

BLEACH 白神様が行く

柴猫侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

▼とある流魂街に住む一人の少年。▼その少年は、ある死神の手によって運命をねじ曲げられる。▼そして再び、死神の手によって運命の選択を差し向けられたとき、少年は死神になることを決意する。▼手に入れた死神と虚の力は、これから起こる悲劇を斬り捨てる為に在る。▼友を、家族を護る為、その魂の刃を振り下ろす。▼オリジナル要素多めなので、そういったのが苦手な方はブラウザバック推奨。

目次

序章	1
第一章 The Vanishing White	
出会い	8
事情	18
お誘い	27
暮らし	35
姉弟	45
試験	55
僚友	63
鬼道	71
開戦	79
終戦	90
変化	99
入隊	109
一と万	119
『姉さん』	127
『兄貴』	137
席官	148
目標	157
戦闘狂	166
旋風	175
欠片	186
接触	196

まつ梨 205

仮面 215

破面 224

アルトウロ 233

真実 242

各所 255

錬磨 264

開幕 272

圧倒 281

水花 291

同期 302

竜叫 311

帰刃 320

卍解 331

第三章 Slight Everyday

安寧 342

復隊 350

宴会 360

滅却・序 369

滅却・中 378

滅却・跋 386

方針 396

取得と喪失 405

第六章	閑話	596
	番外編	
	晴天	588
	血筋	579
	秘話	570
第五章	終幕	556
	虚哭	541
	激闘	531
	戦嵐	521
	陰陽	509
	野獣	497
	対峙	486
	事件	475
	突入	466
	旅禍	457
	再会	448
第四章	石榴	441
	魂	438
	花火	432
	番外編	
	異変	421
	邂逅	413

G r a s p T h e F u t u r e

P a r t 2

T i m e D o e s N o t R e t u r n

C r o s s i n g W h i t e & B l a c k

P a r t 1

憐憫	襲来	黒翼	決闘	悪戯	聖哭	雪花	交戦	虚夜宮	侵入	初戦	第八章	仲間	逆襲	気分屋	破壊	宮内	蹂躪	再臨	第七章	始動	弥勒	救出	思念珠	欠魂
											I t I n c r e a s e s S i g n a l F i r e								T h e B e g i n n i n g F i e r c e F i g h t					
832	822	811	800	790	778	765	752	740	731	721		708	699	690	681	671	661	650		641	632	622	614	604

暗雲	混獸	烈風	拔刀	激流	漢氣	恐怖	第九章	騎士物語	騎士物語	騎士物語	番外編	進擊	願い	覚醒	鼓動	暴走	慟哭	墮天	思惑	天鎖	烈火	忠誠	遊戯	憤獸
							When	参	弍	壹	Part													
							The				3													
							Decisive																	
							Battle																	
1083	1072	1064	1054	1043	1032	1014		1005	996	988		978	968	955	942	932	921	910	900	887	877	867	858	843

終末 凱旋 今宵、 護劍 御劍 償還 白神 開錠 開道 掌上 落涙 日進月歩 死神 重み 閃紅 戦火 散桜 光臨 古い 犠牲 乱戦 乱入 吭牙 毒針 誇り

月が見えずとも

1363135113361325131413011288127712671256124612331222121011981186117611641154114411331121111111021092

エピソード

有明

序章

崩れる御霊

ぎよく
玉は澱む

「ふう……………」

ある山道を、一人の男の子が歩いていった。齢は十歳に届くか否か。髪の色は白。瞳は桔梗色。整った顔立ちの彼には、まだ幼さが残っている。その小脇には、いくつかの山菜が抱えられている。それらのすべては、この山で採った物である。

季節は春。筍やふきのとうが辺りに生え、毎日の食事には困らない程であった。月の明かりが漏れてくる木葉に群れには、桃色の可愛い花弁が咲き乱れている。散っていった花弁も、進む道の上に敷き詰められ桃色の絨毯が出来上がっている。裸足である足で、その上を踏むと柔らかな感触が足裏を刺激するのを彼は感じていた。

「……………あれ?」

彼は、ふと何かを直感した。『聞こえた』や『見えた』ではない。頭に直接響くような感覚であった。その違和感とも取れる物に、彼は辺りを見渡して何かあるのか確かめた。この時期になると、熊などが冬眠から目覚め餌を探し始め、山を徘徊する。しかしもし熊が近くにいるのならば、大なり小なり足音が聞こえてくるはずである。しかしそのようなものが彼の耳に入ってくることはなかった。

「……………あっちか?」

何かあると感じた方向に、彼は歩きはじめる。歩いていく道は、俗に言う獣道であり、自然に草などが生えなくなっただけのもの、舗装などはされておらず砂利などが彼の足裏に小さな痛みを与えるが、慣れたものであり彼は気にしない。

そして、ある程度進んでいくと少し開けた場所に出た。そこで彼は何かを発見した。

(何だ、あれ?)

そこには何人も人が居た。しかしそこに漂う雰囲気は普通のモノではなかった。黒い着物を着た男が三人。そして何か縄のような物で縛られた流魂街の住民のような者達が十人程。縛られている者達の表情は、どれも恐怖というモノに満ちていた。その異様な光景に、彼も緊張せざるを得なかった。

そして、黒い着物の上に白い羽織を羽織る眼鏡の男が、住民の一人に近寄る。その手には、何やら漆黒と形容すべき刀が握られていた。そして住民の一人である中年の男性に、その刀の切っ先を向ける。

中年の男性の表情は、今から何をされるのかという恐怖でその身を震わせていた。

「な……何をすんだよ?!やめろよ!!」

しかし、そんな懇願も虚しく男性の胸の部分に刃が突き刺さる。刹那、男性の顔が痛みで歪み、声にならない叫びを上げる。胸から血を流し、その光景は数秒続いた。

直後であった。

「ああああ!!!!ぐ、おうわああああ!!!!」

最後の方にノイズが掛かったような叫びを上げ、男性の体は爆散し、辺りには男性の肉と血が飛び散った。その光景に、横で見っていた他の住民たちは顔を真っ青にした。草の茂みで隠れてみていた彼も、尋常ではない汗を掻きながら見ていた。本当ならば、この時点で彼は逃げ出すべきであったのだろう。しかし、あまりの恐怖に足が竦み、逃げ出すことが出来なかった。

眼鏡の男は、次々と住民たちに刃を突き刺していき、突き刺された者達は一人残らず爆散していった。そのおかげで、辺りは血の海になっていった。その光景に彼は戦慄していた。なぜこの男は、このようなことをしているながらあの涼しげな顔を出せるのだろうか、と。

眼鏡の男はため息を吐き、その閉じられていた口を開いた。

「……………やはり、流魂街の者達ではこの試作品の実験をするには不十分だね」

「それにしても藍染隊長。よく浅打に虚の力込めよう思いつきました

ね。しかもいきなり大虚メノスグランデなんて」

眼鏡の男の後ろに居た銀色と白色に近い髪の色をした若い男が、そう言った。その言葉に、『藍染』と言われた男は、また先ほどと同じ涼しげな笑みを浮かべた。

「大虚でなければ実験の意味がないからね。どうせなら、下級隊士で実験出来たらいいんだけどね」

「フッフツ……でも、方法がこれまた『死神の力の譲渡』と同じですさかい……死神じゃない方がええんとちゃいますか？」

「勿論さ……だが、この程度の霊力の者達ではね……もうすこし厳選が必要だったかな？」

「藍染様。私が、流魂街を周り適当な実験体を探してきましたよるか？」
そう言うのは、藍染という男の後ろに居たもう一人のドレッドヘアの男。

「いや、その必要はないさ。これは元々試作品だから、回数も限られてる……残す虚の力ももう少しと言ったところか……」

そう言つて藍染は、隠れて見ている彼の方向に首を向けた。その一瞬で、彼の心臓の拍動のリズムは急激に速度を上げる。

「最後に、あの子で試そうか」

「う、うわああああああああ!!!」

とうとう我慢できなくなり、その場を離れ一気に駆け出す。こちらに来るときに持ってきていた山菜も、既に頭の中には存在していなかった。

(殺される！殺される!!)

このままでは、確実に自分の命はなくなる。

その思考は、彼の足をいつも以上に速く動かすのに十分であった。

しかしその彼の行く手を、突如、瞬間移動のように現れた白銀の髪の毛がニヤつきながら塞いだ。

「駄目やん、逃げ出したら。縛道の一・『塞』」

突如、彼の腕は彼の意識に反して後ろで組み交わされた。必死に振りほどこうとしても、何かの力がそれをよしとしない。

解くのを諦めた彼は、目の前に立つ男が居ない別の方向に逃げよう

と駆け出す。しかし、腕を振れない分走る際のバランスがとれない。

「あくもう……そんな必死になったら……。しゃあない……。射殺せ——『神鎗』」

突如、彼の右足に激痛が奔り、そのままバランスを崩し地面を滑るように倒れた。足を見ると、ふくらはぎから血が止めどなく流れ出していた。

しかし、彼はすぐさまそのまま地面を這うようにして逃げる。彼の顔は、すでに汗や涙や泥でぐちゃぐちゃであった。

「ギン。これを」

「はい、藍染隊長」

ギンと呼ばれた男は、藍染に先程の刀を手渡された。それが意図することとはただ一つ。

「私は先に帰っているよ。期待しているよ」

「そんなんボクに言われても困りますわあ。この子次第ですし、結果見たらボクもすぐ帰ります」

「ああ」

藍染はそう言うと、スツとその場から消え去った。瞬歩。死神の持つ、高速歩法。それを用いて離れていった藍染は、今日の最後の実験をギンに任せた。

そして数刻の時間が流れる。血を流す男の子は、先程の場所よりも数メートル離れているところにいた。

「恨まんといてや。君」

しかしそんな彼に、ギンは刃を突き刺した。この刃は、藍染が開発した物であり、そのベースはすべての死神が一度は持つ『浅打』という無銘の斬魄刀である。それに、藍染は自分の霊力と虚の霊力を注入し、死神の中で重罪とされる『死神の力の譲渡』と同じ方法で、突き刺した相手に斬魄刀の中にある霊力を受け渡すという代物であった。しかしそのような霊力の塊を、ただの魂魄とも言える流魂街の住民達では許容出来る物ではなかった。

「あ……あ……あ……ああああああああ!!!」

先ほどの住民達と同じように、彼も苦しみ出す。不自由になった身

体を振れさせて、必死に痛みを耐え抜こうとしている。

「虚化は、そんなんじゃないやどうも出来ひんで？」

そんな彼に、ギンは突き放すように言い放った。そうしている内にも、苦悶の表情の彼に異変が起き始めた。しかしその様子に、ギンはいつもの細目を見開いた。

『ああ!!う、ぐうううう?!!!があああ!!』

先ほどの住民たちは、苦しみ出してすぐに爆散したが、この男の子は爆散せずに、人の体を保ったまま虚の象徴である仮面が、顔に浮かび上がってきたのである。先ほどとは明らかに違う結果に、ギンは面白そうに眺める。

『お、おとおおお!!ぎゅ、ぎゃあああ!!あああああ!!』

やがて男の子の顔には、額に一本角。左右のこめかみからそれぞれ一本ずつ角らしき突起物が生えた仮面が出来上がってきた。仮面の口の部分には、立派な牙が生えそろっている。両目には交差するように上から下に一本線が、それぞれ模様として描かれていた。

「ほお〜……………前の時と同じ感じやなあ……………」

男の子が苦しみ出し、早五分。顔面には立派な仮面が出来上がっていたが、身体はまだ人のままであった。

「ツ……………!!これは……………」

突如、男の子が動かなくなっただと思うと、顔に出来上がっていた仮面が砕け落ち、辺りに何事もなかったかのような平穏が訪れたのである。ギンは、倒れる男の子に近寄ってみる。

「……………息はちゃんとしとるんやな……………」

規則的に上下する背中では、彼が生きていることを如実に表していた。その顔は、汗こそ掻いているものの、安らかな寝顔であった。

そんな男の子を顔をツンツンと指で突いてみるが、反応は一向に戻ってこない。そして、面白い物を見つけたように口の両端を吊り上げた。

「君、運ええな。今日は眠るとき」

そう言ってギンは、何事もなかったかのように男の子を放置したまま、その場を後にした。

—— 数か月後。

「う、わあああああ!!? 虚が出たぞお!!」

そうやって老人は、目の前に現れた牛のような化け物から逃げ出す。老人の声に、周りに居た他の者達も一目散に逃げ出す。

ここは流魂街のとある村。三十人ほどの村人たちが共同生活を送っていたのだが、その平穏は一体の化け物により壊されかけていた。

牛のような虚は、村人たちの家を次々と壊していく。

「ああ!!」

逃げ惑う村人たちの中で、一人の赤ん坊を背負う母親らしき女性が躓いてその場で倒れる。そんな女性が目に入ったのか、虚はその女性に向かって頭に生えている角で突き刺そうと地面を鳴らしながら突進してくる。

「い、いやあああああ!!」

そう叫んで、女性は赤ん坊を抱きかかえながら目を閉じる。

「……………えっ?」

数刻。何も起こらないことに疑問を抱いた女性が、目を開ける。すると虚は、女性ではなく別の方向に目を向けていた。その先には、白い髪の毛の男の子が立っていた。

「モオオオオオオオオ!!」

虚は、一心不乱に男の子の方に走っていく。

「行くぜ、———』』』!!!」

直後、男の子から黒い炎のような物が噴き出し、その顔面には般若の如き仮面が着けられていた。そしてその右手には、先程なかった黒い刀が握られていた。

「モオオオオオオオ!!」

『「うおおおおお!!」』

突進する虚に相對するように、男の子も刀を構え虚に肉迫する。
刹那。

「モ、オオオオオ……………」

突進していた虚の仮面は砕け散っており、今まさにその巨大な体を
霊子へと分解させている光景が、村人たちの目に入っていた。

そして男の子はそそくさと、その場から走って去って行った。一
瞬、何が起こったか見えなかった母親らしき女性は茫然としていた。

「か……………神様……………」

母親らしき女性は、意味もなくそう呟いた。それに反応したのは、
この村の村長であった。

「あれは……………『白神様』しろかみさまじゃ……………！」

そしてここから数年、西流魂街では『白神様』という存在が知られ
るようになる。

それが知られるようになり数年、とある死神たちがこの場を訪れ
た。

これは流魂街で『白神様』と呼ばれるようになった男の子と、それ
を取り巻く死神たちの物語である。

第一章 The Vanishing White 出会い

人が黒き穢れを畏れるように
私は白き無知を畏れる

尸魂界・西流魂街70地区「塵雲」ちりぐも

流魂街の中でも、特に治安が悪い場所である。

喧嘩ごとは四六時中。その他にも、窃盗・殺人なども珍しくないこの場所ので、最近このような噂が立ち始めた。

——ねえ、「白神様」って知ってる？——

——ああ、もちろん——

——ガキみみたいな姿してるんだってな？——

——森の中に住んでるんだって！——

——俺が聞いたのは、お面をしてるってことだな——

——人間を、食べるのを見たって聞いたぜ？——

——儂は、呪いみたいに、手から赤い光を出したのを見たぞ？——

はたから聞けば、行き過ぎた噂のようにはか聞こえないものである。しかし——

——この前「白神様」に助けてもらったの！——

——虚に襲われたときに、颯爽と現れてくれたんだ！——

——あの化け物に、物怖じせず立ち向かっていったんだ！——

——あの人はまさに神様じゃ……——

このように、何十といった数の目撃情報がある。これが、「白神様」の信憑性を高めているというのは、言うまでもないだろう。

こうした噂は、流魂街中に広がり、そしてここ——瀨霊廷にも届くようになった。

「……………本当に、こんな森の中に『白神様』つてのが居るんすかねえ……………」

こう呟くのは、護廷十三隊十三番隊副隊長・志波海燕である。入隊してから、わずか6年で副隊長の座に就いた実力者である。気さくな性格で面倒見がよく、周囲からの人望も厚い人物である。

「ははは……………、それを調べるためにここに来たんだろうに……………」

こう海燕に応答するのは、彼の上司——もとい、十三番隊長の浮竹十四郎である。白髪の、切りそろえた長い髪を持つ男性である。応答の際に浮かべた、柔和な笑みは、彼の人柄を表すものと言っても過言ではないだろう。

「まあ、そうですけど……………」

いまひとつ浮かぬ表情をする海燕からは、心配事のような言葉が零れる。

何故彼らのような実力者——隊長格と呼ばれる死神が、ここ、流魂街に来ているのかというと——。

——虚の討伐に向かった隊士が、「白神様」に襲われた——
この一つの報告から始まった。

今まで、噂としか捉えなかつた事柄が、急に現実味を帯びるような形で、彼らに降りかかってきた。

最初に被害を受けたのは、十一番隊の隊士・二名。

次に、報告を受け討伐に向かった八番隊の隊士・四名。

最後に、八番隊の隊士が、返り討ちにされて戻ってきた後に、編成され向かった、六番隊の隊士・五名。

いずれも、重傷とまではいかないにしても打撲、切り傷等の怪我を負って戻ってきた。彼らが口をそろえて言うことは——

「仮面を被った子供にやられた」——と。

子供相手に隊長格を出動させるのも、いささかやりすぎなようにも思えるが、実際に被害者が多数出ている以上、対処せざるを得ない。そういった経緯で彼らは現在、ここ「塵雲」の「白神様」をよく見かけるという森を訪れている。

「仮面を被った子供って、虚ですかね？」

「さあな……………。その『白神様』に関する被害の報告は、今回の死神の件が初めての事例だ……………。もし虚なら、今まで村に現れた際に何人か『白神様』の犠牲者の報告があるはずだが……………」

「それが、なかったからこういうことになってるんスよね……………」

そう。噂の上では、「人間を食べた」などというものもあるが、実際に、多くの人間が目撃した際に被害に遭った者はいなかった。むしろ、「助けられた」人物がほとんどである。

「とにかく、今回の目的は『白神様』の正体を明らかにすること。これを第一に調べていこう……………」

「そうっすね……………」

このような会話をしていると、ふと、なにかが二人の耳に聞こえてきた。

——グスツ……………グスツ……………!——

「っ……………!?隊長、この声は……………?」

「子供の……………泣き声か……………?」

二人は、すぐさま声のする方に駆けて行った。すると、そこには十歳に達するかしない程度の女の子が、木の根元に座り込んで泣いていた。

「グスツ……………うう……………」

「おい!大丈夫か?!怪我でもしたのか?」

とっさに海燕は、子供に駆けより安否を確認した。こういうことを反射的にするあたり、彼の人柄がにじみ出ていると言えよう。

「うっ……………木の实拾いに……………森に来て……………それで道がわからなくなつて……………ええん!」

その発せられた言葉に対し、二人は安堵のような残念のような表情をする。なぜならば——

「髪の毛は……………白いな……………」

「ですけど、仮面もないし、こんな子が大の大人を倒せるようには見えないっすね……………」

「そうだな……………いったん、この子を家まで連れて行ってあげよう。もしかしたら、その村でなにか聞けるかもしれない」

浮竹の言葉に、海燕は首を縦に振る。

「よしーそうしましょうー！おい、どっちから来た？家まで送ってつてやるよー！」

勿論、迷子から聞く情報であるため、完全な方角などわかるわけではないが、大体の方角が分かれば、人の霊圧を手当たり次第探って、この子供の家を探すがやり易くなるだろう。

「……………向こう……………」

二人は、少女が指差した方角を向く。

「おうよ！任せな！」

海燕はそう言い、少女をおぶり、指差した方角に小走りし始めた。

「お願いね、死神さん……………」

少女は海燕の背中で、誰にも見られない笑みを浮かべた。

——走り出して数刻。

三人は、小さな村を見つけた。——といっても、平屋が四軒ある程度で、村と呼べるかも疑問になるほどであった。

「おばあちやーん!!」

「おお、すみれえ……………！無事じゃったか……………！」

少女と、その祖母と思われる人物が互いに抱きしめあつて泣いている。

「ふう……………よかつたな。すぐに見つかつて」

「そうですね……………」

そんな微笑ましい光景を見ながら二人は言葉を漏らす。

「ああ……………死神様……………なんてお礼を申し上げたら……………」

祖母と思わしき人物は、二人に対して涙を流しながらお礼を言ってきた。

「いえ……………ご家族の方がすぐ見つかつて良かったです」

「それと、急にで申し訳ないんですけどお話を伺いしてもよろしいでしょうか？」

浮竹が軽く会釈しながら応答した後、海燕が話を切り出した。

『『白神様』について、我々は調査をしてるんですが……………、なにか知っ

ていることはないでしょうか？」

「まあ…………『白神様』ですか……………ここで立ち話もあれですし、中でお話ししましょう……………お茶もだしますから……………」

「ああ、お気遣いなく……………、そうですね、お婆さんに立たせたままも失礼ですし、お願いします」

「では、こちらへ……………」

そういうと浮竹は、老婆に案内されて家について行った。海燕もそれについていこうとすると、右の平屋の奥に人影が見えた。

「ん……………」

現世で言えば13〜14歳ほどに見える女性が、桶に水を汲んで運んでいるのが見受けられた。

「……………」

女性は、こちらに気づくと無言で会釈をしてきた。

「あ……………どうも……………」

海燕も、それに応じるように礼を返す。

(……………なんか変だな……………)

ふと、そう思った。今はまだ昼間である。それなのにも関わらず、人気をあまり感じない。食糧を採りに行つてると言われればそれまでだが、もう少し人気があつてもいいんじゃないか？———そういう考えが、海燕の頭の中を、潮が満ちるように埋めていく。

(考えすぎか……………)

仕方なく、今は納得するようにした。

「粗茶ですが……………」

「わざわざすみません……………」

浮竹は、老婆に渡されたお茶に少し口をつける。

「他にご家族は……………」

「ここには、私と孫の二人で、三人いるだけです……………」

「やはりお孫さんはかわいいものですか？」

「ええ……………いい子でしてねえ……………。ご結婚はされているんですか

「？」

「いえ、部下はしているんですが、自分はまだ……………」

他愛ない会話だが、社交辞令として必要なものとして海燕は捉えている。その後も、少しの間この会話を続けていたが、元々短気寄りの性格をしている海燕からは、もどかしく感じてしまうようなものである。

(隊長……………そろそろ本題を……………！)

(ん？ああ……………そうだな……………)

「お婆さん……………それで、『白神様』について聞きたいのですが……………」
「え？ああ、そうですね……………、こちら辺ではあんまり見かけないかも
しれませんね……………」

「そうですか……………」

「すみません……………お力になれなくて……………」

「いえ、お茶まで出してもらったんです。お気持ちだけで十分です」

(収穫は無しか……………)

「……………でも……………」

浮竹と海燕が席を立とうとしたその時、老婆が何か続きを言う雰囲気
を醸し出したことにより、二人の動きが一瞬止まる。

「お礼に、僕の腹の中に入るといえるのはどうかね？」

「っ?!」

老婆の雰囲気急変したことにより、二人は反射的に飛び退く。

「てめえは何者だ!!」

海燕は、斬魄刀の柄を握り、引き抜こうとする——

『きやああああああ!!』

「っ?!海燕!!外を見てきてくれ!!」

「っは、はい!!」

浮竹に促されたことにより、海燕は自分の後ろに位置する引き戸を
蹴破り、外を見渡した。

「た……………助け……………!!」

そこに広がっていた光景は、先ほど水を汲んでいた女性が、自分達
が案内した迷子の口から伸びる触手のようなものに拘束され、宙吊り

になつているといふものであつた。さらに、少女だつたものの顔には、虚特有の仮面が現れている。

「てめえ……………虚だつたのか!!」

「おおつと、動くなよ?この小娘がどうなつても儂は知らんぞ?」

「つ……………!!」

今女性が宙吊りになつていゝる高さは、周りにそびえ立つていゝる木よりも高い場所に位置してゐる。もし、今触手の拘束が解けたら女性は、ただでは済まないだろう。

(下手に動けねえ……………!!)

「ヒツヒツヒ!!貴様ら、見る限り中々の霊圧を持つておる……………。今日は豪勢な食卓になるわい!!」

「ヒツヒツヒ!!そうじゃのう!!」

嵌められた……………!

現在二人が考へてゐることは、ほぼ一致してゐた。

「……………訊くが、てめえらが『白神様』つて奴か?」

海燕は、なるべく時間を稼ぐために話題を振る。

「ヒツヒツヒ!!残念じゃが、先ほども言つた通り、我らは『白神様』など知らん!!」

こう応へるのは家の中にある虚である。先ほどの老婆の姿はもはや原型を留めておらず、ヒキガエルのような体形をしたものに成り代わつてゐる。

「さて……………まずは、この小僧の方から食つてやろうか……………ヒヒツ!!」

「ぐつ……………!!」

下手に動けば、女性が犠牲になる。誰が見てもそう考へるに至る状況である。

「海燕つ!!」

「ですがつ……………!!」

「動くなよ……………?動けばこの小娘があああつ?!!」

海燕に近づいてゐた虚の触手は、横から割り込んできた何者かによつて斬られた。

「し、舌が!!舌がああああああ!!」

「きゃあああ?!!」

「よつと」

拘束が解かれた女性は、体を支えるものがなくなり自由落下を始めたが、虚の舌を斬った者が、元々そういう流れであったかのように、空中で受け止め、そのまま着地した。

(……………子供?!)

女性を受け止め着地した人物は、まだあどけなさを残す、艶のある白髪をもった少年であった。

「お、おのれええええええ!!」

「っ！水天逆巻け—— 『ねじばな振花』!!」

舌を斬られたことにより、怒りのままに少年に突進していく虚に対し、海燕は自分の斬魄刀を解放し、少年と虚の間に入ることにより行く手を遮る。

「そのまま止めておけ」

「はあ?!」

虚の突進を阻止したのもつかの間。少年が、海燕の頭を飛び越え虚に向かつていく。

「おいっ、危ねえぞ!!」

『うつろみかど虚帝』……………!!」

少年が何かを呟くと、何もなかったその右手に黒い炎が噴き出し、直後にその炎の中から刀のような物が現れた。

(斬魄刀……………?!いや……………何だありやあ……………?!)

「うおらあああああ!!」

咆哮を上げる少年は、その勢いのままに切っ先を虚の仮面へと向けた。

「ヒツ……………や、やめっ……………!!」

虚が命乞いをしようとしたが、それも言い終える前に刃は仮面に深々と突き立てられた。

「ぎゃあああああ!!」

悲鳴を上げる虚は、間もなくしてその体を霊子へと分解していっ

た。

海燕はそれを茫然と眺めていたが、ふと思い出す。

「た、隊長?!」

敵は一体ではなかった。もう一体は、自らの隊長と相対していたはず。とつさに振り返ると、そこには刀を仕舞っている浮竹と、小さくうめき声を上げながら体を霊子へと変換している虚の姿が見えた。

「海燕!こっちは大丈夫だ!!そっちはどうだ?!」

「大丈夫っす!!何とか」

そう言つて、海燕は今の戦闘の立役者へと目を向けようとした。

「おい、おま……え……?居ねえ?!」

すでに先ほどの少年は、海燕の目の前から姿を消していた。

「……あいつ……一体……?」

「今回はどうだった?」

——相手が相手だ。あまり上等とは言えない——

「別に死神がやる前に、俺らがあいつらを倒せばよかったんじゃないか?」

——何のための死神だ。それに、死神もすでに何人か送られていた——

「やられてたけどな」

——あの程度にやられるなど、死神も未だな——

「そうだな」

——さっきの死神たちの事をどう思う?——

「さっきのか……?……?……?他の奴らより霊圧は高そうだったけど……」

——ああ、そうだな。隊長格といていた——

「……そろそろいいか?眠い……」

——わかった——

「おやすみ」

——ああ、日向——
そういつて、少年——うぶしろひゆうが天宮城日向は目を閉じた。
自分の魂との対話を終えて——。

事情

振るうは
己がため

「……………眩しい……………」

俺——天宮城日向は、屋根の隙間から零れる朝日によって目覚めた。

元々、廃屋だったこの家を、素人なりに修復した俺の家は、すでにあちこちが欠けたり、腐ったりして隙間が出来てしまっている始末だ。だけど、ここ「塵雲^{ちりぐも}」では、子供が住む家に屋根があるだけで贅沢じゃないかと思う。

そんなことを思いながら、昨日作った猪鍋を温めるために、囲炉裏の中の炭に火をつける。猪鍋と言っても、もちろん調味料など山で採った山椒ぐらいしかなないので、ほとんど肉からでた出汁で味がついているわけだが、具に肉のほかに、キノコ、筍、ゼンマイ、ワラビ、フキなど色々入ってるので、塩味はないが出汁の味は濃い。

火がついたのを確認すると、家の外に出て河原に向かう。俺は、着くやいやな、流れる水を両手で形作った窪みに掬い顔へ持つていき、バシャバシャと音を立てながら顔を洗う。

そろそろかなと思ひ、濡れた顔を服の袖で拭き、家へと戻る。案の定、鍋はぐつぐつと音を立てて旨味が混じってるんじゃないかと思える湯気を、屋根の隙間へと吸い込ませているのが見えた。

「頂きまーす」

ちゃんと両手を合わせて、一礼してから箸を持つ。ちなみにこの箸は、俺が拾った木の枝を刀でうまい具合に削って作ったものだ。……………さすがに、拾った木の枝をダイレクトに使いたくはないという感覚からだ。

「あー……………沁みるわー……………」

自分で言うのもなんだが、中々上手に出来たと思う。

そんなことを思いながら箸を進めていると、扉の方に人影が見えた。

「……………あつ……………」

そこに居たのは、自分と年齢がさほど変わらないであろう女の子であった。

「……………なんだよ……………?」

「えつと……………」

ぐうううううう——。

幾分かビブラートが効いてそうな音が部屋に響くと、女の子は顔を真っ赤にして顔を下に向けた。

「食うか?」

俺が聞くと、女の子は俯かせた顔を上げ、嬉しそうな顔でこちらを向いてきた。

「これ食いたいのか?」と、一旦挿めてもよかつたんだろうけど、俺は朝は何もかも面倒臭く感じてしまう性分なため、必然的に発する言葉は短くなる。

てとてとと効果音が付きそうな歩き方でこちらに来た女の子は、俺が渡した器の中の筍を素手で掴もうとした。

「いや、箸使え!!」

「熱っ!!」

「いわんこつちやねえ……………」

案の定、熱々の筍を掴もうとした華奢な少女の右手は、筍の温度に耐えられずにすぐさま手を離れた。

女の子は、軽く火傷したかもしれない右手にふーふーと、息を吹きかけている。

「ほら、箸」

俺は、自分で使っていた箸を女の子に渡す。——いや、箸は俺が使っている物、一つだけだから仕方ない。他意はない。うん。

「……………?」

箸を渡された女の子は、きよんとした顔でこちらに瞳を投げかける。

「……………これ、何？」

なるほど。まず、箸という概念がなかったのか。それなら、仕方ない。何が仕方ないのかだつてことかと言うと、今まで使わなかった物を、いきなり使える奴はほとんどいないだろうってことだ。

「どうすつかな……………」

箸を使えないなら、この熱々の鍋を食べるのは結構難しいことだろう。別に、冷まして食べるっていう手もあるが、せつかく温めたものを——、いや、熱々の方が美味しい料理をわざわざ冷ますっていうのももったいないだろう。

「……………よし、こつち座れ」

俺は、女の子を呼び寄せ、自分の目の前に座らせる。

「ほれ、口開けろ」

——あーん作戦だ。

仕方ない。早くしないとせつかく温めた鍋が冷めてしまう。

女の子は、目の前に出された美味しそうな具材に、目を輝かせて飛びつく。

「どうだ？」

「おいしいー！」

「そうか」

口の中に入っていた物が喉を通ると、直ぐに「次をくれ！」と、言わんばかりの表情で口を開けてスタンバイする。

……………卑しい奴め——…とは、思わない。この地区に住んでいる子供は、ほとんど野良犬と変わらないような生活をしているため、いつもお腹いっぱい食事を摂れているわけではないのだ。目の前の食い物には食いつく。これが、この地区の子供の生活だろう。

ちなみに俺は、さっき言ったみたいに猪やら鹿やらを仕留めたり、魚釣ったり、山菜を採ったりしている。時々、熊も仕留めたりしている。鹿とか熊とかは、肉が多いから干し肉にして保存食にしてる。なので、食い倒れることはほとんどないだろう。・・・多分。

「ほーれ」

そんなことを考えながら俺は、次々と女の子の口の中に、食材を運んでいく。幾分、飲み込むのが速い気がするが……。しつかり嚙まないと消化に悪いぞ？

こんなことを続けること数分、女の子はとうとうお腹いっぱいと言わんばかりの表情をした。ふーっ、と息を吐き出す様子は少し苦しうだが、幸せそうである。

「ありがとう!!」

「どういたしまして」

女の子がお礼を言ってきたので、俺は軽く返答する。

最後に彼女は、手を振りながら笑顔でこの家を出ていった。

「ふう……………、続き食うか……………」

俺は再び、若干冷めた鍋の中に、箸を向けた。

朝飯を食べた後に行うこと……………それは、昼飯の材料を集めに行くこと。昼の後？ 察しろよ。これの夕飯版だよ。昼の後に洗濯が入ったり、夕飯の後に風呂を沸かしたりとかあるけども、大体変わらない。食材集めるのって結構時間掛かるものだ。特に冬とかは。

その他にすることと言ったらこれだろう。

—— 虚退治 ——

俺は、数年前から変な夢を見るようになった。眉間から前に一本、左右のこめかみから後ろに飛び出ている角があり、目と思しき穴から垂直に黒い線があり、本来口がある部分から横に鋭いギザギザした牙がある仮面を被り、心臓があるであろう胸の部分は虚空を開き、その全身が夜のような黒にも関わらず、着ている服が真っ白——いや、どちらかというと銀色にも似ている袴を着た化け物が、毎日夢の中の、どこかの屋敷の中のような大広間で、俺とその化け物が向かい合って座るといふ形で会うようになった。

その夢自体は、五分くらいの短いものであったが、俺はとうとう我

慢できずに化け物に話掛けた。

「……………なあ、お前何なんだよ？最近ずっと夢の中で会うけどよ……………」

『……………とうとう、言葉を交わろうとしたか。日向よ』

「……………お前は、俺を知ってるのか？」

『無論。俺は、お前の魂に値する存在』

「……………随分、俺の魂は禍々しいんだな……………」

『何もかも、昔からこうであったわけではない』

「……………？どういうことだよ？」

『お前の魂である俺が、こういう姿かたちに変わったのは、ごく最近のことだ』

「最近？」

『お前は、一週間前の記憶があるか？』

「一週間前……………？」

一週間前を思い出せと言われても、毎日同じこと繰り返している日向にしてみれば、その日が分かる特定の事柄がない限り、思い出すことは困難だろう。

「……………思い出せねえ……………」

『そうか……………』

化け物は、仮面の上からでも分かるような残念そうな雰囲気をつた。

『お前は、その日に死神に襲われた』

「えっ……………？」

死神に襲われた？そんなことがあったのであれば、すぐさま思い出せそうだと思うが、日向は身に覚えがないことであった。

『そしてお前は、他の捕まっていた人間たちと共に、何らかの処置を施され……………お前は、虚へと成り代わった』

「っ……………?!」

俺が……………虚に……………？

『だが、それはお前という存在をそこに留まらせることなど不可能なほどに不安定なものだった』

「じゃあ……………俺は何で……………」

「ここに居るんだ？　そう言い終える前に、目の前の化け物は再び言葉を発した。

『命の危機に瀕したとき、お前の魂……………俺が目覚ました』

「……………お前が？」

『魂が虚へと変わるときに、俺は、霧が凝縮し水になるようにはつきりとした自我が目覚めた。そして俺は、自分の器と言えるお前の危機を察知した。皮肉なことに、俺は自らの存在によって、自分の主の命を奪うことを察した』

淡々として語るが、それが自分の命に関係していたことだと思つて平静ではいられない。

『故に俺は、自らを二分化した』

「……………どういうことだ？」

『俺という虚を、『身体』と『力』に分けた。そうすることによって、俺という虚としての力を抑え、魂の安定を図った。今ここに居る俺は、『身体』の方だ』

「そ……………それで？」

『それは功を奏し、お前が瓦解することは防げた。だが、お前以外の魂は消えていたようだがな』

「とにかく、そのせいでこの夢を？」

『正確に言えば、ここはお前の精神世界だ。俺は、ここでお前との対話を望んでいた。これで、お前が虚の力によって暴走する心配はなくなった』

「いや、何さらつと怖え事言つてんだよ?!望んでんならそつちから来いよ!!」

『俺は、去る者を追えず、来る者を拒めない存在。故に、そちらから来るのを待つしかなかった』

「……………まあ、それはもういいとして、俺はどうすりゃいいんだよ?」

『……………俺を、扱えるようになれ』

「……………へ？」

『俺は虚の身体……………言い換えれば『器』とも言えよう。俺はこうして

お前と対等に話せるが、『力』の方はそうはいかない。『力』が『器』から零れるようになれば、お前はたちまち虚へと変貌するだろう』

「つまり？」

『お前が、自我を持ちつつ『器』たる存在へとなれば、お前は『器』として成長し、『力』を抑えられるようになるだろう』

「……………どうすりゃいいの？」

『俺の力を託そう』

そう言っつて、虚が差し出してきたのは、柄から刃の先まで真っ黒に染まった刀であった。

『これを使えば、お前は虚の身体能力を得ることができる』

「……………虚になるってことか？」

『遠からず、近からずだ。文字通り、『仮面を被る』ことによつてできるようになる』

「でも……………どうやって使うんだ？」

『俺の名を呼べ』

「名前……………？」

『死神という斬魄刀の名と同じだ。俺の名を呼べば、俺はお前の元へと赴く』

「……………へえ……………」

『受け取れ、日向よ。これはお前の魂とも言えるものだ』

「そうか……………わかった。ありがとな」

『気にするな。さあ、受け取れ。我が名は——』

——『虚帝』だ』

こんなことがあってから、俺は『虚帝』の力を借りて狩猟とかをするようになり、そうすると霊圧を持つ俺の所に虚が集まったりしてくるので、倒すことがしばしばあった。その中で、どっかの村の近くに来た時に虚が襲つてきて、その虚を倒したのを村の人に見られて言わ

れたのが——『白神様』じゃ……」

どうにも、俺の髪の毛が白いことと、虚から村を救った神様みたいな存在ってことで「白神様」らしい。

閑話休題。

つまり俺の日課に、虚の力を扱うために、実際に虚と戦うことで練習する、というのが時々入ってくるということだ。そのおかげで、俺はだいぶ「虚化」という奴を扱えるようになった。

「虚化」をすると、顔に『虚帝』と一緒に仮面が出てきて、身体に力が溢れてくるようになる。雑魚の虚だったら、おもいつきり殴れば一撃で倒せるくらいに腕力が上がる。……手は痛いけどな。最初の内は、十秒持つか持たないかだったが、毎日虚化して猪や鹿相手に追いかけてこすることで、だんだん時間が延びてきた。今は、ただ虚化するだけなら、三十分持つ。頑張ったと思う。

というわけで、俺は食材探し兼虚退治をしている。

こんな辺境の地区じゃ、死神が虚を退治に来るのは、もう何人か犠牲者が出た後だ。だったらその前に、俺が倒してしまえば一石二鳥だろう。そんなことを続け、早数年。「白神様」も、すっかりこの辺りに知れ渡った。二つ名なんて気恥ずかしい感じもするが、大部分は感謝を持って呼ばれていることなので悪い気はしない。「化け物」と言う奴もいるが、自分でもそう思うのであまり頭にこない。

「……お、林檎だ」

山道を歩いていたら、脇に林檎が生っている木を見つけた。俺は、軽くジャンプし一番近くに生っていたものを一つ採って齧った。

「……酸っぱい!!」

もうちよつと甘いと思っていたが、青林檎並みに酸っぱい。だけどせつかく採ったものなので、採った分は食べることにする。

酸味の強い林檎を齧り自然としかめっ面になりながら、さらに歩を進める。

「……っ虚?!」

少し離れた場所から虚の霊圧を感じた。感じた方に目を向けると、その方角に日向は見覚えがあった。

「あつちは、確か集落があつたところだ……!!」

早くしねえと誰かやられちまうかもしれない……!!
そう思った俺は、俺は手を顔にかざした。

『オオオオオオオオオオ!!』

かざした手が顔から引き離れたころには、俺の顔には虚の仮面があつた。

虚化によつて飛躍的に上昇した脚力で、俺は虚の居る元へと飛び跳ねていく。

『うし……待つてろよ……!!』

とある人物たちと再び対面するまで、あと数刻――
|。

お誘い

知っているか？

『覚悟』とは

どちらの字も

『さとり』なのだ

『よし……………あそこか……………！』

虚化した俺の脚力では、集落に着くまで数分とかからなかった。

「ぐあああああ！！」

そこには、ムキムキの猿——…もといゴリラみたいな灰色の虚が、右手に子供を握り、雄叫びを上げるといふ光景が広がっていた。

『虚帝！！』
うろみかど

俺が名前を叫ぶと右手に黒い刀が現れた。

『おらああ！』

俺はすぐさま虚に近づき、刀を振り下ろす形で子供を握っていた右腕の二の腕から下を斬り落とした。

途中で、落下してきた子供は腕に抱える形で助ける。

「し……………白神様や！我らを救いに来てくださった！」

後ろで爺さんらしき人が何か言っているが気にしない。

『逃げろ』

「は……………はー！」

助けた子供を下ろして逃げるように促すと、素直に逃げて行ってくれた。

『さて……………』

「ぐうあああああああ！！！！」

虚は、俺に怒りの目を向け、俺を殺さんとばかりに咆哮を上げる。

さらに俺を潰そうと、斬られていない左腕を振り下ろし——

『そうカリカリすんなよ……………』

俺に受け止められた。

受け止めた瞬間、大気が震える音がしたが、受け止めた俺の左手は骨が折れたりすることはなかった。

「ぐおお……………お……………」

虚は、信じられないと言わんばかりのうめき声を漏らす。

その一瞬の隙を逃さず、俺は虚の腕を斬り落とした。

『あばよ……………』

両腕がなくなつた虚は無防備と言える状況。俺は、虚の弱点である仮面に一閃する。

仮面を一閃された虚は、体を靈子に変え、俺の目の前から姿を消した。

「ふう……………」

それを確認した後、俺は仮面を消した。

「ああ……………!!お前!!?」

「君は昨日の子!!」

「げっ……………!」

こちらに向かつて走ってきたのは、昨日虚が二体いた村に居た長い白髪の男と、下まつ毛が印象的な男だった。

「ちよつと話を聞かせてくれ……………!!」

「嫌だ!!」

白髪の方が、俺に向かつて止まるよう促してくるが、拒否する。

「隊長……………ここは俺が……………縛道の四・『這繩』!」

「うおおおお!!何だこれ!!」

俺は逃げようとしたが、下まつ毛の方が何かの術を使い、俺の身体を縄で縛ってきた。

「何すんだ!!」

いきなり縛つてくるとは失礼じゃねえか?!

そういう非難の目を下まつ毛に向ける。

「お前が止まらねえからだ!」

「俺の勝手だろうが!!」

「何いい?！」

「やんのか、コラア！」

「海燕……………大人気ないぞ……………」

白髪の方が、下まつ毛——海燕という男を疎める。

「ですけど隊長……………。こいつは……………」

「わかってている……………。いきなり手荒な真似をしてすまない……………。少し話を聞きたいだけなんだ」

「単刀直入に聞く。お前が、『白神様』か？」

「……………ああ、そう呼ばれてるらしいな。だけど、俺は『お前』なんて名前じゃねえ！天宮城日向つつう名前があんだよ!!」

海燕つて奴が、話を振ってきたから答えてやった。

「そうか……………、済まない。俺は、護廷十三隊十三番隊隊長の浮竹十四郎だ。よろしく！」

「俺は、副隊長の志波海燕だ」

「とりあえず、これはまずせよ」

「嫌だね」

海燕が、さっきの意趣返しのように言葉を返す。

「この下まつ毛え……………!!」

「海燕だ!!白髪！」

「いや、お前の隊長も白髪だろうが!!」

「艶が違うんだよ!!」

「分かるか!!」

「まあまあ、二人とも……………」

言い合う二人を浮竹が落ち着かせようとする。

「天宮城日向君だったね?よかったら食事でもご馳走するから、詳しい話を聞かせてもらいたいんだ」

「浮竹さんを見習え。海燕」

柔らかな物腰で対応する浮竹をみて、日向は海燕を疎める発言をする。

「にやろう……………!」

「海燕」

海燕も言い返そうとしたが、浮竹に疎められ、海燕はスツと引く。

「ご馳走してくれるって本当か？」

「ああ、流魂街の美味しい店に連れて行ってあげよう」

「わかった」

やり方が、誘拐みたいな気もしたが、隊長ともいった人物がそんなことはしないと思ったので、俺は了承した。

「よし、行こうか！」

日向の目の前に広がるのは、今まで見たことのないような料理の数々。

「おお〜〜〜……………」

全部旨そうだ！

「遠慮なく食べてくれ！」

浮竹はそういつて、日向を促す。

「頂きますー！」

俺はそう言うのと、目の前にあるチャーハンとかいう食べ物に箸をつけた。

「(浮竹隊長……………早く聞かなくていいんですか?)」

「(まあまあ……………料理は冷めたら美味しくないだろう)」

「(そりやそうすけど……………)」

海燕は、美味しそうに料理を頬張る日向をよそに、浮竹に耳打ちする。

「(海燕……………君の心配は確かに分かるが、村を助けていたのだから悪い子ではないだろう……………)」

海燕の心配——それは、白神様であるこの子供が、前日の死神を襲った者であるかどうかということ。昨日起こった虚との戦闘の際も、さきほどの戦闘も見た通り、この子供の霊圧、戦闘技術は同年代とは比べ物にならない程であった。この強さならば、数多くの死神を倒せたのもうなずける。しかし、浮竹が示唆するのは、死神を

襲った犯人は昨日討伐した虚であり、『白神様』であったこの子とは関係がなかったということである。

「……………で、死神のあんたらが俺に何の用?」

日向は、口にチャーハンを詰め込みながら二人に問いかける。

「ああ、まず、君は昨日俺たちの前に現れた子に間違いないね?」

「そうだね」

「じゃあ、俺たちと会った日より数日前に別の死神とは会ったかい?」

「……………数日前? 何年か前なら会ったけど……………」

この言葉に、二人は杞憂だったと分かり息を漏らす。

「じゃあ、あの刀はなんだい? 君の斬魄刀かい?」

「そうらしいよ」

「そうらしいよってお前……………」

「俺だってよくわかんないんだから聞くなよ……………」

おもむろに嫌な顔をされたので、海燕のこめかみに青筋が一本浮き上がる。

「じゃあ最後に、何で虚と戦っていたんだい?」

「……………」

浮竹の最後の問いに、日向の動きが一瞬止まる。

「……………力があるから」

「力があるから……………」

「戦う力があるからだよ。いつだって、最初に犠牲になるのは力のない奴だ。だから、戦う力がある俺は戦って命を守ってみることにした。俺も、望んで手に入れた力じゃないし、別に助けてと望まれてやり始めたことでもないけど……………」

—————感謝されるんだ」

「感謝、か……………」

「あるなら使う。使って感謝されんなら、俺はこの力を進んで使う。俺も、別に不使してないし、むしろ便利だしな」

そういうながら日向は、餃子へと箸を延ばした。

「成程な……………」

「……………気に入った!」

「……………海燕?」

急に、海燕が立ち上がったって声を上げると、自然に皆の視線が彼へと向けられる。

「日向……………俺の実家に来ないか?!」

「はあ?」

「俺の実家で妹とかが花火師してるんだが、そこに行つて住んでみねえか?少なくとも、今より楽な生活できると思うぜ?」

「だからって、何でお前の家に?!」

唐突な海燕の提案に、日向は声を荒げる。

「お前の心意気に感動したんだよ!そんな力と意思があるなら、死神になつてみないか?」

「しにがみいゝ?」

「死神になるために、うちで色々勉強を教えてやるよ!死神になるには真央霊術院に入るのが通例だし、そこに入るためにも試験があるからな……だから、その試験に受かるための勉強教えてやるよ!」

「いや、死神になるつて言つてねえし、知らねえし、勝手に決めんなし!!」

いささか強引に話を進める海燕に、日向は顔を真っ赤にして反抗する。

「ま、まあ海燕……………」

浮竹は、興奮して勧誘する海燕をなだめようとする。

「だが……………俺も賛成だな」

浮竹の意外な発言に、日向はこれまた目を丸くする。

「いや、俺の味方をしてくださいよ!」

「ははは……………勿論、君の意見も尊重するつもりさ。だけど君は、海燕の言う通り力があるし、心もある。ならそれを、死神となつてたくさんのことを学んで、もっと多くの人を救えるようになりたいとは思わないかい?」

日向は、確かに一理あると感じた。しかし、これは言つてしまえば趣味の範疇であり、死神となることは、これを仕事へと昇華させることである。死神になれば、それで給料ももらえるし、瀟霊廷の中で済

むことも可能になるのだろうが、自分は今の生活に満足しているし、死神になれば、この自由気ままな生活を失うのとほとんど一緒になってしまう。

「うーん……………」

メリットもあるし、デメリットもある。

そして、日向の選択するうえで一番気がかりになっているのが――

「ちよつと、厠に行つていいですか？」

「ああ、構わないよ」

一つ断りを入れて、食堂の厠へと向かう。厠に入るや否や、日向は『虚帝』を呼ぶ。

虚帝……………お前はと思う？

――お前の好きにすればいい。俺はそれに従う――

だけど、俺の力を感づかれないか？

――斬魄刀の力だといつてしまえばいい。お前もそう説明していただろう――

そうか？でもなあ……………

――……………一つだけ気になることはある――

なんだ？

――俺を産み出した死神のことだ。お前は覚えていないが、そいつがいる組織に入って調べるというのも中々面白いことではないか？――

なるほど……………。確かに、そいつは気になるな。

――あのような奇天烈な行為をする奴が、再び何かしないとは考えにくい――

……………それもそうだな。よし、決めた！

――死神となるのか？――

ああ……………。そうすりゃ何か分かるかもしれないし、これ以上犠牲が出るのも防げるしな。

——日向。ならば、死神の斬魄刀の元——『浅打』を手にしたら、俺を呼べ——

なんでだ？

——そのときが来たら説明する——

そうか。相談に乗ってくれてありがとな！

——礼などいらん——

俺は、虚帝との相談を終え、二人の死神の元へと戻った。

「おう、長かったな？大の方か？」

「そういうのはあまり口に出すものではないぞ、海燕………」

海燕の、デリカシーのかけらも感じられない言葉を浴びながら再び席に着いた。

「俺、決めた——……死神になるよ」

唐突の返答に、二人の目は丸くなるが、すぐさま明るい表情へと変わる。

「そうか！歓迎するぜ、日向!!」

「ははは！数年後が楽しみだよ！」

——俺は、死神になる。死神になって——

——強くなってやる——

暮らし

ドカンと一発

華々しく

そいつも悪くはねえだろ？

「ここが、俺の実家だ！」

昼食を終えた後、俺が連れてこられたのは一軒の屋敷。流魂街では、中々大きい方だろう。ちなみに、浮竹さんは、先に帰った。

「お——い!!空鶴——!!岩鷲——!!居るか——?!」

海燕は、屋敷の扉を開け、家の人と思しき名前を呼ぶ。

すると、襖の奥から女性が一人出てきた。髪型は、海燕のツンツンヘアーを伸ばした感じで、頭に包帯らしき布を大雑把に巻きつけている。目は、海燕に似ている下まつ毛があり、右腕は肘の少し上あたりからない状態である。服装は、女性にしては結構露出度が高い方だと見えよう。ちなみに、結構胸がある。

「兄貴?!帰って来るなら先に言ってくれよ!大したもん用意できねえぞ?!」

「おお、空鶴か!いや、今日はついでなんだ!んでもって、頼みたいことがあつてな!」

空鶴という女性は、海燕を一瞥した後に、驚いた表情を浮かべたが、直ぐに嬉しそうな顔へと変えた。

「頼みたいこと……………?…?…?…?…?…?…?…?…?…?…?…」

「こいつ、天宮城日向っていうんだが、ここで預かってくんねえか?」

「はあ?!」

「死神になりたいらしいからな!色々教えてやってくれ!!それじゃあな!!」

そう言うと、海燕はさっさと出てってしまった。

気まずい空気が、二人の間に流れる。初対面で互いのことを知らないで当たり前と言えば当たり前前の状況ではあったが、海燕の説明の足りなさを日向は恨んでいた。

「……………ああ〜、日向つったか？とりあえず上がれ」

「……………お邪魔します……………」

とりあえず、日向は上がらせてもらい、空鶴と呼ばれていた女性に案内されることとなった。

————— こんでもって、一通り説明を終える。

「なるほどなあ〜。まあ、別にいいぜ。でも、うちで暮らすからには、うちのルールに従ってもらおう。いいな？」

「わかった。空鶴さん」

俺がそういうと、空鶴は不機嫌そうな表情をした。

あれ？何か、悪い事でも言ったか？

「ああ————— 堅苦しい!!うちで暮らすんなら、お前はもう家族だ!!もっと砕いて話せ!!」

「え—————……………」

「そうだな…………… 『空鶴お姉様』とでも呼んでもらうか……………」

「それはやめてくれ」

さらっとすごい提案をされたので、冷静に拒否する。

「ほ————— じゃあ、何て呼びたいんだ？」

そんなことを言われても今まで一人暮らしだった俺は、中々思いつかない。

「う————— ん…………… 『姉さん』……………?」

「…………… まあ、それでいいだろう。歓迎するぜ、日向!!」

そんなこんなで、俺は志波邸で住むことになった。

その後に、俺とそんなに変わらない歳ぐらいの男————— 岩鷲に会わせてもらった。

…………… あんまり言いたくはないけど、姉さんは勿論。海燕も、一応美形に入る方の見た目だったけど、岩鷲は————— …… うん、THE・

男子みたいな感じだ。でも、しつかり下まつ毛はある。だがまだまだ子供である。しかし俺も人のことは言えない。

ちなみにその時に

『姉ちゃん、誰だそいつ?』

『天宮城日向っていうんだ。うちに住むことになったからよろしくやっといてくれ』

『ええ〜〜?!?!何でここに?!!』

『死神になるための勉強だよ』

『死神にいく〜?!?!おい日向!お前がどんだけ頑張ってもなあ、うちの兄貴に勝てることなんか永遠にねえんだよ!!』

『根も葉もないこと言ってるじゃねえよ、岩鷲!!』

『痛え?!ね、姉ちゃん!殴らないでくれよお!!』

という感じのやり取りがあった。

その時に、岩鷲に目の敵にされたけど、俺に非はないと思ったのでスルーした。あと、姉さんが凶暴だとわかった。

その後に、志波家の皆と夕飯を食べた。その時に姉さんに「風呂沸かしてくれ」と言われたので、俺はそのためにある人物の元へ行く。

「岩鷲。風呂いつもどういいう感じで沸かしてる?」

岩鷲の元である。

話しかけたら露骨に嫌な顔をされたが、姉さん命令なので引くわけにはいかない。

「……………何で、俺に聞くんだ?」

「姉さんが、いつも風呂を沸かしてるのは岩鷲だって」

「ぐぬぬ……………」

岩鷲が、いかにも教えたくないみたいな顔をしている。

「……………教えてくれたら、今後も俺が風呂沸かしを請け負うぞ?」

「本当か?!」

意外に食いつきが早かった。同じくらい歳のだからわかることだが、十歳くらいの子供は、家事なんて面倒くさいことはできるだけ避けたいものだろう。でも、姉さんがあんな感じだから嫌でもやらされ

るんだろう。

「いや〜、お前結構いい奴だな！」

「岩鷲が、勝手に目の敵にしてただけだろ」

「え？あ、まあそうだが……。そうだ！日向！俺の子分にならねえか?!」

「遠慮するわ」

「即答?!」

何か子分勧誘されたけど、即座に断る。岩鷲が、ショックを受けた顔でこちらを見てくる。いや、何で成功すると思っただよ。

「…………じゃあ、弟分になれ！それで、許してやる!!」

「何で、風呂沸かしの交換条件みたいになってんだよ」

再び岩鷲が、ショックを受けたような顔で見えてくる。

「…………でも、それなら別にいいぞ。姉さんが、俺の事を『家族』って言ってくれたしな」

この言葉に、岩鷲はすぐさま目を輝かせる。

「本当か?!よ〜〜し！さつそく、兄貴である俺が、風呂の沸かし方を教えてやろう!!」

「…………単じゆ…………素直な奴…………」

見たところ、岩鷲は末っ子だから弟かなんかが欲しかったんだろう。それに、海燕のことも尊敬してる感じだったし、あんな感じになりたいという願望もあったんだろう。…………海燕も、結構強引な感じだったけどな。

その後、風呂を沸かして、岩鷲が「男同士の裸の付き合いだ！」とか言っつて、一緒に入ったけど、一人だけハイテンションだった岩鷲は、姉さんに「うるせえ！」と言われて、殴られていた。哀れ…………。

入浴後は、寝ることになった。ちなみに、俺は岩鷲の部屋で寝ることになった。ぶっちゃけ汚かったので、軽く掃除してから床に入った。

「では、今日は平仮名を練習しますぞ!!」

そんなことを言うのは、むさ苦しいちよび髭のおっさん——もとい、金彦である。

そう。ご察しの通り、俺は字が書けないし読めない。ずっと山の中で過ごしていたから、別に書けなくても不便しなかったから、特に覚えようとしなかった。

「まずは……『あ』!!」

「ほい」

出された文字を俺は、難しげもなくさらさら書く。

「おお！初めてにしては、お上手！では次は……『い』!!」

「ほい」

誰かが、覚えるには関係性やらを見つけるといい的なことを言っていた気がする。文字を書くのだから、普段口に出している物を、形として書き出しているだけだから、覚えるのはそこまで難しくはないはずだろう。

「センスがありますな、日向殿！」

「そう？」

俺は、和紙に墨汁の付いた筆で文字を書く。持ち方については、今まで箸持ってたわけだから、さほど難しくはなかった。センスがあるという割には、俺の字はまだまだ拙いと思う。初めてにしてはってことか？

「いや〜、岩鷲殿よりも何倍もお上手！今の岩鷲殿の書く字は、汚くて読めないのです!!」

「それは色々問題じゃない？」

俺よりも、字と接してきてる奴が、初めての俺より汚いつてどういうことだよ、と思った。

そんなことを思いながら練習していると、三時間くらいで終わった。

「姉さん。何かやることある？」

昼を食べた後、俺は姉さんの元へと向かった。書写が終わった後に、金彦に何かすることあるか聞いたら『遊びに行っただいかな？』と

言われたので、今日のカリキュラム的なことは終わったのだと察した。なので、居候と言える俺は、自主的に何か手伝うことはないかと、聞きに行った。

「なんだ？もう終わったのか？」

「うん」

「そうか、う〜う〜ん……………」

姉さんは数秒唸った後に、閃いたと言わんばかりに顔を上げた。

「そうだ！せっかくだし、鬼道でも教えてやるよ！」

「鬼道？」

「おう！覚えといて損はしないしな！」

そう言われて、俺は姉さんに表へ連れて行かれた。

「……………いいか？鬼道には『破道』と『縛道』の二種類がある」
「ほお〜」

『破道』は字のごとく、敵を攻撃する術。『縛道』はどちらかというところ、防御だったり、拘束だったり、補助的な術だ」

「そーいや、海燕が使ってたな……………」

「へえ〜、どんな奴を使ったんだ？」

「俺に向かつて、『這繩』はいなわとかいう奴を使ってきた」

「……………兄貴はなにしてんだか……………」

姉さんの顔が若干引きつっているの、海燕は、結構俺にやばいこととしてくれたんじゃないかな？と思った。

「まあいいや……………日向。どんな術使ってみたい？」

「ん……………？そーだなあ……………どっちも習いたいけど、どうせだったらカッコいい奴がいいな……………」

「そうか、わかったぜ！」

そーいうと、姉さんは丸太をどこからともなく引張ってきた。

「よ〜し、見てろ。……………破道の四・『白雷』!!」

姉さんが術の名を叫ぶと、突き出した右手の人差し指から、一筋の白い光線のようなものが放たれて、丸太を貫通した。

「す……………すげえ!!」

俺はその光景を見て興奮した。指から光線というのは、男にとってロマンのように思えて仕方がない。

「へへへ……………よし、日向! やってみろ!」

「え?……………やり方は?」

「頭の中で、術のイメージをしっかり持つんだ。その後に、霊力を込めて術の名前を言えばできる」

結構アバウトだな……………。

「よし……………」

俺は、姉さんの言った通りに、頭の中でさっきの姉さんをイメージする。

「——破道の四・『白雷』!」

俺が術を唱え終わると同時に、突き出した人差し指から、閃光が瞬く。

直後に、丸太に穴が空き、後ろ辺りの木がバスツ!! というような音を立てた。

「……………日向、やるじゃねえか!!」

直後に俺は姉さんに抱き寄せられて、髪の毛をわしやわしやとかき回される。

苦しい! あと、何か柔らかい!?

「ね……………姉さん! 苦しいよ!!」

「さすが、俺の弟だぜ! よろしくし! 他の奴もバンバン教えてやる!!」

結局そのあと俺は、鬼道の破道と縛道を二十番台までやらされた。

それでわかったことは、俺は雷系の破道が得意であるということだ。いいよね雷。かつこいい。あと、縛道の八・『斥』も、なかなかおもしろかった。相手の攻撃をはじくみたいな感じの術だったけど、防御手段が増えたということは喜ばしいことだ。

その後、上機嫌な姉さんと一緒に屋敷に帰った。俺の飲み込みが速いとかで、嬉しいらしい。そう言われると、俺の顔も自然にほころぶ。そのときに、『笑うとかわいいじゃねえか』と言われて恥ずかしかった。

金彦に聞くと、明日は銀彦が簡単な漢字を教えてくれるらしい。

風呂に入った後、俺は姉さんから貰った鬼道の本を読み始めた。どうも、鬼道は『詠唱』とかいうのをやると、威力も高くなるし、術自体も安定するらしい。そうしないと暴発することもある………。つて、姉さん全部詠唱破棄でやらせやがったのか?!危なっ!

とりあえず、今日習った部分の詠唱を一通り眺めて横を見ると、岩鷲がいびきをかいて寝ていたので、そろそろ時間か………と思いつつ、うそくの火を消した。

………なんやかんやで、この家は楽しい。死神になったら、誘ってくれた二人にお礼でも言おうかな。でも、海燕に言うのはなんか癪だな………。そんなことを思っている内に、俺は夢の世界に入った。

——日向——

どうした?

——生活には慣れたか?——

まだ、二日目だからなあ………。でも、楽しいよ。

——ならばいい——

何か他に言いたいことでもあるのか?

………『器』としての、お前の成長を喜ばしく思う——

お前は親か………。

——どちらかと言えば、兄弟のような存在だがな——

まあ、そうだな。

——1個だけ言うことがあって来た——

なんだ?

——強くなりたいのであれば、虚を倒せ——

………何で今?

——特段、今すぐ倒せというわけでないが、俺たちは特異な存在。

倒した虚が、俺たちの糧となる——

経験値みたいなもんか?

—— 近からず、遠からず。そのような遠回りなものではない——

もしかして、今までもそれに関係することがあったのか？

—— 鋭いな。以前は、自然と虚を倒していたからそこまで言う必要はないと感じていたが、死神となり、力を欲するなら別——

例えば？

—— 虚化の時間が延びたのも、その要因の一つだろう——

……………なるほど

—— 今日言いに来たのはこれだけだ——

—— そうか。お疲れさん。——

—— ああ。じゃあな——

「んが？」

俺は夢を見終わると、目を覚ました。

外を眺めると、煌々とした朝日が山の間か昇ってくる美しい光景があった。

「……………いいもん見た」

今まで、山の中で育ってきたので自然と、太陽が山の間から昇るという光景は、あちこちに茂る木々によって遮られて見えなかった。よって、しっかりと朝日を見たのは、これが初めてであった。

「……………目え覚めた……………」

そんな煌々とした朝日を眺めている内に、俺の目はすっかり覚めてしまった。朝に陽の光を浴びるといっことはいいって聞いたことがあったけど、こういうことなのかと実感した。

身体は、すっかり活動できる体勢にはいつている。

そうなってしまったからには、二度寝をするつもりにはならない。

「……………顔洗いに行くか……………」

—— そう思い、俺は井戸のある方へと向かった。——

「ん？おはよう！早かったじゃねえか！」

そこに居たのは、寝間着姿の姉さんだった。

「おはよう。姉さん早いね」

「いや、いつもこんくらいだぜ？この後、俺が金彦と銀彦を起こしに行くつてのが、日課なんだが、ちようどよかった。行ってくれねえか？」

「うん……………いいけど、一回顔洗わせて……………」

そう言つて、俺は井戸の中に吊るしてあつた桶で水を汲む。

その後、俺はその水で顔を洗つた。

「おら、これ使え」

そう言つて、姉さんが渡してきたのは、手ぬぐいであつた。

「ありがとう」

ぐしぐしと顔を拭いていると、突然、姉さんに手繰り寄せられ抱きしめられた。

「……………かわいい弟が増えて、俺は嬉しいよ……………」

「へ……………？」

「……………ほら、顔洗つたなら、皆起こしてこい!!」

「わ……………わかつたよ!!ちよつと離して!」

俺は、姉さんの綺麗な左腕をなるべく優しく、痛くないように引きはがした。そして、そそくさと姉さんの元から走り去つていった。

「……………優しい子だな、あいつ……………」

空鶴は、誰にも聞こえない言葉を、自分のもう一人の弟へ向けた。

姉弟

名とは魂

その文字に

その声色に

その並びに

幾つもの心が介在する

この思いが薄れる前に 言に魂を乗せ

君の名を呼ぶ

俺は、志波家に来てからもうすでに三年が経とうとしている。

姉さんは勿論、岩鷲ともすつかり仲良くなって、家にいるときはいつつも絡んでる。それで、時々喧嘩に発展してタイマンになるけど、俺が圧勝する感じになっている。

勉強の方も、漢字なら辞書に書いてあるやつならだいたい読めるし書ける。さすがに、絶対使わないであろう奴は覚えてないけども。それに、数学も少し学んだ。一応、志波家も商売する家なので、花火の売り上げのピークの夏はあわただしくなるので、そのとき用に、算盤を使つての足し算、引き算、掛け算、割り算はやった。その時に、姉さんに『岩鷲より使える』と言われたのを聞いた岩鷲が、血涙のようなものを流していたような気がしたが、俺は見ないことにした。

剣術は、金彦と銀彦と竹刀で打ち合っている。時々帰つて来る海燕とも打ち合うが、その時は中々決着が着かず、飯の合図で終了し、いつも引き分けに終わっている。……次こそはぶつ潰す……！

鬼道の方は、六十番台までできるようになった。姉さんは、破道の六十三『雷吼炮』が得意だったので、俺もそれにあやかかって結構練習して、かなり得意な鬼道の一つとなった。

そして今は梅雨の時期。花火屋のうちは、あまり動かない時期に

なった。勉強とかの方もほぼ自習みたいな感じで、教科書与えられてそれをやるか、今までのを復習するかみたいな感じになっている。つまりなにかというところ……。

「暇だ………」

そう、暇なのである。暇で仕方ないのである。

この前、海燕に『真央霊術院の試験を受けたい』と言ったら、『来年の春だ』と言われた。春なら先に言ってくれば今年受けてたのに、という感じで本当にしばこうと思った。

というわけで、俺は来年の春まですさまじく暇なのである。

そんな俺が、今日することは――

「南まで行って帰って来る」

マラソンである。俺は週に一回、虚化の訓練のために、虚化した状態で流魂街の端っこまで走って、折り返して帰ってくるということをしている。虚化すると、これを五時間くらいで終えることができる。ご察しの通り、俺の虚化継続時間は延びた。現在最高六時間だ。それと、もう一つ。姉さんに『瞬歩』とかいうのを教わったので、移動が凄まじく速くなった。でも、このマラソンは瞬歩を使用しない。半分行楽気分で作ってるのでちょっとゆっくりぐらいでいいという感じで作っているからである。俺は、竹筒に水を入れて、懐にはおにぎりを二つほど入れた笹の袋を忍ばせる。

そういえば、岩鷲もやるとか言ったときは、俺が虚化しない速さでも、一時間でダウンしてた。

そんなこんなで走り始めて早三時間。位置的には『戌吊』だろう。山の中を軽やかに駆けて行くと、雨で湿度が高まり、顔には湿った、そして森の香りを含んだ風が当たってくる。

「そろそろ、昼にでもするかなあ………」

体力はまだ余裕があるが、お腹の方はそうはいかない。先ほどから、数刻度にぐくくと鳴る。

せつかくなので、景色の良いところで食べたい。そんなことを思っ

て周りを見渡す。すると、右手の方に大きな崖のようなものが見えた。

「よし、あそこにしよう」

そう思い立つとすぐにそこへ向かって走り出した。

今更だが、登山は初めてだ。意外と疲れる。だが、高い所から眺める景色というのも中々乙なものだろう。

そんなことを思いながら歩を進めていると、奇妙な霊圧を感じた。

「……………虚か？」

そう。虚の霊圧。だがしかし、気になっているのはそこではなかった。

「死神の霊圧も感じる……………」

虚がいるであろう場所に、死神の霊圧も感じるのだ。一つだけ。もし、討伐に出てきた死神ならば二人以上出てくるであろう。しかし、今感じられるのは一つだけ。

「……………行ってみるか」

その霊圧を感じられるのは、この崖の先。そこで、昼食を食べようとしていたので、せっかくなら虚退治もしてやろう。そう思った。

「ルキアを離せ！死神！」

そこに広がっていたのは、地に伏せる黒髪の少女と、死神と思しき男の太ももに刀を突きたてる黄色の短髪で前髪の一部があがっている小さな女の子。さらにそこより少し離れたところには、片目を長い髪の毛で隠すこれまた小さな男の子である。

「邪魔だあ!!」

死神は、刀を突きたてる女の子を殴り飛ばし、自分に刺さっていた刀を抜く。

「つ……………これはやばいだろ!!」

死神は刀振り上げ、殴り飛ばされ地面にへたり込む女の子を今にも斬り捨てようとする。

「お姉ちゃんー！」

少し離れていた場所にいた男の子は、いつの間にかに、女の子と死神の間に入り込み、姉と呼んだ女の子に覆いかぶさり、刀から庇おうとしている。

「破道の四・『白雷』！」

俺はとっさに、死神の刀を持っている腕の手首を鬼道で撃ち抜いた。

「ぎゃあ!!」

あまりの痛みに、死神は手から刀を零す。

「おいおい……………。女と子供に刀振り回すなんざ、ちよつとろくでもねえんじやねえか？」

そう言つて、俺は死神の注意を姉弟から離す。すると、死神はこちらを向いて不気味な笑みを浮かべてきた。

「お前……………いいな……………その体……………よこせえええええええ!!!」

そう叫んできた死神は、俺に飛び掛かってきた。俺は、寸でのところで死神の振り下ろした腕を躲す。

「こいつ……………虚につ……………?!」

さきほどから、死神の周りには灰色掛かった蛇のような虚が浮遊している。

「なら……………手加減はしねえ!!『虚帝』!!」

俺は、名を叫び右手に黒刀を、顔に仮面を出現させる。

「よこせえええええええええ!!」

『破道の三十三・『蒼火墜』!!』

「ぐああああ!!?」

再び飛び掛かってきた死神——虚に、俺は『蒼火墜』を浴びせる。『蒼火墜』は、自分の霊力が高いほど威力が上がる鬼道だが、虚化している俺の霊力は普段と段違いなので、人一人吹き飛ばすには十分すぎるほどの威力が出た。『蒼火墜』を浴びた虚は、青い炎で身を焼かれて

「これ、食うか？」

そう言つて俺が取り出したのは、昼に食べ損ねたおにぎりだった。「ありがとう!!」

感謝の弁を言いながら受け取るのは姉の方であった。その後、弟の方が「あ……………ありがとう」と、遅れて言つてきた。おそらく、気弱な子なんだろう。

「お前ら、名前なんて言うんだ？」

俺がそう聞いた瞬間に、姉弟の顔が目に見えるように沈んだ。

「私たち……………名前ないんだ……………」

「ルキアにつけてもらう約束だったんだ……………」

「ルキアって、そいつのことか？」

そう言つて、俺は寝かせた少女の方を見る。黒髪のセミロングで毛先が少々跳ね気味で、前髪が左斜め下に向かって鼻の付け根へと伸びているという特徴的な髪型をしている。だが、その寝ている姿からもなぜか言い表せることのできない気品のようなものを感じる。

「うん！ルキアはね！お腹のすいてた私たちを拾つてくれて面倒みてくれたの!!」

「ルキア、すつごく優しいんだ！だから……………助けてあげて!!」

弟の方が、俺に向かってルキアという少女の救済を求めてくる。

「安心しろ。大きな怪我もないし、呼吸も安定してるし、霊圧も安定してる。すぐに、目え覚ますだろ」

俺は、姉弟を安心させるために、できるだけ多くの助かる要素を投げかける。俺は、医者じゃないし、大したことはわからないけども、持病とかなければほとんど健康体な身体だと思った。

「ほんとっ?!」

「ああ、ほんとだ」

「やった——!」

ルキアが助かると聞いて、姉弟は喜ぶ。

「早く、名前教えてもらえるといいな」

そう言いながら俺は、姉弟の頭をちよつと乱暴に撫でてやる。

「うんっ!!」

「う……………ううん……………」

「っ?!ルキア?!」

ルキアと呼ばれた少女は、うつすらと目を開いた。

「ルキア?大丈夫?」

「お前は……………誰だ……………?」

少女の口から出た衝撃の言葉に、姉の子はビクツと体を揺らす。

「ル……………ルキア……………?私だよ……………?覚えてるよね……………?」

「ん……………?お前の名前は何と言うんだ?」

信じたくない言葉。

それは、姉弟の心を貫くには十分すぎる言葉だった。

「う……………うああああああ!!」

「お……………お姉ちゃん?!」

姉は、その言葉を聞き、ものの数秒で号泣しながらその場を離れ、家から飛び出て、弟もそれを追う形で家を飛び出て行った。

「お前……………自分の名前分かるか?」

「私か……………?私は、ルキアと申す」

——……………自分の名前は思い出せるのか。

「じゃあ、他に思い出せることは?」

「それよりも、お前は何者だ?」

「俺か?俺は、天宮城日向だ。お前が、崖で倒れてるのを見かけてここに連れてきた」

事実を淡々と述べる。

「私が崖で……………?そうか、済まなかった。恩に着る」

「それで……………頭打って、何か思い出せないこととかあるか?最近のこととか……………」

「……………私が、崖で倒れていたと言ったが……………私は、なんで崖に居たのか思い出せないのだ……………」

「っ……………ーじゃあ、あの姉弟たちの事は?!」

「……………すまない……………わからんだ……………」

俺も驚いた。さっきの発言もそうだが、寝起きで朦朧としていた可能性があったから、まだ冷静でいられたが、こうもはつきりしている

状態でも思い出せないということになると、ルキアというこの少女は、本当にあの姉弟のことが記憶にないのだろう。

「そうか………わかった。俺は帰るから、体気を付けろよ」

「あ………ああ、運んでくれて済まなかったな」

俺はこうして、あの家を出た。

それと同時に俺は、あの姉弟の元へと向かう。

「ひっぐ………ひっぐ………!」

姉の方は、木の根元で体操座りをし、嗚咽を立てながら泣いていた。弟も、それに寄りそうようにして姉をなだめているが、涙を流すことを止めるのは不可能だった。

「………ルキアは、お前らの事を覚えてなかったよ………」

俺も、こんなことを伝えたくはなかったが、真実を伝える義務がある。そんな気がした。

「嘘だっ!!」

姉の方が、俺に向かって怒りのような、悲しみのような、複雑な表情をしながら声を荒げる。

「きつと………すぐ思い出すもん………だって………あんなに………」

あんなに楽しかったのに………!!」

「………だけど………」

——『焰』と『雫』——

「っ………?!」

——それが、こやつらの名——

………何でお前が知ってるんだよ?

——今日倒した虚の中にあつた霊子に、記憶のかけらがあつた——

っ………?!そんなもん?!

——おそらく、のり移った魂魄の記憶を糧にする虚なのであつたのだろう。そして、この記憶は、あの小娘の………——

………どっちが、どっちの名前なんだ?

——姉が『焰』。弟が『雫』——

そうか………

「……………だけど、一つだけ思い出してくれたことがある……………。お前たちの……………名前だ」

その言葉を聞いた途端に、姉弟は顔をこちらに向ける。

「名前……………?」

「ああ……………。お前が『焰』。お前が『雫』だ」

しっかりと、目を見つめ名前を伝える。

「ルキアって奴も、お前らを思い出せなくて苦しんでる。だから、今は苦しいけどルキアから離れてやってあげないか……………?そんで、皆で落ち着いて話せるようになってから、また思い出を作っていけばいい……………」

「でも……………僕たち……………おうちが……………」

「うちに来い!!寂しくさせなくてやるから!!」

俺はできる限りの笑顔を、焰と雫に向けた。

「う……………うわああああん!!」

姉弟は、俺の足に縋り付き、自分の喉から出る限りの泣き声を上げた。

その後、泣き疲れて眠ってしまった二人を連れ、俺は志波邸に到着した。いつもより遅いことに心配して待ってた姉さんに、色々と事情を説明し、二人を家に住まわせてくれることになった。途中で一発ぶん殴られたので、なぜかと聞くと『怪我したら危ねえだろ!!』とのこと。いや、姉さんの一発の方で怪我したんだけど。

次の日には岩鷲と対面していた。岩鷲は最初は、明らかに自分よりも年下の子供たちに難色を示したが、元々面倒見がいい奴だったので、割とすぐに懐かっていた。

俺はと言うと、兄十命を助けてくれた凄い人ということで、岩鷲以上に懐かれた。そのことで、また岩鷲が血涙を流していたような心配がしたが、教育に悪いので二人に見せないようにした。

さらに、俺は二人に勉強を教えることになった。ほら、よく言うじゃん？教えられるくらい勉強しろって。だから、俺は復習も兼ねて二人の妹弟に勉強を教えるようになった。

そんなことがありつつ——春を迎えた。

試験

変わる風景

変わらぬ志

「……………よし。準備完了!」

俺は荷物をまとめていた。今日は、真央霊術院の入院試験の日だ。
「準備できたか?」

そう聞いてくるのは海燕である。俺を迎えに来てくれたのである。

「ああ……………。ばっちしだ」

「そうか……………。じゃあ、表行くぞ」

「……………おう」

門の前には、皆揃っていた。姐さんに、岩鷲。金彦と銀彦。そして
焰と雫。さらに、海燕の奥さんだという都さんも来ていた。

「……………とうとう行つちまうんだな……………」

そう言ってくるのは岩鷲である。

「なんだ? 雑用する奴が減って大変になるってか?」

こんな軽口も、院に入ったら中々叩けなくなるだろう。

「お兄ちゃん……………」

「兄さん……………」

切なそうに見て呟くのは、焰と雫である。

「ははっ! そんな悲しそうな顔すんな!! 休みの日にお土産買って帰っ
てきてやるから!」

そういつて、二人の頭を乱暴に撫でる。あの時みたいに。

「日向……………」

最後に声を掛けてきたのは姉さんだった。

「……………体、気を付けろよ?」

左手を、俺の右肩に乗せる。

「姉さん……………」

俺はすぐさま、できる限りの誠意を込めたお辞儀をする。

「四年間、本当にお世話になりましたっ!!!このご恩はっ!!一生忘れません!!!」

顔は、地面を向いていたが、声は辺りに響いた。

……………この四年で、俺の身長は姉さんとほとんど変わらなくなっ
た。

「……………水臭えぞ、日向。お前は、もううちの一員だろうが」

姉さんはそう言って、俺の頭を抱き寄せる。

「……………いつでも帰ってこい」

「……………ああ」

俺は、姉さんに顔を見られないように、顔を上げた後直ぐに背を向
けた。

「……………行こう。海燕。都さん」

「おう」

「ふふっ……………ええ……………」

そう言つて、三人揃つて霊術院へ向けて足を進めた。

少し離れた後、俺は志波邸の皆の方に振り返る。

「じゃあな—————!!元気でやってくよ—————!!」

皆に声が聞こえるように、精一杯声を出す。

「元気でやってこ—————い!!」

「いつでも帰ってよ—————!!」

「お兄ちゃん、頑張つて—————!!」

「兄さ—————ん!!!」

「お達者で——!!」

皆の声を確認した後、俺は再び足を進めた。

「…………泣いてたろ」

「うっせえ」

「そうか」

「おう」

海燕とも少し言葉を交わして、歩く速さを上げた。

そんなこんなで、俺たちは今、霊術院の前に居る。

「…………で、どこで筆記試験やるんだ？」

「ん？お前は、筆記試験はしないぞ？」

「…………は？」

俺と海燕の話がかみ合っただけなのに気づいた都さんが、話を挟んでくる。

「海燕……………もしかして話してなかったんですか？」

「ああ……………かもな」

はあ、とため息を吐いた都さんは、俺の方を向いた。

「日向君。あなたは、『推薦枠』で願書を出したの」

「『推薦枠』？」

都さんが説明するにはこうだ。入院試験には二つあって、一つは筆記試験の方。これは、所謂『一般枠』の方だ。ついでに言えば、筆記試験というのもそんな難しいことでもなく、ただ単に意気込みを文字に書いたりなどで、メインは霊圧の高さの調査である。そして、俺が今回受けるのは『推薦枠』。これは、護廷十三隊の席官以上の人に推薦状というものを書いてもらって、面接だけをする方らしい。

「ちなみに日向君の推薦状は、浮竹隊長と海燕と私の三人分、出しておいたわ」

「何その面子怖い」

十三番隊の上から三人の推薦って……………。

「つまり、お前がよつぽどやらかさない限り、お前を落とすことはできないっつーわけだ」

「脅迫じみてるじゃねえか」

「だから、今日は瀨霊廷の観光だと思え」

そんな会話をし終え、俺は霊術院の面接会場へと向かった。

その際に、海燕は『まあ、テキトーにやれ』と。都さんは『ファイト!』と、小さくガッツポーズをして見送ってくれた。

そんな感じで早速俺の面接の順番が回ってきた。しかし聞かれたことは大したことではなかった。『霊術院に入ろうとした理由はなんですか』やら『将来は、どのような人物になりたいと考えていますか』など、単純だったのでスラスラ答えられた。

大体五分くらいで終了し、俺は部屋を後にした。

「お、終わったか?」

「おう」

「じゃあ、もうお昼だしご飯にする?」

都さんが、飯の誘いをしてくれたので俺と海燕はそれに頷く。

そして、俺たちは定食屋へ……………。

「あら~~~~?海燕君と都ちゃんじゃないか~~~~!何だい、デートかい?」

俺たちの目の前に現れたのは、笠を被った無精髭を生やした男。さらに言えば、女物の鮮やかな桃色の着物を羽織っている。

「きよ、京楽隊長?!」

「隊長?」

「京楽隊長は八番隊の隊長で、浮竹隊長とも長い付き合いの方なんですよ」

へえ~~~~。そんな凄い人なんだ……………。

あれ?今一瞬、京楽隊長という人が、目を見開いた気が……………。

「ん?そっちの子は誰だい?」

「天宮城日向と申します。京楽隊長」

「おやおや、日向君っていうんだねえ?僕は、さつき都ちゃんが言った

通り、八番隊隊長・京楽春水って言うんだよ。よろしくねエ」
「こちらこそ」

俺は、至って丁寧に挨拶を済ませる。

「成程お〜、霊術院の試験を受けてきたんだねえ？」

「ええ、まあ……………」

「推薦枠です。私と海燕と浮竹隊長の」

「へえ〜！それは、将来が楽しみだねえ！」

「それほどでも」

「実は面接官の中に、七緒ちゃんがいたんだよ〜」

「七緒さんがですか？」

「……………七緒さんってどなた？」

「(八番隊の副隊長だよ。黒髪を後ろで縛ってる、メガネかけてる真面目そうなべつぴんさんだ……………)」

「(……………ああ、真ん中にそんな人いたわ)」

そんなことを海燕とこそこそ話していると、京楽隊長が突然提案をしてきた。

「せっかくだから、僕が日向君にご馳走してあげるよ〜！」

「……………へ？」

……………何かデジャヴ。

「いいんですか？」

「お……………おい、日向！」

海燕が俺を止めようとするが、京楽隊長は俺の返答を聞いて笑顔になった。

「そうかい！じゃあ、おいしい店に案内するよ！」

そう言っつて、京楽隊長はずんずんと歩を進めていく。

「あ……………京楽隊長?!」

「ん？ああ！勿論、二人もご馳走するよ！」

「え、いや、そんなわけじゃ……………」

「ほらほら〜。遠慮しないで〜」

都さんが、焦った様子で何か言おうとしたが、京楽隊長は気にせず、都さんと海燕も誘った。

俺たちが連れてこられたのは、綺麗な内装の海鮮系の料理がある店だった。

色々料理があつて目移りしたが、俺は一番人気の『海鮮丼・竹』というのを頼んだ。この『竹』というのは、サイズらしい。

「どうだいこの店？お気に入りなんだよ〜」

「凄く旨いです〜！」

俺は、海鮮丼のエビが乗つかつてた部分を口に頬張りながら応える。エビの弾けるような食感と、醤油のコクと塩味、わさびのツンとした香りが合わさつて非常に美味しい。

「よかつたよ〜〜！」

「すいません、私たちもご馳走になつて……………」

「ゴチになります!!」

「いや〜……………君らの結婚祝いを何にも渡せてないからね〜……………。このくらいだつたらお安い御用だよ〜〜」

海燕は海鮮天ざるそば。都さんはお刺身定食を頼んで食べている。

「隊長は儲かるんですか？」

俺がぶつちやけた質問をする。

「まあ、それなりだけど、使う機会はほとんどないねえ〜」

京楽は、軽く笑いながら応える。

すると、店の入り口の方から女性の声が聞こえてきた。

「京楽隊長?!ここにいらしたんですね?!」

「お?七緒ちゃんじゃないか〜〜！」

「『七緒ちゃんじゃないか〜〜!』じゃないですよ!!隊長は、今日一応試験監督に選ばれてたんですよ?!」

衝撃の事実発覚。目上の人にも関わらず、俺は凄まじく冷めた目を目の前の人物に向ける。

「いや〜……………七緒ちゃんが居れば十分かな〜?つて思つてねエ……………」

「確かに、京楽隊長が居たら風紀を乱し邪魔に思う方もいらつしやると思いますけど、選ばれた以上は来ていただかないと!!」

さざらつと失礼なこと言ってると思った。

「隊長。今からでも来ていただきませう?」

「いや〜僕は……………」

「来・て・い・た・だ・き・ま・す・よ・?!」

「わ、わかつたよお〜!ごめんね、皆!お金、ここに置いておくからね〜」

京楽隊長は、食事の代金をテーブルの上に置いていき、七緒さんに耳を引つ張られて連れて……………いや、連行されていった。

「……………嵐だ」

「だな……………」

「……………否定できない……………」

試験の結果が出るのは明日ということなので、今日は近くにとった宿に泊まることにした。明日の朝は、浮竹隊長が来てくれるらしい……………プレッシャーが凄い。

だけど、色々と回って疲れていたの、目を閉じたらすぐに眠ることができた。

「お早うございます。浮竹隊長」

「久しぶりだな!日向君!」

待ち合わせ場所に後に現れたのは浮竹隊長だった。

「体の方は大丈夫だったんですね」

俺は、海燕に『浮竹隊長は、体弱いから、もしかしたら行けなくなるかもしれない』と言われていたので、もしかしたら……………と思っていたが、杞憂だったようだ。

「ああ!君の結果が楽しみで昨日は中々眠れなかったよ!」

推薦枠が受かった場合、推薦した内の誰か一人が来る、という注意事項があつたが……………。

『浮竹隊長だ……………!』

『もしかして、あの男の子を推薦したの?!』

『髪の色似てるし……もしかして、お子さん?!』

——……とか色々聞こえる。最初の方はいいけど、最後の奴はなんだ?なんで俺、浮竹隊長の子供みたいな雰囲気出来ちゃっているのは複雑だ。

「よし……さっそく、番号を確認しに行こう!」

俺は、浮竹隊長に促され合格番号が書いてる掲示板に向かって歩を進める。

ちなみに俺の番号は5番だ。推薦枠の方が番号の小さくなるが、ともに推薦枠をもらってる人物は少ないらしく、全員数えても20人いくかないか程度である。

「お、あつた」

俺は、掲示板から20メートル離れた地点で自分の番号があることを確認した。……なんか感動が湧きあがってこないなあ。

「ん?そうか!おめでどう!さっそく書類を書きに行こうか!」

そうして、俺と浮竹隊長は霊術院の書類を書く部屋へと向かっていった。

「……わわわっ?!も、申し訳ございません!!」

後ろで、褐色肌の青年が誰かとぶつかって謝っているのが見えた。

「んっ……そうか……もうそんな時期かあ……」

「どうしたんですか?」

「いや、こつちの話だよ」

「はあ……」

僚友

振るうは魂
分かつは心
それが剣道

「……………一組か……………」

入院式を終え、クラスが発表された後に、俺は自分が何組かを確認すると、すぐにその教室へと向かった。

ガラツと扉を開けたら、すでに教室内にいた生徒達の視線が俺に集まる。……………俺の顔になにか付いているのかと思う程だ。

「……………ここか」

机の上に自分の受験番号があるのでそこに座るように、と指示されたのでその席に座る。

「お、隣か？よろしくな！」

俺に話しかけてきたのは、赤い長髪を後頭部でまとめた目つきの鋭い男であった。

「おう。天宮城日向って言うんだ。よろしくな！」

「俺は、阿散井恋次だ！」

見た目と違って、中々フレンドリーな人物である。

「あの……………、僕は吉良イツルって言うんだ。よろしくね、天宮城君……………」

俺に声を掛けてきたのは恋次と逆サイド……………向かって右側に居る、大人しそうな男だった。

「おう、よろしくな、吉良！あと、俺の事は名前の方で呼んでくれ！そっちの方が短いからな！」

「呼ぶ基準それがよ……………」

俺のどうでもいい要求に、恋次は苦笑いをする。

なんやかんやで、こいつらとは仲良くやれそうだ。

今日は、校訓やら自己紹介だけだったのですぐに終わったが、寮の整理があるからだという理由らしい。ちなみに俺の寮の同居人は……。

「へっ、お前らとはつくづく縁があるらしいな」

恋次と吉良だった。

「ま、いいんじゃないやねえか？」

談笑しながら寮の部屋の扉を開けると、奥に広がる十畳くらいの部屋があった。壁際には、小さな机が三つ並んでいて、隅の方には布団が三つ積み重なっている。

「入浴時間は七時から八時までらしいぞ？」

俺は壁に貼ってあった紙の注意事項を読んで二人に伝える。

「お、そうなのか？よし、時間になったら一番に行つてやろうぜ！」

「いいな、それ！吉良もだろ？」

「あ、うん！僕もそうするよ」

時間になった後、俺らはいの一番に風呂に向かい、結構はしゃいだ。いや、やっぱり同年代って親しみやすいわ。

「朝だぞ、恋次——？」

「んが？」

俺は、いびきをかいて寝ていた恋次を揺さぶつて起こす。

「早くしねえと、朝飯食いつぱぐれつぞ？」

「何?!」

朝飯を食い損ねる的なことを述べると、恋次はすぐさま目を覚ました。

「ちなみに、俺と吉良はもう起きて準備し終わってるぞ？」

「それを早く言ええ!!」

すると恋次は慌ただしく準備をし始めた。朝、学校に行くために慌ただしく準備する——これって青春？

そんなことを思っている内に、恋次は着替えを終えて、荷物を肩に掛けた。

「よし、行くぞお前ら!!」

「いや、恋次を待ってたんだよ」

慌てて走る恋次を先頭に、俺らは院の食堂へと向かって行った。

「おやあ、早いね〜」

俺らを迎えたのは給仕のおばちゃんの笑顔だった。

「おはようございます!」

「おはようございます」

「おはようございます……って、まだ全然いねえじゃねえか……」

「混んでから来るより、空いてるうちに来た方がいいだろ?」

「……早起きして損したぜ……」

「でも、早起きは三文の徳って言うし……」

残念だったな恋次。吉良は、俺の味方だ。

「まあまあ、ほら。食おうぜ!」

今日の朝飯は、ご飯に大根の味噌汁、豆腐、ほうれん草のおひたし、沢庵である。うん、旨そうだ。

「む……恋次ではないか?お前にしては早いな」

俺らは、恋次に話しかけた声のする方を見た。

「あっ……!」

「……お主は……!?!」

そこに居たのは——あの時の、戌吊の少女。

「……ルキア?」

「……天宮城?」

「なんだ?日向、ルキアと知り合いだったのか?」

「あ……まあ、顔見知り程度だけだな……」

「う……うむ……」

「ほら、隣座るか?」

「ああ」

ルキアは、持っていたお盆を恋次のものの隣に座る。ちなみに、

吉良 俺 恋次 ルキア の順である。

「……………あの、日向君に聞きたかったんだけど」

「ん？なんだ？」

吉良が唐突に話を振ってきたので、俺も含めた三人は一斉に吉良を見る。

「日向君は推薦枠だったよね？」

「まあな」

「な……………何?!」

「ん？なんだそりゃ？」

ルキアは驚き、恋次はわけがわからないという顔をしている。

「じゃ、じゃあ誰の推薦状をもらったの?!」

何か、えらく食いついてくるな……………。

「十三番隊の浮竹隊長と、志波副隊長と三席だ」

事実を簡潔に述べると、吉良がハトが豆鉄砲喰らったような顔になった。

なんかルキアも同じような顔をする。

「その人たちとはどういう関係?!」

「どういうものにも……………元々、浮竹隊長と副隊長に死神になるように誘われたんだよ。それで副隊長の実家に住み込んで勉強して、今年入院試験受けたんだよ」

「……………すごい奴だったのだな……………」

何かルキアが驚嘆の言葉を漏らす、俺別に筆記受けてないからね？

「でも……………成績とかは、霊術院の試験で決まるわけだからなあ……………」

「ま、そうだよな。お前が推薦だかなんだか知らねえけど、院の試験では俺が勝ってやるよ」

「……………言ってくれんじゃねえか」

俺と恋次の間には、火花が散っている。勿論、見えないけどな。

「……………早く食べないと冷めるぞ」

俺と恋次は、ルキアに疎められて我に返る。

「お、そうだな。サンキュー、ルキア」

「ん、それもそうだな」

……………「旨え。」

朝食を食べた後、俺らはルキアと別れて一組へと向かった。一時限目は、死神についての基本的なこと。二時間目は、鬼道について。三時間限目は、歴史。四時間限目は、体術。五時間限目は、国語。その後、放課という感じだった。放課の後は、生徒が自主練出来るようにと、道場が開放してあるらしい。なので、俺と恋次と吉良のトリオで向かっている

「日向。お前は、剣道出来るのか？」

「んー……………打ち合いはしたことあるけど、めちやくちやだぜ？」

「イズルは？」

「基本は一通りやったけど、実戦は……………」

「そうか」

「ご察しの通り、俺らは三人で自主練するつもりだ。事の始まりは、恋次が『動かねえとモヤモヤする!!』とか言ったからである。その後、担任の大字奈原巖呉郎先生に話を聞いて、今に至るといふ訳だ。

「じゃあ、まず誰からやる？」

今回は安全性を考慮して、竹刀にすることにした。

「じゃんけんで負けた二人つてのはどうだ？」

俺がこう提案すると、二人は頷いた。

「よし……………最初はグー！じゃんけんぽい！！」

……………じゃんけんの結果、俺と吉良が最初にやり合うことになった。

「お手柔らかに」

「……………ちらこそ」

審判は恋次だが、ルールは相手に最初に一発ぶち込んだ方が勝ちというアバウトなルールである。

「よーし……………始めっ!!」

「めええええええん!!」

吉良は、構えた竹刀を俺へと振り下ろしてくる。俺は、身体を少しずらし竹刀を避けた後、竹刀を握る手に一発入れる。直後に吉良は、持っていた竹刀を落した。

「小手」

「あ……………負けた……………?」

「よし……………次、恋次やるか?」

恋次は、早すぎる決着に反応出来なかったのか、一瞬固まるが、すぐさま不敵な笑みを浮かべた。

「……………へへっ、望むところだ!!」

俺と恋次が一定の距離をとった後、審判になった吉良が合図を掛ける。

「……………始め!」

「うおおおおおお!!」

恋次は、咆哮と共に俺に肉迫し竹刀を振り払う。それを、一步下がることで避け、俺も横一文字に一閃する。恋次はそれに反応し、すぐさま竹刀で防ぐ。

「どらあああああ!」

防いだ直後に、次は突きを仕掛けてきた。それを、竹刀で軌道をずらし、その流れのまま恋次の腹へと打ち込む。

「胴っ!」

「っ痛え?!」

勝った俺は、頭上でVサインを掲げる。

「ぐ……………もう一回だ!もう一回!!」

「へっ……………何度でも相手になってやるよ!!!」

……………私は、廊下をトボトボと歩いていた。

「はあ……………」

思った以上に、授業で習うことは多い。真面目なルキアは、寮に

帰った後すっかり復習しようと考えていたが、今日の分だけでもかなり多いだろう。

それよりも――

「友人を作るといふのは、意外と大変なのだな……………」

今日という日まで、親しい友人関係を保っていたのは恋次だけ。逆にいえば、恋次以外とは、あまり交友関係を持たなかったのである。つまり、ルキアは現在、絶賛人見知り中なのである。

「……………ん？なんだあれは？」

道場の方に人だかりが出来ている……………。

ルキアは、小走りで道場の方へ行き、意を決して近くの同級生に話しかける。

「あの……………これは、何をしておるのだ？」

「ルキアさん？聞いて聞いて?!今ねえ、一組の天宮城君って子が、挑んでくる男子をばったばった倒しちゃってるの!!」

興奮気味の女子から話を聞いたルキアは、その、朝出会った男子生徒を見ようとした。

「あ……………」

そこには、艶のある白髪をたなびかせて、竹刀を振り回して来たり、突っ込んでくる男子を躲し、一撃で一本を取る者がいた。突っ込んで行く男子の中には、自分の幼馴染である恋次も混じっていたが、まるで歯が立っていない。

「……………凄いな」

自然と口から零れた。

「ねえ、ルキアさん？彼凄くない?!!」

「ああ……………凄いな……………」

いつまでもこの光景を眺めていたい……………。そう思っていた。

「コラア!!もう閉館の時間だぞ!!さっさと片付けて、寮に戻れ!!」

だがそれは、この道場の責任者である巖具郎先生によって妨げられた。

ブーイングする者もいたが、一喝されそそくさと道場を後にしていった。

「ゼエー……………ゼエー……………次は勝ってやるからな!!」

「いいぜ……………何度でも、挑戦を受け付けてやる」

そんなことを言い合う二人が、ルキアの視界に入った。
すると、天宮城が私に気づいた。

「あ……………ルキアじゃねえか? どうした?」

「え……………? いや……………凄かったぞ、天宮城殿……………」

「天宮城殿……………? いやいや! 日向でいいよ!!」

そんなことを言つて、日向は大笑いする。

なぜだか、心がスツと軽くなった気がした。

「俺らは、ここ片付けてから食堂行くけど……………ルキアはどうする?」

「私か……………? うーん……………そうだな、お主たちを待とう」

「そっか。なら、早く片付けなきやな!!」

「え? いや、別にそんなに……………!」

「ルキアア!! 見てんだったら手伝え!!」

「……………お前だけは手伝わんわ、この戯け!!」

——なぜだろう。この者といると……………少し楽になれる。

——自然と、笑顔になれる。

鬼道

鬼の道に

入る鬼子達

入院式から数日。現在、一組の生徒たちは鬼道の演習場に来ていた。行くことは勿論鬼道の練習である。生徒の大半は初めての鬼道ということ、ワクワクしている者だったり、ソワソワしている者だった。一人を除いては。

(……………赤火砲しゃつかほうって、基本じゃねえか)

そう、天宮城日向を除いては。

流魂街に居たころから鬼道の特訓をしていた日向にしてみれば、三十番台の鬼道など初歩の初歩なのだ。勿論、それを知っているのはごく一部人間なので、自分だけ基本はやらないなどという融通など効くわけがない。

そんなことを思いながら列に並んでいると、前の方から歓声が上がった。

「や、やったー!!」

「すごいよ、雛森さん!」

どうやら、同じクラスの雛森桃という女子生徒が、赤火砲しゃつかほうを的に命中させたらしい。

それに続いて、次は大きな爆発音と不穏などよめきが聞こえた。

「……………恋次……………」

どうやら、恋次が赤火砲しゃつかほうを暴発させたらしい。そのせいで、恋次の顔はすすを被ったように黒く汚れていた。前日の、竹刀での打ち合いで分かったことだが、恋次は反射神経は抜群にいい。白打といった体術も、クラスの中でもかなり秀でている方だろう。その反面、恋次は勉強が非常に苦手だ。常用漢字でさえ読めないときがあったが、そのときは日向が横で耳打ちして助け舟を出した。

つまり、恋次は力でガンガン攻めるタイプであり、鬼道などの、頭を使ったり暗記しなくてはならない事柄は苦手なのである。

予想通り鬼道が暴発した恋次が、俺の横をため息をつきながら通っていく。

「ドンマイ……」

「にやけてんじゃねえよ!!」

どうやら、自然と口の端が吊り上っていたようだ。恋次に怒鳴られながら、日向の順番が回ってきた。

「じゃあ次、天宮城。やってみる」

「うっす。……『君臨者よ、血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ。焦熱と争乱、海隔て逆巻き、南へと歩を進めよ』」

詠唱を始めると同時に、日向の手の平には他の生徒とは比べ物にならないほど、巨大な赤い光を放つ球状の物体が現れる。

「——破道の三十一・『赤火砲』!」

直後に、的があったであろう場所は爆発を起こした。煙が晴れると、そこには的は跡形もなく消えさえていた。……周りの的も五つほど巻き込んで。

「——……ミスった……」

しまったと、日向は思った。本気で放てば、的の土台ごと消し炭にする自信があったので、それはまずいということ、自身の半分ぐらいの威力に調節して放ったはずだったが、それでも十分すぎるほどの威力が出てしまった。そのせいで、彼は今周りの生徒から好奇の視線を浴びせられる結果になってしまった。

「あ……あははは……」

笑顔で乗り切る作戦でいこうと思ったが、それは吉良の一言によって無に帰すことになった。

「日向君………すごいね……」

直後に、周りの生徒からは『すげえ!』や『天才じゃねえのか?!』など色々聞こえてきたが、これは四年のハンデがあったからこそ考えたので、日向に慢心や優越感などといった感情は起こることはなかった。

「う……………天宮城……………もうちよい威力下げれるか……………?」

担任の巖呉郎先生から懇願されるような声が聞こえてきて、罪悪感
は生まれた。

「あ……………はい。できます……………」

……………請求されたりしないよな?と、日向は思った。

鬼道の授業の後、トリオで廊下を歩っていた。

「お前、鬼道得意なのか?」

そう聞いてきたのは恋次である。

「ん?ああ……………、流魂街にいたころから練習してたから、基本はほとん
どできるんだ」

そう言うと、恋次は嫌そうな顔をした。

「……………なんつーか、差をまざまざと見せられるけられたっつーか
……………」

「いや……………最初の内は恋次みたいな奴の方が多いし、得意不得意もあ
るしな!」

こんなことを言って、必死に弁明をする。

あの的を多数吹き飛ばした赤火砲を放った後は、的一個分くらいに
調節して全部当てていた。

「でも、あれだったら今月の鬼道の試験は日向君が一番じゃないかな
?」

「まあ、狙ってくぞ?お前らよりアドバンテージがあるんだからトツ
プにならなきゃ、俺が落ち込みまうよ」

そんな談笑をしながら、俺らは食堂へと向かう。今は昼食の時間
だ。

食堂に着くと、俺は配膳を受け取って空いていた席に着く。

「……………あの……………」

席に着いた俺の背後から、誰か女子のような声が聞こえた。

「ん?ああ、雛森さん?どうしたの?」

そこにいたのは、授業で赤火砲を的に見事命中させていた雛森桃

だった。

俺が、振り返ると雛森は一瞬あたふたしたがすぐに要件のようなことを口にした。

「え、ええと……………今日の放課後空いてますか……………?」

「放課後?空いてるぜ?」

「じゃ、じゃあ鬼道演習場に来て欲しいんです……………」

「おう、わかった」

「あ、ありがとうございます!」

雛森はそういうと腰を曲げてお辞儀をしてきた。

「ちよ、そんな堅苦しくするなよ?!同級生なんだし、もつと軽くやってこうぜ?!」

「う、うん!じゃあ、放課後よろしくね!!」

そう言うと、雛森はとととと向こうに走って行った。

「ひ……………雛森さんに何て……………?」

こう聞いてくるのは吉良である。

吉良も配膳を受け取って俺の隣に今座るところだ。

「放課後、鬼道演習場に来て」

「ほ……………俺も行くぜ」

こう言ってきたのは恋次である。

「俺も、今日の鬼道の練習してえしな」

「教えてやろうか?」

「誰がお前のなんか!!」

俺が、冗談まじりにからかうと、恋次は憤慨した様子で返答してきた。

「……………僕も、いいかな?」

「おう、いいぜ」

吉良が、一緒に行つていいかという旨を聞いてきたので、了承した。

「まあ、恋次は次の授業寝ないようにしろよ?」

「……………寝ねえよ」

「なんだ、その間は」

そんなこんなで、放課後。

三人で、鬼道演習場の扉の前に来ている。

「雛森く〜く?」

俺が、ガラツと扉を開けるとそこには、雛森と他の女子が二人ほどいた。

「あ、日向君!こっちこっち!」

俺に気づき、こっちに来るようにと手を招くのでそっちに歩いていく。

「え…………と、そっちの人たちは?」

「え?ああ、赤いのが恋次。大人しそうなのが吉良。自主練するついでについて来たんだよ」

「そ、そうなんだ」

「で、ここになにすんの?」

「あの…………今日の鬼道見て、凄い上手だったから教えてもらいたいなあ〜……………なんて」

「別にいいぞ」

「ほ、本当?!よろしくね!!」

というわけで、女子三人に鬼道を教えることになった。

—————のだが。

「破道の五十八・『てんらん嵐』!!」

なぜか、俺の鬼道の披露会みたいなことになっている。勿論威力は下げている。

「凄い!!五十番台もできるなんて!!」

雛森は、キラキラとした目でこちらを見つめてくる。他二人もそうだ。

「…………いや、見るのはいいけど雛森たちもやるんだぞ?」

「う……………うん!」

そういつて、雛森は俺がやったように刀の柄を手首で回そうとす

る。しかし、途中でポロツと落してしまふ。

「あつ……………」

その結果に、雛森の表情は暗くなってしまふ。人一倍頑張り屋だから、自分のミスひとつをここまで気にしてしまうんだろうな、と思つた。

「雛森、手え貸せ」

「ふえ?」

俺は、雛森が落した木刀を拾いながら、右手首をとつた。ちなみに木刀は、珍しい鍰のある物であつた。

「手首の若干引つ込んでるところを、柄と鍰の間に入れるようにして……………下りるときは自由落下に任せて、上げるときは柄に引つ掛けるように若干外側に早く上げるんだ」

思いつく限りの丁寧な言葉を雛森に投げかけ、雛森の手を使って実践してみる。

雛森は、なぜか顔を赤くしながら、俺に言われたことをやり始めてみた。

「……………あつ!出来た!!」

勿論霊力は込めてないから竜巻は発生しないが、そこには型通り、綺麗に木刀を回す雛森の姿があつた。

「おおくく!できたじゃん!!」

俺は、感嘆の拍手をする。他の二人の女子もだ。

「ありがとう!日向君!!」

俺は、雛森に感謝の言葉を述べられる。

……………女子に感謝されるつてのは、気分がいいな。

今日は、日向君に鬼道を教えてもらった!

授業の時は、最初凄い大きなのを撃つてたけど、その後ののは全弾、的に命中させてた!それを見て凄い人だなあ〜と思つて勇気を出して、他の子と一緒に教えてもらえるように頼んでみたら、すぐにオツケーしてくれた!

白髪で目つきが鋭くて、いつも赤い髪の怖そうな人と絡んでいたから怖い人かなっても思ったけど、全然そんなことなく優しい人だった！教え方も丁寧だし、怒鳴ったり呆れたりすることなく、真剣に教えてくれる姿は……………ちよつとかつこよかつたかも。

ふふふつ！また今度も鬼道教えてもらおうかな？

……………また明日会うの楽しみだな……………

『高熱と争乱』じゃなくて、『焦熱と争乱』な」

「お、おう……………」

俺は、今恋次に絶賛詠唱の暗記テストを行っている。なぜかというと、来週斬拳走鬼の試験があるからだ。

「あれだよ。文全体を一気に覚えようとすんじゃないで、フレーズごとに一節一節覚えた方が覚えやすいんだよ」

「わあつてるよー！」

「あと、『赤火砲』とか『蒼火墜』は最初の詠唱が一緒だし、そういう共通してる部分を一つ覚えりゃ、他のにも引用できるんだよ」

「……………正論なだけに何にも言えねえ……………」

「二人とも？そろそろ、明日の実習の準備しないと……………」

「お、そうだな」

明日の実習とは、魂魄の魂葬の実習である。実際に現世に赴き、魂葬を行うらしい。

「よし、恋次。今日はここまでだ。明日の朝、今やったところテストするからな？」

「な、何?!」

恋次が、『嘘だろ……………?』みたいな顔をする。……………いや、三つくらい頑張れよ。

現世か……………。初めて行くから楽しみだな。どんな感じなんだろう

う？

——そんなことを思いながら準備していた俺だったが、実際は楽しむ余裕なんざなかった。

「ギン。要。準備はいいかい？」

「ええ、勿論ですわ」

「はい、藍染様。いつでも」

「失敗作の虚の観察が今回の目的だが………そうだな、利用できそうな子も吟味してみよう」

「ですが………一回生にそのような生徒はいるでしょうか？」

「ギンのような人材もいるかもわからないからね………」

開戦

撃鉄を鳴らせ

近寄る恐怖に

襲われぬように

「オラー！」

「きゃあ!!」

私、ルキアは廊下を歩いていたら、急にお尻を乱暴に蹴られた。

「な……何をするのだ、恋次!!」

「何ボーっとしてんだよテメー。まさか二か月も経って、まだクラスに馴染めてねー、とかいうんじやねえだろうな」

「何を！貴様こそ……」

「恋次。お前、あれセクハラじゃねえのか？」

私のお尻を蹴った恋次と、そのことを疎める日向がいた。

「…………お、大荷物だな。今日は、何かの実習でもあるのか？」

「ああ、今日は現世で魂葬の実習があるんだよ」

そう説明してくれたのは、日向であった。

「な……………?!ずるいぞ！貴様たちの学級だけ!!」

私がこう言うのは、私の学級がまだそんな実習をしていないことに起因する。

「ズルかねーよ！実力だ実力！」

「そういう割には、恋次。俺と吉良に『勉強教えてくれ!!』って泣きついてくるよな？」

「な……………うるせえ！それを言うんじやねえよ!!!」

「な……………何だ！貴様も、大差ないではないか！」

「へっ、大差あるから、お前の学級より進度が速いんだよ！じゃーな！
テメーに、ガンと差あつけて帰ってきてやるよ!!」

「た…………たわけ！わたし……………も……………」

恋次が離れていくのに比例して、自分の声が小さくなっていくのが分かる。

「……………まあ、人それぞれだろ」

こう言って肩に手を乗せてくれたのは日向であった。

「あれでも、めっちゃくちや頑張ってるんだ。何も、才能の差じゃねえ」

「……………」

「あいつも努力してるし、俺も努力してる。あいつとはライバルみたいな感じだ。だから、一回一回の結果に満足しないで、次負けねえように必死こいて練習やら、勉強してる……………」

「……………努力の差か……………」

「ま、それもあるかもしれないけど、努力の仕方の正解なんて人それぞれだしな」

私に、アドバイスしてくれる日向の声色は非常に優しい。

「それでもわかんねえってんなら、大した力にやなれねえけど、俺が力になるよ」

「……………いや。十分すぎる。ありがとうな、日向。大分、気が楽になった」

「そうか、ならよかったよ」

そう言って、日向はこちらに手を軽く振りながら恋次を追って行った。

「……………優しい奴め」

なぜか、私の頬は赤くなっていた。

「まずは、簡単に自己紹介をしておくぞ。六回生の檜佐木だ。後ろの小さいのが蟹沢。でかいのが青鹿。この三人で今日のお前らの先導にあたる」

直後に周囲がざわつく。

「ざわつくな！私語の多い奴は置いていくぞ！」

「……………なんだ？有名人なのか？あの先輩たち」

「知らないのか?! 達じゃない。真ん中の一人だ!」

「(確か、もう護廷十三隊への内定決まってるんだよね?)」

恋次が、俺らに疑問を吹っかけてきたので、それに答える。

「それじゃあ、ここからは三人一組で行動してもらおう。予め教室で引いてきてもらったクジを見る」

「そこに、記号が書いてあるから、同じ記号の人と組んでね」

檜佐木さんが説明し始め、途中で蟹沢さんが付け足した。

「俺はえくくつと……………」

「何だ、日向。俺たちとは違うのか」

「僕と阿散井君は一緒だったんだけど……………」

「ああ、ちげえみてえだな。まあ、また後でな」

「おう。へますんなよ!」

「しねえよ。お前じゃあるめえし」

「何を?!」

「お、落ち着いて!!」

そんな軽口をたたきながら、俺は同じ班の人を探す。

「えーつと、四班四班……………」

「あつ、四班ならこつちです!!」

俺に話しかけてきたのは、一人の青年。褐色の肌に、紫がかつた黒いストレートの髪で、整った顔立ちは中性的ともとれる。四肢は適度に筋肉がついていて、華奢という印象は受けない。

「四楓院朝霧です! よろしくお願いします、天宮城殿!」

「よろしくな、朝霧」

同級生だったので、何回かは見かけたりするが、実際に会って話すのはこれが初めてである。

(……………四楓院? どつかで聞いたな……………)

「えつと……………、山串駿馬です。よろしく……………」

「おう、駿馬!」

もう一人は、気弱そうな男子である。

……………うん。比較的、平和そうな面子だ。朝霧は、礼儀正しい青年。

駿馬は、優男というのが、クラスで見る限りの印象だ。

「各自、地獄蝶持ったな？行くぞ!!解錠!」
こうして、俺らは現世へと向かった。

「……………何か、退屈だなく……………」

「そうでありますか?」

「いや、好奇心は湧くんだけど、作業が単純つつーか……………」

「天宮城君って、意外と面倒くさがり屋なんですね……………」

「否定はしねえよ」

魂葬は、斬魄刀の柄尻の部分を魂魄の額に押し付け、『死印』という判を押すことによって、魂魄を尸魂界に送ることだが、幾分か作業が単純であったので、日向にとってはいささか退屈なものとなっていた。

「お、あの店の焼き鳥上手そうだな〜」

「だ、だめだよ!先輩達から離れたら!」

「冗談だよ、冗談!そんな、あわてるなって」

日向は、焼き鳥の屋台に行こうとしたのを、駿馬に疎められた。

「ふっつ!」

そんな光景を見て、朝霧は自然と笑みがこぼれる

「ひ……………檜佐木く……………あっ!!」

「きゃ、きゃあああああ!!??」

「う、うわああああ?!せ……………先輩が殺されたあ!!」

「なっ……………?!」

「う……………嘘……………?!」

「ひっ……………?!」

そこに広がっていたのは、引率してきた先輩のひとりである蟹沢が、巨大な虚の爪に串刺しにされ力なくぶら下がっている光景であつ

た。

すると、虚は用済みとばかりに蟹沢を容赦なく宙に放り投げる。

「う、うおおおおお!! 貴様あーよくも蟹沢をお!」

「止せー青鹿あ!!」

激高した青鹿は、檜佐木の制止を無視し虚に突貫していく。

しかし、青鹿は虚の振る爪によってあっけなく地に伏せる。

血だまりが出来るのに、そんなに時間は掛からなかった。

「退がれ! 逃げろ、一年坊共! できるだけ速く! 遠くに逃げるんだあ

あ!!」

「う、うわあああああ!!」

檜佐木の声に触発され、一回生たちはクモの子を散らすように辺りに逃げていく。

「朝霧! 駿馬! しつかりしろ!」

「は、はい!」

「ぼ……………僕、腰が抜けて……………!」

「くっ……………俺が持つてく! 心配すんな!!」

日向は、腰の抜けた駿馬を脇に抱え、瞬歩を使い虚から遠ざかっていく。

「……………っ?!……………雛森達何してやがんだ……………?」

「ど……………どうなされたのですか?」

「朝霧! 駿馬頼む! 俺、ちよつと戻るわ!!」

「えっ?! 危険です?!」

「絶対戻る!!」

そう言つて、日向は駿馬を朝霧に渡し、二人の元を遠ざかって行った。

「破道の三十一・『赤火砲』!!」

俺が見たのは、雛森が『赤火砲』を放ち、虚の顔面に直撃させている光景。

「よっー!」

「…………いや…………ダメだ」

しかし、虚はまったくダメージを受けていない。

(くっ…………間に合え!!!)

そして、今まさに雛森、恋次、吉良、檜佐木が、数多くの巨大虚に襲われようとしている。

「い…………嫌だよ…………!」

「う…………あ…………」

「なら…………ぶつぱなす! 破道の三十二・『黄火閃』!!」

俺は、若干離れた位置から今できる限りの威力の『黄火閃』を放つ。それは功を奏し、一番手前にいた虚の左肩を吹き飛ばした。

「ひゅ、日向君?!」

「無事か?! お前ら?!」

「お前、何で戻ってきやがった?!」

「そっくりそのまま返してやるよ、恋次!!」

こんな言葉を掛け合っているが、俺に余裕はほとんどない。

「逃げる、速く! 俺が時間を稼ぐ!!」

俺がこう言うと、四人は驚愕した顔になる。

「馬鹿野郎!! そんなことできるか!!」

「そうだよ!! 死んじやうよ?!」

「早く行けえ!!」

俺が、今まで過こしてしてきた中で一度も出したことのない怒声のような叫びに、恋次と雛森はビクツと肩を揺らす。

「——破道の三十三・『蒼火墜』!!」

再び向かって来る虚の顔面に、『蒼火墜』を放つ。これは、敵を仕留めるものとなった。

「…………俺はこの中で一番強い。でも、お前ら守りながら戦えるほど余裕もねえ!!」

「っ…………!!」

「…………阿散井君。雛森さん。行こう」

「…………おお」

恋次は、吉良の言葉で冷静になり、頷いた。

そして、恋次はすぐさま檜佐木を担いで走っていく。

「日向君……………死なないで?」

「その気はねえ」

そうぶつきらぼうに応えて、現世に来る前に支給された『浅打』を抜く。

そして、すぐさま巨大虚へと向かい合う。

「てめえらの相手は……………この俺だあ!!」

そう叫び、霊圧を全力で放つ。虚の標的を、俺に絞るためだ。

「散在する獣の骨・尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪。動けば風。止まれば空。槍打つ音色が虚城に満ちる——破道の六十三・『雷吼炮』!!!」

完全詠唱で放った『雷吼炮』は、放った軌道を中心に目の前にいた一匹、後ろにいた二匹を吹き飛ばした。

(どうする……………虚化を使うか…………?)

——やめておけ日向。監視されている——

っ?! 『虚帝』? 監視されてるって…………

——この惨劇を産み出した張本人が、近くにいるということだ——

でもよ……………この状況は…………!!

——もし、あの時と同一人物だったらどうする? お前は、あの時の生き残り。何も手を出してこないわけがないだろう——

くっ……………!!

——お前には、あの四年間がある。早々には負けん——

……………サンキュー。大分自信でてきたぜ……………。

「よし、こっちだ!!」

俺は、空中へと歩を歩みだす。尸魂界と違って、現世では空中を走ること可能だ。これが、現時点俺にとつてこの状況を乗り越えるための要点と成っている。

俺に釣られて、虚たちが俺に向かって来る。

「君臨者よ! 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ! 蒼火の壁に双蓮刻む! 大火の淵を遠天にて待つ——破道の七十三・

『双蓮蒼火墜』!!』

さつき放った『蒼火墜』の二倍以上の青い爆炎が、虚を飲み込んでいく。

——いける!

思ったよりも、相手は脆い。これならば、逃げながら隙を見て鬼道を放つという戦法でいけるであろう。

すると、爆炎を掻い潜ってきた虚が一匹、俺に突っ込んできた。

「くっ——縛道の六十二・『百歩欄干』!!」

俺は、複数の光の柱を出現させ、敵に投げ飛ばす。

すると、光の柱は虚に命中しそのまま後ろのビルへと突き刺さっていった。そして、一気に虚の顔面へと肉迫する。

「うおおおおおおお!!」

突っ込んだ勢いのまま、虚の仮面に刃を突き立てる。

「破道の十一・『綴雷電』!!」

直後、刀身を伝って虚に電撃が奔る。『綴雷電』は、物質に沿って電撃を放つ鬼道。これを使用することによって、必然的に虚に与えるダメージを上昇させている。

数秒後には、虚の悲鳴のような咆哮も止み、霊子へと分解していった。

「グオオオオオオオオオ!!」

突如、後ろから聞こえた咆哮に振り返る。そこには、拳を振りかぶっている虚の姿があった。

「なっ?!——縛道の三十九・『円閻扇』!!」

咄嗟に、霊子の盾を繰り出し殴打を受け止めるが、殴られた勢いで背後のビルに身体がめり込んでしまった。

——こいつら、霊圧を隠せるのか!!

今ので確信した。これほどの巨大な虚だったら、発する霊圧も比例して高くなるはずである。それなのに、この虚たちが出現した時も、今現在戦っている時も霊圧を一つも感じなかった。

「ぐっ……そう殺気立ってんなよ——破道の四・『白雷』!」

俺は、刀身を盾を繰り出しながら刀身の方を押さえていた左手の人

差し指で、『白雷』を放つ。その閃光は、虚の仮面の右目にあたる穴を貫いていった。

「グオオオオオオオオ!!」

片目を貫かれた虚の力は一瞬緩んだ。その隙に、空いた左手を背後のコンクリートにかざし、円を描く。

「砂になれ! 石破!!」

直後、俺が埋まっていたコンクリートは砂のような状態になる。この『石破』は、俺が志波家に居た時に、岩鷲に教えてもらった技だ。これは、地面や足場を砂に変えて空中から落下したときの衝撃緩和や、外壁に使うと逃げ道確保になったりする便利だけど、中々使わなかった技である。だが、この場合は拘束を解くという利用方法で使った。

「お返しだ………!——破道の五十四・『廃炎』!!」

俺は、手に灰色の円盤状の炎を発生させて、ひるんでいた虚に放った。それが命中すると同時に、虚は灰色の炎に包まれて灰に変わっていった。

「よし………こつちだあ!! 来い!!」

拘束も解け、敵を倒した俺はビルの外壁を蹴って、再び空中へと駆け出していった。そしてできるだけビルの狭い間のような場所へ走って行った。虚たちも、俺に再び釣られ狭いビルの間に——樹液を求め、木の樹液が潤う裂け目へと群がる虫のように、ぞろぞろと集まってくる。

「縛道の二十一・『赤煙遁』! 破道の十二・『伏火』!!」

『赤煙遁』で煙幕を発生させ、『伏火』で罫を張る。俺の思惑通りに何匹か『伏火』に掛かる。

「破道の三十一・『赤火炮』! 破道の四・『白雷』!!」

さつき『伏火』を張った部分に『赤火炮』を放ち、さらに貫通性の高い『白雷』も連続して放つ。『白雷』は、『伏火』を躱し俺に向かってきた虚に命中し、狭い場所故に後ろに連なるようにいた虚にも命中していく。さらに、『赤火炮』も後から追撃する形となって虚に襲っていく。『赤煙遁』と『赤火炮』の爆発でできた煙が晴れたころには、虚

は残り二体となっていた。それを確認した俺は、地面に下り『浅打』を手首で回し始める。

「——破道の五十八・『てんらん嵐』!!」

刀の回転によって生まれた霊子の竜巻に、向かってきた虚の一匹が身体を刻まれ、霊子に変わっていく。それも躲したもう一匹は、『お前を食ってやる』と言わんばかりに口を開き、鋭い牙を見せつけてくる。

「雷鳴の馬車・糸車の間隙・光もて此を六に別つ——縛道の六十
一・『りくじようろう六杖光牢』!!」

直後に、六つの帯状の光が虚の胴体へと突き刺さり、それによって虚は動きを奪われ、地面に激突しそのまま数メートル砂煙を上げ滑ってくる。

虚の滑走が終わり止まったのは、ちょうど俺の目の前に来たときだった。

虚は、俺に凄まじい殺気の籠った視線を向けながら、あらんばかりの威嚇の咆哮を上げる。

「ギャオオオオオオオオオオ!!!」

「………悪いな。俺個人の恨みはないが………」

逆手に持った刀を、仮面に突き刺す。

「——………約束したからよ。あいつらとな」

徐々に身体を霊子へと変換させていった虚は、遂にそのすべてを霊子へと成していった。

「……………」

終わったのか？

「っ!!この霊圧………くそっ、朝霧!!!」

今の霊圧の変動は朝霧のものだった。虚の霊圧は感じることはできないので、すぐにでも分かる。

(間に合ってくれ………!!!)

だが、虚との戦いで俺の身体は目立った傷こそないものの、すでに立っていることさえもギリギリの状態である。

だがすでに、身体にムチを打って瞬歩で駆け出していた。

「待………っ………ろお!!!」

——ただ今は、無事を祈るしかなかった。

終戦

目覚める獣

剥かれる牙

轟く咆哮

本能のままに

「くっ………破道の四・『白雷』！」

虚に向かい一筋の閃光を放つが、それは虚の革一枚を焼く程度で、殺傷するに至らない。こんな状況に、朝霧は額に汗を垂らす。朝霧の左腕には、大きな切り傷がありそこから血が止めどなく流れ出ている。

「中々、日向殿のようにはいかな………！」

日向ならば、同じ白雷でも虚の体を貫通させるだろうと朝霧は考え、自分を嘲笑する。

『夜一様と違って、朝霧様は死神の才能がありませんわ………』

自分の陰口を言っていた使用人の言葉を、朝霧は思い出す。

(だからこそ、見返すために真央霊術院に入ったのにな………)

しかし今になっては、自分を悪く言っていた使用人の言葉に賛同しようとして朝霧は考えていた。

「しかしだからと言って、ここで級友を捨てるわけにはいかない！」

そう言っって朝霧は浅打を構える。流血する左腕など気にせずに。

「破道の三十一・『赤火砲』!!」

しかし朝霧の目の前に居る虚に向かっていたのは、赤い霊圧の塊であった。直撃した直後に爆発を起こし、虚は体勢を崩す。

「っ………日向殿?!」

「大丈夫か、朝霧！」

朝霧を救ったのは今まさに瞬歩でやって来た日向であった。しかしその表情は優れない。凄まじい量の汗を流し、顔には血の気がな

い。

(いつもの覇気が感じられない……………それほどまでに霊圧を消費したのか……………?!)

心配した朝霧はすぐさま日向に駆け寄る。日向を支えるように抱きかかえた直後、朝霧はあることに気づく。

「日向殿、危ない!!」

「なっ?!」

朝霧は咄嗟に日向を抱えたまま地面に倒れこむ。その直後に、虚の腕が朝霧の背中を掠る。

「くっ……………頑丈な奴め!」

「ぐっ……………破道の三十三・『蒼火墜』!」

そう叫んで蒼い爆炎を虚に放つ日向だが、些か威力は小さいように見える。そのせいなのか、虚は一切怯まずにその太い腕で日向を突き飛ばす。

「がっ……………はっ……………!」

「っ……………日向殿おお!」

日向は吐血しながら建物に激突する。そのまま何の動きも見せず日向はその場で倒れる。

「くっ……………破道の三十一・『赤火砲』!!」

虚の気を引くために朝霧は威力の低い火炎弾を放つ。それは虚の頭部に命中し爆発を起こす。

それは功を制し、虚は朝霧の方を向く。

「若輩ながらお相手しよう……………!」

そう言いながら朝霧は距離を取る。さすがに自分ではこの巨大虚を倒せるとは朝霧は思っていなかった。自分は、日向からこの虚を離して救援が来る時間を稼げればいい。そういった考えで朝霧は目の前の虚に相對していた。

「自壊せよ、ロンダニーニの黒犬!一読し・焼き払い・自ら喉を掻き切るがいい——縛道の九・『撃』!!」

破道での攻撃では時間稼ぎは望めないと考えた朝霧は、縛道で動きを止めようとする。詠唱が終えると、赤い光が虚の巨大な光を包む。

「ブオオオオオオ!!」

「っ!!くっ!!」

しかし動きを止める事の出来たのは一瞬で、すぐさま虚は朝霧を喰らおうと突進する。それを朝霧は間一髪のところまで避ける。

「縛道の四・『這繩』!!」

すぐさま体勢を立て直し、霊子で構成された縄で虚の腕を拘束しようとする。しかし腕に縄が絡まった瞬間に、虚は腕を自分の方向に引き寄せる。それに伴い朝霧の身体も虚の方に飛んでいく。そのままの流れで、朝霧の身体は虚の手の中に納まる。

「ぐっ、ああああああ!!」

掴まれると同時に、朝霧の身体からはミシミシといった音が鳴る。このままでは全身の骨が粉々になるのも時間の問題である。

「あ……………さぎり……………!」

……………俺、死ぬのかな? 約束も守れないで……………

——日向——

……………『虚帝』か。悪い、俺もう無理かも……………

——お前が死んだら俺が困る——

……………でもなあ……………

——……………一時的に、『力』を貸そう——

……………っ?!でも……………

——『身体』の方でなく、『能力』の方だ——

……………は?

——今までお前に貸してきたのは、前言った通り『身体』だけ。これから貸すのは『能力』の方。お前に、周りから見て虚と分かるような代物ではない——

……………そうか。なら、俺に……………!

——ほんの一瞬だけだ。……………『飲まれるなよ』?——

ああ……………やってやるさ……………。誰かが今……………呼んでるから……………

「……………おい」

「ブオ？」

突如として聞こえてきた別の声に、虚は声の聞こえる方向に頭を向ける。そこには白髪の青年が立っていた。

直後、虚の朝霧を握っていた腕が胴体と切り離される。

「ぐっ……………!!」

「ブオオオオオ!!」

拘束の弱まった手の中から朝霧が零れ落ちる。その横で虚は腕を斬られた痛みで、大気が揺れるような咆哮を上げる。

「ひゆうが……………どの……………?」

「……………ははっ!」

朝霧の声に应じずに、日向は浅打を肩に担ぐようにしながら虚に相対す。

「随分痛えことしてくれたじゃねえかあ〜。どうしてくれんだ? 慰謝料でもくれんのか?」

いつもと調子の違う声で、日向は虚に挑発めいた言葉を発する。その様子に朝霧は怪訝そうな顔をする。

「ブオオオオオオオ!!」

そんな日向に、虚は容赦なく残った腕を振り回す。

「もう一本も——っらい」

それを軽い跳躍で回避し、日向は空中で錐もみしながらその勢いで斬撃を放ち、虚の腕を斬り落とす。直後に切断面からは凄まじい量の血が噴き出る。

「ひやはは……………『赤火砲』おお!!」

痛みに悶える虚の頭に、日向は手に出現させた赤い塊をそのままぶつける。そして日向は、爆炎と共に軽い瞬歩で虚から離れる。赤火砲しゃつかほうを放った左手は若干焦げているようにも窺える。

「……………んだよ、まあだ生きてんのかよ」

赤火砲を顔面に喰らいながらも、まだ絶命していない虚に対し、日

向は口の両端を吊り上げながら呟く。

「次、足いつとくかあ？」

「ブ……………ブ……………ブオオオオオオ!!」

凄まじい殺気と、怒号のような咆哮と共に虚は日向に突進する。ない腕を振り回す虚に対し、日向は突進を掻い潜ってそのまま左足を斬り落とす。バランスを崩した虚はそのまま地面を滑っていく。

『綴雷電』

浅打に電撃を奔らせ、日向は残った虚の右足に刃を添える。雷撃がはしっているため、刃を添えている部分は焦げはじめ。

「痛い？痛いよなあ？でも、俺の本体の方はもおつと痛かったんだぜ？」

そう言つて日向は残った右足も斬り落とす。

数拍。日向はゆっくりと虚の頭に近付く。四肢を斬り落とされ、虚はその場をじたばたとする。しかし、すぐさま超速再生で生やした腕で日向を潰そうとする。

「おおつと。危ねえ危ねえ。そろそろ黙ってくれよお〜〜〜」

そう言つて日向は浅打を鞘に納めて、たった今空いた右手の人差し指を虚の頭にチヨコンと当てる。

『破道の四・『白雷』』

直後、閃光と共に虚の頭に風穴が空く。すると虚の動きはピタツと止まり、身体が端の方から霊子へと分解し始めた。

「ばいば〜い」

そう言つて日向は手をひらひらとする。しかし数秒もすると、糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

「日向殿！」

そう叫び、朝霧は傷を負った身体を押して駆け寄る。すると同時に、ドスンという鈍い音が朝霧の耳に届く。

「なっ……………い」

そこに居たのはもう一体の虚。すでにこちらを見つけたのか、倒れた日向と朝霧が居る方に近寄る。

そんな状況で、朝霧は日向の前に立つ。

「……………日向殿は……………や……………らせぬ!!」

浅打を、現れた虚へと向ける。

「……………射殺せ『神鎗』」

虚は、突如として縦に真つ二つになる。

「……………え?」

「君、大丈夫やったか?」

「すまない。随分遅れてしまったよ」

そこに現れたのは――

「……………藍染隊長……………市丸副隊長……………?」

五番隊の隊長と副隊長だった。

「……………はっ!?日向殿を助けてください!!血が止まらないのです!!」

「安心してくれ。すぐに救護班も到着する。必ずこの生徒も救ってみせる……………ギン」

「はいはい、僕は治療は専門やないけど応急処置くらいならできるけども、少し君に手伝ってもらいたいんやけどええ?」

「も、勿論です!!」

市丸副隊長に、手当を手伝ってほしいと言われた朝霧は、すぐさま了承する。

「日向君!!」

「日向あ!!」

「う……………嘘……………?日向くん!!」

「……………っ?!大丈夫か?!」

吉良、恋次、雛森、檜佐木の順に、ビルの屋上から飛び出てきた。「あんまり、騒がんといてや。傷に響いてまうから。あ、包帯そつちに引っ張ってくれへん?」

四人を疎めながら、市丸は淡々と処置を進める。

「は、はいー!」

「日向君は助かるんですか?!」

「こう聞くのは雛森である。」

「今は何とも言えんわ。出血が激しい。……………でも、信じてあ

げや。友達なんやろ?」

「……………はい、そうっす。お願いします!!」

こう言って恋次は腰を曲げる。

「僕に言われてもなあ……………、お?ほら、救護班が到着したで」

「っ!!こっちです!!けが人がいま——す!!」

「何?!よし、直ぐに治療する!!」

——こうして、騒ぎは収束していった。

「……………ん?」

「あら、目が覚めたんですね?」

俺の目の前にいたのは、長い髪を胸の前でネジネジと巻いてる特徴的な髪型をした、妙齢の女性であった。

「……………ここは?」

「ここは、四番隊舎です。さきほど、あなたが運ばれて私が治療していました」

「……………ありがとうございます。お名前は?」

「四番隊、卯ノ花烈です」

「……………卯ノ花隊長お?!ツイデデデエ!!」

「あっ!傷に響くから動いてはいけません!」

目の前にいたのが隊長だと気づいて飛び起きたが、背中の傷がズキン!と痛み、再びベッドにうずくまった。

「それと……………、この方達が起きてしまいますから」

「え……………?」

そう言った卯ノ花隊長の視線を向くと、ソファに腰かけながら眠る恋次、吉良、雛森の姿が見えた。

「もう一人いらっしやっただんですが、碎蜂隊長が眠ったその方を持って帰ってしまいました」

もうひとり?誰だろう……………?」

「……………今、何時くらいですか？」

「十二時ですね」

うわ……………こいつら、この時間まで……………。

「よっぽどあなたが心配だったのか、目をこすりながら起きてようとしてましたよ？」

そう言いながら、卯ノ花隊長は微笑む。

「あの……………傷の方は……………？」

「全治一週間というところですね」

「げ……………もうちよい……………」

「一週間ですね」

「はい、すみません」

なんか、逆らえない笑顔を向けられたのですぐに謝った。……………超怖え。

「……………他に怪我人は？」

「……………犠牲になった一人を除いては、あなたと檜佐木と青鹿という方だけです」

「……………そうっすか」

……………俺が、もっと注意深く周りを見ていたら、先輩を救えただろうか？

「被害は最小限に押しとどめられました。あなたのおかげです」

「……………っ！……………でも犠牲が……………」

「元々、院生たちがどうこうできる状況ではなかったんです。あなたは、十分頑張りました……………」

卯ノ花隊長はそう言つて、優しく微笑んでくれた。

「だから、今はおやすみなさい……………」

「……………はい……………」

「……………ギン。君は、彼のことをどう思う？」

「一回生であんだだけ巨大虚倒したんやさかい、凄い子とちゃうんで

「しょうか?」

「そうだね。でも、最後に一瞬感じた霊圧……………少し不思議に感じたよ」

「そんなん言つて、ホントはもうわかっとなるんやないですか?」

「いや……………あれでは、まだ不確定過ぎる。純粹に斬魄刀を解放した可能性もある……………」

「でももし、あれの生き残りでしたら?」

「貴重なサンプルだね」

「ふふふ、期待が丸見えですわ」

「そうだね。そうであることを切に願うよ」

—————
五番隊舎での密会は、この二人だけに聞こえるようにさ
さやかに閉幕した。

変化

沈む日も

また昇ると

人は知っている

「・・・暇だなあ・・・」

「ふふふ、そんなことを言いながら随分熱心に教本を読んでいるじゃないませんか？」

「退院直後に、試験があるんで・・・」

俺と卯ノ花隊長はこんな感じの談笑をしていた。ちなみに、教本は一通り吉良と恋次に持ってきてもらった。その際について来た雛森に、『怪我大丈夫?!』と泣きながら抱きつかれた。その後、卯ノ花隊長に疎められて離れていたが、本当に心配してくれていたんだと改めて実感し、少し罪悪感に苛まれた。

「あらあら・・・なら、頑張らないといけませんね・・・」

「このペースだと、教本一か月で読み終わりそうっす」

「ふふっ、反復学習は重要ですよ？」

・・・なんか、卯ノ花隊長って優しいお母さんみたいだな・・・。

「・・・何か、私を見て考えてらっしやるんですか？」

「・・・いや、隊長みたいな方が母親だったらなあ・・・ってことを・・・」

「うふふっ！面白いことを仰りますね・・・お世辞でも嬉しいです」

「お世辞なんかじゃないですよ。綺麗ですし、優しいですし・・・」

時々笑顔が怖いけど・・・。

「・・・そうですか・・・」

なぜか、卯ノ花隊長が寂しそうな顔をしたので、慌てて話題を変えた。

「そ、そういうえば霊術院には飛び級の制度があるんですよね？」

「ええ・・・そうですけど、どうして？」

「あれだったらすぐに受けて、死神になりたいなあ……なんて……」
「何だったら、私が巖呉郎先生に話しておきましようか？」

「えっ、本当ですかっ?!」

意外な言葉に、俺は驚いた。

「ただ、受けるためには月の試験で、斬拳走鬼の試験すべて上位三名に入る必要がありますけど……」

「やります！やってみせます!!」

「そうですか……なら、伝えておきましょう……」

やった！意外と了承されるもんなんだな！

「失礼するぞ」

聞きなれない声に、俺は聞こえた方に顔を向ける。

「こいつが天宮城日向か、卯ノ花？」

「そうですよ、碎蜂隊長」

俺の目の前にいた女性は、護廷十三隊二番隊隊長、碎蜂隊長だった。

「貴様に、礼を言いに来た」

あれ？俺、喧嘩売られてるの？そういう口調にしか聞こえない。

「現世において、朝霧様を身を挺して庇ったこと、深く感謝の弁を申そう」

そう言つて、碎蜂隊長は俺に一礼してきた。

「……え？」

「本来ならば四楓院家に仕える私が、朝霧様をお守りするべきであったが、授業という名目上私が出向くのは不自然極まりなく仕方のない事ではあったが、実際に現世で朝霧様の身に危険が及び、それをどうすることも出来なかったことを恥に思っている」

「いや、頭を上げてください！碎蜂隊長！」

そう俺が言つと、碎蜂隊長は頭を上げた。

「後日また、見舞いの品を持って参上する。では、失礼する」

そう言つと、瞬歩で一瞬で消えてしまった。さすが速い。

「……お茶にでもしましょうか？」

「あ……ありがとうございます……」

「——じゃあ、俺が分かりやすく虚の違いを説明するぞ」
放課後、俺はなぜか集まった奴らに授業をすることになった。勿論、ベッドの上で。

居るメンバーは、恋次、吉良、雛森、朝霧、ルキアである。朝霧は病室に入るや否や、『お見舞いです！』と言って、果物がてんこ盛りのバケツトを渡してきた。

「「「は〜い」」」

そんなこんなで俺は虚についての授業を進める。

「じゃあ恋次。巨大虚と大虚の決定的な違いは何だ？」

「げっ・・・！そりゃあお前・・・デカさだろ？」

「ルキア」

「うむ」

「痛あ!!？」

俺が時々恋次に質問し、答えられなかったりはずれたりすると、ルキアがどこからともなく取り出したハリセンで恋次の頭を叩く、という構図が出来ていた。

「てめえ、ルキア!?!じゃあお前はわかんのかよ?!！」

「勿論だ戯け!!巨大虚は一個体として巨大な虚！大虚は群として集まって巨大化した虚だ!!」

「まあ、大体当たりだな。じゃあルキア、大虚の階級全部言えるか？」

「か、階級?!・・・教本にそんなこと・・・」

「下の注意事項みたいなどこにあったぞ？ちなみに、デカイ方から『ギリアン』、『アジューカス』、『ヴァストローデ』だな。でも強さは、『ヴァストローデ』の方が強い」

「物知り〜〜・・・！」

「へっ！暇人が・・・」

「博学と言ってもらおうか。アンポンタン」

「あ、アンポンタン?!！」

恋次、お前はもうちよい頑張れよ・・・。

「あの・・・ずっと気になってたんだけど、その絵は？」

「これか？ルキアが描いた」

吉良が、ルキアの書いた虚の絵に食いついてきた。なぜか全員うさぎみたいなの虚だけどスルーしておいたが、皆は気になるようだ。

「どうだ？中々上手いだろう？」

「くそ下手だな」

「・・・ふんっ!!」

「痛ああ?!」

恋次が批判したら、ルキアがさつき以上のスピードで恋次をぶつ叩いた。

「まあ、インパクトある絵の方が文章も頭に残るし覚えやすいぞ？」

「インパクトがでかすぎて、頭にはいらねえっつーの・・・」

そんなこんなで、放課後は過ぎていく――

斬・一位 天宮城 日向

拳・一位 天宮城 日向

走・一位 天宮城 日向

鬼・一位 天宮城 日向

学・一位 天宮城 日向

総合順位・一位 天宮城 日向

「・・・よっしゃあ!!」

「え、見せて・・・うわっ?!全部一位!!!」

俺は、退院直後に試験を受けたが全部一位をとることができた。

「これで試験が受ける・・・!」

「ん？試験終わったばっかなのに何言ってるんだ？」

恋次が、なんだこいつ？みたいな目線を向けてくるので説明する。

「飛び級の試験のことだよ。全部上位取らなきゃ受けねえんだ」

「そういう訳です!」

後ろから声がするので振り返る。

「勇音副隊長？」

「これ、卯ノ花隊長の代わりに届けに来ましたよ！」

そこに居たのは、長身の女性——もとい、四番隊副隊長の虎徹勇音副隊長であった。

「あなたよりも早く、卯ノ花隊長は試験を受けれることを知ってたんで、順位発表の日に届けるよう言われてたんです！」

その手には、『飛び級試験受験許可証』と書かれた紙を持っていた。

「え?!わざわざ虎徹副隊長が届けにいらっしやなくても……」

「いいえ!どうせ私、日向君の顔見てみたかったので自分から言いましたから!!」

そういえば、勇音副隊長と顔合わせたのほとんどなかったなあ……。

「明日、九時に教官室で実施するそうなので!では!」

そういうと、そそくさと去って行ってしまった。

「……行っちゃったな」

「もし、合格したらどうなるの?」

そう言ってくるのは雛森であった。

「ん?二回生になるんだよ」

「おい、じゃあ寮は変わるのか?」

「それは、変わらないらしいけど……」

皆が質問攻めしてくる。

「……だあ……!明日受けて、合格してから教えてやる!無駄にハードルを上げてくるな!」

「でも……日向君なら受かつちやいそうな……」

「悔しいけど、俺もそう思うな」

「僕も……」

そんなことを三人は言う。

「ま、明日だよ明日!今日はとりあえず、いつも通りいこうぜ?」

そんなことを言いつつ、俺は試験を受けて合格した。周りの皆から

は祝福された。『凄いな!』とか『寂しくなるぜ!』とかだった。でも、放課の時間は一緒だったのでいつもの三人で自主練することには変わりはなかった。

——あれから、半年以上経っていた。

「ふっ……!お前も……ふっ!六回生かよ……ふっ!!」

俺らは道場で素振りしていた。恋次が言う通り、俺はほぼ一か月に一回のペースで飛び級試験を受けて合格していた。

「まあな……ふっ!お前は……ふっ!どうなんだ……ふっ!!」
「まずまず……ふっ!だっ……ああ、もう限界だ!!」

もう五百回くらい素振りをしていたので腕がパンパンになっていた。恋次は木刀を放り投げ、大の字になって寝ころぶ。

「授業、やっぱ難しいのか?」

恋次が、寝ころびながら聞いてくる。吉良はすでにダウンして端の方で倒れて肩で息をしている。

「そこまで違わねえよ。下手に小難しくしたくらいで……」

「へっ……お前が言うと、説得力がねえぜ……」

「そうか?」

「……何か、随分遠くに行っちゃったみてえでな……」

「……」

恋次がこう言ってきたので、俺は少し休んでいた素振りを再び始めた。

「俺は……!変わんねえな……!今も……!お前らに勝とうとして……!必死だ……!!」

「っ……?!そうかよ……おら吉良あ!へばってんじゃねえよ!!」

「ま、待って……もうちょい……」

こうして俺らは再び三人で素振り始めた。

この光景が見えなくなったのは三月くらいのことであった。

——俺は、死神になった。

「……ここらへんでいいか……」

俺は、十三番隊の下級死神になった。そして、正式に『浅打』を譲り受けた。

俺は、流魂街の林の中に来ていた。まだ入隊の儀を終えてない俺がここですることは――

「久しぶりだな、『虚帝』」

『この時を待っていた』

心なしか、仮面の上からでもわかるような穏やかな雰囲気
『虚帝』から放たれる。

『ようやく、お前にもう一つの半身を渡せる……』

すると、虚帝は何もない真つ白だった精神世界の中に、白銀の扉を出現させる。

『だが、すぐに『対話』は出来ん。お前がこれからすることはまず『同調』だ』

「そうか。わかった」

俺がすることは、『浅打』を己の斬魄刀へと昇華させるための『対話』と『同調』である。

『入れ。すぐそこに居る』

俺は言われるがまま扉に入る。

『久しぶり、日向あ……魂葬のときの素敵な夜以来かしら?』

「……お前の名前を教えて欲しい」

『はあ……そんなに急かさないでよ……。せつかくの再会よ? 楽しんでくうこうよ……でしよお!!』

そこにいたのは、死覇装を着た……いや、正確には死覇装のような流動性のある服を着た肌の白い、のっぺらぼうの仮面を被った人物が居た。仮面は頭全体を覆い、どのような髪型なのかもわからない。

「できるだけ平和的にはいきたいけどな」

『嘘はつかない方がいいわよ・・・戦う気ビンビンだったじゃない・・・』
「警戒してんだよ」

すると、仮面はため息を吐いた。いや、見えないがそのような声を出した。

『なら、お望み通り・・・刃を交えましょうか?!?!来い!』『――』!!』
突如、仮面は右手に真つ白な刀を生み出した。そして、それでこちらに刺突を繰り返して出てくる。

「くっ・・・!!』『虚帝』!!』
うろみかど

『御意』

咄嗟に、こちらも黒い刀を出し虚化をする。

『やめろっ!お前とやり合うつもりは・・・!!』

『お前になくても、私にはあるの!!』

そのまま俺は弾き飛ばされる。・・・なんて力だ!?

『随分といい『器』になったじゃない・・・頂戴!!』

『ぐっ?!』

振り下ろしてくる刀を、なんとか軌道をずらす。

『私はお前の魂・・・私にくれる道理は充分じゃない?!』

『だからと言って、お前に全部渡す道理はねえ!!』

『つれないこと言わないでよお?!』

何が足りないんだ?

俺とアイツが分かり合うのに何が必要なんだ?

もともと一つだったのに。

・・・一つ?

俺は、仮面に面と向かった。

『ようやく渡す気になったの?!』

仮面は、俺の心臓に刃を突き立てる。

『ああ、出来たよ。お前を受け入れる準備が』

痛みはなく、むしろ刺さった部分から霊力が溢れ出てくる。

『・・・いつ気づいたの?』

『お前らが一つだってわかった時だ』

『ちえ……。こう面と向かって『対話』されちゃったら私もそうせざるをえないわよね……。』

俺の手にあつた黒い刀が、仮面へと煙のように吸い込まれていく。俺は、虚化を解く。

『ようやくこれで、四分の一を使えるってわけね……。』

『どういうことだ……。?』

『俺達は、二つで一つ。しかし、『始解』ではそれぞれが独立している』
『だから、どこでも虚化使えるわけじゃない貴方は、私の方を『始解』
することですと本気の四分の一を使えるってスンポーよ』

『それに、虚化を併用することによりお前の『始解』は初めて完成する』
『残りの半分は?』

『うふふ……。』『正解』の分よ。勿論素直に二倍強くなるってわけじゃないけど……。』『正解』習得したらわかるんじゃない?』

そう説明している内に、のっぺらぼうだった仮面は剥がれ、目の色が反転してる女の姿が目の前に現れた。髪の毛は、艶のある長い白髪だ。

『じゃあ教えてあげる……。私の名は——『白皇』よ』

『……。よろしくな、『白皇』、『虚帝』』

『さて……。早速、解号叫んで。うずうずしてるの』

『わーったよ!戻ったらな……。』

目を開ける。そこには、さきほどとあまり変わらない光景が見えた。

『よし……。いくぜ?』

——ええ。いつでもいいわよ——

「暁と為せ——『びやっこう白皇』!!」

途端に『浅打』が爆発と閃光を放つ。

「……すげえ……」

——これがお前がため込んだ霊圧の『半分』よ、うふふ——
そこにあつたのはもうすでに『浅打』ではなかった。白銀と漆黒を交える柄。鏝は複雑な深みのある金色で、正八角形の枠の中に、さらに正八角形が入っているというモノであつた。そして、前方へと少し湾曲しながら伸びていたのは、鏡の様に綺麗な刀身。少し刃を傾ければ、その刀身は鈍色にも輝く。長さは太刀といったところか。

——常時開放型よ——

「マジでか」

なんだよ……。せつかくだったら、毎回解号言いたかつたよ。

——え?——

——ならば、俺を呼ぶ時に言えばよかろう——

わかつた。

——ちよつとショックね——

こうして、斬魄刀との対話を終えた俺は、瀨霊廷へと足を進めて行つた。

多少は強くなつた筈だ。

入隊

袖に通す

その腕はもう

昨日の自分とは違う

「——貴殿を、護廷十三隊死神に任命する。山本元柳斎重國。これにて、入隊の儀を終える。よろしく頼むよ、日向！」

浮竹は笑顔で日向の手を握手する。現在まで行われていたのは、今年度の十三番隊に入隊する死神の入隊の儀で、ちょうど順番は日向が最後であった。浮竹が笑顔で握手するのに、日向も笑顔で対応する。始解を習得した日向は、自然と心に余裕が持て笑うことができた。

「はい！お願いします!!」

浮竹は、その若干の変化に気づく。何か、うやむやだったものを振り払えたかのような表情を。

(……………いい顔になったな)

初めて会ったときは、まだあどけなさの残る少年であった。しかし、そのときからこの少年——青年には、誰かを護るといふ正義感がすでに燃え盛っていた。それは今も変わらないだろう。握る手の感触がその不変と、彼の成長を如実に表していた。

「成長したな……」

「まだまだこれからっすよ」

「そうだぜ？お前はまだまだ……」

「海燕は速攻で超えてやるよ」

「何をお!!」

海燕が日向をからかおうとしたが、言い切る前に答えを返される。

「死神になりたてはやはやのお前が俺を超えるって？」

「ああ、当たり前だ………なんだったら、今年中にも席官になってや

「らあ……!」

席官とは、簡単に説明すればその隊の実力者上位二十名に与えられる名誉ある名称である。

「ははっ……いや、日向ならすぐになれるさ。始解はもうできるんだろう?」

「え?なんでわかったんすか?」

日向は浮竹に言った覚えがなかったので、きよとんとした顔になる。すると、海燕ははあく、つとため息をつく。

「……斬魄刀の形変わってるのに気付かないわけねえだろ……」

「それに、霊圧も上がっているしな」

そういえばそうか、と日向は思った。『白皇』は常時開放型の斬魄刀であるので、日向は解放した後には白く変色した『白皇』専用の鞘へと変化したのでそれにしまってきた。しかし、サイズは普通の刀よりも長い太刀のサイズへと変わっているので、入隊の儀の際でも一人だけ異彩を放っていた。

「これ、常時開放型なんですよ」

「なるほど、通りで……」

「へえ、どんな能力なんだよ?」

「教えない」

「何だと?!」

「まあまあ……あんまり人に言いふらすことでもないだろう」

「実戦で見せる時があれば見とけよ」

そう言いながらも日向はあまり見せたくないものではないと思った。勿論、自分の魂から練りだされたものであることには間違いないことではあるが、その本体が虚ということなので下手に勘ぐられてしまったら困る。『虚帝』には、周りから見てもわからないと言われたが、用心することには越したことはない。

「ま、でも最初は雑用だからな……楽しみにしとけよ?」

「いいぜ……掃除でも洗濯でもなんでもきやがれ」

「はははっ!頼もしいな!!」

本来ならば、こんな喧嘩腰の会話を副隊長と下級死神が織りなすこ

とはないのでおかしくなつて浮竹は笑った。

「じゃあまずは、書類でも片付けてもらうか……………来い！」

「おうよ！望むところだ！」

部屋の隅の方で、都は二人の様子を眺めていた。

(……………ほんとの兄弟みたい)

ためらいもなく言い合うその光景を、都は兄弟と捉えるのであった。

「つづく！まったく、人使い荒いな……………」

俺は、海燕から渡された書類を一通りこなし昼休みになったので、隊舎の中をぶらぶらしていた。

すると、廊下の縁側に見知った顔を見つけた。

(ルキア……………?)

その身には死覇装を纏っているのです、正式な死神なのでであろうと察しました。

(飛び級でも受けたのか?)

一瞬そんな考えが頭に浮かんだが、それなら恋次が伝えてくれただろうし、なによりルキア自身が報告しに来てくれるだろうと思った。それに――

(何で、あんな寂しそうな顔してんだ……………?)

それだったら、あんな顔しないだろう。

(……………からかってやるか……………!)

そうだと、思いつた。

そして、そくつと背後に近づく。しっかりと霊圧を消して。

「……………ルキア!!何してんだ?!」

「ひゃああ?!」

バツと、手を肩に置くと、びくんと肩を揺らして、予想以上にかわいい声で悲鳴を上げる。

「ひゅ、日向ではないか?!なぜお主がここに?!」

「なぜって……………十三番隊に入ったからだよ。ルキアもそうなんだろ

？」

「う……………うむ。まあそうだが……………」

どこか、ルキアの言葉は歯切れが悪い。

「今日入ったのか？」

「おう！卒業した奴らは、今日一斉に入隊の儀式やったんだ」

「……………私は、一か月前にこの隊に入った……………」

「そうなのか」

そして、ルキアは少し口をもぐもぐさせる。

「……………なぜ、早く入ったのか聞かないのか？」

「……………訊いてほしいことなのか？」

きつとそうではない。だからこそ、あえて遠回りな聞き方をする。

「……………いや。……………すまない」

「……………んだよ、暗えなあ?!せつかく一緒の隊に入ったんだ！頑張ろうぜ!!」

そう言って、俺はルキアのほっぺたを両手で押しまわす。

「ふえ……………ひゆうふあ！やめないふあ、ほのふあわふえ!!」

「何言ってるか聞こえませくん!!」

やめるころには、ルキアの顔は真っ赤になっていた。弄つてるときに、他の隊員が何人か通つて見られたからだろう。

「……………頼れよ。友達なんだからよ」

俺はルキアの背後にいて、ルキアは今、前を向いているのでどんな表情かはわからない。だが、少し、体が揺れたような気がした。

「俺でいいならな」

「……………ありがとう。日向」

「何だ、お前らそういう仲だったのか？」

俺たちの横に居たのは海燕だった。

「昼休みにアツアツなこつて。もう終わるぞ?」

「俺とルキアはそんな仲じゃねえよ。じゃあなんだ？海燕は、都さんとアツアツな昼休みでも過ごしたのか？あ〜んとか……………」

「つ……………するか、ボケ」

「したんだな、今のリアクション」

「うつせーうつせー!!おら、さつさと仕事戻れえ!!朽木、お前もだ!!」
「ええ?!わ、私もですか?!」

「たりめーだろうが!昼休みは皆平等なんだよ!!」

「…………二人で共有ってか?」

「しばく!!お前しばく!!!」

「げっ…………ルキア逃げるぞ!!」

「わ!ええ?!」

そう言つて、俺はルキアと一緒に廊下を走つて逃げた。

…………心なしか、ルキアは笑つてくれた。

「…………今日は、新人を混ぜての流魂街への虚調査だ。緊張するかもしれないが、あまり気負わないようにしてくれ」

こう説明するのは、十三番隊十五席・可城丸秀朝である。日向達新人が十三番隊に入ってから五日経った。最初は雑用だけであったが、今日はようやく死神らしく虚に関わる仕事をできると日向は思った。

「今日の先導は、僕と車谷さんだよ。途中で二班に分かれるけど、それは現地で話すよ」

「はっ!」

可城丸の言葉に下級死神である日向達は、キレのある返事を返す。

その後、可城丸と車谷を先頭にして流魂街へと赴く。すると、その途中でとある女性死神が日向に話しかけた。頭に花のようなアクセサリーを付ける人だ。

「…………あんたが、天宮城日向?」

「そうですけど…………」

若干、自分よりも年上に見えたので一応敬語を日向は使う。それよりも、彼女がなにか不満そうな顔をしていたので、下手にため口を使わない方がいいと考えたのもある。

「あたしは志乃。たしかあんた、飛び級受けまくつて一年で卒業したのよね?」

「そうです」

日向は問いに淡々と答える。そして、言われるのではないかということが頭を過った。

「……………秀才だか天才だか知らないけど、あたしはそういうので調子 のって態度がでかい奴大っ嫌いな。だから、下手に調子 のって行動 してあたしさらに迷惑かけないでよね?」

やっぱりか、と思った。周囲からは、凄いやら逸材やら言われたが、それは表向きでしかない。裏の方で、嫉妬やらで悪く言われてたのも 日向は知っている。

「大丈夫ですよ。指示に従いますし、敬意を持って対応しますから」

「……………じゃあ、海燕副隊長に対するあの言葉遣いはなんなの?」

「昔っからの付き合いで、変に態度変えても違和感ですし、本人も了承 してるので」

「……………でもねえ、周りからみるとイライラするの。気を付けて」

「……………検討しておきます」

「ちっ……………」

印象悪いなあ……………。日向はそう思った。まさか、海燕のことも言 われるとは思わなかったというところが本音だ。しかし、今更変える のも違和感だと思うし、海燕もそれを望まないだろうとも考えた。

(……………さっそく、難題突きつけられた気分だなあ)

「……………日向。何を志乃殿と話しておったのだ?」

「いや、今日の注意事項のことだな」

ルキアが気になったらしく、何の話なのか聞いてきたがはぐらかし た。他人が聞いて気分のいいものでないだろうと考えたからである。

「……………志乃さんって、いつもどんな人なんだ?」

「?志乃殿か?勝気な女性だが真面目で、しっかりしておる方だが……………」

「……………そうか、ありがとな」

どうやらルキアの様子を伺うあたり、ルキアに対してはいい印象の ある人なのだろう。だが、自分には結構きつくきていたようなので、 何か以前に似たような事例で嫌な目にあったのかもしれない。

(……………ま、考えすぎか)

「よし、ここらへんで分かれよう。じゃあ……………今近い方の先輩に着いてくれ。勿論、均等になるようにね」

均等と言うが、元々席官である一人ともう一人の先導役の車谷を除けば下級死神は四人である。必然的に、先ほど話していた日向とルキアは一緒の班になった。

「では、朽木。天宮城。私についてくるのだぞ?」

アフロがトレードマークの車谷が、二人の前にいた。

「はっ!」

分かれた後、三人で周囲が林の場所を探索していた。

「むう……………特に霊圧は感じんな……………」

「そうですね……………。どうします?」

「そうだな……………一旦集合場所に戻ろうか。そろそろ時間であるしな」

車谷の提案に二人は頷く。虚が居るよりは居ない方がいいだろう。

「……………っ?!車谷さん!!」

「むお?!どうした、天宮城?!」

「可城丸十五席の方向から、虚の霊圧を感じます!急いで援護しに行きましよう!!」

日向は、突如大きくなった霊圧を感じ取った。さらに、それがもう一班の方に現れたのに気づき声を荒げる。

「そ、そうか……………?し、しかし!そうならば、救援に行かざるを終わらない!行くぞ!」

「はっ!!」

この言葉の直後から、三人はもう一班の方へと走り始める。

「……………っ?!よく気づいたな、この霊圧を!」

近づくことにより、やっと感じ始めた霊圧に。そして、このような微弱な霊圧を感じ取った日向にルキアは驚く。

「まあな。……………ルキア、お前は後ろにいてくれないか?」

「な、なぜだ?私もれっきとした死神に……………!」

「腕、震えてるぜ?」

日向は、ルキアの腕の震えを見逃さなかった。日向と違い、ルキア

にとつてはこれが初めての实战なのだろう。

「後ろにいてくれたら、俺はお前を護れる。今回は、援護に徹してみてくれないか?」

「……………うむ、そうしよう……………」

本来なら、このようなことが成り立つ訳がないのだが、ルキアは日向が現世で巨大虚を何体も相手取ってることを知っているのに加え、自分の実力も弁えているので、その提案に乗るしかなかった。

そして、だんだん近づいていったことによつて、ようやく虚の的確な霊圧を補足することが可能になった。

「そんなんでもねえが……………やべえな」

ここで言う「やばい」は、虚の強さではない。味方の状況だ。既に、向こうの霊圧三つはかなり消耗していることがわかつた。

「車谷さん。先行して、状況を確認してもよろしいでしょうか?」

「むっ……………?!し、しかたがない!行ってみてくれ!!」

既に、車谷が息が絶え絶えなのを確認した日向は、自分が先行する旨を伝えた。ここで、「状況を確認する」と言つたのは、「先行して敵を討つ」というよりも許可がやすいと考えた日向の思慮によるものである。

「はっ!」

直後に、日向は瞬歩を使用し、一気に霊圧を感じる場所へと向かう。

「くっ……………!」

見ると、虚には可城丸が相對しているのが確認できたが、満身創痕と言つても過言でないことも確認できた。

「……………破道の三十一・『赤火砲』!!」

直後に、日向は赤い光弾を虚へと放つ。それは、虚の頭に吸い込まれるように向かつて行き、着弾し爆発を起こした。

「……………え?」

可城丸は、何が起こつたか分からないという表情をする。

「(無事ですか?可城丸十五席)」

「あ、ああ……………」

味方の援護であることに、可城丸は安堵する。

しかし。

「う、後ろだ!!」

可城丸は、日向の後ろに迫る虚の姿が見えた。しかも、日向はちょうどこちらを向いていて死角となっている。

「おい、天宮城!!」

後ろにいた志乃も思わず叫ぶ。

しかし、これらは杞憂だった。

直後に振り払われた虚の腕を、日向はしゃがんで躲し、すぐさま斬魄刀の柄へと手を伸ばす。

「ふっ!!」

刹那。

そう思えるほど一瞬だった。日向が放った刀の一閃は、虚の頭部を横に両断し、すぐさま虚は断末魔と共に大気に消えていった。

「これで、大丈夫ですよね?」

あたしは、信じられなかった。ついこの間入ってきたばかりの新人が、席官を含んだ私たち三人相手でも敵わなかった虚を一刀両断したのが。

「志乃さん。足大丈夫ですか?」

天宮城は急にあたしに話を振ってきた。

「え……………?っ痛?!」

そういえばさつき虚の一撃避けた時、拳が地面に当たって弾いた石が、足を掠って行ってたんだ、と思い出した。

「おぶります」

「はあ?!」

天宮城は急にそう言い、あたしをおぶりはじめた。

「いいって! 歩けるから!!」

「でも、悪化するんじゃないでしょうか?」

そう言われるとぐうの音もでない。

「……………助かったよ」

「当然のことをしたままでです」

天宮城は淡々と答えてくる。まるで、あたしと距離をとるよう
に。・・・いや、距離をとっていたのはあたしか。

「……………去年、あんたみたいな優等生面した奴がいたのよ。成績は上
位の方で、それで過信して調子こいてたのが」

「……………そうなんですか」

「そいつ、十三番隊に入って結構すぐに虚の討伐に先輩たちと向かっ
たのよ。……………でも、そいつは勝手に先行して、そして一番に死んで
いった。……………虚は、残りの人たちでたいした怪我もなく倒せたの
よ」

「……………それで、俺にあんなことを」

「……………悪いけど、意趣返しも入ってたのよ。あいつ、あたしにもうざ
いくらい自慢してくるからさ。似たような優等生のあんたにね
……………ごめん」

「もういいですよ。気にしてないですし」

ありがたい。本当にそう思った。

こんな、意地悪なことをしたあたしにも、こんな気を利かせてくれ
た返事をしてくれることが。

「あんた、強いよね」

「今年中に席官入りが目標ですから」

「……………ふふっ、出来そうね」

「あざっす」

最後に、少し砕けた口調になったが、彼が気を許してくれたとい
うことなのだろうか。

「応援するわよ」

「……………じゃあ、ごはん奢って下さい」

「はあ?!なんでそうなのよ!?!」

「いててて!!冗談っすよ!!肩をグーで殴らないで下さい!!」

まったく、小生意気な後輩ができたものだ。とつても強い――

一と万

一と百の違いなど

零と一に比べたらマシだ

「お、朽木。ちよつと来い」

「?どうしたのですか、海燕殿?」

ルキアは、海燕にくるようになられたので現在行っていた業務を一
旦止めて向かう。ちなみに、行っていたのは廊下の雑巾がけである。
「お前、刃禅とかしてるのか?」

刃禅とは、死神と斬魄刀が互いを知りあうために行うものである。

「い……………いえ……………」

「何だ、してねえのか。伸び悩んでるならやった方がいいぞ?」
「っ!」

ルキアは、なぜそのことを?というような反応をする。

「見りゃわかるぞ? 隊舎の訓練場は誰でも使つていいんだから、暇が
あつたら鍛錬してみろ」

「は、はいっ! ありがとうございます!」

ルキアは見事な直角の礼をする。その様子を見て、海燕は若干苦笑
いするのであった。

「……………それで、俺を呼んだわけか」

「うむ、わざわざ付き合わせてすまないな……………」

俺らが隊に入つてほしいか月くらい経つたのであるが、いきなりルキアに『今日の仕事が終わつたら訓練場に来てくれないか?』と言われたので来てみたら、まあこんな感じになった。こんな感じにルキアに頼まれることはなかったので、それなりに嬉しい感じがする。

「いや、全然いいんだが今日はなにをするんだ？」

「うむ、そのだな……………始解を習得したいのだ」
「なるほど」

そう言われてみればそう思う。同期がもう始解を習得してるのであれば、自分もできるようになりたいというのが人間だろう。でも、少し早い気もする。俺は昔から、斬魄刀の半分を使えてたが、ルキアは俺と違って斬魄刀を握ってまだ一年経っていないのだ。割合で言えば、始解できる死神の方が少ない。なので、別に始解出来なくとも焦ることはないことだとも思う。

「まあ、まずは刃禅組んで、精神世界行けるようにすることだな」

まずはこれ。これが出来ない『対話』が出来ないので斬魄刀の名前を聞くことが出来ない。

「精神世界に行くにはどうするのだ？」

「あの……………あれだ、刃禅組んで斬魄刀に意識集中すると、寝落ちする感じで入れる」

多分間違っていないはずだ。

——…おいルキア。何だその信じられないような目は。

「うむ……………やってみないことにはわからんな。では、始めてみる」
すると、ルキアは刃禅を組んで目を閉じる。

「……………暇だな……………」

ただ待ってるのも暇だな。俺も組むか。いずれ卍解も習得したいと思ってるし、修行を始めるなら早いことに越したことはない。

「……………ふう……………」

『久しぶりだな』

「いきなり来るのな、虚帝」

目を閉じて、開けたと思ったら結構目の前に虚帝が居た。

『うふふ……………なに？寂しくなってきたの？』

「いや……………そうじゃねえんだ、白皇」

あいかかわらずハイテンションというか……………。

「どうせだ。卍解習得のための修行にな」

『ならば、俺たちを『具象化』し『屈服』させてみよ。そのために、俺たちの真髄を見抜け』

「真髄って言われても、ろくに使ってねえからな……………」

『うふ！でも、あなたはもう半分出来ちやってるのよ？』

「?どういうことだよ?」

『お前は、すでに俺を「虚化」という形で半分具象化させている』

『それでもって、虚の力そのものの私は、あなたに屈服させられることで従ってる……………』

そうだったのか。知らなかった。

「つまり、半分ずつ半分終わってんだな?」

『そう単純でもないがな』

『うふ！ヒント出してあげる……………!表を見ないで、裏を見て……………!』

「……………わかった。参考にするよ」

『お前は呼ばれているようだ。では、俺たちはここまでで』

『呼ばれてる?あ、おいつ……………!』

「——うが!日向!起きんかこのたわけ!」

「痛い?!」

気づいたら、ルキアに頭をひっぱたかれた。何気に痛い……………。

「お、何だ。終わったのか?」

「終わって話を聞いてもらおうと思ったら、貴様が眠っていたのだ!!」

「マジで?悪い、俺も刃禪しててあっちに行ってた」

「行ってたのか?……………ではなくて、聞いてくれ!私も入れたのだ!!」

マジかよ。早いな。いや、基準分らないけど。

「で、名前聞けたか?」

そう聞くと、少しシユンとした顔になった。

「いや、そこまでは……………」

「まあそんなもんだらうな」

むしろ、行けたのはすごいと思うぞ?

「こういうのは、色んな人に聞いて回った方がいいかもな」
「えっ？」

「始解できる人に聞いて回って、どうやって名前聞けたか聞いてみようぜ？」

さすがに俺だけでは心許ない。というわけでの提案だ。

「……………それもそうだな。よし、行くぞ!!」

「俺かい？ そうだなあ……………俺は、精神世界に入って割と早く名前を聞けたぞ？」

「どんな感じですか？」

「うーん……………『お前の力を貸してほしい』と言ったら、すぐに名を聞けたな」

そういうわけで、現在浮竹隊長の元に来ている。隊長から話を聞くとは、俺たちは結構贅沢なことしてるな。

「参考になったかな？」

「……………うーん、あっさりしていて何とも……………」

「そうか……………済まない、力になれなくて」

「い、いえ！話を聞けただけでも十分です！」

「ルキア、作戦1。普通に聞く」

「まんま正攻法ではないか」

しょうがないじゃん。聞く限りそういう感じだし。

「そうだ！思い出したぞ！」

急に浮竹隊長が大声を出すので、俺とルキアはびっくりした。

「昔、総隊長に言われたことを思い出したよ！」

「ほ、本当でありますか?!」

総隊長からの言葉って……………やく、贅沢だわ。

「ああ！『斬魄刀だけを見つめるのではなく、己をもう一つ見ろ』と、言われたんだ！」

「己ですか？」

「斬魄刀は、言わば己の魂。自分を見つめなおせば、自ずと始解できる

ようになるさ」

なるほど。よくわからん。

「あ、ありがとうございます!!」

ルキア。お礼を言うのはもつともだが、お前は本当に理解できたのかい？

「じゃあ、また明日！いい報告を楽しみにしてるよ！」

「では……………失礼しました。浮竹隊長」

俺らは、こう言って部屋から出て行った。

……………『自分を見つめなおす』か……………

一体私は何をしているのだろうか。

私はどうしてこんなに焦っているのだろうか。

どこから変わってしまったのだろうか。

『養子に……………ですか……………?』

あの時の出来事で大分変わってしまったな。

いつの間にかに朽木家の養子になり。

いつの間にかに死神になり。

いつの間にかにどこへ向かってるのか、道を見失ってしまった。

『ルキア!』

私が、日向に抱くものは何だろうか？

感謝か。

尊敬か。

それとも妬みか。

私は、何と醜いのだろうか。

友人に対して、このような負のような感情を持ってしまおうとは。……いや、あやつなら『そんなもんだろ』などと、私を気遣ってくれるのだろう。一緒に過ごした時間は短い、きつとそう言うのだろうか。……………日向は、優しいからな。

私の勝手な妄想だ。だけれど、確信できる。

……………少しわかった気がする。

私は、日向と肩を並べたかった。

私は、友と一緒に歩みたかった。

そのために、無我夢中になっていただけだ。

始解がどうこうではなく、私は『護られる存在』から『共に護り合う存在』になりたかったのだ。

ただ、そうなるために見つけた口実が『始解』であるだけだ。

斬魄刀に申し訳ない。ただ、そなたを道具のように扱ってしまった。

もう一人の私なのに。でも、理解はしてくれるだろうか？

私は、純粹に強くなりたい。

もう、口実なんかではない。

だから――。

『ルキア……………』

「海燕殿。稽古をつけてもらいたいのですが」

「稽古？ いいぞ」

「……………できれば、斬魄刀での打ち合いで……………」

「つ……………！……………分かった。でも、危ねえから俺は峰うちでやるぞ？」

「分かりました」

私は今、海燕殿に稽古を頼んだところだ。霊術院で満足に学べなかった私にできること――…：数をこなすことだ。鬼道はある程度得意だったので、独学でも伸ばしていくことは可能だろう。しかし、剣術はそうはいかない。剣術はそこまで得意ではなかった。しかし、虚との戦いで剣術は必須。ならば、院でこなせなかった分、ここから取り返していくしかない。

「よし……………朽木！泣きべそかいても知ねえぞ?!」

「な、泣きべそなどかきません!!」

「じゃあ……………行くぞ!!」

海燕殿が、峰だが刀をこちらに振り下ろしてくる。

「くっ!!」

重いつ……………！体格差や筋力、すべてにおいて劣っているであろう

私に、海燕殿の一撃は凄まじかった。

「どうした?!その程度か?!」

「……………これからです!海燕殿!!」

「いい返事だぜ!朽木い!!」

その後、私は刃をしつかり海燕殿の方へ向け刀を振る。そして、それを受け止められ、再び海燕殿が刀を振り下ろしてくる。しばらくはこの繰り返しであった。

「はあっ……………はあっ……………はあっ……………はあっ……………!!」

どうやら私には、この程度の稽古でも息絶え絶えになる程度の体力しかなかったようだ。自己嫌悪に陥りそうだ。

「一旦、休憩したらどうだ?」

今まで聞こえてこなかった声に、思わず振り向く。

「……………日向?!どう……………して……………?!」

「自主練しようと思ったらすでに使われてただけだ。ほら、お茶」
「す……………済まぬ」

日向がお茶の入った竹筒を投げてきたので受け取る。

「おい、俺にはねえのか?」

「飲みてえのか?ほら、これやるよ」

「お、気が利く……………って、これ玉露じゃねえか!甘っ?!」

「一応お茶だぞ?」

「玉露は嫌いなんだよ!甘過ぎるから!」

どうやら海燕殿は玉露が苦手なようだ。しかし、今の疲れ切っている私の身体にはこの甘さが沁みてくるような気もする。

「どうだルキア、調子は」

「……………まだ何とも言えんな」

「ま、そりゃそうか」

日向は大体肯定してくれる。口調は軽いが、それぐらいが心地いい。

「だが、足りないものは見つけた。安心しろ」

「そうか、よかったじゃねえか」

そう言つて軽く笑つてくれる。しつかり応対してくれることに親

しみが湧く。

「…………ルキア、時間はたっぷりあんだ。ゆっくりでいい」「肝に銘じておく」

そう言っつて、私も微笑む。

そうだな。ゆっくりでいいから、お主の肩に手を携えることが出来るよう、私も頑張るよ。

『姉さん』

呼び方だけでいい

そこに気持ち籠っているだけでもいい

『もしよかったら、私のことを——』

「……………ううおおおおおおあああああああ
!!!!」

一人の青年の叫びが、雨中に響いた。

「今回は、都さん先導ですか?」

「ええ、そうよ」

日向の問いに答えるのは、十三番隊三席・志波都である。女性でありながら、三席という上位の席に就いた女傑である。

「人数は、私も含めて八人で、ある虚がでると言われている地区を調査しに行くわ。前回と違って、事前にいると分かっているから最初から気を抜かないで向かうわよ」

「しませんって。現場では、俺真面目な方ですよ?」

「うふふっ! そうね、おせっかいだったわ!」

二人が初めて会ったのは志波邸であった。日向がちょうど居候を始めた年の冬に、海燕と一緒に志波邸に来た時に会った。初めて会った時、この人は海燕にはもったいないんじゃないかと日向は思ったが、家の中で海燕に少しデレる都を見て、本当に夫婦なんだとも思った日向であった。

その時から、幾分か時間が経って二人の間の壁はほとんど取り払わ

れている状態だ。むしろ、二人で話す際は、日向が空鶴にそうするよ
うに、本当の姉のように日向は接し、都は日向を本当の弟のように接
した。都がこのように思えるのは、海燕と日向の関係が兄弟に見える
からだろう。

「……………うわ、雨降ってきた……………」

移動中、突然雨が降ってきた。ちょうど季節は梅雨。このような事
態が想定できなかったとは言わないが、わざわざ傘を持つてくるのも
おかしいと思うので誰も傘など持つてきていない。

「そうね……………早く済ませて、瀨霊廷に帰りましょう。皆、頑張つて
！」

「「はっ！」「」」

その後、都たちは虚がいるという洞穴の前に来ていた。少し離れて
いても分かる虚の霊圧。それが、この場にいる全員に緊張感を与えて
いた。

「……………居るわね。皆、気を抜かないで」

「都さん、誰が先に行『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』つ
ぐあ?!」

日向が、都に質問しようとした瞬間に、何か人型の物体が日向をさ
らって行った。都たちとの距離はどんどん離れていく。

「日向君?!」

「ひひひっ！あやつめ、一番味が濃そうなのを持っていきおったわ
……………。まあ、儂はほどよく実った女の肉も大好きじゃがの!!ひひ
ひっ!!!」

洞穴から出てきたのは、一言で言えば『グロテスク』が似合いそう
な、背中から触手を生やす虚であった。

「くっ……………陣形を崩さないで!…この虚をすぐに倒して、日向君の援

護に向かうわ!!」

「「はっ!!」」

「ひーひっひっひっ!!活きがいいのういいのう!!腹が思わずなつてしまいそうじゃ!!」

「ぐ、うううう!!」

日向は、現在洞穴から出現した何かによって、首を掴まれて隊からどんどん離されていった。首を凄まじい力で掴まれているので、若干酸欠のような状態になり、日向の視界はだんだん朦朧とし始めていた。しかしそのままにする訳もなく、日向は咄嗟に空いていた左手を顔に翳し、虚化する。虚化することによって日向の肉体能力が飛躍的に上昇し、ただの死神のそれとは違う物になった筋力のままに、自分の首を掴んでいる虚の腕を力のままに握る。凄まじい握力によって虚の首を掴む力も若干緩み、その隙に日向は虚の身体に蹴りを入れて距離をとる。

日向はその隙に体勢を立て直し、すぐさま斬魄刀を鞘から抜く。そしてその切っ先を虚に向ける。

『「はあ……はあ……はあ……!」』

虚は人型であった。身長は日向よりも頭一つ分大きいほどである。虚の象徴である仮面は西洋の鉄仮面のように縦に何本も窪みが出来ており、その中から瞳のものと思われる赤い光がうっすらと輝く。穴は、喉仏があるであろう部分に空いている。身体は白く、仮面と合わせるように甲冑を纏っているかのような体である。少し動く度に、関節の部分からギシギシと音を立てている。

『「……よくもやってくれたじゃねえか……!」』

日向は仮面から、反転した黒い瞳で目の前の虚を睨む。そして、何かしらの動きがないか警戒する。

すると虚は、右手を日向に突き出す。すると、手の平から赤黒い光が放たれ始める。

『「っ……?!?!やべえ!!」』

それが何なのか理解した日向は、すぐさま瞬歩で回避しようとする。その瞬間に、虚の手の平からは赤黒い閃光——虚閃セロが放たれる。地面を抉りながらそれは日向に迫っていく。しかしギリギリの所で日向は回避する。

『くっ………！破道の三十三・『蒼火墜』!!』

回避しながら日向は虚に向かって青い火球を放つ。それは鈍重そうな虚の身体に命中し爆発を起こす。そして煙が辺りに立ち込める。

『っ!!縛道の三十九・『円閨扇』!!』

様子を伺おうと身構えた日向であったが、突如目の前に現れた虚がどこからか取り出した刀で日向に斬りかかるので、目の前に円形の盾を出現させて間一髪のところまで受け止める。

『っ………おらあ!!』

そしてお返しとばかりに白皇を横に一閃し、虚の胴体を断ち切ろうとする。

『か………てえ?!』

しかし踏み込んでいない状態での一撃では、虚の硬い表皮を斬るには力が足りなかった。カキインという甲高い音を辺りに響かせ、双方の動きが一瞬止まる。

『ぐおお!!』

日向が動くよりも早く虚が日向の胴体に蹴りを入れる。それをまともに喰らった日向は、横に吹き飛んで木に激突する。あまりの衝撃に木はメキメキと音を立てて折れていく。

そこに向かい、虚は凄まじい速さで突撃していく。

『縛道の六十二・『百歩欄干』!!』

しかし、前方から突如として降り注ぐ無数の光の柱に行く手を阻まれる。それだけではなく、光の柱の何本かは虚の身体に命中し、そのまま虚はその場に留まった。

『縛道の六十三・『鎖条鎖縛』!!』

日向の言葉と共に、太い鎖が虚に絡みつく。すぐさま虚はそれを解こうと体に力を入れるが、すぐには壊れない。その隙を突き、日向は虚に肉迫する。その間に、鬼道の詠唱もする。

『君臨者よ！血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ！蒼火の壁に双蓮刻む！大火の淵を遠天にて待つ——破道の七十三。』

『双蓮蒼火墜』!!』

先ほどよりも巨大な青い火球が虚の体を包み込む。あまりの熱量に、近くに生い茂っていた木を何本も焦がしていく。地面に生える草は黒く変色し、炎が迸る。

さらに日向は先程とは違い、しっかりと踏み込んで虚の体を断ち切ろうと縦に振り下ろす。それは虚の硬い表皮を斬り裂き、虚の体からは赤い血が吹く。

『なっ……?!』

甲冑のような表皮の中からは、なにやら黒い服のような物が見えた。それに心当たりのある日向は、目を見開いた。

『死覇装……だと……?!』

死神が身に纏う黒い装束。それをなぜこの虚が身に着けているのか。

答えは一つ。この虚が元々死神であったから。その答えにたどり着くのに、日向はさほど時間は掛からなかった。そしてすぐさま斬魄刀を身構える。もし自分の予想があたっているならば危険であると考えたからである。

(虚化した死神だったら……他の虚よりも手ごわい……!)

実際、この数分にも満たない攻防の中で、この虚の強さがただの虚の物を凌駕しているという事は明白であった。先ほど放った虚閃がそれを物語っている。あれはもともと大虚が使うもの。日向は、何年も虚化をすることにより虚閃を放てるようになった。それなのにこの虚は、自分と同程度の虚閃をいとも容易く放ってきた。それが、いい証拠である。

『ま、やることは変わらねえけどな……!』

しかし日向は臆さない。自分は死神、相手は虚。ならばやることは一つ。

『ぶった斬る!!』

至極単純。斬魄刀で虚を斬り捨て、その罪を洗う事である。それに

対し日向は一切の迷いを持たなかった。それに呼応するように、日向の虚の力の混じった禍々しい黒い霊圧は日向を中心に大気に迸る。若干周りが赤くなっていることは、元々の色が赤だったと言う事。それが黒くなるほど日向の放つ霊圧の濃度は濃いのである。

そして瞬歩で肉迫し、虚に白皇で連撃を加えていく。霊圧の上昇した日向の放つ斬撃は、一つ一つの重みが増し、先程とは打って変わって虚の硬い表皮を削り取っていく。これに対し虚は防戦一方になってくる。日向が一閃する度に、鉄のように硬い虚の表皮からは火花が散り、その閃光が止むとそこに刀で斬られたような窪みが出来上がる。

それが数秒続いた後に、日向は虚に手をかざす。

『破道の六十三・『雷吼炮』!!』』

日向は、今自分が最も得意とする鬼道を放つ。電気を帯びたエネルギーの塊は虚に襲いかかり、直撃した瞬間に爆音のような音が響き渡る。

しかしそんな雷撃の中から、赤黒い閃光が自分に襲いかかってくるのを、日向は見逃さなかった。

『ちっ………!!』』

すぐさま回避するも体勢が崩れる。そこを狙うかのように虚は日向に再び突進してくる。そして虚の持っている刀が輝き始める。そしてそのまま虚は日向に刀を振り下ろす。

『ぐあっ!!』』

それを白皇で受け止めようとするも、虚の刀を振り下ろす勢いのままに日向は地面に叩きつけられる。凄まじい衝撃が日向の体に襲いかかる。そして虚は続けざまに日向の左腕に蹴りを入れる。

『っ………ぐ!!』』

ビキツと音を立てる腕に、日向はもうこの腕は使い物にならないと思考を巡らす。今なお腕に走る激痛が、その思考に至らしめたのである。

『お返しだ!!』』

しかし地面に倒れたまま、白皇の切っ先を虚に向ける。そしてそこ

から虚の物と同じ赤黒い光が辺りを照らしていく。

『虚閃!!』

それは虚の上半身に襲いかかり、勢いのままに虚を後方へと吹き飛ばしていく。虚が後方に吹き飛んでいくのと同時に、通過していく木々を問答無用で灰燼にしていくその様子は、日向の放つ虚閃を威力を物語っているだろう。

すぐに体勢を整え虚の吹き飛んで行った方向を見る。

『ツブねえ?!』

しかし、自分の目の前に赤黒い閃光が迫っていることに気づいた日向は、再び瞬歩で回避する。その途中で、日向は閃光の始まりの位置に、上半身が炭のように黒く染まっている虚の姿を発見した。

(頑丈な奴だ………!)

自分の本気の攻撃を幾度となく喰らいながら、未だに戦意をむき出しに攻撃を仕掛けてくる虚に、日向は若干の焦りを覚えた。

しかし、それは自分が負けることを示唆することではないと日向は理解していた。

そこで日向は、間髪入れず虚に接近していく。それを見た虚も、こちらに接近しようと身構える。

『縛道の六十一・『六杖光牢』!』

しかし六つの光の帯が虚の胴体に突き刺さり、その行動を抑制する。

『縛道の六十二・『百歩欄干』!!』

無数の光の柱が、虚の体に突き刺さる。

『縛道の六十三・『鎖条鎖縛』!!!』

虚の体に、太い鎖が絡みつく。

『縛道の七十九・『九曜縛』!!!』

虚の縦方向八つ、胸に一つの黒い鬼道の玉を放ち、さらに虚の動きを制限する。ここまでくれば、どんな虚でも解くのに時間が掛かるだろう。

そして日向は、最後の仕上げに入る。

『滲み出す混濁の紋章!不遜なる狂気の器!湧き上がり・否定し・痺

れ・瞬き眠りを妨げる！爬行する鉄の王女！絶えず自壊する泥の人形！
結合せよ！反発せよ！地に満ち己の無力を知れ——破道の
九十・『黒棺』!!!」

黒い面が虚を取り囲み、直方体状に形を成していく。それは重力の奔流であり、目標を圧碎するという凄まじい鬼道である。普段の日向であれば、九十番台の鬼道など使おうとは思わない。番号が高ければ高い程扱いが難しいのは周知の事実。だがそれは、虚化をしていない状態での話。虚化をした日向ならば、完全詠唱であれば九十番台すら暴発せずにその番号に違わない威力の鬼道を放てるのである。

九十番台など、副隊長クラスですら中々扱わない。それを出来てしまえるほどの霊力を日向は有しているのである。

『はあ……はあ……はあ……!!』

しかし、消耗は激しい。日向は今すぐにでも膝を着きそうな程疲弊している。虚化も若干解け始め、いつもの顔に戻っていく。そして、日向は目の前の黒い暴虐の箱を見つめる。辺りに響く重低音はこの箱から響く音なのである。他の鬼道とは違う、腹に響く音。それが日向にとっては多少の恐怖を煽るモノでもあった。しかし今は、それに見向きもせずに相手の終焉を願う。

そして、箱はだんだん消え始める。その中からは、甲冑のような表皮が到る所ひび割れ、そしてそこから血を流す虚の姿があった。

満身創痍。それが両者に似合っている言葉であっただろう。

しかしそれでも、勝者は決した。虚の体はだんだんと霊子へと変貌していく。それをただ黙って日向は見つめる。

「……………終わったか……………」

もう動きもしない虚に、日向はこの言葉を投げかけた。

「いててて……………あの野郎、完全に腕折りやがって……………」

俺は今、急いで都さんの班に戻っているとこらだ。あれから、どのくらいの時間が経っているのか、顔を殴られたせいで時間間隔が変になつてよくわからない。

「霊圧は感じるから、こっちで合つてると思っただけだなあ……………」
皆無事でいてくれ……………。いや、都さんがいるから大丈夫だとは思
うけど……………」

そんなことを思っていると、ふと見慣れた場所に出てきた。どうや
ら、洞穴の近くに來たようだ。

「都さ……………ん……………」

俺は、一瞬信じられなかった。

「ん？なんだ小僧、あ奴を退けて戻って來たのか。ひひひっ！ちよつ
と待つておれ、この女を喰らうてから相手してやるわ！」

そこにあつたのは、胸に触手を刺され、膝から下が無い左脚から血
を垂れ流す————

『もしよかったら、私のこと……………『姉さん』って呼んでくれない？』
『え……………？別にいいですけど……………どうして急に？』

『ふふふっ！空鶴さんのことは姉さんって呼んでるんでしょ？だった
ら、私もそう呼ばりたいなあ……………つていう嫉妬かしら？』

『微笑ましい嫉妬ですね……………。ま、都『姉さん』がいいつて言うなら、
俺はそう呼びますよ？』

『有難うね、日向君……………』

「……………ううおおおおおおあああああああああ……………！！！！」

俺は、迷わず白皇を抜いて突っ込んで行った。

「都姉さんを離しやがれええええええええええええええええええ……………！！！！」

振り下ろした刃は、都姉さんに刺さっていた触手を斬りおとした。

そして、俺は姉さんを受け止め虚と距離をとった。

「姉さん!!しっかりしろ!!!」

何も反応が返ってこない。

どうすればいい？

このまま逃げるか？

それとも虚を倒してから帰るか？

それ以前に、今の俺でこの虚に勝てるのか？

「……………うがく……………ん……………」

「姉さん?!」

「わた……………し……………置いて……………逃げ……………」

掠れ掠れだったが、姉さんが言おうとしたことは瞬時に理解できなかった。

だが、これでやることは決まった。

「……………今すぐ姉さん連れて帰るよ」

「……………だ……………め……………!」

「命令違反します」

「待て……………小僧!!」

「破道の六十三・『雷吼炮』!!!」

「ぬお!?」

虚に、鬼道を放ってすぐに駆けだす。

まだ雨は止んでない。

「わ、たし……………もう……………!」

「言わないでくれ」

そうならないように今必死に走ってる。

「皆怒るぞ?」

まだ間に合うはずだ。

「わたしいがい……………みんな……………!」

背中に熱い液体が伝うのが分かる。

「わかった。もう喋らないで」

粘性があり、鉄臭い。

「今は生きてくれ」

———そう言うしかなかった。

『兄貴』

海のように

空のように

大地のように

そして全てを照らす太陽のように

身勝手に誰かを抱擁しよう

「……………容体は？」

「今は何とも……………今晚が山でしょう」

病室からでてきた卯ノ花に、浮竹は都の容体を聞く。

数時間前に、浮竹と海燕に届いた報告。それは、重体の都を傷だらけの日向がおぶって二人だけ帰還してきたというものであった。あまりの状態のひどさに、二人を直接見た者は絶句した。どちらも、浮竹が実力を知っているからこそ、だからこそこの状況を信じられないものがあつた。

「日向は？」

「左腕を複雑骨折していますが、命に別状は……………」

卯ノ花は険しい表情をする。彼女がこのような表情をするのは、決まって事態が緊迫しているときだ。

「……………補足しておくことが一つ。都さんの魄睡は砕かれています。もし、意識が戻っても死神として任務を全うすることは……………」

「……………そうか」

「隊長」

浮竹の後ろから海燕が現れた。その表情はいかんせん複雑だ。だが……………」

「すぐに、虚の討伐指示を」

「ダメだ」

「何故ですっ?!」

許可できない意を返すと、海燕は溜め込んでいた怒りが爆発したように声を荒げた。

「相手の素性が分からん。少しでも情報を集めてから……………」

「もう、日向から話は聞きました！だが、あいつはもう一体と戦っていて肝心の班を壊滅させた奴の情報を有していない！なら、今すぐにも俺が現場に赴き……………」

「いい加減にしろ!!」

「っ!!」

浮竹は、めつたに上げない怒鳴り声を出した。それに海燕は思わず萎縮する。

「憎いのはわかる…………だが、怒りに任せたまま刃を振るい虚を討てるのか？今はまだ待て。二日後には現在編成中の討伐部隊が向かう。だから…………」

「…………その間に、人が死んだら隊長は責任とれるんですか？」

「っ…………?!」

「班を壊滅させた奴を、二日も野放しにして…………それで多くの犠牲が出たら……………」

海燕も普段聞いたことのないようなドスの効いた声で話す。

「…………わかった。だが、俺も行くぞ」

「有難うございます」

海燕はそう言うと、さっさと四番隊舎から離れて行った。

「卯ノ花隊長。二人を頼みます」

「無論」

浮竹も、卯ノ花に二人を任せ隊舎から離れていく。

「…………行っちゃったんですか？」

しばらくした後、左腕にギプスを巻いた日向が病室から出てきた。

「いけませんよ、部屋から離れては……………」

「…動いてないと、気がおかしくなりそうで……………」

卯ノ花も、日向の心情を痛いほど理解した。日向にとって都は、本当の姉のように慕っていた人物である。その、肉親とも言える者が生死の境目を彷徨っているのに、落ち着いていられる者はそうそういな

いであろう。

「……………俺は……………またみすみすと……………」

「そうやって、また背負うつもりなのですか？」

卯ノ花は、日向の言おうとしたことを先読みした。以前もそうであった。この者は優しいから、全て自分のせいにしてしまう。それが、今彼にとつて凄まじい負担になっていることも知らずに。

「……………俺はどうすればよかったんですかね？死神として、虚を討伐することを優先すべきだったのか……………でも俺は、私情で行動してしまった……………」

「……………たしかに、余力があつたなら死神として虚を討つべきだったのでしょう。しかし、人として……………人道を選ぶなら、その命を優先する姿勢を私は支持します」

これが今、卯ノ花にできる限りの励まし。

このような会話をしていると、病室の方からドタドタと走る音が聞こえてくる。出てきたのは、虎徹勇音であった。

「う……………卯ノ花隊長！都三席の意識が戻りました!!」

「っ……………本当ですか?!」

それを聞いた日向は一目散に病室へ向かう。卯ノ花もそれについていくように、病室へ向かう。

「……………日向君……………」

病室に入ってきた日向を見つけた都は、弱弱しい声で自分の『弟』へと、声を掛ける。その声に、日向は心配そうな、だが少し安堵したような表情をする。

「都姉さん……………」

「……………ここは……………?」

「四番隊舎の病室です、都さん」

都の問いに答えるのは卯ノ花であった。四番隊隊長が自分の目の前に居ることによって、都は自分の現在の状況を理解した。

「……………海燕は?」

都が次に口にしたのは、自分の最愛の夫の名前であった。それに対し、日向は一瞬肩を揺らし現状を伝え始めた。

「海燕は、浮竹隊長と一緒に今日の虚の討伐に向かっているはずだ。安心して、海燕は強いし隊長も付いている……」

「……だめ……！呼び戻して……！」

日向の言葉に対し都が見せた反応は、日向の思っていたものと違う物であった。

「きつとあの人は一人で戦う……それではダメなの……!!」

弱弱しくも、切実な、強い願望の籠った言葉を口にする。無意識かどうかはわからないが、都の手は日向の死覇装の袖を震えながら握っていた。

「あの虚は、霊体に融合して乗っ取る力を持っているの……早く伝えないと……！」

この事実には、日向だけでなくこの場に居た全員に戦慄が奔った。実際、都はあの虚が味方と融合したことにより、味方を斬ってしまうことに躊躇いを覚えたことが起因して不利な戦況へと陥ってしまった。もし、その対象が海燕になってしまったらと考えただけでも、都が震えるには十分すぎるほどの理由へとなり得た。

「……分かった。伝えに行く」

「日向さん?! いけません、そのような体で!」

日向の突拍子もない言葉に、卯ノ花はらしくない声を上げた。当たり前だ。すでに戦闘で疲弊し片腕が折れている状態で、再び現場へと向かわせることなど医者である彼女からしてみれば許容できるはずもない事であったからだ。

「卯ノ花隊長……俺は止められても行きますよ」

その表情は、今までの不安やあ焦燥などではなく、確固たる意志を持った男の表情をしていた。

「ここで動かなかつたら、俺は後悔する……そんな俺を、明日の俺は笑いやがるはずですよ!!」

「……魂が、それを許さないと言うのですね……。わかりました、お行きなさい」

「卯ノ花隊長?!」

卯ノ花の言葉に、勇音は驚愕し声を上げる。その様子に、卯ノ花は

優しく微笑む。

「無駄ですよ勇音。男性の方は、こういうところだけ頑固なんですか……」

「日向君……海燕を……お願い……!!」

「任せて。必ず海燕たちと一緒に生きて戻ってくるから……」

日向はこう言つて足早に病室を去つて行つた。

「……本当に、馬鹿な人たち……」

卯ノ花は誰に言うわけではないが、心中の言葉を口に出すのであつた。

『戦いには二つあり、我々は戦いの中で身を置く限り、常にそれを見極めなければならぬ』

『命を守る戦いと——誇りを……守るための戦いと——!』

ルキアは、さきほどの言葉を浮竹に言われた。海燕を助けるために飛び出そうとしたルキアを疎めるための言葉であつた。海燕は現在、都の班を壊滅させた虚と戦つていた。当初は、副隊長である海燕がこの虚を早々と倒してくれるに違いない——そういう考えがルキアの中に存在していた。しかしそれは、虚が海燕の斬魄刀を消したことにより消滅していった。

海燕は現在、鬼道だけで虚と渡り合つている。だが、状況の切迫は新人のルキアにも身に染みて理解できるものであつた。

(私は……どうすればいいのだろうか?)

ここで動けば海燕を救えるかもしれない。しかし、それは海燕の『誇り』を殺してしまうことと同意であつた。今の自分には量りかねるものである——それが、ルキアの考えであつた。自分が、海燕の『誇り』を殺してしまうことはあまりにも傲慢すぎるのではないか。その考えが、ルキアの一步を引きとどめていた。

「ひひ……斬魄刀なしでここまで粘るか……。なかなかやりよるの小僧……」

「当たり前ーだろ。テメー如き、鬼道があれば十分だ。悪いがこのま

ま倒させてもらうぜ」

虚の言葉に、海燕は余裕であるという態度をとる。しかし、満身創痕なのははたから見ても分かり切っていることであった。

(そろそろ使うかのう……………)

虚は、前に来た女死神の部隊を壊滅させた能力を使おうとしていた。しかし、情報を持っていない海燕はそれに対し対処する術を持っていない。

(ここが——貴様らの墓場だ！)

「破道の六十二・『雷吼炮』!!」

しかしそれは、横から飛来してきた雷の砲弾によって中断させられた。その鬼道を放ったのは——。

「…………日向…………お前何で…………?!」

海燕は突如現れた自分の弟と言うべき人物の登場に驚きを隠せない。あいつは今、四番隊舎の病室に居たはずだ——と。それは、後ろで見ていた浮竹とルキアも同じだった。

「…………助けに来た」

「馬鹿野郎!!手え出すんじゃねえよ!これは俺の戦いだ!わざわざお前に助けられるほど俺も弱くなった覚えは——!」

「斬魄刀がねえくせに、なにほざいてやがる」

「つ…………!!」

「海燕が死んだら、悲しむ奴がたくさん居るんだよ。それも分からなくらいに動転してんのか?」

「これは俺の『誇り』のための戦いだ!!その為なら、命もつ……………!!!」

「その為にお前は家族を見捨てんのかああああ!!!」

一瞬だった。日向は右腕で、海燕の顔を殴った!

殴った衝撃で、海燕は後方へと倒れこむ。

「そんなふざけた理由で死ぬって言うんならもう一発ぶん殴ってやる!!残された奴らの気持ちも考えねえで命捨てようとしてんじゃねえよ!!!お前が死んだら、空鶴姉さんはどう思うっ?!岩鷲は!!金彦も銀彦も!!焔と雫も!!俺も!!!何より…………お前が死んだら都姉さんはどう思う?!一番にお前を信じて…………愛した都姉さんはどう思う?!」

「っ……………!!」

「もう都姉さんの意識は戻った……………あとは、俺らが帰るだけなんだよ!!」

「都が……………?!」

都が意識を取り戻したということ聞いた海燕は、驚きと共に喜びの表情もにじませる。

「だから死なせねえ……………海燕は、俺の兄貴なんだから……………!!」

初めて聞いた日向からの『兄貴』という言葉。今まで、日向のことを弟のように接してきた海燕だが、改めて感じる自分の立場。

そうだ、自分は怒りのあまりに『家族』という存在をないがしろに扱ってしまった。

「……………すまねえ、頭冷えたよ。……………よしっ!!」

海燕は自分の両頬を叩きながら立ち上がる。その顔に、もう戸惑いは見えない。

「……………いつまで話しておるつもり……………!」

「破道の三十三・『蒼火墜』!!」

二人が同時に放った火球によって、飛び掛かってきた虚は後ろに吹き飛ばす。

「気が合うじゃねえか、日向!」

「うわ、ダブった……………」

「おいっ?!何だそのリアクション?!」

「くっ……………おのれ!!ならば……………!」

虚の背中の触手がボコボコと音を立てる。その様子に、日向の表情が変わった。

「海燕、下がれ!!」

すぐさま日向は海燕を自分の後ろに押し飛ばす。

直後に、虚の触手が爆発し、何か液体のようなものが飛び散る。そのうちのいくつかが日向の身体に触れる。

「ぐ、ああああああああ!!」

今まで感じたことのない痛みに日向は絶叫する。

「日向?!」

その光景に、ルキアは思わず飛び出す。浮竹もただ事ではないことを察して日向に近づく。

「ああああ……あ……あ……あ……あ……」

数秒後、日向の絶叫が終わった。それと同時に、腕が力なく垂れる様子に全員の心配は頂点を迎える。

「ひゅ……うが……?」

「……………なんじゃ、儂を呼んだか小娘?」

「っ……………?!」

その顔に映っていたのは白濁とした白一色の瞳。それに連なるように、白い液体が垂れているような模様が目の周りを施す。さらに、口からはよだれを滴らせる舌が力なく垂れていた。

その信じられない光景にルキアは絶句し、硬直した。

「朽木っ!逃げろ!!」

そう叫んだのは浮竹であった。今のこいつは日向ではない。あまりにも霊圧が禍々し過ぎる。そして、最悪の予想が頭を過った。

日向は、虚に乗っ取られた。

そうなってしまうては、ルキアは斬魄刀を振るえるわけがない。故に、浮竹は一番にルキアに撤退を促した。

「ぐっ……正気になれ!!日向!!」

『日向』の行く手を遮ったのは海燕であった。少しでも時間を稼いで、弟を救う手段を――。

「邪魔じゃ、小僧!!」

「ぐああっ!!」

『日向』の取り出した斬魄刀によって海燕は一閃され、地に伏せる。大きく斬られた胸の傷からは、血が止めどなく溢れてくる。

「待っている小娘……まずは貴様からじゃ!!」

そう言うのと、『日向』はルキアに向かっけいき、斬魄刀を振り下ろす。しかし、間一髪のところまで浮竹が受け止める。

「朽木!海燕を連れて行け!!」

「はっ……………はい!!」

半ば混乱状態でルキアは返事をした。

「貴様……日向の中から出て行け!!」

「ひひひっ! 無駄じゃ!! いずれこの身体も儂に食い尽くされる!!!」

「くっ……!!」

どうすればいい? 浮竹の頭の中はその考えで埋め尽くされていた。

「ぐっ……げほっ!!」

途端に、浮竹は吐血した。

——こんな時に……?!?

「ひひひひっ!!! なんだか知らんが……小娘!! まずは貴様の、その若いハリのある肉を喰り、滴る血を飲み尽くしてやろうっ!!!」

障害のなくなった『日向』は一目散にルキアのもとへ歩んで行った。

「あっ………」

ルキアは動けなかった。

「朽木い!!」

斬魄刀は——

「ぎ……貴様……なぜ?!!」

——『日向』自身の右足の太ももを貫いていた。

「う……ああああアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

——我が主の身体に混じりし虚よ——

——あなたが私たちを食べるんじゃないの……きやつは!!——

——貴様が、俺らの糧となるのだ——

——その邪魔くさい触手をみじん切りにして、あなたの身体をミンチになるまで斬り刻んであげる!!——

「ひっ………! があああああああ!!!」

直後に、日向の口から白い液体のようなものが飛び出し、地面に着くと同時に元の虚の姿へと戻っていった。

「な………なんなのだ貴様はあ!! その中身は……まさしく……!!」

「失せろ」

虚の言葉は、日向が放った赤い閃光の刃によって途切れた。両断された虚は二度と動くことはなくなり、霊子へと分解していった。

「日向……………」

「ああ、ルキア。もう大丈夫……………」

日向は言い切る前に地面に伏してしまった。ルキアは心配して、日向に駆けより心臓が動いているか確認する。

——トクンツ……………トクンツ……………!

「う、ああああああああ!!」

心臓が動いている。

日向は生きている。

それだけで、ルキアの涙は止まらなくなった。

朦朧とする意識の中で、自分をうつ水滴の中に混じっていた、優しく、温かいものが混じっていたことだけははっきりと分かった。

「私は、四番隊に移ることにしたわ。戦うことはできないけど、命を救うための戦いなら、まだここから始められるから……………」

「そうか……………。三席が空くな……………」

「何言ってるのよ。適任がいるじゃない」

「でもアイツは、まだ下級だぜ?いくらなんでも、それに反発するやつも……………」

「なら、そのときまでにとっておいてあげて?それが、あなたの妻である私のお願い……………」

「ああ……………。浮竹隊長に話して、周りからの了承得られたらそうするぜ」

「ふふふっ、ありがとね海燕。愛してるわ」

「…………俺もだ。だけど、ここではあんまり……………」

「分かってるわ。少しからかっただけよ。愛してるのは本当だけど」
「だから、そういうのがなんつーか……………」

「ふふっ、シャイね」

「…………日向には感謝しねえとな…………」

「本当ね…………私たちをどっちも助けてくれた…………」

「礼をいくら言っても足りねえ気がするぜ…………」

「ええ…………『弟』に感謝しないと…………」

「今のあいつなら、『家族助けるのは当然だ』とか言いそうだな」

「実際そうじゃない？」

「まあ…………そうだな…………」

「…………頑張っつてね、日向君…………」

席官

白が舞う

白が輝く

「舞え——『袖白雪』！」

解号と同時にルキアの手握られた斬魄刀は、刀身も鏢も全て白——純白であった。さらに、柄頭には先の長い帯が付いており、解放の際に生じた周囲の霊子の流れに乗るようになびく。

「……ふっ！」

ひと呼吸したルキアは袖白雪を構えたまま、斬魄刀を構える日向に肉迫する。振り下ろした袖白雪は容易く受け止められたが、ルキアはすぐさま次の一撃を繰り出し、日向に連撃を加えていく。日向はその連撃に一旦距離をとるために、後ろに下がる。

「破道の三十三・『蒼火墜』！」

その行動を認識したルキアは『蒼火墜』で追撃する。

「縛道の三十九・『円開扇』！」

その火球を、日向は目の前に張った盾によって防ぐ。しかし、盾に直撃したことにより起こった爆炎によって日向の目の前は煙で覆われていく。

「次の舞・白漣！」

突如日向の目の前に迫ってきたのは、雪崩と見間違えるような凍気。それが通ってきた軌道上は瞬く間に凍っていく。このような強力な凍気を受けたらひとたまりもないであろう。しかし——。

「破道の七十三・『双蓮蒼火墜』！」

先ほどルキアが放った鬼道よりも巨大な青い火球が、その迫りくる凍気を相殺し、蒸発させていく。凍気が相殺されたことよって起こった水蒸気によって辺りは、白一色に染まっていく。

「な……痛っ?!」

「俺の勝ちだな、ルキア」

この勝負は、日向がルキアの握っていた斬魄刀を叩き落すことにより終了した。今まで行っていたのは、十三番隊舎にある訓練場を利用しての練習試合。しかしその苛烈さは、はたから見たら実戦と見分けがつかないほど、激しい戦いであったことも観戦していた浮竹や海燕、小椿仙太郎、虎徹清音は理解した。

「むう……また負けてしまった……」

「でも、前より全然動きよかったぜ？」

「しかし、あんなにあっさりと破られてしまうとなあ……」

ルキアは落した斬魄刀を拾い鞘へと納める。その表情は勝利を得ることが出来ず多少不満そうではあるが、清々しさも感じられる表情であった。

「……二人とも凄いな」

「そうっすね……やっぱり競う相手がいると伸びも違うんすかね？」

浮竹の感心の言葉に海燕は賛同する。それもそうだ、片や始解の能力で攻撃を仕掛け、片や七十番台の鬼道を詠唱破棄で放つという下級死神とは思えない高度な試合をしているのだ。ルキアも以前とは違い、一つ一つの動きが俊敏になり、鬼道を見るだけでも霊圧が上昇したことが窺われる。

「もしかして、もう二人とも席官ぐらい強いんじゃ……」

「そうじゃねえか？」

「あなたには聞いてないわよ、ワキクサアゴヒゲ猿！」

「何だと?!」

清音の後輩の強さを示唆する言葉に仙太郎が答えるが、すぐに喧嘩へと発展した。この二人は護廷十三隊の中でも珍しい、同隊における同じ席位に就く二人である。しかしながら二人の関係は『犬猿の仲』がピッタリであるほど喧嘩することが日常茶飯事になっている。

あの雨の日の虚——メタスタシアとの戦闘から一か月経っていた。

あの時の傷は、ほとんど完治している状態になった。都に関して

は、左足の膝から下を失ってしまったために、今は技術開発局に制作してもらった義足を装着している。魄睡を砕かれたため、以前のような靈力は失ったので現在は四番隊に異動し、看護師として働いている。

その後他方では、傷の癒えた日向にルキアは『自分を鍛えて欲しい』と言って以来、二人は毎日特訓を重ねている。その甲斐あつてルキアは始解——『袖白雪』を得ることが出来た。

そんな二人を眺める浮竹は自然と笑みがこぼれる。以前は、ふとした時にため息をついていたルキアが、今となつては同期であり友人である者と切磋琢磨して、その顔には以前のような陰気な様子は見られなくなつた。それが、親同然である浮竹にとっては喜ばしい傾向であることには間違いなかつた。

十三番隊には、緩やかな平和が訪れていた——。

「話……ですか……?」

「ああ、そんな小難しいものじゃない。すぐに終わるよ」

日向はある日、浮竹に廊下で呼び止められた。わざわざ浮竹自身が出てくることに日向は驚きを隠せない。その後、二人は浮竹の部屋で茶の入った器が二つ置いてある台を挟んで対面に座つた。

「それで、話とは?」

「実は、そろそろ頃合いだと思つてね。君を空いていた十三番隊十席に就いてもらいたいと……」

「本当ですか?!」

突然の朗報に日向は声を上げ、浮竹の言葉を遮つた。少し苦笑いした後、浮竹は言葉を続ける。

「元々、君が入隊した時に空いていた十席に就いてもらおうとも考えていたんだが、さすがにそれでは周りからの反発も多少あると思つてね……だが、以前の功績や今日までの功績を考えれば、周りからも君が十席に相応しいという声も上がってきた。日向……就いてもらえるかい?」

「勿論です！」

日向の澆刺とした返答に浮竹は笑みを浮かべる。

「分かった。明日中に十席に就けるように手配しておくよ」

「ありがとうございます!!」

護廷十三隊は一隊辺りに、約二百人ほどだがその中で上から十番目の位置に座るということは大変名誉であると言える。日向にとって、その勧誘を断る理由は微塵もなかった。むしろ、自分で『今年中に席官になる』と断言していた人物が、その誘いでを断るはずがないというのも浮竹は考えていた。そう考えていた浮竹だが、本当は空いた三席に就かせたかったという本音もあった。だがしかし、それこそ反発があるだろうという予想もあった。今までに、入隊して一年経たずに三席になった人物がいなかったわけではない。現三番隊隊長・市丸ギンがいい例だ。彼は、霊術院に入ってすぐに天才と呼ばれ、日向と同じく一年で霊術院を卒業した。そして卒業後すぐに五番隊の三席に就くことになった。だがそれも、五番隊隊長である藍染惣右介の強い推薦があったからだ。浮竹もそうしたかったという意味はあったが、話は前述の通りである。何より当時三席は空いていなかった。よって、このタイミングで日向に十席に誘いがきたのである。

「日向、どうしたのだ？そんな嬉しそうな顔をして」

日向が次に廊下で出会ったのはルキアであった。ルキアにそう言われるということは、日向の表情に相当歓喜が表れていたのだから。

「ルキア？はははっ！実はさっき浮竹隊長から十席の誘いが来て、受けただよ!!」

「ほ、本当か?!よかったな、日向!!」

それを聞いたルキアは、日向と一緒に喜んで。

「あ…そうだ、日向！仕事が終わったら、どこかにお祝いに行こうではないか！」

ルキアはそう言って目を輝かせる。そんなルキアの様子に、日向は首を縦に振る。

「ああ、いいぜ。じゃあ、仕事終わったら隊舎の門の前に集合な」

「うむーじゃあ、待っておるぞー！」

約四時間後に二人は隊舎の門前に集まる。

その後、二人は他愛もない会話をしながら瀨霊廷の様々な店が立ち並ぶ商店街に来ていた。

「なあ日向。何か欲しいモノはあるか？」

「欲しいモノ？あー……………特にな……………」

特に何かがあるわけでもなさそうな日向に、ルキアは唸る。このままではお祝いに来た意味がない。祝うためには、やはり何かしらプレゼントしなければ、とルキアは考えていた。

「うーむ……………あ」

すると、急にルキアの足が止まる。それに伴い日向もピタツと足を止める。

「どうしたんだ？」

「……………服などはどうだ？」

そう言つてルキアが指差したのは、呉服店である。

「私が、お主にピッタリの服を見つけてやろう！」

「……………ま、それでいっか。分かった。頼んだぜ、ルキア」

日向の言葉に、ルキアは意気揚々と呉服店の中に入っていく。

そしてルキアは、紳士服のある場所を重点的に物色していく。

「……………む？…これなどはどうだ？」

そう言つてルキアが取り出したのは、白いシャツである。袖は七分丈といった長さで、襟は普通のシャツのように折り畳められておらず、所謂タートルネックのように首を中間まですっぽり覆うような襟であった。さらに、正面を止めるのはボタンではなく、裏でフックを掛けるタイプのものである。そしてシャツの中央には、銀色のラインが入っている。

「これを死覇装の下に着てみればよいのではないか？」

「そうか？じゃあ、ちよつと着てくる」

そう言つて日向は試着室に向かう。

数分後。

「どうだ？」

「……………おお、中々ではないか」

先ほどのシャツを死覇装の下に着る日向の姿は、傍から見れば中々決まっているようにルキアには見えた。日向の死覇装は半そでタイプなので、七分丈のシャツの袖もすっかり死覇装の袖から出ている。

「うむ、我ながら中々の選択であったな！」

「よし、じゃあこれにするか」

「え？お、おい日向」

「ん？何だ？」

早速、今着ている服を買おうとする日向を、ルキアが止めようとする。

「本当にそれで良いのか？」

「別に、ルキアが似合ってるって言ってんだから、俺は別にいいけど……………」

「そ、そうか……………」

余りに速い買い物の終了に、ルキアは少し残念そうな顔をする。しかし内心は、日向が気に入ってくれて嬉しいというものもあるので、中々複雑な心境である。

「じゃあ買ってくる」

「待て。私が払おう」

『買ってくる』と言う日向を、ルキアが肩を掴んで制止する。

「今日はお前のお祝いなのだ。私が払わずしてどうすると言うのだ！
すると日向はむっとした顔で反論する。

「女に金払わせる訳にはいかねえだろ。選んでくれただけで十分だ」

「いやいや、ここは私が……………」

「いや、俺が……………」

暫し、沈黙が流れる。

「……………半分でどうだ」

「……………しゃあねえ。それでいい」

ルキアの提案に、日向が渋々乗る。

そして二人で割り勘をした後、日向はシャツを着たまま店の外に出

る。そして日向は、ルキアの肩にポンツと手を置く。

「…………サンキューな。大事にする」

その言葉に、ルキアは一瞬目を見開いた後、満足そうに柔らかい笑みを浮かべる。

そして、ルキアが口を開く。

「タグ付いてるぞ」

「早く言ってくれよ」

日向の席官就任の儀は、後日行われた。立ち会ったのは隊長である浮竹と、副隊長の

海燕であった。その後、日向が廊下を歩いていると周りから色々な視線を向けられていた。

「…………何これ？」

「新人が席官入りして、皆好奇心がわきわきなんだよ」

日向の少し前を歩いていた海燕が、日向の疑問の声に答える。その際に、視線を向けている者たちに『おら、仕事に戻れ！』と注意をしていた。

「あー…………、それでお前の仕事に関してだけど、今年中はそんなに席官以外の奴らと大差ねえから安心しとけ」

「へ…………分かった」

海燕の説明に対し、少し気怠そうな返事を返す。それも、相手が海燕であるからだろう。しかし、その口調とは裏腹に滾るような熱意も感じるのは、海燕の気のせいではないだろう。

「ただ、同期の奴らで何かするときにまとめ役任せるかもしれないねえから、そんな時は言うからな」

「おう」

会話は、海燕が仕事部屋へと到着したことにより一先ず終了した。海燕が障子を閉めたのを確認した後に、日向も自室へ戻っていき引き

続き業務に戻ろうとする。

「日向、十席就任おめでどう」

「……ルキア」

偶然向かい側の通路に現れたルキアに、日向は祝福の言葉を掛けられる。

「……お前、兄貴とうまくやれてるのか？」

突然の言葉に、ルキアは驚いた表情を見せる。

「うまくいつてる……と言え、嘘になるな……」

「そつか……。まあ、急に貴族になって慣れろっていうのも無理な話だもんな……」

そうだ。ルキアは、霊術院に居た際突如、四大貴族・朽木家当主でありながら現六番隊隊長の朽木白哉に養子に來いという勧誘を受けたのだ。当時、ルキアは突然のことで狼狽えたが恋次の勧めにより入ることにしたのだ。しかし、流魂街での生活に慣れていたルキアに貴族の生活など急に慣れることなどできなかつたのである。その際の、白哉がルキアを勧誘した理由が、『妻の面影に似ている』という理由だった。ルキアは白哉の妻であった緋真の遺影を見たが、確かに自分にそっくりであった。しかし、白哉が求めているのは妻の面影であり、ルキア自身ではない。そうではないかと考える度に、ルキアは朽木家に自分の居場所があるのかということに、ひどく疑問を覚えるようになりその時からだんだん陰気を纏うようになってしまったのである。

「でも、ルキアの居場所は十三番隊じゅうさんばんたいにある。いいな？」

「っ……いつも済まないな……励ましてもらってばかりで」

「気にすんな。そういう仲だろ？」

そういう仲？ルキアには、この『そういう仲』の意味がどういったものなのかはつきりとは分からなかった。しかし、十中八九好意的な意味であることには間違いなかった。日向の笑顔がそれを語っていた。

「じゃあ、仕事戻るか！」

「……そうだな。サボっていたら海燕殿に怒鳴られてしまうからな」

そう言って別れた二人は、穏やかな表情であつた。

目標

敗北を認めることは悪い事ではない
問題なのは、そこで諦めるか否かだ

「はあ…はあ…はあ…!!」

「朝霧様、少し休まれては如何ですか?」

「はあ…いえ、大丈夫です。もう一度、ご指南お願い致します!」

そう言つて朝霧は腰を九十度曲げる。その相手は、四楓院家に仕えながら現二番隊隊長の碎蜂である。

こういつた休日、朝霧は碎蜂に白打の指導をもらつている。しかし、隠密機動総司令官に勝てるはずもなく、朝霧は模擬戦でも負け続けている。大の男が、百五十程の背丈しかない少女のような女性に、いようにやられるのは、些か情けなくも見えるが、朝霧はめげずにも度も碎蜂に指導を受け続ける。

朝霧の要望に、碎蜂は再び組手の姿勢を取る。そこに朝霧は肉迫し、打撃を喰らわせようとするが、それを碎蜂は蹴り上げ、そのまま腕を掴んで背負い投げをする。疲労の溜まつている朝霧は、受け身も取れずに修練所の床に叩き付けられる。

「はあ…はあ…はあ…はあ…!!」

「もう限界です…!!…!!休ましましょう…!!」

そう言つて碎蜂は、滝のような汗を掻く朝霧を担いで修練所の椅子に座らせる。座らせた後に、碎蜂は手ぬぐいで朝霧の汗を拭う。しかしその手ぬぐいを、朝霧は掴む。

「大丈夫であります…!!…!!この程度、自分で…!!…!!」

「朝霧様…!!…!!」

朝霧は、前四楓院家当主・四楓院夜一の弟であり、元四楓院家当主の四楓院夕四郎の兄である。本来ならば弟の夕四郎でなく、兄の朝霧が四楓院家当主を受け継ぐべきであつたのだが、朝霧はそれを拒否し、四楓院家当主補佐という立場に収まつた。

その理由は――。

『私は、そのような器ではありませんね』

前当主の夜一と違い、朝霧は霊圧が低かった。それは自分の弟の夕四郎よりも。それを、使用人の噂で知った朝霧は、それをコンプレックスとして自信を失い、当主という責任ある立場から退いて行ったのである。

そして朝霧は、何かを決意したのか真央霊術院に入ることを決め、日々修練に励むようになったのである。それは尊敬すべき姉を追ってなのかどうかは、本人にしか分からない。

努力はする。だが実らない。

誰かが、朝霧をこう評した。

人一倍努力する朝霧ではあるが、中々それが実らない。それが何故なのか本人にも分からずに、朝霧は再びそれ以上に努力する。

そんな朝霧を、碎蜂は心配していた。誰よりも、朝霧が努力する姿を碎蜂は見ていた。だがその度に、朝霧の心が荒んでいるように思えて仕方がないのである。目がこちらを見据えていても、心はどこか別の方を向いているような気さえした。

「朝霧様、私はこれより業務がありますので一旦戻ります。どうぞ、お休みください」

「はあ……はあ……有難うございました、碎蜂殿……」

立ち去る碎蜂に、朝霧は起立して礼をする。碎蜂が立ち去って数分後、呼吸が整った朝霧は基礎トレーニングに入る。すでに先ほどでポロポロになった身体に鞭を打ちながらである。

腕立て伏せを数十回程したところで、朝霧は地に伏せる。

『夜一様が居なくなつて………四楓院家はどうなるんでしょうね？』

『なんだつて、弟が二人いるらしいじゃないか』

『あく、でも兄の方は駄目ですな。あれは、ちよつと………』

「………くそっ………！」

歯ぎしりをしながら、朝霧は床を殴りつける。静かな空間で、鈍い音が響きわたる。

「あの………兄様？」

突如背後から聞こえた声に、朝霧は地に伏せたまま振り返る。そこには、弟の夕四郎が立っていた。

「……………どうしたのだ？夕四郎」

「兄様が修練に励んでいると聞いて……………それで差し入れをと思つて……………」

そう言つて夕四郎は、誰も座っていない椅子の所に、何やら包を置いた。

『清乃』の塩大福です！疲れた時には甘いモノを食べるといいと聞いて……………」

「……………そうか、済まないな夕四郎。有難く頂戴する」

朝霧はやつと立ち、椅子に置かれた包を開いて大福に齧りつく。喉が渴いてる状態での大福は少々食べづらかったが、朝霧は嫌な顔をせずに弟の好意を受け取った。

「いつも済まないな、夕四郎……………」

「い、いえ!!四楓院家当主として責務を果たせるのは、全て兄様の補佐あつてのこと！このくらい当然です！」

兄の感謝の言葉に、夕四郎は嬉しそうな顔をする。

「私はもう少し修練に励んでから家に帰る。夕四郎は先に帰っている」といふ

「は、はい！頑張つて下さい！」

そう言つて夕四郎は修練所を後にする。

「……………はあ……………」

朝霧は、一人でため息を吐いた。

「よう、朝霧」

「恋次殿……………お早うございます！」

朝早くに朝霧に声を掛けたのは同級生の恋次であった。二回生に上がったが、二人は同じクラスであった。ついでに言えば、吉良と雛森も同じである。

「なあ朝霧……………オメーちよつと顔色悪いんじゃないか？」

「え……………そうでありますか？」

朝霧の肌は褐色色である。それは勿論、顔も含むわけであり、そのような肌の色でさえ顔色が悪いと言われるのは尋常ではないものがある。

「おう。何か隈もすげえし……………ちゃんと寝てんのか？」

「睡眠はしつかりとっておりますが……………」

「ああ……………ならいいんだがよ。頑張り過ぎもよくねえぞ？」

「肝に銘じておきます！」

そう言つて朝霧は腰を九十度曲げる。そんな様子に、恋次は苦笑いする。

「それより朝霧……………オメー、あれよかつたのか？」

「あれ……………とは？」

「いやよお……………ルキアみてえに卒業の話来てたんだろ？」

「……………ああ、あの緋真殿によく似ておられる女性ですか？」

死神になるには卒業試験がある。さらに、そこから護廷十三隊に入るには入隊試験というものがある。ルキアは四大貴族という立場であつたため、卒業試験を免除され、さらに入隊試験にも運よく受かつてしまった。そのためルキアは、一回生の他の誰よりも速く護廷十三隊に入ったのである。日向の場合は、飛び級の試験を受け順々に合格していったため、ルキアとは少し違う。ここで疑問になつてきたのが、同じ四大貴族の朝霧が何故ルキアのように卒業試験の免除を受けずに、入隊試験も受けなかったのかということである。

「ひさな……………ひさなつて人は知らねえが、とにかく、何で朝霧はその話蹴つたんだよ？」

恋次がそう言うと、朝霧は顔の影を濃くする。

「……………自分には、その力がないからです」

「ん？」

「ルキア殿は鬼道に秀でておられたので入隊試験に受かるのも分かりませんが、自分は他人と比べて秀でているモノがありませんので……………」

「んなこと言うけどよお、オメーは瞬歩得意じゃねえか」

「あの程度、私の周りにいる方々に比べたらまだまだです。ですので……」

「あのよお……………」

朝霧が言い切る前に、恋次が口を挿む。

「オメーが目標が高すぎんじやねえか？」

「へっ……………」

「目標が高すぎて現実味がねえと、何かこう……………やる気出辛いだろ？」

「そう……………でありますかね？」

恋次に面と向かって駄目だしを喰らうと思っていなかった朝霧は、きよとんとした表情になる。

「別に高いのが悪いとかはねえけどよ、もつと身近なところからよ……………ああ、語彙ねえな俺！」

「……………いえ、有難うございます、恋次殿」

そう言つて朝霧は拳をグツと握り締める。

「恋次殿のお蔭で目が覚めました！これを機に私は……………ああ……………」

最後まで言わずに朝霧はその場で崩れ落ちる。

「お、おい?!朝霧!!オメーやっぱり無理してんじやねえか!!」

その後、朝霧は担架で運ばれた。騒ぎになったのは言うまでもない。

「朝霧様は本当に頑張っておられます。ですが、やはり休養は必須です。真央霊術院で勉強に励むのも大切ですが、朝霧様は四楓院家当主補佐という立場も兼任しておられるのです。それなのにも関わらず、あのような無理な特訓をしましては身体を壊してしまうのは当然だったのです。あ、勿論全て朝霧様が悪いという訳でも、これが説教というわけでもございません。ただ私は、朝霧様のお体のことが本当に心配でして……………」

「……………申開きようもないです、碎蜂殿。私のことはよろしいので、仕事に戻られては……………」

碎蜂のマシガンのように発せられる言葉に、朝霧は耳を痛くしな
がら聞いていた。

「なっ……………朝霧様がこのようにお体を壊しなさっているのに、四楓
院家に仕える私が朝霧様のお具合を見ずしてどうするのです!」

「碎蜂隊長……………朝霧さんがこう仰っているのですから、ここは私に
お任せください……………」

「卯ノ花隊長……………」

困っている朝霧に助け舟を出したのは、四番隊隊長の卯ノ花烈で
あった。

「……………卯ノ花隊長がそう言うのであれば仕方ありません。では朝霧
様。しっかりとお体をお休みなさって下さい……………」

「はい……………」

部屋から去って行く碎蜂を、朝霧は虚ろな目で見つめていた。

話が少し戻るが、元々朝霧が運び込まれたのは真央霊術院付属の救
護室であったが、話を聞いた碎蜂が大急ぎで朝霧を四番隊舎に運び込
んだのである。

「過度の疲労です。今日はゆっくりお休みください……………」

「すみません、卯ノ花隊長……………」

「どうしたのですか?それほどこまでに疲労するなんて……………」

昔から朝霧のことを知っている卯ノ花であるが、これほどこまでとは
考えていなかった。何か心境の変化があるのかと思い、卯ノ花は問い
かける。

「……………いえ、他愛のないことです。私の未熟故のことですので、お気に
なさらずに……………」

しかし朝霧は、婉曲するように返答する。

「……………休むことも大切ですよ?すべては兼ね合いです……………」

それだけ言って卯ノ花は部屋から出ていく。

「……………何故私は……………」

そんな呟きが、卯ノ花の背後で聞こえた。

「はあ……………」

何時間か眠っていた朝霧は、自宅に帰っていた。時刻は夕暮れ。一日を無駄にしたような気分朝霧は苛まれていた。

「はあ……………わっ?!」

「いつてえ……………何しやがんだ、ガキい!!」

朝霧は注意力が下がった状態で歩いていたために、前からやってくる男に気づかず、そのままぶつかった。

「も、申し訳ございません!」

「ちつ……………あくくあ!これじゃ骨折れちまったかもなあ?!どうしてくれんだあ?!」

「えつ……………えつ……………?」

男は大分酒に酔っているのか、真つ赤な顔を朝霧に近付ける。そんな男に朝霧はたじろぐ。

「慰謝料くれねえか?おいっ!!」

「えつと……………でも、今で骨折までは……………」

「おいおい!!俺が嘘ついてるってのかあ?!」

悪酔いしている男に、朝霧は完全に押され気味になっている。そんな光景に、周りに居た同じく酔っている男が便乗する。

「そうだぜ、アンちゃん!!怪我させたんなら、しっかり払わねえとなあ!!」

しかし朝霧は生憎金を持ち合わせてはいない。さらに、何もせずここから逃げ出せるほどの気概もない。

「何をしている、四楓院朝霧」

「えつ……………」

突如聞こえた落ち着いた声に、場が鎮まりかえる。

「く……………朽木白哉隊長……………」

首に銀白風花紗ぎんぱくかざはなのうすぎぬを巻き、頭の上と右側に牽星箆を着けるのは、六番隊隊長の朽木白哉であった。まさかの大物の登場に、酔っていた男の顔は真つ青になる。さらに――。

「し……………四楓院……………?!」

今、白哉が朝霧に向かって言った言葉を聞き、今度は滝のような汗

を搔く。

「兄のような者が、あのような言いがかりで狼狽えるなど、見るに堪えん」

「で……ですが……」

「す、すみませんでしたあああああ!!」

野次馬たちは、一斉に二人から離れ去って行く。そして、数刻の静寂が辺りを包む。

「あ……あの、助けていただき誠にありがとうございました!」

「……ありのままを言葉にしただけだ。助けたつもりなど、毛頭ない。見るに堪えないのも、私の本心だ」

その言葉に、朝霧は唇を噛み締める。『見るに堪えない』。なぜか、いつも以上に心に突き刺さるような気分がしたためだ。

「な……ならば、私はどうすればよいのですか? 何事にも才能のない私が、四大貴族として振る舞えるようになるには……!」

「……その諦念に満ちた思考を、今すぐ取りやめろ」

「えっ……?」

何を言われているのか分からずに、朝霧の動きが止まる。

「兄がどれだけ鍛錬に時間を費やしてしようと、諦念の下で行う鍛錬などたかが知れている」

「で、ですが! 鍛錬なくしては、上を目指すなど……!」

「兄は、『四楓院夜一』になどなれん」

「……えっ……」

「……兄が奴を真似しようとも、根本が違う。自らを姉と比べ、届かぬと考えた時点で、兄の行うことは全て無駄なのだ」

「むっ……だ……」

必死になつてしてきたことを全否定され、朝霧は絶句する。

「もう一度言おう。その諦念に満ちた姿勢を今すぐ取りやめろ。それすらも出来ないのであれば、兄は四大貴族に坐するに値しない」

そう言つて白哉は、颯爽と朝霧の前から離れていく。それを朝霧は、黙って眺める。

「……い……」

吐息かと思う様なかすかな声で、呟く。

左手は、斬魄刀の柄を力強く握っている。

「…したい……………」

右手は、爪が手の平に食い込むほどに握り締めている。

「私は……………朽木白哉あのひとに勝ちたい……………!!!」

それは怒りではない。

「朝霧様！探しましたよ?!こんなところでどうなされたのですか?」

立ち尽くす朝霧に、業務が終わったのか碎蜂が瞬歩で近寄る。いつもと違う様子に、怪訝そうな顔をする。

「朝霧様……………」

「碎蜂殿……………私は決めました」

「えつ……………何をですか?」

「私は死神となり、隊長を目指します」

「つ……………!ですがそれは……………」

「わかっています。私の実力では、まだまだであると」

「そ、そういう訳では……………!」

「いえ、いいのです。まだ正式な死神にもなっていない若輩の言葉ですので……………ですが、いづれなってみせます」

そう言つて朝霧はすたすたと屋敷のある方向に帰っていく。そんな朝霧を、碎蜂は微笑みながら付いて行く。

「お供いたします。朝霧様」

「あ……………お気になさらずに、碎蜂殿！私なら……………」

目標が高すぎた訳でも、低すぎた訳でもない。

ただ、目標がなかっただけで、どこに進んでいいのか分からなかったんだ。

戦鬪狂

語るは無用

考えるな

刃に乗せろ

さすれば自ずと分かち合う

「天宮城十席、書類の確認お願いします」

「了解です。じゃあ確認しときます」

「天宮城十席、お茶淹れてきました！」

「あ、ありがとうございます」

「天宮城十席、これ四番隊からの資料です」

「分かりました」

彼——天宮城日向は、席官としての業務に追われていた。当初は、同隊の副隊長の志波海燕に、業務は一年間は新人と変わらないと言われていたがなんのその。明らかに同期の死神よりも、仕事の量が多かった。日向は、心の奥底で『あの野郎……』と多少憤りも感じていたが、根は真面目な性分なので仕事を淡々とこなし、隊の中で着々と信頼を得るようになっていた。

日向が十席になって、数年が経っていた。

「……で、この書類を十一番隊に届ければ終わりか……」

彼は、目の前にある最後の書類を眺めていた。もう夕方なのか、空を見ると水色と朱が美しい色合いを映し出していた。

「さてと……じゃあ行くか！」

そう呟きながら日向は背伸びをして立つ。この数年で色々あったと日向は思い返す。主に、現世へと長期滞在は自分にとって良い経験になったと考える。その時は、小椿仙太郎四席が同伴であったが、

近々一人での滞在もあるのかなとも考える。

「お、ここだな……………」

「誰だテメー？見ねえ顔だな」

十一番隊舎の門の前で日向に話しかけてきたのは、何人かのガラの悪そうな男。いや、実際ガラが悪いとは、十三番隊で既に聞いている事実であった。

「十三番隊第十席、天宮城日向です。書類を更木隊長に届けに来ました」

「十席い？がははっ！お前みたいなもやし男が十席たあ、十三番隊も落ちたもんだな!!」

その言葉に、日向は一瞬こめかみに青筋を立てる。

成程、こういう感じか——と。

「よろしかったら、案内してもらいたいのですが……………」

「あん？だりいよ、んなもん！勝手に探せ!!」

「そうですか。では……………」

「おいおいおい、どこに行くんだい？」

日向が、門を通り抜けようとする则一番手前にいた男が鞘を、日向の喉元に当ててきた。周りにいる四、五人もにやにやとしている。

「せつかくなんだからよ…………十席の実力とやら見せてくんねえか？」

「はははっ、やめとけよ！そんな奴にできるわきやねえよ!!」

「がははっ！それもそう…………ぐぼっ?!」

突如、鞘を突き付けていた男はその場で一回転し、地面に無様に着地した。日向が、鞘を片手で握り、思いつきり回したのだ。

「すみませんが、こつちも業務があるんであまり時間かけれねえぞ？」

この時点で、口調が大分砕けているので日向はイラツとしているのであろう。

「てめえ…………やっちまえ!!」

その後数分間。門の前で一方的な殴打音が鳴り響いた。

「ん？何の騒ぎだこりゃあ？」

「どうせ喧嘩でもしてるんでしょ、一角」

一人は輝くような頭に、目の縁に赤い隈のようなものがある男。そしてもう一人は、おかつぱ頭に、右眼に鳥の羽のようなエクステをつける男。

十一番隊第三席・斑目一角

十一番隊第五席・綾瀬川弓親

知る人ぞ知る、十一番隊の実力者だ。そのうちの一角の方が、騒ぎに気を掛けた。

「いや……知らねえ霊圧がある……誰だこいつ？」

「確かに、十一番隊の死神の霊圧ではないね……行ってみるか？」

「おうよーどうせ暇だったしな！」

好奇心のままに、二人は霊圧を感じる門の前まで歩いていく。するとそこに広がっていたのは……

「いててて!!すみませんでしたああ!!」

「はい。終了」

若い白髪の男が、同じ死神である男の腕を背中に回し、関節を極めている光景であった。周りには、すでにやられたと思われる男たちが地面に寝そべっていた。

「んだ、こりゃあ？」

「あ、すみません。俺、十三番隊第十席の天宮城日向といいます。この書類を届けに来たのですが……」

「ああ。それなら、僕が預かっておくよ」

「あ、ありがとうございます」

一方の手で関節を極めながら書類を渡されるといふ光景は、中々シユールだなど弓親は思いながら書類を受け取った。すると、一角がにやにやししながら二人の間に入って行った。

「これ全部、てめえがやったのか？」

「ええ、そうですけど……? 正当防衛ですのであしからず」

「成程な……おい、天宮城。こっち来い」

「え?案内してくれるんですか?」

「そんなもんだ」

そんな一角に、弓親はあることを察したので少し苦笑いをする。十一番隊は、他の隊からは『戦闘狂の集団』と呼ばれている。その中の上から三番目の男がすることと言ったら――。

「……………ここ、訓練場じゃないですか」

「おうよ。天宮城……………どうだ？俺と一発やり合わねえか？」

『戦い』に決まっているであろう。こんなことを言いながら日向を睨みつける一角の目は、飢えた肉食動物の類であるといっても過言ではない。

「……………いいですよ。俺も最近、デスクワークばかりで体が訛りそうだったので」

こんなことを言う日向ではあるが、毎日十三番隊の訓練場で夜遅くまで特訓しているので、知っている者から言わせてみれば嘘であると言われよう。

「へっ、案外やる気じゃねえか。じゃあルールは……………真剣で。一太刀浴びせたら終了ってことでどうだ？」

真剣という言葉に、日向の顔は一瞬驚愕したような表情になるが、すぐさま平静を取り戻す。

「で、審判は誰がやるんですか？」

「それなら僕がやるよ」

日向の問いには弓親が答える。ごく丁寧にウインクまでつけて。

「よし……………」

二人がそれぞれ訓練場の端に行き、相対す。そして、それぞれが鞘から斬魄刀を抜く。

「…始めっ！」

「ひゃっはあー！」

先に飛び出したのは一角であった。それに対し日向は、その場を動かずただ斬魄刀を構える。

「ふっ！」

振り下ろされた刃に対し、斬魄刀を横に倒し受け止める。その際

に、受けた衝撃を右に流し後ろに回り込み、斬魄刀を横に一閃する。しかしそれは一角が右手に持っていた鞘で防がれる。それを認識した日向は、一角と距離をとるために退く。

「逃がすかよっ!!」

しかし、一角が追撃を仕掛けてくる。それを一つ一つ薙ぎ、時折混ぜられてくる鞘での殴打に関しては、空いている左手か足で対処する。一方的な一角の猛攻に、日向はどんどん壁に追い込まれていく。そしてついに、日向の背が壁に接した。

「てめえ……何で全力出さねえ?」

「…始めっから全力で行ったら、負けると思ひまして……」

「…ナメてんのか?」

「いえ…警戒してるからこそ、最初は一步下がってるんすよ。勝ちに行くからこそです……こっからね!」

「っ?!」

すると日向は一瞬受け止めていた力を弱め、しゃがむ。力を弱めたことにより一角の斬魄刀はしゃがんだ日向を捉えられず壁に命中する。さらに、日向は一角の鞘を握りその場で一回転し足を腕に掛け、一角の右腕の関節を極める。ただ極めるだけでなく、腕にぶら下がる形になるので一角はバランスを崩す。

「ちっ?!はあ!!」

勿論そのままにさせるわけがなく、一角は握っていた斬魄刀を日向に向ける。それを察した日向はすぐさまネックスプリングの要領で一角の腕から離れて体勢を立て直す。

「……いいぜ、天宮城。目が一気に変わりやがった……それを待ってんだよ!!延びろ——『鬼灯丸』!!」

「ちよつと、一角?!」

「大丈夫っす!俺の斬魄刀、常時開放型なんで!!」

一角が始解することによって止めようとした弓親であったが、日向の言葉によって納得し一步下がる。

一角が持っていた斬魄刀は、槍のように形を変えた。それ以外に特筆すべきことはないと感じた日向であったが、警戒は緩めない。むしろ

ろ、始解を使用されたことにより一層警戒を強める。すでに一角の、刀と鞘で攻めるという特殊な剣筋を見極め終わった日向であったが、形状が変化し槍になったので、その観察がすべて泡に帰したのだ。

「ねーねー!!つるりんと戦ってるのだけー?!」

「?!副隊長!」

「つるりん本気出したみたいだけど、そんなにつよいのー?」

弓親の隣にいつの間にかに現れ居たのは、ピンクの髪を持った小さな幼女——十一番隊副隊長・草鹿やちるであった。その口調からわかるように、『天真爛漫』という言葉が護廷十三隊で一番似合うであろう性格である。

「天宮城日向。十三番隊の十席です、副隊長」

「へー!つるりん、自分より階級下の人に負けてるんだー!?!ひゅううーん!そんなつるつぱげやつつけちやえー!」

「だれがつるつぱげだあ?!」

『ひゅううん』って俺っすか?」

やちるの言葉に一角は怒り、日向はいきなりあだ名を付けられたことに対し戸惑う。

「はあ……さて、仕切り直しと行こうじゃねえか」

「そうっすね…じゃあ今度は俺から!!」

そう言うとう日向は一気に一角に肉迫する。それに対し一角はリーチの長い鬼灯丸で刺突を繰り出してくる。それを、斬魄刀の刃で滑らせ斜めに一閃しようとする。

しかし——。

「はっ……裂ける——『鬼灯丸』!!」

「なっ?!三節棍っ?!」

突如一角の握っていた鬼灯丸が三つに裂け、柄であった部分を振り回すことにより、日向は行動を変更せざるを得なくなり、刃で受け止める形になる。

「どうすっかな……」

現状、自分の方が不利だと日向は悟る。一撃相手に喰らわせればいという勝利条件の中で、手数が多い方が有利になるはずなのであ

り、一角の方に軍配が上がっていると言えよう。しかし、このまま食い下がる日向でもない。

「はあっ!!」

再び一角に肉迫し、剣撃を喰らわせようとする。その際に、鬼灯丸の刃に部分に気を付けながら攻撃を加える。無論、喰らうつもりのない一角とは激しいつばぜり合いが起こる。

(……こいつの刀にや、型はねえが殺り慣れてる太刀筋だな……)

これが、一角が日向の太刀筋を見て、受けて感じたこと。刀に型があるとは、芯がしつかりしていて比較的どんな状況でも一応、刀を振れるということである。しかし、型がないということは、型があるよりもどんな状況にも対応できるがその分、刀を振るう者の技量が試される。その点で言えば、この十席という死神はすでにその席に似合わない実力を有していることになる。一角は感じた。さらに、型がないにも拘わらずその太刀筋は熟練されていた。まるで、長年生死を掛けた戦場でやり合ってきたような一太刀一太刀の重さを、一角は感じていた。

「だが……勝つのはおれだあ!!」

一角は、刃の付いた方を日向に振り回す。隙を狙っての一撃。決まったと、一角は確信した。

「それを待ってたぜ!!」

「な……にいつ?!」

しかしその刃の付いた節は、中心の節と繋がっていた鎖の部分に、日向の斬魄刀の鞘を突き付けられることにより、鬼灯丸の刃は鞘に巻きつくように一回転しながら空振った。そして日向はすぐさま鞘を握っていた左手と逆の端の方を掴み、そのまま鞘を九十度振る。そのことによって、日向の方を向いていた鞘の先端が、一角の方へと回っていき、一角の顎を捉える形になった。

「がっ?!」

「はあっ!!!」

そして、鞘を握っていた左手を放し、即座に右手に持っていた斬魄刀を放した左手に持ち替えて、そのまま一角の左に抜けるように飛び

ながら脇腹を軽く一閃する。直後に、一角の脇腹から、軽く鮮血が飛び散る。

「そこまでっ!!」

「やったー! つるりん負けたー!」

弓親が決着を言い渡し、その結果にやちるは歓喜する。

「ちっ……! ……ああー! ……てめえの勝ちだ、天宮城!」

「ふう! いい試合でした、斑目三席!」

試合が終了した二人は、訓練場の中央で握手を交わす。

「その実力で十席たあ、驚いたぜ」

「いえいえ、そんなんでもねえっすよ」

「中々美しい戦い方だったよ。好感が持てるね」

こう評価するのは弓親だ。彼は、十一番隊の中でも中々ナルシストな方なので、こう評価してくれるということは、日向の実力を認めたということになるだろう。

「きやはは! つるりんの負けー! ひゅううんっよいね! 剣ちゃんどどつちがつよいかなあー?」

「剣ちゃんって……更木隊長のことですか、草鹿副隊長?」

「うん、そうだよ! あと、やちるって呼んでいいよ、ひゅううん! もつとフランクフランクー!!」

「そう? じゃあ、やちるちゃんていいかな?」

「おっけー!」

……ちなみにこの後、やちるの強引な一方通行の話により、他三人は二時間ほど訓練場で立っている羽目になった。

「おう、日向ちようどよかった」

「? どうした、海燕?」

「お前、五席になるらしいわ」

「へえ……え?」

何だよ、この突然のカミングアウト的な物は。

俺は、一角さんと試合した後やちるちゃんに二時間くらい話を聞か

されていたけども、その後部屋に戻って後片付けしようと思いなながら廊下を歩いていたら、海燕に呼び止められ言われた。

「何でこの時期？」

「いやさあ、五席だった後醍醐さんがさあ、そろそろ実家の醤油屋継ぐからやめるって言ってよ。それで、他の奴らと協議した結果お前になったんだよ」

「本人なしで？」

「いなかったからよ」

：いなかったからと言われたら何とも言えない。別に怒ることもないしな。

「分かった。いつ、昇格の儀やるんだ？」

「今から」

「マジかっ?！」

帰ってきて早々にやるもんなのか?!

「俺が昇格するの、いつから決まってたんだ？」

「先週くらいだな」

「言えよ!!」

尚更だろうが?!先週からって、いつでも伝える機会あっただろうが!!…というツッコミは、心の中にとどめておいた。

「どうせ昇格の儀なんてすぐ終わるし前日でいいかなって思ってたよ」

「おい、副隊長。おい」

副隊長それでいいのか?いや、海燕だから別にいいだろう。最悪、俺関係ないし。：いや、あるのか?わからん。

「で…まあ、今後お前は今まで以上の責任者になんだ。しっかり自覚持てよ?」

「たりめーだろ…これ、終わった後に言うもんじゃねえのか?」

「気にすんな。よし、じゃあ早速やつから浮竹隊長のそこ行くぞ」

まったく…と思いつつも俺は海燕の背中に付いていく。

天宮城日向、十三番隊第五席に就任。

旋風

しなやかに生きようと 私是不器用になる

それを見て貴女は

一生懸命だと言ってくれる

嗚呼

手が届かないのではなく

私が無様に一步下がっていたのだ

貴女の背の香りに溺れぬように

私は歩幅を広くしよう

「何？一回生の魂葬の実習の引率？」

「ああ、そうだ」

彼ら——日向と海燕は、部屋で大福や煎餅などを食べながら今回の仕事についての話をしていた。

「ほら、お前が一回生の時の巨大虚ヒュージホロウの大群に襲われたことあったろ？あん時から、六回生だけじゃなくて、どっかの隊の死神と一緒に行く感じになってんだよ」

「成程な……」

日向が一回生の時の襲撃。あのときは命からがら生き延びたが、その際に負った背中ヒョウの傷はまだ痕が残っている。

「で、俺一人か？」

「おう。下級死神なら二人だったが、席官一人いりや充分だろ。お前ならなおさらな」

「…そうか」

日向は煎餅を齧りながら応える。ちなみに、味は出汁醤油である。
「ん？どうしたんだ？お前にしちやあ、元気なさそうだな」

「いや、あん時の六回生の檜佐木さんって人いたんだけど、今何してるかなって……」

六回生の中で、すでに死神の内定をもらっていた秀才・檜佐木修平。彼はあの襲撃の際に、顔の右半分には三本のひっかけ傷が出来てしまっただ。

「ああ〜……いたな。たしか檜佐木って奴なら、今九番隊で十八席やってるって聞いた気がするな………」

海燕がなんとも自信のなさそうに答えることに対して、日向はため息をつく。どうせ、噂話を聞いたぐらいで、信憑性に欠けるものだからかという考えが日向の頭を過ったが、あながち間違いではないだろう。

「そっか…席官やってんのか」

「お前が言うことか」

「それもそうだな」

軽いツツコミをもらった後、日向は席を立つ。

「よし…じゃあ、さっそく明日の準備するわ」

「おう、そうか。しつかりやれよ」

「ガキじゃあるめえし。海燕、歯あ磨けよ」

「おい。それだと、俺が歯を磨いてねえみたいな感じになってんじやねえか！」

「じゃあ、寝る前に物食うなよ」

こんな上官に対し、色々と言るのは日向だけだろう…：海燕限定で。他愛もない弄り合いだが、これは彼らが出会ってから何も変わらないコミュニケーションの取り方。今更変えることなど出来ないだろう。

「うし。じゃあ皆、自己紹介するわ。十三番隊第五席・天宮城日向だ、以上」

日向が自己紹介すると、今回魂葬の実習をする一回生がざわつき始めた。

「皆、静かに！じゃあ次は、六回生の私たちの自己紹介を致します！私は、四楓院朝霧と申します！そして、向かって右に居るのが山田花

太郎殿！そして、左側が暮見廉殿です！今日一日、誠によろしくお願い致します！」

朝霧が説明を終えると、またざわつき始める。

「あ、み、みんな〜！静かに〜！」

花太郎と言われた気弱そうな男子生徒が場を鎮めようとするが、甲斐なく終わる。とりあえず、自分の話は置いて朝霧がいることについて騒ぐのは致し方ないような気がしてくる。いくら霊術院生とはいえ、四大貴族なのだ。知らない方が少ないと言えよう。

「…花太郎。頑張れよ」

「す、すみません……………」

「はいはい、静かにしろ——！」

日向が注意をすると、途端に場はしーんとなる。

「これから現世に行くが、遊びじゃねえぞ。いくら、六回生と俺がいても万が一がある。その万が一で犠牲になる奴の中に入りたくねえやつは、しっかりと授業受ける態度で挑めよ〜！」

「……………では、さっそくさっ引き引いたくじで班を作つて下さい！」

日向の心意気についての説明が終わると、それに繋げるように朝霧が続ける。

それと同時に、自分ほどの班なのかという声があちらこちらから聞こえ始めながら、ワラワラと人が入り混じっていく。

「……………もう、五席なのですな。日向殿」

「ん、まあな」

二人だけにしか聞こえない声量で話し合う。

「安心しろ、朝霧」

「えっ…………？」

「今回は、誰も死なせねえからよ」

どこか遠い所を見つめながら呟く日向を見て、朝霧は少しホツとしたような気分になった。

——自分の知らない間に、知り合いがどんどんたくましくなっていく。

嬉しいような、寂しいような、そんな感情を朝霧は抱いた。

「ふっ……私も修練に励んでいますので、心配無用です」

「そうか……おーし、お前ら班出来たかあ？じゃあ早速、地獄蝶連れて行くぞー?!」

そう言って日向は穿界門を開く。

「さて、今回はどのような結果がでるのかな？」

「……どんな感じだ、朝霧？」

「ええと、ほとんど全員二人ぐらい魂葬したので、構わないと思います？」

「そうか……じゃあ、そろそろ集合かけてくれ」「了解です」

——よかった。このまま無事終了するのか。

集まってきた一回生たちがザワザワとし始める。突如、後方から大きな霊圧を三つほど感じる。

「っ……………?!」

「な……………?!」

「これって……………?!」

そこに居たのは、一様に全身が黒い布のようなものに覆われ、鼻のとがった仮面をつけている巨軀があった。

「こちら、現世にて——メノスグランデ大虚の発生を確認!!」

日向は、すぐさま伝令神機を取り出し現状を伝える。

——ありえない。このようなタイミングで、大虚が三体も現れるなんて。

「朝霧！皆連れて逃げろ！」

「っ……………はい!!皆っ!!私に付いてきてください!!」

——まるで、だれかがこのタイミングを見計らっていたような。

そんなことを考えていると、一番手前に居た一体が、口に赤い閃光を構築していくのが見えた。その照準は、逃げている一回生を捉えて

いた。

「きゃあ!？」

最後尾を走っていた女子生徒が、何かにつまずき転倒する。直後に、大虚の口から閃光——虚閃が放たれる。

『縛道の三十九・『円閨扇』』

だが、虚閃は日向が繰り出した盾によって受け止められる。衝突した際に凄まじい量の爆炎が巻き起こるが、虚閃が次第に弱まっていき二人の様子がはっきり捉えられるようになってきた。

「大丈夫か？ほら、早く六回生に付いてけ」

「は……はいっ!」

「君……こつちです、急いで!」

倒れていた女子生徒に、朝霧が駆けより連れて行くのを横目で確認し、すぐに大虚に向きなおす。

『破道の七十三・『双蓮蒼火墜』』

手前にいた一体に向かつて、巨大な青い火球を放つ。それは、その一体の仮面の左半分を大きく抉るように爆発した。痛みは感じるのか、抉れた直後から低いうめき声のような声を薄く開いた口から発する。

「……誰の差し金か知らねえけどな、俺がここの責任者である以上、院生たちには指一本触れさせねえぞ」

——不思議と落ち着いている。

この危機的状況とも言える場面で、日向は自分の冷静さを自覚していた。あの時とは、違うと。あの時とは、持っている力が違うと。それが日向の、慢心ではない絶対的自信になり得ているのだ。

直後に、瞬歩で顔の抉れた一体に向かう。顔のすぐ目の前まで接近したところで『白皇』を引き抜き、赤白く発光する霊圧を纏わせ、仮面を深く一閃する。

——『閃刃』。日向が編み出した技の一つである。虚閃と同じ要領で霊圧を発し、それを単に刃に纏わせるという至極単純な技である。しかし、虚閃はいわば巨大な霊圧を広範囲に放つのであって、これは威力はそのまま刃に沿うように凝縮されているので、同じ霊圧消

費でも密度が違う。つまり、切断力が桁違いに跳ね上がるのだ。

その強力な一撃に虚の仮面は真つ二つに裂け、その衝撃は頭部の裏まで突き抜けていった。直後に虚は、目から光を失い、その場に崩れ去る。

すぐさま、崩れ去った大虚の後方にいた一体が日向に虚閃を放つてくる。上空に立つ日向を狙った一撃は、難なく回避されることにより虚閃を貫いていった。虚閃を放った一体に便乗するように、もう一体も虚閃を放ち始める。放つてから日向に届くまで、若干タイムラグがあるのです、それを見極めた日向は次々に打ち上げられてくる虚閃を躲していく。

『縛道の七十九・『九曜縛』』

このままでは埒が明かないと感じた日向は、『九曜縛』を繰り出した。左手から放たれたその八つの霊圧の玉は右側にいた大虚の身体に命中し、直後に動きを拘束していく。

「こっちだ!!」

すぐさま日向は、拘束した大虚の頭上を経由して、大虚の後頭部に移動する。すると、もう一体の大虚は移動していた日向を狙って、『今、日向がいるであろう場所』に虚閃を放つ。それを確認し、すぐさまその場から離れる。

すると、射線上にいた大虚の仮面に虚閃が命中する。数秒、大虚の頭部は原型を留めていたが、すぐに鉄が溶けたようにぐにやりと形を変えた後、爆音と共に大虚の頭部は消え去った。

あと一体。

残った一体は、尚もまた日向を仕留めようと虚閃を放ってくる。日向はそれに向け、両手を重ね、翳（かざ）す。

『破道の八十八・『飛竜撃賊震天雷炮』!!』

直後、日向の手の平からは大虚の虚閃の二、三倍あるような光線が、雷鳴のような、爆音のような凄まじい音と衝撃を放ちながら、射線上に在る物全てを蹂躪するかの如く進んでいく。無論、それは大虚の放った虚閃も例外ではない。虚閃はその暴虐な光に飲み込まれ、無力化されていく。光が、大虚に命中するまでに時間はそう掛からなかつ

た。先ほどの虚閃とは違い、原型が歪む前にその存在を塵に変えていく。光が終息するころには、大虚の上半身は見る影もなくなっていた。

「…………ふう。よし、一回生の様子見に行くか」

「……………すごい爆音でしたね……………」

「うむ……………ですが、日向殿であるなら……………」

花太郎の不安そうな言葉に、朝霧も同意する。いくら、日向の強さをわかっているとはいえ、相手が虚である。本来なら隊長格が出撃するレベルの相手に、日向は皆を逃がすために立ち向かっていった。心配するなど言う方が無理な話である。

しかし、その不安を徐に表に出すわけにはいかない。そうしたなら、今自分たちが預かっている一回生が自分達以上に不安になるだろう。

「せ……………先輩……………」

「ん？どうし……………」

「うわあ?!」

突如、自分の右にいた花太郎が悲鳴を上げたので咄嗟に振り返る。

「ほ……………虚?!」

そこに居たのは、鳥のような凶体に嘴のような仮面をつけた虚がいた。花太郎の方を見ると、右肩を押さえていた。

「大丈夫でありますか?!」

「す……………少し肩を……………」

「ぐ……………己……………よくも花太郎を!」

動いたのは暮見であった。腰に掲げていた『浅打』を取り出し、虚に突貫する。しかし、虚がその場から飛ぶことによつて、その一撃は空を切る結果になった。

「なっ……………?飛んだ?!」

直後、虚は羽ばたいていた翼を暮見に向け、勢いよく翼を薙いだ。すると、薙いだ翼から鎌鼬のようなものが発生し、暮見の腕に鮮血が

舞った。

「ぐあ!!」

「暮見殿?! く……縛道の三十・『嘴突三閃』!!」

朝霧は自分の目の前に、黄色い霊圧で逆三角形を描き、それぞれの角から嘴のようなものが出現し、虚に向かつて飛んで行った。その三つの内の一つが、虚の左翼に命中し、バランスを崩した虚は地面に向かつて落ちて行った。

「はあ……はあ……はあ……くっ?!」

少しの間、地面でもがく虚を眺めていた朝霧であったが、虚が自分に殺意の籠った視線を向けてきたことにより、息を飲んだ。

「皆……逃げて下さい……!」

「えっ?」

「私が囷になります……安心して下さい! 瞬歩もできますし、逃げるだけです!!」

「わ、わかりました! 本当に気をつけてください!!」

そんなことを言う花太郎は、すぐさま一回生に指示をし、この場から離れていく。皆が離れていく間、朝霧は一瞬たりとも虚から目を離さなかった。とうとう拘束が解けた虚は、待っていたと言わんばかりに、朝霧に向かつて飛翔してくる。朝霧は、すぐさま瞬歩を使用し、皆が逃げた方向と逆に向かつて走っていく。その間にも、虚は先ほどの鎌鼬を繰り出してくる。時折、朝霧のすぐ横の建物の壁を抉る。おそらく、胴体に命中すれば自分の命はない——朝霧は、そう分析した。

細心の注意を払いながら回避していたが、とうとう朝霧の右足に命中し、朝霧はその場に倒れこんだ。

「ちっ……上手くないものだな……!」

そう言いながら朝霧は倒れこむ瞬間に、右手を地面に着けて倒れこむ勢いのまま空中で一回転して着地する。しかし着地した瞬間に、右足に激痛が奔り表情が歪む。しかしこういったアクロバティックな動作も、日々の鍛練の証だと言えよう。しかし、今この状況をどうにかできるかと言ったらそうではない。

朝霧が着地をしている間にも、虚は朝霧に突進してくる。

「くっ……縛道の八・『斥』！」

そんな虚に対し、朝霧は手の甲に発生させた霊圧の盾で、虚の突進を受け流すように躲す。

「君臨者よ！血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ！焦熱と争乱！海隔て逆巻き、南へと歩を進めよ——破道の三十一・

『赤火砲』!!」

飛んでいる虚に対し、朝霧は火の玉を放つ。それは虚の翼に命中し、虚は再び墜落する。

「はあ……はあ……はあ……！」

肩で息をしながら、朝霧は墜落した虚を観察する。すると、たった今赤火砲で焼いた翼が、再生しているのが目に映った。

「超速再生……！」

どうする？

自分にはもう霊力はほとんど残っていない。

だが足を負傷して瞬歩で逃げ切るのは難しい。

そんな考えが朝霧の脳内をめぐる。

——何をしている？

「っ……誰だ?!」

聞き慣れない声に、朝霧は辺りを見渡す。しかし誰も居ない。

——我が主が、そのような情けない顔をするのは許さんぞ。

「姿を現せ！」

——何を言っている。我らは既に、貴様の腰に居るではないか。

「腰……？」

そう言つて朝霧は自分の腰を見る。そこにあるのは——。

「斬魄刀……？」

——抜け。主よ。

言われるがままに朝霧は斬魄刀を抜く。そして斬魄刀を構える。

「ギャアアアア!!」

朝霧の雰囲気を感じた虚が、再生した翼で飛び上がり、高い位置から朝霧に滑空する。

「薙げ

———
『かけかせ陰風』」

「ギ?ギアアアアアア!!」

突如、虚の右翼が胴体から切り離される。

そして朝霧の右手には、浅打ではない斬魄刀が握られていた。浅打よりも短い短刀———所謂、忍者刀と言える刀であった。朝霧の身体には、何やらつむじ風のような物が纏わりついていた。

「これが……『陰風』か……」

———
ふん。あの朽木の小僧と話したその日から、体術ではなく刃禅に力を入れるようになったのは貴様ではないか。

「……………ああ」

(鬼道系……………風を操るといったところか?)

今自分ももっている斬魄刀を、朝霧は冷静に観察した。

「いや……………」

そう言つて、朝霧はこちらを睨む虚に、その場で刃を振り下ろす。距離的には届くはずもない。

「ギアアアア!!」

しかし虚の残った左翼も、血を噴き出しながら胴体から分離する。

「風の刃を放つといたところだな」

今の一撃で確信した。

自分の斬魄刀は、刃から鎌鼬のような風の刃を放つことの出来る斬魄刀である、と。

「ギアアアアア!!」

「……………頼んだぞ、陰風」

咆哮を上げる虚に、朝霧は陰風を振り下ろす。すると、辺りに旋風が巻き起こる。

刹那、虚の仮面に亀裂が入る。

「ギ…………ぎ…………」

虚は頭部を切断され、身体を霊子に分解させていく。その様子を、朝霧は黙って見る。

陰風は忍者刀の長さから、普通の日本刀の長さに変わる。

「朝霧！」

黙って佇んでいる朝霧に、たった今到着した日向が駆け寄る。

「日向……………殿……………」

朝霧は少し目を見開いて日向を見た後に、その場でどさつと崩れ落ちる。

「おい!?!朝霧どうした?!朝ぎ—————!」

私も、これで少しは……………。

欠片

欠片とは

全てあつての『欠片』

嵌めるための物

「はああああああ!!」

日向は目の前にいるとある虚に対し、『白皇』と『虚帝』を両方振り下ろす。しかしそれは、虚の有している太刀によって防がれる。さらにその太刀を振り払う風圧や霊圧諸々によつて日向の身体は吹き飛ばされる。

「くっ……破道の七十三・『双蓮蒼火墜』!!」

『ふんっ……!』』

日向の手から放たれた蒼火の爆炎は、虚の張った霊圧の盾により跳ね返される。それを単純作業のように回避する日向は、次の一撃を与えるべく瞬歩で一気に肉迫する。

『遅い』

しかしそれも、虚の放った虚閃によつて断念する。虚の放った虚閃は、白く、太く、スパークを放っていた。

肉迫を断念した日向は虚化し、急上昇した身体能力でもう一度肉迫を試みる。今度は、正面からではなく背後から瞬歩で接近する。それは功を奏し、刃の届く範囲に入った。

『双閃爪刃!!』

日向は両手に握る斬魄刀を輝かせ、斬撃を放つ。

『むっ……』

その斬撃は虚の背中に直撃する。

『……ちっ……!』

虚は無傷であった。自分の全身全霊を賭けた一撃も、この相手にとつては取るに当たらない物であったことに対し、嫌な汗が流れるの

を止められない。

『出直せ……』

そう言う虚は、太刀に凄まじい閃光を纏わせる。さきほどの自分の技など霞んで見えるほどに。直後に、日向はその一撃を喰らった。

「だあああああ!! 駄目だったか!!」

日向が居るのは流魂街にあるとある山の頂上。日向はここに以前も来たことがある。初めてルキアに会った時。——そう、ここは戊吊である。彼がここでしていたのは……。

「まだ卍解は俺には出来ないってのかよ……」

そう卍解を習得するための特訓。彼は今の今まで、『具象化』した彼の斬魄刀と戦っていた。『屈服』させるために。戦って分かったことは、それは卍解の会得の難しさ。そして、自分に宿る虚の強さ。彼の斬魄刀自身が虚であり、その斬魄刀は倒した虚の力をその刃に溜めることが出来るという、斬魄刀の中でも珍しい物である。つまり、自分が戦っていたのは、今まで自分が倒してきた虚が総結集したものとと言っても過言ではない存在。今までの任務の中で虚を倒し自分は強くなっていると実感する日向ではあるが、それに比例して自分の斬魄刀も強くなっていると感じている。ここ数年間、卍解の会得に挑戦している日向は身に染みて感じていた。その霊力は、普段は抑えているが副隊長を優に超すほどのものとなっていることも実感していた。特に、少し前の大虚三体を倒した際などは、霊力の上昇が顕著であった。

しかし、心配することはこれだけではない。このままでは自分の中の虚に、己を喰われてしまうという事を危惧していた。急激に上昇していく力に、自分は耐えられるのかという不安。そこには、力の増幅による高揚などは存在しない。

「まだ、俺は何か気づいてないのか……?」

自分の斬魄刀と相対している際によく言われる言葉。

——お前はまだ気づいていない。お前の力の根底を。

こう言われるが、日向には皆目見当もつかない。自分の力の根底？それが何なのか分からず、日向の正解の修行は一年ほど停滞している。

「……悩んでもしかたねえか……」

とりあえず日向は帰ることにした。休日を丸一日費やして行った特訓だったが収穫はなし。多少、憂鬱な気分になるのは否めない。そして日向は帰路に着いた。

「お兄ちゃんお帰り——!!」

「兄さんお帰り。久しぶりだね」

「おう、よく帰ったな」

家を出迎えてくれたのは順に、焰、雫、空鶴である。そう、ここは志波邸である。

「ただいま。お土産持ってきたぞ——」

「やった——」

真つ先に日向の土産に飛びついてきたのは焰であった。今では身長も伸び、140くらいあるが天真爛漫さは変わらない。身長伸びたな、と日向が思っている内に焰は土産の風呂敷の一つを紐解いていく。

「わあ……！可愛い!!お兄ちゃんありがとう!!」

日向が焰に持ってきた土産の中身は着物。ピンク色の下地に、桜の形の白い刺繍が入っているものだ。

「そうか、気に入ってくれてよかったよ!じゃあ、これは雫のな!」

そう言っつて、次は雫用の土産の風呂敷を渡す。雫は一言お礼を言っつた後、せっせと風呂敷を紐解く。大分落ち着いた印象をうける雫だが、こういつた贈り物に目を輝かせるのはやはりまだ少年であるということなのだろう。

「……！医学書の本!覚えててくれたんだ!」

「おう、勿論だろ!」

雫に渡したのは医学書の本。以前、雫が医者になりたいと言ったこ

とから、次、志波邸に来るときに買つてくると約束していたのだ。

「日向……まさか、俺に何もならないなんてことはねえだろうな……」

「当たり前だろ姉さん。ほら、ちよつと高めの酒。辛口の奴」

「お——！お前、俺の酒の好み分かつてたのか！」

「はははっ！あんなに、辛口の酒の酒瓶の山を見たら嫌でも覚えるよ」

空鶴に渡したのは酒。『鬼ヶ島』とラベルが貼っている。

「おう！日向か?!帰つてたのか!!」

そう言いながら襖の奥から出てきたのは岩鷲であつた。

「何だ、岩鷲か」

「扱い酷くねえか?!」

「ほれ。お前にはこれだ」

「お?なんだなんだ?!気が利く……」

岩鷲は渡された風呂敷を開ける。そこに入っていたのは、軍手。

「何だこれ?!俺だけ軍手って?!」

「おいおい。ただの軍手じゃねえぞ?最高級の軍手だ」

「本当だ……普通の軍手とは全然着け心地が……って、馬鹿野郎!!」

岩鷲のノリツツコミをスルーし、日向は金彦と銀彦のお土産も零に

手渡しておく。そして、少し皆と談笑した後、日向は帰り支度をする。

「えー?!もう帰っちゃうの?」

「ああ。明日の朝に任務が入ってるからな」

「そうか……気を付けろよ」

「分かつてるよ。じゃあ、行ってくるー!」

「いつてらつしやーい!」

焰の声に見送られながら、日向は志波邸を後にした。

「成程……十番隊と十三番隊の合同野営か」

「ええ、浮竹隊長。最近こういうことがなかったんで、たまにはいいんじゃないかねえかなくって」

こう浮竹に話すのは、十番隊副隊長・志波一心である。現在十番隊には隊長が居ないので、実質彼が十番隊の権限を有していることにな

る。しかし、最近彼は隊長推薦を受け数日後には隊長になるのだ。他にこの場に居るのは、十三番隊副隊長・志波海燕。同隊第四席・小椿仙太郎。同じく四席・虎徹清音。さらに同隊第五席・天宮城日向もいる。十番隊の面子としては、一心の付添として第三席の松本乱菊が居る。

「こつちの面子は、俺と松本。他にも十人くらい出しますので、そつちも同じ人数くらいお願いしたいんですが……」

「しかし、副隊長の君と三席の彼女を同時に出すととなると……」

「ああ……、隊長。それなら、俺が十番隊に行つて手伝つてきますよ」

「本当か、海燕？となると、誰をこつちの責任者として出すか……」

「仙太郎と清音は俺が居なくなつた分色々あると思うんで、日向でいいんじゃないですか？」

「それもそうだな……日向。頼めるかい？」

「勿論です」

「よし……なら決まりだな！今日中に、こちらの面子を君の隊に連絡するよ！」

「分かりました！では、失礼します！」

そう一心が言うと、乱菊と共に部屋から出て行こうとする。その際に、日向は自分が一心に手招きされていることに気づく。それを、浮竹に対し目くばせで伝えると、浮竹は首を縦に振つたので、日向は部屋を出ていく。

「……どうしたんですか、一心さん？」

苗字が示しているように、一心は一応海燕などと血縁関係はある。しかし、分家と宗家という違いであり関わることはなかったが、一心が副隊長に就任した数年ほど前から、日向は海燕経由で関わりを持つこととなつた。そのため、他の副隊長などよりかはフランクに接することはできる。

「実は、話があつてな……」

「まあ、でしようね」

あんな手招きをしたのだから用がないわけがないだろう。そうい

う口調で、日向は一心に返答する。

「俺が隊長に上がった際、勿論副隊長の席は空いちまうわけだ……。順番で考えるなら松本が就くのが順当なんだろうが、俺はお前に就いてもらいてえと考えてる……。どうだ、この話受けてくれねえか？」
突如発せられた副隊長の勧誘に日向は驚く。

「……またなんで俺なんですか？五席の俺より、三席の乱菊さんの方がいいじゃないっすか？」

「ん〜まあな。でも、松本もまだ未熟だ。三席に昇格したのだから近だ。それにお前……。霊力抑えてるんだろ？」

「っ……。?!……。何でそれを？」

「お前見てると、時々霊力が漏れてんのが見えるんだよ。それも、めちゃくちゃ密度の濃いやつがな……。ありゃあ、他の隊の副隊長と比べてみてもかなりデカイぜ？」

しまった、と日向は思った。確かに抑えている霊力が自分から漏れ出すこともあったが、それも微々たるものだった。しかし、この人物はたったそれだけの霊力を見ただけで、自分の霊力の全貌を見抜いている。迂闊だったと感じた。

「卍解さえてできりゃあ隊長にも劣らねえ……。そんな強い奴が、今の不安定な十番隊に必要なんだよ。頼む！」

顔の前で両手を合わせる一心。その様子に、自分が評価されていることに喜ぶべきか、過大評価だと謙遜するべきか、日向は戸惑っていた。

「……。時間を下さい」

「よし、分かった！頼んだぞ!!」

そう言うと、一心はさっさと十三番隊舎から出て行ってしまった。あの様子だと、俺が断らないんじゃないかと考えているんじゃないか？と、考えている日向であった。

「副隊長か……。いいんじゃないやねえか？」

「うおおお!!」

突如耳元に聞こえてきた海燕の声に飛び退く日向。とっさの事だったので、右手はしっかり斬魄刀の柄を握っている。

「おいおいおい?!!!ビビり過ぎだろ!」

「いきなり後ろから話しかけてくるオメーが悪いんじゃないか?!!!何だ、今のいつから聞いてた?!」

『実は、話があつてな……』らへんからだ」

「ほぼ全部じゃねえか!!」

海燕の盗み聞きに対し、全力でツツコンでいく日向。あまりに激しいツツコミをしていたので、日向は肩で息をし、顔を紅潮させていた。

「……で、なんなんだよ……」

「いや、まあな。実はお前をそろそろ三席に上げようという皆の意見が出揃ったことを報告をしに……」

「だから何で、毎回俺の居ないところで話が進んでるんだよ」

先ほどとは違い、冷静なツツコミで対応していく日向。心なしか、こめかみに青筋が二本ほど浮き出ているのを、海燕は気のせいにすることにした。

「いやあ……サプライズ?」

『サプライズ?』じゃねえよ。この下まつ毛が」

海燕がふざける度に日向の口調が辛辣になっていくので、とりあえず海燕は真面目な顔をすることにした。

「……で、なんでこのタイミングで言うんだよ。副隊長に誘われたつていうのに……」

「だからこそだよ」

その海燕の真剣な声色に、日向も真剣な表情になる。『だからこそ』という言葉の意味を探るように。

「どういう意味だ……」

「今まで、なんで十三番隊の三席が空いていたか分かるか? 仙太郎や清音がいたのに関わらず、その席が何年も空いていた理由がよ」

その言葉に、日向は口を噤む。今、何か言葉を発してはいけない。何か自分がそうさせているのだと実感した。

「……都が、お前に残してくれたんだよ」

「つ……?! 都姉さんが……?」

今は四番隊にいる、自分の姉と言っても過言ではない存在。その彼

女が、自分のために何年もその席を空けるように仕向けてくれたという事実には驚く。

「ああ。自分の席にふさわしいのは日向だってな。浮竹隊長や、他の席官皆を説得して空けてもらってたんだ」

「……………」

「まあ、お前が副隊長になるつつつてもあいつは喜んでくれるだろう。もしかすると、お前の実力が他隊にも響いてるつつつて、もっと喜んでくれるかもしれないねえ……………」

「……………そうか」

「こんなこと言っちゃったらお前は決め辛くなるかもしれないねえ……………でもな、ここで都の意思も伝えておかねえと、本当に都の意思を踏みにじっちゃうって思ってたな。だから、今言った……………。勿論、一番尊重するのはお前の意思だ。だから……………」

「んなもん決まってるだろうが」

海燕が言い終える前に日向が言葉を発したため、海燕は少し間の抜けた表情をする。

「……………三席の儀はいつやるんだ？」

日向の決意の言葉に、海燕は笑みを浮かべる。

「……………野宮が終わったらにしといてやるよ」

「そうか。じゃあ、俺もう寝るわ」

儀式の日を聞き、日向は颯爽と廊下を去って行ってしまった。そんな日向を海燕は、どこか遠い目で見る。

あんなガキだった奴が、もう自分の次の席に就くくらい成長してやがるんだと。嬉しいような、焦りのような、そんな複雑な感情が海燕の中に湧き上がっていた。

「都に伝えてやるか……………」

きっと都は喜んでくれるだろう。なぜなら、親愛する弟が自分の後を継いでくれるのだから。

「うくん……………」

さつき寝るとか言ったけども、俺はまだ寝ないでそこから辺をぶらぶらしている。何を考えているのかというところ、『卍解』のことである。

『根底』か……………」

よく『白皇』と『虚帝』が合体した虚みたいな奴に言われることだが、未だにその意味を理解できない。

「おっと、日向君じゃないかあ!」

「え、京楽隊長?!何で此処に?伊勢副隊長も……………」

俺の前に突如現れたのは、八番隊の隊長・京楽春水隊長と副隊長・伊勢七緒副隊長あつた。

「いや、浮竹の見舞いにと違ってね……………」

「私は、今日の分の書類を京楽隊長に見てもらうまで帰らせないために、見張りとして付いて来ています」

「……………はははっ……………」

苦笑いしか出ない。……………そうだ。

「……………京楽隊長。水が桶に入れられるのは何でだと思います?」

「ん?なんだい、それは?謎かけかい?」

「いえ、今悩んでることを例えてみたんですが、京楽隊長なら何かヒントになるようなことを言ってくれるんじゃないかと思ひまして……………」

「成程ね……………」

すると京楽隊長は、手を顎に沿えうーんと唸り始めた。

「やっぱり隙間がないからじゃないかな?」

「隙間ですか……………。確かに……………」

「隊長。それだけだと水は溜まりませんか?桶の底の面積、周りの囲いの高さがある程度ないと……………」

「ああ、言われてみれば……………」

あともうちよつと出てきそうな気がする……………!

「溜める以上、ちゃんと底を確認しないと……………もし穴など開いていたら……………。他の物でもそうですよ」

「……………あああああああああ?!!」

「うおお?!」

「えっ?!えっ?!」

「あ、すいません……。でも、分かった気がします！有難うござい
ます、参考になりました!!ではっ！」

驚く二人を尻目に、俺は急いで部屋に戻る。今すぐにも刃禪をした
い。

そうだ、俺は溜まっている物だけ見えて、何で溜まるかまでは分
かかっていなかったんだ！

もしかしたら……。

足りなかったパズルの一つが、はまった気がした。

接触

虚を埋めよ

さすれば染まる

「破道の三十一・『赤火砲』」

日向は、目の前にある薪に赤火砲で火をつける。小さい火球が薪に当たると、たちまちに火がメラメラと燃え始める。

「ルキア、火いついたぞ」

「うむ、分かった」

そう言うルキアは、薪の上に飯盒を吊るす。そう、これから夕食用のご飯を炊くところなのである。

彼ら、十番隊と十三番隊の合計二十人ほどの死神は、東流魂街六十二地区・花枯に来ていた。野営とはいうが、現在この様子はキャンプなどに近いものだろうと言える。普段会わない隊士同士が和気藹々と協力し、夕飯の支度をする光景はいいものであろうと一心は感じた。

「おう、日向！飯できたら、こっちで食わねえか？」

「分かりました。じゃあ、味噌汁頼みますよ？」

「まっかせて！私にかかれば味噌汁なんてちよちよいのちよちよい！」

そう言つて張り切っているのは乱菊である。金髪の女性がお玉を持つのはどこか不思議な気もしたが、日向は特に気にしないことにした。なぜなら、白髪である彼は見方を変えればヤンキーにも見えるので、そういう感じなのだろうと思つたからだ。

乱菊は張り切りながら、まずまな板にニンジンに乗せるが……。

「唸れ……」

「待て待て待て待てちよつと待てええー！」

ニンジンに向かつて解号を唱えようとした乱菊を、日向は全力で阻止する。ちなみに乱菊の右手はしっかりと斬魄刀の柄を握っている。

「何よおろ!?今から私が華麗にニンジンを斬ろうと思ったの〜!」
「ニンジン切るのに始解する人がどこに居るって言うんですかつ?!!!」
「え〜?探せば居るんじゃないの?」

「ただ料理に特化した斬魄刀ですか?!魂から料理人じゃない限り、斬魄刀で食材切らないっすよ!!」

さすがに、乱菊の始解である『灰猫』の灰の刃で切った食材を食べたくないの、日向はドンドン責めていき、乱菊は結局包丁で切るこ
とになった。

誰も、灰で切った食材は食べたくないだろうという考えだ。という
より、日向の個人的な主観に基づく阻止である。

「見よー俺の華麗な包丁さばきを……ぎやあああ!指切った!!!」

「馬鹿か。トップツードつちも馬鹿か」

一心が包丁で大根を切ろうとし、速攻指を切ったことに対し、日向は辛辣なツツコミを浴びせる。ルキアや、一部の人間は良く知っているが、日向のツツコミが辛辣になっている時は大抵、相手に対し呆れているかキレている時である。この場合は前者であろうとルキアは考える。

日向が、一心が切ろうとしていた大根を代わりに切っている間に、ルキアは一心の指を回道の力で治癒する。

「まったく……!」

そう言う日向の包丁さばきは、かなり手馴れているものがある。あつという間に、大根は均等な短冊切りになる。他にも、ゴボウのさがきや、里芋の乱切りを済ませていく。味噌汁というよりは芋煮に近いものを作る感じになっている。

一時間後には、白飯や芋煮、その他諸々が皆の前に出揃った。

「……日向、昨日の話考えてきてくれたか?」

一心が、日向にだけ聞こえる声で話しかけてくる。

「……すいません。俺はやっぱり、十三番隊です」

「そうか……、分かった!お前の決めたことだ!俺の決める事じゃねえしな?!よし……松本!こつち来い!」

「え〜?何ですか、副隊長?」

いかにも面倒くさいという表情で、乱菊は二人の前にやって来た。右手には、なぜか鮎の塩焼きを握って、今まさに齧りついている。

「お前、今度副隊長な！」

「本当ですか?! やった〜! 帰ったら、宴会しないと〜!!」

ぴよんとその場で跳ねるが、同時にたゆんと揺れる双丘に一心は目が釘付けになって、日向はその一心を白い目で見ている。

「セクハラっすよ」

「え、ええ?! 何のことだ?!」

「はあ〜……………」

焦る一心をスルーし、今度はルキアの所に向かう。大分、十三番隊に慣れてきたルキアだが、それは近い年代の女性に限ってくるので、今この場では少しアウエーになっている。

「ルキア、飯どうだ？」

「……………旨いぞ。お前、どこでこんな料理を……………」

どうやらルキアは、自分と同じ年代の男が自分よりも料理が出来ることに対し疑問を覚えているらしい。ルキアの流魂街からの友人の恋次が、おそらくここまで料理が出来なかったという記憶がある故、疑問を覚えているということもここに追記しておこう。

「流魂街のころ、山で。他には、居候してる時に料理当番で。最近は自炊してる時が多いから尚更だな」

要するに、料理に携わる機会が多いというのが理由だ。

「……………そうか」

ルキアのどこか落ち込んだ様子に、日向はなぜそうなっているのかが分からなかった。ほとんど日向のせいであるのに。

「ふあ〜あ……………」

日向は、欠伸をしながら野営のためのテントの近くにある岩の上に座っていた。夜中に、虚に寝込みを襲われないようにするためである。欠伸をしている様子からはだいぶ気が抜けている様にも感じるが、それに反して日向は霊圧探知の感覚を最大限に広げている。今の

ところは特に何も無い。

「どう〜?何かいる〜?」

「いや、今のところ何も居ないっすね」

気の抜けた声で訊いてくるのは乱菊である。その目は、非常に眠そうに瞬きをしている。

「……………ちよつと横になっていい?」

「駄目っす。完全に寝る気じゃないっすか」

寝ると言っても周りは一面草むらのような場所である。ここで横になると言うのは、中々神経が凶太い人であるか、そういうのに慣れている人でなければ言わないだろう。

「いいじゃ〜ん。ちよつとあんたの膝を枕にしてさ〜」

「だとしたら俺は全力で、頭を乗せてる方の足で貧乏ゆすりしますよ?」

一部の人にとってはご褒美のような申し出ではあったが、日向は完全な抵抗の意思を見せる。その様子に、乱菊も渋々ながら見張りに戻る。季節は、夏の終わりといったところ。昼はまだ暑いが、夜になると涼しくなるといったところであろう。普通に過ごす分には快適であると日向は感じた。雲一つない夜空に、散りばめられたように輝く星を、日向は眺めていた。このまま何もなければなあ、と。そんなことを思っていた矢先であった。

「っ…………?!乱菊さん……………一心さんに、向かって来る霊圧が一つと伝えてください……………」

「えっ……………?!分かったわ!!」

最初は何を言っているか分からないという表情をしていた乱菊であったが、次第に感じ始めた霊圧に、すぐさま真剣な表情になる。

少しずつだが、遠くの方からズドン、ズドンと低く重い地響きが聞こえてくる。日向は斬魄刀を抜刀し、構える。すると、林の奥の方から蛸のような巨大な物体が表れた。

「コンニチワ、死神サン。オイシソウダネ。僕ニ食べサセテヨ」

「……………そいつはできねえ話だな」

蛸のような体に、二つ埋め込まれている顔の一つが日向に話しかけ

てくる。

「いいじゃないか。痛い目に遭いたくはないだろ？」

「こっちよりも、そっちの心配した方がいいんじゃないか？」

直後に、日向は霊圧を急激に上げる。

「じゃねえと、すぐに死ぬぜ？」

「…っ?!こいつは、日向の霊圧か?!」

そう言いながら日向の元に瞬歩で向かっているのは一心と乱菊である。

「……どっちも、なんて大きい霊圧なの……?」

乱菊は、自分を遙かに上回る霊圧二つを捉え、冷や汗を垂らしている。しかし、一心はそういった動揺は見られず、ただ納得しているような表情をしているだけであった。

「乱菊。すぐにやり合えるように、斬魄刀は抜いておけ」

これから起こるであろう事態に、一心は乱菊にすでに抜刀するようにとという旨を伝える。それを聞いた乱菊は、すぐさま抜刀し周りに警戒を向ける。一心もすでに斬魄刀は抜いてある。

「……見えた!」

一心はついに日向と虚であろう物体を捉えた。そこに映っていたのは――。

「破道の六十三・『雷吼炮』!!」

「グ…グウウウ!!」

鬼道を放ち、虚に優位に立っている死神の姿であった。鈍重そうな相手に対し、日向は周りを颯爽と駆け回り、狙いを付けられないようにしながら遠距離から攻撃を放っている。雷の塊が直撃した虚は、命中した部分の皮膚を黒く焦がしている。

「へ…さすがだぜ!じゃあ俺も…燃えろ――『剡月』!!」

「じゃあ私も…唸れ――『灰猫』!」

解号を唱える二人の手の中にはそれぞれ、刀身から炎が噴き出ている刀。刃が灰のように粒子化し周りを漂っている刀が握られていた。

「行け……『灰猫』!!」

乱菊がそう言つて柄を横に薙ぐと、それに呼応するように灰状の刃が虚に向かつていき、灰が触れた部分の虚の肉を、浅いながらも傷をつけていった。

「オノレ……援軍力……?!」

「そういうことだ……喰らいな。——『月牙天衝』!!」

「があああああ?!」

一心が放つ巨大な斬撃に、虚の蛸の足のような部分は半分ほど断ち切られていった。あまりの痛みに虚も悶絶するような声を上げる。

「グ……マダダ……。此処デ死ヌワケニハ……!!」

「だが……終わりだ!」

最後に日向が止めを刺そうとしたとき——。

「っ?!ぐあっ!!」

突如右腕に激痛が奔り、危険を察知した日向はとっさに瞬歩で虚の目の前から飛び退いていく。右腕を確認すると、肩から二の腕に掛けて大きな斬られたような傷があった。

「っつう……!誰だ!!」

左手で傷を押さえながら辺りを見渡す。しかし辺りには、この虚や一心、乱菊以外を見つけることができない。するとその間に、虚は占めたと言わんばかりに黒い空間のような場所へと身を消していった。右手の指からは大量の血がしたたり落ちていた。

「どうした日向?!何があった?!」

「それって……何かに斬られたのっ?!」

血を流す日向を心配し、二人が急いで駆け寄っていく。乱菊は、日向の斬傷に目を見開く。

「はい……でもあの虚じゃない……あの感触は刀みたいな物でした……」

激痛に苦悶の表情をしながらも、攻撃を喰らった際のことを事細やかに話す。

「刀……っ?!」

「でも、周りには何も……」

「一瞬見えたんです……………黒い外套みたいなのを被った奴がいたのが……………」

そう。一瞬だけだったが日向は斬撃を加えた敵を補足していた。しかし、それに気づいたのは既に攻撃を喰らった後であり、敵の後ろ姿しか見ることが出来なかったのである。

「……………そうか。だが今はお前の傷の治療が先決だ」

「そうよ！早く野営テントのところに急ぎましょー!!」

そう言っつて乱菊は日向を急かす。

「……………はい……………」

返事をしながらも、その目線は辺りに向けられていた。

「なんや、あの子僕たちに気づいてるんとかやいますか?」

「そのようだね、ギン」

「……………やはり、私が『清虫』すずむしで万全を期して行くべきでしたでしょうか?」

「その必要はないよ、要。私も、直接刃を交えてみたかったしね」

「実際どうやったんですか?刃交えるゆうても、一方的に斬りつけただけちやいますでしようか?」

「それでもないよ。無意識だが、私に向かって左手で白打を加えてきた」

「なっ……………?!大丈夫ですか、藍染様?!」

「問題ないよ。外套に掠っただけだからね」

「だけど、あれに反応するなんて随分な反射神経持つてるなあ」

「ああ、正直驚いたよ。仮にもこちらは、完全に霊圧を遮断している状態であつたからね」

「……………どう致します、藍染様?今のうちに処分致しましょうか?」

「いや、大丈夫さ。まだその時じゃない」

「いやあ。ホンマ、先が楽しみな子やなあ」

「ああ……………本当にね」

日向は、刃禪を組んでいた。さつきの今で傷はまだ癒えているわけではない。だが、こうしなければ落ちついていられなかった。

意識は次第に落ちていく――。

『……………どうした、日向』

「よお、『虚帝』お前にだけ用事があつてな……………」

『何だ?』

「卍解を習得したい。……………だから、お前から『屈服』させる」

『……………ほう。どうして俺からだ?』

「…『器』がなけりや、受け止められねえだろ?」

『……………気づいたか』

そう言う虚帝は、すつと立つ。すると、和室であつた周りの風景は、月夜で尚且つ四季折々の花が咲いている日本庭園のような風景になつた。

『……………俺たちは、お前を護るために『力』と『身体』を二分化した。だが、その時にもう一つ二分化したものがあつた』

虚帝は、真つ白な刀を何も無い空間から取り出す。

『お前の、『本当の斬魄刀』の力だ』

「……………なるほどな」

『虚帝』は倒した虚の肉体。『白皇』は倒した虚の能力。……………肝心の、俺たち固有の力は二分化した故、その力も半減していた……………。だが、そうしなければならなかつた』

「その力があつたからこそ、俺は魂魄の瓦解を防ぐことが出来た。……………そういうとこだな?」

『ああ……………。だが、二分化を徹底したあまりに斬魄刀は完全に二つに分かれてしまった。二刀一対ではなく、完全な独立した斬魄刀としてな』

「……………じゃあ、俺がする卍解つてのは、その二つを元の一つに戻すことなんだな?」

『その通りだ。……………その時お前は、尸魂界でも類に見ない力を得ることが出来る。だが、それは同時に尸魂界を崩壊に招くことすら出来

る力だ』

「……………」

『御すことが出来れば最強の剣となるその力。だがそれは、必然的にお前をそのようにした元凶との戦いに巻き込むだろう。さっきの刀も、きつと奴のせいだ』

「……………ああ」

『いずれ来るその時……………お前は、戦う覚悟が出来ているか?』

「……………当たり前だ。もう、見過ごすにはいけねえくらい——」

護りたい奴が増えた」

『……………そうか。ならば……………俺を御してみせろ!!!』

爆発的に上昇する霊圧に、巻き上がる砂煙と数多の花卉。暗い月夜でも分かるほどに、霊圧は黒く、深く、厚く、激しく——。

『数多もの大虚を斬り伏せたお前なら分かるだろう!!俺だけでも、メンソグラデー霊圧は最上級大虚をとうに超えていると!!!』

霊圧はまだ上昇する。

『もう一度訊く——覚悟はあるか?』

「愚問だな、今更あ!!!」

『その心意気、よし!!!ゆくぞ!!!』

右腕の傷は、いつの間にか消えていた。すぐに、『白皇』と『虚帝』を取り出す。

『「おおおおおおお!!!」』

夜空には、桜と紅葉が舞っていた。

第二章 Revive Ancient & Bu
rst Force
まつ梨

時代を超える

風は吹く

………ここ、どこだろう？

わからない

身体が痛い

皆どこ？

寂しいよ

一人にしないで

兄さん——

「空座町つすか？」

「ああ。空座町が重霊地に認定されてね……一般の隊士では少々荷が重いんだ。だから君に実際にどの程度の物なのか調査して欲しくてね」

「成程……」

日向は現在、浮竹に次の任務を伝えられている。重霊地とは、現世における霊的特異点であり、最も霊なる物が集まりやすく、霊的に異質な土地である。その場所は時代と共に移り変わり、今回は空座町が、その重霊地に認定された。最も霊なる物が集まりやすいとはつまり、虚も他の場所よりも出現しやすい。

「隊長……だからって日向に行かせる事ありますか？こいつもう三席つ

すよっ。」

「まあそうだが……念には念をとってな……」

虚が集まりやすいとは、その分そこに駐在する死神が危険な目に遭う回数も他と段違いに増えるであろう。浮竹はそれを心配していたのである。

「隊長がこう言っただから別にいいだろ……。それともなんだ？俺がいなえと書類の量増えて大変か？」

日向は殊勝な笑みを浮かべ、海燕に語りかける。席官になって以降、日向は海燕の分の書類も大分手伝っていたりしたので、その量も多い事を知っているし、海燕一人で捌くには厳しい量であることも承知済みなのである。

「んなわきやねーだろ！パツとやってサツと終わらせるわ！」

それに張り合うかのように、海燕は声を上げる。その様子に浮竹は苦笑いをする。そしてこの関係はこのさきずっと変わらないとも考ええる。

「そうか。……それで、浮竹隊長。出発はいつにしますか？」

「そうだなあ……余裕を持って三日後で構わないよ？」

「分かりました。明日行きます」

三日後と言ったのに明日行くと言う日向に、二人は若干呆れた顔をする。勿論それは熱心な仕事魂から来ている物であるが、ここ最近彼は同期と比べても働き過ぎである。特に、三席になった十か月前からそれは顕著に表れている。それを考慮しての三日の猶予であったのだが、それは意味のない物となった。

「……まあ、おめーが言うなら止めねえが……。ま、一か月くらいだ。任務の合間に観光でもすりゃいいさ」

「へっ。わーってるよ。自分の身体位自分で管理出来るっつーの」

こう余裕綽々な態度で返答してくるが、こう見えても日向はかなり真面目だ。そして頭も良い。自己管理など出来て当然という言葉は、今までそうであったからと言えるものであろう。一部の人間が知っている通り、彼は仕事の後に隊舎の訓練場で、いつも二時間ほど自主練してから帰宅している。それでも体調を崩さずに仕事をしている

ということとは、アフターケアがしつかりしているということであろう。

「うむ……じゃあ、くれぐれも気を付けてくれ。はははっ！まあ、日向ならそんな心配はいらないか！」

日向の言葉に、安堵の笑顔を返す浮竹。これも、彼の实力を知っているからこそであろう。

「じゃあ、今日はもうあがりますね！では、浮竹隊長。お体を気を付けて！」

そう言う向日向は、颯爽と襖の奥へと消えていった。

「…変わったな…」

「そうっすか？」

「ああ……以前よりもこう…落ち着いたというか……」

「ま、あれでも入隊してから十年くらい経ちますもんね」

「いや、そういうんじゃないんだ。何と言うかだな……霊圧が安定したというか……洗練されたというか……」

浮竹が示唆するのは精神的な成長ではなく、霊圧の変化。勿論、精神的な成長もしていることは承知しているが、浮竹が最も気になったのはそこであった。日向の霊圧が高いことは出会った当初から知っていたが、その時点ではまだまだ『荒い』という表現が似合う状態であった。しかし今は、その荒さがなくなり穏やかになった。それは、霊圧が下がったというわけではなく、収斂され、堅固なものに昇華したという表現が似合っているだろう。

(……強くなったな)

青年になつた死神を、浮竹は穏やかに見守るのであった。

「ふい〜！ここが空座町か〜！」

日向は、地獄蝶と共に穿界門を潜り抜け、現世に降り立った。そこには民家をはじめ様々な建物が立ち並んでいる。これといって目立つ建物はないが、逆にそれがこの町のいい雰囲気醸し出しているのではないかと日向は感じた。

「さ〜とと……………、さっそく拠点の家に行ってみるか……………ん？」

日向が、今回の滞在任務の拠点である家に行こうと生きこんだ矢先、死覇装の中の伝令神機がプルルルと音を鳴らす。おそらく、早速虚が出現したのであろうと考えた。

「……………近いな。よし……………行くか！」

今回の滞在任務の初仕事に、日向は意気込んで瞬歩で霊圧を感じる場所へ向かう。距離が距離であったので、数分もかからずに現場に到着する。

「……………ん？死神？」

河原である場所には、牛のような虚とおそらく女性であろう死覇装を着た人物が居て、女性の方は地面に倒れている状態であった。

日向の頭の中にはクエスチョンマークが浮かび上がる。穿界門に入る直前に、空座町の担当死神とはすでに引き継ぎを終了したはずである。それなのにも関わらず、なぜ死神がここにいるのか？そういった疑問が、日向の頭に浮かびあがったが……………。

「破道の三十三・『蒼火墜』！」

やることは一つ。すぐに蒼火墜で、虚の頭を撃ち抜く。そんなに強靱な虚でなかったであろう。日向の牽制程度の鬼道で、その虚は倒された。そして、すぐさま倒れている死神に駆け寄る。霊圧の有無は、瞬歩で近づいている時点で確認していたので生きていることは分かっていたが、倒れていたの傷の有無を確認する。体中に多少かすり傷や切り傷、死覇装は少し焼け焦げた跡があったが、拍動はしっかりとしているのだ。おそらく命に別状はないのではないかと捉える。

おそらく年齢は同じくらいであろう。髪は茶髪を脱色したような薄い色合い。その少し癖のある髪の毛を後頭部で一つに束ねている。所謂、ポニーテールという奴であろうと日向は考える。それは、赤い紐のような物で束ねられており、その紐は額を一文字するように通っており、さらには途中で花のような飾りに、赤い羽のような飾りも付属している。

「……………とりあえず、連れてくか」

このまま放置するわけにはいかないので、日向は拠点に持ち替える

ことに決定した。

「……………う……う……」

「お。起きたか？」

「……………あれ？あなたは？」

彼女は現在、日向の拠点の家にあるベッドに眠っていたが、目を覚ましたことにより上半身を起こした。その瞳は藍色で、クリクリとしている大きな瞳は、見た者に可愛いという印象を与えるものである。う。まだ寝ぼけているのか、右手で顔をゴシゴシと擦る。

「俺は、護廷十三隊十三番隊第三席、天宮城日向だ。お前は？」

こんな紹介をするが、日向は現在義骸ぎがいに入って、服装は高校生が休日に着るようなワイシャツにジーパンというラフな格好であるため、傍から見れば死神要素は一切ない。しかし、日向の言葉に反応した彼女はとつさにベッドから降り、片方の膝を着き、恐れ多いかのような態度をとる。

「わ、私は護廷十三隊十番隊無席、宮能くどうまつ梨と言います！初対面でありながら、床に伏した状態で無礼な言動をとってしまったこと、お許しください！」

「お、おう……………いや、そんな固くなくていいぞ？歳近そうだし、もつと軽い感じでやっ？」

「そ……………そう？ありがとう。あたしのごことは『まつ梨』って呼んで！」

「じゃあ、俺は『日向』でいいぞ」

「よろしく、日向！」

そんな屈託のない笑顔で挨拶をするまつ梨。おそらくこれが、まつ梨の素の姿なのであろう。

「……………それで、日向。ここはどこなの？」

「ここは空座町。現世だ。お前が河原で倒れてたから保護した。倒れてたことに心当たりはあるか？」

部屋を不思議そうに見回しながらまつ梨は日向に問いかける。それに対し日向は簡単に返答し、尚且つ倒れていた理由を問う。する

と、まつ梨の表情が急に強張った。

「そ、そうだ！戸魂界は?!アルトウロは?!皆どうなったの?!」

「お、おいっ！落ち着け！アルトウロって誰だよ?!」

「えっ……………?!」

日向の宥める際の言葉に、まつ梨は信じられないという表情に今度
は変わる。心なしか、まつ梨の両手は震えていた。

「とりあえず、何があったか、順番に話せ……………な?」

出来るだけ優しい口調でまつ梨に語りかける。するとまつ梨はぼ
つりぼつりと言葉を発し始めた。

「……………戸魂界で、アルトウロっていう虚の封印が解け……………それで
瀨靈廷で混乱が起こって……………隊長達皆で討伐に向かつて……………私
も、兄さんと隊長と一緒に向かつて……………それで、伊花このかさんが熾水鏡しすいきよう
を使つて……………あともう一步つてところで伊花さんが倒れて……………
それで、私は熾水鏡の黒い何かに巻き込まれて……………それから、何も
覚えてなくて気づいたらここだった……………」

「……………?!?」

日向は、まつ梨の話が信じられなかった。もし彼女が言うように隊
長の多くが虚の討伐に向かう事態など起こったら、嫌でもわかる筈
だ。しかし、日向が護廷十三隊に入隊して以来、そのようなことは一
度も起きてはいない。

「……………お前の隊の隊長の名前は?」

「……………すずなみせいげん朱司波征源っていうの……………」

「っ……………?!……………その人、八十年も前の隊長だぞ?」

「えっ……………?そ、そんな筈……………!!」

日向は、霊術院生の時に習った歴代隊長の名前を聞くことによつて
話を本物なのかどうか確かめることにした。しかし帰ってきた言葉
は、予想の斜め上に行くものであった。

「確かにそうだ。八十年前に、行方不明って教科書に書いてあったぜ
?」

「……………?!そんな筈ないよ?!だって、いくらあたしが寝てたからって
昨日か一昨日ぐらいの話でしょ?!」

互いに、相手の話を理解できない。明らかに、時代が食い違っている。片方は、それを最近と言い、もう片方は、それを遠い昔の話だと言う。

「そ、そうだ!!今の隊長全員言つてよ!!それなら……………」

頑張つて明るく取り繕うとしているが、動揺していることは明らかであつた。

「…………山本元柳斎重國総隊長。碎蜂隊長。市丸隊長。卯ノ花隊長。藍染隊長。朽木隊長。狛村隊長。京楽隊長。東仙隊長。志波隊長。更木隊長。涅隊長。浮竹隊長…………以上だ」

最初の総隊長の名前が出た瞬間は安堵したかのような表情をしたが、二番隊以降、ほとんどの隊長の名前で動揺した表情を見せる。

「半分以上知らない……………そんな……………?!」

まつ梨の目は、次第に潤んでいった。

「四楓院隊長は? 鳳橋隊長は? 平子隊長は? 六車隊長は? 愛川隊長は? 鬼岩城隊長は? 浦原隊長は? 何で……………」

「落ち着けて……………でも、その感じだと浮竹隊長とか、京楽隊長は知つてるんだな? 創設当初からのメンバーの総隊長や卯ノ花隊長は勿論」

「う……………うん……………」

「じゃあ、志波海燕はどうだ?」

「し、知つてる!よくお世話になつたから……………」

そこで、日向は一回ふうく、と息を吐く。

「なら、海燕に直接聞いてやるよ。一応あれでも、俺の直属の上司だしな」

「ほ……………ほんと?!」

その言葉を聞いたまつ梨の表情は一気に明るくなる。やはり、知っている人物が実際に存在していると分かると安心するのであろう。自分の置かれている状況が分からないのであればなおさらだ。

—————ぐうく……………

突如、部屋に腹の鳴る音が響いた。日向は自分のものではないと確信している、必然的に、その音を鳴らした人物は目の前にいる、顔と

……………全裸の状態ではあったが。

日向は、すぐさままつ梨にどかさされ、部屋の奥に押し込まれていった。

頬には、赤い紅葉模様があったのは気のせいではなかっただろう。

「どうじゃったのだ、喜助?」

彼——下駄に甚平、帽子を身に着けている人物に話しかけているのは黒猫。

「ええ、間違いなく彼女でしたよ、夜一さん……………」

喜助と呼ばれた男は、夜一と呼ばれた黒猫にそう言う。

「昨日から彼女の霊圧を確認して、もしかしてと思って動いてみたんですけどねえ……………ドンピシャでしたよ。彼女の……………まつ梨さんの義骸を用意しておいてよかったツス」

「ふむ……………無事だったのならば、それに越したことはないが、どうして今なのか……………」

夜一の問いに、喜助はうくと唸る。

「八十年前、彼女達が熾水鏡に飲み込まれて行方不明になって以降、アタシも全力で捜索したつもりだったんすけど……………」

「もしか、熾水鏡の中で彷徨って時間経過の影響を受けずに生きていたという可能性は?」

「……………否定は出来ないツスけど、そうなるど厄介なことが……………」

「…っ?! もしや、奴が……………?!」

「ええ……………彼も復活した可能性があります……………。古の破面、アルトウロ・プラテアドが……………」

「だとしたら、尸魂界の危機じゃぞ?」

「分かっています……………。アタシ達も、出来るだけまつ梨さんのことはサポートしましょう。今のアタシ達には、それくらいしか出来ない……………」

「そうじゃな、喜助……………」

時を超えた破面に相對すは誰か。
流れる時を生きた、今の死神か。
同じ時を超えた死神か。
それとも、虚の力を持つ死神か。

不滅王に相對すは——。

仮面

仮面舞踏会の
始まりや

「……お！これ美味しいね！」

「……………そうだな……………」

「……………ぐめん……………」

「……………気にするな。頬が腫れてるから、あんまり喋りたくないだけだ」

こんな会話をするのは、日向とまつ梨である。日向がこんなにもテーションションが低いのは、彼の左頬が真っ赤に染まっていることが物語っているだろう。ちなみにこのような事態になったのは明らかに事故であり、故意的ではない。しかし、故意的でなくともビンタされるようなことが起こったということも、日向の口調からわかる。

二人は家で夕食——コンビニ弁当であるが、それを口にしていた。頬が腫れている日向は、咀嚼の動作も小さい。

閑話休題。

二人は夕食をとりながら、今後のことについて話し合っていた。

「まつ梨的にはすぐにでも尸魂界に戻りたいんだけど、俺も現世に来たのは駐在任務で来たわけであって、んでもって今日が初日だったからなあ……………。すぐに戻るなんてことは、向こうも代わりの人を見つけたら大変だろうし……………」

「うん……………。ぐめんね、色々迷惑かけて……………」

「いや、それについては別にどうってことねえんだが、俺が言いてえのはそれなりに時間がかかっちゃうってことなんだ」

現世から尸魂界に。そしてその逆も然り。二つの世界を安全に行き来するには地獄蝶が必要である。まつ梨は、その地獄蝶を有してい

ないので、必然的に尸魂界に行くには日向が同伴となる。しかし日向が現世に来たのは、一か月の駐在任務であった。ただの駐在任務であったのならば、すぐに代わりの人物を見つけ出すことは容易であったが、日向がここ『空座町』の担当になったのは、この町が重霊地であったためである。さらにそこには、空座町の調査も兼ねているので、そうするとここの担当を任せられる死神の数は極端に減る。逆に、任せられる死神はそれほどの実力者であって、それ相応の席次に就いているので、急に尸魂界の仕事を放ってこちらに来るにはそれなりの時間がかかってしまう。

「まつ梨……お前はどうしたい？すぐにでも、向こうに戻るか？」

日向は柔らかな声色で問う。まつ梨の現状はかなり複雑である。急かしても、逆に呑気になっても彼女に不安を煽いでしまうと、日向は考えたためである。

「ううん……駐在任務が終わってから一緒に行くよ……。今すぐに行っても、あたし頭がグチャグチャになって上手く話せないだろうし……」

「そうか……。じゃあ、現世にいる内は俺がお前の面倒しつかり見てやるよ！よろしくな、まつ梨！」

「……………うん！よろしくね！」

日向の差し出された右手を、まつ梨も右手を差しだし握手する。

「……………あ、それでさあ……………服、どうすんだ？」

そう言いながら、日向はまつ梨の現在の服装を見る。義骸に入っている彼女の服装はブカブカの黒いジャージである。元々、日向が家でゴロゴロするときに着ようと思って準備していた物だが、彼女の義骸が唯一着れそうであったのがこのジャージであったため、現在は着させている。しかし、ブカブカであるので見栄えは悪く、先程は一歩歩くとびにズボンの方がずり下がっていた。一日二日なら構わなかったであろうが、二人が現世に居る期間は一月である。さすがに一月もジャージというのは、お洒落したい年頃であろう彼女には些かストレスを感じさせてしまうものであろう。そして問題は、下着がないということである。上なら男物でもギリギリ間に合うが、下はさすが

にそうはいかないであろう。というより、日向が彼女が自分の下着を着るのはさすがに嫌であろうと思ったので、こうして訊いている。

「……………出来ればすぐに欲しい……………」

「分かった。今から買いに行くか……………ユニシロってところが確か近くにあったから、そこで買ってこようぜ」

「それって、あたしも行くの?」

「……………さすがに、俺が女物の服と下着を大量に買うわけにはいかねえだろ……………サイズもわかんねえし……………」

ジャージで買い物に行くことに羞恥心を感じたまつ梨が、日向に自分も行くのか尋ねたのだが、正論が飛んできた。

「うん……………そうだね。じゃあ、終わったら行く?」

「そうだな」

「ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております!」

「ふう〜。結構買ったね」

「……………重い……………」

重いと口を漏らす日向は、両手に大きな紙袋を抱えている。その中身はほとんどまつ梨の服である。ちなみに現在、まつ梨は買った服に着替えている。ゆったりしている白と黒のボーダーシャツに、下はショートパンツを履いている。

「……………結構似合ってたんじゃないか」

「え……………? 本当?!」

するとまつ梨は、その場でくるつと一回転をする。やはり彼女も女の子なのであろう。似合っていると言われて嬉しくないわけがない。

「おう。中々だと思うぞ?」

「うふふ……………ありがと!」

にこりとするその表情は、数時間前見た表情とは比べ物にならないほど輝いているように日向は感じ、その様子に微笑む。

すると、ポケットの中の伝令神機が鳴る。取り出して確認すると、虚の出現が確認されたという情報である。そしてすぐに逆側のポ

ケットから義魂丸の入った入れ物を取り出す。

「まつ梨、俺ちよつと行つてくるわ」

「虚？あたしはどうする？」

「先に家に帰つててくれ。ほら、これ家の鍵」

「あ、うん……………気を付けてね！」

「おう、すぐ戻つてくる！」

日向はケースに入った飴玉のようなものを飲み込む。すると、日向は義骸から出てきた。そして、義骸の方には仮の魂が入りむくつき上がる。そしてすぐに日向は現場に向かう。

「……………霊圧を感じねえ……………」

日向はすぐに現場に到着したが、すぐさま違和感を感じた。虚の気配を感じない。虚の能力であると言われればそれまでだが、霊圧以外にも音や空気の流れなども頼りにして辺りを見渡すが、ただ車の走る音や通りを歩く人々の談笑が聞こえるだけであった。

「……………誰だ？」

「あらら、気づいたんか？」

視線を感じた。その理由だけで見えない何者かに問いかけたが、意外にも簡単に相手の方から出てきてくれた。声の聞こえた方に目を向けると、そこには暗い路地裏から仰々しく歩く男の姿が見えた。金髪のおかつぱ頭で、黒いシャツに白いネクタイ。そして白い長ズボンという格好である。さらに、その右手には鞘には納められているが刀が握られている。

「誰だつて訊いてんだよ」

「なんや、せつかちやなく……………まあええわ。平子真子つて言えばわかるか？」

その名前に日向は目を見開く。

「……………元五番隊長……………？」

「そや。わかつたんなら付いて来い」

すると平子はテクテクと路地裏に戻って行った。

日向は悩んでいた。何故、元五番隊隊長がここにいるのか。元五番隊隊長は、八十年以上も前に、流魂街で行方不明になったということ。霊術院のときに学んだ。その人物が何故……？そこには疑念、警戒など様々な感情が入り混じっている。

「……………ああ」

日向は付いていくことにした。

着いたのは廃屋のような場所。正確に言えば廃工場と言ったところであろうか。暗闇に廃工場というシチュエーションは、『不気味』という言葉がぴったりであると日向は感じた。

「さ、入るで？日向……………」

「……………何で俺の名前知ってるんすか？」

「知り合いから聞いたんや。ほら、さっさと行くで？早く帰りたいやろ？」

拒否は出来ない。そのような雰囲気、平子は日向に放っていた。それに仕方なく首を縦に振り、平子に付いて行き中に入っていく。

「遅いわ真子！このハゲ!!」

「ぐわばあ?!」

突如、奥から出てきた金髪ツインテールの少女に平子はスリッパで顔を殴られる。その際の音はスリッパとは思えない程、鈍い音が出た。それに日向は苦笑いをする。

「おいおい……………随分きつい入れられたな、真子」

「へ〜！その人？新しい人って?!」

「う〜ん……………彼からは僕たちと同じメロディが流れているように感じるよ……………」

「言ってる意味が分からねえぞ、ローズ」

「ふ〜ん……………何人か女泣かせてそうな顔しとるやないか」

「リサさん……………初対面でそんなこと言うのはチョット……………」

言葉を発した順番に、銀髪短髪のタンクトップの男。白いライダースーツを着る黄緑色の髪の元気いっぱいな女子。金髪ロン毛の伊達

男。アフロでサングラスをかける男。眼鏡でおさげのセーラー服女子。桃色の髪の大柄で寸胴な男。かなり個性が強そうな面々である。「あの……………この人達は……………?」

「いててて……………お、そうやった。俺らの自己紹介しとらんかったわ。俺らは『仮面の軍勢』……………自分の身体ん中に虚持つとる奴らが居る集団や……………」

「仮面の軍勢……………?」

聞きなれない言葉と、ある単語に日向は反応する。

「虚の仮面って……………」

「そや。お前の同類や……………」

そう言う平子の顔は、にやりと口角を吊り上げていた。いかにも意地悪そうな、嘘つきがしそうな悪い顔。日向はそう感じた。

「どうや?俺らんとこに来おへんか?」

「それは、無理な話っすね」

日向は、平子の勧誘に即答した。それは、拒否の言葉。その言葉に平子は一瞬眉をピクツと動かすが、すぐに平静の顔になる。

「ほお……………何でや?理由訊こか?」

「俺は護廷十三隊十三番隊第三席っていう立場の死神なんで、いくら元隊長の勧誘であつてもそんな謎の集団に就けるわけないじゃないですか」

「正論やなあ……………」

「真子……………退け」

「ぐわばあっ?!」

再び平子は、ツインテールの女子にスリッパで殴られる。心なしか、さつきよりも威力が高いように思われる。殴られた平子は、壁の方向に飛んでいき衝突する。ドガンという音が工場内に響いたが、日向は敢てそちらを見なかった。

「うちは、猿柿ひよ里や。死神」

「俺は、ちゃんと天宮城日向っていう名前があります。猿柿元十二番隊副隊長」

そのセリフに、ひよ里のこめかみに一瞬青筋が浮かぶ。

「それで呼ぶのやめえ、死神！」

「じゃあ、そつちも死神っていう不特定多数が該当する名詞で俺を呼ぶのやめてくれませんか？」

「うっさいわ、ハゲ」

「ハゲてねえつすよ」

「黙れ、ハゲで十分や」

「……………つち」

「お前、何舌打ちしとんねん?!」

「してねえつすよ」

「したわ!!」

「してねえつすよ」

「した言うとんやろがあ!!!」

「してないつたらしてないつすよ」

日向が舌打ちしたことに対しひよ里は激怒するが、日向はあくまで普通の態度で接する。しかし、一応昔の副隊長という自分より上の立場であった者に舌打ちしているという時点で、日向はかなりイライラしているということになる。

「ちっ……………まあええわ……………。はっきり言うたるわ！お前に拒否権はない言うとんねん!!」

「なんすかそれ」

「そのまんまの意味や！なんや、髪の毛だけやなくて脳みそもないんか？」

「そつちは、こつちの言ってる意味分からずに勝手に解釈するかわいそうな脳みそ持つてるみたいっすね」

「なんやとお?!なら、もう一回言つたるわ!!お前に拒否権ない言うとんねん!!!」

「断る。俺は一回無理な話つて言つたはずですよ?」

「……………もうええわ……………力づくで入れたるわ」

するとひよ里は、背中に背負っていた刀——十中八九斬魄刀であろう物を抜く。そしてさらに、顔面に虚の仮面を出現させる。一本角が印象的な仮面だ。

「おい、ひよ里！」

「ええわ、やらせたれ」

止めようとするアフロの男に、先程壁に激突していた平子は、服の埃を払いながらひよ里にやらせてやるように言う。

「ハッチ。結界張ってくれ。五枚ぐらいやな」

「わかりマシタ」

平子は、ハッチという寸胴な男に結界を張るように指示する。すると、工場の壁全体に薄い膜のような物が表れた。

『さつきと構えや……死ぬで?』

直後、ひよ里の姿はその場から消え、現れたのは日向の前であった。そして、振り上げている斬魄刀を思いつき振り下ろす。直後に、工場内には爆音と言っても過言ではない程の音が鳴り響き、煙が舞いおきる。煙が晴れると、そこには大きなクレーターがあつた。

「あつぶねく……」

日向は、ひよ里の大分後ろに位置する場所に居た。その様子に、ひよ里だけでなく他の者たちも目を見開く。

『何や……三席言うから大したことあらへんと思つとつたけど、中々動けるやんか』

「それでもねえつすよ」

『なら……久しぶりに本気出せるわ……。ぶつ手切れ——』

——『くびきりおろち 滅 大蛇』!!』

突如にさつきとは比べ物にならない程の霊圧を、日向は感じる。斬魄刀は巨大な鋸のような形状に変化した。おそらく先ほどの虚化した際には、まだ霊圧を抑えていたのであろう。

『……行くでっ!!!』

「くっ……!!」

急接近するひよ里に、日向は仕方なく白皇を抜く。薙ぎ払われた一撃を刀身で防ぐが、勢いに負けて後方へと吹き飛んでしまった。

『どうした?!虚化せえへんのか?!それとも出来へんのか?!早よせんと死ぬでえ!!!』

そこからひよ里は、自分の身の丈以上ある鋸を軽々と振り回し、日

向に連撃を加える。それをなんとか防ぐ日向であるが、些かパワー負けしてしまっている。

『ちっ………いつまで手え抜いとんねん?!なら、これはどうや?!』『すると、ひよ里の仮面の口の部分に赤い光球が生まれていく。』

「なっ………待てー！ひよ里ー！」

その光景に、平子は声を上げる。しかし、光球は完成しすでに発射される寸前であった。

『虚閃!!』

赤い閃光が、日向の居る場所へ地面を削りながら進撃していく。日向の居る場所へ到達した瞬間、そこで爆発が起きる。

「ひよ里ー！このアホンダラ!!そんな無茶苦茶したらアカンやろが！」

『うっさい！これで死んだら、あの死神もそこまでやったってことやろ』

「そういう問題やあらへん!!」

『………おい。黙って防御に勤しんでたら、随分好き勝手やってくれたじゃねえか………』

全員、一斉に声のする方へと目を向ける。

そこには――。

『次は、こっちから攻めていいのか?』

――三本角が生えている虚の仮面を被った、死覇装の青年が立っていた。

破面

願いは儂いモノ
だから願いなのだ

『「で、どうします?」』

虚化をした日向は、ひよ里に戦闘を続行するか訊く。

ひよ里は、冷や汗を流していた。

(何や、この霊圧は……?!)

目の前にいるのは現在十三番隊の三席をしていると言った。そのことに対し、自分よりは弱いだろうという予想を立てていたがそれは甘い考えだったとひよ里は感じた。自分は八十年も前とはいえ副隊長であった。しかも、護廷十三隊を離れて以来鍛錬を怠ったことはない。スペックだけで言えば、自分は八十年前よりも上がっているはず。それなのにも関わらず、目の前にいる死神はその自分を威圧するほどの霊圧を有している。それがひよ里には信じられなかった。

「ああ………やめや、やめ。お互い斬魄刀しまつてくれへんか?」

その緊迫した二人の間に入って行ったのは平子であった。飄々とした態度で、二人を鎮めようとする。それに対し、日向はすぐさま虚化を解く。それに続きひよ里も虚化を解く。

「すまん、日向。俺らはお前を試しとったんや」

「試してた?」

「そや。お前が虚の力を制御できとるかをな。でも、杞憂やったみたいやな。むしろ想像以上やわ」

平子が言うのは、己の内側に住む虚が暴走しているか否か。平子達がそれを経験しているからこそ、同類であると言いつつ放った日向に対し気をかけてやった、と。

「…そうっすか。じゃあ、もう家に帰っていいっすか?」

「もうちよい待てや。お前に話さんといけへんことがある」

そういう平子の表情は、今までと比べ物にならない程に真剣なものであった。その表情に、日向の顔も強張る。今から始まることは、何か恐ろしいものであるのだろう。日向はそう直感した。

「日向。お前は、破面^{ブランク}って知つとるか？」

「破面……………」

「その様子やと知らへんらしいな。まあ、仕方ないっちゃ仕方ないわ。そんなこと、教科書に書いてあらへんもんな……………。簡単に説明したるわ。破面^{ブランク}つちゆうのは、仮面を外した虚のことや。そのほとんどが、人間に近い姿をしとる」

「人間に近いとどうなるんですか？」

日向のその言葉に、平子はニヤツとする。まるで、そこが今から説明するところのミソであるかのように。

「形は人間……………破面^{ブランク}つちゆうんは、斬魄刀を持つとるんや」

「……………?!」

「ま、全部がそうとは言えへんかもしれへんが、俺が見た破面は持つとった」

「それは死神のと、同性質のものなんですか？」

「……………いや、そこまでは分からへん。でも、死神のは『浅打』使つとるから完全に同じものとは言えへんやろなあ」

そういう平子の顔は思案顔である。それに対する日向は、平子の真意を探るように真剣な顔になる。

「で、ここからが本題や。随分昔と、八十年くらい前にある破面が、虚ぎようさん引きつれて尸魂界に進軍して来たんや。……………そいつの名前はアルトウロ」

「つ……………?!アルトウロって……………?!」

「落ち着きい。俺が直接やり合つたんは八十年前やったんが、そんなき瀨靈廷は半壊した。んでもって、そんな時死亡を確認した奴ら以外に行方不明になった奴が何人かおつた。……………そんなの一人に、『宮能まつ梨』つちゆう死神や」

「……………まつ梨が?!」

ついさつき知り合った死神の名前が出てきて、日向は驚く。さらに、その話の流れを察した日向はまつ梨の言っていたことが、急に現実味を帯びてきたことを感じた。

「そや、お前んとこ居る女の子のことや。そして、行方不明になった奴らにはある共通点があつたんや。……熾水鏡つちゆう鏡の近くにおつた奴らで、そんなにもあいつの兄貴や当時十番隊の隊長やった朱司波征源。んでもって、首謀者のアルトウロもそうやった」

「アルトウロが生きてるってことですか？」

「可能性は高い。……やり合つて知つとることやけど、そいつは危険すぎる。隊長格がサシでやり合つても負けるかもしれへん強さや」その事実に向向は驚愕する。隊長格が一对一で戦つて負けてしまふ強さとは？日向には実感出来なかつた。

「もしあいつが生きとるんやつたら、また瀨霊廷に攻め込むかもしれへん。……こつからは、予想かもしれへんがもしあいつが何かに因縁つけてくるんなら、まつ梨ちゃんが狙われるかもしれへん」

「なっ……?!」

「そんな時、お前はまつ梨ちゃんのこと護れるか……それを、確かめたんや」

「……やり方荒くないっすか？」

「それは確かやな、すまん。でも、結構強かつたで？」

「隊長レベルの相手に、俺が何とかできるとか言われても……」

「安心し。もし、あいつが出て来おつたなら、馬鹿デカイ霊圧でてくるから向こうも気づくやろ。それとも何や？お前は、一人のこと数分も護られへんのか？」

その言葉に対し、日向の眉がピクツと動く。そして、何故か悪者のような笑みを浮かべる。

「……現世にいる内、俺はあいつの面倒を見るって言ったんすよ。死んでも護ります」

「……ええで。気に入ったわ。その意気なら、お前にまつ梨ちゃんのこと任せられるわ」

そう言う平子は、日向の肩にポンッと手を置く。

「もしもん時は、俺らも手を貸すで。でも、現世でまつ梨ちゃんの一番傍に居てやれるんはお前や。頼んだで？」

「任せてください」

そう言葉を投げ合う二人の顔は穏やかでありながら、固い意志のよ
うなものを感じられる表情であった。

その会話が終わったと同時に、日向はさつきと帰ろうと仮面の軍勢
に背を向ける。結構時間がかかってしまったので、まつ梨が心配して
いるだろうと考えたからである。

「あ、ちよつと待ち！くれぐれも、俺らんことは皆に秘密やで？」

平子は、唇に対し人差し指を垂直に当てる。

「まあ……………でしようね。本当だったら、生存を確認したって報告す
るべきなんでしょうが、瀨靈廷に戻らないでここに居るってことはそ
れなりの理由があるんですよね？」

「あくそやな。……………あと、一つ言っておくわ。藍染に気をつけろ」

「……………藍染隊長つか？」

「ああ……………今色々言っても、お前を混乱させるだけやから言わんが、
あいつにお前の虚の力を見せへん方がええ」

「なるべく、人前では仮面は見せてないっすけどね……………」

「でも気を付けえ。もし仮面見せたら、他の奴らでも目を付けられる
で？八十年前からの隊長格なら尚更な」

それに該当するのは、山本元柳斎重國。雀部長次郎。卯ノ花烈。藍
染惣右介。京楽春水。浮竹十四郎などが該当するであろう。当時の
隊長格というのを除けば、碎蜂や市丸ギン。伊勢七緒。東仙要。涅マ
ユリ。志波海燕などが該当するであろう。

「それが原因で、お前が尸魂界から追放される可能性があるっちゆう
ことは言っておくわ」

「洒落になんないっすね」

「ま、そんな時は俺らんとこに來い。歓迎するで？」

「なるべくお世話にならないように気を付けます」

「それが一番やな。ほな、気を付けて帰れい」

「分かりました。じゃあ」

「アノ……………」

「……………うどうしたんですか?」

日向を呼び止めたのは、寸胴な巨漢の男であった。彼は暫し日向を見つめた後、ふうつと息を吐いた。

「……………いえ、何でもアリマセン。すみませんデシタ」

「え?あ、はい……………」

日向は頭にクエスチョンマークを浮かべながら、出ていった。

「ただいま〜」

日向はそう言いながら、玄関を開けた。時計を確認すると、時刻は十一時を過ぎていた。なにかしら反応があると思身構えていたが、何の反応もない。寝たのか、と日向は予想し部屋の奥に行く。しかし、明かりはついているのでどうしたものかと思い、引き戸を引く。

「すー……………すー……………」

「……………寝てるじゃねえか……………」

そこには居たのは、ちゃぶ台にうつぶせになりながら寝息を立てるまつ梨であった。髪は下ろしており、長い髪の毛は肩甲骨の辺りまで覆っている。

まさか、自分を待っていてその内寝てしまったのかと思い、若干罪悪感を感じる。

「布団敷くか……………」

布団を敷くといっても、勿論布団は一人分しかない。その布団を敷き終わった後、日向はまつ梨を起こそうと体を揺らす。しかし、一向に反応は返ってこない。仕方ないと思い、日向はまつ梨を起こさないように、そつと抱き上げて敷き布団の上に乗せブランケットのような物を被せてあげる。季節は夏なので、あまり厚い物を被せたら暑いだろうと考えたためである。その後自分は、椅子に座りスツと目を閉じる。疲れていた日向は、すぐに意識を落としていった。

……何か眩しい。それと、美味しそうな匂いがする。ああ、こんな時はいつも兄さんが起こしてくれたんだ。いつもおちやらけてる癖にこういう時だけ、しっかりしてるんだから。……ほら、今も体揺すぶってる。

「……兄さん……まだ眠いよ……」

「誰が兄さんだ」

「えっ……?」

あまり聞き慣れない、それでもって聞き覚えのある声があたしに対してツツコミのような口調で語りかけてくる。

「……日向?!」

「何驚いてんだ?もう、朝飯作ったぞ?ほら、顔洗ってこい」

「う、うん……」

……恥ずかしい!!思いつきり日向に対して『兄さん』とか言っちゃった!何か、冷静な顔してたけど、絶対『何だこいつ?』的なこと思ってたよ!

そんなことを思いながら、私は洗面所に行き顔を洗う。意識がしつかりしたところで自分の顔を眺めると、隈が凄いことになっていた。

こんな顔で男の子の前に行きたくないな……。

そんなことを思っても仕方ないので、私は日向が朝ごはんを用意しているであろうちやぶ台の所に行く。

「……うわぁ!凄いや……」

そこにあっただのはユラユラと湯気を立てるご飯やみそ汁、おかずの数々。おかずに関しては、目玉焼きにベーコンを焼いたもの、さらにレタスやトマト、コーンが入っているサラダに胡麻ドレッシングがかかっている物。

「これ、全部作ったの?」

「おう。たいして時間かかんねえしな」

……ここまで完璧な朝食を作られてしまうと、女である自分が霞んでしまう。勿論あたしだって朝食は作ったことはたくさんあるが、ここまで美味しそうにたくさん作れるとは思わない。

「……料理男子?」

「なんだそれ？」

「……………なんでもない。じゃあいただきます!!」

そう言つて、味噌汁を啜る。……………美味しい!しつかり出汁が効いてる!そして、入っている豆腐をパクツと食べる。うくん、やっぱり朝は味噌汁が美味しい!

「美味しい!」

「そうか、よかった。もし足りなかつたら余り少しあるから言つてくれ」

「うん!」

そう言つた後、私はドンドン食べ進めていく。ちょうど全部の品を食べ終わつたころには、満腹であった。

「ふう〜。食べた〜……………幸せ……………」

「お、食い終わつたか。じゃあ、皿洗うから渡してくれ」

「え?いや、このくらい自分でやるよ!私もお世話になつてるんだし、皿洗いはするよ!」

そんならしいしないと、穀潰しつて言われそうだし……………。そう言つて、私は二人分の皿を台所に持つていく。すると日向も付いてくる。

「ん?どうしたの?私一人でやるよ?」

「二人でやつた方が早いだろ?」

「あ、うん……………ありがとう」

……………優しい〜。これが昨日読んだ雑誌に書いてあつた『性格がイケメン』という奴か……………。でも、実際日向は顔立ちが良いので完全なイケメンだなあ〜。

その後、私が洗つて日向が拭くという感じで皿洗いを終えた。

「兄貴達、無事だといいな」

日向が、突然私にそう言つてきた。実は皿洗いしている時、黙つてやつていたから自然と兄さんと朱司波隊長のことを考えていたのだが、それを見透かされたようだ。

「……………うん」

「でも、強いんだろ?なら、どつかで生きてるさ」

「そうだね……………」

そうだよ。きっと二人は生きてる。

「ふっ……ふっ……ふっ……」

朝霧は、二番隊の修練所に居た。そこで朝霧は、逆立ちをしながら片手で腕立て伏せをするという、常人には出来ないような特訓をしていた。

そんな朝霧に、とある人物が近寄る。

「朝ぎ……四楓院。ここに居たのか、もう終業時刻だぞ」

「っ……碎蜂隊長。はい、わかりました」

朝霧の居る二番隊の隊長である碎蜂である。一瞬、碎蜂が以前のように『朝霧様』と言いそうになったが、立場が立場なため、二番隊舎に居る際は『四楓院』と呼んでいる。しかし碎蜂は四楓院家に仕える立場のため、四楓院と呼び捨てにするのも抵抗があったが、朝霧本人の要望により、今のように呼ぶ感じになっている。

朝霧は特訓を終了し、荷物をまとめ始める。

「すみません、隊長。すぐに片付けます」

そう言つて朝霧は碎蜂に笑いかける。その笑顔に、碎蜂は顔を紅潮させる。

「あ、いや、いいの……だ！速く帰宅するといい……」

(……本当に笑われるようになった……)

真央霊術院に入る前は、家でもほとんど笑わずに、笑うと言ってもそれは愛想笑いといったところであった。しかし、今は会話の中で自然と笑みを零すようになった。それが碎蜂にとつては——四楓院家に仕える身としては嬉しいことであった。しかしそのせいで、碎蜂はなぜか動揺することが多くなった。

そしてその度に、碎蜂は少しの罪悪感に苛まれる。

(夜一様ではないのに……)

どうしても比べてしまう。かつての主に。

(それを……この方は嫌悪するだろう……)

夜一と——姉と比べられることを、朝霧は好まない。それを碎蜂

は知っていた。それが、朝霧のコンプレックスであることも。

「どう………したのですか？隊長………」

「へっ？う、うわぁー！」

急に目の前に現れた朝霧の顔に、碎蜂は普段決して上げないような声を出す。

「あ、いいえ！何でもありません！あ………」

つい、以前のような口調に戻る。そんな碎蜂の様子に、朝霧はフツツと笑う。

「隊長………いけません。そのような口調をしましては……。碎蜂殿は既に私の上司なのです。上司ならば、それ相応の言動をせねば他の部下に示しがつきません………」

「わ、分かっており………いるー！」

動揺を隠せない碎蜂に、朝霧は目を細める。

「………姉さまと私を比べておりましたか？」

「えっ………」

押し黙る碎蜂に、朝霧は察する。

「………比べてもよいのです」

「し、しかしー！」

碎蜂は完全に今、四楓院家の仕える者としての立場になっている。

「比べた上で私を見てください。『四楓院朝霧』を見てください。それだけを、お願いしてもよろしいでしょうか？」

「あ………はい………」

朝霧の言葉に、碎蜂は同意する。

「有難うございます」

そんな碎蜂に、朝霧は感謝の弁を言う。

「では、先に上がらせてもらいます。隊長も、お体に気を付けて」

「は、はい………」

修練所を出ていく朝霧を、碎蜂は静かに眺めていた。

「………本当に、お強くなられた………」

アルトウロ

砕けた仮面

手にする刃

相対するのは

仮面を被った者

「はっ……はっ……はっ……!!」

朝霧は走っていた。それこそ全力で。向かっていたのは四番隊舎の病棟。

「卯ノ花隊長?!」

「朝霧さんですか……。こちらへ……」

朝霧の前に姿を見せたのは卯ノ花。その表情は真剣そのものであった。卯ノ花に連れられていったのはいくつかのベッドが置かれている場所。そこには何人もの人が並べられていた。

そのいくつかのベッドの一つの横に、五番隊隊長・藍染惣右介も立っていた。

「君は……?」

「あ……二番隊無席、四楓院朝霧です!……皆は……?」

「……命は取り留めたが、油断は出来ない状態だ。まさかこんなことになるなんて……。僕も同伴していればこんなことには……」

「藍染隊長。あなたが気負うことではありません……」

藍染の自分を責める言葉に、卯ノ花がなだめるように語りかける。そのどちらの表情も、とても悲痛なものになっている。

「恋次殿……吉良殿……雛森殿……」

朝霧は、ベッドに横たわっている痛々しい姿をしている同期に話しかける。その光景に、朝霧は悔し涙を流す。

「何故……?!」

「意識のある隊士に訊いてみた限り、虚に襲われたらしい……。それ

も、かなり強い個体にね……………」

藍染は淡々と答える。だが、その眉間には皺が寄っており怒りのようなものを感じられる。

「…………ぐっ…………藍染隊長……………」

「恋次殿?!」

意識を覚まし上半身を必死に起こそうとする恋次に、朝霧は駆け寄る。その身体の到る所に赤く滲んだ包帯が巻きつけてられており、かすかに消毒液のような匂いが朝霧の鼻孔をくすぐる。

「阿散井君…………目を覚ましたのかい?!」

藍染と卯ノ花も、目を覚ました恋次に掛け寄っていく。

「隊長に…………お伝えしなければならぬことが……………!!」

「阿散井君、横になつてくれ。身体に障ってしまうよ」

そう言つて藍染は恋次の身体を横たえる。恋次は、身体の激痛に耐えながら今回の襲撃について、語りだした。

「虚は、ほとんど人間と同じ姿で…………髪の毛は水色…………背中には流動する赤い翼のような物を有しており…………こう言つてました…………『私の名は、アルトウロ・プラテアド。貴様達死神を抹殺する、破面だ』と……………」

「二つ……………?!」

虚の名前を聞いた隊長二人の表情は、驚愕が浮かぶ。

「アルトウロ…………卯ノ花隊長……………」

「ええ…………すぐに総隊長にご報告せねば……………」

「あの…………その虚は……………」

状況が飲み込めない朝霧は、二人の隊長に問いかける。

「…………アルトウロ・プラテアド。数百年前、瀨霊廷を半壊に追いやり、八十年前にも瀨霊廷に攻め込み、行方不明になっていた虚です」
「なっ……………?!」

「…………あまり想像したくはないが、戦争が始まるかもしれませんね。
卯ノ花隊長……………」

これは、日向の元にまつ梨が現れた三日後の話であった。

「ふう〜。いっぱい買ったな〜」

そう言うまつ梨の手には、大根やニンジン、他色々の食材が入っていた。元々日向が買いに行くと言っていたが、まつ梨がどうしても自分だけで行くと言ったので、日向が仕方なく一人で行かせたために、現在まつ梨は一人である。

「……………片方持つて欲しかったかも……………」

今更である。しかし、その言葉の裏に別の感情が隠れていることはまつ梨自身知らない。

そんなことを思いながら歩いていると、少し広めの交差点に着いた。元々人通りが少ない道を歩いてきたので、必然的のその交差点も人はまばらである。

「はあ……………」

「何をため息を吐いている?」

「えっ……………」

聞き慣れた。そして最も聞きたくない声がまつ梨の鼓膜を揺らした。その瞬間に、まつ梨の背中にどっと汗がにじみ出る。圧倒的な恐怖。それが今、まつ梨のすべてを埋め尽くしていた。そしてそっと、声の聞こえていた方を振り向く。

「っ!!」

直後に自分に降りかかってきた光線のような物をまつ梨は死神化することにより回避する。先ほどまでいた自分の場所は、ぽっかりと大きな穴とクレーターが形成されていた。

「お前は……………アルトウロ・プラテアド!!」

「よく覚えていたな。俺は今、貴様を殺したくてたまらないんだ」

そこに居たのは自分にとつて因縁の敵。見間違える筈がない。あの灰がかつた水色の髪。真紅の霊子の翼。琥珀色の瞳。その表情はすべてを見下しているかのように冷たく、無機質なものであった。

「どういう意味よ……………」

「一瞬とはいえ、俺の至福の時間を邪魔したんだ。それ相応の罰を貴

様に与えたいのさ」

その言葉に、まつ梨の表情は怒りに染まる。そして斬魄刀を抜く。「至福だって……………?!あんなに命を奪って……………それを至福だって?!!!!」

まつ梨の斬魄刀を握る手は震えている。それは、この男に対する怒り。そして恐怖。

「私の力の一部となれたのだ……………それは貴様達、死神にとっても光栄なことであろう……………。それなのにも関わらず、あの女のせい……………!!」

あの女。そう言ったアルトウロの顔はみるみるうちに憤怒の形相となっていく。握られる拳も、爪が手の平に食い込み血が流れ始めた。

「まあいい……………。最近、それに勝る気分のいいことが起きたから……………」

「気分のいいこと……………?」
「貴様の隊長は、中々私の糧になってくれたよ」

「つ……………?!まさか……………?!?!」
「ああ、あと、貴様の兄だったか?あれは駄目だな……………まったく力にならん……………!!所謂ゴミといったところか……………」

「つ……………!!断ち払え———『ことうまる虎淘丸』!!」
直後、まつ梨の斬魄刀はハバキの部分に斧のような刃がついた大刀に変わる。それと同時に、まつ梨はアルトウロに肉迫し虎淘丸を振り下ろす。

しかし、それはアルトウロの人差し指と中指に挟まれることよって防がれる。

「弱者が……………粹がるな」

腹部に奔る激痛。気づくと、自分が民家のコンクリートの壁に激突し崩れた壁に瓦礫に埋まっていることをまつ梨は理解した。

「うっ……………げほっ、げほっ!!」

口の中が切れたことによる血と、腹部を殴打されたことにより胃から逆流したものを口から吐き出した。そんなことをしているのもつ

かの間、アルトウロの右手はまつ梨の喉を掴み、その身体を宙に浮かべた。

「女というものは、常に上品でなくてはな……。まあ、私にとってはさほど関係ないものであるがな」

アルトウロの浮かべる笑みは、『邪悪』という言葉が似合うものであろう。すると、アルトウロの右手をまつ梨の両手が掴んできた。

「よくも……。兄さんを……。隊長を………!!!」

ひどく弱弱しく震える声の持ち主の顔には、二筋の涙が流れていた。それを見たアルトウロは口角を吊り上げ、さらに掴む力を強める。直後に、少女の口からは空気がひゅつと抜けるような音がし、腕を掴む力も幾分か弱まる。しかし、それでもまつ梨の目はアルトウロを捉えていた。

「弱いのは悪だ。貴様の兄達が、私よりも弱かったからいけないのだ」
そう言ってアルトウロは、まつ梨の身体を電柱にぶつける。直後に電柱は碎け、倒れていく。そして、アルトウロの右腕には少女から流れてくる血により赤く染まっていく。

「……………っ!!……………え……………!!」

言葉にならない罵倒を、まつ梨はアルトウロにぶつける。その様子に、アルトウロはさらに殊勝な表情をする。

だが、そう長く続かなかった。

「離しやがれ」

直後、アルトウロの右腕から鮮血がはじけ飛ぶ。その痛みに、アルトウロはまつ梨を放してしまう。そして直後に、何者かに抱えられたまつ梨とアルトウロの間には十数メートルの距離が出来た。

「まつ梨……………すまねえ……………!!」

「ひゅ……………うが……………ありがと……………」

日向は、傷だらけのまつ梨の身体を強く抱きしめる。それに対しまつ梨は、安堵の表情を浮かべる。やがてまつ梨を近くの電柱に移動させた日向は、凄まじい形相でアルトウロを睨みつける。

「てめえがアルトウロか?」

「そうだ……………そういう貴様は何者だ?」

「護廷十三隊十三番隊第三席、天宮城日向」

「ふんっ……………三席か。話になら……………」

アルトウロの言葉は、顔の横を通過した一筋の光線により遮られる。それにより、アルトウロは驚くのではなく、笑みを浮かべる。日向が放ったのは破道の四・『白雷』。霊圧が高くなるほど威力、速度、太さが増す鬼道である。日向の放った白雷を見たアルトウロは、その威力を見たことにより、自分の目の前にいるのはただの三席ではないことを直覚する。

「成程な……………貴様は良い糧になりそうだ……………」

「糧だがなんだが知んねえが……………まつ梨を傷つけた罪、てめえの命で償ってもらうぜ？」

「ほざけ、雑魚が」

そう言つてアルトウロは、日向に対し素手で向かっていく。それに対し日向は、白皇に閃光を纏わせる。そして、再びアルトウロに向かい白皇を薙ぐ。しかし、その刃はアルトウロの皮膚を切り裂くことはなかった。

「なっ……………?!」

「ふんっ!!!」

直後、日向はアルトウロが放った蹴りによって吹き飛ばされ、民家の壁に激突したことにより、やっと停止した。

「はははっ!!!」

「縛道の六十一・『六杖光牢』!!」

向かって来るアルトウロに、日向は六つの光の帯を突き刺す。それによりアルトウロの動きが鈍り、そのうちに日向は逆にアルトウロに瞬歩で接近する。

「破道の八十八・『飛竜撃賊震天雷炮』!!!」

爆音と共に、直径が十メートル以上ある光線がアルトウロを包み込む。あまりの威力に、大気は震え、辺りには砂塵が舞う。

数秒の爆音の後、アルトウロは閃光の中から出てくる。その服は到る所焼け焦げているが、アルトウロ自身はさほどダメージを負っていないように思える。

「ちっ……………化け物が……………」

「いいぞ……………貴様はあの女よりも良い!!」

日向は、アルトウロの信じがたい堅牢さにらしくない悪態をつく。逆に、アルトウロは日向に実力に先程よりも興奮している。

日向は、焦っていた。詠唱をしていないとはいえ、自分が放ったのは八十番台の鬼道である。しかし、アルトウロはそれを耐えきるところか喰らってすらいらない様子を見せる。

「わたしの鋼皮イェロを焦がすとは……………想像以上だ!!!」

アルトウロは叫びながら、再び日向に肉迫する。先ほどとは比べ物にならないほどの速さである。

「貴様の底を、もつと見せてみろお!!!」

アルトウロの振り下ろされる拳を日向は瞬歩で回避する。しかし、霊圧を知覚する前に再びアルトウロが日向の眼前に現れる。

(こいつ……………霊圧知覚に引つかからねえ?!!)

そう考えながら日向は、アルトウロの拳を白皇で受け止める。尚もまた、刃で受け止めたはずなのにも関わらず、アルトウロの拳が切り裂けることはない。勢いのままに、日向はまた、数メートルほど吹き飛び今度はちゃんと両足で着地する。

その短い攻防の中で、日向は既に息を切らしていた。

「虚閃!!」

アルトウロが口腔から放ったのは灰色の閃光。地面を削りながら日向に進撃するそれは、もはや生物なのではないかという勢いすら感じられた。

直後、日向の身体は光に飲まれた。

「……………ちっ。この程度か……………」

その様子に、アルトウロは落胆の表情を見せる。

しかし……………。

「烈閃刃!!」

白い閃光を纏った刃がアルトウロの背中を襲い、今度は血が噴き出た。

「……………何っ……………?!」

すぐさま、後方にいた死神との距離をとるアルトウロ。その表情は驚愕を含むと同時に、新しい玩具を見つけた子供のような笑顔をしている。

「貴様……いつの間に？」

「あれは囷だ。よくひっつかかってくれたな。助かったぜ」

先ほどの囷と言われた日向が居たところを確認すると、黒く焦げた人形が霊子に分解していた。

それを見たアルトウロは興味深そうに眺める。

「思っていた以上だ……まさか、私の鋼皮を破るほどの斬撃を繰り出せるとは……」

「お前の肌が軟いだけじゃねえのか？」

その挑発に対し、アルトウロは余裕の笑みを返す

「フハハハ……私はまだ本気の半分も出してはいないぞ？ 精々、すぐに死なないように……神経を尖らせろよ？」

瀨霊廷では現在隊首会が開かれていた。

生存が確認された破面——アルトウロ・プラテアドの対策についてだ。

「由々しき事態である……」

こう口を開くのは総隊長——山本元柳斎重國である。

「すぐさま瀨霊廷すべてに、厳戒体制を張るように伝達するのじゃ!!」

「し、失礼します!!」

そう言って隊首会の場に入ってきたのは、隠密機動の裏廷隊である者であった。

「何だ貴様は?! 今は隊首会だぞ!!」

「すぐさま、隊長達にお伝えしなければならぬことが!! 破面・アルトウロ・プラテアドと思わしき霊圧が、現世空座町にて補足! 現在、空座町担当の十三番隊、天宮城日向三席と思われる霊圧と交戦している模様!!」

その言葉に、浮竹は驚愕する。

「日向が……!!?……総隊長、私に現世に向かう許可を！」

「待て。私が行こう」

浮竹を右手で制したのは、六番隊隊長の朽木白哉であった。

「兄は、身体に些か不安がある。万が一も考え、隊長のなかでも若輩である私が行くのがいいだろう……」

「なら、僕も行きますわ」

こう言ってくるのは、三番隊隊長の市丸ギンである。

「今戦ってる子の保護も考えたら、二人で行った方がいいんじゃないですか？」

「……私一人では、力量不足だと言いたいのか？」

「そんなことちやいますわ、朽木隊長。ただ、庇いながらよりは一人清々と戦う方がええんちゃうかなくと思ひましてね……」

「……勝手にしろ」

「ふむ……ならば、お主たち二人で行くがよい。可能ならば即座に討伐せよ!!これにて、隊首会を終える!!」

山本がそう言うのと、隊長たちはそれぞれの持ち場に戻っていく。その中で浮竹は、先程の二人を追う。

「朽木隊長、市丸隊長……うちの隊士をよろしくお願いします……!!」

「あいわかった」

「じゃ、浮竹隊長。僕らはさっさと救援に行ってきますね」

そう言うのと二人は瞬歩で浮竹の目の前から消えていった。

「……死ぬなよ、日向……!!」

浮竹は、祈るしかなかった。

真実

知るも罪

知らぬも罪

最も罪深きはヒトと知れ

「はあ……はあ……はあ……!!!」

「ふんっ……やはりこの程度か……」

身体中から流血する日向に、アルトウロは落胆の意を唱える。あれから、十数分ほど交戦したが、アルトウロが圧倒していた。それは、アルトウロが強いというのもあるが、もう一つ理由がある。

(虚化を使えりやもう少し食いつけるのに……!!!)

先日、平子に言われた言葉。それが日向の、虚化をするという手段を縛り付け、こういつた一方的な展開になってしまっている。この霊圧の相手ならば、瀋霊廷が^{メノスグランデ}大虚級と補足し隊長格を今頃こちらに派遣しているだろう。その予想が、虚化を控えるという考えに拍車をかけている。いつ来るか分からない救援。そのために日向は、不利な状況に追い込まれてしまっている。

「……このままではつまらん……そうだ。あの女を殺している間に貴様に休んでいてもらおうか……」

「なん……だと……?!」

その言葉に日向は驚愕の表情を浮かべる。今、まつ梨は重傷である。その状態でこの破面から逃げられるとは思わない。

日向は即座に、左手を顔に翳す。

(こんなつまらねえことでアイツ死なせるくらいなら、俺は自分の立場くらい簡単に捨てれる!!)

「待ちい。俺が、あいつの相手するから、その間にお前はまつ梨ちゃんとか行き」

「……?!平子さん……!」

日向の左手を止めたのは、平子であった。さらに後ろの方には、別の霊圧を複数感じる。

「……………!! 貴様は、平子真子!! フハハハ!! よもやこんな場所で隊長格に遭う事が出来るとはな!!!」

そう叫び、アルトウロは平子に突貫する。それを平子は瞬歩を使用し躲す。左腕には日向を抱えている。

「日向、ようやった。後は俺に任せとき!!」

「っ!!……………分かりました、ありがとうございます!!」

日向はそう言つて、まつ梨の元に去つて行く。この場には、平子とアルトウロが視線を交えている。

「……………まあ、俺は他の隊長さん来るまでの繋ぎやからなあ……………時間稼ぎだけさせてもらおうで?」

「その前に、貴様の首をもらおうか……………」

アルトウロは、平子の姿を眼球に映し、今すぐにでも殺してやろうといきり立っている。それは、アルトウロから放たれる霊圧が物語っていた。

それに対し平子はため息を吐く。

「そうかつかするなや。じゃあ行くで……………倒れろ———『逆撫』さかなで」

直後、アルトウロの世界は反転した。

「まつ梨!!」

「……………日向?! 血がつ……………!!」

まつ梨は、日向の血濡れの姿に目を見開く。

「アルトウロは……………?!」

「あ……………今は、違う人が戦ってくれてる! 安心しろ、強い人だから!」

まつ梨が今にも泣きだしそうな表情で訊いてきたので、日向は優しい口調で返答する。

「ここから離れるぞ。今することはそれだ……………」

「それなら、うちに来てみてはいかがですか？」

「っ?!」

突如背後から聞こえてきた声に、日向は振り向く。そこには帽子に甚平、下駄に、杖を持っている男が居た。

「う……浦原隊長?!」

その姿を見たまつ梨は声を上げる。

「隊長……?!」

日向は、まつ梨の『隊長』という単語に反応する。浦原隊長――

――八十年ほど前に、尸魂界の十二番隊隊長に『浦原喜助』という人物がいたが、おそらくその人だろうと日向は予想する。

「とりあえず、治療は請け負います。まつ梨さん、来てくれますよね？」

「は、はい!!ほら、日向も!日向の方が重体だし……!!」

「待てよ……。あなた、元十二番隊隊長の浦原喜助か？」

「そうっすけど……。何か？」

「あなた……尸魂界を追放された身分で何してるんですか？」

「えっ……?」

『追放』という言葉に、まつ梨の目は困惑の色を宿らせる。

「それはちよつと、ここで話すには色々……」

「何してるのかって訊いてるんですよ!!」

日向の怒声に、まつ梨は身体をびくつと揺らす。

「……とりあえず、後で話しますから治療をしましょう。あなただって、いつまでもまつ梨さんに怪我を負わせたままにしたいんすか?」

「っ……!……分かりました……」

日向はそう言うと、素直に浦原に付いて行くという意思を見せる。

「さ、行きましょう!平子さんが時間を稼いでるうちに!」

「おっと……この霊圧は……じゃあ、俺はここでお役御免やな。さいなら〜!」

「待て！平子真子!!」

逃げようとする平子にアルトウロは虚閃を放つ。しかしそれは平子を捕えるには至らない。そうしている間に、平子は瞬歩でアルトウロの視覚から消えていった。その後、次第に自分の感覚が元通りになっていくことをアルトウロは感じた。

「ちっ………さすがに『不滅王』フエニイチエがなければ不利は否めないか………」

そんなことを呟くアルトウロは、次に今まで感じたことのない霊圧を二つ感じる。そして、その霊圧の大きさに口角を吊り上げる。

「デカいな………隊長格か?………消耗した今ではさすがに厳しいか………?」

しかし、冷静に現状を分析する。先ほどまで隊長格と交戦していた自分は、少なからず霊力を消耗してしまっている。さらにアルトウロは自分の力の根源を今有している状況ではない。その状態で隊長格二人を相手取れるほど、アルトウロは驕ってはいなかった。

しかし――。

「散れ――『千本桜』せんほんざくら」

「っ!!くっ!!」

突如自分に降りかかってきた、数多もの桜の花弁状の刃を高速歩法と、隊長羽織を着た男二名がこちらを見つめていた。片方はマフラーをする男。もう一人は狐のような顔の男。ここからでも分かる、こいつらは出来る。アルトウロはそう感じた。

「兄が、件の破面という者か?」

「そういう貴様は誰だ?」

「私は六番隊隊長、朽木白哉だ。瀨霊廷より、兄を打ち取るように仰せつかっている」

「それと、僕は三番隊隊長の市丸ギンや。よろしゅうな」

隊長という言葉に、アルトウロは邪悪な笑みを返す。

「そうか………だが、本調子でない今、貴様たちと戦うつもりはない。ここは退かせてもらおうか」

「させると思うか?」

再び数多の花弁がアルトウロに迫ってくるが、それをアルトウロは虚閃で相殺する。その様子に白哉は幾分か驚いた様子を見せる。

「あらら、朽木隊長の千本桜を相殺するなんて結構な威力の虚閃やな」

「……………兄は何をしている？」

「いや、浮竹隊長に言われた子の霊圧探つとるんけど、まったく見つからんなくって思うてな？」

「そうか……………ならば、こやつ相手は私一人に任せてもらおうか」

「まあええよ」

すると白哉は、瞬歩でアルトウロに接近する。アルトウロも響転で距離をとりながら、虚閃や虚弾バラを放つ。それを白哉は、千本桜を盾のように展開しながら肉迫していく。このままでは埒が明かないと感じたアルトウロは、ある動作を始める。

「あまり使いたくはなかったが仕方あるまい……………」

アルトウロは、自分の血と霊圧を混ぜはじめる。すると、アルトウロの前に凄まじい霊圧の光球が生まれる。その霊圧の高さに、白哉のみならず、市丸もいつも糸目であるその目を見開いている。

「消飛べ——『王虚の閃光』！』」

先ほど、白哉に放った虚閃など可愛く見えるほどの巨大な破壊の閃光が白哉に襲いかかる。それに対し、白哉もある手段をとる。

「卍解——『千本桜景厳』」

白哉の握っていた刀身のない刀が、その柄さえも桜の花弁へと変貌していき、直後に先程とは比べ物にならない程の花弁が、白哉の後方から『王虚の閃光』へと向かっていきやがて凄まじい閃光を発しながら衝突する。数秒程に渡る暴虐の鏖迫り合いは、先にアルトウロの『王虚の閃光』がその勢いを衰えることにより、花弁がそれを包み込み終息した。

しかし、そこにはアルトウロの姿はなくなっていた。

「……………逃げられたか……………」

「途中で『反膜』ネカンオン見えたから、それやないかな」

反膜とは、大虚が同族を助けるために放つ光であり、その対象が光

に包まれたが最後、光の内と外は干渉不可能になる。

「……………大^{メノスグランデ}虚であることは確定した」

「あれやと、最上級大虚^{ヴァーストローデ}やないかなあ?」

飄々とした態度で市丸は、相手の詳細を分析する。

「……………兄は、隊士の霊圧を補足出来たか?」

「いや、全然やわ。三席言うから結構大きめの感じるかな思ってたけどな」

「…ならば今は退いて瀨霊廷に帰還したのち、搜索隊を編成するように伝えよう」

「そうやなく、浮竹隊長に顔合わせるの辛いわ」

「……………そうは見えぬな」

そう言ってから二人は穿界門を開き、尸魂界に帰還していった。

「漬物はいかがですか?」

「……………ありがとうございます」

日向は現在、おさげに眼鏡というルックスの男性に漬物を振舞われている。その横には、包帯姿のまつ梨もいる。そんな日向も、まつ梨以上に包帯を巻かれている。

二人が居るのは、『浦原商店』と看板を掲げている店の中である。そこには、浦原とそのおさげ眼鏡ダンディがいる。ついでに、奥には座布団の上に黒猫が横たわっている。

「それでは、何かからお話ししましょうか?」

話を切り出したのは浦原である。

「……………とりあえず、何故追放されたあんたがここに居るのかってことから聞きましょうか」

「なるほど、妥当な質問ですね。ならお答えしましょう……………ちなみに、後悔はしませんね?」

その言葉に日向は思案顔になる。なぜ自分が後悔するのか。そう

いった表情である。

「これから話すことは、あなたの瀨霊廷での生活に支障をきたすもの……いや、あなたを傷つける結果になってしまいかもしれません。それでもいいですか？」

「……ああ。戦う覚悟ならとつくの昔に出来てますよ」

「なら、お話しします。……あなたは、八十年程前の流魂街での変死事件について知っていますか？」

「……名前だけなら」

「なら、ここからは一気にお話ししますね？その調査に駆り出されたのが、あなたが先日お会いした仮面の軍勢の皆さんです。元々は九番隊が調査に向かったんですが、途中で消息を絶ってしまいましたね……それで向かったのが、平子さんたち他数名というわけです。そのほとんどが隊長格……他の方々からすればかなり安心できる編成であつたんですがあたしはどうも胸騒ぎがしまして……それで、当時鬼道長であつた鉄裁さんと一緒に現場に向かったんです。そしてそこで見たのは虚の仮面を被り自我を失ったみなさんでした……」

「っ……!!？」

その話に、日向だけでなくまつ梨も驚愕する。

「彼らをそのような状況に追いやった人物……それは——」
「待ってください、浦原隊長」

浦原が名前を言おうとした瞬間に、日向はそれを止めた。

「……どうしたんすか？」

「まつ梨を、席から外して欲しいんです。俺は覚悟は出来てますが、まつ梨には訊いてないでしょう？」

「……そうですね。まつ梨さん、席を外してもらえますか？」

「……でも……」

「今のあなたに、日向君と同じ覚悟を背負えますか？」

「っ……！……わかりました……」

「ではまつ梨さん、こちらへ……」

そう言うともつ梨は、鉄裁に奥の部屋に連れて行かれる。

「じゃあ、続きをお話ししましょう。その正体は、現五番隊隊長で当時は五番隊副隊長であった藍染惣右介です。そして、彼には現九番隊隊長の東仙要が付きましたがっていました」

「っ……………!!!?」

あまりの事実に、日向は動揺する。あの温厚な人が？信じられない事実に、日向の顔は険しくなる。

「彼らが行っていたのは、死神の虚化の実験。それによって平子さんたちは虚にされかかっていたんです。その後、あたしたちの前から藍染が姿を消し、そして鉄裁さんは禁術である、時間停止・空間転移を行い平子さんたちの虚化を一時的に止めました。その後瀨霊廷に戻った後、あたしたちは四十六室に連れていかれました。無断出撃と禁術使用。その罪に対し、あたしたちは必死に藍染のことも一緒に話し弁明しました。しかし、あたしたちはすでに藍染の術中に嵌っていたんです」

「術中?」

「彼の斬魄刀、『鏡花水月』きようかすいげつです。その能力は、解放した瞬間を見ていた者の五感を完全に支配するものであり、すでに瀨霊廷中の要人は藍染の鏡花水月によって錯覚を見せられており、藍染の当時のアリバイが完全に出来上がってしまっていました。その後、あたしたちは牢獄に入れられましたが、その後二番隊隊長だった夜一さんによって助けられ、処分されると決定されていた平子さんたちと共に現世に逃げてきたんです。……………ここまで、理解できましたか?」

「……………なんとなく。つまり藍染隊長の策略だと」

「そういうことっす!思ったよりもすぐ信じてくれましたね」

「……………平子さんたちに、藍染隊長に気を付けろって言われたばかりですし、虚化の実験って……………色々と辻褃があっちゃうんです」

「……………君もですか?」

「直接された記憶はないんです。でも俺の中の虚が、何者かによって俺の魂魄が虚に変貌してしまった、って……………俺はそれを探るために死神になって……………」

「十中八九、それは藍染による実験じゃろな」

「猫が喋った?!」

突如、座布団に横たわっていた猫がはつきりと喋りはじめたので日向は今日一番であろうリアクションをとる。

「まったく夜一さんったらあゝ」

「……………夜一？もしかして、元二番隊長の四楓院夜一ですか?!」

「いかにも」

「……………四楓院隊長も実験で？」

「違うわ!!」

日向のガチな質問に、夜一は本気でツッコむ。

「……………朝霧が心配してますよ？」

「……………そうか。こんな姉でも、あやつは心配してくれるのか……………」
猫の顔なのであまり表情は読み取れないが、その目から感傷に浸っているように日向は思えた。

「……………そうじゃ、碎蜂はどうじゃ？」

「碎蜂隊長なら、朝霧に過保護で有名ですよ？」

「なんじゃ、あやつは隊長になっておったのか。随分時間が経ってしまっただけ」

『『私の四楓院家に対する忠誠は変わらない!!』って言ってました……………たぶんそれが朝霧に向かってますね』

「……………嬉しいような、複雑なような……………」

「朝霧も今年二番隊に入りましたし、毎日碎蜂隊長と特訓したりして元気にやっています」

「そうか……………それが聞いただけで十分じゃ……………」

「まあ、それは置いといて……………日向さん。あなたはどうしますか？」
夜一との会話に浸っていた日向に、浦原は今後のことに対し問いかける。

「……………藍染隊長が首謀者だとしても、俺一人では何にも出来ないですし、今はそのことに関しては動けません……………それに、今一番気になるのはアルトウロのことです」

「藍染に関してのことはそれが賢明でしょう。そうです。今はアルトウロ・プラテアドの対策が一番肝心なんです!!」

そう言う浦原は持っていた扇子を、バサツと広げる。

「あの破面は危険です。……あ、こっからはまつ梨さん呼びますか？」

「そうですね。呼びましょう」

「鉄裁さ〜ん！まつ梨さん呼んで下さ〜い！」

すると数十秒後に、鉄裁と共にまつ梨が出て来た。その手には何個かお菓子が握られている。口の周りには駄菓子の食べかすのようなものが付いていた。

「は、はいー」

「ささ、どうぞそちらに！では、みなさん揃ったことですし話しましょうか！じゃあまず、アルトウロの能力について話しましょう。その能力は、彼が殺した死神の数だけ強くなっていくという、死神にとって相性最悪のものとなっています。その能力によって、初めて彼が現れた数百年前は、瀨霊廷が半壊し、当時の隊長たちによって封印するという形がとられました。そして、今から八十年前何かを拍子にその封印が解け、再び彼が瀨霊廷に進軍してきたんです。その時いたのがまつ梨さんっすね」

「はい……………」

「その時、アルトウロの進軍を止めるきっかけとなったものが『熾水鏡』と呼ばれる道具です。それは、対アルトウロ用に用意された決戦兵装具であり、特殊な力をもった方しか扱えませんでした。その力は強大。対象の霊力を吸収するというものであり、アルトウロの霊力を半減させることにより、その場を凌げました……………」

「でも、アルトウロは生きて……………」

その事実を咄くとともに、まつ梨は唇をかみしめる。

「その『熾水鏡』を扱えたのが、当時十番隊隊長であった朱司波征源さんの姉、朱司波伊花さんでした。しかし、その力を扱うのには身体に大きな負担がかかってしまう……………彼女はその後、亡くなってしまう……………」

「そんな……………?!」

その事実にもつ梨は驚愕する。この様子だと、まつ梨自身知らなかったのであろうと日向は考える。

「……………現状、『熾水鏡』を扱える人物が居ない以上瀦靈廷は、『不滅王』フエニイチエと呼ばれる彼の斬魄刀の能力によって霊力が底上げされた彼と直接対決しなければなりません」

「……………全面戦争ですか？」

「免れませぬね……………彼が、瀦靈廷に進軍して来た際は数多くの虚を従えてやって来ました。そこには大虚もいました。彼の能力と戦力上、彼とまともにやりあえるのは隊長くらいでしょう……………」

その言葉に、まつ梨だけでなく日向も表情を強張らせる。

「俺は……………どうすれば……………?!」

「日向さん、厳しいことを言うようですが今のあなたではアルトウロにやられて、わざわざ敵の霊力を高めてしまう……………直接戦うのは避けた方がいいでしょう。君の始解の事も承知していますから……………」

「……………そうっすか……………」

「君は、今君がすべきことを考えて行動してください」

「……………分かりました」

そう言うと日向はその場を立つ。

「ちよ、どこ行くの?!」

「家に帰る」

「あ、日向さん。まつ梨さんをしばらく貸してもらってもよろしいでしょうか?」

「……………まつ梨がいいなら、それでいいです」

「分かりました。お体に差し支えにないように」

そして、日向は浦原商店から消えていった。それをまつ梨は、どこか遠い目で眺めていた。

「あの……………なんであたしを?」

「まつ梨。力が欲しいか?」

こう訊いてくるのは夜一である。その真剣な表情から、まつ梨も真剣な表情へと変わる。

「……………はい!」

「ならば儂に付いてこい……………卍解の修行をするぞ」

「は、はい!!」

「平子さん、失礼します」

「お、どうやった日向？」

日向は現在、仮面の軍勢のアジトに来ている。

「平子さん、しばらく場所を貸してほしいです」

「ん？なんでや？」

「……………卍解の仕上げをします」

「っ…………!?……………分かった。好きに使い」

平子の許可を得た日向は、アジトに中心らしきところに座り込む。

「ハッチさん。俺のまわりに結界お願いできますか？」

「畏まりマシタ」

結界が日向を囲ったのを確認すると、日向は刃禪を始める。すると日向の目の前に、白いロングコートを着た、三本角が生えた兜を被る女性が現れた。その長い髪は漆黒を彩り、その双眸からは美しい金色の瞳が覗いている。

「……………行くぞ」

『ええ……………始めましょう、日向。最後の試練を』

直後、二人の間に刀同士がぶつかり合い、火花が散る。

「鉄裁さん」

「どうしたのですか？」

「……………そっくりでしたね」

「……………性格はともかく、面影はまるで生き写しのようでしたな」

「……………言うべきだったんすかね。あの事」

「……………まだ、その時ではないでしょう」

「……………そうっすよね。今はアルトウ口で彼も手一杯なんすから、今

あの事彼に話しても、混乱するだけでしょうね」

「……………はい」

「……………鉄裁さんはやっぱり、彼の事を」

「孫のように思っております。例え、血が繋がっていなくとも、菖蒲殿は私の娘同然でした」

「……………そうつすよね。……………もうあれも、百年以上の前の話なんですからね……………」

「……………私は、彼が生きていると分かっただけで感無量です」

「ホント、おつきくなっっちゃったつすからねエ……………」

「そして私は、彼が母親のように強く生きる事を切に望んでいます、店長」

「……………菖蒲さんみたいにつすか？」

「フツ……………些か、やんちや過ぎますかな？」

「そうつすよねエ。何発ボディーブロー喰らったか分かりませんもん」

「……………懐かしいですな」

「ええ。ホント……………」

「……………日向殿。強く生き残るのですぞ」

各所

仮面を被り演じる役者は

心はすでに別の魂にすり替わっている

仮面の数とは役の数

身体を変えられない私たちの

心を引き寄せる娯楽

「あいつがやられたなんて、そんなの信じられるわけねえじゃないですか、隊長!!」

こう叫ぶのは、十三番隊副隊長である志波海燕である。

「分かっている！今は捜索隊が必死に日向を探している！副隊長であるお前が取り乱してどうする?!」

「っ……………!!」

——十三番隊第三席、天宮城日向が行方不明となりました。

これが十三番隊の隊舎に届いたのは、つい先程である。現世に向かった朽木白哉と市丸ギンの報告であり、霊圧知覚能力が高い二人がこう言うという事態に、十三番隊の多くの者は日向の生存に絶望した。

「……………頭冷やしてきます……………!」

「ああ……………」

海燕は障子をピシッと閉めて部屋から出ていった。それを浮竹は悲痛な目で眺めた。弟と慕った人物が行方不明だなんて、誰も信じたくはないだろう。そして浮竹自身も、日向の父親のような存在であり、互いに慕い、慕われていた。浮竹も、海燕と同じ程の心痛に駆られていた。

「失礼……………します……………」

そうやって障子の向こうから出てきたのはルキアであった。その

瞳からはハイライトが消え、まるで生氣を感じられない。

「浮竹……………隊長……………」

何も言わなくても、浮竹にはルキアの心痛が痛いほどわかった。同期であり、友人であり、心の支えとなってくれた人物が行方不明と言われたら、誰だってこうなるかもしれない。しかし、そうであっても今のルキアの表情はとても他人に見せられるものではなかった。

「朽木……………何も言うな。日向はきつと無事だ」

そう言つて、浮竹はルキアの頭を自分の胸元に抱き寄せた。まるで父親の様に。それに対しルキアは、ただ嗚咽を漏らして浮竹に縋り付くだけであった。

（必ず生きて戻つてこい、日向！）

「うむ。では、お主にはこの道具を使つてもらおう」

「これは……………？」

「これは、てんしんたい転神体と言う道具じゃ。これを使えば強制的に斬魄刀の本体を具象化することが可能になる。お主も、卍解を習得するための工程を知つておるじゃろう？」

まつ梨と夜一は現在、浦原商店の地下にある、広大な広間に来ていた。そこは、荒野のような光景であり、土と岩しか存在を見受けられない。そして夜一は現在、人間の姿になっている。

「はい。斬魄刀を『具象化』し『屈服』させるんですよね？」

「そうじゃ。これはその『具象化』の工程をすつ飛ばせる代物なのじゃ。隊長格ならほとんど卍解を習得しているのだが、口を揃つてこの『具象化』に時間がかかると言う。しかし、今は一刻の猶予もない。これを使い、来るべき決戦のために力を付けねばなるまい！」

「はいっ!!」

「うむ、良い返事じゃ！では早速始めよう。さあ、斬魄刀でこの転神体を突き刺すのじゃ」

そう言われるがままに、まつ梨は斬魄刀を転神体に突き立てる。すると、斬魄刀の本体と思われる物体がやがて姿を現してきた。そし

て、その姿にまつ梨は驚愕する。

「……兄さん……?!」

そこにいたのは、兄・藤丸にそっくりな人物。

「成程……双子の斬魄刀ゆえのその姿か……」

藤丸とまつ梨は双子であった。そのことを、夜一をはじめ多くの人物は承知している。斬魄刀は己の魂と言っても過言ではないもの。つまりその根源が、双子故に似通ってしまったのではないか。そういった予想を、夜一は口に出した。

「……あたしは行く！……ここであなたを屈服させて、覚悟を見せる!!」
まつ梨の振り切った様子に、夜一は安堵する。兄の姿故情けをかけて戦えないのではないかという心配があったが、それは杞憂であったらしい。

「はあああああ!!」

そう叫び、まつ梨は虎洵丸の本体に向かっていく。

「………頑張れよ、まつ梨」

「んだ、このやり合いは?」

「………派手にやり合つとるの」

銀髪——六車拳西が平子に言うのは、日向とその斬魄刀の本体との戦闘である。一進一退の攻防。それは、互いに共に戦いあう存在であるにも関わらず、そこには一切の余裕もない真剣な勝負であった。

しかもそれを一時間以上続けているのだというのだから、仮面の軍勢は驚きを隠すことは出来ない。

「………殺し合いやな」

これが平子の率直な感想であった。

「ひゆうたん、凄いい頑張ってる〜!」

こう呑気な感想を漏らすのは、ライダースーツを纏っている少女——

久南白くなましろであった。

「ラブ………君はこの戦い、どう思う?」

こうアフロヘアの男性——愛川羅武あいかわらぶに訊くのは、伊達男のよう

な風貌の男——おおとりばしろうじゅうろう 鳳 橋楼十郎であった。

「俺もここまではやり合わなかったな……………」

元隊長である二人の会話。それこそがこの戦いの激しさを物語っているとも言えよう。

「クラシックのような曲調の中に、彼らの魂ハートのヘヴィメタルなメロディが聴こえてくるようだね……………」

「何言ってるか分からんぞ」

楼十郎——通称・ローズに、ラブは辛辣なツツコミを入れる。

「……………あいつの斬魄刀、あんな形やつたつけ？」

こういった疑問を投げかけるのは、おさげに眼鏡、セーラー服を着ている矢胴丸やどうまるリサである。

この言葉に、全員一斉に日向の手元を見る。その右手には白……………というよりは、閃光を放ち白銀に輝く太刀を有しており、左手には黒い炎のようなものが噴き出している鞘を有している。日向は、鞘で相手の攻撃を防ぎ、太刀で斬るといったシンプルな戦闘方法で具象化した相手と戦っている。

「あの鞘、かなりの硬度デスヨ？」

こう言うのは、寸胴な体に桃色の髪うしろだはちげんの男——有昭田鉢玄。通称・ハッチである。その言葉に、今度はハッチに視線が注がれる。

「あの女性の斬撃……………私の結界を一気に五枚全て斬り裂く威力がアリマス。しかし、それをあの鞘は何度も防いでいマス……………」

そして次は、具象化した日向の斬魄刀である女性に視線が集まる。よくよく見てみると、斬撃の余波だけでさえも結界が一枚斬り裂かれている。

「アホみたいな威力やな……………」

こう驚嘆の言葉を漏らすのはひよ里である。

「これは俺の仮説やけど、あいつの斬魄刀の『屈服』の条件は、あいつ自身の卍解に打ち勝つことやあらへんか？」

「そりゃあ無茶苦茶だぜ、真子……………」

卍解とは、始解のもう一段階上の斬魄刀の解放であり、そのほとんどが始解の強化となっている。さらに、卍解した際の霊力は始解の五

倍から十倍と言われている。つまり、始解で卍解に打ち勝つなど、到底出来ないことなのである。その平子の仮説に、拳西は不可能だと言葉を漏らす。

「だが、彼らの曲調はさほど変わらないように思えるよ……………」

「ああ……………確かに、霊圧はあんまり差がねえな」

ローズの抽象的な表現に、ラブが補足を入れる。二人の戦いには、一方的な蹂躪などは存在せず、実力が拮抗したまま攻防を繰り広げている。

すると、急に二人は刀を下ろし具象化した斬魄刀の方は消えていった。

「どうしたんや、日向?」

「……………腹減ったんで、何か食いに行ってきます」

その言葉に平子だけでなく、多くの仮面の軍勢がずっこける。あれほど熾烈な戦いを繰り広げていたのにも関わらず、それを止める理由が空腹とは……………という感想がほとんどであった。

「待ちい、日向。それならこの紙に書いてある物買ってきてくれへんか?」

そう言つて、リサが日向にメモのような物を渡した。そのメモに書いてあるものを日向は一通り目を通す。

「……………鍋でも作るんですか?」

「そや。お前も食べてええから。だから、買ってくるのはお前に頼んだで?」

「お金はどうします?一応、買える分の金は持ってますけど……………」

「それならお前がここに戻ってきたときに、返してやるから安心しい」
「分かりました。じゃあ、行ってきますね」

そう言つと、日向はさっさと買い物に出かけていった。

「ほらあ!!じゃんじゃん飲みい!!」

「いや〜愉快やわ〜!!」

「……………何で、宴会っぽくなってるんすか?」

日向が鍋の材料を買い終え、仮面の軍勢のアジトに戻り鍋を作った後、何故か全員で宴会をする雰囲気になっていた。平子やひよ里は始め、多くの人物が酒をジョッキで飲み干したりしている。

「いや、やっぱこういう時は英気を養わへんとな〜!!」

そう言つて平子は、ビールの入ったジョッキを日向に渡した。

「……………俺、下戸なんですけど……………」

「構へん構へん!!この機に飲めるようになったらええやん!!」

そう言つてグイグイと勧めていく平子に遂に折れ、日向はビールを飲み始める。そして、苦虫を噛み潰したような表情になる。日向は食事に関しては好き嫌いのない人間であるが、酒だけはどうしても駄目なのである。甘酒や粕漬けなどは大丈夫なのであるが、本当にアルコールがしっかりしているものは飲めないのである。曰く、苦みがあるのも駄目らしいのだが、せんぶり茶などは普通に飲めるので、周りに不思議そうに見られたらしい。

それでも残すのは申し訳ないと思つているのか、鍋の具材を食べながらちびちびと飲んでいく。

ちなみに、鍋はキムチ鍋とごま豆乳鍋の二つが並んでいる。

「あくん、けんせ〜!!鶏肉とらないでよ〜!!」

「うるせえ、まだあるだろうが!自分で取れ!!」

「うくん……………この、豆乳と出汁が滑らかなハーモニーを……………」

「ローズ、このホタテ貰うで」

「ああ!?僕ホタテが!!」

「白菜も中々旨いな……………」

「いや、やっぱり鍋はキムチに限るわ〜!!」

「ひよ里さん、お肉だけでなく野菜も食べないト……………」

「うっさいハッチ!!うちは好きなものだけ食う主義や!!」

「……………この牡蠣、何かエロい形しとるな。まるで、女の」

「はい、自主規制いいいいいい!!」

リサがとんでもないことを言おうとしたので、日向は全力で阻止する。

「……………なんや日向。お前もしかしてやったことあるのか?」

「ないっすけど、だいたいヤバいことだつてことは分かりました!!」
「何やお前、女と一発やったこともあらへんのか。そんな仰山してそ
うな顔しとるのにな」

「そんな顔つてなんですか……………」

「……………もしかして、女と付き合つたこともあらへんのか?」

「え?ないっすけど……………」

日向のその一言に、全員が一斉に日向に視線を向ける。その表情は
全員驚愕のものであった。

「ないのか、お前……………?!誘えばちよちよいと出来そうな顔しとるの
に……………」

「こう言うのは平子である。」

「意外だな……………あれか。結構純愛を求めるタイプなのか」

「こう言うのは拳西である。」

「まるで少年漫画のような……………」

「こう言うのはラブである。」

「うくん……………恋のない人生なんて、サビのない曲ミュージックと一緒だね
……………」

「こう言うのはローズである。」

「ひゆうたんつて、一途な感じ〜?!」

「こう言うのは白である。」

「何や。とんだヤリオンかと思うとつたけど、童貞なんか」

「こう言うのはひよ里である。」

「ひよ里サン……………さすがに、それは……………。多分、日向君は仕事に

一途な方なんデスヨ……………」

「こう言うのはハッチである。」

「何か、数個聞き捨てならない言葉が聞こえたんですけど……………」

仮面の軍勢の様々な意見に対し、日向は少し苛立ちを見せる。主
に、平子とひよ里が原因であろう。

「……………平子さん」

「何や日向?」

急な真剣な日向の声色に、平子も真剣な顔になる。

「明日、本格的な卍解の仕上げをしたいんですけど、その際の周りのことと任せてしまってもいいですか？」

「……………そうか。分かった」

卍解の仕上げと聞き、全員がピクツと体を揺らす。

「もう、そこまでいってるのか？」

拳西が疑問を投げかける。もとより卍解は才能がある者でも、習得に十年かかると言われる代物である。それをこの青年が、もう習得できるまでに漕ぎ着けているのか。そう言った疑念もその質問に混じっていた。

「はい……………ただ、完全に会得するためには俺も本気を出さなきゃいけないんです。その際に周りの被害が凄まじくなるから、ここ一年くらいは抑えてたんですけど……………ハッチさんの結界があるんで大丈夫かなと……………」

その言葉に、ハッチが反応する。

「どの程度の結界が必要デスか？」

「限界まででお願いします」

その即答に、ハッチだけでなく他の者たちも驚く。

「分かりマシタ……………」

「どんな感じになるのかな？」

「こう興味津々に訊いてくるのはローズである。

「うくん……………^{ヴァーストローデ}最上級大虚同士が殺し合う感じになっちゃいますね……………」

その言葉に、ローズを始めハッチや、他全員の顔が青ざめていく。

唯一そうでないのは白くらいである。

「そらあ、周りのサポートが不可欠やわ……………」

「こう漏らすのは平子である。それは自分が斬魄刀を屈服したときよりも、凄まじい方法であるために、呆れや恐れといったものが混じっている声でもあった。

「そういう訳で、今日はしっかり食べて明日に備えたいと思いますー」

「そうかーほら、じゃんじゃん食うときい!!」

こうして、仮面の軍勢+ α の夜は更けていくのであった。

錬磨

戦争が始まる

狂宴だ

「アルトウロ様！アルトウロ様!!」

「貴様は……………マッドイーターではないか。どうした？」

彼らが居るのは白と黒しか存在しない虚無の世界——
『虚園』^{ウエコムンド}。ここで日夜繰り返されるのは強者による弱者の蹂躪。しかしそれは、ただの蹂躪などではない。生存するために、喰らう為に相手を殺す。ただのそれだけであった。

そんな場所に、一人の青年がいた。そしてその眼前には青年よりも巨大な怪物——虚がいる。傍から見れば身体の小さい青年が今にもその虚に捕食されるのではないかと思われるがそれは間違いである。そこには、明確な主従関係があった。

青年が支配する側で、虚の方が支配される側。

それは至極単純な理由で成り立っていた。青年の方が、その虚よりも絶対的に強いからである。

「アルトウロ様が、虚園に居るとお聞きし、これを届けたく居ても立つてもいられず！」

「これは……………『不滅王』^{フェニータエ}!!おお、久しいな！我が刃よ!!」

「アルトウロ様がその行方を晦まし早八十年……………我々は、ずっとアルトウロ様のご帰還を信じておりました……………！アルトウロ様、今こそあの不遜なる死神どもに天誅を下しまそうぞ!!」

「よくやった、マッドイーター！『不滅王』さえ戻れば、我らの行く道に敵など存在しない!!フハハハ……………すぐに、瀨霊廷への進軍の用意をしろ!!」

「はあ!!」

「……………さて、日向は何をするつもりなんや?」

こう呟き日向を見つめるのは平子である。周りには他の仮面の軍勢たちも、その行く末を見届けようと全員揃っている。

日向の目の前には、昨日と同じ女が立っている。大勢の人間が見たらその大部分が『美しい』と評するであろうその女性は、不気味な雰囲気身を纏っていた。

「……………覚悟は出来たぜ……………」

『遂にか……………。私はこの時を待っていた。貴方との雌雄を決する時を……………』

日向の言葉に、女性は艶めかしい声で返答する。そして、日向は持っていた斬魄刀を前に突き出した。

「行くぜ……………。黄昏と為せ——『虚帝』!」
うろみかど

直後に、日向の斬魄刀から黒い炎が噴き出て、それが日向を包んでいく。やがて、黒炎は次第に収束していく。そして、そこにいた物体に仮面の軍勢は全員驚愕する。

額から前方に飛び出る形の角。そして両方のこめかみから後ろの突き出ている角。それは以前も見た、日向の虚化した際の仮面であった。しかし、ここからが以前の虚化と違った。死覇装の上半身の部分は消え去っていた。そして心臓のある部分に向かい、両肩と脇腹、そして腰の部分から合計六本の流線型の黒い筋が描かれていた。そして肩甲骨の部分からは黒炎が轟々と燃え盛り、翼のように形成されている。肩や肘、膝といった関節部分には白いプロテクターのような物が装着され、彼が死神であったことは、下半身に纏う死覇装と、右手に持つ斬魄刀だけが頼りである状態だ。

「あれは……………虚化なんか……………?!」

あまりの異形の姿に、平子は疑問の言葉を漏らす。それは平子だけであらず、普段気楽な白も含めて全員冷や汗を流していた。そして、全員の頭の中にこういった予想が浮かび上がる。

——あれは、完全な虚化なのではないか?

もしそうなのであれば、日向はすでに自我を失っておりここら一帯を消し飛ばすほどの暴虐を働くのではないか。そういった懸念が皆の頭の中に浮かび上がっていた。

しかし、そんな思考を巡らせている内に一人が動いた。

『フハハハハ………ハハハッハッハッハア!!!』

それは、日向に相対す女性であった。凄まじい速さで虚化した日向に肉迫し、その手に持つ刀を振り下ろす。しかし、日向はその速さに即座に反応し、斬魄刀でその斬撃を防ぐ。そして、その斬撃をか弱そうな身体ごと吹き飛ばす。

『素晴らしいぞ日向!!やはり、私を扱う以上そのぐらいしてもらわねばな!!?ああ………今すぐにその身体を、私だけが独り占めしたい………!!』

身を振りながら、嬉々を叫ぶその姿は些か色気と狂気を感じさせるものであったが、日向は一向に動じない。

『そうか……それは出来ない話だな。始めようぜ、『びやっとう白皇………。お前を屈服させて、俺は正解を会得する!!』』

日向から放たれるいつも通りの口調に、仮面の軍勢たちは安堵の表情を浮かべる。自我がある。あそこまで虚化して自我があるというのは驚きであるが、それは日向のなにかしらの能力であるという憶測で納得することにした。

そこからは早かった。突如、両者その場から一瞬で消え、次目に映った時には先ほど両者がいた場所の中心にあたる場所で、刃を交えていた。その後、幾度も先ほどと違う場所で、また違う場所で………といった形で刃を交える。

「………けんせく。あれ、見えるく?」

「………霊圧知覚にかからねえから、俺らも見るのが大変だ」

両者、瞬歩のようなもので移動しながら刃を交えているが、それが瞬歩でないことはここにいる全員が理解していた。ただ、霊圧知覚に反応しないからと言っても、元の速さが速さなので、他の者たちが見れば何が起きているか分からない光景になっている。

『いい………いい………いい!!素晴らしい!私をここまで相手取れ

るとは……!!」

『「こっちは二人がかりなんだ。負ける方がおかしいだろ？」』

『「フハハハ……ならば、これはどうだ?!」』

そう言っただけで女性性は、刀を前に突き出す。すると切っ先に、赤い閃光が形成されていく。

「あの女……、結界ごと町吹き飛ばすつもりかよ?!」

あまりの霊圧の高さに、ラブが驚愕と焦燥の混じった声を上げる。その感情を有しているのはラブだけではない。

しかし――。

『「はああああああ!!!」』

それに負けず劣らずの霊圧の塊を、日向は左の手の平に形成し、やがてその二つの閃光の塊から放たれた光線は衝突し、拮抗し、やがて収束していった。その凄まじい衝突は仮面の軍勢に単なる焦りだけでなく、まわりに張られていた結界を数枚砕いており、その衝突の凄まじさを物語るものにもなっていた。

「日向の奴……瞬間でも使つとるのか？」

「いや、ちやうやろな。ただ、全身に高密度の霊子の鎧みたいなもん纏つとるんやろう」

リサの言う瞬間とは、隠密機動の総司令官に伝わる秘技である。以前、夜一に聞いたことがあり、高密度に圧縮した鬼道を纏いそれを炸裂させることにより凄まじい戦闘能力を発揮するというものであるが、それは隠密機動の総司令官にしか伝わっておらず、日向に出来るわけがない、というのが平子の見解である。しかし、現在日向はそれに勝るとも劣らない密度の霊子を体に纏っているのが、平子の目には見えた。

「瞬間が『攻』だとするのなら、今の日向のは『防』やな……」

しかし凄まじい防御力というのは、そこには攻撃してきた相手を逆に打ち砕くという意味も含まれる。素手で岩を本気で殴ったら、砕けるのは拳の方であろう。

その後、日向と白皇は十数分程度、熾烈な戦いを繰り広げていた。しかし、終わりは一瞬であった。

『はああああ!!』

白皇は日向に急接近し、その刀の切っ先を日向の右肩に突き刺し、そのまま虚閃を放った。その様子に、仮面の軍勢は一斉に動揺し、立ち上がり、日向の安否を心配した。白皇の方は、仕留めたと言わんばかりの笑みを浮かべている。

しかし――。

『知ってるか？相手を仕留めたと思った時が、一番の隙になるってこと』

『っ!!』

白皇はとっさに日向から離れようとしたが、それは叶わなかった。

日向の左手が、白皇の持っている刀の刀身をしっかりと握っていた。

『は、離せ!!』

明らかに動揺している白皇に、もはや勝ち目はなかった。日向は斬魄刀を手放し、代わりに手の平に黒い球体を形成していく。

「あ、あれはアカンやつや!!皆伏せろお!!」

『黒虚閃』
セロ・オスキュラス

黒い破壊の閃光が、白皇の胴体を貫き、結界を破り、天井を消し去り、空へと突き上げていった。その余波は仮面の軍勢の所まで届き、爆風というべき物が辺りを蹂躪していった。

数秒後、砂塵の中からは勝者が顔を覗かせていた。その目は、地面に伏せる自分の半身を眺めていた。

『……………俺の勝ちでいいんだな?』

『……………ああ……………見事だ……………日向……………』

白皇の口から漏れるように発せられる言葉は、日向への賞賛の言葉。
葉。

『……………今から、お前に剣を授けよう……………』

『……………いや、早く寄越せよ』

たっぷり間をとっているのにも関わらず、その剣というのを渡さない白皇を、日向は無理やり立たせようとする。

『ちよつと待て…このせつかちめ!!空いた腹の穴を今塞ごうとしているのよ!痛いからやめろ!!』

何とも気の抜けた会話である。その後、白皇の腹に空いた風穴は、肉の内側が盛り上がるように再生していき、やがて元通りになった。虚の超速再生によるものである。そして、立ち上がった白皇は、服に着いた埃をパンパンと叩いて落とす。服までは再生しないのか、消え去った服の穴からは、艶のある透き通った白い肌と、へそが顔を覗かせている。

『……………私の手を取れ、日向』

そう言って差し出された右手を、日向も右手で握り返す。すると白皇の身体はみるみる霊子に分散していき、代わりに日向の右手には白皇よりも若干長い太刀が現れた。柄は黒く、鍔は金、そして刀身は白銀といったシンプルながら美しい太刀がそこに現れたのだ。

『陽天之劍』……………それが、私の全力の姿。そして、今貴方の有する『因果之鞘』と合わせることによって、卍解は完成する……………』
「なるほど……………ありがとな……………」

太刀から聞こえる声に、日向は感謝の言葉を向ける。その表情は、とても穏やかなものであった。

「日向……………屈服できたんか？」

余韻に浸る日向に、仮面の軍勢を代表して平子が語りかける。

「はい……………でも、使いこなすには時間と練習が必要っぽいっす。なんで……………」

「それなら、俺が請け負うぜ？」

そう言って一歩前に前進してきたのは拳西であった。その言葉に反応するのは、日向だけでなく、後ろに居た白とローズである。

「えく?!けんせーずるーい!」

「出来れば僕が、彼との最初のセッションを試してみたいんだけど駄目かな？」

「白、お前は卍解出来ないから却下だし、ローズのは相手と手合せするのに向いてねえだろ」

拳西のその言葉に、二人は口を噤む。

「……………早速始めるか？」

「……………はっ」

「そうか……………行くぜ。卍解——『鐵拳斷風』!!!」

直後、拳西を中心に爆風が巻き起こる。その爆風により巻き上げられた砂塵が晴れる。そこには、両腕に金属板が巻きつき、それを繋ぐように背に大きな羽衣のような婉曲した金属板が現れる。刀身は二つのナツクルダスター状の刃物になり、それを両手で握っている。

日向は、卍解をまともに見るのは初めてである。その霊圧の高さに身を震わす。しかし、恐怖は感じない。

「拳西さん……………行きます——!!!」

「まつ梨。少し休むがいい」

「……………はい……………」

そう言つて、まつ梨は斬魄刀を鞘に納める。その表情は疲労の色が見えている。

「焦っても良い結果は出ん。切り替えじや切り替え!まつ梨、飯にするぞー!」

夜一はそう言い、まつ梨の腕を強引に引つ張つていく。力の抜けているまつ梨は、なされるがままに連れられていく。

その後、まつ梨は浦原商店の居間と言うべき場所で、昼ご飯を食べている。その表情は幾分か暗い。

(……………やはり、そうなってしまいうじやろうな……………)

まつ梨は斬魄刀を『屈服』することは出来た。しかし、卍解が出来ないのである。その謎の現象に、まつ梨だけでなく、夜一も浦原も頭を抱えている。

(メンタルの問題か?それとも、何か特殊な条件でもあるのかのう……………?)

焦つても結果は変わらない。しかし転神体を使えるのは三日だけ。それ以上は危険である。

まつ梨たちの特訓も続くのであった。

「……………恋次。もう寝ていなくて平気なのか？」

「……………おう」

ルキアの心配する言葉に、恋次はぶつきらぼうに応える。ここは五番隊の特訓場である。それならば本来、ルキアがいるべきではないところなのであろうが、恋次を始め、同期三人が退院したと聞き駆けつけ、見当たらなかつた恋次の居場所を雛森に聞き、ここに至つたのである。

恋次は、ひたすらに木刀で素振りをする。そこには、何かを忘れたいという焦燥が見え隠れする。

「……………日向のことは……………」

「聞いたぜ。現世でアルトウロと戦つて行方不明だろ？」

あまりにもあつさりとして、淡々と答える恋次にルキアは驚く。

「……………気に入らねえ……………」

「え……………？」

「俺たちよりも早く霊術院出てつたくせに、現世でノコノコやられたのが気に入らねえんだよ！」

「恋次……………！」

「分かつてんだよ！俺が日向に敵わねえことも、あのアルトウロつて奴にも敵わねえことも!!……………でもな、アルトウロつて奴に一発ぶち込んでやらねえと、気が済まねえんだ!!!」

信じていた友人の強さ。そして敗北に、恋次は落胆や怒りと共に、そうさせた相手への怒りで満ち溢れている。

「……………私もだ、恋次」

「…ルキア、ちよつとばかし特訓に付き合つてくれねえか？」

「いいだろう。私も、日向や海燕副隊長に数年しごかれた身……………今なら、お前を軽く捻れるぞ？」

わざとルキアは恋次を挑発する。そして、それに軽くひっかかるのも恋次である。

「ほう……………そいつは楽しみだな……………きやがれ!!」

特訓場に、木刀がぶつかり合う音が響いた。

開幕

私に不遜と言う事を
不遜と知れ

「…………準備は出来たようだな……………」

「はい、いつでも行けます！」

「フハハハ……………ならば行くぞ!!死神どもに地獄を見せにな……………!!」

「ははあ!!」

一人の青年の背中を、数百の化け物が付いて行く。闇夜を歩んでいくその光景は、百鬼夜行と言うべき光景であったであろう。そして、これから始まるのは戦争。八十年前の、殺し合いの続きである。

アルトウロが瀨霊廷に侵攻を始めたのは、日向たちが特訓を始めて五日後の話であった。

「清流門付近から、多数の霊圧を確認!!虚のものです!!」

その言葉に、十二番隊にある技術開発局に居る者たち全員に緊張が走る。

「どうとう来やがったか……………!!各隊に通達!!急げ!!」

こう叫ぶのは、十二番隊第三席兼技術開発局副局長である阿近である。額に角の生えている不良のような相貌に眉毛がない男性である。その指示は、瞬く間に他の局員たちに伝わり、全員忙しなく手を動かし始める。

「……………さて、どんだけ被害を防げるか……………!!」

「な、なんだよ……あの虚の量は?!!」

青流門付近に居た死神たちは、今まさに攻め込んでくる虚に畏怖する。一体や二体であつたらまだ落ち着けただろう。しかしそこに居たのは数百というおびただしい数。黒い裂け目のような空間からその虚たちが出てくる光景は、まさに地獄絵図と言つても過言ではないだろう。

その光景を見る死神たちは、ある者は茫然とし、ある者はあまりの恐怖に嘔吐し、ある者は絶望にひれ伏しその場を動かさずとほしなかつた。

攻め込んでくる虚の中には、巨大虚は勿論、大虚ヒュージホロウと思われる黒い巨軀が何個も見えた。そして、虚たちは青流門を壊しながら進撃してくる。何人かの死神は勇敢に虚に突貫するが、あっけなくやられていく。その光景が、さらに後方にいる者たちに恐怖を刻みつけていく。

しかし――。

「霜天に坐せ――ひょうりんまる『氷輪丸』!!」

突如、死神たちの後方から飛来してきた一体の氷の竜により、何体の虚が氷漬けにされ、そして自然に砕けていった。そして、死神たちの前に先行するように一人の銀髪の少年が現れた。

その少年に向かい、さらに何体かの虚が向かつて来るが、また後方より飛来してきた灰のようなものによって、虚は切り裂かれていく。

そして瞬歩で少年の横に現れたのは、金髪の妖艶な美女。首にはスカーフを巻き、左腕には副隊長の付ける副官章をつけている。

「ちよつと冬獅郎く〜! 私たちを置いて前に出過ぎよ〜!」

「だけど、こうしないとやられてた奴がいるんじゃないっすか? 松本副隊長」

銀髪の少年――日番谷冬獅郎に注意するのは、十番隊副隊長・松本乱菊である。そうしている間にも、また虚が一番近くにいる二人の元に接近してくる。

「月牙……天衝!!」

その接近してきた虚を、後方にいた虚もろとも巨大な斬撃が飛来

し、斬り裂いていった。すると、『十』と書かれた隊長羽織を着た人物が、二人の前に姿を現す。

「全員大丈夫か?! 負傷者は誰か運んで行ってやれ!!」

こう叫ぶのは、十番隊隊長・志波一心である。今いる隊長の中でも一番、隊長歴の短い人物である。しかし、彼がとっている振る舞いは立派に隊長のそれと化していて、混乱していた死神たちに一瞬の安堵を与えた。

そして一心が一通り指示を終えたのを確認し、乱菊は一心に話を吹っかける。

「まさかこんなに早く来るなんて……。一体、何体いるっていうの……?!」

「ああ、確かにこんなに大量の虚は見たことねえ……。だが、ここで俺たちが引いちまったら、力のない奴らが真っ先に狙われていく……。何としても、ここで食い止めるぞ!!」

「就任早々、随分な役が回ってきたな……」

彼、日番谷冬獅郎は今年霊術院を主席で卒業し、十番隊の五席となっている。しかも霊術院を卒業するのに費やした期間はたったの一年と、秀才中の秀才である。その彼の、今年一番の任務になるであろう状況が、今日の前に広がっている。

「松本、冬獅郎。俺が先行するから、援護を頼む!!」

「了解!!」

「行くぜ……。燃えろ——『剋月』!!!」

一心が解号を叫ぶと同時に、刀身が真っ赤な炎に包まれる。その熱さは、少し距離をとっている二人にもひしひしと伝わってくる。始解を終えた一心は、まっすぐに虚の群れへと突進し、次々に虚を斬り倒していく。その姿は、夜叉ともとれる光景であった。

「さ、ぼやぼやしないで行くわよ!! 唸れ——『灰猫』!!」

「分かっていますよ……。行け、『氷輪丸』!!」

一心に群がっていく虚を、乱菊の『灰猫』が斬り刻んでいき、冬獅郎の『氷輪丸』が虚の肉体を凍らせていく。その光景に、周りの死神の士気も上がっていき次々に虚へと刃を向けていく。

「飛んで火に入る夏の虫だな……………」

直後、虚の群れに突貫していった隊士たちの半数が、灰色の光線により消飛んでいく。その光景に、同じく突貫していき運よく逃れた隊士は勿論、先行し虚をなぎ倒して行く三人も驚愕する。

「誰だっ!!?」

「お初にお目にかかる……………私は、アルトウロ・プラテアド……………。今日、貴様達を殺しにきた破面だ……………」

一心の問いに、破面——アルトウロは冷静に自己紹介している。その表情は、嬉々としている。

「てめえ……………うおおおお!!」

一心がアルトウロに向かい『剡月』を振り下ろす。しかしそれはアルトウロの有していた刀——『不滅王』フェニチエによって防がれる。ガキンツという甲高い音が空中に響き渡り、つばぜり合いが始まる。

しかし、すぐさまアルトウロが刃を薙ぐことによって、一心の身体は後方に吹き飛ばされていく。その様子に、一般隊士だけでなく乱菊や冬獅郎も驚く。

「なっ……………隊長を……………?!」

「くっ……………氷輪丸!!」

冬獅郎はすぐさまアルトウロに向かい、氷輪丸を薙ぎ氷の竜を疾走させる。しかしそれは、アルトウロが口腔から放った灰色の虚閃によって消滅させられた。

「子供の割には中々の霊力だな……………貴様をやるか……………」

「何っ……………ぐあああ!!」

アルトウロの響転ソニードに反応出来ず、冬獅郎は突如目の前に現れたアルトウロの横から繰り出される蹴りを喰らい、後ろの建物をいくつか突き抜けていく。

「させない!!灰猫!!」

「邪魔だ、女」

冬獅郎が吹き飛ばされたことにより憤慨する乱菊の灰猫を、またもや響転で回避し、後ろに回り込み乱菊の後頭部を掴む。

「アガラール・セロ
『掴み虚閃』」

乱菊の後頭部を掴む手の隙間から、だんだんと光が漏れ始める。隊士数人を一度に消し去る威力のものをゼロ距離で喰らえば、乱菊の頭は消し炭になるだろう。そうさせないために乱菊は灰猫を向かわせ必死に抵抗するが、拘束は解けない。

「月牙天衝お!!!」

しかし、アルトウロの後方より接近してきた一心の攻撃により、乱菊の頭が消飛ぶ前に、アルトウロは一旦攻撃を中断せざるを得ない状況になり回避した。今まさに自分の命が消えかけていたという事実には、乱菊の動悸は激しくなるが、すぐに呼吸を整える。

「松本、下がれ。ここは俺だけでやる」

「し、しかし!!」

「奴は危険だ!!無駄な犠牲を出すわけにはいかない!!すぐに冬獅郎を回収して態勢を整えろ!!」

「くっ……はい……!!」

一心の命令に、松本は苦渋の決断とばかりの表情をする。しかし、ここでは一心の命令の方が正しい。それが分かっているからこそ、自分の無力が情けなくなってくる。松本は、すぐに瞬歩でこの場から消えていく。

「随分と、部下思いの隊長なんだな」

「だったら、さっさとやられてくれっての…」

アルトウロの嘲笑を含んだ斬撃を、一心は真正面から受け止める。しかしこのままではさっきの二の舞となるであろう。そこで一心は、さきほど吹き飛ばされた際に出来た傷から流れる血を口に含んでおいて、今それを剡月へと吹きかけた。すると、剡月に纏っていた炎が一瞬にして、その大きさを膨らませる。その光景にアルトウロは驚愕し、響転で距離をとろうとする。しかし一心は、その隙を逃がさずに月牙天衝を放つ。先ほどと違って、今度は炎も一緒になってアルトウロへと飛来していく。

その一撃を、アルトウロは諸に喰らう。直撃と同時に爆炎が起こり、アルトウロを中心に黒煙が立ち込める。

「フハハハ!!この程度で!!」

「ちっ……………!!」

しかし黒煙から響いてくる声に、一心は表情を曇らせ、さらに降り注いでくる虚閃を瞬歩で回避する。

やがて黒煙が晴れると、そこには左腕から流血するアルトウロの姿があつた。しかしその表情には、焦りなど一切含まれていない。むしろ、自分に傷を負わせた相手に対し賞賛を送るかのような笑みを浮かべている。

「ふむ……………このまま貴様とやり合うのもいいが、そろそろ他の死神たちを仕留めにいくか……………。そうだな、まずは副隊長どもを中心とした席官たちを殺していくか……………」

「何だと……………!!?」

「では、さらばだ」

「待て!!」

アルトウロが逃げようとするのを、一心は月牙天衝を放つことにより阻止しようとするが、響転で回避されそのまま見失う。さらに、アルトウロの霊圧も感じなくなる。

「どこまで行きやがった……………あの野郎……………!!?」

必死にアルトウロを探し、瞬歩でここから離れていくのを、アルトウロをは建物の物陰から眺めていた……………殺した死神の姿で。

アルトウロは、他人に変身する能力でこの場をやり過ごしていた。最初に、あえて自分の速力を見せることにより、自分が居なくなつた際に、どこか遠くに離れたのではないかという疑心暗鬼を覚えさせることによつて。

「さて……………何番隊から仕留めるか……………」

「刈れ———『風死』!」

解号を唱えるとともに、長い柄に二つの鎌がそれぞれ逆向きにつくという形状をした斬魄刀を、九番隊第六席———檜佐木修兵は、目の前にいる巨大虚の首に投げ飛ばし、その首をいとも容易く刈り取っていく。

「いいぞ、修兵!!我々も行くぞ!!」

そう言つて次々と虚を斬り伏していくのは、九番隊副隊長の安藤常安である。その、男という字を体現したかの様な勇猛な姿に、他の隊士たちの士気も上がっていく。

(まさか、こんなところまで侵攻を許すとは思わなかったが……このままなら、ここで食い止められる!!)

現在、檜佐木の居る班は副隊長を中心に十人ほど集まっており、席官を中心に虚の侵攻を抑え、そして押し返しているという状況であり、まさに風向きは檜佐木たちに向いていると言つても過言ではないだろう。

「ぎゃああ?!」

「な、何……ぐわあああ?!」

「っ?!何だ?!」

突如、自分たちの後ろから聞こえてくる悲鳴に前進していた檜佐木たちは振り返る。するとそこには、血濡れの刀を持った死神ひとりを除いて、五人程地に伏せていた。

「ふんっ………案外、簡単だったな」

「なっ………貴様は?!」

血濡れの刀を持っていた死神は、やがて姿を変えていき白い服を着た青年へと変貌した。その側頭には大きな仮面のようなものがくっ付いている。

「こいつが………皆の者、下がれ!!」

そう叫び、安藤が青年——アルトウロに突貫していく。安藤は瞬歩を使い、一気にアルトウロの後ろをとる。

「遅いな」

しかしアルトウロはそれに反応し、安藤の斬魄刀が振り下ろされる前に一閃し、安藤の身体を上半身と下半身に断った。その光景に、周りにいた安藤の部下たちは絶句する。やがて、安藤の身体は地に落ちていった。

「これが副隊長か………思ったよりも雑魚だったな」

「く……くそおおおおお!!」

「止せ!!」

激情に駆られたままアルトウロに特攻する隊士を、檜佐木は制止するが、その間もなく隊士の身体はアルトウロに一閃される。

さらに悪寒を直覚し、すぐさま風死を自分の前にかかげる。直後にアルトウロの一撃が風死に直撃し、檜佐木は後方に吹き飛ばされる。

「直感とはいえ、いい反応だな……………」

(ふざけんじゃねえ……………防いだのに、頭がガンガンしやがる……………!!)

打ち所が悪かったのか、檜佐木の視界が揺らぎすでに満身創痍といった状態であった。そうしている間にも、アルトウロは周りにいる隊士たちを斬殺していく。檜佐木は必死に動こうとするが、身体に力が入らない。

するとアルトウロは、他の隊士たちの始末を終えたのか、檜佐木の方を向き歩み始めた。

「破道の五十四・『廃炎』」

「むっ?!」

突如、左より飛来して来た灰色の炎に対し、アルトウロは響転で回避する。すると、炎の飛来してきた方向より、人影が三つほど現れた。

「東仙隊長……………狛村隊長……………射場副隊長……………!!」

褐色肌のドレッドヘアの男性。鉄の甲冑を被り、その顔を見る事が出来ない人物。ヤクザ風で、サングラスをかける男。その内、ヤクザ風の男の射場鉄左衛門が檜佐木に近寄ってきた。

「檜佐木、大丈夫けえ?」

「はい、なんとか……………」

「檜佐木、下がれ。ここは私が行こう」

そう言い、九番隊隊長である東仙要が一步前に出た。

「ほう……………貴様が相手をしてくれるのか?」

「無論。正義の名の下に、お前を斬り捨てる……………狛村、下がれ」

「あれをやるのか?」

「ああ……………。檜佐木を連れて遠くに、出来るだけな」

すると東仙は斬魄刀を抜き、アルトウロへ切っ先を向ける。その間

に、狛村と射場と檜佐木は、少し離れた場所へと避難する。
「……………行くぞ。 卍解」——『清虫終式・閻魔蟋蟀』
すずむしついでしき えんまごおろぎ

すると、東仙の斬魄刀の鏢の飾り輪が両手を広げたほどの直径まで広がり、九つに分裂し、周囲を円型に取り囲む。さらにそれらの輪具から黒い力場が発生し、やがてそれらが重なり一つの黒いドームのような物になる。その中には、東仙とアルトウロしか居ない。しかし、アルトウロは東仙の事を認知出来ない。

理解できぬまま数秒した後、アルトウロの目の前は一瞬フラッシュしたかのように白くなり、全ての感覚が元に戻ったような感覚を覚えたが、すぐにまた何も感じなくなった。

アルトウロ対東仙——開幕。

圧倒

啼く民衆

轟く銃声

骨を貫く槍

身を焦がす炎

流るは血と涙と

清虫終式・閻魔蟋蟀。

能力解放と同時に、『清虫』本体を握っている者以外の視覚、嗅覚、聴覚、霊圧感知能力の四つを封じる楕円形のドーム状の空間を形作る卍解。

今、この空間に居るのは東仙とアルトウロのみである。しかし、アルトウロには触覚以外何も感じることはない。アルトウロが東仙を探そうと辺りを見渡すが、アルトウロの視界に映るのは暗闇だけ。

その隙を突くように、東仙はアルトウロに肉迫し一閃を喰らわす。その瞬間に、『清虫』の刀身に触れたアルトウロは、斬撃を喰らった方を向き、虚閃を放つ。しかし、一閃が終わると同時に再び視界や聴覚が役に立たなくなったアルトウロの攻撃が東仙に当たる筈もなく、虚閃は虚空を奔っていく。

一方的な蹂躪。しかし東仙は、それを卑怯とは思わない。この戦場では勝ったものこそ正義。東仙にとっての正義とは、最も血に濡れない道を進むこと。そして、今日の前にいるこの破面を倒せば、そこでこの戦いは死神が勝利したのと同義。故に、躊躇いなどある筈もない。

このまま、東仙がアルトウロを一方的に蹂躪し、この戦いを終える

——そう思っていた時だった。

「虚弾!!」

アルトウロは、全方位に向かい靈子の弾丸を放ち始めた。それに対し東仙は回避を迫られる。虚弾は、威力は虚閃ほどではないがその速度は虚閃の二十倍である。さらに連射も効く。勿論、威力が低いと言っても一般隊士が喰らえば被弾した部位が吹き飛ぶ威力であるため侮れない。

それを掻い潜り、東仙はアルトウロに再び接近する。そして、アルトウロの背後に回り清虫を振り下ろす。しかし、その一撃はアルトウロの皮膚を斬り裂くことは出来なかった。その事実には東仙は驚愕する。さっきの一撃は確かに通った筈——その時。

「そこかあ!!」

「なっ?!」

アルトウロは凄まじい反射神経で振り返り、清虫を左手でしっかりと握る。その瞬間から、アルトウロの感覚は鮮明になっていく。動揺した東仙を、アルトウロは逃がさなかった。

「はあ!!!」

アルトウロは『不滅王』フエニイチエで、空いていた腹部を狙い一閃する。すると凄まじい勢いで鮮血が舞う。アルトウロは追撃とばかりに口腔から虚閃を放つ。それは、攻撃で怯んだ東仙をいとも容易く飲み込んでいく。

「フハハハツ……感覚を奪った程度で仕留められると驕ったか……。どうやら、私の居ない間に、護廷十三隊の格は下がったらしいな……!!!」

今まさに吹き飛ばした隊長に向かい、嘲笑と侮蔑の言葉を向ける。すると、アルトウロの前方の瓦礫が崩れ、その中から東仙が這い出てきた。腹部から流血し、身体の到る所は焦げ、満身創痕と言っても過言ではない状況であろう。

「……まだまだ……私は、まだやれるぞ……!!!」

「死にぞこないが……今すぐ、私の糧となってもらおうか!!」

「轟け——『天譴』!!」

突如、巨大な腕と刀がアルトウロに襲いかかるが、響転でそれを回避する。回避した際に、その刀は地面に衝突するが、轟音と共に瓦礫

が飛び散り地面には罅が入る。その光景は今の一撃の重さを知らしめるには十分過ぎるほどのものであっただろう。しかしその光景にアルトウロは笑みを浮かべていた。

「貴公は下がっている、東仙」

「狛村……………!!!」

出てきたのは、先程東仙と共に現れた鉄の甲冑を被る人物。東仙の前に手を伸ばし、まるで選交代と言わんばかりの光景を作りだす。

「次は、貴様が相手をするのか？」

「そうだ。貴公をいつまでも野放しには出来ん。ここで儂が下がったのならば無用の犠牲が出る。総隊長に恩義があるこの身。たとえ焼かれようが、貴公を討つまで刀を握ろう」

「そうか……………その男をさつさと殺したいので……………貴様にもやられてもらおうか……………!!!」

「いざ参る……………卍解——」

『黒繩天譴明王』!!!
こくじょうてんげんみょうおう

「ありやあ……………狛村隊長の卍解じゃねえか……………?!!」

こう走りながら呟くのは十三番隊副隊長・志波海燕であった。後ろには、同隊四席・虎徹清音、同じく四席・小椿仙太郎、そして朽木ルキアが居る。今現在、海燕の視界の奥の方に、鎧を着た巨人のような物が見える。その巨人は右手に握っている、またも巨大な刀を振り回し、何かを断ち切ろうとしている。しかし、かなりの距離があるため巨人が討とうとしている対象までは見えない。しかし、海燕にはおよその予想が付いていた。

「あそこに居やがるのか……………アルトウロ……………!!!」

海燕にとって仇とも呼べる相手。海燕は、実際に八十年前にアルトウロと交戦したことがある。しかしその時は致命傷も与えることも出来ずに、一撃で斬り伏せられてしまった。さらにその戦闘で海燕は、新人の後輩を失うという苦杯を飲む結果となってしまうた。

（仇はとるぜ……………藤丸……………まつ梨……………!!!）

「怪我人は早くこちらへ。勇音、この患者の方の治療を」

「はい！」

卯ノ花は的確に指示を出し、次々と運ばれてくる患者の対応をする。虚が攻め込んできてまだ三十分も経っていないが、患者の数は百人を優に超えていた。比較的軽症の者や、四肢の一部が欠損していたりする重症の者もいる。あまりの怪我人の多さに、四番隊の全員を総動員しても、追いつかないほどである。

「卯ノ花隊長……………」

「都さん……………どうしたのですか？」

卯ノ花は後ろから聞こえる声に振り向くと、そこには四番隊無席の志波都が立っていた。元々十三番隊の三席という実力の持ち主であつたが、ある虚の調査の際に片足を欠損し、自らその座を離れながらも瀨霊廷に尽くすために、戦わずとも隊士の役に立てる四番隊に移籍してきた女性だ。現在、左足は義足をつけているが、それを感じられない程、都はしっかりとその場に立っていた。

「……………我々は、現場に赴き隊士の傷を癒すことは叶わぬことなので
しょうか？我々が現場にいることで助かる命もあるはず……………」
「それはなりません」

現場に行きたいという意志を見せる都に、卯ノ花は制止の言葉をかける。それに都は悲痛な表情となる。

「総隊長がそうおっしゃられたのです。『四番隊は救護病棟を離れず、
搬入される隊士の治療に専念せよ』……………」

総隊長——山本元柳斎重國は、アルトウロの瀨霊廷侵攻の全
てを見たきた数少ない人物である。山本自身もアルトウロと交戦し
た経験もあり、相手の残忍性や、その能力の厄介さも身に染みて分
かっている。だからこそこの命令なのだろうと、同じくアルトウロ
の侵攻を経験している卯ノ花は感じた。

「信じましょう。護廷十三隊を……………」

「……………はい……………」

「ふんっ………的がデカいだけだな!!」

「くっ………!」

狛村は、アルトウロと交戦していたがその雲行きは怪しいものとなつてゐる。狛村の卍解『黒縄天譴明王』は自分の動きをトレースして動く巨大な鎧武者を召喚するというものである。その破壊力は絶大。しかし、その巨軀な身体と比例する大振りな一撃は、アルトウロの響転を捕えられずに一方的な勝負の運びとなつていた。さらに黒縄天譴明王には弱点がある。それは黒縄天譴明王が受けたダメージがそのまま狛村にくるといふものである。それ故、アルトウロの様な素早い敵にとっては、狛村の卍解はただ単に標的が大きくなつただけのものとなつてしまう。

一撃必殺の攻撃も、当たらなければ意味がない。

「これはどうだ?!」

「ぐう………その程度!!」

アルトウロが虚閃を放ち、黒縄天譴明王の左腕の鎧を砕く。それに連動して狛村の左腕にもダメージが来るが、それに構わず刀でアルトウロを仕留めようと振り下ろす。しかしそれもまた響転によって回避される。

「縛道の三十・『嘴突三閃』!!」

回避した場所に、三つの巨大な嘴のようものがアルトウロの元に飛来する。それを危なげなくアルトウロは回避し、飛来して来た方向を睨む。

「苦戦しているようだな、狛村………」

「碎蜂隊長か………」

「ほう………こんな小娘が隊長なのか。驚いたな」

アルトウロの前方に現れたのは、おかつぱ頭のようなのだが両耳付近は長く、布で巻いており、髪の前には輪がくりつけられている少女のような人物。しかし、その身には隊長羽織を纏わせている。

「貴様が破面という奴か。だが、今日瀋霊廷を攻め込んだことを後悔しろ。我ら護廷十三隊が、貴様を殺す」

「口だけでなければいいのだがな……………」

「ほぎげ。すぐにでも仕留めてやる……………」

尽敵螫殺

『雀蜂』！」

解号を唱えると共に、碎蜂の斬魄刀は右手中指に付けるアーマーリング状の刃に変化する。そして碎蜂は瞬歩で、一気にアルトウロとの距離を詰める。そして眼前に迫る蹴りに対しアルトウロは、持ち前の反射神経で躲す。さらに追撃と言わんばかりの白打の嵐が迫ってくるが、それに対し今度は受け流したり、防御したりなどして対応をする。そしてある程度経った頃、碎蜂はアルトウロとの距離をとる。

「……………むっ？」

アルトウロは、自分の腕に刻まれる謎の刻印のようなものに目を向ける。おそらく、先程の乱打戦の合間に何かを喰らったのだろうと予想する。

「それは、『蜂紋華』と言ってな……………次、そこにまた私が一撃を加えたら、お前は問答無用で消飛ぶ……………」

「ほお……………面白いな……………」

はったりか本当なのか分からない事実に対し、アルトウロは余裕の笑みを浮かべる。そして、ある言葉を掛けてみる——。

「二番隊隊長と言ったからどの程度の強者かと期待したが……………四楓院夜一の方がまだマシだったな……………」

「何っ……………?!」

その挑発に対し、碎蜂は分かりやすく不機嫌な顔になる。それが自分の忠誠を誓った者への侮辱に対し怒りを抱いているのか、自分を裏切った者よりも自分が弱いと言われたことに対する怒りかは、碎蜂にしか分からない。

「ほら、どうした？ 隠密機動らしく白打で攻めてきたらどうなんだ？ 私に、あと一撃加えたらいいんだろ？」

「ほう……………お望みなら、今すぐにそうしてやろう!!」

そう言って碎蜂はアルトウロに肉迫し、雀蜂を先ほどの蜂紋華目がけて突き出す。しかしこれは反応され、躲される。そこからは白打を交えながらアルトウロに猛攻を仕掛けていく。

「ぐっ……………!!?」

しかし、猛攻の途中で碎蜂は自分の手と足に違和感を感じ、距離をとる。

(何故だ……………攻撃を仕掛けているのはこちらなのに、私の手足の方がダメージを受けている……………!)

碎蜂は、先ほどの猛攻でアルトウロを殴打したり蹴りを加えた手足に激痛を感じたことにより一旦中止したのである。まるで、素手で岩を殴っていたかのような……………そんな感覚に碎蜂は囚われる。

「いくら隊長であろうが、『瞬閃』でなければ私に素手でダメージを与えることなど出来ん……………」

「何……………?」

『瞬閃』という単語がアルトウロの口より出てきたことに対し、碎蜂は不思議な顔をする。『瞬閃』は隠密機動の総司令官にしか伝わらない秘技。だが碎蜂は、瞬閃という単語を聞いたことがない。

「八十年前の戦いで、四楓院夜一は私に瞬閃を使った。そうしなければ、私を相手取れないと自覚していたらしいからな……………!!」

「ほざけっ!!」

夜一が本気を出さざるを得ない相手。その意味を、碎蜂は恐ろしいほど理解した。理解した瞬間には、碎蜂はアルトウロに再び接近していた。今度は、雀蜂で確実に仕留めるように。しかし、その右手は寸前でアルトウロに押さえ込まれる。

アルトウロの口腔には灰色の閃光が現れ始めていた。

「はあああああ!!」

「ちっ!」

しかしその虚閃は、狛村の黒縄天譴明王の一撃により妨害された。アルトウロが離れる間に、碎蜂もアルトウロと距離をとる。

「落ち着け、碎蜂隊長。これは個人戦ではないのだ。あくまでも我らは護廷十三隊。志が共であれば、協力するのみ」

「分かっている。しかし、貴様の卍解ではあの破面に不利だろう……………」

「しかし、貴公の長所でもある白打で奴に決定打を与えられない。二

人のどちらかの一撃が決まればいいのだ」

「ならば、やることは一つだ」

「ああ」

そう言って碎蜂はアルトウロに肉迫する。

「縛道の六十二・『百歩欄干』!!」
ひやつぼらんかん

碎蜂は手に光の棒を出現させ、それをアルトウロに向かい投合する。それを回避すべくアルトウロは上空に退避する。しかしそこに、狛村の黒縄天譴明王の一撃が振り下ろされる。しかしそれも、アルトウロは虚閃で軌道をずらすことにより回避する。そしてそこに再び碎蜂が近づく。

「縛道の六十三・『鎖条鎖縛』!!」
さじょうさばく

太い光の鎖が蛇のようにアルトウロの身体に巻きつき、その自由を奪っていく。アルトウロはその鎖を引き千切ろうとするが、中々引き千切ることが出来ない。さらにそこに碎蜂は追撃を加える。

「縛道の六十一・『六杖光牢』!!」
りくじょうこうろう

六つの光の帯がアルトウロの胴体の部分に刺さり、さらにその身体の自由を奪っていく。

「今だ！狛村!!」

「うむ……………行くぞ、黒縄天譴明王!!」

黒縄天譴明王が動けないアルトウロ目がけ刀を振り下ろそうと、天高く刃を突き上げる。

仕留めた——。二人はそう確信していた。

「甘いな……………」
『王虚の閃光』!!!
グラン・レイ・ゼロ

アルトウロは自分の唇を少し噛みきり、そこから流れ出た血と霊圧を混ぜ、巨大な光の塊を顔の前に作り出す。その霊圧の高さに、近くにいた碎蜂と、黒縄天譴明王を操る狛村は驚愕する。

そして、放たれた巨大な閃光は目の前に居る巨大な鎧の武者を飲み込んでいく。あまりの威力に、鎧は引きはがされていく。

「がっ……………はっ……………!!!」

直後、狛村は地に伏した。それだけで、碎蜂は今の虚閃の威力を悟った。そして、すぐさまアルトウロに雀蜂を向ける。

「遅いな」

「なっ……………あぐっ!!!」

しかし右手はいつの間にか拘束を解いていたアルトウ口の左手によって拘束され、さらにアルトウ口の持つていた斬魄刀で腹部を貫かれる。痛みに耐えながら、碎蜂はすぐさま次の手を考える。

「ふっ……………!」

「う、ああああああ!!!」

斬魄刀を腹から抜き取られ、その傷にアルトウ口は拳をめり込ませる。あまりの痛みに碎蜂は絶叫する。

「黙れ、雑魚が」

絶叫する碎蜂に、アルトウ口は空中で一回転しサマーソルトキックを碎蜂に喰らわせる。碎蜂は抵抗むなしく、自分の下にあった瓦礫の山に轟音を立て突っ込んだ。そして、ゆっくりと碎蜂の元にアルトウ口は下りる。

「どうした？ 正解もせずに私を倒せると驕ったか？」

そう言いながら、瓦礫に埋もれる碎蜂の胸倉を掴みながら持ち上げる。

「ぐっ!!!」

「おっと」

「が……………はっ……………!!!」

持ち上げられた際に、身体を捻りアルトウ口の側頭部に蹴りを食らわそうとした碎蜂であったが、それより前に地面に思いきり叩き付けられた。その際に、碎蜂は肺から空気が全部抜けていくような感覚に陥る。

（こ……………こんなにも力の差があるのか……………?!隊長である私でさえも……………!?!）

碎蜂は自分の無力を呪うしかなかった。

そんな碎蜂を、アルトウ口は蟻を見下ろすような目で見ていた。

「そろそろ死ぬか？ 死神……………」

「万象一切灰燼と為せ——『流刃若火』」

途端に、アルトウロの眼前に爆炎が迫ってきた。それに対しアルトウロは動揺しながらも響転で回避する。そして狂気的な笑みを浮かべる。

「ようやく来たか……山本元柳斎重國!!!」

「久しいな、アルトウロ・プラテアドよ……」

大山鳴動す。

水花

貴女の顔の輪郭をなぞったこの指で

貴女の手を握ったこの手で

貴女の温もりを忘れぬように

私は誇りの柄を握ろう

「山本元柳斎重國……………ようやく貴様のお出ましか……………！」
「ふんっ！」

アルトウロの言葉に耳を貸さずに、元柳斎は流刃若火を横に薙ぐ。それと同時に、流刃若火から発せられる炎がアルトウロに向かい奔っていく。その業火は、進む道をたちまち焼き焦がしていく。それをアルトウロは苦でもない表情で回避する。

「懐かしいな……………初めて貴様に相對した時、私は当時の隊長共を三人程殺した。しかしそれでも私は貴様達に封印された……………。そして二度目の時は二人ほど殺した。だが、あの忌々しい鏡のせいで貴様を殺すには至らず、私は熾水鏡の中に吸い込まれた……………!!」

そう語るアルトウロの目には怒りが浮かび上がっている。そして今まさに目の前に広がる業火が映ることにより、その表情は阿修羅にも似たようなものになっている。アルトウロの能力は『不滅王』で斬殺した相手の霊力を奪うもの。隊長を合計五人。そして、副隊長を含む隊士は数百を超えるほどに斬殺している。それにも関わらず、自分は目の前にいるこの爺を殺せない。それはアルトウロのプライドを傷つけるものであった。

「だが、あれを使える者はもうここには存在しない!! 今日こそ貴様を殺してやる!!!」

「だけど、そういう訳にもいかないよねエ」

「総隊長、ここは我々が……………」

「……………京楽に、浮竹か……………」

元柳斎の両隣りに二人の人物が現れる。一人は女物の桃色の羽織を着る笠を被った男性。もう一人は白髪の長い髪の毛を持つ男性。

——八番隊隊長・京楽春水。

——十三番隊隊長・浮竹十四郎。

「ほう……………貴様らがわざわざ私の前に姿を現すとはな……………」

八十年前にアルトウロが交戦した隊長の内の二人である。どちらもその実力は折り紙つきである。自分の目の前に実力者が現れることにアルトウロは嬉々とする。

「だが、ここは一旦退かせてもらう」

しかしアルトウロは撤退を選ぶ。それは数の分というのものもあるが、そもそも今登場してきた死神の能力が自分にとつて不利な能力である。それゆえ、圧倒できる霊力を手にするまで相手取りたくない。それがアルトウロの心情であった。

アルトウロはすぐさま響転でその場を離れる。しかしそれに伴い、京楽と浮竹もアルトウロを追いかける。

このままでは逃げ切るのは難しい。そう考えたアルトウロは指を鳴らした。

「出てこい、フーラー」

途端に、青流門の上空が割れ始め黒い空間のようなものが現れる。さらにその割れ目から巨大な白い物体が目を覗かせる。

「な……………なんだい、あれは？」

「……………?! 見ろ、京楽!!!」

突如、白い物体の口のような部分から、黒い液体のような物が滝のように流れ始める。さらに、二人の霊圧知覚に大量の巨大な霊圧が現れる。流れ出ていた黒い液体は、やがて意思のあるように上に突き上げていき。そしてその黒い身体の一部に仮面が現れる。

「あれは……………大虚^{メノスケラシデ}?!!」

「あんなに大量に……………やれやれだねエ。厄介なことしてくれるよ」

産み出されたのは大虚。その数は十数体といったところであろう。この二人には大した敵ではないが他の隊士たちは違う。副隊長なら

ともかく、一般隊士たちには手に余る相手であろう。その数も考えて、このままにすればかなりの犠牲がでることになる。

「さあ……………どうする?」

「水天逆巻け—— 『振花』!!」
ねじばな

ある人物が、アルトウロに向かい三又槍で飛び掛かる。それをアルトウロは受け止め、すぐに弾き飛ばす。弾き飛ばされた人物はすぐに体勢を整え着地する。

「海燕?!」

自分の隊の副隊長の姿に浮竹は驚く。

「貴様は……………あの時の男か?!フハハッ、死に損ないが!またノコノコとやられに来たか?!」

「今度は違え!!破道の七十三・『双蓮蒼火墜』!!」
そうれんそうかつい

海燕はアルトウロに向かい青い火球を放つ。しかしそれはアルトウロの斬魄刀の一振りでかき消される。しかし海燕は動揺した素振りは見せない。あたかも最初からそれが分かり切っていたように。
「……………隊長。ここは俺に任せてくれませんか?」

海燕の言葉に、浮竹のみならず京楽も驚愕の表情を見せる。その言葉の意味が分からない程海燕も馬鹿ではない。だからこそ海燕の突拍子もない言葉に驚いた。

「そんなことが出来る筈ないだろう、海燕!」

「さすがに無謀じゃないかなア?」

「ならば私が立ち会おう」

「っ?!朽木隊長!!」

三人の前に現れたのは、六番隊隊長・朽木白哉であった。いつも通りの表情で、海燕の戦闘を認める旨を話す。

「兄は、策もなしに奴に勝てると驕るほど愚かでないことは私も承知済みだ。一人で奴と相対すと言う分には、何かしらの策があるのだと私は考える。違うか?」

「……………はい。あります」

「ならば私は兄が奴と戦うのを推す」

「だが……………!!」

浮竹は白哉の意見を聞いても、海燕が戦うことに対し否定的になる。海燕の実力を疑っているわけではないが、それでも相手は隊長格を捻れるほどの実力者である。普通に考えて副隊長である海燕が勝利する望みは薄いであろう。

「案ずるな。私が立ち会おうと申したはずだ。無駄死になどさせぬ」

「っ……………!!」

白哉が言いたいことはこうだ。

『殺されそうになったら、自分が救援に入る』

その意味をくみ取った二人は互いに頷きこの場を海燕と白哉の二人に任せることにした。

「……………話は終わったのか？」

「ああ。わざわざ待ってくれるなんざ律儀だな」

アルトウロは今の会話の内に逃げるといふことしなかった。それはアルトウロが現在この場に居る海燕と白哉をどちらも殺すことが出来るという、傲慢ではない、冷静な分析によってこの場に留まることにしたのである。

「フツ……………私の霊圧が分からん訳でもあるまい……………」

「そうだな。だから、力を付けてきた。てめえに勝つためにな……………！」

そう言うと海燕は、自分の目の前に振花を構える。その挙動に、アルトウロは探るような目を向ける。こいつはいつたい今から何をやるつもりなのか。隊長を倒すことが出来る自分に対し、副隊長であるこの死神はどうやって自分に相対すつもりなのか。様々な思考を巡らせる。その余裕があるのも、自分がこの死神に勝てるという絶対の自信があるからだ。

すると途端に海燕の霊圧が上昇していく。その様子にアルトウロは笑みを零す。先ほど殺した副隊長とこいつは格が違う。さらにこの霊力を自分のものにできるといふ自信があるからには、笑みが零れるのを抑えることはできない。

しかし、『喜』は『驚』になる。

「……………卍・解!!!」

「何っ……………?!」

海燕が立っている場所から、爆風が巻き起こる。それと同時に巻き上がる砂塵から海燕の姿を覗くことは出来ないが、爆発的に上昇した霊圧にアルトウロは驚愕する。霊圧だけならば、さきほど自分が討ち取った隊長と同じレベルである、と。

次第に、巻き起こった砂塵の中から、それをこじ開けるように六つの水流が噴き出してくる。そして、アルトウロはある異変に気付く。(……………雨が降って来たな……………)

——天相從臨。
てんそうじゆうりん

一部の斬魄刀が持つ、天候を支配する能力である。天候を操ることにより、自分に有利な戦場を産み出す。今まさに空は曇り始め、豪雨と思えるほどの強い雨が降り始める。

「クククッ……………フハハハハハッ!!!」

目の前にいる獲物が予想以上の力を持っていることに笑いを止められない。

そしてついに、その全貌を明らかにする。

「『水仙六花輪道』!!!」

海燕の周りに渦巻く巨大な水流は六つ。死覇装の上には蒼色の巨大な羽織を纏い、首にはアクアマリンのように輝く玉を連ねた数珠を掛けている。背中には、水で形作られた巨大な華鬘けまんがその存在感を放つ。さらに右手には、振花のような三又槍ではなく、金色で装飾され所々は蒼色で塗られている。その形状は金剛杵こんごうしよと言われるもので、その中でも柄を中心に両端に刃が三つずつ付いている三鉈杵さんこしよと言われる種類である。海燕はそれを振花と同じように手首を主軸にして回転させる。

「地獄道」

海燕は金剛杵をアルトウロに向かい振る。すると、周りを渦巻いていた水流が一度にアルトウロに奔っていく。水流はドリルのように渦巻き、先端は鋭利になる。

「フンッ、たかが水流で!!」

アルトウロはそう言つて、水流を避けず殴打によってその水流を打

ち砕こうとする。しかし、アルトウロの殊勝であった表情はすぐに驚愕へと移り変わる。打ち砕こうとして放った拳は、逆に水流に巻き込まれ皮膚から血が迸り始めた。直後にアルトウロは身の危険を感じ響転で回避する。

「……………ちっ！ただの水だと思っていたが、霊圧の刃も混ざっているな……………」

「よく分かってんじゃねえか！じゃあ次はこれだ……………餓鬼道」

すると渦巻いていた六つの水流は砕け去り、アルトウロの周りに小さな水滴が無数に生まれた。アルトウロは二の舞を踏むまいと、注意力を高める。

そうしている内に、拡散していた水滴は一つにまとまり、やがてアルトウロを包み込む球体になった。そして、水がアルトウロに触れはじめる。

「っ……………ちっ!!」

すぐさま虚閃を放ち、球体を崩す。球体は再び水滴に拡散した後、また水流へと姿を戻す。

(今の球体……………触れている間、強制的に霊力を放出させられるのか……………厄介な技だ……………!)

アルトウロは触れた瞬間に身体に悪寒が奔つたのを実感していた。それは八十年前に感じた、熾水鏡によって自分の霊力を吸収される感覚。故に、今までのどの攻撃よりもいち早く反応した。

その間にも、海燕は追撃を加える。

「畜生道」

六つの水流は瞬く間にその形を変貌させ、竜のような頭部を作り出した。そして、六つの水の竜はアルトウロに向かい突進していく。アルトウロはその一つ一つに虚閃を放ち対処していく。

アルトウロは、これ以上悠長なことをしていると自分に危険が迫ると感じ、海燕に肉迫していく。

「修羅道」

周りに拡散していた水流が海燕の持っている金剛杵の両端に収束していき、やがて両端に水で構成された青い刀が出来る。

「烈波！」

海燕がその金剛杵をアルトウロに向かい振り下ろすと、その刃の軌道から衝撃波のようなもの飛び出る。それはアルトウロが反応するよりも早く、アルトウロの皮膚を斬りつけた。直後に斬りつけられて出来た左肩から右腰まで傷から鮮血が飛び散る。

アルトウロは自らの鋼皮イエロに傷を付けられたことに驚く。鋼皮とは、強固な霊圧硬度を持つ破面の外皮である。外皮の硬さは霊力の高さに比例し、今までに隊長を五人殺し、その霊力をわが物にしたアルトウロの鋼皮の硬度は並大抵のものではなくなっている。それをこの死神は、いとも容易く自分の鋼皮を斬り裂いた。そのことに対して、アルトウロは驚きを隠せない。

「これは……………どうだ!!」

アルトウロはすぐさま虚閃を海燕に向けて放つ。それは接近した状態で今の一撃を喰らうのは危険だという判断のもので行った行為である。

「人間道」

突然、収束して刃となっていた水は海燕の周りを青い炎のように渦巻き始めた。そして海燕は右手を自分の目の前に翳す。

「破道の七十三・『双蓮蒼火墜』!!」

先ほどよりも巨大な青い火球が虚閃と衝突し、爆発を起こす。

(威力が上がっている……………?!!!)

アルトウロは今の一瞬で、先程海燕が放った双蓮蒼火墜が最初に自分に放ったものよりも威力が格段に上がっていると認識した。正解している状態であるので、ある程度の威力の上昇は見込んでいたが、今のものは完全にアルトウロの予想の範疇を超える威力であったのである。

「フンッ……………どうやら、口だけではなかったようだな」

「八十年経ってんだ。当たり前だろうが」

海燕はそう言うのと金剛杵を右手で肩に担ぎ、アルトウロに狙いを付ける。左の手の平はアルトウロを掴むように伸ばされている。

「とっておきいくぜ…………。天界道」

海燕が纏っていた青い炎は再び水へと変化し、それらは全て金剛杵へ纏っていく。それは渦潮のように渦巻きながら、轟音を立てる。

「今までお前に殺された奴等の分だ……………喰らいやがれ!!!」

そう叫びながら海燕は金剛杵をアルトウロに投擲する。竜巻のように渦巻く激流の槍は、凄まじい速さでアルトウロを貫かんと迫っていく。

「この程度で……………!!」

アルトウロは今自分に迫りくる槍に虚閃を放つ。金剛杵と虚閃は衝突する。両方の威力が拮抗しているのか、衝突した位置からどちらも譲らない。しかし…………。

「……………?!周囲の水分を取り込んでいる……………?!」

金剛杵は海燕が投擲した際に回転が加えられている。そして金剛杵からはいくつかの水の筋が伸びている。アルトウロは始めそれを、虚閃と衝突しているために金剛杵に纏っていた水が拡散しているものだと考えていた。しかしそれは逆であった。周囲に拡散していると思われるいた水分は逆に、虚閃と衝突している間にも雨雲から、降り注ぐ豪雨から、地に落ちて出来た水たまりから、どんどん金剛杵に集結していく。

そして、その威力をどんどん上昇させていつている。

現に今、拮抗していた二つの力の均衡はだんだんと崩れかけている。海燕が投合した金剛杵の勢いが、アルトウロの虚閃の威力に勝ってきている。

「……………く、そおおおおお!!!」

アルトウロは、為す術なく金剛杵を左肩に喰らう。直後、集結していた水分は直撃した瞬間に炸裂し、爆音を上げた。そして、集結していた水分が散ったことにより先ほどよりも強めの雨が一瞬降る。そしてその雨と一緒に、投擲した金剛杵が手元に戻ってくる。

「……………やったのか……………?」

海燕は誰に話すという訳ではない眩きを漏らす。アルトウロの居た場所は、水が爆散した際に出来た霧で、その姿を望むことは今出来

ない。

「……………おのれ……………副隊長風情が……………!!!」
「っ!!?」

アルトウロは生きている。

その事実が、海燕に再び緊張感を奔らせる。直後、海燕の左肩に虚閃が降り注ぐ。海燕はそれを避けきれずに喰らってしまう。苦痛に一瞬顔を歪めるが、すぐさま体勢を整える。

「ぐっ……………修羅道!!!」

「遅いっ!!!」

海燕は水を金剛杵の両端に収束させようとするが、それよりも早くにアルトウロの刺突が今度は右肩に突き刺さる。

「……………っちい……………!!!」

「確かに貴様の卍解は強力な部類に入るだろう……………だが、私を殺すにはまだ足りないな……………!!!」

そう言うアルトウロの左肩は血こそ流れているが、まだ稼働可能な傷の部類に入るのであろう。海燕も、ただ攻撃を喰らっているだけではなく、左手から『赤火砲』を放とうと靈力を高める。しかしそれよりも前に、アルトウロは響転で海燕から離れていく。直後に、刃が突き刺さっていた海燕の右肩からは、血がボタツと流れ始める。雨のせいで多少流血は少ないようにも見えるが、海燕を中心に広がる血を混じった水たまりの広さが出血の酷さを物語っている。

「兄はもう下がっている」

「っ、朽木隊長……………!」

「ここからは、隊長である私が奴と相対す。兄は治療を受けるにしろ、他の味方の救援に行くにしろ、その流血を止めるがよい」

「……………分かりました。では、後を頼みます」

そう言うとき海燕は卍解を解除し、瞬歩でこの場を去って行く。アルトウロはそれを狙い撃つように虚閃を放つが、数多の桜の花弁により防がれる。

「……………以降、私が兄の相手をしよう……………」

「……………現世で遭った隊長だな。確か、『朽木』と言ったな? もしや、朽

木銀嶺の息子……………いや、孫か？」

「そうだ。私は朽木銀嶺の孫だ」

「フンッ。息子の方はどうか知らんが、六番隊という奴は代々隊長を、一つの家系の中から出してでも居るのか？だとしたら、貴様も銀嶺の方もたかが知れているな」

「……………祖父を侮辱することは許さんぞ」

『たかが知れている』という言葉に白哉は反応する。それは自分を嘗められたことに対してではなく、尊敬していた祖父に対する侮辱の言葉に憤りを感じたのである。

「……………兄が誰であろうと、私が今ここで兄を斬り捨てれば全て終わる」
「随分、余裕ではないか」

「意志ではなく、使命だ。私が護廷十三隊六番隊長である以上、兄をこれ以上瀰霊廷の内でも好き勝手やらせるわけにはいかん。故に、始めから私の全力を持って兄と相対すことにしよう」

すると白哉は斬魄刀の刀身を地に向け、握っていた柄を放した。斬魄刀はそのまま地面の中に吸い込まれるように落ちていく。直後、先程の比にはならないほどの桜の花弁が出現する。

「卍解———散れ、『千本桜景嚴』」

「ほう……………一度見たが中々のものだな」

アルトウロは白哉の卍解に感嘆の言葉を漏らす。しかし白哉はその言葉を気にも留めない。

「……………兄は、私の手で斬ることにする。これを他人に見せるのは兄が最初だ」

白哉がそう言うと、散り散りになっていた数億枚とも思われる花弁の刃は、千本の刀に押し固まっていく。すると白哉はその内の一つの刀を手取る。

「殲景・千本桜景嚴」

「成程な……………貴様には期待が持てそうだ……………」

狂喜する獣。

舞う桜。
その身を裂かれるのは――。

同期

冷えた指先
温めるのは
濡れた吐息

「破道の三十三・『蒼火墜』!!」

ルキアは、目の前に居る虚に向かい青い火球を放つ。それは虚の頭部を半分削り、絶命させるに至った。その横では、虎徹清音と小椿仙太郎が連携して、虚を着々と斬り捨てていく。いつもは喧嘩ばかりしている二人ではあるが、いざ戦闘となると四席の名に違わぬ戦果を着実に上げていく。

ルキアはそれを見て、自分も負けられないと右手に握る袖白雪の刀身を、今倒した虚の後方に佇む虚たちに向ける。

「次の舞——白漣!!」

雪崩のように突き進む冷氣は、虚たちをたちまちに飲み込んでいき、その大半を氷漬けにした。

「咆えろ——『蛇尾丸』!!」

「面を上げろ——『侘助』!!」

「弾け——『飛梅』!!」

その虚たちは、ルキアの後方から飛来してきた鞭のような刃や火球によって打ち砕かれ、手前にいた虚の一体は、先端がコの字に折れ曲がった形状の刀を持った人物に斬られ、砕ける。

「なっ……………恋次?!」

「へっ…………お前だけに手柄やるわけねえだろうが!!」

恋次はそう言いながら伸びた蛇尾丸の刀身を元に戻す。その形状はダンビラのような、尚且つ鋸のような特徴的な形である。

そして恋次とともに後方にいた雛森と、手前に居た虚を切りつけた吉良がルキアの元に駆け寄ってくる。

「恋次君、朽木さんのこと心配だつて言つて走つていつちやつたから、追いかけるの大変だつたの……」

「雛森！それを言うんじゃないよ!!」

雛森の言葉に恋次は顔を紅潮させながら口止めしようとする。その光景に、『このたわけが……』と、ルキアは眩き、吉良は『ははは……』と苦笑いする。

ちなみにルキア達は先程海燕の指示で、海燕とは別行動をとつている。

するとさらに後方から瞬歩で、霊圧二つが接近する。その方向に四人が目を向けると、それらの人物に驚いた。

「っ！朽木か!?ここにいたのか!!」

「おや、奇遇だねエ。今から僕たちもこつちに加勢するよオ」

「浮竹隊長!?京楽隊長!?どうしてこちらに?!」

隊長二人の登場に、ルキアだけでなく他三人も目を見開く。

「向こうを見てみる、朽木」

「向こう……う？はっ！あれは?!」

浮竹が目線に向けた方向に目を向けると、巨大な黒い縦長の物体が十数体ほど、赤い閃光を放ちながら進撃しているのが確認できた。

「そう、大虚メフスグランデだよ。さすがにあれを、他の子たちにやらせるわけにはいかないからねエ」

京楽は、その間の伸びた口調とは裏腹に、表情は真剣なものとなっている。その様子にルキアだけでなく、他の三人も息を飲む。

「とりあえず僕たちは、あれをどうにかする。その間君たちはこの場を任せてもいいかい？」

「二二はいっ！勿論です!!」

京楽の言葉に、四人ははつきりとした返事を返す。その様子に、二人は互いに頷く。すると、後方からドタドタと音が聞こえてきた。

「ちよ、ちよつとく!!待つてくさいよ!!あんたが飛び出して碎蜂隊長に怒られるのは俺なんスからねえ!!?」

「で、でも大前田副隊長と一緒に安全だと……あ、ルキア殿！皆さん!!」

六人の元に来たのは、ルキアたちの同期である四楓院朝霧と、二番隊副隊長の大前田希千代である。四人を見つけ笑顔の朝霧とは違い、大前田は朝霧を止めようと必死の形相である。朝霧は、ルキア達とは違い刑戦装束という背中が露出しているノースリーブの服を着ている。その露出している部位からは、光沢と引き締まった褐色の肌が惜しげもなく六人に見せつけられる。

「おやア！朝霧君かい?!おつきくなつたねえ〜！昔は女の子みたいにかわかったけど、今じゃもうイケメンかア〜！」

「大前田副隊長もいるなら安心だな、京楽。じゃあ俺たちは早速あっちに向かおうか」

「おっと、そうだねエ。じゃあね朝霧君！今度会った時には清乃の塩大福持ってきてあげるよ！」

「浮竹隊長！京楽隊長！お気をつけて！」

「え？俺が居るから安心ってどういうことだよ？」

「大前田副隊長。我々はここ一帯の虚の対処を浮竹隊長から仰せつかっております。なので、大前田副隊長のお力添えをいただきたいのですが……………」

ルキアは簡単に現状を説明し、大前田に協力を要請する。その言葉に大前田は、驚愕した表情を見せる。

「ちよつと待て！俺は朝霧の……………いや、朝霧様の護衛を碎蜂隊長から言われてるんだよ！こんな危ねえ所にいて朝霧様に怪我でもさせたら、俺が碎蜂隊長にボコボコにされるんだよ!!」

「でも大前田副隊長！私たちは護廷十三隊なのですぞ?!私だけの為に、実力者である大前田副隊長が前線に出ずしてどうするのですか?!」

「お、おう？.そうか？」

朝霧の『実力者』という単語に、大前田は気をよくしたのかちよつと顔が緩む。その様子に、恋次は呆れたような溜息をつく。

「なら、十一番隊の俺たちはもつと前に行かねえとな」

「そうだね、一角。新人さんたちにだけ手柄をとられるのは忍びないからね」

そう言つて六人の前に姿を見せたのは、十一番隊第三席・斑目一角と十一番隊第五席・綾瀬川弓親であった。二人は、まるでこの混乱している状況を祭りのように楽しんでるように見受けられる。

「あ、もしかして斑目一角三席と綾瀬川弓親五席ですか?! 私は四楓院朝霧と言います! どうか、大前田副隊長を説得してくれませんか?!」
「おや、副隊長なのに前線に出ないつもりなのかい? 美しくないね……………」

「はっ、朝霧つつつたか? 行きたくねえ奴なんてほつといて自分の魂^{てめえ}で動きやがれ! 何なら、俺たちに付いてくるか? お前の方がアイツより肝が据わつてそうだ!!」

「じゃあ、お願いします!!」

「ちよちよちよつと!」

一角の勧誘に、朝霧は嬉々として乗る。それは護廷十三隊である自分が瀧靈廷のために動けないことに対しての不満であったのか、かなりの速さで即答した。それに対して大前田は、全力で阻止しようとする。真面目な朝霧は、天然なのか時々凄まじい行動を起こす。自分と一緒になら、朝霧をギリギリどうにか止められるかもしれないが、十一番隊などと一緒にいたらどんな化学反応を起こすか分からない。しかもそれは朝霧が良かれと思ひ、瀧靈廷の為にしようとする事なので、なお性質が悪い。

「ルキア、俺は斑目三席に付いて行くぜ!」

「私は、虎徹四席と小椿四席とともに進む。ここで二手に分かれるか?」

「なら私は恋次君と一緒に行くよ。吉良君はどうする?」

「僕も雛森さんと一緒に行くよ。一応同じ隊だし、まとまって行動しろつて言われたしね」

そうこうしている間に、ルキア達はどういう風に分かれるかをきつさと決めていた。そして二つに分かれた班は、早々に虚に向かつていった。

「う……………朝霧様あ〜! 俺も付いて行きますよ〜! それでいいんでしょ〜?!」

大前田の情けない声が後ろから聞こえてくるが、朝霧以外は耳を傾けない。というより、ルキアたち四人はこんな情けない副隊長を直視したくない、いわば現実を見たくないのである。

「ありがとうございます！大前田副隊長!!」

「まったく……親父も言っていましたけど、四楓院の方々は勝手に過ぎますよ……俺が碎蜂隊長に怒られたら、しっかり弁明してくださいね?!!」

「勿論です!」

情けない上司と、奔放な部下の絵面だな、と一角は考えた。一角の場合、副隊長自由奔放過ぎて補助が大変なのである。それは五席である弓親も同じだ。

「へっ……じゃあいくぜ、弓親ア!!延びろ———」「鬼灯丸」!!

「そうだね一角……咲け———」「藤孔雀」!!

解号を叫ぶと共に一角の斬魄刀は菊池鎗へ変化し、弓親の斬魄刀は四枚の刀身を持つショーテル状の武器に変化する。

そしてそれぞれの目の前に居た虚を次々と切りつけていく。

「はあ……損な役回りだ……。朝霧様、あんまり前出ないでくださいよ? 打つ潰せ———」「五形頭」イ!!

大前田が解号を唱えると、刀身が柄部分と鎖で繋がれた棘付き鉄球に変化した。俗に言うモーニングスターである。

そして目の前の虚の頭部に叩き付ける。

「はい、援護に徹します!! 薙げ———」「陰風」!!

朝霧が一閃すると、剣閃の延長線上にいた虚の体が両断される。

「やるじゃねえか、朝霧! 行くぜ、蛇尾丸!!」

朝霧を戦いぶりを見た恋次は、その流れに乗るように蛇尾丸を虚に振り下ろす。それに続いて吉良と雛森も虚に攻撃を仕掛けていく。

「はっ! 中々やるじゃねえか! 俺に続けえ!!」

一角を先頭に、朝霧たちはドンドン進んでいく。

時刻は遡る。

「まゝしくろくスーパーキ——ツク!!!」

「くっ!!」

日向は、前方から迫りくる白の蹴りを瞬歩で躲す。

「潰せ——『鉄漿蜻蛉』!!」
はぐろとんぼ

直後、巨大な矛のような武器を持つたりサが、その矛を日向に対し振り回す。それを日向は白皇の刀身で受け流す。受け流した流れで、日向はその場で一回転をする。すると日向の上空から、ひよ里が刀を構えながら下りてくる。

「ぶっ手切れ——『鹹大蛇』!!」
くびきりおろち

刀身がギザギザがついた身の丈ほどの大剣に変化し、それを手加減なく日向に振り下ろす。

「破道の三十一・『赤火砲』!!」

空いていた左手から赤火砲を地面に放ち、日向はそれをブーストとしてその場を離れる。ひよ里はそれを逃がさまいと日向に再び迫っていく。すると、日向は再び左手を地面に向ける。

「縛道の二十一・『赤煙遁』!!」

直後、煙幕が発生しひよ里の目の前は真っ赤になる。

「ちっ………小賢しい?!!」

悪態を吐こうとしたひよ里の頭を日向が踏みつけたことにより、ひよ里はゴンツという鈍い音を立てながら地面に顔をぶつけた。

それを見たりサは、すぐさまひよ里の援護に入ろうと現在空中を飛んでいる日向に鉄漿蜻蛉で突こうとする。しかし突こうとして繰り出した一撃は、刃の先に手を置かれ飛び上がられることにより回避され、さらにそのまま日向は駆け出しりサに急接近する。驚くりサの額に、日向はチョップを命中させる。チョップをもろに喰らったりサはその場で痛そうに蹲る。

「よくも二人を〜!!喰らえ、ましろくスーパーパ——ンチ!!」

風を切る凄まじい音を立てながら、白は日向にストレートを繰り出す。しかし、それも日向の持ち前の反射神経によって躲され、直後に白の腕を掻い潜り白の眼前に突き出した左手から、バチンツとデコピンを繰り出す。その衝撃によって白は後ろにのけ反り、そして痛そう

に額を抑え込む。

「いったくい!!もつと優しくしてよ——!!」

「いや、でもそつちの攻撃ガチじゃないっすか」

彼らがこの場で行っていたのは、日向の特訓。主に移動であったり、回避であったりするものである。そのために今回は、仮面の軍勢ヴァイザードの女性三人に協力を仰ぎ、このような訓練をしていたのである。

「日向、随分動けるよおなったな」

「あいつの卍解がああである以上、反射神経は必須だからな。それもあいつが一番わかってんだろ」

平子の感心する言葉に、拳西が返答する。一番に、日向の卍解を相手したからこそその言葉である。

「あとは実戦でどこまでいけるかやな……」

「こんなところに居ったのか。まあ、予想は出来ていたがのう」

「っ?!夜一やないか!!なんでここがわかんねん?!」

突然の来訪者に平子は驚く。ましてやそれが知り合い、そして黒猫の姿であるなら尚更だ。

「ふんっ。日向の霊圧の痕跡を辿ればこの程度造作もないわ」

「っ!四楓院隊長?!来てたんですか?!」

「夜一でよい。お主に用事があつて来た」

夜一の言葉に、日向だけでなく仮面の軍勢も興味深そうに夜一を見つめる。

「尸魂界で、異常な量の霊圧が急に発生した。恐らくアルトウロが瀧霊廷侵攻を開始したのであろう。まつ梨はすでに、喜助の開いた穿界門で尸魂界に向かっている。お主も、行くのではないかと思つてのう」

その言葉に、全員が驚愕する。予測していたことではあるが、現実に起こってみると重みが違う。日向はそう感じた。

「霊圧って……どうやって観測したんや?」

疑問を浮かべた顔で、平子が夜一に尋ねる。

「儂は昔、喜助に頼まれて一回だけ尸魂界に戻つたのじゃ。その際に、霊圧の観測機を志波邸に設置してきた。今回はそれに反応したの

じやろう」

「くっ……………！まつ梨……………！何で一人だけで……………！」

「今のあ奴は、五日前のあ奴とは比べ物にならない位成長しておる。お主が行く時間くらい、あ奴でどうにでもなるわ」

日向の心配する言葉を、夜一が諫める。

「行くのか？日向……………」

「勿論です、平子さん。すぐに穿界門を開いて瀨靈廷に戻ります」

平子の言葉に、日向は迷いのない表情で答える。それに、仮面の軍勢は全員安心しているような表情をみせる。そして夜一が口を開く。「ならば、すぐに行け。こんな状況にでもなったら、お主の力で救える命も数多に存在するであろう。そしてあと一つ言っておくことがある……………『おぬしに、藍染は視える』。浦原の言葉じゃが、信ずるには十分じやろう。決して藍染には手を出すな」

「……………？……………はい、行ってきます！平子さん、拳西さん、ラブさん、ローズさん、リサさん、白さん、ひよ里、有難うございました!!」

「ちよお待てや！何でウチだけ呼び捨てやねん!!」?

ひよ里のツツコミも虚しく、日向はさっさとアジトを去って行く。それを見つめる仮面の軍勢の瞳はどこか寂しそうであった。

少し経った後、平子が口を開く。

「……………あいつは、強おなった。俺らはもう口出し出来へんくらいにな」

「そうか。なら、安心じゃ」

(あの目は、本当にあ奴にそっくりじゃ……………)

平子の言葉に、夜一も表情を柔らかくさせる。

「アルトウロと一回やり合ったんが、ええ経験になったんちやうか？実際の實力差つてもん見せつけられて、あいつは最初より上を目指すようになった。でも、時々基礎に立ち返ってんねん。それ見たら『ああ、コイツ大事なもん無くさんよう必死になつとるんやなあ』って思っつな。それで、ついつい世話を焼きたくなつてもうたわ」

「実際に手伝ったんはうち等やけどな」

平子の言葉に、不服と言わんばかりにリサが横やりを入れる。その

様子に夜一はため息をつく。

「……………ほんっ！とにかくアイツの心配はもういらへん。行く未見
守るだけやわ」

そう言っつて平子は誰もいない扉の方を見つめる。

(守りたいもん、しっかり守り通せ。日向……………！)

白神様しろかみさまが行く。

竜叫

これは

あたしが選んだ戦いだ

「冬獅郎、大丈夫か？身体は動くか？」

「まあなんとか……ふつうの虚とならやり合える程度には……」

「もお、心配したのよ〜?!」

こんな会話をしながら虚の群れに向かい走っているのは、志波一心と日番谷冬獅郎と松本乱菊である。アルトウロに重い一撃を喰らいダウンしていた冬獅郎は、四番隊の治療を受けて何とか回復した。冬獅郎を心配していた乱菊は、冬獅郎を胸に手繰り寄せる。それに対し冬獅郎は『離せ!』と暴れ、一心は羨ましそうな眼を向ける。

「……とりあえず今の問題は、あの大虚だ。あれは俺たちでやるぞ」「そうですね……でも、あんなに大量の大虚は見たことない……!」

視線の先にいるのは、数十体の大虚。松本自身に大虚との戦闘経験がないわけではないが、これほど多くの数は見たことがなく、その眼差しには緊張を含むものとなっている。新人の冬獅郎は尚更である。

「でも、誰かがやらなきゃいけない……!」

冬獅郎は決意を固めるように呟く。

「あ、一心!!俺だ!!」

「海燕じゃねえか?!どうした、他の奴らは?!」

一心に遠くから声をかけるのは、十三番隊の副隊長である志波海燕であった。二人は親戚関係であるため、他隊の隊長・副隊長という関係であるにも関わらず、フランクな口調で話し合う。一心は海燕の周りに隊士が居ないことを疑問に思い、そのことについて尋ねる。

「清音と仙太郎に任せてる!今から向かうつもりだったんだ!」

そんなことを叫びながら、海燕は一心達の近くに来る。

「そうか。俺たちはあの大群をなんとかする。じゃあ、俺たちは行くぜ」

「おう」

そう言葉を交わした後、再び一心達と海燕は分かれる。しかし、一心には一つ気にかかることがあった。

（霊圧がだいぶ減っていたな……。それに死覇装が所々破けてやがったし……。どつかで一戦してきたのか……。？）

海燕の諸所の消耗らしき痕を目にした一心は、多少でありながら海燕を心配した。しかし、海燕の実力は良く知っているので、一心は心配するだけ無駄だと感じ、考えることをやめた。

「ぎやあああああ!!」

「わあああああ!!」

東流魂街、清流門付近の地区。ここでは現在、瀨霊廷と逆方向に進んできた虚たちによって、住民に対しての蹂躪が行われていた。勿論、死神による対処も行われていたが、何分数が多く瀨霊廷からこちら側に来るためには、虚の大群を横断してくることに等しい行為なので、瀨霊廷内部の対応に追われる死神は、必然的にこちらに来ることは難しくなっていた。

そうしている間にも、住民の一部が虚の犠牲になっている。

「断ち払え——『ことうまる虎淘丸』!!」

突如、太刀のような斬魄刀を有した死神の少女が、一部の虚を斬り捨てていく。そして次々と住民たちを襲う虚を中心に刃を振り払っていく。その光景に住民だけでなく、虚や死神たちもその少女にくぎ付けになっていく。

「はあああああ!!」

少女は鬼神の如き戦いぶり、虚を退けていく。そして、小さな子供を襲っている虚に狙いを定め肉迫していく。狙われた虚は危機を察し、すぐさま子供を連れだま逃げようとする。しかし、少女の方

が早かった。

「虎洵円舞!!」

少女が斬魄刀を振るうと、円柱状に霊圧が立ち昇り、虚の胴体に風穴が空く。そして支えを失った子供は空中で虚の手から落ちていく。

「うわああああああ!!」

「よつと!大丈夫、君?」

「う、うん……………おねえちゃん、ありがとう!」

少女は落下の途中で子供を抱えることに成功し、そのまま着地する。お礼を子供に言われた後は、子供をすぐに安全な場所に向かわせる。

「ふう……………でも瀧霊廷はもつと大変なんだろうな……………。速くいかなきゃ……………」

「おーい!君!どこからの援軍だ?」

少女——宮能まつ梨は、後ろから一般隊士らしき男性に声を掛けられる。それに対しまつ梨は一瞬びくつと反応するが、すぐに平静を取り戻す。

「え……………つと、じゅ、十番隊です。でも逸れていて……………」

「十番隊か!なら、すぐ近くに志波隊長の霊圧が感じられる!志波隊長に、何人が応援を送ってもらえるよう言ってくれないか?!今は、ここは三番隊で何とかする!」

「は、はい!分かりました!では、お気をつけて!!」

「そっちなー!」

何とか隊士との会話をやり過ごし、まつ梨はその『志波隊長』という人の元に行くことにした。

(志波隊長って……………海燕さんのことかな?)

彼女の中で志波の姓が付いている人物は、お世話になった志波海燕しかいない。しかし、現在向かっている恐らく隊長であるであろう巨大な霊圧の持ち主は、以前感じたことのある霊圧ではない。しかし、味方の死神に応援を要請するよう頼まれたので無視するわけにはいかない。

「ふっ!!てあ!!」

そんなことを考えながら襲いかかってくる虚を斬り捨てていく。このように虚に落ち着いて対処できることから、自分が成長したとまつ梨は感じるのであった。そして、清流門付近に到着した途端、目を見開く。

「あれは………大虚?!」

初めて見る黒い巨体。余りの存在感に一瞬足がすくむ。漣靈廷にあのような強力な虚が居るなら、すでに被害は凄まじいものとなっているだろうと考えた。

「くっ………早く応援を………!」

そうしている内に大虚の狙いは、まつ梨に向けられた。すると大虚の口に赤い閃光が収束していく。それに気づいたまつ梨はすぐさま虎掏丸を体の前に構える。直後、虚閃がまつ梨に襲いかかるが、刀身でなんとか弾く。しかし腕に残る痺れが、その威力を物語っているとまつ梨は感じた。

(アルトウ口はもつと強力な虚閃を放つ………このくらい何ともない………!!)

自分に言い聞かせて、目の前の大虚に相対す。そして、瞬歩を使い大虚に肉迫する。そして大虚の身体に刃を突き立てながら、どんどん仮面に向かい上っていく。そしてとうとう仮面に到着すると、虎掏丸を振りかぶる。

「はああああああ!!!」

そして思いつきり、仮面を叩き斬る。大虚の仮面にはくっつきり文字が描かれている。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「なっ………?!」

しかし、それは大虚を絶命させるには至らなかった。空中で無防備なまつ梨に向かい、大虚は虚閃を放とうと霊圧を高める。まつ梨がさまざま防御の体勢をとるが、空中では上手く受けることが出来ないであろう。

しかし――。

「月牙天衝!!」

突如後方より飛来して来た斬撃が、大虚の仮面に直撃し、大虚の目からは光が消え霊子へと変わっていった。

「えっ……………?!」

「嬢ちゃん！大丈夫か?!」

まつ梨が振り向くと、そこには隊長羽織を着た燃える刀を持った男性が居た。男性はまつ梨を心配するような声を掛ける。

「何番隊だ？見かけない顔だが……………?!」

「えっと……………あ、もしかして志波隊長ですか?!」

まつ梨は何番隊かという問いを、無理やり話を変えることにした。

「ん？そうだが……………なんだ？」

「清流門付近で虚と交戦する三番隊の隊士が、志波隊長に応援を頼んでくれと言われて……………!」

「そうか、わかった！よし、松本、冬獅郎！行くぞ！」

「え……………隊長自らですか？」

「おう！大虚群れには京楽隊長と浮竹隊長も行ってからな！俺たちは、瀨霊廷の外側から攻め込むことにしよう！」

志波隊長——つまり一心は外側から虚の殲滅に当たると言う。

まつ梨は隊長自身が応援に行くと言うことに驚きを隠せない。

「もう隊長く！自分でさっさと行っちゃって!!」

「俺のこと言えないっすね」

すると一心の後方から、金髪の美女——松本乱菊と、銀髪の少年——日番谷冬獅郎がやってくる。

「あれ、この子誰ですか？」

「あ、そうだった！お前、名前と所属の隊は？」

松本によって再び先ほどの質問がやってきて、まつ梨は冷や汗を流す。

「ええと……………宮能まつ梨です。所属は……………元十番隊です……………」

「元？いや、今の隊を……………」

「隊長。応援行くんですよね？だったら行きましょう」

「お……………そうだな。えっと、まつ梨だったな？とりあえず気を付けろよっ。」

一心はそう言うと、二人を引き連れ瞬歩で清流門に向かっていった。それをまつ梨は、ふーっと息をついて眺めていた。

——危なかった。

まつ梨はそんなことを考えながら再び瀨靈廷の中心に向かって進んで行く。

(待つてろ……アルトウロ!!)

「破道の四・『白雷』」

「フンツ、その程度で!!」

白哉の指から放たれた光線を、アルトウロは頭を傾けることにより回避し、不滅王を白哉に振り下ろす。白哉は手に持つ白い刀でそれを防ぎ、そして周りに展開されている数多の刀の内を二つをアルトウロに向かい飛ばす。しかしそれもアルトウロは軽い身のこなしで躲いでいく。その回避している間を付け入るように白哉は瞬歩で肉迫し、刀を振り下ろす。それをアルトウロは不滅王で防ぐ。

このような攻防がすでに十分以上続いている。

二人を見て、消耗しているのはどちらかと言われたら、大半が白哉と答えるであろう。いつも通りの平静を保っているながら、息はそれに反するように上がってしまった。その様子に、アルトウロは口角を吊り上げる。

「確かに貴様の刀の一撃は強力だが、当たらなければどうということはない」

「そうか。ならば兄を斬り捨てるまで刀を振るうのみだ」

そう言つて白哉は刀を薙ぐ。

確かにこの男は強い。隊長五人分の霊力をフルに使う事ができる自分と、よくここまで対等に戦えるものだとアルトウロは感心する。しかし、単純に考えて隊長一人と、隊長五人分の力を持つ者の戦いであつたら、百人中百人が後者を選ぶであろう。

客観的に見て。白哉が勝利することは難しい。

しかし白哉の目には、そう言つた現実に対する絶望や焦りといった

負の感情は見えない。むしろ静かに佇むその瞳からは、敵をどうやっても討ち取ろうとする凄まじい気迫を感じられるものであった。

その様子が、アルトウロをさらに高ぶらせる。

「そろそろ死んでみてはどうだ？」

「断る」

そう言つて白哉は、手に持つ刀と周りに浮遊する刀を巧みに操り、アルトウロに連撃を加えていく。アルトウロもそれに対応していく。

しかし、突然それは起こった。

「っ!!!」

白哉の背中から突然鮮血が舞い、その場で一瞬膝を着いた。何が起こったのか分からないままアルトウロに再び視線を戻す。

「何か知らんが……運は私に付いてきたようだな!!」

「ぐっ!!」

白哉は初めてこの戦闘の中で、苦しそうな声を漏らす。アルトウロは、白哉の一瞬怯んだのを見逃さずに響転で接近し腹部に膝蹴りを喰らわせた。

白哉は吹き飛び建物に突っ込む。

(何者かが私の背中を切ったのか……?)

瓦礫をどけている間にも、自分の置かれた状況を確認する。そして殲景・千本桜景敵を解除し、無数の花卉の状態へと戻し、アルトウロに向かわせる。しかし、アルトウロはすでに準備を終えていた。

「王虚の閃光」

「っ?!」

無数の花卉も、巨大な灰色の閃光に飲みこまれていく。そして、白哉を中心に周りの建物がほとんど消滅するような閃光が五秒ほど続いた。

アルトウロは、白哉が居た場所へと目を向ける。

「まだ生きているのか。まあ、そちらの方が好都合だな」

「……………」

白哉は無言で、アルトウロの左側に佇んでいた。しかし、左腕からは凄まじい量の血を流している。

「そろそろ、終わらせようか」

アルトウロのその言葉に、白哉は千本桜を向かわせることにより返事する。それをアルトウロは響転で回避し白哉の左腕の方に移動した。

そして不滅王を左腕に向かい薙ぐ。白哉はそれを避けきれずに、再び左腕に傷を負うことになる。

「縛道の六十一・『六杖光牢』」

「むっ！」

アルトウロの胴に、六つの光の帯が突き刺さる。

「破道の三十三・『蒼火墜』」

アルトウロの胴体を、青い爆炎が包み込む。それにはさすがのアルトウロの表情も歪む。そして六杖光牢を破壊し、白哉と距離をとる。

「虎洵円舞!!」

「なにっ?!」

直後背後から聞こえてきた声と、自分の下から突き上げる霊圧の攻撃にアルトウロは驚く。そしてすぐに、その霊圧の柱から抜け出す。

「……………何だ、貴様か。邪魔をして……………」

「尸魂界の平和にとつて、お前の方こそ邪魔よ。アルトウロ」

見たことのある少女に、アルトウロは落胆する。一度、自分が為す術なく暴虐を尽くした死神。

宮能まつ梨。

まつ梨は、虎洵丸をアルトウロに向ける。しかしそれに対してアルトウロは一切身構えない。

「どうした?今日は、私にわざわざ殺されにきたのか?あのまま現世で隠れていればよかったものを……………」

「黙れ。今日はお前を倒しに来たんだ……………。藤丸兄さんと、朱司波隊長の仇をとるために!!」

そう叫ぶまつ梨の霊圧は急激に上がっていく。

「お前だけは許せない!罪のない人を殺して!それを楽しんで!!苦しむ人を見下して笑って!!そんなお前を……………私は許さない!!!」

まつ梨が纏っていた霊圧が、白いものからだんだん赤いものへと変

化していく。

「だから………お前をここで倒す!! 正解
!!!!!!」
「っ?!」

「りゅうきゆうことうまる竜糾虎淘丸」!!」

獣が触れたのは、竜の逆鱗。

帰刃

何故 偶像を拝む？

貴様の世界で一番大事なのは

お前の命だろう

自分より上の存在を作ろうなど

馬鹿馬鹿しいとは思わないのか？

『藤丸、まつ梨。死神の戦いにとって必要なものは何だと思う？』

『うくん……やっぱり、斬拳走鬼じゃないですか？』

『あたしは、知識と経験だと思う！』

『はははっ！確かに、お前らのいう事も大事だが、もっと大事なことがある！』

『……胸？』

『違う、心……『想い』だ。誰かを護りたい……そんな想いが、私たち死神には必要なんだ』

『へえ〜！為になりました！』

『藤丸兄さんが言うと、何か重みを感じられないね』

『何〜?!』

『はははっ！二人とも、精進して立派な死神になれよ?!』

（『想い』……私は恐怖でそれを忘れていた……でも、もう違う！流魂街の人も、瀨霊廷の人も、皆アルトウロのせいでも苦しんでる！だから……私はアルトウロを倒す！皆を、護るために——
!!!
!!!

「卍解!!!」

『竜糾虎洵丸』!!!
りゆうきぎゆうこうまるとまる

まつ梨の叫びと同時に、爆発が起きる。爆発によって起こった砂塵

はやがて止み、まつ梨の姿が現れた。

腰から下には白いマント、肩の部分には竜の形をした銀色の肩当てが出現し、刀身は紅い炎に変貌している。

以前とは比べ物にならない霊圧に、アルトウロは目を見開く。これが五日前に、叩きのめした死神なのか。これほどまでに成長するのは。そういった感慨のようなものがアルトウロに浮かんでくる。

「だが……………それでどうしたア!!?」

アルトウロは、まつ梨の卍解に目もくれずに不滅王を構え、突貫していく。それに反応するようにまつ梨も、刃を後ろに構える。すると、刀身の炎が巨大化する。それに比例し霊圧も上がることをアルトウロは感じた。

「竜糾———絶衝!!!」

アルトウロが刃を振り下ろすと同時に、まつ梨も刃を振り上げる。凄まじい衝突音と共に、アルトウロの左腰から右肩にかけて赤い線が浮かび上がる。それと同時に、アルトウロから鮮血が舞う。その光景に、アルトウロのみならず、白哉も驚愕する。

アルトウロはまつ梨から距離をとる。そして今出来た傷跡を指でなぞり、指に付着した血を嘗めとった。

「破道の四・『白雷』」

「つぐ?!」

アルトウロが次の行動に移ろうとした瞬間に、アルトウロの右肩を後方から一筋の閃光が貫く。予想外の攻撃に、アルトウロは苦悶の表情を浮かべる。

アルトウロが後ろに振り返ると、右手の人差し指を突き出す白哉の姿があった。

「兄が何をやるかなど、さっきの今でどうに知れている」

「ちつ……………死に損ないが……………!」

アルトウロが悪態をつく間にも、白哉は無数の花卉を操りアルトウロに攻撃を仕掛ける。その間に、白哉は瞬歩でまつ梨の元に移動する。

「兄のそれは、卍解で間違いないな?」

「は、はい！」

話したことの無い隊長に話しかけられることで、まつ梨は一気に緊張し、若干声がはずれる。そんなことも気にせず、白哉は話を続けていく。

「私が奴の隙を作る。その隙に、兄は奴を斬り捨てることは出来るか？」

その問いにまつ梨は一瞬思考を停止させる。そして様々なことを考え始める。

自分の攻撃でアルトウロを仕留めることは出来るのか？

その一瞬の隙を捉えることは出来るのか？

そもそもこの隊長との息が合うのか？

しかし、まつ梨の答えは決まった。

「はい、出来ます！」

出来る出来ないではない。やらなければならないのである。

その返答に、白哉は首を縦に振る。

「いつでも先ほどのを放てるように、霊圧を高めておけ」

「はい！」

そう指示され、まつ梨は再び霊力を刀身に集中させていく。すると、どんだん刀身である炎は巨大化していく。その間に、白哉は無数の花卉でアルトウロを追い立てていく。しかしアルトウロは、それらの花卉を響転で回避していく。

「いつまで協力ごっこをしているつもりだ？」

そう言いながら、アルトウロは白哉に肉迫し不滅王を振り下ろす。

そして、その一閃は白哉を捉えた――。

「なん……………だと……………?!」

――かに見えた。

「隠密歩法『四楓』の参『空蝉』」

白哉を捉えたかに見えた一閃は、白哉の着ていた隊長羽織を斬り裂くだけで終わり、白哉自身はアルトウロの後方に佇まっていた。

「吭景・千本桜景厳」

直後に、アルトウロを数億枚の刃が包み込み、それらは球形になっ

た。億を超える刃の間からは多少の鮮血が見受けられるが、それでも白哉は止めない。そして数秒間の蹂躪が終わり、そこには体中の到る所から流血するアルトウロの姿があった。

「この……………程度でえ!!」

「だけど、もう終わりよ」

アルトウロは、自分のすぐ近くから聞こえる声の方向に目を向ける。そこには、紅い刃を振りかぶるまつ梨の姿があった。

(斬り捨てるがよい。名も知らぬ死神よ……………)

「竜糾————絶衝!!!」

先ほどよりも速く、強力な一撃は、アルトウロの胸を確実に捉えた。しかしアルトウロは土産と言わんばかりに虚弾を数発、まつ梨の胴体に直撃させる。その攻撃によって、まつ梨も苦悶の表情を浮かべ、最後の方には口から少量の血を噴き出した。しかし、それでもまつ梨の目は、アルトウロを見据えていた。

数秒、沈黙が続く。

「クッククック……………ハーツハツハツハツハツハツ!!!」

それを破つたのは、アルトウロの狂氣的な笑い声であった。その様子に、二人は目を見開く。

「まさか……………まで私を追い詰めるとはな!! 貴様たちには賞賛を送りたいものだ! だが、私はまだ戦える!!」

「そんな身体で、他の隊長たちを倒せると思ってるの?」

アルトウロの言葉に、まつ梨は挑発的な言葉を発する。しかしその言葉に対しても、アルトウロは殊勝そうな表情を崩さない。

「そうだな……………確かにこのままでは倒せない……………」

そう言ってアルトウロは、不滅王を体の前に構える。

「いいことを教えてやる……………私には、もう一段階上がある……………」
「な……………に……………?!」

アルトウロの言葉に、まつ梨は絶句する。それは白哉も同じである

ようで、目を見開いている。

「冥土の土産に見せてやろう……………。捧げろ——『不滅王』フエニイチエ」

アルトウロが解号らしきものを唱えると、背中にある翼が自身を包み込んでいく。そして全て包み終わると同時に、殻のように形成された物体はパキパキと音を立てながら罅を入れて割れ始めていく。罅からは赤い光が漏れている。

「下がっている」

「えっ? きゃあ!!」

全てが割れる前に、白哉は仕留めようと花卉の刃を殻に向かわせる。

しかし遅かった。

花卉が殻を包み込む前に殻の全てに罅が入り、そして爆風とともに花卉は全て吹き飛ばされた。

殻の中からは、赤い化け物が蠢いていた。

背中からは暴風のような赤黒い炎が渦巻き、白かった肌は灰色に変貌していた。そして爪は血よりも赤く染まっていた。顔には隈取のような赤い模様が浮き出ている。そして足にと腕には、白い鎧のようなものを纏っている。

(何……………この不気味な霊圧は……………?!)

直後にまつ梨の腹部に激痛が奔る。恐る恐る見てみると、腹部から血が滝のように流れていた。

「なっ……………いつのまに……………!!?」

「こつちだ」

まつ梨は、声のする方に即座に顔を向ける。そしてその場で不気味な笑みを浮かべるアルトウロに向かい、斬魄刀を振るう。

しかしそれは、アルトウロの腕の鎧で抑えられる。そして次の瞬間、まつ梨の腹部に一文字が加えられた。その一撃の際に、まつ梨は先ほどとは比べ物にならない程の血を吐き出し、意識を失いそうになるが唇を噛み締め、何とか意識を喰い留める。

「う……………ああああアアアアアアアアアアアあああああああ!!!」

絶叫したまま、もう一度斬魄刀を振るうまつ梨。しかしその一撃は空を斬り、背後からの斬撃によって今度は背中から鮮血を噴き出す。その際に、まつ梨の髪を縛っていた紐も斬られ、長い髪の毛が広がっていく。

そしてまつ梨の意識は、そこで途絶えた。

「……………兄のその姿は何だ?」

「私はこれを『帰刃』と呼んでいる。普段は刀に能力の核を閉じ込めておき、貴様達死神のように解号を唱えると、自分に帰ってくる……………。これが、私の真の姿だ!」

白哉の質問に、アルトウロは丁寧に答える。

(禍々しい霊圧だ……………)

アルトウロの底の見えない深淵のような霊圧に対し、白哉はこのような感想を抱いた。先ほどとは比べ物にならない程の霊圧に、白哉は恐怖のような、焦りのようなものも覚える。

「ははははっ!はははあ!!!」

「む?」

直後、後方から迫ってきた眼帯の大男の一撃をアルトウロは防御する。その一撃の衝撃で、周りのいくつかの建物が倒壊する。

「十一番隊隊長、更木剣八……………!」

「へっ!でけえ爆発があると思ったら、面白そうな奴とやりあってるじゃねえか!!」

「ほう……………今代の剣八か……………。先代よりは、期待できそうだな……………!」

狂気的な笑みを浮かべる二人の化け物が、凄まじい攻防を繰り広げる。背中に重傷を負っている白哉にとっては、その攻防の衝撃すら顔を歪めるものになっている。

「ねえねえ、びやくくん!この子、あんぜんな所につれてった方がいいんじゃない?!」

「……………草鹿やちるか……………」

白哉に明るい様子で話しかけてくるのは、十一番隊副隊長である草鹿やちるであった。その小さな体で、まつ梨の体を背に軽々と抱えて

いる。確かに、このまま重体であるまつ梨を放っておけば失血死で絶命してしまうだろう。自分の作戦を手伝わせたこの少女を見捨てることは、白哉にとつて恥に値することである。

白哉はすぐに頷いた。

「じゃあ、剣ちゃん楽しんでる間にれつつごー！」

元気よく掛け声を上げたやちるは、そのまま凄まじい速さで走って行った。それを白哉は、怪我をしている身で追いかける。

(私が礼を言うまで死ぬなよ……………)

「ははははあ!!」

「フハハハツ!!」

剣八は、ぼろぼろに欠けている刀をアルトウロに振り下ろす。それをアルトウロは腕に纏っている鎧で受け流し、剣八の胴体に手刀を繰り出していく。手刀が命中すると、その部位から鮮血が飛び散る。

しかし、剣八はそれを確認して笑う。

「いいぜえ、てめえ……………。今までの中でも、かなり楽しめそうな奴だぜ……………!!」

そう言つて剣八は、付けていた眼帯を外す。すると、剣八の霊圧が急激に上昇する。その様子にアルトウロは、剣八に呼応するように獯猛な笑みを浮かべる。

走りながらの凄まじい応酬は、二人が通過してきた道を見るも無残な光景にしながら行われている。通りざまに近くにいた死神たちは、アルトウロが放つ虚閃によつて丁寧に殺されていく。

そして、虚閃は剣八の左肩にも襲う。しかし左肩を貫かれてもなお、剣八は笑みを崩さずアルトウロに刀を振るう。今度は、アルトウロの纏う鎧に刃が食い込んだ。その様子に、アルトウロは多少驚いた表情を見せる。

「ククク……………瀨霊廷にまだこんな奴がいたとはな……………!!少し、硬度を調節するか……………!!」

そう言うと、刃が食い込み罅が入っていた部分から赤黒い炎が湧き

出て、たちまちに修復されていった。そして次に、鎧の色が今度は灰色になっていった。

「んだ、そりゃあ?」

剣八は興味深そうに、変色した鎧を見つめる。

「私の力は霊子の『放出』と『吸収』だ!!今の私が破壊したものは全て、私の力に成り得る!!そして今私は、これまで殺して吸収した死神の霊力を全開放している!!山本元柳斎重國ですら、今の私には敵わない!!」

「そいつあ楽しみだ!!おら、もつと殺り合おうぜえ!!!」

昂ぶるアルトウロに比例するように昂ぶっていく剣八。その攻防はまるで竜巻のようである。霊力を解放していくアルトウロに比例して、剣八の霊圧も上がっていく。

しかしこの攻防は、剣八にとって不利であった。斬ったところから再生していくアルトウロと違い、剣八の流血する部位はドンドン増えていくばかりである。しかし剣八の笑みは消えない。戦いこそ、彼の幸福である。強い者と戦えるのであれば、これ以上幸福なことはないであろう。

「ははははあ!はははははあ!!はははははははははは!!」

「フンツ、ただの戦闘狂が……だが、楽しかったぞ!これで消え失せろ!!」

アルトウロは、右手から虚閃を放とうと霊圧を高める。剣八はそれを意にも介さず、斬撃をアルトウロに喰らわすが、斬ってもすぐに再生していく。

「おつとオ、そこまでだよ?」

突如、頭上から迫ってきた斬撃に対し、アルトウロは虚閃を放つのを中止し回避する。突然の介入者に、剣八は不機嫌そうな顔をする。

「ああん?何だよ?良いところだったのによお」

「そんな顔しなさんなア」

「ああ、そうだぞ、更木隊長」

剣八の前には、京楽と浮竹が現れた。

「何だ、貴様らか」

「何やら不穏な靈圧を感じたんでねエ……それで、向こうは違う人たちに頼んでここに来たって訳だよオ」

「アルトウロは危険だ。今すぐにも、我々が対処しなければ……」
そう言つて浮竹は京楽にアイコンタクトをとり、互いに頷く。すると二人は斬魄刀を構える。

「花風紊れて花神鳴き、天風紊れて天魔笑う——」
『花天狂骨』!!

「波悉く我が盾となれ、雷悉く我が刃となれ——」
『双魚理』!!

二人の斬魄刀は、それぞれ二刀一対になる。そして、京楽が先行する。

「不精独楽!!」

京楽は両手に持つ斬魄刀を、自身と共に回転させることにより風を起こし、それをアルトウロに飛ばす。しかしそれはアルトウロの放つ赤黒い虚閃によつてかき消される。

さらにその虚閃は、京楽の元に直進していく。しかし京楽はそれを瞬歩で回避し、虚閃の直線状に浮竹が立つ。すると浮竹は片方の刀を突き出し、その虚閃を吸収する。そして次に逆の刀をアルトウロに向けて、刀の切っ先から虚閃を放つ。その虚閃を、アルトウロは響転で回避する。

その回避する瞬間にも、京楽は接近し斬りつけようとする。しかしそれすらも、アルトウロは腕を払うことにより京楽を吹き飛ばす。さらに、虚弾を放とうとするが、今度は剣八がアルトウロに斬りかかることによりそれを中断させられる。

「おや、君が手伝つてくれるなんて意外だったよ」

「へっ、俺は勝手に楽しむぜ？ 精々、俺に斬られないようにどいてろ」
「おやおや、そうかいイ」

剣八の言葉に、京楽は満足そうな顔をする。

「フハハッ………すぐにその余裕を消してやる！」

そう言うアルトウロは、急激に靈圧を上昇させていく。そして、アルトウロは両手を目の前に翳し赤黒い光球を形成していく。光球には黒い稲妻が奔っている。

「黒虚閃」

突如、光球から赤黒い閃光が三人に襲いかかる。地面を抉りながら、その際に発生した瓦礫を跡形もなく消え去っていく。それを三人は躲すが、アルトウ口は続けざまに何発も放ってくる。

「ちよ、これはまずいんじゃないのオ?!」

「くっ……………」

「はははっ！面白い技出してくるじゃねえか!!」

黒い蹂躪の光は終わりなく三人に降り注いでいく。

「ぐっ、がはっ!!」

「浮竹っ!!」

浮竹が突然吐血したことに、京楽は『不味い!』と感じた。この夕イミングでの浮竹の持病が出てくるのは、死に等しいことである。その場に倒れこむ浮竹に近づこうとする京楽だが、黒い閃光によって行く手を阻まれる。

そして、黒虚閃が浮竹に迫る。

「破道の八十八・『飛竜撃賊震天雷炮』!!」

しかし浮竹の後方から飛来した巨大な光線により相殺される。その様子には、京楽だけでなくアルトウ口も驚く。

そして、ひとつの人影が浮竹に近づく。

「浮竹隊長、無事ですか?」

「お前……………日向か?生きてたんだな……………!!」

久しく見ない人物の顔に、浮竹は驚愕と安堵の表情を見せる。

「……………現世で会った死神か。何しに来た?」

「お前を倒しに」

日向の言葉に、アルトウ口は目を見開く。

「貴様が……………私を倒すだど?!寝言は寝て言え!!」

そう言い、アルトウ口は日向に虚閃を放つ。しかしそれは、日向の左手に突如現れた鞆に防がれる。虚閃は、鞆を中心に二つに分かれる。その様子には、今度は日向以外全員驚く。

「何だ?何、驚いてんだ?」

「……………貴様、五日間何をしていた?」

「修行」

日向の端的な返答に、アルトウロは眉を顰める。

「…………お前とやり合って、俺は自分の無力を改めて知った。だから、力を付けてきた」

すると、日向の右手の斬魄刀が白いその刀身を白い閃光が纏い、それが晴れる頃には、さらに白く、美しく輝いていた。

「お前は俺が討つ。これは、そのための力だ」

そう言うとき日向は、白い斬魄刀を左手に持っている鞘に納めようとする。その光景に、全員疑問を抱く。

「刃を納めて、どうするつもりだ？」

「納めるんじゃない。元に戻すんだ」

そして、遂に刃を鞘に納めていく。直後から刃と鞘の間から凄まじい光が発せられる。

「いくぜ————卍解!!!」

白が瞬く。

卍解

赤き血を流し

白き骨を晒し

青き天を駆け

黄色き声を上げ

黄金こがねの光を銀しろがねの刃に纏わせ

黒き穢れに身を染めよう

それを表すならば白。死覇装の代わりに、上衣には地面に付きそうな程長い白いロングコート。さらに左肩からは表が純白、裏地は真紅のマントが風に靡いていた。その上半身は、まるで西洋の服のような物であった。しかし下は袴であり、死覇装の黒がそのまま白く変色したような物だ。腰に巻かれる帯は、マントの裏地と同じ美しい真紅の色に染まっていた。袴の下からは、ブーツか何か分からないが革製の靴が見受けられる。そして手の甲には、白銀の手甲が着けられている。手首には、金色に輝く腕輪が装着され、中指にも同じような金色の指輪が嵌められている。両耳には、美しい水色の勾玉のような物が繋がっているイヤリングを装着している。

卍解した際の砂塵が彼を包み込んでいる。しかし、彼が手に持つ斬魄刀を振り払うことにより、砂塵は風の流れによって消え去って行った。

彼の目は、目の前に居る赤い化け物を見据えていた。その桔梗色の両目は、今から戦う相手を射殺さんと睨んでいた。その桔梗色の

そして、彼の口が動いた。

『虚哭隸王』きよくれいおう

その名を認識しただけでも、京楽と浮竹は圧倒されるような感覚を覚えた。例えるならば、自分よりも偉い人物に見下ろされた時と同じ

——高位の存在を目の当たりにした時。それと同じだと。

—— 剣八は、ただ静かに笑っていた。

—— 強い。

これだけは確信していたので、剣八は笑っていたのだ。

そしてアルトウロは、静かに、冷めた目で彼を見つめていた。興奮を覚えない。志波海燕や、宮能まつ梨といった死神が卍解した時よりも、拍動が速くなることはない。それは、アルトウロがすでに目の前の人物を達観していたからかもしれない。『これ以上は望めない』と。初めてこの死神と遭遇した際の興奮など微塵も感じられない。恐らくそれは、アルトウロの本能が興奮するに当たらないと感じていたため。アルトウロ自身が、それをそう捉えたために、冷めていた。

「行くぜ？」

「っ!!」

日向から発せられた言葉を認識した直後、自身のすぐ近くに風が巻き起こったのをアルトウロは感知し、すぐに感知した方向を向く。しかしそれよりも前に、アルトウロの胴体は浅く一閃される。浅くだったのは、アルトウロが反射で一步下がったからである。そしてアルトウロは、驚愕していた。

(今のは……………響転だど!!)

瞬歩ならば発動した際に霊圧を感知できる。しかしこの死神の高速歩法は、霊圧を感知出来ずに自分の近くに接近されることを許してしまつた。しかも、自分の目に見えない速さで。

その事実には驚愕しながらも、斬られた部位を再生していく。正確に言えば再構築していく。成体の破面となつた際、アルトウロは虚の持つ超速再生の能力を失つてしまつた。それは、自身の超速再生を出来る手段を刀に封じ込めてしまつたからだと認識していたからだ。しかしそれは違う。アルトウロの帰^{レス、レクシオン}刃^{フェニチエ}である不滅王は、今まで溜めた霊力の全面開放である。その際に、吸収した霊力を使用し、霊子の再構築も行っていたのである。故に、アルトウロの鎧もすぐに再生出来たのである。

その後も、日向とアルトウロの攻防は続く。日向の凄まじい速度に、アルトウロは防戦一方となる。しかも、日向の斬撃一つ一つが深く入れば致命傷足らしめる程、アルトウロを易々と斬っていく。アルトウロは体勢を整えるために、一旦響転で日向を離れようと上空に逃

げる。そして、ある程度の高さに来たところで日向が居るであろう方向に顔を向ける。

「喰らいやがれ」

「がっ?!」

突如目の前に現れた日向の左拳が、アルトウロの右頬を捉える。直撃したアルトウロは数メートル空中を吹き飛ばす。そして、何とか体勢を整え日向を睨む。

「貴様……………何故、空中で立っている?」

日向は、瀨霊廷の空を立っていた。その様子にアルトウロのみならず、地上にいる三人も驚いたような顔をする。いくら跳躍しようが、尸魂界では上空で留まることはできない。それは瀨霊廷中の死神の承知している事実だ。しかしこの青年は、しっかりと空中で立っている。アルトウロは翼があるため、それをブーストの様に使用することで瀨霊廷を飛ぶことを可能にしていたが、この青年はそんなものは持っていない。

「足元の霊子固めてんだよ」

あまりにもあつさりと言い切る日向。しかしそれが普通出来ないから、他の者たちは驚愕しているのである。

「……………目障りだ、死ね! 王虚の閃光!!」

狛村の黒縄天譴明王を仕留めた時よりも強力な虚閃を、目の前の死神に放つ。直撃すれば跡形も残らない。しかし日向は、一向に避ける素振りを見せない。そして、日向は斬魄刀を自分の目の前に翳した。

「八咫鏡」

すると、日向の目の前に巨大な黄色がかった透明な膜のような物が出現する。それはアルトウロの王虚の閃光を受け止め、閃光の進撃が止まるまでの数秒、日向を完全に防御していた。さらに、膜の前で留まっていた閃光は、そのままアルトウロの元へと戻っていった。その光景にアルトウロは危機を感じ、すぐさま響転で回避する。

辛うじて回避するアルトウロは、再び日向を睨む。

「私の王虚の閃光を跳ね返すとは……………! 何をした……………?!」

「死神にはそういうの専門の術があるんでね……………そいつを使わせて

もらった」

そういう日向の表情は、殊勝そうなものではなく、ただ寂しそうな目をしていた。それがアルトウロの神経を逆撫でする。

そして今度は、アルトウロの方から日向に肉迫する。アルトウロの手刀の連撃に対し、日向は斬魄刀の柄を両手で握り、アルトウロの攻撃を受け流すように扱っていく。しかし、刀を扱うのと、手を二つ使うのであれば、後者の方が圧倒的に手数が多い。そして遂に、アルトウロの手刀の一撃が日向の右肩を貫く――。

「なっ……………!!?」

――はずだった。

アルトウロの一撃は、日向の服を突き破ることなく、ただ日向を少し後方に押し返すだけで終わった。日向が上手い具合に受け流したというのも考えられるが、それならば服が少し破けてもいい筈だ。しかし、服を裂くことすらも叶わなかった。それに動揺している間に、日向の斬撃がアルトウロの右腕を斬り落とした。直後、肉の断面から鮮血が舞う。激痛を感じると共に、アルトウロは再び距離をとる。そしてアルトウロは、斬り落とされてなくなった右腕を再生する。しかし冷や汗は止まらなかった。

「貴様は……………何者だあああああああああ

!!!!!!
????!」

上空では日向とアルトウロの攻防が続く。それを、京楽と浮竹はしっかりと見届けていた。剣八は、つまらなそうに近くにあつた瓦礫に座り込んでいる。しかしその視線は、しっかりと上空を見据えている。

「凄い……………なんていう戦いなんだ……………!!?」

「凄いねエ……………彼、あんなに強くなっちゃってたのかい……………」

そして京楽はハアっとため息を吐く。

「京楽、どうした?」

「……………初めて会った時から、ボクは彼を見る度にあの娘を思い出しちやうんだよねエ……………」

「……………菖蒲のことか？」

「勿論。そつくりだもんねエ、彼」

そう言つて京楽は自分の右手の人差し指を、親指で押さえつけるようにして鳴らす。

「鬼道のとときに、こうやって指鳴らすのとか彼女にそつくりだもん。嫌でも重ねちやうよオ」

「……………ああ。特に、破道はな」

『お？浮竹さんと京楽さんじゃねえか！何だよ、酒飲みしてんならアタシも混ぜてくれよ！』

頭の中で生き生きとする女性の姿を思い浮かべ、浮竹は涙を流す。

「それに『日向』つて名前、百年前に何回彼女に言われたことか……………」

『見てくれよオ！うちの日向のこの馬鹿みてえな寝顔可愛いだろ?!』

「浮竹はいつ気づいたんだい？」

「……………名前を聞いたときからだ。それに、日向の霊圧は彼女のモノに似ている」

『頼むよ……………日向を助けてやってくれ……………!!』

「……………俺たちは、あの時彼女を助けてやれなかった」

「ああ……………分かつてるよ。あれは剗屋敷の時よりやるせなかったよオ」

『アタシが生きてると、困る奴がこの世に一人だけいる……………そいつのために、アタシはここで死ぬ!』

「親つてのは、あそこまで強くなれるんだねエ……………」

「独身の俺たちにはまだ分からんがな……………」

そうやって二人は、再び日向とアルトウロの戦闘に目を向ける。

「破面の彼、霊圧の消費が速すぎないかい？僕らのときとは全然違うよ？」

「確かにな……………なぜだ？」

そして二人の視線は日向へと向けられる。白いロングコートを靡かせながら戦うその姿は、主体が男と分かっているにも関わらず美しいと思えるものであった。

そして次に、霊圧の消費が速すぎると言った破面の方を見た。赤黒い翼をはためくその姿は、悪魔と見間違えるほど禍々しいものであった。

「もしかして、日向君が何かしてるんじゃないかな？」

「その可能性はあるな。そうでなければ、あの霊圧消費は納得出来ない」

日向が何かしている。それは二人にとって確信に近いものであった。

「頼んだぞ……………日向……………!」

「がああああああああ!!!!」

アルトウロは、咆哮と共に虚閃を乱射する。しかしそれらは、日向を掠めることなく躲されていく。その攻撃はいつもの正確さが欠けており、雑な攻撃となっていることにも関わらず、焦りを持つアルトウロにとっては弾幕にでもなればと放っているものに成り下がってしまっていた。それを次々と回避する日向は、響転と言われた歩法でアルトウロに肉迫し、左手から赤い閃光を放つ。それはいとも容易くアルトウロの身体を包んでいくが、閃光が通過した後、アルトウロが大したダメージを負っているように確認出来ず、眉を顰める。

「貴様……………私に何を……………?!」

「今の攻撃か？」

「違う……………私の霊力をどうしているのか訊いているんだ?!」

怒りの混じったアルトウロの叫びが、空中に響いていく。叫んだ際にも、凄まじい圧のようなものが日向に迫るが、気にせずアルトウロを見据える。

「気づいたか………なら、教えてやるよ。これ見えるか？」

そう言つて日向は、耳にぶら下がっている勾玉を指で掴んでみる。

「やさかにのまがたま八尺瓊勾玉。これの力は、霊子の絶対隷属。及び、その霊圧への変換。それが俺の力だ」

その言葉に、アルトウロは目を見開く。そして日向はさらに言葉を続ける。

「俺が霊子に変えたものを吸収することで、俺は今まで力をつけていた。でもそれは全部無意識だったから、これを自由に操ること出来なかったんだよ………だが、卍解することでその力は自在に操れるようになった。つまり、お前が今垂れ流してる霊力云々全部、俺が貰つてたんだよ」

「なん………だと………?!」

衝撃の事実、アルトウロは驚愕する。

最強だと思つていた自分の真の姿。しかしそれは、この死神にとっては一番相性のいい相手。つまり、自分にとつて最悪の相手。今まで溜めていた霊力は、少しずつこの死神に吸収されていた。まるで、十年前の熾水鏡のように。

しかし、アルトウロはそれを受け入れることは出来なかった。

「ふざけるな!! 貴様が、私の霊力を吸収しているだど?! 私には、死神を滅ぼすこの一瞬のためだけに、どれだけ殺してきたのか?! 貴様が誕生する以前よりも溜めていた私の霊力が、貴様程度に吸収されると?! そんな話があつてたまるか?! 私が………私が最強だ!! 尸魂界でも! ウエコムンド虚園でも! 私が最強なのだ!!!」

「………もう、うんざりだ」

慟哭に対するは、静かな一声。

「運がなかったな。それで勘弁してくれ」

達観していたはずが、返されたのは達観されている言葉。

「だから、もう消えてくれ」

そう言つて日向は、虚哭隸王を両手で構える。

あまのむらくものつるぎ
「天叢雲劍」

直後、虚哭隸王が金色に発光する。そして、凄まじい霊圧が刀身から発せられ大気を揺るがす。

「ふざけるなあ!!その霊圧も、全て私のものだ!!!返してもらおうぞ!!!」

そう叫ぶアルトウロは、自らの目の前に灰色の光球を産み出す。

グラン・レイ・ゼロ
「王虚の閃光!!!」

直後、破壊の閃光が日向に迫っていく。その間に、日向は虚哭隸王を頭上に構える。

「八咫鏡」

日向はそれを、先程のように目の前に張った結界で跳ね返す。跳ね返った光線は、未だに日向を焼き尽くそうとする流れと衝突する

しかしそれも長くは続かなかつた。

「っ……………がああああ!!」

痺れを切らしたアルトウロは虚閃を放つのをやめ、響転で日向に接近する。それを察知した日向も、瞬歩でアルトウロに接近する。

アルトウロは右手に禍々しい黒い霊圧を纏わせ。

日向は刃に金色の霊圧を纏わせ。

「おおおおおおおおおっ!!!」

決するのは一瞬だった。

アルトウロは、右腕ごと身体を一閃された。身体からは鮮血が飛び、血の雨がアルトウロの下に降り注ぐ。

アルトウロは、虚ろになった目で日向を睨もうとする。残った左腕を、日向が居る方向へと伸ばす。

「く……………そ……………」

しかし左腕は虚空を掴むだけだった。

「じゃあな、アルトウロ」

地に落ちながら霊子になっていく敵に、日向は別れを告げた。
「ありがとう」

「日向さん、そろそろお休みになられたらどうですか？」

四番隊舎の病棟の一室で、卯ノ花はある少女を静かに見つめる日向に休むよう言葉を投げかけた。しかし日向は『有難うございます』と言うだけで、休もうとはしない。時計を見るともう十二時を過ぎていく。アルトウロとの交戦を知っている卯ノ花にとっては、日向の身体がボロボロであることは分かり切っている事実である。

そして卯ノ花は、ベッドに横たわっている少女に目を向ける。最初に、やちるが連れてきたときに卯ノ花は驚愕した。その人物が、八十年前に行方不明になった宮能まつ梨であることを認識したからである。さらに身体中は血まみれで、一刻を争う状況であつたため尚更であつた。一命は取り留めたものの、油断は出来ない状況である。

まつ梨の治療を終えたころ、外の戦闘の音はだんだん静かになっていき、やがて終息していった。そして、京楽や浮竹、そして日向が病棟に赴いたとき、まつ梨のその姿に驚愕していた。その後も多くの人物が病棟に赴き、まつ梨を知っている人物は全員、彼女の生存を驚いていた。そして全員が、彼女の回復を願っていった。

「これ、どうぞ……………」

「虎徹副隊長……………有難うございます……………」

日向は、勇音に渡されたお茶の入った湯呑を受け取り、そして音を立てないように静かに啜る。この時間まで休みなく働いていた勇音の顔は疲れ果てているように見えるが、湯呑を渡した後に、また別の

病室に行くために部屋を早足で出て行った。

その後も、卯ノ花は別の患者の治療をしながらも、時々日向とまつ梨の様子を見に来るが、日向は一向に休もうとはせずにとその場に佇まっている。

そうしている内に、朝日が窓から射し込み始めた。

「……………ん……………」

まつ梨は、重たい瞼を上げる。その際に腹部や背中に痛みを感じ、一瞬表情を歪める。そしてベッドに横たわっている状態で、目だけ動かして周りを確認する。

「……………あ……………」

まつ梨は、自分が寝ているベッドの近くに置いてある椅子に座りながら眠る日向の姿を見つけた。背中を痛めそうな格好で、顔は床の方を向いている。

「……………ん……………？あ……………目え覚めたのか？…」

「あ……………うん……………って!!」

「おい、動こうとすんなよ。重傷なんだからよ……………」

身体を起こそうとするまつ梨を、日向は止めようと椅子から立って近づく。目の下には、かなり濃い隈ができている。首が痛いのか、手を首に据えながら歩いてくる。

「……………気付いてよかった。ゆっくり休め。アルトウロは倒したからよ……………」

最後の言葉に、まつ梨は目を見開く。そして数秒後、目の端からは一筋の涙が流れた。

「そう……………ありが、とう……………!」

声を震わせながら、日向に礼を言う。それに対し日向は、まつ梨の左手の甲にそっと右手を添える。まつ梨を見つめる目は非常に優しくかった。

「じゃ、寝ろよ？もう行くからな……………ん？」

部屋から出ていこうとする日向の死覇装の袖を、まつ梨の手が握っていた。

「もう少し……………居て欲しい……………」

「……………そうか。分かった」

そう言って日向は再び椅子に座った。

そうしてから数分後、二人は夢の世界に落ちていった。

つかの間の平穏が、そこには流れていた。

第三章 Slight Everyday 安寧

戻る日々
変わった貴方

「失礼します、浮竹隊長」

「海燕か！怪我の具合はどうだ？」

浮竹は、自室の布団に横たわりながら海燕に具合を訊く。その際に海燕は左手を右肩に置き、そのまま肩をぐるぐる回すことで平気であることを、笑顔と共に示唆する。それに浮竹は身体を起こしながら、安堵の表情をする。

浮竹は、アルトウロと一人で交戦した海燕の生死を心配していた。見届けると言っていた六番隊隊長である朽木白哉が、重傷で四番隊病棟に居ると言うことを聞き、自分の身を差し置いて京楽と日向と共に病棟に向かった。実際に見てみれば、右肩を貫かれる程度で命に別状がないということが分かると、今度は浮竹がその場で吐血し大騒ぎになった。

「ま、ぼちぼちってところですかね！それより……………」
「ああ……………」

今、彼らの中にある問題。それは特定の人物の間だけでではあるが、非常に困った、そして予測できていた事実が起こっている。

「まつ梨をどうするってことっすかね……………」
「この場合だと、復隊という処置になるだろうが……………。うん、どうしたものか……………」

行方不明であった宮能まつ梨の生存。それは、彼女を知っている者たちに驚愕を歓喜を与えるものであった。浮竹が彼女の姿を見たときは、痛々しい姿でベッドに横たわっていたが、つい先日目を覚まし

たようで、あと一週間ほど経てば動けるようになるらしい。そして、彼らの中での問題というのが……………。

『いやア、まつ梨ちゃんが生きてて本当によかったよ！隊に復帰するときは、前と結構人事が変わってるからねエ……………僕の隊のここに来ないかい？』

『京楽、それを言うならこっちは俺と海燕の二人が居る。海燕なら彼女のことをよく知っているし、こちらの方でも面倒を見やすいだろう』

『いえいえ二人とも……………まずは四番隊で色々と慣れてからにするべきです。彼女の傷は定期的に診てあげるべきだと思いますし、こちらならあまり体の負担がかからない仕事が多いですしね……………』

こういった、三つの隊でのまつ梨の取り合いが行われていた。こうなってしまったのには、八十年前にまつ梨が実際働いていたところに、全員が彼女のことを可愛がっていたということに起因する。以前とは勝手が違うという心配が元ではあるが、そこには可愛がっている者を自分の近くに置いておきたいという深層心理も影響している。実際にまつ梨に訊いてみなければ分からないことではあるが、どの隊長も自分がお世話になっていいるということ、恐らくまつ梨は頭を抱えて考え込んでしまうだろう。

何はともあれ、実際に決定するのはまつ梨である以上、三人は自分にとっていい答えを待つのみであった。

「よ、まつ梨！」

「あ、日向……………どうしたの？」

昼に、まつ梨の病室を訪れる日向。その右手には何やら風呂敷のようなものが握られていた。

「羊羹持ってきたぜ！よかったら食べてくれ！」

そう言うと日向は、風呂敷の中から高そうな箱を取り出した。それ

に対しまつ梨は目を輝かせる。

「わあ〜!!ありがとう!あたし羊羹好きなんだ〜!」

まつ梨は満面の笑みで日向から羊羹の箱を受け取る。その様子に、日向は表情を綻ばせる。重傷と聞いた際は、肝を冷やすような想いで傍にいたが、こう元気になつてくれればもう安心だろう。日向はそう考えた。

その後二人は、現在の瀨霊廷の復興状況のことについて語り合った。被害が最も大きかったのは清流門付近の建物であったが、その復興は着実に進んでいる。そのことをまつ梨に伝えると、『よかつた……』と穏やかな笑みを浮かべていた。

すると出入り口の方から声が聞こえてくる。

「日向!ここにいたのか!」

「ん?ルキアか?どうしたんだ……?」

黒のセミロングで、紫の双眸の小柄の女性——ルキアは、日向を見つけ声を上げる。そして、早足で日向の元に近づく。

「兄様の見舞いに来ていてな。そうしたらお前の霊圧を感じたという訳だ」

「そうか。朽木隊長の具合はどうなんだ?背中の傷が一番酷かったんだろ?」

「ああ。確かに、背中の傷のせいで出血は酷かったらしいが、もうすぐ業務に戻る程には回復なされるそうだ」

そう話し合う二人は、淡々としていながらも強い信頼を感じられるような雰囲気の流れているのを、まつ梨は感じ取っていた。そうしている間にも話の趣旨は変わっていく。

「聞いたか?恋次は此度の活躍で、十一番隊の六席の方に藍染隊長の推薦を受けたそうだ」

「マジか。一気に他隊の六席なんて、結構昇進したな〜!」

「うむ。吉良は異動して四番隊の十五席に、雛森は五番隊の十八席に、朝霧も二番隊の二十席になったそうだな」

「へえ〜。ルキアはどうなんだ?結構活躍したって聞いたぞ?」

日向がそう訊くと、ルキアは少し下を俯く。

「ああ……………私はまだ……………」

「……………そうか。ま、席官に就くことが全部じゃねえし、今のままでも実力つけてったらいいだろ」

そう言っただけ日向はルキアを元気づける。言われたルキアは、パツと顔を上げ微笑んだ。

「それもそうだな……………！私には私の進む速度がある……………。済まないな、また慰められてしまっ……………」

「ああ……………ルキア……………その……………悪かったな……………」

急に歯切れの悪い謝罪をルキアにする。その様子に、ルキアは少し顔を俯けた後に、にっこりと笑って話した。

「……………なら、今度は二度と、勝手に行かないようにしてくれ……………頼む……………」

「……………ああ。約束する」

日向は、自分が行方不明とされていた五日間のルキアの様子を、浮竹から直接聞かされていた。その内容から、自分の勝手にルキアがどれだけ心配し、辛い思いをさせてしまったか、凄まじい罪悪感に駆られていた。そのことに対し、日向はルキアに謝罪を伝えたのである。

それをルキアは、約束もつけて許してくれたことに、日向は複雑そうではあるが微笑む。

その後、ルキアは業務があると病室から去って行った。

「……………あのルキアって子と、知り合って長いの？」

「ん……………ちゃんと知り合ってからなら、もう十年くらいかな……………」

「そっか……………仲良さそうだね」

「まあ、異性の中ではいい方だな」

頭をポリポリと搔く日向は、あつさりと言った。その言葉にまつ梨はピクツと体を揺らす。

「そう言えば日向、仕事大丈夫なの？三席なのに、ずっとここに居たら怒られるんじゃない？」

「ああ……………それもそうだな。特に海燕とかに色々言われそうだな。じゃあな、まつ梨」

そう言つて日向は、まつ梨に手を振りながら部屋を出ていく。それを見送つた後、まつ梨は再びベッドに身体を横たえる。そして、ため息をつく。

「……………嫉妬つて怖いなあ……………」

それは自分に向けて放つ言葉。誰にも聞こえない呟きであった。

「おら、飲めよ二人とも。今日は奢つてやるよ」

そう言つて日向は、恋次と吉良に酒を勧める。現在、三人で居酒屋にいる。二人の席官就任を祝うためである。

日向に勧められた二人は、手元にある日本酒に手を付ける。ちなみに日向は飲めないでウーロン茶が入ったグラスを手元に置いてある。

「おう。じゃあ遠慮なく飲むぜ！」

「ありがとう、日向君。……………何か、こうやって三人で居るの久しぶりだね」

その言葉に、日向は霊術院時代を思い浮かべる。

「ま、これからは気軽に誘つてくれよ。時間は空けるようにするからよ」

「でもお前、酒飲めねえじゃねえか」

「下戸だからな」

「僕以上に飲めないしね……………」

「俺の場合、料理メインで来るからよ」

基本的に、日向の居酒屋での過ごし方は料理をつまむくらいである。そして、必然的に酔いつぶれた人の事後処理に回る。

「でも吉良よく。何でお前四番隊なんだ？」

「あ……………それもそうだな。何でだ、吉良？」

「ああ、それは僕が怪我してた人の応急処置してたのを四番隊の人が

見て、是非一度来てくれないかって言われて……。それで藍染隊長に相談したら、『百聞は一見に如かず……。何事も、一度やってみる事が肝心だよ。四番隊でしか学べないこともあるだろうし、君の新しい才能が芽を出すかもしれない』って言われてね……。それで、一回異動してみようと思つて……。」

まあ、大事だな、と考える。しかし、藍染が絡んできると聞き、少し吉良を心配する。

あの戦い以降、白皇と虚帝と相談し、向こうの出方を待つしかないという結論に至つた。恐らく、向こうはこちらにもう気づいている可能性が高いと見たのである。しかし今までに大きなことを仕掛けてこなかった以上、今の日向は虚化を他の人たちに見せないことを第一に考えることにしている。その点では、日向の卍解は非常に自身にとって有用なものとなつた。

虚の力を、太刀と死覇装に全て収束した卍解。それが『虚哭隸王』。始解との一番の違いは、斬魄刀の本当の力を百パーセント発揮出来るということである。日向の斬魄刀の力は『靈子の隸属』。それがあつたからこそ、虚化の実験の際に力が目覚め、上手い具合に虚の力を抑えられたのだと、今は結論づけた。ただし、色々な制約はある。顕著なのは、始解では、倒した虚を吸収する程度しか発揮できない。それでも十分強力なのだが、卍解では倒して靈子にした虚以外にも作用してくるため、コントロール出来ないと周りの人にも被害が及ぶ。しかし逆に言えば、靈子で構成されているものであれば何でも吸収出来るのである。しかし、実際に自分の力に出来るのは倒した虚の分である。それでも、今まで手に入れた虚の能力を五日間で錬成した三つの技は、非常に強力なものに仕上がつた。

一つ目の『八咫鏡』は、ネカンオン反膜の上に『鏡門』を展開する技である。反膜は大虚の能力であるが、何体か討伐している日向も出来るようになっていた。反膜は外部と内部が不干渉になるので、防御としては最高の性能を発揮するが、発動している間の靈力の消費が激しいのと、発動している間その場を動けないのが欠点である。

二つ目の『八尺瓊勾玉』は、日向の斬魄刀の根源を実際の形にした

ものである。実際に形にすることによって、隷属の調整をしやすくしている。最大限に力を発揮すれば、鬼道であろうと霊子に分解して自分の霊力に変えられる。ただ見境がなくなるので、発動は限定される。

最後に『天叢雲剣』は、簡単に言えば霊子で構成されている物体に限定して、絶対切断が可能な状態の太刀になるというものである。どうやっているのかというと、まだ志波邸で居候している時に、ルキアと会った時に倒した虚の、鎌の透過能力。それと隷属する際の、霊子の分解。それらを組み合わせ、斬りつけた際に敵の身体を透過するようにして、内部から分解する形で、絶対切断を可能にしている。だが欠点として、この技を使用している間は刃以外に隷属の力を働かせることが出来ない。

ちなみに他には、瞬歩に霊圧を消す能力を付加して、霊圧感知を出来ないようにしている。

これらは手に入れた虚の『能力』の部分である。それでは『肉体』の方はどうなったと言うと、それらは卍解の時着ている白いロングコートに行っている。日向の霊圧に比例して、マントは硬度を増していき、破けたとしても超速再生ですぐに元通りになる。

つまり日向の卍解は、虚帝のように全面的に虚が出るわけではないということなのである。

アルトウロとの交戦の際に、日向はアルトウロを圧倒出来てはいたが、あれは状況が上手く出来過ぎていた。アルトウロの真の姿は、霊力を全面開放しながらすぐに吸収するという、簡単に言えば超速で霊力の循環をするというものであったが、その戻る際の霊力は八尺瓊勾玉が全て吸収していたので、アルトウロの霊力は激減していき、日向の霊力は激増していった。だからこそ、アルトウロは本気の半分以下も出せてはいなかった。そして日向は、実際の力よりも大幅のパワーアップが出来て交戦することが出来た。

ここで疑問になったのが、アルトウロの霊力が全て日向の力になったのかということだ。答えは『ノー』である。虚帝が言うには、アルトウロが『不滅王』で上昇した分は吸収出来なかったらしい。それは、

アルトウロ自身の霊圧は手に入れることが出来たが、アルトウロが放出した分の霊圧は手に入れることができなかつたらしいからである。

そして話は戻る。

「回道が本格的に出来るようになったら、助けられる人も増えるだろう。うしいと思っぞ？」

「おう。何事も経験だ、経験」

「二人とも……ありがとう！なんだかやる気が出てきたよ！」

「おう！飲め飲め！奢りだからな！」

「俺のな。吐く程飲むのはやめろよ？」

「さすがにそこまでは……。じゃあ、いただくよ！」

そう言って日向達は夜中の遅くまで飲んだ。そして、恋次は酔いつぶれたので日向がシバイた。

「いや。まさか藍染隊長が、朽木隊長に斬りかかるとは思いませんでしたわ」

「そうした方が、虚の彼のためになるかと思ってね……。だが、彼に負けるようでは破面としては力不足だと思ってね……」

「でも、隊長さんを仰山倒してはりましたよ？」

「だが、脆すぎた。それが彼の敗因だったよ。しかし、彼は私たちに有用なものを多く残していった……」

「確かに、一回成体見れたんは大きかったですね……。崩玉完成すれば、あの強さの仰山作れるんではよか？」

「ヴァストローデ最上級大虚なら、出来るだろうね。だがしかし、一回やってみなければ分からないよ」

「それもそうですね。いや、おもしろいもん、仰山見れたなく……」

「ああ、確かにね。特に、彼は……」

復隊

高鳴る胸に重ねる手を

いつか貴方の手に重ねられるように

そんな思いが

私を焦がす

「う〜ん……………」

まつ梨は、病室のベッドの上で背伸びをしていた。

「今日退院か……………」

アルトウロとの戦闘の傷が癒え、まつ梨は今日退院することになっていた。入院している間には、日向やその友人たちが見舞いに来てくれたり、海燕や浮竹なども知り合いも訪れてくれた。そのおかげで、まつ梨は八十年の時の流れをあまり感じないで過ごすことが出来ていた。

皆に感謝しながら、ベッドの周りに増えていった私物を着々とまとめ始める。

この後、地獄の選択（？）があるとも知らずに……………。

「え……………？復隊する際の隊ですか……………？」

「ああー君が居ない間に、こちらも色々変わったからね……………知り合いの多い所に復隊した方がいんじゃないかと思ってるね！」

病室をいざ出ようとしたときに、卯ノ花、京楽、浮竹の三人に囲まれたまつ梨は背中に凄まじい汗をかいていた。確かに、八十年経ってしまったため、こういった提案は非常に嬉しいものではあるが、それが隊長三人からの勧誘となると、どれを選ぶかで何か分からないものが自分を

襲いそうな気分を、まつ梨は味わっていた。

「えつと……………」

三人を見渡すと、全員にここにこしているがその目はしっかりとまつ梨を捉えていた。

「ん？何してるんすか？」

そう言つて入ってくるのは、現十番隊長の志波一心であった。その後ろには、副隊長の松本乱菊もいる。

「いや、まつ梨ちゃんの復隊先を選んでもらおうと思つてねえ……………。やっぱり、ブランクもあるだろ？」

その言葉に一心は大体察し、そして目の前にいる少女を憐れむような目で見た。

「ええ〜!!それだったら、やっぱり元々居た十番隊に戻るっていうのが筋じゃないですか?!!」

その空気を読まずに発言する者が一人。乱菊である。

「松本副隊長、だがしかし今の十番隊で彼女を知っているのは……………」
「死神になるときなんて、ほとんど全員知らないじゃないですか〜!」
「だったら、一からスタートっていうのも大丈夫ですよ〜!!それにうちの隊緩いから、この子も平気ですよ〜!」

「松本、おめーが言うな」

どんどん持論を繰り広げる乱菊に、一心がツツコむ。それを、他の四人は苦笑いで見つめる。

「とりあえず、まつ梨さんに訊くのが一番です。焦らなくていいですよ?」

「え……………」

卯ノ花の穏やかな声に、まつ梨は数秒黙り込む。周りの者も、それに呼応するように静かになる。

「……………」
「やっぱりあたしは、十番隊に戻ります!それで、朱司波隊長の意志を継いでいけるような気がする……………」

その言葉に、全員が納得するような表情を見せる。そして、松本がまつ梨を抱きしめる。

「まつ梨〜!これからよろしくねえ〜!私が、手取り足取り教えてあ

げるから安心してねえ〜!!」

「ま、まちゆもと副隊長!・むねが……………」

松本の豊満な胸に顔を埋めるまつ梨は、苦しそうに手をバタバタさせる。

「ふふふつ。まつ梨さんが決めたなら仕方ありませんね」

卯ノ花が微笑みながら言うのに対し、他の三人は同じく微笑んで松本に抱かれるまつ梨を見る。

「はっ!!」

「おっとー!・甘いぜ、冬獅郎!」

「まだまだあ!!」

冬獅郎と日向が模擬戦をしているのを、一心は黙って眺めていた。この模擬戦は、元々一心が冬獅郎を鍛えるという名目で始めていたものだったが、途中で日向が顔をみせて流れで参加し、冬獅郎が日向に負けたためそれに対抗心を燃やして何回も行っているという感じになっている。

表向きでは、アルトウロを仕留めたのは京楽や浮竹、そして剣八となっているが、実際にその場を見ていた三人は日向がアルトウロを仕留めたのを目撃している。そのことで、日向はいずれ隊長を担う人材であるというのが隊長の間で話題になっている。しかし本人は『十三番隊以外に行くつもりはない』という旨を浮竹に言っているため、現在空席である他隊の副隊長に就くことはない。

そして冬獅郎は、霊術院を朽木白哉や市丸ギンと同じく一年で卒業した天才である。そのため、冬獅郎にも次世代を担う人材として期待が懸かっている。その冬獅郎が、少し先輩である日向とこうして互いに高め合うというのはとても微笑ましいこともある。

「ふっ!!」

「よっ!」

「なっ?!」

そしてこの模擬戦は、日向が一瞬の隙をつき冬獅郎の木刀を叩き落

としたことで終了した。

「くっ……………」

「ま、前よりはいいんじゃないの？」

「……………もう一回頼むぜ、先輩」

「いいぜ、掛かってこい！」

そうして、また木刀を打ち合う音が訓練場に鳴り響く。そうすると、廊下の方からドタドタと二人分の足音が鳴り響いてくる。

「あっ！ここに居たんですね、隊長！！探しましたよ！！？」

「一心隊長……………今日の分の書類は終わらせておかないと……………」

乱菊が鬼の形相で一心に迫り、まつ梨が疲弊した様子で手を壁に置く。それに対し一心は、頭をボリボリと掻き目線をずらす。しかし乱菊が右手で一心の顔を掴み、そのまま向きを修正される。

「もう夕方になっちゃいますよ?!」

「い、いや……………ちよつと冬獅郎の稽古をなく……………」

「見てるだけじゃないですか!!冬獅郎はちゃんとノルマ達成してからここに来ているからいいですけど……………あんたは終わってないでしょう!!」

なんとか罪を免れようとする一心だったが、乱菊の正論に完敗した。その様子に、まつ梨は『ははは……………』と苦笑いする。それも気にせず、奥の二人は木刀を打ち合っている。

その後、一心は襟を掴まれそのまま引きずられていった。

「はあ……………はあ……………ちきしよう、何で勝てねえんだ……………」

二時間程木刀を打ち合い、疲れた冬獅郎は壁にもたれかかった。

「なんつーかな……………動きはいいんだけど、単調だよな」

日向のバツサリとした言葉に、冬獅郎は頭垂れる。

「冬獅郎の氷輪丸だって相手を凍らせるってのは強力だけど、強い相手だと決定打に欠けるしな……………」

「わーってるよ……………今回の奴で特にな……………」

冬獅郎が言う『今回の』とは、十中八九アルトウロのことであろう。実際に戦い、その実力差を目の当たりにしたのだから。

「だったら考える。今、何が出来るか」

だからこそ、日向は卍解を手に入れた。完璧に自分の思い通りの力が手に入ったわけではないが、それでも多くの人物を護れるほどの力は手に入った。それは、あの対峙があったからだろう。

冬獅郎は数秒唸り、こう言った。

「だったら、卍解を出来るようになって隊長になってやる」

「……………そうか。ある程度は手伝ってやるよ」

「……………そういや、鬼道について訊きてえことがあるんだが……………」

冬獅郎の改まった雰囲気に、日向は目をパチクリさせる。

「先輩は、八十番台の鬼道を詠唱破棄できるらしいって聞いたが、本当なのか？」

「ああ、まあな」

鬼道の詠唱破棄。それは言霊の詠唱を省略して鬼道を放つ技術で、鬼道による即時攻撃を可能とするが、威力を保持することが難しく鍛錬が必要である。それを、三席の死神が八十番台を詠唱破棄するなど、普通ならありえないことなのである。

「でも、俺の場合はわざと詠唱破棄できる威力まで下げてる感じだからなあ……………」

「成程な……………」

その答えに冬獅郎は納得する。

男二人の談義は続く……………。

「ふう……………」

まつ梨は、一心がようやく終わらせた書類を届け先に送り、一息ついた。そして、十番隊舎に戻ろうとする。

退院してからはもう一か月。復隊したまつ梨は、元の無席という形で戻ったが修行のおかげで無席とは思えない程の霊力を有していた。しかし、八十年前に死神として活動していたのはたったの一年程であるため、仕事の処理のスピードなどはまだまだである。

「あ、まつ梨！ちようどいいところに来た！」

まつ梨の前にぴよんと現れたのは、上司である乱菊であった。復隊

当初、不安が募っていたまつ梨をグイグイ引つ張って行ってくれた、まつ梨にとつては姉御のような存在である。

「副隊長！ちようどいいってなんですか？」

「今度ねえ、現世でいう『クリスマス』の日に知り合い呼んで宴会することになったのよ。どう？来る？」

そう言つて乱菊はまつ梨にぐいぐい詰め寄る。まつ梨がこの一月で分かったが、こう来る乱菊の誘いは必ずと言つていいほど断れないのである。

「えつと…………誰が来ますか？」

「えつとねえ…………まず、十三番隊からは海燕と日向でしょ？十一番隊からは一角と弓親と恋次で。十番隊は私と隊長でしょ？九番隊からは修兵が来てねえ。八番隊からは京楽隊長が来て。四番隊からは勇音が来る感じ？」

「女性、あたしも入れて三人じゃないですか……………」

男女比にまつ梨は苦笑いする。

「それに、あたしだけ無席つて…………浮いちやわないですか？」

「いいのよ！そんなの気にしないでさ！お酒飲んだら席次なんて関係なし!!」

乱菊がそう断言した際に豊満な胸がたゆんと揺れて、まつ梨は若干の敗北感を感じた。

「それに、お酒の勢いじゃないと駄目なこともあるじゃない！」

そう言つて乱菊は、人差し指でまつ梨の頬を突く。まつ梨はその言葉の意味を探るような目を、乱菊に向ける。

「…………どういうことですか？」

「酔った勢いで、誰か襲つちやいなさいよ！」

「お、襲う?!」

乱菊の突拍子もない言葉に、まつ梨は驚愕する。

「…………ていうかあたし、お酒あんまり飲んだことないんですけど……………」

「酔いつぶれても平気よ！日向、お酒飲まないから事後処理してくれるし！」

「あ……………そうなんですか……………」

若干主旨が変わったような気がしたが、まつ梨は乱菊を止めるのはやめることにした。

「もしかしたら、お持ち帰りしてくれるかもよ？」

「……………お持ち帰り？」

乱菊の言っている意味が分からず、まつ梨は首を傾げる。その様子に、乱菊は若干つまらなそうな表情をする。

「ま、あつちもあつちでそんなことしなさそうだけどね……………」

乱菊が言う『あつち』とは日向のことである。三席であり、人柄も中々よく、顔立ちも申し分ないのに色恋沙汰をまったく言っていないほど聞いたことがない。唯一聞くのは、同期の朽木ルキアと仲がいいくらい、という位である。本人に事実確認を取ったところ、『ルキアに對して恋愛感情は持っていない。良い友人である』とバツサリ斬られた。ここまでくるとストイックも程があると言えるレベルである。

閑話休題。

「ま、宴会は楽しみにしときなさいよ？」

「はい！そうします！」

「朽木、そんなもんか?!」

「くっ……………まだまだです!!」

海燕とルキアは、訓練場で始解をした状態で打ち合いをしていた。流水系と氷雪系では、氷雪系に軍配が上がると思われるが、海燕からしてみればルキアの技はまだまだ隙が多く、逆にルキアからしてみれば海燕の独特な槍捌きに翻弄され、上手く攻撃を加えられないでいる。

しかしルキアの実力は確実に上がってきていて、総合的な戦闘力は席官に及ぶものだろうと海燕は実感している。だがルキアは未だ席官にはなれずにいる。

(……………これは言うべきなのか……………)

海燕はあることを聞いてしまった。それは故意的に聞いたもので

はなかつたが、重大な事実。

『うちのを席官にするのは、まだやめてほしい』

これを浮竹に、わざわざ十三番隊舎にまで赴いたのは他でもないルキアの義兄である六番隊隊長・朽木白哉であった。

『なぜだ、朽木隊長？』

『席官ともなれば危険な任務が回つてこよう。妻の遺言を果たすためにも、そのような事態は出来るだけ避けさせたい』

白哉が言う遺言とは、彼の亡き妻である緋真の遺言である。貴族としては異例の、流魂街出身の妻。しかし白哉は、それでも彼女を妻に儲けた。そして緋真のただ一人の妹——それがルキアであった。ルキアを探し、そして護るようにしてほしい。それが緋真の遺言であった。そのため、白哉は貴族の掟を二度も破っている。それがどれほど異常なことなのか、元々名門貴族であった志波家の長男である海燕はよく分かった。

『しかし朽木……そちらの妹は、すでに申し分ないほど実力を付けている。それでも同期との差をどんどんつけられていくあいつの気持ちも、多少くみ取ってもらいたい……』

『……分かつている。だが、その時が来れば私もルキアに話そうと考えている。それまでは、我儘であると分かっているがそうしてもらいたいのだ。頼む』

『朽木隊長……』

亡き妻の遺言を果たすために、義理の妹を護ろうと奔走する兄。その姿は、普段の白哉の態度からは考えられないものであった。

『……分かった。それまでは、こちらで彼女をサポートしよう。だがその時が来たら、納得できるように彼女に話してもらいたい』
『無論だ』

このような姿をルキアが見ればどう感じるだろうか。少なくとも、自分の姿形だけが白哉に欲されたのではないと分かり、二人は歩み寄れるようになるだろう。しかし白哉は不器用であるがために、このような手回ししか出来ない。この事実は海燕にとって酷くまどろっこしいものであった。

そして考えた。

(その時が来るまで、俺が朽木の支えになってやろう……………)

何度か、ルキアには『自分は味方』と断言していた海燕だったが、改めて決意するのであった。しかしルキアの周りには多くの友人がいる。自分だけが支えであるとは考えてはいないが、それでも多く接する機会がある。だが自分は、一度死にかけた身。日向の介入がなければ、すでにこの世にはいなかったであろう。だからこそ、改めて決心する。

「くっ!!」

「ふう……………!ここまでだ、朽木!」

海燕がルキアの袖白雪を手から弾いたことにより、訓練は終了した。

「朽木、大分良くなってきたぞ!」

「は、はい!ありがとうございます!」

訊くべきか。席官になれないことで、ルキアの心が疲弊していないか。

「……………なあ、朽木。お前、席官になれてないことどう思っている?」
しまった。海燕はこう考えた。訊き方を間違えた。これでは、席官になれてないことを咎めている様ではないか。

しかし海燕の心配をよそに、ルキアは穏やかな顔をする。

「……………やはり、私の実力不足です。しかし、然るべき実力が身に付いたら……………その時が来れば、いずれなれるのではないかと考えています。焦っても仕方がない……………自分の歩幅が大事なんだと……………そう言われました」

「……………日向にか?」

「え?な、なぜ分かるのですか?!」

「そういうこと言うのは十中八九あいつだろ。だけど、その通りだ。朽木、焦るな。今出来ることを、しっかりとやっていきやあいんだ!」
そう言って、海燕はルキアの頭に手を置く。するとルキアは恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「海燕殿……………子供ではないのでやめてもらえませんか……………」

「ほほお……。言うようになったじゃねえか、朽木い……。！」

そう言つてルキアの髪の毛をぐしゃぐしゃと掻き回す。

ちよつと、やめて下さい！海燕殿！———こういつた言葉に耳を傾けながら、海燕は微笑む。

こいつは大丈夫だ。自分に出来ることは少ない。だからこそ、それを出来ることは全てこなそう。

ルキアを死なせないこと。

自分が死なないこと。

そして、ルキアの大事な奴らを護ること。

それが、十三番隊副隊長である自分に出来ること。

宴会

一片の花弁が
揺れている

まつ梨は、瀟靈廷にある墓地の一角に来ていた。そこにはある墓に文字が書かれていた。

『朱司波征源』

『朱司波伊花』

「……………隊長、伊花様……………」

一人は、自分に父のような大きな背中を見せてくれた男性。

そしてもう一人は、自分に母のような温かさを教えてくれた女性。

感謝してもし切れない二人の人物へ、まつ梨は花を手向ける。そして、静かに瞼を閉じて合掌する。

「よお、まつ梨。来てたのか」

「……………海燕副隊長……………」と、浮竹隊長？」

そんなまつ梨に声を掛けてきたのは、同じく花を持ってやって来た海燕であった。そして彼の後ろには、海燕の上司である浮竹も優しく微笑んで立っている。

海燕は軽い足取りで墓の前に立ち、そして花を置いてからまつ梨と同じように静かに合掌する。それは浮竹も同じだ。

「……………オメーは慣れてねえだろうが、俺と浮竹隊長は結構な数、ここに通って来てる」

「……………はい」

「…ま、慣れてたまるかって話だよな。俺もオメーも、あの人達には結構世話になってるしよ。……………恩人の墓参りなんて……………」

「……………はい」

死んでいなければ、墓に来る必要もない。だが、もうこの墓石に名前を刻まれている二名の人物はもう死んでいる。過去の人物なのだ。

恩人が死んだということを認めたくはないが、死んでいるならばその墓に花を手向け、手を合わせる事がせめてもの事だ。だが、この墓石の前に立つということ、まつ梨の心は酷く苦しくなる。

「…………アタシ、分からないんです」

「…………何がだい？」

まつ梨の言葉に、言葉を発した浮竹のみならず海燕も不思議そうな表情を浮かべる。その視線は、墓石をじっと見つめる儂げな瞳をする少女に向けられる。

「隊長や、伊花様や、兄さんが死んだっていうのが分かってるはずなのに…………大切な人にもう会えないって、ここでお墓を見てしつかり分かったはずなのに…………涙が出てこないんです……………」

まつ梨の視線は墓石ではなく、すでにどこかも分からない虚空を見つめているということに二人は気づいた。

「悲しいはずなのに…………辛いはずなのに…………今まで何回も泣いてきたのに、今に限って涙が出ないんです…………これって、アタシがおかしいんでしょうか？」

涙こそ出ていないが、まつ梨の声は酷く震えている。そんな様子に、二人は心を痛ませる。

すると、三人に近寄ってくる足音が静かな墓地に響く。小さな石を敷き詰めた墓地は、遠くてもその足音が響ようになっていく。

その足音のする方向に、三人の視線は向く。

「…………日向…………と、日番谷君……………」

墓地に来るにしては珍しい組み合わせ。白と銀の髪の二人は、静かに三人に歩み寄ってくる。

「どうも、隊長。墓参りつすか？」

「ああ。日向、お前もか？」

「はい」

日向に、瀨霊廷に墓参りに来るような人物が居たか気になるところではあるが、恐らくもう一人の方と関係があるのだと予想して、浮竹は深く追求することをやめた。

そして日向は、まつ梨の隣に並び目の前の墓石に向かって合掌す

る。

「……………ねえ日向」

「ん？」

まつ梨に声に、日向は閉じてた瞼を開ける。

「アタシ、悲しいのに泣けないの……………これってアタシが冷たいからなのかな？」

まつ梨の言葉に、日向は少し複雑そうな表情を浮かべる。

そして数秒後、日向はその問いに答える。

「……………変に強がつてるからじゃねえのか？」

「えっ……………？」

「今までは何かあった時もぶつけることの出来た矛先がなくなつてよ、それでもしつかりしなきやつて必要以上に思い詰めてんだよ」

「あ……………」

思い当たる節があった。

思い浮かぶ人物が一つ。

「家族でもよ、兄弟って親とかより、そういうのに向いてるだろ？」

「……………うん……………」

二人の静かなやり取りを、他の三人は静かに聞いていた。

「まつ梨も、まつ梨の兄貴もお互い支え合ってたはずなんだよ。だけど急に兄貴が居なくなつて、戸惑つてんだよ」

ここに来たからこそ。墓こそまだ建つてはいないが、まつ梨は後々建てるつもりだった。

「兄弟の前なら思いつきり泣けても、それ以外だとそうもいかねえしな。だから、他人に涙見せないように、変に我慢してるんだよ。そんなで、必要以上に我慢してんじゃねえのか？」

核心を突いているような気がした。

「そう……………かも……………」

「別に、誰も責めねえよ」

「え？」

「どんだけ泣こうが、人の勝手だしよ」

涙腺が急に熱くなってくる。

「弱さを見せてもいいんだよ」
視界がぼやけてくる。

「泣きやあいいんだよ」
頬に熱いモノが伝う。

「うっ……うっ……」

急に縮こまるまつ梨の背中を、日向は優しく撫でる。

始解が出来るようになって、少し勘違いしてたのかもしれない。

正解が出来るようになって、少し背負うようになってしまったのか
もしれない。

そして、他人よりも強くあろうと背伸びをしたのかもしれない。

だがこの一瞬、その氷塊のように固まっていた何かが一気に溶け始
めた。

「うわああああん！ひっぐ！えうう……！」

もう変に隠す必要はない。

背中を擦る手の平の数が增える。

ああそうだよ。

アタシは、一人じゃないんだよ。

もう――。

「まつ梨。おい、まつ梨」

「ん……ひよわあ?!」

「うおおう?!」

突然、奇声を上げながら飛び起きるまつ梨に、起こそうとしていた
日向が驚く。

「び、びっくりしたあ……………」

「お前の声に俺がびっくりだよ」

二人がどこに居るのかというと、以前乱菊の行っていた宴会のために居酒屋に来ていたのである。そんな中、余り酒の飲まないまつ梨は早々にダウンして眠っていたというわけである。

頭の痛そうな表情をしながら、まつ梨は眉間に手を当てる。

「頭痛あ……………」

「水あるぞ?」

「ありがと……………ん……………」

少し色っぽい声を漏らしながら、まつ梨はコップに入っている水をちびちびと飲む。その横で、乱菊などの酒豪たちは瓶飲みで酒を飲んでいる。

「まったくう……………まつ梨、そんなんじやいつまで経つてもお子ちゃまよお〜!」

「お……………お子ちゃまですか……………」

「泥酔してる人に言われても説得力が皆無ですね」

乱菊の言葉に少し複雑そうな顔をするまつ梨に、この中で唯一酔っていない日向がフォローを入れる。何故酔っていないのかというと、下戸であるため単純に飲んでいないだけなのである。

「しゅ——へえ——お酌——!」

「はいい!乱菊さん!」

乱菊にデレデレでデロデロの檜佐木が酌をするというのは中々シユールな光景ではあったが、何も言わずに日向はジョッキのウーロン茶を飲んでいた。

檜佐木が普段はしっかりしていて真面目な先輩であることも、日向が現在進行形で複雑な心境になっている原因である。

「おう恋次い!もうへばつてんじやねえだろうなあ?!」

「いえ!まだまだいけます!」

隣で煌びやかでツルツルな頭の男と、紅いパイナップルのような頭の男が飲み比べをしているが、とりあえずそれを日向はスルーした。

さらにその横でおかつぱ頭の男が『美しさとは何か』について、高身長的女性に延々と語っていたりしたが、とりあえずそれもスルーした。

「はははっ！皆楽しく飲んでるみたいだねエ」

「京楽隊長……………全然酔ってないじゃないですか」

女物の羽織を羽織るナイスミドルの男性が、お猪口を持って日向に歩み寄る。他の者達のほとんどが顔を赤くしているのに対し、京楽は全然酔っている様には見えない。

「このくらい序の口だよオ。でも、次の日には二日酔いになるから七緒ちゃんに怒られるんだよねエ」

「……………さぞかし大変でしょうね」

そう言っただけで日向は、八番隊副隊長の労を心の中で労う。

日向がそんなことを考えている間に、京楽は日向の隣に座る。

「……………日向君、ありがとうよ」

「え……………どうしたんですか、急に？」

急な京楽の感謝の言葉に、日向は少し驚く。

「こうやって前みたいに皆で楽しく飲めるのは、君がアルトウ口を倒してくれたお蔭だよ。そして……………」

何かを言いかけて、京楽の視線はまつ梨の居る方向へと移る。

「彼女がこの輪に入れたのも、君のお蔭だよ」

「……………俺はきっかけを作っただけですよ」

そう言っただけで日向はウーロン茶を飲む。だがその表情はどこか穏やかなモノが見受けられる。

京楽と日向が話している内に、まつ梨は酔っぱらった乱菊に捕まり日本酒を飲まされているが、まつ梨の表情もどこか穏やかである。

「京楽隊長の方がまつ梨との付き合いが長いんですから、影響力と云った部分では俺よりあるんじゃないですか？」

「いやア、そうでもないさ。同年代だからこそって言うのもあるんだよ？」

そう言っただけでお猪口に口を付ける。

「君みたいに、席次も性別も気にしないで接してくれる人って中々居

ないモンなんだよ」

京楽の言う事はその通りである。日向の様に真央霊術院を若くして卒業し席次の高い者は、少なからず妬みの対象になり易い。しかしそんな者達を含めて日向は友好的に接する。その性格のおかげで、日向は所属している十三隊では元々温厚な雰囲気も相まって、日向に悪い印象を持つ者はあまり居ない。

「だからさ、まつ梨ちゃんのことよろしく頼むよ」

「……………勿論です」

京楽の頼みに、日向は静かに答える、が――。

「ひゆうがあ~~~~~!!」

「うおう?!」

突然、満面の笑みで抱き着いてくるまつ梨に、日向は為す術なく押し倒される。

「急にどうした、って酒臭っ?!」

「えへへえ、酔っぱらっちゃったあ~~~~!」

「はははっ!いい酔いつぶりだよあ~~~~!」

顔を真っ赤に紅潮させるまつ梨は、完全に酔っている。そんなまつ梨を、京楽は笑って煽る。

そして戸惑う日向の死覇装の胸元に、まつ梨は顔をうずめる。

「あまい匂いするう~~~~!チョコレートみたい~~~~!」

「おいおいおい。いい年頃の女子が健全な男子の胸元に顔をうずめてんじゃねえよ」

「やあだあ~~~~」

まつ梨はガシツと、腕を日向の背中に回してホールドする。そんな光景を京楽が羨ましそうに眺める。

平静を装う日向だが、実際は一刻も速くまつ梨を引きはがそうと必死である。その理由は、かなりの密着度のため、まつ梨の女の子の部分が日向の腹部辺りに惜しげもなく押し付けられているのだ。二つの柔らかい感触は、酔っていない相手に対しても破壊力が抜群である。

(意外と着痩せしてんだな……………じゃなくて!)

何とか引きはがそうとするが、相手が女性であることから、力づくというわけにもいかなく、傍から見ればベタベタしているカッパルにしか見えない。

その後、この地味な攻防はまつ梨が寝落ちするまで続いたが、後々詳細を聞いたまつ梨は暫くの間、日向の顔を直視出来なかつたという。

『滅却師』

かつて世界中に散在した対虚戦に特化した退魔の眷属である。しかし、虚を滅却する滅却師は魂魄量のバランスを壊して世界を崩壊させる存在とされ、調整者である死神によって200年以上前に殲滅された。

その生き残りは極僅かである。

「真咲くく!!一緒に帰ろくく!」

「うん!」

中学生と思わしき二人の女子が、制服姿で仲良く歩いてゆく。真咲と呼ばれた女子は、明るい髪の色をする澆刺としている人物だ。

そんな彼女も、同級生に隠している事実がある。

——彼女は、『滅却師』なのである。

それも滅却師の中でも、すでに数少なくなっている『純血統滅却師』なのである。そして彼女には、家族がもう居ない。『黒崎』を名乗る人物はすでに彼女だけになってしまい、真咲は同じ純血統滅却師の石田家によって保護されている。

『純血統滅却師』は、容易く血を流すべきではない。

これは、保護されている石田家に住む真咲の婚約者・石田竜弦に言われた言葉。

それがただ単に『怪我をしないでくれ』程度の意味であつたら、真咲も素直に了解できていたであろう。しかしそれが『自分たちは特別な存在だから』という意味になると、真咲は首を傾げてしまう。

同じ人間なのに、『特別』もなにもない。それが彼女の考えであつた。

自分は『特別』なのではない。境遇が少し、一般と違つただけ。

だがそれを理解する人物は居ない。

(はあ……………)

誰にも聞こえないため息を、真咲は吐くのであつた。

滅却・序

失ってからしか気づかない

幸せとは

そういうものだ

アルトウロとの戦いから、約三年。

「隊長オーっ！隊長——っ!!どこですか隊長——!!」

十番隊舎の庭を駆け巡っているのは、十番隊副隊長の松本乱菊である。バタバタと音を立てながら自分の隊のトップを探す姿に、通りかかった二人の死神は『松本副隊長またやってる…』や『毎日大変だなあ…』などといった感想を漏らしている。

「むっ！」

すると乱菊は何かを見つけたのか、木が何本か立っている場所に目を向けながら、通りがかった死神の女性が持っていたおぼんを寄越すように要求する。

「隊長見——っけ!!!」

「ギャ——!!!」

凄まじい勢いで投擲されたおぼんは木の上でがさがさと動いていた物体に命中し、物体はバサバサと木の葉も携えながら木から落下する。

「よ——し、命中！」

「ぎ——んねん！ギリギリで受け止めたので命中しませんでした——!!」

「ハイ命中」

「ぽう!!!」

命中していないと豪語する落下してきた人物——志波一心に、乱菊は顔の前で受け止められているおぼん目がけて蹴りを喰らわせる。するとおぼんは、蹴られた部分を中心に罅が入ったため、周りにいた

人間たちにも蹴りの凄まじい威力を物語っていた。

「ひ——！！折れたア——！！俺のイカス鼻が折れちゃったア——！！これはもう今日休むしかない——！！」

「さー帰りますよーちゃんと仕事してもらいますからね、志波隊長！」
ぎゃあぎゃああと叫ぶ一心だが、乱菊はそれに目もくれずに背を向け歩き出す。その様子に、一心は仕方ないと立ち上がり罎が入ったおぼんを元々持っていた女性に返す。

「すまねえなこれ。乱菊のせいでヒビ入っちゃって……」

「ひとのせいにはしない！隊長が仕事もせずに逃げ回るからでしょ！」

いかにも乱菊が悪いという声のトーンで話すが、乱菊に責任は一心の方にあると諫められる。乱菊は背を向けたまま、一心に対し説教を続ける。

「まったく……分家とは言え志波家の当主がそんなコトじゃ、宗家の方にもキズがつかますよー！しっかりして下さいー！」

「またまたア」

いつも以上に真面目に説教する乱菊に、一心はにやけた顔つきで言う。

「家ガラの事なんて言い出しちゃってガラにもねー。オメーが俺に仕事させたいのは、自分の仕事の配分減らして遊びたいからだろ？ん？わかってんだぞ、ん？」

「……………」

凶星であるかのように乱菊は黙り込む。その様子に、一心はさらに追い打ちをかける。

「気がついてんだぞおくくくく？お前がジワジワ俺の仕事の配分を増やしていることに！あーもう恐ろしい！恐ろしい策略だわ——！！魔女!!」

今までの意趣返しと言わんばかりに一心は畳み掛ける。それに我慢できなくなったのか、乱菊は裏拳を繰り出そうとし振り返る。

「あ——もう、ウルサ……………!!」

しかしその一撃は、一心の無駄にいい反射神経によって手首を掴まれることにより防がれた。

「乱菊!!」

「はっ………はいっ!」

一心の真剣な声色と表情に、乱菊は身体をびくつと揺らし、若干顔を赤らめる。

「今日のお前………走り回って俺を探したおかげで、おっぱいがテカってていいな………!」

真剣な表情とは裏腹に、出て来た言葉は破廉恥な内容。それに乱菊は激怒し、すぐさま一心に無慈悲なほどの暴力を働く。隊長が悲鳴を上げるその光景は、部下が上司に対し行うことと見れば常軌を逸していたが、誰も止める者はいなかったという。

その後一心は、ボロボロになりながら隊首室に連れて行かれた。

「遅かったっすね。書類終わりました」

「もおくくく!二人とも、あっちこち行かないで下さいよくく!!」

淡々として束になった書類を渡してくる冬獅郎と、その奥で別の書類をまとめるまつ梨が一心の目に入る。その光景に一心は『うおおお おお!』と、謎の雄叫びを上げながら冬獅郎の両脇に手を入れ、高い高いを始める。

「やるじゃねえか冬獅郎!まつ梨!さすが次期隊長!!」

「ちよつとちよつと!!次期隊長はあたしでしょ——、順番的に!!」

乱菊は、一心が自分よりも席次が下の二人が次期隊長と言われたことに大声を上げる。アルトウロとの戦争から三年が経ち、冬獅郎は三席に、まつ梨は四席に昇進していた。しかし乱菊はそれよりも上の副隊長であるのだから、異論を唱えるには十分である。

「何言ってるんだ。オマエみたいなのが隊長になったら、隊が崩壊するわ」

「そうっすね。卍解の修練も進んでるし、俺で問題ないと思います」

「コラ、冬獅郎!!あんたまで何言い出してんのよ!!」

「はははっ………。二人とも、落ち着いて下さい………」

一心の言葉を一ミリも否定しない冬獅郎に対し、乱菊は冬獅郎の頬を抓り横に伸ばす。それに対し冬獅郎も乱菊の下唇をつまんで引き延ばしている。それをまつ梨は苦笑いしながら制止する。

「ハツハツハ！ほどほどにしとけよ——————……あれ？ここに
あつた俺のまんじゅう知らない？」

「！」

一心は戸棚の中を確認すると同時に、自分が楽しみにとっておいた
まんじゅうが消えていることに気が付いた。すると、冬獅郎とまつ梨
はある書類を一心の前に持ち出してくる。

「隊長、そういえば一つ気になる報告が……………」

「これなんですけど……………」

二人が取り出してきたのは、死神の死傷に関する報告書である。こ
れには現世での死神の虚から受けた傷や、戦闘中の死亡について書か
れている。

「イヤイヤ。先にまんじゅうのハナシしようよ。俺が楽しみにソコに
隠しといたまんじゅう知らない？ねえ」

「うるさいなあ、まんじゅうなんて今どうでもいいでしょう！ごちそ
うさまでしたよー！」

「一心隊長より働いてるので糖分が必要だったんです!!」

「やっぱりお前らが食べてんじやん!!何サラツと流しちやおうとして
んの?!悪いヤツだなお前!!それとまつ梨に関しては、俺に責任なすり
つけてるし!!」

二人の自白に、一心はぎやあぎやあと騒ぐ。そして一心は、まつ梨
の口の横に餡子が若干残っているのに気づく。

そして四人は本題に戻る。

「二か月前の報告、覚えてますか？鳴木市という中規模の都市なんで
すが、二か月前に担当死神が事故死しました」

「あ——、あつたな。原因調査中のやつだ」

冬獅郎の言葉に、一心は手を顎に沿えながら思い出す。そして冬獅
郎に続くようにまつ梨も内容を読み上げる。

「それで、先月分の報告書がさつき出来上がってきたんですが……………
原因は不明のまま、先月は二名死亡しているんです……………」

その言葉を聞いた瞬間に、一心は振り返りどこかに行くように歩ん
でいく。その様子に、乱菊は声を上げる。

「あつ！ちよつとどこ行くんですか、隊長!!」

「調査！あと任せたぞ——!」

一心は振り返らず、ただ左手を頭上で振るだけである。

「え?!ちよつ……今から!?一人で!」

「オウ！明後日ぐらいには戻るから、明日の仕事ヨロシクな!」

そう言つて、一心は両手を銃のような形にしながら乱菊たちの居る方に振り返る。ちなみに左目をウインクしながらである。

「何言つてんですか！総隊長に報告とか……」

乱菊が言い切る前に、一心は瞬歩で目の前から消えていった。

「あ!!もう!!追うわよ、冬獅郎!!まつ梨!!」

「……いや……」

「今日はやめときましよう……」

斬魄刀を携え、一心を追いかけようとした乱菊であったが冬獅郎とまつ梨の様子に、その場で立ち止まる。

「!あんだ達ねえ……」

「隊長はこの調査が危険だと踏んで一人で行つたんだ」

乱菊の言葉を遮るように、冬獅郎は口を開いた。

「そんなことわかつてるわよ!!だから尚更……」

「尚更!」

「……だからこそ、あたしたちはここで待たなきゃいけないんです……」

「……解つてんだろ。待つしかねえんだ。今の俺達の実力じゃまだ、隊長の足手まといにしかねえんだから……」

担当死神が何人も原因不明のまま犠牲になつていくという現状。それは恐らく強力が虚が現世にいるということの裏返しでもある。そのような事態に、一心はもう犠牲を出さないために一人で行つた。そのことを乱菊に悲痛な顔で訴える。一部の死神しか知らないが、卍解を習得しているまつ梨ならまだどうとでもなると思えるが、それでもまだ精神的な面でまつ梨は弱い。

弱いなら、足手まといになるなら行かない方がいい。

それを、解つていた。

「ねえねえつるりん！遊ぼうよ〜！」

「うるさいっすよ!!あっち行きやがって下さい!!」

一角が仕事をする横で騒ぐやちるに対し、一角は黙るように叫ぶ。それに不服そうにやちるは唇を尖らせる。すると扉が開き廊下側から肩から先がない死覇装の下に、フードが付いている特徴的な着こなしをする男が現れた。

「ぶー!!あ、マキちゃんだ!!ねえねえマキちゃん、聞いてよー!つるりんがあっち行けって言うんだよ〜?!」

「そうですか、副隊長。しかし一角は現在進行形で仕事をしているので、今我慢すれば仕事が速く終わるため後で多くの時間一角を弄れますよ?」

「あ、そっか——!マキちゃんあたまい——!」

「何恐ろしい提案してんだ、真樹!!」

平然とした顔で、一角が弄られること前提の提案をやちるに提示するのは十一番隊第四席・一ノ瀬^{いちのせ}真樹^{まき}である。

その平然とした態度に、一角は怒鳴り声を上げる。そして奥からは恋次と弓親も出てくる。

「一角さん……また副隊長に怒鳴り声上げてるんすか?」

「まったく……怒りを顔に出すとは美しくないよ……」

「俺悪いか?!」

こういった騒ぎは、十一番隊ではお馴染みである。すると扉の方から普段は居ない人物が現れる。

「書類届けに来ました——」

「お、日向じゃねえか!」

書類の束を持って現れる同期に恋次は反応する。日向は、部屋に居る人物たちに一礼しながら書類を一角の机に置く。

「おい!何で俺なんだ?!」

「え?こういうの一角さん担当じゃないんすか?」

「天宮城。それよりも茶菓子はどうか?」

「あ、お構いなくです。真樹さん」

「スルーするな！つーか、『それよりも』って何だ?!」

一角を軽くスルーしながら、日向と真樹は会話する。真樹は十一番隊の中でも寡黙で業務に実直であることから、日向や恋次からは一目置かれている。真樹も、日向の実力を一角や弓親などから聞き、一目置いている。根が真面目同土馬が合うのか、日向と真樹は結構仲が良いいのである。

「おい日向。ちよつと気になる話があるんだが……」

「何だ、恋次？」

宴会の際に日向から貰ったゴーグルを付ける恋次は、自分の仕事机に座りながら話を切り出す。

「最近、現世で原因不明の事故死が結構起きてるだろ？管轄は十番隊の町なんだが……こつちでも気になることが起きてんだ……」

「気になること？んだ、そら？」

「ああ、流魂街でも死神だけが狙われて襲われてるんだよ。ただの虚だったら魂魄を片っ端から喰いそうだが……」

「成程……霊力の高い奴だけ狙ってるのか……?」

「そのことなら、こちらでも調べている。十一番隊の者も何人かやられてるからな」

そう言つて真樹は、自分の机の上から流魂街での死神の死亡について書かれている報告書を二人に渡してきた。やられている人数は、殺されただけでも十人に上る。

「俺が調べたところによると、どうやら下手人は死神を喰らうことを主とせずに、殺すことを主に行っているらしい……」

さらに報告書に記載されている主な死亡原因は、心臓を射抜かれるようにして殺されていたり、上半身と下半身が切り離されるように切断されていたなどの過激な理由になっている。しかしそのどれも、虚が喰ったような痕跡が見当たらず、技術開発局で司法解剖しても痕跡は見当たらなかったため、死神に対し怨恨を持つ虚によるものと推測されると、上の欄に書かれている。

「すでに席官もやられている。状況次第では、俺たちも動くことにな

るだろう」

「それで、もう一個気になることがあるんすよね？真樹さん」

「ああ、恋次。どうやら、流魂街の者は喰わず殺さず。死神は殺すが喰わず。虚は殺して喰う。さらに詳しく言えば、流魂街の住民を襲う虚は、殺すが喰いはしない」

「っ……………?!何ですか、その生息は……………?」

「さあな。だが、複数回ある事例でこの事柄は全て共通する。まるで義賊のようだな。『自分はお前たちを救う者だ』と言わんばかりのな。少し違うが、今はもう聞かなくなった『白神様』のようにな」
「そうっすか……………」

『白神様』という単語に日向は反応する。知っているのは数人だけだが、本人である日向にしてみれば行っていることの主旨が違うのでまったくの別物に感じる。

「近々、どこかの隊でこの虚に対する部隊が編制されることになるだろう。これだけは知っておいて損はない」

「分かりました。真樹さん、ありがとうございます！恋次、サンキューな！」

「うむ」

「おう！ま、オメーなら変な心配はいらねえと思うがな」

恋次の若干遠回しな信頼に、日向はちゃんとくみ取って笑って返す。そして、今度は全員にまとめて一礼し、部屋を去って行く。

「またおいでねー!!ひゅうううくくん！」

「はははっ！また来るよ、やちるちゃん！」

やちるの元気な声に、日向も手を振りながら対応する。そして自分の隊舎に戻るために早足になる。

「さて……………速く戻らないと……………」

「何そんなに急いでるんだ？もうちよつとゆっくりしていけよ……………」

突如背後から聞こえてくる声に、日向は固まる。そして、錆びついたロボットの様にギギギツと首を後ろに向ける。

「はははあ!!」

「ぎゃああああ!!? だから速く帰りたいんですけどよお!!」

後ろに立っていた男——剣八が振り下ろした斬魄刀をギリギリで躲し、日向は涙目になりながら剣八から逃げていく。しかし剣八は逃がさんとばかりに追いかけてくる。

「ははははっ! この前みたく本気出して俺とやり合ってみせてくれよお!!」

「嫌っす!! 勘弁です!! ああ、だから書類運ぶの違う人に頼みたかったのにい!!」

全力で走りながら、書類を運ぶのが本意ではないことを叫ぶ日向である。以前はこうではなかったのだがアルトウロとの決戦以来、日向は剣八の中で強い奴と認定され、見つかるたびに真剣で斬りかかられる有様となつてしまっている。

「……………やっぱり心配だわ」

「死なない事だけは祈っておこう……………」

不幸とも言える日向に、恋次と真樹は言葉を漏らすのであった。

滅却・中

現の異変

夢には出てこず

「私は黒崎真咲。滅却師クイーンシィです」

静かな平穏が、崩れた。

「一心さんが失踪……？何だよ、それ……?!」

事の始まりは、一心が現世に無断で出撃し、死神を殺戮していたと思われる虚を負傷しながらも撃退したことから始まった。しかしすぐにまた現世に無断で行き、そして帰ってこなくなった。捜索隊がいくら探しても一心の行方を探ることが出来ない。戦闘で死亡したのならその痕跡も残るであろうが、それすらもない。そして遂に、捜索が打ち切られたのであった。

「隊長のアイツが簡単にやられるタマじゃねえのは俺も分かっているが……状況が状況だから、まだ何とも言えないのが現状だ……」

この事実を日向に伝えているのは、一心の親戚に当たる海燕である。その神妙そうな顔から、不安が隠せていないことは明白であった。

（藍染隊長の仕業なのか……?!くそっ!!）

自分が何も出来ていなかったことに、日向は自分に対し悪態をつく。隊長程の霊圧を持つ者の、その痕跡すら探せないというのは異常である。

考えられるのは二つ。

一つ目は、霊圧の痕跡が残らない程早く虚にやられたのか。もしくは喰われたか。

二つ目は、一心が意図的に霊圧の痕跡が残らないように仕向けたの

か。

一つ目は隊長ともあろうな人物が何も抵抗せずにやられるとは思えず、日向は必然的に後者を思い浮かべた。

(浦原隊長絡みか………？それとも仮面ヴァイザードの軍勢絡みか………)

後者であるならば、この二つが関与している可能性が高いであろう。仮面の軍勢に関しては、霊圧を遮断する結界を張っていたので尚更である。浦原の作っていた義骸も、霊圧を感知させなくなるように作っているらしいので、それらのどちらかに関与しているのなら行方を探すのも簡単になるであろう。

しかし後者ならば、戻ってこれない理由もあるはずである。それも知らずに連れ戻そうと言うのは、少々短絡的だと日向は考える。故に、日向は待つしかないのである。恐らく、同じ考えに至っているまつ梨も。

「分かり次第、追って通達するからよ。それまではいつも通りやってくれ」

「おう………そうだな………」

そう言つて日向は部屋から出ていく。そして誰にも聞こえないようにため息を吐く。

「………今日、冬獅郎達とはどんな顔で会えばいいのか………」

日向は、ほぼ毎日冬獅郎の訓練に付き合っている。現在冬獅郎が行っている卍解の修練もそうである。自分の隊の隊長が行方不明になったばかりで落ち込んでいるであろう彼らに、どんな顔で会えばいいのか。それが日向の悩みであった。

「そおい！」

「痛あ?!」

突如、後ろから何者かに蹴られ日向は廊下にビタンツと倒れる。そしてすぐに、蹴ったであろう人物に目を向ける。

「何すんだルキア?!」

「このたわけが！そんな暗い顔をされたらこちらまで暗くなるわ！」

腕組みをしながら立っていたのはルキアであった。状況的に、日向はルキアに見下ろされている状態であり、普段とは逆に立場になつて

いる。

「……………心配してくれてるのか?」

「……………多少はな」

ブスツとした表情のまま肯定するルキアに、日向は『素直じゃねエ奴……………』と笑う。それを見てルキアもやつと微笑む。

「お前のことだ。志波隊長の安否でそのような顔になっていたのであろう。だが、三席ともあろう者が何と言う振る舞いだ!お前は、十三番隊の皆からすれば上に立つものなのだぞ?!そんなことでどうする?!」

ルキアの叱責を聞き、日向は目を見開く。そしてすぐに微笑み立ち上がる。

「ありがとな、ルキア。おかげで目え覚めたよ」

傍からすれば、一般隊士が三席の者に向かって叱責を飛ばすのは非常識な光景ではあるが、同期であり友である二人からすれば、これでもいいのである。こうでなくてはいけないのである。

立ち上がった日向は、ルキアの頭に手をポンツと置く。以前ならば『やめんか、このたわけ!!』と、顔を真つ赤にしながら振り払うののだが、最近は満更でもない表情で少し経ってから無言で手を下ろすというものになっている。

そういった他愛もない動作をしながら、再び会話を始める。

「……………そうだ、日向。お前は最近流魂街での、ある虚が死神を襲っているというのを聞いたか?」

「ん?あの、死神と虚は殺すけど住民は殺さないって奴か?」

「うむ。その討伐に、十一番隊が出動することになったそうだ。恋次も討伐隊の一員に選ばれたようだ」

「そうか……………。ま、大丈夫だろうな」

「そうだな。剣術なら目を見張るものがあるしな」

同期が虚の討伐に行くという話題に、二人は特に心配する様子もなく淡々と進めていく。

そして数日後、東流魂街76地区・逆骨に十一番隊の精鋭が向かった。

「ここが、問題の場所か……………」

「気を抜くなよ、恋次」

「分かってますよ、真樹さん」

「たくつ……………湿っぽい所だぜ……………」

「肌に悪そうだから、すぐにでも終わらせて帰りたいね……………」

逆骨の森の中を歩くのは、今回討伐隊に選ばれた恋次、真樹、一角、弓親である。俗に言うボックスというようなフォーメーションで、四方からの襲撃に備えている。

「残留霊子か何かあるかと思っただけど、何もありませんね……………」

「どうやら、普通の虚より頭が回るらしいね……………」

恋次の呟きに、弓親は冷静に感想を言う。

「へっ、ツエー奴なら是非相手してもらいてえもんだな！」

「油断は禁物だぞ、一角」

早く戦いたいと言う一角に、真樹は平然とした顔で注意を促す。
すると突如、真樹が動いた。

「ふんっ!!」

「なっ……………襲撃?!」

真樹が、飛来したものを斬魄刀で斬り落とし、その事態に対し他の者も斬魄刀を抜く。そして真樹は、たった今自分が斬りおとした物体に目を向ける。

「……………矢……………?」

そこにあつたのは矢。しかしただの矢ではなく、淡い光を放ちながらそこに実体がないかのように、粒子へと分解していくものであった。

「霊子で構成された矢じゃないか……………?」

それを見て、弓親は自分なりの分析した結果を口に出してみる。

「成程……………すると相手は飛び道具使いか……………」

そうだとすると、心臓に風穴が空いていた死神の死亡理由がはつきりとする。そして全員が、矢が飛来して来た方向に身体を向ける。

「っ?!後ろかア!!咆えろ——『蛇尾丸』!!」

霊圧を自分たちの後方に感知した恋次は、解放した斬魄刀を後方に振るう。

しかし高速で移動する物体には命中せずに、生い立っている木々を何本も斬り倒す結果となる。

すると、高速で動く物体は一角に向かい肉迫してくる。

「へっ…いいぜ……延びろ——『鬼灯丸』!!」

解放した斬魄刀を物体に向かい、突き出す。しかしそれは、物体が繰り出した蹴り上げによつて弾かれる。

そして手刀を繰り出してくる物体に、一角は蹴りを食らわせ一旦距離を取り向きなおす。

「へ………ここまで完璧な人型は初めて見るぜ………」

四人の前に姿を現したのは、全身白の虚。その姿形は完全な人型でありながら、頭上には光の輪と、背中からは一对の光の翼を生やしている。仮面は頭全体を包み込むような卵のような形だが、顔の方には十字の穴が空いてそこから目を覗かせて、後頭部と首のつなぎ目の隙間からは長い金髪が靡いている。両腕に手甲のような鎧を身に着け、虚の穴はへそにあたる部分にぽっかりと空いている。全体的な印象は所謂、『天使』という言葉が似合いそうな虚である。

「こちらを忘れてもらつては困るよ………咲け——『藤孔雀』!!」

刀身の数が増えた斬魄刀で、弓親は虚の後方から斬りかかる。

すると虚は、右手を手刀の形にしたまま光のような物を纏わせて、光は瞬時にメートルほどの長さになり、それで弓親の一撃を防ぐ。さらに、二つが衝突し拮抗するかに見えたそれらは、藤孔雀が光の剣に斬られるという形で終了した。余りの出来事に弓親だけでなく、他の三人も驚愕の表情を見せる。さらに虚は、左手にも同じような光の剣を作りだし、無防備な弓親の胴体を貫こうとしている。すると、瞬歩で真樹が虚に接近する。

「下がれ、弓親!光華閃け——『虹霞』!!」

突如、真樹の有する斬魄刀が発光し始め、虚は堪らず弓親達から離

れる。しかしその隙を、他の二人が攻める。

「へっ……行くぜ、恋次!!」

「うすー行け、蛇尾丸!!」

それぞれの斬魄刀で斬りかかろうと、虚に接近していく。しかし次の瞬間、虚の左手に纏っていた光は剣の形ではなく、まるで弓のように手から均一に上下に伸びていく。そして右腕を肩に平行に持ち上げ、手が口元に来るように折りたたんだ瞬間、右手と左手が繋がるように一本の光の矢が出現した。そして恋次と一角が斬りかかるよりも速く、出現した矢を二人に向かい放つ。

しかし辛くも、それを回避する二人は今後ろを通り過ぎていった矢から再び虚へと目を向ける。

「何……だと……っ?!」

恋次は目を疑った。たった今矢が放たれてから数秒もしない内に、恋次と一角の目の前に百は下らないであろう光の矢が二人に向かっていた。

「恋次、避けるオ!!」

「くっ!!」

一角の怒号で我に返り、恋次はすぐさま横へ駆けて行く。一角も同様に、恋次とは逆の方向に駆けて行く。しかし虚は、弓道で言う残心の体勢のまま恋次に身体を向け、光の矢を連射していく。恋次は必至で避けていくが、後ろに目を少し向けるとすぐそこにある木々が穴だらけにされていくのが見え、背筋に悪寒を感じた。

「はあ!!」

しかし、真樹が虚に斬りかかることにより、矢が放たれるのは阻止された。真樹の一閃と、虚の手に再び形成された光の剣が衝突する。

「彩玉虹霞!!」

真樹の握る斬魄刀が発光し、他の三人は真樹と虚を視認することが出来なくなる。『彩玉虹霞』は、虹霞から放たれる光の中に閉じ込め、無数の斬撃で相手を斬り刻むという技である。光に閉じ込めるため、相手は光で目を開けることは困難になり、真樹の斬撃から避けることは至難の業となる。

そして、発光が終了する。

「ぐっ……………」

「真樹?!」

そこには何事もなかったかのように平然と佇む虚と、左腕から血を流す真樹の姿があった。

「視覚ヲ奪ツタ程度デ……………私ノ霊圧感知能力ヲ嘗メテイタヨウダナ」

「貴様……………」

初めて言葉を発する虚に、四人は驚愕する。それと同時に、真樹の技を完全に防いだことにも驚く。

「死神ハ私ガ全員殺ス……………!!マズハ貴様カラダ!!」

「くっ!咆えろ、蛇尾丸!!」

真樹に止めを刺そうとする虚に、恋次は鞭のように撓る刀身を虚に向けて振るう。しかし、虚はあろうことか左腕で易々と受け止める。

「……………」

傷一つ付けられないことに驚く恋次だが、他にも一つ気づいた。

(何だ、あの模様は……………?!)

受け止めた一瞬だけ、虚の左腕に青い線のような物が奔ったことを恋次は目で捉えていた。

「ドウシタ?二百年前ノヨウニ私ヲ殺セナイノカ?」

「……………君は、滅却師か?」

挑発的な言葉を投げかけてくる虚に対し、弓親はこう投げかけた。その単語に、恋次たちだけでなく虚も驚愕したような態度をとる。

「……………近カラス遠カラス。私ハ、元々ハ滅却師ノ魂魄ダツタ。ダガ、貴様達死神ヘノ憎悪ヲ押シトドメルコトガ出来ズ、私ハ虚ヘト変ワツタ!!ダガ私ハモハヤ、滅却師デモ虚デモナイ!!貴様達死神ニ罰ヲ与エル執行人ダ!!」

そう言い切ると、虚の霊圧は爆発的に上昇する。余りの勢いに、先程の矢の雨でボロボロになっていた木々が倒れるほどである。

そして、仮面の十字架の端から、一粒の涙が零れ落ちる。

「殺ス……………死神モ虚モ、私ガ殺ス!!!」

「くっ……………なんつー霊圧だ!!!」

隊長格に匹敵する霊圧に、恋次はその場で圧倒されるように立ちすくむ。すると、一角が他の三人よりも前に出てくる。

「下がれ、ここは俺一人でやる……………!!!」

「なっ……………でも一角さん!!!」

「一角、やるんだね?」

「あれをやるのか?」

止めようとする恋次を手で制止しながら、弓親と真樹は意味深な言葉を発する。それに対し一角は、狂気的な笑みを浮かべる。

「ああ……………恋次、これは皆には内緒だぜ?」

すると一角は、鬼灯丸を自分の目の前に構える。

「行くぜ……………卍・解!!!」

直後に、一角を中心に竜巻が生じる。ドンドン巨大化していく竜巻の中心からは、赤い竜のようなものが空に昇っていく。

その光景に、恋次のみならず虚も驚愕したような様子を見せる。

そして煙が晴れる。

「……………
『龍紋鬼灯丸』!!!」

一角の左右と後ろに特殊な形状をした刃物が鎖で一連に繋がれ、後ろにある刃物には龍の紋が彫られている。

「さあ……………楽しもうじゃねえか!!!」

「楽シム前二殺シテヤロウ。死神ガ……………!」

滅却・跋

復讐を悪とするのは

永遠の敗者

私がするのは仇討などではない

仇を敗者へと陥れる傲慢だ

「おりゃあ!!!」

「フンツ」

一角が右手に持つ巨大な刃物を虚に向かって突き出す。しかしそれは、虚の高速移動によって躲される。

(瞬歩みてえに動きやがるな……………)

「瞬歩デハナイ、飛廉脚ダ」

「っ…………!!」

頭の中を見透かされたように応えられ、一角は一瞬動揺するが、すぐに口角を吊り上げる。そして虚は、再び弓を形成し、矢を何本も一角に放つ。しかしそれを一角は、左の刃物で全て弾く。

「おい、虚。その矢、随分脆いじゃねえか」

『ヤ矢』ハイリツヒ、ブファイルデハナク、『神聖滅矢』ト呼ンデモラオウカ。ダガ、コレハ滅

却師用ノ用語ダガナ」

そして虚は、先程よりも溜めの長い構えをする。

「ソシテオ望ミナラバ、モウ少シ威力ノアル物ヲ放ツテヤロウ」

すると虚が用意していた矢は、みるみる赤く染まっていく。そして放たれると同時に凄まじい速さで一角の頬を通過する。

「っ…………!!」

「セロ虚閃。ドウヤラ見エナカッタヨウダナ」

「へっ……………いいぜ。もつと楽しませろオ!!!」

焦るのではなく、喜ぶ。

一角は再び両手に持つ刃物で斬りかかる。しかし、それらは虚の両腕で受け止められる。衝突した瞬間に、大地が揺れるような音が辺りに響き恋次はビクツと体を揺らす。

「コレガ卍解カ。笑ワセルナ」

「はっ!!その腕の奴、中々硬えじやねえか!!それも何か名前あんのかよ?!」

直後、虚の腕に赤い線が奔る。そして両腕で受け止めていた刃物を振り払う。

『血装』ダ

そして、両手に光の剣を形成する。

「ソシテコレガ、『魂を斬り裂くもの』ダ」

飛廉脚で一角に肉迫し、両手の剣を一角に叩き付けるように振り下ろす。しかし一角の目の前で交差された刃物によってそれらは防がれる。数刻、つばぜり合いは続く。

「なっ……………?!」

しかし異変に気付いた一角が一步退くことにより、その攻防は終了した。そして一角は、自分の持っていた刃物の表面を見る。

「……………若干斬られてやがるな……………」

表面が虚が振り下ろした剣と同じ様に赤く染まっているの。

『魂を斬り裂くもの』ハ剣デハナイ。アクマデコレハ刃ヲ持ツ武器ダ。ダカラ、コノヨウナコトモ出来ル」

そう言っ虚は、右手を一角に振るう。すると右手に纏っていた光が、一角の方向へと飛来していく。それを一角は危なげなく叩き落とす。

「それも、ハイリツヒなんちゃらって奴なのか?」

「コレ以上貴様ト話ス義理ハナイ。死ンデモラウゾ」

虚は再び弓矢を形成し、神聖滅矢の雨を一角に浴びせかけようと放つ。それを次々と叩き落としていく一角だが、刃を振る数に対し降り注ぐ矢が多い。次々と刃を潜り抜けた矢が一角の身体を掠め、そして貫く矢も出てくる。その攻防は三分以上も続き、一角の身体は血まみれになっている。

その様子に、近くで黙って観戦する三人の内の恋次が動く。

「くっ……………！弓親さん！真樹さん！何で援護に入っちゃいけないんですか?!」

「男の戦いに横やりするのは美しくないからね。それに、一角は一人でやると言ったんだ。言った以上、それは貫かなければならないよ」
「ですが……………!!」

このままでは一角が死ぬ！そう叫ぼうとする恋次を、真樹は手で制止する。

「抑えろ恋次。それに、一角が何の考えもなしにあれを続けると思っ
か?」

「えっ……………?!」

そう言われた恋次は、一角達の方向に振り返る。そして、先ほどとのある違いを恋次は発見する。

(赤くなってる……………?)

恋次が言った『赤くなっている』というのは、一角の後ろにある刃物に掘り込まれている龍の紋のことである。卍解をした直後では刃物そのものの色をしていたが、今は龍の尾から首元まで赤く染まっている。

「そろそろ行くぜ?おらああ!!!」

「ッ!!!」

突如一角は攻勢に出る。右手に持っていた刃物を突き出す。その際の衝撃波で、一角に降り注ぐ矢の雨を吹き飛ばし、反応する間もなく虚の左腕を吹き飛ばす。

「グッ……………?!」

「どうした?さっきの余裕は?」

肩から先が吹き飛び肉の断面から血が流れ落ちる虚は、表情は見えないが唯一仮面から覗く瞳からは苦悶の様子が見受けられる。

「それじゃあ矢あ撃てねえな……………。どうする?」

「……………ソレガドウシタ?」

すると血が流れる肉の断面が急に盛り上がり、新たな腕が生えてくる。そして動作の確認をするように指をパキパキと鳴らす。

「超速再生……………!!」

初めて見る超速再生に恋次は驚愕の言葉を漏らす。しかしそんな恋次とは裏腹に、一角はさらに口角を吊り上げ目の前の虚を睨む。

「へへへっ！腕じゃダメか……………なら次は胴体か頭をふっ飛ばさなきゃなあ!!」

「サセルト思ウカ？」

再び刃を振るおうとする一角に、虚は虚閃を放つ。しかしそれを、一角は刃を横に薙ぐだけで消し飛ばした。

さらに突進してくる一角に対し虚は、上空に飛んで回避する。しかし一角もそれを追ひ、跳躍する。

ルス・ジユレシア
『光 雨』

跳躍し、ほぼ無防備な一角に対し虚は神聖滅矢を連射する。嵐のような攻撃に、一角は一瞬怯むがすぐさま片方の刃を振るい、一部を吹き飛ばす。そして余ったもう片方で虚に斬撃を喰らわそうとする。

トルメンタ・デステリーヨ
『嵐 光』

しかし今度虚が放ってきたのは、神聖滅矢ではなく虚閃の嵐。一撃一撃が重い虚閃が嵐のように一角に降り注ぎ、その内の一つが一角の腹部に命中する。空中で体勢の取れないまま、凄まじい勢いで一角は地面に激突する。

「一角さん?!」

「くっ……………一角！聞こえるか?!」

「……………ちっ!!諸に喰らっちゃったな……………!!」

さすがに弓親も一角の安否を確認する。すると抉れた地面の中から、血だらけの一角が這い出てくる。しかし傍から見ても既に満身創痕と言える状態であった。

「ドウヤラ口ダケノヨウダツタナ。ナラ終ワラセテヤル——」

トルメンタ・デステリーヨ
『嵐 光』

「くっ!!」

「うおおお?!」

「これはさすがに……………っ!!」

「くっ……………一旦退くぞ!!」

今度は全員に虚閃が降り注ぎ、真樹は全員に撤退の指示を出す。しかし逃げる暇も無いほど、赤い閃光は四人と周りの木々に降り注ぎ大地を抉っていく。轟音は辺りに響き渡り、森からは鳥たちが飛び去っていくのも確認できる。しかし今の四人には、それを見る余裕すらなかった。

「これでは鬼道でも……!!」

弓親は一瞬でも隙を作ろうと虚に対し鬼道を放つが、そのどれも虚閃の嵐に飲まれる。このままではジリ貧だと、全員が感じる。

「水天逆巻け——『振花』!!」

「ムッ!!」

突如、後方から謎の霊圧が接近していることに気付いた虚は、すぐさま虚閃の掃射を止め両手に光の刃を纏わせ、振り下ろされる槍を受け止める。

「っ……………海燕副隊長?!」

虚に斬りかかった人物を、四人全員が視認する。

「破道の四・『白雷』!」

「クッ!!」

そしてさらに、一筋の光線が虚に飛来していき虚は堪らずその場から退く。そして恋次の横に、白髪の青年が現れる。

「日向?!」

「よう恋次。苦戦してるみてえだな」

突然現れた同期に、恋次は目を見開く。その間に地面に降りた虚と、振花を持つ海燕が激しい攻防を繰り返している。虚は神聖滅矢を放ちながら魂を斬り裂くもので斬りかかるが、海燕も負けじと鬼道を放ちながら振花で応戦する。

「下がってろ……………後は、俺と海燕がやる……………!」

日向はそう言つて、瞬歩で虚に肉迫し斬魄刀を振り下ろす。それに虚は反応し、海燕の振花を受け止めている腕と逆の方で受け止めようとする。

『閃刃』

しかし、突如振り下ろされる斬魄刀は赤く発光し、受け止めようと

した虚の右腕を切断する。

「ツ……………!!手練レカ……………!!?」

不利と感じた虚は、すぐさま飛廉脚で二人から遠ざかろうとする。

「海燕！俺が追う!!救護部隊の指示執っておいてくれ!!」

「分かった！だが、深追いはすんな！追いつけそうになかったらすぐに戻ってこい!!」

「おうっ!!」

後に到着する救護部隊の指揮を海燕に任せ、日向は逃げた虚を追いかける。

「くっ……………日向……………!」

恋次は、同期の背中を見送ることしか出来ず、唇を噛み締めていた。

「待ちやがれ!!」

「シツコイ……………!!」

瞬歩で追いかける日向に対し、虚は神聖滅矢を放つ。しかしそれが日向によつて必要な分だけ斬り落とされる。それを見て虚は、苦虫を噛み潰したような表情を仮面の中で浮かべる。

明らかにこの死神は、先程の戦闘狂の死神とは違う。頭を捻り、確実にこちらの首を取りに来る奴だ、と。

「ルス・ジュリア光 雨」!

追いかけてくる日向に、虚は矢の雨を放つ。しかしそれらを日向は、身体を傾けるて回避するか斬魄刀で弾くかで対応し、無数の雨を掻い潜ってくる。

「破道の四・『白雷』!」

日向の左手の人差し指から放たれた一筋の光は、虚の右肩に当たる部分を貫く。その痛みに、虚は仮面の中にある顔を歪ませる。さらに日向は、その一瞬の隙を見極め瞬歩で肉迫する。

「はあああ!!」

「グッ……………!!」

日向の一閃は、虚の左腕を斬り落とす。そのため虚は弓を失くし、

神聖滅矢を放つことが出来なくなる。日向に一撃貫つた虚は、距離をとろうと下がるが日向もそれに合わせて接近してくる。

そんな日向に、今度は残った右腕を日向の方に向ける。

「虚閃!!」

赤黒い閃光を目の前の死神に放つ。しかしそれすらも回避される。その攻撃の際に、日向は斬魄刀を振り上げる。それは虚の仮面に命中する。命中した反動で虚の体は後ろにのけ反る。そのまま虚の体は背後にあつた木に激突する。

「ハア…………ハア…………ハア…………!」

一閃された仮面は下半分が砕け散り、人間らしい口が垣間見えた。その両端からは赤い粘性の液体が流れ出ていた。

斬られた腕を再生しながら、激痛の走る身体を必死に起こそうとする。しかしそんな虚の眼前に、斬魄刀の切っ先が現れた。

「ここまでだ」

ただ単調に言葉を発する青年の目は、酷く悲しそうだった。

「一つ訊かせてもらおうか」

「何だ?」

「何故、貴様達死神は滅却師を殺シ回つた?」

「…………それを俺に訊くか?」

「ああ」

「俺はそんな時まだ尸魂界にも来てねえし、死神にもなってねえから当時からどうだったとかは何にも言えねえが、滅却師の虚を完全に消滅させる力が世界のバランスを崩すつてことで、仕方なく殲滅したつて習つたぜ?」

虚相手に、日向は丁寧に話した。その説明に、虚の口元は見る見るうちに歪んでいった。凄まじい歯ぎしりの音が、日向の耳に入ってくる。

「それが…………死神の総意か?」

「…………一概には言えないが、大半がそうだろうな」

「貴様もか?」

「…………正論って通すには、殺し過ぎだと思ってる」

「この偽善者がっ!!」

日向の言葉に、虚は叫んだ。息遣いは先程よりも荒くなり、叫んだ際に口から飛び散った血がすぐ目の前の草むらに落ちていった。

「死神の行った行為によって、どれほどの尊い命が犠牲になったと思っているのだ?!? まだ幼かった乳飲み子も貴様たちの殺戮によって死んだのだぞ?!? それを……滅却師たちが許せると思うか?!? 正しい行為だったと貴様たちは断言できるのか?!?」

「……出来ねえな」

「っ……………!!」

日向の肯定に、虚は口を噤んだ。

「お前の言い分は分かった。だからと言ってお前をここで斬らないわけにはいかねえ」

そう言つて日向は斬魄刀を握りなおす。

「虚から魂魄を護る……そして、虚の犯した罪を斬魄刀で洗い流すのが死神の仕事だ」

「……………」

そんな日向の言葉に、虚は黙り込む。そんな虚に、日向は違和感を感じた。そう思った瞬間に、虚は右手から何かを日向に投げつけた。

「銀鞭 下りて五手石床に墮つ——『五架縛』!!」

「っ?!?縛道の三十九・『円閘扇』!!」

虚の投げた何かから広がった帯に、日向は円状の盾を目の前に繰り出し防ぐ。

「くっ……………拘束の術か?!?」

「ふんっ……………これでも喰らえ! 『光 雨』!!」

動きを制限された日向に、虚は再び弓矢を形成し無数の矢を放つ。

「させるか!!破道の六十三・『雷吼炮』!!」

振る掛かる無数の矢に対して、日向は雷の砲弾を手の平から放ち吹き飛ばす。日向の放った砲弾は、爆発を起こし周囲に煙を巻き上げる。

「……………逃げられたか」

煙が晴れる頃に辺りを見回し、霊圧を探っても先ほどの虚の気配は

すでに感じれなくなっていた。

「…………ちつ…………」

複雑な心境の日向のした舌打ちは、無音になった空間に響いた。

「はあ…………はあ…………」

虚は、傷ついた身体を引きずりながら砂漠を歩いていった。いくら傷が塞がれていようと、減った体力までは回復出来ないのだ。

そんな虚に呼応するように、半分砕かれていた仮面もボロボロと剥がれはじめた。そして白かった身体にも罅が入っていき、人間と同じ肌色が露わになっていく。

ほとんど人間のそれとなった身体は、丸みを帯びた女性の体であった。

「死神…………!!」

露わになった顔からは、憤怒の表情が垣間見えた。虚の特徴である穴は、へそを中心に空いていた。逆に、虚の時にあつた翼と輪はなくなっていた。

「おいおいおい……………何でこんなところに女が居るんだあ?」

そんな彼女の前に、一体の大^{メノスケランデ}虚が現れた。珍しい物を見るように彼女に身体を嘗めるように見る。最^{ギリアン}下級大虚と思われる大虚は、小さな彼女を見下ろす。

「『目そうだな……………でも、小さいから腹の足しにならねえな。俺が喰う代わりに、お前にこれを喰らわせてやるよ!』」

そう言つて大虚は、彼女に向かい虚閃を放つた。

「……………邪魔だ!!」

しかしそれを彼女は片手で受け止める。そして大虚の虚閃が放ち終わると同時に、彼女は受け止めていた手から虚閃を放つ。それらは大虚が反応するよりも早く、大虚の頭部を消し去った。頭部を失った大虚は、その巨体を砂漠の上に任せるように倒れていった。

「……………覚えていろ、死神!!」

そうやって彼女は、白い髪の死神に復讐を誓うのであった。

方針

獲物の味を確かめるように
君に舌を這わせる

「この度は、十番隊隊長就任につきお祝いを申し上げに参りました
……………という訳だ」

「なんだ、その祝う気ゼロの口調は？……………まあ、ありがとよ」

十番隊の隊首室で、たったまま日向は冬獅郎に祝いの言葉を言った。前十番隊隊長の志波一心が行方知らずになりすでに十年。冬獅郎は着々と修練に励んでいた卍解をとうとう習得し、それによって十番隊隊長に推薦され、特に何の問題もなく就任したのである。副隊長は乱菊のままで、以前冬獅郎の席次であった三席にはまつ梨が就任しており、十番隊には一先ずの安泰がもたらされた。最年少での就任ということ、当初はあちこちで噂になっていたが日向が祝いに行く機会を見計らっている内に、すでに昔の話題という雰囲気になってしまっていた。

冬獅郎は、特訓に付き合ってもらった日向に礼を述べながら、ある質問をした。

「……………何で推薦受けなかったんだ？アンタの方が、俺より死神としての任期も実力もあった筈だぜ？」

冬獅郎は知っていた。日向がこの十年の間に、何回か十番隊隊長への推薦をあらゆる隊長から受けていたことを。事の発端は、アルトウロとの決戦で日向の卍解を目撃した京楽と浮竹の誘いであった。さらに副隊長の海燕の推薦があったり、話を聞いた卯ノ花や市丸ギン、藍染惣右介などの推薦もあったりしながらもそのすべてを跳ね除けた。どの推薦も、『自分はずっと十三番隊に居るつもりです』という固い意志を見せ、丁寧に断っていたが海燕だけは『お前も卍解出来るだ

ろうが!!』という感じの喧嘩になりかけていた。

自分よりも多くの隊長の推薦がありながらも、その全てを跳ね除けた真意が気になっていた。

「ガラじゃねえからな。それに、俺が隊長になるとするなら十三番隊だけだぜ?」

「……………らしいな……………」

二カツと笑いながら言う日向に対し、冬獅郎も目を瞑って笑う。日向がなぜそこまで十三番隊に拘るのかは冬獅郎には分からない。だが、何か譲れないものがあるのだろうかということは理解した。

「ほら、甘納豆だ。好きなんだろ?」

そう言って日向は甘納豆の入った袋を冬獅郎に投げる。受け取つてすぐに見てみると、瀟靈廷でも有名な菓子屋の高い物であった。しかし冬獅郎は一つ疑問に思った。

「……………何で俺が甘納豆好きって知ってたんだ?」

冬獅郎にとって先輩であるこの死神に、自分の好物を言ったことは一度もない。特訓の付き合いなどで一緒に居る時間は結構長いものの、お互いプライベートにはあまり関与していなかったのである。

「雛森が、『シロちゃん、甘納豆好きなの!!』って言ってたからよ」

「……………雛森……………」

冬獅郎はそう呟きながら、五番隊の現在五席である自分の幼馴染の顔を思い浮かべる。そう言えばこの人物はアイツと同期だ。それならばアイツが自分のことを話していてもおかしくはないし、その気になれば好物など訊くのは容易いことだろう、と。

「まあ隊長の仕事頑張れよ、シロちゃん」

「アンタはそれで呼ぶな!!」

からかい気味に言葉を発する日向に、冬獅郎は青筋を立てながら怒鳴る。冬獅郎が隊長になっても、おそらくこの関係は変わらないであろうという雰囲気があるそこには流れていた。

「あらあゝ?!日向、来てたの?!も——、一言くらい言ってから来てよ——!」

「乱菊さん。奢りませんよ?」

扉から現れた乱菊はハイテンションで日向に迫るが、頭の中を見透かされたように発せられた言葉に、ギクツと体が揺れる。万年金欠の乱菊は、特に買う物もなく貯金している日向と共に酒を飲みに行つて奢ってもらおうと画策していたが、ガツカリしたように肩を落とす結果となった。

「ええ——?!ちよつとくらいいいじゃなく〜いい!!?」

「ここ数か月で乱菊さんの酒代に五万くらい費やしてるんですけど、今すぐ返してくれるならいいですよ?」

「うっ……………!隊長!!ちよつと外に……………」

「待て!松本オ————!!!」

日向に借金の事を追及され乱菊は再び部屋を出ていく。日向の場合、檜佐木や射場と違ってちゃんと記録して借金であるという旨を伝えて貸しているため、乱菊はそこを追及されると弱いのである。ピューつと逃げていく乱菊を、冬獅郎は怒鳴つて止めようとするがその甲斐なく乱菊は消えて行つてしまった。

「……………日番谷隊長。お茶です……………」

「……………頼りになるのはお前だけだ、宮能。今度、松本の給料減らしてお前の給料に入れとく」

冬獅郎の目の前に、まつ梨は静かにお茶の入った湯呑を置いた。それを啜りながら、冬獅郎はまつ梨の給料を上げる旨を伝える。普通、副隊長の方が三席のまつ梨よりも給料が多いのは当たり前だが、仕事をほったらかして遊びに行く乱菊に対して、冬獅郎は乱菊の分も仕事を頑張るまつ梨に、定期的に乱菊の給料から差し引いてまつ梨の給料に足しているのである。それが乱菊の金欠をさらに加速させ、負の循環になっていると気づくのはもう少し後であった。

「おう、まつ梨!」

「ひゅ、日向!調子どう?!」

日向に声を掛けられると、まつ梨は途端に顔を紅潮させながら挙動不審になる。

「ああ、まあまあだな。まつ梨はどうなんだ?」

「え、えくと……………うん!順調順調!!」

「そうか、なら良かった」

会話が一区切りすると同時に、まつ梨は奥の部屋の方にサササツと逃げていく。

「……………俺、嫌われてんのか?」

「……………逆だろうが……………」

「ん?」

「……………もういいよ」

鈍感な先輩に、冬獅郎は深いため息を吐く。しかしその意味すらも日向は分からなかった。

「お、十三番隊の天宮城クンやないか」

「あ、市丸隊長……………どうなされたんですか?」

十三番隊舎で、日向は普段見ない珍客と対面した。三番隊隊長・市丸ギン。常に薄ら笑いを浮かべ、その糸目から『キツネ』とも呼ばれていると日向は聞いたことがあった。飄々として掴みどころがない性格で、一部の隊士からの評判はあまり良くない。

その右手には、何やら風呂敷のような物が握られていた。布の形から、何やら箱のような物が入っていることは分かる。

「いやあ、うちの隊で干し柿作うとるの知ってる?それやけど、今年は柿の数多くて隊士に配っても余ってもうて……………。それで、せっかくやから浮竹隊長にでもと思うて」

「ああ……………それなら、俺が浮竹隊長にお渡ししておきましょうか?」

「あく、それは助かるわあ。あんまりこつち来いへんから迷いそうやったんやわく。そんなら、これ頼むなあ?」

そう言っつて市丸は、申し訳なさそうな顔をしながら風呂敷を日向に渡す。手渡ししてから、市丸は日向の顔をじつと見つめ口角をいつもより吊り上げた。

「聞いとるよ、キミの活躍。今後が楽しみやわあ。早いうちにウチの隊に引き抜きでもしとけばよかったわあ」

「はははっ……………。でも、入隊の時以外は『もうこの隊で行く!』って

決めてたので受けなかったと思いますよ?」

「それは残念やわあ〜」

別にそのような様子は見受けられないが、市丸は口ではそう言った。そして急に沈黙する。

「……………キミ、藍染隊長のことどう思うてるの?」

急な質問に、日向は傍から見れば不思議そうな顔をする。しかしその思考の内では、警戒心をむき出しにしながら、返す言葉を選んでいった。

「直接はあまりお会いしません、優しい隊長だと思っっていますよ?」
「フツツ……………それにしたら、随分藍染隊長の事目の仇にしたりやないかあ」

「そうですか?あまり会わないし、気にしたことないですね……………」

「ははっ!それもそうやな。ならボクの勘違いやわ」

市丸の質問を、何気ない言葉で日向は返答する。それに市丸は表情をあまり変えないまま笑う。そして市丸は去って行こうと日向に背を向ける。

「ああ、そうやわ」

去って行く途中で、市丸はあることを思い出したかのように立ち止まる。

「斬魄刀とは仲良くしとき。ほな、さいなら」

「……………言われなくても」

市丸の意味深な言葉に、日向は誰にも聞こえないように呟いた。

『……………最近、ずっと来ているじゃないか』

「ああ……………もつと使いこなせるようにならねえと……………」

日向は、刃禪を組んでいた。そして精神世界で、『虚哭隸王』と会話していた。白皇と虚帝の時はそれぞれ別の斬魄刀として独立していたが、卍解を習得した後からは一つに戻った状態で対話することが出来るようになっていたのである。その本体は女性。両目は白と黒が

反転している。そして髪や肌、着ているロングコートまで全て真っ白というものである。腰の部分には、真っ黒な鎖がベルトのように巻かれていて、その途中に刀——『陽天之劍』が『因果之鞘』に納められて携えられていた。

『ふっ………三席ともなると、現場での任務が増え虚を倒す機会が多くなり、こうやって一度整理しなければならぬのは私も承知している』

見た目は具象化した『陽天之劍』で、性格は『虚帝』のようである。日向の斬魄刀は、他人の物に比べると、かなり複雑なものとなっている。『白皇』の完全開放状態が『陽天之劍』。『虚帝』の力を全て圧縮して形成した物が『因果之鞘』である。簡単に言ってしまうと、それぞれが日向の卍解に匹敵するものであり、それらが組み合わさったものが『虚哭隸王』なのである。そして、日向の斬魄刀の力——『靈子の隸属』で手に入れる虚の力は、任務で虚を討ちとるたびに斬魄刀に蓄積されていく。しかしそれらの能力は、発揮する前に討ち取るのがほとんどであるため、こうして一度精神世界でどういった物か確認するのが日課となり、さらにそれを錬成していくのが日々の特訓になっている。

日向の始解と卍解の違い。それは、隸属の力の違いであり、卍解をすればその力は絶対的なものに変貌し、日向は自分に蓄積した虚の力を全て発揮できるようになる。さらにそこから、虚の力を組み合わせることが可能になる。始解だと一つずつしか使えなかった能力が、卍解だと様々な能力を組み合わせ、戦闘に有利な能力に錬成することも可能になるのだ。ただし、とっさでは中々組み合わせることも難しいため、こういった整理をしながら錬成をするのである。

「最近の奴で、目立つ奴あったか？」

『あの程度の虚では、期待できるのも少なからう。だが、お前が使えば有益になるのも多い。例えば、以前倒した虚の小虚を出す能力なんかは面白いだろう』

小虚とは、虚が生み出す分泌物のような物体である。しかしそれぞれが動き、主に従うため相手にすると厄介な能力であり、小虚の力は

分泌する虚によって千差万別と言えよう。

『ほれ、どうだ？』

そう言つて虚哭隸王は手の平から、髑髏を被り、そして白い着物を着る小人のような物体を産み出した。

「……………なんか嫌だな……………」

『そうか。なら、放出した霊圧が炎になるのはどうだ？』

次に、虚哭隸王は霊圧を発し始め、それらが発火し炎の衣を着るという猛々しい光景が前に広がる。

「あ……………流刃若火みたいで強そうだけど、発する霊圧が炎になるってところで、扱うのに少し時間が掛かりそうだな」

『なら、最近の中でもとっておきのを見せてやろう』

そう言つてから、虚哭隸王は人差し指を地面に向け、しばらくしてから人差し指から垂れ下がる何かを掴んだ。

『霊子で作った糸だ。『イロ霊糸』と言つたところか。強度は鋼鉄並み。用途は色々あるだろう』

「四番隊が欲しそうな能力だな、それ」

すると虚哭隸王は、指を日向に向ける。それと同時に日向は首を横に倒す。そして経つた今自分の横を通つて行つた霊糸を掴んだ。

「攻撃にも使えるつてところか」

『罨でもいい。これは中々便利だろう。どうだ、この際回道とやらを極めればいいだろう。戦闘中に敵に回復されるというのは、お前も中々嫌な敵だと思うだろう』

この案には日向は頷く。確かに、虚の超速再生は厄介な能力ではあるが、もしそれと同等の速さで回復できる手段があったとしたら、自分のためにも仲間のためにもなるだろう。さらに、先程の霊糸を組み合わせれば、現場での早急な傷の縫合なども可能になるだろう。

「そうだな……………なら、今度四番隊に行つて回道を本格的に教えてもらうかあ……………」

『ふ……………なら、それ用の能力を持った虚に出会えるといいな』

「……………不謹慎じゃねえか？」

『何を言っている。私たちが手に入れるのはあくまで、『虚としての

力』だ。魂魄までも吸収するわけでもあるまい。虚の力を無駄にせず
に、虚の罪は浄化し尸魂界に魂魄を送る……………お前はまさしく死神
の鑑と言えようぞ』

「若干違う気もするけどな……………」

虚哭隸王の言葉に、日向は苦笑いをする。

「だけど、藍染隊長たちの野望を阻止するなら、これ以上適役な力は
ねえな」

日向の最終的な目的は、藍染を倒し、その野望を阻止すること。そ
の上で日向の斬魄刀は、切り札とも言える斬魄刀なのである。

倒した虚の分だけ強くなる斬魄刀。

言い換えれば、絶えず進化する斬魄刀。

これ以上、相手にとつて嫌な能力はないだろう。新たに作った技と
いうわけでもなく、単純な能力の成長でもなく、常に新しいものを取
り入れる斬魄刀。卍解さえすれば、その戦略は大樹に生い茂る枝のよ
うに多くなる。そして戦略の多さは、相手が対策しにくいという利点
を生むことになる。

「お前の言い方なら、どうせだったら藍染隊長の斬魄刀用の力が欲し
いぜ……………」

『完全催眠か……………あれは厄介だな……………』

藍染の斬魄刀の能力。それは、発動の瞬間を目にした者の五感や霊
圧知覚の完全催眠。

もしやすると、すでに自分もその催眠にかかっているのではないか
とも日向は考える。

『一つだけはあるがな……………』

「ああ……………でも、リスクが高い」

それを封じる手立ては一つだけある。しかし、それは日向にとつて
かなりリスクを含むものとなっているため、あまり使いたくないと日
向は考えている。

『まあ、今後次第だろう』

「そうだなあ……………。ま、とりあえず今は回道を教えてもらおうか
……………」

『そうか』

虚哭隸王がそう言った後、日向は目を覚ます。そして、回道に精通する人物を頭に思い浮かべる。

「……………やっぱり、都姉さんかなあ……………」

現在、四番隊で日向の近い人物と言えば、上司の海燕の妻の都を思い浮かべる。数年前から、霊圧も回復し始め回道で怪我人を治療できるところになったとは、海燕より聞いていた。

「よし……………今度、訊きに行くか……………」

そう言いながら、日向は都への土産を考えながら楽しみにするのであった。

取得と喪失

貴女が覚えてなくても

僕たちは覚えている

あの温かい手の平を

「回道を教えて欲しい？」

突然、羊羹が入っている箱と共に四番隊舎まで現れた日向は、『回道』を教えて欲しいと都に言った。

「日向君、どうして？」

「いや〜……現場で軽く治療出来るようになったらいいなあ……つて」

そう言いながら顎をポリポリと掻く日向に、都は優しい笑みを見せる。真意までは分からないが、きっと誰かのためになろうとして教わりたいのであると直感したからだ。

回道は、霊術院でも多少習うがそれはあくまで基礎の範囲。大怪我ともなると、やはり専門である四番隊の力でなければ治すことは難しい。

「ええ、分かったわ。じゃあ、明日もう一度四番隊舎に来て」

「ああ、分かった。ごめんな、都姉さん。仕事中時間取らせちゃって」

「いいのよ。休憩時間見計らって来てくれたんでしょ？それに羊羹まで持ってきて……こちらこそありがとうね」

「うん。じゃ、身体気を付けて……また明日来る！」

「ええ、また明日……」

そう言っただけは、去って行く日向の背中を見つめていた。初めて見たときは自分よりも小さな背中だったのに、今はもう自分よりも一回り大きくなっているという事実には、都は胸の辺りがジーンとするのを感じていた。

「立派になっちゃって……………」

今は、元々自分が座っていた席次に就き、他隊に轟くほどの活躍をしている日向に都は感銘を受けていた。しかしそれ以外に、他隊からの副隊長の推薦や、隊長への推薦を断っているという事実を、都はその原因が自分のしてしまったことで何か責任感を感じて断っているのではないかも考えていた。十三番隊の三席は、都が隊の皆に頼んで日向のために空けていた席次。それを知っている日向は、そういった事実から三席に固執しているのではないか。あくまでこれは妄想であるが、本当にそうであったということを思うと、都は何とも言えない罪悪感に襲われる。そして、再びこう思うのである。

あの子の力になってあげよう、と。

「ほら、姉さん！日向君に教えてあげなよ！」

「う……………は、はい！頑張ります！」

「……………すいません。虎徹副隊長」

現在、四番隊の訓練場には日向、都、そして何故か虎徹清音とその姉の勇音が居た。この場を選んだのは、四番隊が救護・補給専門であるため訓練場で特訓している者がほとんどいないので、もし何かあっても四番隊舎にいる病人などに被害が及ばないという配慮からである。そして何故、虎徹姉妹がいるのかと言うと――。

「よかったね姉さん！これで、日向君にお礼できるよ！」

「そ、そうだけど……………こういう感じでお礼するとは思ってなかったから……………」

都が直々に勇音に頼み込んで、日向に回道を教えることになったのである。勇音は以前から、瀨靈廷を助けた日向に何かしらの形で礼をしたいと呟いていたので、それを都はこういった形で礼をしてみればどうかと誘ったのである。そして清音が居るのはノリである。

「日向君は鬼道得意だから、きつとすぐ上達するわよ」

「そうかなあ……………」

本人は知ってはいないが、日向の同期が鬼道の達人は誰かと訊かれたら、その大半が日向か雛森の名前を上げると言う。回道も鬼道の一種なので、達人と言える技量を持った人物が習えば、普通の者よりは出来るようになるだろうというのが都の見解である。

「よし………じゃあお願いします！虎徹副隊長!!」

「は、はい!!じゃあ、まずこの教本に書いてある基礎の部分から………」

そう言つて勇音は、日向に回道に関しての書物を日向に手渡し説明をし始める。その光景を、都と清音は笑みを浮かべながら眺めていた。

そんな日々を過ごしながら、日向は休日には志波邸に帰ってきている。そして毎回志波邸の皆から歓迎を受けている。

日向と同じように岩鷲も背丈が高くなり、体つきに関しては日向よりもしっかりしている。しかしだからといって日向に勝てるわけでもなく、試しに相撲を試してみれば一瞬で吹き飛ばされていた。

焰と雫も大きくなり、雫に関しては日向と同じくらいの背丈になっている。今は、流魂街で病氣の人を救うために医術を学んでいる。そんな夢を応援するために、日向も医術の本を買ったり、薬草に関しての本や瀰霊廷で売っている薬を買ってきたりしている。

焰は、大きくなったもののまだまだ身長は小さいが、体つきはしっかりと女性らしい丸みを帯びたものになっており、着ている着物も中々見栄えがいい物になっている。そんな焰は最近、岩鷲に感化され猪に跨りあちこちを爆走している。岩鷲の子分からは『姉御』と呼ばれ、流魂街でも別の意味で有名になっている。しかし性格は昔から変わらない天真爛漫なものであるため、どちらかというと流魂街の皆からは慕われている。

「きゃ〜！猪丸！今日も毛並が絶好調だね!!」

「ぶるるる!!」

「でけえ……………」

ちなみに焔が跨る猪丸の大きさは、軽く人一人を超すほどである。そんな猪を懐柔させる妹を、日向は若干恐ろしく感じる。毎日の散歩という名目の爆走が終わると、猪丸は森に帰っていく。そして次の日にはまた志波邸の目の前にいるのだ。ちなみに、爆走する際に焔は、恋次が着けてそうなゴーグルを目に付けている。これも日向が買ってきたお土産だが、本来岩鷲に持ってきたのだが、どうしても欲しいと駄々をこねられて渡したのだと言う。つまり、なんやかんやで岩鷲と焔は気が合っている。

そんな感じの二人だが、護身用にと鬼道は空鶴から学んでいるらしい。そして近隣の住民からは、『何かしら困ったら、あの姉弟に助けを求めると良い』とまで言われている。兄として、少し複雑な心情の日向ではある。活躍するのはいいが、怪我はしてほしくないからである。

そんなことを思いつつ、日向は焔の頭を撫でる。すると焔は嬉しそうにはにかむ。

「じゃあね、猪丸!」

「ぶるるる!!」

「よし……………家に入るか」

「うん!」

そうやって焔は日向の腕に組みつく。兄離れ出来ていないと言うよりは、日向にだけスキンシップが激しい。海燕や岩鷲に対してはここまでではないが、日向にだけやけに肌を合わせようとする。それに日向は、気恥ずかしいモノを感じている。兄として妹が仲良くしてくれることに喜ぶべきか、そろそろ兄離れをして自立してほしいと考えるべきか、こういつた部分でも日向は複雑な心情を抱くのであった。

(ま、いいか……………)

しかし日向も、妹には甘かった。

『ルキア——』

『——し——?』

「う……わあああああ?!」

そう大声を上げながら、ルキアは布団から身体を起こした。周りを見渡すと、目を大きく開いている侍女のちよが居た。

「ル……ルキア様、大丈夫ですか? 大分うなされていらっしやった様ですが……?」

そう言われて、ルキアは背中が湿っていることを感じた。悪夢のよ
うなものを見て、汗を掻いていたんだろうと予想する。

そして外を眺めると、すでに朝日が昇っているのを確認した。

「す、すまない……。すぐに着替える……」

「ご気分はよろしいのでしょうか? 悪いのであつたら、お薬をご用意
しますが……」

「いや、大丈夫だ。心配をかけてすまない……」

「いえー私は朽木家の使用人ですから、この程度は当たり前です!」

そう言つて、ペアつと顔を明るくするちよに、ルキアも顔を綻ばせる。ちよは、古株が多い朽木家の使用人の中で最も若い。それは、歳が近い方がルキアが気兼ねなく接することができるだろうという白哉の考えであると、ちよがルキアに言っていた。

そしてルキアは、着替えるために立ち上がる。

(……あの夢は一体何なのだ?)

ここ最近見る夢。顔も分からない誰かが、必死に自分の名前を叫ぶという夢。名前を呼ばれることは別に怖いことではない。しかし、名前を呼ぶ者達がだんだんルキアから離れていき、やがて黒い渦のようなものに飲み込まれていくのである。その瞬間になる度に、ルキアは恐怖に襲われるのである。まるで、何か大切なものを失くすような、そんな感覚に。

そんなことを考えながら、ルキアはせつせと着替え、食事を済ませ、
そしていつものように十三番隊舎に行く。

「おう、ルキア。おはよう!」

「日向か、おはよう!」

そして日向に会った途端に、その恐怖がスツと消えていくのである。親友に会ったからではない。まるで、足りなかった何かが元に戻るように。

「……………どうした？俺の顔に何かついてるか？」

「え？い、いや……………」

考えている内に、ルキアはじつと日向の顔を見つめてしまったようである。そして、顔を背けながら日向の太ももを見る。

あの雨の日、ルキアを傷つけないために日向が自傷した部位を。もう傷跡はないだろうが、ふとした瞬間にルキアも太ももに幻痛を感じるようになった。そして、無力な自分を恨むようになった。

雨は、ルキアのトラウマだ。

ルキアの大切な人達が傷ついたのも、雨の日。

瀨靈廷で破面が多くの死神を殺し回ったのも、雨の日。

後者は、海燕の卍解による天相従臨によるものだがルキアは知らない。だが、どちらもルキアにとっては自分の無力を痛感させる出来事である。いくら自分が、他の虚を倒し戦果を挙げたとして、破面がルキアの前に現れていたのなら、自分は何も出来ずに殺されていた自信があった。そして、無力と思う度に胸が締め付けられるような気分になる。

「よし、今日もお勤め頑張るぞルキア〜！」

「う、うむ！では、また後でな！」

しかし日向の声で我に返り、それぞれの執務室へと歩を進めていく。

自己嫌悪に陥ってはいけないとルキアも感じている。だからこそ、ルキアはこれらを自分への戒めと捉えている。

皆と肩を並べられるようになったなら、これも解かれる。

そう信じながら。

「……………ふう……………」

彼女は砂漠を歩いてきた。その恰好は、へそが出るほど短い黒い布切れのようなフード付きポンチョを羽織り、腰にも同じような黒い布きれを、何とか女性として大事な部分を隠すように巻いているという何とも特徴的な格好であった。右目は、長く伸びている金髪をアシメのようにして隠し、隠れていない方からは大きな瞳が覗いていた。その、訊けば大多数の者が美女と呼ぶであろう女性は、他の人間と決定的な違いがあった。

へそのある部分に、ぽつかりと穴が空いているのである。

そう、彼女は虚なのである。

しかしその姿は、他の虚と違い完璧な人型と言えるものであった。いや、穴さえ隠してしまえば人として十分生きていけるほどであった。

そんな華奢な彼女を襲おうとする虚は居なかった。それは、彼女が強いからである。自分よりも一回りも二回りも小さい彼女に、他の虚は為す術もなく殺されるほど、実力に差があるのである。

だから虚は、彼女に近寄らない。そして彼女も、襲われないので殺さない。

「何もないな……………」

彼女は髪を掻き上げながら誰にいう訳でもなく呟いた。

「んっ」

彼女はとある場所に目を向けた。そこには黒い空間のような物がぽつかりと虚空に浮いていた。

ガルガンダ
「黒腔か……………行ってみるか」

そう呟くと、彼女はスウーッと宙を滑るように移動する。そして黒腔の中も同じように滑りながら移動していく。

移動するとすぐに出口のような場所に辿り着いた。

「……………現世か」

そこに広がっていたのは現世の街並み。

「……………この感じ……………滅却師か？」

彼女は、ある霊圧を感じた。それは自分と限りなく近く、そして限りなく遠い霊圧。虚の自分とは限りなく遠いが、根源は非常に似通っ

ている霊圧。

しかしその霊圧はどんどん小さくなっていく。

それを察知した彼女は、すぐにその霊圧がある方に向かった。

(筋違いだとは分かっているが……………)

虚である自分が、虚を殺すための滅却師を助けようなど、彼女にも筋違いだと分かっていたが、元々滅却師であった彼女にとってそれは見捨てられないものであった。

(……………何故助けようと思った?)

彼女は、あることを疑問に思った。何故霊圧が下がっているのか。そして、何故それが今向かっている場所に居るであろう滅却師の死に繋がるのか。彼女は言いようもない違和感を覚えた。

(とりあえず、見るだけ見るか)

一先ず、彼女は現場に向かう事にした。

邂逅

放つは心
残るも心

「一護！駄目エ!!」

ある女性は、河原に向かって走って行った息子に手を伸ばす。その息子には、今まさに命を刈り取るうとする爪が迫っていた。

女性は、息子を庇うように覆いかぶさろうとする。

「あつ……………!!」

覆いかぶさった瞬間、女性の背中から鮮血が奔る。その直後に女性の視界は暗転する。

(一護……………!)

「ひひひひっ！旨そうな女じゃー!」

そんな女性の耳に、ある声が聞こえてくる。しかし女性は背中の中の激痛で立ち上がることも出来ない。

「さあ……………儂の腹に入ってもらおうか……………」

何か触手のようなものが女性の首に巻きつき、その華奢な体を持ち上げる。女性の胸からは、鎖のようなものがぶら下がっていた。

「ひーひっひっひっひっひー!」

女性を喰らおうとする者——グランドフィッシャーは、大きく口を開ける。

(遊子……………夏梨……………あなた……………一護……………ごめんなさい)

「ヒツヒツヒ……………ぐ、ぎゃあああ?!!」

突然グランドフィッシャーは苦しみだし、それと同時に女性の体は河原に敷き詰められている石に落ちていった。

「だ……………誰じゃ?!儂を攻撃した輩は?!」

グランドフィッシャーは、たった今何かによって傷を負った部分を

再生しながら辺りを見渡す。

すると、土手の上に町の風景に似合わない服装をした女性が立っているのが見えた。

「私だけど」

「き……………貴様あああ!!!」

叫ぶグランドフィツシャーの仮面の端を、一本の矢が通り過ぎる。その一瞬の出来事にグランドフィツシャーは絶句する。

「ちっ……………!!」

不利を察したグランドフィツシャーは、すぐさまその場から逃げる。それを、彼女は黙って見ていた。

そして彼女は、倒れている女性に近寄る。

「あ……………貴方は？」

「……………虚だ」

抱き上げられた女性は、彼女の言葉に驚愕したような表情を浮かべる。そして数秒後に、その血が流れる口の両端を吊り上げた。

「……………不思議なこともあるのね。昔は死神に助けられて、今度は虚に助けられるなんて」

そんなことを話す女性を、彼女は無表情で見つめる。

「でもあなたはどうするの？さっきの虚みたいに私を食べる？」

そう言う女性はどこか諦めのような表情を浮かべていた。

「私は虚が嫌いだ。そして、それよりも死神が嫌いだ。私は嫌いな物と一緒になりたくはない。だからお前を食べようとはしない」

その言葉に、女性は目を細める。先ほどから降っていた雨は、彼女達を濡らしていく。

「不思議な人……………でも、嫌いじゃないわ」

そう言う女性の体温はどんどん下がっていく。それを抱き上げる彼女は実感していた。

(これが『死』なのか)

自分も、今までに何人も虚を殺し、死神も殺してきた。だがこのように間近で他人の死を実感するような状況に出会ったことはなかった。

肉体から離れ、因果の鎖も千切れている女性はまだ肉体には戻れない。それは肉体の死を意味する。そして肉体に負った傷は魂魄にも影響が出てくる。それが、今現在この魂魄を死に至らしめる要因となっている。

「貴方に言いたいことがあるの……………」

「何？」

「死神を……………嫌いにならないで」

女性の言葉に、抱き上げる彼女の眉間に皺が寄る。それが、彼女の死神に対する感情を如実に表しているということは言うまでもないだろう。

「私も……………最初は死神は怖い人ばかりだと思ってた。でも実際はそうじゃなかったの。優しく……………温かく……………」

女性の声はどんどん小さくなっていく。それと同時に女性の体は霊子に分解されていく。

「貴方も……………きつとわかり合えるから……………」

そう言うと同時に、女性の体は消え去って行った。

「……………奴らと何を分かり合えと……………!!」

虚であり滅却師である彼女。そしてそのどちらにも敵対する死神。分かり合えるはずなどない。その思いが彼女の心を埋め尽くしていた。

そして彼女は。もはや抜け殻となった女性の遺体に近寄る。そして、遺体の下にいる人間に目を向ける。

オレンジ色の髪の毛の子。何かの衝撃で気を失ったのか、うんともすんとも言わずに静かにその場で息をしている。この男の子も気が付いたら、亡骸になっている母親を目の当たりにするのだろうか。そう考えると、彼女は同情を禁じ得ない。

そして彼女は、倒れる男の子の頬をそつと撫でる。

「可哀相……………」

そう言うって彼女は立ち上がる。そして今度は腕を前に突出し、現世に来たときと同じ空間を作り出す。そしてその中に入っていく。

「さようなら。恨むなら、虚でも恨んでね」

去り際に、男の子に向かい呟いた。

彼女は歩く。何も無い砂漠を。

永遠の夜が、白い砂を覆うこの世界を。何年も何年も。

「やあ」

彼女に話しかけてきたのは、メガネをかける男性。その身に纏うのは黒衣着物。そしてその上には白い羽織も羽織っている。それだけで彼女の表情は曇った。

「……………何故死神がここに居る?」

「是非、君に私達の仲間になって欲しくてね」

すると、彼女はすぐさま左手に弓を作り出し、一瞬にして数本の神聖滅矢を死神に放った。

当たる。彼女はそう確信した。

「私達は、来るべき死神との戦いに向けて、君のような強い人材を求めているんだよ」

「っ……………?!」

いつの間にか死神が彼女の背後に立っていたことに対し、彼女は驚きを隠せない。そしてすぐさま飛廉脚で死神から離れようとする。

「君は死神を憎んでいるようだから、悪い話ではないと思うよ?」

「誰が……………!」

そう呟いて、彼女は男に虚閃を放つ。

白い砂が巻き起こる。

赤と黒の混じった爆炎が立つ。

「君には、ただの虚を超えた新しい力を与えることを約束しよう」

「っ……………!!」

いつの間にか、腕を掴まれていた。

彼女の頬には、いくつもの汗の筋が出来ている。それは虚閃を避けられたことへの焦りではない。この死神から発せられる、自分とは比べ物鳴らない程の霊圧に圧倒され、本能的に恐怖した。

「そうすれば、君はあの白い髪の死神にも勝てるはずさ」

死神の言葉に、彼女はハツとする。何故この死神が知っているのかという疑問ではなく、本当に出来るのかという期待が、彼女の胸の中に生まれ始めた。

自分の仮面を斬りおとした憎い死神。

「……………だが、ただで仲間になるはずもないだろう!!!」

そう言っただけで彼女は、死神に無数の光の矢を放つ。

それを、死神は落ち着いた表情で眺める。

「縛道の八十一・『断空』」

突如として死神の前に現れた壁に、無数の矢は阻まれる。

そのことに一瞬驚愕した彼女ではあるが、すぐさま次の行動へと移る。

「はああああ!!」

飛廉脚で死神の背後を取り、手刀の形をとった手に『魂を斬り裂く者』を発生させ、首を刈り取ろうと振りかざす。

「縛道の六十一・『六杖光牢』」

「なっ…………?!」

しかし、死神の唱えた術により、彼女は空中で六つの光の帯に動きを止められて、砂の上に落ちる。

「これでどうかな?」

死神は殊勝そうな顔で、彼女を見下ろす。

死神の顔はこう言っている。

——君は私に勝てない。

「ふぎ……………けるなあああああ!!!」

そう叫んで、彼女は奥の手を出す。

「……………ほお」

その光景に、死神も興味深そうに彼女の変貌を見届ける。
煙が晴れる。

そこに立っていたのは、彼女の姿。

先程と違うのは、背中に光の翼が生え、頭上には光の輪が浮かんでいる。両翼には、血管のように、鮮やかな赤が奔っている。

「――『滅却師完聖体』」
クインシー・フォルシュテンドレイツェ

切り札。

「成程。興味深いね。半破面でありながら、既に別の手段で上位の力を得ることが出来るとは」

「ほげげ」

飛廉脚で、死神に接近する。その際に、両手には『魂を斬り裂く者』を纏わせる。

死神は、それらの連撃をいとも容易く躲していく。

しかしこれらは彼女の予測の範囲であった。先ほどの所作を見れば、この程度の攻撃は避けられて当たり前。そう考えていたのであった。

そこで彼女はすぐさま、武器を刃から弓矢に替える。先ほど形成した時よりも、幾分か巨大な弓である。

死神は、その分威力は上がっているモノだと予測し、そして微笑する。

刹那、矢は放たれた。矢の一本一本に赤い筋が刻み込まれている。死神は、それらも瞬歩で最小限の動作で回避していく。

しかし、先程と違うことがあった。矢は、砂地に着弾すると同時に、その場で爆発した。少し驚きながらも、凄まじい速度の瞬歩で、今度は死神が彼女の背後を取る。

そして、ずつと納めていた斬魄刀を抜き、居合で彼女を斬り裂こうとする。狙いは、彼女の背中。勢い良く、刃は彼女の背中を捉える。

「……………何？」

しかし、血は一滴も出なかった。それを死神は、一瞬彼女の背中に走った青い筋が原因だろうと考える。

――『ブルート・ヴェーネ静血装』』

成程、これは一度『黒崎真咲』も行っていたな。死神はそう考える。しかしその間にも、彼女は背後の死神の向かって『魂を斬り裂く者』で斬りかかる。それを、死神は難なく躲す。

そして、死神はもう一度攻勢に出る。

「破道の九十・『黒棺』」

突如、彼女を黒いモノが包み込む。余りの一瞬の出来事に、彼女は
何の抵抗もすることも出来ずに、黒い棺桶に包まれていく。

数刻。死神は事の顛末を見届けようとその場に立つ。

直後、黒い棺桶の中から、今までで一番巨大な神聖滅矢が死神を
狙って飛来してくる。それを死神は、斬魄刀の一振りで粉々にする。

「はあ…はあ…はあ…！」

死神から見て、正面に穴の開いた黒い棺桶の中から、金髪の女性が
身体から血を流しながら出てくる。

そして死神は、微笑む。

(防御性能は、彼に次いで秀でているか……)

死神は、長身眼帯の男を想像しながら、彼女が自分の鬼道を耐えた
ことに感心していた。そして、彼女のポテンシャルを想像し、再び行
動に出る。

「縛道の九十九・『禁』」

「なっ……ぐう?!」

死神が何かを唱えると同時に、彼女の身体をベルトが拘束し、さら
にそのベルトに鉾が突き刺さる。

「縛道の九十九第二番・『卍禁』」

死神の唇は止まらない。

——初曲『止繃』

彼女の身体を、巨大な布が巻きつく。

——式曲『百連門』

そして数十本の鉄串が、彼女の華奢な体に突き刺さる。刺さった部
位からは、いくらか流血が窺える。

——終曲『卍禁太封』

最後に彼女の身体に、卍の模様が刻まれた巨大な碑石が降りかか
る。そして、彼女に押し掛かると同時に、巻きついた布でまともに話
せなくなった口からくぐもった悲鳴が静かな砂漠に響く。

——このままではいけない。

死神はそう思い、数十秒してからそれらの術を解いた。すると、彼
女は押し固められていた四肢を砂漠に放り出し、今にも途切れそうな

呼吸を肩でする。先ほどの翼と輪はもう消えていた。

「さて……………どうするかな？これで、仲間になる気は出てきたかな？」

「はあ……………はあ……………死んでも……………断る……………！」

「……………成程」

すると、死神は指を鳴らす。そして死神の後ろに、骸骨を被ったよ
うな者が何名も駆けて来る。

「ルドボーン。濟まないが、多少手荒………でもいい。彼女をラスノーチエス虚夜宮に連れ
てきてくれ」

「御意」

すると、リーダーらしき骸骨を被った者が部下らしき者達に向かっ
て指示を出し、彼女の身体を持って、どこかに連れて行くこうとする。

「ああああ!!」

しかし、彼女も黙って連れて行かれるつもりもなく、両手に剣を発
生させて近付いた者を斬り裂いていく。

だが、数には敵わない。

数分もすると、彼女は死神との疲労のせいで動きが鈍くなり、骸骨
たちの接近を許す。そして、殴打や虚弾を数発浴びると静かになっ
た。

「さて……………帰ろうか、彼女の新しい家へと」

死神はそう呟き、砂漠を静かに歩いて行った。

異変

目に映る

世界は全て偽り

浮竹は、ある墓の前に立っていた。しかしその墓石には、誰の名前も刻み込まれてはいない。傍から見れば不思議と思われるが、百五十年以上ここに通い詰めている浮竹にとっては、特に不思議と思われる光景ではなかった。

「おやア？来てたのかい、浮竹」

「京楽か……………」

墓石の前に立ちつくす浮竹に話しかけてきたのは、花束を持つ京楽だった。そして京楽は浮竹の隣に立つと同時に、持っていた花を墓に添えた。

「時間が過ぎるっていうのは早いもんだねエ」

「……………ああ」

短いやり取りをした後、二人は墓石に向かって合掌する。

——この墓石の下には、誰も眠っていない。

——正確に言えば、埋めるモノが残っていなかった。

「……………そう言えば、まだあれ浮竹の所に飾ってあるんじゃないのかい？」

「……………ああ。ずっと、綺麗なままさ」

「やっぱり、話した方がいいんじゃないのかい？」

京楽の言葉に、浮竹は顔を俯かせる。

「……………話すには時間が経ち過ぎた。俺にとっても、日向にとってもな」
「だからといって先延ばしにし過ぎたら、それこそ間に合わなくなるんじゃないのかい？」

「……………本当なら、初めて会った時に言うべきだったのかもな」

もし日向がこれを聞いたら荒れるだろう。

瀨靈廷を恨むだろう。

だが、今になつては立場も出来た日向はそれを押し殺すだろう。そして怒りの矛先を失うだろう。

「……だが、今のアイツの世界を壊したくないと思うのは、俺の傲慢なんだろうか？」

「……あの子は賢い。それに若い。これからの人間なんだよ。だから、変にボク達が悩むことじゃないんじゃないかな？」

「だが、賢いからこそ……！」

「瀨靈廷に刃を向けるんじゃないか、って？」

「つ……！俺はそうとは……！」

「だけど、彼には彼らを皆殺しに出来る力はもうついている。違うかい？」

京楽の言葉に、浮竹は狼狽える。

「……でも、彼はそんなことの為に刃は振るわない。彼は、自分の大切なモノを護る為だけに刃を振るう。それは浮竹が一番知ってるんじゃないのかい？」

その言葉に、浮竹は少し柔らかい表情をする。

ああ、そうだ。アイツは復讐の為に、誰かを殺すような奴じゃない、と。

「……ああ。いつか話せるときが来たら、話すことにするさ」

そう言つて、浮竹は再び墓石に向かつて合掌した。本来、ここに眠るべき女性に向かつて。

「破道の三十三・『蒼火墜』」

静かに呟かれた言葉と共に、青い爆炎が目の前の女に向かう。それを女は、自分の目の前に『八咫鏡』を形成し、簡単に跳ね返す。

これは予測出来ていた。

これは目くらましだ。

「縛道の八十一・『断空』」

日向は目の前に巨大な防御壁を作り出し、跳ね返ってきた蒼火墜を防いだ。それを見た女は、すぐさま響転で日向の後ろを取る。それを察知していた日向は、白皇を背中に担ぐように持っていき、女の繰り出した一撃を防ぐ。

そして、すぐさま次の行動に移る。

「縛道の六十二・『百歩欄干』」

複数の光の柱を女に投げつけ、行動を制限しようとする。

「天叢雲劍」

女はそう呟いて、輝きを持った刃で光の柱を次々と斬り落としていく。

——やはり、効果は薄いか。

日向はそう考えた。そして次の一撃に映る。

瞬歩で、一瞬にして女の目の前に姿を現す。そして手の平を女に翳す。

「破道の八十八・『飛竜撃賊震天雷炮』」

凄まじい熱量を持った光線は、華奢な女の身体を一瞬にして包みこむ。普通の者であったら、この一撃だけで塵も残らなくなるだろう。

「しっ—」

しかし、凄まじい閃光の中から女が飛び出し、日向の頭を吹き飛ばそうと虚弾を放つ。それを日向は、頬の薄皮一枚の所で避ける。そのせいで、日向の斬られた方の頬からは鮮やかな赤い液体が溢れてくる。

「破道の四・『白雷』」

しかし日向も虚弾を喰らう際に、刃の隙間から一筋の閃光を放ち、女の右肩を撃ち抜く。一瞬苦痛に顔を歪ませる女だが、すぐさま撃ち抜かれた肩の穴は超速再生で塞がれていく。

しかし、痛みで出来た一瞬の隙を日向は見逃さなかった。

「縛道の九十九・『禁』」

すると、女の身体にベルトが巻きついて、さらにそのベルトに鋌が撃ち込まれ女を拘束していく。

「ちっ……………」

女は無駄な足掻きをやめ、ピタツと動きを止めてあることに力を注ぐ。それを分かっていた日向は、最大の隙を逃さぬように次の行動に移った。

「千手の涯。届かざる闇の御手。映らざる天の射手。光を落とす道。火種を煽る風。集いて惑うな、我が指を見よ。光弾・八身・九条・天経・疾宝・大輪・灰色の砲塔。弓引く彼方、皎皎として消ゆ——」
破道の九十一・『千手皎天汰炮』せんじゆこうてんたいほう

詠唱を終えた瞬間に、日向の周りに集まっていた無数の光の塊が、拘束されている女に向かい飛んでいく。そして女の居る場所に着弾すると、凄まじい爆発が巻き起こる。

日向は斬魄刀を構えたまま、暫し様子を伺う。

すると、先程の爆発で巻き起こった煙の中から白い炎が発生して、爆煙が元々なかったかのように吹き飛ばしていく。

「……………ったく、流刃若火じゃねえんだからよ」

愚痴のような言葉を呟き、距離を取ろうとする。しかしそんな日向に、黒い閃光が襲いかかる。

セロ・オスキュラス
黒虚閃。

それを、日向は持ち前の反射神経で間一髪のところまで回避する。すると、今度は女が日向の隙を突くように、響転で一気に距離を詰めてきた。女の纏うロングコートは、所々焦げている。

女は、右手の親指を前歯で少し噛みきって流血させる。そしてすぐさま、手の平を日向に向ける。

グラン・レイ・セロ
王虚の閃光。

先程の、飛竜撃賊震天雷砲のように凄まじい光線が日向を襲う。このままでは日向は消し飛ぶ。

そこで、日向は左手に黒い鞘を出現させ、咄嗟にそれに斬魄刀を納める。

「――卍解」

日向を包む白い閃光は、女の放った金色の閃光を弾き返すようにして防いだ。その光景に、女は対して驚かない。むしろ当たり前であるかのようにして、それをじっくりと眺める。

「――『虚哭隸王』」

そして、日向は瞳を閉じた。

「こんなもんか……」

日向は組んでいた座禅を解き、その場に立ち上がった。今の戦闘は、全て日向が精神世界で行っていたモノ。ルールは簡単。日向が卍解をせざるをえない状況まで追い詰められたら負け、というモノだ。あくまで勝ち負けは関係ない。問題は、始解の状態でどこまで卍解を相手取れるかということだ。そのために、日向は剣術だけでなく鬼道もフル活用する。密かに、虚化は使わないという決まりを自分に言い聞かせている以上、他に使えるモノはドンドン使っていくというのが、先程の戦闘で心に決めていたことだ。

『白皇』の能力は、今までに倒した虚の能力を使用できるというものであるが、そこにはある制約がある。始解状態では、一度に使える能力が一つまでなのである。卍解であれば、複数の能力を組み合わせて使用出来るが、始解だとそうはいかない。そのため、日向は人前で白皇の能力を使ったことがほとんどと断言している。『虚帝』と違って、虚の力ということがばれるという訳ではなく、もし能力を使ったのを誰かに見られた際に、そういった能力であると見た人物が考えてそれを他人に言いふらされるのが嫌だったのである。

そして、別の場面で別の能力を見られたのならば、以前使っていた能力と違うことに気づかれ、不信感を抱かれるのも嫌だったのである。

そのため、三席でありながら斬魄刀の能力が誰にも見られたことない日向の斬魄刀は、『ただの直接攻撃系の斬魄刀』という風に捉えられている。常時開放型というのは、死神になりたての頃に海燕に言った

ため、結構な人物に知られているが、そのほとんどが直接攻撃系の斬魄刀と認識している。

しかし一度卍解を目撃した京楽と浮竹は、少し違った憶測を持っているかもしれないが、それでも日向の斬魄刀については都市伝説並みに謎なのである。

さらに、それに拍車をかけているモノがある。

——天宮城日向は、鬼道衆並みに鬼道の天才である。

こういったことを誰かが言い始め、それが瀟霊廷中に知れ渡った。そう。日向は、隊長格となんら遜色のないほど鬼道を扱えるのである。元々、鬼道を使わない更木を除き、他の隊長が認める程の鬼道の腕前を日向は有している。同期の雛森も鬼道の達人と呼ばれているが、雛森は『鬼道の応用の達人』であって、日向は『鬼道の発動の天才』といったところである。九十番台ですら詠唱破棄する日向は、鬼道だけでほとんどの虚と戦える強さを有している。そのため、純粋な剣術と様々な鬼道だけで虚の討伐などの任務を完遂させるため、隊士の日向の斬魄刀への能力の興味が薄れたのである。

それらは、先程の精神世界での戦闘でも如実に表れていた。

「あ〜疲れた……………」

精神世界での戦闘と言っても、実際に霊力は減っている。そのため日向は普段の討伐任務よりも疲労している。座禅をして凝り固まっていた首をバキボキと鳴らしながら帰路に着こうとする。

元々今日は休日で、日向はこの特訓のために鯉伏山まで来たのである。普通ならば、精神世界に行くなら斬魄刀が必要だが、『虚帝』という日向に内包される形で存在する斬魄刀のおかげで、日向はいつでも刃禅が出来るようになっていた。

「やて……………ん？」

日向の霊圧知覚に、虚の物と思われる霊圧がかかる。場所はそう遠くない。

「……………しゃあねえ。休日返上で行くか」

本来なら、今日仕事の死神に任せるべきだろうが、そこまで日向は捻くれてもいない。むしろ、進んで人を助ける人物である。そんな日

日向が、わざわざ出現した虚を放っておいて、流魂街の住民に被害をもたらせるわけがない。

日向は、すぐさま瞬歩で霊圧がある場所へと向かうのであった。

距離はさほどない。日向にとっては、一分もかからずに着く距離であった。故に、今まさに流魂街の住民に襲いかかろうとする虚の姿をすぐに確認できた。

「破道の三十一・『赤火砲』！」

日向が叫ぶと、凄まじい速さで火の玉が飛んでいき、虚の頭部に命中した。中級鬼道ではあるが、霊圧の高い者が放てばそれだけ威力は高まる。ただの虚を倒すには十分な威力であった。

命中と同時に爆炎が巻き起こり、虚の体はすぐに霊子へと分解していった。

「ふう……………終わったか？」

そう言つて日向は、虚の居た付近まで行く。回道もそれなりに使える日向は、怪我人がいないかを確かめていたのである。

そんな日向に、背後から何者かが襲いかかる。

何者かが繰り出した一撃を、日向は瞬歩ですぐさま回避する。

「誰だ？」

「キヒヒヒ……………！誰でもいいじゃねえかよお……………！」

日向に襲いかかった虚は、猿のような見た目の虚であった。

「なっ……………！」

すると猿の虚の周りに次々と虚が集まってくる。しかし日向が驚いたのは、その出現する速さである。

「キヒヒ……………アイツの言う通りだ。少し餌撒いたらすぐに出てきやがった……………」

「アイツって誰だ？」

「てめえにや関係ねえよ……………やれ、野郎どもお!!」

猿の虚が指示すると、取り巻きの虚たちが一齐に日向に襲いかかる。その数は、二十を軽く超える。

「……………成程な」

しかしそんな状況にも関わらず、日向は冷静だった。
そして日向の唇が動く。

————『黒棺』と。

直後に、日向のちょうど前に当たる場所に黒い箱が多数の虚を包み込むように出現する。そして、黒い箱に包まれた虚はすぐさま圧碎されていく。

「悪いな……………ちよつと本気ではやれねえから勘弁しろよ？」

「キヒヒ……………すぐにそんなこと言えねえようにしてやるよお!!」

そんなやり取りがあり、数十分が経った。

「破道の六十二・『雷吼炮』!!」

右手から雷を纏ったエネルギーを発射し、虚を五体ほど吹き飛ばす。そんな日向に、後方から別の虚が二体程接近してくる。

その虚に対し、日向は背を向けたまま両手を後ろに向ける。

「破道の三十二・『黄火閃』!」

黄色の霊圧の光線は、見事に二体の虚の頭部に命中する。そしてすぐさま体勢を整える。

(流石に、救援遅くねえか……………?!)

ここは流魂街でも瀨霊廷に近い部類に入る。日向はすでに、虚を百に迫るほど鬼道だけで倒した。これほどの数の虚が出現したとなれば、瀨霊廷でも察知することは出来るだろう。そして瞬歩の出来る死神であれば、十分程度で日向の居る場所に着くはずである。しかし日向の霊圧知覚には、一切死神の霊圧を感じることは出来ない。

流石の日向でも、一時間に迫るほどの戦闘は身体に堪えていた。さらに、斬魄刀であれば霊圧の消費も抑えられるが、救援が来ることを考えて日向は虚帝を使うことを躊躇い、鬼道だけで戦闘を行っていたのである。それが、現在の日向の疲労に拍車をかけている。

「キシヤアアアアア!!」

そんな日向に、蛇のような虚が凄まじい勢いで突っ込んでくる。そ

んな虚の頭に日向は飛び乗る。

「破道の三十三・『蒼火墜』！」

そして蛇の虚の頭部を、青い爆炎で吹き飛ばす。

「グラァァァァァァァァ!!!」

「なっ?!」

日向が着地した瞬間に、地面から這い出てきた虚が日向の足を掴み、地面に引きずり込もうとする。

「ぐっ……破道の五十七・『大地転踊』！」

そんな虚に対し、日向は鬼道で地面ごと空中に吹き飛ばそうとする。そして日向の思惑通りに、地面に居た虚ごと日向は空中に浮かび上がる。

「破道の一・『衝』！」

そして、自分の足を掴んでいる手に向かって鬼道を放つ。すると、虚の手に凄まじい衝撃が奔り、途端に虚の拘束の力が弱まる。

「破道の三十一・『赤火砲』！」

日向の手から火の玉が迸り、虚の頭部に命中する。

「キュルルルル!!」

「っ………!」

突然、一体の虚が日向の目の前に現れた。疲弊していた日向は、接近していた虚に気づくことが出来なかったのである。

「くっ……!」

すぐさま鬼道を放とうと手をかざすが、それよりも早くに虚が日向を仕留めようと腕を振り下ろした。

間に合わねえ………!

そう考えた日向であったが、虚が腕を振り下ろすよりも前に、虚の体が縦に両断された。

「なっ………!」

「済まない。遅れてしまったよ」

日向と共に着地したのは、五番隊隊長の藍染惣右介であった。柔和な笑みで、日向に語りかける。

「雛森君。彼を頼んだよ」

「え……………？日向君、どうしたの？もしかして怪我とかしてるの？」

「い、いや……………なんでもねえ。わりい、後任せていいか？」

「あ……………うん……………」

日向はすぐに痛みのことを忘れようとし、現場を離れようとする。

(何だよ、これ……………？)

日向が、この痛みの実態を知るのはもう少し後の話である。

番外編 Part 1

花火

夜空に瞬く

七色の火花

「よっしや——!!張り切るぜエ!」

「姉さん……元気だね」

気合いを入れているのか、腕をブンブンと振り回す空鶴に、日向は苦笑いをしながらこう言った。

今日は、流魂街のとある地区で夏祭りが行われるらしい。その祭りに空鶴は花火を上げることがを毎年頼まれているらしい。流魂街の中でも治安の良い地区で行われるこの祭りは、流魂街の住民のみならず、空鶴の花火を見物しに瀨霊廷より来る者も多いため、実際に屋台なども催されて本格的な祭りとなっている。そのために志波家では現在、花火を打ち上げるために道具一式を運ぶために、あくせく働いているのである。志波家に居候をし始めまだ三か月程度の日向にとっては、この光景は非日常のようなものであり、顔にはあまり出していないが内心胸を躍らせているのである。

「おっくう、やってるなあ」

「お、兄貴!休み取れたのか?!

三か月ぶりの対面に、空鶴は声を上げる。働く皆の前に現れたのは、志波家の長男でありながら、護廷十三隊十三番隊副隊長である志波海燕である。日向と最後に分かれた際の死覇装の姿ではなく、現在海燕が着ているのは私服と思われる着物である。

「お邪魔します、空鶴さん……」

「都も来てたのか!」

私服の海燕の後ろからひよこっつと顔を出したのは、おしとやかそうな美人であった。清楚な印象を与える白の浴衣に、長い艶やかな黒い

髪の毛を後ろでまとめるのは、海燕の妻である志波都である。

「あら？貴方が日向君？」

「え？あ……………はい」

「私は都って言うの。よろしくね！」

「よろしくお願いします……………」

都の明るい笑顔と共に差し出された手に、日向もそうつと手を差し出し握手を交わす。

「いやあ……………今年もこの日がやってきたなって感じだなあ……………」

「兄貴が居なくなつてから、こつちの仕事が増えて大変だったけどなのんびりとした口調で感慨深そうに話す海燕に対し、空鶴がぼつきりと本音を口に出す。それに海燕はギクツツとして、笑って誤魔化そうとする。

「たくつ……………そうだ。日向、お前は兄貴たちと一緒にもう祭りに行つてこい」

「え？でもまだ……………」

「気にすんな！毎年四人でやってたから、お前が減つた所で何も変わんねえよ！」

あくまで手伝おうとする日向の背中を空鶴はグイグイと押して、ポツと都に渡す。

「じゃ、頼んだ！」

「ほら、日向君。空鶴さんもこう言ってるし、三人で先に行つてこよう？」

都の言葉で、日向は渋々首を縦に振る。こういった所作から、日向の義理堅さが垣間見えると海燕は感じた。連れてきたのは海燕だが、日向は居候なりに率先して何かを手伝おうとするのだ。それが、このまだ小さな男の子にあるというのが、海燕にとつては感心すべきことであつたのだ。

その後三人は一時間ほど歩いて、祭りが催される広場に到着した。まだ時刻は夕焼けだが、大勢の人が屋台で食べものを買って食べたりに、射的などをしたりしている。霊力を使わなければ腹を空かせることなく、基本水だけで事足りるのが流魂街の食事情だが、こういった

催しの際にはそういったことも気にせず、皆が様々な食べ物を口にしている。

「日向君。何か食べたいモノある?」

都の言葉に、日向は辺りをぎっと見渡す。山籠もりをしていた日向には、全ての食べものが珍しく、食欲をそそるような匂いが鼻孔を刺激している。

その中でも、日向はあるモノが目に入った。

「あれ、なんですか?」

「あれ?.....ああ、かき氷ね!」

「ああ.....確かに、山じゃ氷なんて食わねえな」

日向が不思議そうにかき氷の屋台を見るのに対し、海燕は納得したように口に出した。すると海燕はかき氷の屋台に近寄っていく。

「おい、日向!何味がいい?!

「何味?」

「苺とか、練乳とか!」

「ほら、行ってみよう?」

都に背中を押され、日向は屋台に向かう。そこには何種類かの味があるらしく、紙に色々と書かれている。日向は数刻眺め、そして口を開く。

「.....この、抹茶練乳で」

「抹茶とか渋いな、おい.....」

幼い顔をしながらも、進んで抹茶を選ぶこの子供に、海燕は軽めのツツコミを入れた。

そしてかき氷をそれぞれが選んで手に持ったあと、三人はさらに屋台を見て回る。そして屋台を一つ見つける度に、日向は食いつくように目を見開いて初めて見るモノを眺めていた。

そうしている間にも、だんだんと日は落ちていき夜になり始めている。日向の手にはもうかき氷はなく、焼きトウモロコシが握られていた。

「私、空鶴さんのところに差し入れ持っていくから、海燕はいつもの所に居て!」

そう言つて都は、手に焼きそばなどが入っている袋を持って、花火を打ち上げる場所——空鶴達が居るところへと歩いて行つた。

「いつものところって?」

「ん? ああ、毎年花火を見るところに絶好の場所があんだよ」

そう言われ、日向は海燕の後を追い歩いていく。すると途中から山道に入っていく。

「ここどこだよ?」

「鯉伏山っていうんだよ。昔、俺がよく修行で使つてたりしてな」

「ふうくん……………」

言われるがままに歩くと、途端に木々の生い茂る山道から見晴らしのいい丘に出た。そこからは、先程見回っていた屋台の数々が一望できた。

「よし……………ここで待ってるか」

「おう」

そう言つて二人は適当な場所に腰掛ける。日向は食べかけの焼トウモロコシに再び口を付け始める。

数分が経つた後、海燕が口を開いた。

「日向。お前、何で山に住んでたんだ?」

唐突な質問。日向は多少驚きながら、答えを返した。

「……………母親に捨てられた」

「つ……………! わりい、訊いちや不味かつたな」

「いいんだよ、別に。俺も望んでたしな」

その言葉に、海燕は怪訝そうな顔を日向に向ける。そんな海燕に反して、日向は淡々と語っていく。

「父親はいなくて、山の中で俺は母親に育てられてた。……………そうだな、去年辺りまでだな」

「……………探さなかつたのかよ?」

「言つたら? 『俺も望んでた』って。赤ん坊の頃から霊力垂れ流してた俺は、よく虚に襲われてたんだ」

その言葉に、海燕は驚く。赤ん坊の頃から虚に狙われるほどの霊力を有しているとなると、現在の霊力はどれほどなのか、と。

「それで、何か知らねえけど母親が霊圧がどうたらこうたら知識があつたから、小さいころに霊圧の制御の仕方を教えてもらつて、何とか過ごしてた」

「でも、制御出来たなら捨てられる理由にはならねえだろ？」

「……………春だったかな」

日向は食べ終えた焼トウモロコシを地べたに置く。

『花見に行く』って急に言われてさ、それで途中で『先に川辺で休んでなさい』って行かされて、ずっと川辺で待ってた。でも、待っても待っても来ねえんだ。それで、日が落ちたくらいになつてやつと理解できた。『捨てられた』って」

いつもの覇気がなく、ぼそぼそと話す日向の目は虚空を見つめていた。

「でも不自由はしなかった。食い物なら山に一杯あるしな。何やかんやで、あの人は俺が一人で暮らせるまで待ってたんだと思う」

「……………」

日向の『あの人』という余所余所しい言い方に、海燕は複雑な表情をする。

「楽だったよ。やつとあの人の足手まといにならなくて済む。ここからは全部自分の責任なんだって思つてよ」

そう言うとき日向は少し深い呼吸をする。

「優しい人だった」

「……………優しい？」

自分を捨てた母親に対し優しいと言う日向に、海燕は眉を顰めた。

「……………多分、自分が死ぬのが分かつてたんだよ。元々、身体弱かつたらしいから」

「……………」

「捨てる様子なんて、一度も見せなかった。でもあの日捨てた」

「……………でもよお、その気になりやあ」

「探した。どこにもいなかった」

「っ！」

「一度くらい顔を見せてもいいって思つて探した。でも、どこ探して

もいねえんだよ」

こう語る日向の目は、心なしか潤んでいるように見えた。

『今まで育ててくれてありがとう』くらい言わせろっての」

「……………そうか。お前も、色々あったんだな」

海燕がそう言うのと、後ろの方より足音がいくつか聞こえてきた。

「兄ちゃ——ん!!」

「お、岩鷲か!」

「ふう……………よかった、間に合いそうね!」

都と共に来たのは、日向の兄（自称）の岩鷲だ。元気よく、久しぶりの兄に対し接する。そして四人が横一列に並ぶ。都、日向、海燕、岩鷲という順だ。

「さて……………今日は多分派手になるぜえ?」

「何でだ?」

海燕がニヤニヤしながら言うので、日向が不思議そうに訊く。

「なんたって今年は……………」

海燕が言うのと同時に、花火が一つ打ちあがる。それはヒュ〜という音を奏でた後、凄まじい爆音と同時に、美しい色の光で辺りを照らした。

「家に家族が増えたからな!!」

言い切ると同時に、次に先程よりも大きい花火が夜空に咲く。その美しい光に、四人は目を奪われる。特に、初めて見る日向はその迫力に息を飲んでいる。

「……………ありがとう」

日向は誰にも聞こえないような呟きを、今は居ない人へと言い放った。

「俺、家族増えたよ」

魂

日は眼に
月は心に

静かな夜。そこには大きな屋敷が一つだけ佇む。

その中には一人、鬼の面を被る女性がいる。髪は黒く、着物も黒く、その姿は『漆黒』という言葉が似合っていた。

そんな静寂が包む屋敷だったが、突如、地響きが辺りに響き渡る。

「……………これは」

そして次の瞬間、屋敷は崩れ始め、静かであった夜の景色も崩れ始め、その崩れた場所からは光が漏れ出す。

夜であるこの場所には似合わない程の光の量。鬼の面を被る彼女も、平静を装う事は出来なかった。

さらに、夜の空には罅が入り始め、そこから黒い液体のようなものが降り注ぐ。

「……………虚の力か」

その液体を見て、彼女はそう呟いた。

そしてじつと目を閉じた。

「何をしている」

「つ……………貴様は誰だ？」

そんな彼女の前に、男が現れる。白い髪を長く伸ばし、それを後頭部でまとめ上げている。その目は、些か人間のものとはとれない。まるで、別の存在であるような目である。

「朕は、この魂の斬魄刀だ。たった今、虚の力と共に流された死神の力により、長年の眠りから少し目が覚めた」

「そうか。妾もこの魂の斬魄刀なのだが、これはどういうことだ？」

その男は、自分がこの魂に眠る斬魄刀と言う。だがそれを、この鬼

の面の彼女は認められない。なぜなら、彼女自身この魂の斬魄刀であるからだ。

「本来、朕達は別々の場所に存在していた。だが、虚の力によりその境界が崩れ、朕はここに來ることが出来た」

「成程。それなら妾も納得しよう」

男の話を、鬼の面の女は納得する。つまりこの魂は、元より斬魄刀を二本有す魂であること。

だが問題はそこではない。

「どうする？…このままでは妾達の主が死ぬぞ？」

「ああ。そうであろうな」

そう言つて男は空を見上げる。昼と夜が混同したような混沌とした空から、止めどなく黒い液体が流れ続ける。

それを見て、男が口を開く。

「だが、朕達の力があれば、あれを止められるだろう」

「ああ。妾もそう思っていたところだ」

「ならば、朕はあれの『身体』を」

「ならば、妾はあれの『魂』を」

「虚の力を我らに宿すことによつて、我等が主を救おうぞ」

そう言つた瞬間、混沌としていた空の崩壊は止まり、昼だった部分は纏まっていき月となり、夜だった部分はそのまま夜としてそこに留まった。

「これで一先ずは安心だ。違うか、『——』？」

「ああ。だが、貴様の力が真に出ていないことは解っている、『——』」

「ならば、暫くの間虚の力の大部分は任せる」

「そうすればいい」

そう語り終えると、二人の姿はどんどん変わっていく。

男は、白から黒へ。

女は、黒から白へ。

そして黒へと変貌した男は、女から鬼の面を受け取る。

「俺は今日から『虚帝』だ」

「そして私は今日から『白皇』……うふっ！」

——日向。我等は『月』なのだ。お前なくして、我等は生きていくことが出来ない。

お前が力を欲すというのであれば力を貸そう。

お前が生きたいというのであれば生を分けよう。

日向。お前は『太陽』だ。

我等にとつて、お前は掛け替えのない存在なのだ。

お前のためならば、我等は己を投げ捨てる事が出来る。

お前がもし、死神の全てを擲って力を欲するときは

『朕』が手を貸そう。

お前は、朕の主なのだからな。

朕の名は『——』。尸魂界で唯一——……。

柘榴

夙^{つと}めての

影が匂うや

待雪草

「ふう〜……………さすがに冷えるな……………」

そんな独り言を呟きながら、ルキアは廊下を歩いていった。一日の業務がすでに終了し、後は家に帰るのみとなった。

日も落ち、冷え切った手に熱い吐息を吹きかけながら、足を小刻みに動かす。冬の乾いた空気により乾燥した廊下は、足裏を着ける度にギシギシと音を立てる。時々吹く風が、騒がしくルキアの耳元を通り過ぎていく。その度に耳が凍えそうになり、温めた手で握り体温を分け与えようとする。しかしその甲斐虚しく、再び吹く風が今度は吐息で湿っている手に襲いかかり、その体温を悉く奪っていく。そして再び手に吐息をかける。その繰り返しである。

「うう〜……………」

埒が明かないと、今度は両手を死覇装の袖に入れる。そして入れた先で、それぞれの腕の部分を握り温めようと試みる。風が直接当たらない分、先程よりはマシであろうが、それでも死覇装で遮れる風には限界がある。どうにも、今日の風はいつもより強い。風が吹く度に、ルキアの前髪がバサバサと靡く。

「寒いなら着ろよな？風邪ひくぞ？」

「あつ……………日向？」

突然背後から、肩に何かを掛けられその方向に首を向ける。そこには見知った人物が、鼻をすすりながら立っていた。鼻の頭を真っ赤にさせ、白い髪がそれを際立たせている。自分の肩を見てみると、紺色の羽織が掛けられていた。先ほどまで着ていたのか、仄かに温かみがある羽織であった。男物であろうその羽織はルキアには些か大きい

物であるが、その分風を多く遮ってくれるのでルキアには助かった。

「いいのか？お前がこれを着ていたのだから？」

「女子に風邪をひかせる訳にはいかねえだろ？」

そう言う日向はやんちゃに微笑む。それに伴いルキアもにっこりと微笑む。

「ルキア。今日はこれ渡しに来たんだよ」

「ん……………？何だこれは？」

日向が死覇装から取り出したのは、小さな風呂敷。そこから、何やら石のような物が何個か通っている輪つかのような物であった。

「現世風に言えば『ブレスレット』って奴だ。まあ買ったのは瀟霊廷だけだな」

「この石は何だ？」

ルキアの指差すのは、輪つかに通る美しく緑に輝く石である。整えられているであろうその石は、規則的に角ばっていた。

「柘榴石だ」

「柘榴石？これがか？」

柘榴石——いわゆるガーネットを指差し、ルキアは驚嘆の声を上げた。ルキアの中の柘榴石というのは、褐色のイメージが強い。それなのに unrelated、このように夏に生い茂る光沢のある木の葉のような緑に輝くとは、思いもしなかったのである。

「……………綺麗だな……………」

「そうだろ？ルキアにピツタリだと思ってさ」

「どういう意味だ？」

「柘榴石は一月の誕生石だからな」

その言葉にルキアはハツとした。今日は一月十四日。ルキアの誕生日である。忙しい毎日に、自分の誕生日の事など頭から離れていたのだ。それを、この友人は覚えていてくれた。そのことにルキアは、驚愕と嬉々を交えた表情で日向を見つめる事しか出来なかった。

「ほら、着けてみろよ」

そう言って日向は、特段手馴れているわけではない手つきで、柘榴石の通ったブレスレットをルキアの左腕に着ける。その不規則に光

を反射する緑の石に、ルキアは目を大きく見開きじつと眺めた。

「女は小物が好きって聞いたからな」

「……………誰にだ？」

ルキアは多少予測しながら日向に情報元を尋ねる。

「都姉さんだ」

「……………ふふっ。敵わないな……………」

あの女性の鑑である人物に訊けば外れはないだろう。そんなことを考えながら、左腕に輝く充実感に身を浸らせていた。

「有難う。本当に気に入った。一生大事にする」

「一生大事にされるほど高いもんでもねえけどな」

ルキアの仰々しいと思える言葉に、日向は苦笑いする。しかしルキアは首を横に振る。

「一生懸命考えてくれたのだろうか？なら、それだけで十分だ」

そう言うルキアに、日向は照れ笑いする。この友人は結構サプライズめいた物が好きで、そのためにかなり頭を巡らせるのである。そのためルキアの誕生日云々を訊きまわり、これにたどり着いたのである。

「……………そう言えば、日向の誕生日はいつなのだ？」

自分の誕生日を祝われている最中に、相手の誕生日が気になるルキア。その言葉に、日向は少し動きを止める。

「……………明日だな」

「なっ……………！明日!？」

自分がお返しになにかあげようとまで考えていたルキアであったが、その期限が明日となると出来ることは限られてくる。そのことにルキアは必死に思考を巡らせる。今自分にこの友人に出来る最上のお返しは何か、と。

そんなルキアに対し、日向は飄々とする。

「別にいいよ、来年もあるし。何だったら、そこら辺で売ってる菓子でも嬉しいぜ？」

そう言う日向の言葉に偽りはないであろう。価値よりも気持ち。そんな人物なのである。ルキアがこうして悩んでくれているだけで、

彼にしてみれば嬉しいのである。最悪、お返しなどなくてもいい。日向はそう思っているが、ルキアはそれを良しとしない。

「……………ズルいぞ」

「えっ……………？」

唐突なルキアの言葉に、日向は固まる。その言葉の真意が分からないからだ。

「お前が送ってくれた気持ちは、これのように形として残るが、言葉だけでは残らない……………証がないではないか。私はこれを見るだけでお前の気持ちに触れられる気がする……………そんな物を、私はお前に送ってみたいのだ」

言葉だけでは駄目。言葉だけに気持ちを乗せれば、それは記憶の消失と共に薄れていつてしまふ。だが、このブレスレットのように形として残る物であれば、それを見るだけで受け取った時の情景、昂ぶりが頭に甦ってくるのである。そんな物を、ルキアは日向に渡したかったのである。

長年支えてくれた友への、感謝を込めた逸品。それを手渡したい。そんなルキアに、日向はゴチンツと額をルキアの額にぶつける。そしてそのまま喋り出す。

「ルキア……………だったら、そんな時に俺が『欲しい！』って言う。だから、その時に『証』を俺にくれ」

粉雪のように柔らかな声が、ルキアの耳を撫でた。それにルキアはコクンと頷いた。それに日向は、顔を上げ無邪気に笑う。

「ははっ！じゃあ今年は、近くの甘味処で一緒にお汁粉でも飲むか?!」
「……………はははっ！なら、そうしよう……………身体も温まるだろうしな」
ルキアがそう言うのと、日向は意気揚々と歩いていく。それにルキアも急いで追いかける。

この充実感が、永遠に続けばいいと感じながら。

「…………ルキア、何眺めてんだ？」

「ん？…………うわあ?!何を見ておる、一護!!!」

驚くルキアに、一護も驚く。ルキアは、いつも左手に着けていたブレスレットを右手で摘み、ぶらぶらとさせながら眺めていたのである。思っていたよりも自分の世界に入り込み、ルキアは接近してくる一護に気づかなかったのである。

「何って…………オメーが柄にもなく、んなもん見てっからだろうが!」

「姉さん!もしかしてそれって姉さんの宝物なんですか?!」

「触るな、コン!!」

大事そうにするルキアのブレスレットに興味を抱いたコンが、ブレスレットに触ろうとするが、華麗なキックで壁まで吹き飛ばされた。

「これは、私の親友がくれた大切な物なのだ!!そう易々と触らせるわけなからう!!」

「お、おう……………なら大事に持つとけよ……………」

いつもより数倍気迫があるルキアに、一護もタジタジとなる。

「へえく……………姉さんの親友って、そりゃ姉さん並みにキュートな……………」

「彼奴は男だ」

「ええ!!?男オ?!?じゃあその親友つてもしや、姉さんの……………!!」

「違うわ、たわけ!!!」

驚愕するコンに、ルキアは容赦なくドロップキックを喰らわせる。吹き飛んだコンを、さらに踏みつけるその光景に、一護は戦慄した。連撃を加えるルキアの顔はいつもより紅潮しているが、それを一護は指摘出来ずにいた。

「ああ……………でも、それなりにルキア大事にしてくれてるってことだろ?それなら別によお……………」

「……………違うのだ」

「えっ……………?」

急に静かになるルキアに、一護も静かになる。下で騒ぐコンも然りだ。

「私は、何度もアイツに救われた……………憧れなのだ、コレは。勿論、好

意もなかったわけではないが、今では憧れの方が強い……………ああなり
たいのだ、私は」

「……………急に女の顔になんなよ」

「っ……………！黙れ!!!このたわけがっ!!!」

一護の言葉に、ルキアは先程よりも顔を紅潮させ、さらに青筋を立てながら押入れのルキア用の枕を一護に投げつけた。それを一護は顔面に喰らう。

「乙女が一度くらい恋をして何が悪い!!!」

「乙女じゃねえだろうが!!ガキだろ、テメーは!!もしくは俺の十倍生きてるっつってたから、ババアじゃねえか!!」

「死神ではまだまだピチピチなのだぞ?!貴様……………それをババアだど!!許さん!!!私をコケにした罪……………骨の髄まで分かせてやろう!!!」
「上等じゃねえか!!」

一護とルキアの間には火花が飛び散っている。その光景に、コンはぶるぶると体を震わせることしか出来なかった。

現世。浦原商店地下・穿界門前。

「……………そういえば黒崎。これ、お前のじゃないのか?」

「ああ?……………あつ、これルキアの持ってたやつじゃねえか。サンキューな、石田」

「あの死神と戦った場所にあったからな……………朽木さんのだったのか」

「ああ。親友にもらったやつだつてな」

「……………そうか、じゃあ返してあげないとな」

(待ってるよ、ルキア……………!)

次の舞台は瀟霊廷で。

第四章 Crossing White & Black

再会

始まる異変

藍の思惑

立ち向かうは

黒と白

始まりは、ルキアが現世に駐在任務に行ったことからだった。

「…………ルキア、聞こえるか?」

「…………ああ…………」

日向は、現在牢屋の前に立っている。その牢の中の椅子に座っているのは、白い服を着たルキアであった。

こうなったのは二日程前から。ルキアが現世に駐在して、ほぼ三か月。実際の駐在期間は一か月だったのに対し、大幅な現世への滞在であった。最初の一か月目ですでに連絡が絶え、十三番隊の皆は気が気ではなかった。

そして、六番隊の隊長である朽木白哉と副隊長の阿散井恋次が、ルキアを連れ戻すことに成功した。そしてそこで判明した事実。

人間への死神の力の譲渡。それは重罪。故に現在ルキアは、中央四十六室での裁判を受けるまで、この牢屋で過ごすことになっているのだ。

「顔ぐらい見せろよ。こちとら、お前のこと心配だったんだからな。挨拶ぐらい言ってくれよ」

「……………今の私に、お前に会わせる顔はない。十三番隊の皆にもだ」

ルキアの声は酷く暗い。牢屋に入っているのに明るく話せという

のも無理な話だが、顔だけは見たいと日向は思っていた。

「そうか……じゃあ、また来るわ。身体は壊すなよ?」

そう言っつて、日向が部屋から出ていく足音を、ルキアは背中で聞いていた。すると、別の足音がルキアに近づいてくる。

「よお、ルキア」

「恋次か。どうした?」

幼馴染の声に、先程より幾分か声は明るくなる。

「どうしたじゃねえよ。日向来てたんだろ?顔見せてやったのか?」

「いや……見せてはおらん」

「おいおい……」

ルキアの言葉に、恋次がやれやれといったような声を出す。恋次はルキアを連れ戻す際に、ルキアから死神の力を貰った人間——黒崎一護と交戦し少なからず身体に傷を負い、服の隙間からは包帯が覗く。

「アイツ……お前が来ないから現世に無断で行こうとして、志波副隊長に止められたりして、十三番隊大騒ぎだったんだぜ?日向の気持ちも考えてみるよ……」

日向が無断で出撃しようとするなど、普段の真面目な様子を見ているルキアには少なからず衝撃であった。そして、胸が締め付けられるように痛む。

「見せられる訳なからう。私は罪人なのだぞ?」

「……本当にそれだけか?」

恋次の言葉に、ルキアの声は止まる。そして、僅かだが身体が小刻みに震えているのが見える。

「……今、日向の顔を見たら私は耐えられん……」

ルキアの身体と同じように震える声に、恋次は黙って耳を傾ける。

「お前たちの声が……ここまで恋しいと思った日はない……!顔を見たなら……余計恋しくなる……!!」

「ルキア……」

恐らく本心である言葉に、恋次はルキアに悲痛な目を送る。

「だから……今は出て行ってくれ……!」

「…………おう」

ルキアの余りにも痛々しい姿に、恋次は見てられずにすぐに部屋から出ていく。

かすかに、泣いているような声が恋次の耳に響いた。

「はあ…………はあ…………日向!!おいつ!!」

「ん?何だよ、恋次?」

後ろから必死に駆け寄ってくる恋次の声が聞こえ、日向は歩みを止める。そして日向の前に立ち止まった恋次は、凄まじい形相で日向を睨む。

「お前…………何でルキアに顔見せなかつたんだよ!」

「…………アイツが、自分は皆に見せる顔がないって言ったからだ。無理やり見せろっていうのも酷だろ」

その言葉に、恋次は日向の胸倉を掴む。日向は抵抗もせずただ恋次を見つめる。

「アイツが…………アイツが一番、お前の顔を見たかつたんじゃねえのかよ?!」

恋次の顔からは怒りではなく、悲しそうな感情を読み取れる。そして日向はゆつくりと恋次の手を引きはがす。

「未来永劫会えねえ訳じゃねえんだ。アイツが見たいって言ったなら、俺はいくらでも見せに行つてやるよ。それに、話すだけなら明日も行くしよ」

その答えに、恋次は落ち着いたような表情になる。

「…………悪い。そうだよな」

「はっ…………まあ、お前の気持ちも分かるぜ?副隊長さん?」

「…………からかつてんのか、おい」

「でもなあ…………いくら連れ戻すからって、女の顔斬つちやうかなあ…………」

「うっ…………!」

わざとらしい日向の芝居に、恋次は痛い所を突かれたような顔をす

る。恋次は、ルキアを連れ戻す際に、ルキアを脅すために右頬を少し斬りつけたのである。それを聞いた日向は、女の子の顔を斬るのはどうなのか、という雰囲気を感じて恋次に現在ぶつけている。

「ありやあ……あれだよ！その………謝つとくわ」

「そうしとけ」

早くに折れた恋次に、日向はニヤニヤする。そして、もうひとつ気になっていふことをぶつける。

「恋次。ゴークルどうしたんだよ？」

「あれか？その人間のガキに壊された」

「お前がか？」

恋次が、自分があげたゴークルを人間に壊されたという事実には、日向は驚愕する。ここで言う人間とは、ルキアが死神の力を渡した人間のことである。恋次は仮にも副隊長である。現世に行く際に限定霊印で霊力を五分の一に抑えられていたとはいえ、死神になって三か月も経たない者に一撃喰らわせられるとは予想できなかったのである。

「ああ………人間のくせに、馬鹿でけえ霊圧だったぜ。まあ、朽木隊長に鎖結と魄睡貫かれてたから、もう生きちゃいねえだろうがな………」

「生きてても死神の力はなくなってるな、そりやあ………」

鎖結と魄睡は魂魄の急所であり、砕かれると大抵の魂魄は死に至る。迅速な治療がなければ確実に死に至るだろうし、魄睡は霊力の発生源であるため、そこを破壊されたのならば死神としての戦闘能力はほぼ無に等しいものになるだろう。

「俺らが今気にすんのはルキアの処遇だけだな………」

恋次は深刻そうな表情で呟く。それに対し、日向は明るい表情で恋次の肩に手を乗せる。

「いくら重罪だからって死刑になることあねえよ。なんなら、ルキアが戻ってくるまでに隊長にでもなつてりゃいいだろ！」

「………へっ！そうだな………それでアイツの驚いた顔拝むのもいいな！『俺は隊長だぞ！』ってな！」

「はははっ！明日ルキアに白玉投げつけてやれ！面白いリアクション

すんじやねえか?!」

『何をやる、たわけ!!』って言いそうだな?!ははっ!」

恋次が似ていないルキアの真似して、二人は腹を抱えて笑う。ここまで来ると、二人はルキアの処遇に一切の心配をしていない。微塵もしていない訳ではないが、状況を明るく見ようと努めている。

二人は霊術院を卒業した後で、互いによく飲みに行く仲である。そのため二人は男としての親友と呼べる仲である。それ故二人で話す際は、他人より声が明るくなるのである。

大分明るくなった会話は、世間話に切り替わる。

「いやあく、お前も出世したよなあ。いつの間にか副隊長だしなく」

「お前は異動しないからな。だから、雛森も吉良もお前より早く副隊長になったんだよ」

雛森と吉良が副隊長になったのは、大体三年ほど前である。その際に吉良は三番隊に異動しているため、市丸の部下という立場になった。恋次もつい二か月ほど前までは十一番隊の六席であったが、そこから六番隊副隊長という大抜擢を受けた。それを知った日向は当時、恋次と祝いのために飲みに行った。しかし、その時も若干恋次は面白くない顔をしていた。

「ったく………実力はあるのに頑固っつーのも損だな」

「雀部副隊長に比べたらそれでもねえよ」

「その人と比べたら誰も勝てねーよ!」

雀部は、護廷十三隊創設当初からの一番隊副隊長であり、今までに隊長の座が空いていても頑としてその座を動かないという人物である。年数で勝てる者はだれ一人としていないであろう。

「まあ頑張れよ。今度はお前が奢ってくれよな?」

「おう、いいぜ!他の奴らも呼ぶか!」

そんな明るい会話をして、二人はそれぞれ帰るのであった。

「やあ、天宮城君」

「っ………藍染隊長」

日向は聞き慣れない声に、少し驚いた声を出す。

「どうしたんですか？」

「いや、少しこの辺を散歩していたんだよ。仕事ばかりで部屋に籠ってては身体に悪いからね」

そう話す藍染の表情は柔和である。しかし日向の顔は微動だにしない。

「ああそうだ。朽木隊長の妹さんについては話は聞いたよ。同期なんだね？」

「はい……………そうですけど」

「本当に驚いたよ。まさかとは思ったけども……………君が心配なのは僕も分かるが、今は少しでも彼女の罪が軽いものであることを願うよ」

「……………そうですね」

「ああそれと……………」

そう言って藍染は、少し間を置く。

「君とは仲良くやりたいと思っっているよ」

「……………」

日向は、突然めまいのようなものに襲われる。

(何だ、コレ……………?!)

「だから、これからもよろしく頼むよ」

しかし藍染は言葉を続ける。そんな藍染を、日向はずっと凝視する。

(ホントに何だ……………?!見えている藍染と、藍染の霊圧が別の所にあるみてえに感じる……………!)

そう思っつて、日向は眩暈と共に激痛が奔る右眼を押さえる。

「……………大丈夫かい?どこか、具合でも……………」

「あ、いいえ!大丈夫です!はははっ、少し疲れてんのかな?」

しかし激痛は一向に止まず、息を切らしながらその場に倒れこむ。

「本当に大丈夫かい?何なら、近くの救護詰所に……………」

(しかも藍染にノイズが掛かっているみたいに見えるし、何かフワフワ

して気持ち悪い……………!それに、心臓ら辺が……………!)

「ぐ、がはっ!!はあ!はあ!はあ!」

「っ!!どうしたんだい?!天宮城君!!」

過呼吸のような状態になり、日向の顔は蒼白になる。その様子に、近くにいた藍染のみならず、近くを歩いていた隊士たちも近寄ってくる。

「だ、大丈夫ですか?!天宮城三席!」

「すぐに四番隊を呼んでくれ!何かの発作かもしれない!」

「は、はい!」

心配する女性隊士に、藍染が的確な指示を出す。すると、その女性隊士だけでなく他の何名かも、四番隊を呼びに向かっていく。

「天宮城君!しっかりするんだ!」

「はあ!!はあ!!はあ!!はあ!!」

右眼を押えていた右手は、今度は死覇装の心臓に当たる部分を掴んでいた。

(んだよ、これ……………!藍染が……………藍染が……………黒い塊にしか見えねえ……………!)

今まさに自分を看病する藍染のことを、日向はただのノイズのかわった黒い塊のようには見え、混乱する。

意識が朦朧とする中、日向はあることを思い出した。

(あれ……………これ、俺が小さい時に……………?……………小さいって、どんくらしいの時だ……………?)

そんなことを考えながら、日向は意識を闇に落とした。

「卯ノ花隊長!」

「分かっています、勇音。すぐに日向さんをこちらに」

そう言われて勇音は、日向が乗っているベッドを卯ノ花の居る部屋に運び込む。

「これは、どんな症状なのでしょう?私の鬼道でもどうしようもなくて……………!」

勇音はそう言ってベッドに倒れている日向を見る。日向の目や鼻

や耳などから血が出ており、症状が尋常でない事を悟らせている。

「はっ!!はっ!!はっ!!はっ!!」

日向は苦しそうに息を切らしている。その様子を見て、卯ノ花が目を見開く。

(これは……………まさか!!)

「勇音、今すぐ集中治療室に日向さんを運びます」

「は、はいー!」

「それと……………治療は、私一人で行います」

「えっ……………?」

卯ノ花の言葉に、勇音が驚いた表情をする。

「そして、治療室の周りには誰も寄せ付けしないで下さい」

「ええと……………はい!分かりました!」

そう言つて勇音は早速行動する。疑問があれど、患者のためならばと動く勇音はやはり四番隊というところだろう。

「日向さん。聞こえますか?」

「はっ!!う……………ノ花、たい!ちよう!!はっ!!はっ!!」

日向は必死に、卯ノ花の言葉に反応する。今治療室の中には、二人以外誰も居ない。そして治療室の周りにも誰も居ない状況になっている。

「日向さん。今からあなたに組み込まれている、『魄内封印』を解きま
す」

「はく……………ない……………ふういん……………?!」

「はい。ですから、耐えてください」

卯ノ花は端的な説明を終え、両手で印を組む。

(あの時は赤子でしたが……………今の日向さんの霊圧ならば……………!)

そう思いながら、卯ノ花は淡々と印を組んでいく。

そして……………。

病室の一角が吹き飛んだ。

旅禍

弾ける火種

燃える闘志

我らは忌避される

故に寄り進め

連なる鎖を断ち切るために

旅禍。死神の導きなしに不正に尸魂界に來た魂魄。尸魂界ではありとあらゆる災厄の元凶とされる。

そんな旅禍と呼ばれる存在である人間が四人と猫が一匹。

死神代行・黒崎一護。

滅却師・石田雨竜。

人間・茶渡泰虎。

同じく人間・井上織姫。

そして喋る黒猫・夜一。

彼らは浦原喜助が開いた穿界門を通り、拘突に追われながらも尸魂界にやってくる事が出来た。

彼らの目的は一つ。捕えられた死神・朽木ルキアの救出である。そのため彼らは現世で修行を積んだ。その甲斐あって、瀨霊廷の西の門・白道門の門番である☒丹坊を、一護は危なげなく下す事が出来た。しかし直後現れた☒丹坊は片腕を斬られ、一護も門の外に吹き飛ばされ瀨霊廷侵入は失敗した。元々、瀨霊廷に入る方法を考えていた夜一にとってそれは特に痛手でもなかったが、ひとまず一護たちは白道門近くの流魂街で休憩することになった。

そんな一護たちに近づく人影。猪に乗って豪快に扉を突き破り平屋に入ってくる。その光景に誰もが目を見開いた。そして入ってきた男は一護にガンつけながら近寄る。そんな男に対し一護はピンタ

を喰らわせる。

男は岩鷲と名乗り、様々な自分の異名（自称）を一護たちに聞かせた。

一護と岩鷲の間に、不穏な空気が流れる中、凄まじい轟音が鳴り響いてきた。

「ん？何だあれ？」

最初に気づいたのは一護。さらに、それがだんだん近づいてくることに気づいた。

すると、森の奥から巨大な影が一護に接近する。

「うわあ?!虚か?!」

思わず一護は、背に背負っていた斬月を取り出す。しかしその前に、黒い巨体は一護の目の前で止まった。

「猪丸スト——ッブ!!」

何やら巨大な猪の背中から、女の子のモノと思われる可愛らしい声が聞こえる。すると、すぐに背中から二人の人物が下りてきた。

「やつほ——!!おじいちゃん来たよ——!!」

「ご無沙汰しています……」

「おお!焔と雫じゃないか!」

一護たちを家に招き入れてくれている老人が友好的そうな声を上げたため、敵ではないと察知し一護は斬月を再び背負う。

「あれ?何でガン兄居るの?ま、いつか。おじいちゃん、☒丹坊怪我したって聞いて飛んできたんだけどどこ?」

「ああ、向こうにいるよ」

「オツケ——!」

「お、おおい!ちよつと待て!」

颯爽とどこかに行こうとする二人に、一護は思わず声を上げて止める。

「あんたら一体何者なんだよ?!」

「……………あれ?何で死神の人がここに居るの?」

今気づいたように、焔がキョトンとした表情をする。そして、眉間に皺を寄せながら一護に顔を近づける。先ほどの岩鷲程ではないが、

顔をじろじろと見られるのは一護にとって堪えるモノである。

「焰ちゃん。この死神の人は、☒丹坊を助けてくれたんじやよ」

「え、そーなの？なあんだ！いい人なんだね?!」

一護がいい人だと聞かされ、焰は途端に明るい表情を浮かべる。

「私は焰！自称・流魂街猪ライダー紅一点！そして自称・流魂街一姉御と呼びたい人！そんなでもって自称・流魂街一のお兄ちゃん&お姉ちゃん子!!」

（（（全部自称だ——!!）））

焰の自己紹介に、現世組は全員心の中でツッコんだ。

「そして、こっちが！」

「えっと……………流魂街で皆を治せるような医者になりたい、弟の雫です……………」

（（（ただの好青年だ——!!）））

姉のテンションに当てられて少し照れくさそうに自己紹介する雫に、再び現世組は心の中でツッコみをする。

「そんじや、ちよつくら☒丹坊の所に行ってくるね！」

そして焰と雫は、☒丹坊が居る場所に向かっていく。そんな中、岩鷲たちにも変化がある。

「兄貴！八時だ！」

「なっ……………ちつ、今日はここまでにしてやるよ！カモン！ボニーちゃん!!」

すると、岩鷲が乗ってきた巨大な猪が、一護の頭を飛び越え岩鷲に突進する。その後、岩鷲はボニーちゃんに乗って、子分たちと一緒に帰って行った。

「何だったんだ、あいつ等……………」

一護は、ただ茫然とするだけであった。

同時刻、瀨霊廷。

「ん、うくん……………」

「あ……………卯ノ花隊長！天宮城三席が！」

ベッドで眠る日向は、うつすらと開いた目で辺りを見渡す。

(…………あれ？俺何してたんだっけ……………?)

「気が付きましたか？」

聞いたことのある柔らかい声に、日向は声の聞こえる方向に首を曲げる。するとそこには、白い羽織を着た柔らかな笑みを浮かべる女性

が。

「卯ノ花隊長……………」

「気が付いてよかったです。もう三日、貴方は眠っていたんですよ？」

「三日……………?!」

自分が三日眠っているという事実、うつすらと開かれていた目は完全に開かれる。そして日向は眠っているベッドから飛び起きる。

そしてベッドから降りようとするも、急に身体がガクツとよろける。

「……………いけません、日向さん。しっかり休まない……………」

「す、すいません……………」

(何だ、これ？距離感つかめねえ……………)

よろけた理由。それは数日眠っていたというのもあるが、それ以上に距離感が掴めないという事実があった。集中して見ようとすれば、部屋の隅から隅まで見える。

(あれ？視力上がったか?)

元々視力は悪くない方であった日向だが、今は視力が上がったと実感できるほどに周りが見え過ぎていた。しかし現在、それは日向にとって違和感にしかならず上手く行動することができない。

現在の日向は、目の良い人間に常に望遠鏡を覗かせている状態であると云っても過言ではない。

「…………卯ノ花隊長。俺、何かあったんですか？」

とりあえず、日向は自分に何が起こっていたのか知ろうと、卯ノ花に訊く。すると卯ノ花は暫し顔を俯かせ、そして答える。

「…………今は言えません。ですが、命に係わるモノでもありませんので心配しないで下さい」

「え……………っ？それってどう……………」

「……………これは、貴方の過去を掘り返す事実です。ですので、今はまだ
言えません」

卯ノ花のはぐらかすような言葉に、日向は困惑の様子を隠せない。
俺の過去？

それを、この女性は知っている。

すぐにそこまで思考は回った。だが、今訊くのは無駄だ。そう、直
感した。

「……………分かりました。治療、有難うございました」

「すみません……………このような答えしか返せなくて……………」

「いえ。命に別状がないのなら、そこまで詮索はしませんよ」

そう言っただけ日向にベッドに倒れこむ。そして何とか距離感を掴も
うと、天井を凝視する。

「では、私は失礼しますね」

「はい、有難うございました」

退出する卯ノ花に、日向は顔を向けて礼を言い、再び天井を凝視し
始めた。そして、ふと右を見る。

(白皇……………)

自分の斬魄刀。台の上にそれは置いてあった。そしてそつと手を
伸ばす。鞘を掴み、自分の腹部に持つてくる。そして、瞼を閉じた。

「……………二人とも」

「何だ」

「うふふ……………お久しぶりね」

精神世界に入っただけ真つ先に会ったのは、日向の斬魄刀たち。

「具合はどうだ、日向」

こう訊いてくるのは虚帝である。仮面を被り表情は窺えないが、そ
れなりに日向を心配してくれているのであろう。

「ああ……………目がちよつと良くなり過ぎたくらいだ」

「うふ、心配したのよお。私の可愛い日向が急に倒れちゃったんだも
の」

そう言いながら、白皇は響転で日向の後ろをとって首に腕を回し、抱き着いてくる。

「…………でも、お前らなら何か知っているんじゃないか?」

「え〜?何の事?」

『魄内封印』

日向の言う言葉に、二人がピクツと反応する。

「卯ノ花隊長は、俺を治療する前にそう言った。なら、俺の魂であるお前らなら何か知っているんじゃないかって思ってたな」

「うふっ!流石…………」

そう言いながら白皇は日向の頬に接吻をする。しかし日向の表情はピクリとも動かない。

「でも、それは教えられない。いえ……………いずれ分かることって言った方がいいかしら?」

「……………そうか、分かった」

白皇の言葉に、日向は少し残念そうな顔をする。白皇も、ただ意地悪で教えないという訳ではないと察したので、日向はすぐに引き下がったのである。

「日向」

そんな日向に、虚帝が口を開く。

「今回の朽木ルキアの件……………貴様はどう考える?」

「……………ん?何だよ、急に……………」

「じ・っ・は、ルキアちゃんに死刑宣告が出たのよお〜」

虚帝の言葉の続きを言うように、白皇が日向の頬を指で突きながら甘い声で語りかける。その言葉に、日向は驚愕する。

「な……………死刑だと?!」

「びっくりよねえ〜。ルキアちゃんは人間に死神の力渡しただけなのに、それが死刑よお〜?」

「お前の霊術院で学んだことは、粗方俺達の頭にも入っている。それから考えるに、今回の朽木ルキアの判決について違和感を感じる。どう思う?」

「……………確かにおかしいな」

いくら重罪といえど、今回のルキアの罪は死刑までいくとは思えない。それは勿論、日向の私情を省いての冷静な判断だ。

「うつふーどうする？ルキアちゃんは囚われの姫君になっちゃったわよ？」

白皇が、日向の髪の毛をクルクルと指に巻きつけながら耳元で囁く。言い回しが、多少日向の神経を逆撫するようなモノであったが、日向は瞼を閉じて思考を働かせる。

「ルキアちゃんのお兄さまは、ルキアちゃんのこと助けるつもりないわよ？さて……………どうする？お・う・じ・さ・ま♪」

「……………からかうのもいい加減にしろよ、白皇。んなもん決まってるだろうが」

日向は若干イラついた口調で白皇に口を開く。

そして、意識を落とした。

日向が瞼を開けると、そこには先ほどと変わらない病室の天井があった。そして周りに誰も居ないことを確認し、ベッドから降りる。そして、台の上に畳んであった自分の死覇装を着始める。

すると、扉の方から聞いたことのある声が聞こえてきた。

「あ、起きたんですね……………って、何で着替えてるんですか？」

「虎徹副隊長……………もう平気なんで、退院しますね」

「え、でも……………あ」

入ってきた勇音の言葉を最後まで聞かずに、日向は瞬歩で部屋の窓から消えていく。余りの一瞬の出来事の、勇音は茫然と見ることしか出来なかった。

「え、ええ……………」

どうしたものかと、勇音は暫く立ち尽くしていた。

「これで大丈夫だよ、☒丹坊」

「ありがどな、雫う〜」

雫は、腕を一回斬り落とされた☒丹坊の腕を治療していた。消毒し、薬を塗り、包帯を巻き直し、回道で念入りに治療するという手際は四番隊に比類するほどであった。

(…………でも、本当に一度腕を斬り落とされたのかな?)

雫は、村人が何とか繋ぎ合わせた☒丹坊の腕の繋ぎ目は、一度斬り落とされたとは思えない程綺麗に繋がっていた。それに驚きつつも、雫は念には念を押して治療をしたのである。

「多分、数日で動くようになるんじゃないかな?」

「そうがあ〜。ホンドありがどな、雫。あど、織姫ちゃんに感謝しねえどな」

「織姫?」

「ああ。雫が来る前までオラの腕を治してくれた娘だあ〜」

「へえ……………」

雫は、その織姫という人物と会ってみたい願望が生まれた。一度斬り落とされた腕をこんな短時間で繋ぐことの出来る技術を、是非見みたいという願望である。

「ほい、二人とも!おにぎり持ってきたよ!」

「おお!ありがどな、焰あ!」

「ありがとう、姉さん」

意気揚々とおにぎりの乗っているお盆を持ってきた焰は、それらをたった今治療の終わった二人に手渡す。しかし、かなりの巨体である☒丹坊にとっては、焰の握ったおにぎりの一つ一つが小さいため、お盆に乗っていたうちの三分の一を一度に持っていく。

「…………死神にやられた腕、大丈夫?」

「ああ。雫や村の皆のお蔭でもう痛みはほとんどねえ」

「…………そっか!ならもう大丈夫だね!」

少し暗い顔をしていた焰だったが、☒丹坊の言葉に笑顔になる。しかしそれを雫は複雑そうに見つめる。

(…………姉さん。やっぱりまだ……………)

雫は知っている。焰の、死神に対する内なる心情を。

彼女の愛する兄や姉の多くが死神である。だが、焰は死神のことを快く思っていない。

『海兄とか、都ねえとか、ひゆう兄とかが死神として活躍するのは嬉しいけど……死神は私達からルキアを奪ったんだよ？』

幼い時の記憶。

自分達に、家族の温かさを教えてくれた人物。

兄や姉にこそ話していないが、自分たちのもう一人の姉。

その人物の記憶から自分達を奪ったのは死神。

その事実が、焰の死神への印象の悪さを産み出しているのだ。実際は、虚が死神の身体を乗っ取ったことにより起きた悲劇だったが、彼女の中ではその原因が死神ということになっている。

『ルキアに会いたいなあ……』

焰がよく口にする言葉。

だが、焰は流魂街の住民。そしてルキアは現在、四大貴族の当主の妹。よほどの関係がなければ会う事はないだろう。その唯一と言っている事実も、彼女の記憶の中から消え去っていくのである。

一度日向に、ルキアと会いたいか、ということを読かれたが、その時は首を縦に振ることが出来なかった。

その死神に、ルキアもなっていた。

なにより、ルキアが赤の他人との昔話に付き合いたくはないはずだと考えた。

自分達の知っているルキアはもういない。

そういった考えが、焰の家族に対する愛情へと移り変わっているのだろう。他の者達がどの程度焰のことを理解しているかは分からないが、長年傍に居る弟の雫はそれを理解していた。

おにぎりを頬張る焰の横顔は、どこか寂しそうだった。

だがこの時二人は、近いうちに彼女に会う事になることになるのだが、それは知る由もなかった。

突入

暁の空に昇る玲瓏

それは戦の始まりを告げる

「あ、天宮城三せ……………き……………?」

「おう!天宮し、ろ……………?」

「お、起きたのか……………あ……………?」

「……………?どこかおかしいか?」

久しぶりに職場に顔を出した日向に、清音と仙太郎と海燕は目を見開く。その原因は、日向の顔にあった。

何故なら――。

「何でお前眼鏡掛けてんだ……………?」

満を持して海燕が皆が気になっているところに突っ込む。そうである。日向が、今まで掛けたことのない眼鏡を掛けて職場である執務室にやって来たのである。

清音が『結構似合ってる……………』と呟いているが、他の者はあまり気にしない。

「何でって……………ちよつと目がな……………」

「ほおく……………ちよつと貸してみろ」

そう言つて海燕が日向の掛けていた眼鏡を取り、試しに自分に掛けてみる。

「っ、んだこりや?!全然見えねえじゃねえか?!」

試しに眼鏡を掛けた海燕だが、レンズ越しの視界が何やら白く曇っているように見える。

「当たり前だろ。そういう仕様なんだよ」

面倒くさそうに返答して、海燕が掛けた自分の眼鏡を取り返す。日向が買ったのは、目が良すぎる人用の、レンズに細い網目のようなモ

ノが組み込まれているモノである。因みにこれは、元六番隊副隊長の銀銀次郎の経営する『銀蜻蛉』という店で何とか見つけてきたものである。

眼鏡を掛けなおすと、日向はそそくさと自分の定位置に座る。そしていつも通りに業務を開始する。

そんな日向を、海燕は複雑そうな表情で見つめる。

「おい、日向」

「……………何だ？」

「……………朽木の事聞いてるか？」

「ああ。それがどうした？」

予想していたよりもドライな返答に、海燕は眉間に皺を寄せさせる。

「……………お前は何も思わねえのか？」

「……………それ聞いてどうする？」

日向は今度は、海燕に鋭い睨みを浴びせる。久方ぶりに見る激怒と思える表情だ。その気迫に、近くで見ていた清音と仙太郎は少し狼狽える。

その目はこう訴えている。

『これ以上訊くな』

その様子に、海燕は仕方ないと考え、違う話題を挙げてみることにした。

「……………そういや、少し前に旅禍が現れた。何があっても対応出来るようにだけはしとけ」

「……………そうか」

それだけを聞いて、日向は再び自分の机に視線を戻す。そんな日向に対し、海燕が『最後に』と付け足すように口を開く。

「……………朽木の処刑まで二週間を切った。今頃、懺罪宮四深牢に移送されてるはずだ」

その言葉に、日向の身体がピクツと動く。

海燕はそれを見逃さない。

だが互いにそれから何事もなかったかのように、業務を開始する。

俺の腹はもう決まってる。

なら、方法はどうする？

——懺罪宮に突入する。

却下。

逃走経路はどうする？ 人一人抱えたままで、追っ手を全員退けられるか？ 『倒山晶』は張ったままじゃ移動できない。俺の、霊圧を消す能力でも、他人にまで使用出来るか分からない。

それよりも前に隊長格が来る。

一人を庇ったままで隊長格を相手取れると思うほど、俺も慢心してねえ。

地下を通るか？ 駄目だ、複雑過ぎる。それに、出入り口を全部塞がれたらたまらねえ。

なら、処刑の最中に助け出すのは？

いや、尚更難しい。それこそ隊長格がわんさか襲ってくる。

何か、混乱してる状況なら………ん？

『少し前に旅禍が現れた』

………これだ。

一護たちは移動していた。それは瀟霊廷に突入するために『志波空鶴』という人物に力を借りるためである。

そして一護たちが辿り着いたのは、謎の腕のオブジェがそびえ立つ奇抜な家であった。

それぞれが心の中でツツコみを決めた後に、門番だという大男が二人立ちはだかるが、夜一の姿を見るなり、知り合いなのかすんなりと家の中に案内された。

そして——。

「くっ、空鶴って……女ア!!」

案内された広い居間に、肘掛けに肘を掛けながら腰を下ろしていたのは、右腕のない、それでももって整った顔立ちと豊満な胸の美女とも言える部類の女性であった。

その後、夜一と言葉を交わした後に、突入するための協力を快く承諾してくれた。そして見張りの意味として、一人の男——もとい空鶴の弟が付けられるのであるが、それが流魂街で出会った岩鷲であり、一護と岩鷲の間に少し不穏な空気が流れたが、空鶴のそれを上回る凄みに、大事には至らずに済んだ。

さらに、家の中で焰と雫とも出会い、世間とは狭いモノだと現世組の四人が連れて行かれたのは、巨大な花火台がある場所であった。

そこで、この花火台で打ち上げ瀨霊廷に突入するという手段を聞かされ、現世組で賛否両論あったものの、それしか方法がないため、突入を成功させるために霊珠核に霊力を込める訓練に移ったのであった。

が。

「ぬおおおおおおお………!」

必死に訓練する一護を、端で見る岩鷲と焰と雫は白い目で見ていた。

「センスがねえよな、アイツ………」

「ひゅう兄ならスツとできちやうのにな〜」

元々、正規の死神の訓練を受けていない一護と、死神の中でも上位の身内を比べるのは少々ナンセンスではあるが、それを踏まえても一護の結果は酷かった。

「ねえねえ、一護」

「あん？何だよ？」

汗を流す一護に、焰がフランクな口調で話しかける。

「そんなに『今から助けに行く死神』が大事なの？」

この場で見えていた彼らが気になっていたこと。それを焰が代表して訊いた。わざわざ瀨霊廷に赴き助けに行くなど、正気の沙汰ではな

い。ならば、それなりの理由があるはずだ。

だが、一護の口から発せられたのは思ってもいなかった言葉。

「べつに」

「え？」

簡潔に言った後、一護は再び霊珠核に霊力を込めようとする。

「じゃあ何？助けてあげるって約束でもしたの？」

「ちげえよ」

「じゃあ金か？」

途中で岩鷲が口を開くが、雫に『通貨が違うよ…』と突っ込まれていた。

「じゃあなんで……………？」

焰の問いに、数秒口を閉じてから言葉を発する。

「借りだ」

命を救われた。

家族を守るために、能力をくれた。

そのせいで、捕まり、処刑されようとしている。

「そいつを見殺しにするような、つまんねえ男にはなりたくねえんだ

よ、俺は！」

「……………」

似てる。

口調も、性格も、違ふところの方がずっと多いけど。

(多分、ひゆう兄と同じ人なんだ……………)

「名前、教えてよ」

「名前？誰のだよ？」

「助けに行く人の」

一護がふうーっと息をした後、口を開く。

「朽木ルキアだ」

「ッ!!？」

予想外の名前に、この場に居た二人の目が見開かれる。そして額

に、嫌な汗が流れ始める。

「ん？どうしたんだよ、知ってんのか？」

「…………ガン兄、一護に霊珠核の教えてあげて…………」

「え、あ、おい！焰！」

「姉さん！」

岩鷲に後を頼む旨を伝えた後に、焰は足早に部屋を去って行く。それを雫が追いかけていく。

「…………何なんだ、アイツ？」

次の日。

夜一が、一護が無意識のうちに掴んで曲がった尻尾のことを、一護が分からないまま訊いて機嫌を悪くし、早速発射の準備をしていたのであるが――。

「岩鷲たちはどうしたんだ？」

「どうしたって、あいつ等なら下で何か…………」

「準備完了よ――！！」

「ちよ、姉さん！！」

「へっへへ…………ヒーローは遅れてやって来るもんだぜ…」

すると、花火台の影から昨日とは服装の違う三人がやってくる。

「何だ、そのカツコウは？」

「岩鷲様専用バトルコスチュームだ！かつこいいだろ！」

「同じく焰専用！」

「えつと、雫専用…………」

岩鷲の服に比べ、焰と雫の服装はよきこいに着るような服である。片方の袖だけがなく、上衣はそれぞれ焰が赤、雫が青のモノを着用し、下には黒いズボンを穿いている。

「バトルコスチュームだあ？何で見送りのオメーらがそんなカツコに…………」

一護の問いに、焰が詰め寄る。

「今から、大分前の話になるけど、私達は流魂街でルキアに拾われた

の」

「なっ……!?!」

思いがけない事実にも、一護のみならず他の者達も驚いている。

「でも、虚に乗っ取られた死神のせいで、ルキアは私たちのことを忘れちゃった」

「記憶喪失ってことか?」

一護の言葉に、焰が頷く。

「その後は、ひゆう兄が私達のことを拾ってくれて志波家でずっと過ごしてたけど、それでも私達はルキアのことを忘れたことはなかった!」

周りの者達は、ここまで来ると全員が黙って聞いていた。それは隠れて聞いている岩鷲の子分たちもだ。

「ルキアは私と雫にとつて家族なの!!ルキアが処刑されかけてるつてのなら、私は助けに行く!!」

「なっ、焰!おい!」

その言葉に、空鶴が身を乗り出す。

「姉ちゃん!安心してくれ!俺も付いて行く!!」

「だからってなあ……!!」

「俺も二人の兄貴なんだよ!!だったら、死ぬ気で守る!それでいいだろ、姉ちゃん!!」

岩鷲の言葉に一度上げた腰をゆっくりと下ろす。その際に『生意気なガキが…』と呟いていたが、その顔はにやけていた。

その近くでは、金彦と銀彦が涙を流し、岩鷲の子分も涙を流していた。

「行くなら死ぬ気で行ってこい!!」

「『おうっ!!』」

空鶴の言葉に、三人が応じる。そして一護が岩鷲の胸倉を掴み、『よろしくな』と発する。

(黒崎くん……岩鷲くん……)

その光景を、兄というモノがどういふモノなのか知っている井上は、穏やかな目で眺めていた。

「よし、始めるぞ!!」

空鶴が、大声を上げる。その後、一護が苦勞してやつと出来た靈珠核に、いとも容易く靈力を込め一護を軽く落ち込ませた後に、皆が花火台の筒の中に入り込む。

「……………そう言えばよ、『ひゆう兄』って誰なんだ?」

一護がそう言えば、という雰囲気で岩鷲たちに訊く。

「俺の自慢の弟だ! 兄貴と一緒に死神やってんだよ!」

「へえ……………」

「……………じゃが、一護。お主は会わん方がよいじゃろう……………」

一護たちが岩鷲の説明を聞いている途中で、夜一が一旦話を区切る。

「何だよ夜一さん。知ってるのか?」

「一応な。因みに本名は『天宮城日向』じゃ。そして戦うとするなら、お主にとって相性は最悪じゃ」

「それって、どういう意味なんですか?」

石田が、夜一の言う意味を探るように訊く。石田のみならず、井上や茶渡も気になっているようだ。

「一護のような単細胞よりも頭を使って戦う奴という意味じゃ」

「な……………」

一護が、夜一を殺気の籠った視線で睨むが、それを意にも介さずに続ける。

「冗談じゃよ。まあ、手ごわいことには変わりはないがの。頭の切れる奴というのはホントじゃ」

「でもよお、隊長とか副隊長じゃねえんだろ? だったら……………」

「それに匹敵するから話しておるのじゃ」

「……………」

夜一の言葉に、現世組の四人が息を飲む。しかし驚く四人を置いて、話を続ける。

「一護、お主は現世で阿散井恋次という者と戦ったな?」

「あ、ああ……………あいつは副隊長だったぜ?」

「日向は三席じゃが、実力は並みの副隊長を超える。それは……………お

「主らも知っておるのではないか？」

「そう言つて、岩鷲たち三人を見る。そしてその三人全員が、首を縦に振る。そしてその事実には、現世組は深刻な表情をする。」

「……………じゃが、説得次第ではこちらに味方するかもしれん。奴がこちらに味方してくれれば、かなりの戦力になる」

「じゃあ、私が……………」

焰が率先して、その説得に乗り出そうとする。

「うむ……………確かにそれならばお主などの身内が適任じやろう。他の者も、今回の旨を話せば悪いようにはしてくれるまい」

その後、『隊長格とは戦うな』、『はぐれるな』などの注意事項が夜の口から話される。

そして……………。

「彼方！赤銅色の強欲が36度の支配を欲している！！72対の幻！13対の角笛！猿の右手が星を掴む！25輪の太陽に抱かれて砂の揺籃は血を流す——花鶴射法二番『拘咲』！！」

空鶴の先の口上で、一護たちの入った球が打ち上げられる。

凄まじい勢いで打ち上げられたそれは、途中で方向転換をして瀨霊廷のある方向へと飛んでいく。

それを、空鶴はどこか儂げな瞳で見つめていた。

「……………気を付けて行ってこいよ……………三人とも……………」

「狭い空だな……………」

ルキアは、懺罪宮四深牢にある細い縦長の窓から外を眺めていた。すると、日の出で明るんできた空が、鈍い音とともに光り始めた。

「何だこれは……………!?空が……………光っている……………!?」

瀨霊廷、突入。

事件

岩壁の花は

手折るには遠すぎる

瀟靈廷に突入の成功した七人と一匹だったが、突入後すぐに彼らはバラバラになってしまった。

その内の焰と雫も例外ではない。

現在進行形で二人は、空中から真つ逆さまに地面に落下していた。

「いやああああ!!?!」

「姉さん!少しどいて!」

パニックに陥っている焰と違い、弟の雫は冷静に対応する。落下している最中に、周りを一瞥に地形を確認する。

「よし……縛道の三十七——『吊星』!」

雫は落下地点に霊圧の床を出現させ、二人はそれに着地する。着地すると同時に、霊圧の床はトランポリンのように伸縮し、落下の衝撃を和らげたため、二人は無傷であった。

「ふい……サンキュー、雫……」

雫が差し伸ばす手に捕まりながら、焰はげっそりとした顔で立ち上がる。

しかしそれもつかの間、近くから死神の『今、あそこに落ちていたぞ!』といった声に、二人はビクツと反応する。

そしてあたふたしている内に、二人は五人程の死神に遭遇した。

「いたぞ!旅禍だ!」

「くっ……姉さん!」

「あいよ!」

元気な声を出し、焰は背負っていたバッグから丸いモノを取り出し、それに鬼道で火をつける。そしてそれを、今来た死神に向かって投げる。

「血涙玉！」
ちなみだま

焰の投げたそれは地面に着弾し、大きな煙を巻き起こす。煙の中からは『げほっ！何だこれ?!』や『目に染みる!!』といった声が聞こえる。

それもそのはず。血涙玉とは、トウガラシが入った煙玉であるのだ。

煙が晴れると、その場に二人の姿はなかった。

「くっ……逃げたか!?探せ！」

「おうよっ！俺の手柄にしてやんよ！」

そんなことを言っている内に、死神達はどこかに二人を探しに去って行った。

「……………行つたよ？」

「うん。じゃあ解くよ」

そう言つて雫は、二人を覆っていた『曲光』きょくこうの光を解く。曲光は、霊圧で覆うことにより対象を見えなくする縛道である。それで二人はやり過ぎしたのである。

一息吐いたところで、二人は今後の方針を話す。

「ひゆう兄とか、カイ兄がすぐに見つかればいいんだけど……………」

「かなり広いからね……………地道に探そう」

「そだね」

あっさりと決めたところで、二人は隊士たちに見つからないようにして、進んでいくのであった。

そして数時間後、瀨霊廷に旅禍が侵入するという事態はさらに緊迫するモノとなった。その理由は、六番隊副隊長・阿散井恋次が旅禍に敗北し、負傷するという事態に陥つたためである。

そして恋次は現在、吉良達三番隊何名かに近くの詰所に運び込まれていた。そこには五番隊副隊長の雛森桃も居り、信じられないといったような表情を浮かべていた。

「そんな……………」

涙目で漏れる声は、酷く震えていた。

「僕が見つけた時はもうこの状態だったんだ……もう少し早く見つけて僕が戦いに加勢していれば……」

自分を責めるように言う吉良に、雛森が首を横に振る。

「ううん……そんなの……吉良くんのせいじゃ……」

吉良はその言葉に、少し息を吐いた後、四番隊に連絡するように話していたが――。

「その必要はない。牢に入れておけ」

「っ！」

突如、扉の方から声が聞こえる。その方向に頭を向けると、そこには隊長羽織を羽織った男が一人立っていた。

「朽木隊長……！」

「そ……そんな……阿散井くんは一人で旅禍と戦ったんです……それなのに……」

「言い訳などきかぬ。一人で戦いに臨むということは、決して敗北を許されぬということだ。それすらも解らぬ愚か者に用などない。目障りだ、早く連れていけ」

突き放すように言い放つ白哉。余りの言いように、雛森の握る拳が震える。

「ちよつと待ってください！そんな言い方って……」

「そんな言い方ねえんじゃないですか？」

「っ?!日向くん、どうして君が……?」

突如、白哉と同じ扉から一人の青年が入ってくる。思いがけない人物に、吉良だけでなく雛森も驚いた表情をする。

彼は三席である。つまり、ここに居るのは体調の優れない浮竹の代わりに海燕が指揮を執っているため、副官補佐である日向がここにいるのだろうと二人は考える。

「……兄は、私が間違つてると言いたいのか？」

突如、この場の空気が重くなったように感じられる。それは無意識に発せられる白哉の霊圧か、それともその声の重さか。

だが、そんな隊長格の睨みにも日向は退かない。

「いいえ。護廷十三隊である以上、負けることは余りよろしくはないでしょう。ですが、共に志同じくする仲間を、そのような言い方で非難するのはどうかと思ひましてね」

日向の口角の片方は吊り上っている。だが、それに比べて眉間の皺は深い。

一方で白哉はいつも通り無表情である。

「兄は、こやつと同期らしいな」

「ええ」

「つまらぬ情で、自らに枷をつけるのは愚かだ」

白哉はそう言つて部屋を出ようとする。

「もし兄が私に刃向うと………私の枷になろうとするなら、即刻叩き斬る」

すれ違うタイミングで、日向にだけ聞こえる音量で、白哉は言い放つ。その言葉に、日向は何の返答も返さずに黙って立っていた。

「ひゅ……日向くん……？」

「……ああ、そう言えば。四番隊にならもう声掛けといた。もうすぐ来るだろうな」

その言葉に、雛森のみならず吉良もホツとした顔になる。

「お——こわ！」

急に部屋の隅から聞こえる声に、三人は一斉にそちらに顔を向ける。するとそこには狐を彷彿させるような顔の男が立っていた。

「市丸隊長！」

「何やろね、あの言い方。相変わらず怖いなア、六番隊長さんは。それと先に四番隊に声掛けてあげよ思つたけど、もう日向くんが声かけた言うならボクはお役御免やな。じゃあ、後任せてええかな？」

「いいですよ」

市丸の問いに、日向が淡々とした口調で返事する。

「じゃあ行こか、イツル」

「はい……」

呼ばれた吉良は、去って行く市丸の背中を足早と追っていく。その間に、日向はせつせと恋次の身体を回道で治療していく。

「日向くん、回道出来るの?」

「本職には及ばないけどな」

雛森もある程度は出来るが、日向の回道は自分よりも洗練されているモノだと理解し訊いてみる。本人は本職には及ばないというが、開始して数分ですでに小さな傷なら塞がり始めている。

「おお———こりゃハデにやられやがったな、阿散井のヤロー!」
「ふわあ?!」

急に背後から聞こえる声に、雛森がビクンと体を跳ねらせる。そこに居たのは十番隊隊長の日番谷冬獅郎だった。

その後、隊長の登場の仕方や呼び方云々で二人は言い合っていたが、話は途中で方向転換した。

「三番隊には気を付けな」

冬獅郎の言葉に、治療をしていた日向も少し耳を傾ける。その言葉に、雛森が不思議そうな顔をする。

その後、四番隊が到着したため日向は恋次の治療を任せ、部屋から出ていこうとした。

「あ……日向」

「お、まつ梨か」

すると、部屋を出たちようどの所でまつ梨に出会った。

「ねえ、日番谷隊長知らない?」

「ああ、冬獅郎なら今あの部屋にいる」

そう言って日向は、先程まで自分が居た部屋を指差す。それに対しまつ梨は『ありがとう!』と言って駆けていく。

その途中で、日向が何かを思ったかのようにまつ梨を呼び止める。

「なあ、まつ梨……」

「え……どうしたの?」

「……もし、何かあったら雛森のこと頼んでいいか?」

その言葉に、まつ梨が首を傾げる。

「……………何で?」

「あ………ほら、冬獅郎ってああ見えて直情的になるしな。特に雛森が絡んでくるとな。だから、そんな隊長に代わって雛森のこと頼ん

でいいか？」

「そういうことなら……………」

何とか納得したような表情で再びまつ梨は足を進ませようとするが、今度はまつ梨の方から声を掛けてくる。

「あ、日向……………」

「ん？」

「えっと……………何か隠してない？」

「んん？何だよ、急に……………」

言おうか言わないか迷いながら発したまつ梨の言葉に、日向は少し冷や汗を掻く。

「あ、そんな詮索とかじゃないけど……………」

そう言って、まつ梨は一呼吸置く。

「アタシは、日向の味方だから……………それだけは分かって欲しくて」

「……………サンキューな、まつ梨」

それだけ言って、日向はそそくさと歩いていく。

それをまつ梨は静かに見つめていた。

同期の人がたくさん傷ついて、日向は戸惑ってるはずだから。

それに、浦原隊長達の真相のことも知ってるのは日向だから。

アタシに出来る事は少ないけど、貴方の力になってみせる。

まつ梨はそう決意していた。

「くあく……………ねみい」

旅禍が瀨霊廷に侵入して次の日。日向は珍しく寝坊していた。普段ならば、業務開始時刻の三十分程前から執務室に向かう。しかし今日は定例集会があり、それを失念していた日向はまんまと寝坊していたのである。

しかしそれだけではない。

(目え疲れるなあ……………)

最近、見え過ぎるようになったこの目。急に視野が変わるといふモ

ノは中々疲れるモノなのである。その疲労も相まって、日向は寝坊する結果となった。

そそくさと早足で、向かうのであった。

「いやああああああああ!!」

「っ?!この声、雛森?!」

突如、響き渡る知り合いの声に、日向はすぐさま霊圧で場所を特定し、走って向かう。

(東大聖壁か……くっ、何が起こったんだ?!)

一刻も速く雛森の所に向かうべく、ドンドンスピードを上げていく。

そしてようやく、雛森の姿を捉えた。奥の方を見ると、同じく雛森の悲鳴を聞いたのであろう副隊長たちの姿が見受けられる。

雛森は、何かを見上げるようにしてへたり込んでいる。

「藍染隊長!!」

は？

頭の中がぐちゃぐちゃしたまま、雛森が駆け寄った場所、そしてその目線を追う。

雛森は何を見てるんだ？

他の副隊長も絶句したまま何かを見上げている。

雛森は、必死に何度も呼びかけている。

「藍染隊長!!藍染隊長!!いやです……いやです!!藍染隊長!」

一体、どこに藍染が居ると言うんだ？

日向は、皆の目線の先に注目するが、何も見えない。鼻を、血の匂いが少し攪る程度で、他に違和感などない。

自分の目がおかしくなったのかと、こすってみたり、眼鏡を外してみたりするが何の変化もない。

「何や、朝っぱらから騒々しいことやなあ」

混乱の最中、副隊長たちの後ろからいつも通りの飄々とした口調の市丸が歩いてくる。

そんな様子の市丸を見た雛森の纏う雰囲気が変わる。

「お前か!!」

そう叫び、雛森は斬魄刀を抜き市丸に飛び掛かる。

しかし、咄嗟の所で吉良がそれを防ぐ。

そして――。

「どけつて言うのがわからないの!!」

「だめだと言うのがわからないのか!!」

互いが叫んだ所で、動きが出る。

「弾け――『飛う――』!!」

「それは駄目だ」

雛森が斬魄刀を解放しようとした瞬間に、日向が間に入り、素手で斬魄刀の刃を握り、残った手を雛森の眼前に翳した。すると雛森は、糸の切れた人形のように崩れ落ちた。それを、日向はしっかりと受け止める。

「吉良、雛森頼む」

「あ……うん……」

雛森を渡された吉良は、戸惑ったような様子になる。

『白伏』……鬼道の達人にしか出来ない術を、あの一瞬で……

吉良が何とか冷静に、今の一瞬を分析すると、市丸がパチパチと拍手をする。

「いやあ、ホンマ助かったわ。九死に一生ってこういう……」

「市丸隊長」

市丸が言い切る前に、日向が言葉をはさむ。

「あまり、そういうことはしない方がいいですよ？」

「……………そら、気を付けんとな」

市丸に言い切った日向は、疲れたように息を吐く。そんな日向に、乱菊が近寄る。

「アンタ、素手で斬魄刀なんて掴んだら血が出るでしょうが……………」

そう言っただけ乱菊は、レースの付いた可愛らしい女物のハンカチを日向に差し出す。日向はふと、自分の左手を見ると刃を掴んだせいもあり、結構な量の血が流れていた。

「いいんですか？」

「良いも悪いも、洗って返してくれば良いわよ」

「人の血がついてたハンカチなんて使う気になれないですよ。今度、別の買いますから」

「あら、じゃあお願い」

そんなやり取りをした後、日向はハンカチを手の平に巻きつける。そしてひと段落した後、乱菊が話を切り出す。

「……………ギンの奴……………確信犯なのかしら……………」

そう言っただけ乱菊は先程まで市丸の立っていた場所を眺める。すると今度は射場と檜佐木が駆け寄ってくる。

「おう、日向。儂の酒でええなら、これで消毒せえ」

「包帯なら持ってきてやったぞ」

「何よ。アタシのハンカチ意味なかったじゃなくい！」

二人が持ってきた道具を有難く頂戴し、日向は早速使用する。その途中で、乱菊の先程の問いに答え始める。

「……………乱菊さん。『確信犯』って言葉の意味、知ってます？」

「え？何よ、急に……………えっと、悪いことだと分かってやるヤツじゃないの？」

「大体合ってます。それともう一つあります。元々はこつちの意味だったんですけど、道徳とか、宗教とかに基づいて、本人が悪でないと確信して起こされる犯罪……………さっきの市丸隊長の発言で言えば、

乱菊さんの意味の方ですね」

意味深に話を続ける日向に、三人の視線が集まる。

「つまり……………何が言いたいわけなのよ？」

もったいぶるようにする日向に、乱菊が訊く。

「……………後者だったら、怖いですねって意味です」

そう言っただけで日向は檜佐木の方を見る。檜佐木は、『俺の顔に何かついてるか？』と不思議そうに呟く。

勿論これは意図的である。

(ノーマークって訳にはいかねえからな)

もしここに居るのが、京楽や卯ノ花といった勘のいい人物であれば、日向の所作に含まれる意味を理解できたかもしれないが、ここで東仙がどうだということも言っただけで意味がないことは分かっているため、日向はそれ以上何も言わない。

藍染が死んだ。だが、日向はその姿を視認することが出来なかった。視認がどうこうとはいうのは、日向はすでに置いておいて、すでに思考は切り替わっている。

こうなつたからには、藍染は必ず動いている。

恐らく、皆が見ていた藍染の死体は鏡花水月で作りに出した偽物であり、本物は別の場所に居る。日向はそう考えた。

だったら、何でこのタイミングで？

必死に考えを巡らすが、答えが出ない。市丸のあの挑発的な態度にも、何か意味があるはずである。

ズンツ。

「っ!!？」

日向は何かを感じたのか、懺罪宮の方向へと顔を向ける。

「どうしたんだ？」

檜佐木が、様子の変な日向に声を掛ける。

「これは……………更木隊長の霊圧……………?？」

「更木隊長の?……………いや、わからないな」

(もう一つの霊圧……いや、三つか？更木隊長の霊圧がデカすぎて一瞬わからなかったけど、一つだけ知ってる霊圧だ……)

その霊圧が誰か分かった瞬間に、日向は駆け出した。

(何でテメーが居やがんだー岩鷲!!)

流魂街に住んでいるはずの自分の家族の一人。

その霊圧を察知した日向は、急いで懺罪宮の方へ瞬歩で移動し始める。

この時日向は気づいていなかった。何故自分が、殺気石でできた建物が多く作られる懺罪宮で、霊圧の数、そしてその霊圧が誰なのかはつきりと認識することが出来たのかを。

「死んでくれるなよ………！岩鷲！」

対峙

交わる月と日

圧倒的な白に

黒は

一護が十一番隊長・更木剣八と戦っている間にも、岩鷲達は何時間かほど掛けて、目的地に着いた。

「おら、花太郎！ さっさとコイツを連れて行こうぜ！」

「えっ？ ああ、はい！」

「お、おい！ ちよつと待て！」

ルキアの小さな体を肩に担ぐ岩鷲は、そのまま懺罪宮を花太郎と共に去ろうとする。しかし、ルキアはそれに乗り気ではなかった。

自分は裁かれるべき人間。それ故に、自分のためにこれ以上誰かに迷惑を掛ける事は出来ないと考えていたのである。

そして状況から言って、岩鷲たちは結局懺罪宮に着き、ルキアの牢の錠を外すことが出来た。このままルキアを連れだせば、岩鷲たちの目的は達することが出来たも同然である。

「は、離せ！ 私に構うな！」

「そうはいかねえぞ！」

「絵柄が完全に誘拐ですよ、岩鷲さん……………」

肩の上でじたばたするルキアを何とか押さえながら、岩鷲は牢の外に出ていく。

しかし――。

「「っ!!」」

突如、凄まじい霊圧が三人を襲う。そして三人の視線は、橋の先にいる人物へと向かっていく。

「あれは……………朽木白哉！ 六番隊長！」

岩鷲が知っているかのように、こちらに歩んでくる人物の名を発する。

実際に見たことはこれが初めてである。だが、話だけならば何度か聞いたことはある。現隊長の中で最も有名なのではないかと言われる人物が、力のない三人の前に現れるというモノは、最悪と言っている状況であった。

しかし、ここから自分だけ逃げるなんて出来る状況ではなかった。

岩鷲は、一か八かという雰囲気でも白哉に斬りかかる。その際に、ルキアは花太郎に渡した。

しかし、勿論真正面から斬りかかるつもりなどなく、刀を持つ逆の手で血涙玉を持ち、白哉に投げつけようとする。

だが投げるよりも前に、白哉は岩鷲の背後に瞬歩で移動し、投げようとした腕の二の腕を斬りつける。

鮮血が舞う。

(どうする? どうする!?)

岩鷲の頭の中はそれで一杯になった。

白哉が岩鷲に何かを言ったが、その内容も岩鷲の頭の中には余り入ってこなかった。だが、岩鷲の頭にあるのは、その内容に反抗するモノであった。

何とか時間を稼ごうと、挑発めいたことを叫ぶ。

「ゴチャゴチャうるせえぞ、お坊ちゃん!! あんたら貴族はどうだか知らねエが、この程度でビビッて逃げるような腰抜けはいねえんだよ!! 志波家の男の中にはな!!」

その言葉に一瞬目を見開いた白哉は、斬魄刀を鞘から抜く。

(何する気だ? あんな距離から……………)

不思議そうな岩鷲の後ろで、何かを察したルキアが叫ぶ。

「駄目です! 兄様!」

白哉は、斬魄刀を立てるように目の前に構える。

「散れ—— 『千本ぎ』——」

しかし、それよりも前に、白哉の目の前の地面に斬魄刀が突き刺さった。その光景に、この場に居た全員が驚く。

すると、その斬魄刀の持ち主であろう人物が、斬魄刀が突き刺さった場所に瞬歩で現れる。

「どうも、朽木隊長……………」

「……………何のつもりだ、天宮城日向」

日向は、突き刺さっていた斬魄刀を引き抜き鞘に納める。

睨み合う二人の死神の背後では、三人が茫然としてそれを眺めていた。しかし、その中でもルキアは殺気石に長時間居た影響で、二人が睨み合っているだけの霊圧だけでへたり込む。

「この程度の旅禍、朽木隊長が始解するまでもないと思ひまして。俺で十分でしょう」

「……………なら、すぐにでも捕えよ」

そう言われた日向は、一番近くに居る岩鷲に睨みを利かせる。そしてどんどん近づいてくる。

「お、おおい！俺だ！岩鷲だ！分かるだろ!!」

「……………」

「お……………おい!!」

「うおらああああああ!!」

「げふう!?!」

残り一メートル程まで近づいた後、日向は突然岩鷲にリアットを喰らわせた。その光景に、ルキアと花太郎は目を見開く。

その後日向は、リアットで橋の上に倒れた岩鷲の首を後ろからホールドし始めた。

「お……………おい!!入ってる!!入ってるう……………!!」

「(岩鷲、黙って聞け)」

「……………!?!」

首を絞めるふりをしながら、日向は岩鷲だけに聞こえる音量で話す。

「(お前はそのまま気絶しやがれ。俺は処刑日当日にルキアを助けるつもりだ。お前の事は後で牢屋から出してやる。いいな?じゃ、おやすみ)」

「(え?おやすみっておい……………!)」

話を終えた後は、日向は岩鷲の眼前に手を翳し、『白伏』で岩鷲の意識を落とす。その岩鷲を、日向は肩に担ぐ。

そして、岩鷲を持ったまま花太郎の下へと歩いていく。

「花太郎」

「あ、その、えっと、僕は、えっと……………!」

「とりあえず落ち着け」

「は、はい!!」

日向の言葉に、花太郎は腰を九十度曲げる。

その後に、日向はルキアの顔を眺める。

「……………ルキア。お前……………」

「日向……………」

二人の間に、暫しの沈黙が流れる。

しかしそれもつかの間、日向はすぐに振り返る。

「何だ、この霊圧?!」

日向は、それが数時間前に更木と戦っていた物だと察知する。そしてその巨大さにも驚く。

そして――。

(オレンジの……………髪?)

何やら、不思議な道具を使い空を飛びながら、白哉と日向の間にあたる場所に舞い降りた。その背中には、背丈ほどもある鏢のない出刃包丁のような刀があった。死覇装と思われる黒い着物の間からは、包帯が見え痛々しさを訴えている。だがその表情は、闘志に染められていた。

「一護……………!」

「一護……………?」

ルキアの調子から、ルキアの知り合いだとまず考える。

そして状況から察するに――。

「……ルキアの死神の力を奪った奴か」

「……テメーが、岩鷲をやったのか？」

一護と呼ばれた男は、凄まじい形相で日向を睨む。その際に、背中の刀——恐らく斬魄刀を取り出す。

「気絶させたのは俺だが、斬ったのは朽木隊長だ。あ、花太郎、岩鷲お願い」

気絶した岩鷲を花太郎に渡しながら、あっけらかんとした様子で、日向は答える。

(……どうすつかない?)

恐らく、一護という男は自分に敵意を向けている。

一瞬、日向の頭の中にルキアを一護に渡して、自分が白哉と戦うという選択肢を頭に浮かべたが、ここに近付いてくる霊圧にその考えを取りやめた。

(浮竹隊長……それに海燕も来てるな……)

隊長格が二人。いくら温厚な二人と言えど、相手が旅禍であれば容赦はしない。浮竹はともかく、海燕がルキアを連れた一護を追うだろうと考えた。

そんなことを考えている間にも、一護は日向とルキアの居る場所に歩み寄ってくる。

「……やるのか？」

「ルキアを渡してもらおうぜ」

二人の間に、霊圧の衝突が発生する。それに伴い、先程のようにルキアが霊圧に当てられてフラつく。それを日向は手で受け止める。

そして日向は斬魄刀を抜く。

「そいつぁ……出来ねえ話だな」

「日向、待てー！コヤツは……！」

「日向……？」

一護は思い当たるように日向の顔をじっくりと眺める。

「テメーが……！何で岩鷲の奴を！」

「あぁ……！」

とりあえず、一護が自分と岩鷲の関係を知っているとすることは分

かった。その上で、何故自分が岩鷲に手を出したのか、という所に憤りを感じているのだろう、と日向は考えた。

それよりも、一護の背後で白哉が『早く始末しろ』というような圧を、日向に凄まじく発している。その様子に日向は冷や汗を掻いていた。

「……………とりあえず、こっから離れて話すか」

「んだと……………!?!」

「破道の七十三・『双蓮蒼火墜』」

直後、一護の居た場所が青い爆炎に包まれる。しかし爆炎の中から、上の方向へ一護が飛び出す。

「てめっ……………!?!」

「単純だな、お前」

「なっ……………!?!」

上に飛び出した一護の上に、先に日向が左手を肩に担ぐように構えてスタンバイしていた。

「縛道の六十二・『百歩欄干』
ひやつぼらんかん」

「ぐっ……………!?!」

無数の光の柱が一護に向かっていく。それを一護は手に持つ斬魄刀——斬月で斬り落とす。しかし斬り落とす速さよりも、光の柱の数が勝り、一本が一護の左肩を貫き、そのまま一護は落下していく。ここの橋の高さは中々あるので、もし落ちたら大怪我をするであろう。やがて、二人に地面が接近する。

「う、おおおおおおお!!」

しかし一護は地面に当たるよりも前に、巨大な斬撃を地面に放つ。その衝撃により、一護は落下の衝撃を和らげ無理やり着地した。その間に日向は『吊星』でしっかりと着地した。

(今の技……………見たことあるような……………)

たった今一護が放った技に、日向はどこか親近感を湧かせる。だが、それを考えているよりも前に一護が日向に斬りかかる。それを日向は白皇で防ぐ。

「あんまり動かない方がいいんじゃないか?」

「うるせえ!!」

一護が叫び、その後幾度となく刃を交える。
そして互いに距離を取った後、日向が動く。

「破道の七十八・『斬華輪』ざんげりん」

日向は円状に並んだ鬼道の刃を、一護に向かって飛ばす。しかしそれを一護は斬月で斬り落とす。そしてそのまま一護が日向に向かって斬りかかる。

「うおおああ!!」

「ちっ……………!!?」

すると途中で、一護が斬月の柄に巻かれている包帯を片手で掴み、そのまま日向に包帯を掴んだまま投げしてきた。予想外の攻撃に、日向もギリギリの所で回避する。

「破道の九十・『黒棺』!」

それに対し日向は、黒棺で一護を包むようにする。見たことのない攻撃に戸惑いながらも、一護は投げた斬月を即座に回収し、そして斬月を振り下ろした。

すると、先程と同じ巨大な斬撃が黒棺を破壊しながら、日向に迫ってきた。

(これは……………『月牙天衝』じゃねえか……………!)

ようやく思い出した技を頭に浮かべながら、日向は月牙天衝を回避する。しかし完全に回避する事は出来ずに、少しこめかみに掠る。その際に、掛けていた眼鏡が衝撃で吹き飛ぶ。

「……………ふう、成程な」

「…何だ?今からでも退くか?」

一護が多少挑発しながら、日向に話しかける。

「……………お前、少し調子に乗ってるんじゃないか?」

「……………何だと?」

一護が怪訝そうな顔で日向を睨む。しかし日向はそのまま話を続ける。

「更木隊長を倒したからって、他の隊長やら副隊長やら、一対一なら勝てると思ってるんじゃないか?って訊いてんだよ」

「何……!?!」

心外だ、と言うような顔で一護は斬月を構え直す。

「『卍解』って知ってるか？」

「……卍解？」

やっぱりな、と日向は思う。

「卍解は、斬魄刀の真の姿。つまり始解の上だ。更木隊長を除いた隊長達は、全員がこの卍解を使える」

「何……!?!」

一護が驚愕の事実には驚く。

「始解状態と卍解状態での斬魄刀の戦闘能力の差は、人にもよるが、まあ、五倍から十倍ってところだ」

「何……だどっ……!?!」

一護の、斬月を握る力が強まる。

「……………それが今、何の関係があるってんだよ？」

「……………実際に、見てもらおうと思っただけ」

一護の目が見開かれる。

そして日向は、左手に黒い鞘を出現させ、それに斬魄刀を納める。

「卍解——『虚哭隸王』」

「っ……………!?!」

刹那、一護の首に冷たい感触が奔る。横目で見てみると、刀らしき細長い物体が自分の首に当たっているのだと一護は理解した。

「ぐっ!!」

一護はすぐさま、斬月を背中で振るう。

すると、瞬歩で日向が一護から少し離れた場所に現れる。

「はあ…はあ…はあ…!!」

(全く見えなかった……………!!)

一護は何とか斬月を構え直し、目の前の敵を見据える。目の前の死神は、先程までの黒い死覇装から白いロングコートへと服装が変化していた。それ以外、余り変化は見受けられない。

だが――。

(何だよ、この霊圧……………剣八とは全然違え……………剣八は全身を斬り刻むような霊圧だったけど……………コイツは、常に喉元に刀の切っ先を付けてくるような鋭い霊圧を発してきやがる……………!!)

「どうした?」

「っ……………!!」

「来ないならこっちから行くぞ?」

そう言った日向の周りからは、白い炎が爆発するように迸る。

(炎か!?)

「遅い!」

「ぐっ?!ああ!!」

一護が反応するよりも早く、日向が一護の頭を掴み、そのまま建物に投げつける。凄まじい勢いで投げられた一護は、建物の壁に叩き付けられ、そのまま崩れ落ちる。

(霊圧の移動を感じれなかった……………!?)

あの剣八でさえ、凄まじい速さで移動するときには霊圧を感じ取れた。しかし、今のこの男からはそれを感じ取れなかった。

「これが……………卍解……………なのか……………!?!」

「ああ、そうだ。他の隊長達は全員使えるんだよ」

そう言いながら、日向は一護の死覇装の胸倉の部分を掴む。そしてそのまま宙に持ち上げる。

「っーわけだ。そんな身体じゃ絶対に勝てねえ。と、言うわけで一旦休め」

「はっ……………っ?っぐ!!」

日向は、戸惑いの表情を浮かべる一護の顎に凄まじい掌打を喰らわ

せる。そして脳が揺れた一護は、そのまま意識を闇の中へと落とす。意識のない一護を、日向は肩に担ぐ。

なるべく傷を作らないように戦うのは難しいと日向は考えた。相手がそれなりだともっと難しくなるな、と。

ふくつと息を吐きながら、日向はチラツと後ろを見る。

「……………夜一さん。居るんですよね？」

「ほう、分かったか」

名前を呼ぶと、どこからともなく褐色肌の女性が現れる。

日向はそれを見て、一護を夜一へと投げる。そして夜一は一護を受け止める。

「余計なことしちゃいましたか？」

「いや。卍解それを身を持って知ったことは大きいじやろう。後の説明が省けた」

夜一はそう言って、足早にここから去ろうとする。それは、ここはかなり上にある橋の上に、まだ霊圧をいくつか感じるためであろう。

「……………コヤツを、三日で白哉坊よりも強くする」

「それはつまり？」

「卍解を習得させる」

「……………成程」

夜一の言葉に、日向は一瞬怪訝そうな顔をした。それもそうだ。卍解は才のある者でも十年の修練を経て、習得するモノである。実際に日向は十年以上かかったため、夜一の言う事がどれだけ無謀なことかと考える。しかしそれと同時に、夜一は以前にもまつ梨に一週間も経たずに卍解を習得させたこともあるため、一概に無理とも言えないと考えた。

「じゃ、旅禍に逃げられた理由は適当に作っとくんで、早く行っちゃってください」

「……………恩に着る」

それだけ言って、夜一は瞬歩で消える。

それと同時に日向も卍解を解く。

「……さて、どうしたモンだか」

野獣

獣は砥ぐ

獲物を殺す牙を

「うん……迷っちゃったね」

「……そんなにあっけらかんとして言われても困るんだけど……」

焔と雫の二人は、現在瀨霊廷の下水道を歩いていた。偶然見つけた道であり、人がほとんど通らないと分かり、幸運と思っていたが、まず具体的にどこに向かうかも決めておらずに尚且つ瀨霊廷の地形も解っていないため、迷うのは至極当然であった。

「それに、さつきから凄い霊圧が近くにあるし……」

「うん……」

先程、焔と雫が地上に出て様子を確認しようとした際に、かなり近くに巨大な霊圧があることを二人は察知した。そのため二人は、見つからないように地上に出ずに下水道を彷徨っていたのである。

「どうする？少し様子を見に……」

「でも危ないよ？ここは少しでも下水道を通って確実に……」

『はーなーしーてー!!はなしてください!!』

「ん？この声は？」

聞いたことのある声に、二人は自分たちの上を見る。少し耳を澄ませると、何やら足音のようなモノが聞こえ、さらに男女の言い合う声が聞こえる。

一つは中年と思しき男の声。

そしてもう一つは――。

「これは……織姫さんの声かな？」

志波家で出会い、そして突入時にはぐれた人物の内の一人。

「これはもしや……捕まってる感じ？」

先程からの井上の言葉を聞く限り、男に捕まってそこからどこかに連れて行かれている感じなのであろう、と二人は考えた。

「じゃあ助けに行かなきゃ!」

「あつ……姉さん!ちよつと!!」

一目散に地上に出る梯子に捕まる焔を雫が止めようとするが、止める前に焔は身軽に梯子を上つていき、地上に出るための蓋を開けた。

「待て——い!!」

「うおおお!!何だ、テメーは??」

突如、地面のマンホールのような場所から出て来た謎の少女に、井上を肩に担ぐ十一番隊平隊員の荒巻真木造はこれ以上ないほど驚く。

焔が、荒巻の肩に担がれている井上を見ると、反応もなくぐったりとしているのが窺えた。

「アンタ、井上さんに何したの!?!」

「あ、ああ!?!俺の肩を齧るから、少し気絶させただけだよ!!」

「嘘つけえ!!どうせいやらしいことでも考えてたんでしょ!!」

「はあ!?!」

構図的に、おっさんが女子高生を誘拐しているモノにしか見えないため、焔は辺りに少し響く程度の良い声で断言した。

その言葉に、荒巻は心外だというような顔で弁明をし始める。

「お、俺はだな、ただ旅禍の眼鏡の男に頼まれて、嫌々コイツをここまで運んできてやったんだぞ!?!」

「何で旅禍のお願いを死神のアンタが聞くのよ!色々話がおかしいでしょうが!!」

「それはだな、話すと結構長い話にな……!」

「言語道断!!君臨者よ、血肉の仮面・万象……!」

「ぎゃああああ!!鬼道を撃とうとするなあああ!!」

「姉さん!アイツは井上さんのこと担いでるんだから、鬼道で攻撃したりなんかしたら井上さんも巻き込まれるよ!」

「あつ、そっか」

そう言つて焔は構えていた腕を下ろす。それと同時に荒巻は、非常に疲れた顔でその場にへたり込む。

そして二人は、荒巻の前に立ちほだかる。

「まあとりあえず、井上さんのことは僕たちが連れて行く。そうすれば貴方に危害は加えません」

雫が丁寧な口調で荒巻に話しかける。それに対し荒巻は無言で首を縦に振る。

しかし、三人はある音に気が付き、音のする方向へ一斉に顔を向ける。

ドドドドツ、という音はだんだん三人に近付いてくる。

「あ——！見つけた——！！」

「……………小つちやい女の子？」

「く……………草鹿副隊長おおおおお!!」

桃色の髪の毛の小さな可愛らしい女の子を見た途端に、荒巻が先程の焔が地面から飛び出して来た時ばりのリアクションで驚愕する。そして二人は荒巻の言葉のある部分に反応する。

「副隊長？」

「うん…そーだよ！」

傍から見れば副隊長に見えない風貌の女の子に、焔は近づいてゆく。

そしてその小さな体を抱き上げ——。

「可愛い——！！」

「ちよ、姉さん！見た目は小さくても、副隊長なんだよ!!」

焔はそんな忠告を聞かずに、やちるに頬をすりすりさせる。

「ねえねえ。いっちー知らない？」

「いっちー？」

「うん！旅禍の、オレンジの髪の人！」

「それって一護さんじゃないかな？」

やちるの問いに、雫が答える。

「そーだよ！」

「うくん……………私達も皆のこと探してるしなあ……………」

「そうなんだ……………」

焔の言葉に、やちるが残念そうな顔をする。

しかしすぐに元の明るい笑顔に戻り、やちるは話し始める。

「じゃあね、剣ちゃんがいっちーのこと探してるから、一緒に探そうよ!!」

「お、いいねー!」

「姉さん!?!」

言ってしまうば敵である女の子と仲良くする焔に、雫が慌てて止めようとする。

この後、結局やちるが全員を連れて、ある場所に行くのであるが、その場所で旅禍である三人が戦慄することになるのはまた別の話である。

「ふにゃあ……………」

牢屋の目の前で見張りをしていた男が、腑抜けた声を出してその場に崩れていく。

それを見計らって、雛森は鬼道で牢屋の壁を吹き飛ばす。

「藍染隊長……………」

乱菊から渡された藍染の遺言書。それに書かれていたのは衝撃の事実。信じたくない、だが一番信頼出来る者が書いた内容。

雛森は戸惑っていた。

だが雛森は歩みを止めずに、ある人物の元へと走っていく。

「どこに行くんですか、雛森副隊長」

「っ!?!」

しかし、目の前に瞬歩で現れた人物に雛森は足を止める。

「宮能さん……………」

十番隊第三席・宮能まつ梨。

皮肉にも、今から会いに行く隊長の部下である。

「……………外で見張っておいて正解でした」

「……………今から日番谷くんのところに行かなきゃダメなの。そこをどいて」

静かであるが、二人の間に霊圧の衝突が起こり、辺りの大気が少し

揺れ始める。

「駄目です。牢に戻って下さい」

「どいて」

「落ち着いて下さい、雛森副隊長………！今、貴方は少し混乱しています！」

「っ………今から藍染隊長の仇を取りに行かなきゃ駄目なの!!そこをどいて!!」

「雛森副隊長!!」

まつ梨の言葉にもはや答えず、雛森は斬魄刀を抜く。

「弾け——『飛梅』!!」

「なっ………!?!」

七支刀のような形状になった刀から火球が奔り、まつ梨の居た場所へと向かっていく。それをまつ梨はギリギリの所で回避する。

「落ち着いて!!」

「怪我したくないよね!!だったら、そこをどいて!!」

そう叫んで雛森は再び火球をまつ梨に奔らせる。

仕方なしと、まつ梨も斬魄刀を鞘から抜く。

「断ち払え——『虎淘丸』!!」

大剣のような形状になった斬魄刀を振るい、まつ梨は火球を断ち切る。そして次々と自分に飛来してくる火球を、一つ一つ斬り伏していく。

(日向は、これを分かったから………くっ!)

日向が自分に雛森を気に掛けるよう言った理由が、今分かった。

藍染が死んだとなれば、藍染に心酔といったレベルで固執している雛森は普段からは考えられないことを起こすはず。

「破道の三十一・『赤火砲』!!」

「くっ………!?!」

巨大な火球に紛れて放たれる一つに小さな火球を、まつ梨は左腕に諸に喰らう。

「はぁ……はぁ……はぁ……!!」

自分は下手に反撃出来ない。その考えがまつ梨の足かせとなって

いた。

そんな防戦一方のまつ梨に、雛森は容赦なく刃を振るう。

そんな二人に一人の人物が近寄る。

「まつ梨！雛森！そこまでだ!!」

「っ……………隊長!?!」

「っ……………シロ……………ちゃん……………!?!」

銀髪を靡かせる少年のような見た目の人物。十番隊隊長・日番谷冬獅郎。だが、ここには最も来てはいけない人物。

雛森の刀を握る手の力が強まる。

「ああああああっ!!!」

「なっ……………雛森!?!」

冬獅郎を見た雛森は、すぐさま標的を冬獅郎に移す。しかし雛森と日番谷の間に、まつ梨が入り込む。

「どけえ!!」

「くっ……………!!」

まつ梨は、何かを決したような顔で虎洵丸を雛森に投げつける。それを飛梅で弾く雛森だが、その隙にまつ梨が雛森の懐に入り込む。そしてまつ梨は、勢いをつけた右拳を雛森の鳩尾に打ち込む。雛森は短いうめき声を上げた後、その場に倒れこむ。

「はあ……………はあ……………すいません、日番谷隊長……………」

「……………いや、悪かった。俺がもう少し早く来てれば、お前がそんなになることもなかったのにな……………」

冬獅郎は、済まなそうな顔でまつ梨に謝る。

「……………隊長。藍染隊長の手紙を確認しましょう……………」

「……………分かった。雛森は俺が連れて行く」

「はい……………」

まつ梨が示唆したのは、藍染の手紙に書かれていた内容のせいで、雛森がこのような暴挙にでたのではないかということだ。

その提案に冬獅郎も賛成なようで、すぐにでもという様子で雛森を背負う。

「……………行くぞ」

「……………はい！」

雛森が脱獄していた時と同じくして、別の場所でもある人物が看守を殴り倒して脱獄をしていた。

「よし……………行くぜ、蛇尾丸!!」

「傷の具合はどうだ？恋次」

「……………日向か。どうした、俺を捕まえにでも来たのかよ？」

まるで恋次が出てくるのを待ち構えていたかのように、通路の角から日向が出てくる。しかし二人の間には不穏な空気は流れていない。

「まさか……………行くんだろ？」

「おう。たりめーだ」

そう言って、恋次は日向の横を通り過ぎる。

「オメーはどうすんだ？」

「ちよつと行くところがあるからな。そこに行つてからだ」

「そうかよ」

軽く言葉を交わした後、二人は別々の方向へと歩き出す。

それは、これ以上言葉を交わす必要がないと判断したからだ。

「ホント、気が合うよな……………」

日向はその後、岩鷲が入れられているという牢屋に向かっていた。一度、鍵を奪って出そうかと考えたが、やはり面倒だと考えてそのまま来た。

「こつちか？」

時々、『ご乱心でありますか、天宮城三席殿お——!!』と言って看守たちが襲いかかってきたりもしたが、とりあえず延髄にチョップを一撃加えて気絶させて日向はここまで来た。因みに、日向にそこまで罪悪感はない。

「お、ここか？」

「あ……日向、てめ——!!」

牢屋の前に立つと、中に居た者達の中から岩鷲が飛び出し、泣きながら鉄柵にすがりつく。

「まあ、待て。今から出してやるからよ」

「お、そうか？」

「ちよ、ちよつと待て！君は一体誰なんだ!？」

二人が会話を進めていると、中から眼鏡を掛けた男が焦りながら日向に話しかけてきた。日向は面倒臭そうな顔をしながら、斬魄刀を鞘から抜く。

「十三番隊第三席、天宮城日向。ルキアの同僚だ」

「お、おい、それで鉄柵斬るのか？」

「ほいつと」

「ぎゃああ!？」

岩鷲が恐る恐る訊くが、日向は間髪入れずに鉄柵を斬り裂く。そして、出る隙間を確保するために、今斬った場所とは違う所も斬り裂く。

岩鷲はかなり驚いたのか、牢屋のベッドの布団にくるまりながら泣いている。その際に、『お前容赦なくなつたな……』と呟いていたが、日向はスルーしていた。

「よし、じゃあ次に手錠取るから……岩鷲、お前で実験する」

「実験って何!?実験って何!?腕でも斬られるの、俺!？」

「鋭いじゃねえか。お前が変な動きをしたらスパっていつちやう感じだ」

「そんなヤベエことしたくねえよ!!」

「まあ、別に鬼道でも取れるんだけどな」

「そつちにしろ!!」

日向と岩鷲のコントのようなやり取りを、中に居た石田と茶渡は茫然と眺める。とりあえずこの人物が味方であることに、二人は安堵もしていた。

そして日向は、鬼道を応用し手錠を解く鍵を作り、順に三人の手錠を外していく。

そんな四人は、あることに気が付く。

「……………何か音しねえか？」

「これは……………更木隊長の霊圧だな」

「なっ……………更木って……………」

岩鷲が言い終える前に牢屋の天井が崩れ落ち、その穴から人影がいくつも見える。そして天井が崩れ落ちた際の煙が晴れると、岩鷲の顔がどンドン曇っていく。

「ぎ……………ぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ!!!更木剣八!!十一番隊長
!!」

先程の日向の突然鉄柵斬撃の時よりも泣きながら、岩鷲は目の前の人物の名を叫ぶ。その後、続くように降りてくる人物の内、弓親が岩鷲と言いついていたが、それも日向はスルーした。

そして最後に降りてきた人物達に、日向は驚く。

「ひゆう兄い!!」

「兄さん!!」

「なっ……………焔!? 雫!?」

志波邸に居る筈の妹と弟がここに居る事に対して、日向はどうしたモノかというような表情を浮かべる。

焔はすぐに日向に飛びつき、目じりには涙を浮かべる。

「ひゆう兄い! 私達、ルキアが殺されちゃうって聞いて、それでじつとしてられなくて……………!!」

震える声で訴える焔の頭を、日向は優しく撫でる。

「莫迦野郎。危ない真似して兄ちゃんのこと心配させんじゃねえよ。お前らが来なくても、俺はルキアを助けるつもりだったんだからよ」
「っ……………ひゆう兄大好き!!」

その言葉に焔は感激したような顔をして、日向を抱きしめる腕の力を強める。それを雫は穏やかに眺める。

「雫……………こんな姉、お守が大変だったろうに……………」

「え? いや……………まあ……………」

「ちよつと!! どういう意味!?!」

日向と雫のやり取りに、先程まで泣いていた焔はすぐさま憤怒の形

相となる。その光景を、周りにいた者達は苦笑いしながら見ていた。

そして人数が増えたところで、全員で処刑場まで行くことになった。

実際、一番霊圧探知能力が高い日向が道案内をすべきなのだが、剣八の肩に乗るやちるが『あたしやる!!』と駄々をこねたので、仕方なくやちるに道案内を頼んでいる。

そして案内どおりに進んで行き止まりに着く度に、一角がやちるに何かしら癪に障ることを口走り、やちるに一発を貰っているという状況が続く。

そしてまた行き止まりに着き、一角がやちるに余計なことを口走り齧られている途中で、剣八が口を開く。

「ゴソゴソしやがってみつともねえ連中だ……出てこいよ。霊圧消して隠れるなんざ、隊長格のすることじゃねエだろうが」

すると、その言葉に反応するように返事が返ってくる。

「……………随分な口の利き様だな。自分が何をしているのか解っているのか?」

そして剣八たちの前方の建物の屋根に、ある四人が現れる。

「旅禍を連れて何処へ逃げる? 敗れて誇りまで失ったか、更木」

その中に居た東仙が、凄まじい霊圧を剣八たちに浴びせる。すると荒巻などの霊圧の低い者は顔中に汗を掻き、そうでない者も冷や汗を流す。

だがその中から、白髪の青年が一人出てくる。

「おかしいな……………隊長格の皆さんは、今双匣に集まってるんじゃないんですか?」

「……………天宮城日向。君は、もつと聡明な人物だと思っていたよ」

挑発するような日向に、東仙が残念そうな表情で日向に語りかける。

しかし、それを日向は鼻で笑う。

「俺と貴方の正義は違うってことですよ」

「……………共に瀟靈廷を守護する者として、残念な答えだ」

「はっ……………あんたがそれを言うか、『東仙』……………!!」

「天宮城。口が過ぎるぞ」

突如として振りかざされる刃を、日向は平然とした顔のまま斬魄刀で弾く。

弾かれた檜佐木は、距離を取る。

「急に斬りかかるなんて危ないじゃないですか、檜佐木さん」

「お前こそ、こんなことをするヤツとは思わなかったぞ」

そう言つて檜佐木は斬魄刀を日向に向ける。しかし日向は怯まな

い。

「残念ですけど、檜佐木さんに俺の全部見せたことないですよ？」

「そりゃそうだろうな」

「ま、別に俺は血迷つてもなんでもありませんから、これが俺だと思つてください」

「だが、簡単に行かせると思うか？」

檜佐木はそう言つと、瞬歩で再び日向に肉迫する。

「破道の四・『白雷』」

「っ!!?」

しかし、今まさに斬りかかろうというところで、一筋の閃光が檜佐木の頬を掠る。その事態に、檜佐木は思わず距離を取る。

掠った所を撫でてみると、手に血がべったりと付く。

「檜佐木さん、俺は言いましたよ？檜佐木さんに俺の全部見せたことない、つて……………本気の俺とあんた、どっちが強いんでしょうね……………?」

「っ……………てめえ……………!!」

「下がれ、天宮城」

しかしそんな日向の前に、剣八が割つて入る。そして剣八は、鞘の

ない斬魄刀を目の前の四人に向ける。

「四対一か……試し斬りにや、ちつと物足んねエがな」

剣八が狂気染みた笑みで、隊長格の四人を睨む。それを見た日向は、素直に一步下がる。

そしてやちるが他の者達を連れてこの場を離れようとする。

「剣ちゃんもはやく来てね——!!」

「ああ、すぐ行く」

「挑発のつもりか、それとも本気で言っているのか……どちらにしても君は、どうやら誇りだけでなく——……正気まで失ってしまつた様だな……更木」

「ハッ、『正気』かよ——……生憎そんな面倒なモンは、最初から持ってた覚えは無えな」

陰陽

夜天に浮かぶ宝玉

次第に欠けてゆくそれに

貴方は瞼を閉じる

そして 瞼の隙間に再び光が差し込んだ時

貴方は瞼をそっと開ける

そして私は

貴方の瞳に映る月ばかりを眺めてしまっているのだ

「朽木ルキア。何か……言い遺しておくことはあるかの？」

「はい、一つだけ」

「イヤベエぞ清音!! 処刑が始まったクセえ!! 隊長まだかよ!？」

ある場所の窓の枠に手を掛けながら、十三番隊第四席・小椿仙太郎が大声を上げる。かなり切羽詰った状況であるため、声が大きくなるのは仕方ない事なのだが、他に居る者達との距離を考えると些かデカすぎるといったことが事実である。

「うるっさい!! 聞こえてるわよ!! いちいち怒鳴らないでよ、ワキクサアゴヒゲ猿!!!」

仙太郎の声に不快な顔をする清音は、自分たちの隊長が入っている部屋に顔を向ける。

「隊長!!」

「オメーも怒鳴ってるじゃねーか」

そう言っつて海燕は、清音の頭にチョップする。涙目を浮かべる清音だが、海燕は気にせず部屋をノックする。

「隊長! 朽木の処刑が始まりました!! 早く……」

最後まで言い終える前に、ノックしていた部屋の扉が開く。そこからは、巨大な盾と棒のようなモノを持った浮竹が出てくる。その後ろには、褐色肌の青年が立っていた。

「すみません、浮竹隊長。時間が掛かってしまい……………」

「いや、気にしないでくれ、朝霧くん。君のおかげで、思ったよりも封印の解除が速く済んだ。これでいける……………」

「これで、ルキア殿を……………」

「ああ……………中央四十六室への進言も通らなかった今……………最早手段はこれしか無い……………——……………双☒を、破壊する」

浮竹の持っているモノは、双☒を破壊するための道具。その持ち主は、天賦兵装番である四楓院家のモノであった。浮竹は断られる覚悟をして四楓院家当主補佐である朝霧に、貸してくれないかを頼みにいったところ、事情を理解してくれた朝霧は、自分の立場を差し置いてこの道具を浮竹に貸し出すことにしたのであった。

「「はいっ!!」」

浮竹の『双☒を破壊する』という言葉に、部下である三人が決心したように返事をする。

同じ頃、双☒に向かっていた一行は、じつと双☒の丘を見つめながら走っていた。日向は大分前に、一人で瞬歩で突っ走っていき、残りの者達を置いてけぼりにしていた

そして、やちるがうくん、と言いながら口に出す。

「……………始まったかな? 処刑」

やちるの言葉に、隣を走っていた石田が驚いたような顔を見せる。

「えっ!?! それなら急がないと……………」

「……………あたしも先行くね」

「ええっ!?! なんで……………」

「処刑はどっちでもいいんだけど、あそこにはいつちーが来てるかも
しんないからね。いつちーは手伝ってやんないとね」

やちるの言葉に、井上は少し目を見開く。

「あ……ありがとう……」

「あはっ！へーんなの！なんでぶるんがお礼？いつちー助けんのな
んてあたりまえじゃん！だっていつちーは………剣
ちゃんのともだちだもん」

『ともだち』という言葉に、井上のみならず石田や茶渡、そして志波
家の三人も目を見開く。

「そんじや行くね！つよいやつはあたしが片しとくからねっ！マキ
ちゃん、ザコはよろしく♪」

「了解です、副隊長」

真樹の返事を聞いた瞬間に、やちるは瞬歩ではなく普通のダツシユ
で、井上たちの前から姿を消す。その余りの迅さに、通過した場所
には砂塵が舞っている。

「ありがと……やちるちゃん………」

ルキアは、今まさに解放されようとしている双匣の矛を眺めてい
た。

だがその瞳は、矛ではなくどこか虚空を見つめている様にも感じら
れる。

（あの時市丸に乱された心にも、少しずつ静けさが戻ってきている
……）

ルキアはここに来る以前に、懺罪宮の橋で市丸に遭遇した。そこで
市丸の口から出てきたのは、ルキアを助ける、といった根も葉もない
言葉。だがそれにルキアは一瞬、生への希望を見出してしまった。

『嘘』

だが、すぐさま目の前で放たれた言葉により、ルキアは自分の心の弱さを呪った。

(総隊長殿の約束のお蔭か、或るいは、心を見出し無様にも生に縋りつこうとする私を、兄様が一部の隙も無く突き放してくれたお蔭かも知れぬ)

そう考えながら、双☒の近くで並んでいる隊長格の中に居る白哉に目を向ける。

「……ありがとうございます……兄様……」

そしてすぐに、ルキアの足元にある台座から、三つの立方体が浮かび上がる。その内二つは、ルキアの両手にそれぞれとりつき、残った一つは足にとりつく。

そのままルキアは、双☒の磔架の上の方へと昇っていく。

「……七緒ちゃん」

それを茫然とした様子で見ていた、八番隊副隊長・伊勢七緒は隣に居た隊長の京楽に声を掛けられる。

「そんな辛い顔しなさんな。ボクまで悲しくなっちゃうじゃないの」

その言葉に、心外だという様な表情で、七緒は視線を京楽から反らす。

「……辛くて、このような顔をしている訳ではありません」

そうしている内にも、双☒の矛の解放は進み、やがて矛の刃の部分から凄まじい量の炎が噴き出し、矛全体を包み込むように炎が舞い上がる。

「んな……何だ!?何が起きてんだ、こりやあ?」

凄まじい光景に、並んでいた大前田は顔中に汗を掻き、一步下がりをしながらその続きを見る。

そして、矛は地面を離れ、その姿を変えていった。

「こりやあ驚いたね……」

その姿に、京楽もいつもの様子ではいられない。

ルキアが居る磔架の前に、巨大な炎の鳥が現れる。

『燬燬王』

「双の矛の真の姿にして、の最終執行者。彼が罪人を貫くことでは終わる」

業炎という言葉ですら足りない程、猛々しく燃え盛る燬王に対して、ルキアの心は静かに、落ち着いたモノとなっていた。

——恐ろしくはない。

走馬灯のように、記憶が次々と甦る。

——私は良く生かされた。

風が、肩にかかる髪を靡かせる。

——恋次達と出合い。

成吊で出会った家族。

——兄様に拾われ。

理由はどうあれ、自分を家族として迎え入れてくれた兄。

——海燕殿に導かれ。

貴族である自分を、温かく迎え入れてくれた上司。

——そして、一護に救われた。

こんな自分を、必死に救おうとしてくれた友。

——つらくはない。

——悲しくはない。

——悔いはない。

——心も遺してはいない。

——ありがとう。

様々な人物が頭を過る内に、一人だけがこちらに笑顔を見せてくれた。

——どうせ、目の前で言う勇気などなかったのだから、最後に言っておこう。

「好きだったぞ——……日向」

——さよなら。

炎が、ルキアを包む。

「よう」

中々終わらぬと思いきや、そこには見知った一人のオレンジ髪の死神が立っていた。

「——……い……い……」護……！

何を言うべきか。

「莫迦者!!何故また来たのだ!!!」

「あ……あア!?!」

一護は予想外といったような様子で驚く。

「貴様も、もう解っているのだらう!貴様では兄様には勝てぬ!!今度こそ殺されるぞ!!」

思い浮かぶのは現世での場面。為す術なく、一護は白哉に斬り伏せられた。

「私はもう覚悟を決めたのだ!!助けなど要らぬ!!」

今度こそは、と。

「帰れ!!」

二人がそんなやり取りをしている最中、丘の上でその光景を見ていた碎蜂は驚愕していた。

小さくて完全には見えないが、明らかに旅禍を思われる男は、背中に背負う斬魄刀で燧燵王を止めている。

「莫迦な……止めたというのか……!斬魄刀百万本に値する破壊能力……その双匣の矛を斬魄刀一本で……奴は……奴は何者だ!!!」

その光景に、他の隊長格達も各々の様子を見せている。

「七緒ちゃん……もしかしてあの坊やが旅禍の彼が言ってた……」

「はい。外見的特徴も隊員達からの情報と一致します」

京楽の問いに、副官の七緒がテキパキと答える。そして京楽は、意味深な笑みを浮かべながら笠を深く被る。

「結局間に合ったのは……彼らの方だったって訳ね……」

すると、燧燵王が甲高い声を上げ、一護と少し距離を取る。その行動に抑えるようにしていた一護も少し体勢を崩す。

「第二撃の為に距離をとったか……いいぜ、来いよ」

斬月を構える一護だが、それをルキアは焦った様子で止めようとする。

「よ……止せ一護!もうやめろ!!二度も双匣を止めることなどできぬ!!次は貴様まで……」

「……………つたく、素直に助けられろっつーの」

聞き慣れた声が、ルキアの鼓膜を揺らす。

ルキアの襟架のすぐ横で、一人の白い衣を纏う男が印を組む。

「軍相八寸退くに能わず。青き門・白き門・黒き門・赤き門・相贖いて
大海に沈む。竜尾の城門!!」

燬穀王の目の前に巨大な壁が現れる。それに燬穀王は少し狼狽え
たような様子を見せる。

「虎咬の城門!! 亀鎧の城門!!」

そして次に、両隣にまた別の壁が出現する。

「鳳翼の城門!!」

そして、今度は燬穀王の頭上に壁が出現する。

「——『四獸塞門』!!」

最後の詠唱と共に、燬穀王を巨大な結界が包み込む。それに対し燬
穀王は必死に結界から出ようとしますが、中々破壊することが出来な
い。

地上で眺める者達の中で、『何だあの鬼道は……!?』と眩く者も居る
が、それは仕方のないことである。この鬼道は、日向が仮面ヴァイザードの軍勢の
アジトでの修行の際に、元副鬼道長のハッチが独自で開発した術で
あって、それを教えてもらったモノなのである。

「ひゅ……日向!? どうして、ハッチ!?」

すぐ近くに居る友に、ルキアは声を荒げる。実は日向は一護よりも先に着いており、卍解をした状態で燧燵王に対抗出来るように、八咫鏡を準備していたのであるが、一護が飛来してきたのを確認し、霊圧を消す能力を解いて陰から出てきたのである。

「おい、これどんくらい持つんだ？」

「あく……………五分くらい？」

「短いじゃねえか!!」

「うるせえ!!双匣の威力嘗めてんじゃねえよ!!無防備の隊長を殺せる威力あんだから、五分で十分だろうが!!」

「私の話を聞け!!」

ルキアを無視して言い合う二人に、ルキアは堪忍袋の緒を切らす。しかしそんな茶番を繰り返していると、結界の一部にヒビが入る。

「……………前言撤回。一分だ」

「大分短くなってんじゃねえか!!」

かなり心もとない発言に一護が声を荒げる。

「逃げるには十分だろうが」

「おい!!しっかりしやがれ!!」

どこか悟りきったような日向に、一護は思わず斬月を投げつける。

「あぶねえ!?わーったよ!!別の方法で時間稼ぐからそれでいいだろうが!!」

そう言って日向は斬魄刀を構え、その切っ先を燧燵王に向ける。

「千手の涯。届かざる闇の御手。映らざる天の射手。光を落とす道。

火種を煽る風。集いて惑うな、我が指を見よ。光弾・八身・九条・天

経・疾宝・大輪・灰色の砲塔。弓引く彼方、皎皎として消ゆ——

破道の九十一・『千手皎天汰炮!!』」

燧燵王が結界を破壊するタイミングで、無数の光弾が燧燵王に向かって降り注ぐ。無数の光弾は燧燵王に命中し、燧燵王は苦しそうな鳴き声を上げる。

そして爆炎に包まれる燧燵王の首に何かが巻きつく。その元を辿ると、浮竹が何かの道具を携えていた。

「よう、この色男。随分待たせてくれるじゃないの」

そんな浮竹に、京楽と七緒が近くに寄っていく。

「済まん、解放に手間取った。だが……………これでいける!!」

そう言っつて浮竹は盾らしきモノにの溝に、自分の斬魄刀を入れる。それと同時に京楽もまた、自分の斬魄刀を浮竹とは逆向きに盾に入れる。

すると、燧燬王に巻きつき縄のようなモノに何かが辿つてゆき、そして数秒もすると燧燬王は跡形もなく消え去った。

それを見た一護は、すぐさま礫架に乗り、斬月の柄に巻きつく布を持ち、頭上で振り回す。

「な……………何をやる気だ、一護?!!」

「決まっつてんだろ。壊すんだよ、この……………処刑台を」

その言葉にルキアは驚愕する。

そしてそれを止めさせようと、必死に双匣の礫架の強度について説明する。

だが――。

「いいから、黙つて見てろ」

そう端的に言っつて、一護は斬月を礫架に突き立てる。そして凄まじい衝撃と爆音が辺りに響いてゆく。

「……………助けるとか帰れとか……………ごちゃごちゃうるせーんだよ、テメーは。言っつたろ。テメーの意見は全部却下だつてよ」

そう言う一護の左腕には、ルキアが抱えられている。

「……………今度こそ、助けに来たぜルキア」

「……………礼など言わぬぞ……………莫迦者……………!」

そう強がるルキアだが、目じりには涙が浮かんでいる。

そんな中、一護は隣に佇んでいる日向を見る。

「ルキアを頼んでいいか？」

「たりめーだ」

日向の返事に、一護はルキアを投げて渡すことにより返事をする。日向は投げて渡されたルキアを、しっかりと両腕に抱き寄せた。

そんなシチュエーションの中で、ルキアは日向を直視出来なかった。

「……………おい、ルキア。何でこっち見ねーんだよ？」

「……………黙れ、莫迦者」

それもそうである。ルキアの顔は今まさに、茹蛸のように真っ赤になっっているため、日向に顔を見せることは出来ないのである。

そんな中、下では鬼道衆の者達が、たった今来た者により叩きのめされていた。

「恋次!!」

「ルキア!!!」

幼馴染である二人は、互いに無事を確認して安堵の表情を浮かべる。

その光景を見て、日向は穏やかな笑みを浮かべる。

「ルキア、行くぞ」

「え？」

間髪入れずに、日向は瞬歩で一瞬に恋次の下まで降りる。

日向は自分で行ったことなので平然としているが、ルキアは先程とは違い顔を真っ青にしている。

「た…………たわけ!!降りるならちゃんと言え!!びつくりするではないか!!」

「別にいいじゃねえか……………恋次、ルキア持ってきてくれ」

「お……………おう」

ルキアは今度は恋次へと渡る。それに対し、ルキアは若干残念そうな顔をするが、二人は気付かない。

すると、上の方から一護の声が響く。

「日向ア！恋次イ！てめーらの仕事だ！死んでも放すなよ！」

一護の言葉に恋次は表情を変え、すぐさま双拳から離れるように移

動し始める。

その横を、日向が護衛するように並んで走る。

「恋次、俺が護衛する。だから気にしないで走れ」

「おうー！」

「ま……待て二人とみよ……!?!」

ルキアが、何か言いたそうにするが、すぐさま日向がルキアの頬を右手で挟む様に掴む。

「あの一護って奴と同じだ。俺はオメーの意見は聞かねエ。俺は、俺がルキアを助けてエから動いてんだ!!解ったな!?!」

そう断言して、日向は再び前を向いて走り始める。

「莫迦者たちが……!?!」

幼馴染の腕の中で、ルキアはそう呟いた。

戦嵐

激闘の幕開け

刀を持つは

誇りか

命か

双匣の丘から、ルキア含む三人が逃げていく。その光景を茫然としていた者達も居たが、その者達は碎蜂の声によって我に返った。「何を呆けておるのだ、うつけ共!! 追え!! 副隊長全員でだ!!」

その声に、雀部、大前田、そして勇音が反応する。追いかけてようと駆け出すが、双匣の礫架の上に居た一護が、瞬歩で三人の前に回り込む。一護は背負っていた斬月を地面へと刺し、立ちはだかるように佇む。

「邪魔だア!!!」

大前田が叫んだ瞬間に、追いかけていた三人は斬魄刀を抜く。

「奔れ—— 『凍雲』!!」
いにくも

「穿て—— 『嚴霊丸』!!」
ごんりようまる

「打つ潰せ—— 『五形頭』!!」
げげつぶり

三人を迎え撃とうとする一護は、悠然と佇んでいた。だが、一護の後ろから二人ほど現れることにより、それは崩れる。

「水天逆巻け—— 『振花』!!」
ねじはな

「薙げ—— 『蔭風』!!」
かげかせ

槍状の斬魄刀を持った男は雀部に立ち向かっていき、忍者刀を持つ者は勇音に立ち向かっていった。それを驚きながら横目で見ていた一護は、斬魄刀を使わずに大前田の五形頭に対し殴打を繰り返して、そのモーニングスターのような形状の斬魄刀を破壊しながら、大前田を吹き飛ばす。

「おい！旅禍！こっちは任せろ!!」

振花を持つ死神——志波海燕は、旅禍である一護にそう言った。それに対し一護は黙って頷く。そうしている間にも、蔭風を持つ死神——四楓院朝霧は、勇音との戦いを終えようとしていた。

朝霧は、持ち前の足の速さで勇音を翻弄しながら後ろを捕え、延髄に向かって手刀を放った。延髄に手刀を喰らった勇音は、そのままその場に崩れ落ちる。

「申し訳ございません……!」

そう言つて朝霧は、崩れ落ちる勇音をしっかりと腕で支える。

だが、その朝霧を瞬歩で肉迫してきた碎蜂が捕える。首に手を掛けようとしていたが、寸での所で朝霧には防御される。

「四楓院……貴様、何をしているか解っているのか!？」

「解っています……そしてこれが、私の考え抜いた答えです!!」

「っ……ならば、裏切り者は私が排除する!!」

そう言う碎蜂は、一度朝霧と距離を取り、何度か交錯する。その間には、かなりの速度で攻防が行われていたが、目で捉えるのは難しい程の速さであった。

そして、海燕と雀部も剣戟を繰り広げていた。

「——……志波副隊長。貴方は、もっと聡明な方だと存じていましたぞ」

「それは光栄です、雀部副隊長……でも、これは俺が考え抜いた答えなんスよ……!」

そう言つて海燕は振花に波濤を纏わせ、それを雀部に振るう。それに対し雀部は瞬歩で距離を取る。だが、その瞬間海燕は一気に距離を詰めて雀部の肩を掴み、そのまま双拳から離れようとした。

だが、雀部も何も抵抗しない訳がなく、斬魄刀を自分の目の前に構えた。

「濡らせ——『巖靈丸』!」

「なっ……ぐあ!？」

雀部が解号のようなものを唱えた途端に、空は曇り始め暗雲が立ち込め、そこから一筋の落雷が海燕に向けて落ちた。その雷撃は、海燕

が触れている雀部にも伝わるが、雀部は堪えた表情は見せない。

そのまま二人は双匣の丘を落ちていった。

その光景を、海燕の上司である浮竹は焦った顔で見っていた。

「海燕!!」

「動くな」

叫んだ浮竹の前に、元柳斎が立ちはだかる。その威圧感に、浮竹は汗を一筋流す。

「元柳斎殿……!」

「罪人を連れて逃げたのは副隊長。斬って挿げ替えれば替えは利く。後でゆるりと捕えよう……じゃが儂が許せんのはおぬしらじゃ。おぬしらは隊長として、してはならん事をした。それがどういう事か、わからんおぬしらじゃなからう……」

「よおし、仕方ない!!それじゃいっちょ逃げるとしようか、浮竹エ!!!」
元柳斎の威圧感に圧倒されていた浮竹は、肩を京楽に掴まれることによりハツとする。そして京楽はそのまま、双匣の丘から副官である七緒と共に飛び降りた。

それに対し、浮竹は焦ったように口を開く。

「待ってくれ京楽!まだ俺の部下が!」

「落ち着け。あんな処で山じいと戦ってみろ。それこそ皆、巻き込まれて死んじまう」

その言葉に浮竹は顔を歪ませる。全ての死神の中で最強と謳われる元柳斎が、始解をしただけで双匣の丘が焼け焦げる光景が、容易く想像できたからである。

「皆なら大丈夫さ。感じないか?ここへもう一人、俺達の味方が近付いているのを……」

「はぁ……はぁ……!」

朝霧は、碎蜂との攻防を繰り広げその場所を森へと変えていた。だ

が、碎蜂は目立った怪我はなく、逆に朝霧は頬などに打撃痕が残っていた。

これが、隊長とそれ以下の実力。幾ら朝霧が努力しようと、碎蜂はその上をいつていた。

「……………四楓院。貴様の行いは十三隊席官としての矜持を忘れた恥ずべき裏切りだ。だが安心しろ。これ以上、恥を晒さぬ様今すぐ私が葬ってやる」

「なら、そうならぬ様、次は儂が相手しようかの？」

「!!」

懐かしい声に、二人の視線はその声の方向に振り向かれる。

「夜……………姉様……………!」

「久しぶりじゃのう、朝霧。見違えたぞ」

夜一の言葉に、朝霧は一瞬目頭が赤くなる。逆に碎蜂は、その姿に静かに佇んでいた。そして碎蜂は、斬魄刀を構えた。

「……………夜……………!」

新旧、二番隊隊長兼隠密機動刑軍軍団長の戦いが、幕を切った。

一番隊副隊長・雀部長次郎と十三番隊副隊長・志波海燕の戦いも幕を切っていた。両者とも退かず、互いの斬魄刀の能力を行使しての戦いは『派手』という言葉が合っていた。海燕の斬魄刀は流水系であり、

雀部の斬魄刀は天候を操り雷で相手を攻撃するというものである。ここで考えると、水を操る海燕に対し、雷を操る雀部は優位に立っていること言うことは言うまでもない。だがそれでも海燕は、護廷十三隊創設当初からの一番隊副隊長に喰らいついていた。

全ては、自分の弟と部下の為。

「つ……………やっぱり強いツスね。雀部副隊長……………!」

「……………志波副隊長。何故、貴方はそこまでして旅禍に加担する?」

その言葉に、海燕は少し俯く。そして決意したような眼差しを雀部に送った。

「旅禍が朽木を助けようとしているからツスよ」

「何故そこまでして、朽木女史を助けよう?」

「……………朽木は、瀨靈廷でも数少ない日向の『本当』のダチだからですよ」

「本当の……………?」

『本当』という言葉に、雀部は疑問を覚える。雀部は日向のことを知っている。それは日向が実力者であると同時に、様々な人脈を持っているためである。それは言い方を変えれば人徳があるということにもなる。なのにも拘わらず、『本当』というのはどういう意味なのか、雀部には疑問だった。

「……………流魂街からの長い付き合いなんスけどね……………アイツ意外と警戒心強くて……………周りには気づかない位のものなんですけど、幾ら愛想良くしていても、日向はどっか周りと距離を置いてるっていうか……………。そんなアイツが本当に仲良くしてるのが、朽木だったり、阿散井だったりするんスよ。特に朽木は、仕事でも一緒だからいつも仲良くやりやがってるんスけどね……………」

そう言っつて海燕は振花の柄をギュツと握る。

海燕は気付いていた。日向の兄として長年連れ添ってきたが、客観的に日向を見たときに、本当に僅かであるが人と距離を置いていることに。普通に過ごせば気付かずに過ごしていたが、ここ最近ではやけに顕著に見えるようになって来たという風に海燕は感じたのである。

それは、紛れもないルキアが原因である。

「……けどアイツは、朽木と話してる時だけ、どっか寂しそうな顔してるんですよ。俺達には見せたことのない、本当に悲しそうな……辛そうな……！俺は、アイツが何か隠してるんじゃないかって……：気が気じゃ人には言えない苦しい事があるんじゃないかって……：浮かべてたつて、俺は思うんすよ」

「……：彼が、何を隠していると……？」

「俺には解りません。ですけど、俺は日向が自分から言ってくれるまで待ちますよ。それまでアイツには、朽木が必要なんすよ!!アイツの、本当のダチが!!!」

それを聞いていた雀部は、少し複雑そうな顔をしながらも斬魄刀を握り直す。それを見て、海燕も構え直す。

両者の間に、火花が散る。

「……：貴方の言いたいことは分かった。だがそれは、瀨霊廷を乱す事だ。私はそれを許せない」

「……：別に、許しなんざ得ようとは思っていませんよ。雀部副隊長には雀部副隊長の『誇り』があるんすもんね……」

その瞬間に、海燕の霊圧が急激に上昇する。それを見ていた雀部は目を見開く。その霊圧の上昇の仕方に、心当たりがあつたからである。

「——：だけど俺は、雀部副隊長には負けられない……：俺は、『命』を護る為に戦ってるんすよ……：！」

「——：……：『命』の為か……：なら、私もその覚悟に『誇り』を賭けて相対そう……：！」

「降りましょう、『肉雫^{みなづき}』」

斬魄刀・『肉雫』の背に乗っていた卯ノ花は、双で朝霧に倒された勇音が起きたのを見て、近くの救護連塔の近くに降り立った。それと同時に、四番隊の隊員達が卯ノ花に駆け寄っていく。

「皆を出してお戻りなさい、『肉雫』」

卯ノ花がそう言うと、エイのような姿の生き物が口の中から双で倒された者が出てくる。そして次にエイのような生き物は、卯ノ花の持つ斬魄刀の鞘に戻っていき、その姿を刀の形に戻す。

そして駆けつけた四番隊士に、肉雫から出て来た隊士を救護詰所に連れて行くように指示する。

その間勇音は、双の上から感じられる巨大な霊圧に対し、不安そうに眺めていた。

「なんて霊圧……あそこにまだ誰か……?」

「先程の旅禍の少年と、朽木隊長が戦いを」

その言葉に、勇音はばつと卯ノ花の顔を見る。そこからは驚愕の色が窺える。

「他の隊長達も皆、それぞれの戦いに。とても我々だけでは止めきれません……ついておいでなさい、勇音。少し、向かいたい処があります——……」

そう言って、卯ノ花は歩き出した。

卯ノ花が、『向かいたい処』に向かい始めた時、冬獅郎率いる十番隊トップ3は、中央四十六室に来ていた。必要以上に存在する扉の数が、その組織の権力の大きさを物語っているだろう。

だが三人は、中に進むにつれて、異様な雰囲気を感じ取っていた。そして遂に、中央四十六室の者達が居る部屋に入ると、そこにはあり得ない光景が広がっていた。

「——中央四十六室が……全……滅……」

その光景に絶句するまつ梨とは裏腹に、冬獅郎は冷静に死んで居るのである。その血は乾いた音を立てひび割れる。

「……血が乾いている……黒く変色してひび割れるくらいに……殺されたのは昨日今日の話しやねえってことか……」

そこから冬獅郎は頭をフル回転させる。

ここ、『中央地下議事堂』には、恋次が一護にやられて以降、戦時特例によって完全隔離状態に入り、誰一人として此処に近づくことは許されなかった筈である。なのにも拘わらず、さつき冬獅郎達に通ってきた扉には、強行突破された形跡は残っていない。つまり、ここに居る者達が殺されたのは、恋次が倒されるよりも前ということになる。

つまり、それ以降護廷十三隊に伝えられた決定は全て——。

「贖物か……!」

真つ先に思いついた下手人は市丸であるが、彼一人でこれだけのことを隠し通すことは難しい。

(他にも協力者がいるのか……!?)

「……いらつしやると思っていました。日番谷隊長」

思案を巡らせる冬獅郎達に話しかける声の一つ。その声の方向に皆、目を向けると、そこには吉良がいた。

「まさかてめえが……これをやったのか……?」

冬獅郎の問いに、吉良は無言のまま冬獅郎達の前から走り去って

く。それを見て冬獅郎達は追いかけてしようとする。

「宮能！お前は此処に残つてろ！」

「っ……………はい！」

冬獅郎の言葉に、まつ梨は返事をする。そしてまつ梨を残した二人は、吉良の後を追いかけていく。

その後ろ姿を、まつ梨は真摯な眼差しで見送っていた。

「……………一体誰が……………!?——っ、誰?!」

突如、後方から聞こえた足音にまつ梨はバツと振り返る。するとそこには予想外の人物が居た。

「……………雛森副隊長……………!?!」

まつ梨との戦闘で意識を失っていたはずの雛森が、驚愕した表情で中央地下議事堂の扉の近くに立っていた。

呆然と立ち尽くす雛森の元に、まつ梨は駆け寄っていく。

「雛森副隊長！どうしてここに居るんですか!?!」

「どうして……………中央四十六室が全滅してるの……………?」

雛森の言葉に、まつ梨は答えることが出来ない。それもそうである。まつ梨達が知ったのはあくまで、中央四十六室の者達は何者かに殺されたことであり、誰が殺したかまではまだ判っていない。曖昧な返答など、出来るはずも無かった。

「——やあ。雛森くん。宮能くん」

「っ!!?!」

突如、響き渡った声に、二人がその声の方向に振り向く。

そこに立っていたのは——……………。

「あ……………藍染……………隊長……………」

雛森が震えた声で、目の前の人物の名を声に出す。それに対し藍染は、柔らかな笑みを二人に返す。

「……久しぶりだね、雛森くん。そして宮能くん。色々聞きたいことがあると思うが、まずは僕に付いてきてくれないかい？」

藍染はそう言つて、奥の部屋に進んでいく。それに対し二人は、信じられない表情のまま、藍染に付いていくのであった。

激闘

毒牙にかかるは
傷を負っている者のみ

時は、昨日に戻る。

一護は、『卍解』というものを発動した死神の前に、何も出来ずに敗北した。その死神との戦いの最中に意識を失い、半ば自分はこのまま死ぬのではないかと考えた。だが目を覚ますと、目の前には夜一がこちらを見つめて立っているではないか。

そして夜一の口から発せられたのは、あの死神が自分を逃がすためにああしたこと。そしてあの死神も、ルキアを助けるつもりだということだ。

だが一護には、素直にあの死神に感謝することが出来なかった。

『あんなに力があるなら、アイツがルキアを助けることも出来たんじゃなかったのかよ……!!?!』

『ほざくなっ!!』

しかし、飛んできたのは怒声。

『あの場を含め近くには、少なくとも三人の隊長格が居った。そのどれもが、護廷十三隊の中でも屈指の実力者じゃ。そんな中で、人質や怪我人も居る中で逃げ切れるとでもお主は思っておるのか?』

『っ……………!』

一護は、夜一の言葉に悔しそうな表情を浮かべる。もしあの死神の言葉を信じるなら、あの時懺罪宮に居た朽木白哉も、卍解を使えるはずであり、三席であったあの死神の卍解ですら自分は為す術なくやられたのである。結果は、目に見えているといっても過言ではないと、今の一護には理解出来た。

『日向がお主に与えてくれたのは時間じゃ。確実にルキアを助けるた

めの、な』

『……………夜一さん。俺はどうすりゃ……………』

『一護、お主には卍解を三日で習得してもらおう……………!!』

そして、その後一護は、転神体というものを使った卍解を習得するための修行に入った。途中で修行場に現れた恋次が言い放った、『ルキアの処刑時刻が早まった』という言葉に驚きはしたものの、一護は無事に卍解を習得することが出来た。

そして、今に至る。

「卍・解つつつ!!!」

双☒の丘で、『千本桜景厳』を発動した白哉の前で、斬月を突き出し、咆哮する。それと共に、凄まじい爆発が一護を包み込む。

「—————」
『天鎖斬月』

黒が、億の花弁に相対す。

双☒の丘で激闘が繰り広げられている最中、ルキアを連れた恋次と卍解を解いた日向は、瀨霊廷の中を駆け巡っていた。

その中で日向は、ルキアを運ぶ恋次を、迫りくる死神達から護衛していた。

「巻きて昇れ—————」
『春塵』!」

「吹鳴らせ—————」
『虎落笛』!」

「打消せ—————」
『片陰』!」

目の前の席官と思しき人物達が、立ちほだかるように斬魄刀を始解する。しかし、日向は立ち止まらずに逆に目の前の者達に肉迫する。

「恨みはないけど……………縛道の二十一・『赤煙遁』!」

「なっ……………!?!」

突如自分たちの前に巻き上げられた煙幕に、一瞬動揺しながらもすぐに三人は体勢を立て直す。

しかし、日向はそれよりも速かった。

「ふっ!!」

「な、ぐおお!?!」

凄まじい速さで、煙幕の中から日向は一番ゴツイ男の顎に掌打を浴びせる。そのままその男は吹き飛ぶ。

そして日向はすぐさま、近くで斬魄刀をこちらに構えようとした男の鳩尾に肘打ちを浴びせる。短いうめき声の後、すぐに男はその場に崩れ落ちる。

「はああ!!」

肘打ちをした体勢の日向に、後ろから最後の一人が斬りかかる。しかし日向はそれが見えていたかのように、男の放った斬撃を回避し、振り向きざまに裏拳を顎に叩きこむ。

「ふう……………よし、行くぞー!」

「……………派手にやったな、日向」

煙が晴れると、後ろに居た恋次が呆れたように言葉を発する。

「まあいいじゃねえか。これで……………っ!?!」

日向が言い切る前に、三人に凄まじい霊圧が襲いかかり息を飲む。その霊圧に、怪我人である恋次や、まともに動けないルキアは息も絶え絶えといった状況になる。

そして三人の前に、その霊圧を発する人物が現れる。

「あらら。随分派手にやったなあ〜、天宮城クン?」

「市丸……………!!」

薄笑いを浮かべたまま、市丸は三人に少しずつ歩み寄ってくる。それに対し日向は、鞘に納めていた斬魄刀をすぐさま抜き出す。

「駄目やないか、ちゃんと『隊長』ってつけない」

「今のアンタに、隊長ってつける義理はないな」

その返答に、市丸はさらに口角を吊り上げる。

「なんやあ……………もしかして気付いとった?」

「……………答える義理はねえよ」

「ははっ！まあええわ……………それよりも、ボクはちゃんと隊長の仕事せなアカンからね」

そう言つて市丸は、右手を死覇装の懐に潜り込ませる。

その動作に、日向はすぐさま斬魄刀を構える。

「射殺せ——『神鎗』」

「くっ、おおおおおお!!」

市丸の懐から伸びてくる刀身に対し、日向は白皇で弾くことで、その切先を狙われていた標的から外すことに成功した。

「恋次!!逃げろ!!」

「なっ……………!」

「早く!!」

「あ、ああ！行くぞ、ルキア!」

「待て！日向が!」

「アイツを信じろ!!」

ルキアが、この場から逃げ出すことに対し否定的な声を上げるが、恋次が一喝することにより、ルキアはすぐに口を噤んだ。

そんな二人を横目に、日向は神鎗を元の長さに戻した市丸に斬りかかる。

「ははっ、友達思いやなあ」

「アンタに言われても嬉しくねえな……………!」

少し切り結んだ後、日向は市丸から距離を取る。

(こいつ……………確実に恋次の頭を狙いやがった!)

先程の切っ先の先。それは確実に親友を一瞬で絶命させるに事足りる部位を狙って放たれたものであった。それは、市丸の狙いがルキアを殺すことではないことを暗に示していた。

邪魔者を排除する。それが市丸の狙い。

「アンタの狙いは何だっ!!」

再び迫りくる刀身を弾きながら、日向は市丸に問いかける。

そして、市丸の口が動く。

「ふふっ、せっかくやから教えてあげるわ。ボクの頼まれたことはキミの足止めや」

「な……………!!?」

予想外の返答に、日向は一瞬顔を強張らせる。そして、最悪の事態が日向の頭に浮かんでくる。

護衛を、対象から引き離す。

「ちっ!!」

「そんな簡単に逃がすと思う?」

すぐさま恋次達を追いかけようとする日向に、刀身が伸びた神鎧を市丸は振りかざす。その一撃に、日向は白皇で防御したものの身体を弾かれる。

迂闊であった。それだけが日向の頭の中を埋め尽くしていた。そしてそんな頭の中から導き出された結論はこうだった。

「卍解——『虚哭隸王』きよくわいおう つっつ!!」

弾かれたまま、日向は卍解する。そして刹那、日向は白い衣を纏った騎士のような姿になり、そのまま市丸に斬りかかる。

(一秒でも早く、こいつを倒す!!)

振り下ろした一撃は、間一髪のところまで防がれるが、市丸はさすがに驚いたような表情を浮かべた。

そして数メートル後方に滑った後、市丸は神鎧を構え直す。

「なんやあ。キミがそんな本気出したら——」

そう言つて、市丸は神鎧を腰の辺りで構える。

「——ボクも本気出さなアカンやん」

市丸の発した言葉と共に、辺りの気温が下がると錯覚したまま、日向は虚哭隸王を構える。

「卍、解——『神殺鎧』かみしにのやり」

一瞬。それ言葉すらも生ぬるい速度で、刀身が日向に迫りくる。日向の本能が導き出した反応は、迫りくる刀身を弾くことであった。

「だああああああっつっつ!!」

気合いと共に日向は刀身を上に弾く。しかし完全に弾き切る前に、刃が少し日向の額を掠った。それと同時に日向の額の傷からはかなりの量の血が流れ出す。

「いい反応や」

そう言つて市丸は、小さな斬魄刀を胸元で構え直す。

「っ……………!?!」

(いつ元に戻した……………!?!)

市丸の斬魄刀を先程まで、自分の額を掠りながら日向の少し上空へと伸びていったはずである。しかしその刀身は、すでに脇差程の長さしかない。

「天宮城クン。キミ、神鎗の別名知つとるね。『百本差し』言うんや」
急に語り出すように市丸が口を開く。

「そのまんまや。刀百本分伸びるから『百本差し』や。だったら、始解で刀百本分やったら、卍解だどどんくらいやと思う?」

「……………千本位か?」

「ふふつ、サービスや。答えは、三里と少しや」

「なん……………だと……………!?!」

三里と少し。言つてしまえば、最低でも12kmはあるということだ。そんな長さになれば、今現在逃げている恋次達に振るつた刃が当たつてもおかしくない。

だが、日向は虚哭隸王を自分の前に構える。

あまのむらぐものつるぎ
「天叢雲剣」

「っ!」

発光し始める刀身に、市丸は普段の細目を少し見開く。この技は、以前日向が瀟霊廷に侵攻をした破面・アルトウロに止めを差した技。その事実からわかることは生半可な威力ではないという事。そしてもう一つは、あの刀身に触れてはいけないという事。

後者は、現場を遠目に見ていた藍染が端的に市丸に話していたものである。藍染曰く、『私でも、あれを喰らえばただでは済まない』。その言葉の意味することを、市丸は良く理解していた。

(怖いなあ……………)

思い出すのは、四十年以上前に初めてこの少年に出会った時の事。死が確実と思われた実験を生き延び、市丸が見逃したこの存在。それが今や、自分の喉元をいつ斬り裂くか分からぬほどまでに力を付けている。

そこに覚えるのは畏怖ではない。どちらかというところ狂喜にすら近いようなもの。更木剣八が、殺し合いを楽しむ様に、悦ぶように、市丸は目の前の青年の成長を悦んでいた。機会があれば、こちらに引き込むことも考えていた市丸だが、それはもはや叶わぬこと。

天宮城日向にとって、市丸ギンは敵。それは、市丸が一番よく分かっていたこと。

「だけど、それでええんやけどなあ……………」

「？」

市丸の呟きに、日向が怪訝そうな表情を浮かべる。内容までは聞かえなかったであろう。

だがそれでいい。これは市丸にとって、誰にも聞かれてはならないものなのであるのだから。そのためには、他のもの、モノ、者、全てが犠牲になってもよいのだ。

それらを心中にしまい、市丸は神殺鎗の柄を両手で挟み込むように持ち、それを胸の中央で構える。

その様子に、天叢雲剣を発動している日向は身構える。この状態の斬魄刀の刀身に触れれば、問答無用で刀身に触れた部分が霊子レベルで斬り裂かれるといっても過言ではない。そのような剣に誰も近づきたくはないだろう。だからこそ、市丸はこれを使う。

『神殺鎗』『舞踏』

刹那、先程正解した時と同じように、神速の切っ先が日向の頭部を射抜こうと伸びていく。だが、それが伸びるよりも前に察知した日向が頭を傾けることにより、その一撃は躲された。しかし、すでに次は始まろうとしていた。

『神殺鎗』『舞踏連刃』

「なっ！」

神速で伸縮する刀身は、日向が反応するよりも早く、雨のごとく日

向に襲いかかってくる。あまりの速さと、その攻撃の数に日向の居る場所を中心に建物や地面がどんどん抉れていく。

普通の者であれば、この暴虐の嵐に一秒も絶えることは出来ないであろう。そんなことを考えていた市丸の視界が少し青白く光る。その光景に市丸は、*“舞踏連刃”*を一旦止め、すぐに回避できるように身構える。

「破道の九十・『黒棺』!!」

「っ……………」

市丸は、自分を包み込むようにせり上がってくる黒の壁に対し、唯一逃げ場所のある上に回避しようと跳躍する。だが、ここから起こることは市丸は予測していた。

市丸はすぐさま、目の前に肉迫してくる日向に神殺鎗の一撃を放つ。それを、先程の*“舞踏”*の時のように放つ前に当たらぬように回避する。だが、その一瞬でも市丸には十分であった。神殺鎗の伸縮速度は、音速を優に超える。そんな伸縮速度の神殺鎗は、その一瞬よりも短い時間でもあれば、次の一撃を放つことが可能なのである。

だが、それは市丸のみならず、先程体感していた日向も解っていた。だからこそ、その一撃を防ぐための布石を用意していた。

「八咫鏡」

「っ！」

市丸が一撃を放った直後にすぐさま展開された結界。それは、音速を超え神速に並ぶ市丸の斬魄刀の二撃目を防いだ。日向は八咫鏡を発動したまま市丸に突進しようとする。しかしそれよりも早く、市丸は後方に飛び退きその突進を回避する。

一進一退。それが、この戦いに似合っている言葉であった

市丸が死神となり百年。この青年が死神となり四十年なるかならないか。六十年の差がありながら、目の前の死神は自分と拮抗していると言っても過言ではない。

その事実には、市丸は口の両端が吊り上げるのを止められない。

「流石やなあ。やっぱり、血筋がええと実が結ぶんかなあ？」

「……………何の話だ」

市丸の意味深な言葉に、日向は再び怪訝そうな表情を浮かべる。『血筋が良い』と言っているが、日向は流魂街育ちであるため、そのようなことは一度も考えたことはなかった。

「何や、キミ知らないん？」
「……………」

市丸が何を考えているのか分からないが、日向はすぐさま恋次達の下に駆け付けたいのである。そのため、日向にとってこの話は、市丸が時間稼ぎをしているようにしか思えない状況である。

「キミの苗字の『天宮城』は、れっきとした貴族の苗字や。下級やけど、知っとる人多いんちやうかなあ〜？」

「どういう意味だ」

その言葉に、市丸はさらに口角を吊り上げる。

「ボクもまだ死神にもなっていない頃の話や。だけど、その頃の隊長さんたちは天宮城ゆう苗字の人と、随分仲良かった聞いたとるなあ〜」
「他人だろ」

あつさりと片付けられるように、日向が言い放つ。それもそうだが自分と同じ苗字の知らない人物が、当時の隊長と仲良くしているように日向に關係はない。

それに有名であるならば、今までに何度かは聞いたことがあるはずだ。それこそ、古参の卯ノ花や、それに及ばずとも浮竹や京楽がそのような話題を提示してくるはずである。

だが一瞬、日向の背に嫌な汗が流れる。これが何なのかは、日向自身にも分からない。だが最近、思い当たる節を四番隊隊長に言われたことがあった。

『自分の過去に触れること』と。

『破道の八十八・『飛竜撃賊震天雷炮』!!』
ひりゅうげきぞくしんてんらいほう

それを断ち切るように、鬼道を市丸に放つ。しかしそれは易々と市丸に躲される。

「何や、意外と動揺してるんちやう？」
「關係ねえな！」

その言葉通り、先程と同じの迷いのない斬撃を市丸に放つ。それを

市丸は神殺鎗で防ぐ。そして互いに距離を取る。

「ま、今はそれでもええんちゃう？これから、嫌でもキミは知るから」
「……………そうかよ」

市丸の言葉に、日向は深く息を吐き、虚哭隸王の切っ先を市丸に向けてる。

「なら、この戦いはアンタを倒すことに集中出来るな」

「……………何や、言わんほうがえかったわ」

日向の言葉に、市丸は心底残念そうな表情を浮かべる。もう少し話していれば、この青年の心を揺さぶることが出来、時間を稼ぐことが可能だったのかもしれない。だが、自分の言葉選びが不味かったせいで、この青年の刃の切っ先は完全に市丸に向けられた。

（ま、ええわ。これが終わったら、キミは毒に侵されたように苦しむはずやからな）

この戦いの行く末はすでに見えているとも同然である。それこそ、あの人物が生きている限り。

市丸は、獲物を見つけた蛇のように、少し舌なめずりをするのであった。

虚哭

お前を護る為ならば

俺は最も忌み嫌われる

強き者となろう

「嘘……!!?」

まつ梨は、目の前の光景を信じる事が出来なかった。

その理由は二つ。

一つは、死んでいたはずの五番隊長の藍染惣右介が生きていたという事実。

そしてもう一つは、自分の所属している隊の隊長でもある日番谷冬獅郎を、何もさせないままに斬り伏したという事実。

これら全ては、藍染の残した遺書から中央四十六室の異変を察知し、冬獅郎、松本、まつ梨の三人で中央四十六室に向かったことで起こった。その途中で、三番隊副隊長・吉良イヅルが現れ、冬獅郎と乱菊が走り去っていった吉良を追いかけ、まつ梨は一先ず中央地下議事堂に留まっていた。だが、そこに雛森が現われ、まつ梨は何とか返そうと試みるが、死んでいた藍染の登場によって場は混乱した。そのまま二人は、藍染の案内のままに清浄塔居林に到着した。そこで二人は、藍染の口から『やらなければいけないことがあった』を聞こうとしたが、そこで突如雛森が藍染に刺された。

その直後に、冬獅郎がこの場に到着し、動揺した表情を浮かべた。そこから冬獅郎は、様々な質問を投げかけ、藍染はそれに淡々と答えていった。

そして最後の藍染の放った言葉によって、冬獅郎が激怒し卍解をしたものの————現在に至る。

「くっ………卍っ——!!」

「やめておいた方がいい」

「か——……………!?!」

すぐさま斬魄刀を抜き、卍解を発動しようとしたまつ梨であったが、それはまつ梨の後ろから聞こえる声によって妨げられた。

藍染は先程まで、自分の前に居たはず。それなのにも拘わらず、藍染はすでに自分の背後をとっていた。その事実にも、まつ梨は言いも言えない恐怖に襲われていた。

「君の上司である彼の今の状況を見れば、君が僕に敵わないことは解るはずだよ?」

「……………!」

それは紛れもない事実。卍解を習得し、日々の鍛練を欠かさなかったまつ梨は、慢心には及ばずとも、しっかりとした自信がついていた。だが、藍染の放つ言葉一つ一つによって、その自信という虚像がガラガラと音を立てて崩れ落ちるのを、まつ梨は感じていた。

「どう……………して……………?」

「それは、君の友人に訊けばいい話なのではないかな?」

「……………!」

藍染の言う『友人』とは、紛れもない日向のことである。浦原から聞いたであろう話は、まつ梨は直接聞いてなくとも、頭のどこかでずつと気になっていたことでもある。だが、それはまつ梨のことを案じた日向の計らいであるため、まつ梨は日向に今まで訊いたことはなかったのである。

「やはり此処でしたか、藍染隊長」

ふと、背後から聞こえる声にまつ梨は振り向く。

「——いえ、最早『隊長』と呼ぶべきではないのでしようね。大逆の罪人・藍染惣右介」

「どうも、卯ノ花隊長」

扉から現れたのは、四番隊隊長・卯ノ花烈。そしてその副官・虎徹勇音。卯ノ花と藍染の口調は穏やかなものであるが、そこには『穏やか』というものを微塵にも感じさせない雰囲気、両者は放っている。

そして卯ノ花は語る。死体に違和感を覚えた卯ノ花が、もしこれが精巧な死体の人形だとして、本人が隠れる場合に最も安全な場所はどこ

こか。

だが藍染も語る。

それは、瀨靈廷全ての者を騙っていたという事実。

「許せない……………」

余りの事実には、斬魄刀の柄に手を掛けたままのまつ梨が呟く。

「だが、中央四十六室の者達が殺されたことならば、以前にもある。違いますか、卯ノ花隊長？」

「……………」

藍染の言葉に、卯ノ花の眉間に皺が寄る。その所作だけでも、それが事実であることは間違いではないということが、その事実を知らなかったまつ梨と勇音にも分かった。

だが、そのような事件が起これば、真央霊術院の教科書にも載つてもよいはずだろうが、まつ梨も勇音も、そのような記述は見たことがなかった。そのことから解することは、その事件が中央四十六室にとつて隠したいものであるということ。それを何故、この隊長が知っているのか。それが、現在二人の頭に疑問として過っていた。

「この事実……………内情を知れば、彼は大いにこの瀨靈廷を恨むことになるだろう」

「それは……………」

滅多に見ることの出来ない卯ノ花の動揺した姿。それだけでも、藍染の言う事の凄まじさを物語る。だが、ここで藍染の言う『彼』が誰なのかはまつ梨には解らない。

「彼つて……………」

それが、まつ梨の口から自然に出る。それに藍染が、卯ノ花に相對したまま答える。

「天宮城日向」

「…!?!」

その名前に、まつ梨と勇音は驚愕し、卯ノ花は神妙な表情を浮かべる。

「彼は、瀨靈廷に両親を殺された人物だ」

「う……………そ……………!?!」

あれほど瀨靈廷に住まう者のために戦う者が、その瀨靈廷に自分の肉親を殺されたというのならば、まつ梨ならば正気ではいられない。そして頭を過るのは、日向自身がこの事実を知っているのか。そしてもし知っているというのであれば、最悪の事態に陥る可能性がある。それこそ、瀨靈廷にとつての裏切りという形で。

「さて、そろそろ私は行かせてもらおうよ」

「っ……………待て!!」

突如、藍染の身体を白い布のようなモノが包んでいくのに対し、一番近かったまつ梨がすぐさま斬魄刀を抜き、藍染に斬撃を加えようとする。だが、まつ梨が振り切るよりも早く、藍染の身体は布に包まれその場から姿を消していった。

その光景に、まつ梨は悔しそうな表情を浮かべると同時に、その場に膝から崩れ落ちる。その様子に、勇音が駆け寄る。

「大丈夫ですか!？」

「は……………はい……………」

「勇音。私は、日番谷隊長と雛森副隊長の救命措置に取り掛かります。その間、貴方は此処で知った藍染惣右介の全てを、隊長・副隊長に伝えてください」

「は、はい!」

卯ノ花の言葉に、勇音はすぐさま『摺趾追雀』^{かくしついでじやく}で藍染の位置を補足し、『天挺空羅』^{てんていくうら}を発動する。

「勇音、あの旅禍達にも……………」

「はい……………!」

付け足すように言われたものの、勇音は動揺することもなく今知った『藍染惣右介』を隊長格に伝えようとする。

そして時は少し後。

朽木ルキアの目の前に広がる光景は、『敗北』という言葉が相応しいものであった。

親友である恋次が地に伏し、相棒とも呼べる一護も同じ。駆けつけた粕村も、正解する間もなく、藍染の鬼道によって倒れ伏した。そして、ルキアを自らの手で処そうとしていた白哉も、崩玉を魂魄の中から取られて『用済み』と呼ばれたルキアを身を挺して庇い、瀕死の重傷を負った。

「兄様……………！兄様！」

ルキアの悲痛な声にも、白哉は苦しそうな息遣いをするのみである。そして、先程ルキアを斬り捨てようとした東仙の代わりに藍染が、もう一度白哉ごとルキアを斬り捨てるため斬魄刀を引き抜こうと柄に手を掛ける。

その光景に、ルキアは自分の兄の頭を抱え込み、護ろうとする。だがその行動も、目の前の者にとつては無意味な行動である。それはルキアも解っていたことであるが、そうせずにはいられなかった。

だが、斬魄刀に手を掛けた藍染が、接近してくる霊圧に感づき、その方向に視線を向けた。

「うおおおおおおお!!」

「ふっ……………」

純白の衣を纏う青年が、藍染に向かい太刀を振り下ろす。それを藍染は危なげなく回避するが、それでもルキアから藍染を遠ざけるには十分であった。

「日向……………！」

「済まねえ……………遅れた……………！」

そう言う日向の身体の到る所から流血が確認出来る。

そして日向に少し遅れて、市丸が双匣に到着する。

「すみません、藍染隊長。抜かれてしまいましたわ」

「いや、構わないよ」

謝罪を口にする市丸も、額の一部に切り傷があり、そこから血を少

し流している。そんな市丸に対し、気にすることは無いという旨を言い放ち、藍染は斬魄刀を引き抜く。

「彼とは、直接やり合ってみたかったのさ」
「っ……………」

突如、凄まじい霊圧が日向を襲いかかる。それこそ、今まで感じてきたことのないほどの強力な霊圧。それだけで日向の額には冷や汗が流れ落ちる。

だが、ここで怯むわけにはいかない。

すでに卍解を発動してかなりの霊圧を消耗しているが、まだ戦える体力は残っている。そしてこの卍解は、元々はアルトウロを倒すためとはいえ、その後は藍染と相対した際に戦えるように磨いてきた卍解でもある。

だからこそ、今藍染に相対さなくてはならないのである。

「破道の八十八・『飛竜撃賊震天雷炮』!!」
ひりゆうげきぞくしんてんらいほう

少し距離の離れている藍染に、日向は青白い巨大な光線を放つ。それは大気を揺らし、辺りには轟音が轟く。

「縛道の八十一・『断空』」
だんくう

しかしその光線は、藍染が発動した防御壁により藍染に届く前にかき消されていく。その光景に驚愕しながらも、予測はしていたため大きな動揺もなく日向はすぐさま次の一手に移ろうとする。

だが、それは眼前に迫った斬撃によって一蹴される。

「ぐっ……………!!?」

「っ!」

いつの間にか眼前に居た藍染の斬撃は、反射的に躲したことにより日向の胸の薄皮一枚を斬り裂くだけで終わった。

だが、その一連の流れに驚いたのは攻撃を受けた日向だけではなく、攻撃を放った藍染もであった。

「……………やはり君は興味深いな」

それもそうである。今の一撃は、先程の狛村のように飛竜撃賊震天雷炮に紛れ『鏡花水月』を解放し、自分の位置を完全に誤認させた状態で放ったものである。完全催眠に陥った状況で、藍染の位置を探る

ことは至難という言葉ですら足りないほど難しいものである。だが、その状況で日向は目の前の斬撃を感じず、すぐさま回避行動に移った。それが意味することは、『鏡花水月が効いていない』ということ。そんな藍染に対し、日向は心臓が速く動くのを止めることは出来ない状況に陥っていた。

(さっきの一撃……市丸の正解に目が慣れてなきや、確実に喰らってた……!)

日向がそう思う程、今の一撃は突然であり、速かった。だが幸いにも、『神速』とも言える速度の攻撃を放つ市丸の『神殺鎗』と今まで戦っていたために、ギリギリで回避することが出来た。

だが日向には、それ以外でも焦る要因があった。

(霊圧と本人の場所が、完全に違っていないやがった……!)

鏡花水月の能力は完全催眠。それは、浦原から聞いた話でも分かっていた。だからこそ以前藍染の鏡花水月を目にしてしまった時は、凄まじい後悔の念に襲われてしまった。だが日向はなぜか、自分は『視覚』だけは藍染に支配されていないことに今気づいた。だからこそ今の一撃を、ギリギリで躲すことが出来たのである。そしてだからこそ、ギリギリでしか躲すことが出来なかったのである。

これは逆に言ってしまうえば、視覚以外は完全に支配されていた。それは無論、霊圧知覚でもある。だからこそ、日向は攻撃が目の前に迫るまで、藍染が『断空』で発動した防御壁の後ろに居るといふ風に錯覚していたのである。味覚や嗅覚はともかく、触覚と聴覚も大事だが、それ以上に戦闘では視覚と霊圧知覚が最も重要な感覚である。その二つの内の一つが完全に支配されているということは、日向にとって不利以外の何でもなかった。

「なら、これはどうだい？」

そう言う藍染の手の中には、黒い塊が渦巻いていた。それが何なのか瞬時に理解した日向は、すぐさま防御態勢をとろうとするが、それよりも早く藍染はそれを放ってきた。

「破道の九十・『黒棺』」

「ぐっ……!!?」

日向が避ける間もなく、黒い壁が日向を包み込むようにせり上がってくる。この攻撃は、先程狛村を一撃で葬った鬼道である。それを喰らえばただでは済まない事は、この場に居る全員が理解していた。だからこそ、日向は回避以外の行動をとった。

「破道の九十・『黒棺』つ!!!」

それは普通の『黒棺』とは違い、重力の奔流が内側でなく外側に放っているものであった。日向を護るように地面からせり上がってきたそれは、藍染の放った『黒棺』と激突した。それと同時に、日向は詠唱を始めた。

「滲み出す混濁の紋章！不遜なる狂気の器！湧き上がり・否定し・痺れ・瞬き・眠りを妨げる！爬行する鉄の王女！絶えず自壊する泥の人形!!結合せよ！反発せよ!!地に満ち、己の無力を知れ!!!」

日向が詠唱を進めると共に威力を増していった『黒棺』は、藍染の放ったものと反発するように霊圧をまき散らしながら、スツと消えていった。

「はあっ……はあっ……はあっ……!!」

一区切りすると、日向は苦しそうに息を荒くする。その光景に、藍染は殊勝そうな笑みを浮かべる。

「僕の『黒棺』を、『後述詠唱』の『黒棺』で『反鬼相殺』するとは……：君にはつくづく驚かされるよ。驚嘆と共に、君には賞賛の言葉を贈るよ」

「ちっ………!」

藍染の言葉に、日向は悔しそうな表情を浮かべる。それもそのはずである。後述詠唱とはいえ、完全詠唱に近い威力で放った日向の一撃が、藍染にとつては詠唱破棄と同じ威力であったのだ。それは、日向と藍染の実力の差を如実に表していた。

「日向………逃げろ………!」

「っ………ルキア?」

日向の耳に届いたのは、ルキアの弱弱しい声。

「お主では藍染隊長に勝てない………!」

「………うるせえ」

「え……………」

「うるせえつつつてんだよ」

ルキアの言葉を聞かないというような言葉に、ルキアは目を丸くする。

「黙って朽木隊長護ってる!! 大事な兄貴なんだろ!!」

「つ…………!! あ、ああ!」

日向の言葉に、ルキアは白哉を庇うように再び抱きしめる。この行動自体にそこまで大きな意味はないが、それだけで十分であった。

その光景に、藍染は再び口を開く。

「美しい兄妹愛だ。志波家で育った君も、志波海燕に同じような感情を持つのかい?」

「……………それを訊いてどうする?」

「所詮、血の繋がっていない家族だ。底が見えるよ」

「つ…………!!」

まるで、ルキアの白哉を思う気持ちが浅いとても言うように、藍染は言い放つ。それに対し日向は無意識に霊圧を高める。

「ふつ……………僕を討とうと霊圧を高めるのはいいが、君が刃を向けるべきなのは別にあるのではないか?」

「……………何の話だ」

少し俯き気味になりながら話す藍染に対し、日向は身構える。

「君の両親を殺した者達を、知りたくはないかい?」

「つ……………!!?」

藍染の言葉に、日向のみならずルキアも驚く。それもそうである。

日向はルキアと同じく流魂街出身として今まで育ってきたのである。そして日向は母親と認識している人物は居るものの、血縁関係まであるとは解らない。

「君は、真央霊術院でも飛びぬけて成績は良かった。それは君の才能と共に、君の血縁に由来するものだと、君は考えたことはなかったのかい？」

「……………」

「……………なら教えてあげよう。君は、『真血』だ」

「……………」

真血とは、死神の血を引く者のことであり、普通の死神よりも強いと、一般には言われる。だが、ここで気になってくるのは、日向の両親のどちらが死神であったのかということである。

「君の聡明さは父親に似、そして死神としての才能……………特に鬼道に關しては母親の血を色濃く残しているよ」

「……………」

「……………ひゅう……………が……………？」

黙って話を聞く日向に、ルキアが心配そうに声を掛ける。しかし、日向は一切反応を返さない。

「君の父は、元中央四十六室の裁判官の一人、司優咲つかさゆうさく。そして母は、元鬼道衆副鬼道長・司菖蒲。旧名・天宮城菖蒲だ」

「っ!!」

「彼らは約百五十年前までは生きていた。だが、司優咲は屋敷に居た際に、何者かによって屋敷の使用人諸とも暗殺された。そして司菖蒲は、当時外出し完全なアリバイがあるながらも当時の中央四十六室によって下手人として捕まり、裁判中にその場にいた中央四十六室の者達とともに自害した」

「……………」

日向は、ただ藍染を一点に睨む。

「そして、彼らには一人だけ子供が居た。その子供の名前は司日向。その行方は、裁判中の事件の後に、元鬼道衆の香水ルイと共に眩ませた」

「そ、そんな……………!!」

ルキアが、藍染の話に驚愕する。その話が本当であるならば、日向は凄まじい家系の下に生まれた者であり、本当の貴族であるはずである。だが、ここで疑問も生まれる。

「だが、何故君は流魂街に消えなくてはならなかったのか、疑問には思わないかい？」

「さあな」

「ふつ……………司優咲は、中央四十六室の裁判官の中でも新参であり、さらに中央四十六室の中でも屈指の改革派とも言えよう。彼は、中央四十六室の制度を改革しようとしていた。だがそれは、中央四十六室にとって邪魔でしかなかったのさ」

「……………」

「だからこそ彼は殺されたのさ。愚かな保守派によってね。そしてその矛先は、君の家族にも向いたのさ」

日向はゆつくりと瞼を閉じる。

「司家は、中央四十六室の中でも最上位に位置する家柄でもある。その司家の持つ力は、他の賢者達よりも大きいことは、君なら解るはずさ。そう……………彼らにとって、自分の地位の邪魔になった家など、全て根絶しなければ気が済まなかったのさ。だからこそ中央四十六室は、君の母親に『殺人』と共に『神器の紛失』という罪を被せ、確実に死罪とし、その存在を消そうとしたのさ」

「神器だと？」

聞き慣れない単語に、日向は閉じていた瞼を開ける。

「……………司家がそれほどまでに大きな力を持っていた理由。それは、霊王から授かったという神器・『浄天眼』を有しているからだよ。分かりやすく言えば『千里眼』さ。瀨霊廷全てを見渡すことの出来るその力があれば、司家の発言こそが裁判において絶対的なものになることは、君も解るだろう？……………だが、最早浄天眼などなくても、その事実が中央四十六室にとっては都合がよかったのさ。それが己の地位の妨げにならなければね」

「……………」

「浄天眼は物ではない。それは血縁関係のある者一世一代につき発現するものと言われている。……父親やその親族を殺せば、残るは君だけさ」

「っ!!」

「だからこそ、それを察した君の母親は裁判中にその場にいた賢者全員を殺害した。自分に、大逆の罪人という汚名が被さろうとね」

「日向……………」

ルキアが声を掛けるが、その表情は窺えない。

「そして残された君は、司菖蒲の最も親しい友人である香水ルイに引き取られ、行方を眩ましたのさ」

「日向、その香水殿は……………」

「……………流魂街で俺を育ててくれた母親だ」

「っ!!!」

その一言が、藍染の話の信憑性を高めるという事はルキアには恐ろしいほど理解した。

「これは全て、大霊書回廊の最重要案件の一つとして、ブラックボックスに仕舞い込まれていた事実だよ。……………もう一度訊こうか、天宮城日向。君が本当に刃を向けるべきは誰だい？」

藍染はそう言っ手て手をさしのべる。まるでそれは『自分と共に来い』と言わんばかりに。

「……………関係ねえな」

放たれた言葉は、ルキアの予測していた言葉のどれとも違っていた。

「俺がここでテメーと戦うのと、その話は微塵も関係ねえんだよ」

日向はそう言い切り、同時に虚哭隸王を一度横に振る。

まるでそれは、自分の迷いを捨てるかのように。

「……君は選択を誤った」

「……藍染。俺はテメーを斬る」

「ふっ……あまり強い言葉を使うなよ。弱く見えるぞ……ああそれと、君には感謝しなければね」

一瞬にして、空気が張り詰める。

そして、藍染が発する。

「君は、最高の失敗作だったよ」

その言葉に、日向の中の何かが真っ赤に染まってゆく。それは怒りであり、悲しみであり、憎しみでもある。そのどれも、『負』の感情である。

そして日向は決心する。

どんな手段を使っても、今ここで藍染を殺さなくてはならないと。

例えそれが、今の自分の立場を完全に殺すことであっても。

そして日向は、ルキアの方を振り向く。

「ルキア、わりい」

「えっ……………？」

「俺のこと、嫌いにならないでくれよ」

そう言った瞬間に、日向は左手を顔に翳す。それと同時に、日向の顔には三本角の鬼のような漆黒の仮面が出現した。その光景にルキアのみならず、近くで虫の息であった一護や、ルキアに抱きかかえられている白哉、そして市丸や藍染すらも目を見開く。

仮面が出現した瞬間に、虚特有の霊圧が日向から発せられ、それは爆発的に上昇する。その霊圧は、先程の日向の霊圧を思わせない程まで上昇する。

それこそ、隊長と同等以上までに。

『日向……………この状態で戦えるのは、今は五分が限界だ』

『分かってる……………』

精神世界から話しかけてくる虚哭隸王に、日向は小さな声で答える。

元々、『虚哭隸王』は虚化込の卍解である。だが、それでも仮面を出せないという訳ではない。

仮面を出さない理由は二つ。

一つは、単純に仮面を見せなかったため。

もう一つは、身体の負担が始解時よりも大きいためである。

しかし、だからこそ仮面を被った際の霊圧の上昇は爆発的なモノになる。

それこそ、いつぞやのアルトウロのように。

『虚哭隸王・須佐能袁』

虚特有の負の霊圧が、目の前の死神を殺そうと爆発的に上昇していく。

それは四十年來の因果を断つために。

終幕

仮面を被り

引き剥がされる仮面

仮面を被った直後の日向の瞬歩は、驚異的な速度であった。それこそ、卍解としての戦力の全てをその小さな刀の形に凝縮すること卍解最大戦力での超速戦闘を可能にする天鎖斬月よりも速く。その速度と共に、日向は霊圧を消す能力を併用し、相手の霊圧知覚にかからないようにして移動するため、日向の移動は視認でしか確認できない。

その超速の瞬歩で、日向は藍染に一気に肉迫する。

『おおおおおおおっ!!!』

「ふっ…」

凄まじい勢いで振るわれた斬撃は、藍染の斬魄刀によって止められる。その際の刃の交差により、辺りには衝撃が奔る。

刹那、日向は藍染の背後に回り込み斬りかかろうとする。だが、日向の視界から一瞬にして藍染の姿が消え失せる。その瞬間に、日向は辺りを見渡す。それこそ自分の目を信じるように。そしてその中で、自分の頭部に迫りくる刀身を確認し、すぐさま虚哭隸王を構えて防衛する。

「素晴らしい力だ。だが、それでも僕には届かない」

『べらべら喋ってる暇あるのかよ』

藍染の言葉を一刀両断すると共に、日向は空いている左手の人差し指を藍染が居る方向に向ける。そして指先からは、悍ましい強大な霊圧が溢れだす。

—— 『黒虚閃』
セロ・オスキュラス

漆黒の光線が、藍染の目の前を夜の如く、一瞬にして黒に染めていく。だがその黒が藍染の身体を染める前に、藍染は瞬歩で黒虚閃を回

避する。

そして、日向がその技を使用したことに対し笑みを浮かべる。

「君がその技を使うということは、君が『死神を捨てた』ととってもいいんだね？」

『「断空」でも、これなら防げないだろ』

藍染の問いには答えない。前方の広範囲に雷の光線を放つ『飛竜撃賊震天雷炮』は、先程藍染の『断空』によって防がれた。八十九番台以下の鬼道を完全に防ぐ縛道・『断空』。それを突破するには、文字通り九十番台以上の鬼道を使えばいいのだが、それらだけを頼ると高威力故に癖が強く、戦術が限られる。故に日向が選んだのは、単純、故に強力な技。大虚が使用する虚閃が、圧縮されることにより黒に染まった暴虐の閃光。

だが、それを使用できるということが死神にとって『異常』であることは明らかであった。

「君が必死に身に付けてきた力は、それこそ身近な者達に忌み嫌われるものとなるだろう」

『「ほざけっ」』

少し距離をとる藍染に、日向は虚弾を何発か放つ。しかし、そのいずれも藍染に命中することはなく回避されていく。

虚弾は、虚閃の速度の二十倍。その速度をいとも簡単に回避する辺りに、藍染の実力が窺える。

『「破道の九十一・『千手皎天汰炮』』
せんじゆこうてんたいほう

日向の流暢な言葉と共に、さまざま無数の光弾が藍染に襲いかかる。それらも全て回避する藍染だが、その一瞬の隙に日向の接近を許した。

『「天叢雲剣』』
あまのむらくものつるぎ

発光する虚哭隸王を確認し、藍染の表情も一瞬歪む。それだけで、この技の破壊力が窺える。広範囲に対してならば、先程の『千手皎天汰炮』や『黒虚閃』が勝るが、相手に確実な一撃という点では『絶対切断』と言っても過言でない『天叢雲剣』の方が勝るだろう。

『「破道の六十三・『雷吼炮』』
らいこうほう

しかし、接近する日向に藍染は雷の光弾を放ち牽制する。『天叢雲劍』の欠点は、絶対隷属の力をその刀身に凝縮することと透過によって成り立っているが、それ故に広範囲の攻撃に対しては虚哭隸王の絶対隷属の力を存分に発揮することが出来ない。

藍染の一撃に対し、日向はすぐさま天叢雲剣を解除し、別の手段に移る。

『八咫鏡』
やたのかがみ

日向が目の前に張った結界は、『反膜』の上に『鏡門』を展開した反射膜。それは凄まじい速度と威力を誇る藍染の『雷吼炮』を跳ね返す。そして藍染の居る場所へと向かって行き、その場に着弾する。

「まさか、君にここまで手こずらされることになるとはね」

『っ!!?』

突如、後ろから聞こえる声に向向は本能的に振り返り、その場に斬撃を加える。

(っ……………居ない!?)

しかし、そこには藍染の姿はなかった。代わりに、斬撃をし終えた直後に日向の背中から鮮血が宙に舞っていく。

『ぐっ……………!!』

「君はよくやった。だが、いくら君が僕の姿を捉えることが出来ても、それこそ並みの実力者ではない君は他の感覚も視覚並みに併用して今まで戦ってきた。その大半を奪われている状態では、僕に分があることは解るだろう?」

日向に一太刀加えた藍染は、日向の前に瞬歩で現われる。

藍染の言うことはもつともである。だからこそ日向は、今の嘘の声に騙され、反射的に動いてしまった。

———
藍染。

———
俺は、お前を倒さなきゃ。

—— お前を倒さなきゃ、俺は本当の……………。

『……………藍染。なんで俺が、二十年近く黙ってたと思う?』

「ふっ……………」僕に対抗する力をつける為、かな?」

『ああそうだよ。他の誰でもなく……………俺がお前を斬る為にな……………!』

刹那。藍染は凄まじい速度の瞬歩で、日向に肉迫し、斬魄刀を脇腹に突き立てる。口から血を吐く日向に、藍染は不敵な笑みを浮かべる。

「だが、これが現実だよ」

だが、脇腹に刺さっている刀身を持つ藍染の右腕を、日向は左手で握った。

「……………触れたな、藍染……………!」

「なっ……………!?!」

その瞬間、藍染の鏡花水月が分解して宙に消えていく。流石の藍染も、その光景に目を見開く。藍染はそれに覚えがあった。

『メタスタシアの一日に一度だけの能力。触れた者の斬魄刀を消失させる』

吐き捨てるように呟やいた日向は、虚哭隸王を逆手に持ち替えて構える。その刀身には、幾らか日向の血がこびり付いている。そして直後に、その刀身が白銀の霊圧を放ち始める。

先程の虚化の時と同じように、日向の霊圧が爆発的に上昇していく。

そして、日向は虚哭隸王を振り上げた。

『あまのはばきり天羽々斬』

「っ!!」

振り上げると同時に、巨大な刃状の斬撃が藍染を包み込み、さらにはその先の地形を削り去っていく。余りの威力に、周りに居た市丸や東仙、そしてルキアや白哉も驚愕の表情を浮かべる。

大気が唸り、空に佇む雲はその形を瞬く間に変貌させてゆく。藍染が居た場所より先は、その一撃により消え去り、綺麗な崖の断面が窺える。

——天羽々斬。斬魄刀所有者の霊圧と血を媒体にし、凄まじい霊圧を刃状にして飛ばす技。これはアルトウロの使用していた

『王虚の閃光』を元にし、日向によって編み出された技。その威力は、近くで見えていた一護が呆然とするしか出来ないほどのものであった。『はあっ……はあっ……ぐっ……!!』

天羽々斬を放った直後に、虚哭隸王を杖の様に使い何とかその場に立っていた日向だが、仮面が剥がれ落ちると同時にその場に崩れ落ちた。そして卍解も解けて、元の黒い死覇装に戻る。

そしてそんな日向に、隊長羽織を着ていない藍染が瞬歩で現れる。『……まさか、君程度に僕に傷を負わせられるとは夢にも見ていなかったよ』

「藍染隊長、大丈夫ですか？」

「ああ。それほどでもないさ」

市丸のからかうような言葉に、藍染は端的に口を開く。そして、目の前に倒れている青年に鬼道を放とうとする。

「……これはまた、随分と懐かしい顔だな」

日向に止めを差そうとしていた藍染を、瞬時に拘束する女性が二人。

「動くな。筋一本でも動かせば」

「即座に首を刎ねる」

「……成程」

藍染を拘束していたのは、元隠密機動総司令官兼二番隊隊長・四楓院夜一。そして現である碎蜂。

暗殺を主とする彼女達に拘束されるということは、並みの事では抜け出せるものではないことを示唆している。

だが次の瞬間に、夜一の背後の方向から巨大な地響きが聞こえる。夜一が目を向けると、そこには巨大な人影が三つあった。

「……いっ……いっ……!!」

その正体に、夜一は目を見開く。

東・青流門門番『鬼蛇』

北・黒陵門門番『斷蔵丸』

南・朱門門番『比鉅入道』

全員が、瀨霊廷の門を守る門番であった。

「莫迦な……！此奴等まで手懐けておったというのか……！」

「……どうする？幾ら君達でも、僕を捕らえたまま彼等とは戦えまい」
「ちっ………！」

今の状況では、夜一と碎蜂は動けない。するとなると、必然的に残りは日向になるのであるが、日向もかなり疲労しており、顔中に汗をかいている。

にも拘わらず、日向は満身創痕の体に鞭を打ち、立ち上がり斬魄刀を構える。

だが、次の瞬間、日向は口から血を吐き出す。そして、胸から突き出ている刀身を震える手で握る。

その刀身の延長線上には、神鎗を突き出すように構えている市丸の姿があつた。

「お一人様、お———しまいや」

「っ………ぐっ………！」

「日向アアアアア!!」

地面に崩れ落ちる日向に、ルキアが叫ぶ。

その間にも、三人の門番達は藍染が居る方向へと向かって歩き始めている。その光景には、流石の夜一達も焦燥を拭えない。

だが、夜一は上空から聞こえる声に気付いた。その声は夜一の『友』の声であつた。

凄まじい轟音と共に、三人の門番の前に一人の巨人が立ちふさが

る。その巨人の肩には、一人の女性が居た。

「空鶴!!」

「おう夜一! あんまりヒマだったからからよ、散歩がてら様子見に来たぜ! さア、いくぜ! 丹坊!」

「おス!!」

☒丹坊に合図をした空鶴は、鬼道の詠唱を始める。空鶴の左手には、稲妻が奔る。

「破道の六十三・『雷吼炮』!!!」

空鶴の放った一撃は、☒丹坊の正面に立っていた比叡入道を吹き飛ばした。それに続いて☒丹坊は、他の門番に殴りかかる。凄まじい衝撃に、あたりには砂塵が巻き起こる。そして岩の破片などもあちらこちらに飛び散る。

「ひゃあ、派手やなア……どないしょ?」

そう言いながら破片を弾く市丸であったが、次の瞬間に何者かに手首を捕まれる。そして首には斬魄刀を突きつけられる。

「動かないで」

十番隊副隊長・松本乱菊。予想していたよりも市丸が抵抗しないことに、乱菊は少し驚きを見せながらも、市丸を拘束した。

「すんません藍染隊長。つかまってもた」

そう言う市丸に、藍染は特に反応を見せない。

「……………これまでじゃの」

「……………何だつて?」

「……………判らぬか藍染。最早おぬしらに……………逃げ場は無いということが」

夜一がそういった瞬間に、双☒の丘に様々な人物が現れる。一部を除く、全隊長格。その強者達が、藍染達を囲むようにして並ぶ。

その錚々たる顔ぶれは、この瀨霊廷に住まう者であれば、威圧感を覚えずにはいられないだろう。

だが、その面々を前にして、藍染は不敵な笑みを浮かべた。

「……………どうした。何が可笑しい、藍染」

「……………ああ、済まない。時間だ」

藍染の言葉に、一瞬怪訝そうな顔を浮かべる夜一であったが、不穏な霊圧を捉え、目を見開いた。

「離れろ！碎蜂!!」

夜一はそう叫び、倒れる日向を抱えながら藍染から離れた。その直後に、空から光が降り注ぎ、藍染を包んだ。

そして皆の視線は、空へと移った。

直後、空に裂け目が生まれ、そこから巨大な白い手が現れる。

メノスグランデ!
「大虚!!!」

その手を見た碎蜂が口にすると同時に、裂け目が拡大し、無数の巨大な手が出てきた。そしてその手の主である無数の大虚が、身乗り出すようにして姿を現す。

その数の多さに戦慄する者も多いが、檜佐木が、裂け目の奥の何かに気付いた。

一瞬、三日月に見間違えるかと思うほどの薄い湾曲した線。だがそれは、明らかに生物の何かであることを皆に感じさせた。

さらに、藍染と同じような光が市丸と東仙にも降り注ぐ。それによつて市丸を拘束していた乱菊も、東仙を拘束していた檜佐木も、すぐさま離れなければならぬ結果になった。

その際に市丸は、乱菊の方を振り向き、何か言う。それに対し乱菊は目を見開くが、他の者には聞こえなかった。

そして遂には、三人の立つ場所が浮き上がり、三人は裂け目へと向かって昇っていくように浮き上がっていった。

「浮いた……っ!?」

「逃げる気かい、この……」

「やめい」

射場は、浮き上がっていく藍染を追うように斬魄刀を抜くが、元柳斎によつて引き留められる。

——『ネカンオン反膜』。大虚が同族を助ける際に行使するもの。その

光に包まれたが最後、光の内と外は干渉不可能になる。つまり、もう藍染達には誰も触れることは出来ない。

そんな中、藍染の『黒棺』を喰らって倒れていた狛村が立ち上がった

た。

「東仙!!降りてこい、東仙!!解せぬ!!貴公は何故死神になった?!亡き友の為ではないのか!!正義を貫く為ではないのか!!貴公の正義は、何処へ消えて失せた!!!」

狛村の咆哮は、空へと響き渡る。そしてその叫びに、東仙が口を開いた。

「言つたらう、狛村。私のこの眼に映るのは、最も血に染まらぬ道だけだ。正義は常に其処に在る。私の歩む道こそが、正義だ」

「東仙……………」

東仙の言葉に、狛村は続ける言葉を見失う。

そんな狛村の代わりに、浮竹が一步前が出る。

「……………大虚とまで手を組んだのか……………何の為にだ」

「高みを求めて」

「地に堕ちたか、藍染……………」

そう言う浮竹の表情は、今まで見たことの無いほどに険しい。そんな浮竹に向かい、藍染が口を開く。

「……………傲りが過ぎるぞ、浮竹。最初から誰も、天に立ってなどいない。君も、僕も、その死神も、神すらも。だが、その耐え難い天の座の空白も終わる。これからは……………」

「……………私が天に立つ。さようなら、死神の諸君。そしてさようなら、旅禍の少年。人間にしては、君は実に面白かった」

藍染はそう言って、裂け目の中に消えていった。

藍染の反乱から、一週間後。

「……………あつ……………」

「っ!!隊長、天宮城三席が!!」

久方ぶりのように目を覚ました日向の眼前には、白い天井が広がっていた。それだけで日向は自分が病室に居るという事を察した。

そして数分もすると、四番隊隊長である卯ノ花烈がゆっくりと日向の下に歩み寄ってきた。その表情は、どこことなく儂げで、哀愁を漂わせ、複雑なものであった。

「日向さん……………」

「……………はい」

「……………あの霊圧に関しては、私は関与するつもりはありません。本来、あれを判断すべき中央四十六室も今は機能しておりません。そして……………」

「お主は、藍染から両親の事を聞いたのであろう?」

突如、卯ノ花の背後から余り聞かないしわがれた声が病室に響く。しかし、その声は聞き間違えることのない人物が放ったものであった。

「総隊長……………」

死神の長。その瞳は、一心に眼前の青年に向けられる。

「……………儂はあの霊圧に対しどうこう言うつもりは一切ない。だからこそ、今はつきりすべきなのは、お主の立場なのじゃ」
「……………はい」

元柳斎の言いたいことを、日向は概ね理解した。

——お前は、瀧霊廷に於いて『何者』なのか。

それは、藍染の話したことが真実であるかのように裏付ける問いでもあった。だからこそ、日向は一瞬、辛そうな表情を浮かべた。

「その件に関しては浮竹に任せておる。直に訊くとよい」

それだけ言って、元柳斎は日向の居る病室から去ってゆく。それを見送った日向と卯ノ花は、少し間を置き見つめ合う。

「卯ノ花隊長は、全部知ってるんですね?」

「ええ」

間髪入れず肯定する卯ノ花に、日向は複雑そうな顔をする。

だがそんな表情もすぐに晴れる。

「じゃ、後で訊いときますね」

「えっ?」

あまりにあっさりとした物言いに、卯ノ花はきよんとした表情になる。そして日向はさっそく、近くにあった己の死覇装に袖を通そうとする。

「あの……………まだお休みになられた方が」

「俺の場合、霊圧の減少が原因でぶっ倒れたので、今の感覚ならもう全

快です。それに――……………瀨靈廷が大変だつて時に、俺だけ寝てるわけにはいきませんから」

「……………分かりました。ですが、無理は禁物ですよ?」

「了解です。じゃあ、ありがとうございます」

そう言つて、日向は物陰で着替えを終えてスツと部屋から出て行つた。その光景を、卯ノ花は少し微笑みを浮かべながら眺めていた。

「……………そういうところは、本当に似ていらつしやいますね」

「……………」

ルキアは、死覇装ではない私服でとある場所を訪れようとしていた。そしてルキアの横には、その場所の家主とも言える者も一緒だった。

「どうした朽木?あんまり固くならなくてもいいだろ」

「っ……………ですが海燕殿、やはり緊張します……………」

そう言つてルキアは、少し口を噤んでから再び口を開く。

「私が……………私の記憶から消し去ってしまった者に会いにゆくなど……………」

それが、相手にとってどれだけ苦しかったものであつたか。忘れていた側であるルキアには、計り知れぬものであつた。

ルキアがこれから会いにゆくのは、海燕の義理の妹と弟である焰と雫である。藍染たちが双匣の丘から消え去った後、ルキアが緋真の血の繋がった妹であると白哉から告げられ、半ば放心状態であつたルキアの下に、見知らぬ二人の人物が海燕と共に駆け寄つてきた。その者

達は、『他人』と呼ぶにはあまりにも自分に好意を抱いている者のそれであった。そして直後に、事情を知っている海燕から衝撃の事実が告げられた。

そしてルキアは、ここ数日間言いも言えない罪悪感に苛まれた後に、海燕の導きにより空鶴の家に戻った二人を訪れることにしたのだ。

「……………ゆっくりでいいんだよ」

「えっ……………？」

突如、海燕がそうルキアに言い放つ。

「確かに、お前が忘れた過去は取り戻せねえかもしれない……………だけだよ……………」

海燕が話していると、だんだん見えていた目の前の屋敷から二人の人物が、ルキア達に手を振っているような光景が、ルキアの瞳に映った。

「あいつらと思いい出を作れる未来の方が、まだまだ長えんだ」

「……………はい」

その言葉に、ルキアはそっと目じりに溜まっていた雫を袖で拭いた。

そうしていると、ルキアと海燕は屋敷の目の前に着く。そして、扉の前に立つ少女と青年が、ルキアに満面の笑みを向ける。

そして、ルキアの潤んだ唇が動いた。

「……………聞かせてくれ。私と、お前たちの思いい出を……………」

一度潰えた道ではあるが、またこうして三人の思いい出を作ることが出来る。

それが、ルキアの失った過去を埋める思いい出となっていくのである。

第五章 Time Does Not Return

n

秘話

己の産まれた日を知る

それを愛情と取るならば

「……………来たか」

浮竹は、十三番隊隊舎の隊首室に居た。すると、だんだんその部屋に向かつて足音が近づいてくる。その足音の音質だけでなく、その霊圧で、浮竹はここに向かつて来ているのが誰か理解した。

「失礼します。浮竹隊長」

「……………ああ。入ってくれ」

襖を開けたのは、白髪青年であった。

「そこに掛けてくれ」

「失礼します」

そう言つて浮竹は、日向に座布団に座るように促した。そして日向は少し息を吐いた後に、本題に入るように浮竹の顔を見つめた。

「話は総隊長から窺つてます。教えてください。俺の……………過去を」

「……………解つた」

そこから浮竹は、少しずつ口を開いていった。

話は約二百年前までに遡る。

「……………まったく、一体何の騒ぎだ？」

「いやあく……………まさかボク達が真央霊術院まへに視察に来ている時に、トラブルが起こるなんてねエ……………」

そんなことを呟きながら、十三番隊隊長・浮竹十四郎と八番隊隊長・京楽春水は真央霊術院の廊下を駆けていた。

何故、二人がここに居るのかというと、今日は年に一度の隊長格による視察の日であったからである。そして、その任を任されたのが二人であるという単純な理由である。

そして二人が駆けている理由は、ちようど浮竹の講義が終わった後の休み時間に、廊下から何やら騒ぎと思しき声が聞こえてきたため、二人はトラブルなのではないかと駆けていたのである。

「あ、浮竹隊長！京楽隊長！ど、どうかあの子を止めて下さい!!」
そんな二人に気づいた男子生徒と思しき人物が、二人に助けを求め、その顔の青ざめ方から、二人には嫌な予感が頭を過った。

「済まない！通してくれ！」
「ちよつとごめんねエ」

野次馬と思しき生徒の群れを掻き分けながら、騒ぎの中心と思しき場所へと向かう。

そして――。

「まだやるか、てめえ!!」

「ひい!!も、もう許してくれえ――!!」

「……………はっ?」

二人の目に移った光景は、白い長髪を後頭部でまとめ、ポニーテールのような髪型をしている少女が、明らかに自分よりも体格の良い男子生徒に馬乗りになり、今まさに拳を振り下ろそうとしているというものであった。余りの光景に、二人は一瞬茫然としたが、このままだとあの拳が男子生徒の顔面に直撃することは免れないので、すぐさま浮竹は少女の振り上げている方の腕の手首を押さえる。

「もうやめるんだ。このどんな理由があるのかは解らないが、やり過ぎだよ」

「ぐっ、ぐぬぬ……………」

自分を押さえているのが隊長と理解し、少女は渋々男子生徒から降りる。

すると、その途中で野次馬の中から『さすが鬼女だ……………』という

声が聞こえてくる。

「てめえ、ぶっ殺すぞ!!」

『ひいひい!!』

「ほら、押さえて押さえて」

少女が怒鳴ると、野次馬たちの顔が一瞬にして青ざめる。それを見て京楽はすぐに抑えるように催促する。

何とか押さえている浮竹であるが、目の前にいる少女の腕力は、成人男性にも劣らないほどであるため、浮竹も冷や冷やしながらか押さえている現状である。

そして二人は、未だに顔を真っ赤にする少女と落ち着いて話せる場所を探しに行き、漸くそれらしい部屋を見つけることが出来た。

「ふう〜……………君、名前は?」

落ち着いたと言わんばかりに、浮竹は出来るだけ優しい口調で少女に話しかける。少女は少し黙った後に、小さな声で呟く。

「……………天宮城菖蒲」

「へえ〜!じゃあ、貴族の子だね!」

知っている、という口調で話す京楽に二人の視線が集まる。

「でも、確か天宮城の家って何年か前になくなったはずだけど……………」

「天宮城はアタシの家の分家。宗家は御神楽。勘当されたから、アタシは天宮城の苗字を借りてる」

簡潔に区切りながら話す菖蒲と言う少女だが、その内容は中々濃い。い。

「えつと……………何で勘当されたんだい?」

少し申し訳なさそうに話す京楽に、菖蒲は素っ気ない態度で続ける。

「死神になりたいって言ったら、親に『とんでもない!』なんて言われたから、こつちから出てきてやった」

少し彼女の親であろう人物の物まねもしながら、菖蒲は説明をした。

「でも、それじゃあ君の親が心配してるんじゃないかな?」

「ふん!下級貴族の娘なんて、上の貴族との結婚を強要されるだけだ

もん!!結婚結婚結婚結婚って……アタシにはもう耐えらんない!!」
ふんふんと鼻息を荒くする少女は、華奢な腕をぶんぶんと振り回しながら力説する。その光景に、二人は苦笑いする。

その後、少女が再び落ち着くのを待って、浮竹は再び問う。

「それで……何であの生徒と喧嘩してたんだい?」

「あの野郎……アタシの鬼道の成績がいいからって、陰口をネチネチネチネチネチと……!それだけならまだしも、すれ違い様に聞こえる声で『売女が……』って根拠もないことをおとおお!!!」

「お、落ち着いて!菖蒲ちゃん!」

腹の奥底から叫ぶ菖蒲を、京楽が再び宥める。

どうやら先程の喧嘩は、男子生徒の心無い言葉に憤慨した菖蒲が我慢できずに手を出したものであることが解った。手を出すことも悪いが、それ以前の男子生徒の言動にも非があることは、菖蒲の話聞く以上明らかであった。

その後菖蒲は、浮竹と京楽の立ち会いの下、男子生徒に手を出したことを謝りに向かい、そして男子生徒からの謝罪も受けた。

これが、浮竹たちと菖蒲の邂逅であった。

女性にしては粗暴な言動が目立つ生徒であったが、斬拳走鬼の斬以外が突出していた才能を誇っていた菖蒲は、霊術院を卒業するまでの六年で、周りから僻まれる存在から、霊術院の女子生徒の誰もが憧れる『強い女性』という存在になっていったのである。

そして遂に卒業をし、どの隊に入るか悩んでいる時のことであった。

「ふむ……貴方が天宮城菖蒲殿かな?」

「はいい?」

急に後ろから話しかけられ、菖蒲は少し間延びした声で背後に立っていた男性の方を向いた。

そこに立っていたのは、死覇装に青色の羽織を羽織り、さらに錫杖を右手に持つ眼鏡の男性であった。

「……誰ですか?」

「おっと、失礼。私は、鬼道衆総帥大鬼道長・握菱鉄裁と申します。こ

の度は、ご卒業おめでとうございます」

「はあ……………」

話が見えない菖蒲は、困惑した顔で鉄裁の顔を見つめる。

「急な話で申し訳ないのですが、是非貴方に鬼道衆に入っていたいただきたいのです。貴方の鬼道の才は、既に存じておりますぞ。既に、七十番台の鬼道を詠唱破棄で完全な威力を発動できると……………」

そして、鉄裁の懸命な説得が功を奏し、菖蒲は鬼道衆に入ることになった。

菖蒲は、霊術院時代からの鬼道の非凡な才により、十年程で鬼道衆のナンバー2に位置する副鬼道長になった。

副鬼道長になってからは、死覇装の上に紫紺の羽織を羽織り、衆の長である鉄裁を支えながら任を全うしていた。最初こそ、二人の仲はただの上司と部下のそれであつたが、鉄裁の柔和な態度により菖蒲も心を許し、鉄裁は菖蒲にとっての第二の父とも言える存在になった。

そして副鬼道長となり忙しくなりながらも、浮竹達との交流は続いていた。その交友関係は浮竹や京楽に留まらず、鉄裁繋がりで夜一や浦原、隊長では卯ノ花や曳舟、果てには山本元柳斎重國にも及んでいた。

そして、そんな激務をこなす菖蒲にも女性としての幸せが訪れることになったのである。

相手は、行きつけの団子屋に同じく常連だった男性。雨の日に困っていたところを、男性に傘を貸してもらったところから交際は始まったのである。

男性の名は『優咲』。少し弱弱しい印象を与える痩せた身体に、眼鏡を掛けた人物であり、行きつけの団子屋ではいつも本ばかりを読んでいた。

最初は、偶然顔を合わせていたのが、一か月も経つと同じテーブルに座るようになり、また一か月経つと次は隣の席に座るようになり、そして一年経つと店に入ってから出るまで一緒に笑いながら時を過ごすような関係になっていた。

互いに、相手がどのような職に就いているのは知らなかった。だが

それでも、二人は互いの人柄に惹かれ、そして好きになったのである。
「菖蒲……僕は、中央四十六室の裁判官なんだ」

ある時、突然言われた真実に菖蒲は目を丸くした。中央四十六室とは尸魂界中の賢者が集められる瀨霊廷の司法機関である。その事実だけで菖蒲は、自分が優咲には不釣り合いな者だと理解した。自分は下級貴族。それも、実家からは勘当され今は分家の苗字を借りている身分。いくら自分が副鬼道長だからといって、その身分の差が埋まるとは菖蒲には思えなかった

「……僕は君を妻になってももらいたいと思ってるんだ。だから……」

優咲の恥らいながら言う言葉に、菖蒲も恥らいながら首を縦に振った。

病室には、赤ん坊の泣き声が響き渡る。菖蒲の隣には、助産師の女性が二人ほど居る。そして菖蒲の腕には、たった今産まれた赤ん坊が抱きかかえられていた。

「ふふふ……」

「菖蒲殿お!!産まれたのでありますかああ!!」

「うおおい!!何でうちの旦那よりも早く鉄裁さんが部屋に入って来てるんだ!!」

凄まじい勢いで襖を開けた人物に対し、菖蒲は頭の下にあつた枕を投げつける。それは見事に、上司でもあり、父でもある男性の顔面に直撃する。しかしそれにもへこたれずに、鉄裁は産まれたばかりの赤ん坊を目にし、涙を流す。

「おお……これで菖蒲殿も、一人の母親に……!」

どこからともなく取り出したハンカチで、鉄裁は涙を拭う。

そして鉄裁は少し落ち着いた後に、口を開いた。

「それで、菖蒲殿。この子の名前はどうか致すのですか?」

「…………お日様の『日』に、向かうの『向』で、『日向』」

「ほう。何故、その名を？」

鉄裁の問いに、菖蒲は少し深呼吸をして、泣き止んだ日向に微笑みかけながら口を開く。

「女だったら、同じ漢字で『ひなた』って読ませようとしたんだけどね……まあ、一緒の意味だから関係ないや。日向みたいに、そこに居るだけで居心地が良くて暖かい……そんな皆の抛り所なるような人間になってほしいって思っ……鉄裁さんはどう思う？」

「……素晴らしい名前ですぞ。それだけ想いが込められているのであれば、日向殿も喜ぶでしょう」

「赤ん坊に殿って……」

いつもの堅苦しい口調の鉄裁に、菖蒲は苦笑いする。

その後、菖蒲は子育てと仕事を両立しながら暮らしていた。副鬼道長という仕事柄、中々家に帰れないことも多かったが、優咲の両親が快く面倒を見てくれたので、菖蒲は心配せずに任務を果たすことが出来た。

そして休日には、日向を背負い瀟霊廷を散歩し、知り合いに会いに行くのが通例になっていた。

「あらあ〜!!日向ちゃんじゃないかい!!元気かい!？」

「おっ、桐生さん!ウチの日向はいつでも元気さ!!」

そんな菖蒲は、十二番隊長の曳舟の下を訪れていた。笑顔の曳舟の呼応するように、日向も満面の笑みで曳舟に笑いかける。

そんな日向に、菖蒲と曳舟の表情はどうしても緩み、だらしないものになってしまう。

「やつぱり赤ん坊はかわいいねえ〜!もうすぐ一歳の誕生日かい?」

「おう!やつと一歳になるんだよ!」

「うう〜!!」

「は〜い!どちらたんでちゆかあ〜?」

何か言うように声を上げる日向に、菖蒲は赤ちゃん言葉で話しかけ

る。仮にも、瀟靈廷では『鬼姫』と称される程に強い女性が、赤ん坊一人でここまでだらしない表情を取れることに、曳舟は子の偉大さを思い知った。

「アンタほどのじゃじゃ馬が、今じゃ母親ねえ〜……………」

「……………ん？桐生と菖蒲ではないか……………お、日向もおるではないか！ちよつと、儂に抱かせてくれ……………」

そこに現れたのは、四楓院家の当主である、四楓院夜一であった。夜一は日向を見るなりに、顔をニヤニヤさせて抱こうとする。

しかし日向は、夜一の手をぺちぺちと叩き、拒絶の意を示す。

「なっ……………！」

「はははっ！残念だったな夜一！！日向はお前の抱っこは嫌らしいな！」

その光景に、菖蒲は殊勝そうな笑みで夜一に言い放つ。それに対し夜一はがっくりと頭垂れる。

「ははっ！夜一、あきらめな！やっぱり子供は、母ちゃんに抱っこされるのが一番いいんだよ！お前も母親になったら解るよ！」

そう言つて曳舟は、夜一を元氣付ける。

「お主も独身ではないか！！儂と何が違うと言うのじゃ！」

「アタシにはひよ里が居るからねえ〜！アタシにとつちや、アイツが子供みたいなもんだよ！」

そういった、半ば無益な戦いを繰り広げながら曳舟と夜一は口論する。

するとそこに、二人の男性が現れる。

「お、みなさん何をやってるのかなア〜？」

「京楽さん！」

「やあ、菖蒲ちゃん。日向君は元氣かな？」

「浮竹さん！ほら、この通りさ！」

新たに二人の隊長が集まることにより、日向を中心とした場所は、何やら近寄りがたい雰囲気醸し出してくる。それもそうである。隊長が四人に、それに匹敵する副鬼道長が居るのだ。一般隊士には、かなりの度胸がない限り、この集団に近寄ることは出来ない。

「ははっ！日向くんは元気だねエ。こんな綺麗な人がお母さんって、幸せ者だよ。でも、僕が赤ん坊だったら、曳舟隊長の……………」

「はっ!!」

「ぎやうん!?!」

京楽が言い切る前に、菖蒲は京楽に金的を喰らわせる。クリーンヒットだったためか、京楽は泡を吹きながらその場に崩れ落ちる。

「日向く。こんなセクハラ親父にだけは絶対なるなよくく」

「うくく!」

元気良く返事する日向に場が和むが、それでも京楽はまだ立ち上がれない。その横で浮竹が『自業自得だ』と、同情の余地なしと切り切る。

「あらあくく?みなさん、どうしたんスカく?」

そこに飄々とした口調で現れたのは、この場で唯一隊長格でない浦原喜助であった。そして日向を見るなり、近づき――。

「可愛いツスねえく!ボクにも少し……………」

「ふんっ」

「痛いっ!?!何するんスカ、夜一さん!」

日向に手を伸ばした浦原だったが、それは夜一のしつぺによって阻まれる。

「日向に、お主のような得体のしれない虫を近寄らせる訳にはいかん」
「え、得体のしれない虫って……………」

夜一の言葉に、浦原はがっくりと頭垂れる。その光景を見て曳舟は、夜一が先程抱っこ出来なかつた腹いせと、もし浦原が抱っこ出来た際に自分のプライドが傷つくことを恐れ、それを阻んだのは目に見えていた。

こうして日向は、多くの人に愛され育っていたのである。

だが、事件が起こるのはもうすぐであった。

血筋

血塗られた過去

その垢は

血よりも紅く

昼間に、様々な人物に可愛がられていた日向は疲れて、菖蒲の背中
で気持ちよさそうな寝息を立てて眠っていた。

その寝息を聞きながら、菖蒲は足早に屋敷へと戻っていた。時刻は
夕方であり、屋敷にいる給仕たちが、自分や夫のために料理を作っ
てくれていると考え、菖蒲は久しぶりの一家団欒に心を躍らせていた。
最近、忙しかった夫の優咲も、裁判に一区切りが付くので夕方には帰
れると言っていたため、今頃家で優咲が自分と日向を待つてくれてい
ると思うと、それだけで顔がニヤついてくるのである。

そして漸く菖蒲は屋敷の門に着いた。だが、いつもとはどうも様子
が違う。

「…………あれ？いつもなら、藤さんが来てくれるのになあ…………」

藤さんとは、この司家に居る老齢の侍女である。菖蒲が帰って来る
時間には、いつも門で待機しているのである。その人物が居ないと言
うだけで、菖蒲は得も言われぬ違和感に襲われる。

「ただいま〜」

立ち止まっては仕方ないと、屋敷に入っていく。だが、いくらか歩
いても人一人の気配すら感じない。

嫌な予感が、菖蒲の頭の中を巡る。

そして廊下から夫の書斎へと入る。

「っ!!!ゆ、優咲!!!」

菖蒲の視界に映ったのは、書斎の机に上半身を預けるように倒れこ
む優咲の姿だった。ただならぬ状況ではないということに察した菖

蒲は、必死に優咲の身体を揺らす。だが、一向に反応は返ってこない。その状況に、菖蒲の顔はどんどん青ざめてゆく。

心音が、ない。

菖蒲は医者ではない。だが、心音がないということは、医術の素人でもただならぬことであることは容易に想像できた。

「誰か!!誰か居ないのか!!」

大声で屋敷の者に助けを求めようとするが、一向に反応が返ってこない。それだけで、菖蒲は屋敷がどのような状況なのかはつきりと解った。

それからのことは、菖蒲ははつきりと記憶してはいない。ただ一つ、はつきりとしていたことは、酷く静寂に包まれていた屋敷の中に、赤子の泣き声が響いていたことだけだった。

「菖蒲。下手人は、現在隠密機動で探しておる。気休めにしかならんかもしれないが、今はゆっくり休んでおけ」

「……………ああ……………」

その後、菖蒲の叫ぶ声を聞いた隊士が、すぐさま各所にこの惨劇を到達した。そして菖蒲は、鉄裁の家で日向と共に避難している。そこで菖蒲は、現状を夜一から聞いていたのである。

菖蒲の目の下には、濃いクマが出来ている。それだけでも、菖蒲の今の心労が窺える。

(……………何故、下手人は屋敷を襲ったのじゃ?それも、菖蒲の居ない時に……………いや、わざと居ない時を狙ったのか。だとしたら、目的は何じゃ?中央四十六室への強い憎悪を持った者の犯行か?それとも菖蒲へのか?)

夜一は、必死に現状から下手人の犯行の動機を考える。金品の消失は確認出来てはいない。だとすると、強盗とは考えにくい。そこから導き出されるのは、司家への怨恨の線である。

「夜一さん」

「っ！喜助か!!」

「っ……………」

夜一が思考を巡らせていると、下手人の手がかりを探っていた浦原が現れた。尸魂界でも随一の頭脳の持ち主の登場に、二人は息を飲む。

そんな二人を見て、浦原はバツの悪そうな顔で頭を掻く。

「どうじゃ喜助!?何か分かったか!!?」

「……………ええ。下手人はこちらで見つけました。ですが、もう死んでいました」

「なっ……………!!?」

「霊圧痕跡を辿り、下手人の家で……………。死体に目立った外傷はなし。現場の状況から、毒か何かでしょうね」

「……………口封じか……………!!」

そこで夜一は考え至る。これは、第三者が下手人に依頼をし、屋敷を襲わせたものである。

「何が目的何じゃ……………!?!」

「今は特に……………ですが、優咲さんの立場を考えたら、明らかに保守派の者の手引きでしょうね……………」

「ど……………どういうことだ……………?」

浦原の言葉に、菖蒲が反応する。

その反応に、浦原は再びバツの悪そうな顔で話し始める。

「ここからはボクの勝手な推測なので、あまり真に受けしないで下さい。優咲さんは、中央四十六室でも、今の瀨霊廷の法を見直そうとする改革派だったんす。もしこれが、ただの賢者の一人であればこうはならなかった……………ですが、司家は中央四十六室でも強い権力を持っている家ツス。その理由はボクは詳しいトコまで解りませんが、他の賢者たちからすれば、自分に仇なす強者は邪魔でしかないんす。そして、秘密裡に優咲を排除するために犯行に及んだ……………これがアタシの推理ツス」

その推理に、二人は息を飲んだ。ただの一人の死神の勝手な推測であるにも拘わらず、その説得力はかなりのものであった。

そして、夜一は思わず自分の太ももを殴る。

「おのれっ……………!!これでは手が出せん……………!!」

もしこれで、疑いを中央四十六室の者達に向けても、それは権力の塊である者達の独断と偏見の審議の下、水泡に帰するであろう。それこそ、『下手人は死んだ』という事実より。いくら夜一が四楓院家の当主であり、隊長であっても、中央四十六室には力が及ばない。

そのことに、夜一は歯噛みをするのであった。

「それともう一つ……………日向クンを、しばらく一人にしない方がいいでしょう」

「どういうことじゃ?」

浦原の言葉に、夜一は下に向けていた顔をパツと上げる。

「曲がりなりにも、日向クンは司家の血を引いています。もし本元の本当の目的が、『司家の血の排除』であれば、日向クンも危ないです」
「なっ……………!!」

浦原の言葉に、菖蒲は腕に抱く日向の顔を見る。あどけない顔で眠る日向の顔に、菖蒲は涙が零れそうになる。

「そんな……………日向まで……………」

「あくまでも推測ツスけど、念には念をと思い……………」

浦原の言う事は、菖蒲にとって絶望にも等しかった。もし、日向が狙われているのであれば、それはいつ何処から、どの様に来るのか。そしてそれは、どのようにすれば防げるのか。

ありとあらゆる考えが、菖蒲の頭の中を巡る。それが辿り着く場所は……………。

——日向の不自由。

いずれの考えも、それは日向のこれからの自由——『選択』を奪って行くものとなる。それが、母親にとってどれだけ辛い事か。そして、それを知らない我が子がどれだけ不憫か。

「……………菖蒲サン。入りマス」

片言の言葉が、部屋の外から聞こえる。そして襖が開かれると、そこには寸胴な桃色の髪の大男が居た。

「ハチ……………」

「大鬼道長に言われて、ココ来ましタ。護衛を頼む、ト……………」

「……………はっ、アンタに守られるほど、アタシも弱かないよ」

菖蒲は強がるように、目の前の男——有昭田鉢玄に言い放つ。だが、その口調とは裏腹の酷く憔悴した様子に、鉢玄はいつもの菖蒲とは違うことをひしひしと感じていた。いつもならば、仕事や家庭のことを愚痴りながら、途中でノリツツコミで鉢玄の豊かな肉に向かってビンタするのである。

「菖蒲様……………」

「……………ルイか」

そして、鉢玄の巨体の後ろに居た女性が出てくる。長い黒髪の、お淑やかな雰囲気を含み出す美しい女性。

そのルイと呼ばれた女性は、菖蒲の部下でありながら親友でもある人物である。そんな女性が、日向を抱く菖蒲に歩み寄る。

「……………安心して下さい。日向様は、私が命に代えても護ります」

「……………ルイ……………」

ルイの言葉に、菖蒲は弱弱しく微笑む。

心なしか、日向の寝顔も先ほどより安らかになっていた。

『——朕ハ〃〇〃。ツギノ所有者ハ才前ダ。ソノ血ノ証ヲ示セ』

惨劇から一週間後、別の事態が巻き起こった。

ある夜、菖蒲が日向の泣き声に気づき目を覚ますと、右眼から血涙を流す日向の姿が目に入った。その事態に、ただごとではないことを察した菖蒲は近くで見張りをしていた鉢玄とルイに声を掛けた。

そしてその後、鉢玄の治療能力や、事態を聞いて駆け付けた卯ノ花の回道で回復を試みたものの、事態は足踏みしていた。

ただ明らかになっているのは、日向から常に霊圧が漏れ出している

こと。そしてそれが原因で、日向が衰弱し始めていることであった。そしてそんな中、中央四十六室から菖蒲へ出頭命令が出た。気が気でない状況のまま菖蒲は中央四十六室へと出頭した。

これが息子との、最後の別れになるとも知らずに。

菖蒲が出頭した後、多くの人物が日向を助けるために奔走していた。それこそ鬼道衆や、隊長格など、菖蒲との交友関係のある者がある。

現状、日向の生命を維持するためには失ってゆく霊圧を補給しなければならなかったため、その手段を持つ四番隊の卯ノ花が付きっきりで治療を行っていた。何故、卯ノ花なのかと言うと、卯ノ花でなければならぬほど霊圧の消失が速いのである。そのため卯ノ花は、仕事を副隊長や他の者に頼み、日向に付きっきりであったのである。

そんな中、浦原が瀟霊廷の図書館で興味深い記述が書かれている本を見つけた。

それは尸魂界の創生にまつわるおとぎ話のような本であったが、その中で次のような記述を見つけたのである。

霊王に授かりし浄天眼は、千里を見渡し、その内の善悪すらも見通す。

そして受け継ぎし血を持つ者は、幾らかの血と力を贅に、浄天眼を授かることを能ふる。

この記述を見つけた浦原はすぐさま、日向がこの儀式とも言うべきものの真つただ中なのだと判断した。本来ならば、先の浄天眼を有するであろう日向の祖父が死に、そして日向の父に順に受け継がれるモノであったのだが、その両方が同時に死したため、その順番が赤子である日向に回ってきたのだ、と。

だがそれは、霊圧も零に等しい日向にとっては、死に急ぐものでしかない。

「ですから日向クンの浄天眼を、魄内封印します」

浦原は、現在日向の周りに居る者達に向かって言い放った。

「喜助……………そんなことが可能なのか？」

夜一が、不思議そうな顔で浦原に問う。

「……………浄天眼は『神器』ツス。ボクの予測では、現在日向クンの血と霊圧を元に、浄天眼が日向クンに馴染もうとしてるんす。ですが、『モノ』であるなら分離は可能かもしれません。日向クンの身体が、浄天眼を『異物』と認識してる今ならなんとかなるかもしれないんす……………卯ノ花隊長。手伝ってもらえませんか？」

「……………はい、勿論です」

浦原の言葉に、卯ノ花は首を縦に振る。そして卯ノ花は日向を抱きかかえる。

「貴方の母親はきつと戻ってきます。ですから、それまで暫し辛抱を……………」

ズウウウウウン!!

「……………!!?」

突如、響き渡る地響きに三人は驚く。

「この霊圧は……………菖蒲のものか!!?」

「……………夜一サン。ボクは卯ノ花隊長と日向クンの魄内封印を進めます。ですから……………菖蒲さんの所に」

「……………解った。任せたぞ」

そう言つて夜一は、すぐさま菖蒲の居る場所——中央四十六室の裁判所へと向かう。

(菖蒲……………お主は、何をしておるのじゃ……………!?)

瞬神と呼ばれる夜一が瞬歩をすると、モノの数分で目的地が見えて

くる。

そして次の瞬間、目的地から凄まじく巨大な刀の形をした炎が噴き出た。その爆炎は、夜で暗かった辺りを真っ赤に照らした。

その炎に、夜一は心当たりがあった。

破道の九十六・『一刀火葬』

犠牲破道とも呼ばれるものであり、自分の四肢の一つを犠牲に発動出来る鬼道である。

そしてもう一つ気づいた。

「霊圧が……消えた……じゃと……？」

菖蒲の霊圧の消失。

その事実が何を意味するか。

夜一が混乱していると、炎の近くより知っている霊圧がこちらに向かっていているのが解った。

そしてその霊圧の持ち主は、夜一の目の前で止まった。

「総隊長殿……！」

「四楓院夜一か。ちょうどよかつたわ。四番隊に連絡をつけよ」

長い髭を蓄えた老人。死神の長・山本元柳斎重國。その老齡とは思えぬ身に纏う服の所々が焦げている。

「総隊長殿!!あそこで、何が起きたと言うのですか!?!」

「……中央四十六室の者達を殺害した下手人・司菖蒲は、自害した」
「なっ……!!?!」

菖蒲が自害した。その事実には、夜一は目を見開く。そんな夜一に、山本は言葉が続ける。

「下手人は死んだ。ならば今すべきは、付近で巻き添えを喰らった者の手当。そうではないのか？」

「っ……はっ。すぐさま、救護班の要請に向かいます」

夜一はそう言つて、この場を後にする。それを山本は、長い髭を触りながら見届けていた。

そして、こう呟いた。

「お主の命より、子の未来か……」

山本の耳には、菖蒲の遺言とも言うべき叫びが何度も繰り返されて

いた。
その遺言を痛いほど理解しながら、山本は彼女を憐れむのであつた。

晴天

流れる血

紅く 熱く

「……………無責任だよねえ……………アンタの母ちゃんは……………」

曳舟は、眠っている赤子を抱きながらそう呟いた。

結果だけ言うと、日向の件は解決した。だがそれは安心出来るものではない。浦原曰く、魄内封印は出来たものの、それがいつまで続くかは解らないとのことである。何かの拍子に封印が解けることは否定出来ず、百年続く可能性も、明日解ける可能性も否定出来ない。

だが、現在は別の問題が発生していた。

この天涯孤独になってしまった赤子をどうすべきか。

その件について話すべく、曳舟を始め、夜一や浦原、そして卯ノ花が集まっている。本来ならば鉄裁なども呼ぶべきだとも四人は考えたが、現在鉄裁は空いた副鬼道長の件なども相まって動ける状況ではなかったのである。

「……………普通に考えたら、養子に出すべきですが……………」

「なら、儂が請け負おう」

卯ノ花が、言い辛そうに口を開くが、最後まで言わずして夜一が割って入った。

その速さに、浦原と曳舟が目を見開く。

「仮にも、司家は上流貴族。その血筋であれば屋敷の者も反対せまい。いや、反対しても引き取る！」

「……………アンタに母親務まるかい？」

夜一の言葉に、曳舟が呆れたように言う。それに夜一はグツと息を飲むが、その表情を見るからに決心は固いと見えた。

「ふむ。ちょうど良かったですな」

「っ……朽木隊長!? どうしてここに……?」

突如、この病室に現れたのは六番隊隊長・朽木銀嶺であった。予想外の人物の登場に、四人は差があれど全員驚いている。

「いや、少し野暮用で……それで元の話に戻りますが、その養子の話。朽木家も候補に入れてはもらえませんか?」

「なっ……!」

老齢の男性の口から出たのは、夜一と同じく日向を養子に迎えるというものであった。その言葉に、夜一は驚く。

だがそれを横目に、銀嶺は話を進める。

「此度の一件……うちの蒼純も心を痛めていてな。司家とはそれなりに親睦を深めておった。それで蒼純が、両親を失ったこの赤子のことを思い出してな。可能であれば朽木家に迎えようと言ったのじゃ」

蒼純とは、銀嶺の息子であり現六番隊副隊長である人物である。実は菖蒲と蒼純は霊術院で同期であり、それなりに知っている間柄であったため、菖蒲の結婚の披露宴に招待されたことを境に、再び親交を深めるようになっていったのである。

思わぬ所で、瀨霊廷でも五本の指に入る貴族が、一人の赤子を引き取ろうと争っているように、傍から見ている曳舟は思っていた。

だが、それを見ていた浦原が、言いづらそうに口を開いた。

「その養子の件ですがア……ボクはおすすめ出来ないツス」

「何故じゃ、喜助?」

浦原がそう言う理由を、夜一が問いただそうとする。そして銀嶺も、浦原の顔を静かに見つめる。

「……今回の件は、本元が司家の血筋の排除を目的としたものでした。それは現在も変わらないでしょう。もし、日向クンを養子に出せば、多くの家が日向クンの引き取りを画策するでしょう。それは勿論、最初に言った目的や、自分の家の権力強化のために……ああ、スイマセン。気を悪くしないで下さい、お二方」

「いや、構わん」

浦原の言った意味を察し、すぐに銀嶺は気にしないように伝える。しかし、納得出来ない顔の夜一が口を開く。

「じゃから、早々に四楓院家か朽木家のどちらかを選ぼうと言っているのではないか！」

夜一の言いたいことは、権力がどうのこうののではなく、何故養子に出すのがいけないのか、というところである。

「……………恐らく、中央四十六室は浄天眼という『存在』を、血眼になつて探しているでしょう。自分側にあれば有益に働くが、そうでなければ邪魔でしかない……………後者の場合、手っ取り早いのは何でしょうか、夜一さん？」

「……………殺しか」

「ええ、そうです。権力にモノを言わせ、何が何でも日向クンを消そうとするでしょうね。いくら五大貴族の庇護の下にあるとは言え、四六時中護衛を付けるでもない限り、日向クンの命が危ない……………。これはつまり、日向クンの自由が奪われると同意なんですよ」

「……………ふむ」

浦原の説明に納得したように、銀嶺が頷くが、その横で夜一がワナと震えていた。

「何故……………何故罪のない子が、そんな目に合わなければならんのだじゃ……………！」

「……………方法があります」

そんな夜一に、浦原が口を開く。

「日向クンを、一度社会的に消します」

「もっと分かりやすく言えんのか、喜助！」

苛立っているのか、夜一の声が自然に大きくなる。

「……………つまり、日向クンを何十年か誰にも悟られない場所に匿うんですよ。それこそ、屋敷の一室や流魂街などに……………ボクは、後者を勧めます」

「つ……………こんな赤子を、流魂街にじゃと!? 正気か!？」

「ん……………んんん……………！」

夜一の怒鳴り声に、眠りについてた日向が目を覚まし、ぐずり始めた。それに対し曳舟は『よしよし』と言いながら日向を揺する。

「瀨霊廷に身を置くか置かないかで、そのリスクは格段に違ってきま

す。ですが後者にも、誰か日向クンの面倒を見る事が出来る人を探すという問題が……………」

「その役、私にお任せ下さい」

不意に、部屋の外から声が聞こえる。そこに立っていたのは、香水ルイであった。ルイは曳舟に歩み寄り、静かに日向を抱きかかえる。

「ですけど、ルイさんは……………」

「菖蒲様に救われたこの命、当に捧げております。ならば、せめて菖蒲様の形見である日向様のために……………お願いします」

そう言つてルイは、日向を抱いたままこの場に居る全員に向かつて深く礼をする。

深く、長く……………。

「その後は、お前の考える通りだ。彼女はお前を連れて流魂街へと姿を消した」

浮竹の話を聞いていた日向の顔は、どこか俯きかけている。そんな日向を見た浮竹は、少し頭を掻いた後、部屋の後ろに飾つてある刀の元へ赴き、それを取つて日向に差し出した。

「……………これは？」

「……………鬼道衆副鬼道長・司菖蒲の斬魄刀だ。『一刀火葬』で骨も残らなかったが、これだけは形見として残つた」

「形見……………ですか……………」

そう言つて、日向は斬魄刀を受け取る。打刀のように反りのある刀身は、薄く紅がかつている。長い間使われていなかったためか、はたまた所有者がこの世から姿を失つたせいか、その刀身は少々曇つている。

「それをどうするかは、お前次第だ。そう、総隊長から告げられている」

「……………はい」

それだけ言つて、日向は部屋を後にした。それは一刻も早くこの暗

い雰囲気の一部屋から逃げ出し、外の空気を吸おうとしたのか。または、手元に握つてある斬魄刀を一刻も速くどうにかしたいのかと考えていたのか。それは日向にしか分かり得ないことであった。

陰のある表情のまま、日向は廊下を歩いていた。

「あつ……………」

「つ……………」

そんな中、向かい側から一人の人物が現れた。死覇装ではなく、私服姿ではあるがすぐさま誰かは理解出来た。

(……………皮肉だよな)

貴族でありながら、流魂街の者となった自分。

そして流魂街の者にも拘わらず、四大貴族の一員となったこの人物。

貴族になり、その悩みを相談していた相手は自覚していない元貴族。

(どんな顔すりやいいんだ?)

「日向、怪我はいいのか?」

「ん……………まあな……………」

どこかぎこちないのは、彼自身が一番理解していた。それを見て、ルキアが眉間に皺を寄せさせる。

その表情は、複雑で、儂げで、憐れみを持ち、そして動揺を持っていた。

「その……………日向……………あの時の……………」

「仮面のことか?」

「つ……………ああ」

自分が言おうとしていたことを先に言われ、ルキアは少し驚くがすぐに複雑な表情に戻った。

「いつからなのだ? あれは死神の力とは思えん……………いつからあれを……………」

「ルキアとも、海燕とも会うよりずっと前だ。虚の力だからずっと隠してた」

日向が淡々と話すのに対し、ルキアの顔はどんどん影を濃くしてゆ

く。親友である者が、自分にずっと隠していたことがあると知り、どこかで怒りのような、悲しみのような感情が湧いてきたのであろう。だがルキアは、それが自己中心的な考えと悟り、その感情を振り払ったうえで話を進める。

「……辛くはなかったのか?」

「言わない方が楽なことってあるだろ。ただそれだけだ」

日向の態度は、どこか余所余所しい。いつも身近にいたからこそ、感じ取れた違和感。

「私が軽蔑するとも思ったか?」

「は?」

「私が軽蔑するとも思ったかと訊いておる!」

先程とは打って変わって高圧的な態度になったルキアに、日向は呆気にとられている。ルキアは、ずんずんと日向に近寄り死覇装の襟を掴む。

「あれを他人に見せたから何だと言うのだ!お前は、あれで私を……皆を護ろうと藍染に立ち向かったではないか!!何を恥じるのだ!何故、お前は皆から一步身を引いておるのだ!お前が隠していたことは、確かに皆から距離を取られる事かもしれん!だが、それよりも前にお前が身を引いてどうするのだ!!」

「ちよ……ルキア……!」

「お前は莫迦者だ!!どうしようもない莫迦者だ!!阿呆だ!!皆のお前への信頼が、あの程度で無くなると思っておるのか!!そんな軟なものだったのか!!私は……少なくとも私は、以前と同じようにお前を信じておる!!だから……だから……!!」

だんだんと声が小さくなってきたルキアは、襟を掴んだまま頭を日向のちよようど胸の部分に押し付けた。

「お前も、私を信じてくれ……。確かに、話さない方が楽なこともあるだろう。だが、私はお前の傍に居てやる。それだけは覚えておいてくれ……」

「ル……キア……」

ルキアの心からの言葉に、日向は暫し言葉を失った後に、胸に頭を

押し付けるルキアの肩にそっと腕を回した。その行動にルキアは一瞬驚くが、そのままの状態を保つ。

「……………ありがとな。俺も、お前が辛いときは傍に居てやる」
「日向……………」

日向の言葉に、ルキアは押し付けて俯いていた顔を上げ、明るくなった日向の顔を見つめる。

そして暫し、その場に不思議な空気が流れる。それは今まで二人が感じたことのない、何やら甘いような空気が――。

「朽木さ――ん！石田君が服を……………」

「おうルキア。ここに……………」

「あ……………」

しかし、その空気は廊下の角から現れた二人の人物によって壊される。現世からやって来た人物。胸の豊かな女子とオレンジ髪の男子は、日向とルキアが密接になっている光景を見て、瞬く間に目を反らし、顔を紅潮させていく。

「ご、ごめん朽木さん！もう少し後に来るねっ!？」

「おおおう、ルキア！悪かったな！邪魔しちまってよ！」

「ちよちよちよ、ちよつと待て!!誤解だ!いや、いい雰囲気だったのは否定せぬが、そういう関係ではないのだ!!」

「全員落ち着け」

慌てふためく三人に、唯一冷静な日向がツツコミを入れる。だが、そんな日向も顔を紅潮させていたことは言うまでもない。

これにて一先ず、瀨霊廷の騒動は収まった。

旅禍として現れた一護たちも、無事現世に戻ることが出来た。その際、一護は浮竹から『死神代行証』なるものを受け取り、正式に尸魂界から死神であることを認められた。

穿界門を潜る一護と、それを見送るルキアの顔はどこか晴々としていた。

梅雨の時期に別れ、夏の日差しのような容赦ない特訓を受け、そし

て台風のような争乱に巻き込まれた少年に、漸く太陽が覗いた瞬間であつた。

彼らの、長く短いような夏は終わった。そして、暑さが残る秋へと季節は移っていく。

舞台は、現世に移る。

番外編 Part 2

閑話

雨のち晴れ

空は、よく晴れていた。まるで、今迄自分の心の奥底を暗くしていた暗雲が去って行ったかのようなようだった。

だが、それはあくまで一時の平穏でしかない。

今は夏。これから台風が来るかもしれない。冬には豪雪が降るかもしれない。それが季節の風物詩だと言われれば、俺には何とも言えない。

だけど俺は思うんだ。何やかんやで、そういった少し悪い思い出の方が記憶に残りやすいって。どっかの誰かは、『男は悪い思い出』を覚えやすく、女は『良い思い出』を覚えやすいってさ。

俺にはこの快晴が、どうにも嘘っぽくてたまらない。そりゃあ幾分か気も晴れるが、完全には言えない。

でも、そんな今でも気持ちのいい風が吹いてくれる事は嬉しい。なんでかって言われたら、いつも隣に居た奴の匂いが風に運ばれて、やっと戻って来てくれたって思えたからよ。

俺は恋とかそういうのとかはよく分からない。海燕や都姉さんの姿を見て、あれが恋の完成形なのかなって思ったこともある。だけど、俺はそういうのはなるべく考えないようにした。

誰かを好きになるって事は、そいつが俺にとっての弱点になる。そのせいで、そいつが何か酷い目にあったら、俺は何て言っているのか解らない。

だから、『誰かを好きになる』ことについては、何も考えようとはしなかった。

時々、恋次が俺の好みのタイプを訊いてきたけど、俺は何て答えていいのか解らなかった。

でも、今なら少しだけ解る気もする。

これが恋とかどうとかは解らないけど、たつた一つだけ思ったんだよ。

——俺は、お前の傍に居たい。多分、これが……………。

「……………おかえり、ルキア」

「まあ、食えよ。俺の奢りだからよ」

「お……………おう。そうか」

「じゃあ遠慮なく頂くよ」

「うわ……………おいしそ……………!」

「ム……………頂く……………」

一護達が現世に帰る一日前、日向は今回ルキアを救う為に来た一護達に恩を返すべく、とりあえず瀨霊廷の料亭に連れてきたのである。

高級感が漂う店の内装に、一護は少しタドタドしているが、他の者達は日向の言う事もあって、目の前に置かれている会席料理を食べ進めいていく。

「いいのかよ?こんな高そうな店で……………」

「気にすんなったつたる?ルキア助けるのに手を貸してもらったんだ。これでも足りないくらいだ」

「金とかはいいのか?」

「大丈夫つつつてるだろ。ほら、冷めない内に食えよ」

そう言つて日向は、パクパクと料理を食べ進める井上を指差す。井上は、本当に幸せそうに、目を輝かせながら箸を進める。

「ありがとうね！天宮城くん！本当に美味しいよ！」

「井上……食べるの早いな……」

井上の前の料理が、他の者よりも無くなるのが早いのに対し、茶渡が驚く。

「そういや、石田。お前、いつも何食ってるんだ？」

一護が、石田に疑問を投げかける。

「別に何でもいいだろ」

「何でもいいだろって……気になるじゃねえか」

「……自炊しているよ。僕は一人暮らしだからね。だから、こういう料理は久しく食べてない。そういった面では、君に感謝して味わっているよ」

「そりやどうも」

石田の言葉に、日向は安堵の息を漏らす。もし気に入られなかったら、それなりに日向も落ち込む。だが、一先ず全員、料理を楽しんでいるようである。

「ねえ、天宮城くん！朽木さんとは仲良いの？」

目の前の料理がなくなりかけている井上が、日向に疑問を投げかける。その問いに、日向は少し唸った後に答え始める。

「ああ……ルキアとは霊術院時代からの付き合いだから、結構長いな……。まあ、それなりに仲は良いぜ？」

「ほお……」

日向の答えに、井上は興味深そうに耳を立てる。

「……料理、追加するか？」

「え!?……いいんですか？」

井上の前に置かれている空の皿を見て、日向は苦笑いで訊く。それに井上は恥ずかしそうに顔を赤らめながら、首を縦に振る。

そして次に、日向は一護に視線を向ける。

「なあ、一護」

「ん？どうしたんだよ？」

「……いや、やっぱいい」

「?……そうか」

日向は少し間を置いて、質問することを取りやめた。

『実際に見た方が早い』と考え。

その後、日向と一護達は料理を楽しみながら、共に戦った者として少しの間談笑していた。

瀨霊廷・穿界門前。

「……これが、正式な穿界門だ。無論、君達のために靈子変換器も組み込んでおいた」

浮竹は、一護をはじめとする現世の者達に話をしていた。

藍染の反乱から約一週間。一護達は、“旅禍”という立場から、瀨霊廷への客人という風な立場になっていた。

この場には多くの隊長格達が居る。現世に戻る一護達を見送る為だ。

そんな中、浮竹が手招く。

「……一護君」

「浮竹さん」

「君にこれを」

「？何スかコレ？」

浮竹は懐から一護に何かを渡す。それは五角形で、中に髑髏の絵が描かれていた。

「二応、尸魂界にも死神代行の発生に対応した法律があつてね、現れた死神代行が尸魂界に有益であると判断された場合、古来から必ず、これを渡す決まりになっている」

「へ〜……ありがとう！浮竹さん！」

一護は浮竹に礼を言つて、代行証を懐にしまう。

その間にも、現世の者達は見送りに来たルキアに別れを告げていた。

「それじゃ朽木さん、元気で……」

「ああ。チャドも石田も井上も……皆元気でな」

「あーそ……そうだ!!」

すると、井上が何かを思い出したかのように声を上げ、どこからともなく服を取り出す。

「これ！石田くんから朽木さんへ!!」

「お……」

「だ……大事に着てあげてね！」

「ん？あ……ああ……」

服を渡す井上だが、かなり挙動不審で視線を石田に向けたり日向に向けたりしている。それが何の意味を示しているのかは、井上本人にしか分からない。

浮竹との会話を終わり、ルキアに視線を移す一護だが、何か腑に落ちないことがあるかのように顎に手を当てる。

「……………あああああああ!!」

すると一護が、顔を真っ青にして懐に手を入れ、何かを探す動作をする。その行動に、周りの者達が何事なのかと一斉に一護に視線を移す。

「ねえ!?ねえ!!?どこだ!!」

「何がだ、黒崎……?」

「ルキアの!!ブレスレット!!」

石田の問いに答える一護。そしてその答えを聞いた石田が、呆れた顔をする。

「まさか……失くしたのかい!?朽木さんの大事なブレスレットを!」

ルキアのブレスレットとは、昔日向が誕生日にルキアに渡した柘榴石のブレスレットである。現世でも、大事そうに着けており、並々ならぬ思いを抱いていることは一護には理解していた。

そしてそれを失くしたという事実には、一護は顔から汗が流れることを止められない。

勿論一護もわざとではなく、隊長格達との死闘を繰り広げたため、どこかで何かの拍子に失くしたのだろう。

そしてルキアを助ける事に必死になって、ブレスレットの事など気にも留めなかった。つまりはそういうことである。

「私のブレスレット……?」

「……ああ。あれだろ。俺が昔、誕生日にあげた奴」

「…………おお、あれか!……………失くしたただとお!!?」

日向の言葉に手をポンツと叩いたルキアであつたが、冷静になつて考えてみるとその重大さに気づき声を荒げた。

そしてルキアは涙目になつて一護の死覇装の襟もとを掴む。

「どこらへんだ!?!どこらへんで失くしたのだ!?!」

「わ、わかんねえよ!!俺も必死だったからよ……………」

一護の答えに、ルキアは目からハイライトの消えた状態で、一護の死覇装を掴む手の力を抜く。

それを見ただけで、ルキアの精神的なダメージが凄まじいということとを周りの者達は察していた。いつものルキアであれば、『たわけ!!』と言つて一護に一撃を加えるだろうが、それすらもしない。

そんな悲しさが天元突破しているルキアの肩に、日向は手を置く。

「気にすんなよ。また、別の買つてやるからよ。今度は一緒に見に行こうぜ?」

「……………本当か、日向!?!」

ルキアは、日向の言葉で一気に復活する。それを見て、一護はホツと胸をなでおろす。そしてその光景を見ていた井上が、『天宮城くん……………やっぱり朽木さんのこと……!』と言っているが、肝心の二人には聞こえていない。

そして少し後、日向は一護に視線を向ける。

「……………」一護。本当にありがとな。あと、お前の家族にもよろしく言つていてくれ」

「ん?お、おう……」

何故、家族によろしく言うのか解らないまま、一護は首を縦に振る。そして一護は、ルキアに視線を向ける。

「……じゃあな、ルキア」

「……ああ。ありがとう、一護」

その言葉を聞いた現世一行は、穿界門へと歩いていく。

そしてその背中が見えなくなるまで、この場に居た者達はずっと彼らの後ろ姿を見つめていた。

「なあ、ルキア」

「うむ？どうしたのだ、日向」

十三番隊の縁側で茶を飲むルキアに、日向が話しかける。

「来年の夏に、一緒に花火見に行かねえか？」

「ブツ………!？」

日向の誘いに、ルキアは飲んでいた茶を噴き出す。そして顔を紅潮させながら、零した茶を拭く。

「ど、どうしたのだ、急に……?」

「……いや、別に。たまにはそういうのもいいかなって思っただけよ」

「そ、そうか………私は一向に構わぬが……」

何とか平静を保とうとするルキアであるが、どうにもそうにはなれない。

——何故、いきなり花火なのか？

「………おっと。俺はもう時間だから行くぜ？ちゃんと休めよ？」

「お、おお………そうか」

そう言っただけ日向は颯爽と消えて行った。その後ろ姿を、ルキアは茫然として見つめていた。

動悸が激しく、湯呑を持つ手は小刻みに震え、中に入っている茶が波を立てている。

(……今のはズルいぞ……日向……)

そう思いながら、ルキアは熱い茶を無理に飲み干すのであった。

第六章 Grasp The Future 欠魂

幾つかの夜を跨ぎ
記憶は交差されてゆく

瀨靈廷の藍染の争乱から、少し時は経つ。

空座町のある家のインターホンが鳴る。それに対応するのは、この家に居る死神代行の少年の妹の一人である。

『一兄い——！お客さんだよ——！』

「ん？ああ、今行く！」

妹の自分を呼ぶ声に、彼——黒崎一護は自室から降りて玄関に向かう。軽快な音を立て玄関まで降りると、そこには黒いフードを被り、ジーパンを穿く白髪の青年が居た。

その人物に、一護は驚く。

「日向!?なんでここに居んだよ!?!」

「おう。一週間ぶりだな。ほら、土産だ」

日向はそう言つて、右手に持っていた饅頭の入っている箱を一護に手渡す。茫然としながらも一護はそれを受け取り、そして再び会話を始める。

「向こうはどうしたんだよ?もしかして、空座町^{こっ}担当になつたのか?」

「ああ………それ諸々お前に話した方がいいことがあつてな。時間大丈夫か?」

「まあ休日だから時間はいいけどよ………俺の部屋でいいか?」

「おう。じゃあ上がるぜ」

そう言つて日向は穿いていたスニーカーを脱ぎ、一護に付いて行くように階段を上っていく。その光景を、妹である夏梨と遊子は静かに眺めていた。遊子は、夕飯の準備のためにエプロンをしていた。

「髪の色抜いてる人なんて……一兄も結構な人と絡んでるよね」

「ええ〜？でも夏梨ちゃん。あの人結構優しそうだったよ？」

「実際どうなのかなんて解らないよ。それこそ一兄にでも訊かなきゃね」

夏梨はそう言いながら、右手に持っているコップの中のソーダを飲む。

「よっこいしょ……代行業はどうだ？」

「まあまあだ……それより本題に入ってくれよ。何でこつちに——」

「何だよ一護。そいつ知り合いなのか？」

「っ!」

ライオンのようなぬいぐるみが急に喋りだし、日向はそのぬいぐるみをまじまじと見つめる。

「何だこいつ……?」

「何だこいつとは何だ!?俺様は『コン』ってんだ!よく覚えておきやがれ!!」

「じゃあ一護、本題入るぜ」

「うおおい!!」

日向の華麗なスルーに、流石のコンも全力のツツコミを日向に入れる。それにわき目も振らずに日向は話を始める。若干コンに憐れみのような目を向けていた一護だが、日向の真剣な顔に、一護もそれに釣られて真剣な眼差しを日向に向ける。

「俺がこつちに来たのは空座町に発生してる『欠魂』^{ブランク}の調査だ」

「欠魂?」

聞き慣れない単語に、一護は眉を顰める。その反応を予想通りとばかりに日向は淡々と説明を始める。

「欠魂ってのは、輪廻の輪から外れて記憶が抜け落ちた魂魄のことだ」

「魂魄なのか？それがどうしたって言うんだ？」

「その欠魂が、この空座町でつい先日から大量発生してるんだよ。急に現れて急に消えるって感じでな。欠魂自体に害があるって訳でもねえが、こんな現象は瀨霊廷の記録でも数百年以上ないことだ。それだけでこの事態が異常だってことが解るだろ？」

「ああ……………それでお前が調査に来たって訳か？」

「まあな。隊長三人が抜けて体制がガタガタになってる瀨霊廷から、隊長格を出撃させる訳にはいかねえってことだから、一先ずは俺が……………ってことだ」

一通り説明を終え、日向は一息吐く。日向も、この欠魂の大量発生を聞いたのは一昨日である。この事態に藍染が関係していることは解ってはいないが、それでも無視出来る事態でないことに変わりはないので、現世調査に日向が抜擢されたのである。

そして日向はこの事態を独自に調査する上で、この空座町で活動をする死神代行にも知らせておかねば、と考え今に至っているのである。

日向は頭を掻きながら、再び口を開く。

「この事態は浦原さんにも話そうと思ってる。こういうった類は、あの人が得意だろうからな」

「ん？日向、浦原さんのこと知ってるのか？」

「まあな。二十年前ぐらい前に会って……………いや、向こうはもつと前から知ってるのか」

肯定しながらも、最後の方は呟くように話した。それは一護にではなく、自分に向かつての言葉だったのかもしれない。だが、呟くようにだったので最後の方は一護には聞こえなかったようである。

「とりあえず、俺は調査を進めるから暫く空座町に居る。何か異変があったら俺に伝えてくれ」

「おう、そうか。わざわざ悪かったな」

一護はそう言って出向いてきた日向を労う。その後、日向は一護の家を後にし、浦原商店へと歩いて行った。

「これ、どうぞ……………」

「おう。ありがとさん」

気弱そうなツインテールの女の子が、茶の入った湯呑を日向の前に差し出す。それを日向は愛想のいい笑顔で受け取り、少し啜ってからテーブルに置く。

そのテーブルの周りには日向の他に、浦原と鉄裁が座布団の上に座っている。

「……………朽木さんのことでしたら、謝罪する覚悟は出来ています」

「いや、今日はそんなことで来た訳じゃないんです。それはルキアに直接言つてやって下さい。それに……………俺も謝罪とか、色々しなきゃならないことがあるんで……………」

そう言つて日向は深く礼をする。その光景に、浦原のみならず、鉄裁や近くで見えていた雨という女の子や、ジン太という赤髪の少年も驚いたような様子を見せる。

「母が……………お世話になりました」

「……………聞いたんすね」

日向の口から出た言葉に、その意味を理解出来た浦原と鉄裁は、妙な顔で日向を見つめる。

「それに、俺を助けてくれてありがとうございます」

「……………アタシは当然のことをしただけです。子供を助けるのが、大人の役目ツスから。それにアタシは君に強いた選択で、君を普通とは程遠い道を歩ませることになってしまいました。恨まれるならともかく、感謝される程のことはしちやいません」

そう言う浦原の顔は、酷く俯いている。それが何を意味するか、日向には理解することは出来なかったが、日向は再び礼をすることでこの話を終わらせることにした。

そして話題は藍染の話に変わった。

「鏡花水月を喰らっても、俺は視覚だけは支配されなかつたんです」
「成程……やはりそれは、浄天眼によるものと考えていいでしょうね」

以前、アルトウロとの決戦の前に夜一に『藍染に手を出すな』と言われていた日向であるが、それは浄天眼の封印解放を待つてのことだと思に至った。

そして浦原の考えに、日向も同じ推測を立てていた。自分を数多くの者から引き離れた忌々しい存在ではあるが、日向はいつまでもそれに縛られることはなく、自分にあるモノは全て利用しようという考えに、今は至っていた。

「鏡花水月の術中に陥ったとしても相手を視認できる……それは大きなアドバンテージになります。もしやすれば、隙を突けたかもツス」

「ですけど……俺は藍染に歯が立たなかつた」

日向はそう言つて歯を食いしばる。思い出されるのは双匣での対決。日向が卍解状態で虚化しても、藍染には一太刀加えるだけで、倒すことは出来なかつた。

「……浅慮かもしれませんが、それは問題ないでしょう」

「……？？？どういうことですか？」

日向の疑問に、浦原は扇子をぱつと開いてから説明を始める。

「藍染が奪つた『崩玉』とは、死神と虚の境目を取り払うことが出来るものツス。それで産み出されるのが、『破面』ツスね」

「アルトウロのようなのですか？」

「はい」

浦原の説明に日向は、剣を交えたことのある瀨霊廷に侵攻をした破面を思い浮かべる。

「崩玉が完全に覚醒すれば、あれと同じレベルの破面が量産されることになるでしょうね。まあ、個々の虚にもよりますが強力になるのは間違いないツス」

アルトウロは、自身の斬魄刀である『不滅王』の力を使い、多くの死神の力を自分の物にすることで強大な力を得ていたが、今回の藍染の手によって産み出されるのは、そのような能力なしで隊長格の破面が量産されるだろうというのが、浦原の主張だ。

「そしてここで重要になってくるのが日向さんの斬魄刀の能力ツス」

「……………大体察しました」

倒した虚の能力と力を、自らのモノとする禁断の力。それが日向の斬魄刀。

「藍染の手下であろうその破面達を倒せば、日向さんは大なり小なりかなりの力を短期間で得ることが可能ツス。向こうが戦力をどの程度揃えるかは解りませんが、恐らく隊長と同じ頭数を揃えることはするでしょう。つまり、そのレベルの破面を倒せば……………日向さんの実力なら可能ツスよね？」

「買い被りです。実際、相手がどの程度か見てみないと分かりませんから」

そう謙遜する日向だが、実際に実力は隊長と同格である。同じ隊長を一瞬で倒す藍染に対し、かなり善戦したことからそれらは窺えるだろう。

「最悪、止めだけでも日向サンが行えばかなりの収穫ツス。……………勿論、日向サンがその気ならツスけどね」

「……………ここまで来て方法がどーのこーの言ってられる状況じゃないです。それが最善なら、俺はやります」

「……………スイマセン。汚れ仕事のようなことをしてもらって」

「いいです。割り切ってますから」

そう言う日向の顔は、確かに割り切ってるかのような表情である。それを見て浦原は安堵の表情をする。

そこには、あの時の赤子がここまで成長したのかという、一種の親のような感慨があるのが関係しているかもしれない。

そして日向は、思い出したかのように手をポンツと叩く。

「ああそうだ。今回現世に来たのは、ちよつと欠魂のことで……………」

「え？ああ、はい。アタシでよければ協力しますよ？」

次の日の朝。

『ホロ、——ウ!!ホロ、——ウ!!』

「うおおう!?!……………やっぱ慣れねえな、これ……………」

朝っぱらから鳴り響く、代行証の虚が出現したことを知らせる警鐘音に一護は驚く。靈感のあるものには聞こえない音ではあるが、その音量はかなりのものであり、既に何回か聞いている一護でもまだ驚く。

一護はやれやれと頭を揺らしながら、眠っていたコンの口に手を突っ込みながら、ぬいぐるみの中に入っている義魂丸を取り出す。

そしてそれを一気に飲み込む。

「よし……………コン!留守頼んだぞ!」

「てめえ!俺の淫夢を邪魔しやがって!!覚えとけよ!!」

文句を垂れるコンを尻目に、一護は窓から瞬歩で虚が居る場所へと向かって行く。空座町には、車谷善之助という死神も居るが、空座町に出現する虚の強さと比べると心もとない実力であるため、毎回一護がその死神よりも早く虚を倒しているのである。

一護が向かっているのは、紅葉が美しい大きな池のある公園のような場所である。この季節であれば、大勢の人たちが紅葉狩りをしているであろう。そんな場所で虚が暴れば、どれだけの被害が出るかは解らない。そのことを考慮し、一護は瞬歩で現場に急ぐ。

「よ、一護」

「っ…………日向か!驚かせんなよ……………」

急に一護の隣に同じく瞬歩で来た日向が現れる。急に隣に現れた人物に、一護は一瞬驚いたが、知り合いであることに安堵の表情を浮かべる。

「大分遠くから来てたろうが……………お前、恋次と同じで探知系は苦手か?」

「うるせえな！」

「つたく……………ほら、サービス出勤だ！急ぐぞ！」

「おうよー」

日向の掛け声に、一護は頷く。二人の死神の瞬歩はかなりの速さなので、現場に着くにはそう時間は掛からなかった。

紅葉が美しい公園に着くと、そこから少し離れた場所で小さな女の子が巨大な猿のような虚に追われている光景が目に入る。それを目の当たりにして一護はすぐさま背負っている斬月を取り出し、その横で日向は腕を肩に担ぐように構える。

「縛道の六十二・『百歩欄干』!!」

突如出現した光の柱を、女の子を追っている猿の虚に向かって投げつける。それは虚に向かう途中で幾つかに分裂し、地面に刺さるようにして、女の子と虚を隔てる壁となる。上から降ってきたことを認識した虚は、一護たちが居る方向を見る。

「おおおおおおっ!!」

「ギャアアアア!!」

そんな虚の右腕を、一護は振り下ろした斬月で斬り落とす。痛覚はあるので、虚は苦悶の叫びを上げる。そして虚が目の前の死神の危険を察知する間もなく、日向が虚の左側に移動し、鬼道を放つ。

「縛道の六十三・『鎖条鎖縛』！——決めろ、一護！」

「おう!!」

日向の声に、一護は声を上げ、再び斬月を虚に向かって振り下ろす。それは虚の中心目がけて放たれたものであり、鎖条鎖縛で動きを封じられている虚は逃げる間もなく身体を両断される。

そして虚は断末魔を上げながら、宙に霊子をまき散らしながら浄化されていた。

「ふう……………まあ、こんな所か」

一護はそう呟いていると、日向が先程追われていた女の子を連れて向かってきた。

「ほら、感慨ふけてないで、ちゃんと死神の仕事しやがれ」

「うっせーよ。そう言うならオメーがやればいいじゃねえか」

「俺は、オメーがちゃんと死神の仕事をしてるってことを浮竹隊長に伝えなきゃならねえからな。ほら、魂葬してやれ」

「ちっ……………解ったよ」

そう言つて一護は女の子に近付くが、女の子は怯えた目で一護を見つめ、日向の死覇装を両手で握る。

その様子に、日向は思わず嘔き出す。

「ぶっ……………確実にオメーの顔にビビってんじやねえか。大丈夫だ。このお兄ちゃんの怖いのは、口調と顔だけだから」

「てめえ……………覚えてやがれ……………」

日向の言うことに、一護は額に青筋を立てる。そのせいで女の子はさらに怯える。

それを見かねて、日向が膝を折つて女の子と同じ目線になり、頭 handsの平を乗せる。

「大丈夫だ。このお兄ちゃんが、ちゃんと君を天国に連れてつてくれるからな」

「天国……………？怖くない？」

「ああ。天国つて名ばかりのど田舎だけど、住んでる人らは優しいからな」

そう説明するにつれて、女の子の表情は強張ったものからだんだんと穏やかなものへと変わってゆく。

そして女の子は決心したように頷き、それを確かめた一護は斬月の柄尻を女の子の額にポンッと押し付ける。柄尻を額から話すと、額には『死印』という文字が刻まれており、それを確かめるとすぐに女の子の身体はだんだんと消えてゆく。

「ありがとう……………お兄ちゃん達……………」

「おうよ。機会があったら、向こうでも会おうぜ」

笑顔を浮かべ礼を述べる女の子に、日向は軽く手の平を振りながら別れを告げる。そして間もなく、女の子の身体は完全に消えた。

それを見届けた後、日向は一護の方を見る。

「よし……………一護。この後暇だろ？俺の調査手伝ってくれよ」

「はあ?!何でそうなんだよ?」

「オメーの町の異変の調査位手伝ってくれてもいいじゃねえかア。」
聞いたぜ？オメー部活とかいう奴入ってねーんだろ？だったら日曜
の今日は暇じゃねえか」

「誰に訊いたんだよ……………」

無駄な情報網に、一護は呆れた表情を浮かべる。

「井上だ」

「いつ訊いたんだよ」

「昨日学校でな。お前のことを校門でスタンバってたら、手芸部だっ
たか？それが終わった井上に会ってな。それで部活に入ってないオ
メーは土曜は学校来てないって聞いてな。その後、お土産渡してオ
メーんちまで来たって訊だ」

「……………ああく解ったよ！手伝ってやるから一回家に帰らせろ」

「おうよ。じゃあ俺も一回浦原さんのとこに戻るわ」

日向は浦原に頼み、暫くの間は泊まらせてもらうことにしてもらっ
ているのである。そのことに関しては、鉄裁の賛成もありすんなり決
まったことはここに追記しておこう。

「じゃあ駅に集合な」

「おう」

軽く別れを告げ、二人はこの場を後にする。

そして、この後その駅で異変を目の当たりにすることを二人は知る
由もなかった。

思念珠

存在とは

周りに認識されてこそ　そこに真を持つ

周りに知られない存在など

無に等しい

「……………」護遅えな

日向は、右手にコーヒーの入ったカップを持ちながら駅前で一護を待っていた。勿論、日向は義骸に入っている。

傍から見れば、日向は週末に彼女を待つ男子高校生にしか見えな。実際に待っているのは実際の男子高校生なのだが、日向にとってはどうでもいいことである。待っている間に何回か女子高生に逆ナンをされていたが、それを華麗に断りながら日向は待機していた。

手に持っていたコーヒーが冷め始めたところに、駅の方からオレンジ髪の少年が現れる。

「一護、遅えぞ」

「わりい……………遊子が、朝飯も食わないでどこに行ってた、つて言つてな……………。朝飯食つてけつて言われてよ……………」

「……………はあ、まあいいわ。待ってたつても三十分くらいだからな」
そう言つて日向は一旦辺りを見渡す。日向が現世に来てから、未だに欠魂には遭遇していない。欠魂が出現すれば伝令神機に表示が出るものの、それまでは今まで出現した場所を見て回ったりして空座町をパトロールするしか出来ることがない。

とりあえず今日は一日中町を歩くことになるだろう。日向はそんなことを思いながら、二十年前も訪れた町の風景を眺めていた。

「……………ん？」

——風が変わった？

日向は突如雰囲気の変った周囲に、違和感を覚える。この違和感

は、日向のみならず一護も覚えていたようで二人は辺りを注意しながら見回す。

すると、日曜の人の多い時間帯の奥の方に、明らかに人ではない物体が日向の目に入る。それと同時に日向の伝令神機に反応が出たことから、日向は確信してすぐさまポケットから義魂丸を取り出して飲み込む。それを見ていた一護も、同じく義魂丸を飲み込む。

「お、おいー一護」

一護の身体に入ったコンが焦ったような声を上げるが、二人は気にもせずにその物体の元に向かってゆく。

近くまで来ると、その全貌が確認出来た。トンガリ帽子のような頭部に、白いレインコートを羽織るような胴体。ただの霊魂でないことは明らかであった。

「日向……………コイツか?」

「ああ……………多分な。試しに、魂葬してみる」

そう言って日向は腰に差していた斬魄刀を抜き、柄尻を欠魂と思われる物体の額に押し付けてみる。しかし欠魂は押し付けた際に少し引く程度で、何の変化も現れない。それを見て日向は、伝令神機を取り出し瀟霊廷の技術開発局へ連絡しようとする。

「こちら、十三番隊第三席・天宮城日向。現世空座町にて、欠魂と思しき魂魄を発見。そちらの指示を仰ぎたい……………ん?」

淡々と報告する日向だが、伝令神機から聞こえるのはノイズだけであり、日向の報告が届いていないということを実に示していた。その事実にも、日向は心の中で舌打ちをして一護の方を見る。

しかし、一護の方にも同じような欠魂が居り、二人は欠魂が増えていくことに気が付く。

「気味が悪いな……………」

「魂葬も出来ないんじゃない、どうすりゃいいんだよ……………」

一護が不満のような言葉を漏らすと、欠魂に異変が生じた。先程まで大人しかった欠魂が日向達に向かってきたのである。その様子に、二人は咄嗟に斬魄刀を構える。

「こいつらっ……………!一護!」

「くっ……！」

一護は苦悶の表情を見せ、斬月を横に振るう。それに巻き込まれた二体ほどの欠魂は何の抵抗もなく斬られ、すうっと姿を消してゆく。しかし、すぐさま後ろから別の欠魂が二人に向かって来る。

「縛道の九・『撃』！」

日向は詠唱破棄で欠魂の行動を縛ろうと試みる。日向の放った鬼道は、十数体程の欠魂の行動を封じること成功する。だが辺りを見渡すと、行動を縛った以上の欠魂が居る事は明らかであった。

「月牙天衝は使うなよ！」

「当たり前だ！こんな所で使う訳ねえだろ!!」

一応日向は釘を刺すが、それは杞憂だったようである。

一護は必死に迫りくる欠魂に対処する。日向も、防戦では仕方ないと考え縛道を解き、攻勢に転じる。

「キリがねえ…………！」

「まったくだーん…………？」

一護は、斬っている最中、突如付近に現れた新たな霊圧に気が付く。その霊圧は欠魂のものではなく、どちらかと言うと死神に近いものであった。一瞬、空座町担当死神の車谷のものかと一護は考えたが、どうも霊圧の質が違うので車谷ではないと考える。

そして多くの欠魂の身体の合間から、その霊圧の正体が見えた。

「女…………？」

その姿は、明らかに少女と思われるものであった。紫色の髪を、黄色のリボンでまとめ上げている。その身に纏うのは明らかに死覇装である黒い着物である。

その少女は、斬魄刀と思われる刀を軽やかに振り回して欠魂を次々と斬り裂いてゆく。そして少女は次の瞬間、宙に飛びあがり、斬魄刀を構える。

「夕闇に誘え——…………！」

「っ!?!ばっ…………！」

少女が口にするのが解号だということを察した日向は、すぐさま少女の下に瞬歩で赴き、それを阻止しようとする。

「縛道の四・『這繩』！」

「……『弥勒……』……きやあ!? 何すんのよ!？」

腕に絡まった光の縄で体勢を崩した少女は、あからさまな怒りの言葉向日向に向ける。

「何するも何も、こんな所で斬魄刀の解放なんかすんじやねえよ!!」

日向の危惧することは、この得体の知れない死神の少女が斬魄刀を解放することで、駅周辺に居る多くの人間に危害が及ぶのではないかという事。直接攻撃系の斬魄刀なら兎も角、鬼道系の、それも『流刃若火』のような範囲の大きいものであったら被害は計り知れない。

「うっさいバ——カ!!」

「っ……しかたねえ!」

罵声を浴びせてくる少女に、日向は仕方ないという表情を浮かべ、少女の持つ斬魄刀を直に手で握る。その瞬間に、少女の斬魄刀は霧散するように消える。

「えっ……嘘!？」

「大人しくしてろ!」

「ふえ? ふにやあ……」

驚く少女の目の前に手を翳すと、少女はすぐさま意識を失い空中から崩れ落ちてゆく。それを左腕で支え、日向は少女を抱えたまま欠魂に向かつて右手の人差し指を向ける。

「破道の一・『衝』!」

日向の人差し指から放たれた衝撃は、群がっている欠魂の中心目がけて放たれる。普通の死神が放てば、人の身体が少し弾かれるほどの威力であるが、日向程の霊圧の者が放つとその威力はちよつとした爆発に並ぶものとなる。

爆発のような衝撃は、多くの欠魂を巻き込む。爆発によって辺りには凄まじい突風が巻き起こる。

そしてその威力を目の当たりにした欠魂達は、蜘蛛の子を散らすように駅から逃げ去ってゆく。その様子に、日向は一先ずの安堵の表情を見せる。

「……とりあえず、コイツどうするかな……」

そうやって日向は、腕の中で眠る少女に目を向ける。軽くとはいえ『白伏』を使ったからには暫く起きてくることはないであろう。

「はあ……………」

仕方ないという表情を浮かべ、日向はため息を吐いた。ため息を吐きながら地上に降りる日向に、斬月をしまいながら一護が近づいてくる。

「日向。そいつ何なんだ？」

「解らないな。それに尸魂界にも連絡が取れない。一護、悪いけどこいつを浦原商店に連れてつてくれねえか？俺はこつちで起こったことを直接向こうに伝えに行く」

「お、おう。やっぱりあれか？他の隊の奴等って解らないもんなのか？」

一護が急に質問を投げかける。その問いに、日向はすぐさま答える。

「空座町は十三番隊の管轄だ。三席の俺は大体の人事は把握してる。その中でも始解が出来る奴は一割ぐらいだ。だけどこいつは見たことがねえ」

「……………そうか。悪かったな、時間取らせちまって」

「いや。じゃあ、行ってくる」

そうやって日向は駅前から義骸と共に姿を消す。それを一護は黙って眺めていた。

救急車が、自分の身体に近付いていることに気づくまでは。

一護はその後、死覇装を纏った少女を背負い浦原商店まで向かった。そして起こったことを端的に話す。そして浦原は、欠魂についての説明を図と共に説明する。その中には『叫谷』や『思念珠』といった聞き慣れない言葉が出てくる。その途中で、コンが欠魂の中で謎の人物が居たことを話したりなど様々な話題が出て来た。

すると――。

『あの……もう少し眠ってた方が……』

『ええく!? やだやだく! 知らない場所だし、知らない人居るしく。撤退撤退!』

襖の奥から、雨のオドオドした声と、死覇装の少女の声が聞こえる。その声に居間に居た一護と浦原と鉄裁は襖をまじまじと見る。そしてドタドタという音の後に、少ししてから雨が襖を開けて三人が居る居間にやってくる。

「雨。どうしたんスか?」

「え……えっと……逃げられちゃいました……」

「あららく……ですって黒崎サン」

「何で俺に振るんだよ!?!……ああく解ったよ!俺が追いかかりやいんだろ!?!」

「流石黒崎サン!話が早い!じゃあ、お願いツス」

浦原の言葉に、一護は渋々少女を追いかけることにする。

そんな一護を眺めて、浦原は扇子をパンツと手の平に打ち付ける。

「さて……こつちはこつちで動きますか」

「ふんふんふん♪」

「おい!待てよ!」

鼻歌を歌いながら歩く少女を呼び止めるように、一護は声を上げる。それを見て少女が嫌そうな顔をする。

「アンタ誰?」

「アンタ誰って……俺は黒崎一護だ」

「あ、結構律儀く。私茜雫。よろしく!」

そう言っつて茜雫と名乗った少女は手をひらひらと振る。その屈託のない笑顔に、一護は多少抱いていた緊張感を取る。

そして一護は本題に入ろうとする。

「それで茜雫。お前について色々訊きてえんだが……………」

「ええ、何？ナンパ？」

「違えよ。お前が何で死神の力持つてるのかとかだよ」

「ふくん……………あつそ」

「あつそつてお前……………」

茜雫の態度に、一護は頭を抱える。何と言うか、かなり移り気な少女であり、自分の手には余る、というような感覚を一護は抱いた。同じ少女といっても、自分の妹達はかなりしつかりしている方なので余り手を焼いたりはしていない。だが、この短時間の会話をして解ったことは、茜雫は明らかに自分の妹達とは逆の性格であるということだ。

「もし、教えて欲しいならあそこに連れてつてよ！」

そう言つて茜雫が指差す先には、空座町に唯一ある遊園地である。

「ちつ……………わーつたよ！連れてくからちゃんと教えろよ！」

「オツケーオツケー！じゃ、レッツゴー!!」

茜雫ははしやぎながら、遊園地へと走つていく。それを一護はやれやれと頭を抱えて追いかけていく。

その追いかける最中で、一護はあることに気が付く。

（アイツ……………いつ死神から元の身体に戻つたんだ？）

一護の記憶の限り、茜雫は死神の姿のまま浦原商店に運んできたはずである。それなのにも拘わらず、茜雫は現在どこかの学校の制服であろう服に着替えている。もしあれが茜雫の本当の身体であるならば、いつ元に戻つたのか。浦原商店から真っ直ぐ茜雫を追いかけていた一護は、茜雫にそのような時間がないと考えていた。だが実際に茜雫は制服になっていて、その身体は橋の下の川の水面にも映っていることが確認出来る。

（どういふことなんだよ……………?）

今はそのことを振り払い、一護は茜雫を追いかける。

その頃日向は、瀨靈廷の異変を目の当たりにし、その事態について冬獅郎と話をしていた。

「まったく……まさか、こんなことになるとはな……」

「今回の事態は、明らかに欠魂が関係してるな」

「ああ……先輩の報告を聞く限り、あれと欠魂には明らかに因果関係があるだろうな」

十番隊の隊首室で話す二人の間には、やや重苦しい雰囲気漂っている。それもそのはずだ。尸魂界の空から現世の街並みが見えるなど、瀨靈廷史上初めての事である。この事態については流石に護廷十三隊も黙ってはおらず、日向とは別に早急に現世に派遣するための部隊を、冬獅郎を中心に編成している最中である。

「俺はすぐにでも現世に戻る。だが、今回の一件は技術開発局の協力なくしては解決できねえだろうな……」

「解ってる……涅の奴が、興味津々であれを調査してる。直に解るだろうよ。それまでは、黒崎の野郎と協力して先輩に頑張ってもらうしかねえぜ」

「まあ俺もやれるだけはやる。だが、専門じゃないからどうしても後手に回るしかねえだろうな……。俺の場合だけだな」

その最後を誇張した辺りに、何か真意があるのだろうと察し、冬獅郎は少し黙るがすぐに言葉が続ける。

「ともかく、何かあった時にすぐに動けるのは先輩だ。頼んだ」

「ああ……じゃあ、すぐに現世に戻る」

そう言って日向は隊首室を後にする。

「……まったく。気負い過ぎなんだよ……」

その途中で、日向はため息を吐きながら呟いた。

救出

千の夜を超えても
忘れてはいけない
約束を秘めて

日向が現世に戻ってきたのは、日が一日過ぎてからであった。そしてまず最初に訪れたのは浦原商店であった。

そしてそこで浦原がちょうど良かったと言わんばかりの様子で、日向にある映像を見せてきた。それは昨日の欠魂の大量出現の際に、コンが数多くの欠魂の中に見たと言う甲冑を身に纏う男たちの姿であった。

「こいつ等は恐らく、昔権力争いに負け尸魂界から追放された龍堂寺家の者と考えられます」

「……………成程。それで他に解ったことはありますか？」

「いえ……………それ以外は特に……………」

「……………解りました。貴重な情報を有難うございます。……………それで昨日の死神は？」

日向がそのことを訊くと、浦原が誤魔化すように笑いながら日向に応える。

「実は昨日黒崎サンに色々話してる時に逃げられてしまいましたねえ……………黒崎サンが追ったんですけどその後のことは……………」

「解りました。一護のここに行きます」

しかし日向は、浦原が予測していたものとは違う反応を見せながら、一護の下へ向かおうと立ち上がる。しかしそこで浦原は一旦日向を止める。

「行くのは良いツスけど……………今日は月曜なので家に居るかどうかわからないツスよ？」

「あ……………マジですか？」

「店長。今日は敬老の日なので大丈夫かと……………」

「ああ……………そう言えばそうでしたね。なら、ウチも少しセールスしますか」

鉄裁の今日は祝日であると言う言葉に、二人は間の抜けた表情を浮かべる。そして日向は再び一護の下へ向かおうとする。そして日向が店の扉の前付近に着くと、そこには見たことのある顔の人物が立っていた。

その予想外の人物に、日向のみならず、奥の方で見送っていた浦原も驚く。

「平子さん……………」

「よお日向。元気やったか?」

黄色いシャツに黒いネクタイをしている平子の姿は、日向が現世で卍解の修行をしている際に何度か見たことのある姿であった。それはともかく、日向は突然の知り合いの来訪に驚いている。

「どうしてここに?」

「ちよお顔貸しや。試したいことあんねん」

意地悪そうに笑う平子の姿を、日向はどうしたものかというような表情で見つめていた。

「まだここに住んでたんですか?」

「いーや。何回か別のところにも行ったんやけど、巡り巡ってまた空座町こっちに来てな。どや? 元気やとつたか?」

「あ……………え……………まあ……………」

「何や。歯切れ悪いのう」

以前訪れたことのある仮面の軍勢のアジトに着き、平子以外のメンバーが居る所に向かうが、二人は話していた。

平子は義骸に入っているの、その容貌は以前会った二十年前と何一つ変わらない。それに比べて日向は、幾分か大人になっているだろう。それでもまだ日向は青年の域を脱しない程度ではある。

世間話をしている間にも、二人は皆が居る広間に着いた。そこには外からは想像も出来ない荒野が広がっている。この光景も、二十年前に日向は何度も見ていた。

「ハゲ真子!!遅いわボケ!!」

「うっさいわアホ。別に遅くてもええやろ。こつちも尸魂界あつちに気づかれないように動くの大変やねん」

怒鳴り散らすひよりに、平子が呆れている様子で言い返す。その横では、拳西やラブ、ローズ、ハッチ、リサ、白が居る。

「ほんじゃ、ま、本題入るわ」

平子はそう言って、奥に置いてあった自分の斬魄刀に手を掛ける。そして斬魄刀の柄に手を掛ける。

その様子に、日向はすぐさま義骸から飛び出し、同じく斬魄刀に手を掛ける。

「夜一に聞いたわ。お前、視覚だけは支配されならしいやないか。その実証でもしよう思うてな」

「成程……じゃあ早速お願いします。少し予定が詰まってるんで」

日向の了承の言葉に、平子はニヤツと口角を吊り上げる。そして斬魄刀を抜き、構える。

「じゃあさっさと終わらしたるわ。倒れる——『逆撫』さかなで」

平子が解号を唱えると、平子の斬魄刀の形状が変化する。

それを日向はじっと見つめている。今のところ、日向には何の変化もない。

「どやっ？」

「……今のところは何も」

「そうか……あら？甘い匂いがせえへんか？」

「甘い……っ？」

言われてみればと、日向は鼻をクンクンとし、平子の言う甘い匂いというのを感じる。

「今度こそどうやっ？」

「いえ。特には」

その表情に、平子は日向が逆撫の能力を喰らっていないことを察し

た。勿論今は、視覚に限定して発動しているためであるが、それでも実際に日向の視覚を支配出来ないという事実には、平子は驚きを覚えていた。

そして、実証は第二段階に入る。

「?やうどはレコ。向日」

「っ?!……………逆再生みたいに聞こえました」

「……………成程。確かに、視覚だけは支配出来ないらしいなア」

平子はそう言って斬魄刀の解放を解除する。

そして日向は頭が痛そうな表情を浮かべる。

「ま、これでお前が視覚を誰にも支配できないっちはゆうことは解った。それだけでも儲けもんや」

だが、そう言う平子に比べ日向の顔は幾分か浮かない。

「どうした、日向?」

「……………実際の藍染と戦ったら、多くの死神の視覚は支配されています。その中で俺だけ見えていても、余り意味がないんじゃないかって思っ……俺が藍染だったら、すぐに視覚を支配して、それでも見える奴を率先して始末しますから……………」

「……………成程な。ホンマ、その通りやわ。でもな、悲観的に捉えたらアカン」

そう言いながら、平子は日向の肩に手を置く。そして真剣な眼差しで日向を見つめる。

「お前は今まで頑張ってきたんやろが。だったら、最後まで気張らんかい」

「っ……………」

平子の言葉に、ハツとした日向は少し俯いた後、深く息を吐いて顔を上げる。

「そうでしたね。一回負けたくらいで少し弱気になってました。有難うございます」

「何ゆうとんねん。お前と俺の仲やろがい。そんな畏まんや」

明るい表情になった日向に釣られるように平子もニヤツと笑う。その光景に、周りで見ていた仮面の軍勢もホッと息を吐く。

そんな最中――。

「っ……………この霊圧……………隊長格!」

日向は、突如として現世に現れた知っている霊圧に驚く。そしてその数にも驚く。恐らく、現世で何か起きたのだろうと考える。

「……………行つたれ。俺らは瀋霊廷の仕事を手伝うつもりはあらん。お前の仕事や」

「……………はい、行つてきます!」

そう言つて日向は、すぐさま瞬歩で移動しながらアジトを後にする。それを仮面の軍勢の者達は眺めていた。

「はあ……………気張るんは、俺らもやな」

――っ……………一護お!!

「ぐっ……………!」

頭の中で、こちらに手を伸ばす茜雫の顔が浮かび上がる。それと同じ時に一護は目を覚ました。

そして周りを見えると、そこには浦原が居た。

「漸く起きましたか、黒崎サン」

「浦原さん……………っ!あれからどのくらい時間が経つた!?!茜雫は!」

一護は、脇腹を擦りながら茜雫の場所を問う。

茜雫と共に町を歩き回り、迷子の魂魄を連れてある神社に行った。そこで一護達は日番谷率いる死神達と出会った。その死神達の使命

は、思念珠である茜雫の確保。無理矢理連れて行くとする死神達に、一護は異を唱えたが、乱入してきたダークワンという一族によって茜雫は連れて行かれてしまったのである。

「……………恐らく、厳龍の下でしようね。大体六時間といったところで」

浦原の言う六時間前、一護は厳龍と戦い、負けた。その際に、思念珠であると言われた茜雫は厳龍率いる『ダークワン』という組織に連れて行かれた。

一護はその際に、不意打ちによって脇腹を刺された。だが、確認する限りその怪我は跡形もなくなっている。恐らくそれが、井上の双天帰盾であるのだろうと一護は考える。そして一護は、病み上がりの身体に鞭うち立ち上がる。

「俺は……………茜雫を助けに行かなきゃならねえ……………!」

そう言って、一護は一日余り自分と行動を共にした少女を思い浮かべる。

我儘で、移り気で、大雑把で、そして優しいあの少女を。例え思念珠であろうと一護には助けに行かずにはいられなかった。

そんな一護を見て、やれやれと浦原は息を吐く。

「ですって、日向サン」

その呼び声に、襖の奥から死覇装の日向が現れる。そしてその瞳は、一護ただ一人を見つめる。

「……………あいつらの本拠地はもう割れてる」

「なっ……………ホントか!? だったら、すぐに教えてくれ!!」

しかし一護のその願いと関係なく、日向は話を進める。

「尸魂界は、今回発生した叫谷を鬼道砲でぶっ飛ばす心算だ。思念珠諸ともな」

「っ……………ふざけんじゃねえ!! 茜雫はどうなる!!」

「今回の騒動の原因は、元より思念珠が現世に出現したことによって始まった。つまり尸魂界は、本元諸とも消滅させるつもりなんだろうな。ほとんどの隊長達は尸魂界に帰ってるぜ」

「ちくしょう!! 茜雫は……………茜雫は……………ん? 何でお前はここに居んだ

よ??」

一護が気づいたように口になると、それを聞いた浦原は扇子をばつと広げる。

「そうッス黒崎サン。日向さんは独断で現世に残って、浄天眼で空座町を洗いざらい見回して敵方の本拠地に入る場所を見つけてくれたんス！」

「……戸魂界は、手っ取り早く鬼道砲を放つつもりだから、こっちからの侵入ルートは探さなかった。……ここで一護、オメーに訊きたいことがある。アイツを……茜雫を助けてえのか？」

「っ……当たり前だ!!」

日向が独断で、ダークワンの本拠地への侵入ルートを発見した。それだけで、一護のやることは決まっていた。

「思念珠だろうとなんだろうと、アイツは今を生きてんだ!!泣いたり……笑ったり……怒ったり……!ただの記憶の塊なんかじゃねえ……俺が……俺の魂がそう言ってるんだよ!!」

一護の魂からの叫びは、浦原商店の一室に響き渡った。それを聞き、日向はニヤツと口角を吊り上げる。

「来い、一護」

「おうー!」

そう言つて、二人は部屋から出ていく。そして二人は、話しながら目的地に向かって行く。

「いいか?鬼道砲がぶっ放されるまで後一時間は切ってる。だが、実際はもつと短いと見積もれ」

「おう」

瞬歩で、すでに夜となった空座町の空を駆けてゆく。秋となった町の夜の風は、幾らか肌寒い。

「最優先するべきは茜雫の奪還だ。その次に、可能であればダークワンの奴らを倒す。勿論、あっちも抵抗してくるから順序は逆になっちゃうかもしれないねえ。だけど、一応この二つを覚えておけ」

日向が説明をしていると、その目的地へと到着する。

「(っ)は……」

『ここ、お父さんと一緒に歩ったんだ!』

そこは、茜雫の記憶に有った場所。勿論それは茜雫本人の記憶ではないが、茜雫にとっては大事な思い出の場所。

「見えるか? 橋の下」

「……………ああ」

橋の下の川には不自然な丸い空間が、水面に浮かぶように存在している。

「……………何でお前は、現世に残ったんだよ?」

一護が、橋の下の空間を見ながら、日向に問いかける。

「……………この案件任せられたくせに、重要な時に駆けつけられなかった罪滅ぼしだ」

そうやって日向は深呼吸をする。

「さて、行くか」

「……………おう!」

日向の言葉に、一護は少しの安堵を覚えていた。日向の言葉の一つ一つが、茜雫を思念珠としてではなく、一人の人物として見ていることが解ったからである。

そして二人は、一斉に空間の中へと入ってゆく。

暫くすると、崖のような殺風景な場所へとたどり着く。

「……………一護。お前は先に行け」

「あん? 何でだよ?」

「早速、お持て成しが来たからな」

日向がそう言った瞬間に、二人が居た場所を中心に爆発が起きる。それを二人は難なく避けるが、それが敵に見つかったということを表しているということは火を見るよりも明らかであった。

「ふんっ……………鼠が二匹……………!!」

そう、ダークワンの一人であるジャイが言う。そしてその他にも四人が一護たちを囲むように立ちはだかる。

だが、それをものともせずに一護は茜雫が居るであろう異様な光景

の中心地へと向かって行く。それを阻止しようとダークワンの一人・ムエが立ちはだかるが、一護の目の前に着いた瞬間に、上空から日向のとび蹴りを喰らい、叫谷の地面に叩きつけられた。

「行け、一護!!後で追うー!」

「おうー任せたぞ!!」

軽く別れを告げ、日向は目の前のダークワンのメンバーを眺める。

「ふふふつ……………」対五で勝てるんでも思ってるの?」

「はっ、悪いな。三下が何人居ようと、俺には違いが解らないな」

ダークワンの一人・ベニンの言葉に、日向は挑発的な言葉を口にする。それらは先程吹き飛ばした者も含め、全員の神経を逆撫でる言葉であった。

「貴様……………死ねえええええ!!!」

そう叫び、ジャイが両手のチャクラムを構えながら日向に飛び掛かる。そんなジャイに、日向は左手を翳す。

「破道の六十三・『雷吼炮』」

「ぐもお?」

巨大な雷の弾丸が、ジャイの身体を包み込む。一瞬の爆発の後、スパークを纏ったジャイが地面に落下していく。その光景を、周りで見ているダークワンのメンバーたちは息を飲む。

そんなダークワンのメンバー達を見て、日向はすぐさま白皇を構え、左手には因果之鞘を出現させる。

「卍解……………」

『虚哭隸王』きよこくれいおう

一瞬にして、日向はその身に白い衣を纏う。それに伴い凄まじく濃密な霊圧が辺りに溢れだす。

その霊圧を肌に受けて焦りを見せる者も言えば、不敵な笑みを浮かべる者も居る。

「くくくつ……………焦りを感じて咄嗟に卍解したか」

「何勘違いしてんだ」

ダークワンの一人・リヤンの言葉に、日向は澄ました顔で言い返す。それに対し、リヤンはいけ好かないといったような顔を見せる。

リヤンも含め、ダークワンのメンバーに向かって日向は虚哭隸王を構える。その瞬間に日向は、霊圧をさらに高める。それによつて叫谷の大気が揺れる。

「てめえ等は、世界が壊れるつていうのに様子見なんてする程悠長な奴なのか？俺はそんなに呑気な性格じゃないんでね」

そう話す日向の背後に、顔を布で覆った巨体の男・バウが棍棒を振り下ろそうとする。しかしバウが棍棒を振る下ろすも、日向はそれを瞬歩で回避し逆にバウの背後をとる。

「破道の九十・『黒棺』」

「つ！ぐ、おおおおおおおつ!!!」

突如として黒い壁がバウを覆つていき、数秒もしない内に黒い棺桶が空中に完成する。そして数刻の重力の蹂躪の後に、黒棺の中から身体中から血を噴き出すバウが姿を現し、何の抵抗もなく地面に落下した。

その瞬間に、他のダークワン達は額に嫌な汗を流す。そして日向は虚哭隸王を再び構える。

「————……宣戦布告だ。五分で終わらす」

「ぐっ………殺せえええええええ!!」

リヤンがそう叫び、背負っているミサイルポッドから無数のミサイルを発射し、日向達の戦闘が幕を開けた。

弥勒

月が 紅葉を護る為に
白い炎を吐き散らす龍に
牙を剥く

日向がダークワンのメンバーと相対している時、一護も厳龍と相対していた。

「卍、解っつっつっ!!!」

斬月を構え、一護は全力を持って厳龍と戦おうとする。

卍解を発動すると同時に、一護を中心に爆風が巻き起こり、数秒するとその中から黒いロングコートを身に纏った一護が姿を現す。

「…………… 『天鎖斬月』てんさざんげつ」

その姿を見て、厳龍は焦るのではなく不敵な笑みを浮かべた。それは現世で茜雫を攫った際に、一護は卍解をして厳龍に挑んだ。だがその時は、その最速とも言われる卍解の性質を逆手にとり、猛スピードで接近する一護に向かって不意打ちを喰らわせた。

つまり、一度は勝利している相手。油断しない限り負けるはずがない。何より叫谷こいは自分のテリトリー。欠魂で形成されている空間故に、例え厳龍が傷を負ったとしても欠魂を使ってすぐさま傷を癒すことが可能である。そんな自分に有利な状況の中で、自分が負けることは万に一つもない。厳龍はそう考えていたのである。

「……………行くぜ、厳龍」

「……………来い、鼠が」

刹那、厳龍のすぐ目の前に一護が出現する。そして一護は厳龍に向かって天鎖斬月を振り下ろすが、厳龍は欠魂で形成した刀でそれを受け止める。そしてそのまま横に薙ぎ払い、一護の身体を吹き飛ばす。

一護は吹き飛ばされ、バランスを崩すがすぐさま体勢を立て直し、厳龍に肉迫しようとする。しかし厳龍はそれを許さず、辺りの地形を変化させ、欠魂で出来た白い蛇のような激流で一護を飲み込もうとする。

る。

だが一護もそれを許さずに、速さが取り柄である己を斬魄刀を最大限に利用し、その無数の激流たちを回避する。

「くっ……近づけねえ！」

この短時間の攻防で、一護はその事実を悟った。敵龍の腕力は自分よりも強く、真正面から斬り合っても押し負けるのは目に見えている。だからこそ一護は、今まさに迫りくる白い激流の合間から一瞬の隙を見出し、一撃を決める事が必要だと考えている。しかし、その隙を見出すには、手段が限られる。

(ちっ……、何度も撃てねえが出し惜しみは出来ねえ……!!)

そう思い、一護は白い激流を挟み敵龍の方向に身体を向ける。そして天鎖斬月を構える。

「月牙——」

天鎖斬月の刀身に、黒い強大な霊圧が纏われてゆく。その霊圧と強さに、敵龍は目を見開く。

「——天衝つつつ!!」

一護が天鎖斬月を振るうと、黒い斬撃が白い激流を斬り裂きながら敵龍へと、凄まじい速さで迫ってゆく。その光景に、敵龍も焦りの表情が見える。

敵龍は、迫りくる月牙天衝を回避しようとする。月牙天衝は、敵龍がその場を離れた瞬間に、敵龍が居た場所を大きく穿った。だが、敵龍が回避した瞬間に白い激流の攻撃が緩んだことを確認した一護は、すぐさま敵龍の目の前に回り込む。

「むっ！」

「うおおおおお!!」

移動の速さや隙を突いたのも相まって、一護の一撃は先程よりも重い一撃となって敵龍を襲った。この一瞬の攻防は一護の勝利に集結し、敵龍の身体は少し後方へと吹き飛ばされる。そこに向かって一護は、再び月牙天衝を放とうと再び霊圧を高める。

だがその瞬間に、一護の脳裏に白い姿をした自分の姿が浮かび上がる。

(くっ……………こんな時に……………!?)

それによつて一護の霊圧が揺らぎ、月牙天衝を放てなくなり、さらにはその場で少し蹲る結果に陥った。

それを見た巖龍は、運が自分を味方したと言わんばかりの笑みを浮かべ、先程の白い激流を一護に向かわせる。

体勢を崩した一護がそれを避けることは敵わず、直撃する。

「ぐおおー!」

真面に喰らい、一護は激流に吞まれながら吹き飛ばされてゆく。

直撃した際に、凄まじい衝撃が臓器を揺らし、それらが一護の意識を刈り取ろうとするが、寸での所で一護はそれを押しとどめた。

(こんなの……………白哉の攻撃の方がまだ重い!!)

尸魂界で剣戟を交えた相手のことを思い出し、一護は何とか天鎖斬月を横に薙ぎ払い白い激流を一瞬だけ振り払う。その隙に一護は逃げ出し、体勢を立て直すことに成功する。

だが、その表情は優れない。

それは巖龍の強さに辟易しているのではなく、自身の中に住み着く虚が、自分を蝕み始めていることに気が付いたからである。白哉との激闘の際に、卍解の力に身体が耐えられず、白哉に止めを差されそうになった時に、一護の中の虚が仮面として出現した。先程一護の使用した黒い月牙天衝は、元々一護の中に居る虚のものであったが、さつきは無理に使ったのである。だが、黒い月牙天衝を使う度に、一護は精神を虚に喰い尽くされそうになる。本来ならば、一発でも使わない方がいいのであるが、使用せずに勝てるほど巖龍も甘くはない。だが、使えば使うほど一護の正気が失われていく。

(早めに決着をつけねえと……………!)

そのようなことを考えながら、一護は迫りくる白い激流を薙ぎ払いながら巖龍に肉迫しようと試みる。

「うおおおお!!」

「ふん……………何度来ようと同じだ!」

「一護………」

その頃茜雫は、欠魂で形成された巨木の幹の中央辺りに、幹に埋め込まれるように捉えられていた。そこから、先程から開始されている一護と巖龍の戦闘を眺めていた。

だがその戦闘は、素人目から見ても一護が不利な状況であると理解していた。何とかしたいと、茜雫はその場から脱出しようと力を入れるが、びくともしない。

「くっ………！動け！動け！動けええ!!」

「はい、しいく………」

「どひゃあ!」

突如、聞き慣れない声が聞こえ茜雫は素っ頓狂な声を上げながら驚く。そして声が聞こえた方向に首を向ける。

「アンター！何でここに!」

「アンタじゃねえ。天宮城日向だ。一護と同じく、お前を助けに来た」
卍解状態のまま日向は話を進め、虚哭隸王を構えて茜雫を捕えている部分を斬ろうとする。

「え？ホント?」

「ホントも何も、それ以外にわざわざここに来る理由がねえだろうが」
そんなことを話していると、日向は天叢雲剣を発動して、欠魂の巨木を豆腐のように切断して茜雫を助け出す。

しかしそれを、遠くで戦っていた巖龍が気づいた。

「っ！鼠があ!!」

巖龍は、一護に放っている白い激流を日向達にも放つ。それに気づいた日向は、茜雫を自分の背中の方に押しつけ、立ちほだかるように前に出る。

「破道の八十八・『飛竜撃賊震天雷炮』！」

しかし、迫りくる白い激流よりも巨大な雷の閃光を放ち、灰燼と為していく。それを見て茜雫は、目を見開いて呆けた表情を浮かべる。

そして巖龍と同じく、茜雫の救出を確認した一護が日向に向けて叫ぶ。

「日向！茜雫を連れて先に現世に帰ってくれ！俺は……俺は厳龍を倒す!!」

しかしその言葉に、茜雫は驚愕し一護に叫ぶ。

「厳龍を倒すって……ヤダよ一護！一緒に……」

「行くぞ、茜雫」

だが茜雫が言い終える前に、日向が茜雫の腰に腕を回してその場から連れ去っていく。それに対し厳龍は再び白い激流を向かわせようとするが、一護が厳龍に斬りかかることでそれは阻止される。

「厳龍……てめえの相手は俺だ!!」

「ちい！死にぞこないがっ!!」

そして再び、一護と厳龍の戦いが幕を斬った。

そんな中、茜雫は日向の瞬歩によって凄まじい速度で出口に連れて行かれていた。

「ちよつと日向！一護が……!」

「曲がりなりにもアイツは隊長と同じ実力を持つてる。そう簡単に負けねえ。信じてやれ」

日向はそう言うが、茜雫はまだ納得していない顔を浮かべる。そして茜雫はあることに気づく。

「あれ？厳龍の部下は？」

「もう片付けた」

「ええ!？」

厳龍の五人の部下をもうすでに倒したという日向に、茜雫は驚く。だがそんな茜雫とは反対に、日向は淡々と話す。

「俺は十三番隊第三席。つまり、十三個ある内の隊の上から三番目。それでも五人を片付けるには五分あれば十分だ。一護は尸魂界で、六番隊隊長の朽木隊長を一騎打ちで倒した……後は解るな？」

「……………うん」

日向の言おうとしていることを理解した茜雫は、一護を信じることにした。日向は三席の中でも突出した実力を持っていて、日向の言うことが真実なのかは解らない。だが一護が、白哉を倒したことは事実である。日向は、その事実を、それを成し遂げた一護を信じることに

したのである。

「そろそろ着くぜ」

「うん……………あつ」

「……………どうした?」

何か気づいた茜雫は、ハッと顔を上げる。

「敵龍って、思念珠を使って現世とその……………尸魂界ってところを一緒にして世界を破壊しようとしてるんでしょ?」

「まあな。だからこそ今尸魂界では今、鬼道砲って奴でこの空間の消去をしようとしてる。だけどこの時間なら、一護も帰ってこれる時間は充分……………」

「そうじゃないの!その鬼道砲ってのより、こっちが世界をめちゃくちゃにしちゃう時間が早かったら……………!」

「……………ちっ……………成程な」

茜雫の言う事を理解し、日向は顔をしかめる。確かに茜雫の言う通り、尸魂界が鬼道砲を放つよりも速く、思念珠を——茜雫を利用して繰り上げた時間により、この叫谷が崩壊する時間が速ければ全てが水の泡になる。

日向は頭をフル回転させ、解決策を何とか絞り出そうとする。そしてある結論に辿り着く。

「先に行け、茜雫」

「えっ……………?どうするの?」

「虚哭隸王の隸属範囲をこの叫谷全域に広げて、今すぐにでも空間の崩壊を遅らせる!」

「ええ!」

驚く茜雫を横目に、日向は虚哭隸王を地面に突き差し、精神統一をする。日向の周りには穏やかな霊圧が溢れだし、それが虚哭隸王を中心に広がってゆく。

この隸属範囲の拡大は霊圧自体は消費しないが、それ以上に精神的な疲労が日向を襲いかかる。それも普段しないことである以上、その疲労は並大抵のものではない。

「……………私も手伝う」

「っ……………!? どうやって……………だ?」

茜雫の言葉に日向は驚く。茜雫は日向に近付き、手を重ねるように虚哭隸王の柄を握る。そしてそのまま瞼を閉じ、茜雫も精神統一を図る。

「思念珠の力で叫谷こたの空間の崩壊を早めることが出来るなら、その逆だって出来るはずでしょ? 完全には無理かもしれないけど……………」

そう言って、茜雫は虚哭隸王を握る手の力を強める。

「……………やんなきゃ解んないでしょ?」

「……………ああ。そうだな」

茜雫の言葉に日向は微笑む。それは茜雫も同じだった。

世界を護る為に、全力を尽くす。そこには人間も、死神も、思念珠も関係ない。

茜雫が虚哭隸王を握って数秒、僅かながら隸属範囲の拡大が速くなってゆく。その事実には、実際にそれを行っている二人はニヤリとする。

(一護……………早く決着を決めろ。後は……………お前だけだ!)

「うおおおおおおお!!」

その頃一護は、月牙天衝を使用せずに鬼神の如き連撃を厳龍に浴びせていた。朽木白哉ですら、その初撃を反応出来なかった速度で放たれる連撃は、厳龍の先程までの余裕を崩していた。

白哉の千本桜には『無傷圏』という領域があり、それは千本桜の刃が自分に命中しないように自動的にその範囲内に入らないように決まっております。それは自在に操ることが出来る飛び道具という点で、厳龍が一護に放っていた欠魂の白い激流も同じであった。

一護が厳龍に肉迫していれば、その激流は必然的に厳龍の近くに向けることになる。だがそれらの激流はあくまで一護を狙っているため、一護が厳龍より離れている時よりも攻撃範囲が狭くなり、逆に一護にとっては最小限の動きで回避することが可能になり、天鎖斬月を

最大限に利用出来るという状況になる。

「それらは一護が極限の状態で、本能的に見出したことである。

その甲斐あって一護は、少しずつではあるが敵龍に傷を負わせることが出来るようになってきた。

流れに乗ってきた一護とは裏腹に、敵龍はあることに焦りを感じていた。

(何故……何故欠魂が私に従わない!?)

先程までであれば、一護につけられた傷など欠魂によってすぐさま修復することが出来た。だがつい先程から、欠魂が一向に敵龍の指示に従わない。そのせいもあって、白い激流は使わない方がいいという状況から、使えないという状況に変わっていたのである。

『そうだ一護オ!!戦え!!勝れ!!戦いこそが、てめえの本能だ!!』

一護の中で虚である者が叫んでいるが、一護はそれを一向に気にすることはしない。それは茜雫が助かったという事実や、流れが自分に流れているという事を認識したことによる安堵など様々な理由があるかもしれない。だが明らかなのは、今の一護に負の感情が限りなくないということである。負の感情が心を蝕めば、自然と一護の中の虚が暴れ始める。だが今の一護には、ただ一つ、皆を護る為に戦う。その一点だけが心にあつた。だからこそ、先程月牙天衝を使った時のように、正気を失いかけることがない。

そしてもう一つ理由があつた。

(この感じ……日向と茜雫の霊圧だ)

先程から、この叫谷を包むように広がっていく霊圧。その存在が一護の心に、確固たる決意を産み出すことになっていた。

「うおおお!!」

「ぐっ……!」

気合いの籠った咆哮を上げながら、一護は天鎖斬月を横に振るう。それに伴い敵龍の身体は後方に吹き飛ばされる。

「……………敵龍。これで終わりだ」

一護はそう言つて、天鎖斬月を掲げる。

その光景に、敵龍は汗を流しながらも笑みを浮かべる。

「ふっ……………こちらのセリフだ!!」

そう叫び、厳龍の霊圧は上昇してゆく。そしてそのまま厳龍は一護に特攻を仕掛ける。

「月牙……………」

一護もそれに呼応するように、極限まで霊圧を高める。そして天鎖斬月から黒い霊圧が噴き出る。

「……………天、衝おおおおおおお!!!」

白哉の白帝剣か、それ以上の霊圧を伴った月牙天衝は厳龍に迫ってゆく。厳龍はそれに対し、全力の斬撃を放つが押し返すことは敵わず、黒い霊圧の中にその身体を埋めてゆく。

「ぐおおおおおおおっっっ!!!」

断末魔が叫谷に響き渡り、黒い閃光が止むと同時に静寂が訪れる。

一護は肩で息をしながら暫くその場に立ち尽くす。

「勝った……………のか?」

そう無意識に呟いた途端、一護は脱力する。

「ははっ……………また遊子にどやされるな」

恐らく時刻はもう夜になっているだろうと考え、一護は苦笑いするのであった。そしてすぐさま、待っているであろう二人の元に向かって行った。

この決戦は、一護たちの完全勝利に終わったのである。

始動

運命への抗戦

いくら足掻こうと

押し戻す事は出来ず

ダークワン達との戦闘を終えた一護と日向は、茜雫を連れて浦原商店まで戻ってきた。

「いやあく。大手柄でしたよ、黒崎サン。日向サン」

「いえ。調整者バランスサーとしての仕事をこなしただけです」

浦原の言葉に、日向は淡々と答える。わざわざ『死神の』とは言わずに『調整者の』と言い換えたあたりに、日向もそれなりに独断行動を反省しているのであろうという考えが見て取れる。だがその表情には後悔などは一切に見受けられない。

三人はあの後、浦原を始め多くの者達の歓迎を橋の上で受けた。そしてその後に、疲れて眠りこけた茜雫を連れて浦原商店に来たのである。

「それで浦原さん……………茜雫はこれから……………」

「まあ、ダークワンの連中を倒したので暫くは安全だと思いますけどねえ……………」

一護の言葉に、浦原が淡々と事実を述べる。今回、茜雫を利用しようとした、というより実際利用したダークワンはすでに一護たちにより打ち倒された。それにより一時的に、茜雫は追われることはなくなったが、それでも二次的に茜雫が何者かに利用される可能性は否定できないというのが、浦原の言いたいことである。

「茜雫を、思念珠から普通の魂魄にすることは出来ねえのかよ?」

「……………こう言っちゃ悪いですが、茜雫サンはあくまで『記憶の塊』。

多くの記憶が集まって、辛うじて人の形に保っているのが現在の茜雫サンです。思念珠とはそういうもんなんス」

「そう……………か……………」

一護の願うことは、茜雫を他の魂魄のように普通に暮らして欲しいということである。もう一護の中で茜雫は、ただの記憶の塊ではなくなっているのである。一護は、一人の人間の幸せを願っている。

「スイマセン、黒崎サン……………」

「いや、大丈夫だ。今はゆっくり休んで……………」

「くうおらあ一護!!俺をこんな所に置き去りにしやがって!!」

しんみりした雰囲気の中、一匹のライオンのぬいぐるみが一護に突撃する。そのライオン——もとい、コンに向かって一護は蹴りを喰らわせる。

「てめえ……………空気読みやがれ……………!」

「え、あ、いや、その……………ううううるせえ!俺にとっちゃ此処はトラウマな場所なんだぞ!」

頭をアイアンクローで掴まれながら、コンは必死に抗議する。そんな光景を日向はボーっと見つめ、一言漏らす。

「……………霊骸ならどうだ?」

「えっ?」

「…成程日向サン。その手がありましたね」

納得する浦原とは別に、一護とコンは頭にクエスチョンマークを浮かべる。

「霊骸ってなんだ?日向」

「義骸の尸魂界版だ」

端的に説明するが、一護はまだ納得出来ない表情で日向に問いかける。

「義骸ってあれだろ?ルキアが現世で入ってたあの……………。現世なら解るけど、尸魂界で何で必要なんだよ?」

「ああ……………技術開発局で、義魂丸の作成の時に実際に身体に入れてみたらどんな感じなのか確かめるためだ。まあ、使用用途はそれだけだが」

つまり日向は、ぬいぐるみに入ってるコン、つまり義魂丸を思い出して霊骸という存在を思い出したのである。使用するのは専ら技術開発局であり、他の死神は残りその存在を知らないが、浦原は元技術開発局局長を務めていたためすぐさまその存在を思い出した。

「それなら早速、徹夜で茜雫サンの霊骸の作成に取り掛かりましょう」
浦原はそう言つて部屋の奥の方へと向かつて行く。

それに一護が反応する。

「う、浦原さん！それで茜雫は助かるのか!？」

「……………論理的に考えれば、魂魄の記憶で形成されている茜雫サンは、魂魄とほぼ同じである霊骸になら入ることが出来るでしょう。霊骸に入り、そのまま霊骸に馴染めば、今のように危うい状態からは脱することが出来るでしょう。まあ物は試しです」

「そうか……………頼んだ、浦原さん！」

「なくに言つてんスカあ、今更〜！アタシと黒崎サンの仲じゃないですか〜！」

そう言つて浦原は笑いながら奥の方へと消えていく。それを暫く、残された三人は黙つて見ていた。

一護は『どういう仲なんだよ……………』と愚痴を零しながら、浦原を信じることにし、日向は素直に浦原なら何とかしてくれるだろうと考え、コンは未だに呆けていた。

「お送りいたしましたようか？」

「あ、いや、いい……………」

少しその場で動くことをしなかつた一護に、鉄裁が家まで送るか否かということを問うが、それを一護は断つた。さすがにこんな筋骨隆々のおっさんに、兄が家まで送られたのを目の当たりにすれば妹達は少なくとも尋常ではないことを想像するだろう。それだけは阻止する為、一護は早々に家に帰ることにした。

「じゃあな、日向」

「おう」

元より泊まるつもりの日向は、帰ろうとする一護に軽く別れを言つてその場にグデる。

そんな日向の懐から、何やら電子音が鳴り響く。その音に覚えのあ
る日向は、のっそりと動きながら伝令神機を取り出す。

「は〜い。天宮城日向〜」

『何が『天宮城日向〜』だ！お前現世で何してんだ！』

そこから聞こえるのは直属の上司である海燕である。勿論内容は、
欠魂——もといダークワンによる一件が終結したにも拘わらず
現世に留まっている日向に、早く帰って来るように催促するためであ
る。

「事後処理」

『何が事後処理だ！お前が居ないから十三番隊の仕事は火の車だぞ
!?!』

内心、嘔吐けと思いつながら日向は海燕の叱責を聞く。日向が居ない
からと言うが、十三番隊は元々四席が二人いるから実際は他隊とそこ
まで変わらないだろうと考える。それは勿論、浮竹が時々隊長の仕事
を出来ないことを考慮してもである。

「あく、明日昼位に帰るからそれでいいだろ？」

『ぐっ……………分かったよ！さっさと帰ってこいよ!?!』

「はいは〜い」

間の抜けた返事をしながら日向は伝令神機の通話を終える。

「日向殿。お風呂が温まりましたぞっ。」

「あ、すみません鉄裁さん。お先失礼します」

事情を知っている日向は、先程の上司とは大違いの丁寧な対応で鉄
裁に返事する。母親の元上司となると、やはりそこには自分の上司と
いうものよりも何か特別なものを日向は感じていた。ただしそれは
海燕という人物は例外としてである。

そして日向は、鉄裁に一礼しながら浦原商店の風呂に向かって行く
のであった。

「ん……………」

襖の間から漏れてくる日の光に、眠っていた茜雫は目を覚ました。布団のすぐ下の畳の香りが鼻孔を刺激し、茜雫は自分が生きているということを実感した。

そして重たい身体を起こし、辺りを見渡す。一度見たことのある光景。あの時は半ば無理やりだったが、今回は自分が疲れてその場で眠ってしまったのだと、茜雫は思い出す。

その場で背伸びをし、ゆっくりと立ち上がって他の誰かを探す。すると、襖の奥の方で足音がドタドタと聞こえてくる。それが気になり茜雫は襖をゆっくりと開ける。

そこには、白い髪青年が居た。

「お、やっと起きたのか」

「お……お早う……」

『やつと』と言う言葉を気にしながらも、茜雫は挨拶を交わす。部屋の方を振り返り時計を見てみると、その針は十一時を超えた辺りを示していた。

「鉄裁さんに言えば飯用意してくれると思う。じゃあ俺はもう行くぜ？」

「え？どっ行く？」

「尸魂界。中間管理職って面倒だからな。お前のことは浦原さんが面倒見てくれるってよ。しばらくはお世話になっとけ。そんじゃ！」

日向はそう言って、颯爽と茜雫の前を後にしてゆく。それを茜雫は呆氣にとられた表情で眺めていた。

日向の姿が消えて数秒後、茜雫は少し後悔していた。

「お礼……まだ言えてないのに……」

自分を救ってくれた二人の人物に、未だお礼を言えていないことを思い出し、茜雫は少し唇を噛むのであった。

その場でボーっとしていると、茜雫の背後から人影が一つ近づいてくる。

「茜雫サン。お早う御座います」

「うわああ!？」

完全に気を抜いていた茜雫は、浦原の声に身体をビクツと揺らす。

「体の方に異常はなさそうツスね。なら良かったツス」

「は、はあ……………」

「アタシは暫く茜雫サンの世話をすることになってるので、分からないことがあつたら訊いて下さい」

「あ、あのー」

淡々と話をする浦原に、茜雫は身体を乗り上げてあることを訊こうとする。

「一護と日向にお礼を言いたいですけど……………」

「……………黒崎サンなら、学校の休みに家に行けば会えると思いますけど、日向サンは……………すぐには無理ですけど近いうちに会えるでしょう」

浦原の表情はどこか優れない。それが何を意味するのかは、今の茜雫には解らないことであつた。

「良く来てくれたね。クリステイナ」

「御用は？」

ここは虚園ウエコムンドに佇む巨大な建物・虚夜宮ラスノイチエスのある一室。そこには、元護廷十三隊五番隊長・藍染惣右介と、白い死覇装のような服を身に纏う金髪の美女が居た。

藍染は、その言葉とは裏腹にクリステイナと呼んだ女性が、ここに来ることが当然というような目をしており、逆にクリステイナは目の前の人物に対し一切の敬意を持たない視線を向ける。

「ああ。早速だが、ウルキオラに現世に『黒崎一護』の戦力調査に一時間後に向かつてもらいたいと伝えてくれないか？補足として、もし連れて行きたい人物が居たら君に任せる、とも」

「御意」

藍染はそれから、黒崎一護という人物の特徴を伝える。

その説明を聞いたクリステイナは一礼し、颯爽とその場から去ってゆく。向かう先は、この虚夜宮に於いて第4十刃クァトロ・エスバレードの称号を得ている破面である。

機械のような人物であり、藍染からの評価も高い。

だがそのような評価などクリステイナには関係がない。彼女の心の中にあるのは、この虚夜宮に蔓延る死神と破面の抹殺である。彼女自身も藍染の手によって破面となった存在だが、藍染には一ミリたりとも感謝の念など抱いていない。むしろ、自分の身体に手を加えたことへの憎悪が藍染に向いている。

数字持ちも十刃エスバレードも、彼女にとっては排除すべき存在。

ただ今は、命令に従い力を蓄えるのみ。

そうこうしている内に、彼女はウルキオラの居る宮の中の部屋へと到着した。

「入るぞ」

「何だ」

ノックなしに入ると、ウルキオラは簡素な部屋の中で椅子に座ってじっとしていた。

「藍染様からの命令だ。現世に、黒崎一護の戦力調査に向かえとのことだ。連れて行く者はお前が決めるとのことだ」

「そうか。なら来い」

「……………ちっ」

藍染から特別扱いされているとは言え、只の数字持ちである彼女は権限が上であるウルキオラに逆らえないことを理解し、了解の意も含む舌打ちを送った。

女性には有るまじき程に眉間に皺を寄せる彼女に、火に油を注ぐような人物が近づいてくる。

「何してんだウルキオラア〜?!クリステイナも居やがるし、これからおっばじめ様とでもしてたのかア!」

「黙れヤミー。その騒がしい口を閉じろ」

「んだとオ!!」

クリステイナの言葉に、ヤミーという大男が額に青筋を立ててキレる。もはや人ではない程の巨体から大声が発せられているその光景は、普通の者ならば背筋も凍るほどのものだが、生憎ヤミーの目の前に居る二人は虚夜宮（こよみや）に於いて普通の範疇には入らない強者であるため、怯む様子は微塵もない。

「……………俺はクリステイナに、藍染様の伝言を受け取っただけだ。現世に居るとある人物の戦力調査に向かえとのことだ」

「はっ！面白そうじゃねえか！俺も連れてけ！」

「好きにしろ」

「ちっ！」

ヤミーが来るという事実には、クリステイナは先程よりも大きな音のする舌打ちをする。しかしそれには今のヤミーの耳には入らない。

「楽しみだぜえ！」

「……………現世で返り討ちにでも遭え」

「ああ？何か言ったか？クリステイナ」

「何も。空耳だろうな」

クリステイナの呟きが聞こえたのだろうかヤミーが問いかけるが、それを本人は白を切る為ヤミーは気のせいとすることにした。

「出発は一時間後だ」

クリステイナはそう言つて、その場から颯爽と消えてゆく。現世に行くための準備もあるが、それよりも生理的（ヤ）に拒絶する者が居るこの場に居たくないというのが第一である。

「……………ちっ」

苛立たしそうに舌打ちをしながら髪を後ろに掻き分ける彼女の姿は、『美しい』という言葉がよく似合う。この虚夜宮には、トレス・エスパーダ第3十刃にティア・ハリベルという金髪褐色の美女が居るがハリベルは『美しい』という言葉が似合う。

そんな二人は個人的にはどうなのかと言うと、端的に言えば悪い。何故そうなのかと言うと、言わずもがなクリステイナが他者を寄せ付けない性格であるからである。ハリベルは破面の中でも穏便な性格だが、来る者は拒まず去る者は追わずなスタイルであるため、邪見に

されているのなら、と言う考えでクリステイナに近寄ろうとしていない。

何よりハリベルの従属官達フレーションが、破面達を嫌悪するクリステイナをハリベルに近寄らせようとしないのも理由の一つである。

とにかく、クリステイナは同じ破面達と仲がいいわけではないのである。

そんな彼女の嫌悪するモノは、最初に言った通りに『破面』と『死神』。それらを排除するためならば、彼女は修羅となる。

『滅却師』であった彼女は。

第七章 The Beginning Fierce Fight

再臨

私が塊を憎み

個を憎まないのは

個を知らぬ故に

矛先を失っているからだ

「は……………反応ありました!!」

突如として、漣霊廷の技術開発局にブザーが鳴り響く。それによって「暇だ」などといっていた局員たちは、慌ただしく動き始めた。その内で先程まで菓子を食べていたリンという人物は、かなりの速さでキーボードを叩く。

「座軸、三六〇〇〜四〇〇〇、東京・空座町東部!!補正と補足お願いします!!」

リンが部屋中に聞こえるように叫んでいる最中、鶴洲という男もまたキーボードを叩いていた。すると部屋の出入り口の方から、額に二本の角が生えた阿近という男がやってくる。そんな彼に向かって、鶴洲は言い放つ。

「きたぜ」

空座町の山の中腹部分に、三人の破面が降り立っていた。

一人は無表情の男。

一人は人外の巨軀をした大男。

最後に金髪の美女。

その三人は、降り立った場所から辺りを見渡していた。

「ぶはあくくくく！面付いてた頃に何度か来たが、相変わらず現世はつまんねえ処だなア、オイ！霊子が薄すぎて息しづれえしよオー！」

その中で大男の破面・ヤミーが文句のように喋り始める。しかし残りの二人はヤミーの言うことに反応しない。

そのことに関してヤミーは額に青筋を立てる。

「おい！聞いてんのかア!？」

「何だ、私たちに話していたのか。独り言かと思つたぞ」

「クリステイナ……てめえ……!!」

淡々とヤミーに返答するクリステイナに、ヤミーの怒りのボルテージはどんどん上がっていく。それもそのはず、クリステイナはわざとそういう風に仕向けているのである。

そんなヤミーの周りに、何人かの者たちが近づいてくる。その正体はこの山中で練習をしていた空座第一高等学校空手部部員なのだが、彼らは破面が降り立った際の凄まじい衝撃音を気にして三人の居る場所にやって来たのである。だが、靈感のない者達は三人の姿を確認することが出来ず、ただ目の前に広がっているクレーターを見て驚いているだけである。

「何だこいつら。ジロジロ見てんじゃねーよ。吸うぞオラ」

自分達をジロジロみられることに嫌悪感を感じたヤミーは、空気を吸うような動作をする。すると突如、三人の周りに居た者達は悲鳴とも思えない声を上げながら、その場に崩れ落ちてゆく。

——『魂吸』。強い虚は、空気を吸うようにするだけで辺りの弱い魂魄を取り込むことが出来る。彼らは現在、ヤミーという破面によって一方的な暴虐を受けているのである。

「ぶっは——つ!!まじイ!!」

「汚いモノを見た。それをお前の顔だ。ヤミー」

「うるせえぞ!!クリステイナ!!」

ヤミーの魂吸の顔を見たクリステイナは、まるで台所に現れたゴキブリを見るような表情で空を見つめていた。

そんなやり取りに目もくれず、無表情の青年・ウルキオラは辺りを確認する。

「おいウルキオラア！何匹殺せばいいんだア!?」

「一人だ。それ以外を殺す必要はない」

二人がやり取りしている最中、クリステイナはあることに気づいていた。

——生き残りが居る。

先程のヤミーの魂吸で、三人の周りにいた多くの人間は息絶えた。それは彼らがただの魂魄を持つ者であるため、ヤミーの魂吸に抗えなかったからである。そんな中で、たった一人だけ、生き残りが居る事を確認した。その生き残りの所に向かって、クリステイナはゆっくりと歩いてゆく。

クリステイナの視線が捉えたのは、一人の短髪の女。所謂、道着という服を身に纏った女は、クリステイナを見つめ、息も絶え絶えとなっている。

(……………運が良かったな)

女の様子を見る限り、ヤミーの魂吸で生き残れたのは偶然だとクリステイナは考えた。

そんなことを考えていると、クリステイナの後方から大きな音が響いてくる。その音を発している者に対し、クリステイナは嫌悪感丸出しの表情をする。

「ウルキオラ!!こいつか!?!」

「これだから単細胞は……………それぐらい自分で分かれ」

「ぐっ……………クリステイナ、てめえ……………!」

「落ち着け、ヤミー。よく見ろ。お前が近づいただけで魂が潰れかけているだろう。ゴミの方だ」

クリステイナの言葉に苛立ちを覚えつつも、ウルキオラの言葉にヤミーは耳を貸す。そして目の前の女が調査対象でないことに、さらに苛立つ。

「ちっ、んだよ。くだらねえ。じゃあな」

ヤミーはそう言い放って、目の前の女に丸太のような太い足を振り

抜こうとする。

だが、ヤミーの足を女を蹴り抜くことが出来ずに、何者かに受け止められる。その突如として現れた二人の人物に、ヤミーのみならずクリステイナも少し驚いたような表情をする。ヤミーの場合、自分の蹴りを受け止められたことと知らない人物が現れたことに對してである。一方でクリステイナはヤミーとは違い、何者かが自分達の所へ向かってきていることは探査神経を通して知り得ていたことだが、ヤミーの蹴りを受け止めた浅黒い肌の男が、その程度の霊圧の人間が仮にも十刃であるヤミーの一撃を止めたことに驚いていた。

(こいつ………ただの蹴りが何て威力だ………！)

破面たちが各々の感想を抱いている中、ヤミーの一撃を受け止めた茶渡は、その一撃の重さに驚愕していた。恐らく今の一撃は、ただの人間であるたつきを殺すために軽く放ったものであると茶渡は考えていた。だが、その一撃は今の自分にとって余りある一撃である。もし次に、本気の一撃が来れば受け止める事は難しいだろう。

たった一撃で、ここまで力の差を見せつけられることは茶渡にとって二度目であった。

(やはり井上がどうにかできる相手じゃなさそうだ……！)

「ウルキオラ!!こいつか——!!」

「……………クリステイナの顔を見てみる」

「ああん!?クリステイナの顔だあ!?!んなもん見たって……………あつ」

ウルキオラに言われるがままに、ヤミーはクリステイナの顔を見てみる。それと同時にクリステイナもヤミーの方を向くが、その表情に絶句した。

まるでお手本のようなジト目。ヤミーの方を向いてはいるが、その視線はどこか虚空に向かっている。

「……………違うってことか」

「偶には頭が回るらしいな」

「嫌でも分かるだろうがア!!」

そんなヤミーの叫びをスルーし、クリステイナは茶渡とヤミーの間に割って入る。

その行動に、間に入られた二人は怪訝そうな表情を浮かべる。

「何だ、クリステイナ？それはどーゆう意味だ？」

「こいつは調査対象外だ。わざわざ相手する理由はないが……………」

そう言いながら、茶渡の方を振り向く。

「邪魔するであろう相手を、わざわざ見過ごす理由もない」

「っ!!」

その言葉に、茶渡はすぐさま動いた。変質した黒い右腕に霊圧を圧縮させ、目の前の者に向かって全身全霊の一撃を放とうとする。ただでさえ実力に差があるのだ。ならば、不意打ちでもいいから一撃を加えることが先決だと、茶渡は考えたのである。

「うおおおお!!」

茶渡は咆哮を上げながら、クリステイナに拳を振り抜く。それと同時に凄まじい轟音と衝撃が辺りを駆け巡る。そして拳を放つたと同時に放たれた霊圧の一撃は、無防備なクリステイナに一直線に向かって行く。

「人間にしては上々だ」

そう言って、クリステイナは茶渡の一撃を片手で受け止める。受け止めた瞬間に、爆風がクリステイナの死覇装や長い髪を靡かせたが、クリステイナの身体には傷一つ付いてはいなかった。

その光景に、茶渡は絶句した。

まさか、自分の本気の一撃があんなにも簡単に受け止められるとは思っていなかったのである。しかも受け止めたのは、やって来た者達の中でも最も華奢な者。見た目が全てとは考えてはいなかったが、それでも思考が、感情が、それを直ぐに認めることが出来なかったのである。

「それでも、私達には届かない」

「っ、ぐああああああ!!」

直後、クリステイナの姿は茶渡の後ろにあつた。それと同時に茶渡は、右腕に空虚感と、右肩に今までに感じたことのない激痛を感じる。余りの痛みの、茶渡は先に地面に落ちた己の右腕のように、地面へと崩れ落ちていった。その光景を見ながら、クリステイナは右手に握っている斬魄刀を一度振り、刀身に付いた血を飛ばす。そしてそのまま鞘に納める。

「茶渡君!!」

苦悶の声を漏らす同級生の下に、一緒に来ていた井上が近づく。だがクリステイナは、動揺しながら近づく井上の首を掴み、そのまま地面に叩きつける。その衝撃に井上は一瞬意識を失いかけるが、寸での所で持ちこたえる。

「はなし……………て……………!!」

「まだ死にたくはないだろう?そこに倒れている男も、腕が一本無くなっていくが綺麗に斬ってやった。後で縫合でもすれば繋がる可能性もある」

「っ……………!」

思いがけない言葉に、井上は目を見開く。まさかこの女性は自分達に情けをかけているのか、と。

「だが、今お前たちの命の所有権を持っているのは私達だ。ここからそこに居る男を殺すのも、さつき連れて行った女を殺すのも私達の判断ですぐさま実行出来る」

「あ……………あなた……………!!」

だが、それが甘い考えだったと、すぐさま訂正する。例え井上が反撃に出たとしても、返り討ちにされるのが目に見えている。

その事実には、井上は自分の非力さを呪うしかなかった。

「さて……………本題だ。黒崎一護を出せ。そうすれば、この場に居る人間三人を見逃してやろう」

「っ……………!?!」

そんなことできる筈がない。だが、これだけ騒ぎが起こっているのに一護が動いていない訳がない。つまり、一護が来るのは時間の問題

である。

しかしそれでも、井上はすぐさま首を縦に振ることは出来なかった。

「あなたの……目的は……なっ、ああああ……!？」

井上が話し始めると、井上の首を掴む手の力がどんどん強くなつていく。このままいけば窒息、否、それよりも早く井上の首が千切れるだろう。

井上の顔は血が上りどんどん赤くなっていき、井上自身、視界がだんだんとぼやけはじめる。

(くろさき……くん……!)

薄れゆく意識の中で、井上はオレンジ髪の少年の姿を思い浮かべた。

「井上ええええええええ!!!!」

突如、上空からクリステイナに向かって急降下してくる影が一つ。井上の首を掴む手を離し、クリステイナはすぐさまその影が放つ一撃を避ける。

躲された一撃は先程までクリステイナが居た地面を大きく抉る。

そして影は、井上を抱えて少し離れた場所に姿をはつきりさせる。

「げほっ、げほっ!!」

「井上、大丈夫か!？」

「黒崎君……!ごめん……ごめんね……!」

黒崎。その単語に、クリステイナは口角を吊り上げる。

そして一護は、斬月をクリステイナに向かって構える。その表情は、怒りが満ち溢れている。

「……チャドの右腕をやったのはためーか?」

「ああ。そうだ」

「っ……そうかよ。なら、手加減しねえぜ————卍、解!!」

茶渡の右腕を斬り落としたのが、目の前の女であることを確認した

一護は、多少驚きを見せながらも怒りのままに卍解を発動する。

「……………『天鎖斬月』!!」

卍解と共に巻き起こった爆風の中から現れたのは、ロングコートのように長い死覇装を身に纏い、漆黒の斬魄刀を握った一護であった。

その姿に、クリステイナは頷く。

「成程。オレンジ色の髪。黒い卍解。お前が黒崎一護か。なら、約束通り人間三人を見逃してやる」

「……………どういう意味だ?」

井上を見ながら話すクリステイナに、一護は問いかける。

「そのままの意味だ。そこに居る井上という女に、お前を差し出せば人間三人を見逃してやると言った」

「何……………!?!」

クリステイナの言葉に、一護は少し驚いた顔をするが、すぐさま戦士の顔へと戻る。今の言い方だと、井上がわざと一護が来るように仕向けたように聞こえるが、実際井上の霊圧が不安定に感じ始めたのは一護がこつちに向かっている途中であった。そこから考えるに、自分が来るのは時間の問題であり、井上には何一つ責任はない。例え、そう仕向けるようにされていたとしても、今の現状を見る限り確実に茶渡やたつきを救うために行ったと考えられる。

井上が不安そうに一護を見つめるが、それに対し一護は少し微笑む。

「大丈夫だ、井上。俺がこいつらを倒す間に、チャドの治療を頼む」

「う、うん……………負けないで、黒崎君」

井上はそう言って、茶渡の下へ走っていく。先程まで、窒息しかけていたが、あの様子を見る限り大丈夫だと一護は安心した。

そして井上が走っていく間に、何の動作を見せなかったクリステイナに対し、一護が不思議そうな顔を浮かべる。

「わざわざ離れるまで待つなんぞ、どういう心算だ?」

「あの人間たちが近くに居たら、お前の本気を見る事が出来ない。」

だからわざわざ待ったんだ」

「っ……後悔すんじゃないぞ!!」

まるで自分を試しているかのようなクリステイナの言葉に、一護は全力の一撃をもって答える。天鎖斬月の超速から放たれた一閃は、並大抵の反射神経では反応出来ない。このままいけば、クリステイナの左腕は宙を舞うことになるだろう。

——もらった!

一護はそう考えながら、天鎖斬月を振り下ろす。

「速いが、軽いな」

「なん……だと……!!」

天鎖斬月の刀身は、振り切ることなくクリステイナの左手の中に納まっていた。刀身を直に握っているはずの手からは、血は一滴も流れていない。

(何だ……あの青い線は……!!?)

一護は受け止められたことにだけ驚いたのではなく、天鎖斬月を受け止められた瞬間に、クリステイナの左手全体に青い線のようなモノが奔ったことに驚いた。それが破面特有のものかどうなのかは量りかねるが、どちらにしろ相手は天鎖斬月の一撃を無傷で受け止められるだけの相手である。

だがそんな思考を巡らせている途中で、一護の視界はぐらつく。そして一護の口からは多量の血が零れる。腹部を方に目を向けると、クリステイナの右手が一護の腹部に深くめり込んでいた。

「ぐっ……!!」

「そんな一撃、誰にでも出せる」

「ぐ、がああっ!!」

めり込んでいた拳を振り抜かれたため、一護はそのまま後方に吹き飛ばされる。そして山に生い茂る数多の木々の中にその身を打ち付けられていく。

その姿に、一護を圧倒したクリステイナは興味を失ったかのように自然体な姿勢をとる。

「駄目だ。私じゃあ手加減が出来ない。ヤミー。黒崎一護はお前に任せる」

「はっ！だつたら最初から俺に任せろ!!」

ヤミーはそう言つて、嬉々として一護の下へ歩んでいく。それを横目に、クリステイナはウルキオラの近くまで歩いていく。

「……………何故手加減した？お前なら、最初の一撃であのガキを殺すことが出来たはずだ」

そんなクリステイナに、ウルキオラは無表情のまま疑問を投げかける。それに対し、クリステイナは髪を掻き分けながら答え始める。

「……………一応この任務は黒崎一護の戦力調査だ。最初の一撃で殺したら『調査』じゃあない。だが、さっきの一撃でどの程度かは把握出来た。後は、あのでくの坊に勝手にやらせるさ」

「そうか」

そんなやり取りをしている間にも、ヤミーの一方的な暴虐が一護を襲っていた。もし一護が無傷であれば、慢心している緩慢な動きのヤミーを、逆に一方的な展開で圧倒することが出来たであろう。だが、それも出来ないほどまでに一護は強力な一撃をクリステイナに貰ってしまった。さらにその際に、一護は内臓を揺らされかなりのダメージを受けた。それが、超速戦闘を主体とする一護に多大な影響を与えているのも、現在一護がヤミーに一方的にやられている理由である。

一護は身体中から流血しており、息も絶え絶えになつている。そんな一護を、ヤミーは笑い声を上げながら煽つてゆく。その光景に茶渡の治療をしていた井上は我慢できずにヤミーに立ち向かっていく。

「黒崎君!!」

「来るな、井上!!」

そんな井上に一護は声を上げるが、すでに井上はヤミーの攻撃範囲に入っていた。それは、ヤミーが腕を振るえば井上に一撃を喰らわせられる範囲ということである。

必死に動こうとするが、一護の身体は言う事を聞かない。

そんな間に、ヤミーの左腕は井上を吹き飛ばそうと振りかぶられる。井上もそれに気づき三天結盾を発動しようとするが、間に合いない。

(ちく……………しよう!!!)

「夕闇に誘え——『みろくまる弥勒丸』!!」

「うおおう!?!」

だが、ヤミーの一撃が井上に当たる直前に、何者かが放った竜巻によつてヤミーの巨軀が少し吹き飛ばされる。ヤミーのそのまま不恰好に、尻もちをつきながら地面に落ちる。

「ちつ……………何だ、てめえはア!!!」

ヤミーは自分を吹き飛ばした者に向かって声を荒げる。そしてその対象を見て、一護は目を見開く。

「茜雫……………?」

井上の前に佇んでいたのは、髪を赤いリボンで纏め、死覇装を身に纏った少女。その手には、錫杖のような形状の斬魄刀が握られていた。

その表情は、不安げながらも硬い意志が感じられるものであった。

「私は……………死神だつ!!」

蹂躪

死を恐れるなど

この世に生まれ落ちなければ
感じる事などなかったのに

『茜雫サン。貴方の身体は霊骸に入ったことよって、だんだん一つの魂魄として安定してきています。このままいけば義骸に入ったりしたまま、普通の人間として暮らしていくことも可能になっていくでしょう。ですが、もし無茶をなされたら最悪魂魄が自壊してしまいます。そこは気を付けてください』

(つて、店長に言われたけど……)

茜雫は、つい最近浦原に言われたことを思い出しながら、目の前の敵を見据えていた。後ろには井上が、そして別の場所には一護が血まみれで倒れている。意識こそ失っていないが、傍から見ても重傷なのは明らかだった。

そもそも何故茜雫がここに居るのかと言うと、不自然な大きい霊圧を三つ感じたこと。そして、それに相対するように上昇していた一護の霊圧が急激に下がっていったことが理由である。茜雫の霊圧知覚はお世辞にも敏感とは言えない。だがそれでも、隊長格レベルの強大な霊圧と、自分の霊圧の差ぐらいは解っているつもりであった。だからこそ、ちやうど近くを散歩していた茜雫はすぐに向かうことをせず、少し様子見をしてから来たのである。

(勝てない……)

「あくあ！折角の一張羅がボロボロだぜエー！」

茜雫が震える身体を押さえながら立っていると、先程吹き飛ばされたヤミーが、弥勒丸の竜巻によつて斬り刻まれた死覇装を見て、わざと聞こえるように言葉を漏らした。

なるべく平静を保っている茜雫だが、内心はその真逆であった。どのような経緯かは解らないが、相手は卍解した一護を一方的に捌ける相手。どう転んでも自分に勝ち目はない。それは先程の竜巻で、皮膚には一切傷がつかなかったヤミーの身体が如実に示したした。

「茜雫ちゃん……………」

「だ、大丈夫だから……………一護をお願い」

「うん……………」

茜雫の言葉に井上は、すぐさま仲間の治療に戻っていく。

大丈夫と言った手前、すぐにやられる訳にはいかない。自分にできるのはあくまで時間稼ぎ。どの程度かは解らないが、それは浦原たちが駆けつけてくるまで。それまでは何としても目の前の大男を止めなければならぬ。

そして、再び弥勒丸をしつかり握る。

「弥勒丸っ!!!」

先程よりも巨大な竜巻で、ヤミーの身体を包み込む。もしこれが普通の虚であつたら、為す術もなく竜巻によって身体を斬り刻まれていたことだろう。だが相手は、茜雫こそ知り得ていないが十刃のなかで二番目に鋼皮が硬い相手。竜巻をヤミーの動きを止める事は出来ても、傷を付ける事は出来ない。

だが、ここで接近戦に持ち込まずに、竜巻を放つことは正解だった。ヤミーの身体は、人型ではあるがその大きさは人外レベルである。その大きさが、風を受ける面積を広くすることで抵抗が比例して大きくなっている。まさに、時間稼ぎという意味では正しい一手であつた。「はっ!!何だよ、涼しいぜエ!!」

厳しい表情の茜雫とは違い、ヤミーは不気味に笑う。茜雫の攻撃を受けても尚、余裕を持った笑みは崩さない。

そんな光景を、傍から見ている破面の二人は黙って眺めていた。「……………現世でまともに戦えるレベルの者は三人だと聞いていたが、奴は何者だ?」

「さあな」

クリステイナが聞いたその三人とは、『黒崎一護』、『浦原喜助』、『四

『楓院夜一』である。しかしその人物たちのどの特徴も、今ヤミーと戦っている少女には当てはまらない。

「……大方、空座町の担当死神か何かだろう。あれでは、戦力に数えなくとも問題はない」

「ああ」

それでも、自分達には到底及ばない霊圧しか保持していないため、考えるのをそこで止めた。

暫く、茜雫の放つ竜巻に対し腕をクロスさせ防御だけをしていたヤミーが、二人の方をみてこう言った。

「なあウルキオラ!!こいつもゴミかア!？」

「……………ああ、ゴミだ」

「そうかよオ!!」

「っ!!」

ウルキオラの言葉を聞いたヤミーは、その場で口を大きく開く。すると口腔に赤黒い光球のようなものが出現する。

——『虚閃』。大虚が放つ破壊の閃光であり、威力は強大である。ましてやそれを放つのが十刃であれば茜雫の身体は消し炭になるであろう。虚閃の存在を知っていればすぐさまにでも回避行動をとったであろうが、茜雫は正規の死神ではない。そのため茜雫は避けることをせずに、その場で弥勒丸を盾にするように留まってしまった。

そしてヤミーの口腔から虚閃が放たれた。辺りは一瞬赤い光で埋め尽くされる。轟音が響き、砂塵が木々の合間を縫っていく。

「っ、茜雫アアアア!!」

その光景に、近くで倒れている状態で見えていた一護は声を上げた。一度、虚閃を受け止めたことのある一護は、その威力を知っていた。そのため、最悪のシナリオが一護の脳内を埋め尽くした。

暫くすると、虚閃によって巻き起こった砂塵が収まってきた。

「ど————もオ————♡遅くなっちゃってスイマセ————ン、黒崎

サン♪」

「店……長？」

しかし、そこに居たのは三人。尻もちをつく茜雫の前に、二人の人物が立っておりその内の帽子を被る人物——浦原が、紅い六角形の盾『血霞の盾』を発動していた。そして浦原の傍に居るもう一人の人物——夜一が、尻もちをつく茜雫に手を差し伸べた。

「時間を稼いでもらって済まぬの、茜雫。おかげで間に合うことが出来た」

「夜一さ……ん」

そんな夜一を見た茜雫は、どんどん目じりに涙を溜めていく。それを見ただけで夜一は、茜雫がどれだけ恐怖と戦っていてくれていたのかを瞬時に理解し、茜雫を立ち上がらせた後に、優しく抱き寄せた。

「喜助。薬を寄越せ」

「はいな」

夜一がそう言うと、浦原が何かを夜一に向かって投げる。それをキヤツチすると、夜一はそれを茜雫に渡した。

「これを一護に飲ませるのじゃ。分かったな？」

「はいい……」

夜一から薬を受け取った茜雫は駆け足で一護の下へと行く。

しかし、それをヤミーが許すはずもなく、追いかけてやろうとする。だがその瞬間に、一瞬ヤミーの視界が反転し、凄まじい衝撃が身体に走る。

「な……なん……だと……!!？」

ヤミーは今の一瞬で、夜一によって身体を回されていた。しかしあまりにも一瞬のことであったため、ヤミーは自分が何をされているのか把握出来ていなかった。

「くそがあああああ!!！」

何はともあれ、自分が一方的にやられたことに逆上し、夜一に襲いかかろうとする。だが、そうしようと立ち上がった瞬間に、ヤミーの身体は何者かの手によって地面にめり込まされる。

「く、クリステイナア!! てめえ、何しやがる!!？」

「黙れヤミー。こいつらは浦原喜助と四楓院夜一だ。お前じゃあ解放なしではどうやっても勝てない。だから――

……………私に寄越せ」

「っ!!……………ちっ、分かったよ」

ヤミーを地面にめり込ませた張本人であるクリステイナの言葉に、ヤミーは仕方ないと言う表情で下がっていく。

その間に、クリステイナはウルキオラの方を見る。

「いいだろう？ウルキオラ」

「……………戸魂界からの増援も考えられる。五分だ」

「了解」

ウルキオラが了承した瞬間に、クリステイナは響転で夜一の目の前に移動する。その速さに、瞬神と言われる夜一も驚愕の色を見せる。

クリステイナは右手の手刀で夜一の首を刈り取ろうとするが、それに反応した夜一はそれを左足で蹴り上げて防御する。だが蹴り上げられた流れで、クリステイナはその場で一回転し今度は蹴り上げを喰らわせようとする。夜一はその一撃を躲すが、その瞬間からクリステイナは怒濤の連撃を夜一に放つ。

(速い!)

クリステイナの連撃を避ける夜一は、その速さに驚嘆していた。さらにそれらのどの一撃も、喉や心臓などの急所を狙ってくるので夜一は上手く攻勢に転じることが出来なくなっていた。

だがその途中で、紅い斬撃がクリステイナに襲いかかった。それと同時に夜一はクリステイナとの距離をとる。

「大丈夫ツスか？夜一サン」

「遅いわ、喜助」

「何だ。これで本気か？」

「っ!!?」

浦原の紅姫の一撃・『剃刀紅姫』を喰らったはずのクリステイナは、服こそ破れているが身体には傷は何一つ付いてはいない。その事実にも、紅姫の所有者である浦原は一筋の汗を流す。

「いや……………驚きツスね。紅姫の一撃を喰らって無傷とは……………」

「悠長なことを言つとる場合か。喜助、手を貸せ。あの破面出来るぞ」
「解つてますよ」

「話は終わったか？」

二人が会話を終わると同時に、クリステイナは口を開く。

そしてその表情は、強者二人と相対しているのにも拘わらず焦りも恐怖も感じられない。一つ感じるものの出来るものと言えは——
——底の見えない憎しみ。それはクリステイナの放つ荒々しい霊圧が物語っていた。浦原は一瞬、自分が仮にも女性型である相手の死覇装を破ってしまったからかとも考えたが、恐らくそれは違うだろうと考えた。その憎しみは、破面になってから、もしくは虚になる以前に芽生えたものである。浦原はそう直感した。

そんな浦原に対し、クリステイナは言葉を続ける。

「元十二番隊長兼初代技術開発局局長・浦原喜助。お前に恨みがある訳でもないが、ここで殺す」

そう言うと、クリステイナの右手に赤黒い閃光が収束を始める。

「虚閃か！」

すぐさま察した夜一が、虚閃を放たれるのを阻止しようと瞬歩で肉迫しようとする。

『トルメンタ・デステーリョ
嵐 光』

「っ!!夜一サン!!!」

「くっ、『瞬閃』!!!」

迫りくる虚閃の嵐に回避することが不可能だと察した夜一は、すぐさま瞬閃を発動し、虚閃を一撃一撃、拳や蹴りで撃ち落としていく。

しかし、撃ち落としそびれたものもあり、それらは後方にいる浦原が何とか一護や井上たちに当たらないように奮闘しているが、それ以外は木々を消し炭にしたり、地面を穿ったりしている。

その途中で、クリステイナは夜一に肉迫し、拳を放つ。それに対し夜一も拳で相對そうとする。瞬間状態で放たれる拳であるため、例え相手が隊長であつたとしても骨を粉々にする一撃になつたであろう。

刹那、鮮血が舞う。

「ぐうっ!!!」

「ちっ……!!」

だが苦悶の声を漏らしたのは両方であつた。夜一は、瞬間を発動していたのにも拘わらず、拳と腕の骨が砕け、拳の皮膚は裂け血が噴き出ている。そしてクリステイナの拳からも鮮血が舞っており、無傷ではないことを表していた。

自分の不利を悟つた夜一は、一旦距離をとる。

(何じゃ……?一瞬、奴の拳に赤い線が奔つたぞ)

夜一は、今の一瞬でクリステイナの変化に気づいていた。自分と拳を交えた時に、クリステイナの拳には赤い線が奔つていた。もしや、それが今の激突で自分の拳の骨が砕けた原因ではないかと思考を巡らせる。

(ちっ………動血装じゃなく、ブルート・ヴェーネ静血装にするべきだったか)

夜一が赤い線に思考を巡らせている最中、クリステイナも今の一瞬で、自分が選択を誤つたと考えていた。今の一瞬、クリステイナは自分の攻撃力を高めるために動血装を発動していた。だが相手は自分の鋼皮を通り抜け、骨を砕く程の衝撃を持つ一撃を放つてきた。だがそれに伴い相手は、自分の肉や骨にダメージを負っていることからクリステイナの鋼皮の硬さに耐えられなかつたのだろうと考えた。そうすると、こちらが下手に攻勢にでるより防御に徹しても、次第に相手にダメージを負わせることが出来、尚且つ自分は受けるダメージを減らすことが出来ただろう。

しかしそれは後の祭りである。

(もしもの時は、乱装天傀で無理やりにも動かして不意を突けばい

い)

だが、使いものにならなくなった腕を無理にでも使うことが出来る能力が自分にはある。クリステイナはそれも考慮して、余裕のある表情で夜一に相対そうとしていた。

『剃刀紅姫』

「っー」

しかし後ろから放たれた一撃にクリステイナは驚き、斬魄刀を抜いて対応する。

「やつと、斬魄刀を抜きましたね」

「ほざけ」

そう言つてクリステイナは斬魄刀を握つたまま、左手の人差し指と親指を立てる。それはまるで、子供が警察ごっこでもするときの手で銃の形を作るときのそれであつた。その挙動に浦原は危機を察知し、すぐさま『血霞の盾』を発動する。

「バンっ」

「っ……なっ!?!」

可愛らしい声とは裏腹に、状況は血霞の盾を発動していたはずの浦原の肩からは血が出るというものになっており、浦原自身それに驚愕していた。傷こそ小さいが、浦原はいつ攻撃を喰らつたのか解らないことに動揺していた。

—— 『銃虚弾』^{バラ・フシール}

虚閃の二十倍の速さを持つ虚弾を、銃の形にした手の人差し指から放つことにより、それを通常の虚弾よりも速い一撃を放つことの出来るクリステイナの技である。

浦原はいつ喰らつたのか解らなかつたが、クリステイナは『バンっ』という以前の手の形を作つた瞬間にすでに放つていたのである。故に、その挙動を見てから血霞の盾を発動した浦原の行動は、遅いものだったのである。一撃が小さいのと、その速さにより直撃した部分は貫通するが、元隊長である浦原にとってはまだ活動範囲内の怪我である。

(中々……いや、かなりの手練れ!!……卍解を使うか? いや……あれはこんなところでやるもんじゃない……)

余りの相手の強さに、浦原は卍解するまで思い至る。だが、その考
えは第三者の言葉で止められることになった。

「クリステイナ。時間だ」

「……………ちっ」

ウルキオラの言葉に、クリステイナは舌打ちをしながら斬魄刀を鞘
に納める。そしてそれを確認したウルキオラは、自分の後方に黒腔を
出現させる。

「待て……………よ……………!!」

黒腔の中に入っていく三人に対し、茜雫の介抱を受けていた一護が
口を開く。

「逃げんのかよ……………!」

一護の言葉に反応したのはウルキオラであった

「逃げる、だど？勘違いするな。既に俺達の任務は完了した。クリス
テイナ一人に圧倒されたゴミなど、殺す価値もない。仮にこのまま続
けてもお前たちの敗北は目に見えている筈だ」

その言葉に、深刻そうな表情をしたのは夜一と浦原であった。自分
達二人を相手取り、夜一の腕を一本駄目にした相手の実力は計り知れ
ない。さらにそのクリステイナを止めたことから、ウルキオラは少な
くともクリステイナの上の地位に居る者。つまりクリステイナより
も強者である可能性が高い。もし、ウルキオラも加勢するのであれば
ここに居る全員が殺される可能性を二人は否定出来なかったのであ
る。

「藍染様に報告しておく。貴方が目をつけた死神もどきは、殺すに足
りぬ塵でしたとな」

ウルキオラの言葉に、一護は悔しそうに歯ぎしりをする。そんな一
護を見て口を開いたのは、クリステイナであった。

「……………命は、軽く見るもんじゃない」

「はっ……………?」

「死にたくなければ、戦場に出ないことだ」

「おい、どういう意味だ!!」

一護が、クリステイナの意味深な言葉に対し叫ぶが、それよりも早

く黒腔の裂け目が閉じた。
そして暫し、静寂が辺りを包んだ。

「ち……………くしょう……………!!」

宮内

儂きを

その情緒を

私は嫌う

「ぶは——っ!!」

大きなどんぶりを畳に置き、夜一は湯呑のお茶を啜る。夜一の顔には、先程まで食べていた形跡とも言える米粒を幾つも付けていた。

そして片腕には、痛々しくも包帯を巻きつけていた。

「戻ったみたいっスねえ、腕の調子」

「まあ。手も一応日常生活には支障は無い」

差し入れのジュースを持ってきた浦原は、夜一の腕の調子を聞く。それに対し夜一は、特段問題のないと言う風に答える。

「……………戦闘には？」

だが、浦原の次の言葉に夜一は『無言』という形で返答した。それで浦原は察する。

夜一の腕は、先日の破面との戦闘で骨を砕かれ、肉が裂けるといふ普通であれば数か月は治らないであろう傷を負った。だが、井上による双天帰盾により、何とか日常生活に支障が出ない程度に回復したものの、まだ戦闘に使えるまでには回復しなかったのである。

「……………瞬間状態で放った一撃にも拘わらず、儂はあの者の一撃と相打ちになった。奴にダメージは入ったものの、あれでは押し勝ったとは言えん。奴等、手強いぞ。儂やお主の予想よりは、遙かにの」

そして同日、日番谷先遣隊が現世に到着し、それを空座町死神代行である一護に伝えるために、先遣隊の一人を除いて全員が空座第一高等学校に居た。その先遣隊のメンバーが、銀髪、赤髪、ハゲ、おかつぱ、金髪美女、小学生体形であり中々目立っていたが、一先ず伝達は終了した。

その際に先遣隊の一人であるルキアは、破面に圧倒され戦意を喪失していた一護を再び立ち上がらせる事に成功していた。

そんな中、一人だけ別行動をとっていたのは――。

「…………成程。成体の破面が三体ですか」

「ええ。実際にアタシたちが戦ったのはその内の一体ですが、かなりの手練れでした」

先遣隊の一人である日向は、学校に向かう事を遠慮していて、代わりに実際に戦闘を行った浦原の下に破面の情報を得るために浦原商店を訪れていた。

「あれが破面達の中でどの程度の序列なのかは解りませんが、隊長格レベルの個体であることには間違いありません」

「……………そうですか」

虚閃を嵐のように放ち、浦原の攻撃を完全に防ぐ皮膚を持ち、さらには瞬間状態の夜の放った拳を逆に打ち砕く攻撃力を持つ。それを聞いただけで日向の表情はどんどん曇っていく。その理由は、破面の強さもあるが、それよりも実際に破面と戦った者としての理由がある。

『帰刃』

一部の破面は、破面化した際に自分の核である部分を刀剣化し、解放すると同時に元の姿に戻り爆発的に戦闘能力を向上させる。もしそれが隊長格を圧倒する者が行ったとすれば、その上昇幅は予測出来ない。

「アタシも、出来る限り先遣隊の皆さんのサポートはします。ですけど……………」

「大丈夫です」

浦原が言い終える前に、日向が口を開いた。その言葉の真意を探る

ように、浦原は帽子の影から日向のことを見つめた。

「何とかしてみせます。そのための、護廷十三隊です」

その言葉に、浦原はフツと笑う。

随分、成長したじゃないツスカ。

そう、心の中で呟いて。

すると、日向の後ろに位置する襖がガラツと開く。

「茜雫？どうした？」

そこに佇んでいたのは茜雫であった。それも私服ではなく、死覇装である。茜雫は神妙な趣のまま、その場で腰を九十度を曲げる。

その挙動に、日向だけでなく浦原も驚き、目を見開く。

「お願い日向。私に、戦い方を教えてー！」

「……………はっ？」

茜雫の言いたことはこうだ。以前の破面の襲撃の時に、自分は力がないがために、出来ることが何もなかった。だから、もしもの時に誰かを護れるだけの力を持つ『死神』になりたい。だから、最低限の技術を自分に教えて欲しい、と。

「浦原さんじゃ駄目なのか？」

そんなことを話しながら、二人は浦原商店地下の修行場に来ていた。日向の言葉に、茜雫はバツの悪そうな表情を浮かべる。

「……………店長には色々お世話になってるから、これ以上迷惑かけれないってどうか……………」

「……………成程な」

茜雫は日向が尸魂界に戻って以降、浦原商店で居候のような生活をしてきた。衣食住を無償で提供され、さすがの茜雫も何もせずには居られず義骸に入って店番をしたりなどしたが、浦原はそれに対してバイト感覚できちんと給料を渡していた。それでは意味がないと茜雫は断ろうとしたのだが、浦原の喋りに敵う筈がなく、結局言いくるめ

られ給料を受け取らされていた。

そのこともあり、茜雫は浦原に対しては頭が上がりず、なるべく迷惑を掛けないようにしていたのである。

「あと、夜一さんに『日向に手取り足取り教えてもらえばいいじやろう』って言われて……………」

「……………何かその言い方嫌だな」

しかし、茜雫は浦原には頼み辛い。夜一は怪我をしている。先遣隊のメンバーは面識が皆無。一護は教えるには向いていない。井上や茶渡も、死神としての戦闘方法を教えるのは無理である。そうすると自然と残りは日向となる。

そう思い至り、日向は仕方ないと深呼吸する。

「……………分かった。だが、実際に破面とどこまで戦えるレベルになるかは保証できねえ。それでもいいってなら……………」

「いいの」

茜雫が、日向が言葉を続けている途中で、口を開いた。

その瞳は、しっかりと日向を見据えている。

「もう……………見てるだけは嫌だから。大事な人が傷つけられるのは嫌だから」

「……………そうか。解った」

離しながら、日向は斬魄刀を抜く。それと同時に霊圧を急激に上昇させる。

「っ……………!!」

「茜雫。俺も本気でやる。覚悟しろよ」

少しの間、隊長格レベルの霊圧に当てられていた茜雫だが、何とか正気を取り戻し斬魄刀を抜く。

「……………うん！」

「行くぜー」

数刻前、虚夜宮。玉座の間と呼ばれる場所に於いて、二十体の破面

と藍染、市丸、東仙の三人の前で、現世で黒崎一護の戦力調査の結果を、ウルキオラが報告していた。

「——成程。それで彼を『この程度では殺す価値無し』と判断したという訳か」

「微温いな」

藍染の言葉に、説明していたウルキオラに割って入ってきたのは、第6十刃であるグリムジョー・ジャガージャックである。水色の髪をリーゼントにするヤンキー風の破面である。

「こんな奴等、俺なら最初の一撃で殺してるぜ」

「はあ……………」

そんなことを言うグリムジョーに対し、クリステイナはあからさまに面倒臭そうな表情を浮かべる。

「理屈がどうだろうが『殺せ』って一言が命令に入ってるなら殺した方がいいに決まってるだろうが!あ?」

「同感だな」

グリムジョーの意見に、彼の従属官であるシャウロン・クーファンが賛成の意を唱える。

「いずれにしろ敵だ。殺す価値はなくとも、生かす価値など更に無い」
「大体クリステイナ!!テメー、人間を見逃すたあ何考えてやがんだ!!
てめえに盾突くやろうを見逃してどうするつもりだ!」

そしてグリムジョーの怒りの矛先は、人間を見逃したクリステイナに向かった。それに対しクリステイナは、淡々と言葉を並べていく。
「私達の受けた命令は『黒崎一護』の戦力調査だ。奴らはそのための餌。巻いた餌をどうしようと私の勝手だろうが」

「わかんねえ奴だな。俺ならせいつらも一撃で殺すつつつてんだよ」

「殺すしか能のない獣が、よく喋るじゃないかグリムジョー。そんな『王』に従う下僕共が可哀相で仕方がない」

「ああ!第一に、テメーはあの女に一撃喰らって腕ポロボロじゃねえか!!そんな奴に『殺す価値がなかった』って言われても『殺せませんでした』にしか聞こえねえよ!!」

「お前もヤミーと同じで脳みそを使わない奴だな。お前なら腕が吹き

飛んでいた。後ろの下僕共がやればそのまま死んでいた。映像をあれだけ見て、それも理解できないのか？そしてあの戦いを止めたのは、尸魂界の増援を考慮したウルキオラだ。あのまま続けていれば私はあの女を殺せた。だが、お前はあの女を殺せないだろうな」
そこでクリステイナは一息置く。

「お前は、私より弱いからな」

「っ……………てめえ!!!」

「そこまでだ。クリステイナ。グリムジョー」

一触即発の雰囲気になった瞬間、この時まで黙っていたウルキオラが口を開いた。否が応にもウルキオラに視線が集まる。

「クリステイナは俺の指示に従っただけだ。そして我々にとって問題なのは今のこいつじゃないことはわかるか？」

「……………あ？」

「藍染様が警戒されているのは、現在のこいつではなくこいつの成長率だ。確かにこいつの潜在能力は相当のものだった。だがそれは、その大きさに不釣り合いな程不安定で、このまま放っておけば自滅する可能性も、こちらの手駒にできる可能性もあると俺は踏んだ。だから殺さずに帰ってきたんだ」

ウルキオラは、一護の中の内なる虚のことを見抜き、その上で一護が虚となり自分達の勢力に入る可能性を示唆した。だが、その説明に對してもグリムジョーは納得しない。

「それが微温イって言ってんだよ！そいつがてめえの予測以上にデカくなって、俺らに盾突いたらてめえはどうするってんだよ!？」

「その時は私が始末するさ」

グリムジョーの問いに、クリステイナは間髪を入れずに答える。

「それで文句はないだろう？セスタ・エスパルダ第6十刃」

「そうだな」

クリステイナの言葉に反応したのは、玉座に座る藍染であった。

「それで構わないよ。君の好きにするといい、クリステイナ。いや、^{アルモニア}虚夜宮調和刃・クリステイナ・エルフリーデ」

「はっ」

藍染の言葉に、クリステイナは礼をする。藍染が言ったことにより、グリムジョーはこれ以上反論することが出来ずに、その場でクリステイナを睨むことしか出来なかった。

『^{アルモニア}虚夜宮調和刃』。数字持ちの中でも別格の強さ————上位十刃級の強さのクリステイナに、藍染が与えた役職。その名の通り、虚夜宮の調和を図る役職であり、葬討部隊とは違いクリステイナ単独で動いている。だがそれは名だけであり、実質は愚かな考えを持つ破面がクリステイナに喧嘩を囁け、返り討ちにされるようなことを抑える為に、クリステイナの強さを示すために与えた役職である。その権力は十刃には及ばないが、一部の破面からは十刃以上に恐れられている存在である。

それはともかく、藍染の言葉により三人の報告は終了し、各々が玉座の間から出ていく。

「おい、クリステイナ」

「……………何の用だ、レイチエル」

部屋から出ていくクリステイナを呼び止めたのは、藍色の髪に、長いマフラーを首に巻く破面・レイチエルという破面であった。中性的な容姿であり、クリステイナよりも頭一個分ほど大きい。レイチエルに呼び止められたことにより、一瞬間な顔をするが、それはヤミーやグリムジョーの時のように顕著なものではない。

「……………あまり敵を作るような真似はやめておけ。自分の首を絞めるのはよくない」

「今更だ。それにお前の小言も聞き飽きた」

クリステイナの態度に、マフラーによって口元は見えないがレイチエルはため息を吐く。

「お前の寝首を掻こうとしてる奴は、虚夜宮に何人も居る。いくらお前が虚夜宮調和刃だとしても、敵が多いとロクなことが起きない」

「…………それはお前個人の意見か？それとも『帝守護刃』のトップとしての意見か？」

「どっちもだ」

『帝守護刃』とは、十刃以外での群を抜いた破面に与えられた『藍染を守護する者』の称号である。元々はレイチエルだけに与えられた称号であったが、レイチエルを慕う破面が従属官のようにレイチエルの下に就き、葬討部隊のような部隊となっているのである。

「お前が聡明なのは知っている。やり様によっては今からでも『お前の誤解』は解ける。だからもう少し……………」

「黙れっ!!」

レイチエルが言い終える前に、クリステイナが静かな通路に声を響かせた。

それにレイチエルは声を詰まらせる。だが、すぐに続きを話し始める。

「…………彼女はもう虚夜宮には居ない。お前の気持ちは解るが、お前も一步を踏み出すべきだ。過去に固執し過ぎるな」

その言葉を聞いた瞬間に、クリステイナは響転でレイチエルに肉迫し、胸倉を掴んでレイチエルを壁に叩き付ける。無表情のレイチエルに対し、クリステイナは憤怒の形相である。

「忘れると言うのか……………!!?」

「そうは言っていない。もし彼女がいればお前にそう言っていた筈だ、と言っている。お前が彼女に固執しているあまりに、憎しみのままに行動を起こしていくことを、彼女は悲しむ筈だ」

「つ…………お前にアイツの何がっ!!アイツ等の何がっ!!」

「感情に流されるな。俺達には『理性』がある。それを教えてくれたのも彼女だろう？」

「つ…………レイチエル!!」

「そこまでだ。虚夜宮調和刃」

レイチエルの言葉に、拳を振り掲げたクリステイナだったが、それは何者かの手によって止められる。咄嗟に後ろを確認すると、金髪で褐色肌で、乳房の下半分からへそまでかけて大胆に露出するという死

覇装を着た女型の破面が居た。

「ティア・ハリベル……………!!」

「仲間割れをしている場合じゃあない。ましてや、お前たちはな」
「済まないな、ティア」

クリステイナの拳を止めていたのは、第3十刃であるティア・ハリベルであった。その後ろには彼女の従属官である三人の女型破面が居る。止めてくれたことに対しレイチエルは礼をいい、そつと胸倉を掴んでいるクリステイナの拳を解く。

「虚夜宮調和刃であるお前が、私情で暴力を働くべきではない。ましてや相手が『帝守護刃』ならな」

「……………ちっ!」

ハリベルの言葉に、クリステイナは舌打ちをしながらその場を離れていく。その後ろ姿を、レイチエルとハリベルの二人はじつと眺めていた。

「……………レイチエル。余りそのことは言つてやるな」

「……………お節介だとは解つているつもりだ」

「そのせいでお前がやられて、お前の従属官がクリステイナを目の仇にしたらどうするつもりだ?私がお前の従属官だったら、気が気じゃない」

「ありもしないことを言うな。そのおかげでお前の従属官が、俺を目の仇にする」

そう言われてハリベルが後ろを見ると、自分の従属官たちが凄まじい目つきでレイチエルを睨んでいることを確認したため息を吐いた。忠誠心が強いがために、嫉妬も強いというのは悩みどころである。

「はあ……………ともかく、お節介なのはいいが下手な優しさは相手を苦しめる。クリステイナが良い例だ」

「……………誰も優しさを向けなくなったら、それこそアイツは一人になる。只でさえ破面^{俺達}を拒絶するアイツはな」

「クリステイナは孤独を望んでいる」

「それは、仲間という温かさと、失った時の絶望を知っているからだ。心の底から孤独を望んでいる訳じゃない」

「……………平行線だな。この話はやめよう」

このままではいつまで経っても互いの主張がぶつかるだけと察したハリベルは、自分が引くことによって話題を終わらせた。

「……………お前が、彼女のような優しさを万人に向けて万人が良い反応をする訳じゃない。私は嬉しいが、他の奴等には気を付けてやれ。これだけは言っておく」

「そうか」

ハリベルの言葉に、レイチエルは頷く。それを見てハリベルは、従属官と共にレイチエルの前から去って行った。

「はあ。俺も、難儀な性格だ」

誰も居なくなつた通路で、レイチエルはそう呟いた。

「デイ・ロイ。シャウロン。エドラド。イールフォルト。ナキーム。行くぜ、遠慮も区別もねえ。少しでも霊圧のある奴は、一匹残らず――」

「……………皆殺しだ!!」

破壊

抉り

削り

穿ち

血を啜る

俺の牙は

吭は

そう出来ている

「っ!!この霊圧は……………!」

浦原商店の地下で茜雫と特訓をしていた日向は、空座町に現れた幾つもの破面の霊圧を感知した。そのどれもが霊圧のある者へと向かって行っている。

そのことから、破面達は少しでも霊圧のある者を殺そうとしているのではないかと思に至る。

「くっ……………」

「待て、茜雫!!霊圧を消費しているお前じゃ、出て行っても足手まといだ!」

「っ!」

日向の言葉に、飛び出そうとした茜雫はその足を止めた。そして悔しそうな顔でその場で立ち尽くす。

茜雫は今の今まで日向と実戦形式の斬魄刀の打ち合いをしていた。その中で茜雫は、今までにない以上に斬魄刀を解放していた。それから考えるに、今の茜雫が以前の破面の襲来の時よりも戦闘力が落ちているのは目に見えているだろう。

「日向!」

そんな二人の近くに、腕に包帯を巻く夜一が瞬歩で近づいてきた。

その表情から、事態が緊迫していることは想像に難くなかった。

「破面が一体こつちに向かって来ておる！店の前に恋次が居るから問題は無いじゃろう！じゃが……………」

「じゃが？」

「一体だけ、別格の霊圧の破面が一護のところに向かっておる！」

「……………！解りました！すぐに向かいます！」

夜一の言葉を聞き、日向は瞬歩でこの場から消える。それに対し茜雫は驚いたような表情を浮かべる。

「よ、夜一さん！日向も私と特訓して、消耗しているはずじゃ……………」
「安心せい。お主と刀を打ち合うだけでへばる様な男ではないわ」

夜一の言葉に、茜雫は若干ショックを受けている顔になるが、すぐに元に戻る。

それよりも夜一が気になっているのは、一護のところに向かっている破面のことであった。その霊圧は明らかに隊長格レベルであり、今の一護では到底敵わないであろう。ならば、現在現世にきている先遣隊の内の十番隊隊長である日番谷冬獅郎に、本来は任せべきであるが、隊長・副隊長は現世に来る際に限定霊印を押されておりその霊圧を極端に制限されている。そのため、瀨霊廷から許可が下りるまで本気を出すことが出来ず、許可を得ている最中にやられてしまう可能性の方が高かった。そう考えると、現在本気で戦える者の中で、その破面と直角以上の戦いを出来るのは必然的に日向しかないのである。

（任せたぞ……………日向！）

グリムジョーは、地面から伸びる円柱の氷を眺めていた。その氷の柱の中には、グリムジョーの従属官であるデイ・ロイが居り、その氷の為す術なく氷と共にその身体をバラバラに碎かれていった。

その光景を、グリムジョーは何の感慨も無く眺めていた。

そしてグリムジョーは、デイ・ロイを倒した者達の下へと響転で瞬

時に移動する。

「はっ………何だア？デイ・ロイの奴は殺られちまったのかよ？仕方無え。んじゃ、俺が二人まとめてぶっ殺すしか無えなア！」

グリムジョーの姿を捉えた二人の死神は、グリムジョーの霊圧の大きさに動揺しているかのような表情を浮かべている。

「破面N0.6・グリムジョーだ。よろしくな死神！」

グリムジョーは凶悪な笑みを浮かべながら地面に降りる。その姿を、一護とルキアは目を見開いて眺めていた。

(霊圧のレベルが………違い過ぎる………!!!)

「………どっちだ？」

グリムジョーの唐突な問いに、ルキアは身構える。それは一護も同じであり、拔身の斬月をグリムジョーに向ける。

「!?」

「強えエのはどっちだって、訊いてんだよ」

「っ、一護！一旦退くぞ!!」

余りのグリムジョーの霊圧の高さに、ルキアは一時撤退することを勧める。

だが、その瞬間にグリムジョーは響転でルキアに肉迫する。その右手の形は、ルキアの腹部を貫こうと手刀の形をしている。

「くっ!!」

だが、寸での所でルキアは身体を傾け、脇腹に大きな裂傷を作る程度でグリムジョーの一撃を回避する。

そのまま、自分の近くにいるグリムジョーに向かって、ルキアは左手の平を向ける。

「破道の三十三・『蒼火墜』!!」

ルキアが詠唱を完了すると同時に、グリムジョーの身体を青い爆炎が包む。だが、それに構わずグリムジョーはルキアに回し蹴りを入れ、吹き飛ばす。ルキアはそのまま後方にあったブロック塀に激突し、血反吐を吐く。

「ルキア!!っ………てめえ!!」

ルキアを倒されたことに憤慨した一護は、すぐさまグリムジョーに

斬りかかる。だがそれは、グリムジョーが腕を振るだけで弾き飛ばされる。

(硬え……………!!)

一護はグリムジョーの鋼皮の硬さに驚愕する。そもそも一護は『鋼皮』のことは認識してはいないが、前回の戦闘で破面の皮膚が硬いことは認識していた。一護はまだ正解こそしていないものの、斬月で斬れないというだけで相手の力量の高さを認識するには十分であった。

「はっ!!せいぜい楽しませてくれよ!!死神イ!!」

「……………双蓮を刻む。大火の淵を遠天にて待つ——破道の七十三・『双蓮蒼火墜』!!」

一護に嬉々として迫っていたグリムジョーだが、その途中でブロック塀の中からルキアが鬼道を放ち、それを阻止しようとする。だが、ルキアの渾身の一撃もグリムジョーは危なげなく回避する。

「雑魚が……………てめえから殺してやるよ!!」

邪魔されたことに腹を立てたグリムジョーは、標的を一護から動くこともままならないルキアに変更した。先程の一撃で素早い動きが出来なくなったルキアは、グリムジョーの動きに反応することが出来ない。

気づくと、既にグリムジョーはルキアの目の前に立っていた。

「っ……………!!」

ルキアは思わず瞼を閉じる。

そして、ルキアの耳には血が飛ぶような音が響き渡る。

「……………よく止めたじゃねえか」

「ああ?」

ルキアが瞼を開けると、そこには見知った人物が居た。

「日向……………!」

日向はルキアの前に立ち、斬魄刀をグリムジョーの腕に横から突き立てていた。もしグ

リムジョーが、そのままルキアを殺そうと腕を動かしていれば、勢いのままに肉と骨が刃に沿って裂けていただろう。

グリムジョーはすぐさま腕から刃を抜くように動かし、日向との距離をとる。その間に日向は、刀身に付いた血を振り払う。

「てめエ……………何モンだ？」

「人にものを尋ねる時は、まず自分から名乗るのが常識じゃねエか？」

「はっ!!そうかよ……………なら名乗ってやるよ」

そう言つてグリムジョーは、腰に差していた斬魄刀を抜く。そしてそのまま日向に向かって高速で飛び掛かる。

『セスタ・エスパルダ』
「第6十刃、グリムジョー・ジャガージャックだ!!」

「そうかよ。俺は、十三番隊第三席・天宮城日向だ!!」

互いに叫んだ瞬間に二人の斬魄刀が交差する。その際、凄まじい衝撃が辺りに響く。そしてグリムジョーは、空いている左腕を日向に叩き付けようと振り上げる。それを日向は、左手に虚帝を出現させ防御する。だが、勢いまでは殺せずに、日向は上空に上げられる。

「はははっーいいぜ、お前!!これはどうだ!!」

そう叫びグリムジョーは、日向に虚閃を放つ。それを見て日向は迷わず虚化し、同じく虚閃で相殺する。その光景を、グリムジョーのみならず一護も驚愕した表情を浮かべる。

「な……………何だそりや……………?死神が虚閃を……………?」

『……………久しぶりに始解で発動したな。でも、これでイーブンだろ?』

そう言つて日向は、上空から凄まじい速さでグリムジョーに肉迫していく。それに対しグリムジョーは、再び虚閃を放つ。だがそれを紙一重の所で回避し、そのまま瞬歩でグリムジョーの背後をとる。

「ちっ!!」

『破道の六十三・『雷吼炮』』

グリムジョーの背中に当てた手の平から、容赦なく雷のエネルギー弾を日向は放つ。凄まじい閃光と雷鳴と共に、グリムジョーは先程の日向のように上空に打ち上げられる。雷吼炮を喰らったことにより、グリムジョーの死覇装の上は大部分が消し炭になっている。しかし、

当の本人は対してダメージを受けていないような表情を浮かべる。

(流石に詠唱破棄じゃ、この程度か)

そんなことを考えつつ、日向はグリムジョーを追うように上空に飛びあがる。そんな日向に、グリムジョーも迎え撃つように日向に肉迫しようとする。

『縛道の六十二・『百歩欄干』』

「なっ!?!」

その途中で、日向はグリムジョーに向かって数本の光の柱を投げつける。それをグリムジョーは、自分の身体に当たるであろうものだけを斬り落とす。だが、その最中あることに気づく。

「っ、どこだ!?!」

先程まで自分の目の前に居たはずの日向の姿を見失っていた。すぐさま探査神経を使用し、場所を特定する。

そして自分の背後の目を向ける。

「そこかっ!」

『俺ばっか見えていいのか?』

「ああ?」

自分の背後に居た日向が、意味深な言葉を発したことに對し、グリムジョーは怪訝そうな顔をする。

その瞬間グリムジョーは、日向とは正反対の位置する場所から大きな霊圧を感じ取る。すぐさま、グリムジョーはその場所に目を向ける。

「月牙……………天、衝っ!!」

「っ!!」

ロングコート姿になった一護が放った黒い斬撃に對し、グリムジョーは腕を交差させ防御する。

それを辛うじて受け止めるが、月牙天衝の一撃に沿ってグリムジョーの身体には大きな斬傷が出来ていた。

「……………何だ、今は……………? そんな技、ウルキオラの報告にや入ってなかったぜ、死神!」

「ガツカリせずに済みそうか? 破面」

そう強がる一護だが、日向は一護の変化に気づいていた。

(…………虚の力を制御出来てないか…………)

それは、たった今月牙天衝を一発放っただけで、顔の半分を手で覆った一護の挙動で理解した。一護に虚の力があることは、浦原が『平子が一護と接触した』という報告で理解していた。

だが、現時点では相手に一人ずつ一撃を加えることが出来た。それに対し日向と一護はまだ無傷である。一護は時間が掛かってしまえば戦線を離脱することになる。だが、それまで二対一で戦える。それは日向達にとってかなりのアドバンテージであった。日向がメインで攻勢に出て、一護は一瞬の隙を突くように一撃を放つ。それだけで、相手に対しかなりの消耗を強いることが出来るのである。

(今現世に来てる奴では別格だ。この機を逃すわけにはいかねえ！)

二対一という好条件で戦える手前、日向はこの機会を逃すわけにはいかなかった。上手くいけば、藍染との決戦前に戦力の一つを削ることが出来、自分は力を得ることが出来る。

「本気で行かせてもらう!!」

「ちゅっど——ん」

「っ!」

突如、虚閃が自分に襲いかかり、日向は卍解しようとしていたのを中断させられる。虚閃が飛来して来た方向を見ると、そこには赤髪のショートヘアの女が宙に立っていた。首には、まるでチョーカーのような首輪がぶら下がっており、死覇装は短ランのようにへそを大胆に露出する仕様である。

その姿を見て、グリムジョーが声を荒げる。

「アニーシャ!!てめエ……………何でここに居やがる!!」

「はあ? アンタがそれ言うの? うっわ——、マジ引くわ——」

グリムジョーの言葉に、アニーシャと呼ばれた女破面は右手で頭を抱える。そして次に手を左右に広げる。

「アンタの独断行動のせいで、統括官サマは激おこぶんぶん丸。そのせいでアタシが駆り出されたのよ?」

「知るか! 俺の勝手だろうが!!」

『俺の勝手』ってアンタ……………ってうおおお!?危ない!!』

アニーシャが呆れたように話していると、そんなアニーシャに日向は斬りかかった。それを紙一重で回避するが、顔はかなり焦っている雰囲気が出ていた。

「いきなり斬りかかるって、アンタ常識あんの!？」

『常識も何も、敵なら斬るだけだ』

「やだ——!!この任務に真面目な感じで取り付く島のないタイプの奴——!!ウルキオラ風の——!!」

そう喚きながら、アニーシャは日向の斬撃を次々と紙一重で躲していく。途中からは、腰にぶら下げていた鞘から、シヨーテルのような剣を取り出し、日向の斬撃を流していた。

『中々やるじゃねえか!!』

「うっさい!!やめろ!!婦女暴行で訴えるぞ!!」

「どきやがれ、アニーシャ!!そいつは俺の獲物だ!!」

「ややこしくなるからグリムジョーは出しゃばるな!!帰れ!!そしてアタシを帰らせろ!!」

一気に騒がしくなった戦場は、だんだん混乱に満ちていく。

「グリムジョー」

「っ!!」

突如、そんな中に一つ、透き通った声が響く。その声に、この場に居る全員が声の聞こえる方向に目を向ける。

そこに居たのは、藍色の髪に、マフラーをしている破面であった。

「レイチエル……………てめエ……………何でここに……………!？」

「アニーシャと同じだ。お前の従属官は全員やられた。お前だけでも連れ帰る。それが藍染惣右介の命令だ」

「……………ちっ!!」

レイチエルという破面の言葉に、アニーシャの言葉には一切従わなかったグリムジョーは仕方なくレイチエルがやってきた黒腔の中に入ってしまった。それに伴いアニーシャも黒腔の中に入っていく。

『待ちやがれ!!』

去って行く破面達に、日向は黒い虚閃——ゼロ・オスキュラス黒虚閃を放つ。

それにグリムジョーとアニーシャは驚愕の色を見せるが、レイチエルは黒腔の裂け目の前に、何やら結晶のような物を発生させ、黒虚閃を防ぐ。

まさかその一撃を止められるとは思っておらず、仮面の中で日向は目を見開く。

『なっ………!!』

「成程な。『始解』という状態でその霊圧か。流石、藍染惣右介に目を付けられているだけのことはあるな。グリムジョーが圧倒されたのも解る」

「ああ!？」

レイチエルの言葉にグリムジョーは、自分は圧倒されていないという風に主張する。

だが、レイチエルは言葉を続ける。

「戦いなら、決戦の時に受け付けてやる。それまでこの勝負、預からせてもらうぞ」

そう言い終えると同時に、黒腔の裂け目は閉じる。

それを日向と一護は黙って見ているしかなかった。すると日向の近くに、結晶の破片が舞ってきた。それを日向は掴み取ってみる。

(……………氷?)

掴むと同時に、日向の手の平には冷たい感触が広がり、手の隙間からは雫が零れ落ちた。

それと同時に、残りの氷を砕くように日向は拳を握った。

『くそっ……………!』

日向は実感の湧かない敗北を、夜空を見上げながら噛みしめていた。

気分屋

自由気ままに

好き勝手

楽しまなければ

人生生きてる価値が無い

グリムジョー達による現世への無断侵攻。その後、各々が準備のため
に奔走をしていた。

その中でも、六番隊副隊長の阿散井恋次と茶渡泰虎は、浦原商店の
地下で特訓をしていた。

「どうしたア!? もう終わりかよ、茶渡泰虎!」

「……………まだだっ……!」

卍解『狒々王蛇尾丸』を発動している恋次に向かって、茶渡は何度
も立ち向かって行っている。茶渡は、黒く変質した右腕から霊圧の一
撃を放つが、恋次はそれを次々と躲していく。そして恋次は、狒々王
蛇尾丸を茶渡に向けて振り、蛇の頭をした部分が茶渡に襲いかかる。
それを茶渡は優れたの腕力で受け止めようとするが、あくまで人間で
ある茶渡はその一撃を完全に受け止めることが出来ずに、再び岩壁に
叩き付けられる。

「……………」

それらを、日向は遠くの崖の上から眺めていた。万が一に二人が重
傷を負った際に、回道で治療を行うためである。

そして日向の後ろには、刃禪を組む茜雫の姿があった。

『刃禪?』

『ああ。普通、死神は自分の斬魄刀と対話することで始解や卍解まで
至ることが出来る。だが、元から出来てたお前は始解は出来ているが
弥勒丸のことを何も解ってない』

前日の刀の打ち合いで分かったことを、日向は茜雫に話していた。それは、これからの特訓のプランを立てるためでもある。

『崩玉の覚醒まで大体四か月。そうすると、実際に特訓に回せるのはそれよりも少ないと思え。死神の斬拳走鬼を学ぶにしても、白打はお前の戦闘スタイルに合っていない。鬼道も、四か月ちよつとじや破面に對抗できる程の完成度にはならねえだろうからな。だからその二つを省く分、他の二つを出来るところまで叩き教えてやる』

そういう経緯で、茜雫は弥勒丸との対話を果たすために刃禅を組んでいるのである。一護も、やり方は違うとはいえ斬月との対話の中で『月牙天衝』を習得した。斬魄刀の力を最大限に発揮するには、何よりも斬魄刀のことを知ろうとしなければならぬのである。

そして日向が考えた特訓方法は、午前を刃禅だけに回し、午後は日向との実戦形式の打ち合い。さらにその打ち合いの中で、『瞬歩』の特訓。これが最善だと、日向は考えた。

そして茜雫の刃禅の間、日向は特にすることもないたため、最初の話に戻る。

「日向サン。皆さんの調子、客観的に観てどうツスか？」

「浦原さん……まずまずじゃないですか？」

日向の所に歩み寄ってきた浦原に対し、日向は端的に答える。

「恋次は茶渡の修行相手をしてますが、小さい獲物を捕らえるって意味でかなり有益な修行になってるはずです。そして茶渡の奴も、卍解とやり合うことでステップアップ出来るでしょうね」

「茜雫サンは？」

その言葉に、日向は手を顎に当てて少し唸る。

「……………東仙は、他人の斬魄刀で卍解出来るようになってます。そう考えると斬魄刀の力を知るには、その斬魄刀の本来の所有者か否かはそこまで重要ではないと考えてます。なら、茜雫も卍解まで時間は足りないにしても、弥勒丸本来の戦い方で戦えるようになると思っっています」

「流石日向サン、よく考えてますね。アタシもその意見には賛成ツス」
卍解は、十刃と戦うならば必須とも言える事項であろう。だが日向

は、死神としてまだまだ見習いの茜雫にそこまで求めようとは考えていない。だが重要なのは、卍解まで至ろうと斬魄刀と奮闘することである。事実、日向も己の斬魄刀たちと死闘を繰り広げ、かなりの戦闘経験を得ることが出来た。

「十刃には、ほぼ確実に隊長達がぶつかるとしようね。俺が懸念するのは、前回の襲撃で居た『従属官』っていうのが、実際どの程度の強さで、どの程度数を揃えているのかです」

「成程……」

前回の襲撃で分かった、従属官という存在。それらの最低ラインは、限定解除をしていない隊長格を圧倒するレベル。パツと聞き、余り大したようには聞こえないが、実際には護廷十三隊の上位席官レベルであることは間違いなかった。もしそれよりもある程度上のレベルの破面達が、十刃の部下として大量にやって来れば、副隊長たちだけでは対応出来なくなるかもしれない。尚も、隊長格以外で日向や一角、弓親、まつ梨などといった隊長・副隊長レベルの者は何人が居るが、それでもごくわずかであるため心もとないのは変わりない。

ならば、決戦まで出来ることはその従属官と呼ばれる破面たちと互角以上に戦える者を増やすことである。

「向こうの数が多いなら、こっちも戦力が多いに越したことはないです」

「端的に茜雫サンは、どの程度戦力になるとお考えですか？」

「さあ」

「ありや？」

日向の的外れな答えに、浦原は珍しくズッコケる。

それを見て日向は「すいません」と軽く謝罪してから、穏やかな顔で話し始める。

「俺に教えることが出来るのは、戦い方の基本と気構え位です。そこからどこまで伸びるかは、茜雫次第ですから……」

「……………それもそうツスね。ならアタシに出来るのは、茜雫サンに快適な衣食住を与えるだけツスね」

「……………茜雫のこと気に入ってるんですか？」

「そりやあもおく！雨と同じ感じで、浦原商店の看板娘ツスからく！」
日向の言葉に、浦原は扇子を広げて清々しく肯定する。それに対し日向は、目を薄くしてそんな浦原を見ていた。恩返しの意味で茜雫は浦原商店の店番などをしていたが、愛想の良い雰囲気の評判となり、浦原商店の収入が地味に上がっていたのが理由である。

「……………そういえば、最近黒崎サンのことをお見かけしていないんですが、日向サンはご存じで？」

「そりや、まあ」

「浄天眼ツスか？」

「いえ……………まあ、それもありますけど、俺の霊圧は仮面の軍勢側に近いんで、使わなくてもなんとなく感じることは出来るんです」

藍染の鏡花水月によつて覚醒し始めた『浄天眼』であるが、日向はことある度にそれを行使していた。その理由としては、次に藍染と相対した際に完全に使いこなすためである。

そして日向は行使する内に解つたことが幾つかあった。

一つは、行使の際に霊圧を消費すること。これは見える範囲を広げると、それに比例して消費量も増える。だが、それらはそこまで気にするほどの消費量ではない。

そしてもう一つあり、それは屋内では使えないということである。あくまで浄天眼は、多角的に、広範囲に視渡す能力であるため、もし補足対象が屋内にいたり、障害物の影に隠れたりすると、詳しい所までは視ることが出来なくなる。だがそれはあくまで『視えない』というだけで、霊圧を感じ取ることが出来れば、屋内に居てもかなりの高精度で補足することが出来る。

「そうツスか……………すると、霊圧知覚も錯覚させる藍染とは、どう戦うつもりツスか？」

「一つは、目だけで藍染の動きを見極めるようにすることですね。んでもって、それを出来るだけの基本スペックを身に付けます」

「成程。確かにそれは日向サンにしか出来ないツスね」

「……………俺の出来ることはたかが知れてます」

「ですが、日向サンに出来ることが他人に出来るとは限らないんすよ。

もつと、自信もっていきましよう。アタシも、出来ることはお手伝いしますから」

時は少し後になる。

「はあく……マジ怠いんですけど」

「我慢しろ。直々に呼ばれているんだ」

「ですよ〜……」

虚夜宮でこんな気の抜けたやり取りをしているのは、帝守護刃のレイチエルと、その従属官の一人であるアニーシャであった。心底面倒くさいと感じているアニーシャの心持は、その猫背な前屈態度に如実に現れている。

「でもでもそれでも、アタシじゃなくてもよくない？」

「そろそろだ」

「無視ですか。そーですか、はい」

レイチエルの華麗なスルーに、アニーシャは頬を膨らませる。

そんなやり取りをしていると、すぐにレイチエルたちが招かれた場所へと到着した。そしてその場所へと入る為の巨大な扉の前に立つた。

エスクード
「帝守護刃、レイチエル・セレーナ」

「及びその従属官、アニーシャ・バレンタイン。入ります」

「……………来たね、レイチエル。アニーシャ」

二人の姿を確認し、部屋の中央の台座に身体を向けている藍染がそう言った。その奥や、扉のすぐ近くなどの様々の場所に、先客たちが佇んでいた。

プリメーラ・エスパルダ
第1十刃、コヨーテ・スターク

セクンダ・エスパルダ
第2十刃、バラガン・ルイゼンバーン

トレス・エスパルダ
第3十刃、ティア・ハリベル

クイント・エスパルダ
第5十刃、ノイトラ・ジルガ

セスタ・エスパーダ
第6十刃、ルピ・アンテノール

セブティマ・エスパーダ
第7十刃、ゾマリ・ルルー

オクターバ・エスパーダ
第8十刃、ザエルアポロ・グランツ

ヌベール・エスパーダ
第9十刃、アールロニール・アルルエリ

アルモニア
虚夜宮調和刃、クリステイナ・エルフリーデ

そして、グリムジョー・ジャガージャック。

「……………帰りたいよお」

「我慢しろ」

「アタシ場違いだよ、レイさん」

「我慢しろ」

「何で従属官アタシだけなの？」

「静かにしろ」

「は〜い」

そんな気の抜けるやり取りパート2を行った二人は、空いているスペースの所に歩く。その途中で、眼帯をしている長身長髪の男が、レイチエルの前に立ちふさがる。

「よお、レイチエル。遅れて従者と一緒に来て何だあ？仲良くやってたのか？」

そんなことを訊くのは、第5十刃であるノイトラであった。意地悪そうな顔で、二人に喰ってかかる。

「ノイトラ。場を弁えろ」

「そうだぞ。アタシが発情期じゃない限りそんなことは万が一にもない」

「御宅は何を喋ってんだよ……………」

レイチエルの注意の後に、アニーシャが冗談なのかそうではないのか分かり辛い爆弾発言をしたので、少し遠くに居た第1十刃であるコーテ・スタークはそう呟いた。

「だけど、発情期だとしてもレイチエルは鉄壁だからないんだよね〜。鉄壁だからねっ！」

「何ヲ強調シテイルンダカ……………」

「騒がしい餓鬼どもが……………」

アニーシヤの的外れな発言に、第9十刃であるアーロニーロが呆れたように眩き、第2十刃であるバラガンは苛立たしそうに眩く。

アニーシヤの発言を聞いていたレイチエルは流石に、これ以上部下が変な発言をしないように一瞬霊圧を上げて脅してみる。その瞬間、アニーシヤの身体がビクツと動き、すぐにレイチエルの隣で直立不動になる。

「ははっ。愉快だな」

「藍染様の前で、粗相をするなど……」

その光景を見て第6十刃であるルピが笑い、第7十刃であるゾマリが怒りをあらわにする。

「……ウルキオラ、入ります」

そんな中、扉の方から二つの人影が現れる。

「…来たね、ウルキオラ。ヤミー。今、終わるところだ」

『アア？何、アンタ？』

気に入らねえ。

『アタシに関わらないでよね。No12のくせに』
気に入らねえ。

『アンタ、誰のお蔭で生きてると思ってるの？』
気に入らねえ。

『アンタは……何のために戦ってるのよ……！』
その目が、気に入らなかったんだよ。

「……………ジョー。グリムジョー!!」
「……………何だよ」

黒腔の中を歩くグリムジョーは、自分が呼ばれていることにやっと気づいた。この場に居るのはグリムジョーの他に、アニーシヤ、ルピ、

ヤミー、ワンダーワイスの五人であった。

「何だよって何よ。そろそろ着くから準備しろってのに、アンタがいくら呼んでも反応しなかったんじゃない」

「……………そうかよ」

「大体何でアタシが引率を……………」

アニーシヤはそう言つて、自分が破面たちの引率を任されたことに
対し愚痴をブツブツと呟く。

そんなアニーシヤの袴の隙間から、太腿が垣間見える。

————『106』

「……………ちっ」

「ん？何よ？……………はっ！まさかアンタ、アタシのパンチヲを!？」

「めんどくせえ勘違いしてんじゃねえよ」

「ふっ……………そんなグリムジョーに悲報よ。残念だったわね、ノーパン
よ」

「今すぐ帰りやがれ」

いきなりの爆弾発言に動揺しつつも、グリムジョーは的確なツッコ
ミをする。

「冗談よ。ちゃんとTバック穿いてるもん」

「何で数ある物の中でそれをセレクトしやがった」

アニーシヤの言動にいちいちイラつきながら、グリムジョーは対応
する。

何故、こんな奴と腐れ縁になってしまったのか。過去に、アニー
シヤと関わりを持つてしまった自分を、グリムジョーは恨んだ。

「ねえ、引率さくん。さつきと行こうよ。6番さんなんか構わな
いでさあ。ア、ごめん。元6番さんだっけ？」

「ほら、さつきと行きんしゃい。アタシ見てるから。しっし」

「何か雑!？」

挑発的な言動をとるルピに、アニーシヤは先に行かせるように催促
する。その余りの雑さに、ルピも驚いた顔を見せる。その横でヤミー
は『くだらねえ』と呟き、ワンダーワイスは元よりそのやり取りを見
ていなかった。

一通りやり取りが終わると同時に、黒腔の裂け目が出現する。

「ほくら。遊び相手があんなに居るんだしね」

逆襲

純粹なものほど

恐ろしいものはない

想像してみなよ

笑いながら

虫けらを踏みにじる子供の姿を

「破面……!? そんな……早過ぎないか、いくら何でも……!?」

先程まで刃禪を組んでいた弓親は、突如として現世にやって来た破面達に驚きを隠せなかった。

「確かに早過ぎるが……理由を考えてるヒマはなさそうだぜ……」

冬獅郎は、動揺する弓親を諫めるように言った。

すぐさまこの場に居た冬獅郎、乱菊、一角、弓親は義魂丸を飲み込んで死神化する。すると、五体いる破面の中の一人が突然去って行った。

（一体戦列から離れたか……これで数は同じだが、奴等の強さは……）

冬獅郎はすぐさま思考を切り替える。数が同じだとしても、以前の破面とは違うレベルの者達であつたら、数が同じでも苦戦を強いられる。

そしてすぐに、氷輪丸を鞘から抜き、破面達の中で最も体格の良い者に斬りかかる。それをその破面は、腰に差していた斬魄刀を抜き防ぐ。

「十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ!」

「奇遇じゃねえか、俺も10だぜ。破面No. 10、ヤミーだ!」

「No. 10……『十刃』ってやつか!」

「よく知ってるじゃねえか。随分と口の軽いヤローと戦ったらしいな」

それを聞き、冬獅郎は氷輪丸を解放する。以前、冬獅郎と対したシャウロンという破面の言うことが本当であれば、このヤミーという破面は別格の強さである。そんな相手に解放なしで戦うのは愚策であろう。

「ほくれ、ワンダーワイス。こつちおいで〜」

「ウ〜……………」

そんなヤミー達とは裏腹に、後ろではアニーシャがワンダーワイス相手にスキップを凶っている。アニーシャがワンダーワイスの名前を呼ぶと、ワンダーワイスは覚束ない足取りでアニーシャの元へ歩いていく。

そんな光景を、乱菊はどうしたらいいのか解らない表情で眺めていた。

「……………アンタは十刃つてやつなのかしら?」

「残念。アタシは十刃じゃありません〜」

相手を煽る様な喋り方をするアニーシャに、乱菊は一瞬額に青筋を立てるが、すぐさま気を取り直す。

そんな乱菊に対し、アニーシャは意地悪そうな笑みを浮かべながら斬魄刀を抜く。

「アンタの名前は?あたしは十番隊副隊長・松本乱菊よ」

「アニーシャ・バレンタイン。番号は106よ」

「106……………?」

以前戦った破面の番号は二ケタであった。その上に君臨する者達として1から10まであるとは知っていたが、三ケタの番号を持つ破面が来るとは考えてはいなかった。単純に考えると、破面が100体ほど居る事になるが、そんなことは洒落にならない。

「そう。106。質問は以上?」

「……………アンタは、破面の中だどのくらいの強さなの?」

せめて、と思い乱菊は相手の強さの度合いを尋ねる。

「そうねえ……………上の下ってどこ?」

「……………成程ね」

アニーシャの言葉から察するに、相手は破面の中でも上位に位置す

る者。十刃ではないが、それなりの実力者ということになる。

それを知り、乱菊の顔は険しいモノになる。

「なら、手加減はいらないわね……………」

「いい心がけ。でも、本気じゃなきや……………」

途端に、アニーシヤの姿が乱菊の視界から消える。それに驚きつつも、すぐさま辺りを見渡そうとする。その瞬間に乱菊は、自分に影が掛かっていることを認識した。

「……………すぐ死んじゃうよ?」

「っ!?!」

「だア——めだっつってんだろ!!」

浦原商店の地下特訓場で、恋次は怪我を負っている茶渡の身体を押えていた。だが茶渡は、血が流れている疲弊した身体を無理やりにも動かそうとしている。

「テメーは力を使いすぎてんだよ!!俺が行くからテメーはここで休んでろ!!」

「し……………しかし……………」

「そツスね……………阿散井サンの言う通りッス」

そんな二人の前に、浦原が現れる。その右手には、普段杖の中に隠している刃をむき出しにしている紅姫が握られていた。

「だけど阿散井サンも消耗していることは同じこと……………お二人とも、ここで休んでください。代わりに……………アタシ達が出ます」

そう言う浦原の後ろには、二人の人物が居た。

日向と茜雫。

破面が来たのが幸いにも午前であったため、特訓内容的に日向は消耗が零であり、茜雫も体力的には充分だと言える状態であった。

「そうだぜ恋次。今回は俺達に譲れ」

「……………ちっ!分かったよ!その代わり、絶対に奴らに吠え面かせ

「てやれ!!」

「たりめーだ」

「じゃ、話が纏まった所で早速先遣隊の皆サンの所に向かいましょうかね」

日向と恋次の会話を聞き終えた浦原は、パンパンと手を鳴らして先遣隊の所に向かおうとする。

それに対し二人は、無言で首を縦に振る。それを確認した浦原は、瞬歩で地下特訓場から出ていく。それを追うように、二人も瞬歩で出ていく。

「ムッ………天宮城はともかく、あの子は大丈夫なのか………?」

茶渡の言う『あの子』とは、十中八九茜雫のことであろう。面識はほとんどないが、一護が助けた人物としては記憶されている。

その茶渡の問いに、恋次は少し唸る。

「……俺は他人がどんくらい強エかとかは、実際にやり合わなきゃ解らねえ。だが、日向が直々に面倒見てたんだ。そこらの雑魚よりはよっぽど出来るだろうな」

「………信頼してるんだな」

「テメーと同じだ」

「………そうか」

恋次の言うことをすぐさま茶渡は理解する。茶渡の信頼する相手は他でもない、一護である。その一護と、再び背中を合わせて戦えるように、茶渡は死にかけても特訓を続けていたのである。さらに言えば、一護は破面達と戦う為に特訓していると考えているため、自分と一護の特訓の量が同じでは意味がないのだ。

一護よりも努力しなければ、一護の背中を護ることは出来ない。だからこそ、死にもの狂いで――。

――『旋腕陣』^{ラフ・ヘリ}。『葦嬢』^{トレンブドーラ}を解放したルピが、八本の触手を回転さ

せ、周りに居る一角と弓親をその技で吹き飛ばした。すでに始解もし

ている二人であるが、十刃であるルピの帰刃には手も足も出なかった。一角には卍解があり、弓親には藤孔雀の本当の姿『瑠璃色孔雀』があるが、乱菊や冬獅郎の居る場所ではそれを使う気にはなれなかった。

「ぐうっ!!」

そんな二人の下に、血まみれになっている乱菊が吹き飛ばされてきた。乱菊が吹き飛んできた方向を見ると、赤い髪の女破面がつまらなそうにして宙に立っていた。

そんな死神達の姿を見て、ルピは長い触手を手持無沙汰であるかのようにブンブンと振り回す。

「何だ、話しにならないね。キミたちホントに護廷十三隊の席官？つまーん、ないっ」

そう言うと、ルピは八本の触手を三人に向けて振るう。それらを三人は何とか躲すが、次々と振るわれる太い触手に、三人の動きもだんだん衰えていく。そしてついに、触手の二本が弓親と乱菊を捕えた。その光景に一瞬動きを止めた一角も、すぐに触手に捕らわれる。

「おねーさんさア、やーらしい体してるよねえ。いーなあ、セクシいだなあ………穴だらけにしちやおつかなくく」

「っ!!」

『鉄の処女』。乱菊のすぐ前で、触手から無数の棘が生える。乱菊の身体は現在、ルピの触手によって捕えられており、身動き一つとることも叶わない。

そして次の瞬間、棘の生えた触手が乱菊へ向かって振るわれた。迫りくる触手に対し乱菊は、恐怖で目を閉じることはなく、ただ目の前に迫る触手に向かって睨みを利かせていた。

「啼け——『紅姫』」

「っ!!」

だが、触手は突如下から飛んできた紅い斬撃によって、棘のある部分を丸々切断された。触手にも血が通っているのか、切断面からはいくらか鮮血が舞う。

「いやア~~~~間にあつた間に合つた。危なかつたツスねえく」

」

「…………誰だよ、キミ」

突如現れた下駄の男に、ルピはあからさまに嫌そうな顔をする。それもそうである。今から自分が、最高に楽しいことをしようとしたのに、それを邪魔されたのである。

「あ、こりやどーも。ご挨拶が遅れちゃいました。浦原喜助。浦原商店でしかない駄菓子屋の店主やっています。よろしければ以後、お見知りおきを——」

「店長！」

少し遅れてやって来た茜雫の声に、浦原は自分に接近する霊圧に気づき、すぐさま紅姫を振るう。それに、浦原に襲いかかったワンダーワイスは吹き飛ばされる。だが見る限り怪我を負っていないため、ギリギリの所で回避したのだろう。

「アハ！」

「…………へえ。随分変わったヒトが居るじゃないっすか……」

「浦原さん。その破面は浦原さんに任せていいですか？」

茜雫と同じく、浦原よりも少し後に到着した日向は、ワンダーワイスを見ながら話した。

「解りました。では日向サンは…………あの破面で」

そう言う浦原の視線の先には、帰刃を発動しているルピの姿があった。それに対し、日向は無言で頷く。

「じゃあ私はリベンジで」

そう言つて茜雫は、特訓で習得した瞬歩でヤミーの目の前まで移動する。

「夕闇に誘え——『弥勒丸』」

みろくまる

そしてすぐさま解放し、斬魄刀を構える。ヤミーはその姿に、悪そうな笑みを浮かべる。

「はっ！この前の雑魚の女じゃねえか!!何しにきやがった!」

「アンタに答える義務ないでしょ」

「っ!?!」

その瞬間、茜雫の姿はヤミーの後ろにあった。そして次に、旋風の

ようなものがヤミーの身体を覆い、ヤミーの皮膚からは血が少し出る。

それにヤミーは目を見開く。前回の時は、自分はいくらこの女の竜巻を喰らっても傷一つ負うことがなかった。なのにも拘わらず、今の一瞬で十刃の中で二番目に鋼皮が硬いと言われる自分の鋼皮が斬り裂かれたのだ。

「この……………蠅があ!!」

「ふん！私は茜雫！浦原商店の従業員兼、死神よ!!」

茜雫とヤミーが交戦を開始した辺りから、日向はルピの目の前に居た。

「十三番隊第三席、天宮城日向だ」

「あつそ。ご丁寧にどうも。ボクは第6十刃、ルピだよ」

「第6？グリムジョーってやつじゃなかったのか？」

第6十刃と名乗るルピに対し、日向は怪訝な表情を表す。前回、日向は第6十刃と名乗るグリムジョーと相對した。もし、この目の前の破面の言うことが本当であったら、グリムジョーという破面は十刃じゃなくなったということになる。

だが、日向はすぐに思考を切り替え、目の前の破面を倒すことに集中する。

「アイツなら十刃じゃなくなったよ。だから、今はボクが第6十刃だよ」

「成程な……………お前が第6十刃じゃ、それより上もたかが知れてるな」
「ああ？」

日向の挑発に、ルピは顔の影を濃くする。それもそうである。その発言は、明らかにルピが日向よりも弱いということを示していたからである。

そして苛立ったルピは、眉間に皺を寄せたまま口角を吊り上げる。
「解んないの？さつきボクは十番隊の隊長さんって人を倒したんだよ？三席のキミが……………」
ボクに勝てるわけねえだろ!!」

そう咆哮するルピは、弓親を離し八本の触手で檻のように日向を囲う。八方向から同時に迫りくる触手に、日向はルピの居る方に向かっ

て移動する。

「卍解……………『虚哭隸王』！」

その途中で卍解を発動し、日向は白い死覇装を身に纏う。その光景にルピは一瞬目を見開くが、すぐさま我に返る。

「はっ！わざわざ触手の内側を通って来るなんて！押し潰してくれって言ってるモンじゃないか！」

そう言いつつ、ルピは自分に迫りくる日向の周りに伸ばしてある触手を、すぐさま日向を中心に引き寄せてその身体を押しつぶそうとする。

——その白い服を真っ赤に染めてやるよ！

自分を侮辱した相手への憎悪を、心の中で呟く。

「破道の七十八・『斬華輪』」

「えっ……………？」

だが日向は迫りくる触手に対し、自分を中心に鬼道の刃を円型に放ち、全ての触手を斬りおとした。あまりの出来事に、ルピは一瞬放心状態に陥った。

その一瞬のうちに、日向は背中から赤い霊圧を翼のように放出し、一気にルピに詰め寄る。これはアルトウロの使用していた霊圧を背中から放出することで、空中での戦闘能力や直線での加速する能力である。そのまま日向は左手をルピに翳す。

「破道の七十二・『双蓮蒼火墜』」

「……………がつ……………」

双蓮蒼火墜をゼロ距離で放たれたルピは、爆発の勢いのままに吹き飛ばされる。

それを見ていたアニーシャは、舌打ちをして日向に肉迫しようとする。

「『群鳥氷柱』！」

「っ！?!ちい……………！」

しかし、突如したから襲いかかる無数の氷柱に行く手を阻まれる。次々と飛来する氷柱に業を煮やしたアニーシャは、虚閃で氷柱を破壊しながら、技を放つ相手を補足する。

「アンタ生きてたの!? 流石、隊長つてところね!」

「氷輪丸は冰雪系最強。砕かれても水があれば何度でも蘇る」

そこに居たのは、先程ルピの触手によって森林に落ちていった冬獅郎であった。両者は互いに肉迫し、空中で剣戟を交える。そして何度か交えた後、距離をとる。

「……………本当は、あの饒舌野郎にぶつけるつもりだったんだがな」

「はっ……………? 何を……………!?!」

冬獅郎の言葉に疑問を覚えたアニーシャは、辺りの気温が急激に下がった感覚に陥った。すぐさま辺りを見渡すと、アニーシャの周りには無数の巨大な氷柱があった。それらはアニーシャを取り囲むように配置されている。

「お前らは俺に時間を与え過ぎた。これを喰らいな—————」

『千年氷牢』

冬獅郎が手首を九十度回すと、それと同時にすべての氷柱がアニーシャに迫りよる。それらを虚閃で撃ち落とすようにするが、表面を削る程度で撃ち落とすには至らない。

その現状を見て、アニーシャの顔にはどんどん焦燥が浮かんでくる。

「くっ……………そ……………!!」

そして、牢が閉じられた。

仲間

欠けた月を

埋めることが出来るのは

紛れもない

太陽の光だけだ

「く……そ……!?!」

迫りくる氷の柱を前にして、アニーシャは焦燥を隠せないでいる。

だが――。

「な――んちゃって♪」

「っ……!?!」

突如、アニーシャが冬獅郎に向かって舌を出し挑発するような態度をとる。だが、既に氷の柱は避け切ることが出来ない程まで迫ってきている。

なのにも拘わらず、ここまで余裕を見せるには何かしらの理由がある。

それこそ、先程のルピヤ以前相對したシャウロンなどに共通するもの。

例えば、『刀劍開放』など――。

「火種を煽れ―― 『焰狩獵豹』オ!!」

千年氷牢に完全に閉じ込められる寸前に、アニーシャは斬魄刀の解号を叫んだ。それと同時に斬魄刀から炎が溢れだし、それらはアニーシャを包み込んでいく。その炎の温度と勢いによって、巨大な氷柱たちは瞬く間に融け、そして碎ける。その光景に、千年氷牢を繰り出した冬獅郎は驚愕の色を隠せない。

氷が炎に融かされたため、辺りには水蒸気が立ち込める。

「ふしゅうううう……!?!」

そしてその中から、姿が変貌したアニーシャが現れた。

噛み締める歯は、肉食獣のように鋭い犬歯に変わっており、死覇装は袖なしのライダースーツのような物に変貌していた。そして何かの動物の毛皮のようなものを腰巻にしている。さらに尾てい骨の辺りからは炎で出来ている長い尾がぶら下がっていた。

「……………成程な」

冬獅郎はその姿を見て、頬に汗を一筋流した。先程のルピの帰刃以上に、アニーシャの帰刃は威圧感のあるものだった。それはアニーシャの放つ熱により、陽炎のようにアニーシャの姿が揺れているのも理由の一つだろう。だがそれ以上に、アニーシャの放つ霊圧の荒々しさが、冬獅郎に焦燥を与えていた。

「があっ!!」

（っ！速え!?!）

アニーシャは咆哮すると同時に、冬獅郎に向かって響転で肉迫する。だがその余りの速さに冬獅郎は『回避』という行動をとることが出来ず、背中の氷の翼で自らを覆うように防御した。

だが、アニーシャの手から炎の爪のようなものが伸び、その氷の翼をドンドン融かしていく。

「ちっ……………『氷竜旋尾』!!」

このまま防御し続けるのは悪手だと考え、冬獅郎はその場でバク転することにより、氷の尾をアニーシャに叩き付ける。だがアニーシャはそれを、先程よりも勢いを強くした炎の爪で叩き斬る。

「……………『焰ウーニャ・リアマ爪』。見ての通り、アタシが放出する炎で出来た爪よ。どう?アンタとは随分、相性がいいんじゃない?」

「……………そうだな」

氷と炎。客観的に見れば、炎の方に軍配が上がるだろう。どの程度の温度かにもよるが、今の攻防を見る限り、相手の炎の温度はかなり高い。それでは冬獅郎の放つ氷を蒸発させられてしまう。

形成逆転とはこのことを言うのであろう。

だが冬獅郎は負けるつもりはさらさらない。次の一手の為に、すぐさま思考を切り替える。

しかし、そのような冬獅郎の目の前に、アニーシャは響転で肉迫す

る。

(目で追えねえ……！)

肉迫したアニーシャが放った踵落としを受け止めながら、その響転の速さに舌を巻く。

「きやは！教えてあげる！アタシの響転は破面の中でも結構速いの……よおっ!!」

「くっ!!」

高速の一撃を、冬獅郎は辛うじて防御するが、そこから始まる連撃を刀身で何とか流していく。

拙い。相性が悪すぎる。氷輪丸は比較的オールラウンダーな斬魄刀であるが、最も力を発揮するのは中々遠距離である。ここまで接近されて距離をとる間もなく連撃を浴びせられるのは、冬獅郎にとつてかなり不味い状況であった。まして、相手の力が炎であるなら。

そんな中、一瞬二人を眩い光が包んだ。否、二人だけではなく浦原や茜雫、ヤミーやワンダーワイスでもある。

その光源である方向を見ると、刀を振った後の体勢をしている日向の姿があった。日向の真下の地面には、巨大な斬撃の後が存在しており、たつた今放ったであろう一撃——『天羽々斬』あまのはばきりの強大さを示していた。

「ちっ……ルピの野郎、やられやがったか……!!」

(さっすが……！)

それを見たヤミーは悪態をつき、逆に茜雫は心の中でガツポーズをした。これで数の上でかなり有利になった。逆に言えば、破面側にとつてはだんだん厳しい状況になってきたのである。

そして茜雫個人の戦闘についてであるが、茜雫はヤミーに比べかなり小柄な体形を活かし、相手を攪乱するように動き、攻撃をかわし、隙を突くように一撃を放ち、ヤミーの体力を地道に削っていた。その戦闘方法に、元々短気であったヤミーが苛立ちを隠せなくなるのは時間の問題であった。

「くそがあ!!」

「ふっ！そんな単調なの、喰らわないよ！」

ヤミーが苛立ちのままに放つ虚弾を、始めの動作でどこに来るか予測し、すぐさま回避行動に移る。そしてそのまま弥勒丸を振るい、竜巻でヤミーの鋼皮を薄くであるが斬り裂く。

「クソ!!ちよこまかと動きやがって!」

今の茜雫にとつてヤミーの動きはかなり緩慢なものに感じられた。この一か月で日向と特訓していた茜雫は、嫌と言う程『速すぎる』動きを見てきた。三週間を過ぎた辺りからやっと目が慣れてきたのはあるが、その速さに慣れた茜雫の目はヤミーの動きを見極めるには十分なほどになっていた。

そしてヤミーの隙をついた茜雫は、弥勒丸の刃をヤミーに突き刺そうとする。

「これで……………」

茜雫がヤミーに弥勒丸を突き刺そうとする光景を、ルピを倒した日向は見ていたが、突如空に裂け目が出来てきているのを見てハツとする。

「っ、離れろ!茜雫!!」

「えっ?きやあ!!」

日向の叫びによって、茜雫はヤミーに降り注ぐ反膜に気づきすぐさま離れる。と、言うより、日向が放った霊糸によって胴体を無理やり引っ張られて離された。

そしてその間に、アニーシャに反膜が降り注ぎ、それを確認して刀剣開放を解く。

「ふくん、終わったんだ」

「ちっ……………」

「アウウ……………」

反膜はヤミーだけでなく、冬獅郎と戦うアニーシャや、浦原と戦うワンダーワイスにも降り注いでいた。その瞬間、浦原が『しまった!』というような挙動をみせたが、その理由を日向は量りあぐねた。

そして反膜に包まれた破面達をどうこうする手もなく、この場に居る全員がただ見るだけしか出来なかった。

現世に、破面が来た日のその夜。それなりに遅い時刻であるため、町の中でも電気の点いている家屋は少ない。

静寂が町を支配している中、一人の少女はある場所へと向かっていた。

空を見上げていると、三日月が優しく暗い夜の町を照らしていた。

『これを身につけている間、お前の周囲には特殊な霊膜が張られ、お前の存在は我々破面にしか認識できなくなる。それと同時にお前は、物質を透過する能力を手に入れる。身につけて放すな』

少女が自分を連れて行こうとした破面に告げられたのは『12時間の猶予の内、一人にだけ別れを告げることを許可する』というもの。しかし、相手に気づかれたのならば駄目という、どこか矛盾しているようなものであった。

しかし少女は、たった一人の者に別れを告げるために、町を歩いていた。

そして漸く、目的地に着く。

「よう……しよ……と」

破面が言った通りに、少女は物質を透過する能力を得ていたため、建物の壁をすり抜けることに成功した。

そして、別れを告げる少年の前に立つ。だが、肝心の少年はベッドに横になっている。体中に包帯が巻かれており、多かれ少なかれ傷を負っているのは確かであった。

その少年を見ながら、少女は頭を搔く。

「え……えへへ……来ちゃった」

聞こえはしないが、少女は続ける。

「ほんとはね、たつきちゃんとか、茶渡くんとか、石田くんとか、朽木さんとか、お別れ言いたい人はいっぱいいたんだけど……」

そこから少し、言葉は途切れる。少女の瞳は、目の前で寝ている少年が映っている。

「うう……ん……」

突如聞こえる声に、少女は驚き肩をびくつと揺らす。そして身を乗り出して、ベッドの奥の方に目を向ける。

そこには少年の妹である二人の少女が、毛布に包まって眠っていた。彼女たちのそばには、食器が置かれていた。

「……そっか、遊子ちゃんと夏梨ちゃん……今日はここでごはん食べたんだ……」

この少年は、破面との闘いのために一か月ほど家を離れていた。一か月も姿を見ることが叶わなかった兄が、傷だらけの状態で帰ってくれば誰でも心配するであろう。

「……そうだよ。ずっと黒崎くん居なくて淋しかったもんね……黒崎くんの部屋でごはん食べたいよね……黒崎くんの……」

そこで少女はあることに気づき、顔を赤らめる。

(そういえば……あたし黒崎くんの部屋に入るの初めてだ……黒崎くんの……においがする……)

初めて訪れた部屋を少女は見渡す。そして一通り見渡した後、少女は少年の右手に自分の右手を重ねる。

無骨な手には包帯が巻かれており、少女の柔らかな肌に複雑な感触を与える。

カーテンの隙間から漏れてくる月明りが、二人を照らし出す。

その月光下で、少女は自らの顔を少年の顔に近づける。

ゆっくりと。

ゆっくりと

だが、少女は唇が重なる一歩手前でそれを取りやめた。

「……ダメだ……やっぱりできないや……」

少女はそう言っただけで着ているセーターの袖で、涙を拭う。そしてそのまま、カーテンのある方の壁にもたれかかる。

「……えへ……ダメだね、あたし……最後なのにこんなことして……」

そしてそのまま眠っている少年に語り始める。

「……黒崎くん、あたしね……したいこといっぱいあったんだあ……学校の先生になりたいし……宇宙飛行士にもなりたいし……ケーキ屋さんにもなりたいし……ミスドに行っただけで『ぜんぶください！』って言いたいの……サーティワンにも行って『ぜんぶください！』って言いたかったし……あ……あ！人生が五回ぐらいあったらなあ！」

少女の目から、涙はなくなっていた。

「そしたらあたし、五回とも違う町に生まれて、五回とも違うものおなかいっぱい食べて、五回とも違う仕事して……それで五回とも……」

——同じ人を好きになる。

「…ありがとう、黒崎君………さよなら」

とある部屋の一室で、一人の少女が、別れを告げた。

次の日であった。

とあるアパートの一室。その部屋の住人は、現在いない。

「霊波障害除去は？」

「完了した様です」

日番谷は、松本に尸魂界との連絡を取るための機器の状況を尋ねていた。そして松本は、前日通信不良に陥っていた機器の回復を告げた。

この場に居るのは日番谷先遣隊全員と、たった今来た一護である。「繋いでくれ」

ノイズのかかった画面がだんだんと鮮明になっていき、そして画面にはある人物の姿が映った。

画面に映ったのは、神妙な表情の浮竹であった。

「!?浮竹……?総隊長じゃねえのか……?」

『代わって頂いた』

「理由は?」

前回、この機器での通信を行った際には総隊長である山本元柳斎重國が赴いた。だが今回わざわざ浮竹が代わってもらったというならば、それなりの理由があるはずである。

『井上織姫が現世に向かう穿界門に入る時、最後に見届けたのが俺だからだ』

「!!!」

浮竹の言葉に、この場に居る全員が驚く。その中でも特に、一護とルキアの反応は他よりも大きいものであった。

その各々の反応を見て、浮竹は察した。

『……その反応を見ると、やはり彼女はそちらには到着していないようだな……』

「……どういうことだよ、浮竹さん……井上は……どこに消えたんだ……尸魂界で何か解ってんじやねえのか……!?」

『……こちらの見解を言おう。穿界門通過の際に彼女につけた護衛の二人が生存して戻った。彼ら二人の話によれば——』

——井上織姫は破面側に拉致、若しくは既に殺害されたものと思われる。

「……殺……っ」

「浮竹隊長!!」

浮竹の言葉に一護は絶句し、ルキアは声を荒げる。

そして一護が叫ぶ。自分の傷が治っていたこと。そしてその傷のあった場所から、井上の霊圧を感じたことを。

『それは残念じゃ』

しかし一護が叫んでいる途中で、浮竹の後ろからある人物が画面に歩み寄ってきた。

山本元柳斎重國。護廷十三隊一番隊隊長。死神の長。

その姿を見た全員が、息を飲む。

「…残念……？…？…？…？…？…？…？」

元柳斎の言う『残念』という言葉の意味を理解出来ず、一護は訊き返す。

『確かにお主の話通りなら井上織姫は生きておることになる。しかしそれは同時に、一つの裏切りをも意味しておる。もし拉致されたなら、去り際にお主に会う余裕などあるまい。即ち、お主の傷を癒して消えたということは、井上織姫は自らの足で破面の許へと向かったという事じゃ』

「ぼっ……！」

「止せ。これ以上喋っても立場を悪くするだけだ」

『馬鹿なことを言うんじゃないやねえ!!』と叫ぼうとした一護の肩を、後ろにいた恋次が肩を抑えて諫める。それに対し、一護は頭が冷えたのか口を閉ざした。

それを見て恋次は、一步前に入る。

「……お話はわかりました、山本総隊長。それではこれより、日番谷先遣隊が一、六番隊副隊長阿散井恋次。反逆の徒、井上織姫の目を覚まさせる為、虚園へ向かいます！」

「恋次……！」

驚いた一護を横目で見ながら、恋次はニヤツとする。

『ならぬ』

「!!」

だが返された答えは、『否』。

『破面側の戦闘準備が整っておると判明した以上、日番谷先遣隊は全名、即時帰還し尸魂界の守護についてもらう』

「それは井上を……見捨てろということですか……！」

元柳斎の言葉に、ルキアが口を開く。

『如何にも。一人の命と世界の全て。秤に掛ける迄も無い』

元柳斎の言う事は最もであろう。下手に戦力を分散し、それがやられてしまえば尸魂界の戦力が下がる。それはつまり、決戦における戦力が減ることを意味する。その戦力差でやられたとするならば、その『井上を助けに行く』という判断が間違っていたものと判断される。さらに行ってしまうえば、それは敵の本拠地に攻め込むことと同意であるため、助けに行く者が返り討ちにされる可能性がかなり高いのである。

「……恐れながら総隊長殿……その判断には……」

「ルキア！」

『その判断には従いかねる』。そう言おうとしたルキアを、日向が遮る。それに対しルキアは日向に悲痛な視線を向けるが、日向が無言で首を横に振ったため、悔しそうに床を見つめた。

『……既におぬしたちの許には迎えを遣わせておる』

元柳斎がそう言うと、画面とは逆方向に位置する壁に穿界門が開き、そこから二人の人物が現れた。

六番隊隊長・朽木白哉。

十一番隊隊長・更木剣八。

「そういう訳だ。戻るぞ、お前ら」

「手向かうな。力尽くでも連れ戻せと、命を受けている」

その二人の姿を見て、この場に居る者達は再び息を飲んだ。

しかし、そんな中でも一護は口を開いた。

「……わかった。尸魂界に力を貸してくれとは言わねえ。……せめて虚園への入り方を教えてくれ。井上は俺達の仲間だ。俺が一人で助けに行く」

あくまで、自分は井上を助けに行く。それが一護の主張だ。

『……ならぬ』

「何……だと……?」

『おぬしの力はこの戦いに必要じゃ。勝手な行動も、犬死も許さぬ。命あるまで待機せよ——……以上じゃ』

元柳斎の言葉に茫然として立ち尽くす一護を背に、先遣隊のメンバー達は次々と穿界門の中に入っていつていた。その中で、只一人ルキアだけが入ることを躊躇っていた。

そんなルキアの肩を、日向がそつと掴みながらゆっくりと連れて行くこうとする。

「……一護………済まぬ………」

申し訳なさそうな謝罪の言葉が、主を失った部屋に、嫌に透き通つて響いた。

静かな夜の街の一角。既にシャツターが閉まった店の前で、下駄の男がキセルで煙を吹かしていた。

そんな男の元へ、死覇装を身に纏う少年が歩み寄る。

「——いらつしやい。来る頃だと思つてましたよ、黒崎サン」

「……どうして、そう思つた？」

一護は、何故自分が浦原の元を訪れると思つたのか尋ねた。だが、それは一護自身も浦原にすでに理解されていると思つていた。

「アタシなら知っているかもしれない、と思つたんでしょ。『虚園に行く方法』。ご名答ツス……用意、出来てますよ」

そこから一護は、浦原が井上を戦線から外そうとした理由と、自分が犯してしまったミスについて話した。その上で、自分に協力できることはする。それが、浦原の話であつた。

「いいのか？尸魂界の判断には背くことになるんだぜ？」

「……元々あれこれ、背いて現世に居るもんで」

あくまで自分は一護の協力者。それが浦原の言い分だ。

「随分と辛気臭い顔をしてるな、黒崎！」

「！石田……！お前……何でここに………」

地下特訓場の崖の上に腰掛けていたのは、滅却師の正装を身に纏う石田の姿であった。その姿から察するに、石田は滅却師の力を取り戻したのだろうか。

「…決まっている。虚園に行くためだ、一護」

「チャド……！」

そして次に現れたのは、茶渡であった。

「店長から話聞いたよ。織姫が連れてかれちゃったんでしょ？私も手伝うよ」

「茜雫……！」

最後に現れたのは茜雫。死覇装を纏っているため、すでに死神化しているであろう。

単純に考えれば、戦力がいきなり三人増えたことになるが、一護は素直に喜ぶことが出来なかった。

「……ダメだ。気持ちはありがてえけど、チャド。石田。茜雫。オマエらの力じゃ……」

「一護」

次の瞬間、地下特訓場に爆風が起こった。

それは右腕を変質させた茶渡が、一護に向かって一撃を加えたからである。一護はそれを斬月で受け止めたが、その余りある余波から、茶渡の実力が一か月前とは比べ物にならないことを暗に示していた。

「チャド……」

「……俺達を信じろ。一人で背負うな。そのための……仲間だ……！」

その言葉に、一護は目を見開く。

「はいはい——い。準備はいいツスカ——？」

そのやり取りを見ていた浦原は、両手を鳴らして準備が終わったか尋ねる。それに対し、四人はそれぞれの挙動をしながら、浦原を一点に見つめた。

「……漸く出来たみたいツスね——……準備」

第八章 I t I n c r e a s e s S i g n a l

F i r e

初戦

花見酒

花の薫りに

酔い痴れよ

「我が右手に界堺を繋ぐ石。我が左手に実存を縛る刃。黒髪の羊飼
い。縛り首の椅子。叢雲来たりて我、鵠を打つ」

浦原が詠唱を唱えると、崖から飛び出している二本の棒の間に霊子
のようなものがあ繋がり、次の瞬間にはそこに裂け目が現れる。

その裂け目が開いた瞬間から、辺りには激しい風が吹き荒れる。
元々地下に在るこの修行場で風は吹くはずなど無く、その風が裂け目
から吹いている物だとこの場に居る者達は瞬時に理解した。

中は暗く、『一寸先は闇』という言葉がよく似合いそうな場所であつ
た。

「破面達が行き来するこの穴は、名を『黒腔』と言います。中に道は無
く、霊子の乱気流が渦巻いています。霊子で足場を作つて進んでくだ
さい。暗がりに向かって進めば虚園に着く筈です」

「——わかった……浦原さん。ウチの連中のこと頼んでいいか。
俺のこと心配しないように上手いこと言つてやつて欲しいんだ」

一護は、家に居る遊子や夏梨のことを思いながら、黒崎家の者達の
ことを浦原に任せる。只でさえ、一護は一か月家を留守にし散々心配
をかけたのである。これ以上妹達に心配をかけるのは、兄として失格
だと一護は考えたのである。

「……わかりました……お友達には？」

「……あいつらには……帰ってから謝る」

「……わかりました」

浦原の言葉に、四人は黒腔の中に入る準備が出来る。そして、一護が黒腔の中に視線を移した。

「行くぜ」

その瞬間に、四人は同時に黒腔の中に入っていく。そして四人が入った後に、黒腔の入り口は音を立てて塞がれた。

一護達が黒腔に入った頃、虚夜宮に於いて井上が藍染の前に連れてこられていた。この場には藍染と井上以外に、陽動の役割で現世で戦っていたアニーシャ、ヤミー、ワンダーワイズ、グリムジョー、そして井上を拉致する役割を有していたウルキオラが居た。

唯一、第6十刃であったルピは現世で打ち取られたため、この場に来る事は叶わなくなった。だが、誰もルピが死んだことに対し悲しんでいる様子は見られない。

そして藍染は文字通り、玉座から井上を見下ろす。

「ようこそ。我等の城、『虚夜宮』へ……『井上織姫』……と言ったね」

「……はい……」

「早速で悪いが織姫、君の能力を見せてくれるかい」

その瞬間、井上は体中の力が吸い出されるような感覚に陥る。現世でウルキオラや、ヤミーと相対した時とは違う感覚。

「………はい………」

辛うじて返答することが出来た井上に、藍染が言葉を続ける。

「どうやら君を連れてきたことに、納得していない者も居るようだか

らね……そうだね？アニーシャ」

「……………へっ？」

藍染の言葉に、アニーシャは目を見開いた。まるで、言いがかりと
いう様にあたふたしながら口を開く。

「そ、そんな納得するとかしないとかじゃなくて、引率だったのに仮に
もルピが殺られちゃったから、アタシどうなっちゃうんだろうなく？
……………って思いましたエ……………えへへ……………」

あからさまな作り笑いをしながら、アニーシャは取り繕う。

「そのことなら心配することはないよ。そのために、彼女に能力を見
せてもらうんだからね……………さて、織姫。グリムジョーの腕を治して
やってくれ」

藍染の頼みという名の命令に、グリムジョーだけでなくアニーシャ
も驚いたように目を見開く。グリムジョーの左腕は、以前の現世への
独断侵攻の罰として東仙によって斬り落とされ、挙句の果てには「廃
炎」で文字通り灰にされたのである。

腕が残っているのであれば話は別だが、再生させるにしても切断面
は完全に塞がれているので、普通に考えれば元通りにすることなど不
可能であるのだ。

二人が驚いている間にも、井上は静かにグリムジョーの下に歩み寄
る。

「……………双天帰盾。私は……………拒絶する」

誰もが、グリムジョーの左腕に視線を向ける。光に覆われたグリム
ジョーの左腕があつた場所に、徐々に肉や骨が生み出されていく。そ
れは超速再生などではない、もっと別の力。

「これは……………？」

「解らないかい。ウルキオラはこれを『時間回帰』若しくは『空間回帰』
と見た」

「はい」

驚くアニーシャに、藍染が説明する。そして最後に、この能力がど
ういったものであるか推測したウルキオラが口を開いた。

そしてアニーシャは、いつの間にもやら元通りになったグリムジョー

の腕をぺたぺたと触れる。

「……凄い能力……」

「ああ。だがこの能力は、その二つのどれでもない。これは『事象の拒絶』だよ。彼女の能力は対象に起こったあらゆる事象を限定し、拒絶し、否定する。何事も起こる前の状態に帰すことができる能力だ。それは『時間回帰』や『空間回帰』よりも更に上、神の定めた事象の地平を易々と踏み越える、神の領域を侵す能力だよ」

その説明に、アニーシャは感心したように井上を見つめる。

「……おい、女。もう一か所治せ」

アニーシャにジロジロ見られている井上に、グリムジョーが声を掛ける。そしてグリムジョーは、戻った左腕でもう一か所治す場所を指し示す。

そして井上は、言われるがままに双天帰盾でグリムジョーの背中中の傷を治す。すると、その場所に『6』という数字が浮かび上がってくる。

そしてそれを確認したグリムジョーは、笑い声を漏らす。

「……ク……はははははははははは!!戻った!!戻ったぜ力が!!俺がN
O. 6だ!!!第6十刃、グリムジョーだ!!!はははははははははは!!!」

狂気の笑い声を上げるグリムジョーに対し、井上はその光景をおびえた目で見ることしか出来なかった。

一方、黒腔の中を進む一護達は霊子で足場を作りながら前へ前へと進んでいた。一護が先陣を切って走るが、一護の形成する足場はかなりボロボロであり、今にも崩れそうである。

そんな傍から、茶渡の踏み込んだ足場が崩れ、体勢を崩す。

「大丈夫か！チャド!!」

「ム……問題ない……」

「一護く、交代」

そんな光景を後ろから見ている茜雫が、一護を前に過ぎ去っていく。その瞬間から、先程までのボロボロの足場が嘘のように綺麗なもへのへと変貌していく。

それを見て一護は茜雫に礼を言おうとしたが、茜雫が凄まじいドヤ顔で一護に視線を向けていたので、一護は素直にお礼を言えなくなつた。

そんな一護に対し、茜雫は口を押さえて笑いをこらえる。

「ぷぷつ………どんな気持ち？私より死神歴長いのに、私の方が足場作るの上手いの見て、今どんな気持ちイ？」

「ウルセえ!!」

「無様だな。君は足場くらいまともに作れないのかい」

煽る茜雫に声を荒げる一護を見て、石田が呆れた表情で一護の横を通り過ぎていく。石田だけは、一護達の作る足場ではなく、一人だけサーフボード状の霊子の足場でスーツと移動している。

「ウルセーな！俺アこういうの苦手なんだよ！っーか何だよ、オマエのソレ！一人だけズルいじゃねーか!!」

「飛廉脚の応用だよ。このくらい訳無い」

そう言つて石田は眼鏡をクイッと上げる。そんな石田に対し、茶渡がなにやら疑問ありげに声を漏らす。

「………そう言えば………石田。浦原さんから聞いたんだがお前………親父さんと契約していたそうだな………『修行をつけてもらう代わりに、

死神とその仲間に関わらない』——それなのに……どうしてここに居るんだ……?」

「何だそりゃ!?初耳だぞ石田!?そんなのかよ!?!」

茶渡の言葉に、一護が声を上げる。それに対し石田は静かに肯定する。

だが石田が言うには、尸魂界に見放された死神代行の一護と関わっても、契約に違反したことはないという言い分である。

「……屁理屈じゃねーか」

「契約の穴を突いたと言ってもらいたいね」

「だからそれを屁理屈って言うんだよ!だったら茜雫はどうなんだよ!?!」

「私は自称だから」

「うるさいな黒崎。君は一体どつちの味方だ?」

「オメーの敵だツ!!」

一護と石田のやり取りに、茶渡は後ろで静かに笑っていた。

——石田らしい、と。

それからしばらくした後、四人は黒腔を抜けることに成功した。黒腔から出て四人の目の前に広がっていたのは、建物の中のような壁であつた。

あちこちに通路が繋がっているように見え、明かりも点々と存在するが、窓は一切ない。

「……何だ?随分シツカリした建物の中に着いたな。なーんとなく、虚園っていうともつとグチョグチョしたところ想像してたんだけどなア……」

「トーンを落とせ、黒崎!今の侵入音で恐らく誰かが感じている筈

だ！」

一護が辺りを見回しながら呟くのに対し、石田が注意する。だがそれを聞かずに、一護はどんどん進んでいく。

「ここホントに虚園か？」

「聞いているのか黒崎?!一度どこかに身を隠して——」

石田がどこかに身を隠そうと言い切る前に、何やら鈍い音が通路に響き渡る。その音に、全員が発信源に振り向く。そこには、何やら巨大な長い手を天井につけながら、通路の角から四人の見る何者かの姿があつた。

「何んだ?オマエら?」

その巨大な影は、すぐさま四人を追うようにして通路を這つてくる。それを見た四人は、すぐさま逃げ出す。一護はその場で相對そうとしたが、石田が死覇装の襟を掴んで引つ張つていくことでそれは阻止された。

抗議する一護だが、窓がない事から石田が現在四人が居る場所が地下であることを推測し、尚且つそんな場所で戦ったら通路が崩れてしまうことを説明した。

「ムー抜けるぞ、石田!」

走っている四人の前に、開けた空間が姿を現す。そこに着いた瞬間に、一護は斬月を取り出す。だが石田は広間の先に在る階段に向かつて一直線に走っていく。

一護達は井上を助けに来ているのであり、破面達を殲滅しに来ている訳では無い。勿論、戦いはするが、体力を温存するために避けられる戦いは避けていくべきであろう。

そういつた考えで石田は階段に向かうが、あと少しの所で鳥のような仮面をした者が降り立つ。

「シヤツハア!!」

そして立ち止まる石田に対し、両腕が鋸のような形状になっている破面が斬りかかる。それを石田は紙一重の所で回避する。

「……どうやら……挟み撃ちにされたようだな」

「オメーが言うな、ボケ」

石田の言葉に、石田に無理やりここまで連れてこられた一護が青筋を立てながら応える。二人がそのようなやり取りをしている間にも、両手が鋸の破面が襲いかかる。だが一護が動くよりも早く、茜雫が斬魄刀を抜いて鋸を受け止める。

そして両者は鏝迫り合いに至る。

「シャハハ……女あ……名前なんつーんだ？」

「自己紹介は自分からが常識でしょ？」

「シャハ!!いいぜえ……気の強い女は嫌いじゃねえ……破面No. 1
9、ブラス・グリンガルだア!!」

ブラスと名乗った破面は、力のままに茜雫を弾き飛ばす。茜雫は弾き飛ばされるが、すぐに空中で体勢を整える。

その光景を見て、一護が加勢しようと斬月を構える。

「茜雫!今手伝——」

「心配ご無用!私に任せて!」

だが、加勢しようとした瞬間に茜雫に必要なと言われる。そしてその言葉に、石田と茶渡も反応する。

「そうだぞ黒崎、ここは……」

「俺達がやる」

その言葉と同時に、三人はそれぞれ戦闘を開始する。石田は巨体の破面と、茶渡は鳥のような仮面をしている破面と、茜雫はそのままブラスと剣戟を繰り広げる。

だが、両腕が鋸であるブラスと、斬魄刀一本で相対す茜雫では手数が変わり、茜雫は受け流してはいるものの徐々に後退し始める。

「シャハハ!!どうしたア!?この程度かア!」

「……………」

茜雫は、ブラスの連撃を静かに受け流していく。だが遂に、茜雫は壁際まで退かせられてしまう。

ブラスは口角を吊り上げながら、両腕の鎌を茜雫に振り下ろす。だが振り下ろされる直前に、茜雫は瞬歩でブラスの一撃を回避する。空振りになったブラスの両腕は、いとも容易く壁を斬り裂いた。

「シャハ……上手く避けたな……」

「……………夕闇に誘え——『みろくまる弥勒丸』」

茜雫は始解し、錫杖状の斬魄刀を手に取る。そしてその場で二度、弥勒丸を回す。その場で回しただけで、何もしてこない茜雫にブラスは首を傾げる。

「てめえ……………何した？」

「……………いや……………桜が舞う良い季節だねエ〜」

「はア?てめえ、何言って……………!?!」

次の瞬間、ブラスの目の前に在る筈のない桜の花びらが何枚か宙を舞っていた。その光景に、ブラスは信じられないというばかりに目を見開く。

——これは幻覚なのか?

これが幻覚なのかどうか解らないまま、この不可解な状況を消し飛ばそうと、ブラスは虚閃を茜雫に放とうとする。

だが、その前に茜雫は弥勒丸の先についている刃を地面に突きたてる。

「春先の雷にはご注意を、ってね」

「ツ!?!ぐあああ!?!」

突如、虚閃を放とうとしていたブラスに、一筋の落雷が直撃する。放とうとしていた虚閃はその場で暴発する。ここは地下である。落雷など発生するはずがない。

だが、事実落雷がブラスを襲い、そして身に纏う死覇装を焦がした。「く、そがあああああ!?!」

何が何だか解らないまま、ブラスは茜雫に肉迫する。

それに対し茜雫は、また弥勒丸を二度回す。すると今度は、茜雫の周りに紅葉が舞う。そして弥勒丸の先からは竜巻が巻き起こる。そのまま茜雫は、肉迫するブラスに対し瞬歩で肉迫していく。

そして刹那、交錯する。

——刈田かりた」

「……………何……………だと……………!?!」

交錯した二人の内、ブラスが胸から血を噴き出してその場に崩れ落ちる。それを見て茜雫は始解を解く。

「……何だ、ありゃあ……!?!」

茜雫の戦いを見ていた一護であったが、何が起きているのかは一護にも解らなかつた。一護が茫然としている間にも、他二名の戦いも終わっていた。

最初こそ、石田は大男を、茶渡は鳥仮面の破面と戦っていたが、相性を考え相手を交換し、そこから圧倒的な力で相手を打ち取った。

だが、相手を倒して安心するのもつかの間、広間が地響きのような音を立てて崩れ始めた。

「つ……とりあえず階段だ! 急ぐぞ!!」

石田の声に、他の三人含め全員が階段に向かって走っていく。

その後ろ姿を、鳥仮面——アイスリンガーは、じっと見つめていた。

「……恐れるべきは……か……大層な物言いだが……滅却師、貴様一つ思い違えている。藍染様はなにも怖れてなどいない」

——それ故我々は、あの方の下へと集うのだ。

——恐怖より生まれた我々に、恐怖を持たぬあの方の歩みは、月光のように眩いのだ。

——あの方は……。

侵入

先駆者無くして
道は出来ず

「ふう〜!!ええパイオツやあ〜!!」

「あの、ちよつと……………」

ある部屋の一室で、アニーシャは井上の胸を揉みながら興奮していた。それに対し井上は、どうしていいのか解らずにたどたどしている。

それを部屋の奥で、レイチエルと女性型の破面が各々の反応をしなから眺めていた。

そしてレイチエルの横に居る、ネコ科の耳のような仮面の名残を持つピンク色のセミロングの破面が口を開く。その服装はアニーシャと違い、出来るだけ露出が抑えられるような死覇装になっている。

「お、お姉ちゃん……………そこまでにしてあげて……………」

「嫌よ、サラ!アタシはここに極楽浄土を見つけたの!!」

そう言いながら、アニーシャはサラという破面の制止を聞かずに、井上の豊満な胸に顔を埋める。

「ひゃあ!」

その突拍子もない行動に、井上は顔を赤らめる。しかし、普段同じようなことを平然とやるクラスメートがいるため、そこまで嫌がる素振りもみせない。

「……………アニーシャ」

「ふえ?」

「崩^{プリンセツサ}姫が嫌がっている。今すぐやめるか、首から下が氷漬けになるか

「…………どつちが」

「ごめんちやい!!」

レイチエルが最後まで言い切る前に、アニーシャは顔面蒼白になり井上の谷間から顔を離れた。

それを見て、井上は苦笑いをする。

「え……と……ありがとうございます……?」

「あの……姉がすみません……」

「あ……いいえ……元気なお姉さんですね……」

丁寧に謝罪するサラに、井上は愛想良く笑いかける。

元々、こんな状況になったのには理由がある。まず、今回の現世襲撃は『崩姫』と名付けられている井上を拉致するための陽動であった。作戦は、ルピの死亡以外滞りなかった。そして井上は虚夜宮に連れてこられた後、その力を端的に示すために、グリムジョーの腕を双天帰盾で元通りにした。それを見ていたアニーシャが井上を気に入り、レイチエルを通して面倒を見させてもらうように藍染に進言したのである。

そしてそれが承諾されたため、レイチエルが虚夜宮に居る間は帝守護刃全員で面倒を見る事になったのである。

「じゃあ歓迎会ってことでお菓子持つてくるね……!!」

アニーシャは先程の顔面蒼白が嘘だったかのように、すぐさま明るい顔になりどこかに向かう。

「あの……お姉ちゃんって言ってましたけど、本当の姉妹なんですか?」

「え……?あ、人間の言う感じの姉妹ではないですけど、家族であることには間違いありません」

サラの顔は、少し複雑そうな顔だが、井上はそれを気にしないことにした。

「そうなんですか……仲良いんですか?」

「まあ……あんなハイテンションな姉ですけど、優しいので……」

「へえ……羨ましい……」

「崩姫には兄弟が居るんですか?」

「兄がいます……………でも……………」

「あ……………ごめんなさい……………」

井上の表情で察したサラが、申し訳なさそうに謝る。

そんなサラに、井上が慌てて手を振って『そんなことはない』という表現をする。

「いえ、そんなつもりじゃ……………！あたしもお兄ちゃんとは仲が良かったし……………お兄ちゃんはあたしの……………心の中にちゃんと居るから……………」

「……………そうなんですか」

「それと、破面の人たちってもっと怖いイメージだったんですけど、サラちゃんとか、アニーシャちゃんとかすっごい優しく……………あたし、正直戸惑ってるんです」

「それが普通だろうな」

井上の『戸惑っている』という言葉に反応したのは、レイチエルであつた。

「異種族には警戒心を持つ。それは人間も虚も同じだ。違う存在には警戒しか持てない。それは理性ではどうにもできない、動物としての本能だ」

「つ……………でも、あたしは朽木さんや乱菊さんと……………死神の皆と仲良くなれたし……………！」

「それは死神も本来人間の魂魄だからだ。存在として近ければ、警戒心を解くにはそう時間は掛からない」

「だったら、破面の人たちはどうなるんですか!？」

レイチエルの真つ当な答えに、思わず井上は声を荒げる。

「……………虚と人間の違いは、死神と人間の違いとは根本的に違う。『喰う』か『喰われる』かだ。食物連鎖の立ち位置の違いだ」

「レ……………レイチエル様……………」

レイチエルの次々と発せられる言葉に、井上はだんだんと顔の影を濃くしていく。それに対しサラは、レイチエルにこれ以上井上を追い詰めないように諫言をしようとする。だがそれを察したレイチエルは、一回ため息を吐いて『最後に』と言い出した。

「…………余り甘い考えは持たないことだ。それが、今囚われているお前に出来るアドバイスだ」

その言葉に、残念そうに顔を俯かせる井上だったが、次の瞬間その顔はバツと上げられた。

その理由は、突如地震のように部屋が揺れたからである。それに対し井上だけでなく、他の三人も各々の反応を見せる。

「レイチエル様！」

「…………サラ。アニーシャ。崩姫を任せた。侵入者だそうだ」

何かしらの伝達を受け取ったレイチエルは、壁に立てかけておいたロングソードのような斬魄刀を腰にぶら下げ、部屋から出ていく。

井上は、レイチエルが言葉にした『侵入者』に一瞬反応した。

——もしかしたら、と。

「恋次、話があるのだが」

「ちょうど良かったぜルキア。俺もだ」

尸魂界に戻ってきたルキアはある言葉を聞き、隊舎に一旦戻った後に颯爽と恋次の居る六番隊舎に来ていた。ある言葉とは、ルキア達を連れ戻した後に白哉が言い放った『私が受けたのは、お前達を連れ戻せという命だけだ。連れ戻した後、どうしろという命までは受けていない。好きにするがいい』というものだ。そしてさらにルキアは、白哉からマントを渡された。その際に言ったのは『虚園は砂埃が酷いから持つてゆけ』。コレは明らかに、ルキアに『虚園に行け』と言っているようなものである。

そこでルキアは迷わず、現世でも虚園に行くという発言をしていた恋次を連れて行くとしたのである。

「…………虚園に行くのだろうか？」

「ああ。浦原喜助の所に行きやあ、虚園に行ける方法も教えてくれん

だろ」

その言葉にはルキアも賛成であった。恋次の言葉に首を縦に振り、意志を確かめ合う。

だが、その一連の流れで恋次はあることに気づいた。

「……日向は来てねえのかよ？てつきり、お前と一緒に来るもんだと思ってたぜ」

「うむ、そのことだが……あ奴は呼ばないことにしておいた」

「何でだ？」

日向を呼ばない理由を、恋次は問いかけた。

そのことに対し、ルキアは少し顔の影を濃くしながら答え始めた。

「……日向は、藍染との決戦で必要不可欠な戦力だ。それこそ私では事足りぬ程にな。私の代わりを日向が出来ても、日向の代わりは私には出来ないのだ。それなのに、私の我儘で虚園に連れて行くことは出来ない」

「……成程な。そりゃあ確かだ。俺も、アイツの代わりを出来るとは思えねえ。仕方ねえ。アイツは置いてくか……」

「誰を置いていくって？」

「っ!!？」

突如聞こえた声に、聞こえた方に顔を向ける。そこに居たのは紛れもない、日向であった。

「何故お前がここに……!!？」

「馬鹿野郎。気づかない訳ないだろ……俺も行くぜ」

「っ、駄目だ！お主は藍染との決戦に必要な戦力なのだ！ここで勝手に……」

「だったら、井上も藍染との決戦に必要な戦力だ。それに崩玉の覚醒期間にもまだ猶予はある」

日向の言葉にルキアは息を飲み、恋次はやれやれとニヤける。そんな恋次を見て、日向も笑いかける。

「……それによ、俺も理屈だけで感情押し殺せる程、出来た人間じゃねえんだ……ルキア。だから俺はお前を助けようと思った。違うか？」

「つ……………この莫迦者が……………」

日向の言葉にルキアは頭を抱える。だが、その表情は満更でもないものであった。そしてルキアは微笑みながら顔を上げる。

それに対し、日向と恋次は頷き合う。

「行くぜ、虚園に」

「おう！」

「ああ……………井上を助けに！」

玉座の間。たった今ここには、虚夜宮のトップたちが集っていた。

「22号地底路が崩壊したそうだ」

現状を端的に話したのはゾマリである。地底路には番人がそれぞれいて、そこにいる番人が負けたり死んだりすると、地底路ごと崩壊する仕組みになっている。つまり、地底路が崩壊したことは、そこにいる番人が侵入者に負けたことを意味する。

「22号オ!?また随分遠くに侵入したもんじゃな!!」

ゾマリの言葉に声を上げるのは、『大帝』バラガン。ここにいる誰よりも真っ先に椅子に座るその姿は、傲慢な王とも見えよう。

「全くだね。一気に玉座の間にも侵入してくれたら面白くなったんだけど」

バラガンの言葉に反応したのはザエルアポロである。実際、そんなことは天と地がひっくり返っても起こり得ることのないことだが、ザエルアポロは生憎常人とは似ても似つかない思考回路を有しているため、そっちの方が『自分にとって』面白いという発言をした。

ザエルアポロに続いて席に座ったのはハリベル。そしてその次には、顔を仮面で全て隠しているアローニーロが席に着く。

「ヒヤッハア!!そりゃあいい!!」

侵入者を歓迎でもするように声を上げるのは、ノイトラである。

そんなノイトラを蔑んだ目で見つめるのが一人。

「黙れ、ノイトラ。二度とその耳障りな声を出せないように、声帯を消し炭にしてやろうか？」

そう言いながら席に着くのは、虚夜宮調和刃・クリステイナ。

「つたく………こっちは眠ーんだ。喧嘩するなら余所でやってくれ」

「ゴヨーテ。お前が眠いのは四六時中だろう」

二人の喧嘩のようなものに面倒くさそうに反応したのはスタークである。それに対し帝守護刃・レイチエルが、普段のスタークの生活習慣のことを口にする。

そしてそれに続き、三人の破面が席に着く。ヤミー、グリムジョー、ウルキオラである。それぞれが個性豊かに席に着くと、部屋の奥の方から三人の死神が姿を現した。だがその身に纏うのは死覇装ではなく、それぞれ白を基調とした服を身に纏っている。

「お早う、諸君。敵襲だ。先ずは、紅茶でも淹れようか」

藍染がそう言うと、雑用の破面が同じサイズのティーカップに紅茶を注ぎながら、各々に配膳していく。明らかにヤミーにとっては小さいが、ヤミー自身紅茶などという嗜好品には興味がないので関係ないであろう。

「全員に行き渡ったかな？………さて、飲みながら聞いてくれ。要、映像を」

「…はい」

藍染の言葉に東仙が反応し、壁にある何かの仕掛けに手を掛けると、玉座の間の中央に佇む巨大なテーブルの真ん中が開く。そしてそこからデジタル映像のようなものが浮かび上がり、四人の虚園を走る姿が映し出される。

「侵入者は四名。石田雨竜。茶渡泰虎。思念珠・茜雫。黒崎一護」

「!!」

その映像を見て、グリムジョーが目を見開く。

「………こいつが………敵ナノ？」

「何じやい。敵襲じやなどと言うからどんな奴だと思うたら、まだ餓鬼じやあないか」

「ソソられないなア、全然」

「…………ちっ」

「侮りは禁物だよ。彼らはかつて『旅禍』と呼ばれ、たった四人で尸魂界に乗り込み、護廷十三隊に戦いを挑んだ人間達だ」

アール・ニーロ、バラガン、ザエル・アポロ、ヤミーが反応を見せると、藍染が侮らないようにと口にする。だがその表情からはそういった感情は一切感じ取れない。

「思念珠とは？」

「魂魄の記憶の集まりだ。あの女は以前いなかった。尸魂界に攻め込んだのは、あの女ではなく井上織姫だ」

「仲間を助けにきたってワケかよ。いいんじゃないのオ、弱そうだけどな」

「聞こえなかったのか？ 藍染様は侮るなど仰った筈だ」

完全に見下しているかのようなノイトラの発言に、ハリベルが諫めるように口を開く。それに対しノイトラはあからさまに嫌そうな顔をする。

「別にそういうイミで言ったんじゃないよ。カリカリすんなよ、びびってんのか？」

「黙れと言った筈だ、ノイトラ。耳障りだ」

「……………落ち着け、お前達」

ノイトラの言葉にクリステイナが不愉快そうな顔をし、それらのやり取りをレイチェルが収めようとする。

そんな中、一人だけ席を立つ。

「どこへ行く。グリムジョー」

「殺しに行くんだよ。入った虫を叩くのは、早いに越したことはねえだろ？」

部屋から去ってゆこうとするグリムジョーに対し、東仙が口を開く。それに対しグリムジョーは、侵入者である一護たちを殺しに行くと言う。

その光景を見てクリステイナは、『殺すしか能のない獣が…………』と呟いたが、それも気にせずグリムジョーは出ていこうとする。

「藍染様の御命令がまだだ。戻れ」

「その藍染様の為に、あいつらを潰しに行くんだろがよ」

「グリムジョー。戻れ」

そんなグリムジョーの肩に手を掛けたのは、帝守護刃のレイチエルであった。急に肩に手を掛けられたことに驚くが、それは他の者達も同じだ。スタークは『相変わらずはえーな……』と呟いたため、レイチエルは今の一瞬で響転を行いグリムジョーに肉迫したことになる。「何しやがるんだよ、レイチエル！」

「どうせ待っていても奴等はここに来る。なら、それまでにやることはしっかりやれ。この話もそうだ。早く行きたいなら、それ相応の行動をとれ」

「……………ちっ！」

レイチエルの言葉に嫌々ながら納得したグリムジョーは、すぐに席に戻る。

「有難う、レイチエル。グリムジョーを説得してくれて」

「……………有難きお言葉」

藍染の感謝の言葉に、レイチエルが丁寧に礼をする。

そして続けて口を開く。

「諸君。見ての通り敵は四名だ。侮りは不要だが、騒ぎ立てる必要もない。各人、自宮に戻り平時と同じく行動してくれ。傲らず、逸らず、ただ座して敵を待てばいい」

藍染は座っていた玉座から立ち上がり、各々に手を差し伸べるような動きをする。

「たとい何が起ころうとも、私と共に歩む限り、我等の前に敵は無い」それは虚園に於いて、『神』と等しい存在の死神の放った言葉であった。

虚夜宮

道別つとも

志は

一護たちは、虚夜宮に向けてかなりの時間走っていた。しかし一向に虚夜宮には着かず、延々と夜のように暗い砂漠を走ることを強いられていた。

その途中で、一護達は虚に追われるフードを被る子供を助けた。

その子供の名は『ネル・トウ』と言い、実は追っかけていた虚とは『無限追跡鬼ごっこ』なるもので遊んでいたらしく、その際に子供に『DM』という言葉を教えていたネルの兄の一人であるドンドチャツカという、トーテムポールのような顔の虚を一護が殴りつけた。

その後、ペツシエという虚含め三人が兄妹であることが明らかになったが、その経緯がかなりアバウトなものでだったので、一護がそれは兄妹でないと言い放ったが、その言葉に余りにシヨックを受けた三人を見て、一護は取り消すことにした。

その後、一護たちは成り行きで三人のペットであるバワバワという芋虫のような生き物に乗せてもらい、虚夜宮に連れて行ってもらえることになったのである。

「……しっかしなあ~~~~お前ら本当に破面か？」

「何を言うスか！ 見えねツスか、この立派に割れた仮面！」

「何っーか現世に来た連中と全然雰囲気が違うんだよな……」

一護が思い浮かべるのは、自分を圧倒した破面達。そのどれも殺伐とした雰囲気纏っており、このネルという破面とは雰囲気が似ても似つかないのである。

その疑問について、ネルが手をポンと叩いて答えた。

「そりやそ——つスよ！現世に行つたのは『数字持ち』の人たちつスもん！」

「ヌメ……………？何だそりや？」

『数字持ち』つてのは、大虚以上で破面化した人たつことツス！2ケタの数字を名乗れて十刃のヒトたつに直接支配してもらえるツス！まさに戦いのエクスパート！ネルたつみみたいなゴミ虫とは天と地ツス！」

「ゴミ虫……………」

ネルの自分達を『ゴミ虫』と例えることに、一護は何とも言えない表情を浮かべる。それは一護のみならず、他の三人もそうである。ここまで清々しいと、逆に笑えてくる。

「つ——かそんなコト言つたら、あんたたつの方がよっぽど破面っぽくないじゃねツスか！面はねーし、黒いキモノ着てなんつーか死……………」

一護を指差して喋っていたネルだが、途中で時が止まったかの如くピタツと止まる。そして次に顔色を悪くし、指を震わせながら再び喋り始める。

「あつ……………あの……………あんたらのソノ……………ご職業は……………？」

「黒崎一護。死神代行！」

『滅却師』。石田雨竜」

「茶渡泰虎……………人間だ」

「私は茜雫！死神……………かな？」

四人の職業兼自己紹介を聞き、破面である三人は戦慄したかのような表情を見せる。

「あああああ死神だア……………!!ワルモノだア……………!!」

「お前……………俺達が誰なのかわかってなかったのか……………」

通りで、明らかに虚ではない自分達を簡単に虚夜宮に連れて行つてくれると了承したのかと一護は理解する。

呆れた四人に対し、ネルは一護たちに背を向け、砂漠に向かって叫ぶ。

「おかスーと思ったんだア!!フツの破面は『虚夜宮』に行きてえなん

て言わねえもの！こ——ろ——さ——れ——る——！！」

「イヤ……別に殺しやしねえよ……」

取り乱すネルを落ち着かせようと一護は話しかけるが、生憎ネルはパニック状態のため耳を貸さない。

そんな光景を呆れて見ていた四人だが、突如地響きのようなものが聞こえてきたため辺りを見渡す。

すると、一護たちの前に巨大な何かが立ちはだかる。その大きさはかなりのものであり、現在一護たちが乗っているバワバワよりも巨大である。

『……死神なんぞに殺されずとも……このわしが、ぬしらをねじり殺してくれる!!この白砂の番人・ルヌガンガがな!!』

突如現れた番人という砂の虚に、ネル達含め全員が呆けた顔をする。

『今し方『虚夜宮』より侵入者アリとの報が入った。よもや、ぬしらの如きゴミ虫が侵入者と通じておろうとは……許せぬ。ぬしらまとめて砂漠の砂にしてくれる!』

「イヤ、あの違うんす！ネルたつはホント……っ」

「のいてろ」

必死に弁明するネルだが、その後ろから一護がルヌガンガに向けて月牙天衝を放つ。巨大な斬撃は、巨大なルヌガンガの頭から上半身を真っ二つに斬り裂く。

「よしー!」

「あああ〜く〜!!イキナリだ!ふいうちだ!!ズルっこだ!!ワルモノ〜く〜!!!」

ルヌガンガに月牙天衝をいきなり放った一護に対し、ネル達は騒ぎ立てる。

「うるせーな。いいだろ、助けてやったんだから。大体真正面から斬ってんだ。不意打ちじゃねえ……」

『不意打ちじゃねえだろ』と言おうとした一護だったが、後ろから再

び響く地響きに気づき振り返る。そこには先程頭から上半身を真っ二つにされたルヌガンガが、斬られた部分がだんだん元通りになっている光景が広がっていた。

『不意打ちして尚反省無し……侵入者、益々許せぬ!』

月牙天衝が喰らっていないことに驚いた一護だが、ネルの口からルヌガンガが砂であるため攻撃が喰らわれないことが判明する。

「くそっ! 何とかならねえのか!! 石田!」

「ムリだね。弓じゃ穴が空くだけだ」

「チャド!!」

「砂相手じゃムリだと思うが……やってみるか?」

「茜雫!!」

「弥勒丸じゃ砂埃が立つだけだと思う……」

全員に訊くが、どうにも出来ないという結論になったため、全員は逃げることにする。だがそれをルヌガンガが許すはずもなく、蟻地獄で全員を砂の中に埋めようとする。

「ネル!! あいつ何か弱点とか無えのかよ!?!」

「わわっ……ワルモノには教えるワケにはいかねッス……!」

何やら知っている雰囲気醸し出すネルであるが、ネルの中で悪者と認定されている一護達に、それは教えられないと言う。

しかしこのままではネル達も含めて全員が蟻地獄の中に呑み込まれる。

まだ虚夜宮にすら着いていないのにも拘わらず、こんな場所でやられてしまうわけにはいかなく、一護も自然と声が大きくなる。

「アホか!?! このままじゃお前らも砂に呑まれるんだぞ!!」

「ネルちゃんお願いイ〜!!」

ネルに対し頬を掴む一護に対し、茜雫は涙目で懇願する。目つきが悪く完全に悪者認定されている一護と代わって、茜雫はまだ女であるからという感じの理由でネルは仕方なく教えることにする。

さらに言ってしまうえば、ネルは泣いている者に対してまで意地を張る者ではないということでもあるので、そこでネルのお人好しさが出ている。

「み……水!!水ツス!!」

やはり命が惜しいネルは、漸くルヌガンガの弱点を話す。だが、砂漠に水などある訳がなく、一刻一刻一護たちが砂の中に吞まれようとしている。

このままでは一護たちは、ただ砂に吞まれるのを待つだけである。一護や石田、茜雫は空中を移動する術を持つが、茶渡やネル達破面はそれを持たない。茶渡はともかく、ネル達もどうにかして助けようとするのが、一護の性格が現れていると言えよう。

だが、こんな状況ではそのような考えは命取りである。

「次ひょうがせいらんの舞はくれん——『氷河征嵐』」

次の瞬間、冷気の渦のようなものがルヌガンガを包み、その次には雪崩のように押し寄せる冷気がルヌガンガを完全に氷塊とする。

一護達が茫然としている間に、蟻地獄も止まり、ルヌガンガは砕け散っていった。

そして冷気が押し寄せてきた元の方向を見ると、そこには三人の人影が立っていた。

「日向……ルキア……恋次……!」

一護が名を口にした三人は、高低差のある砂漠の中の、少し位置の高い砂丘から飛び降り一護達の元に駆け寄ってくる。それを見て一護も、三人の元に駆け寄っていく。

「……お前ら……!」

三人が近づいてくると、一護の顔には自然と笑みが零れる。
だが——。

「べは!!」

真っ先に近付いてきた日向が、一護の左頬を殴る。その後日向は、後ろでスタンバっているルキアとハイタッチする。

「はぶ!!」

ルキアは、日向の一撃で怯んだ一護の顎を捉えるように殴る。

そしてすぐさま次の恋次にハイタッチする。

「ぶお!!」

恋次は止めとばかりに思いきりのいい一発を一護の右頬に喰らわせる。

三連撃を喰らった一護はひとたまりもなく、その場に崩れ落ちる。

「……………無事か、黒崎?」

「たわけっ!!」

その後、一護はルキアに散々怒鳴られたが、その中でルキア達が虚園に行こうとしていたこと、そして自分達は一護の仲間であることを口にしたことで、一護は微笑んだ。

十人+αとなった所で、皆はバワバワに乗って再び虚夜宮に行くことになった。

バワバワに乗った結果、先程一護たちが走っていた時よりも速度は格段に向上し、虚夜宮にはぐんぐん近づく結果になっていた。

そして数十分後には、虚夜宮の壁に到達することが出来た。

遠くから見ても巨大であった建物は、近くから見ると全体が見えなくなり、その建物の異常な巨大さが理解できた。

「……………着いたな……………」

「よくがんばったツス、バワバワ!!よく頑張った!!」

石田が感慨深そうに呟く後ろで、ネルがバワバワに劳いの言葉を掛けている。その際ルキアは、虚夜宮の壁を触れ、どんな材質か確かめている。

「……………どうやら殺気石ではないようだが……………」

「殺気石じゃねーんなら、力尽くでイケるって訳だ!行くぜ、日向!恋

次！」

「へっ、しゃあねえな！」

「仕切ってんじゃねーよ、ボケ！」

一護の言葉に、日向と恋次はそれぞれ斬魄刀を抜く。それは一護も同じである。

「はあああああ!!!」

そして三人同時に斬魄刀を振るい、目の前の巨大な壁の一部を破壊する。破壊した際に、瓦礫が崩れ落ちる音だけでなく、何やら風が抜ける様な音も同時に聞こえてくる。

「…………貫通したか？」

「らしいな。風が抜けてる」

「どのくらい距離があるだろうな？」

そんな会話をする三人にネルが抗議する。正門なら現在地から三日ほど歩いた場所にある、と。だが生憎七人にはそんな時間はない。

ネル達を後にし、進もうとする七人だったが、ネルがこのままでは自分達は裏切り者として処罰されると言い、一護達に付いてゆこうとした。その際に、何とかして付いて行くために一護に対し泣きわめいたが、その時言った言葉は子供が言っただけの言葉も混じっていたため、それを止めるべく一護は仕方なくネルを連れていくことにした。

「…………しっかし、分厚い壁だな…………いつまで続くんだよ…………。暗くて何も見えやしねー」

「フ…………しょうがねえな…………俺に任せておけ！」

一護が『暗い』と言ったため、恋次が何やら得意げな顔で口を開く。「破道の三十一・『赤火砲』！」

恋次が詠唱破棄で赤火砲を繰り出すと、恋次の手の平からとても小さな火の塊が現れる。しかしそれは、現在皆が走っている場所を照らすには些か光力が足りないものであった。

「へえ。随分小さな明かりだな。君がそんな控えめな奴だとは知らなかったよ」

「たわけっ！下手の癖に恰好をつけて詠唱破棄なんぞするからだ！素

直に日向に任せればいいものを」

そんな火を見た石田が、皮肉のように口を開き、それに続いてルキアも口を開く。色々言われた恋次の顔は、その髪 of 如く真っ赤になっている。

「ほら、恋次。後述詠唱でだんだん火力を強めれば……………」

「俺はお前みてーに器用じゃねーんだよ!!」

「……………気にすんな。赤い髪で明るさはフォロー出来てるって。ホラ、よく言うじゃねーか。トナカイさんが真っ赤なお鼻で——」

「うるせえよつ!!」

日向のアドバースも、一護のフォロー(?)も、今の恋次には火に油を注ぐようなものだった。

そんなやり取りをしながら壁の中を進んでいると、とある暗い広間に着いた。するとその広間に置いてあった幾つかの蠟燭が、まるで一護達を歓迎するかのように灯り始めた。そして明るくなったことにより、その部屋に五つの別れ道があることが判明した。

「……………別れ道か……………」

「面倒なところに出ちまったな……………」

「日向。浄天眼で井上の場所が解るか?」

ルキアの言葉に、日向は右手を右眼に翳し、浄天眼を使用する。その際に、正八角形の紋章のようなものが宙に浮き出る。

だが、数秒使った後、日向は首を横に振った。

「駄目だ。屋内じゃ見えない。それにそれぞれの道が遠いし広い」

日向の浄天眼でも分からずに、ルキアは少し落胆する。それほどまでに虚夜宮は広いのか、と。

そしてさらに、一護がネルに告げる。

「……………ネル。やっぱりお前らとはこの辺でお別れみてえだ……………こつから先の霊圧は……………お前らの耐えられる重さじゃなさそうだ……………!」

一護のその言葉に、ネルは茫然としてその場に立ち尽くす。

「……………道は五つ……………」

「風潰しに端から当たっていくしかないか……………」

茶渡の確認の言葉に、石田が井上を探す方法を口にする。

だが、その方法に異を唱えたのはルキアであった。

「いや……………全員、別々の道を行こう」

「二人余るけどな」

ルキアの言葉に、日向が端的に付け加える。ここに居るのは七人。もしすべての道に行くとするのであれば、二組だけ二人のペアが生まれる。だがそれでも、戦力を分散することは敵の本拠地を攻める点で得策とは言えない。

「何言ってるんだ！相手は十刃だぞ?!全員一緒に動いた方がいいに決まってるんだろ!!向こうだって一人で来るとは限んねーんだ!コツチがバラバラになったら……………」

「止めとけ……………」

ルキアの意見に反対する一護の前に、恋次が出てくる。

「戦場での気遣いは、戦士にとって侮辱だぜ」

その言葉に、一護は絶句する。勿論一護にはそんなつもりはなかった。だが一護の言ったことは必然と、ルキアを侮辱するものになっていたと知る。

「……………全員で動く…か。お前は私の身を案じてそう言っているのだろうが、らしくない科白だ、一護。言った筈だ。『私の身を案ずるな』と。私は、貴様に護られる為に此処へ来た訳では無い!」

ルキアの言葉に、一護は数秒間をとった後、ため息を吐いた。

「……………分かったよ。全員別々の道を行こう」

「じゃあ私はルキアと!女子チームで!」

一護の言葉を聞いた茜雫が、早速ペアを作る。確かに同じ女同士であれば男とよりは気遣いが減るだろう。それを他の者は了承した。

そして残る一人だが――。

「じゃあお前らでジャンケンしてくれ。勝った奴に俺が付いて行く」

そう言ったのは日向だった。その言葉に、一護は驚いた顔をする。

「日向!?!おい、こういうのは戦力が均等になるようにだな……………」

「いや、黒崎。彼の言った通りにするのがいい」

「……………?何でだよ、石田?」

石田の言葉に一護が頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。それに対し、石田は眼鏡を指で上げながら説明を始める。

「……二人で行ったペアは、片方が戦っている間に、もう片方が何もしないで先に行けるんだ。そうするなら、先に行くのは基礎スペックで最も足の速い人がいい。恐らくこの中で最も足の速いのは彼だ。だったら、彼を一番先に行かせて井上さんの元に行かせるべきだ。そうするなら、最初に組むのは誰でもいい」

「……成程な」

石田の説明に一護だけでなく、横で聞いていた茶渡や恋次達も納得する。そして何故か言いだしっぺの日向も納得したような表情を見せる。

「お前……頭いいな！」

「なっ……まさか何も考えないで言っていたのか!？」

「ああ。早く行くこうと思って」

日向の言葉に、石田の顔が引きつる。

つまり結果オーライである。

そして早速、日向を除く男四人はジャンケンをする。その勝者は――

「ムッ……よろしく、天宮城……」

「おう。頼むぜ」

茶渡であった。中々珍しい組み合わせであるが、ジャンケンの結果であるため誰も異を唱えない。

そしてひと段落したところで、恋次が口を開く。

「よおし！そんじゃ、出発の前に一つまじないをやっとう！」

「まじない？」

「おう。大きな決戦の前にやる護廷十三隊伝統の儀式みてーなモンだ。今じゃ廃れちまってやってる隊なんて殆ど無えが、今こういう時にやるモンだろうと思っただよ。オラ！手エ重ねろ！イヤソーにすんな！俺だつて嫌だ!!」

そう熱く語る恋次だが、それを聞いていた一護は何やら嫌そうな顔をする。それは高校生にもなつて気恥ずかしいのか、それとも単に恋

次と手を重ねたくないのかは本人に訊いてみないと分からない。

「日向。半分頼んだぞ」

「おう」

恋次がそう言つて日向と確認をしている間に、皆が手を重ねていく。

「——我等！今こそ決戦の地へ！」

「信じろ！我等の刃は砕けぬ！」

「信じろ！我等の心は折れぬ！」

「たとえ歩みは離れても！」

「鉄の志は共に在る！」

「誓え！」

「我等、地が裂けようとも！」

「再び生きて、この場所へ!!!」

日向と恋次が同時に叫んだタイミングで、全員は重ねた手を一緒に地に伸ばすような動作をした後、先程の話通りのペアで別れ道に入っていく。

虚夜宮、突入。

交戦

交わす刃

弾ける火種

我、瞳は外さず

見据えるは

敵の喉元

「……………存外、様になっているじゃないか」

「わあー！…いつからそこに!?!」

部屋に突如現れたウルキオラに対し、虚夜宮専用の服を着た井上が驚く。現在井上は食事をとっており、足音を立てずに現れたウルキオラに対して仰々しい反応を見せた。

その反応を邪険そうにしながら、ウルキオラは話を続ける。

「今だ。いちいち騒ぐな、鬱陶しい」

「てゆうかく、女子の部屋にノックなしで入るなんて、アンタもいい性格してるよね〜」

騒ぐ井上を疎めるように発現するウルキオラであったが、井上の近くのソファでダラ〜ンとしていたアニーシャが、デリカシーのなっていないウルキオラを疎めるような発言をする。

だがそんなアニーシャを気にすることもせず、ウルキオラは話を続ける。

「報せだ。お前の仲間がこの虚園に侵入した」

「……………どうして……………」

その報せに、井上の顔は一気に暗くなる。

——覚悟を決めたのに。

「……………どうして』だと？お前を助ける為だ。それ以外に奴等に何の理

由も無い」

「あたしを……助けるため……」

「そうだ。だが最早お前には、それは意味を持たぬ筈だ。お前は既に身も心も、我等が同胞。それを身につけたということは、そういう事だ。井上織姫」

「はいはい。そういう建前どうでもいいから、女子の部屋から男子は撤退」

ウルキオラが言い終えた瞬間に、アニーシャはウルキオラの背中を押して部屋の外に押し出そうとする。

そんなアニーシャの行動に、ウルキオラは顔色を一切変えないで口を開く。

「……………変わったな。元第4十刃」

「……………昔の話。それに、もうあの時ほど力はないわ」

二人だけに聞こえる声量で口にする。そしてアニーシャは、部屋の隅で佇むサラを見つめる。

「あの子のために、必要以上の力は捨てたの」

「……………それは何故だ？」

「さあね。ほら、さっさと出てって」

アニーシャの催促に、ウルキオラは文句を言わずに出ていく。

その後ろ姿を、アニーシャは黙って眺めていた。そしてウルキオラの後ろ姿を見送った後に、アニーシャは再びソファにドカッと座る。次に、横たわって頭のすぐ傍にあるクッションに顔を埋める。

柔らかな感触に頭を委ねながら、十刃であった頃を思い出す。あの頃は一応は良かった。思い出すと、自分が何歳なのか気になってくるところであるが、一先ずそこは置いておく。

身の回りの様々な家事を雑用の破面にやらせてのんびり過ごすのは、自由気ままな彼女にとってはそれなりにいい生活であった。だが、ある時起こったことで、アニーシャは気づいたのである。

必要以上の力は、自分を束縛する、と。

故に、力を捨てた。

正確に言えば、力を別った。

(あの時のザエルアポロの薬クソ不味かったな)

昔を思い出す中で、力を別つ為に飲んだ薬のことを思い出した。明らかにヤバい色をしていた。それをジューズだと思えば飲む際に躊躇せずに済んだのだろうか、作ったのがザエルアポロだと考えると、よく昔の自分はあるものを飲めたものだと思った。

だが効果は確かにあった。だから、今自分には妹がいる。

(…………ちよつと散歩に行こうかな)

昼寝する気分でもないので、アニーシヤはスタツと立ち上がり部屋の外に出ていく。向かう先は、よく昔からかかっていた同僚の元。

よく解らない二人称を使う、自称紳士の破面の元である。

「…………何や、覗き見かいな。あんまりええ趣味やないな。東仙さん」

虚夜宮における監視室に来た市丸は、先に来ていた東仙に向かつてそう言った。それに対して東仙は、ポーカーフェイスのまま市丸に振り返った。

東仙は目が見えないが、長年の感覚により相手がどのような表情であるのかは把握できる。今の市丸の顔は、いつも通りの薄笑いの顔。何を考えているのか、傍から見たら読み取ることの出来ない虚偽にまみれたような表情。

しかし、今言ったようにいつも通りのことなので、東仙は淡々と口を開く。

「…………心外だな。キミも奴等の動きが気にかかって、此処へ観に来た口だろうか?市丸」

「いややなあ。冗談やないの。そない怖い顔せんといて…………」

市丸が話しながら東仙が観ているモニターの所に行こうとすると、突然何者かに袴の裾を掴まれたため、その場から動けなくなる。

パツと横を見ると、そこには体育座りのような恰好をしているワンダーワイスが居た。そのワンダーワイスが市丸の袴をガツチリと握っている。放してもらおうと、少し足をクイッと動かすも、ワンダーワイスは袴を放す素振りを見せない。

——ああ。だからボク、この子苦手なんやあ。

このままでは東仙が熱心に観ているモニターまでたどり着くことが出来ないので、普段からワンダーワイスと仲良くしていると思われる東仙に助けを求め。

「東仙さアん。何とかしてこの子」

「ワンダーワイス！」

「……ウー……」

市丸が東仙に助けを求め、東仙がワンダーワイスに声を掛けると、渋々といった感じで手を離す。そしてジト目をし、親指の爪を齧りながら市丸を凝視する。

その際には、何かを警戒するかのように喉の奥から唸り声を上げる。

——なんや、気味悪いなあ。

何を考えているのか解らない。なのに自分は警戒されている。そのことについて市丸はどうしたものかと頬をポリポリと掻く。別に、ワンダーワイスに好かれようなどという魂胆などはないが、それでも不必要に警戒されていると考えればたまったものではない。

そして何故、こんな扱いづらい者が東仙に懐くのか。市丸はそこが気になった。

「……何やあの難しい子が、あんたにはえらいなついでるなア」

「…純粋なものは、それ同士引かれ合うものだ。その子が何について純粋なのかは未だに量りかねるがな」

「成程なア。道理でボクに仲良うしてくれへん筈やね」

「まともな者なら誰でも君に警戒心は抱くさ。そんな事より見ろ。奴等、全員別の道に別れたぞ」

市丸のことを多少悪く聞こえるように東仙は喋るが、市丸は一向に気にせずに東仙の言うモニターの所に歩み寄る。そこには、先程別れ

た七人の姿がそれぞれ映っていた。

その姿を見て、市丸は呆れたような表情を浮かべる。

「あらら、ほんまや。バラバラになったら勝率落ちるで。あの子ら自分の実力わかってんのかいな」

敵の本拠地で、戦力を分断させることがどれだけ愚かなことか。彼らの目的は『井上織姫の奪還』である故に、井上に遭遇する確率を高くするために分かれるのは理解できる。しかし、それを考慮しても各個撃破される確率が高くなる手段をとることは悪手としか見ることが出来ない。

この中で十刃の上位陣とまともにやり合えるのは、天宮城日向だけであると市丸は考える。実際に一度相對してその実力は知っている上に、双匣の丘では『虚哭隸王、須佐能袁』という隠し玉まで持ち、藍染に一撃喰らわせた実力は確かであろう。

しかし逆に言ってしまうと、それ以外の者達は十刃達と一対一でやり合えばまず負けてしまいうだろうと考えた。黒崎一護に関しては、天宮城日向に続く実力の持ち主ではあるが、それでも中の上程度である。

ここまで考える市丸であるが、東仙がモニターを指さしながら口を開く。

「……ああ、しかも奴等、面白い処を通っている」

「……ああ、『3ヶ^{トレス・シフラス}タ』の巣やね」

市丸の見るモニターには、たった今一護がラテンダンサー風の恰好をする破面と相まみえようとする場面が映し出されていた。一瞬の交差の後、一護の左肩からは鮮血が舞う。

そして一護は驚いたような顔で、たった今自分の左肩に一撃を加えた破面に振り向く。

——ああ、アカンなあ。他の子やったら、今ので死んでるかもしれんわあ。

油断して今の一撃を喰らった一護に対し、市丸はそう考えた。これが、ウルキオラやノイトラ、そしてグリムジョーなどであつたら確実に首を刈り取られていただろう。

尚も、今例に挙げた三人の第一印象を考えた時に、一護は確実に警戒するであろうから、そんなことはない筈であろうと考える。

「……トレ——ス……う？」

市丸と東仙の会話に反応を見せたのは、ワンダーワイズであった。舌足らずの発音ではあるが、どうやら「3ケタの巣」という単語に興味を抱いたのであるかと考えた。

「……ああ。お前はまだ『虚夜宮』に来たばかりだから知らんだろうな。教えておいてやろう」

モニターには、一護がラテンダンサー風の破面に月牙天衝を放つのが映っている。だがそれを、破面は蹴り上げでかき消す。

「『3ケタの数字』は『剥奪』の証。それが示すのは『階級を剥奪されし者』。つまり、3ケタの数字を持つ者全てが『十刃落ち』^{ブリバロン・エスパーダ}だ」
『十刃落ち』。それが指し示すのは、『かつて十刃だった者』ということ。

その頃、日向・茶渡ペアはある十刃落ちと対峙していた。赤いアフロであり首回りや太腿の部分には、服の装飾か何かか、モコモコしたモノが付いている。そんな特徴的な服の破面が、二人の前に立ちほだかる。

「……天宮城。作戦通りだ、先に行け」

「解った……お前の力は修行を見ていたから解る。お前ならやれる。任せたぞ」

「……ああ……」

気休めか、それとも本当のことなのか、日向はそう言い遣し瞬歩で破面の後ろにある扉を抜けていった。その二つのどちらかは解らないが、日向は茶渡が相手に勝てるという油断を生ませないために、わざと曖昧な応援を残したのだろうと茶渡は考える。なら、そこから導

き出される答えは一つ。

「……………茶渡泰虎だ。破面、何故天宮城を簡単に行かした……………？」
「はっ……………二体一じゃ、フェアじゃなかったからな。それに名乗るなんざ、随分律儀じゃあねえか。だが、そういう奴は嫌いじゃねえぜ。その代わりに俺も名乗ろうか……………破面No. 107、ガンテンバイン・モスケーダだ」

名乗った茶渡に対して、ガンテンバインという破面も名乗る。そして茶渡は右腕に『巨人の右腕』を出現させて、臨戦態勢に入る。

「そうか……………行くぞー！」

茶渡は恋次との修行のことを思い出しながら、ガンテンバインと名乗る破面に相対するのであった。

茶渡泰虎 VS ガンテンバイン・モスケーダ、開戦。

「ふい……………光に向かって走ってるけど、全然着かないよお……………！」

「……………確かにこれでは距離感が掴めないな」

廊下のような場所を走りながら、茜雫とルキアは進んでいた。

そんなことを話しながらルキアは茜雫のことをじっと見ていた。

(……………ここまでかなりのペースで走ってきたが、茜雫は一向に疲れる気配がないな……………日向の教えを受けたと恋次から聞いたが、よもやここまで強くなっているとは……………)

ルキアと茜雫は、ほとんど面識がない。この場に居るのは、ただ味方だからという側面が強い。だがそれでも、自分の横を走る者を少し心強く感じたのは、ルキアの状態にとって幸いと言えるものだったであろう。

「……………茜雫。何故貴様はここに来たのだ？」

「え……………そんな難しい話じゃないよ。一護の仲間が捕まった。そして一護がその人を助けに行く。だったら、一護の仲間の私も助けに

行くのが当然じゃない？」

屈託のない笑みで、ルキアに反応する。それを聞いて、ルキアは自分が処刑されそうになった時のことを思い出す。

一護は、来るなど言ったのにも拘わらず助けに来た。

石田は、リベンジという口実で滅却師の力を失ってでも戦った。

茶渡は、一護が助けに行くからという理由で隊長とまで相対した。

井上は純粹に自分を心配してくれて来てくれた。

きつと彼女も、そうなのであろうとルキアは考えた。深い理由などない。誰かを納得させる理由などいらない。

そこに単純明快な理由があればいい。それは今のルキアにも言えることであつた。

「っ……………そうか、それもそうだな……………朽木ルキアだ。よろしく」

「?…どうしたの、急に改まって……………」

ルキアが微笑みながら手を差し伸べたことに対し、茜雫は疑問を浮かべる。

『仲間』、なのだろう?…だったら、一度くらいきちんと自己紹介をせねばならぬと思つてな」

それを聞き、茜雫は明るい笑みを見せながらルキアの差し伸べた手を握り、握手を交わす。

「そつか……………私は茜雫!改めてよろしくう!」

「ああ!必ず井上を助け出すぞ!」

「勿論!あ……………そろそろ抜けるよ!」

茜雫がそう言い、ルキアは光が漏れ出す方を見る。そして二人が光のある方に抜けると、そこには驚きの光景が広がっていた。

晴天。

夜しかないはずの虚園に、燦々と太陽の光が降り注いでいるのである。そのあまりにも信じられない光景に、二人は絶句する。

そしてもう一つ、あることに気づく。

「何故壁を抜けてまた空があるのだ……………」

そう。ルキア達は、巨大な建物の壁を破壊して中に入った。とすると、ルキア達は今屋内に居ることになる。だが、目の前に広がるのは

明らかに『外』の光景。

太陽の光が、白い建物を照らす。

「教エテアゲルヨ」

「っ!?ちっ!!」

「っ、ルキア!!」

突如現れた顔全体を仮面で隠す者によつて、ルキアは肩を掴まれ、道の先にある宮へと抵抗する間もなく連れて行かれる。それを見た茜雫は、すぐさま瞬歩で追いかけていく。

「くっ………離せ!!」

「オット」

だが、ルキアが無抵抗な訳がなく、宮の中に入った瞬間に斬魄刀を抜き、その破面のことを斬り捨てようとする。その一閃は躲されたが、距離をとることは成功する。そして後から追いかけてきた茜雫も、距離をとったルキアと合流することが出来る。

だが、茜雫が宮に入った瞬間に、入ってきた扉が閉まり、二人は光の差し込まない暗い宮の中へと閉じ込められる。

密室。

つまり逃げられない。ならばすることは一つ。茜雫も斬魄刀を抜く。

それを見たルキアは斬魄刀を構える。

「舞え———『袖白雪』!!」そでのしらゆき

「夕闇に誘え———『弥勒丸』!!」みろくまる

二人が同時に解放することにより、氷が弾け、風が辺りを駆け巡る。「元氣ノイイ娘達ダネ。自己紹介シテアゲルヨ。ボクハ第9十刃、ヌペーノ・エスパーダアール・ニール・アルエリ。君達ガボクニ食ベラレルマデノ短イ間ダケド、ヨロシクネ」

アール・ニールと名乗った破面は、右手に何やら霊圧の刃のような物を産み出す。

「あんに食べられるのは死んでも御免だわ！ルキア！行くよ！」
「ああ！」

朽木ルキア&茜雫 VS アーロニーロ・アルルエリ、開戦。

(……………朽木さんと、茜雫って子が解放したな……………誰かと当たったんだろうか……………?)

石田は走りながらそんなことを考えていた。

そうしている内にも、石田は何やら広い間に出た。大きな円柱が、様々な場所に立っているという不思議な部屋だ。その瞬間に石田の頭には嫌な予測が過る。

(これは……………この広間にいる破面が戦いやすいように作られた部屋だ……………！つまり……………)

そして石田は、前方から飛来して来た円盤のような刃を躲す。次に、石田は銀嶺弧雀を出現させ、円盤が飛来して来た方向に向かって神聖滅矢を放つ。

「キヤハハハ!!よく躲したわね、眼鏡君！でも今の一撃で死んでたら、この後苦しまなくて済んだのにね!!だって相手はこの私……………破面 No. 105、チルツチ・サンダーウィッチちゃんだからね!!」
石田の放った矢を躲しながら、数多くの円柱の内の一つの上に立つのは、ゴスロリ風の服を身に纏った女。その手にはワイヤーと通したチャクラムのような武器を持っている。

中々化粧が濃いな…、という失礼な感想はさておき、石田は神聖滅矢を番えながら相手を見据える。

「そうか……………なら僕も名乗らないとな……………石田雨竜だ」

「そりやどうも！でも……………すぐに忘れちゃうかもねエ!!」

石田雨竜 VS チルツチ・サンダーウィッチ、開戦。

「うおおおおお!!?」

恋次は、落とし穴に落ちていた。いや、もう少し詳しく話すならば、一護を追って迷子になったネルを追っかけて迷子になったドンドチャツカが落ちたと同時に、何故か恋次の足元に巨大な穴が空き、そこに落ちていった。

「ごほっ!ごほっ!……ちくしよー……何だあのデケー落とし穴……どこだここ……?」

漸く落下が終わった恋次は、辺りを確かめる。大きく広い通路。それ以外、特に変わったところは見当たらない。

だがそれがかえって、この場所が不気味に思える要因となった。

『クハハハハハッ!最高!』

そんな恋次の居る部屋に、声が響き渡る。

それは遠くから喋っているのではなく、何かマイクを通したような声。その声が、何かを笑うように高らかに声を上げる。

その声を聞いた恋次はすぐさま斬魄刀の柄に手をかける。今の声を聞く限り、自分はすでに敵のテリトリーにでも入っているのだろうと考える。

『色々とし掛けは施しておいたけど……まさかあんな一番安い仕掛けに引っかかる奴が居たとはね!……おっと、失礼。自己紹介がまだだったかな。一度しか言わないよ。君の頭で憶えられるといいけど……』

すると、部屋の一部が扉のように開き、そこから桃色の髪で、眼鏡のような物をかけている男が出て来た。

「オクターバ・エスパーダ第8十刃、ザエルアポロ・グランツだよ」

阿散井恋次 VS ザエルアポロ・グランツ、開戦。

「……………あちこちで霊圧の衝突が起こってやがるな……………」

茶渡と別れた日向は、再び長い通路を走っていた。

全ては、捕らわれた井上を助けるために。そして仲間の思いを果たすために。

「……………っ!?!」

走っていると、突如横の壁が崩れ、そこから特異な形状をした斬魄刀が日向を狙って突き出されてきた。数字の8の上の部分の少し切り取り、そして内側に刃があるという斬魄刀。それを辛うじて回避した日向は、すぐさま崩れた壁から距離をとる。

崩れた際に巻き起こった煙が晴れてくると、そこには長身長髪で左目に眼帯をする男が立っていた。

「……………誰だ……………?」

「ヒヤツハあ!!よく避けたじゃねえか!!」

そう言っつてその破面は、何故か舌を日向に見えるように覗かせる。それを見て日向は目を見開く。今まで日向は破面と何回か戦ってきた。よくよく考えてみると、その破面は十刃であったり、十刃級の相手だったりした。

そして相手が覗かせた舌の上には、大きく『5』と書かれていた。

『5』……………!」

「そうだ……………俺は第5十刃だ。クイント・エスパーダてめえ……………名はなんだ?」

第5十刃という破面の問いに、日向は斬魄刀を抜きながら答える。距離をとるために後ずさりする音が通路に響く。それに対しノイトラは、ジリジリと距離を詰めようとする。

「十三番隊第三席、天宮城日向だ」

「天宮城か……………憶えておいてやるぜ……………てめえが死ぬ迄の、ちよつとの間だがなア!!」

天宮城日向 VS ノイトラ・ジルガ、開戦。

とある宮の一室。そこにはクリステイナが座っていた。

丸いテーブルの周りには、椅子が四つ並んでいる。そしてテーブルの上には、椅子と同じ数のティーカップが四つ並んでいた。ティーカップには何も入っておらず、さらにはそのどれにも埃が被っているため、長い間放置されていたことが解るほどだ。

その中でも、クリステイナは自分の席と向かい側にあるティーカップを、愛おしそうに触れる。

「……………ル……………」

隙間風のような細々とした声で、クリステイナは誰かの名前を呼ぶ。

だが、誰も居ない部屋で誰も反応を返すはずがなく、ただ空虚だけがそこに広がっていた。

「どう……………して……………」

クリステイナの目尻には、涙が浮かんでいた。

雪花

雪纏う花も

また良きかな

十刃落ち、ドルドーニ・アレツサンドロ・デル・ソカツチ才は床に伏していた。その身体には幾つもの裂傷が残っており、さらには部屋のあちこちに存在する大きく抉れている痕が、彼と一護の戦闘の熾烈さを表していた。

「……………久しぶりだな。 淑セニヨリータ女よ」

「やつほくドルドーニ。アタシがレイチエルの従属官になって以来かしら？」

倒れているドルドーニに近付いたのは、アニーシャであった。

その顔は、負けたドルドーニをからかうかのように笑みを浮かべていた。それは敗北したドルドーニを侮辱するわけでも、軽蔑するわけでもない、普段通りの彼女の表情であった。

「ドルドーニ様。すぐに治療を致しますね」

そしてアニーシャの後ろからは、彼女の妹であるサラが、包帯や傷薬などを持ってドルドーニの元に歩み寄る。

「オオーまさかサラ殿が吾輩の傷を癒してくれるとは!!まさに聖母マリアの如き慈悲……………吾輩、感激の余りに貴方に恋を……………ぎゃふん!？」

「アタシの妹に手エ出してんじやないわよ、この髭親父が……………」
「ぶくぶく……………」

自分の妹に手を出そうとしたドルドーニに対し、アニーシャはドルドーニの股間を踏みつける。クリティカルヒットしたらしく、ドルドーニは口から泡を吹く。

そんなやり取りをしつつ、ドルドーニは着々と治療を受けていた。
「……………で、どうだったの？あのストロベリーでオレンジな死神の奴は」

「……………強かった。仮面を出した途端、吾輩は手も足も出ずに負けた」
そう言うドルドーニだが、その表情に悔しさなどは感じられない。
むしろ、全力で戦ったことに清々しさを感じ、満ち足りているような表情を浮かべていた。

「だが、淑女の主には遠く及ばない。あのぼうやは甘すぎる……………
それこそ、チョコラテのようにな……………」

「そりやそうよ。レイチエルが只の死神の負ける筈ないでしょ？」

「……………ふははー！そうであつたな！」騎士は強い！それこそ、破面の中でトップに立つことが相応しい程になー！

「ちよ……………余り叫ばないで下さい。傷口が開いてしまいます……………」

「オオウ……………濟まない、聖母よ」

サラに注意され、ドルドーニは静かになる。その際にサラを見ている表情がニヤついていたが、アニーシャが凄まじい殺気を放っていることに気づき、顔面蒼白になった。

そんなやり取りをしている三人だったが、その後ろから多くの足音が響いてくる。

「ドルドーニ様。アニーシャ様。サラ様」

「……………葬討部隊が何の用？」

「ドルドーニ様を、こちらに引き渡して欲しく、こちらに参りました」
葬討部隊の隊長であるルドボーンが、ドルドーニを引き渡すように口を開く。だがアニーシャはその要件に対し、怪訝そうな顔をする。

ルドボーンの後ろにはかなりの数の骸骨の仮面を被る者達がいる。そのすべてが、ルドボーンの刀剣解放である『髑髏樹』の能力『髑髏兵団』によって生み出された者達であり、すべてがルドボーンの指示に従う言葉持たぬ兵である。

一体一体の戦闘能力は低いものの、数で対象を圧倒するのがルドボーンである。

その髑髏の兵団は、見ている側からすれば圧巻するものである。

しかしアニーシヤは、それに臆することなく平静を保って話を続ける。

「何で？」

「治療をと」

その答えにアニーシヤは眉を顰める。仮面の下で分からないが、嘘を随分簡単に言ってくれる、とアニーシヤは思った。

そしてアニーシヤは右手の親指で自分の妹であるサラを指さす。

「サラがやってる。十分だわ」

「ですが、専用の治療室がございます」

「……………御免ね、アタシ鼻が良いのよね……………アンタらから、気持ち悪い薬品の臭いがプンプンして。ザエルアポロに頼まれたのかな？」

「っ!!」

アニーシヤの言葉に、ルドボーンは若干動揺したような表情を見せる。顔全体に仮面があるため、その表情は窺えないが、その挙動で察するには十分であった。

それを見て、アニーシヤは斬魄刀であるシヨーテルを鞘から抜く。

「どうせ、実験に使うから持つてこいと言っても言われてるんですよ。アイツも一時期、十刃落ちだったから嫌でも解るし……………で、どうする？」

「……………力尽くでも」

ルドボーンが斬魄刀の柄に手を掛けると、それと同じくしてルドボーンの後ろに並んでいる部下たちも柄に手を掛ける。

「それは、俺の部下に手を掛けるという意味だな？」

「……っ!!?!?!」

突如として部屋中に満ち渡る霊圧に、この場に居る全員が冷や汗を流す。そして霊圧の発生場所を見ると、そこには一人の破面が立っていた。

「レイチエル・セレーナ様……!!」

その姿を見てルドボーンは、身体全体で震えを表現する。それはルドボーンの意味ではない。生き物としての本能が、ルドボーンが動くことを不可能にしているのである。もし仮面がなければ、その表情は恐怖に染まっていたことになるだろう。

そんなルドボーンを見て、レイチエルはさらに霊圧を高める。それに対しては、この場にいる全員が息をのむ。

ドルドーニやアニーシャは額に汗を流し、戦闘要員ではないサラは息も絶え絶えになり、霊圧を実際に向けられているルドボーン達は後ろの三人以上に霊圧に当てられていた。

「もう一度訊こう、ルドボーン・チエルト。それは、俺の部下に手を掛けるという意味だな?」

「っ……!!」

霊圧にあてられ、ルドボーンは部下共々その場に崩れ落ちる。そしてルドボーンは、首を動かして退却することを指示する。

そして颯爽と、髑髏の兵団はこの場から去っていく。

それを見たレイチエルは、放つ霊圧を弱め、三人の元に歩み寄る。

「……………久しぶりに、騎士の熾おこっている姿を見たよ。正に、逆鱗を触れられた竜ドラゴンの如き、な」

「そうか」

ドルドーニの言葉を聞きながら、レイチエルはドルドーニを肩に担ぐ。

「お、おい……………騎士カバリエロ。我輩をどこに連れて行くつもりだね?」

「治療室に決まっているだろう。そこの方が、サラの刀剣解放レス・レクシオンをするにも好都合だ。行くぞ」

「は……………はい!」

レイチエルの言葉に、サラははつきり返事をする。その二人の後ろ

姿を見て、アニーシヤはショーテルを鞘に納める。
(さて……………他の所の戦況はどうなってるのかな?)

「初の舞——『月白』!!」

ルキアは袖白雪を横に振るい、円を描く。それと同時に円が輝き出し、その円が掛かっている領域全てが凍り始める。だが、アールローロはそれを響転で回避し、続けざまに虚閃を放とうとする。

だがそれは、後ろから瞬歩で斬りかかってきた茜雫によって阻止される。アールローロは手に持っている霊圧の刀で茜雫と鏢迫り合いをし、その末に茜雫を力のままに弾き飛ばす。かなりの勢いで弾き飛ばされた茜雫であるが、壁に叩き付けられる前に茜雫の足元からは小さな竜巻のようなものが放出され、弾き飛ばされている方向と逆に出すことにより、その勢いを弱らせ、叩き付けられるのは阻止された。

「破道の三十三・『蒼火墜』!!」

そんな間にもルキアは、次の一手とばかりに鬼道を放つ。それをアールローロは危なげなく躲し、次は虚弾を放つ。その余りの速さにルキアは躲すという選択肢を取ることが出来ず、袖白雪の刀身で受け止める。その際の衝撃でルキアの手には痺れた感覚のような奔るが、それを気にする余裕は二人にはない。

「ちっ……………強い……………」

「ソウ思ウカイ? ダツタラ……………」

「でやああああ!!」

ルキアに斬りかかろうとするアールローロだが、後方から飛来する竜巻によって、一瞬バランスを崩し、その一瞬で今度はルキアが体勢を立て直し、アールローロと正面から鏢迫り合いをする。

「チツ、面倒ナ小娘ダ」

「茜雫! 今だ!」

「オツケー!!」

鏑迫り合いになり、後ろががら空きになっているアールロニーロに向かつて、弥勒丸の刃がある部分で突き刺そうとする。だがその一撃は、アールロニーロの空いている左手で掴まれ防がれる。

確実に隙を突いたと思っていた茜雫は、驚いたように目を見開く。

「なツ……!?!」

「甘イヨ」

「えっ……きやああ!」

「ぐあっ!」

弥勒丸を掴まれた茜雫は、アールロニーロが弥勒丸を掴む手を前に振ることにより、そのままアールロニーロと鏑迫り合いになっているルキアとぶつかる。そのまま二人は奥の方に吹き飛ぶ。すぐさま二人は空中で体勢を立て直す、その間にもアールロニーロは両手に霊圧の刃を持ち、二人に斬りかかる。二人はそれらを一人ずつ受け止める。

(二体一でもこれか……やはり十刃と名乗るだけはある)

(だけど……負けられない!)

茜雫は弥勒丸を横にしていたのを、急にななめに傾けることにより、アールロニーロの刃を地面へすっぽ抜かせることに成功する。それと同時にアールロニーロの体勢も若干崩れる。そして続けざまに、茜雫は弥勒丸でアールロニーロを突き刺そうとする。

だがアールロニーロも、少し体を傾けることによりそれを躲す。

そしてアールロニーロは、左手から何やら触手のようなものを伸ばし、茜雫を叩きつける。

「げほっ……!」

「弱イ弱イ」

「茜雫!!ぐ、ああ!?!」

動揺したルキアは、アールロニーロの力に押し負け、壁の方に弾き飛ばされる。壁に思いきり叩き付けられたルキアは、眉間に皺を寄せながら次の一撃に備えようと袖白雪を構える。

「一匹、終ワリ」

「っ!!」

アールローは、先程鏢迫り合いた時よりも巨大な霊圧の刃を持ち、ルキアを仕留めようと響転で肉迫する。

だが、それは床が裂け、そこから噴き出してきた風により体勢を崩す。

「ナツ!？」

「……………」にひやくとおか「二百十日」

ルキアの視線の先には、地面に弥勒丸を突き立てる茜雫の姿があった。恐らく、地面である砂漠と宮の床の合間を縫って、竜巻をアールローの所まで行かせたのであろう。

その隙を逃すわけもなく、ルキアは動く。

「次の舞———」はくれん「白漣」!!」

ルキアに一直線に向かつて来るアールローに、雪崩のような冷気を放つ。普段であれば、もっと威力の高いものが放てるが、場面が場面なので威力を低くし、放つまでの時間を限りなく削減した。それでもアールローを怯ませるには十分だったらしく、アールローは自分の服が少し凍りついたところでルキアに接近することを止め、距離をとる。

「弥勒……………丸ウ!!」

そんなアールローに対し、茜雫は次に瓦礫を含んだ竜巻をアールローに向けてける。瓦礫の一つ一つは小さいが、それがかなりの速さでぶつかったらただでは済まない。鋼皮を持つ破面であっても、多少怯むには十分であろう。

「チイ!!」

それを何とか回避するが、アールローの後ろにある宮の壁には瓦礫がいくつもぶつかり罅が入る。

「———よ。血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ。雷鳴の馬車、糸車の間隙、光もて此を六に別つ」

「ツ……………二重詠唱……………ダト……………!？」

アールローが茜雫の攻撃を受けている間に、ルキアは二重詠唱をしていた。

「蒼火の壁に双蓮を刻む。大火の淵を遠天にて待つ———縛道の

六十一・『六杖光牢』！^{りくじようこうろう}

ルキアが叫ぶと、アールローの胴体には六つの光の帯が突き刺さる。

「——破道の七十三・『双蓮蒼火墜』!!!^{そうれんそうかつい}」

そして続けざまに、ルキアの両手から凄まじい勢いの青い爆炎が放たれる。それを、六杖光牢で動きが取れないアールローは、その一撃を真面に喰らう。さらに先程罅が入っていた後ろの壁も、その爆発によって崩れ落ちる。

「やった!」

「いや……………」

其処に佇むのは、身体の到る所が焦げてはいるが、まだ動けるアールローの姿があった。だが、先程の攻撃により仮面は吹き飛んでおり、そこにはアールローの顔が明らかになっていた。

「な……………何だ…貴様は……………!」

その顔は異形であった。

カプセルのような物の中にはピンク色の液体が満たされており、その中には顔のような物が二つ浮かんでいる。

「……………ジャア、改メテ自己紹介スルヨ。僕ラガ、^{ヌペーノ・エスパード}第9十刃、アールロー・アルエルリだ!!!」

明らかに異形。現世で見た破面には似ても似つかない。

その姿に、茜雫は明らかに動揺した様子を見せる。その一瞬で、アールローは茜雫に肉迫する。

「ッ、茜雫!!」

「——え?きやあ!!」

霊圧の刃で斬りかかるアールローに対し、ルキアは袖白雪で防御する。だが耐えられたのは数秒で、霊圧を高めたアールローによって、袖白雪の刀身は中央から先が折れてしまう。そのままルキアの身体は、アールローによって斬られる。その勢いで、ルキアは後方へと弾き飛ばされ、庇われた茜雫も飛んできたルキアにぶつかり後方に飛ばされる。

「う……………うう……………あ?!ルキア……………ルキア!!」

「むう……大丈夫だ……薄皮一枚で済んだ……ぐっ！」

そう言うルキアだが、その出血の量は甘く見てはいけない程のものだった。

しかしルキアは『それよりも』という表情で、自分の握る袖白雪を見つめた。

(折れた……か……)

この状況で、斬魄刀が折れるということはルキアの戦闘力を下げることではない。鬼道があるものの、それでも接近戦を行えないということはルキアにとって辛いものであった。

そんなルキアを見て、アローロニーロが殊勝そうな笑みを浮かべる。

「イイコトヲ教エテアゲルヨ。僕ハ、十刃ノ中デ唯一下級大虚ダ」

「何……?!？」

今、目の前に立っているのが現世でルキアと対峙した破面と同じ下級大虚と知り、ルキアは驚愕する。

「本来、十刃二入レルヨウナ力ナド無イ。だが俺は事実十刃に入り、第9の数字を与えられている。何故だか判るか？」

そう言いながらアローロニーロは左手の手袋を外す。そこには、人の手とは思えないような、触手が蠢く手が存在した。手の中央には蛸や烏賊などの口のように歯が並んでいる。

「それは俺がすべての破面の中で唯一、無限に進化する破面だからだ!!俺は、死した虚を喰らい、その能力と霊圧をわが物にする!!ソシテコレガ僕ノ能力ダ!!喰い尽くせ———」
『グロトネリヤ 喰虚』!!

アローロニーロが斬魄刀の解号のようなものを叫ぶと、アローロニーロの下半身が爆発するように膨らむ。それはアローロニーロの身体より何回りも巨大であり、宮のスペースをかなり占領する形になっている。

まるでその姿は蛸である。だがその蛸のように蠢く巨大な触手の間からは人の顔のようなものが浮き出ており、まるでそれはアローロニーロの身体自身が地獄絵図のようであった。その姿に、茜雫は再び動揺する。それもそうである。茜雫は戦いの訓練は受けたものの、実戦は限りなくないのである。それも相手はどれも人に似ている形で

あった。それと比べると、この姿は明らかに異形。抵抗を覚えない方がおかしい。

だがいつまでも動揺している訳にはいかないため、ルキアは茜雫の頬を軽くビンタする。

「しつかりしろ！」

「あ……うん！」

「はははア!!恐怖しろ!!これが、今迄俺の喰らってきたすべての虚の力の姿だ!十刃ノ刀劍解放ヲ、凡百ノ破面ノソレト同等ダト思ウナ!!俺の『喰虚』は喰った虚の能力を全て同時に発現できる!!今迄オレガ喰ツタ虚ノ数ハ、三万三千六百五十!!ここから先の戦いは三万を超える虚の大軍勢と二人で戦うに等しいと思え!!」

アーロニーロの言葉は、どこか現実味がなく、二人はただ斬魄刀を構えるしかない。だが、その途中でルキアが何かを決意したような顔をする。

「……………茜雫。一瞬、隙を作れるか？」

「ツ……………勿論！」

「なら……………」

「何をこそこそ話している!？」

二人が何かを話し合う様子に、刀劍解放をし高揚しているアーロニーロは痺れを切らして二人に向かって虚閃を放つ。それをギリギリの所で躲す。その際に爆発が起こり、辺りには爆炎が立ち込める。「うおおおお!!」

その煙の中から、弥勒丸を構える茜雫が飛び出してくる。だがそれを見てアーロニーロは凶悪な笑みを浮かべる。

「遅イ!シネエエエエ!!」

「ツ、がつ……………!？」

茜雫の胸には、アーロニーロが手から出した刃の霊圧が深々と突き刺さる。そして口からは多量の血が出る。

刃を突き立てられた茜雫はピクリともせず、刃の先でぶらりと力なく頭垂れた。

「ハハハハハッ!!ハアはははは!!ひやはは!ヒヤハ……………ハ？」

一人を仕留め高笑いをしていたアールニーロだったが、その茜雫の身体が急に消えていき紅葉に成り代わったのを目の当たりにし、アールニーロは呆気にとられた。今のは自分の能力ではない。

「いつ代わったか、気付いた？」

「なッ……………!!？」

声が聞こえてきたのは後ろ。そこには弥勒丸を構えている茜雫の姿があった。その胸には傷などない。

——『朧月』。朧雫が、日向との修行の中で見いだした弥勒丸の力の一つ。朧月のように、自分の霊圧を朧気にする技である。早い話、自分の霊圧を辺りの霊子濃度と同等にすることで、相手の霊圧知覚を騙す技である。そして、次に自分の身代わりの霊圧の残像を残すというものである。

「チィ……………!!！」

すぐさま茜雫を仕留めようとするアールニーロであったが、すぐにあることに気づく。

——もう一人はどこだ？

「ッ……………!!！」

「はあああああああ!!!」

アールニーロが茜雫に目を向けている間に、ルキアは瞬歩でアールニーロに肉迫していた。

そしてルキアは、刀身の折れた袖白雪をアールニーロの頭部に向かって突き出す。

だがそれを、アールニーロはギリギリの所でルキアの腕を掴む。アールニーロは、勝ち誇ったような笑みを、袖白雪を突き出しているルキアに向ける。

「へ……………そんな折れた刀身で俺を……………!!！」

比べると違った哀愁のようなもの漂っていた。

「……………さらばだ。十刃」

相手が事切れたのを見届け、ルキアは斬魄刀を鞘に納めながら言い放った。

「ルキアア~~~~~!!」

「うわああ!?何だ、茜雫!」

死にゆくアーロニーロを眺めていたルキアであったが、突然抱き着いてきた茜雫によって、先程までのシリアスな雰囲気崩れる。

「傷大丈夫!?ごめん……………ごめんね、私のせいで……………」

「……………ふっ、気にするな茜雫。この程度、鬼道でどうにでもなる。少し傷を癒してから、井上の元へと行こう」

「うん……………うん!」

朽木ルキア&茜雫 VS アーロニーロ・アルルエリ

勝者は、ルキアと茜雫に終わった。

聖哭

敵の首に鎌を掛ける

その時刃は

自分にも向いているのだ

「破道の六十三・『雷吼炮』!!」

「効かねエつつつてんだろ!!」

日向の放つ雷吼炮を真正面から受けても、ノイトラは怯まずに斬魄刀を振るう。その斬魄刀は日向の物と比べてかなり長い。日向は必然的に距離をとる戦いになっている。だが、距離をとって戦う方法は鬼道がメインになる。

だが日向の放つ鬼道は、どれもノイトラの死覇装を焦がす程度にしかならない。それだけノイトラの鋼皮の硬度が異常であるのだ。

その余りの硬さに、日向は眉間に皺を寄せさせる。

「どうしたア!? その変な術しか出来ねえのかア!？」

そう叫びながら、ノイトラは舌を突出し、その先から虚閃を放つ。

場所は狭い通路。逃げ場所がない。

「ちっ!」

それを理解した日向は、すぐさま左手を顔に翳し虚化する。そして自分に迫りくる虚閃を、空いている左手で受け止める。

それには流石のノイトラも驚く。

そしてそのノイトラに、日向はお返しとばかりに虚閃を放つ。それをノイトラは捉え、後方の壁ごとノイトラを外に吹き飛ばした。

だがノイトラはすぐさま体勢を立て直す。

「ヒヤッハア!! 中々面白いじゃねえか!!」

(虚閃でも駄目か……………!)

虚化して放った虚閃は、ノイトラに傷を負わせることが出来なかった。以前虚化して放った虚閃は、第6十刃であるグリムジョーという破面に少くない傷を負わせることが出来た。

このことから察するに、十刃の一階級に力の差にかなりの隔たりがあるのか。若しくは、この破面は単に他の者より硬いのか。この二つが考えられた。

『「なら……：鬼道の刃はどうだ!?破道の七十八・『斬華輪』!!』』ざんげりん

そう叫び、日向はノイトラに向かい鬼道の刃である斬華輪を放つ。それを見てノイトラは、面白くなさそうな顔をして斬魄刀で弾く。

そしてそのまま斬魄刀の先を日向に向けて突き出す。

「いい加減、効かねエつつつてんだろうがア!!」

『「くっ!?!」』

ノイトラの突き出した斬魄刀によって、日向の仮面は剥がされる。それと同時に日向の右頬に切り傷が出来、そこから鮮血が舞う。

続けざまに繰り出されるノイトラの攻撃に、日向は防戦一方となる。

だが、次の瞬間、ノイトラの動きは一瞬止まる。

「……………?」

「ちっ、アーロニーロの野郎。やられやがったか……………」

ノイトラの言うことを聞く限り、破面の中の誰かがやられたのであろう。それを聞き、日向はフツと笑みを浮かべる。

「どうした?仲間がやられて動揺してんのか?」

「何……………?何……………ふざけたこと言ってやがる!!」

日向の言葉に、ノイトラは怒るのではなく笑った。その表情を見て日向は驚愕する。同じ仲間がやられたのであれば、大なり小なり動揺すると考えていたからである。

狂気的な、尚且つ獣のような笑み。獣が笑っても、他者から見ればそれは牙を剥いているようにしか見えない。

「誰が仲間だア!?俺にとっちや全員敵なんだよオ!!」

「ぐっ!?!」

ノイトラは咆哮しながら日向に長い斬魄刀を振り回す。長いとい

うことは、振り回す際に遠心力が働いたため、その分ヒットする際の力が他の短い武器よりも強くなる。

何度か受け流そうとするが、ノイトラの尋常ではない力に受け流すことも難しい。

「だが……まずはてめえだ!! てめえを殺して、他の奴等も殺しに行つてやるよオ!!」

その言葉を聞いた瞬間に、日向は目の色を変える。虚化によつて黒に変色していた瞳であるが、そこに何か別のものが宿つたように、ノイトラに向ける視線が鋭くなる。

それには向けられているノイトラも、日向の何かが変わったことに気づく。

「……させてたまるかよ!!」

「だったら、俺を殺してみろオ!!」

「言われなくても……! 卍、解———『虚哭隸王』!!」

ノイトラの、日向の仲間を殺すという発言対し、日向は遂に卍解する。それを見てノイトラは只でさえ上がっている口角をさらに吊り上げる。

そして白い衣を纏つた日向に対し、斬魄刀を横に振るう。

だがその一撃は、虚哭隸王で防がれる。斬魄刀が交差することによつて火花が散り、通路が一瞬照らされる。

「なっ……!!?」

「———黒虚閃……!」

ノイトラの一撃を防いだ一瞬で、日向は空いていた左手に黒い光球を産み出していた。それをノイトラに向かつて問答無用で放つ。黒い暴虐は、ノイトラの細い巨軀を瞬く間に包み込む、ノイトラごと砂漠を穿つた。

ノイトラが砂漠に叩き付けられると同時に、凄まじい量の爆発と砂塵が舞う。

それを日向は黙って見ている。

次の一撃に備えて———。

「っ、ふっ———」

砂塵の中から、ノイトラの斬魄刀が日向に向かって飛来してくる。それを日向は虚哭隸王で弾く。そして弾かれた斬魄刀は、柄尻に繋がっている鎖が引つ張られる事により、爆風の中から姿を現したノイトラの手元に戻ってゆく。

「……………今のは効いたぜ……………」

「……………そうかよ……………」

そこに立っているノイトラの右腕は、日向の放った黒虚閃によって黒く焼け焦げていた。だが斬魄刀を持っているところを見ると、まだ動かすことは可能なのであろう。

ノイトラは、死神が黒虚閃を放ったことに驚き、日向は、黒虚閃を喰らったのにも拘わらずその程度の傷しか負っていないノイトラに驚いた。

だが、日向はそこまで焦っていない。

それは、日向が卍解をしたということが証明である。慢心でも、傲慢でもない。日向が卍解したということは、それ相応の覚悟を決めたということである。

絶対に、負けないという覚悟。

それは同時に、自信となり得る。

「……………行くぜ！」

「っ!？」

日向は目の前の敵を見据え、瞬歩で肉迫する。その速さにノイトラも思わず驚く。そして日向はノイトラの眼前まで肉迫すると、すぐさま後ろに回り込む。

「甘エん……………だよオ!!」

だが、それをギリギリの所で追ったノイトラが斬魄刀を背後の日向に振るう。だが日向は、今度はその斬魄刀を素手で掴み受け止める。そのまま斬魄刀を引つ張り、それに伴いノイトラも日向の方に引き寄せられる。

そして日向は虚哭隸王を、ノイトラの眼帯目がけて突き出した。

「目は……………どうだア!!？」

「っ……………!!」

日向の狙いは目である。理由はノイトラの鋼皮が異常に硬いので、別の急所を狙おうとしたことに起因する。

そして虚哭隸王は狙い通りにノイトラの眼帯を貫く。刀身はノイトラの頭部を貫通しているのが見える。これにより、ノイトラには少ない打撃を与えることに成功したことになるだろう。

それはどんな生き物でもある。只の虚ですら、頭部が弱点なのである。ならば人型となった破面も、頭部が弱点であることは自明の理である。

(やったか……!?)

「……………てめえに、俺は斬れねえよ」

「っ!」

だが、目を刺されたはずのノイトラは何事もなかったかのような表情を浮かべ、そのまま日向の喉を左手で掴む。

そして舌先を出し、虚閃を放とうとする。凄まじい光が辺りを包み込んでいく。

ただの虚閃ではない。それは……………。

「グラン・レイ・ゼロ王虚の閃光!!」

刹那、巨大な閃光が日向を呑み込む。

ノイトラの舌先の延長線上の砂漠は、王虚の閃光によって、先程の日向の黒虚閃のように爆発と砂塵が巻き起こる。

「はっ!随分手こずらせてくれやがったな……………」

ノイトラは、手の先からいなくなった死神に対しそう呟く。そして先程日向の突きによって穴が空けられた眼帯を砂漠の上に投げ捨てる。そこから覗くのは、仮面の名残と虚の穴。つまり日向の渾身の一

撃は、虚特有の穴を通り過ぎたにしか過ぎなかったのである。

戦いが終わり、ノイトラはつまらなさそうに舌打ちをする。しかし、ノイトラのいる場所に人型の影がかかる。

「……あまのはばきり
天羽々斬!!」

だが、次の瞬間には白銀の巨大な斬撃が、上空からノイトラに降りかかる。

そして今日何度目か分からない砂塵と爆風が辺りを駆け巡る。それらが晴れると、砂漠には地割れのように、だが切断面は綺麗な斬撃の痕が残っていた。

それを見て、日向は砂漠に降りる。

そして斬撃の痕のある方向に向かって声を上げる。

「……まだ生きてんだろ!? 出てきやがれ!!」

「……ち、くしょうが……!!」

砂漠の裂け目から這い出てきたのは、身体に巨大な裂傷があるノイトラであった。流石に十刃一の霊圧硬度の鋼皮を持つノイトラでも、王虚の閃光を凝縮した斬撃では傷を付けられてしまったようだ。その裂傷からは多量の血が流れ出ている。

ノイトラを呼び出した日向だが、先程喰らった王虚の閃光でそれなりのダメージを負っている。実は、先程王虚の閃光が放たれた瞬間に、反射的に目の前に反膜^{ネガシオン}を張って防御していたのだが、流石に完全に防御するには至らなかった。

「はあ……!! はあ……!! 俺が……俺が負けるかよ!! 祈れ
『^{サンタテレサ}聖哭蠟螂』アアツ!!!」

「……刀剣解放か!」

ノイトラが叫ぶと、ノイトラを中心に砂塵が渦巻く。そして数秒後には、腕が節足動物のようなものになり、尚且つ腕が四本に増えたノイトラが立っていた。その手にはそれぞれ鎌のようなものを持っている。そして頭部の側面からは、正面から見ると三日月のように見える角が生えていた。

その姿を見て、日向は虚哭隸王の柄を握り直す。現世で倒した十刃

は第6十刃と名乗っていた。その破面は、日向にとってはやさほど問題ではない強さであったが、この破面の霊圧は現世で倒した破面とは明らかに違う。霊圧の質も、戦い方も。相手は限りなく物理型に近い。しかも鋼皮が鬼道を受け付けけない程硬いので、日向も近接戦を強いられることになる。そうすると、腕が四本あるノイトラの方が有利になる。

単純にそうとは言えないが、十刃であるノイトラの腕力は並ではないので、一応この考えは当て嵌まるだろうと日向は考えた。

「……行くぜ、死神。俺に解放させやがったんだ。すっかり名乗ってやらないとなア!! 第5十刃、ノイトラ・ジルガダア!!」
クイント・エスパーダ

ノイトラは響転で日向に肉迫する。

それに対し、日向も背中から霊圧の翼を放出しながら瞬歩で肉迫する。そして次の瞬間には両者の剣は交差した。

「なん……だと……!?!」

その一瞬に驚愕したのは、刀剣解放を行ったノイトラの方であった。自分の腕の一本が、あろうことかいつも容易く斬り飛ばされたのである。

「……」
あまのむらくものつるぎ
「天叢雲剣」

日向は、ノイトラの超硬度の鋼皮に対し『絶対切断』という能力で打って出た。

単純、ゆえに強力な技。絶対隷属の刃は、十刃最高の硬度を誇るノイトラの鋼皮を容易く斬り裂く。

驚くノイトラに対し、日向は鋭い眼光を向ける。

「……次で、もう一本もらうぜ」

「ちい……嘗めてんじゃねエよ!! 死神イ!!!」

そう言うノイトラの斬られた腕は、切断面が盛り上がり再生している。そして元通りになると、手首の部分から再び収納されていた鎌が出てくる。

その光景に、日向は平然としたまま内心舌打ちする。

(超速再生か……厄介だな)

これではいちいち斬った所で再生されてしまう。ノイトラを仕留

めるには、確実に急所を斬るしか方法はない。

そう考えながら、日向は再び虚哭隸王を両手で握り構える。

そして先程と同じように、霊圧の翼で加速しながらノイトラに近づく。

「芸がねエんだよオ!!」

——迫りくる二つの鎌の内、日向から見て右腕を斬り上げで斬り落とす。

「それがどうしたア!!」

——続けざまに、今振った鎌の他の残りを振るうノイトラに對し、日向はその場でバク転することで躲す。

「ちよこまかと……うぜエんだよオ!!」

——舌先から放たれる虚閃を、左手でかき消す。

「その目………気に入らねえなア!!」

——ノイトラは最初に振るった鎌の残りの方を振り上げようとしますが、日向がブーツの底で鎌の先の部分をバク転の回転のままに踏みつける為、斬り上げられない。

「くッ……!!」

——日向はその場で、虚哭隸王を下にある三本の腕目がけて振るう。それは同時にノイトラの腕三本を斬り飛ばす。

(これで………!?)

顔を上げた日向だったが、目の前の光景に目を見開く。

ノイトラの腕が、増えている。

たった今斬り落とした四本の腕とは違う二本が、日向の両腕を掴む。その際に、ノイトラは勝ち誇ったような笑みを日向に向ける。そして舌なめずりをして、目の前の日向を見据える。

「しまっ………!!」

「これで仕舞いだ………死神イ!!!」

逃げようとする日向だが、ノイトラの握力のために逃げる事が出来ない。そうしている間にもノイトラの斬られていた四本の腕が再生し、鎌を再び手に取り、そのまま日向を斬り裂く——。

「縊れ——
『葦嬢』」
トレバドローラ

——はずだった。

「なっ、ぐああ!!?」

日向の背中に霊圧の翼の代わりに出現したバックパックのような鎧から、八本の触手が飛び出し、その内の四本がノイトラの四本の腕を押さえつけ、尚且つ残りの四本がノイトラの胴に向かって打撃を繰り出す。その衝撃でノイトラは日向の腕を離し、そして砂漠に叩き付けられる。

「……………つたく、腕が六本ってズルいんだよ……………ア、ごめくん6対8、だっけ?」

「てめエ……………そいつはルピの……………!!」

ノイトラが見る日向の背中には、紛れもない、元第6十刃ルピ・アソテノールの帰刃『葦嬢』であった。

それを発動した直後から、心なしか日向の表情や言動がルピに近付いたものになる。

だが次の瞬間に、触手の先の方が裂け、口のようなになる。そしてその触手一つひとつに目が浮かび出て、モノによっては口から火を噴き出している。さらには触手に黒い鱗のようなものが浮き出て、まるで蛇のような見た目になる。

その光景を見て、ノイトラは目を見開く。

「そいつは……………何だ……………!?!」

「……………俺が、新しく産み出した技——
『八岐大蛇』だ」
やまたのおろち

「何……だと……!？」

日向が名を発すると共に、蛇の頭のようになった触手が同時に咆哮を上げる。その光景は、現実からかけ離れている光景と言えよう。オリジナルであるルピの葦嬢でも、ここまで威圧感が出るとは思えない。蛇は、ノイトラを見据えて長い舌をチロチロと動かしている。その際に、蛇特有の長い牙もうかがえる。

死神が、背後に伝説の八つ頭の蛇を携える。こんなバカな話があったままるものか。そんな考えがノイトラの頭を埋め尽くす。

「ふぎげ……やがってエエエ!!」

そう言つてノイトラは、六本の腕を重ねて黒虚閃を放つ。黒い暴虐は、空中にいる日向に向かって一直線に掛けていく。

それを見た八岐大蛇が、一斉に咆哮する。

「……行くぜ。始めてやるから上手く行くかは解らねエが……」

日向がそう言いながら虚哭隸王の切っ先をノイトラに向けると、八つの蛇頭が一斉にノイトラの方を向き、口を大きく開く。そしてその口からは、灼熱とも言うべき炎が漏れ始めている。

「ゼロ・ブルガトリオ
煉獄虚閃」

刹那、蛇頭全てから灼熱の炎が、ノイトラの放つ黒虚閃に向かって放たれる。それは只の炎ではなく、全てが虚閃である。それはノイトラの黒虚閃と激突し、辺りには煉獄虚閃の余力である熱が各所に奔り、周囲の気温を一気に上げていく。それこそ、本当の昼間の砂漠の如く辺りは灼熱の大地へと変貌していく。

二つの虚閃の拮抗は、やがて煉獄虚閃が押し勝つことで崩れる。

「な……………っ!!」

ノイトラは声を上げる間もなく、紅蓮の炎に呑み込まれていく。ノイトラを中心に巻き起こる爆炎は、火山の噴火というのが解りやすいほど、激しいものであった。轟音と共に砂漠はみるみる内に溶けたガラスのように赤く、粘性の液体へと変貌していく。

その光景が数秒続いた後、日向は煉獄虚閃を放つのを止めた。

(これ以上はオーバークイルだ……………)

一瞬、自分の中の虚に呑まれたことを反省し、ため息を吐く。

そして日向は、ノイトラが居るであろう場所へと移動する。

「ぐ……………はあ……………はあ……………!!ち……………くしょう……………この……………俺がア……………!!」

するとその場所には、皮膚が黒く焼けただけ、息も絶え絶えなノイトラの姿があった。

それを見て、日向は静かに佇んでいた。

砂漠に吹く風が、肉の焼けた嫌な臭いを、日向の鼻へと運んでくる。その臭いに対し、日向は心の中で顔を歪めた。

「……………俺の勝ちだ。先に行かせてもらうぜ、ノイトラ・ジルガ」

「ふぎ……………けんじゃ……………ねえ!!俺は……………ま、だ……………戦える……………んだよオ!!」

そう叫びながらノイトラは立ち上がるが、その瞬間にノイトラの帰刃は解ける。破面の刀剣解放が解けるということは、本人の霊圧が限界まで消耗されているということ。今のノイトラの状態を見れば、死期が近いことを意味している。

それを理解している日向は、憐れむような目でノイトラを見下ろす。これからの戦いには、倒した十刃の力を確実に手に入れる必要がある。そのためには相手にとどめをさすことが必要であるが、それでも相手をズタズタに引き裂こうという考えは、日向には無い。

「やめろ……………もうこれ以上は……………」

「うるせえ!!俺は……………俺が……………最強だあああああああ!!!」

「くそっ」

飛び掛かってきたノイトラに対し、日向は胴体に一太刀入れた。その瞬間に、ノイトラの身体からは生気が消え、そのまま砂漠へと落ちていった。

今の一太刀は、せめても一撃で沈むように、これ以上苦しむことのないように。そう考えて、日向は「天叢雲劍」を発動して斬り伏せた。ノイトラは、もう動かない。

そんなノイトラに対し、日向は静かに合掌する。

自分と戦った『戦士』への、僅かな手向けとして。

そんな日向の近くに、謎の霊圧が近づく。

「……………誰だ？」

「……………僕は、そこに居るノイトラ・ジルガのフランシオン従属官。テスラ・リンドクルツです」

「従属官……………かたき討ちか？」

「いえ」

テスラと名乗った破面は、倒れたノイトラの元に歩み寄り、その姿をじっと見つめた。何を思っているのかと日向が考えていると、不意にテスラが日向に視線を戻す。

「……………僕はここに居ます。どうぞ、先にお進みください」

「……………言われなくても行くさ」

テスラの言葉を聞いた後、日向はすぐに駆けだす。

その瞬間、ノイトラの身体が霊子に分解し始める。その霊子は目に見えるものではないが、心なしか、日向の後を追っているようにテスラは見えた。

「……………そうか、ノイトラ。お前は、彼と共に行くか……………」

悪戯

命を弄ぶ

これ以上楽しい遊戯があるかい？

日向が卍解をして、ノイトラと相対していた頃の一護達。

「……………っ！何て霊圧の衝突だよ……………これは……………日向か？」

「い、一護……………怖いッス……………」

「心配すんな、ネル！アイツは強エ！それこそ俺よりもだ！」

余りに強大な霊圧の衝突に、力のないネルは怯える。それに対し一護はネルに安心感を与えようと口を開く。

だが、霊圧の衝突自体は先程から各地で感じている。その中でも特に目立っているのが、日向とその相手と思われる破面の霊圧であった。どちらの霊圧も凄まじく、かなり遠くに居るであろう一護にもはつきりと届いていた。

(ちっ……………待ってる、井上！)

一護は一刻も早く井上の元に向かうために、さっき戦ったドルドーニという十刃落ちと戦った時から、卍解状態を保っている。一護の卍解は、その霊力を刀に固めているため、卍解状態で居るだけならばそこまで消耗はない。だがそれでも多少はあるので、そこから一護の焦燥を感じ取れる。

「よし、そろそろ出口だ！次は……………!!」

扉に向かっていた一護だが、そこに誰かが現れたのが目に入った。その姿は現世でも見たことのある姿。病的に白い肌。無機質な瞳。そして目の下にある仮面紋。

「てめえは……………ウルキオラ……………！」

「俺の名を憶えているのか。お前に名乗った憶えは無いんだがな」

何の感情もないような喋り方のウルキオラに対し、一護が出した答

えは——。

「月牙天衝!!」

黒い斬撃がウルキオラに飛ぶが、それをウルキオラは素手で受け止める。だがその一瞬の間に一護はウルキオラに肉迫していた。

そして眼前に着いた瞬間に一護は仮面を出す。

それと同時に、禍々しい霊圧が部屋中に広がっていく。その霊圧に対し、ウルキオラは瞠目した。

その霊圧は明らかに、最後に一護を見た時よりも上がっている。この短期間で何があつたか。そもそも、井上が拉致されてから一護達が虚夜宮に到着するまで、短期間という言葉すら当てはまらない程、短い時間である。

「っ……………」

『「行くぜ……………ウルキオラ!!」』

黒崎一護 VS ウルキオラ・シファア、開戦。

「……………これで治療は終わりです、皆様」

「ふう、助かりましたぞ。聖母^{マリヤ}」

「ドルドーニ。アンタのその喋り方どうにかなんないの?」

「直らんだろうな。そいつの喋り方は一生」

帰刃を解いたサラの前には、先程まで侵入者と相対していた十刃落ち達が居た。全員、侵入者と相対したことにより重傷を負っていたが、それでもサラの帰刃によって傷はほとんどふさがっていた。

『滅却師^{クインシー}は、弓矢以外使わない』

自分と相対した侵入者の言葉を思い出しながら、チルツチは胸の辺りを擦る。石田雨竜との戦闘によって、チルツチは「鎖結」を貫かれた。だが、チルツチは微かだが自分に霊力が復活していることを感じていた。

「……………凄いわね、アンタの能力」

「そうでしょ。ウチの妹は凄いのよ〜!」

「アンタには言っていないわよ……………」

「ああん?」

サラが褒められたことに対し胸を張るアニーシャだったが、チルツチがお前には言っていないと言い、二人の視線の間には火花が散る。それを見てサラはあたふたする。

「わ、私の能力は自分の霊力を相手に分け与えて、霊圧を回復させて身体の方も治すという能力ですから……………死神の術に近いかもしれませんが……………」

「どちらにしろ、俺達が助かったことには変わりない。助かった」

「ああ……………そんな儂げな顔をしないでくれ、聖母^{マリヤ}よ。その太陽のような笑みが陰ると、吾輩は気が気では……………びゃん!」

「ナンパは余所でやれ!」

ドルドーニが再びサラにナンパしようとしたが、アニーシャの容赦ない顔面チョップによってそれは阻止される。

それを、レイチエルは黙って見ている。そして視線をアニーシャに向け、口を開く。

「……………アニーシャ。^{プリンセス}崩姫の所に行け」

「え?何で?」

「お前が面倒を見ると言っただらう。万が一も、ある」

「……………ちえ。はいはい。解りましたよオ〜」

レイチエルの命令に、アニーシャは唇を尖らせてぶつくさ言いながら治療室を後にしていった。

そんなアニーシャを見送った後、ガンテンバインがレイチエルに向けて言葉を発した。

「……………どうしてアニーシャを行かせたんだ?別に侵入者は誰も崩姫の所に辿り着いてはいないぞ?」

「……………念には念をだ。いくら崩姫が、死神達をおびき寄せる餌だとしても、あの能力が向こうに渡れば厄介だ」

「ふむ……………騎士^{カバリエロ}が言うのであれば、そうするのは得策だらう」

レイチエルの説明に、ドルドーニは頷きながら応える。
(悪い予感が当たらなければいいがな……………)

「これは……………一護の卍解か!?!」

「色んなところで戦ってるって訳ね……………」

アールとニーロを見事倒したルキアと茜雫は、先に行くために道なりに進んでいた。晴天という表現が正しい虚夜宮の空の下、二人はかなりの時間走っていた。その前に二人は、ルキアの傷を癒すために多少休憩をとっていたのでさほど問題ではなかったが、それでも十刃の戦闘の後と言う事もあり、それなりに疲労は溜まっていた。

自分達が戦闘を終え、霊圧知覚を尖らせてみると、様々な場所で巨大な霊圧の衝突が起こっていた。

(日向の霊圧はさつき鎮まったが、恐らくこれは戦闘が終わったと言う事になるだろう。彼奴の霊圧はしっかり感じ取ることが出来るからな……………)

一護の卍解の霊圧を感じ取る前に、ルキアは日向の霊圧が落ち着くのを感じ取っていた。だがその霊圧の様子から、日向が見事破面との戦いで勝利を掴んだのだと考えた。

「我々も早く、井上の所に向かわなければな……………」

「うん!」

因みに、ルキアの斬魄刀である袖白雪は、一度解放を解き鞘に納めている。一度折れた斬魄刀であるが、始解であれば所有者の霊圧が回復すれば元に戻る。ルキアの傷も大分癒えているので、袖白雪が元に戻るのも時間の問題であろう。

「さて……………次はどこにおおおお!?!」

「ルキア!?!大丈夫うううう!?!」

一緒に走っていた二人だが、突如崩れる床に巻き込まれ、そのまま

床の下へと引きずり込まれていく。

「ルキア、掴まって！弥勒丸！」

差し出した手をルキアが掴んだのを確認し、茜雫は弥勒丸を解放し、自分の足元に竜巻を発生させ、落下速度を急激に落とした。

「す、すまない！」

「お互い様お互い様ア♪」

そのままゆっくりと降りていく二人であるが、中々下には着かない。その状況から、ルキアの口から恐ろしい答えが返って来る。

「……………もしや、ここは奈落の如く深いのではないか？」

「怖い事言わないでよオ！」

もし二人が踏み込んだ場所が落とし穴であり、それが確実に落ちた相手を殺すものであれば、かなりの深さがあるということになる。今は茜雫によつて落下速度はゆっくりで安全であるが、もしかなりの深さがあるのであれば、井上を助けに行くのにかなり時間がかかってしまう。

だがそれも杞憂だったらしく、数分もすれば地面が見えてきた。だが明かりなどはなく、漆黒の闇が辺りを包んでいた。

「……………どい、いっ？」

「まあ、待て。破道の三十一・『赤火砲』」

壁を走っていた時の恋次のように、赤火砲を出し明かりの代わりにする。すると、辺りの様子がかすかだが見え始めた。

「だれ…………？」 「お腹すいたよお〜」 「わあ〜、明る〜い！」

「お客さん……………」 「遊ぼうよ——！！」

「A g o w w w w w」 「はラ へった」 「くらいの怖いよ

〜！」

「な……………なんだ、こいつらは……………!？」

「子供……………」

二人の前に大勢いたのは子供の姿をした破面。その容姿は一人一人別であり、男もいれば女もいる。髪型も別々であり、個性によつて

は眼鏡を掛けている。そしてであろうことには先程相対したアール
ニーロのように、顔だけしかない者もいる。

その数は五十程。

『悪戯小僧』。群体の破面であり、破面の中でも特異な存在である。
元々はバラガンの配下でありながら、十刃という地位に就いていた破
面であるが、その子供故の無邪気さや残酷性と言った扱い辛い性分に
より、十刃落ちにされた破面である。

その番号は102。元々は百体を超える破面であったが、十刃落ち
にされるヌガンヌの力によって幽閉されて以来、真面に食事を摂れて
いないため、その個体数は激減している。

だが、それでも二人にとってはかなりの数である。

「お姉ちゃん！」 「遊ぼう！遊ぼう！」 「え、面倒だよ
」

「火……熱イ………」 「オロロロロ!!」

「久しぶりのお客さんだあー！」 「鬼ごっこしようよ」

「かくれんぼがいい〜！」 「GRUUUUUUuuu」

「しに……ガミ………」

二人の姿を確認したピカロ達は、じりじりと二人に詰め寄って
くる。それに対し二人は斬魄刀をそれぞれ構える。

「くっ、行くぞ！茜雫！」

「う……うん！」

朽木ルキア&茜雫 VS ピカロ、開戦。

『『フラシオン従属官』』

「!!」

ザエルアポロと戦っていた恋次の前には、数多くの破面が居た。

大小様々で、そのどれも辛うじて手と足はあるが、どれも人外と

いすべきの長さであったり太さであったりする。

ここまで何とかしてザエルアポロと戦ってきた恋次であったが、卍解を封じられるなどのトリッキーな戦法の前に、不利を被っていた。「僕ら十刃には、支配権の証明としてNo. 11以下の破面から直属の部下を選ぶ権利が与えられる。それが従属官だよ。一人しか選ばない奴も居れば、山ほど選ぶ奴も居る」

ザエルアポロの場合、後者なのであろう。他に多くの従属官を従えているのはバラガンぐらいであり、他の十刃は多くても三人しか従属官を引き連れていない。

それはともかく、現在単独行動をとっている恋次にとって相手の数が増えるというのは好ましくない状況であった。

「うちの第8従属官共は少し異色でね、僕が改造した虚共を、藍染様の手で破面化して頂いたものだ……まあ、無駄話は辞めにしようか。ともかく君は最早、僕が直接手を下すには値しないという事さ」

その言葉に、恋次の顔にはわずかであるが焦燥が浮かび上がる。

「……さて、劇終だ」

だが、次の瞬間にザエルアポロの後ろに佇んでいた巨体の破面が矢に中り、そのまま崩れ落ちる。

それにザエルアポロも驚き、恋次も驚く。そして二人は矢が飛んできた方向に目を向ける。

「……虚夜宮の建物が殺気石で出来ていないのは、君達にとって不幸だったね。壁三枚隔てた先まで霊圧が響いてる。どうした？随分なやられ様じゃないか、阿散井恋次！」

「てめえ……石田……！」

崩れた壁の場所に居たのは、銀嶺弧雀を構える石田の姿であった。

その姿に、恋次は僅かながら口角を吊り上げる。心強い味方が来た。

『エル・ディレクト
「巨人の一撃」 オオ!!』

「なっ……また邪魔か……！」

そして今度は石田の居る場所の逆の壁が崩壊する。そこから飛来して来た霊圧の塊に、多くの従属官が吹き飛ばされる。

それを見て、流石のザエルアポロも苦言を漏らす。

「ムツ……無事か、阿散井……」

「茶渡泰虎……お前も来やがったのか!」

其処に立っていたのは、現世で恋次が特訓をつけていた人間・茶渡であつた。

一気に戦力が増えたことにより、恋次も内心ほくそ微笑む。頭脳派である石田に、恋次との修行で力のついたパワータイプの茶渡。

人数が増えたことにより、目の前の頭脳派と思われる十刃と対抗できる戦略を練ることが出来る。その戦略を考えるのは石田に任せるつもりだが、恋次は確実に流れが変わると直感する。

「茶渡君!彼は!」

石田の言う『彼』というのは日向のことである。その質問に対し、茶渡は右手の親指を立てる。

「先に行った……心配ない……!」

「そうか……なら、僕たちも急がなきゃね」

茶渡の言葉を聞き、石田は銀嶺弧雀をザエルアポロに向かつて構える。それと同時に恋次は蛇尾丸を、茶渡は悪魔^{ブラッ・イスキエルダ・デル・ディアプロ}の左腕を発現する。

阿散井恋次&石田雨竜&茶渡泰虎 VS ザエルアポロ・グランツ、開戦。

「キャハハハハッ!」

藍染の側近であるロリ・アイヴァーンは、同じ側近のメノリ・マリアと共に、井上の部屋に来ていた。そこで何をしていたのかと言うと、藍染に寵愛を受けている井上への暴力。

嫉妬心の強いロリが、抵抗しない井上に対し一方的に殴る蹴るなどの暴力を加えていたのである。

井上を投げ飛ばし、そしてその先で髪の毛を掴んで持ち上げる。

「ハッ！ザマあないわね！人間の腕力で破面に勝てる訳ないでしょ！」

そう豪語するロリに対し、井上は静かにロリに瞳を向けていた。それを見てロリは、さらに癪に障り暴力を加える。

「なんてカオしてんのよ!!」

「ちよつと……もう少し静かにやんなよ」

「うるさいなッ!!」

メノリの注意に、ロリは逆ギレする。二人がここに来たのは、ちょうど井上の世話係であるレイチエルとその従属官達が留守にしていたからだ。もしレイチエル達が戻って来れば、ロリ達は只では済まないだろう。だがそれでも、ロリは自分の腹に煮えたぎる黒いモノを吐き出すために、執拗に井上に暴力を働く。

「あ、そーだ！ツメはがしちやおっ！」

「ちよつとロリ……」

だが、次の瞬間に扉が吹き飛ばされる。

爆音のような音が部屋中に響き渡り、二人は扉の方に目をパツと向ける。

そこに居たのは――。

「グ……………グリムジョー……………!」

第6十刃、グリムジョー・ジャガージャック。

グリムジョーは眼前の光景を見て、若干眉を顰める。

(あの死神と本気で殺り合うのに崩姫を連れて行こうと思つたら……………随分胸糞悪いことしやがってんな……………)

グリムジョーがここに来た理由は、今回の侵入者の一人である黒崎一護と全力で戦う為に、一護を回復させることの出来る井上を連れて行って、回復させた上で戦おうと考えていたのである。

だが、その崩姫である井上が、藍染の側近とも言える破面に暴行を受けている。井上が暴行を受ける事には、グリムジョーは特に何の感情も抱かない。問題なのは、戦う意思のない者に対して粹がる弱者の見苦しい姿である。

——さつさと、レイチエル達が居ない間にこの女を連れて行かねえとな…。

何はともあれ、グリムジョーは井上を連れていくつもりなので、前に進む。わざわざレイチエル達の霊圧がこの宮から離れるのを察して来たのである。今更戻るなど考えられない。

その際、井上を掴んでいるロリを蹴り飛ばし、次に襲いかかってきたメモリに対しては上半身に虚閃を放ち消し飛ばす。

そしてグリムジョーに対して喚き散らすロリを黙らせるために、片足を掴んでそのまま足を掛けて引き千切る。部屋中にロリの血が巻き散るが、それでもグリムジョーは気にしない。足を千切られたロリは、さらに喚きたてるので、グリムジョーは最後にどてっ腹に一撃、蹴りを入れた。

そして漸く、井上を捕えることが出来た。

井上の顔は困惑に満ちていた。

何故、自分を助けたのか。

井上が困惑していると、グリムジョーが口角を吊り上げ、凶悪な笑みを浮かべる。

「てめえへの借りは返した。これで文句は言わせねえ。次はコツチの用事に、つきあってもらうぜ！」

グリムジョーの浮かべる笑みは、まるで獲物を捕まえた獣の如きものだった。

決闘

爪を研ぐ

その肉を切り裂く為に

牙を研ぐ

その骨を砕く為に

そして目は

その心の臓を睨む為に在る

「……………これはどういうこと?」

「っ……………」

「どういふことって訊いてんのよ、三下ア!!!」

「っー!!」

凄まじい形相で怒鳴るアニーシャに、ロリとメノリの二人は恐怖の色を顔に浮かべる。十刃落ちであるとしても、アニーシャはかなりの実力者なのだ。普通の破面であれば、殺すことなど簡単である。

アニーシャが何故怒っているのかには二つの理由がある。

一つは、部屋が血まみれになっていたこと。

もう一つは、その部屋に居たはずの井上織姫が居なくなっていたこと。

「グ……………グリムジョーが……………」

恐る恐る口を開いたロリに、アニーシャは視線を向ける。その瞳は、烈火のごとく燃え盛っている。

「グリムジョーが……………崩プリンセス姫を…連れて行った……………」

「……………あんの馬鹿が……………!!!」

グリムジョーが連れて行ったと聞き、アニーシャの顔には怒りと呆れの色が浮かぶ。そして早々と、グリムジョーの霊圧の痕跡を辿って

追いかける。

顔面に一発、拳を入れるために。

玉座の間。たった今ここには、死神三人と、破面が五人居る。

「――よく集まってくれた。レイチエル。スターク。バラガン。ハリベル。ウルキオラ」

帝守護刃であるレイチエルと、エスパーダ十刃の上位に位置する四人。ヤミーは帰刃すると第0十刃になるが、今回は呼ばれなかった。

「我々は一時間後、空座町に向けて侵攻を開始する。侵攻する者は、私達の他にギン、要、ワンダーワイス。そして十刃である君達とその従属官……そしてレイチエルだ。ウルキオラ。君にはその間、虚夜宮の守護を任せてもいいかな?」

「…はい。仰せのままに」

藍染の命令に対し、ウルキオラは丁寧に礼を返す。だがそれには感情など一つも籠っていない。

しかしウルキオラはそれでいいのである。

それを見て藍染は微笑み、そして再び口を開く。

「ウルキオラ。早速だが、此処に向かつて来る侵入者の霊圧が一つある。その迎撃を任せてもいいかい?」

「はい。すぐさま」

その指令に、ウルキオラはすぐさま響転でこの場からいなくなる。

(天宮城日向……やはり君は興味深い……)

それを見届けた藍染は、ふっと微笑んだ。

(…………井上の霊圧が近づいたと思ったら破面の霊圧と一緒に遠くに行って…………そのまま一護の霊圧があるところに行きやがった…………どういうことだ?)

霊圧知覚を限界まで高めて井上を探っていた日向は、井上の霊圧の謎の移動に疑問を抱いていた。

そして若干の進路変更も兼ねながら思案を巡らせる。

(誰かが裏切って井上を助け出したのか……………いや、それはねえな)

甘い考えを捨て、井上の移動が、何者かによる打算の上の行動だと考えた。だが井上の霊圧の移動先には一護の霊圧を感じ取ることができたため、もしやすると一護がそのまま井上を助け出すかもしれない。

そんな淡い期待を胸に抱きつつ、日向は先に進む。

(なら今の俺に出来るのは、脱出路の確保ってところか?それならどこに……………)

「藍染様の言っていたのはお前か」

「っ!!誰だ、お前!!」

突如目の前に現れた、病的に白い肌を持つ青年の破面に対し、日向は斬魄刀を抜く。それを見た青年は、響転で日向に肉迫する。そして手刀で、日向の喉元を刈り取ろうとするが、紙一重のところまで剣によつて防がれる。

防がれたことに対して一瞬目を見開く青年であるが、間髪を入れずに続けざまに手刀を繰り出す。しかしそれを日向は斬魄刀ですべて受け流していく。

それを見た青年は、一旦距離をとる。そしてそのまま腰の携えてい

た斬魄刀を抜く。

「……第4十刃、ウルキオラ・シファア」

クアトロ・エスパルダ

「つ……6、5と来て、次は『4』かよ……!」

「……成程。ノイトラを倒したのはお前か」

「ああ」

それを聞いたウルキオラは、無表情のまま斬魄刀を構える。それを見て、日向は白皇を構える。

両者が構えてから、数秒時が過ぎる。

緊迫した空気が辺りを包む。ウルキオラは人形のように身動き一つせずに、ジツと日向を見据えている。自分を見つめるその瞳をずっと見ていると、何か黒いものに吸い込まれそうな感覚に陥ってくると、日向は錯覚した。

(……隙がねえな……)

一切隙の無いウルキオラに対し、日向は思案を巡らせる。

そして、すぐさまある結論に辿り着く。

——虚化。

「っ!」

『行くぜ……ウルキオラ!!』

虚化した日向に、ウルキオラは目を見開く。日向は虚化した瞬間にすぐさま瞬歩で肉迫し、そのまま斬りかかるが防がれる。

そのまま何度か斬りつけるが、その全てをウルキオラの無駄のない動きによって防がれる。一度剣が交錯する度に、火花が散って辺りが照らされる。

虚化によって各段に上がった身体能力でも、ウルキオラにとっては余り変化の見当たらないものには見えない。虚夜宮で戦った一護も虚化していたが、霊圧の上昇度合で言えば一護の方が高かった。

一撃、また一撃と防ぎ、いなしてく。

「……この程度か?」

『縛道の六十一・六杖光牢』

「つ……これは……」

突如、ウルキオラの胸に光の帯が六つ刺さる。身動きが取れなく

なったウルキオラに対し、日向は左手の平をウルキオラに翳す。

『破道の八十八・『飛竜撃賊震天雷炮』』
ひりゅうげきぞくしんてんらいほう

「っ……………」

轟音と共に、日向の放った光線はウルキオラごと背後の壁を吹き飛ばす。

数秒閃光が瞬いた後、日向は白皇を背中に担ぐように構える。すると、響転で移動して来たウルキオラが、ちやうど斬魄刀を横に一閃するところであった。ウルキオラの服はボロボロになつてはいるものの、本人には大したダメージが通っていないように窺える。檻樓のようになつた死覇装を靡かせながら、ウルキオラは剣を振るう。

甲高い音が、大きな穴の開いた通路に響き渡る。

今の一撃を、日向が受け止めたのである。

『……………今のでそれかよ……………十刃つてやっぱり硬いな』

「……………成程な。お前は、確かに排除すべき対象だ」

二人が言い終えると同時に、両者は距離をとる。

その際にウルキオラは左手の人差し指を日向に突出し、その先から緑色の虚閃を放つ。だがその虚閃を、日向は同じく虚閃をもって相殺する。爆風が通路を奔り、爆音は広い虚夜宮の空へと響く。

ウルキオラは着地し、仮面を被る日向をじつと見つめる。

「……………名は何だ、死神」

『「天宮城日向だ」』

「そうか。ならば、天宮城日向。お前も、さつき穴を開けてやった餓鬼のように穴を開けてやる」

『「餓鬼……………だと……………？」』

ウルキオラの抽象的な物言いに、日向は仮面の下ではあるが怪訝な表情を浮かべる。

「黒崎一護だ」

『「っ……………なん……………だと……………!？」』

一護の霊圧は先程感じられた。それは確かなことである。つまりこのウルキオラという十刃は、一度一護を倒したということになる。その事実には、日向は白皇を握り直し、そして左手には虚帝を出す。

「ほう……………それも斬魄刀か」

『「ああ。そうだぜ」』

「だが、大した違いには見えんな」

『「そりやそうかい」』

日向はそう言った瞬間に、両者を中心とした場所に火花が散る。二人が同時に肉迫し、斬魄刀を交錯させたからである。

黒く染まった瞳と、無機質な瞳が睨みあう。

そして両者は無意識に霊圧を高める。急激な霊圧の上昇に大気が震えだし、床に罅が入っていく。そして先程、飛竜撃賊震天雷炮によつて大きく穴を穿たれた通路は、その負荷に耐え切れずに崩れ落ちる。幾つもの瓦礫が二人に落下するが、霊圧によつて弾き飛ばされる。最後の瓦礫が地面に落ちた瞬間に、両者は押し返すように距離をとる。

天宮城日向 VS ウルキオラ・シファー、開戦。

(暗え……………俺は……………死んだのか……………? 井上を……………助けられずに……………)

一護は朦朧とする意識の中で、井上を助けられていないことを後悔していた。新たに手に入れた虚化ですら、刀剣解放なしのウルキオラに圧倒された。しかも、そのウルキオラは十刃の中の序列は『4』。余りに、圧倒的だった。

(ちくしょう……………ちくしょう……………!)

だが、一護はだんだん自分の身体が温かくなる感覚を覚えた。まるで、血が通い始めたかのような、じんわりとした、優しい温かさである。

そして間もなく、一護の視界は色を取り戻し始めた。

そこに居たのは――。

「……………ネル……………と……………井上……………」

「黒崎くん……………」

「いっ……………いぢっっ!!」

意識を取り戻した一護に安堵する井上と、一護が生き返り目に涙を溜めるネルの姿であった。

そして、次の瞬間にもう一人の気配を感じ取った。現世で戦ったことのある荒々しい霊圧。自分に二度の敗北を感じさせた破面。

第6十刃、グリムジョー・ジャガージャック。

「うるせえぞ……………！喚くヒマがあったらさっさと治せ……………！」

「！お前……………グリムジョー……………！なんでてめえが井上と……………」

本来、井上と居る筈のない人物。否、破面。

倒れる一護に向かって鋭い視線を向けながら口を開く。

「てめえも黙って治されてろ……………！俺は無傷のてめえとケリをつける為に、ここに来たんだ……………！」

「!!グリムジョー！あなた、そんな事の為に治させて……………」

事情を察していなかった井上が声を上げるが、グリムジョーもそれに呼応するように声を上げる。

「うるせえって言ってるんだ!!死にかけてんのを治させてやってんだ！文句言うんじゃねえ!!急げよ!!いずれ気付いた奴がここに戻ってくる!!その前に――」

「――その前に、何？」

「!!!!」

突如現れた赤髪の女破面に、グリムジョーだけでなく一護と井上も驚く。その姿は、二人とも面識があった。一護は現世で、井上は面倒係として。

破面No. 106、アニーシャ・バレンタイン。

アニーシャは、意地悪そうな笑みを浮かべながらグリムジョーを見据える。そして横にいる井上たちには手をヒラヒラと振っている。

そんなアニーシャを見て、グリムジョーはあからさまに嫌そうな顔をする。まるで、面倒な知り合いに会ったかのようなリアクションで

ある。

「よりもよって、てめえかよ……………」

「何？レイチエルが良かった？」

「そいつは御免だな……………」

数秒、二人の間に沈黙が流れるが、その流れを取りやめたのはアニーシヤの方であった。

「ウルキオラが倒した侵入者を治して、どうするつもりなの？」

「決まってるんだろ……………コイツとケリをつけんだよ!!」

そう言うグリムジョーに、アニーシヤは呆れた顔をする。

(コイツ……………昔からこうだよ……………まったく……………!)

数年前。アニーシヤ・バレンタインがまだ、クアトロ・エスパーダ第4十刃だった時の話である。その時、アニーシヤは従属官を持たず、一人でのんびりと、上に座す者として日々を過ごしていた。

だが、そんな時に藍染から、とある命令が出た。破面とする為の大虚を捕獲せよとの命令だ。

当時、十刃一の響転を有していたアニーシヤは、虚園の砂漠を飄々と駆けた。その際に見つけた大虚の集団のトップが、後に第6十刃セスタ・エスパーダとなるグリムジョー・ジャガージャックであった。グリムジョーに従うシャウロンなども、破面としての圧倒的力を見せつけ、無理やり連れてきて藍染に献上した。

その時、破面化したグリムジョーはまだNO.12だった。

その際に藍染の命令で、グリムジョー達はアニーシヤの従属官となった。初めての従属官ということでアニーシヤはどう扱えばいいか戸惑い、グリムジョーも他人の下に着くつもりなどなく、互いに一定の距離を保っていた。

だが、転機が訪れる。虚夜宮で定期的に行われる、番号を巡っての決闘があった。そこでグリムジョーは、挑戦者を圧倒するアニーシヤ

の姿を見ていた。アニーシャの戦い方は、限りなくグリムジョーに近いものであった。だからこそ、グリムジョーは思った。

——俺は、コイツを超える。

その日から、グリムジョーは何かにかけてアニーシャに喧嘩を売るようになった。だがそのいずれも、基本的に自由奔放なアニーシャによつて流され、中々戦うことが出来なかった。

それでもグリムジョーは、練磨の間にアニーシャに喧嘩を売りながら力を付けていった。

そして決闘の時。

その決闘は一進一退だった。限りなく戦い方が同じで、そして限りなく実力が同じだった二人は、互いの血肉を裂き、刀剣解放をし、一時間以上戦った。

——その決闘を制したのは、アニーシャだった。

そして『自分を殺せ。情けをかけるな』と言うグリムジョーに対し、アニーシャは短い間でも自分の従属官であったグリムジョーに対し情が生まれ、止めを差すことが出来なかった。

だがそれはグリムジョーにとって、屈辱的な出来事であった。

生を承らえたグリムジョーは、再びアニーシャとの決闘を行う為に力を付けていった。

だが、その願いは叶わなかった。

——『アニーシャ・バレンタインの、十刃落ち』

そうなった理由は、元第0十刃であるザエルアポロと同じく、自らの魂を別つことによつて二人となり、戦闘能力が激減したこと。その際に生まれたのが、アニーシャの妹であるサラ・バレンタインであった。

その理由にグリムジョーは失望した。自分が一瞬でも憧れた相手からの、自分への裏切りとも取れた。

そして程なくして、グリムジョーは第6十刃に選ばれたのである。己の中に沸々と滾る怒りと共に——。

「……………分かった。好きにしちやつて」

「っ、アニーシャちゃん！」

了承するアニーシャに対し、井上が声を上げる。その思いは痛い程解っていた。だが、アニーシャはグリムジョーの中に滾る思いも、理解していたのである。

「チャン織。こういうのはこの馬鹿共二人の意見を訊こうじゃないかね。アタシ達女がどーこー言つたつて、この馬鹿猫は聞かないからね」

「ああ!？」

馬鹿猫と言われ、グリムジョーは眉間に皺を寄せさせる。だが、それを気にせずにアニーシャは一護に向かって話しかける。

「で、ストロベリーボーイ。アンタはどうなの？」

「……………俺はやる。井上、治してくれ」

一護の言葉に井上は悲痛な目を向けるが、一護の表情を見て、少し俯いてから頷く。それを見ていたアニーシャは、井上の傍によって笑いかける。

「ほうち。こういう奴等は、一度股の間にぶら下がってるゴールドンボールが潰れない限り、一生馬鹿なんだから」

「ゴ……………ゴールドンボールですか……………」

アニーシャの遠回しな言い方に、井上は顔を引きつらせる。それに対し反応したのはネルだった。

何かを思いついたのか、手をポンツと叩く。

「……………はっ！キンタマの事ツスね!!」

「ネルちゃん、駄目！折角、アニーシャちゃんが遠回しに言ったんだから！」

ネルの直球過ぎる言葉に、井上が顔を紅潮させながら止めようとするが、すでに口から出たものなのでどうしようもない。

「どうでもいいから早く治しやがれ!!」

「……………井上。俺からも頼む」

「ぐ、ごめんなさい!!」

グリムジョーと一護の催促に、井上はあたふたとして双天帰盾で一護の傷を癒し始める。

それを見てアニーシャは、思わず嘔き出すのであった。

黒翼

教えてやろう

ここが最も

地獄に近い場所だと

『破道の三十三・『蒼火墜』』そうかつい

虚化している日向は、ウルキオラに向かって「蒼火墜」を放つ。その攻撃が、ウルキオラに通らないことは既に理解している。「飛竜撃賊震天雷炮」でもウルキオラの鋼皮を消し飛ばす事は出来なかつたので、三十番台の鬼道での効果などたかが知れているだろう。

ウルキオラは自らに迫りくる青い火炎を、左手の一振りでかき消す。だが、掻き消した際に炎の陰から一瞬で、日向はウルキオラの懐に潜り込んだ。そのまま、「白皇」と「虚帝」を交錯させるようにして、ウルキオラの胴を斬りつける。

『……ちつ……』

だが、その斬撃はウルキオラの死覇装を斬るだけで、肝心の鋼皮を斬り裂くことが出来ない。懐に入って攻撃したのにも拘わらず傷を負わせられていない日向に対し、ウルキオラは右手に携えている斬魄刀を振り下ろす。

日向は咄嗟に右に転がってその一撃を回避するが、すぐさまウルキオラが響転で日向の背後に回り込む。そして再び剣を振り下ろそうとするが、その一撃は「虚帝」によって防がれる。

虚帝を形成する黒い霊圧の一部が、火花のように一瞬辺りに散る。だがウルキオラの一撃を防ぐほどの強度を有してはいた。

一瞬の鏖迫り合い。だが、横に転がっている途中で剣を防いだ日向は隙だらけである。ウルキオラは左手の人差し指を日向に向ける。

そして瞬く間に、緑色の閃光が収束していく、床に転がっている日向に襲いかかる。

———
“黄火閃”
おうかせん

刹那。虚閃が日向に襲いかかる前に、日向は右手に握る白皇を放し、そして手の平からそのまま“黄火閃”を放ち、その攻撃をブースト代わりに自分の体勢を無理やり持ち上げて立て直す。

だが肝心の日向の斬魄刀は、ウルキオラの放った虚閃に巻き込まれて遠くに弾き飛ばされる。

(斬魄刀を放すなど浅慮だな、天宮城日向)

二本ある斬魄刀ある内の一本を手放したことに、ウルキオラは浅慮であると評価する。そう思いながら、ウルキオラは右手の斬魄刀の柄に左手を掛け、両手で持って力を込める。

それには日向も一瞬、仮面の奥に見える瞳を細める。

破面の、それも十刃の腕力は只の死神の比ではないだろう。ウルキオラが力を込めることによって、虚帝を支えている左手の骨がどんどん軋んでいく。

だが次の瞬間に、日向の右手に先程弾き飛ばされた白皇が戻ってくる。その光景に目を見開くウルキオラに対し、日向は戻ってきた白皇を逆手に持って、そのままウルキオラの左腕を斬りつけようとする。

しかし、それよりも早くウルキオラは響転によって日向との距離を取った為に、その一閃は空振りに終わった。

距離を取った瞬間に、ウルキオラは白皇の柄尻に、何やら糸のようなものが繋がっている事に気付いた。恐らくそれを手に繋げることによって、先程白皇を放す事に躊躇いを持たず、尚且つ今手元に白皇を手繰り寄せることが出来たのだろうと考える。

「……………だが、始解で俺を倒そうなど、愚考にも程があるな」

『……………ああ？』

ウルキオラの言葉に、日向は怪訝そうな声を出す。確かに現在、日向は虚化こそしているものの始解状態である。十刃であるルピヤノイトラを倒す際には、日向は必ずしも卍解状態になって戦っていた。確かに今までの戦闘を振り返るのであれば、卍解状態で戦った方が

事は有利に進んでいく筈である。だが日向は、早々に卍解を相手に見せることにより手の内を晒すことを懸念したため、最初の内は虚化によるパワーアップ状態で様子を見ることにしたのである。

「卍解を出せ、天宮城日向」

『……………確かにこのままじゃ、埒が明かねえな……………いいぜ』

そう言つて日向は左手を自分の前に突き出す。それと同時に、虚帝や顔の仮面が黒い霊圧となつてだんだん鞘を形成していく。そしてその鞘——『因果之鞘』に、日向は『陽天之劍』を納める。

「卍解——『虚哭隸王』」

陽天之劍を因果之鞘に納めると同時に、因果之鞘を形成していた黒い霊圧が日向を取り囲み、そして次に日向が姿を現す頃には、その身に白い衣を身に纏つていた。黒い霊圧が辺りに流れていくことによつて、日向の白い髪と耳にぶら下げている勾玉、そして白いロングコートや袴が靡いている。

そして次の瞬間に、日向はウルキオラに一瞬にして肉迫する。そしてそのままウルキオラに向かつて一閃するものの、ウルキオラは寸での所でその一撃を防御する。だが予想以上の衝撃によつて、ウルキオラは後方の壁に激突し、尚且つそのまま壁を突き破る。

そんなウルキオラに追撃しようと、日向は瞬歩で再び肉迫する。迫りくる死神に対し、ウルキオラは再び緑色の閃光を左手の人差し指に収束させる。

そして虚閃特有の不気味な音を奏でながら、緑色の虚閃は白い衣を纏う死神に向かつて行く。

「うおおおおお!!」

だが、迫りくる虚閃を日向は左腕の一振りでかき消す。その光景には流石のウルキオラも目を見開く。まさか自分の虚閃が、こんな餓鬼の腕の一振りでかき消されるとは。

それを見たウルキオラは何を思ったのか、凄まじい速さで空に向かつて飛んでいく。ウルキオラを追撃しようとしていた日向も、それに連なつて空に上つていく。

(……………どこまで行く気なんだ……………!?)

ウルキオラは一向に止まる気配を見せない。最初の内は、空中戦を仕掛けるのかと身構えていた日向であるが、恐らくウルキオラの狙いはそれではないのであろうと予測した。

青い空の下に広がる虚夜宮の景色が良く見える所まで上ってきた。こうして上から見ると、やはり虚夜宮が異常な大きさであることがよく分かる。

既に雲がかかっている高度まで上ってきたが、未だにウルキオラは止まる気配を見せない。

本当に、一体何をやる気なのかと身構えていると、突然ウルキオラが目指していた空の光景が崩れた。砂煙のようなものと、瓦礫が地面に落ちていく光景を見て、日向はこの虚夜宮に広がっている青空が造られたものであると理解した。

それはともかく、日向はウルキオラが突き破った天蓋の穴を潜り抜ける。

すると、日向の目の前にそびえる一本の円柱の上に、ウルキオラが佇んでいた。

「……………は……………」

「……………虚夜宮の天蓋の下で、禁じられているものが二つある。一つは、十刃の為に存在する虚閃、グラン・レイ・ゼロ『王虚の閃光』」

(……………さつきノイトラって奴、普通に使ってたけどな……………)

どうやら、虚夜宮にも禁止事項があるらしい。その禁止事項二つの内の一つが、自らの血と霊圧を媒体にして放たれる『王虚の閃光』らしい。どうやら日向と戦っていた十刃・ノイトラは、その禁止事項を破って戦っていたことになる。

だが、今はそんなことはどうでもいいことである。

「……………そしてもう一つが、第4クアトロ以上の十刃の解放。どちらも、強大過ぎて虚夜宮そのものを破壊しかねないからだ」

その言葉に、日向の表情が強張る。ウルキオラの言うことを聞く限り、第4未満の十刃は虚夜宮の天蓋の下で解放することは許されていないが、それでも王虚の閃光を放つことは許されていない。だが、第4以上の十刃は王虚の閃光を使わずしても、天蓋の下での解放が許され

ていないことから、解放すれば王虚の閃光並みの虚夜宮を破壊せしめる力を有していることになる。

あの広範囲を塵にせしめる破壊力を常時有す解放状態など、想像しなくもない。

そう思っている日向に、ウルキオラは斬魄刀の切っ先を日向に向ける。

「鎖せ」

——『ムルシエラゴ黒翼大魔』

突如、黒い液体が舞い上がり、天蓋の上に雨のように降り注いでいく。暫くそれが続くと、円柱の上で大きな翼が大きく開かれる。

巨大な漆黒の翼。仮面の名残が四本の角の兜になっており、服装も下部がスカート状になっている。そして両眼の下に垂直に伸びた緑色の線状の仮面紋はより大きくなっている。

一番目を引くのはその漆黒の翼であるが、思っていたよりも大きな変化はない。

「……………動揺するなよ」

ウルキオラの声に、日向は警戒心を高める。

「構えを崩すな。意識を張り巡らせろ。一瞬も気を緩めるな」

静寂が、辺りを支配する。

そしてウルキオラの右手に、光の槍が——。

「——っ！だらあ!!」

突如、目の前まで肉迫して来たウルキオラによる槍の一閃を、日向はギリギリの所で虚哭隸王で弾く。

その際に、辺りに凄まじい衝撃が奔り、天蓋に罅が入っていく。そして衝撃音は、静寂が支配していた虚園の空を響き渡っていく。

「……………今のを弾かれるとはな」

「……………そうかよ」

そう言っただけなら、日向がウルキオラに虚哭隸王の切っ先を向ける。

「……………はや迅いだけなら、俺を斬れねえぞ」

「……………成程な」

刹那、二人の姿が消え、再び辺りに衝撃が奔っていく。衝撃は一度

や二度ではなく、何度も虚園の夜空を奔り、その度に雷鳴のような轟音が辺りに鳴り響く。

そして最後に一度、一番大きい轟音が鳴り響いた後に、二人の姿が見えるようになる。そしてウルキオラは手に携えている光の槍「フルゴール」を日向に投擲する。

——「ルス・デ・ラ・ルナ」。

雷のように空を奔る槍に向かって、日向は巨大な白銀の斬撃を放つ。

——「あまのはばきり天羽々斬」。

日向の放った白銀の斬撃は、ウルキオラのフルゴールを忽ち呑み込み、そのままウルキオラに迫っていく。それを目の当たりにしたウルキオラは、響転を持って「天羽々斬」を回避する。

そしてその際に、左手の人差し指に黒い光を収束させていく。

——「ゼロ・オスキュラス黒虚閃」

漆黒の破壊の閃光が、白い衣を纏う死神に一直線に奔っていく。その際に、極太であつたウルキオラの黒虚閃は、接する天蓋を悉く削り去って行く。

そんな強大な虚閃に対し、日向は左手を翳した。

——「黒虚閃」……！

ウルキオラの黒虚閃が緑色の霊圧を少し纏っているのに対し、日向は青色の霊圧を少し纏っている黒虚閃をウルキオラのものどぶつけた。

二人の黒虚閃は天蓋の上で凄まじい衝突を繰り広げる。虚園の空の下で、黒いスパークが辺りにまき散らされていく。その光景を見て、ウルキオラは瞠目する。

（馬鹿な……虚の仮面を被れる程度の死神が、解放状態の俺の放つ黒虚閃と同威力の黒虚閃を放つとは……）

ウルキオラが思案を巡らせている間にも、二つの黒虚閃は相殺されて収束していく。二つの黒虚閃の衝突により、虚園の空には歪んだ空間が出来ている。

その光景を見た後、ウルキオラは再び右手にフルゴールを出現させ

る。そんなウルキオラに対し、日向は虚哭隸王を構えながら笑みを浮かべる。

「ウルキオラ・シフアー………テメーを倒すついでに、ラス・ノーチェス虚夜宮を瓦礫の山にしてやるよ」

「……成程な。威勢を張るだけの實力はあるようだ。だが、教えてやろう。お前の思う程、俺という壁は脆くないぞ?」

「んなもんわかってら………なんだったら、テメーを倒す前に虚夜宮が瓦礫になりそうだがな」

そして再び、虚園の空に静寂が訪れる。

——刹那。

「」

二つの影が、激突した。

虚夜宮の天蓋の上で、日向とウルキオラの激突が始まった頃、下でもある死神と十刃の戦いが始まろうとしていた。

オレンジ色の髪の毛の死神が、水色の髪の毛の破面と並走して宙を駆けている。そしてとある場所から一定距離離れた後に、オレンジ髪の毛の死神――

――黒崎一護は地面に降りた。砂漠である地面に着地すると同時に、辺りには砂塵が巻き起こる。そしてその砂塵が晴れる頃に、一護は卍解をし終えて黒い斬魄刀を右手に携え、その身には黒いロン

グゴートを身に纏っていた。

それを見て、水色の髪の破面——グリムジョー・ジャガー ジャックは満足そうな笑みを見せながら同じく地面に降り立ち、斬魄 刀を鞘から抜く。

そして互いに姿を見据えた瞬間に、両者は激突する。

その衝撃は、遠くで心配そうに眺める井上やネル、そしてアニー シャの下にも届いた。

一護とグリムジョーは幾度となく続き、その度に三人の下にも届いて、井上とネルに不安を抱かせる。

「……………黒崎くん……………」

二人の激突を見て、井上は心配そうな表情を浮かべている。そんな 井上を見て、アニーシヤは意地悪そうな笑みを浮かべて、井上に歩み 寄る。

そして井上の頬をツンツンと突く。

「心配なさんな〜♪チャン織はあの子のこと信じてないの〜?」

「え……………?あたしは只……………黒崎くんが怪我してくれなければ……………そ れで……………」

「でも、殺し合いなんだから、絶対怪我はするって」

井上の甘い考えに、アニーシヤはズバツと言葉を放つ。それを聞いて 井上は、複雑な表情をしながら俯く。

だが、その気持ちが解らないでもないアニーシヤである。何事にお いても怪我をしないことはいいいことであると思う。だが戦いに於い て怪我をしないなど、ましてや強者同士の戦いに於いて無傷など、よ ほどの実力差が無い限りないことといってもいいだろう。

それは元第4十刃でもあるアニーシヤには解っていた。

「じゃあ……………死ななくてくれれば……………」

「グリムジョーに負けたとしたら、確実に死ぬよ?」

「つ……………じゃあ、どうすれば……………」

「……………願うだけタダなんだから、願うなり祈るなりしてあげたら?」

悩む井上に、アニーシヤはそうアドバイスする。別にアドバイスな どする必要などアニーシヤにはない。だが、アニーシヤの中にあるお

節介な心がそうさせた。

それを聞いた瞬間から、井上は手を握って瞼を閉じる。

それを見て微笑むアニーシャだったが、次の瞬間には焦燥が顔を覆った。

「……………こいつが…十刃にだけ許された、最強の虚閃だ!!!」

グリムジョーが一護に向けて「王虚の閃光」を放とうとする。だがその射線には一護のみならず、井上達三人がいる場所も含まれていた。

それを理解した瞬間に、アニーシャは顔を引きつらせる。

「あの馬鹿猫オ!!!」

咄嗟に、近くにいる井上とネルの身体を抱きかかえて逃げようとする。

「王虚の閃光!!!」

「にやあ、あ、ああ……あ……!!!?」

急いで逃げようとしたアニーシャであったが、王虚の閃光が三人に届く前に、何者かによつて防がれた。

それは勿論一護なのであるが、霊圧の量や濃度、禍々しさがつい先程とは別人であった。三人が茫然として一護を見ていると、一護が井上やネルの安否を確かめるために振り返った。

そして井上は、そんな一護の顔を見て息を飲んだ。

虚の仮面。

一護が一月の間、破面との戦いの為に平子達「仮面の軍勢」の下で修業して手に入れた新たな力。だが、その仮面の下から覗く一護の黒い瞳を見て、井上は一瞬恐怖を抱いた。

『……………悪い、怖い。このカツコで安心しろつつつても難しいだろうな……………でも言わせてくれ。安心しろ。すぐに終わらせる』

一護はそう言つて、地上に立っているグリムジョーを見据える。グリムジョー本人はと言うと、虚化した一護を見て満足そうに笑みを浮かべる。

獲物を見つけた獣のように。

「く……………はははははははははは!!!いいぜ……………待ってたんだ……………この時を

よお……!」

そう高らかに笑い声を上げながら、グリムジョーは斬魄刀を構える。そしてその刀身を、爪で掻き立てる。

それと同時に、刀身からは水色の霊圧が溢れだす。

「軋れ——『豹王』!!!」
パンテラ

グリムジョーが刀剣解放すると同時に、砂塵が巻き上がりさらには濃密な霊圧が辺りに溢れだす。

『……………アンタ……井上達を任せてもいいか?』

「ああ? まあいいよ」

『「そうか……じゃあ頼んだ」』

そう言つて一護は、砂塵の中に向かって一気に近付いていく。その瞬間に、巻き上がる砂塵の中から刀剣解放し終えたグリムジョーが姿を現す。鋭い牙を生やし、猛獣の鬣を思わせる長髪、獣のように尖った耳、さらに身体を鎧が覆っている。さらに尻尾も生え、両腕と両脚に刃がついている。

刹那、一護の天鎖斬月とグリムジョーの腕の刃が交錯する。

直後、二人を中心にさらに砂塵が巻き起こる。そこから数秒鏢迫り合いに発展するが、グリムジョーがその場で一護に向かって回し蹴りを喰らわせる。

それによつて一護は吹き飛び、背後にあった円柱を幾つか破壊しながら吹き飛んでいった。そんな一護を、グリムジョーは響転で追撃しようとする。追いかける。

「どうした黒崎イ!? そんなもんじゃねえだろうがア!!」

『……………たりめえだろうが』

グリムジョーの咆哮に、一護は小さく呟く。そして、月牙天衝を放とうと刀身に黒い霊圧を纏わせる。

そして肉迫して来るグリムジョーに、力の限り刃を振るい月牙天衝を放つ。

(日向の虚化は、こんなもんじゃねえんだよ……!!!)

思い出されるのは、双☒で日向と藍染が直接対決を行った時のこと。あの場面で日向は、全てを棄てる覚悟で虚化を行い、一護と恋次、

そして粕村を瞬殺した藍染に傷を負わせるといふ快拳を成し遂げた。あの時の日向の霊圧には、自分は未だに届いていないと一護は考えている。それほどまでに日向の虚化は完成されていた。

仮面の軍勢のアジトで修行している時にも、平子達の虚化を見たがまるで別物であった。そしてその理由を探るために、平子に日向がどういう経緯で虚化になったのか訊いたが、『藍染にやられたらしいが、自分とは時期がちやうから解らへん』と平子には言われた。

つまり日向は、自らの方法だけで虚化をあの次元まで昇華させた。一時は日向に直接訊こうとも思った。だがそれは烏滸がましいと一護は考えたのである。自分はたかだか一か月。それに比べて日向は、四十年以上も内なる虚と向き合ってきた。そもそもつい最近まで内なる虚を押さえられなかった自分が、日向と同じ感覚で虚化を練磨させることなど出来ないと考えていた。

だが一護にはつきりしていたことは、あの時の日向の虚化が、今の自分にとっての虚化の到達点であることである。

『月牙……天衝オオオ!!!』

まだ、一護とグリムジョーの戦いは始まったばかりである。

襲来

貴方の歌声が

私の三半規管を揺らす

『……阿散井、茶渡君。あいつを何秒足止め出来る？』

恋次は、先程石田に問われた内容を頭の中で繰り返し考えていた。それは茶渡も同じだ。ザエルアポロは厄介な破面であり、恋次の正解を封じている。この中で最も攻撃力が高い方法が封じられているのは痛い、それでも茶渡の能力が封じられていないことは幸いであった。

だが、茶渡の放つ一撃は、ザエルアポロの従属官達肉壁によって防がれている。このまま無駄に時間を掛けたしまったならば、それこそザエルアポロの思うつぼである。いずれ茶渡の能力も解析され、何かしらの手で封じられてしまうだろう。

そうさせないために、三人は一刻も早くザエルアポロを仕留めなければならぬ状況に陥っていた。

『巨人の一撃』オ!!』

従属官に向かって、茶渡は強烈な一撃を放つ。直撃した従属官はそのまま吹き飛んで、多くの他の従属官を巻き込んでいく。

それにより、一瞬だけ、ザエルアポロの姿が見える。

それを見ていた恋次は、決心する。

「石田！茶渡！」

「っ……！」

恋次の声に、二人は無言で頷く。

それと同時に、恋次は蛇尾丸を頭の上で振り回し、刃節を限界まで伸ばす。遠心力のお蔭で、回転する速度はどんどん上昇していき、辺

りには旋風のような風が巻き起こる。

それを見てザエルアポロは鼻で笑う。

「ブン……………何をしてくると思えば……………やはり只の力押しか!」

恋次が最高速度で回転している蛇尾丸を、ザエルアポロに向けて振り、それをザエルアポロは右手で叩き落とそうとする。

「茶渡!!」

「なっ……………!?!」

だが、その瞬間に恋次が叫んだことにより、ザエルアポロは後ろに回り込んでいた茶渡に気づいた。だが驚いたことは後ろに回り込まれたというのが理由ではない。茶渡が、人間にできる筈のない速度で回り込んできたのである。死神には『瞬歩』、滅却師には『飛廉脚』、破面には『響転』があるが、茶渡のそれはそのどれにも当て嵌らない。そして僅かだが、茶渡の足の裏がチカチカと光っていることを確認した。

「『エル・ディレクト巨人の一撃』 オオ!!」

「それは見飽きた!!」

茶渡の一撃は、ザエルアポロが横に躲したことで、ザエルアポロ目にかけて振るわれた蛇尾丸と激突し、それと同時に蛇尾丸が天井に弾かれる。

挟み撃ちをしようとして失敗したのだとザエルアポロは考えていたが、それは天井が崩れてくることにより、思考は中断される。天井が崩れ落ち、無数の瓦礫が落下してくる。その光景を目の当たりにして、ザエルアポロは瓦礫に巻き込まれないように、崩れた天井から離れる。

その際に、最も近くにいた茶渡がザエルアポロに拳を振るうが、それは軽くいなししていく。

「フンツ……………!!低劣種が……………この程度で僕を……………」

「予想通りだ」

「!」

だが、ザエルアポロが後ろに下がると同時に、石田の声がさらに後ろの方から部屋に響いて聞こえてくる。その手には銀筒を携えてい

る。

「二人の攻撃を受ければ、成功しようが失敗しようが二人の逆の方向に退く。今のは最終的には茶渡君に調整してもらったが……君は相手を見下すのが好きなようだからね。攻撃を回避したら敵の手の届かないギリギリの距離をとるクセがある」

「……それが何だ？君こそ随分と背後を取るのが好きらしい。それで勝ったつもりか、滅却師？」

「……ああ」

ザエルアポロの問いに、石田は銀筒を逆さまにして、地面に突き刺さっている“魂を切り裂くもの”の上に、何かの液体が注がれている。その行動を注視していたザエルアポロだったが、自分の中心に地面に五芒星が描かれていることに気づく。

いつの間にか？と思うザエルアポロであるが、時はすでに遅かった。

石田が傾けた銀筒の中に入っていた液体——霊子が“魂を切り裂くもの”の柄に今まさにつかうとする。

「な………何だ、これは………!?!」

「『破芒陣』シュブレンガー。世界には君の知らないこともあるってことさ。解り易く、君達の言葉で今の状況を説明してあげようか」

霊子が、柄に付着する。それと同時に五芒星が凄まじい輝きを見せる。その光景に、ザエルアポロは目を見開く。

そして石田は、眼鏡の奥からザエルアポロを見据えながら言った。
「アスタ・アキ終わりだよ。ザエルアポロ・グランツ」

「く、クソオオオオオオオオオオ!!」

直後、結界の中で大爆発が起こる。

その爆発はやがてザエルアポロを囲っていた結界ごと吹き飛ばす。
(僕が………こんな所で………!!)

爆発の中で、身体が焼け焦げる最中でもザエルアポロは意識を保っていた。そして腰の斬魄刀を抜き、唱えながらその刀身を呑み込む。

「啜れ——『邪淫妃』!!!」

「な……………なに……………!?!」

爆発の中で刀剣解放をしたザエルアポロに、恋次だけでなく他の二人も驚く。そして爆炎の中から、奇怪なシルエットが浮かび上がる。翼のような触手が背中から伸び、下半身は植物の根つこのようになって広がっている。やがて爆風が晴れると、その中からザエルアポロの姿が現れる。

「さあ……………第二幕の開演……………いや、訂正しよう。第二幕の——
……………終演だ」

「——『豹王デスガロンの爪』。俺の最強の技だ」

一護とグリムジョーが戦闘を始めて早数十分。一護は虚化を発動し、グリムジョーは刀剣解放——『豹王バンテラ』を発動している。そして戦いが佳境に入った所で、グリムジョーはとっておきの技を繰り出してきた。

『豹王の爪』。超巨大な霊圧の爪を出現させ、敵を斬り裂く技。元々は、アニーシヤの刀剣解放——『焰狩ゲバルト獵豹』の『焰ウーニャ・リアマ爪』の強化版・『灼熱烈爪』を自己流に真似たものであった。だが、長年のグリムジョーの練磨により、それはオリジナル以上の完成度を誇るものになっていた。

(なんて霊圧……………あの時とは比べ物にならない……………!)

それを直に見ているアニーシャは、グリムジョーの『豹王の爪』がすでに自分の必殺技を超えていることを悟った。

それと同時に、そんなグリムジョーと互角に戦っている一護に驚いていた。以前一護を見たときは、グリムジョーに傷を負わせたものの、後半はボコボコにやられていたというのがアニーシャの感想だった。だが今の一護は、帰刃状態のグリムジョーと同格。この短期間でそのレベルに成長していることに驚いていた。

「黒崎くん……………」

『豹王の爪』を繰り出された直後から防戦一方になっている一護を見て、井上が不安そうな表情を浮かべる。

それを見て、アニーシャは複雑な気持ちになる。自分はグリムジョーに勝つて欲しいが、それでは井上が悲しむ結果となる。だが井上が喜ぶ結果では、それはグリムジョーが倒されるという結果であるのだ。

そんな思考を巡らせていると、戦況が変化した。

『豹王の爪』に対して一護は天鎖斬月を突き立て、そのまま『豹王の爪』を一本裂いていった。

そこからは一護のターンであった。

次々と繰り出される『豹王の爪』に対し、一護は月牙天衝を刃に纏わせた状態で次々と斬り裂いていく。恐らく咄嗟の機転であったのだろう。月牙天衝を纏わせたままの刀身の切断力は上昇し、『豹王の爪』に対し対抗している。

「黒崎くん!!」

「ッ……………グリムジョー……………」

一護は次々と『豹王の爪』を斬り裂いていき、最後の一つを斬り裂くと同時にグリムジョーの胴体を一閃した。そしてグリムジョーの身体からは鮮血が舞う。

そしてグリムジョーは力なく地面に落下していった。だがその途中で一護がグリムジョーの腕を掴み、そのまま共にゆっくり着地した。

「グリムジョー!!!」

アニーシヤはたまらず、グリムジョーの元へと駆け出す。途中で一護とすれ違うが、目もくれないで駆け寄る。

その間に、一護は井上とネルの居る場所へと到着した。

「……ケガ……ケガ……してねえか?……井上……」

一護のその表情に、井上はいつもの一護だと安堵し、ネルは超加速を発動しながら一護に抱き着く。

その後、井上を肩に担いで下に降りたり、一護がネルに金的を喰らったりと、様々なことがあったが、そこにはつかの間の『日常』が流れていた。

「ちよ……グリムジョー!待ちなさいよ!」

「う……るせえ!!」

「ッ!!」

そんな一護達に、帰刃が解けているグリムジョーが歩み寄ってくる。だがすでに満身創痍であること間違いなく、アニーシヤが無理に支えることで漸く立てている状態だ。

だがグリムジョーは、そんなアニーシヤを振り払い、刀剣解放が解けたことにより手元に戻った斬魄刀で一護に斬りかかろうとする。

だがそれを一護は少し体を傾け、手首を掴み眼前で止める。

「もう止める……グリムジョー……そこに居る奴を……悲しませんじゃねえよ……!」

「黒崎くん……」

「いちぢ……」

一護はグリムジョーに、アニーシヤを悲しませるなという風に言葉にする。

「うる……ぐッ!!」

「っ!!?グリムジョー!!!」

一護は、突如グリムジョーの首元に光の矢が刺さったことに驚愕する。そしてすぐに、矢が飛来して来た方向を見る。

(今の矢……石田のと同じ……滅却師か!?)

「無様だな。グリムジョー・ジャガージャック」

「てめえは……………現世で会った……………!!」

砂丘の上に佇んでいたのは、左手に光の弓を携える金髪の女破面。その容姿を、一護は忘れる筈もなかった。

一護の様子に対し、その破面は弓を消し、代わりに腰に差していた斬魄刀を抜いた。

そしてそのままグリムジョーの元に、響転で接近する。

「っ!!」

満身創痕のグリムジョーには、その速度は速過ぎた。すでに斬魄刀は振り上げられており、後はそのままグリムジョーを斬り裂くのみだ。

「月牙天衝オオオオオ!!!!」

「ちっ」

だが、寸前の所で一護が月牙天衝を放つことで牽制することとなり、そのまま破面はグリムジョーから距離をとった。

「虚夜宮調和刃……………クリステイナ・エルフリーデ!!」

その姿を見たアニーシャが、破面の名前を口に出す。

「おい…アンタはグリムジョーを連れて逃げる!!井上とネルもだ!!」

グリムジョーに駆け寄ったアニーシャに対し、一護はありつただけの声量で叫ぶ。

——コイツは不味い!

一度現世で相對したから解ること。このクリステイナという破面は危険すぎる。それこそ、ウルキオラと同じレベルで。

天鎖斬月を構える一護に対し、クリステイナは肉迫し、そのまま斬魄刀を一閃する。それを辛うじて受け止めるが、グリムジョーとの戦いで疲弊している一護にとっては重すぎる一撃であり、そのまま後方に吹き飛ばされる。

「ぐっ!!」

「フンッ……そんな身体で私とやり合えると思っているのか？」

クリステイナは吹き飛ばし一護に対して、容赦なく虚閃を放つ。それを避ける間もなく喰らった一護の死覇装はボロボロとなり、上半身はほぼ裸になる。

だがクリステイナの連撃は止まらずに、虚閃を喰らって怯んだ一護に対し、一護の頭上に回り込んでそのまま上からとび蹴りを喰らわせ、そのまま砂漠に叩き付ける。

「があっ……!!」

次に、クリステイナは左手に弓を形成し、そこから地面の上の一護に狙いをつける。

『光 雨』

刹那。一護の居る場所が一瞬にして光の矢に埋もれる。絶え間なく放たれる矢に、一護は身動きが取れない。

それを一護に言われて逃げている途中のネルが、逃げる事を止めて見る。

その顔は、恐怖と焦燥に覆われている。

「ネルちゃん!」

「……何でネルたつは逃げてるんすか?このままじゃ……一護は死んじゃうツス!!」

「っ……………」

絶え間なく降り注ぐ矢に対し、一護は何の抵抗もすること出来ない。このままでは一護が息絶えるのは時間の問題だろう。

ネルが井上に訴えかけている間にも、クリステイナは手を変えてきた。

『トルメンタ・デステリーヨ
嵐 光』

光の矢だったものは、やがて虚閃の嵐になる。辺りは虚閃の赤い光

によって不気味に照らし出され、まるで地獄絵図かの如き彩色を放っていた。

「く……黒崎くん!!黒崎くん!!」

「いちごっ!!いちごっ!!おおおおお!!」

「黙れ!!」

泣き叫ぶ二人に向かって、クリステイナは虚閃を放つことを一旦止め、矢を二人に向かって放つ。井上の脇腹に一本中り、ネルは頭の後面の名残の部分に中る。

「きやつ……つう……!!」

「だ……大丈夫ツスか?」

「うん……でも、黒崎くんが……!!」

井上は自分の脇腹に刺さる矢に目もくれず、再び虚閃の嵐を喰らおうとする一護の場所に目を向ける。

「月牙……天、衝っつ!!」

「フン」

大きく窪んだ穴から放たれた斬撃は『黒くなかった』。それはいとも容易くクリステイナにかき消される。

窪みにいた一護の死覇装は最早原型を留めていない。さらには卍解も解け、始解状態になっている。

「……卍解が、本人の意思とは関係なく解除されるということとは、その斬魄刀所有者の死期が近付いていることを意味する……違うか?」

「うる……せえ……!!」

強がる一護だが、響転で肉迫され殴打を何発も喰らう。

何発も。

何発も何発も。

何発も何発も何発も。

何発も何発も何発も何発も。

一護の目は焦点が定まらず虚空を見つめ、さらには斬月も手放した。身体の到る所に打撃痕が残り、左腕はおかしな方向に曲がっている。

それを見ていたネルは、だんだん胸の奥から燃え滾る何かを感じる。

——数年ぶりの、何かを。

「いちっ」
——
っ
!!!!!!
「」

ネルが叫ぶと同時に、ネルを中心に爆発が起こる。そして時を同じくして膨大な量の霊圧が溢れだしてくる。

「っ………この霊圧は……!?!」

まるで知っているかのような口ぶりのクリステイナは、反射的に一護から離れる。そしてその一瞬で、一護の元にその霊圧の持ち主が響転で近寄る。

そしてクリステイナは、新たに現れた霊圧の持ち主の名を叫ぶ。

「ネリエル………ネリエル・トウ・オーデルシュヴァンクか!?!」

「久しぶりね………クリス………!」

ネリエル・トウ・オーデルシュヴァンク VS クリステイナ・エルフリーデ、開戦。

憐憫

温かい貴方の手は

冷たい私の手にとって

熱すぎるんだ

およそ二百年前の話。

私は、とある集落で暮らしていた。周りは山に囲まれ、閑散とした集落であったが、自然が豊かであり、そこに暮らしている人々も温かかった。

普通な場所で、普通の暮らしをしていた。だが一つだけ、私達は他の人間と違うところがあった。

私達は『滅却師』と呼ばれていた。だが当時小さかった私は、それが何を意味するのかが解らなかつた。親も、兄弟も、それが何を意味するのか教えてくれなかつた。だから私も、それを知ろうとは思わなかつた。知らなくても、私は幸せだったから。

ある日、私は集落の友達と一緒に、丘の上に出かけた。夜になると、澄んだ空気のお蔭で星が綺麗に見える場所だった。そこで私達は暫くの間、いつも通り星を眺めていた。

一時間程して、私達は集落に戻ることにした。

そしていつも通りに、家族のみんなが『おかえり』と言ってくれると思っていた。

——集落は崩壊していた。

家は崩れ、道に倒れる人は皆、身体から血を流していた。それを見て私は絶句した。そして、刀を持ち黒い着物を着る男がこう言った。『まだ、生き残りが居るか』

私達は必至に逃げた。そして、あの丘に逃げよう、と。逃げている間に、友達は一人、また一人と斬られて死んでいった。丘に着くころには、私一人だけであった。

そして再び星を見る間も無く、私は首を斬られて息絶えた。

数日後、私は地縛霊として蘇った。そして空虚のままに、何時間も、何日も、何年も空を眺め続けた。そして気づくと、私の身体は人のものではなくなっていた。そしてそこで気づいた。

『お腹が減った』

急な空腹感が私を襲い、私は家に帰ることにした。誰一人として生き残っていない集落に。

家に着くと、そこには白骨化した遺体が三つほどあった。父と母と兄。だが私は空腹のままに、家中を漁る。そして美味しそうと感じたものがあるだけ口にした。それだけでは物足りず、今度は集落中を巡って漁った。

そして集落の中で美味しそうと感じるものがなくなった後は、集落を出て探すことにした。

そこから先は覚えていない。だが、気付いたら再び人型となり、虚園に居た。

『君は今日から、虚夜宮調和刃として、この虚夜宮で活躍してもらおうことになる』

無理やり連れてこられた場所で、私は破面化され、謎の役職を藍染に押し付けられた。恐らく、時々喧嘩を売ってくる破面を殺していた

ことが限度を過ぎたからであろう。何か役職を押し付けて、それを抑止しようとする考えだろうと私は考えた。

そこから暫くすると、私はとある人物に声を掛けられた。

「貴方が、虚夜宮調和刃になった破面ね？」

緑色の髪に、山羊のような仮面の名残を持つ女十刃。ネリエル・トウ・オーデルシユヴァンク。

破面の中でも穏健派の彼女は、出来るだけ争いをしたくないという甘い考えの持ち主だった。そのせいで、同じ十刃であるノイトラには目をつけられていた。

そんな破面が私に何の用だろうと思考を巡らせていると、彼女は右手を差し出し、微笑みながらこう言った。

「一緒に、ご飯はどう？」

「はあ？」

その言葉に、私はらしくない声を上げた。いきなり来て『ご飯と一緒に食べよう』とはどういう意味なのか。それが私には理解出来なかった。

「貴方は虚夜宮の中でも数少ない女性の破面だから、仲良くやろうと思っ……」

「……………目障りだ。消えろ」

私は、ネリエルにそう言っ目の前からさっさと去って行つた。滅却師とは何なのか、家に有った書物を見て知り得た私は、滅却師としての自覚と誇りが芽生えていた。そんな私が、虚である他の破面達と仲良くなるうなどは思わなかった。

だがネリエルは、そこからしつこかった。朝・昼・晩といちいち私を誘いに来る。いくら暴言を吐き、つながりを断とうとしても、ネリエルは次には笑顔で私に会いに来るのである。

それが、私には怖かった。

だが遂に折れたのは私であった。あまりにもしつこかったので一度だけ、と念を押して私は第3の宮に足を運んだ。これでもう誘いは来ないだろうと考え。

「おや？ネル様がお客様を呼ぶとは珍しいですね」

「ええ。私の『友達』よ。丁重に扱ってあげて」

ネリエルが従属官に向かつて迷いなく私のことを『友達』と言ったことに對し、私は憤慨した。そのつもりは毛頭ない。いい加減なことを口にするな、と。だがネリエルは訂正することなく、こう言った。

「なら、今から友達よ」

その言葉に私は戸惑った。この破面が解らない。何故、この破面は頑なに私を友達に至らしめようとするのか。

「ドンドチャツカ！二人分の食事をお願いできる？」

「はいでヤンス！」

『最初』の食事は酷かった。どう見ても二人前とは思えない量の料理の数に、私は柄にもなく絶句した。

私は少しだけ口をつけて、すぐに帰ろうとした。

「また、一緒にお食事しましょうね」

扉に向かつて歩く私に、ネリエルはそう言ってくれた。

『次』の食事は一か月後だった。一度行けばいいと思っていたのであるが、再びネリエルがしつこく誘ってきたので、前と同じく少し食べてさっさと帰ろうと考え、再び向かった。

次の食卓では、ネリエルの従属官も一緒であった。だが、その光景を見て私は不思議な感覚を覚えた。明らかに主と従者の関係ではなかった。

それをネリエルに問うと、彼女はこう答えた。

「だって、ペッシェとドンドチャツカは、私の家族ですもの」

『家族』と言うネリエルに、私はさらに困惑した。血すらも繋がっていない虚を、『家族』と呼ぶことに對し、私は何が何だか分からなくなった。

そのまま結局、ネリエルがテーブルの食事を全て食べ終えるまで、私は席に着いていた。

三度目は二週間後であった。再び誘ってくるネリエル。私は、断る方が面倒だと考えすぐに行くことにした。

そこで話題となったのは、私の名前であった。虚になってから私は自分の名前を思い出せなくなっていた。だから虚夜宮に来てからも

ずつと、『虚夜宮調和刃』で通っていた。それを聞いたネリエルは、私の名前を考えようと喋ってきた。

また面倒くさくなくなってきたと思いつつながら、私はテーブルの上に置いてある紅茶を啜っていた。

そしてネリエル達三人が考え出した名前は、『クリステイナ・エルフリーデ』。何故そう言う風になったのか、理由を尋ねると『貴方の雰囲気合っていると喋ったから』と言われた。

その日から私はネリエルに『クリス』と呼ばれるようになった。何故、わざわざ考えた『クリステイナ』の方で呼ばないのか理由を尋ねると、『愛称があった方が、友達らしいでしょ』、と。

ネリエルの従属官である二人も私の事を『クリス様』と呼び、やがてネリエル達が考えた名前は虚夜宮中に浸透していった。

—— 食事は、何度開かれたか分からない。遂には一日は一度、必ず行くようになり、そのお蔭で第3の宮のテーブルには、常に四つのティーカップが置かれるようになった。

—— 悪い気はしなかった。

だがそれと同時に、私は何か解らない恐怖のようなものに襲われた。昔、一度あったような、何かを失いそうな恐怖を。

そして『最後』の食事会。私はいつものように椅子に座りながら、他愛もない話をネリエルと交わっていた。いや、どちらかと言うとネリエルが一方的に話しているのを、私が聞いている形だった。

『家族』について話すネリエルの表情は、とても温かかった。それを見て、私の中で固まっていた何かが溶けた。

「それでね、ドンドチャツカが……あ………」
「……………どうした？」

急にネリエルが目を見開き、私の顔をまじまじと見つめる。

そして、満面の笑みを私に向けてくれた。

「貴方の笑う顔、初めて見たわ！とつても素敵よ！」

「な……………」

私は、自分が笑ったということに驚愕した。そして戸惑う私に、ネリエルはこう言ってくれた。

「貴方には、いつも笑っていて欲しい。だって私は、『家族』にはいつも笑って欲しいから」

私のことを、ネリエルは『友達』ではなく『家族』と呼んでくれた。それを私は、『嬉しく思った』。

——だが、別れは突然だった。

『ネリエル・トウ・オーデルシュヴァンクと、その従属官の失踪』。その報告が届いたのは、ネリエルが私に『家族』と言ってくれた次の日であつた。

私は泣いた。再び、『大切な人』を失つたことに。

そして私の心は再び『復讐』に染まつた。

「……………ネリエル。その死神の餓鬼を寄越せ」

「嫌よ、クリス。いくら貴方の頼みでも、私は一護を貴方に渡す訳にはいかない」

ネルの言葉に、クリステイナは眉間に皺を寄せさせる。そして次の瞬間には、クリステイナはネルに斬魄刀を振り下ろしていた。だがそれを寸前の所で斬魄刀で防がれ、辺りには金属がぶつかる音が響き渡る。

そのまま刀身は重なり合いながら、二人は視線を交わす。

「はあああ!!」

「くっ!!」

だがネルが押し切ったことにより、クリステイナは後方に飛ばされる。流石は、元第3十刃だ、とクリステイナは考える。そしてその瞬

間に、ネルは井上たちの元に響転で移動し、意識のない一護を引き渡す。

そして血まみれのグリムジョーを支えるアニーシャに視線を向ける。

「……………アニーシャ。皆をお願い」

「……………アンタに戦えるの？ 『憐憫』だったアンタが」

元第3十刃、ネリエル・トウ・オーデルシュヴァンクの司る死の形は『憐憫』。情け故に戦い、情け故に許し、情け故に死んでいく。それがネルの司る死の形であった。

そのアニーシャの問いに、ネルは静かに微笑む。

「大丈夫。クリスを止めるだけだから……………」

そう言つて今度は井上に視線を向ける。井上の目は、まだ目の前にいるのがネルであるということが信じられないというような目であった。さらにそれだけではなく、風で靡いたネルの檻樓の影から『3』という数字が見えたのが、井上が驚いている要因の一つでもあった。

一護と死闘を繰り広げたグリムジョーですら『6』。それよりも三つも上。あんな小さかったネルが、『3』であることが信じられなかったのである。

それに対し、ネルは柔和な笑みを浮かべる。

「……………一護をお願い」

「ネル……………ちゃん……………」

「……………ごめんなさい。余り時間がないらしいの」

そう言つてネルは、再び響転でクリステイナの所に向かう。それを見届けた井上は、すぐさま双天帰盾で一護の治療を施そうとする。そしてそのまま、双天帰盾の範囲を傷を負っているグリムジョーまで広げる。

それを見ていたアニーシャは、驚いたような顔で井上を見つめる。それに対し井上は、ただ黙つてうなずいた。

「はあああああ!!」

「ちつ……………!」

ネルは、クリステイナに向かって斬魄刀を振り下ろす。それを横に弾いたクリステイナは、すぐさま空いている左手でネルに向かって虚閃を放つ。赤い光がネルを照らしたが、虚閃を放とうとしている左手を、ネルは蹴り上げる。その為、クリステイナの手は空に向き、そのまま花火のように虚夜宮の空に虚閃が打ち上げられた。

ネルは再び、斬魄刀をクリステイナに振るう。だがそれをクリステイナは静血装フルート・ヴェーネを展開した左腕で受け止める。静血装で防御能力の上があった腕は、元十刃のネルの振るった一太刀を完全に防ぐ。

そしてクリステイナは、そのままネルに向かって右足で蹴りを喰らわせようとするが、ネルが左足を上げて脛で防御することによって防がれる。だが、ネルは勢いのままに後方に吹き飛ばされる。

「容赦がないわね……！」

「お前程ではないさ……虚閃!!」

吹き飛ぶネルに向かって、クリステイナは虚閃を放つ。虚閃は、ネルの前に突き出した左手によって防がれる。そしてネルは、そのままクリステイナの放った虚閃を飲み込む。

それを目の当たりにして、クリステイナは焦ったような顔を見せる。

「しまっ……！」

「があっ!!」

ネルが口から放った虚閃——『重奏虚閃』セロ・ドレプルは、クリステイナに命中し爆発を起こす。『重奏虚閃』はネル固有の技であり、相手の虚閃を飲み込み、そのまま自分の霊圧を上乗せして相手に放つという技である。クリステイナの放った虚閃はかなりの威力であり、ネルの霊圧も上乗せされているため、かなりの威力が期待できるものであった。それは、〃クリステイナが静血装を発動していなければ〃の話であるが

爆発の中から、クリステイナは何事もなかったかのように歩み出てくる。死覇装が爆発で所々破けている以外、目立った外傷は見当たらない。

「……………流石ね」

「……ネリエル。教えてやろう」

「何？クリステイナ——……………!!?」

クリステイナの言葉に返答しようとしたネルは、響転で肉迫してきたクリステイナの左ストレートによって吹き飛ばされる。そのままクリステイナは、斬魄刀をネルに振り下ろそうと構える。

「私はこの数年間……………お前に復讐することで頭が一杯だった!!」
「なっ……………!?!」

クリステイナの告白に、ネルは目を見開く。そしてクリステイナが振り下ろした斬魄刀を防ごうとするが、勢いのままに地面に叩きつけられる。

そのまま両者は鏝迫り合いに進展する。

「お前が私に関わらなければ……………私はこれほどまでに苦しまなかった……………お前が私の前から消えなければ、私は悲しみに明け暮れる事もなかった!!!」

「クリス……………!!」

憤怒の形相でネルを斬ろうとするクリステイナに、ネルは悲壮の漂う表情を浮かべる。そして決心したかのように目を鋭くする。

ネルは刀身を引き、そのまま横に転がる。ネルを斬り裂こうとしていたクリステイナの斬魄刀は、急に引かれることによって砂の地面を斬り裂くだけに終わった。

何とか抜け出したネルは、そのまま斬魄刀を自分の前に構える。

「なら私は……………貴方を止めなければならない……………!」

「……………っ!!」

何かに気づいたクリステイナは、ネルの行動を阻止しようと肉迫する。だが、既にそれは始まった。

ネルの構える斬魄刀に、桃色の霊圧のようなものが纏わりついていく。

「謳え————『ガミューサ 羚騎士』!!!」

ネルが解号を唱えると、爆発した霊圧がネルを包み込み、そのまま渦巻く。そして中から、ケンタウロスのように下半身が羚羊のものに変貌したネルが飛び出してくる。その右手には大型のランスが握ら

れている。

「うおおああああ!!!」

「ぐっ!?!」

凄まじい勢いで突進してくるネルに、クリステイナは思わず腕を交差させて防御態勢を取る。その際には、腕に静血装を展開する。それを確認したネルはランスではなく、その場で身体を回転させて後ろ脚で蹴り飛ばす。人型の時以上の脚力によって、クリステイナはいとも簡単に吹き飛ばされる。そんなクリステイナに対しネルは、すぐさま身体をクリステイナに向け直し、ランスを肩に担ぐように構える。

「ランスアドール・ヴェルデ『翠の射槍』!」

ネルが投擲したランスは、凄まじい回転が掛かっている。そのままかなりの速さでクリステイナの交差している腕の中心に命中する。

ただの槍の投擲であつたならば、静血装の前に為す術なく防御されていただろう。だが『翠の射槍』はその回転によって貫通力を高めているため、直撃を喰らっているクリステイナの顔には焦燥が浮かぶ。

クリステイナはそのまま、後方に建っていた建物に激突する。

—— お前さえいなければ。

『翠の射槍』が、静血装を貫通する。

—— お前が私に優しさを向かなければ。

そして肉を巻き込む。

—— お前が私を一人にしてくれれば。

骨に到達し、碎ける音が鼓膜を揺らす。

—— お前が、存在していなければ。

「滅ぼせ—— 『エバンヘリオ神滅天使』!!!!」

凄まじい光が、辺りを包む。

「ちつ……やつと着いたか……強エ奴はどこだ？」

「劍ちゃん！あつちじゃない!？」

「更木隊長。独断行動は、出来るだけ抑えるようお願いします
……」

「私は先に行かせてもらう」

「あ、朽木隊長!？」

「ま、待ってくださいよ！僕、瞬歩が使えないんですって！」

「全く……騒々しい奴等だネ」

「マユリ様、四時の方向に大きな霊圧を確認出来ました」

憤獣

ギロチンの糸を持つは
お前では無い

舞台は、天蓋の上。偽りの空の上は、本来虚園を包み込む夜の空が広がっていた。その月明かりだけが唯一の光源である空の下、白と黒が相まみえていた。

一つは、『虚哭隸王』を発動した日向。
そしてもう一つは、『黒翼大魔』ムルシエラゴを解放したウルキオラ。

虚夜宮では、禁止されていることが二つある。それは『王虚の閃光』の使用。そして次に第4以上の十刃の刀剣解放。虚化した日向と互角の戦いをしてきたウルキオラは、互いに実力差がない事を察していた。故に、己の全精力を持って侵入者を迎え撃とうとしていた。

『黒翼大魔』を解放したウルキオラの背中には、大きな黒い翼が生え、仮面の名残が四本の角のついた兜のようになっていた。服も下部がスカート状になり、仮面紋も大きくなる。

そして手には霊圧で形成した光の槍『フルゴール』を携えている。
——ウルキオラの最たる能力は、その再生能力にある。どんな傷も臓器などの重要器官でなければすぐさま超速再生で元通りになる。それ以外はどうかと言うと、他の十刃のように目立った武器はない。だが、一つ一つの攻撃が究極に洗練されているため、どれも凶悪な威力になっている。

だが、それは日向も同じ。手数で言えば圧倒的に日向が勝っているが、ウルキオラの移動速度がそれらの発動を赦さない。故に日向は現在、純粋な剣技でウルキオラと互角に戦っている。ウルキオラが黒虚

閃を放てば、日向も黒虚閃でもって相殺する。ウルキオラがフルゴールで肉迫すれば、日向も虚哭隸王を構えて肉迫し、鏝迫り合いになる。辟易するほどに繰り返された剣戟。だが両者は、いつまでも相手を視界の捉え、一步も退かない。日向は現在、ウルキオラの移動速度に對抗するために、アルトウロの霊圧の翼を使用している。そのため羽ばたくように移動するウルキオラよりは、長期的な加速の持続性では勝っている。それでも、一瞬でも押すとウルキオラは瞬時に下がり体勢を立て直す。それ故隙がない。

「黒虚閃」

ウルキオラが指先から黒虚閃を放ったのを目にして、日向は八咫鏡を発動して防御する。黒虚閃は八咫鏡の前に跳ね返されるが、その先にはウルキオラは居ない。それを察していた日向は、響転で動くウルキオラを目で捉えて攻撃に備えた。

（――上――）

ウルキオラが日向の頭上からフルゴールを投げつける。それを左手で弾くが、その一瞬でウルキオラは既に別のフルゴールを形成していた。そのフルゴールを突出し、日向を貫こうとするが、日向も虚哭隸王を突き出す。

両者の切っ先は、互いの刀身を掠めて狙いがずれる。それぞれの切っ先は、互いの頬を少し斬る程度で終わった。

「……………」

ウルキオラは無言のまま、日向から距離を取る。それは日向も同じだ。ウルキオラの頬の傷は、超速再生によってすぐに塞がる。逆に日向は、都直伝の回道によって傷を塞ぐ。

—— 実力は互角。

悟ったウルキオラは、自然体になる。それを見て日向は怪訝そうな顔をする。

「……………どうした？」

「このままでは埒が明かかないと思ってな」

そう言ってウルキオラは瞼を閉じる。

「……………ここまで戦わせたお前に、俺の真の姿を見せてやろう」

「真の姿……だと……？」

「ああ。その姿は藍染様にも見せていない」

その言葉に、日向は一瞬目を見開く。

「……………これが、俺の真の姿」

レスレクシオン・セグンダ・エターパ
「刀剣解放第二階層だ」

そう言ったウルキオラの身体に異変が起こり始める。否、身体だけではない。その霊圧も異質とも言うべきものに変化していく。

ウルキオラの背中の翼がウルキオラを包み、次に黒い霊圧がウルキオラを包む。それと同時に、溶岩が滾る様な不快な粘着音が響き渡り、それが止むと同時に翼が開かれた。

——“悪魔”。

それが今のウルキオラの姿を見た日向の素直な感想。それは見た目だけでなく、霊圧も“悪魔”と呼ぶに相応しい禍々しさを宿っている。

「……………成程な。それがお前の真の姿なのか」

「——ああ、そうだ」

ウルキオラには、先程なかった尻尾が生えており、四本あつた角はなくなり、代わりに長い二本の角が生えている。そして腕と下半身は黒い体毛に覆われており、極めつけは眼球が黒みのある深緑色、瞳が黄色と変わっていた。

それを見て日向は、深呼吸をする。

「——なら俺も、全力でやり合わなきゃな」

「……………何？」

ウルキオラが疑問ありという表情を浮かべるが、日向はそれに構わず左手を顔に翳す。そしてその左手が振られたときには、日向の顔に三角の黒い鬼の仮面が現れた。

——虚哭隸王・須佐能袁^{スサノオ}。

卍解状態で発動する虚化による戦闘能力の上昇は、始解の時の比ではない。

刹那、両者の異質な霊圧が激突する。

「——『雷 霆』の 槍」
ランサ・デル・レランパルゴ

日向の霊圧を目の当たりにしたウルキオラは、両手に霊圧を集中さ

せて、先程のフルゴールよりも細い光の槍を産み出した。

日向は、その霊圧濃度を感じるだけで、その槍の凶悪な威力を察した。故に日向も刀身に隷属の力を集中させる。

その瞬間に、ウルキオラは先程とは比べ物にならない速度の響転で、日向の後ろに回り込む。そしてウルキオラの細長い尻尾が、日向の背中に迫りくる。

—— 『ラテイーゴ』。

鞭のように撓る尾は、風を切る。

『縛道の八・『斥』』』

それを防いだのは、手の甲に発生させた霊圧の盾。凄まじい衝撃音が天蓋の空に響き渡る。

それが第二ラウンドの開始のゴングとなった。

鬼と悪魔の死闘は、まだ続く。

—— 淋しいよ。

『今ならネリエルは許してくれるよ』

—— もう駄目だ。

『何が？』

—— 私がネリエルを思っていた心が全部、復讐心に変わってるんだ。

『そんなの八つ当たりだよ』

—— 解ってる。

『謝ろうよ。』』めんなさい』』って』

—— 言えない。

『どうして?』

—— 私の中にいる滅却師が、虚を殺せと叫んでいる。

『落ち着いて』

—— 私の中にいる虚が、その負の感情を煽り立てる。

『落ち着いて』

—— どんどん、黒く染まっていく。

『ダメだよ』

—— ああ、私は醜い。

『そんなことない。まだ間に合う』

—— もう辛い。苦しい。痛い。淋しい。悲しい。そんな感情全てが忌々しい。

『クリステイナ、しっかり』

—— ああ、私の中にいる唯一の人の心を持つ記憶。

『なに?』

—— どうか、お前だけはずっと、ネリエルを愛してあげてくれ。

『どういうこと?』

—— 私は死にたい。

『何を言ってるの?』

—— 私は恨まれたい。

『何を言ってるの?』

—— だから、私を恨む誰か。

『クリステイナ? クリステイナ? どうしたの?』

—— どうか、私を殺してくれ。

『ダメだよ、そんなこと言ったら』

—— 私の中の殺意が、彼女を殺す前に。

『しっかりして!』

レクテシ殺ヲ私イ醜、カウド

「滅ぼせ」

『エバンヘリオ
神滅天使』!!!

ランサドール・ヴェルデ
『翠の射槍』の直撃を受けていたクリステイナは、咄嗟に解号を口にした。その瞬間に、辺りには眩い光が溢れだし、核爆発のような閃光が瞬く。

それを見ていたネルや、後ろで見ていた井上やアニーシャもその光景に唾然とする。

やがて、刀剣解放の際に舞い上がった砂塵が晴れる。

一对の光の翼。そして頭上に浮かぶ光の輪。そして右眼は赤く、左眼は青く光っているオッドアイになっている。死覇装の代わりに、その身には純白のワンピースを纏っている。腰の部分には光の帯が巻かれており、風によって靡いている。

立ち上ったクリステイナは、先程まで自分を貫こうとしていたランズを拾い上げ、それをネルに投げ飛ばす。

それを見たネルは、そのランズをキャッチしようと思構える。だがその瞬間に、クリステイナはネルが反応出来ない速度の響転で後ろに回り込み、右手に光の剣を携えて、首を刈り取ろうとする。

「!!」

『ギリヨティナ
滅斬剣』

だがそれを、ネルはギリギリの所で回避する。しかし完全に回避出来たわけではなく、背中に大きな斬傷が出来る。ネルは回避しつつ、自分に戻ってきたランズをキャッチする。

そしてクリステイナと距離を取る。

「……………どうして、本気で振らなかつたの?」

ネルは気付いていた。今の一撃は、本気のものではない。明らかに手加減されて繰り出された一撃であった。だからこそネルは、反応出来ない程の速度で回り込まれても回避できた。

ネルの問いに、クリステイナは笑う。

だがそれは、ネルの見たことのない狂気的な笑みであった。

「それはさっきの借りだ……………次からは問答無用でその首を刈り取る!!
そして……………この虚夜宮に居る奴らを全員殺す!!!」

「なっ……………!!?」

「まずはお前だ……………ネリエル!!」

「火種を煽れ——『焰狩^{ゲバルド}獵豹』!!」

ネルを殺すと宣言したクリステイナに、刀剣解放をして肉迫したのはアニーシャであった。その手には『焰^{ウーニャ・リアマ} 爪』を発動させている。だがそれをクリステイナは、背中の光の翼でいとも容易く防いだ。だが、その一瞬でアニーシャはネリエルの傍に移動する。

「……………どういう風の吹き回し?」

「解つてんでしょ?このままだとクリステイナは、マジで全員を殺し回る。それこそアタシやサラも……………あのストロベリーボーイもチャン織もだよ」

「……………確かにそうね」

今のクリステイナは、最早ネルに心を開いてくれた頃のクリステイナではない。憎悪や怒りなどに心を蝕まれ、『悪魔』と為している。

ネルはそれを止めるために戦っているのだが、最早ネル一人ではどうにもならない域に達してしまった。

「アタシも手伝うよ……………このままじゃ、アタシは何もできずに罅り殺されるだけだ」

「そう……………じゃあ、有難く手を借りるわ」

アニーシャの言葉を聞き、ネルは微笑む。それを見たアニーシャもニヤリとする。だがそれは強がりである。アニーシャは、もう第4十刃であった時の力はない。勿論、それでも普通の破面よりは強いが、十刃に届くかと言われれば微妙なところである。

それでもアニーシャは、『サラ』という守るべき存在が居る為、容易く敗れる訳にはいかないのである。

「……………行くよ、ネリエル!!」

「ええ、アニーシャ!!」

アニーシャの合図と同時に、二人同時に響転で肉迫する。響転の速さではアニーシャの方が速いため、必然的にアニーシャが先行する形になる。手には『焰爪』を発動させ、クリステイナを斬り裂こうとする。だがそれをクリステイナは、同じく響転で回避する。クリステイ

ナは『滅斬剣』をアニーシャに振るおうとする。だが、クリステイナの一閃はアニーシャに命中するが、次の瞬間にはアニーシャの姿は揺らぐように消える。

—— 『焰分身』。

アニーシャの響転の速度。熱気による景色の湾曲。それらによって産み出される高精度の分身。それが『焰分身』である。

そしてその『焰分身』の後ろから、ネルの放った虚閃がクリステイナに飛来する。だがそれを片手で弾かれる。

「ウオオオオオオ!!!」

その隙にアニーシャはクリステイナの後ろに回り込み、『焰爪』よりも巨大な炎の爪を手に纏わせている。

—— 『灼熱烈爪』。

アニーシャの本気の一撃。

「遅い」

「なっ……!?!」

しかし、その渾身の一撃はクリステイナの翼によって防がれる。その翼には、血管のように青い線が奔っている。防御された際に、弾かれた炎があちこちに散る。

だが、それは困だった。

「ネリエルっ!!!」

「ええ……『王虚の閃光』!!」

アニーシャによって動きの止まったクリステイナに、ネルが手の平を突き出して、極太の虚閃を放つ。その虚閃は、翼で身を覆うクリステイナに命中する。アニーシャは命中する直前に逃げ、何とか巻き添えを喰らう事を回避する。

(これで少しは……!?)

「……どうした? これで終わり?」

「な……に……!?!」

だが、空中に逃げて様子を伺っていたアニーシャの目に移ったのは、傷一つないクリステイナの姿であった。

そのクリステイナの左手には、巨大な弓が形成されており、既に矢

が番えられている。

『ザシクト・ボーゲン大聖弓』』

その弓から放たれた矢は、アニーシヤのギリギリの所を通過する。それに対しアニーシヤは冷や汗を流す。

そんなアニーシヤを見たクリステイナはこう言う。

「済まないな。威力が強すぎて、狙いが上手く定まらないんだ」

「っ……………!!!」

元十刃の全力の一撃でも、傷一つつかない防御力。

これが虚夜宮調和刃、クリステイナ・エルフリーデの実力。

「ち、くしょオオオオオオ!!!」

「……………お姉……………ちゃん？」

「これは……………セニヨリータ淑女の霊圧……………！」

治療室に留まっていたサラ達四人は、虚夜宮の中に巨大な霊圧が現れたのを感じた。

一つはクリステイナ。

一つは謎の人物。

最後にアニーシヤ。

霊圧の大きさからして、全員が刀剣解放を行っているのであろう。だが、そこでサラに疑問が浮かんだ。

「何で……………クリステイナ様と戦っているの……………?」

「何!?あの女とやり合ってるの!?!」

アニーシヤがクリステイナと戦っていると言う事実には、チルツチが思わず声を上げる。それは勿論、何故味方なのに……………という考えがあるからである。だが、サラには一つ思い当たる節があった。

クリステイナは、虚夜宮屈指の孤高の存在。自分が破面でありながら、同じ破面を忌み嫌う人物であった。そこから導き出される答えは

一つ。クリステイナが、侵入者をいいことに破面達を殺そうとしているのではないか。

そう考えただけで、サラの顔からは血の気が引く。

それを見たドルドーニが、サラの肩に手を置く。

「聖母……そんな不安そうな顔をしないでおくれ。吾輩が、セニョリータ淑女を連れ戻して来よう」

「え……………？」

「本気か、ドルドーニ!？」

ドルドーニの言葉に、ガンテンバインが声を荒げる。幾らドルドーニの霊圧が回復しているからと言って、今あの霊圧の衝突の中に入っていけば、死ぬ確率の方が高い。

だが、ドルドーニの決意は固かった。

「吾輩の命を助けてくれた聖母マリヤの姉エルマーナを助けずして、誰が吾輩を紳士と呼ぶ?」

「つ……………分かった。俺も行こう。一人よりはマシだろう」

ドルドーニの言葉に、ガンテンバインも付いて行こうとする。だが、それをサラは引き留めた。

「いえ……………皆様はお休みになって下さい。私が行きますから」

「な……………だが、聖母マリヤ。君は戦闘型の破面では……………」

「大丈夫です。元に戻るだけです」

その言葉に、ドルドーニ達は目を見開く。それはサラの言っていることを瞬時に理解したからである。

そして三人は、少し残念そうな、そして悲しそうな顔を見せる。それに対し、サラは笑顔を浮かべて、治療室を出て行く。

「……………行ってきます」

「……………ああん？迷っちゃまったな……………」

「剣ちゃん方向音痴〜！」

「やちる！おめえの案内通りに俺は走ったんだよ！」

十一番隊隊長・更木剣八は、虚夜宮を彷徨っていた。

まず、何故彼が虚夜宮に居るかから話す。最初にまず、彼を含め隊長四人と副隊長三人、そして救護にもう一人というメンバーが、浦原喜助の開いた黒腔でここまでやって来た。浦原は、総隊長により命を言い渡されており、その中に黒腔を安定させるというものがあつた。それによつて、万全な状態で虚夜宮に攻め込むことを可能にする。それが命の一つであつた。だが、井上織姫が拉致されたこと。そして井上織姫を救出するために飛び込んでいった一護達のために予定が変更された。そして少し前、黒腔が安定したため、剣八を含め隊長格達が虚夜宮に来たのである。

そして剣八は強い相手を探すために、やちるの適当な案内を聞きながら虚夜宮を走り回っていたのである。

「ちっ……………罫が明かねエな……………ん？んだ、あの建物は？」

走る剣八の前に、一つの巨大な建物が見えてくる。それを見て剣八は口角を吊り上げる。

「へっ！強エ奴は、こういうところに居るのが相場なんだよ!!」

そう言つて剣八は容赦なく建物を壁を斬り壊す。

そしてそのまま、その建物の中に入っていく。

「アーンツ!!アーンツ!!」

「ああん？犬か？」

「わあ〜！ワンワンだあ〜!!こっちおいで〜！」

虚の仮面のようなものを被る犬が剣八に向かって咆えるが、剣八はそれを一向に気にしない。逆にやちるは好奇心満々で、その犬と戯れようとする。

虚園に犬なんているものかと剣八は考えるが、虚園に居ることと頭の仮面を見る限りその犬は虚であろう。虚とやちるを戯れさせてい

いものかという問題に発展するが、こんな見た目でも副隊長。それ相應の力は有しているため、もしもの時は自分で自分の身を守ることなど出来るだろう。

だがその犬は、奥から鳴り響いてきた足音に驚いて逃げていく。

「てめエ……………いきなり俺の宮を壊しやがって!! 覚悟は出来てんだろ
うな!!」

「ああ? 誰だ、てめえは……………?」

部屋の奥から出て来た巨体の男に、剣八は睨みを利かせる。剣八は成人男性と比べるとかなり身長が大きい、目の前の破面はそんな剣八よりも大きい。

褐色の肌、盛り上がった筋肉。そして後頭部の一か所だけから生やしている長髪。そして仮面の名残は顎の部分にある。

「はっ……………俺はヤミー。第10十刃、デイエス・エスパーダヤミー・リヤルゴつつうんだよオ!!」

『十刃』と聞き、剣八の口角が吊り上る。そして後ろに居るやちるに向かって声を上げる。

先遣隊の引率であった冬獅郎から話は聞いていた。数多くの破面の中でも、殺戮能力の高い順に、1から10の数字が与えられると。

目の前の破面がその末席である10であることが剣八にとつて不服だが、それでも強者であることには間違いない。剣八的に、一先ず目的の一つが達成されたことに剣八は喜ぶ。

そして剣八は、犬の虚と遊ぼうとしているやちるに視線を向ける。

「やちる! お前はさっきの犬と遊んでろ! その間に俺が、こいつをぶった斬るからよ……………!!」

「うん! わかった! 待って、ワンワン!!」

剣八の言葉に、やちるは元気よく返事をして先程の犬——クツカプー口を追いかけていく。

その光景に、ヤミーは眉間に皺を寄せさせる。

「てめえ……………俺をぶった斬るだと……………!!」

「ああ。そうだ」

剣八の発言に、ヤミーは青筋を立てる。怒りを露わにするヤミーで

あるが、それに比べて剣八は笑顔を浮かべている。笑顔と言っても、そんなに爽快なものではなく、獲物を見つけた獣のような狂気的な笑み。

そんな表情の剣八に、ヤミーは苛立たずにはいられなかった。

「……そうかよ。だったらそんな口二度と訊けねエように、粉微塵にしてやるよオ!!!」

ブチ切れる——『^{イーラ}憤獣』アア!!!』

ヤミーが斬魄刀を抜き、解号を叫ぶとヤミーの身体がどんどん巨大化していき、やがてそれは宮の天井を突き破るほどになる。

そして巨大化する際に破けていった死覇装の影から、ヤミーの左肩に『10』と書いてあるのが見える。だがそれは、やがて『1』の部分が剥がれ落ちてゆき、『0』となった。

「ああん? 『0』?」

「ハアアアアアア……へっ、済まねエな死神! 一つ訂正することがあるぜエ……俺は第0十刃^{セロ・エスパーダ}、ヤミー・リヤルゴ……十刃の中で、俺が最強だアアアアアア!!!」

そう叫びながら、ヤミーは巨大化した体に携えている剛腕で剣八を叩き潰そうと、拳を振り下ろす。

『最強』という単語に剣八は反応していた。そしてすぐに斬魄刀を

抜き、ヤミーの拳に相對そうとする。

——成程。こいつは当たりだったか。

「そうかよ………だったら愉しもうぜ、破面ウ!!!!」

更木剣八 VS ヤミー・リヤルゴ、開戦。

遊戯

鬼ごっこをしよう

君が逃げて

僕達が追いかける

僕達が飽きるまでね

「……………兄は、何を見ているのだ」

「……………これはこれは。その羽織、隊長格とお見受けする」

巨大な穴の手前に立つ褐色肌の男——セフティマ・エスバード 第7十刃、ゾマリ・ル

ルーは、後ろから話しかけてきた者に身体を向ける。

銀色掛かるマフラーを首に巻き、髪には何かの装飾品を着けている。

「……………そして私はただ、つい先程ここに落ちていった死神がどうなったのか気になって来たのですが……………何の音沙汰もないようなので、ピカロにやられたのでしょうか」

その言葉に、ゾマリに相対す死神——朽木白哉は眉を顰める。白哉は、微かに残るルキアの霊圧痕跡を辿りここまで来た。それなのに拘わらず、今この場所からはルキアの霊圧を感じ取ることが出来ない。

その理由としては二つ考えられる。一つは、目の前のゾマリの言う通りに、ピカロという者に既に倒されたか殺された。もう一つとしては、既にルキアがこの場所から移動しているのか。

「……………ならば、私が直々にその穴の下を確認しにゆくだけだ」

「おやめなさい。あの程度の死神では、ピカロ相手に肉片になるまで弄ばれるのがオチです。行くだけ、徒労に終わりますよ?」

「それを決めるのは兄ではない」

そう言つて白哉は、腰に携えている『千本桜』を手に取る。それを見ていたゾマリも、左手に持っていた鞘から斬魄刀を抜く。

「……………人の忠告を聞かない傲慢な方だ。それ故に、貴方は私に敗北する」

「案ずるな。兄は私に勝てない。純粹な……………格の差によつてな」

朽木白哉 VS ゾマリ・ルルー、開戦。

「ぐっ……………!」

「っ!黒崎くん!」

「い……………井上か?!?……………はっ!そうだ、アイツは!!?」

漸く意識を取り戻した一護に、井上は笑みを見せる。だが一護は自分がクリステイナに手も足も出ずに倒されたことを思い出し、井上に問う。

だが一護の問いに答えたのは、別の人物であった。

「うるせえぞ、黒崎一護。黙って寝てやがれ」

「グ、グリムジョー!」

「……………あれを見ろよ」

自分と同じく井上の双天帰盾による治療を受けているグリムジョーを見て驚く一護に対し、グリムジョーは顎でどこかを見るように示す。

その方向を見ると、砂塵が舞い上がりながら誰かが戦っているのが目に見えた。

「な……………なんだよ、あれ……………!?!」

「……………刀剣解放したクリステイナと、同じ刀剣解放をしたアニーシャとネリエルの野郎がやり合ってる」

「ネリエル……………?」

聞き慣れない名前に対し、一護は疑問ありげな顔を見せるが、それに対し井上が答える。

「ネルちゃんだよ、黒崎くん」

「な…ネルが…!?くそっ!!」

ネルが戦っているという事実には、一護は身体を起こす。それを見ていたグリムジョーが、苛立たしそうに舌打ちする。

「うるせえー！ポロポロのてめエが、刀剣解放したクリステイナに勝てると思つてやがるのか!?!」

「だけど、グリムジョー………!」

「きやあ!!」

「!!」

言葉を交わす二人であつたが、すぐ傍を吹き飛ばされたネルが過ぎていく。すぐに体勢を立て直すのが、その身体には打撲の痕や斬傷が見える。ネルの胸周りに纏っている若草色の襤褸は血によつて赤く染まっている。

満身創痍のネルであつたが、その目からは闘志は消えていない。

そんなネルに向かつて、刀剣解放したクリステイナによつて蹴り飛ばされたアニーシャが飛んでくる。何とかそれを受け止めるネルだが、その一瞬でクリステイナに距離を詰められる。

クリステイナは手に持つ『滅斬剣』で、アニーシャごと二人を斬り捨てようとする。

「お、アアアアアアアア!!」

だが、ネルに受け止められていたアニーシャが、その場で身体を錐揉みさせて、回転蹴りでクリステイナの手を上を蹴り上げる。

「でやああああ!!」

その隙にネルが右手に持っていたランスをクリステイナに突き出す。だが、それを体の前に持つてこられた光の翼によつて防がれる。そして再び翼が元の位置に戻される際に、凄まじい旋風が巻き起こり二人は吹き飛ばされる。

「ネルちゃん!!アニーシャちゃん!!」

吹き飛ばされた二人を案じて、井上が声を上げる。

吹き飛ばされた二人は後ろにあった建物に激突する。そして建物は、二人が激突した衝撃で崩れ落ちる。

その光景を、クリステイナは背中の翼をはためかせながら空中から見下ろす。

そして左手に光の弓を形成する。

「光 雨」
ルス・ジュリア

次の瞬間、二人が居るであろう瓦礫の山に、光の矢が降り注ぐ。豪雨という表現すら生ぬるい程の矢の量に、井上は唾然とする。

「……………温いな」

十数秒ほど光の矢を放った後、クリステイナは光の矢を宙に霧散させるように手元から消した。

そしてまた十数秒後、瓦礫の山から流血する二人が出てくる。

「はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………！」

「ち、くしょう……………ただの風じゃない……………！翼をはためかせた瞬間に、靈子を巻き込んで衝撃波を放ってきた……………！」

アニーシャは冷静に、今のクリステイナの技を分析した。普通の風であれば、元十刃である二人が吹き飛ばされる訳がない。しかし、今のクリステイナの放った風——『ベンダバール聖風』は、翼をはためかせると同時に、虚閃と同じ要領で靈圧を飛ばす技である。だが本来、牽制技であるためそこまで威力はない。しかし、満身創痍の二人を吹き飛ばし、体勢を崩すには十分であった。

「……………どうした？来ないなら、今すぐにも殺してやろう」

「くっ……………！」

クリステイナの言葉に、ネルは齒噛みをする。

「初の舞——『つきしろ月白』」

「——えっ……………？」

突如、空中に留まるクリスティナが、地面から天に向かって伸びていった氷の柱に閉じ込められる。それを目の当たりにして、ネルが驚嘆の声を漏らす。

その氷の柱の根元を見えると、黒い着物を身に纏う二人と、それを追い掛けるように後ろからやって来る小さな子供たちの姿が目に入った。

「あれは……………ピカロ……………？」

「っ、ルキア！茜雫！」

その姿を確認した一護が声を上げる。そして一護の声を聞いた二人も、一護の元に向かって来る。

「一護！無事か!?井上も無事そうよかった……………」

「朽木さん……………その子たちは？」

そう言つて井上は、ルキア達の後ろにゾロゾロ居る子供たちに目を向ける。性別も容姿もバラバラの子供たち。さらには人の姿ではない者もいる。

井上の問いに答えたのは茜雫であった。

「この子達はピカロって言つて……………その……………ここまでリアル鬼ごつこの的な？」

「マジかよ……………」

茜雫の説明に、一護は茫然とする。

要するに、二人はピカロ達がいた穴に落ち、最初の内は戦っていたが、戦力差を考えて穴の中から撤退したところ、そのままピカロ達が追いかけてきたということである。

ピカロ達は、ほんの遊び感覚で追いかけていたのであるが、二人にしてみればここまで来る間は地獄の時間であった。

だが途中で、ピカロの興味がこの場で戦っていた巨大な霊圧に移つたことにより、何とか難を乗り越えたということである。

因みに、逃げている最中に茜雫が本気でべそを掻いていたのは、また別の話である。

「わあ、一杯ひと居る〜！」 「お腹へったな〜」 「あ、ネリエルだあ！」

「M D a a a a a a」 「あにー……しゃ……」

「茜雫あゝ、鬼ごっこしよ〜」 「氷綺麗え〜!!」 「眩しい……」
茜雫の説明の間にも、ピカロ達は各々の行動をとっている。余りに騒々しいので、グリムジョーが苛立ち始める。

だがそれも、ルキアの放った“初の舞・月白”で作られた氷の柱が砕かれたことにより止まった。

「……この程度の技で、私を止められるとでも思っていたのか？」

「な………に………!?!」

いとも容易く氷を砕かれたことに、ルキアは目を見開く。これ程までに容易く技を破られたのは、現世でグリムジョーに向かって“次の舞・白漣”を使用した時以来である。

クリステイナは再び左手に光の弓を形成し、そのまま矢をピカロの一体に向かつて放つ。その矢は、狙われたピカロの眉間を貫いた。

「はっ………!?!」

茜雫が貫かれたピカロの身を案じるが、ピカロはピクリともしない。それに対し茜雫は、空中に居るクリステイナに鋭い睨みを向ける。

「貴方……同じ破面を………!!」

「同じ破面？笑わせるな、小娘。お前達と行動を共にしている以上、そいつらはネリエルと同じ『敵』だ。『敵』に対し、殺すことに何の躊躇いを持つ？」

「くっ、うおおおおお!!」

「待てー茜雫!!」

弥勒丸を解放してクリステイナに特攻する茜雫に対し、一護がそれを止めようとする。だがそれよりも早く、クリステイナが『滅斬剣』を手に持ち、それを振るう。弥勒丸で受け止めようとする茜雫だが、弥勒丸の柄は容易く切断され、無防備になった茜雫はクリステイナの放った虚弾を腹部に喰らう。そしてその勢いのままに地面に落下す

る。

「がはっ……………」

「茜雫!!くっ…………破道の三十三・『蒼火墜』!!」

青い爆炎を放つルキアだが、それはクリステイナが羽ばたくだけでかき消される。

「そんな技、喰らうと思ったか?」

「ちっ……………」

見下ろしてくるクリステイナに対し、ルキアのみならずネルやアニーシヤも構える。

だが、ある者達の挙動によって全員の視線が一つに集まる。

「あああ、一人やられちゃたよ」 「どうする?」 「あのお姉

ちゃん、本気で殺しに来てるよ?」 「わあー!だったら、僕たちも

思いつきり遊べるね!!」

「G r u u u u u u u u ……」 「茜雫の仇だあ〜!」 「じゃ

あ、あれやろうよ!」

「いいねいいね!」 「うん、じゃあやろう」

「遊べ!」 「遊べ!」 「アソ…べ……………」 「a s o o

o b e e e e

「あそべ〜!」 「あそべ!」

「……………遊べ……………」
『ランゴスタ・ミグラトリア 戯擬軍翅』!!!……………

「なっ……………!?!」

突如、風切り音が辺りに鳴り響き、全てのピカロの外見が僅かずつ

変化していき、背中から、バツタやコオロギなどの虫の羽を連想させる半透明の翅が生えた。そして、そのピカロ達に留まるクリステイナを囲むように宙を舞い、声を上げる。

「『チユツチユリア
菓菓楽土』！」「『』」「』」

その声が砂漠を駆けると同時に、ピカロ達が囲んだ範囲の空気の流れが止まり、次の瞬間に中心に黒い球体が生み出された。それは凄まじい勢いで回転しつつ、範囲内の霊子を超速で吸収し始めた。

「なん……だと……!!?」

そのしている内に、クリステイナの背中から生える光の翼と、頭上に浮かぶ光の輪が崩れ始めた。翼がだんだん形を失い、クリステイナは地上に落下していく。

そんなクリステイナに向かって、ピカロ達は容赦なく追撃をする。

「虚閃！」「虚閃」「虚閃！」「虚閃」「虚閃」「虚閃！」「せろ」

「セロー！」「虚閃——!!」「バラ！」「セ……ろ……」 「C E R

〇」

「虚閃！」「虚閃」「せろ！」「虚閃！」「セロー！」「虚閃」

ピカロ達の放つ虚閃や虚弾の嵐は、地上に落下していくクリステイナに容赦なく命中していく。無数とも言えるべき破壊の光は留まることを知らず、辺りを赤く照らしていく。

止めどない爆発に、他の者達は目を見開く。明らかにオーバーキルとも言える暴虐に、井上は口を開けたまま呆然とする。

突如、虚閃の嵐の中心から、青白い閃光が空に向かって放たれる。それらは、宙を飛び回るピカロ達の一部に命中し、当たった者を問答無用で消し飛ばした。

そしてクリステイナが落下した地点から、膨大な光が辺りに溢れだす。その光によって、ピカロ達の虚閃や虚弾は弾かれていく。やがてそれは翼として広げられ、その中から肌に少し傷を負った様子のクリステイナが現れた。

「屑が……誰から殺して欲しい……!?!」

クリステイナの眉間には皺が寄っており、その表情から憤慨していることが窺える。両手には『滅斬剣』を携えている。

その様子を見ていた一護は、井上を見る。

「井上……わりいが、治療を急いでくれ。俺も茜雫も……グリムジョーもだ。それに、ネルやあの破面も」

「っ……はい!」

一護の言葉に、井上が頷く。そして井上は双天帰盾の範囲を広げる。それを察したネルとアニーシャはすぐに井上の近くに響転で移動する。双天帰盾も範囲が広ければ、それだけ井上の消耗が激しくなる。恐らくそういう事を察したのであろう。

(早く何とかしねえと……嫌な予感がする……!)

一護は嫌な胸騒ぎを抱えつつ、井上の治療を受けるのであった。

忠誠

我らが死すは
主が忠誠の下

「ぐあ……い」

「石田ア!!」

ザエルアポロと戦う三人は、危機に瀕していた。刀剣解放を行ったザエルアポロに、手も足も出なかったのである。

そもそも建物の中に居ること、石田は滅却師としての力を封じられ、恋次の切り札でもある卍解も封じられているのである。唯一力を封じられていない茶渡も、満身創痍で部屋の隅に横たわっていた。口からは血を吐き、瞳は虚ろになっている。

そして恋次と石田もその例外ではなく、口から血を吐いて横たわる事しか出来なかった。

その理由は、ザエルアポロの技の一つ“人形芝居”によるものである。三人は、ザエルアポロが解放し終えた直後に、地中から襲いかかってきた羽根に包み込まれた。そして数秒した後、三人は羽根の中から出る事は出来たが、その代わりにザエルアポロの手には何かがあった。

三つあり、それぞれが恋次、石田、茶渡を模した人形であった。

—— 蹂躪は、そこから始まったのである。

まずザエルアポロが手に掛けたのは、茶渡の人形。その人形を半分に割ると、中からカラフルなパーツのようなものが入っていた。それが何なのか警戒して見てみると、とたんにザエルアポロはパーツの一

つを取り出し、それを指で潰した。

その瞬間、茶渡が口から血反吐を吐いた。

そして続けざまに、また一つ、また一つとパーツを取り出しそれらを潰していく。パーツが一つ潰される度に、茶渡は苦悶の声を上げながら床に崩れ落ちて行った。

勿論、茶渡がやられている間にも恋次達はザエルアポロに攻撃を加えようとしたが、石田はそもそも銀筒以外攻撃手段がなく、恋次は始解しか使えない為、帰刃状態のザエルアポロに羽根だけでいなされていた。

茶渡が崩れ落ちた後は恋次が対象とされ、胃や腎臓、腕や足の骨を折られた所で、恋次への蹂躪は完了した。

そして現在、その蹂躪が石田に回ってきたのである。

「ぐっ……い！」

「ふん……男の声も聞き飽きてきたな……」

石田が苦しそうにしていると、ザエルアポロはつまらなそうにしながら口を開いた。ここまで三人は、かなり時間をかけてじわじわと傷を負わせられていた。その間に、三人の叫び声は何回響いたか、本人たちにも解らない程叫んだであろう。

そう言ったザエルアポロは、空の方に視線を向ける。

「僕的には、天蓋の上で戦っているウルキオラと、もう一人の者の戦闘が気になるね」

ザエルアポロの言うウルキオラが誰なのかは解らないが、それでも三人はもう一人の方が日向であることは分かっていた。チラツと上を見てみると、天蓋の半分以上が無くなっており、暗い夜の空が姿を現せていた。

その暗い空にも、何度か小さな光が瞬く。そして爆発や轟音も聞こえてきたりする。それらに対し、ザエルアポロは熱心に視線を注いでいた。

そんなザエルアポロの背後に、何者かが忍び寄る。

「とうー！」

「!!」

「っ……よし！取ったぞ——！！」

突如、ザエルアポロの背後からどこに行っていたのか解らなかったペツシエが飛び出してきてザエルアポロの手元に向かって“無限の滑走”を放ちヌルヌルにする。それと同時に、ザエルアポロの手にあつた三人の人形が滑り落ち、それらをペツシエがスライディングでキヤツチする。

「ドンドチャツカ!!」

「おうでヤンス！」

三人の人形を、ペツシエは向かい側に居るドンドチャツカに向けて投擲する。それをドンドチャツカは見事にキヤツチする。その光景を目の当たりにして、恋次は歓喜の声を上げる。

「あの野郎！人形を取り戻しやがった!!」

そんな恋次を横目に、ドンドチャツカは口からなんと、バワバワを出し始める。その光景を見て、三人は絶句する。一体身体のどこに、あんな巨大なウナギのような生き物を入れられるスペースがあるのだろうか。

その間にも、ドンドチャツカはバワバワに指示を出す。すると突然バワバワは三人の下に這いより、器用に体をくねらせながら三人を背中に乗せてザエルアポロの居る方向とは逆の方に向かって進んでいく。

これではまるで三人が逃げている様なので、恋次はたまらず声を上げる。

「オイ、バワバワ！何で逃げてんだよ!?!」

「バワ~~~~!」

バワバワは恋次の声に反応こそするものの、一向に進路方向は変えない。普段の恋次であれば、力尽くでもバワバワの進路方向を変えていたであろうが、不幸にもザエルアポロに身体の臓器やら骨やらを弄ばれていた恋次は、その分の体力がなかったのである。

ならばと思ひ、恋次はバワバワに指示を出したと思われるドンドチャツカに視線を向ける。

「お〜い!!こいつなんとかしてくれ——!!」

だが、ドンドチャツカは恋次に見向きもせずじつとザエルアポロの方に視線を向けている。やがてバワバワは、通路の角を曲がり三人にペツシエとドンドチャツカの姿は見えなくなった。

それをペツシエは横目で確認しながら一息吐いた。そしてそのまま、禰に手をつ込みながら、ザエルアポロに襲いかかっていく。

「お……おい、お前……何をしよう?!」

ザエルアポロが驚愕の色を出している隙に、ペツシエは自分の斬魄刀である「究極」を抜き、ザエルアポロに斬りかかる。刃だと解った瞬間に、ザエルアポロは羽根で防御しようとするが、タイミングが遅かった為そのまま左腕を浅く斬られる。

斬魄刀を振り切ったペツシエを、ザエルアポロは今度こそはと羽根で弾き飛ばす。

「ぐっ……い」

何とか受け止めるペツシエだが、刀剣解放したザエルアポロの力はかなりのものであり、凄まじい勢いで壁に弾き飛ばされる。そのまま壁に激突するが、すぐさま立ち上がる。

表情は仮面に隠れているものの、唯一覗ける瞳には凄まじい闘志が宿っていた。それは後方に居るドンドチャツカも同じである。

立ち上ったペツシエは、ドンドチャツカの下に駆け寄って斬魄刀を構える。

「……ネル様が戦われているな」

「……そうでヤンスね」

つい先程から虚夜宮のどこかから感じ取れた強大な霊圧。それは紛れもない、彼らの主人であるネリエル・トゥ・オーデルシュヴァンクの霊圧。

そしてそれと相対している霊圧にも、二人は心覚えがあった。

ネルが十刃としての生活の晩年、よく第3の宮に食事に来っていた破面。

「クリス様と戦われている……い」

ネルに一時、心を許してくれた破面、クリステイナ・エルフリーデの霊圧。荒々しくも神々しい霊圧。それは紛れもなかった。

二人の霊圧が激突していたのを感じ取り、ペツシエは斬魄刀の柄を握る力を緩めることが出来なかった。必要以上に力を込められる剣は、カタカタと音を立てていた。そしてペツシエの瞳からは、凄まじい怒気が溢れだしていた。そうであるのはドンドチャツカも同じ。「かつて友人であつたお方と、ネル様は戦われているのだ……その苦惱、我等には量りかねる……!!」

震える声で語りながら、ペツシエは斬魄刀の切っ先をザエルアポロに向ける。

「――全てはお前が……我等を餌とし、ネル様を陥れ……そして、クリス様を悲しませた結果だ!!ザエルアポロオ!!」

ペツシエとは思えない程、ドスの効いた声でペツシエは叫んだ。その声は、恋次が開けた天井の穴を通つて、外まで響いていく。

そんなペツシエの姿をザエルアポロは冷めた目で見ていた。やはりか、と。

この破面達が、元第3十刃、ネリエル・トウ・オーデルシユヴァンクの従属官であることは分かり切つていた。それでもなければ、今のようなプライベートなことなど解るはずもない。それ以前に、霊圧の質などで判断できていた。それでもザエルアポロが手を下さなかつたのは、二人が攻撃を仕掛けようとしなかつた為、優先順位が低かつたからである。

だがその考えで、先程三人の人形を奪われてしまった。

しかしもう、そんなことはどうでもよかつた。

「ふん……『クリス様を悲しませた』か……君達は、彼女の従属官か何かかい?」

「違う!!だが、あのお方はネル様の御友人!!そしてネル様の大事な家族でもあつたのだ!!」

『家族』……か……クハハ!!笑わせてくれるじゃないか!!破面が家族など!!」

『家族』という言葉に、ザエルアポロは声を上げて笑う。ザエルアポロには、『イールフォルト・グランツ』という魂を別つた兄がいるが、彼の事をザエルアポロは録霊蟲を運ぶゴミ程度にしか考えていない。

つまりザエルアポロにとって家族とは、他の者達との認識とはかなりかけ離れていたものであった。

勿論、ザエルアポロは普通の意味での『家族』という言葉も知っているが、ザエルアポロにとってはその限りではない。

「お前は、クリス様が微笑みかけてくれるという事が、どれだけの意味を有しているのか解らないからそんな事を言えるのだ!!!」

たった一度だけ。

たった一度だけであるが、ネル達はクリステイナが笑う所を見たことがある。破面であることを忘れさせるような、美しく、凛々しく、優しく、可愛らしく、穏やかで純粋な笑みであった。

その笑みには、今迄クリステイナが何十人の破面と敵対しているなど感じさせる要素など、一つもなかったのである。虚夜宮に来て、一度も笑わなかった彼女が笑った。それは、間違うことなくクリステイナがネル達に心を許したという事になるのである。

それを、この十刃が悉く斬り裂いた。

ネル達は知っていたのである。クリステイナが誰に対しても敵対するのは、何かを失うことを恐れているからだ。その本質には、誰かの温もりを感じたい一心がありながらも、失う恐怖に怯えているのだ。

だからこそ、ネルは怯える彼女の投げ所となろうとしたのである。

「お前だけは許せん……ザエルアポロ!!」

一度投げ所を失った者が、再び投げ所を見つけた。

だがそれも、再び崩れ去った。

それがどれだけの苦痛をクリステイナに与えたか、ペツシエには量り切れない。自分達は、記憶の失ったネルを守っていただけで、常に三人で行動していた。

だがその代りクリステイナは、再び一人ぼっちになってしまった。

悲しかっただろう。

辛かっただろう。

苦しかっただろう。

寂しかっただろう。

そして勝手に去って行った自分達を、大いに恨んでいるだろう。

全ては勝手な憶測であるが、今激突してる二人の霊圧を感じ取るだけで、それが大方間違いでない事は認識出来た。

「……………行くぞ、ドンドチャツカ……………奴を討つ!!!」

「応!!!」

ありつたけの怒りを込め、ペツシエとドンドチャツカは虚閃を放つ準備をする。だがそれも只の虚閃ではなく、二人の虚閃を融合させて放つ強力な虚閃。

ザエルアポロを倒すために編み出した技。

「……………融合虚閃!!!」

通常の虚閃の何倍もの太さの虚閃が、ザエルアポロに襲いかかる。通路の両端を消し飛ばしながら、二人の技はザエルアポロに進撃していく。

その虚閃に対し、ザエルアポロは一切の回避行動をとらない。

——とつた!

そう思った二人であったが、それは一瞬で甘い考えであったことを知らされた。融合虚閃は、ザエルアポロに直撃すると思った瞬間に先の方からかき消されていった。二人が驚く間もなく、ザエルアポロと重なっていない部分だけが彼の横を通り過ぎていき、背後の通路で爆発を起こした。

「な……………何故だ……………!?!」

「……………ふん。まったくもって素晴らしい技だが……………予測の範囲内だ」

「っ……………!」

切り札が、相手に何の手傷も負わせられずに無効化された。これでは、恋次達を逃がした意味がない。

恋次達がこれ以上の戦闘が不可能だと思ったからこそ、二人は彼ら

を逃がしたのである。自分達でザエルアポロを倒すために。
しかし倒せなくては本末転倒である。

「……ドンドチャツカ。私の死に場所は決まったぞ」
「オイラもでヤンス」

何も出来ずに死ぬより、三人が逃げる事の出来る時間を稼ぐ。それが自分達に今できることであると、二人は考えた。

そして二人は斬魄刀を構える。

(ネル様……申し訳(づ)ぎいません……！)

「——」
「正解！ 『ひひおうぎびまる狒々王蛇尾丸』！！」

「なっ!?」

突然、ザエルアポロの上の天井が崩れそこから蛇の頭蓋骨を思わせる巨大な頭部が、ザエルアポロに襲いかかる。その光景に、ペツシエは思わず目を見開く。

ザエルアポロは、多少驚きながらもその頭部を羽根を使って受け止める。

「……奇襲でもしたつもり——」

「——」
「ひこつたいほう狒骨大砲” オオ!!」

だが次の瞬間に、頭蓋骨の口が開きそこから霊圧の光線がザエルア

ポロに至近距離で命中する。目を見開いたザエルアポロは、避ける間もなく直撃を喰らう。そして通路には、爆炎が迸り、通路に居た二人は思わず腰を抜かす。

爆炎が収まるころに、天井の影から一人の姿が現れる。

「き……貴様、恋次!? どうして動け……?」

「ごちやごちや言っつてんじゃねえ!! そいつ倒すなら、俺もやるぜごぶっ!!?」

「……余り叫ぶな、阿散井」

叫び過ぎて血を吐き出している恋次に、石田が呆れた表情で姿を現す。どちらも先ほどまでまともに動ける身体ではなかった。しかし、バワバワが第8の宮から脱出した辺りで、石田が機転を利かせた。

“乱装天傀”

無数の糸状に縊り合わせた霊子の束を、動かない個所に接続し、自分の霊力で自分の身体を操り人形のように強制的に動かす、超高等技術である。それを使用し、石田達は何とか動けるようになった。だが、使えるのが石田だけであるため、メインで動くのは石田であるが、恋次にも使用して何とか動ける程度に力を貸している状態である。

宮から出た恋次は卍解が使用できるようになり、どうやって攻撃を仕掛けようかと考えた結果、石田の飛廉脚を応用して屋根を上り、卍解を封じられない場所から奇襲をかけることにしたのである。

「……ちっ……下等生物が……!」

狒々王蛇尾丸の狒骨大砲を喰らったザエルアポロは、鋼皮牙少し焦げている状態が出て来た。その表情は怒りに満ちている。

だが屋根の上に居る二人の姿を見て、あることに気付く。

(あのゴツイ男と、ウナギはどこだ?)

茶渡とバワバワが居ない。茶渡は一番初めに“人形芝居”で遊び始めた相手なので、既に戦えない体力であるのかと予測するが、バワバワは何をしているのであろうか、とザエルアポロは考える。

「バワ~~~~!!バワ~~~~!!」

噂をすれば。

突如、通路の奥からバワバワが凄まじい速度でザエルアポロに迫っ

ていく。そしてペツシエとドンドチャツカを追い越して、ザエルアポロに噛みつこうとする。

「いい加減……!?!」

噛みつこうとするバワバワの開いた口を羽根で受け止めたザエルアポロだが、バワバワの中から人影が現れる。

———
「ラムエル魔人の一撃」。

バワバワの口の中から飛び出して来た茶渡が、無防備のザエルアポロの鳩尾に「魔人の一撃」を加える。

「ぐっばおお!?!」

「……………後は……………任せた……………」

ザエルアポロを数メートル吹き飛ばした茶渡は力尽きその場に倒れる。そんな茶渡を、バワバワは急いで回収して、撤退していく。

その光景を、ザエルアポロは口から血を吐きながら凄まじい形相で去って行くバワバワを睨んだ。そして手の平を撤退するバワバワに向ける。

だがその瞬間に、狒々王蛇尾丸の頭蓋骨がザエルアポロの前に立ちはだかる。

「てめえの相手はこの俺だぜ……………陰険眼鏡!」

「……………精々、今のうちにほざいてると良い……………!」

烈火

怖いのは
貴方がいたという証が
無くなってしまうということ

「うっ」

刀剣解放したピカ口の一体が、クリステイナの『滅斬剣』ギリヨテイナのよって上半身と下半身に両断される。これで何体目かは解らない。だが、砂漠の上には夥しい数のピカ口が倒れている。ピカ口は群にして個という特異な性質を持ったため、ピカ口達の中の一体が殺されたとしても、他のピカ口達から霊力を受け取って復活することが出来るのである。だが、今はそれが出来ない程にピカ口達は疲弊していた。それは他でもない、クリステイナの手によってである。

戦う前には五十体程居たピカ口であるが、その数はすでに二ケタを切っている。ピカ口達の中には、その圧倒的なクリステイナの強さに、戦意喪失している者も出て来ている。

「……………おいで」

そんなピカ口に対し、井上は優しく声を掛けて呼び寄せる。そして優しく胸に抱き寄せる。こうして甘える姿は、いくら破面であっても子供であるのだと、井上は感じた。

そして遂に、時は来た。

「……………すまねえ、井上。もう大丈夫だ」

一護が、完全に回復する。それは他の治療されていた者も同じである。

そして次の瞬間に、井上の視界は黒に染まる。

—— 『天鎖斬月』。

卍解した一護に続き、二人が続く。

「謳え—— 『鈴騎士』」

「火種を煽れ—— 『焰狩獵豹』」

回復を早めるために刀剣解放を解いていた二人が、再び本来の姿に戻る。そして凄まじい速さでクリステイナに向かって行く一護に、二人は続いていく。

一護はその途中で、迷わず虚化する。

生半可な力では瞬殺されるのがオチである。ならば、最初から本気で行くべきだ。

『うおおおおお!!』』

月牙天衝を、ピカロを斬り殺そうとするクリステイナに放つ。それはクリステイナの静血装を展開した光の翼に防がれるが、今やられようとしていたピカロを救うには十分であった。幾ら意図していない行動だったとしても、ピカロは一護が回復する時間を稼いでくれた。そうでなくても、自分の目の前で誰かが死ぬのを、一護はもう見たくなかった。それは大勢のピカロの中に、自分の妹達の姿を映し出したのかもしれない。

「またやられに来たか」

そう言うクリステイナに対し、今度は刀身に月牙天衝を纏わせたまま振るう。それはクリステイナの『滅斬剣』によって防がれ、両者の間には火花が散る。

そんなクリステイナの背後に、忍び寄る影が一つ。

—— 『灼熱烈爪』。

アニーシャが、無防備なクリステイナの背中を斬ろうとする。だがそれは、クリステイナの左手に発現した『滅斬剣』によって防がれる。

これでクリステイナの両手は塞がれた。

—— 『翠の射槍』。

そんなクリステイナの胴目がけて、ネルがランスを投擲する。このまま行けば、ランスはクリステイナの胴に問答無用で命中するだろう。

だがクリステイナがそれを赦すはずもなく、一瞬二人の攻撃を抑える力を弱め、その際に硬直が解け、響転で移動する。『翠の射槍』は虚空を貫き、天目がけて昇っていく。

クリステイナは、手元に何の武器も無くなったネルに向かって滑空する。そんなクリステイナにネルは虚閃を放つが、それは『聖風』によつて掻き消される。

しかし超高速で動くクリステイナに対し、超速戦闘を得意とする天鎖斬月を解放している一護と、破面の中で二番目に響転が速いアニーシャが追いかける。

しかし二人がどうする間もなく、クリステイナは何者かの妨害を受ける。

その方向を見ると、一人の女破面がクリステイナに向かって虚閃を放っていたのがアニーシャの目に見えた。

「サラ……………!?!」

驚くアニーシャに対し、サラは響転でネルの前に立つ。視線は、アニーシャを見つめたまま。

「お姉ちゃん……………元に戻ろう……………」

その言葉に、アニーシャは目を見開く。

「何言ってるの!?!そんなことしたらアンタは……………!」

「……………」

サラの無言の訴えに、アニーシャはハツとしたような表情を浮かべる。その間にも、クリステイナはネルを仕留めようと、神聖滅矢を番える。

それを見たアニーシャは、苦渋の決断であるかのように歯を食いしばり、クリステイナの居る場所を通り過ぎて、サラに向かって一直線に移動した。

「……………サラ」

「……………うん」

アニーシャは手の差し伸べ、それをサラは手に取る。その瞬間、二人は輝き始め、やがて一つの身体になった。

「……………!?!」

その姿に、矢を番えていたクリステイナは少し驚いたような顔を見せる。だが、すぐさま気を持ち直し、矢を放つ。

だがそれよりも早く、赤い髪に桃色のメツシユを入れた女破面が鉤爪のような斬魄刀を取り出して、口を開く。

「爆ぜろ——『焰狩獵豹』」

その瞬間に、女破面を中心に爆発が起きる。それによってクリステイナの放った矢は掻き消される。

そしてその爆発の中からは、アマゾネスのように露出の高い服を身に纏った破面が出て来た。そして手からは、轟々と燃え盛る炎の爪が揺らめいていた。露わになっている四肢には、程よく筋肉が付いており、小麦色になった肌と相まってしなやかさを漂わせていた。

その霊圧は、先程とは比べ物にならなかった。

そして、その姿を見てネルは目を細めた。

(……戻ったのね、アニーシャ。第4十刃の頃の姿に……)

アニーシャは元々一人の破面であった。だが、ある時ザエルアポロの作った魂を分ける薬を飲み、その身体を『アニーシャ』と『サラ』に分けた。その際に個々の戦闘能力が低下したために、アニーシャは十刃落ちになった。

だが、今ここでアニーシャは元に戻った。

司る死の形は『我情』。自分の思い通りに生き、そして自分の思い通りに死んでいく。それが、元第4十刃であるアニーシャ・バレンタインの司る死。

そのアニーシャは、クリステイナに視線を向け、咆哮を上げる。

「——うおおおおおおおおお!!」

「っ……………」

その咆哮に、一護は顔を歪ませた。まるで、先程まで戦っていたグリムジョーが刀剣解放した時と同じようだ、と。

そしてアニーシヤは、クリステイナに向けて手を翳す。手の平からは、黒い閃光が溢れだす。

「——黒虚閃!!」

アニーシヤの放った黒虚閃に対し、クリステイナは静血装を張って防御する。黒い閃光は、クリステイナに命中するものの、横に弾かれていく。

弾かれた黒虚閃は、砂漠の大地を抉り取り、凄まじい高さまで砂を巻き上げる。黒虚閃の直撃ですら無傷のクリステイナを見て、アニーシヤは舌打ちする。しかし、黒虚閃を受けている間に、クリステイナは少しだけ隙を見せていた。

「この……………程度でー!」

静血装を展開するクリステイナの背後から一護が斬りかかる。虚化したことにより霊圧こそ上がっているものの、効くかどうかまでは解らない。

だが当ててみなければ解らないことである。

『月牙天衝オオオオオ!!』

黒い斬撃は、クリステイナの背中を襲う。だが、静血装を展開していたため、月牙天衝はアニーシヤの黒虚閃のように横に弾かれていき、致命傷にはならない。

元十刃や、虚化した死神の攻撃ですら弾き飛ばすクリステイナに、相対す誰もが息をのむ。

そんな光景を、井上は遠目で見ていた。

「……………皆……………」

自分には何もできない。それこそ、皆の傷を癒すことぐらいしか。攻撃方法が無い訳ではないが、椿鬼の“孤天斬盾”を放ったとしても、一護の本気の攻撃をはじく相手に対し傷を負わせられるとは思わない。

“三天結盾”も、気休め程度の防御にしかないだろう。

(あたし……どうすれば……)

井上が悩んでいる間にも、戦闘は激化していく。高速戦闘型の一護とアニーシャは、クリステイナに対し近接戦闘を行っている。これはクリステイナの遠距離攻撃を恐れての事である。距離を取られてしまえば、こちらに相手に対して遠距離攻撃での決定打がない分、向こうの攻撃が激しくなるのは目に見えていた。

二人の連撃に対し、クリステイナは両手に滅斬剣を持って相対していた。さすがに二人同時に近接戦闘を行われるのは相性が悪いのか、表情もどこか険しい。

そんなクリステイナの背後から、ネルがランスを携えて突進してくる。

「ちいつ………！」

それを感じ取ったクリステイナは、すぐさま上空に飛んで逃げようとする。

「鉄砂の壁、僧形の塔。灼鉄熒熒、湛然として終に音無し——縛道の七十五・『五柱鉄貫』！」

しかしその瞬間にルキアが“五柱鉄貫”を唱える。突如空中に現れた五つの柱は、クリステイナの両手両足、そして首を貫きそのまま地面に縫い付けようとする。だが、拘束された瞬間に、クリステイナは動血装を体全体に展開して、その拘束を無理やり解く。

七十番台の鬼道を力尽くで解かれたことに、ルキアは驚きを隠せない。そんなルキアに、クリステイナは響転で肉迫し、“滅斬剣”で首を刈り取ろうとする。

完全に不意を突かれたことにより、ルキアはその場から一步も動けない。

そんなルキアを、茜雫が跳ね飛ばしクリステイナの“滅斬剣”を真面に受ける。

『「っ……茜雫ああああ!!!」』

胴体から鮮血をまき散らす茜雫の姿を目の当たりにして、一護は感情のままにクリステイナに斬りかかる。その一撃は静血装を展開した光の翼によって防御され、そして翼が羽搏くことによって一護の体

は吹き飛ばされる。

だがその間に、ルキアが体勢を立て直し倒れている茜雫を抱きかかえて戦線離脱する。そんな二人を仕留めようとするクリステイナだが、目の前にアニーシャが立ちちはだかる。

その瞳は、いつものお茶らけたものではなく、敵を仕留める肉食獣のものであった。響いてくる低い唸り声が、アニーシャが虚としての本能を完全に解放していることを如実に表している。

そんなアニーシャが、両手に灼熱烈爪を纏わせながらクリステイナに斬りかかる。それをクリステイナは両手に携えた“滅斬剣”でいなしていく。

「でやああああ!!」

「っ!」

だがアニーシャをいなすクリステイナの上から、ネルが四本足で踏みつけようと飛び込んでくる。それに対し静血装を腕に展開して防御しようとするが、前にアニーシャ、後ろに一護が居る事を思い出し、一瞬でも隙を見せれば不味なることを察し、咄嗟に動血装を展開する。

そして踏みつけてくるネルの足の内、前足二本を掴んで動血装で力が向上した腕力のまま背後にいる一護のネルを投げつける。

『「悪い、ネル!!」』

自分に向けて投げられるネルを飛び越えて、一護は天鎖斬月の刀身に月牙天衝を纏わせながら斬りかかる。

そんな一護に、クリステイナは面倒くさそうな顔をする

「賢しい……!」

あの攻撃はたとえクリステイナでも、静血装を展開していなければ鋼皮を斬り裂かれるレベルの切断力を有している。故に、直撃は免れない。只でさえ、三人の同時攻撃より静血装を展開し続けているのである。これがもし、動血装を展開している間に襲われたと考えると、一気に形勢が傾くと考えていた。

——ならこいつを最初に仕留める。

「っ!？」

突如脳内に響いた声に、クリステイナは一瞬よろめく。その様子は、周りの者達も目の当たりにした。

そして今まさに攻撃をしようとしていた一護は、好機とばかりに纏わせる月牙天衝の威力を上げる。　すぐ目の前まで迫った一護に対し、クリステイナは静血装を全力で展開することによつて事を済ませようとす。

そして遂に一護の一撃が、クリステイナの胴体に命中する。

「ぐっ……!」

苦悶の声を漏らしながら、受け切ろうとクリステイナ踏みとどまる。しかし一護は相手の体勢を崩すために、一撃で押し切ろうとはせずに、難度の剣を振るう。その度に、黒い斬撃がクリステイナの華奢な体に襲い掛かる。

ギリギリの所で踏みとどまっていたクリステイナであるが、直後背後からアニーシャが全力のドロップキックをがら空きになっていた背中に襲い掛かる。その瞬間にクリステイナはバランスを崩す。

『うおおおお!!』

バランスを崩したクリステイナの胴体に、一護は天鎖斬月を叩き込む。静血装を展開している筈の身体に僅かながら裂傷が出来、驚くクリステイナは勢いのままに弾き飛ばされる。

そして砂漠の上を何バウンドかしてから、翼を羽搏かせて体勢を立

て直す。

追撃するために、一護はすぐさま肉迫する。そんな一護に対し、再び“滅斬剣”を携えクリステイナは相対す。

『クリステイナ、駄目だよ』

「ぐっ……………黙れ!!」

『「っ……………!?!」』

脳内に再び響いてくる声に顔を顰めながら、クリステイナは一護の連撃を受け止めていく。

それに対し一護は複雑な感情を抱いていた。

(何で……………何でこいつの剣からは『淋しさ』しか伝わってこねえんだ……………!?)

いつからかは覚えていない。だが一護は、斬魄刀から戦っている相手の感情や思いなどといったものを感じ取れるようになっていた。それは、強い相手程顕著に表れてくる。

剣八なら、『戦うことへの喜び』。

白哉なら、『掟を守る』という決意。

そしてグリムジョーなら、『目の前の相手を殺す』といった思いである。

今日の前で戦っているクリステイナは、今まで戦ってきた中でもトップクラスに入るほどの強者である。

先程、このクリステイナという破面は『死神も虚もすべて殺す』というような旨を口にした。そうであるのなら、グリムジョーに似たような感情を感じ取れてもよい筈である。しかし剣を伝わってくるのは、『淋しさ』ばかり。

(何でなんだよ……!?)

今まで戦った中で一番似ている者は、井上の兄である昊である。

大切な者が、自分から離れていきどうしようもない喪失感に襲われた者。

そして伝わってくる感情は、今までで一番大きい。それは、一護が虚に近づいたからなのか、クリステイナが死神に近づいたのか、それともさらに他の要因があるのかは解らない。

『だけどよオ!!!』

「ぐっ!!」

突如、一護の斬り込み深くなり、クリステイナは顔を顰める。

『俺は……これ以上負けられねえんだよ……!!』

「ほごげ……餓鬼が……!!」

想いを胸に、一護は相対す。

天鎖

あんよが上手

あんよが上手

いないいないばあ

いないいないばあ

いなくなつたのは

だあれ？

『うおおお!!』

黒い斬撃がクリステイナに襲いかかる。怒涛の連撃を、両手の「滅斬剣」でいなしていく。黒い刀身と光の刀身が激突するたびに、火花のように霊子が散っていく。それに伴い、辺りに砂塵が巻き上がる。

一護の攻撃に対し、クリステイナは背中の翼を羽ばたかせて聖風を繰り出す。それによって先程までクリステイナに肉迫して攻撃していた一護は、体勢を崩して後ろに数メートル吹き飛ばされる。その隙を狙ってクリステイナは神聖弓を左手に出現させ、番えた神聖滅矢の矢先を一護の心臓に定める。

それを見た一護は天鎖斬月を構えて防御しようとしたが、ネルがクリステイナにタツクルを喰らわせて吹き飛ばしたことにより、一護はすぐさま体勢を立て直して攻勢に転じようとする。

この破面は強い。だからこそ、三人で戦つていても未だに決定打を与えられていないのである。しかし、ここで負けてしまつては自分だけでなく他の者達にも危害を加えられるのは目に見えていた。

故に負けられない。

『—————!』

一護はネルと鏢迫り合いになっているクリステイナに一気に肉迫する。両手で柄を握り、確実に一撃を加えようとする。それを感じていたクリステイナは、ネルと鏢迫り合いになりながらも右手の剣を、一護に投擲する。

投擲された剣は、脳天を捉えるように投げられたが、咄嗟に頭を傾けられたことにより一護の仮面の頬の部分を抉っていくだけに終わった。一護はその攻撃に怯まずに、月牙天衝を放とうとする。そして一護の反対側には、“灼熱烈爪”を発動しているアニーシャがクリステイナに飛び掛かろうとしている。

挟み撃ちにされていることを目の当たりにしたクリステイナは、すぐさま上空に飛び立つ。

そんなクリステイナに対し、ネルが虚弾を連射する。それに対しクリステイナは、“嵐光”を地面に向かって乱射する。狙いなど在于て無いような雰囲気で放たれる虚閃の嵐は、地面に居る者に見境なく襲いかかる。

勿論それは井上も例外ではない。

「っ……『三天結盾』！」

茜雫を治療していた井上だったが、虚閃の一つが井上達の居た場所に飛来してくるのを目の当たりにして井上は防御しようとする。そしてルキアは、“円闌扇”を展開してそれを防御しようとするが、刀剣解放状態のクリステイナの受け切れるかと言われれば、受け切れない自信があった。

「ちっ」

だが、虚閃が“円闌扇”と“三天結盾”に当たる前に、グリムジョーが素手でその虚閃を受け止めた。一瞬何が起こったのか解らずに、見ていた二人は目を見開く。

数秒、赤い光が瞬いた後、グリムジョーは砂塵の中に悠然と立っていた。

何故グリムジョーが井上達を助けたのは解らない。ルキアは現世でグリムジョーに一度、殺されかけた。そんな相手を何故、助けるような真似をしたのか。

理解できないでいると、グリムジヨは井上の方に顔を向ける。

「……………借りは返したぜ、女」

「えっ……………」

グリムジヨの言っている意味が解らずに茫然としていると、先程まで自分がグリムジヨの事を治療していたことを思い出した。

そう言えばこの破面は、『腕の借り』と言ってロリの暴行から自分を助けてくれた。その方法がどうだったとは言え、この破面にはこの破面なりの仁義というものがあると言うのであるうか、『借りたら返す』という考えを持っているのであろう。

今のも、先程の治療の借りという事であろう。

「っ……………あやめ！」

井上はグリムジヨを見て、咄嗟に盾舜六花の一人であるあやめに指示を出して『双天帰盾』の範囲をグリムジヨまで広げる。

井上が気付いたのは、今の虚閃を受け止めてグリムジヨの片腕が焦げていた事である。

みるみる傷は治っていくが、グリムジヨは不機嫌な顔をする。それもそうである。借りを返したと思ったら、また借りを作られたのである。

「女……………てめえ！」

「気にしないで」

「あぁ？」

「……………あたしが勝手にやったことだから……………気にしないで……………」

井上は今の一連の行動を反射的に行ってしまった。故に、今のは借りを作る行動ではなく、ただのお節介である。だから、グリムジヨに借りを返してもらう必要などない。

そう顔で訴える井上を見て、グリムジヨはさらに顔をしかめる。いくら返す必要がないと訴えられても、グリムジヨも思いのほか繊細な性格であった。故意であろうとなかろうと、『治療を受けた』という事実がグリムジヨの胸の中にイガイガしたような感覚を覚えさせる。

「ちっ……………」

グリムジョーは納得しないまま、井上達の前に立つ。まるで、井上達を守る盾のように。

未だに虚閃の嵐は止まない。

「グリムジョー……………」

井上が呟くのに対し、グリムジョーは何の反応も見せない。しかし、黙して虚閃の前に立ち塞がるその背中には、どこか一護に似ていた。

井上達がそのようなやり取りをしている間にも、クリステイナは先程よりも上空に上っていつていた。それを一護が追っていたが、クリステイナの放つ神聖滅矢によって牽制され、上手く近づけないでいた。

そして突如、クリステイナの頭上に浮かぶ光輪が広がり始める。

『な…………なんだよ、あれ…………!?!』

どんどん広がっていく光輪を見て、一護は目を見開く。そして光輪がある大きさになった途端、異変が起こり始める。

まずクリステイナの近くにあった建物が霊子に分解されて、光輪の上に収束されていく。

何が始まったのかと身構える一護だったが、次の瞬間、一護の死覇装が霊子に分解されていく。そしてそれに留まらず、一護の皮膚も分解されて霊子へと変貌していく。

『つ…………ぐつ…………!?!』

「一護…離れて!!」

ネルの言葉を聞いて一護はすぐさま砂上に戻る。霊子に分解された皮膚の部分は、肉が曝け出しており血が流れている。

そうしている間にも、クリステイナは周りにある物全てを霊子に分解して光輪の上に収束させていく。

———
”スクラッヂ 聖 隷 ”

滅却師の霊子の収束能力を限界まで強化し、隷属という域まで達した力である。その隷属は、周りにある霊子で構成されている物全て見境なく隷属させる。

「クリス…………貴方まさか…………!」

ネルは何か心当たりがあるのか、目を見開く。その表情からは焦燥

が窺える。それを横目で見る一護とアニーシヤは、何事かと思い身構える。

そしてネルは、ありったけの音量で叫ぶ。

「——皆!!:逃げて!!」

「もう遅い」

ネルの叫びに対し、クリステイナは冷めた目で地上に居る者達を見下す。頭上に浮かぶ光輪の上に隷属されていった霊子の塊はかなりの大きさになり、太陽のような輝きを放っている。

その神々しい光景とは裏腹に、その塊の霊圧濃度に地上の者達は息を飲む。

次の瞬間、クリステイナは左手の神聖弓に番えている神聖滅矢を、その塊に向かって放つ。そして矢が直撃すると同時に、輝きがさらに激しくなる。

「メテオ滅却流星」

次の瞬間、霊子の塊が爆発し、砕け散り地上に向けて凄まじい速度で落下していく。砕け散った塊は、それぞれ拳大の大きさであるが、その分落下してくる数は夥しくなっており、数百個という単位で地上に落下してくる。それぞれが広範囲に飛び散っていく光景は、ナパーム弾のようにも見える。

それを目の当たりにした者達は、すぐさま回避行動や迎撃態勢に移

る。

『「月牙天衝」!!』

「翠の射槍」!!」

「黒虚閃」!!」

自分達に降りかかろうとする流星達に向かつて、三人は迎撃に移る。三人の放った攻撃はそれぞれ、いくつかの流星に激突する。

だが迎撃された流星は、その場で大爆発を起こす。

その小さな霊子の塊とは思えぬ大爆発に、この場の全員が焦燥を覚える。あんなのが直撃すればただでは済まない。

ネルが先程投擲したランスは、いくつかの霊子の塊を打ち砕いて勢いを失くし、そのまま地上に落下していった。しかしそれを取りに行く時間も惜しいので、ネルは虚閃を連射する。

横に居るアニーシャも虚閃を連射し、一護も月牙天衝を連続で放つ。

幾つもの霊子の塊を迎撃するが、その度の大爆発が起こり、視界はどんどん悪くなっていく。視界が悪くなれば、それだけ迎撃の質が劣っていく結果に繋がり、迎撃が遅れていく。そして遅れば、さつき迎撃したもののよりも高度が低い場所で爆発を起こす結果となり、再び視界が悪くなっていく。

そのような負のスパイラルの結果、遂に霊子の塊は地面に着弾し始める。

爆発が起こる度に砂塵が巻き上がり、さらなる視界不良に導いていく。

「っ、アあ!!?」

「アニーシャ!!」

そして迎撃していたアニーシャの頭部に命中し、そのまま爆発を起こす。アニーシャは頭部から煙を立てながら、その場に崩れ落ちていく。辛うじて頭部の一部が吹き飛んでいるとうには見えないが、それでも大ダメージであったことには間違いない。

崩れ落ちるアニーシャを庇うように、ネルは響転で移動して立ち塞がる。何とか迎撃していくネルであるが、人数が一人減った分流星の

勢いも強くなり、手が間に合わなくなる。

横目で、ルキアやグリムジョーも何とかしようとして鬼道や虚閃で迎撃しているのが見える。

それを見たクリステイナは、「光雨」を地上に向けて放っていく。

——冗談じゃねえ！

それを目の当たりにしながらも、一護は必死に月牙天衝で迎撃する。

「っ……ぐううっ!!」

靈子の流星を迎撃しながらアニーシャを庇っていたネルに、クリステイナの放つ神聖滅矢の雨が降り注ぐ。それは肩、胴、そして足に次々と刺さっていく。

明らかにネルを狙って放たれている攻撃であった。

そして次の瞬間、矢の一つがネルの頭部の仮面に突き刺さった。それと同時に、ネルの瞳からハイライトが抜け、その場に崩れ落ちる。さらに空気が抜けるような音が一瞬響き、ネルの姿が子供のものに戻った。

『っ……ネルウウウ!!』

このままではネルとアニーシャが成す術なく串刺しにされて殺されると思い、一護はすぐさまネル達の前に移動し、盾のように立ち塞がる。出来るだけネル達を覆う部分が広くなるようにと、一護は放たれている矢の群れと靈子の流星に対し、背中を向け、両手を広げる。

そうすれば、命中する確率が上がるのは自明の理であり、すぐさま流星の一つが一護の背中に命中し、爆発を起こす。

「くっ……黒崎くん!!」

井上の悲痛な叫びも、全て爆発の音に掻き消される。一発喰らった一護に、続けざまに何発も命中し、その度で大爆発を起こしていく。それだけに飽き足らず、神聖滅矢の雨の一護の背中に突き刺さろうとする。

しかしその光景は、爆炎や砂塵によって覆い隠されていた。

「アハハ……アハハハ、アハハハハハハ!!」

その光景に、クリステイナは狂氣的な笑みを浮かべながら笑い声を

上げる。そして神聖滅矢を何発も放つ。
狂っていた。

彼女の中に在る凶暴な何かが、彼女を狂わせていた。
「死ね!!死ね!!みんなミンナ皆、死んじゃえ!!」

クリステイナが狂ったように笑っている間にも、霊子の流星も落ち着き、辺りには静寂が戻っていく。

そしてクリステイナは、砂塵の中にいるであろう肉塊を確かめるために、一度神聖滅矢を放つのを止める。

「ウフフ……フフ……フフ……フ……?」

砂塵が落ち着き、中からは確りとした人影が存在していた。しっかりと両腕を広げながら地面で倒れているネルとアニーシャを庇っているのは、紛れもない一護であった。

死覇装こそ、上衣の右腕の部分と袴しか残っていなかったが、それでもそこには一護が二本足で堂々と立っていた。

クリステイナは、その光景を信じられずに瞠目する。

何故、あの攻撃を喰らってここまで無事なのか。

どこか一部が吹き飛んでいたり、焦げて焼け爛れていたりしてもよいのである。

「……………!?!」

かなり上空に居る為、はつきりとは見えなかったが、一瞬一護の背中に青い線が奔っているのが見えた気がした。

フルート・ウエーネ
—— 静血装……………?」

滅却師にしか使えない筈の技術。それを何故、この死神もどきが使えるのか、クリステイナには理解出来なかった。

クリステイナは啞然としている間にも、一護は倒れている二人を担ぎ、井上の元まで移動する。

「……………悪い……………二人頼む……………」

「だ……………大丈夫……………?」

「ああ。何とかな」

井上の心配に対し、一護は平然とした様子で受け答えする。

そして一護はすぐさま、クリステイナの下に飛んでいく。その際

に、虚化も忘れない。速力が急激に上昇し、ものの数秒でクリステイナの居る高度まで上った。

虚化し、漆黒の瞳になった一護は、目の前のクリステイナを見据えていた。

『……………もう……………やめようぜ……………』

「……………何を言っている……………?」

『……………テメーとネルが戦う必要なんてねーんだよ……………』

一護の言葉に、クリステイナはすぐに鬼のような形相となり怒りを露わにする。そして霊圧も上昇させて、目の前の一護を威圧しようとする。

しかしその霊圧の上昇に、一護は平然とする。

「……………お前が何を言っているのか、私には解らないな」

『……………テメーは、ネルを許せねえからネルを殺すつつたな。でも、俺はそう思わねえ』

「……………何を言いたい?」

『テメーが許せねえのは、自分を置いてったネルじゃなくて、それでも帰って来てくれたネルを許せねえ自分自身じゃねえのかよ?』

一護はそう言った瞬間に、クリステイナは凄まじい速さで肉迫し、一護に斬りかかる。それに対し一護は天鎖斬月を構えて受け止める。刀身が激突した際に、火花が散るほど激しかった激突であったが、一護は弾き飛ばされる事無くその場に留まった。

憤怒の色を見せるクリステイナに、一護はあくまでも冷静に相対す。

『「つ……………でも、テメーは誰にも想いを受け止めてくれる奴がいねえ……………それこそネル以外にな……………だからテメーは、怒りも悲しみも寂しさも殺意も、ネルにぶつけるしかねえんだよ……………!」』

「黙れ!!!」

一護の言葉に、クリステイナは怒号を上げる。そしてクリステイナは力の限り羽ばたき、一護を押し返す。そしてそのまま、地面に向かって二人は急降下していく。かなりの速度で降下していき、地面に激突した時には轟音と砂塵が巻き起こった。

一護は下敷きになるようになり地面に激突するが、それでも剣に込める力は緩まない。それどころか、時間が経つに連れて一護の力は強くなっていく。

『……謝りやいいんだよ……謝って……それで許せるのが……許してくれるのが“家族”だっ!!』

「お前と問答を交わすつもりはない!!」

二人が鏢迫り合いの状態のまま霊圧の衝突が起こる。

クリステイナの技を受けて疲弊している一護。

致命傷を全て静血装により免れてきたクリステイナ。

単純に考えれば、この鏢迫り合いはクリステイナに軍配が上がるだろう。しかし、地面に仰向けになりながらクリステイナの剣を押し返す一護は、徐々にクリステイナを押し返し、ゆっくりと立ち上がっていった。

(何故だ……何故この人間は、まだ立ち上がれる!!?)

一護を斬り捨てるべく、クリステイナは全身に動血装を展開して押し切ろうとする。それでも、剣は一向に目の前の人間の首を刈り取るには至らない。それどころか、未だにこちら側が押されてきている。

そしてよく見ると、一護の肌蹴ている上半身に、赤い線が無数に奔っていることに気が付く。

「馬鹿な……!!?」

ブルート・アルテリエ
動血装……だと……!?

『———“月牙天衝” オオオ!!!』

動揺するクリステイナに対し、一護はゼロ距離で月牙天衝を放つ。目の前で瞬く黒い閃光に我に返るクリステイナであったが、時すでに遅く、静血装を展開する間もなく黒い霊圧の斬撃を身体に喰らった。華奢な体に一文字が刻まれ、そこから大量の鮮血が宙を舞う。クリステイナは目を見開いたまま、その場で膝を折り曲げて身体をのけ反らせるようにして崩れ落ちた。オッドアイの両目は、虚ろなままに青い空の中にぽっかりと浮かんでいる暗い夜を見つめていた。

———痛い。

『痛いね』

———熱い。

『熱いね』

———苦しい。

『ううん。苦しうなんてない』

———辛い。

『辛うなんてない』

———憎イ。

『憎うなんてないよ』

———殺シタイ。

『ダメだよ、クリステイナ』

———アア、解ツタヨ。

『何が?』

『「——!?」』

突如、地面に崩れ落ちていたクリステイナが立ち上がり、右手で一護の首を絞める。それに対し一護は必死の抵抗を見せるが、全然振り解ける気配は無い。

「死ネ……死ネ……死ネ……!」

オッドアイであった筈の瞳は、どちらも白目が向かれており、目尻からは血涙がどくどくと流れ出している。そして次の瞬間、クリステイナの背中の翼がどんだん赤く染まっていく。そして光の翼は、徐々に粘性の液体のように——血のように変貌していく。

身体中に黒い線が奔り、血管のように脈を打っている。

「ア、ア!!」

『「ぐっ!?」』

クリステイナは、獣のような雄叫びを上げながら一護を地面に叩きつける。その衝撃で一護は苦悶の声を漏らしながら、天鎖斬月を自分の首を掴む腕に突き立てる。

しかし、ガキンという甲高い音が鳴り響くだけであり、クリステイナの肌には傷一つ付かない。

(嘘だろ……!?)

「ア、アア、ア、アアアアアア!!」

そして空いていた左手を一護の胸に当て、手の平からは黒い閃光が瞬いていく。それを見て一護は瞠目する。

「ッ!!!」

声にならない咆哮が、空に響く。

セロ・オスキュラス
“黒虚閃”。

思惑

手綱を握られている獣
首を絞められるのを待つか
その牙で食いちぎるか
お前が決める

「く……黒崎くん……？」

つい先程、クリステイナが一護に対し至近距離で黒虚閃を放ったことにより、一護の周りには砂塵が巻き起こっていた。その威力は、アニーシャが放っていたものとは比べ物にならないほどであり、喰らう瞬間を目の当たりにしていた者は、全員が絶句していた。

クリステイナの猛攻を受け切った一護であったが、今の攻撃を無傷で受け切れるとは思わない。

井上が震えた声で、少年の名を呼ぶ。

その瞬間に、何かが井上の横を通り過ぎる。井上が反応する前に、通り過ぎた何かはドチャという肉質な音を奏でて地面に落ちる。

「——つ黒崎くん!!!」

恐る恐る後ろを振り向いた井上の瞳には、胸に風穴を空けられた一護の姿が映った。空けられた孔からは、止めどなく血が流れ出て、砂漠の地面を紅く湿らせていく。一護の開かれている目は、虚ろに、虚空を見つめていた。

それだけで、今の一護がどういった状態であるかが井上には解つた。

「ア、ア、アアアアッ!!」

井上が双天帰盾の領域を広げようとした瞬間に、砂塵の中から雄叫びを上げながらクリステイナが飛び出してくる。そしてそのまま、地面に転がっている一護の身体を蹴飛ばした。

その光景を見て、井上は瞠目した。

このままでは、一護が死ぬ。

「ツいやああああ!!!」

井上は、絶叫しながら一護の駆け寄ろうとする。しかし、その瞬間にルキアが井上の前に立ちはだかる。

「待て、井上!! 奴に近付くな!!」

そう言っただけでルキアは、駆け寄ろうとする井上の前に立つようにして先行していく。既に始解はしている。だがそれで、あの化け物のような霊圧を放つクリステイナに勝てるとは思ってはいない。だが、このまま恐怖のままに立ち尽くしていれば、それだけ一護の死ぬ確率が高くなるだけである。

少しでも、自分に注意が向くようにルキアは仕掛ける。

「次の舞————『白漣』!」

雪崩のような冷気を、一護を蹴り飛ばした後その場に留まるクリステイナに迫っていく。だが、技を繰り出した瞬間に、クリステイナの姿はその場から消え失せる。ルキアはどこに行ったのかと辺りを見渡す。

その瞬間に、耳の奥に何かが砕けるような音が聞こえた。

「————なっ……………」

気付いたのは、自分の身体が地面に落ちた後であった。首に感じたことのない激痛が奔った後に、目の前が真っ赤に染まったような感覚に陥った後、ルキアは意識を闇に落とした。

その一連の流れを、ルキアのすぐ後ろに居た井上ははつきりと目に移していた。ルキアが『白漣』を放った直後に、クリステイナの姿はすぐにルキアの背後に存在していた。そのままクリステイナは、掌打をルキアの側頭部に叩き込んだ。その瞬間に、ルキアの首から骨が砕けるような鈍い音が辺りに響き、小さな体はそのまま砂漠の上を何バウンドもして吹き飛んでいった。

「朽木さん!!!」

吹き飛んでいったルキアに対し、クリステイナは黒虚閃を放とうとする。黒い閃光が辺りを照らす。

「あ、ああ……あああああ!!」

その一連の流れだけで、井上は何をすればよいのか解らず混乱に陥る。一護もルキアも、すぐに治療しなければならない。だが、クリステイナはそのような時間など一切与えようともせず、執拗に相手に攻撃を加えようとしている。

クリステイナの黒虚閃は、井上の「三天結盾」などでは防げない程威力が高い。

「軋れ

—————
『豹王』
—————
バンテラ

だが、ルキアに放とうとしていた黒虚閃は、刀剣解放したグリムジョーがクリステイナの腕を蹴り上げたことにより、虚空を貫くように打ち上げられて行った。

敵を殺すのにジャマされたクリステイナは、白目をむいたまま自分を睨んでいる豹に視線を移した。

グリムジョーもまた、クリステイナに対し不機嫌そうな表情を浮かべて一旦距離をとる。

「ウウ……ウ……ウアアアアアア!!!」

そんなグリムジョーに、クリステイナが咆哮する。

白目の、自我のないクリステイナを目の当たりにして、グリムジョーは眉間に皺を寄せさせる。

「……………気に入らねえな、その眼……………始めは黒崎をぶつ殺してからだと思ってたが止めだ……………まずはテメーをぶつとばして正気に戻してから、その五月蠅え喉笛掻き切ってやるよ!!!」

そう叫んで、グリムジョーは「豹王の爪」を出現させる。それを見たクリステイナは、さらに霊圧を高める。そしてさらに、身体中に黒い線が奔っていくのが目に見えた。

グリムジョーはこの戦闘を見ていて解った。クリステイナには、状況に応じて攻撃用と防御用を使い分ける技術のようなものがあり、それがあの身体に奔る線であると。何か防御するときには必ずクリス

ティナは、青い線を体に奔らせており、そして誰かを押し切ろうとするときには体に赤い線を奔らせていた。前者が防御用であり、後者が攻撃用であることは、普段本能のままに相手を倒すグリムジョーでも解った。否、考えなければならぬ程、クリステイナは強かった。だからこそ、今の戦闘でその二つを見極めていたが、今クリステイナの身体に奔っているのはそのどちらでもない『黒』。

この黒い線がクリステイナにどのような効果をもたらすかは解らない。だが、今の訳の分からない状態のクリステイナには、己の最強の技をぶつけるのが最善の策だとグリムジョーは考えたのである。

響転で、一気にグリムジョーは肉迫する。そして巨大な霊圧の爪を、クリステイナに振り翳す。

「うおおおおお!!!」

「ア、アアアアア!!!」

肉迫するグリムジョーに対し、クリステイナは両手に滅斬剣を出現させ相対す。二つの霊圧の刃が交錯し、辺りには凄まじい衝撃が奔っていく。

二人が交戦を始めた頃に、井上は混乱したまま、双天帰盾の範囲を一護とルキアまで届くように拡大する。混乱した井上は止めどなく涙を流し、二人が何とか生き返るレベルまで回復しようと試みる。

動悸が激しい。

訳が分からない。

夢なのか。

だが、自分の身に降り注ぐ霊圧の衝突が、瞳に映る現状が真実だと知らせる。

——— どうしよう

「ちっ!!!」

井上の横に、グリムジョーが吹き飛んでくる。ゆっくり首を向けると、グリムジョーの左腕は無くなっており、切断面からは血が滝のように流れている。

だがグリムジョーは怯まずに、再びクリステイナに斬りかかっている。ここでグリムジョーがクリステイナに相對するのは、この場に居るモノを助ける為ではない。だが、井上に一護を治させなければ、グリムジョーは一護のリベンジを果たす事が永遠に出来なくなる。

先程、一護に敗北したグリムジョーにとっては、それが一番許せなかった。

故に、今こうしてクリステイナを戦っているのである。借りを返すのではない。これは、井上に貸しを作る為の戦いである。

「勝った気になってんじゃねえよ、クリステイナアアアアアアアア!!!」

「ア、ア、ア、アア!!!」

—— どうしよう、黒崎くん。

—— どうしたらいいかわからないよ。

—— なにも、なにもわからない。

—— くろさきくん。

—— くろさきくん。

—— くろさきくん。くろさきくん。

——くろさきくん。くろさきくん。くろさきくん。

——たすけて。

「——助けて、黒崎くん!!!!!!」

「うっひゃあ。クリスちゃん、随分張り切ってるなあ」

虚夜宮に響き渡るクリステイナの霊圧に、市丸は飄々とした声ですう呟いた。先程から、天蓋の上では日向とウルキオラの凄まじい霊圧の衝突があつたが、現在感じ取れるクリステイナの霊圧は、それらの霊圧に比肩するものであつた。

—— // レスレクシオン・セグンダ・エターバ 刀剣解放第二階層 //。

通常の刀剣解放が、死神の“始解”とするのであれば、その刀剣解

放第二階層は死神の「卍解」に当たる。通常の刀剣解放ですら隊長格の卍解に比肩するのにも拘わらず、それを超えるものとなると、相手をする者にとつては絶望するに値する事象であるだろう。

事実、ウルキオラの刀剣解放第二階層ですら、市丸は先程知ったばかりで、その深海を除いているような暗く濃密な霊圧に驚嘆していた。そしてさらに、そのウルキオラと互角に戦っている日向の「虚哭隷王・須佐能袁」の霊圧上昇の異常さを知らしめる結果にもなっていた。

今思い出すと、尸魂界で自分と戦っていた時にそれを出されていれば、間違いなく劣勢になっていただろうと、市丸は考えた。

「まったくもって素晴らしい霊圧だ」

待機している市丸に対し、藍染は玉座に座ったまま話しかける。視線こそ市丸に向いてはいるものの、実際にはどこか遠くを見つめている様にも思われる。賞賛と思われる言葉を発しながらも、藍染はいつもと同じ平然とした表情を浮かべている。

「やはり、彼女を黒崎一護と戦わせたのは正解だった」

「藍染隊長、わざと仕向けたんですか？ボク、てつきりクリスちゃんも勝手に向かっと思うてましたよ」

「いや、動いたのは彼女自身の意味だ。だが、そうなるように導いたのは私だとも言っておこうか」

市丸の問いに、藍染は平然と答える。傍から聞けば、どこか矛盾しているように思える言葉。だが、それを口にしてるのが藍染惣右介だと解ると、その瞬間にそれは真実だと思えてくるのが、この死神の凄まじく、恐ろしい所である。

そして不敵な笑みを浮かべながら、藍染は語っていく。

「私には解っていた。瀨霊廷で私と戦った時よりも強くなっている天宮城日向と互角に相対することが出来るのが、ウルキオラであると。そして、黒崎一護達とクリステイナが戦い、彼女がさらに高みへと昇ることが出来る」と

そして藍染は、右手を虚空に差し伸べる。

「彼等二人がさらなる高みへと昇るには、ウルキオラ・シフアー悪魔」と

墮天使」という壁が必要だった。そして全ては、私の手の平の上で滞りなく進んでいる」

——全ては、自分の思惑通り。

藍染の発する言葉の意味は、そうであると市丸には理解出来た。

そして藍染は、差し伸べた手を引き、スツと立ち上がる。その瞬間に、部屋に流れる空気が張り詰めたような感覚に陥る。

本気を出せば、上位十刃ですらひれ伏すしかなくなるほどの霊圧を持つ死神。その一挙一動により、周囲の雰囲気が変わっていく。長年、彼の傍で動いていた市丸でなければ、神経がやられてしまう程の緊張感に襲われるであろう。

「……黒崎一護の内なる虚の元……『ホワイト』は、数多の死神の魂魄を元に作られている。それは彼の母、『黒崎真咲』から受け継いだものと言つてもいいだろう。ホワイトの虚の力は、彼女の血を受け継ぐ黒崎一護の魂魄へと滲み、その魂の一部へと変貌している。そして彼が死神になることで、その虚の力も目覚めた」

昔、藍染達は試作として作り上げた虚『ホワイト』を、現世にやって来ていた一護の父・黒崎一心と戦わせてデータを採取しようとした。だが、途中で乱入してきた真咲によりそのデータ採取は失敗に終わった。だが、ホワイトは真咲に戦闘中に咬み付いており、その際に滅却師である彼女の体内へと転移していた。

それによって真咲は虚化に苦しんでいたが、浦原と一心の協力により虚化は止められた。

そして時間は経ち、一護が生まれた。そんな死神である一心と、滅却師である真咲の子供である一護は、藍染の研究対象としては最高の素材であった。

長年、一護を観察し、そして漸く彼の中の虚は目覚めた。そしてその虚の力を引き出させるために、グリムジョーと戦わせて虚化をマスタースターターさせた。

だがそれだけでは足りないのである。一護の力を引き出すためには、彼の中に居る虚をもっと引き出さなくてはならない。

「……だが、私は黒崎一護と天宮城日向を比べた所で、ある違いに気付

いた。それが何か解るかい？ギン」

「天宮城クンは、藍染隊長の実験で直接虚の力を注がれたんちやいましたっけ？」

「ああ、そうだよ。黒崎一護の中の虚は、最早彼の魂の一部と言っても過言ではない。それこそ、斬魄刀の一部と言ってもね。だが、天宮城日向は違う。彼は、平子真子達のように後天的に虚の力を得た者だ。平子真子達は、内在闘争により内なる虚を抑え込んでいる。抑え込んでいるということは、自分以上の虚の力を引き出したのであれば、その瞬間に身体は虚に呑まれる」

始まりは四十年前。藍染は虚化の実験で、大虚の力を濃縮した斬魄刀を作り上げ、それを死神の力を譲渡する方法で、刀を刺した魂魄に虚の力を流し込んだ。

他の魂魄が続けざまに魂魄自殺していくなかで、彼だけは生き残った。そして虚化の力を使いこなすようになり、死神となった。

「私はある仮説を立てた。天宮城日向も、黒崎一護と同じく、平子真子達とは違う何かがある虚の力を抑え込んでいるという仮説だ。その仮説は、黒崎一護の『月牙天衝』が黒虚閃と酷似していることで確信に変わってきている。彼らの虚の力を抑え込んでいるのは紛れもない、彼らの斬魄刀だ。黒崎一護の『月牙天衝』は黒虚閃に酷似しているのに比べ、天宮城日向の卍解状態での虚化は——」

破面の『レスレクシオン刀剣解放』に霊圧上昇の具合が酷似している。

刀剣解放。破面となり、虚だった頃の力の核を斬魄刀の中に封じ込め、解号と共に虚の力を自らの身体に戻すというものである。

藍染が言うのは、一護が「黒い月牙」を放つことが、一護が虚の力を行使しているということであり、日向にとつての虚の力を行使しているということが、あの卍解状態での虚化・『虚哭隸王・須佐能袁』ではないかということだ。

「そして私が立てた天宮城日向の仮説は、昔彼の中に流し込んだ「最下級大虚」が、彼の中で「最上級大虚」へと成長したというものだ。その最上級大虚も、黒崎一護と同じく斬魄刀に抑え込まれているとしたら、何かしらの要因で彼の斬魄刀が崩壊した瞬間に……その虚は、姿を現す」

「その虚を出させるための役目が、ウルキオラクンいう事ですか？」
「いいや。彼を完全な虚へと変貌させるためには、完全な虚になった彼と同等の力を有すものにしか役目は務まらない。その役目が――」

――
君だ。黒崎一護。

「さあ、黒崎一護。君の手で、彼の中に存在する須佐能袁荒ぶる神を見せてもらおう。彼女クリステイナは、その為の駒だったのだからね」

墮天

何もない

今の私には

何もない

捨てる事が出来るものが

グリムジョーと相対していたクリステイナが突如近くに出現した
霊圧の方向に振り向く。

そこには虚が立っていた。二本の角と仮面紋のついた仮面。白い
肌。そして胸に大きく穿たれている穴。後頭部からはオレンジ色の
長い髪が靡いている。

そしてその身には、ボロボロになった死覇装を纏っていた。

「ダ……………レ……………?…」

「……………」

「シニガミ……………ホロウ……………?…」

「……………」

「……………オマエモ、クロス……………」

音階がしつかりしていないクリステイナは、言葉を発した後にその
虚に向かって『滅却虚閃』を放つ。

だがそれは、その虚が角の間から放った真紅の虚閃によって相殺さ
れる。その際に両者の虚閃が激突した場所は大爆発を起こし、周りに
倒れている者達の身体を砂漠の上に転がしてゆき、クリステイナの近
くに居た井上も、その爆風によって吹き飛ばす。

爆風が止むと、クリステイナは手に『滅斬剣』を携えて、虚の首を刈り取ろうとする。だがそれは虚の持つ天鎖斬月によって防がれる。

甲高い音が鳴り響くが、次の瞬間にはそれは爆音に変わる。

クリステイナの放った虚閃が、虚に命中したのである。

「……………オシマイ……………」

だが、虚閃を放った後に距離をとったクリステイナに、再び真紅の虚閃が襲いかかる。その速度に回避することが出来ず、クリステイナは静血装を身体中に展開して防ごうとする。しかし、その余りの勢いにクリステイナはそのまま上空に打ち上げられていく。

『オゝアゝアゝアアアアアアアアアアアア!!』

そして次の瞬間に、虚は咆哮を上げながらクリステイナを追うように響転で移動した。

その一連の流れを見ていた井上は、茫然としながらこう呟いた。

「……………黒崎くん……………?」

虚夜宮に偽りの空で、二人の悪魔が剣戟を繰り広げていた。

一人はクリステイナ・エルフリーデ。大切な者達を何度か失ったことにより、自我を失い、大切な友さえも殺そうとする哀れな墮天使。

そしてもう一人は黒崎一護。哀れな墮天使により胸に風穴を空けられ、生死の淵を彷徨っていたが、大切な仲間の呼び声により彼の内なる力が発現した死神。

クリステイナは滅斬剣を片手に一護に斬りかかる。『魂を切り裂くもの』と同じで、この光の剣は斬りつけた対象の霊子結合を弱めて、滅却師である自分の収束の力を行使しやすくするための剣。だが、滅却師完聖体と同等の力を発動している——『刀剣解放第

二階層”に到達した彼女の剣は、只の刀剣解放の時の滅斬剣よりも単純な収束の力が強まり、それは『隷属』という域に達している。

滅斬剣を振り下ろすクリステイナに対し、一護のとった行動は。

——— “月牙天衝”。

右手に携える黒い刀を一振りすると、特大の黒い斬撃がクリステイナに向かって放たれる。それはクリステイナの振り下ろした腕のみならず、その華奢な体も呑み込んでいく。

偽りの空に、黒い霊圧が一瞬奔った後に、クリステイナは右腕から流血しながら再び翼をはためく。翼を一度はためかせる度に、地上に向かって翼の血が地面に向かってしたたり落ちていく。

地上で受け止めた時とは比べ物にならない密度の斬撃は、クリステイナの全身に展開される静血装飾の防御力を上回った。

本能的に、一護に怖れを抱いたクリステイナは距離を取りながら左手を一護に翳す。そして次の瞬間には、手の平から一筋の虚閃が一護に迫っていった。

——— “滅却虚閃”。

極太の閃光が、空を駆けて一護に襲いかかる。だがそれを一護は左手で直に受け止め、虚閃の軌道を変える。

軌道を変えられた虚閃は、地上にそびえ立っている塔に向かって飛んでいく。そして塔に直撃すると同時に、そこから大爆発が起きる。巻き起こった爆風が、天蓋に近い場所で戦っている二人の所まで届いてくる。その爆風により、二人の長髪は靡くが、二人は一向に気にしない。

瞳が見据えるのは、目の前の敵。

己の憎む、死神と虚を兼ね備えた男。

己の仲間を殺そうとした虚。

二人の瞳には、そう映っていた。

『「オ、ア、アアア!!!」』

唐突に、一護はクリステイナに向かって虚閃を放つ。真紅の色の閃光は、青い空を夕焼けの如く赤に染めていく。

それを響転で回避するクリステイナだが、続けざまに何発も放たれ

テイナであるが、このままでは埒が明かないと接近戦を試みる。

「ウ……ア、ア!!」

両手に滅斬剣を出現させ、虚閃放っている一護に肉迫する。クリステイナは自分に向かって放たれている虚閃を這うかの如く接近して移動する。虚閃の余波が、クリステイナの身体に響く。

移動にかかったのは数秒。

そして目の前まで肉迫し、滅斬剣を振るう。

一護はその一撃を、天鎖斬月一本で防ぐ。両者の剣がぶつかった際に、剣同士がぶつかり合う甲高い音が虚夜宮中に響き渡る。

一護を斬り殺そうと、クリステイナは歯を食いしばりながら剣を握る手に込める力を強める。

ギリギリと音が鳴る中、一護は突然動く。

その頭部を、クリステイナの顔面にぶつけた。思いがけない攻撃にクリステイナは怯み、衝撃によって身体をのけ反らせる。

「グ……ギギ……!」

頭突きによって鼻血が流れるクリステイナを、一護は追撃する。のけ反ったクリステイナの頭を、一護は左手で鷲掴みした。

そのまま一護は、凄まじい速度で降下していく。

場所は、目の前の大きな宮。

「鎮まれ———」
『呪眼僧伽』フルヘリア

六番隊隊長・朽木白哉を前にして、第7十刃、ゾマリ・ルルーは刀剣解放を行った。解号を唱えると、ゾマリが胸の辺りに置いた斬魄刀が菱形に折れ曲がり、同時に刀身からは白い液体のようなものが溢れだす。

その白い液体は、ゾマリの上半身を包み込んでいき、やがてその液

体は全身を包んでいく。粘性であるかのような液体は、気泡を弾かせながら体積を増やしていき、不快な音を宮の中に響かせる。

その異様な光景を見ながらも、白哉は静かに、毅然と佇んでいた。やがて白い液体はゾマリの身体から落ちていき、その中から姿を変えたゾマリが出て来た。

首、胸周り、へそ周り、腕、そして球根のような形になった下半身には多くの眼が浮かび上がっていた。

異様な姿になったゾマリを白哉は注視する。

すると、ゾマリは合掌させていた手の内、右手を白哉に向ける。手の平には、身体にあるような眼が同じくあり、突如それは黒く染まる。それを目の当たりにした白哉は、すぐさま瞬歩で移動する。移動した先はゾマリの背後。

暫しの間、静寂が宮中を包む。

「……どうしました？攻撃を放つと直感したのに何も起こっていない。それが解せないと言いた気だ。残念……起こっていますよ。既に」

ゾマリが不気味な笑みを浮かべると同時に、白哉は自らの身に起こる異変に気付いた。左足が思う様に動かない。

そこで白哉は左足に視線を向ける。すると、左足の足首の辺りに、謎の模様が現れていた。勿論、このような模様は白哉は知らない。

「その左足は、わたしのものになりました」

「何だ……これは……」

「全てのものには『支配権』があります。部下は上官の支配下にあり、民衆は王の支配下にあり、雲は風の支配下にあり、月光は太陽の支配下にある。我が『呪眼僧伽』の能力は、その目で見つめたものの『支配権』を奪う能力。私はこの力を、『愛』^{アモール}と呼んでいます」

そういいながら、ゾマリは左手で白哉の左足に向けて差し伸ばし、手招く。すると白哉の左足は白哉の意思とは関係なく一歩前に進む。

その光景に、白哉自身は眉間に皺を寄せる。

「どうやら、相手の言っていることは本当である、と。」

だからこそ、白哉はすぐさま行動に移った。右手に携える斬魄刀

で、自らの左足の筋肉と健を斬った。

それによつて、白哉の足は動かなくなつた。

「……ほう。即断即行。素晴らしい。それでは——」

「兄は、私に種を明かし過ぎた」

その瞬間、白哉の前に大量の花弁が盾の様にして二人の間に割り込む。それを見て、ゾマリは驚く。

今、ゾマリは白哉に向かつて『愛』を放つたが、相手に変化は見られない。

「くっ……ならばもう一度……!」

「無駄だ。卍解——散れ、『千本桜景厳』」

白哉が斬魄刀の柄を離す。すると、柄は地面の中に吸い込まれるように消えて行く。それと同時に、周りに巨大な刀身が浮かび上がってくる。

それは徐々に、桜の花弁へと姿を変えていく。そしてそのまま、ゾマリを囲うように

舞う。

「おのれ……こんなもの、我が全霊の『愛』で全て支配してくれる!!」

素晴らしいながら、ゾマリは全身の眼を開き、『愛』の力を発動する。

「……たかが五十の眼。それで私の億の刃を支配出来ると思つていいのか?」

ゾマリの持つ眼は、白哉が数えた限り五十程。実際はそれより多いかもしれないが、例えそうだとしても、卍解することで刃の数が増える『千本桜景厳』の億の刃に比べれば、余りにも絶対数が少なすぎる。

その絶対数が足りないという事実は、今まさに囲まれているゾマリが一番分かっていた。

「刃の吭に、呑まれて消えろ—— 吭景・千本桜景厳」

直後、億の刃が一齐にゾマリを襲う。それに伴い、轟音が辺りに轟く。

「……しぶといな」

卍解を解きながら、白哉は丸い何かに覆われているゾマリの姿を見据える。だが、その球体も間から血を流していることから、少なから

だが掴まれている方も只では済まさないとはかりに、左手で自分の顔を掴む腕を掴み、そして右手に光の剣を出現させ、腕を斬り落とす。そして斬り落とした腕を投げ捨て、左手から凄まじい勢いで虚閃を放つ。

だがその一撃は響転で回避され、代わりに二本角の後方にいたゾマリの頭部に直撃し、その頭を消し飛ばす。それと同時に、頭を消し飛ばされたゾマリは、その場に力なく崩れ落ちた。

そして次に二本角の者は、瓦礫の中に居る者に向かって黒い斬撃を放つ。

「っ……!!」

瓦礫の中にいた者は避ける間もなく、その斬撃を喰らう。斬撃の着弾地点は衝撃によつて砂塵を巻き上げる。

『ア、ア、アアアアアア!!』

二本角は勝利の咆哮とばかりに、天に向かって声を上げる。二本角が咆哮を上げている間にも、先程切り落とされた腕は再生していく。

白哉も空を見上げると、そこには黒腔から出て来た時とは違う空が広がっていた。青い空には無数の穴が穿たれ、そこから暗い夜が顔を覗かせている。

それを見た後、白哉は二本角の者へ視線を向ける。

そして、右手に携えている黒い刀を一瞥する。

「……………兄は、黒崎一護か？」

「……………」

「その斬魄刀……………黒崎一護かと訊いている」

「……………」

白哉の問いに対し、一護と言われた二本角の者は一向に答えを返さない。

白哉が、目の前の者を黒崎一護だと考えた理由。それは手に持つ斬魄刀が理由であった。黒い刀身。卍型の鏝。そして何よりも、先程放った斬撃。

(あれは間違いなく、黒崎一護の“月牙天衝”だ……………)

無言で白哉を見つめる相手に対し、白哉は斬魄刀の柄を握り直す。

すると、二本角はゆっくりと白哉に歩み寄ってくる。

「……………黒崎一護であるならば、それ相応の応えを返すがよい」

『「——オッ、アッ、アッ、アアアアアッ!!!」』

だが、返されたのは咆哮。それを見て白哉は、斬魄刀の刀身を再び地面に向ける。

「……………どうやら、言葉が通じぬようだ。ならば、わが剣によって正気に戻すのみ……………卍解——『千本ざく——』」

「アッ、アアア!!!」

卍解をしようとした白哉であったが、それよりも早く、先程月牙天衝を喰らった者が飛び出して、一護に襲いかかる。

万力の如き力により歪んだ顔はそれとなく元通りにはなっているが、それでも裂けた肉からは血が溢れだしている。だが本人はそれを気にもせずに、素手で殴り飛ばす。

殴り飛ばされた一護は、そのまま吹き飛んで向かい側の建物に激突する。

「ア——……………ア——……………!!」

一護を殴り飛ばした者は、その場で口の両端から血を流しながら息も絶え絶えになって立ち尽くす。

そして次の瞬間に、響転を使用して凄まじい速度で一護に肉迫していく。

『「オッ、アアッ!!」』

「ギッ……………!!」

だが一護の目の前まで来た瞬間に、立ち上がった一護に顔を殴り返される。その際、骨が碎ける嫌な音が響き渡り、尚且つ辺りに血がまき散らされていく。それもちよつとや少しの量ではなく、ビシヤ、という打ち水のような音が辺りに響く。

そしてそのまま吹き飛んでいくかと思いきや、右足を掴まれて上に投げ飛ばされる。

『「アッ、アアッ、ア!!」』

そして自ら投げたそれを追撃すべく、一護は追いかけていく。

風のように去って行く二人を、白哉は斬魄刀を構えたまま眺めてい

た。その表情は、真剣そのものであった。

今日の前で繰り広げられた攻防は、ただ事ではなかった。

(…………早く、ルキア達の下に赴かねば…………)

自分が思っているよりも複雑な戦況に、白哉は己の義妹の下へ急ぐことを決心した。

慟哭

堕ちる天使
対峙する悪魔
奔る鬼

「——ふむ。興味深いネ」

彼——十二番隊隊長・涅マユリは、空を見ながらそう言った。虚夜宮の天蓋のほとんどが崩れ去り、空には虚園本来の夜の空が、黒々と広がっている。そんな空の中に、幾度となく瞬く閃光がある。どちらも、霊圧的には自分よりも上である。だが、そこから感じ取るのは恐怖や焦燥などではなく、科学者としての興味。

「同士討ちにでもなつて、死体が二つ手に入れられればいいのだがネ。君もそうは思わないかい？ いや……もう聞こえてはいないかね」

そう言いながら、マユリは自分の斬魄刀を突き刺した相手に話しかけた。だが、その相手は一向に反応を返さない。斬魄刀を突き刺した相手——第8十刃、ザエルアポロ・グランツはじつと虚空を見つめたままピクリとも動かない。

マユリがこの場所に来たのはつい先程。その時は恋次や石田がザエルアポロ相手に奮戦していたが、マユリの姿を見て二人は固まった。

——瀨霊廷一の狂人。

そんなマユリがここに来たという事に、二人は危機を察したのだから。瞬く間に顔は青褪めていく。そして二人は咄嗟に撤退していった。

そこからマユリとザエルアポロの戦闘は始まったが、展開としては終始マユリが圧倒していた。“人形芝居”も、石田の身体に仕込んでいた監視用の菌で、今迄のザエルアポロの戦闘を監視しており、それにより対策として全ての腱と臓器にダミーを一つずつ揃えていた。

それにより“人形芝居”を完全に封じた。焦るザエルアポロに対し、マユリは卍解である『金色足殺地蔵』こんじきあしそぎじぞうによってザエルアポロを、赤ん坊のような見た目の卍解で食い殺した。

毒々しい見た目の卍解は、辺りに毒を散布しながらザエルアポロを捕食していた。

だが、ザエルアポロは“受胎告知”という能力により、マユリの副官であり娘であるネムの身体に自分の卵を産み付け、母体であるネムの全てを奪って急成長し、再びその姿を現した。

さらにザエルアポロを捕食していた『金色足殺地蔵』は、ザエルアポロを食べたことにより神経を侵され、そのままマユリに襲いかかった。

だが――。

『道具が主人に盾付いて、無事で済むと思うかネ』

マユリは自分の斬魄刀に対し、自分に襲いかかったら自爆するように改造していたため、『金色足殺地蔵』はマユリを襲いかかった瞬間に爆発した。さらにそれだけではなく、ネルの身体に侵入した時点で、ザエルアポロはある薬を投与されていた。

――“超人薬”。

達人同士の戦いに於いて、“剣が止まって見える”などという、時間間隔の延長。それを強制的に引き起こす物が、マユリがザエルアポロに投与した“超人薬”である。しかもそれだけではなく、一滴を二十五万倍に希釈するのが適量の薬を、ザエルアポロに対しては原液を使用した。

それによってザエルアポロの時間間隔の延長は異常に引き起こされ、一秒が百年程までに感じるレベルとなった。

時間間隔が狂ったザエルアポロは、為す術なく、マユリの斬魄刀によって胸を突き刺されたのである。

余りにもあつけない最後であった。

「終わったようですね、涅隊長」

「フム……四番隊隊長様が、私に何の用だネ？」

「いえ、ここに怪我人が居ると解ったので来たまでです」

涅の後ろに現れたのは、四番隊隊長・卯ノ花烈。長い髪の毛を胸の前で編みこんでいる、柔らかな笑みを浮かべる女性。

そんな卯ノ花は、ザエルアポロを倒し終わった涅に対しいつも通りの柔らかな笑みを浮かべていた。

「なら、向こうの方に六番隊の副隊長と、人間共が居たヨ」

「そうですか。わざわざ有難うございます」

「治療に行くのならさっさと行ってくれたまえ。私はここで、様々な調査をしたいのだヨ」

「ええ。そのつもりです」

卯ノ花はそう言って、先程恋次達が退避していった場所へと瞬歩で向かって行った。それを見届けた後、マユリは崩れた第8の宮を調査しようと思いを見渡す。そして瓦礫をどかさうと考えるが、自分がかすのは億劫であるため、副官であるネムにどかせようとする。

しかしネムの方を見ると、先程のザエルアポロの「受胎告知」によって全てを奪われ、身体中が干からびた様に皺だらけである。

「ちっ……まったく、手間のかかる奴だヨ……」

そう言いながら、マユリは倒れているネムの下に歩み寄る。

そして――。

――あう……うあああああ――っ♡♡

やけに妖艶な声が、第8の宮辺りに響き渡った。

「……！」
「……！」

天蓋の上では未だに日向とウルキオラが激突していた。二人の死力を尽くした戦いは天蓋を粗方吹き飛ばしていた。両者が交錯する度に、虚園の空には雷鳴のような轟音が轟く。そして続けざまに、爆発のような衝撃が、ただでさえボロボロの天蓋を崩していく。

これでは虚夜宮の守護を任されているウルキオラにとっては本末転倒の結果であるが、それでも虚夜宮内で戦うよりはマシであった。それ以前に、ウルキオラは第4十刃であるため、虚夜宮内での刀剣解放は許されていない。もし天蓋の下でこの死神と戦ったならば、刀剣解放出来ない自分はまけていただろうとウルキオラは考える。

それまでにこの死神の力は、刀剣解放第二階層である自分と拮抗している。現在まで何とか致命傷は避けているものの、当たれば即死級の攻撃をこの死神は幾つも有している。

ウルキオラの長所である超速再生は、大方の傷を癒すことが出来るが、それでも臓器などの重要器官は再生出来ない。もしこの死神の攻撃が一度でも自分の臓器を抉り取ってでもしたのであれば、一気に劣勢になるであろう。

だが、それをさせないのがウルキオラであった。

——虚弾。

威力は虚閃よりも劣る霊圧の弾丸が、日向を襲いかかる。しかし威力が劣ると言っても刀剣解放第二階層の状態であるウルキオラが放つそれは、下手な破面の虚閃よりも強力であった。

その攻撃に対し、日向は距離を取るようにして何とか回避している。そして虚弾を討ち続けるウルキオラに対し、鬼道を放つ。

「縛道の六十二・『百歩欄干』ひやつぼらんかん」

日向はウルキオラに対し光の柱を投擲する。それは虚園の暗い夜の下では、流星のように空を流れていく。そして途中で無数に分裂した柱達は、ウルキオラの身体を縫い付けようと迫っていく。

それらをウルキオラは間髪を入れずに背中 of 翼を羽ばたかせて、一気に叩き落とす。

だが、その一瞬の際に日向は瞬歩でウルキオラに近付いていた。勿論、只の瞬歩であればここまで速度は出ない。アルトウロの霊圧の翼を最大限に活用し、ウルキオラ of 速度に追いつくようにしていた。ブーストのように使うことにより、直線での加速や、ターン、そして何より空中戦の幅が広がるというように慣れば便利なものを、日向はウルキオラの戦闘の中で完全にマスターしていた。

そしてウルキオラに向かつて、「天叢雲剣」を発動した刀身を振りかざす。それに対しウルキオラは、先程「百歩欄干」を叩き落した翼で防御する。

絶対切断の斬撃に対し、ウルキオラの蝙蝠のような翼は紙のように裂けていく。だがそれでよかった。下手に近付かせたら、それだけこちらが不利になる。絶対切断には、刀身にしか発動出来ないという制約があるため、一部を犠牲にすれば無理やりにも距離は取れる。

ウルキオラはすぐさま日向との距離をとりながら、右手から黒虚閃を放つ。その間に、ウルキオラの斬り裂かれた翼は超速再生によって元通りに戻っていく。

日向はウルキオラの放った黒い閃光に対し、同じく黒い閃光によって相殺する。二人の黒虚閃の激突は、辺りの空間を歪ませるほどに激しいものであった。

「ランサー・デル・レランバー 雷霆の槍」

ウルキオラは、瞬時に右手に霊圧の槍を出現させる。そしてそれを日向に投擲する。「雷霆の槍」は超威力の代わりに狙いが安定しないという欠点があるものの、相手に対する牽制としてはかなりの効力

を持っていた。

日向は、その槍に当たるまいと体を傾けて対応する。体を傾けたことにより、霊圧の槍は日向の横を通り抜けて行き、そのまま放物線を描きながら遠方の砂漠に着弾し、エメラルドグリーンの閃光で辺りを照らし上げた。そしてそれに伴う爆風が、二人の髪の毛を靡かせる。(思っていたよりも厄介だ)

ウルキオラはこの戦闘は、刀剣解放第二階層を発動した時点で終了すると思っていた。だが相手の白い死神は、そのパワーアップに対抗するだけの方法を有しており、今の今迄互いの決定打が無い程の互角の戦闘を繰り広げてきた。

超速再生で傷こそ治るが、霊圧までもが無限であるわけではない。強大な力というのはその分消耗も激しくなるものである。ウルキオラもそうであり、日向もそうである。

延々と続くこの戦いも、このままでは恐らく、どちらかの霊圧が尽きるまでというような決着のつき方に終わるであろう。

「……………」

そう考えていたウルキオラは、天蓋に近付いてくる二つの霊圧に気付く。一つはクリステイナのものであると判断できるが、もう一つは異様であり、さらに今の自分よりも強大な霊圧。

一瞬、尸魂界に増援に来た隊長格の霊圧かとも考えたが、死神のものにしては禍々し過ぎる。

このような疑問は日向も同じらしく、二人は近付いてくる霊圧に気を取られていた。そしてその正体が、二人の目に移る。

『「オ、ア、アア!!」』

二本角の影が、翼を生やした何かを空に向かって投げる。その投げられた者はクリステイナであると、ウルキオラには理解出来た。だが見る限りすでに虫の息。

「……馬鹿な」

他人に毛ほどの興味もないウルキオラであるが、クリステイナの実力はそれなりに理解しているつもりではあった。彼女の実力は、十刃の序列で言い表すのであれば、第5以上第4未満といったところであ

り、下位の十刃に関しては余裕で勝れるほどの実力は有している筈であつた。

それなのにも拘わらず、ウルキオラの深緑色の瞳に映っているのは、片足が無くなつていてピクリとも動かないクリステイナの哀れな姿。明らかに、弄ばれてでもいるような状態であつた。血が尾を引いており、死ぬ寸前であることは何となくではあるが感じ取ることが出来た。

『「ア、ア、アアアア!!」』

そして二本角の者は、そんなクリステイナに向かって黒い斬撃を放つ。それを見て、宙に留まっている二人は瞠目した。

———『月牙天衝』。

『「一護………なのか………?」』

日向は仮面を被つていても解るほどに、戸惑いを隠せなかつた。あの化け物が本当に一護であるのか。もし、そうであるのであれば、何故あのような姿になつたのか。そんな疑問が幾つも浮かんでくるが、目の前に広がる光景に日向は無意識に反応した。

『「オオア!!」』

一護が、クリステイナに月牙天衝を喰らわせた後に、そのまま自由落下してくるクリステイナの顔を一文字に一閃した。

明らかなオーバーキル。もう、あの女破面に戦う力が残っていないのにも拘わらず、執拗に甚振ろうとしている光景に、日向は動けずにはいられなかつた。

『「一護!!もうやめろ!!」』

「………あれが、あの餓鬼だと?」

ウルキオラは、クリステイナを蹂躪しているのが一護であると思ふことが出来なかつた。彼は、虚夜宮に侵入してきた一護と一度対峙し、その時は全力で剣を振るってくる一護に対し、無解放のまま圧倒した。勿論、一護がネルを庇っていたというのもあるが、それがなかつたとしても解放するには至らなかつたであろう。

そんな人間の餓鬼が、何故あの姿で、そして何故クリステイナを蹂躪出来たのか。

ウルキオラが静かに眺めている最中、日向は一護に斬りかかろうと
していた。これ以上、その破面に手を下したのであれば、一護は人道
を離れて行ってしまおう。そう考えたのである。

『うおおおお!!』

そして日向は、二撃目を放とうとする一護の刃を防いだ。そして落
下しているクリスティナを左腕で抱えた。

僅かながら呼吸で胸が上がり下がりしているのは解るものの、虫の
息であることは確かであった。弱弱い脈拍が、日向の腕に危機を伝
える。

「……………て……………」

『っ!?』

小さな声であるが、日向は抱える破面が何かを呟いたことに気が付
いた。既に刀剣解放は解けており、死期が近いことを悟っている。

「…たす……………けて……………」

『……………!ちっ!!』

恐らく意識もほとんどない状態であろう。それにもかかわらず、こ
の破面は涙を流してそう言った。その言葉を聞いた日向は、敵ながら
も何とかしてやりたいという感覚に陥る。しかし、このような傷は井
上でもなければ治すことが出来ない。

しかし、それをこの目の前の虚と化したのであろう一護は許さない
筈である。

『オ、ア、アアアアアアア!!!』

一護は片手で剣を振るう日向に対し、容赦なく天鎖斬月を振るって
くる。それをなんとか流すように受け止めていく日向であるが、一撃
一撃が凄まじく重いため、手が痺れる様な感覚に陥ってくる。

本来であれば、『天叢雲剣』でも発動して少しでも相手のリーチを
短くしたいところであるが、それは中々出来ないことであった。それ
は、『壊れた卍解は修復出来ない』という事柄に起因するものであつ
た。そのままの意味で、壊れた卍解はどうやっても修復することは出
来ない。一部例外を除けば、ほとんどの卍解がそうなのである。形だ
け直すことも出来るが、それでも本来の性能には届かなくなる。

ここで「天叢雲劍」を発動すれば問答無用で、一護の天鎖斬月は真つ二つになるであろう。だが、味方の卍解を破壊してしまうという事は、どうしても後ろめたく実行に移すことが出来なくなる。

『オアアアアッ!!!』

何度も剣を防ぐ日向に業を煮やした一護が、刀身に月牙天衝を纏わせながら振るい始める。

それに伴い一撃の威力も増し、日向の顔も歪み始める。このままでは一護の月牙天衝によって切り刻まれてしまう。「八咫鏡」でも展開して防御に徹したい所であるが、それを発動するにも幾分かのタイムラグがある。その間に一護は問答無用で日向ごと、この腕の中で死にかけているクリステイナを斬り殺すだろう。

頭をフル回転させていた日向であったが、次の瞬間、その思考は止まった。一護と日向の間に、「雷霆の槍」が凄まじい速度で通り過ぎていくのが瞳に入った。

命中した時の威力を理解している日向は、仮面の中で冷や汗を流す。そしてその槍を投擲した張本人であるウルキオラは、再び手に「雷霆の槍」を出現させ狙いを定めようとしている。

(今ので一網打尽にしたかったが……やはり命中率は低いか)

ウルキオラは今の一撃で、一護ごと日向を倒す心算であった。しかし、その命中率の低さも相まって外れてしまった。そうなってしまったものは仕方ないと、ウルキオラは次の一撃を放つ準備をする。

だが、今の一撃によって、ウルキオラも一護のターゲットの一人となった。

一護は標的をウルキオラに変え、二本角の間に赤い閃光を溜めはじめる。それが虚閃だと理解し、ウルキオラは左手の人差し指から黒虚閃を放とうとする。

『オアアアアッ!!!』

↓

刹那、両者の放つ閃光が激突する。

その光景に、日向は瞠目する。解放状態の十刃が放つ「黒虚閃」は、その霊圧の濃縮度などによって黒く染まっている。つまり、普通

の虚閃よりも密度が濃く、言ってしまうえば虚閃の何倍の威力も有しているのである。

だが、刀剣解放第二階層のウルキオラの放つ黒虚閃を、一護は“只の虚閃”で相殺した。

二つの虚閃の激突により、虚園の空に爆風が吹く。だが、その一連の流れは日向にとって好都合であった。

すぐさま浄天眼を使用し、井上が居る場所を探す。天蓋のほとんどが崩壊している。ならば、屋外にいるのであればすぐにでも見つかる筈である。

その目論見は功を奏し、井上の霊圧を補足することが出来た。そしてすぐ傍に、ルキアや茜雫たちが居る事も解った。

『ツ……ちよつと堪えるが、我慢しろよな！』

一護がウルキオラに気を引かれていた間に、日向は全速力で井上の居る場所まで向かう。“須佐能袁”を発動している日向の速度はかなりのものであり、重体であるクリスティナにはその速度だけで負担が凄まじくなる。

だが、それを考慮した上でも、一刻も早く井上に届けなければならぬと日向は感じていた。

勿論、日向にこの破面を助ける義理などない。むしろ、すぐさま止めを差してこの破面の力を手に入れるべきである。だが日向は、その考えに至らなかった。

——こいつはどこか、俺に似てる……………。

感覚ではあるが、それが今日向がこの破面を助ける理由になっていた。

そして少し、懐かしく感じていたことも理由の一つであった。

.....誰？

.....でも

.....温かい.....。

暴走

死ぬ覚悟で来い
でないと死ぬのは
貴様だ

『……ッ、居た！あそこか！』

日向は瀕死のクリステイナを抱えながら、井上の居る場所を見つけた。よく目を凝らすと、井上は数多くの者を治療していることが窺えた。その中には、ルキアや茜雫だけでなく、グリムジョーやネルなどといった破面も含まれている。

とりあえず日向は、地面に降りたつ。

「ツ天宮城くん!？」

『井上、無事だったか。色々話したいことあると思うが、とりあえずコイツここに置いてくぞ』

そう言つて日向は、瀕死のクリステイナを地面にそつと置く。ボロボロの女がクリステイナだと気づき、井上とグリムジョーは瞠目する。

「おい、死神。そのヤロー、テメーがやったのか？」

『いや、違うぜ。グリムジョー・ジャガージャックだったか?………お前が何でここに居るのかは知らねーが、俺は一護を止めに行かないきやなんねえ。話は後だ』

そう言つた後に、日向は全速力で天蓋の上を目指して飛んで行った。その間にも、この場には緊迫した空気が流れていた。

あれほどの人数を相手取つていたクリステイナが、異様な姿に変貌した一護に蹂躪された。それが今の一護がどのような状況であるか

は、井上にも、グリムジョーにも理解出来なかった。

普段の一護であれば、相手を倒しさえすれど、ここまで鬪るような真似は絶対にしない。例えそれが、自分の大切な者を傷つけられていてもである。非情になりきれない。それが黒崎一護という人間だった。

そんな一護が、クリステイナを見るも無残な格好に仕上げた。両目を横一文字に斬られ、左足は無くなっており、身体中に斬られた痕があり、血まみれになって美しかった金髪も血によって赤に染まっていた。

いつもの井上であれば、すぐにでも治療に取り掛かったであろう。だが、この破面は先程まで一護達を蹂躪していた。一護の胸に孔を空け、ルキアの首をへし折り、茜雫を一閃し、ネルの頭を撃ち抜き、アニーシャの頭部を爆撃し、ピカロを虐殺し、グリムジョーもボロボロになるまで圧倒していた。

そんな相手を今治療すれば、回復した瞬間に襲いかかってくるかもしれない。そんな恐怖が、井上の動きを縛っていた。

「……………」

「ッ……………」

突如、クリステイナが言葉を発し、井上は身体を大きく揺らす。そしてグリムジョーは、倒れているクリステイナのすぐ傍まで歩み寄っていく。

目の前まで行くと、帰刃を解除に鞘に戻った斬魄刀を抜いて、クリステイナの喉元に突き刺そうとする。

息を飲む井上であるが、身体が動くことは無い。それは井上がどこかで、彼女が死ねばこの恐怖から解放されるという考えがあったからなのであろう。先程まで自分達を殺しに掛かって来ていた者が死ぬ。それだけで、今の自分がどれだけ楽になれるか。

「……………みんな……………どこ……………？ひ……………とりに……………しない……………で……………！」

「ッ！『三天結盾』！」

クリステイナの絞り出されるような声を聞き、井上は動いた。クリステイナの上に『三天結盾』を張って、グリムジョーの斬魄刀から彼

女を守った。その行動に対し、グリムジヨ―は鋭い眼光を井上に向けてるが、それに構わず井上は「双天帰盾」の範囲をクリステイナの身体にかかるまで広げる。

「女―てめえ……………どういうつもりだ!!？」

「……………」

「おい！聞いてんのか!？」

グリムジヨ―の怒声に耳を貸さずに、井上は必死にクリステイナの回復に努めようとする。

それを見ていたグリムジヨ―は、盛大な舌打ちをした後に斬魄刀を鞘に納め、ドカツと瓦礫に腰掛ける。そう言えばそういう奴だった。この女は、自分に暴力を働いた破面にすら、こういった情けをかけるような奴であった。ロリとメノリの事を思い出しながら、グリムジヨ―は事の成り行きを見届けようとする。

もしクリステイナが復活して、誰かを襲おうとするのであれば、すぐさま自分が止めを差す。さっきのような事はもう御免である。

グリムジヨ―はそのようなことを考えて、井上を眺めていた。

「ごめん……………なさい……………ごめん……………なさい……………」

クリステイナは斬られて血が流れている瞳から、涙を止めどなく流しながら、誰かに謝っている。それを見て井上は悲痛な表情を浮かべながら、治療を続けていく。

「待ってて下さい……………あたしが、貴方を治しますから……………」

「ちつ……………」

天蓋の上では、一護とウルキオラが相まみえていた。しかし、展開

は一方的であった。ウルキオラは幾度となく一護と交錯するが、その度に身体はどこかを斬り裂かれていた。すぐさま超速再生により傷は塞がるものの、いずれかは臓器に達するほど深い傷もあったため、ウルキオラの体力がどんどん減っていく。

そもそもつい先程まで日向と互角の戦いを繰り広げていたため、ウルキオラは疲弊しており、既に満身創痕といっても過言でない状態で一護を相対したのである。

黒虚閃を放てば、一護は虚閃でそれをかき消す。

“雷霆の槍”を投擲すれば、回避されるか“月牙天衝”で迎撃される。

虚弾を放つても、手でかき消されるだけで牽制にもなりはしない。

「だが……舐めるな……」

自分に言い聞かせるように、ウルキオラはそれを声に出す。そして再び“雷霆の槍”を出現させて一護に相対そうとする。

響転で肉迫し、一護に槍を振りかざす。それに対し一護は、右手に持つ天鎖斬月で軽く受け止めた後に、左手でウルキオラの胴体に殴打を繰り返す。それを真面に喰らったウルキオラは、そのまま後方に吹き飛んでいく。そんなウルキオラに対し、一護は響転で接近し、上に回り込んで踵落としを喰らわせる。

鈍い音が響いたのちに、ウルキオラは僅かに残っている天蓋の上に墜落する。

(……………あばらが数本逝ったか……………)

自分の骨が今の一撃で何本か粉々になったことを悟りながら、ウルキオラは立ち上がろうとする。

しかしその瞬間に、天鎖斬月が上空から降ってきて、ウルキオラの胴体に刺さる。そして病人のような細い身体を天蓋の上に固定した。

『アアアア!!』

そんなウルキオラ目がけて、一護は虚閃を放つ。真紅の虚閃は、天蓋の上に固定されているウルキオラの身体の何倍もの太さをほこり、当たれば問答無用で消し飛ばすほどの威力を有していた。

真紅の閃光が、目の前の悪魔を殺そうと漆黒の空を駆けて行く。

そのままウルキオラはやられると考えていた。

『「八咫鏡」！』

だが、命中する直前に、虚閃とウルキオラの間は何者かが割り込み、その虚閃をあらうことか跳ね返した。

その光景を見て、ウルキオラはいつもどおりの無表情のまま、目の前の人物に話しかけた。

「……………どういふつもりだ。天宮城日向」

『「どういふつもりもねえよ。ただ、一護の本望でもないことやらせたら、一護が落ち込むと思つてよ」』

「……………下らん推察だな。他人の想いなど、解りもしないことを……………っ！」

日向を見ながら話していたウルキオラであったが、突如自分に突き刺さっている天鎖斬月が抜けたため、驚いたように語尾が上がる。そして抜けて行った天鎖斬月は一護の手元に戻っていく。

まるで、一護の手元が自分の在るべき場所であるとしても言う様に。それを見て、日向は仮面の下で顔をしかめる。

『「なあ、ウルキオラ。少し提案があるんだが……………」』

「断る。俺は俺のやり方でやらせてもらう」

日向が言おうとしている事を先に察したウルキオラは、日向が言い切る前に「雷霆の槍」を出現させて一護の元に翼をはためかせて飛んで行った。

日向の考えでは、今の一護には自分だけでは返り討ちに合うのが目に見えていた。そこで『虚夜宮を守護する』という任を任されているウルキオラと共に、暴走する一護を止めるために共闘するという目論見を考えていたのであるが、それはあっさりと泡に帰した

ネルなどの友好的な破面はともかく、十刃であるウルキオラにそのような提案をしようとしたのが間違いであったと日向は考えた。

そもそも、どうすれば一護の暴走が止まるのか解らないのに、共闘するのが無理だという話でもある。

『「たくっ……………しゃあねえ……………とりあえず、仮面剥がすところから始めるか……………」』

虚化を解除する方法として、『仮面を剥がす』というものがあるの
で、まずは日向はそれから始めようとする。しかし、見る限り一護は
完全に虚化しているように見える為、今更仮面を剥がした所でどうな
るかは解らないが、やってみないことには解らない。

考えをまとめたところで、日向はウルキオラに続くように一護に肉
迫していく。

『オ、ア、アア!!』

迫りくる死神と破面を、一護は敵として認識して問答無用で虚閃を
放ってくる。先行していたウルキオラはそれを回避し、『雷霆の槍』
で一護の首を刈り取ろうと肉迫していく。

その背後では、日向が『八咫鏡』を繰り出して一護の虚閃を跳ね返
していた。放ったはずの自分の虚閃が戻ってきているのに対し、一護
は月牙天衝を放って、その虚閃を真つ二つに斬り裂く。

しかしその隙に、ウルキオラが一護の背後に回り込んでおり、手に
携えている槍を凄まじい速度で横に一閃する。

「――！」

だが、一護はそれを察知し響転で逆にウルキオラの背後に回り込
む。そして『雷霆の槍』を振って隙が出来ているウルキオラに対し、
天鎖斬月を振りかざそうとする。しかし、そうくることを予測してい
たウルキオラは、長い尾を撓らせて一護の身体に一撃加えようとす
る。

鞭が撓る様な音が虚園の空の下に響き渡る。だが、その尾は一護の
左手によって受け止められ、そしてそのまま振り回される。そして数
回回された後に、ウルキオラは近くの円柱の建物に向かって投げ飛ば
される。

その間に、日向は一護の上に回り込んでおり、背中から『八岐大蛇
』を出現させていた。

――『煉獄虚閃』。

八つの蛇の頭から放たれた業火が、漆黒の空を駆けて行く。だが一
護は回避する素振りを見せずに、その業火を真面に喰らう。

数秒、暗い夜が紅く照らされていく。だが次の瞬間に、業火の中心

から一護が超速で日向に肉迫して来る。日向は余りの速度に反応出来ずに、一護の伸ばされた手が自分の首を掴む事を許してしまう。凄まじい握力掴まれることにより、日向の頭に酸素が届かずに目の前が朦朧として来る。

『「——つく！許せよ!!」』

そう言って日向は、*“天叢雲劍”*を発動して、一護の左腕を斬り落とす。だがその瞬間に、一護は天鎖斬月を日向に振るう。それは日向の凄まじい硬度を誇る白い衣をいとも容易く斬り裂く。そして下にある日向の皮膚も深く斬り裂く。

刹那、鮮血が宙に舞う。そして日向の白い衣は、流れ出る血によって赤く染まっていく。

苦悶の表情をする日向を、一護は左足で蹴り飛ばす。

『「ぐっ!!」』

咄嗟に左腕で庇った日向であったが、防御した瞬間に左腕に嫌な感触が響き渡る。今の一撃で、左腕の骨が折れた。

『「冗談じゃねえつつうの……縛道の六十一・『六杖光牢』!!」』

吹き飛ばされながら、日向は一護の行動を縛道で縛ろうとする。六つの光の帯が一護の胴に突き刺さり、その行動を制限する——

『「オ、アアア!!」』

——答だった。

一護は、光の帯が突き刺さった瞬間に、力尽くでその拘束を解いた。六十番台の縛道が一瞬で破壊されたことに、日向は瞠目する。そして一護の左腕が超速再生で元通りになるのも目に入った。

そして一護は、未だに吹き飛んでいる日向に向かって真紅の閃光を放とうとする。それを目の当たりにして防御態勢をとる日向であるが、一護の背後にウルキオラが迫っているのが見えた。完全に日向に気を取られていると思っていたのであろう。ウルキオラは全力で*“雷霆の槍”*を振るう。

だが瞬間、一護が振り向いてその一撃を左手で受け止める。あの膨大な破壊力を持つ霊圧の塊である槍を素手で受け止めたことに対し、

見ていた日向とウルキオラは瞠目した。

次の瞬間、*“雷霆の槍”*は一護の左手の中で炸裂する。そして一護は、先程から二本角の間に溜めていた虚閃を、ウルキオラに向かって発射する。至近距離で放たれる虚閃に、ウルキオラは回避行動をとる間もなく直撃する。

『冗談だろ、オイ……ちっ、縛道の九十九・『禁』!!』

虚閃を放射する一護に、日向は『禁』を放つ。それと同時に、どこからともなく出現したベルトが、一護の身体を縛っていく。そしてそのベルトに鉾が突き刺さっていく。

一護は先程のように力尽くで解こうとするが、九十番台であるため、すぐには拘束は解けない。そして自分を縛るベルトに気を取られた一護は、ウルキオラに虚閃を放つことをやめる。それと同時に真紅の虚閃はだんだん細くなり、その中から左腕を左足が欠損しているウルキオラが出現し、地面へ向かって自由落下していった。

その間にも、日向と一護の攻防は続く。

『縛道の九十九第二番・『卍禁』!!初曲・『止縛』!!』

このままでは一護が『禁』を破るのは時間の問題であるため、日向はかか八かで封殺型に切り替える。それと同時に、巨大な布が一護の身体に巻きついていき、さらに拘束の力を強めていく。

『弍曲・『百連門』!!』

そして次に、一護の身体に数十本の鉄の串が突き刺さっていく。

『オ、ア、アアアアアア!!』

一護は拘束を解こうと、霊圧を極限まで高めていく。それに伴い、大気が震えて、大地が鳴動する。ボロボロであった天蓋は完全に崩れ始める。

それに構わず日向は、最終段階に入る。

『————終曲・『卍禁太封』!!』

そして一護の頭上に、巨大な碑石が現れる。そして一護を押し抑えようとし、降りかかってくる。

このままいけば、一護の身体に碑石が命中し、地上まで圧しつけて地面に一護の身体を縛るだろう。そうすれば、比較的安易に一護の

仮面を剥がすことができる。

『ア、アアアアツ!!!』

だが、碑石が一護の命中する瞬間に、一護は咆哮を上げながら自分に降りかかろうとする碑石に虚閃を放った。真紅の閃光は、巨大な碑石の中心を貫き、容易く砕いていった。そして次に、自分を縛るベルトや布を無理やり破き、身体に突き刺さっている鉄の串を一本ずつ抜いていった。一護の身体には大きな穴がいくつも空いていたが、それも超速再生によって瞬時に塞がれていった。

その光景を見て、日向は驚かずに居られなかった。

『嘘……だろ……?』

九十番台の鬼道ですら、今の一護を縛ることが出来ない。

刹那、一護の姿が日向の目の前に現れる。それに対し我を取り戻した日向は、すぐさま虚哭隸王を構える。だが、そんな日向に対し、一護は月牙天衝を纏った刀身を日向に振り下ろす。

その一撃を防ごうと、刀身を横にするように構える。

『——は……?』

日向は、宙に鮮血が舞っているのが目に見えた。それが自分の血であることは瞬時に理解出来た。

だが、一体今の一撃でどこを斬られたのだろうか？

確実に、自分の中央を狙って振るわれた一閃を日向は刀で防いだはずである。視界の端には、折れた刀身がクルクルと回りながら宙を舞っているのが見えた。その瞬間、右手に感じる重さが、いつもより軽いということを感じた。

鼓動

喋らないで

貴方の鼓動に

耳を澄ませたいから

天蓋の上には静寂が訪れていた。そして、漆黒の夜空には一つだけ、月明かりに照らされて浮かび上がる影があった。二本角の彼は、先程虚閃を命中させた相手をじつと眺めていた。煙が尾を引きながら、落ちていく相手は円柱の建物に激突し、そのまま中に入っていく瓦礫に埋もれていった。

そして天蓋の上では、悪魔のようなシルエットの者が静かに横になつていた。大きな翼も片方が消え去っており、ピクリとも動かない。

彼と相對していた二つの存在は、既に彼と戦う力が残っていないといわんばかりに動きを見せない。そして彼は、既にここに敵の存在がないということを理解し、別の場所へと向かって行く。

まだ、止めを差したことを確認できていない、『墮天使』の元へ。

「井上………そいつを治すとは本気か？」

ルキアが、クリステイナを治す井上を姿を見て心配するが、井上は静かに治療を続けていた。ルキアはこのクリステイナによって、一時は首の骨をへし折られて生死の境目を彷徨っていた。井上の「双天帰盾」がなければ、ルキアの命は既にこの世になかったかもしれない。そして他の者達も、大方の傷は井上の手によって治っていた。しかし、ネルだけは未だに意識を取り戻していない。

全員が事の成り行きを心配している。そしてその視線は、全てが井上の元へと向いている。

井上の必死の治療により、クリステイナの左足は元通りになっており、そして一閃された目も完治していた。

「……………っ!？」

治療をしていた井上だが、突如背後にある気配を感じ取る。全員がこの場に現れた霊圧に目を向ける。

其処に立っていたのは、完全な虚と化した一護であった。全員が、その霊圧の高さに戦慄する。そして時が止まったかのような感覚に陥る。そして井上は、確か日向が一護を止めに行ったことを思い出した。それにも拘わらず一護がこの場に現れたという事は、つまり日向がこの一護に敗北したことを表していた。

不味い。恐らく自我が無いであろう一護は、この場に居る者全てを蹂躪するかもしれない。

「くろ……………さきくん……………」

『……………』

一護は静かに、井上の下に歩み寄っていく。方向こそ井上の下であるが、狙いはクリステイナであった。その首を刈り取るまで、一護は止まることは無い。やけに静かな空間に、一護が砂漠の上をゆっくりと歩む、乾いた音だけが響く。時々、遠くから爆発音のようなものが響く以外には、鼓膜を揺らす音源は無い。

体内の中では心臓が異様に高鳴り、呼吸も早くなってくる。

そして、一護が左腕を伸ばす。

「っ、駄目!!」

突如聞こえた新しい声と共に、一護の伸ばした腕が迫ってきた花卉のような刃によって切り刻まれる。そして鮮血が舞って、辺りには赤い点々が無数に現れる。暫くフリーズしていた一護であったが、次の瞬間、傷を付けられた腕は超速再生によって元通りになる。

そして一護は、自分の腕に傷をつけた張本人の方に首を向ける。現れた人物に、ルキアは目を見開く。

「に……兄様………!?!」

六番隊隊長・朽木白哉。凜とした佇まいのまま、無言の一護をじつと見つめる。そして先程向かわせた無数の花卉が、柄だけの斬魄刀に戻ってゆき、元の刀の形に戻る。

数秒、静寂が辺りを支配する。

次の瞬間、一護が白哉の背後に回り込み、天鎖斬月を背中から突き立てた。

「兄様!!」

その光景を目の当たりにして、ルキアは声を上げる。

だが、次の瞬間白哉の姿はその場から無くなっており、代わりに羽織だけが天鎖斬月の餌食となっていた。そして、羽織を着ていない白哉が逆に一護の背後に回り込み、剣を振り下ろした。

しかし、白哉の一閃が降り終わる頃には、一護は別の場所に佇んでいた。

両者は数秒睨みあった後に、この場から消え去っていった。他者が

見れば、二人がどこに向かつて消えて行ったのかは目に移らない。だが、今の一瞬で白哉は卍解を発動しながら一護を牽制しながら、あの場から離れていくようにしていた。しかし、左足は先程のゾマリとの戦闘の際に、『愛』による支配を逃れるために腱と筋肉を斬り裂いたため、全力で移動することは叶わない。

故に、白哉は千本桜景厳による全方位攻撃により、一護に攻撃を加えることにした。

「——『吭景・千本桜景厳』」

億の刃が、一護を取り囲むように球体になつてくる。そして、一護の身体を斬り裂くために一気に迫っていく。しかし、完全に刃が一護に命中する前に、一護が『吭景・千本桜景厳』の一部分に虚閃で穴を空けた。その余りの威力に、白哉は顔をしかめる。

『オ、ア、アア!!』

そして一護は一瞬で白哉に肉迫してくる。それを目の当たりにした白哉は千本桜景厳を手で操ることにした。基本、千本桜景厳は念によつて操っているが手掌で操れば速力は二倍。以前、尸魂界で相まみえた時は、その二倍の速力でも一時は間に合わない程の速力で一護は白哉と相對していた。今の一護は自我が無いと言っても、その速度はあの時よりも速いことは確かである。

そのことを考慮し、手掌で操ることに変えた白哉であったが、一護は自らに迫る億の花弁に対し『月牙天衝』を放つて弾き飛ばしている。そして次の瞬間、一護は白哉に向かつて溜めなしで虚閃を放つ。

「くっ……」

何とか回避する白哉であったが、完全に回避することは叶わず、左腕を一護の虚閃によつて焼かれる。肉が焼かれる激痛に、白哉は顔を顰めるがそれでも瞳から闘志が消え失せることは無い。

——さて、どうするか。

恐らく、このままでは一護の圧倒的な力により千本桜景厳では手も足も出ないであろう。ならば、やることは只一つ。

突如、周囲を舞っていた億の花弁が白哉の右手に収束していき、刀の形を成していく。

「――終景・白帝劍」
しゅうけい・はくていけん

億の花弁が一つに纏まり、超絶的な力を有した刀が白哉の右手に握られる。最初に見せたのは一護が初めて。そして二度目も、この男であった。だがあの時と一つ違うのは、この男が確固たる意志の下自分と戦っているのではなく、自我のないまま敵も解らずに相手を殺そうとしていることである。

「…………行くぞ、黒崎一護」

『オ、アアアアアア!!』

白哉が白帝剣を構えると同時に、一護も咆哮を上げて白哉に一直線に飛んでくる。

――刹那、白と黒が激突する。

「…………兄様…………」

先程やってきて、すぐさま一護と共にどこかに去っていった者の名を、ルキアは呟く。そして、再び井上に目を向ける。クリステイナの傷は大分癒えており、今にも目を覚ましそうな程、綺麗な体に戻っている。

だが井上はまだ熱心に治療を続けている。

先程のことが嘘のような静寂が、再び辺りを支配する。

「――悪いね。本トはこういう面倒なの、好きじゃねえんだけど。ちよつと借りるよ」

「つ、スターク。てめえ!？」

グリムジョーが突如現れた男の名前を呼ぶ。それと同時に、ルキアと既に目を覚ましていた茜雫は警戒する。グリムジョーが名を呼ぶという事は、相手が破面であるということ。

全員が自分に視線を向けているのを目の当たりにしながらも、スタークは話を続ける。

「グリムジョー。それにアニーシャもよ。早いとこ、侵入者から離れた方がいいぜ。侵入者の皆さんに、大層なお出迎えが向かって来るからな」

そう言った瞬間に、スタークと井上と共にその場から消えて行つた。響転であることは確かなのであるが、十刃であるグリムジョーですらとらえきれない程の速度は圧巻としか言いようがなかった。

そして井上が連れて行かれたという事に、ルキアと茜雫は焦燥に駆られていく。

他の者達が啞然としている間にも、井上はスタークと共にどこかに連れて行かれていた。余りの速さに、井上は時が飛んだような感覚に陥る。そして気が付いたときには、井上はとある部屋に到着していた。そして目の前を見上げると、長い階段の上に三人の死神が佇んでおり、その中で中央に佇む男が井上を見下ろしながら話しかけてくる。

「おかえり、織姫」

—— 藍染惣右介。

自分をこの虚夜宮まで拉致することを画策した張本人。それが目の前に居ることに、井上は焦燥を隠せなかった。

そんな井上の下に、藍染は歩み寄ってくる。そして、左手を井上の頬に当てながら、囁くように言葉を発する。

「どうした、随分と辛そうな顔をしているね。笑いなさい。太陽が陰ると、皆が悲しむだろう。君は笑って、少しの間ここで待っているだ

けでいい」

そう言つて藍染は、再び階段の上へと昇つていく。すると、檀上の先に何やら空間のような物が現れる。そこに映っていたのは、平凡な街並み。青い空が広がり、無数の住宅が並んでいるどこにでもあるような町。

「——ただ、我々が空座町を滅して来るまで」

「空座町を……滅す………?」

信じる事は出来なかった。藍染が空座町に侵攻するのは、冬だったはず。

「そうだ。空座町を滅して、王鍵を創生する……要。天挺空羅を」

少し様子を見ていたが、藍染の思つたような結果は現れない。もし自分の仮説が正しければ、日向の斬魄刀が崩壊した瞬間に、彼の中の虚が瞬時に姿を現すものだと思つていた。だが、待つても一向に変化は現れない。

——期待外れだ。

藍染はそう考えながら、東仙に指示を出した。

「縛道の七十七・『天挺空羅』」

東仙の腕に黒い線が奔つていく。それを確認した藍染は口を開く。「聞こえるかい? 侵入者諸君。ここまで十刃を陥落させた君達に敬意を表し、先んじて伝えよう」

天挺空羅により、藍染は現在虚夜宮に侵入している者達すべてに自らの声を届ける。

「これより我々は、現世へと侵攻を開始する。井上織姫は、第五の塔に置いていく。助けたければ奪い返しに来れば良い。彼女は最早、用済みだ。尸魂界上層部はその能力の重要性を理解していた。だからこそ、彼女の拉致は尸魂界に危機感を抱かせ、現世ではなく尸魂界の守りを堅めさせる手段たり得た」

『事象の拒絶』。その能力は凄まじく、実際に冬獅郎などの隊長格も井上の治療の世話になっている。だからこそ、その能力の凄さは尸魂界にも伝わっていた。

「そして彼女の存在は尸魂界の新規戦力となるであろう。死神代行」

を含む「旅禍」を、虚園へとおびき寄せ、餌となり、更にはそれに加勢した四人もの隊長をこの虚園に、幽閉する事にも成功した」

それと同時に、虚夜宮内に何か閉じる音が響く。それは紛れもない、隊長達が虚園に来るために通ってきた黒腔が閉じる音であった。

「護廷十三隊の素晴らしきは、十三人の隊長全てが主要戦力たり得る力を有しているという事だ。だが今はその中から三人が離反し、四人が幽閉。尸魂界の戦力は文字通り半減したと言っても良い——
——……容易い」

現在、尸魂界に居る隊長は六人。言ってしまうえば半分以下である。

「我々は空座町を滅し去り、王鍵を創生し、尸魂界を攻め落とす。君達は全てが終わった後でゆっくりとお相手しよう」

そう言いながら、藍染は市丸や東仙と共に、目の前に存在する空座町に繋がる黒腔へと入っていく。

——相手を、か。

「君達がそれまで、生きていたららの話だがね」

「……………は……………」

日向はふと目を覚ます。直前に起きたことを思い出すと、完全に虚と化した一護によって月牙天衝を真面に喰らって虚哭隸王諸とも一閃されたという事を思い出す。酷く、頭が重いと感じながら、日向は今自分がどこに居るのかと思いつながら体を起こそうとする。だが、自分の頭に何やら瓦礫ではない柔らかく温かい物があると感じる。

「……………起きたか、日向よ」

声が出た方向に首を向ける。そしてその瞬間に日向は、現在進行形で膝枕をされていることに気付く。そして視線の先に居たのは、黒い

着物に黒い髪、そして真紅の瞳をした妖艶な女性が佇んでいた。女性と言うにはまだ幼さが残っており、少女と言うにはあまりある妖艶な雰囲気が存在する者であった。

そして日向は、ゆっくりと自分の体を起こす。起き上がった後に周りを見回し、今現在どこに居るのかを理解する。

「……………精神世界？」

「ああ、そうじゃ」

月明かりが柔らかに辺りを照らす、日本庭園のような光景が外に見える屋敷。紛れもない、日向の斬魄刀である虚帝と白皇が居る場所であった。

「……………ついて来い」

「お、おい！お前誰だよ!?!」

静かに立ち上がってどこかに歩んでいく女を、日向は追いかけていく。あの姿、虚帝でも白皇でもなかった。

なら誰になるのかと疑問になるところではあるが、女が一言も喋らないため、日向は仕方なく女に付いて行くことにした。日本庭園のような庭に出た後に、女はある場所に着いて足を止めた。

一面に咲き誇る、彼岸花。しかも赤ではなく、白い彼岸花である。それらが淡い月明かりにより薄い青のような色彩を放ちながら、絢爛に咲き誇っている。その光景に、日向は息を飲んだ。今までこのような光景は精神世界に入って目にしたことが無い。

「……………これに触れてみよ、日向よ」

「ああ？……………おう」

そう言つて日向は一番手前にある彼岸花に触れてみる。その瞬間に、彼岸花が赤く光る。それだけでなく、何やら彼岸花の上に映像のようなものが流れ出す。

—— 『私の名は、ウルキオラ・シファーです』

—— 『その時は俺が始末するさ』

—— 『鎖せ—— 『黒翼大魔』』

—— 『……………これが、俺の真の姿—— 刀剣解放第二階層だ』

「——っ、何だよこれ……………!?!」

「……………これが、お前が手に入れた記憶の中で最も新しいもの。それにも触れてみよ」

日向が目の前の映像を見て驚くのに対し、女は平然とした態度で再びある彼岸花に触れるように指示を出す。

「言われるがままに、日向は再び別の彼岸花に触れる。」

「—— 気に喰わねえんだよ。戦場で、メスがオスの上に立つのがな」

「—— 『無様だなア、ネリエル!!』」

「—— 『俺は斬られて、倒れる前に息絶える。そういう死に方をしてえんだ』」

「—— 『祈れ—— 『聖哭螿螂』!!!』」

「つ……………ノイトラ?」

「ああ。他のにも触れてみるがよい」

日向は言われるがままに他の彼岸花にも触れていく。その度に何者かの記憶のような映像が何秒か流れる。そして映像が終わった瞬間に、彼岸花は赤から白に戻っていく。

映像は様々であった。先程のように破面のもものは少数であったが、他のものは全て何やら一般人の家族による楽しかった思い出や、事故にあった妹の葬儀にでる兄の思い出など、多種多様であった。

「何だよ……………これ……………」

「それが妾の能力。貴様の魂を刻んだ虚が霊子に分解される時、その一部を取り込み、魂を記憶し、そしてそれを行使する。それが貴様の能力の実態だ」

「これが……………全部記憶なのか?」

「……………こつちに来い」

女は再び移動を開始する。そして庭園の中央にある池の場所まで歩んでいく。

池の中を覗くと、そこにはまた別の映像が流れていた。二本角の虚が、六番隊隊長である朽木白哉と戦っている映像。

「っ、一護!」

「ああ、そうじゃ」

茫然とする日向に、女が儂い表情を浮かべながら口を開いた。

「……………貴様の魂魄に虚が流し込まれた時、妾と奴は二人で虚を抑え込もうとした。だが、奴は虚の力により境界が崩れたことにより僅かに力を見せただけにすぎなかった。故に内なる虚は、ほとんど妾が抑えていたのじゃ」

女の言葉を、日向は一字一句聞き漏らさないように耳を立てる。

「虚の能力は、先程のように妾の力により淡々と得ていった。それには理由があった。倒した虚の魂の一部を得ることによって、内なる虚の空虚を埋める。それが、貴様の虚を抑え込む手段になっておったのじゃ。じゃが、強すぎる能力は器を破壊するに足り得る。故に奴の……………隷属の力により、倒した虚の力も内なる虚に与え、器を育てていった」

女は、静かに腰を下ろし、池の水を手の平で掬う。

「そして内なる虚は、妾達の思惑通りに能力に見合うだけの器に成りえた。今まではそうじゃった……………そしてこれからもそうであれば良かった……………じゃが、藍染の思惑により妾の本体を——斬魄刀を砕かれた。それにより、今迄密かに抑えていた虚の力の奔流が貴様を巡った」

目尻から流した涙が、池に落ちる。

「昔のままの虚であれば、そのまま虚は貴様を問答無用で自分の物にしたのじゃろうな……………じゃが、空虚を埋められてゆき、最上級大虚となり意思も持ち、虚は……………お前と共に歩むことを決めた。それが彼奴の決意じゃった」

「……………」

「彼奴に利点など無い。寧ろ、そのまま虚として虚園の王として君臨でもすればよかつたじゃろうて。じゃが、彼奴は……………『須佐能袁』は、貴様の魂の一部として戦うことを決めた」

「……………そうなのか……………?」

訳の分からないまま、日向は池に映る白哉の姿を見る。しっかりとした瞳のまま、一護と必死に相對している。だが、不利は否めない。

「貴様の中に眠る内なる虚は、貴様の覚醒を待つておる……………日向。貴

様に問う。貴様は、奴と共に歩む覚悟はあるか？」
その問いに、硬直する。

「……………今更だろ」

実に単純な答え。

「……………そうか。訊いた妾が馬鹿みたいじゃったな……………クハハハハ!! いらぬ心配じゃったのう!! そうよそうよ!! 貴様はそういう奴じゃった!! その意気やよし!!」

そう言っただけは日向に歩み寄り、右手をとる。そして女の髪が、どんどん白くなっていき、左眼が黒く反転してくる。そして徐々に、顔の右半分を鬼の面が覆っていく。

「……………今から妾は、完全に彼奴と同化する。今まで抑えてきた彼奴と、妾が同化することにより、死神と虚、二つの力を有した斬魄刀が産声を上げるじやろうて。妾が彼奴にとつての、『奇稻田』^{クシナダ}となろう……………」

「……………でも、俺の斬魄刀は……………虚哭隸王は……………」
「心配するな……………あれは、あくまで虚の力を抑える為の器の一つ。妾も『隸王』もそうじや……………」

形無きが、
貴様の正解よ。

「さあ。妾を手にとれ」

覚醒

一つ目は心に

二つ目は瞳に

三つ目はお前との間に

—— 剣を取り、戦場を踊れ

—— 鬼の様に荒々しく

—— 鬼のように悍ましく

—— 鬼のように猛々しく

——百鬼夜行を連れ

——雄叫びを上げよ

——退くな

——臆すな

——貴様の道は、何者にも染められない

「……………託そう。血筋に染められていない、貴様自身が培ってきた、貴様自身が積み上げてきた記憶を……………貴様は一人ではない。振り返ってみろ。貴様の後ろには、背中を押ししてくれる多くの過去が存在する」

——立ち止まるな。前に進め

——愛する者達を、護る為に

——その為に、剣をとれ

「……………廻^{めぐ}れ——」
『夜叉^{やしや}姫^{ひめ}』

虚園の空の下に、閃光が瞬いた。

「くそっ……………井上を連れて行かれてしまったか……………!」

「第五の塔って言ったよな? なら、早いとこ織姫の所に向かおう!」
井上が連れて行かれたことに、ルキアは齒噛みする。そんな様子の

ルキアを見て、茜雫は早く救出に向かおうと催促する。井上のお蔭で完全ではないものの、ほぼ体力は回復した二人は早速井上の下に向かおうとする。だが、気絶しているネルや、大半が虐殺されたピカロをそのまま置いていくわけにもいかないため、どうするべきか悩み、足が止まる。

「……………」

「っ、ちよーグリムジョー!?どこ行く気!?!」

突如、グリムジョーがどこかに響転で消えて行き、それを見ていたアニーシヤも響転でこの場から去って行く。先程まで共闘紛いのことをしてはいたが、それでも破面であり、元々は敵である関係なのだ。本来ならば、なれ合いもせずにごうなるのが普通なのであったのだろう。

それを特に気に留める事も無く、茜雫はとりあえずネルを抱きかかえる。気絶したまま置いていくわけにもいかないなので、ネルは茜雫が連れていくことになる。数少ないピカロは、なんとなく二人に付いて行こうとしている為、勝手に付いて来れると考える。

そして最後に、未だに砂漠の上で横になっているクリステイナについてであるが、怪我自体はほぼなくなっているので、そのままにしていれば直に目を覚ますと考える。

「よし……………行くぞ、茜雫!」

「よっしやー!」

互いに声を掛けあい、二人は第五の塔という場所に向かおうとする。だが、走り始めようとした瞬間に、二人の前にとある破面が現れる。

牛の頭蓋骨のような仮面を被っている破面であり、後ろには数多くの髑髏を被った者達が佇んでいる。その数の多さに二人は絶句する。「……………葬討部隊隊長、ルドボーンと申します。侵入者、貴方たちの御命を頂きにありがとうございました」

「——ちっ……………!?!茜雫、進路を変え——!?!」

そう言いながら振り返るルキアであったが、ルキア達の背後にも数多くの髑髏の兵達を取り囲むように出現した。そしてじりじりとル

キア達に詰め寄ってくる。そうしている間にも、どこに隠れていたのか数をどんどん増やしていく。

その数は優に三ケタを超えている。

(百?二百?いや……その倍以上はいる……!!)

自分達が治療されている間に、このルドボーンという者が自分達を確保するために取り囲む準備をしていたのだろうと考え、ルキアは歯噛みをしながら斬魄刀を抜く。茜雫も斬魄刀を抜くが、片手にはネルを抱えている為、上手くは戦えないであろう。

(どうする……このままでは一方的に——!)

「ぐああああ——!?!」

ルキアが思考を巡らせている間に、何やらルキアの背後で髑髏の兵達が宙に吹き飛ぶ。そして何度か爆発音がした後に、その原因である人物が見えてくる。

その人物に、ルキア達は絶句する。

「奴は……?!?」

「……クリステイナ様。どういうおつもりですか?」

ルドボーンが、兵達を吹き飛ばした者に向かって言葉を発する。その問いに一向に反応は返さないが、刹那、クリステイナはルキア達の下に響転で肉迫し、目に見えない何かで全員を縛り付け、そのまま攫って行くようにしてルドボーンの背後まで移動する。余りの速さに、ルドボーンは反応出来ずに、ルキア達の突破を許してしまう。そしてすぐに追撃するために、数多くの兵を向かわせる。

そしてクリステイナはそれを見て、ルキア達を縛っていた霊子の束を解き、その場に立ち尽くす。

「貴様……どういうつもりだ……?!」

ルキアの問いに、クリステイナは静かに深呼吸した後、刀剣解放が解けて鞘に戻った刀を抜く。

「……ネリエルを頼んだ」

「……は……?」

「……さっさと行け!!私が足止めすると言っている!!私の気が変わらない内に、ネリエルを連れて逃げろ!!」

その言葉を聞き、ルキア達は少し目を見開き立ち尽くした後、サツと走り去っていく。それを追い掛けようとする髑髏の兵達であるが、クリステイナの横を通り過ぎようとした瞬間に、その髑髏たちの首が刎ね飛んでいく。

それを見て、ルドボーンが剣を抜く。

「……………私と敵対すると言うのですか」

「……………昔お前は、私を随分いたぶってくれたな」

「任務でしたので」

「そうか。だがその恨み、ここで晴らしてもらおうとする」

「……………霊圧もほとんど回復しておらず、刀剣解放もままならない貴方が、私達五百の軍勢に敵うとは思えません」

「……………」

黙るクリステイナに、再び髑髏の兵達が襲いかかってくる。だが、一体一体確実に首を刎ね飛ばされていく。

ここからは物量戦であり消耗戦である。いくら虚夜宮調和刃と言っても、風前のももしびである存在。実力が遠く及ばないルドボーンでも、数で圧倒すれば勝てる状況。そんな状況下の中で、まだ痛む身体に鞭を打ちながら動くクリステイナは、必死に戦っていた。今までの自分で会ったのならば、絶対にこんな殿を務める様な真似はしない。ましてや、自分が必ず死ぬと言っても過言ではない状況下。まだ、死神に復讐すらしていないのにも拘わらず、死ぬわけにはいかない。

だが、今のクリステイナにはある想いがあった。

(ネリエル……………謝らせてくれ……………そして私に……………)

——— “家族” を護らせて、死なせてくれ。

(お前に殺して欲しいとも、お前を殺したいなどとはもう言わない。だが、限りあるこの命を、お前の為に使いたいんだ)

そんな決意を胸に秘めながら、クリステイナは剣を振るう。

(……………ああ。『ペツシエとドンドチャツカによろしくと言ってくれ』
と言うのも忘れていたな)

ネルの二人の従属官の事を思い出す。あの愉快な破面達を思い出すと、自然と笑みが零れてくる。

「……………さあ。続けようか、ルドボーン・チエルト。今の私は、中々死なないぞ?。」

「心配はございません。時間が少々掛かるか否の問題です。」

「くっ……………」

『オ、ア、アア!!』

完全に虚と化している一護に対し、白哉は苦戦を強いられていた。

“終景・白帝剣”を発動しながらではあるが、一護の攻撃は数億の花弁を凝縮した一振りの刀の破壊力に物怖じせずに向かって来る。虚と化している為、少しの傷であれば超速再生によってすぐに元通りになる。

左足はほとんど動かずに、左腕は黒焦げにされている。そのような状態で今の一護と戦うのは、自殺行為に近かった。そもそもどうすれば一護が元通りになるのかすら解らない。霊圧の消費かとも考えたが、そんなものを待っている間に白哉が殺される。

『……………』

突如、天蓋の上から接近してくる霊圧に一護が反応して顔を向ける。その霊圧は凄まじい速度で二人の居る場所へと接近して来ている。

る。そして、その霊圧はとうとう二人の居る場所まで降り立ってくる。

そしてその影は、白哉の隣へと並ぶ。

「……………どうも、朽木隊長」

「……………天宮城日向か……………」

隣に来た人物に、白哉は一先ず安堵する。もしこんな状況で敵などが来たら、只でさえ一護で手を焼いていると言うのに、さらに悪い状況になってしまう。しかし、先に虚園に乗り込んでいた中でも実力者が来てくれたという事に、現在の状況が改善されるという期待を胸に秘める。

だが、日向の姿を見る限り、あることに気付く。斬魄刀が無い。死覇装も黒いスタンダードのものであり、卍解状態でないのも確かである。

「……………朽木隊長。ここは俺に任せて頂かせてもよろしいでしょうか？」

「……………本気か？」

「はい。朽木隊長は、虚夜宮第五の塔に捕らわれている、井上織姫の救助に。朽木ルキアの霊圧も、その場所に向かって進んでいます」

「……………そうか。あいわかった」

白哉はそう言つて、この場から瞬歩で消えて行く。そんな白哉を追おうとした一護であったが、目の前に日向が立ちふさがる。一護は邪魔だとばかりに、天鎖斬月を振るう。その一閃に対し、日向は突然手に鎌を出現させて防御する。完全に虚と化した一護の腕力は尋常ではなく、それを受け止めた瞬間に日向の顔は歪む。

そして数秒の鏝迫り合いの後、一護は一旦距離を取る。そして目の前の障害を消し飛ばすために、二本角の間に虚閃を溜める。

それを見て、日向は深呼吸をする。

————…行こう、『夜叉姫』

「卍解……………」

日向の霊圧が急激に上がっていく。その瞬間に、一護は真紅の虚閃を目の前の男に放つ。砂上を駆ける破壊の閃光は、躊躇いなく目の前

に塞がる存在を消滅させようとする。

『戦憶夜叉姫』

日向の姿は変わった。死覇装が上だけ、『虚哭隸王』のような白いロングコートになる。そして死覇装の帯は真紅になる。だが袴は普通の黒い物であった。さらに、前までは純白のマントであった左肩から垂れ下がっていた物には、白い下地に紅い彼岸花が刺繍されていた。そして肩当てに、今迄日向が虚化の際に被っていた仮面が使われていた。最後に、左眼だけが反転しており、黒く光っていた。

そして、一護の放った虚閃は日向の目の前に現れた薄い膜のような物に遮られる。そして虚閃は横に弾かれていき、日向の後方にブイ字型の痕を作り上げながら爆発を起こしていく。

——『反膜』

反膜を目の前に展開して、虚閃を防いでいる間に、日向は右手に霊圧の槍を出現させる。『雷霆の槍』。元々はウルキオラの技であるが、今こうして使えるという事はウルキオラが息絶えたということになるだろう。死した彼に敬意を表しながら、日向はその技を遣わせてもらうことにする。だが、それだけでは終わらずに霊圧の槍はどんどん黒く変色していく。

『天逆鉾』

今は斬魄刀を折られた為、斬撃は使えない。否、『天叢雲剣』や

八尺瓊勾玉”と言った隷属の力を使えない。日向の斬魄刀は二つ。その二つを無理やり一つにしつつ、片方だけを卍解して、一つの卍解として扱ってきたのが、『虚哭隷王』である。

簡単に言ってしまうえば、『夜叉姫』の卍解である『戦憶夜叉姫』に、もう一つの斬魄刀である『隷王』の隷属の力を付与していた物が『虚哭隷王』であった。しかし、その斬魄刀二つを合体紛いにさせるような境界を破壊していた虚は、現在『夜叉姫』と一つになっている。そのため、『二つの斬魄刀を合体させる』というような事は出来なくなってしまうっている。そもそも、そのような事実はさつき知ったばかりである。どうすれば『隷王』を呼び出せるのかなど、日向には解らない。だが、それでも今まで蓄積してきた虚の能力は使用できる。それこそオリジナル以上の強さで。

『その記憶した能力の行使の名は、 “百鬼夜行” と言う』

どこからともなく、夜叉姫が日向に語りかける。

『感じるか？ 貴様の中を巡る、戦の鬼たちの記憶を』

「……………ああ。ありがとな……………これで俺はまだ……………戦える！」

そして虚閃が止んだ瞬間に、日向は一気に一護に肉迫していく。そして日向の手に持っている “天逆鉾” と、一護の天鎖斬月が激突する。すると、二つの刀身が触れた瞬間に槍の先の方が炸裂し、一護の腕の一部を抉り飛ばす。 “天逆鉾” はウルキオラの “雷霆の槍” を弄ったものである。オリジナルとの違いは只一つ。接触した瞬間に、凝縮し黒く変色した霊圧が炸裂する。それにより爆発的に攻撃力を高めている。

腕を抉り飛ばされた一護は、爆発の衝撃で天鎖斬月を手から放す。だが左手を広げた瞬間に、吸い込まれるように天鎖斬月が左手に飛んで行ってそのまま収まる。そして立て続けに、左手で天鎖斬月を振るう。それを日向が “天逆鉾” の刃の無い部分で防ぐが、その間に一護の右腕が完全に再生する。

日向は槍術などやったことが無い。だが、参考になる人物はいつも近くにいた。その人物の事を思い浮かべながら、持ち前の戦闘センスのままに槍を振るっていく。狙うは仮面。だが、一護の猛攻により

中々届かない。リーチこそ長いが、慣れていない武器では扱い辛い。仮面を剥がせばいいのである。それが、今の一護を正気に戻すたつた一つの方法であると思える。

(それに、さつき『天挺空羅』で藍染達が空座町に侵攻を始めたつて聞こえた……あまり時間はかけらんねえ……！)

藍染達が虚夜宮にやってきた侵入者たちに、『天挺空羅』でそのことを先んじて伝えていたという事を思い出す。その時はまだ日向は意識が朦朧としていた時であるが、内容は大体覚えていた。

(一護……お前の町が危ないつっのに、お前はそんなんでいいのかよ)

「なあ……一護！」

『オ、ア、アアアアアア!!』

一護に声を掛けるが、咆哮を上げるだけである。それを見て、日向は複雑そうな表情を浮かべる。そして、何かを決心したかのような表情に変わる。

——出来れば、使いたくは無い。

——だが、時間が迫る中、出し惜しみは出来ない。

——そしてこれが、現状、最も迅速に一護の仮面を剥がすことのできる方法。

突如、日向は右手に握る『天逆鉾』を消失させる。そしてその場にしゃがむ。そして徐に、右手を地面に置く。それを見た一護は、まっすぐ日向に向かって来る。

——それを見向きもせずに、日向は瞼を閉じた。

——思い返せば、自分が虚化できるようになってからずっとそうであった。

——あの斬魄刀は、『浅打』が無いにも拘わらず、自分の斬魄刀としてずっと自分に連れ添ってきた。

——そして虚の力が全て『夜叉姫』に渡った今、彼は本来の姿に戻っている。

「……………天照らせ——
『隸王』」

刹那、溢れんばかりの光が辺りを照らし始める。その瞬間に、一護の仮面が剥がれはじめ。そして一護は急に力なくその場に崩れ落ちる。それを確認した日向は、すぐさま『隸王』の解放を止める。

日向は息も絶え絶えになり、顔に滝のような汗を流しながら倒れる一護を眺める。仮面の一部が剥がれた一護は、ピクリともしない。すると次の瞬間、仮面が全て剥がれ落ち、次に長かった髪の毛も落ちて、元々の長さまで戻る。そして白かった肌の色も元に戻る。最後に、胸に大きく穿たれていた孔が超速再生によって塞がる。

その光景を見て、日向は一息吐く。恐らく致命傷であった傷が塞がったということもあり、生命の危機からは回避できたのであろうと考える。そうしてから、一護を背中に背負う。

——『隸王』。それが、日向のもう一つの斬魄刀。

『浄天眼』に宿り、代々司家に受け継がれてきた霊王の力を持つ斬魄刀。故に、尸魂界で唯一、『霊王』と同じ読み名をすることを許されている斬魄刀でもある。その能力は至極単純。『浄天眼』——つまり『千里眼』の見える範囲を光で照らすことの出来る天相従臨の力を有し、その範囲にある霊子を隸属させるというものである。今使ったのは一瞬であった為、日向の周りにしか発動しなかったが、もしこれが大勢の者が居る場所で使用したら味方ごと霊子に分解してしまうという事態に陥る。だからこそ、先程日向は白哉を巻き込まな

いように、先に行くように差し向けた。

あくまでこれは『始解』。今まで『虚帝』として日向の中に内在していた斬魄刀の本来の姿。刀身は持たない。なぜならば、隷属させた霊子が右手に収束して刃を為すため、刀身を持つ必要がないからである。

『夜叉姫』と『隸王』。これらが、今の日向の斬魄刀。

「これが………藍染を倒す力だ」

自分の中で覚醒した二つの存在を確かめるように、日向は呟いた。そして、先に向かった白哉を追うべく、日向も一護を背負いながら駆け出した。

願い

この星空の下で
貴方を想います

「……………早く仕留めろ」

「はっ」

ルドボーンの指示に、彼の部下である髑髏兵団がクリステイナの下に向かつて行く。彼是十分程、五百居た兵団の内の五分の一——つまり、百名程が手負いであるはずのクリステイナに首を刎ね飛ばされ、尚且つ他の者達は足止めを喰らっていた。だが、クリステイナも余裕綽々という訳でもなく、身体中に刀傷が見え、彼女が剣を振るう度に彼女自身の血が辺りにまき散らされていく。今のクリステイナは刀剣解放もままならず、一番の長所でもある血装も発動出来ない。なのにも拘わらず、クリステイナは鬼神の如き戦いぶりで髑髏たちを蹴散らしている。

しかし、さすがに満身創痍の身体を動かしている為、クリステイナの身体は徐々に衰弱していつている。井上の「双天帰盾」という能力で怪我が治っても、霊圧までが回復したわけではない。

そして遂に、苦しそうに顔を歪めながらその場に膝を着く。口からは多量の血が吐き出される。そんなクリステイナを見た髑髏兵団は、すぐさまクリステイナに肉迫して来る。

——まだだ。

しかし、ここで倒れる訳にはいかないとばかりにすぐさま立ち上がり、再び剣を振るう。そして肉迫する髑髏の首や胴を刎ね飛ばす。だが、他の髑髏たちがクリステイナに剣を振るい、さらに彼女の身体に刀傷が増えていき、出血も酷くなる。

——護ってみせる。

だが、背後から髑髏の振り下ろされる剣を素手で受け止める。そしてそのまま、振り下ろしてきた髑髏の胴に一閃を喰らわす。そして、髑髏の持っていた剣を奪い取り、二刀流になり、手数を増やしなから相対そうとする。しかし、奥の方にクリステイナに向かって虚閃を放とうとする者がクリステイナの目に留まる。すぐさま、先程奪い取った剣を投げつけて、髑髏の眉間に命中させる。

——滅却師の誇りに掛けて、“家族”を護ってみせる。

永らえたからには、それだけはやり遂げてみせる。例え、ネルに許されることがなくても。

そんな決意を胸に戦うクリステイナに対し、髑髏兵団は容赦なく襲いかかっていく。だが、その髑髏兵団の内、ルドボーンの後方に待機していた兵団達に何かが襲いかかる。膨大な量の桜色の何か、髑髏たちを襲いかかり一瞬にして呑み込んでいく。その光景には、クリステイナだけでなくルドボーンも驚いた表情を浮かべる。ルドボーン表情は見えないが、大体の挙動でそうであると捉えることが出来た。

「っ……何者だ?！」

桜吹雪が道を作っていく。そしてその道の中央から、マフラーをすする男がルドボーンの軍勢たちの下に歩み寄っていく。

「…………名乗る意味など無い。私には往かねばならぬ場所がある。そこを退いてもらおう。散れ——」
『千本桜景厳』
せんほんざくらかげよし

そう言つて彼——朽木白哉は、手をルドボーン達の方に翳す。それと同時に、白哉の周りを待っていた無数の桜の花弁が、ルドボーンの軍勢たちに襲いかかっていく。何とか食い止めようとする髑髏兵団であったが、白哉の卍解の前に為す術なく身体を切り刻まれていき、次々と鮮血を噴き出しながら血に崩れていく。

それを見て、ルドボーンは急な劣勢を悟り、斬魄刀を構える。

「くっ……生い上がれ——」
『髑髏樹』
アルボラ

ルドボーンが解号を唱えると、斬魄刀が変形し、尖った枝のような形状に変化する。次に、右半身が木の幹のようなもので覆われ、下半

身が樹の根のように変化し、背中には左右対称の先端に髑髏がついた枝が生える。そしてその髑髏から、身体が生えてくる。

これがルドボーンの刀剣解放『髑髏樹』の能力の一つ『髑髏兵団』カラベラスである。ルドボーンの背負う木の枝の髑髏からは、際限なく彼の忠実な僕たちが生まれる。だがその速度にも上限があり、明らかに千本桜景敵が兵達を倒す速度よりも遅い。桜の刃は、徐々にルドボーンに迫っていく。ルドボーンも必死に髑髏の兵を量産するが、億の刃には些か少なすぎる兵であった。

「な…何をしている！相手はたかが一人——！」

「無駄だ。幾ら兄が、その兵を造り出す能力を使ったとして、私に兄の剣が届きはしない」

そう言つて白哉は、手の平をルドボーンに翳す。それと同時に、花弁の激流がルドボーンに向かって進軍していく。そして、ルドボーンを囲むように円を作り上げた後に、そのまま波紋のように広がっていく。髑髏兵団を蹴散らしていく。そして桜色の波紋が広がり切る頃には、ルドボーンの周りには誰一人として立っている兵が居なくなつた。

そして白哉は、何故か卍解を解いて花卉を元の斬魄刀の姿に戻す。その光景には、ルドボーンも仮面の中で目を見開く。

「な…何を…!?!」

「…………兄に止めを差すのは私ではない」

「…………は…………?」

白哉は、茫然とするルドボーンを横目に斬魄刀を鞘に戻す。その瞬間に、白哉の背後から一つの影が現れる。その影は、ロングコートを靡かせながら、右手に長い槍を構えていた。

そして次の瞬間、その槍をルドボーンに向かって投擲した。それを目の当たりにして、ルドボーンはすぐさま防御態勢をとるが、それも虚しく槍は凄まじい勢いで胸を貫いた。

「かはっ……!」

仮面の中で血を吐くルドボーンであったが、力なく崩れ落ちる前に、胸に突き刺さった槍が大爆発を起こす。黒煙と砂塵を巻き起こす。

し、周囲に強風を産み出した爆発を目の当たりにして、先程まで髑髏兵団と戦っていたクリステイナは瞠目する。

もしあの爆発に巻き込まれていたのであれば、満身創痍である自分はずぐにでも息絶えたであろう。そんなことを考えながら、クリステイナは黒煙が晴れるのを待っていた。そこには、白哉の他に二人の人物が居た。二人の人物といっても、一人はもう片方の者に背負われており、意識が無いように見える。

「いやあく、よかったです、朽木隊長。間に合ったみたいで」

「……………兄が来なくても、私一人で充分だった」

「そういう意味じゃあないんですけど……………とにかく、これで先に進めますね」

「……………あの破面はどうする?」

「……………俺が上手くやるので、先に行ってください」
「そうか」

白哉は、白いロングコートの男の話を聞いて、すぐに瞬歩で消えて行った。そしてクリステイナは、目の前にいる人物を目の当たりにして、驚愕の色を見せる。そんなクリステイナに対し、その男はゆつくりとクリステイナの所まで歩み寄ってくる。

「お前、もう平気なのか?……………って、もう血まみれじゃねえか」

—— およそ、二十年前に会った白い死神。

間違う事などない。最も印象に残っている、白い髪の毛。そこから当時の口調や霊圧が、頭の中に甦ってくる。左目が黒く変色していることや、死覇装が大分違うこと以外は、当時の印象のままであった。

自分の仮面を斬り裂き、半破面にした者でもあるが、今は特に何の感情も抱かない。少し前の自分であったら、何かにつけてこの死神も殺しに向かったのであろう。だが、今はそんな気分にはなれなかった。

「……………どうするんだ?私を殺しにでも来たのか?」

「は?何で、んなことしなきゃならねえんだよ。わざわざ一護から助けたつっ—のによ」

目の前の死神の言葉を聞き、クリステイナは再び驚く。

——こいつが私を助けた？

クリステイナは、動血装を発動した一護に月牙天衝を喰らって以降の記憶が曖昧であった。だが、曖昧な記憶の中でも、自分が生死の境目を彷徨っていたことは覚えていた。そしてそんな自分を治療してくれたのが井上であることも、曖昧であるが覚えてはいた。だからこそ、再び攫われた井上を助けに行こうとするルキア達の為に足止めをしようと思ったのである。そこには、ネルも一緒に連れて行くという事実があったからでもあるが、ネルを理由にした方が、自分にとっては気楽であった。

そんなことを思い出しながら、クリステイナの記憶は大分前まで戻る。

『死神を……嫌いにならないで』

自分の目の前で死んだ、息子を庇って死んだ母親の滅却師の記憶。彼女は、まだ破面化していない彼女に向かってそう言った。そんな彼女の事を思い出していると、ふと、何かが鮮明に思い出されてきた。彼女の息子は、オレンジ色の髪の子供。そして目の前の死神が背負っている者——黒崎一護は、オレンジ色の髪の毛。そして、無意識ではあったろうが『血装』を使っていた。

(……………そうか。成程な……………)

この、黒崎一護という死神代行が、名も知らない彼女の息子なのであろう。完全な根拠などないが、それは確信だった。

『許してくれるのが『家族』だっ!!』

(……………確かにお前の境遇なら、『家族』の事を口にしてもおかしくはないな)

戦闘中、一護が自分に叫んだ言葉を思い出しながら、クリステイナは涙を流す。母を殺された息子が、一体誰を憎んだのだろう。当時、虚など知らなかった少年が、何を恨んだのだろう。恐らくその矛先は、紛れもない『自分』だった筈だ。

自分だけ傷つけば、誰も傷つかないと。

だが、そんな彼を救ってくれたのは彼の家族だったのかもしれない。だから彼は立ち上がった。一心不乱に戦うことが出来た。『家

族”を謳うことが出来た。

(私はどうしようもない弱虫だな……………)

自分が傷ついたのを他人の所為にしか出来ない自分を思い出し、クリステイナは両目から大量の涙が流す。

それを見て、目の前の死神が目を見開く。

「お、おい!?俺なんかしたのか!?!」

「…………お前には……………関係……………ないっ!」

「誰か……………」

目の前で金髪美女の破面が、血まみれで泣きじやくっている。彼の――天宮城日向の人生の中で、ここまでカオスだった状況はあっただろうか。思わず、日向は誰かに助けを求めるが、こんな状況を助けてくれる人物などいないだろう。

だが、只一人反応する者が居た。

「……………ん……………」

「お、一護?起きたか。起きて早々悪いが、助けてくれ」

「は?日向…………お前急に何言って……………!!って、こいつ!!」

日向の背中で目覚めた一護は、少し寝ぼけたような目のまま辺りを見渡し、目の前で泣きじやくっているクリステイナを見つける。最初は、自分の胸に風穴を空けた者だと思い出し警戒するが、まずそれ以前に日向に背負われていることに気付く。色々疑問が溢れてくるが、ともかく一番の問題は、目の前でついさっきまで自分を殺そうとしていた者が、何ゆえか泣いているという事である。こんな状況、一護の経験の中ではなかった。

だが、二人が目の前の破面についてどうこう会議をしている間に、クリステイナは既に泣き止んでいた。そして一息吐いた後に、スッと立ち上がり二人を見る。

「……………お前達死神はこれからどうするんだ?藍染は既に、空座町への侵攻を始めたぞ」

「なっ……………!?本当なのかよ!?くっ……………!」

「待てい」

「ぶっ!?何すんだよ、日向!!」

クリステイナの言葉に駆けだす一護だが、そんな一護に対し日向は足をスツとかけて一護を転ばせる。一護は勢いよくこけて、砂上の上を滑らかに滑っていく。そして顔を上げて日向に怒鳴った。

「俺もあっさりとしか聞いてねえから、詳しいことは分からねえ。だが、隊長達が虚園ウエコムンドに来るために使った黒腔ガルガンダを、藍染に閉じられちゃったんだ。つまり俺達は今、虚夜宮ラス・ノーチエスで足止め喰らっちゃってんだよ」

「なっ……!? どうにかなんねえのかよ!!?」

「さあな。だが、井上がまた攫われたっていうのも聞いたぜ」

「っ!どこだ!?!」

「第五の塔。目の前の建物だ」

日向の言葉を聞き、一護は目の前にそびえる巨大な建物を見て、すぐさま駆け出していく。その後ろ姿を見ながら、日向はやれやれとため息を吐く。そしてすぐに、一護を追い掛けようとして――。

「待て、白い死神」

「ん?」

駆け出そうとした日向に、クリステイナが声を掛ける。

「…………お前達は、藍染を倒しに行くのか?」

「……………ああ」

「なら、後生の頼みだ……………ここで私を殺してくれ」

その言葉に、日向は目を見開く。そしてクリステイナの瞳を見つめる。じつとこちらを見つめて、視線をずらそうとはしない。

「……………何でだ?」

「……………大切な者を傷つけた。会わせる顔もない。ここを死に場所に決めた。失血死で死ぬくらいなら、刀で一思いに」

静かな時間が流れる。そしてクリステイナは、瞼を閉じる。まるで、自分を斬るのを待つかのように。

クリステイナは、闇の中で自分の死を待つ。すると、砂漠の上を歩く音が聞こえてくる。ゆっくりと、自分に近付いてくる。

「……………そんな眼えしてる奴、斬り殺せるかよ」

だが、日向はただクリステイナの肩を一度叩いただけで、横を通り過ぎて行った。

「自殺志願者殺す程、俺も暇じゃねえんだ。死にたいなら、お前で勝手にやれ。もし、その気が本当にあるんならな」

そう言った直後、日向は瞬歩でクリステイナの背後から消えて行った。風が吹く濁いた音しかしなくなった場所で、クリステイナは暫く立ち尽くしていた。そして、自分の手に持っている斬魄刀の刀身をジツと眺めた。鏡のように反射する刀身には、血と涙を流す自分の姿が映っていた。

———今ので、もしそのまま斬られたのならば本望だったのかもしれない。

『違うよ』

———……………ああ。そうだな。

『うん。生きなきや』

———……………ネリエルに、謝らなきやならない。『ごめんなさい』つて。

『一緒に謝ろう?』

———……………ああ。ありがとう、白い死神。私にチャンスをくれて。

『お礼しなきやね』

———祈ろう。アイツの望み通りになるように、この空に向かって。

『それがいいよ。クリステイナ』

———ああ、アンナ。お前も、祈ってくれるか?

『勿論！だって私達、友達でしょ？』

——……………いや、違う。

『え……………？なら、何？』

——『家族』だ。

『……………そっか！私達、家族なんだね！』

——ああ。ずっと一緒だ。これからも、ずっと。

『……………良かった。私はやっと、貴方に戻る……………』

——済まなかった。だけど……………もういいんだ。

『……………うん』

——……………皆に、お礼を言いたい気分だ。ネルにも、崩姫にも、黒崎一護にも、他にもたくさんいる。

『うん』

——だから、今、私に出来る事をしよう。手伝ってくれるか？

『勿論！』

——……………ああ。やろう。

自分の中に居るもう一人の自分との会話を終えたクリステイナは、手を胸の前で重ねる。そしてそっと瞼を閉じながら、天を崇める。それと同時に、クリステイナの頭上に霊子が収束していく。それはほとんど、巨大な鐘のような形に形成されていく。

そして数秒した後、左手に神聖弓を形成し、鐘に向かって神聖滅矢を放つ。それは、見事鐘に命中する。それと同時に、美しい鐘の音が辺りに響いていき、収束して鐘の形になっていた霊子が辺りに散らばっていく。

そしていつの間にか、クリステイナの頭上には光輪が出来ており、そして背中には光の翼が出来ていた。澱みのない、美しい白い輪と翼が出来ていた。

——『クインシー・フォルシユテンデイツレ滅却師完聖体』。

「
〃^{オラシオン}
神の福音
〃
」

聴いた者の傷を癒す福音。それが、皆に届くようにクリステイナは祈っていた。そしていつの間にかクリステイナの傷は癒えており、血も無くなっていた。

——この願いが。

『誰かに届きますように』

そう祈りながら、クリステイナは聖母の如き笑みを浮かべていた。

進撃

布の擦れる音がする

鋼が掠る音がする

脈が体を駆け巡り

我らの生を示してる

我らこの生尽きるまで

臆して息絶う事は無し

日向は、目の前の聳える建物に向かって突き進んでいた。目の前の塔には、白哉や一護が先に向かっている為、何の目的も無いよりかは、集合した方がいいと考えたためである。それに一護のこともある。放っておいたら、勝手に空座町に向かおうと我武者羅に動こうとするはずである。

「ふう……………早く行かねえと……………ん？」

もうすぐで塔に着くというところで、日向は何かを聴く。砂漠という渇いた気候の為か、遠くから響いてくる音は、やけに透き通っていた。そしてよく耳を澄ませると、それが鐘の音であることに気付く。最初の内は、虚夜宮なんぞに鐘があるのか、と考えていた日向であったが、次の瞬間自分の身に起こる異変を感じ取った。回道で治療を受けた時のような、内側から漲ってくるような、そんな感覚。

一体何事かと、日向は浄天眼を使ってその鐘の音の根源を探そうとする。そしてそれは、意外と近くにあった。

「……………あいつか」

先程、すれ違った破面。

それを見ただけで、日向は笑みを零した。もう、彼女は大丈夫である。もう、自分を殺せなどと、口に出したりなどしない。恐らくこれ

は、彼女なりに何かを伝えようとしているのだと、日向は思った。安らぎを与えてくれる透明感のある音色に、少し気持ちを寄せてみる。そうしている間にも、日向の霊圧は急速に回復していく。

——餞別なのだろうか。

破面である彼女が、このように死神が回復してしまう手段をとる理由はよく分からない。だが、何かしらの意味があつてのことだろうと考えたので、日向は再び塔に向かって走り始める。

「……………これは……………卯ノ花隊長……………」

「……………感じますか、勇音。この音色に乗っている、何者かの思いが」卯ノ花と勇音と花太郎は、現在第8の宮の近くで、恋次や石田、そして茶渡の治療を行っていた。因みに何故花太郎がここに居るのかというと、元々白哉と共に行く手筈であったが、白哉が颯爽と去って行ったため、置いてけぼりにされて何とか卯ノ花達と合流したという話があるのは、また別の話である。

卯ノ花は、突如虚夜宮に響き渡った音色に耳を傾けながら、石田の治療を続けていた。

「……………あんまり、適当な事は言えないですけど……………とても優しい音色です……………」

勇音は、現在恋次の治療をしている。それを続けながら、勇音も響いてくる音色に耳を委ねていた。寺の鐘のような腹部に響いてくる音ではない。どちらかと言うと、琴や川のせせらぎのような、鼓膜を優しく撫でるような音。聴いているだけで、穏やかな気持ちになれる音色。そんな音色に、勇音は自然と笑みを浮かべた。それは他の者達も同じであるようだ。そういったことには感心が無さそうな恋次ですら、瞼を閉じて聴きに入っている。

「へっ……何か、元気が出て来たぜえ!!」

そう言つて、恋次が急に立ち上がったことに、治療をしていた勇音が焦る。恋次達は、ザエルアポロの“人形芝居”により体構造をいくらか破壊されており、それは骨だったり臓器だったりする。それを癒すために、四番隊である卯ノ花達が回道を駆使し、霊圧を回復させる。それは回復した内部霊圧を、術者による外部霊圧とで肉体の回復を図る為である。恋次達の場合、かなり霊圧も消費していたので、その回復にはかなり時間が掛かる筈であり、こうやってすぐに立つことなど出来ない筈である。

しかし、今日の前で立っている恋次はすでにピンピンしていた。

「……………どうやら、この音色には何かの回復作用があるのかもしれない……」

「石田ア!そんな細けえことなんざいいんだよ!動けるようになったなら、いっちょ戦りに行くだけだろうが!」

「……………阿散井。君の脳筋さには、ため息しか出ないよ」

腕をブンブンと振り回す恋次に、石田は言葉の通りのため息を吐く。そんな二人に対し、卯ノ花は静かに恋次の方に視線を向ける。

「阿散井副隊長」

「え?なんスか、卯ノ花隊長……………!」

「動くと傷に障るので、もう少しお休みください」

卯ノ花の『笑顔』で放った言葉に、恋次は顔を青くしてゆっくりとその場に座り始めた。その一連の流れを見ていた石田と茶渡は、隊長のなんとるかを見て戦慄していた。このような事には慣れている四番隊員の二人は、淡々と治療を進めていく。因みに、恋次達と共に居た破面の二人は『ネル——!!』と叫んで、どこかに消えて行った。

大分時間が経ったこの場に、新たに二人の人物が現れる。

「あら、涅隊長。調査は終わりにになりました?」

「アア、そうだね。大した物は見つからなかったヨ」

「……………それは“黒腔も”ですか?」

卯ノ花の強調した言葉に、マユリは眉を顰める。そして彼の後ろに存在する副官のネムに、何やらサインを出す。すると、ネムが引つ

張って来ていた巨大な台車にかかっていた布を、ネムが豪快に取り払った。

その巨大な「何か」を目の当たりにして、卯ノ花を除いた者達が瞠目する。そんな反応に対して、マユリは特にリアクションもせず話を続ける。

「君は何を言っているのだネ。調整こそ必要だが、少し時間があれば空座町のレプリカに繋がる黒腔を開くことなど、この私にとっては造作もないことだよ」

「それは頼もしい限りです。では……勇音。『天挺空羅』で、虚夜宮にいる皆さんに連絡を。『第8の宮に、戦闘員も非戦闘員も集合。準備の整い次第、我等、黒腔を通じて本隊に加勢する』、と」

その指示を聞き、勇音はすぐさま詠唱を始めて『天挺空羅』を発動しようとする。だが、そんな会話の中である疑問が浮かんだ石田が、卯ノ花に対して質問をする。

「あの……空座町のレプリカとは……？」

「おや？聞いていませんでしたか？なら、説明致します。決戦が冬と決まった時点で、我々護廷十三隊は浦原喜助に、ある協力を仰ぎました。その内容が、黒腔を安定させる事と、護廷十三隊の全隊長格を空座町で戦闘可能にすることです」

「なっ……全隊長格を!? そんなことをしたら町は……!!」

『町は壊れてしまう』と言いかけた石田だが、それを卯ノ花は視線で止める。押し黙る石田であったが、納得などできない。隊長格は現世に来る際に、現世の霊に不要な害を与えないように「限定霊印」というものを身体に刻む。それは隊長格の有り余る霊圧を、通常の五分の一にするというものである。そうでもしなければ、隊長格が一度戦えば町が壊滅するからである。

一人でも全力で戦えば、町は荒野になるだろう。それを全隊長格と言ったなら、塵も残らない程になるだろう。だが石田は、『レプリカ』という単語に引っかかっていたことを思い出した。

「貴方の危惧は理解しています。それを防ぐために、浦原喜助は「転界結柱」という装置によって解決しました」

「っ！……成程……」

「石田……今ので理解出来たのか？」

納得した様な石田に対し、茶渡はまだ疑問ありげな声で石田に問いかける。それに対して石田は、眼鏡をクイッと上げる。

「茶渡君。つまり、現在空座町に在るのは、本物の町ではなく複製の町が置かれているという訳さ。そうですね？」

「ええ。『転界結柱』とは、包囲したものを尸魂界のある別なものと移し替えることが出来るということ。これを使って我々は、流魂街の外れに空座町を全てそのまま転送しました」

要するに、藍染達が侵攻したのは本物の空座町ではなく、複製の町。そうすることにより、現世の霊に害を及ぼさずに、全戦力をもって藍染達との決戦に臨むことが出来るという訳である。そしてそこに行くための黒腔を、現在マユリ達が調整しているという訳である。

調整が終わるまで、石田達はどうかやっても向こうの決戦に行く事は出来ない。そうであれば、ここで黙って治療を受けて休んでいるのが最善である。

藍染が侵攻を宣言してから数十分。恐らく空座町のレプリカでは、既に激戦が開始されているのであろう。そこに自分が向かってどうこうできるかは解らない。だが、例え微力であっても加勢できるのであれば、自分は戦いに向かいたい。それが石田の考えであった。それは恋次も、茶渡も同じであろう。

その感情をくみ取ったのであろう。卯ノ花は、石田に視線を向ける。

「……………今、向こうで行われているのは、文字通りの決戦です。ですがあくまでそれは、『護廷十三隊と藍染の』という意味です。ここで言うってしまったら頼りなく思ってしまうかもしれませんが、もしもの時の為に貴方達人間の方には先に本物の空座町に戻って、防衛について頂きたいのです」

「っ……………解りました。黒崎は、僕達と一緒にじゃなくて、レプリカの方に向かうんですね？」

卯ノ花の言葉を聞き、石田は苦渋の決断であったとばかりの表情を

見せる。ここで卯ノ花の示唆するのは、この決戦で石田や茶渡などは逆に足手まといになってしまうということである。石田や茶渡、そして恋次、さらには破面の二人の加勢を得ても第8十刃であるザエルアポロ・グランツには結局敵わなかった。決戦というのだから、藍染と共に向かっている十刃達は、トップクラスの实力者たちである。八番目でも勝つことの出来なかった自分が、それ以上の相手を前にどうにか出来るかと言われれば、石田はそこで退くことしか出来なかった。それならば、いつそのこと自分達の町で、自分達が最終防衛線として空座町に戻った方がいい。

そんなことを思いながら首を縦に振った石田に、卯ノ花は申し訳なさそうな顔をしながら、話を続ける。

「ええ。彼はこの先の決戦で必ず必要になってくる筈の戦力です。真に勝手ですが、彼には空座町ではなく、レプリカの方で行われている決戦の方に加勢して頂きます」

「僕に謝らないで下さい。黒崎ならきつと、同じことを言われたら無理をしても決戦の方に向かう筈ですから」

石田はそう言って眼鏡をクイっと上げる。あの男は、座して待つ性格ではない。即断即行。早期の解決を目指してすぐに動く者である。どうせ、自分が止めたとしても彼は行くだろう。

石田の答えを聞き、卯ノ花は少しだけ表情を穏やかにする。そして、黒腔を開くための巨大な装置を弄っているマユリに顔を向ける。「涅隊長。先に、レプリカの方に繋げて頂き、その後本物の空座町に繋ぐことをお願いしてもよろしいでしょうか？」

「フン……その程度、造作もない事だが、一度に開ける道は一つだけだよ。私は、先に向かった者達がどの程度でレプリカの方に着くのか解らんヨ？万が一、まだ着いていないのにも拘わらず私が、うっかり」と黒腔を閉じてしまったのなら、そのままずっと閉じ込められることになるが……それでも構わないのかネ？」

「心配なさらずに……私は涅隊長を信頼していますので、涅隊長がどの程度で我々が現世に着くか予測するなど、容易であると考えています。適当に黒腔を閉じて、戦力を無駄にするとすれば、浦原喜助に

笑われてしまうでしょう」

卯ノ花の言葉に、マユリは装置を調整しながら少しの間黙る。そして、卯ノ花に背を向けたまま、漸く口を開く。

「フン……よく考えて喋る事だネ……まあ、そこに居る人間共を本物の方に送るのがいくら遅れようが、余り影響がない事を考慮して、余裕を持って黒腔を開けておいてあげるヨ」

「感謝致しますわ、涅隊長」

マユリの言葉に対し卯ノ花は柔らかな笑みを浮かべるが、肝心のマユリは背を向けたままであるので、その表情を見ることは叶わない。そうしてから、卯ノ花は自分達に近付いてくる霊圧を感じ取るようになる。向かって来る霊圧の中で、この決戦において必要不可欠になる戦力は二つ。一人は、『浄天眼』を有し藍染の『鏡花水月』の五感の支配から、視覚だけ逃れる事の出来る死神・天宮城日向。そしてもう一人が、数か月前に死神になったばかりの人間であるが、既に正解を有し、その実力は隊長格と比肩するイレギュラー・黒崎一護。この二人は、この決戦において『鍵』となる者達である。

この二人が着いた時点で、卯ノ花はレプリカの空座町に向かおうと画策する。

「……………勇音。山田七席。貴方達は虚園に残って、未だ戦闘を続けている更木隊長などの補佐をお願いします」

「は、はいー」

剣八の霊圧は、だいぶ前から感じ取れており、かなり巨大な霊圧の者と対峙していることが解る。剣八の心配など、『猫に小判』や『馬に念仏』のように無意味なことかもしれないが、ああいった性分である以上、ボロボロになるまで戦いに興じることであることは、卯ノ花は知っている。そして間違つて失血死でもしないように、卯ノ花は勇音達に虚園に残って治療を任せた。

そして、卯ノ花は彼らが来ることを待つ。

待つこと数分。三つの霊圧が凄まじい速度で、卯ノ花達の居る場所へと到達してきた。

「……………」

「つと……着きました、卯ノ花隊長」

「黒腔が通じてるって本当か!?!」

最初に白哉。次に日向。そして最後に一護である。遅れて近付いてきている霊圧も幾つかあるが、一刻も争う次第なので彼等はやむを得ず無視することにする。白哉は、ゾマリや自我を失った一護との戦闘でかなり負傷していたが、井上に治療してもらったので、現在はほぼ全快しているといっても過言ではない。そこには、先程虚夜宮に響き渡った鐘の音も関係している。一護も、その鐘の音のお蔭で霊圧が幾分が回復し、死覇装もある程度戻ってきている。

そんな三人の顔を一瞥した後、卯ノ花は本題に入る。

「……………一通り揃った様なので、簡潔にお話させていただきます。涅槃隊長、準備は大丈夫ですね?」

「勿論だヨ。そいつらが遅かったからネ」

そう言ってマユリは装置の一部である円柱の上に立つ。そして反対側には、同じような円柱に立っているネムの姿がある。そして二人の頭上に線が奔っていき、それらが繋がる。すると、空間が裂け始めて次の瞬間には、大きな裂け目が宙に存在していた。

「この通り、黒腔の準備は完了しています。そして決戦の地に向かうのは私、朽木隊長、阿散井副隊長、天宮城三席、そして黒崎さんです」

卯ノ花の言葉に対し、四人は無言で頷く。因みに恋次は、大方の治療が終わった直後から、卯ノ花の隣に立って準備運動をしていた。そんな恋次の隣に、三人はやって来た。無言で頷いた彼等を見て、卯ノ花は早速黒腔に入ろうと体を裂け目の方に向ける。

緊迫したような空気が、辺りに張り詰める。

そんな中、恋次が日向に向かって言葉を発する。

「おい、日向。ルキアはどうしたんだよ？」

「今、井上とかと一緒にこっちに向かって来てる」

「……………何か、言っちゃったか？」

「いや……………言いたいことなら、終わってから話すつもりだ」

「…そうかよ。ならいいぜ」

二人の会話が終わったのを感じ取り、卯ノ花はバツと黒腔の中に入っていく。そして白哉が次に入り、次に一護と日向と恋次が三人同時に入っていった。

——後ろは、振り向かない。

(必ず、帰って来るからよ)

黒腔の外から感じる霊圧に向かって、日向は心の中でそう呟いた。『天挺空羅』で連絡が届いた瞬間に、三人は全速力でこの場所に向かってきた。そのタイミングが、ちょうど日向が井上が囚われている部屋に着いた瞬間であったので、先に部屋に到着していた者とはロクに会話することもなかった。

——気の利く男だったら、去り際に何か言ってやれたのか。

そんなことを思ったが、そんなのは柄ではない。だから、自分の考えている事は自分なりに伝えようと思った。その為には、この戦いに勝つ必要がある。

「……………一護、恋次」

「ん？」

「ああ？どうした？」

日向の声に、一護と恋次が反応する。

「……………絶対勝つぞ」

「つ……………おうよ！」

「たりめえだ！自分の町は、自分で護ってみせるぜ！」

日向の言葉にそれぞれ返答する二人に、日向はフツと笑みを零す。根拠はないが、何故か負ける気がしなくなってきた。思い込みと言われればそうかもしれないが、そんな安い言葉では表現できない確信があった。

決意を胸に、彼らは黒い空間を突き進んでいく。
再び、光に相見えるために。

番外編 Part 3
騎士物語 壺

我が剣に

真実是在る

これは、ある破面アランカルの昔話である。

暗い夜が永遠と空を支配する、空虚の世界。大地は砂と化し、一度風が吹けば地形が変わってゆき、一定の姿をそこに留めることは無い。木はあれども、それには青々と葉が生い茂っている訳でもなく、枯れ木のような佇まいで、砂漠の上に刺さるように生えていた。

荒野という言葉が似合っている世界であるが、一つだけしっかりと土台の基礎が造られている場所が存在する。

名を、『虚夜宮ラス・ノーチェス』。

整備された道の先には階段があり、そこには玉座が堂々と置かれていた。そしてその玉座には、一体の虚が座っていた。髑髏の頭部に冠を被り、身体には黒いローブを身に纏っていた。彼こそ、この虚夜宮における王・『バラガン・ルイゼンバーン』である。彼の傍には、人型の従者のような虚が一体居り、手には水差しを持っている。そして従者は、彼の近くに置かれているグラスに水を入れようとするが、彼が無言で骨しかない手の平を見せたことにより、従者の動きは止ま

る。

そんな動作をしていた彼の視線は、ある方向を一点に見つめていた。

「ふむ……………」

彼の視線の先では、闘技場のような台座が置かれており、その上で現在彼の配下の虚たちが戦っていた。見た目はコロツセオのような闘技場を彷彿とさせる場所である。そこでは、一体の人型の虚が数多くの巨大な虚を素手で倒していた。素手と言っても、人型の虚は鋭い爪を有しており、それで次々と迫りくる虚たちを斬り殺していた。

鉄仮面を彷彿させる仮面。そして騎士を思わせる鎧。所謂、『騎士』という言葉が似合う虚。全身黒づくめであり、それも考慮するならば『黒騎士』と言ったところである。

「……………なんじゃ、もう終わりか」

しばらく見ていると、黒騎士のような虚に襲いかかる虚が居なくなった。それを見てバラガンは、つまらなさそうに呟いた。そしてバラガンの下に、先程の黒騎士が一瞬で迫りより、玉座の横に直立した。それを確認して、バラガンは玉座から立ち上がる。それを見ていた彼の部下である虚たちは、一斉に跪いた。そして跪いていないのは、バラガンとその竜騎士だけであった。

「今回の『略奪戦』も、現刃エスパーダであるレイチエルの勝利という訳で、そのまま続投という形になる」

「有難きお言葉」

「思ってもない事を言うもんじゃないわい」

レイチエルと呼ばれた虚は、バラガンの言葉に御礼を言いながら腰を折り曲げたが、それを見てバラガンは鼻で笑った。バラガンの言う『刃』エスパーダとは、彼の配下の虚の中で彼の側近となるのにふさわしい虚一体に授けた称号。バラガンという虚園の王の傍に立てるといふ光栄な立場。彼を盲信する者達がほとんどの中で、その刃に選ばれたのは彼——ヴァストローデレイチエル・セレーナという虚であった。彼は、バラガンと同じく最上級大虚と言われる存在であり、配下の大半を占める中級大虚や最下級大虚とは次元の違う強さを有している。

だが、彼が他の者達と決定的に違うことがあった。

それは、王であるバラガンに忠誠を誓っていないということにある。他の者達からすれば、喉から手が出るほど欲する立ち位置が、そんな忠誠を誓っていない者に立たれていい迷惑であり、邪魔でしかない存在であった。そんな配下達の為に設置しているのが、『略奪戦』である。これは、現刃であるレイチエルを殺すことが出来れば、問答無用でその者を刃にするというものであった。

ルールは単純。レイチエルを殺せばいい。人数も、方法も関係ない。制限時間も挑む者が居なくなるまでというものであり、他の者達からすれば破格の条件であった。だがそんな条件下であっても、誰もレイチエルに敵う事は出来なかった。

「まったく……腑抜けしかおらんようじゃの……」

レイチエルは、バラガンの配下に最近入ったばかりの新参者である。その経緯は、バラガンが暇つぶしに新たな配下を増やそうとし、その中で部下が連れてきた者の一人であった。彼以外にも、何体かの虚がバラガンの下に連れてこられたが、何体かはバラガンに反旗を翻して立ち向かったり、帰ろうとしたが、そのまま配下の者達に蹂躪されていった。だが唯一、ハリベルという最上級大虚だけは連れの中級大虚と共に無傷で帰っていた。

そしてレイチエルについては、特に反抗する訳でもなく、ある条件を提示して配下に入ることを許諾した。

『俺はお前に忠誠を誓うことは絶対に無い。それでもいいのなら、俺はお前の配下に入ろう』

忠誠を誓わずして配下に入るということは、自分が反逆を起こすとも言わんばかりの言いようである。現世において、明確な主従関係を持たぬ騎士のことを『黒騎士』と呼ぶ地域がある。成程、この虚の言う事と、その身に黒き鎧を纏いながら戦う姿は確かに『黒騎士』に相応しい。バラガンはそれを面白がって彼を配下にすることに決めた。そんなやり取りがあつて早数年。虚園の絶対王者であるバラガン。その横に常に居る刃・レイチエル。最早その光景は形式美といつても過言ではなかった。だがそれを許す者はいない。いずれあの虚

をズタズタに引き裂こうと画策するが、未だそれが叶っていないのが現状である。

反逆の可能性を含む強き家臣が居るといふのは、中々の退屈しのみであった。だがそれも数年、変わらざるの位置に居るといふのは些か面白くない。そして余りにも、バラガンの配下が「刃」の座を狙ってみすみす返り討ちになっていることから、少し配下が減ってきている。

王とは、民たちが居てこそその「王」である。ここで言う民とは『彼に従う者達』、という意味である。民無き王など、それは意味の無い存在である。バラガンはそう考えていた。

「フン……………いつまでもお前が『刃』エスパーダとして儂の横に立つのも飽きてきたな。のう、レイチエル？」

「……………我儘な王だ。俺にどうしろと？」

「フハハハ！なあに……………儂の配下にふさわしいと思う虚を何体か連れてくれば良い……………最下級でも中級でも最上級でも何でも良い……………強いて言えば、強き虚じゃ」

「……………そうか。なら、暫く留守にさせてもらおう」「ふん……………楽しみにしておるぞ」

バラガンの声を聞いて、レイチエルは凄まじい跳躍で跳んで行った。跳んで行った際の衝撃が、辺りに砂塵を巻き起こす。それだけレイチエルの引き起こす風が強かったということになるろう。

跳んでいくレイチエルを、バラガンは髑髏の頭部の存在しない瞳でじっと眺めていた。

虚夜宮を一度出れば、辺りは砂漠しか広がっていない。強い虚を連れてくるように頼まれたレイチエルは、足を動かしながら虚園の下を凄まじい速度で駆けていた。一度足を動かすと、下に広がっている砂漠の砂が巻き上がる。遠くから見れば、爆発でも起こったように見え

る光景を、レイチエルは移動するだけで作り出していた。

バラガンは、階級は問わないような口ぶりであったが、『強き虚』と念押ししていたため、最下級で満足しないことは目に見えていた。ならそこから導き出される答えは、中級大虚の中でも上位の虚か、最上級大虚ということになるだろう。前者はともかく、後者を調達するとはかなり難しいことである。現在、バラガンの勢力の中で最上級である虚は、バラガン本人とレイチエルしかいない。だからこそ、二人の立ち位置が絶対的になつていくということもある。

そんな二人のような最上級大虚は、この虚園においても数体しかないと言われている。そんなものを見つけようとすれば、かなりの時間を要する。さらに素直にレイチエルに付いていくようには思えない。となると、必然的に前者の中級大虚を狙っていくことになる。中級大虚はよく『コロニー』と呼ばれる場所で、集団で過ごしていることがある。てっとり早く集めるならば、そういったコロニーに行く方がよいとレイチエルは考えた。

「さつさと見つかればいいが……ん？」

豪速で移動するレイチエルの目に、何体かの虚が目に入る。四体居る。鹿のような大虚、獅子のような大虚、大蛇のような大虚、そして戦闘には人型の大虚が居た。レイチエルが特に目を引いたのは、先頭を歩く人型の大虚だった。

——運がいい。

先程まで、会うのは至難の業だと考えていた最上級大虚が、こうもすんなりと見つけることが出来るとは。

見つけたからには、やることは一つである。

あの虚たちを勧誘するために、レイチエルは虚たちの前に降り立った。その際に、周りに凄まじい砂塵が巻き起こる。それを見て、虚たちはレイチエルを警戒した。

「な……何だい、コイツは……!?」

「人型……まさか!」

「ハリベル様と同じ……!」

レイチエルを見て、人型の後ろに居る獣型の虚たちが騒がしくな

る。そんな虚たちの前に、人型の虚が立つ。右手には大剣を携えている。顔の仮面が半分無くなっており、本来の肌の色が見えていた。褐色の艶のある肌。髪は金髪。そして豊かに実っている胸から、女性型の虚であると考える。

レイチエルは、獣型の虚の話に聞き耳を立て、この人型の虚が『ハリベル』と言うのであろうと予想した。そしてハリベルが、先行するようにレイチエルに近付く。

「…………私達に何の用だ？」

「俺の名はレイチエル・セレーナだ。まず、名前を訊かせてほしい」

「…………ハリベル。ティア・ハリベルだ」

「そうか。なら、単刀直入に言う。バラガンという虚に頼まれて俺は強い虚を探し回っている。お前は俺やバラガンと同じ最上級大虚だろう。是非、俺と共に来て欲しい」

その言葉に、ハリベルは眉間に皺を寄せる。

「…………バラガンの使いか。私は以前、バラガンに勧誘されたが断つたはずだ」

「何？そうなのか…………」

そこでレイチエルは困ったように顎に手を当てる。その挙動から、ハリベルは本当に自分達がバラガンに勧誘されていることを知らなかったであろう。恐らく、自分が勧誘されたよりも後に、バラガンの配下に入った者だろう。仮に、自分達が勧誘されたときに最上級大虚が居たら、自分が嫌でも覚えているだろうとハリベルは考えた。

「…………断つたなら仕方がない。他を当たろう。だが、次に会った時もお前を勧誘する。そのつもりで居てくれ」

「…………御免だな」

今回は、衝突も無く話が終わったようだが、ハリベルはレイチエルがその言葉を発するまで、かなり精神を削られていた。以前、バラガンの勧誘を断った際に、シユモクザメのような中級大虚が襲いかかってきた。その際は一刀の下、その大虚の頭を斬り裂いて退かせたが、もしこのレイチエルという虚が自分達に無理やりにも付いてこさせようと仕掛けてきたら、ただで済まないことは理解出来ていた。

こんな緊張感、出来れば二度と味わいたくない。
そう思っていると、レイチエルは早速別の虚を探すために飛び立っていった。

ハリベルに会ってから、レイチエルは様々な場所を飛び回って虚を探し回った。

そこで、レイチエルは多くの虚を勧誘することが出来た。

一人目は、ジオルヴェガと言う虎のような大虚。

二人目は、ニルゲ・パルドウツクと言う像のような大虚。

三人目は、アビラマ・レッダーと言う鷲のような大虚。

四人目は、シャルロット・クールホーンと言う薔薇を身に纏っている大虚。

五人目は、フィンドル・キャリアスと言う蟹のような大虚。

最後に、チーノン・ポウと言う鯨のような大虚。

六人も居れば十分であろうと、レイチエルは彼らを連れて虚夜宮に帰ることにした。因みに、血気盛んな者も多い彼等をどうやって連れて来たのかと言うと、レイチエルの勧誘に耳を貸さずに襲いかかってきたのを返り討ちにする所から、それは始まる。圧倒的な力で叩きのめした後、自分はいくまで配下であると言う。そこで彼らは瞠目し、驚愕する。そして自分の上に立つ者が、この虚園の王を自負する者だと言う。最後に、自分はその王の「刃」である存在であり、王が新たな刃に相応しい者を探しており、自分はそれにふさわしいと思う者を選定しにあちこちを回っていると言う。

全員が、最後の言葉を聞き、自分がその「刃」になれる可能性がある大虚だと自覚する。あくまでそれは思い込みであるが、レイチエルは連れてくるのが簡単になるのであれば、それで良いと考えてい

た。だが、全員がこんな強者が配下としている「王」に感心や畏怖を抱くのが当然の反応であった。そして、そんな「王」に会ってみたいと思った彼らは、素直にレイチエルに付いてきた。

そしてレイチエルは、数か月ぶりに虚夜宮に帰る事にした。行きのように全力で帰る訳にはいかなないので、帰路は徒歩であった。

そして――。

「……………随分、整ったな」

目の前に広がるのは、以前の虚夜宮ではなかった。

バラガンが言っていた事を、レイチエルは思い出す。

『この虚園ウエコムンドの空の全てが、我が城の屋根』

そう言っていたのにも拘わらず、目の前にはしっかりと屋根のある巨大な建物が出来ていた。レイチエルが、以前との違いに呆気にとられている間にも、連れてきた六人はこの虚園にしっかりとした建物が存在していることに驚愕していた。

立ち止まっても仕方ないので、レイチエルはとりあえず入口を探してみることにした。だが、レイチエルが動こうとした瞬間に、何者かが現れた。眼鏡を掛けた、明らかに虚ではない者。黒い着物の上に白い羽織を着ている。

「ようこそ、虚夜宮ラス・ノイチエスへ……………」

彼、藍染惣右介はそう言った。

騎士物語 弐

柄を握る理由が
無くなつた

昔々、あるお姫様と騎士が居ました。

騎士はとても強く、一騎当千。どんな敵でも、剣の一振りです倒したといひます。そんな騎士に、お姫様はあろうことか恋をしてしまいました。

そして戦争が起りました。

お姫様は、戦場に行く騎士に、愛の告白をしました。

ですが騎士はとても生真面目で、それが許されないことであると知っており、お姫様の好意を断ち切りました。そして騎士は、忠誠を尽くす王様やお姫様の為に、戦場に向かいました。

騎士は戦いました。戦争が終わるまで、ずっと剣を振っていました。

戦争が終わりました。騎士の勢力が勝ちました。騎士はすぐに、お姫様の下に帰りました。

—— お姫様は、病気で亡くなっていました。

騎士は泣きました。何日も、何週間も、何か月も。

こんなことになるのであれば、例え許されざる恋でも、受け止めるべきだったと、騎士は思いました。

騎士は、王様に仕える事を止め、『黒騎士』として各地を放浪しました。

騎士は、強くなることを決めたのです。あの世では、絶対にお姫様を護ると決めて。

そんな騎士の魂は、死して尚、強さを求めて旅をしているといひます。

——御終い。

虚夜宮のトップはバラガンではなく、藍染惣右介という死神に変わった。あのバラガンが、何者かの下に就くということには驚いたレイチエルであったが、あの瞳を見れば決して納得したものではなく、いつか復讐しようとして画策しているものであるということには、すぐに気が付いた。

どうやら藍染は、強い虚を求めてここにやって来たらしい。そして『崩玉』なる物を使って、虚を高めへと昇らせることが出来るらしい。

——虚の死神化。

それが藍染の言う方法。

レイチエルも、藍染の下に来るように言われた。それに対しレイチエルは、特に反抗することなくこう言った。

『俺はお前に忠誠を誓うことは絶対に無い。それでもいいのなら、俺はお前の配下に入ろう』

バラガンに勧誘された時と同じ言葉。それを藍染は、特に不快な顔をする訳でもなく了承した。だが、近くに居た東仙という死神は、明らかにレイチエルに敵意を持った瞳を向けていた。

そして時が立ち、藍染は崩玉を使ってレイチエルを『破面』という存在にした。最上級大虚であったレイチエルは、完全な人型となり、他の破面達と比べると完成度もかなり高いものに仕上がった。

そして藍染によって破面化された者達の中から、七人の強者が選び出されることになった。その者達は、^{エスパーダ}“刃”の称号が与えられ、数ある破面の中でも別格の存在として扱われることになった。

そしてレイチエルが与えられた称号は、『第^{セクンダ・エスパーダ}2刃』。それに対し、

バラガンは『第1刃』という立場であり、他の二人を知っている者達からすれば、当然のような順列であった。

——レイチエルの司る死の形は、『虚飾』。

この際、七人の『刃』に与えられたのは数字の他に、七つの大罪に沿った『死の形』であった。他の刃達は、『傲慢』、『暴食』、『色欲』、『強欲』、『憤怒』、『怠惰』といった死の形を与えられていた。

『虚飾』とは、内容が伴わないのに外見だけを飾る、うわべの体裁のことである。バラガンや藍染に対し、体裁だけ従っている様にしているレイチエルには、特徴を捉えた死の形と言えよう。

『虚飾』を司るレイチエルは、暫くの間、第2刃として君臨していた。

「俺はどうも、お使いを頼まれる性分なようだな」

レイチエルは、虚園の空の下に広がる砂漠の上を響転で駆けながら、そう呟いた。現在レイチエルが動いている理由は一つ。藍染に、大虚の調達を頼まれたからである。破面になっても、戦闘要員として戦えるのは大虚以上である。

さらに大虚であっても、階級によって破面化した際に人型になれるかどうかの確立が変わってくるという問題がある。最下級であると虚の姿に近くなり、最上級であればほぼ百パーセントの確立で人型になれる。それはバラガンとアールロニーロという、二人の刃を比べてみるとよく分かる。バラガンは最上級大虚であったため、完全な人型となったが、アールロニーロは最下級大虚であったため、虚に近い形をしていると言われている。何故ここで『言われている』と言っているのは、アールロニーロが虚の名残の仮面ではない仮面で顔を隠している為、本当の顔を見た者は余り存在しないからである。

つまり何を言いたいのかというと、レイチエルは今、戦力になりそ

うな大虚を探しているのである。

そんな中で、レイチエルは一つだけ心当たりがあった。

「ティア・ハリベル……………」

以前会ったことのある、最上級大虚。彼女には、三体の中級大虚も付き従っていた。上手く丸め込めれば、一気に四体の戦力を得られることになる。最上級大虚に加えて中級大虚を三体連れてくる事が出来れば、藍染も文句は言わないだろう。そんなことを考えながら、レイチエルはあるものを辿っていた。

破面のものと思しき足跡と霊圧。今回の大虚の調達は自分に一任されている筈なのに、一体誰が。恐らく、何者かが独断行動で何かをしているのであろう。

破面となり新たな力を入れた者達は、こぞつてその力を試そうと戦いを挑もうとする。この虚も、破面になったことにより自分の力に酔い痴れ、勝手に出てきたのであろう。という事は、この破面の後を辿れば、自然と虚の下へとたどり着くだろうレイチエルは気楽に考えた。それこそ、ハリベル程でないにしても、ある程度の大虚は見つかるだろう。

だが、足跡を辿られている方が、第2刃に凄まじい速度で追われていると知ったら、どう思うであろうか。

それはともかく、レイチエルが勝手に動いている破面に追いつき始めているのは事実であった。

「……………見えてきたな」

かなり遠目であるが、レイチエルは爆発が起こっているのが目に入った。それを見てレイチエルは、当たりだと考えた。

そして、遠目で見ていた景色の先に、レイチエルは一瞬で辿り着いた。一瞬で現れたレイチエルに対し、先にこの場についていた破面は驚いた顔を見せる。その破面の足の下には、とある大虚が踏みつけられていた。その大虚を見て、レイチエルは少し驚きながらも、何か感慨深いものを感じた。

「ちようど探していたところだ、ティア・ハリベル」

だがハリベルは、踏みつけられている為口を開くことが出来ない。

その代わりに、シユモクザメのような破面が、レイチエルに睨みを効かせる。

「っ……………第2……………何でてめえが……………!!」

「藍染惣右介に大虚の調達をしてくるように頼まれてな。中級大虚が三体に、最上級大虚が一体……………大量じゃあないか」

そうやってレイチエルは周りに倒れている三体の虚たちを一瞥する。そのどれも、一度見たことのある虚。

だがそんなことを言っているレイチエルに対し、破面は苛立たしそうに口を開く。

「大量だと……………!?こいつらは全員俺が嬲り殺してやるんだよ!!てめえの出る幕じゃあねえ!!」

「そうか……………残念だ」

そう言った直後、レイチエルの姿は破面のすぐ後ろにあつた。その腕の中には、ハリベルがお姫様抱つこのような形で丁寧に抱きかかえられていた。

破面は自分の反応出来ない速度の響転で出し抜かれたことに気づき、憤慨する。破面は、怒りのまま手に霊圧の剣を出してレイチエルに襲いかかろうとするが、直後バランスを崩してその場に倒れこむ。

何事かと思い、自分の下半身の方に目を向けてみると、右足の膝から下が無くなっていることに気付いた。そして辺りを見渡してみると、自分の足が転がっているのが視界に入った。

「っ、てめえええええ!!」

破面は怒りのままに、地面に倒れこんでいる状態で虚閃をレイチエルに放つ。かなりの近距離で放つ虚閃であつたため、破面は確実にレイチエルを捉えることが出来たと確信する。

だが、その虚閃はレイチエルに命中する直前に、何かによって弾かれる。破面が驚く間に、虚閃はそのまま宙に霧散していく。

「な……………何故だ……………!?今、確実に捉えた筈……………!」

「解らないか?お前程度の霊圧じゃ、〃刃〃の俺には傷一つ付けることが出来ないという事が」

そうやってレイチエルは、ハリベルをお姫様抱つこから左腕だけで

支える様な抱き方に変える。そして、腰に納めていた斬魄刀を抜いて破面にゆつくりと近づいていく。それを目の当たりにして、破面の顔はほとんど青ざめていく。

「ま、待ってくれ!!俺が悪かった!!俺も虚を運ぶのを手伝う!!だから……—!」

破面が必死に命乞いをしていたが、最後まで言い切る前にレイチエルは破面の首を斬り落とした。そして、剣を一振りして血を払った後に、鞘に納める。

そして首が無くなった破面を見下ろす。

「………済まないな。アールローロに、食事を持って帰るようにと頼まれていたんだ」

あの後、レイチエルはハリベル達を一人で連れて帰った。そして四体を、藍染に引き渡した。最上級大虚が居るという事に、藍染は満足そうな顔を浮かべていた。因みに、レイチエルが止めを差した破面は、ハリベル達をここに連れて来る前にアールローロに引き渡した。その際にアールローロが、仮面の下で満悦な表情を浮かべていたのはまた別の話である。

そしてレイチエルは今、藍染の前に跪いている。これもあくまで形式的なものである。そんなレイチエルに、藍染はいつも通りの柔和な笑みを浮かべながら口を開く。

「今回はご苦労だった、レイチエル。新たな最上級大虚が私達の勢力に入るといふ事は、とても喜ばしいことだよ」
「任務ですので、その役を果たしただけです」

両者は、淡々と会話を進めていく。それは両者が、相手の発する言葉に感情というものが籠っていないということを理解しているからである。『虚飾』を司るレイチエルにしてみれば、そういった態度をと

ることはいつもの事である。

そんなレイチエルに対し、藍染が笑みを浮かべながら口を開く。

「レイチエル。君に頼みたいことがあるんだが、いいかな？」

「内容にもよりますが、出来る限りの事は」

「話が早くて助かるよ。君に、暫くの間ハリベル達を預かってもらいたい。彼女達は、バラガンとの間に軋轢があるようですね……そこで、バラガンの部下でもあった君に両者の確執を取り除けるように動いてくれないか？」

随分、無理難題を押し付けてくれる。レイチエルは心の中で、藍染に対して悪態をついた。バラガンの司る死の形は『傲慢』。そして二つ名は『大帝』。絶対に退かぬ王である。故に、バラガンは自分から引き下がる様な真似は絶対にしない。そして、ハリベル達に関しては、一応であるがバラガンの部下であった者が、かなりいたぶつてくれたため、レイチエルがバラガンの下に来た時よりも確実に確執は大きくなっている。そして、レイチエルは一応バラガンと対等に取り合うことのできる数少ない破面であるが、そこに友好的な関係など無い。

虚夜宮に来て、初めて悩みが出来た気がする。

そんなレイチエルを余所に、藍染はどんどん話を進めていく。

「彼女達は、既に君の宮に向かっている筈だ。仲良くやってくれ」

「……………はい」

行動の速い事だ。レイチエルがどう言っても、絶対に引き受けさせるように考えていたに違い無い程に。レイチエルは一礼して、澁々といった顔で藍染の居る部屋を後にした。

「……………」

「……………」

部屋の中央にテーブルが置かれている。そこで、二人の人物が対面

に座りながら黙って本を読んでいる。テーブルには、きちんとティーカップが二つ並んでおり、座っている二人はちよくちよくそのティーカップの中の紅茶に口を付けていた。

それを、遠目で三体の虚が眺めていた。

「オイ……………何で、ハリベル様があんな野郎と一緒に本なんか読んでやがんだよ……………」

「(知らないよ……………アタシに訊くんじやないよ)」

「(あら、貴方達はハリベル様が読書に勤しんでいるというのに、静かに出来ないのですか？まったく……………これだからお猿さんたちは……………」

「(スンスン、てめえ!)」

スンスンという大蛇のような虚の言葉に、鹿のような虚のアパッチと獅子のような虚のミラ・ローズが声量を抑えながら声を荒げる。ひそひそとしたやり取りであったが、静寂が支配しているこの部屋では、かなり響き渡る。だが、それに対して椅子に座って読書しているレイチエルとハリベルは特に気にする様子もなく、読書を続けた。

美男美女が対面で座っている。その光景は、傍から見れば綺麗に映えているものであるが、ハリベルに忠誠を誓っている三人からすれば嫉妬が天元突破している。

そんな三人を余所に、二人は順調にページを読み進めていく。

「……………レイチエル・セレーナだったな」

「ああ」

ハリベルが、本に視線を向けたままレイチエルに話しかける。それに対してレイチエルも、視線は本の文字に向けたまま返答する。

「……………有難う」

「……………何がだ？」

「あの破面から助けてもらった事だ」

「……………打算に打算が重なったまでだ」

あくまであれは任務。そう言っているレイチエルに対し、ハリベルは読んでいた本を閉じてからテーブルの上に置き、椅子から立ち上が

る。そしてハリベルは、そのまま腰を折り曲げた。

その光景に、部屋の端で見ていた三体は目を見開く。自分達の主人が、自分達をいたぶった者と同じ勢力に入っていた者に向かって丁寧な礼をしているのだ。それが三体にとっては、複雑であった。本心で言ってしまうえば、今すぐにもハリベルの行動を止めたい。だが、ハリベルがそういった行動をしているのにはそれなりの理由があり、それを無下にするような行動はとれない。故に、三体はただ黙って見ていることしか出来なかった。

「……………顔を上げろ、ティア」

「……………」

レイチエルの言葉に、ハリベルは下げていた頭を上げた。そしてレイチエルが、ハリベルに椅子に座るようにジェスチャーで伝えたため、ハリベルは素直に椅子に座る。

「……………これからの事について少し話す。俺は藍染惣右介に、お前達の面倒を見るように言われている。具体的には、お前達が破面化するまでだな。それまでは面倒は見えてやるから、余り問題になるような行動は起こすな。解ったな？」

レイチエルの言葉に、ハリベルの瞳が少し揺れる。顔の下半分は仮面で隠れているが、今の挙動が負の感情によるものではないとレイチエルは感じた。レイチエル自身も、マフラーをしている為、顔の下半分は見えない。

表情の読み取り辛い二人が、少しの間黙って見つめ合う。

「……………何だ？」

それに耐えきれなくなったのはレイチエルの方であった。何か言いたいことでもあるのかと思ひ、レイチエルはハリベルに訊く。それに対しハリベルは、穏やかな視線をレイチエルに投げかける。

「……………いや。『ティア』と呼ばれるのも、悪い気はしないと思つてな」
「……………そうか」

そう言つて二人は、再び読書を開始する。その一連の流れを見ていた三体は、只黙って見ている事しか出来なかった。

騎士物語 参

十個の戒め

それが我が源

レイチエルが刃になって、幾らかの時が立った。破面の人数が増え、それに伴って実力者も増えたため、〃刃〃は〃十刃〃となり、七人から十人へと変わった。

そして、十刃の面々も幾度となく入れ替わった。そうした中でも、レイチエルは第2十刃という立場で居た。変わらないトップ2。初期の刃の面々で現在の十刃に居るのは、バラガン、レイチエル、アローニーロ、ヤミーだけであった。ザエルアポロも初期も刃のメンバーであったが、彼は十刃落ちとして今は存在している。

「…………ネリエル・トウ・オーデルシュヴァンクの失踪か…………」

「ああ、物騒だな」

現在、第2の宮ではある人物達が話しをしていた。先ずは、この宮の主であるレイチエル。そして、最近破面化して未だに番号を貰っていないハリベルである。二人はいつも通りにテーブルの周りの椅子に座り、読書をしている。

そしてレイチエルは、今読んでいた本を閉じてハリベルに視線を向ける。

「…………恐らく、次の第3十刃はお前が選ばれる。そうなったら、三人を連れてここから出て行けばいい」

「……………そうか」

レイチエルの言う三人とは、ハリベルよりも先に破面化していたアパッチ、ミラ・ローズ、ンスンの事である。それを聞いたハリベルは、どこか寂しそうな顔をする。

「この雰囲気は嫌いじゃなかったんだがな」

「……………本が読みたいならいつでも来ればいい。紅茶も出してやる」
「……………済まない」

そう言うハリベルの瞳を、レイチエルはじっと見つめる。
何かに似ている。何に似ているのかは解らない。だが、確かに何かに似ている。そこでレイチエルは何となくハリベルの全体像を見回してみる。綺麗な金髪に、エメラルドのような色彩の瞳。そして小麦色の肌。ハリベルは破面化してから、かなり特徴的な死覇装を身に纏っていた。口元は隠れているが、乳房の下から腰のあたりまで大胆に露出しているというものである。

一通り眺めてみて、何が似ているのかをレイチエルは思い出した。

「……………目……………」

「……………？目がどうした？」

「……………いや、綺麗な目だ」

ハリベルに聞こえていたらしく、レイチエルは咄嗟に答える。咄嗟に言ったから感情が籠っていないと、レイチエルは自分で思っていたが、案外そうでもなかった。自分は今確かに、ハリベルの目を美しいと思った。まるで、久し振りに故郷に帰った時に、青々とした自然を目の当たりにした時のような感覚。

瞳を褒められたハリベルは、満更でもないような表情を浮かべる。

「ふっ……………お前に褒められるとは思ってもいなかったな」

「……………聞き流してくれ」

「そうか」

自分でも何故口走ってしまったのか解らずに、レイチエルは再び本を開いて読み始める。

その後藍染の口から、新たな第3十刃が発表された。レイチエルの予想通りに、その座に就いたのはハリベルであった。だが、そこから

予想だにしない変動があつた。

『第1十刃には、これからコヨーテ・スタークという破面に就いてもらう』
フリメーラ・エスパーダ

第1十刃の入れ替え。それはバラガンが第1十刃でなくなっていることを示唆しているのと同義であつた。 “大帝”である彼がそんなことを妥協するとは思えなかつたが、藍染がそう言うのであるからそれは真実であろう。だが、問題なのは第1十刃でなくなったバラガンがどの地位に就くかである。

考えられるのは二つ。

一つは、十刃落ちになるか。

もう一つは、第2十刃になるか。

答えは後者であつた。

「勿論レイチエル、君がバラガンと戦つてその地位を守るのもいいが、どうする?」

藍染の提案に対し、レイチエルは第2十刃を降りることを口にした。そうなれば、レイチエルは十刃落ちになるだろう。元々、地位にそこまで拘っていないレイチエルにしてみればどうでもいいことである。寧ろ、そちらの方が気楽であると考えた。

だが、そんなレイチエルの考えとは裏腹に、藍染はとあることを口にした。

「本来なら十刃フリバロン・エスパーダ落ちになるのが順当だが、それにすれば君は惜しい人材だ。だから、君にはある職に就いてもらいたい」

——その名は、 “帝守護刃”エスクード。

『帝を護る刃』とはよく言つたものだ。 “大帝”の側近であつたレイチエルには、ピツタリの称号であつただろう。これからは、藍染という “帝王”を護れということなのだろうか。レイチエルはそう思つた。

ともかくレイチエルは、十刃ではなくなつたが、それでも十刃に並ぶ地位には留まつたのである。

「フム……やはり紅茶はレモンティーに限る……そうは思わんかね？ 騎士^{カバリエロ}」

「……俺はストレートの方が好みだ。甘ったるいのは嫌いだな」

「^{カバリエロ}——！！騎士よ、君は紅茶というものを解っていない！！」

現在、レイチエルの目の前でレモンティーを飲みながらリアクションをしているのは、十刃落ちであるドルドーニ・アレツサンドロ・デル・ソカツチ才である。十刃時代から、よくレイチエルの宮に来ては紅茶を飲んでいた。その理由が、レイチエルの宮にいる女破面であったことは、レイチエルはよく知らない。だが、それでも交友関係を持つには至った。

そのため、彼が十刃落ちになっても定期的にお茶会をしていた。偶に、同じ十刃落ちであるチルツチやガンテンバインなども、ドルドーニに無理やり連れてこられて定期的にお茶会に参加している。

「うるっさいな……お茶位静かに飲みなさいよね」

「^{セニョリータ}淑女よ！！君に関してはさつきから、紅茶に一口も手を付けてはいないではないか！！クツキーばかりを食べて！！」

ドルドーニは、部屋の隅にあるソファの上でクツキーをバリボリと食べている女破面に向かって叫ぶ。彼女も十刃落ちであるアニーシャ・バレンタインである。咀嚼音から解る通り、クツキーのカスがポロポロと床に落ちており、それをもう一人の女破面がせっせと箒で掃いて掃除している。

「すみません、レイチエル様！お姉ちゃん、もうちよつと零さないように食べてよー」

「大丈夫よ。レイチエルつて、そういうのをあんまり気にしないから」

「……アニーシャ。お前は、『自粛』という言葉を知らないようだな」

レイチエルが腰に差している斬魄刀に手を掛け、チキつという音を立てる。すると、アニーシャが驚いた猫のように高く跳び上がり、落

ちてから床に散らばっているクッキーのカスを素手でかき集める。

それを見て、レイチエルはため息を吐いた。十刃落ちの中で、最もレイチエルの宮に居る時間が長いのは、このアニーシャである。彼女曰く、『お菓子が一杯ある』という理由で来ているらしいが、それはアニーシャだけのものではなく、他の客人用であることを彼女は知らない。

「お邪魔するぜ……………」

「オッス！レイチエル、お菓子ある!？」

騒がしいこの場に、新たに二人の人物が現れる。一人は気だるげに欠伸をする、中途半端なロングヘアの男破面。そしてもう一人は、若緑色の髪の元気の良さそうな少女の破面。

ブリメーラ・エスパーダ

第1十刃、コヨーテ・スターク。

アランカル・ブリメーラ

破面No.1、リリネット・ジンジャーバツク。

二人はどちらも『1』の番号を有してはいるが、十刃であるのはスタークであり、リリネットは従属官という立場である。そんな二人は、部屋の中央に置かれているテーブルの周りの椅子に座る。そしてスタークは自ら、ティーポッドを持ってカップに注いでいく。その間リリネットは、目当てである菓子を探してあちこちを見渡す。

「あ、アニーシャ!!何独り占めしてんだよ!」

「こういうのは年功序列よ。お・子・ちゃ・ま♪」

「お…………お子ちゃま…………ぐぬぬ…………!」

意地悪な笑みを見せながらアニーシャはクッキーを食べ進めていく。それを見てリリネットは悔しそうに拳を握る。いくら相手が十刃落ちであるといっても、実力は圧倒的に向こうの方が上なのである。と、言うよりもリリネットが破面に似つかわしくない程弱いだけである。

アニーシャが、リリネットに対しこれ見よがしにクッキーを口に頬張る。そんな光景を眺めていたレイチエルが、見かねて部屋の隅にあった戸棚から別の食べものを取り出す。

「リリネット。スコーンならあるぞ」

「え、ホント!？」

レイチエルが皿にスコーンを並べながらそう言ったのに対し、リリネットは先程の表情とは打って変わって目を輝かせてテーブルの方に飛んでいく。そして椅子に座り、間髪を入れずにスコーンに手を伸ばし、美味しそうに齧り付く。それを見ながら、レイチエルはリリネットのカップに、他の者達のように紅茶ではなく牛乳を注いでいく。元々はミルクティーを作る用の牛乳であるが、飲む分には問題のない質のものである。

リリネットは、レイチエルが注いでくれた牛乳にも口を付けながら、どんどん食べ進めていく。

「いつも悪いね」

「気にするな。コヨーテ。お前はレモンとミルク、どっちがいい？」

「いんや。御宅と同じでストレートでいいよ。甘いのを飲んだ後に寝たら、虫歯になっちまうからよ」

そう言つてスタークは、無糖の紅茶を飲む。それを見てレイチエルも紅茶に口を付ける。隣でドルドーニが、紅茶とはなんたるかを語っているが、二人は気にしない。傍から見れば、破面とは思えない程穏やかな景色が生まれている。

ここで何故、レイチエルとスタークが交友関係を持っているのかを説明しよう。スタークが第1十刃に就いたのと同時にリリネットも従属官となった。だが、その二人の背後にバラガンを蹴落としたというような悪評が立ち、二人はバラガンの配下の一部の者に付け狙われていた時期があった。そして狙われたのは、弱そうな、そして実質破面としては弱いリリネットであった。だが、リリネットが襲われそうになった所をレイチエルが偶然目撃し、その場を収めた。その後レイチエルは、バラガンにその事実を告げ、二人を付け狙う輩はいなくなった。

その為、リリネットは助けにくれたレイチエルに良い印象を持ち、よくレイチエルの宮にスタークと共に来るようになった。破面特有の殺伐とした雰囲気のない部屋であるため、二人は良い居心地を感じ、現在のようによく遊びに来るようになったのである。

「あ、スコーンいいな。アタシにも頂戴！」

「うっさい！ほれはあはひほは！」

アニーシヤがリリネットの食べるスコーンに手を伸ばすが、リリネットはそれを死守する。

そんな光景を、レイチエルとリリネットの保護者的立場であるスタークは穏やかな表情で眺めていた。

——破面になってから、穏やかな気持ちになれるようになった。

(こんな光景を、いつまでも眺められればいいのにな……………)

そう思いながら瞼を閉じたレイチエルだったが、瞼の裏の暗闇で、とある記憶がよみがえる。

——隊長！もうここは…………ぐあああ!!

——み、見逃してくれ…………俺には妻と子供が…………!

——騎士様…………私は、貴方の事を…………

「…………!!」

「……………?どうした、レイチエル」

「いや…………何でもない」

スタークの心配する言葉に、レイチエルは眉間を抑えながら返答する。だが、辛そうな目をするレイチエルに、リリネットが不安そうな顔をして近づいてくる。

「だ、大丈夫かよ…………?」

「……………ああ。もう大丈夫だ」

そう言ってレイチエルは、リリネットの頬に手を添える。そのまま優しく撫で、微笑みかける。そんなレイチエルに対し、リリネットは赤面する。

「な、何すんだよ!!急にそんな……………」

最後の方が小さくなるリリネットに対し、レイチエルは頬を撫でるのを止める。そしてその真紅の瞳を、スタークの方に向ける。レイチエルの真剣そのものの視線に、スタークの表情も険しくなる。

「……………コヨーテ」

「……………何だ?」

「……………俺は仲間の為であれば、幾らでも戦える。それは覚えておいてくれ」

「……………そうか」

そう言つて二人は、冷めかけている紅茶に口を付けた。

——騎士とは強くならねばならない。

——騎士とは勇気がなければならぬ。

——騎士とは高潔でなければならぬ。

——騎士とは寛大でなければならぬ。

——騎士とは信念がなければならぬ。

——騎士とは親切でなければならぬ。

——騎士とは崇高でなければならぬ。

——騎士とは信じる心がなければならぬ。

——騎士とは弱き者を護らなければならぬ。

——騎士とは忠誠心がなければならぬ。

——俺に無いのは、“忠誠心”。

所詮俺は、完全な騎士とはなれない。

だが俺は、剣をとろう。

新たに出来た、“仲間”の為に。

俺は『黒騎士』。

地上に未練を残し、強さを求める弱き者。

これは呪いだ。

俺は、大地に縛られている。

俺は、鎧に縛られている。

俺は、剣に縛られている。

だが進もう。

俺は、既に戦士だ。

『騎士』と為る為に、忠誠するに値する者を探そう。

俺はその旅の真つただ中なのだから。

俺は、『騎士』という骸を被った『悪霊』。

さあ、死神。

その刀で、俺の鎧を斬り裂いてみる。

その刀で、俺の剣を防いでみる。

その刀で、俺を殺してみせろ。

出来るのであればな。

第九章 When The Decisive Battle

恐怖

恐れを忘れぬよう

私は自らに

刃を立てる

流れる血が

肉が鋼を疎んでいる証拠

時は遡る。

「……………どうやら、間に合ったようじゃの」

総隊長は、目の前で黒腔の中から出て来た藍染に向かってそう言った。だがそれを聞いて藍染は、不敵な笑みを浮かべる。

藍染達は、現世の空座町で王鍵を創生するためにこの場にやって来た。その際に、四人の隊長を虚園に幽閉することが出来た。何故、そのような真似をしようと考えたのか。

それはつまり、残りの護廷十三隊の戦力が何らかの対抗策を準備し、こうして目の前に現れる事を予見していたからである。

「——間に合った？ 一体、何を以てその言葉を口にしてている？ そこにあるのが空座町でない事は解っている。だが、それを何の妨げにもなりはしないよ」

そう言つて藍染は、自分の後方に視線を向ける。まだ何もない、ただの空である。

「スターク。バラガン。ハリベル。レイチエル。来るんだ」

藍染がそう言うのと、後方で空間が歪む様にして四つの黒腔が出てく

る。

その中から、破面が何人か出てくる。

——マフラーをしている破面。

——だるそうに頭を搔く破面。

——威厳のある佇まいの破面。

——毅然として腕を組む破面。

その破面達の後ろには、部下であろう破面が何人か居たり居なかつたりする。それを確認した藍染は、静かに瞼を閉じ、言葉が続ける。

「空座町が尸魂界に在るのなら、君達を殲滅し、尸魂界で王鍵を作る。それだけのことだ」

「ちイツ………相変わらずバケモンみてえな霊圧してやがるぜ」

「恐ろしければ逃げてでも構わんど、腰抜け」

「大丈夫です、隊長。私は隊長と共に戦う限り、微塵も恐怖は感じません」

藍染の霊圧に汗を流す大前田に、碎蜂が口を悪くして返答する。だがそれに返答したのは、毅然とした様子で佇む朝霧であった。

藍染の霊圧もそうであるが、他にも凄まじい霊圧を放つ破面が四体。それを見て臆さない者はいないであろうが、瀨霊廷の十三個存在する隊の内の、二番隊と隠密機動という組織を二つ率いている碎蜂は臆することはなかった。

——裏切り者であるならば、誅すのみである。

その意図を、大前田と朝霧は受け止める。

「ここは先ず、頭を叩くんがスジですかいの」

「いや、藍染の能力が特殊だ。集中して対処するには、周りを先に倒す

べきだろう」

戦略を提案する射場に、隊長である粕村が返答する。本丸は藍染であるが、『完全催眠』という凶悪な能力である以上、他の戦力が屯していく場所に突っ込んで行くのは得策ではないだろう。

藍染を確実に倒すには、まず周りの戦力を削るべきである。

「誰が一番強いかな？十刃の三人の中で」

「難しいな……藍染に訊いてみない事には……」

「……俺は誰が相手でも全力でやり合いますけどね、隊長」

京楽が浮竹に、誰が最も強いか訊くが、パツと見では誰が一番強いのか解らないので浮竹は曖昧な返答をする。

それに対し、海燕が鋭い目つきで決意表明をする。この場に来ているという事は、どの破面も精鋭である。ということであれば、誰を相手にしても大差はないというのが海燕の考えである。余りにも単純であり、相性によっても変わってくるが、戦ってみないことには解らない。

自分達がすることは一つ。護る為に戦うのである。

「問題は、十刃との戦闘中に藍染が手を出さない保障は無えって事だ」

「………ですね」

「ですけど、いずれ戦う相手であることには変わりありません………！」

冬獅郎が、懸念を口にする。それを乱菊が肯定し、まつ梨がその先のことを口にする。ここに居る破面は、恐らくどれも隊長格。そうでないにしても上位席官レベルである。そういったレベルでの戦いの中で、必ずしもどこかで実力が拮抗するであろう。いや、ほとんどの戦いが拮抗する筈である。

そんな実力の拮抗した中で、藍染惣右介という異常な強さを持つ者が介入してきたのであれば、負ける可能性が格段に高くなる。

どうにかして、藍染の動きを止めることが出来ないか。

皆がそう考えている時であった。

「………皆、下がっておれ」

総隊長の言葉に、全員が反応する。総隊長を見ると、杖の中に封印

していた斬魄刀を取り出し、その柄を握った。

「万象一切灰燼と為せ――

『流刃若火』」

「う……おおおっ!？」

「ふせろ、浮竹! 海燕クン!」

「わかつてる!」

「いきなりかよ、総隊長!？」

総隊長が流刃若火を解放すると同時に、凄まじい爆炎が辺りを包む。それを見て大前田が圧倒されたようになりアクションを取り、京楽は浮竹と海燕に声を掛ける。

そんな間にも、総隊長は流刃若火を藍染たちの場所へ向けて振るう。すると凄まじい爆炎が、藍染目がけて空を駆けて行く。それは瞬く間に、藍染、市丸、東仙の居る場所を包んだ。

「――城郭炎上」。これで暫くは藍染達も、この炎の壁から出られまい。さて――……ゆるりと潰して往こうかの」

「手荒いな……総隊長……」

「それだけ山じいもご機嫌ナナメってことじゃないの」

凄まじい気迫の総隊長に、京楽と浮竹が汗をタラリと流す。一度、藍染の反乱の際に流刃若火を前にした二人であったが、何度見てもその迫力には慣れないものである。そして、初めて見る者であれば、畏怖するであろう。

天地を焦がし、万象を焼き尽くす最強最古の斬魄刀・『流刃若火』。先程の炎だけで、この一体の気温が高くなつたと錯覚するほどの熱量である。藍染を囲っている炎の所為で、陽炎も少々出来ている。

「——藍染……」

城郭炎上に包まれた藍染を見て、冬獅郎は怪訝な表情を浮かべる。あの炎の中に、自分の大切な者を傷つけ、裏切った男が居る。そう考えると、今すぐにでも怒りが火山の噴火の如く、爆発しそうである。

しかし今自分は、十番隊隊長としてここに居る。無責任な行動は、自分の、そして部下の死にもつながる。そう考え、冬獅郎は一旦深呼吸をする。そして落ち着いた鼓動のまま、敵の破面を見つめる。

自分も、あの破面の中のどれかを相手取る。以前の十刃とは格が違うだろう。いや、違っていなくては期待外れだ。

——藍染を討つための刀の、錆を落とさなきゃいけないからな。

「ひゃあ、あついあつい。ムチャしはるわア、総隊長サン。どないしましす、藍染隊長。これやつたら、ボクら参加だけへんよ」

城郭炎上の中に居る市丸は、飄々とした口調で藍染に向かってこう言った。轟々と燃え盛る炎によって、三人の肌は赤く照っている。そして炎に囲まれている為、勿論暑い。

だが、そんな中でも藍染はいつも通りに、余裕を持った表情で口を開く。

「——……何も。ただこの戦いが、我々の手を下す迄も無く終わる事になった。それだけの話だよ」

「ギアて、どうしたもんかのオ。敵は山程。ボスはあのザマだ」

バラガンはそう言つて、城郭炎上の中に居る藍染に目を向ける。その言動に第3十刃であるハリベルが、眉を少し顰める。

「藍染様に口が過ぎるぞ、バラガン」

「お前は儂に口が過ぎるぞ、ハリベル。……………さて、どうするんじや？
帝守護刃よ」

バラガンは少しハリベルと言い合つた後に、レイチエルに視線を向ける。レイチエルは少し思案を巡らせるように、顎に手を当てて考えた素振りを見せる。

「……………こういつた多対多の場合、多くの虚を引き連れていたバラガンの方が、戦略を考えるには長けているだろう。お前に任せるぞ」
「ふんっ……………解つておるではないか」

バラガンはそう言つてから、指を鳴らす。するとバラガンの後ろに佇んでいた従属官達が、何やら椅子のような物を組み立て始める。すると、ものの数十秒でバラガンが座ることの出来る玉座のようなものが完成する。それにバラガンは、ドカツと腰を掛ける。その姿は『王』と呼ぶものに相応しいであろう。

「ならば、儂が指令を出させて貰う。レイチエルよ。あれは皆に済ませているな？」

「ああ。お前はどうする？」

バラガンとレイチエルが、何やら意味深な会話をする。レイチエルの問いに対し、バラガンは首を横に振つてこたえる。

「いや、儂はいい。やるだけ無駄じやろう」

「そうか。なら、始めよう。みんな、それでいいな？」

「いいんじゃないの……………あ痛!!何すんだよりリリネツ……………痛い!!」

スタークがだるそうにレイチエルの言葉に賛同するが、それを聞いたりリネットがスタークの尻を蹴る。その光景を見て、ハリベルの従属官の一人であるミラ・ローズが『うるせえな…』と呟く。

それをスルーしつつ、バラガンは自分の考えを話し始める。

「足元の重霊地。偽物じゃと言ったな。尸魂界で造った模造品と入れ替えた。ボスは『尸魂界まで重霊地を手に入れれば良い』と言っておったが……果たしてそんな面倒をする必要があるかの？」

バラガンはそう言いながら、死神の長である元柳斎を見下ろす。元柳斎は、ただ静かに敵であるバラガン達を睨んでいる。もしこれが実力のない破面であれば、その睨みだけで腰を引かせていたことであろう。だが生憎、この場にいるのはほとんどが実力者。睨みだけで引くものなどいなかった。

「さっきの話じゃこういう理屈だ。『この街の四方に柱を立てて、その柱ごと街ごと入れ替えた』。だったら、その柱を壊せばどうなる？ フィンドール」

「はい」

フィンドールと呼ばれた破面は、手甲の部分を口に当てて笛のような音を響かせる。その瞬間に、空に割れ目が出現し、その中から虚が出てくる。

「柱の場所は判つとる。こういうもんは東西南北四方の端に造るのが定石じゃ」

バラガンがそう言い切ると、多くの死神の中から一人だけ、慌てふためく者が現れる。二番隊副隊長・大前田希千代である。

だがその光景を見て、元柳斎が口を開く。

「莫迦者めが」

刹那、柱を壊そうとしていた虚たちは何者かの手によって斬り捨てられる。その光景を目の当たりにしたバラガンは、少しの間静かになる。

柱にはそれぞれ腕利きの死神達が居る。

三番隊副隊長・吉良イヅル。

九番隊副隊長・檜佐木修平。

十一番隊第三席・斑目一角。

十一番隊第五席・綾瀬川弓親。

「……………それがどうした？ 四匹の蟻が守る柱なら、四匹の龍で

踏み潰せばいい。ポウ。クールホーン。アビラマ。フィンドール。潰せ」

「「は！陛下の仰せのままに!!」」

名前を呼ばれた四人の破面は、声をそろえてバラガンに返答し、すぐさま四方に散らばっていく。

「うおおおおお!! 殴ってやる蹴ってやる!! 殺ってやるぜくくく………つておい！何でオメーも一緒にやらねーんだよ！暗えヤツだな!!」

「………いきなり目の前で変な雄叫びを上げてる奴に、乗っかるつもりはねーよ」

檜佐木の目の前で一人の破面が何やら謎の雄叫びを上げているが、どうやら彼なりの様式美的なものであることが発覚した。

だからといって檜佐木は、やるつもりなど毛頭ない。

檜佐木は斬魄刀を構え、目の前の破面の動きに注意する。個体にもよるが、破面の強さは上位席官並みであることは判明している。故に、気を抜くことなどできない。

「これは儀式だ!! 互いをブチのめしてやるって気持ちで叫びに込めて互いに鼓舞する戦いの儀式なんだよ!!」

「だからなんだ」

檜佐木の言う事には誰もが首を縦に振るだろう。儀式をするのであれば、此処に来る以前にするものではないか。とりあえず、戦いが始まる以前に済ませておくものではないのか。檜佐木はそう考えていた。

乗っかるつもりのない檜佐木を見て、破面が残念そうな顔をして檜

佐木を見下ろす。

「ちツ……まあいい。バラガン陛下の従属官、アビラマ・レッダーだ。名は何だ、死神」

「九番隊副隊長、檜佐木修兵だ」

「！九番隊………？」

『九番隊』という単語に、アビラマは反応する。

「何だお前——……東仙要の下か。成程な……戸魂界に棄てて来たとは聞いたが、納得だぜ」

「何がだ？」

「こんなフヌケじゃあ、棄てるも止むなしってことだよ」

その言葉に、檜佐木は怒りを見せることなく斬魄刀を構え直す。否、怒りなどはない。寧ろ、安堵していた。

自分は、隊長の教えを守ることができている、と。

「そうか………なら、納得させてやるよ。俺が、東仙隊長の下で戦ってきたってことをな」

檜佐木修兵 VS アビラマ・レッダー、開戦。

「はいはいはいはあ~~~~い、ちゆうも~~~~く~~~~♪バラガン陛下の第一の従属官、シャルロツテ・クールホーンちゃんが来ましたよオ~~~~♡」

「……ツイてねえな」

目の前に来たキャラの濃い相手に対し、一角はそう呟いた。だが聞こえていたらしく、クールホーンは青筋を立てる。

「いきなり『ツイてねえな』って何よ!?何がツイてないわけ!?アタシと戦えるんだから、アンタはツイてるのよ!!」

そう指向けながら訴えるクールホーンであるが、一角は未だテンションの下がったまま鬼灯丸を構える。

そのやる気のなさそうな一角に対し、クールホーンは斬魄刀を抜く。

「ふん………まあいいわ。これから嫌でも、アンタがツイてるってことを教えてア・ゲ・ル♡」

「はっ………そーかよ。色物じゃねえことだけを祈るぜ。俺は十一番隊第三席、斑目一角だア!!楽しくやろうぜ、破面!!」

斑目一角 VS シャルロット・クールホーン、開戦。

「………随分大きな敵が来たね」

「そう言うお前は小さいな」

目の前に来た巨躯の破面に対し、吉良は思ったことを口に出した。破面は吉良を見て小さいと言うが、相手の大きさが普通の人間と比べると大きすぎるだけであり、別に吉良が小さいという訳では無い。

そして間髪を入れずに、吉良は斬魄刀で破面を斬りつけようとする。だが直前で、破面が迫ってくる吉良に対しパンチを繰り出す。

その一撃を吉良は躲して、一旦距離をとる。

「ふう………叩き潰すのも面倒だ」

「そうかい。ならすぐにでも、楽にしてあげるよ」

吉良イヅル VS チーノン・ポウ、開戦。

「……………最初に訊いておきたい。君は何席だ？」

「綾瀬川弓親。十一番隊第五席だよ」

目の前に来て早々、相手の席次を訊く破面に対し、弓親は平静のまま答える。それに対し破面は、何かを思っているのか否か、人差し指を立てる。

「……………そうか。それでは俺も、五席相当の力で戦うとしよう」

その言葉に、違和感を覚えながら弓親は斬魄刀を構える。

綾瀬川弓親 VS ファインドール・キャリアス、開戦。

「ははあ!!」

「っ……………」

剣を大振りに振るアビラマに対し、檜佐木は落ち着いて剣で受け流す。しかし、アビラマの見た目に違わぬ筋力は、受け流している檜佐木の腕に少なくない衝撃を与える。

だが、落ち着いて観察すれば、アビラマの剣技は荒々しく隙の多いものである。

「どうおらあー!」

アビラマは剣戟の間に檜佐木に向かって虚弾を放つ。だが、落ち着いて観察していた檜佐木は慌てることなく瞬歩で距離を取るようようにして回避する。

続けざまに何発も放つアビラマであるが、檜佐木はあくまで冷静

に、一つ一つの軌道を呼んで回避する。

そんな檜佐木を見て、アビラマは虚弾を放つのを止める。そして満足げな顔で笑みを浮かべる。

「へっ……いいじゃねえか！いいよ戦いらしくなってきたぜ!!頂を削れ——『空戦驚』!!」

虚弾の嵐を回避していた檜佐木に対し、アビラマは本番とばかりに刀剣解放する。それを目の当たりにした檜佐木は、次の一撃に備えて斬魄刀を構える。

その間に、アビラマの姿はどんどん変貌していく。

頭部は鳥の頭のような仮面に覆われ、腕や足には赤い体毛が覆われる。爪も人間のように五本ではなく、鳥のように四本の鉤爪となる。そして最後に、背中から巨大な赤い翼が広げられる。

アビラマがはためく度に、辺りには強めの風が吹き、檜佐木の髪の毛を靡かせる。

「うおらあ!!」

そしてアビラマは、檜佐木に向かって一気に急降下する。それを目の当たりにした檜佐木は一先ず瞬歩で距離を取ることにした。

攻撃対象を失くしたアビラマは、そのまま檜佐木が先程まで居た場所に突撃するが、その瞬間に建物が豪快な音を立てながら崩れる。

その光景を見て、檜佐木は避けていた事が正解だと考えた。レプリカとはいえ、コンクリートの建物。それをいとも容易く破壊する突撃など、下手に受け止めればそのまま地面にまで吹き飛ばされて骨が砕けていたりしたであろう。

そして、アビラマにどのようにして攻撃を当てるか、檜佐木は思案を巡らせる。その間にも、アビラマは建物の瓦礫の中から姿を現す。

「ふんっ……逃げ足だけは、いっちょよまえたなあ!!」

そう言つてアビラマはその場で翼を大きく羽ばたく。すると、アビラマの翼から何枚か羽が放たれる。

先程と同じく、下手に受け止めるより回避した方が無難だと考える檜佐木は、瞬歩で飛来する羽を回避する。檜佐木が回避した羽は、そのまま建物の壁にぶち当たり、そのまま壁に大きな穴を空けた。

(羽のくせに、何て重量だ……………！)

「まだまだあ!!」

アビラマの「デボラル・ブルーム餓翼連砲」の一撃目を回避した檜佐木に向かって、アビラマは空に向かって羽ばたきながら再び「餓翼連砲」を放つ。しかも、一度ではなく、何発も檜佐木を狙って放たれるために、檜佐木は回避に徹するしかなかった。

そんな檜佐木に向かって、アビラマが再び突撃する。それを見た檜佐木は、その場で立ち止まる。

「……………今だ!」

自分に向かって一直線に向かって来るアビラマを、紙一重の所で瞬歩で回避しつつ背後に回り込み、斬魄刀で斬りかかる。

「んなモン喰らうかよ!!」

だがアビラマは背後から斬りかかる檜佐木に対し、身体を捻って翼を持って檜佐木の剣を防御する。

ガキン、という音が辺りに鳴り響く。それと同時に、檜佐木は目を見開く。

「何……………!?!」

「はん!ただの翼と思うなよ。触れる者全てを叩き潰す、岩より重い鋼の翼だ!!」

アビラマは、そう声高らかに行った直後に翼を思いつきりはためかせて、翼と鏑迫り合い状態になっている檜佐木を吹き飛ばした。檜佐木は剣が通らなかつたことに驚きつつも、空中で体勢を立て直す。

そして真正面から攻める事は悪手だと考え、左手に光の柱を出現させる。

「縛道の六十二・『ひゃつぽらんかん百歩欄干』!」

アビラマに光の柱を投げつけ、そのまま拘束しようと考え。だがアビラマは、途中で分裂する光の柱に対し「餓翼連砲」を放って迎撃する。

その対処を見る限り、アビラマも只の脳筋ではないことが窺える。今の縛道は、アビラマが考えなしに突っ込んできて、そのまま翼を建物なり何なりに縫い付けてやろうという魂胆で放ったものであった

が、不発に終わってしまった。

そして“百歩欄干”を“餓翼連砲”で迎撃したアビラマは、再び檜佐木に向かって突撃してくる。

そんなアビラマに対し、檜佐木は左腕につけている腕輪を外して投げつける。それはそのまま宙に浮かび、ちょうどアビラマが来た辺りで爆竹のように爆発する。

「っ、んだこりゃあ!!めんどくせえ真似しやがって!」

「——破道の五十八・『てんらん嵐』」

爆竹に多少なりとも動揺しているアビラマに対し、檜佐木は斬魄刀を手首で回して竜巻を発生させる。

敵に翼がある以上、強風を当てれば多少怯むだろうと考え檜佐木は“嵐”を放った。だがその攻撃に対し、アビラマは鼻で笑った。

「こんな攻撃……喰らうか!!」

迫りくる竜巻に対し、アビラマは翼の一振りでかき消していく。自分の考えが悉く打破されていく状況に対し、檜佐木は歯噛みする。

そして再び距離を取っていく檜佐木に対し、アビラマは憤慨する。

「いつまでも逃げ回りやがって……速攻で叩き潰してやらあ!!」

「っ!」

アビラマは突如、己の鋭い爪を自らの胸に描かれている模様突き刺す。そして突き刺したまま、その模様を描いていく。肉に爪が刺さっており、さらには裂くような行為をしている為、アビラマの胸からはかなりの鮮血が宙に舞っている。

何をしているのかと檜佐木が警戒していると、アビラマに変化が訪れた。頭の仮面がシャープな形状となり、さらに新たに翼が二枚生えた。

それを目の当たりにして目を見開く檜佐木に対し、アビラマは再び突撃する。速度は先程よりも格段に上がっており、檜佐木も焦りを見せながら瞬歩で回避しようとする。

だが、完全に回避するよりも早く、アビラマが檜佐木の居た場所に激突し足場を崩した為、檜佐木は上手く踏み込まず、崩れる足場と共に地面へと落下していく。

「ぐっ！」

「どうしたア!? もう終わりかあ!？」

落下する檜佐木に向かって、アビラマは大きく翼を羽ばたかせて檜佐木に止めを差そうと急降下する。

アビラマの翼に当たった瓦礫は、悉く砕かれていく。

「ちっ……………」

「終わりだア!! 檜佐木修兵!!」

「刈れ——

『かぜしに風死』

「っ……………ぐああ!？」

檜佐木に向かって急降下するアビラマの右目を、何かが斬り裂く。突如起こった出来事に、アビラマは思わず体勢を崩す。その間に、檜佐木はアビラマの急降下の軌道から離れる。

攻撃対象を失ったアビラマはそのまま地面に激突する。そして数秒した後、右目を押さえながら、アビラマが立ち上がる。

「…………成程な。それがオメーの斬魄刀っつーワケか」

そう言いながら、アビラマは左目で檜佐木の手元に視線を向ける。柄尻の鎖が繋がっている鎌のような物が二本。特別な装飾などもある訳では無く、見た目は至ってシンプル。

アビラマの言葉に、檜佐木は淡々と口を開く。

「ああ。これが俺の斬魄刀、『風死』だ。あまり好きじゃねえんだけどな」

「……………はあ? 何言ってるんだ、テメー?」

檜佐木の言っている意味が解らずに、アビラマは頓狂な声を上げる。それに対し檜佐木は、まるで見せつけるように、尚且つ邪険に扱うように、風死の柄尻の鎖を持つ。

鎖の擦れる音が、辺りに響く。

「見ろよ、この形……………」

——命を刈り奪る形をしてるだろ？」

「……………」

風死を投げつける檜佐木に対し、アビラマは翼を羽ばたかせてその場から飛び立つ。風死は空を斬るが、すぐさま檜佐木が鎖を引くことによつて手元に戻ってくる。

そして檜佐木は、空に飛び立ったアビラマを追って、戦場を空中に戻す。そして追いかけてくる檜佐木に対し、アビラマは四枚になった翼で“餓翼連砲”を放つ。

「はっ!! さっきまで避けるので精一杯だったのに、倍になった俺の“餓翼連砲”を避け……………」

『避けられるのかよ』と言おうとしたアビラマだったが、それよりも早く檜佐木が風死を操り、迫りくる“餓翼連砲”を斬り落とした。余りにも一瞬だったため、アビラマは絶句する。

何故こうも急に、流れが変わってしまったのか？

刀剣解放した自分は、この副隊長を圧倒的に追い詰めていた筈である。なのにも拘わらず、この副隊長が始解した途端、流れが向こうにもっていかれてしまった。

「ち……………くしょうがああ!!」

現状を打破するために、アビラマは虚閃を檜佐木に向かって放とう

とする。

「……………右が、お留守だぜ？」

「っ……………!!」

アビラマが虚閃を放とうとした次の瞬間、アビラマの右側の翼の一枚がいつの間にか後ろで回転していた風死によつて斬り落とされる。この風死自体は、先程の“餓翼連砲”を斬り落とした際に、風死の片方をアビラマの背後まで投げたものであるが、よほど焦っていたのかアビラマは全く気付かなかつた。

翼を一枚斬り落とされたことで、アビラマはバランスを崩す。そしてそのまま、近くの建物の屋上へと墜落する。

「はあ……………はあ……………ちくしょう……………」

良いように事を運ばれていることに対し、アビラマは悪態をつく。そんなアビラマの前に、檜佐木は瞬歩で降り立つ。

「……………どうだ？怖いかな？」

「ああ!?何がだ!？」

「闘いは怖いか？つて訊いてるんだよ」

「はっ!!何訊いてやがるんだ、てめえはよお!!」

そう叫んでアビラマは残った翼を大きく広げる。それと同時に両腕を大きく広げて、高らかに謳う。

「闘いっつーのは、相手をぶちのめす爽快なモンなんだよ!!それを『怖いか?』だつて!?馬鹿も休み休み言いやがれ!!」

「……………そうか。それじゃあテーマとは話が合わねえ筈だぜ」

檜佐木は、次の一撃の為に風死の鎖の部分を持って片方の鎌をヒュンヒュンと回す。そしてアビラマを見据える瞳は、どこか憐れみを宿していた。

その瞳に対し、アビラマは言いようのない不安に駆られる。

「……………自分の剣に怯えぬ者に、剣を握る資格は無い」。俺はそう教わつた」

「っ!!ちくしよおおおおお!!!!」

檜佐木の言葉に憤慨したアビラマは、一直線に突撃する。その瞬間、アビラマの右肩から鮮血が迸る。しかしそれには目もくれずに、

アビラマは檜佐木を仕留めようと特攻する。

それを見た檜佐木は、体重を後ろに預けて建物の屋上から落ちていく。それを見たアビラマは、すぐさま檜佐木を追いかけようと羽ばたく。

だが檜佐木は落下しながら、投げた風死の鎖を引き戻すことにより、先程アビラマに投げつけた風死が回転しながら戻ってきて、そのまま檜佐木を追いかけているアビラマの右側の残りの一枚を斬り落とす。

右側だけ翼を失ったアビラマは、飛ぶこともままならず空中でバランスを崩す。そしてそのアビラマの頭上に、檜佐木は瞬歩で姿を現す。

「う、あああああ!!!」

今まさに自分に止めを差そうとする檜佐木に、アビラマは絶叫するだけしか出来なかった。

その顔から窺えるのは『恐怖』。敗北への。死への。

「……………漸く俺と対等だな。アビラマ・レッダー」

檜佐木は最後にそう言っつて、風死を投げつけた。刹那、墜落するアビラマの首は刈り取られて、血をまき散らしながら地面へと落下する。

その光景を見ながら、檜佐木は風死を手元に手繰り寄せた。

勝者、檜佐木修兵。

漢気

ここが戦場である限り

我が魂は尽きぬ

「『ビューテフル・シャルロツテ・クールホーン』S……ミラクル・ス
ウィート・ウルトラ・ファンキー・ファンタスティック・ドラマティッ
ク・ロマンティック・サディスティック・エロティック・エキゾチッ
ク・アスレチック……ギロチン・アタック!!」

「うおお!」

クールホーンと空中戦を行っていた一角であったが、クールホーン
のやたら長い技名の只の剣の振り下ろしを受け止め、余りの勢いに吹
き飛ばされた。

一角はそのまま地面へと落下する。何とか途中で体勢を整えるが、
着地の衝撃でコンクリートの地面に罅が入りクレーターが出来上が
る。

巻き上がる砂塵を手で払いながら、一角は上空に居るクールホーン
を見据える。

「へっ………中々強えじゃねえか」

「あら？あたしの美しさを認めてくれたってことかしら？」

「……美しさはともかく、色物じゃねえってことは認めてやるよ」

中々濃い顔から放たれるウインクに対し、一角は少しゲテモノを見
たように気分の悪そうな顔をするが、すぐに気を取り直し鬼灯丸を構
え直す。

それに対して、クールホーンはニヤリとしながら斬魄刀を一角に向
ける。

「フーン。なら、もうちょっと本気だしちやおつか・し・ら♡」

クールホーンは一気に一角との距離を詰める。そして鬼灯丸を構

える一角に対して怒涛の連撃を繰り出していく。これといった型はない。だが、流石に破面あることもありかなりの力を有している。単純な力で言ってしまうえば、以前戦ったことのあるエドラドよりもあるかもしれない。

そんな力の応酬に対し、一角は鬼灯丸のリーチを生かして距離を取りながら、クールホーンの攻撃をいなしていく。

「あら、どうしたの!?:元氣ないんじゃない!?:」

「そいつあ見間違いだぜ!・裂ける——『鬼灯丸』!」ほおずきまる

一角はクールホーンが踏み込んできたタイミングで、鬼灯丸を突き出して三節棍に変形させる。予想だになかった攻撃に、クールホーンは目を見開きながら、節の部分でクールホーンの首を刈り取ろうとしている刃をその場でしゃがんで回避する。

そしてお返しとばかりに、クールホーンはその場でしゃがんだままバレリーナの如く足を高く上げて一角の顎を蹴り上げる。

「ぐっ……!?:」

顎を蹴り上げられた一角は、宙高く身体を放り出されて弧を描きながら地面に落下していった。

それを見て、クールホーンは一角のことを鼻で笑う。

「今のはちよ〜とだけ驚いたけど、大した攻撃じゃなかったわね」
一角はよろめきながら立ち上がる。顎を思いつき蹴られたことにより、脳がゆさぶられたからである。そして次に、口の中をモゴモゴさせて何かを血と共に吐き出す。

血と共に吐き出された固形物は、カランという音を立ててコンクリートの道路の上を転がっていく。

「ちっ……また歯あ抜けちまったよ」

「あらあ、それは残念ね♡歯は、美しき者にとって重要なポイントの一つでもあるのよ♡」

そう言ってクールホーンはニカツと笑ってこれ見よがしに歯を見せつける。それを見た一角は、鼻で笑ってクールホーンを指差す。

「ふん……俺の同僚はよく髪型にも拘ってんだが、テメーはどうなんだよ?」

「勿論♡あたしは美への飽くなき追及で日夜欠かさず努力を——
!？」

自らの美への追及心を声高らかに話すクールホーンであったが、髪を見せつけようと触った瞬間に、いつもと感触が違うことに気付く。

その事実には、クールホーンは目を見開く。

「なっ……あ、あたしの髪がああああ!!？」

「済まねえな。さっきの奴で、どうやらテメーの髪の毛ちよつと斬つちまったみてえだ」

『さっきの奴』とは、鬼灯丸を三節棍にして行った攻撃。どうやらクールホーンは避けていたつもりであったが、それ以前にクールホーンの髪の毛に刃は当たっていたという事になる。

不揃いになった後ろ髪を触れながら、クールホーンは拳を振るわせる。そしてこめかみには青筋が立ち、鼻息を荒くしていく。

「この……クソハゲがああああ!!許さん許さん許さん許さん、絶対に許さないわよおおおお!!！」

そう叫びながら、クールホーンは斬魄刀を天高く掲げる。

「煌めけ——『^レイ^ナ・^デ・^ロサ^スス』!!！」

(刀剣解放か——!)

クールホーンが真の力を解放——刀剣解放したのを目の当たりにして、一角は鬼灯丸を構える。

斬魄刀から噴き出した煙がクールホーンを包み込んでいき、霊圧も急激に上昇する。煙の中から姿を現したクールホーンは身体的な変化は特に見当たらない。強いて言えば、バレリーナの恰好であり、さらにやけに股間の膨らみが強調されていることぐらいであろうか。

パツと見の感想だけで言えば、以前戦ったエドラドの刀剣解放の方が真面に見える。

「——さて……あたしの髪を斬った罪は、ちよつとやそつとじゃ割に合わないわよ」

「そうかい……なら、しっかり楽しませてやらないとなー！」

「ふん……真のあたしの姿を見て尚、そんな風な口を叩けるなんて……いいわ。格の違いって奴を見せてあげ・る♪」

そう言つてクールホーンは、仰々しいポーズをとり始める。

「『ビューティフル・シャルロット・クールホーン』S……ファイナル・ホーリー・ワンダフル・プリティ・スーパー・マグナム・セクシー・セクシー・グラマラス……虚閃!!」

最後に胸の中央でハートの形にした手の間から、極太の虚閃が放たれる。それを見て一角は瞬歩で回避しようとする。クールホーンの放った虚閃は如何せん攻撃範囲が広く、一角の居た周りの建物をいくつか消し飛ばす。

その攻撃範囲の広さに、一角は齒噛みする。

「ちっ……………」

「遅いわよ!!」

上空に回避していた一角に、クールホーンは一瞬で肉迫しそのままサマーソルトキックを喰らわせる。サマーソルトキックを一角は腹部に喰らう。そしてクールホーンは、腹部に攻撃を喰らってよろける一角の頭部を掴み、そのまま地面に向かって急降下する。

そして掴んだまま一角を地面に叩きつける。

「がっ……………はっ……………」

「ふん……………他愛もないわ」

そしてクールホーンは一角を持ち上げる。すると、二人を中心に黒い茨のようなものが広がっていき、徐々に二人を取り囲むようにドーム状になってくる。

そしてクールホーンの背後には、大きな白い薔薇が現れる。

「こいつぁ……………何だ……………」

「『ロサ・ブランカ白薔薇ノ刑』。あたしの最も美しく、最も残酷な技よ。この黒く覆われた茨の中で、あなたは誰にも見られる事無く、白い花卉に包まれて死んでいくのよ」

「『誰にも』……………だど?」

「そうよ」

「成程な……………訂正だ、シャルロット・クールホーン。今日の俺は……………ツイてるぜ!!」

「っ!!?」

突然の一角の笑みに、クールホーンは警戒して一角を放して距離を取る。そして、クールホーンの攻撃で血まみれになっている一角は、鬼灯丸をその場でぐるぐると回転させる。その光景に、クールホーンは一体何をしているのかと目を見開く。

「———卍、解!!」

「なっ……………何ですって?!」

鬼灯丸を回す一角を竜巻が包み込み、その竜巻の目から赤い霊圧の竜が天に向かって昇っていく。そしてやがて竜巻が収まると、そこには巨大な刃を二つ手に携え、尚且つ背中にも特徴的な刃を背負う一角の姿があった。

先程とは違う、そして明らかに上昇している霊圧を前にしてクールホーンは冷や汗を流す。

「……………『龍紋鬼灯丸』!」

「卍解……………ですって……………?」

確かに、目の前のこの男は『卍解』と叫んだ。才ある者でも習得するのに十年はかかる業。斬魄刀の真の姿。死神の戦闘における、切り札。

それが『卍解』。

今の今迄悔っていた相手が卍解を使えると言う事実には、クールホーンは身構える。そんなクールホーンに対し、一角は先程よりも鋭い眼光を向ける。

「……………楽しもうぜ、シャルロッテ・クールホーン。こっからが、楽しい戦いの始まりだろうが……………!」

「……………成程ね……………貴方のその逞しきは認めてあげるわ……………それでも、勝つのはあたしよっ!!!」

クールホーンの雄叫びと共に、二人は同時に激突する。一角は両手に携えている刃でクールホーンに立ち向かう。それに対してクールホーンは、その筋骨隆々の肉体から凄まじい威力の拳を放つ。

そこから繰り広げられるのは『漢』による、魂からの激突。一発一発放つたびに、両者は斬られたり殴られたりして、身体のうちこちらから鮮血をまき散らす。

両者は雄叫びを上げながら、ぶつかり合う。一角の刃が、クールホーンの腕の肉を斬り裂く。クールホーンの拳が、一角のあばら骨を砕く。

「うおおおおお!!」

「ずええええええい!!」

互いが咆哮する。

(何よ……何でこいつ倒れないわけ!? さっきまでの戦いで、ボロボロになってたくせに!?)

何度も殴打を喰らいながら倒れない一角に対して、クールホーンは何とも言えない不安に駆られる。

既に身体の骨は粉々にしている筈である。なのにも拘わらず、一角は卍解した時から口角を吊り上げながらクールホーンに相対している。そこから感じるのは、『狂気』。何が一角をここまで動かしているのか、クールホーンには解らなかつた。だが、自分がバラガンの従属官である以上、敗北など許されない。

故に、クールホーンにとって倒れることは出来ないのである。

「どうおおおおお!!」

クールホーンは気合いの雄叫びを上げ、虚弾を纏った拳を一角の鳩尾に叩き込む。それと同時に、一角は多量の血を口から吐き出す。

それを見て、クールホーンは一息吐きながら拳を引く。

「うおらあ、あ、ああああ!!」

「なっ……!!?」

だが拳を引いた瞬間に、一角は今までで一番の雄叫びを上げながら右手に持っていた刃をクールホーンに向かって振るう。その一閃を避ける間もなく、クールホーンは直撃する。

真面に喰らったクールホーンは、血を吐き出しながらその場に崩れ落ちる。左手で傷口を押さえながらも、クールホーンは鋭い眼光を一角に向ける。

何とか反撃しようとするものの、身体は言うことを聞かない。

それが意味することは、クールホーンの敗北。

「ぐっ……!!」

「俺の勝ちだな、シャルロッテ・クールホーン」

血まみれの一角は、何とか膝立ちを保っているクールホーンに向けて、そう言い放った。勝ち誇った顔をする一角だが、そんな一角も既に満身創痍であった。それは一角の下に出来ている血だまりが如実に表していた。

だが、それでもしつかりと己の二本の足で立っている一角にクールホーンは虚ろ気な瞳を向ける。

「あ……あなた……こんな凄いの、何で最初から使わなかったのよ……？」

「ああ？」

クールホーンが疑問に思っていたのは、何故一角が始めから卍解を使わなかったのかということ。切り札は後で出すのが戦術的には良いと考えられるが、それでもタイミングというものがある。

どうせならば最初に繰り出して一気に片をつけるなり、刀剣解放をした直後に繰り出すのが無難なのではないかとクールホーンは考える。

「決まってるんだろ。こりゃあ奥の手なんだよ。戦いを楽しむにや、後までとっておいた方がいいだろ？それによお、こいつを見られたら『隊長に就け』とかなんなり、上がうるせえんだよ」

「……ホントに、それだけの理由で……？」

「たりめえだろうが。隊長に就くつてのは、俺が更木隊長の下で戦えなくなるってことだ。それは死んでも御免なんだよ」

その言葉を聞いて、クールホーンはハツとする。

自分も、バラガンの下で命を尽くすと決めた身。恐らくそれと、この男の考えていることは同じである。

絶対に譲れない信念。つまりクールホーンは、その信念の上で戦う一角に、肉体的にも精神的にも敗北したということになる。

「……何よ……結構……かっこいいじゃない……」

「はっーそう言うテーマも、中々楽しい奴だったぜー！」

「……せめてそこは、美しいくらい言いなさいよ……ね……」

一角の言葉に、若干の不満を口に出しながらクールホーンは息絶え

た。その姿を見届けた後に、一角もその場に崩れ落ちる。

(何か……前もこんな感じだったな……)

エドラドとの戦いのことを思い出しながら、一角は意識を闇に落とした。

「ふんっ」

「くっ……縛道の三十九・『円閨扇』！」

ポウの巨軀から放たれる拳に対して、吉良は霊圧の盾を自分の前に展開して防御しようとする。だが、ポウの一撃は「円閨扇」に命中した瞬間に罅を入れる。それを目の当たりにした吉良は、すぐさま瞬歩でポウの拳の軌道上から離れる。

それと同時に、ポウの拳は「円閨扇」を粉々に砕く。

その一撃の重さに、吉良は歯噛みする。この破面は、その巨軀に見合っただけの腕力を兼ね備えていると見ていい。そして何故か、この破面は斬魄刀を抜かずに拳でもって自分と相対している。

ならば――。

「面を上げろ――」
『侘助』

吉良が解号を唱えると、吉良の斬魄刀が『7』の形に折れ曲がる。それを見てポウは、疑問を浮かべた顔をする。

「何ダそれハ？」

「……今から見せてあげるよ」

「そうか。ダガ、何かをされるのも面倒ダ。すぐに叩き潰すカ」

吉良が始解したことにより、ポウも漸く斬魄刀を鞘から抜く。その巨軀に見合わない小さな刀である。元々破面の斬魄刀は破面の力の核を封じ込めているだけなので、刀の形など実際はどうでもいいことである。だが、ポウの身体と比べるとあまりにも小さいその刀は、ポ

ウが振るうには小さすぎて扱い辛いだろう。

そこはかたなく納得しながら、吉良は侘助を構える。

「気吹け」

『カルテロン巨腕鯨』

「!?」

解号を唱えた瞬間に、ポウの頭が風船のように巨大に膨らむ。そして順々に腕や体も大きく膨らんでいき、只でさえ大きかった身体がさらに巨大化していく。

そしてその変態のような刀剣解放が終わった頃には、ポウの姿は近くの家の何倍も大きい身体に変貌していた。全身に鯨のようなスーツを身に纏っている姿は異様であった。

その姿、大きさに吉良は警戒する。

「重いイ~~~~~~~~~~~~だるイ~~~~~~~~~~~~ケドモソレモ、仕方のナイコト。それがバラガン様ノ……命令ヨ!!」

ポウはそう言つて、巨大化した剛腕を吉良に振るう。幸いにも、動きは緩慢なため吉良は瞬歩で冷静に瞬歩で対処する。だが、地面に振るわれた腕はコンクリートの道路をいとも容易く砕く。

「出鱈目な力だ……!!」

「面倒だナ……逃げルナー!虫ケラ!!」

回避に専念する吉良に、ポウは次々をその剛腕を振るつていく。その度に建物や道路が破壊され、破片が辺りに飛び散っていく。

吉良はその連撃に対しずっと逃げていく訳でもなく、一度振るわれた腕には侘助を斬りつけてから距離を取っていくというヒットアンドアウェイを見せている。しかし侘助の攻撃はポウの鋼皮を斬り裂くことは無く、それを見たポウは高らかに笑いながら見下ろす。

「ぽはははははっ!逃げるのが上手い虫ケラだ……~……~だけどモウ終わり——!?!」

腕を振り上げようとしたポウであるが、上手く持ち上がらない。そして再び力を込めて持ち上げようとするも、一向に持ちあがる気配はない。何かに縫い付けられているという訳では無く、ただ単純に腕が重すぎて持ち上がらないのである。

「な……何ダコレハ……!?!」

そんなポウに対し、吉良は一気にポウに肉迫し、そして巨大な背中に乗る。そして次に侘助でポウの背中を何度も斬りつける。何度も何度も斬りつけられたポウは、斬りつけられる度に自分の身に起こる違和感を覚える。

そして次の瞬間、ポウの立っていた場所に罅が入る。ポウは驚く間もなく、次の瞬間には地べたに這いつくばっていた。そして余りの自分の体重の重さに、肺の空気がどんどん押し出されていく。

「――斬りつけたものの重さを倍にする。二度斬れば更に二倍。三度斬ればそのまた倍。それが僕の斬魄刀、『侘助』の能力。今ので僕は、君の身体を十回程斬りつけた。それによって君の身体は、二十乗……つまり普段の君の千二十四倍の重さになっている。いくら筋力のある者だとしても、自分の体重の千倍の重さがかかったら、そのまま押し潰されて死ぬだろう」

「が……………あ……………が……………!!」

吉良が説明している間にも、ポウの身体からは骨が軋み、そして碎ける音が響いてくる。さらに肉も裂けて、辺りはポウの血で真っ赤な血だまりになってくる。

やがて肉や骨の潰れる嫌な音が聞こえるようになってきて、さらにはポウの身体の中にある空気がプシューつと音を立てて漏れ出すのも確認出来る。抜けていく空気と共に、ポウの血も宙を舞っていく。

まるでそれは、鯨の潮吹きのようなであった。

「……………もう僕が、君に手を下す必要はない。死にゆく君に、一つだけ言っておきたいことがある」

吉良はそう言いながら、始解を解いて鞘に納める。

「どうか僕を、許さないでほしい」

直後、何かの破裂音と共に、血や肉がまき散らされる音が辺りに響いた。

直後町に、何かが崩れる音がした。

激流

呑まれる呑まれる

渦巻く流れに

お前は身を委ねる事しか出来ないのだ

「ぐっ……………」

「転界結柱」の要でもある柱を崩された弓親は、その瓦礫の下で倒れていた。手には解放した「藤孔雀^{ふじくじやく}」が握られている。その柄をしつかりと握り、立とうものならすぐにも敵に立ち向かっていきたいが、相手の攻撃によって弓親の身体をボロボロにされていた為、立ち上がる事すら出来ない。

そんな弓親と相對していたフィンドールが、得意げに弓親を見下ろす。その顔には、戦い始めた当初よりも欠けている仮面の名残があった。

（何だこいつ…………仮面を自分で割った後から、急に強くなったぞ…………!?)

戦闘を始めた当初は、両者は互角の戦いを繰り広げていた。だが、その戦闘の途中でフィンドールは、あろうことか自分の仮面を割ったのである。すると、何故かフィンドールの動きや臂力が向上し、弓親が押され始める展開となってしまった。

弓親も、必死に戦ったが結果は敗北に終わってしまった。そして、そのまま柱を壊されてしまったということである。

「…君は…………仮面を割ると強くなる能力でもあるのかい?」

「『正解^{エサクダ}』…そう、仮面を割る事で俺の戦闘能力を向上させる…………それが俺の技の一つ『彫面^{アフィナル}』だ。因みに、今の俺の力は四席といったところだ」

そこからフィンドールは、何やら疑問あり気とばかりに顎に手を当てて考え始める。そして左手の指揮棒のような物を、弓親に向ける。「君は確か『五席』と言ったな。護廷十三隊の席官一つには、それだけの力量差があるのかい？」

「……………それは、僕が思っていたよりも弱かったという風に聞こえるな……………！」

「『正解』^{エサクタ}。その通りだ。期待外れだったと言おう」

その言葉に、弓親は屈辱的な感情を覚える。まず、弱いと言われて悔しく思わない者はいないであろう。そして弓親は、本来の力を隠して戦っている。そのためこの戦いの結果は本意とは言えないだろう。だが、弓親はその力を表す訳にはいかなかったのである。それは『十一番隊』としての矜持であった。同じ十一番隊の中でも、真樹は普通に解放はしていたが、彼にはそれなりの信念があるからこそ、それが出来ていたのだ。それと同じぐらいの信念を、弓親は持っている。自負していた。故に、それを出すことが出来ずに敗北という結果に終わったのである。

そして、屈辱を受けている弓親を横目に、フィンドールは壊した柱の方に目を向ける。すると、柱の下の方から景色が変わってくる。具体的に言えば、先程までの戦闘の形跡が無かったかのように綺麗になつていくのである。

「ふむ……………これが、本物の空座町の土地なのか……………」

一応の任務を果たせたことに、フィンドールは一先ず満足そうな笑みを浮かべる。そして次に、手に持っている斬魄刀を、地面に倒れている弓親に向ける。

それに対し弓親も抵抗しようと力むが、全身をボロボロにされているため、上手く動くことが叶わない。

「俺が陛下から賜った命令は『潰せ』だ。命令通りに、潰させてもらおう」

「くっ……………！」

敗者に選択権はない。それを理解していた弓親は、悔しそうな表情を浮かべる。そして、グツと脛を閉じる。

弓親がそうしている間にも、フィンドールは刀を振り上げていた。
「――さらばだ。綾瀬川弓親」

「待ちな」

刀を振り下ろしたフィンドールだったが、その一閃は目の前に割り込んできた者の刀によって防がれた。左腕に腕章を巻いており、そこには『十三』という文字が刻まれていた。

フィンドールの刀を受け止めていたその男は、空に向かって叫ぶ。

「射場さん!!」

「おうよ!!」

射場と呼ばれた男は、何やら巨大な袋のような物を取り出し、さらにそこから円柱のような物を幾つか取り出す。そしてそれらを、地面に向かって何かを囲むように投擲される。

円柱は地面に円形に刺さる。すると、先程まで戦闘の形跡を打ち消しながら本物の空座町に戻っていた景色が、その円柱が刺さっている所から先に進むことは無くなった。

それを見てフィンドールは、怪訝な顔をする。

「……………何だ、これは?」

「悪いが、回帰は止めさせてもらったぜ」

「成程……………つまりあれは、緊急用ということか?」

「そうだな」

目の前の男の言葉に、自分の推測が「正解」であったことに口を吊り上げる。そして一度目の前の敵から距離を取る。それに対して、目の前の男もフィンドールから距離を取り、手に持っている斬魄刀を構え直す。

そして先程、円柱を投げていたサングラスをかけている男が、弓親に肩を貸して支えた。

「…射場さん……海燕さん……」

「綾瀬川。お前は休んどけ。こっからは俺がやる」

そう言つて海燕は、斬魄刀の切っ先をフィンドールに向ける。それを見て射場は、弓親を支えたまま、この場から去つて行つた。

「ふむ……その腕章……副隊長か？」

「ああ、そうだけ。十三番隊副隊長・志波海燕だ」

「ご丁寧にも。俺はバラガン陛下の従属官、フィンドール・キャリアスだ」

相手が名乗つた事と、そしてそれによつて副隊長と解つたことに、フィンドールはさらに口を吊り上げる。

そんなフィンドールの様子を見て、海燕は警戒を強める。敵の浮かべる笑み程、警戒しないことには構わないものはないだろう。十中八九、こちらを貶めようとでも考えている筈だ。海燕はそう考えていた。

警戒を強める海燕に対し、フィンドールは笑みを浮かべたまま語りかける。

「副隊長であるなら、俺もそれ相応の実力で戦わなくてはな」

「……………どういう意味だ？」

「すぐに……………」

フィンドールは放したまま、左腕に付いている指揮棒のような物で自分の仮面を少し割る。そしてそのまま肉迫し、海燕に向かって振り下ろす。それを危なげなく受け止めた海燕であったが、先程とは違う違和感を覚え、目を見開く。

「——解る!!」

刀が交錯し、火花が散る。

そして両者が距離を取る。その瞬間に、フィンドールは先程と同じように指揮棒で自分の仮面を割る。それも先ほどのような小さく割るのではなく、仮面の左半分を全て落とすように仮面を割つた。そうすると、先程まで仮面に隠れていたフィンドールの素顔が露わにな

る。

その様子に、海燕は何事かと身構える。

フィンドールは仮面を割ると、すぐに響転で海燕の後ろに回り込む。先程よりも確実に上がった速度に、海燕は驚愕しながらも刀で防御する。

「てめえ………さつきよりも強くなってやがんな……！」

「『エサクタ正解』——今の俺の力は、副隊長と同等だ!!」

フィンドールはそう言いながら、斬魄刀を海燕に向かって何度も振る。それに対し海燕は、あくまで冷静に受け流していく。激しい剣戟が繰り広げられていき、辺りには甲高い金属のぶつかり合う音が響き渡る。

そして何度目かの激突の後に、フィンドールは近くの建物の上に昇る。それに伴い、海燕も追いかけるように上っていく。そして屋上に着くと同時に、海燕は来るであろう攻撃に備えて身構える。

だがそんな様子は垣間見えずに、フィンドールは上って来る海燕を待っていたかのような表情で、貯水タンクの上に立っていた。

「………どういふつもりだ？」

「どうもこうもないさ。ただ、そろそろ戦いにも始末をつけようと思ってる。君らの準ずる形で」

そう言つてフィンドールは、斬魄刀の切っ先を海燕に向ける。

「水面に刻め——『ピンサグーダ蟹刀流断』」

解号を唱えたフィンドールには変化が現れてくる。フィンドールの右半身が装甲のような物で覆われる。そして両腕には蟹のハサミのような物が形成される。だがどちらも同じ大きさという訳ではな

く、右だけ巨大である。

その姿を見て、海燕は警戒を強める。これは破面の刀剣解放というもの。破面が刀剣解放を行えば、格段に強くなることは先遣隊の報告で分かっていた。まずは見た目でこういった能力か判断しようとするが、今の所解るのは、あの巨大なハサミで切りつけてくるのでは、といったような簡単な判断しか出来ない。とにかく、まずはやってみないことには解らない。

自分を観察するようにつめている海燕に対し、フィンドールは右腕のハサミを向ける。その瞬間に、フィンドールのハサミの中から青紫色の閃光が瞬き始める。それを見て海燕は、すぐさま回避行動をとる。

——虚閃。

ハサミから放たれた光線は、先程まで海燕が居た建物の一部を削り取っていく。それを回避した海燕は、空中でフィンドールの動きを眺めていた。だが、次の瞬間フィンドールの姿が海燕の前から消える。

しかし、僅かに見える軌跡で相手がどこに動いたのかを見極めた。その場で回れ右をして振り向くと、右腕の巨大なハサミを振ろうとしているフィンドールの姿があった。それを見て海燕は、迷わず斬魄刀で防御する。

「うおっ！」

だが、刀剣解放し膂力が上昇していたフィンドールに圧され、海燕はそのまま後方に吹き飛ばされていった。そんな海燕に対し、フィンドール先程のようにハサミを構える。そしてハサミの間からは、再び青紫色の閃光が瞬き始める。

だが、放たれたのは“虚閃”ではなく“虚弾”であった。虚閃よりも威力は低い、その分溜めは早く、すぐに撃つことが出来る。追撃するという意味でならば、フィンドール風に言えばその行動は“正解”であった。

自分に向けて放たれる数々の虚弾に対し、体勢を崩している海燕は防御をすることにした。

「縛道の三十九・『えんこうせん円閨扇』!!」

海燕の目の前に、円型の霊圧の盾が形成される。それは次々と放たれる虚弾から海燕を守るが、長くは続かなかつた。十発程、霊圧の弾丸を受け止めた盾はガラスのように砕け散っていった。そのままであれば、虚弾は海燕の身体を容赦なく颯るのを開始するのであるが、今の一瞬の間に海燕は体勢を立て直していたため、何とか虚弾の嵐が自分の身体を蹂躪する前に瞬歩で抜け出すことに成功した。

そのまま逃げるのであれば追撃されるのは目に見えている。そこで海燕は、遠距離攻撃に打って出た。

「君臨者よ。血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ。雷鳴の馬車、糸車の間隙。光もて此を六に別つ。双火の壁に双蓮を刻む。大火の淵を遠天にて待つ——縛道の六十一・『六杖光牢』!!」

先ずは、光の帯で相手の動きを縛ろうとする。そして海燕が繰り出した光の帯は、フィンドールの胴を穿って、その動きを止める。それに対しフィンドールは、光の帯を左腕の小さなハサミを使って次々に帯を砕いていく。

だが、その時間があれば海燕は次の行動に移れた。

「——破道の七十三・『双蓮蒼火墜』!!」

海燕が手の平から青い爆炎を放つ。それは現在縛られているフィンドールに向かって、空中を駆けて行った。その熱と衝撃により、近くにあった建物のガラスは割れていく。

喰らえばただで済まない一撃。それに対しフィンドールは、虚閃や虚弾を放った時のように右腕のハサミを構える。

海燕は、青い爆炎の後ろで何が来るのかと身構えていた。虚閃であれば、瞬歩で躲して一気に攻め込んで近距離戦に持ち込む。虚弾であれば、同じく瞬歩で躲した後距離を取るのが正解であろう。

だが、フィンドールは海燕の予想していた攻撃とは違うものを放ってきた。言い表すならば、何かが噴き出したような音。それが聞こえた瞬間に、海燕は反射的に首を傾けていた。

首を傾けたままフィンドールの方に目を向けると、先程自分が放ったはずの爆炎が、横に真つ二つに両断されていた。そして次に、何やら空気が湿っていることに気付いた。何か蒸発したかのような、ム

シツとした感覚。それは、海燕が流水系の斬魄刀を扱っているからこそ感じ取れた感覚。

そして、先程自分を通り過ぎて行ったものを確認すべく、後ろを振り返る。すると、背後にあったコンクリートで出来ている筈の電柱が、綺麗に両断されている光景が目に入った。

「っ……高圧水流かよ!!」

「『正解』^{エサクタ}！だが、敵から目を離すのは良くない。『不正解』^{ノ・エス・エサクト}——

——……残念だ、死神！」

一瞬目を離れた海燕に、フィンドールは再び高圧水流を——

^{テイヘラス・ネフトウネア}

「海王鋏」を繰り出す。それを少し上に飛びあがって回避する

海燕だったが、それに対しフィンドールは続けざまに「海王鋏」を放つ。

クモの巣のように重なり合う水流のカッターに、海燕の視界は支配される。このままでは、海燕の身体は先程の建物のように身体を刻まれてしまうだろう。

——んなことは死んでも御免だ。こちらら、まだ子供もいねえんだぞ。

海燕は瀨霊廷で、自分達の帰りを待っている妻の姿を思い浮かべる。一度、自分は死にかけて。もしあのまま死んでいけば、妻は悲しみに明け暮れていただろう。それを理解した今は、どんなことがあっても死ぬわけにはいかない。そう思った海燕は、斬魄刀を構える。

「水天逆巻け——

『振花』^{ねしほな}」

海燕の手に持っている刀が変形し、三又の槍に姿を変える。それと同時に、槍の先に凄まじい量の水が生まれる。

そして勢いのままに槍を振り上げる。その際に、槍の先に纏っていた水が波濤となり、フィンドールの放った水流のカッターを悉く打ち砕いていく。

その光景には、フィンドールも少し驚いたような表情を浮かべる。

「——成程。その槍が、君の斬魄刀か」

「おうよ。お互い、水を操る能力たあ気が合うじゃねえか」

そう言って海燕は、振花を手首で何回転かさせた後に肩に担ぐ。そんな海燕に対し、よく見えるようになった顔で、フィンドールは笑みを浮かべた。

「成程……似通った能力ならば、はつきりできるな」

「…………どっちが上か、か？」

「^{エサクタ}正解!!」

そう言ってフィンドールは左腕の小さなハサミで、残っている仮面の名残をさらに割る。それによって先程まで隠されていた右目も見えるようになる。

この破面は、仮面を削る度に戦闘能力を上げていった。つまり今のも、この破面の戦闘能力は向上した。そう思っただけで、振花の切っ先がフィンドールに向くように構える。

「ふん……九割の仮面をはぎ取った俺の力は、隊長格と同等!!副隊長の君では、俺に敵う筈などない!!」

「隊長格と同等……………?……………そうか」

フィンドールの言葉に、少し怪訝な顔を見せた海燕は迫りくるフィンドールに向かって槍撃を持って相対す。フィンドールの巨大なハサミと、海燕の振花のリーチは大体同じ。だが腕とハサミが一体化しており、尚且つ臂力も上がっているフィンドールの方に軍配が上がると思われる。フィンドール自身も、仮面をはぎ取り力を上げたため、自分が海燕に勝つのは当然の断りであると確信していた。

「ぐっ……!?!」

だが、押されているのはフィンドールの方であった。

海燕の扱花は、常に槍先に波濤を纏っている。その波濤が、剣戟を繰り広げる際にフィンドールが不利になるように働いていた。水の中では抵抗が起きてしまうため、扱花とハサミが衝突する際に、フィンドールの攻撃の勢いがそぎ落とされてしまう。逆に海燕の攻撃に關しては、波濤に圧されるフィンドールをどんどん攻め入っている。両者の主武器がぶつかる度に、フィンドールのハサミに少しずつ罅が入っていく。

それを見て、フィンドールは距離を取ることにする。響転で一氣に海燕から離れ、『海王鋏』を何発も放つ。だがそれらは、海燕の扱花の一振りにより只の水しぶきにされていく。

「な……何故だ!?!何故俺の『海王鋏』が……!?!」

「……俺の『扱花』は、槍撃と共に巻き上げた波濤で、相手を圧碎・両断する斬魄刀……」

海燕は丁寧な自分の斬魄刀の説明をする。そして、高い位置で扱花を構える

「簡潔に言っただけよ。てめーは、俺よりも弱いってことだ」

「なっ……!」

そんなことは在る筈がない。自分の『彫面』は、剥いだ仮面が多いほど、そして残った仮面の名残が少ない程自分の力を向上させるのである。今の自分は、護廷十三隊の隊長に匹敵すると自負していた。だが、目の前に居る死神は、そんなフィンドールの考えを自分の放った技がそうであったように、悉く打ち砕いていく。

焦るフィンドールを前に、海燕は舞を思わせる槍捌きを見せる。

「くっ……舐めやがって……!!」

「別に舐めちやなんかいねえよ」

「黙れ!」

フィンドールは叫びながら、海燕の足元に向かって虚閃を放つ。着弾した虚閃は、地面で爆発を起こし、さらにコンクリートを砕いて海燕の視界を悪くしていく。煙が立ち込めたのを確認して、フィンドー

ルは一気に肉迫していく。

——油断しているだろう、今がチャンスだ！

相手は、自分のことを格下に見ている。癩ではあるが、それはつまり自分に対して油断しているのと同義であると、フィンドールは考えた。

この一撃で、あの死神の首を刈り取る。

その考えを胸に、フィンドールは一世一代の攻撃に出る。

「……………舐めやがってはこっちの科白だよ」

だがフィンドールの放ったハサミの一撃は躲され、代わりにフィンドールの横に位置していた海燕が、波濤を纏った槍先で胴体を一閃する。激流が凝縮されたような一撃に、フィンドールの鋼皮は容易く破られ、次の瞬間にはフィンドールは胴体から大量の血液を含んだ水を辺りにまき散らした。そしてそのまま、地面に崩れ落ちた。

ピクリとも動かなくなったフィンドールに、海燕は振花を肩に担ぎながら言い捨てた。

「護廷十三隊、舐めんじゃねえよ」

抜刀

さあ抜け

戦は既に

始まっているのだから

「あいつら……全員やられやがった……」

「……バカが……！」

バラガンの四人の従属官がやられたのを、同じ従属官であるニルゲとジオルヴェガは一筋の汗を流していた。それは、辺りの気温が高いからではない。寧ろ、背筋が凍るような感覚に陥るほどの恐怖を感じているからだ。

そしてそれは、二人の考えていた通りに起こった。

バラガンが、座っている椅子肘掛けの先の部分を握りつぶしたのである。派手な音が鳴り響かせながら、バラガンは椅子から立ち上がるとうとする。

それを見て、二人はすぐさま跪く。

「申し訳ありません、バラガン様！ 奴等是我々がすぐに始末して参りますので、どうぞお座りになってお待ち下さい！」

何とかバラガンの怒りを納めようと、ジオルヴェガは声を張り上げる。遠くまで響くようなしつかりとした声は、バラガンを何とか椅子に留める効力を発した。

だが、代わりに何者かがバラガン達に近付いてくる。

「誰を始末するだど？」

来たのは、羽織を羽織る少女のような容姿の者。そしてふくよかな男に、褐色肌のすらりとした体躯の男。

「返答次第では、私がお前から始末するぞ」

そう言って、彼女——碎蜂は腰の後ろ側に差していた鞘から、斬

魄刀を引き抜く。それと同時に、後ろに居た大前田と朝霧も斬魄刀を引き抜く。

空気が張り詰める。

ジオルヴェガは、二体三であることに少し顔を歪める。一人は羽織を纏っていることから隊長であることは間違いない。そしてもう二人は、副隊長やそれに近い實力を持っている者だと考える。先程の四人の戦いから解るのは、副隊長クラスであれば、中級大虚から破面化した者を倒す實力を持っているということである。それは勿論、自分達が負けることを仮定しているのではなく、戦場における冷静な分析である。何の考えもなしに突っ込むという事は、即刻死に繋がる事象であるのだ。

そんなことを考えつつ、ジオルヴェガは斬魄刀を抜く。ニルゲに關しては肉弾戦が得意である為、斬魄刀は抜かない。

「――二対三とは、感心しないな」

「っ！」

突如、背後から聞こえた声にジオルヴェガは振り向く。其処に立っていたのは、元バラガンの配下であり、側近であった者。

「レイチエル……………」

ジオルヴェガが目を見開くのをしながら、レイチエルは後ろに視線を移す。そこには険しい表情を浮かべているバラガンの姿があった。

玉座に座っている「大帝」の姿を見ながら、レイチエルは斬魄刀を抜く。

「……………王ならば坐^まして待て」

「……………ふん。言うようになったな、小童が」

バラガンの言葉を聞いて、レイチエルはすぐに目の前の敵に視線を移す。目標は、羽織を纏っている隊長である。

それと同時に、他の十刃と従属官達も一か所に集まってくる。それは死神達も同じで、碎蜂達の周りに何人が集まってくる。破面のトップたちと、死神のトップたちが並んで相対している光景は壮観であった。

全員が何かしらの動きを見せている中、動いていないのは藍染達を

除いて二人。

——護廷十三隊一番隊隊長・山本元柳齋重國。

セグンダ・エスパーダ

——第2十刃、〃大帝〃バラガン・ルイゼンバーン。

数秒の静寂の後、金属の擦れる音が幾つも鳴り響く。

「——かかれ!!!」

元柳齋が叫ぶ。それに伴い、死神達の目の色が変わる。そしてそれを見た破面達も警戒を強めるか、剣を構える。

「全霊を賭してここで叩き潰せ！肉裂かれようと、骨の一片までも鉄壁とせよ!!奴等に、尸魂界の土を一步たりとも踏ませてはならぬ！」
元柳齋の気合いの籠った声に、空気が一瞬にして張り詰めていく。そして次の瞬間には、宙で幾つもの衝突が起こっていた。

その中で、レイチエルと相對したのは女物の羽織を着て、笠を被っている中年の男。レイチエルはロングソードの形状の斬魄刀で、その男の放つ斬撃をいなしていく。そして剣戟が五秒程続いたところで、男は一旦レイチエルから距離を取った。

今の一瞬の攻防で分かった。目の前に居る死神は強者である。勿論、女物の羽織のしたに隊長羽織が見えることから、隊長であることは間違いなく強いのは当たり前なのであるが、それでも洗練された動き。一撃一撃の重さ。そしてその速度など、色々な事柄を総合した結果、手練れであると判断した。

レイチエルがそのように判断した男は、ふう〜と息を吐いて、レイチエルを見据える。

「君、強いねエ。正直びっくりしたよオ」

「……………安い賞賛は止めろ。骨まで透けて見えるぞ?」

「おオっと、怖い怖い」

男——八番隊隊長・京楽春水は、レイチエルの静かな声に対し、両手を上げて怖がる素振りを見せる。勿論そんなことはないのだが、こういったお茶らけた挙動を見せるのが京楽という男だ。

声色こそ軽いが、レイチエルを見据えるその視線は凄惨なものである。それを感じ取っていたからこそ、レイチエルは今の軽口を、冷たく切り離した。

そしてレイチエルは、斬魄刀の切っ先を京楽の心臓のある位置に向ける。

「安心しろ……………まだ恐怖など与えていない」

「……………それは、君がボクに怖がらせる手段を持つてることかな？」

「戦えば……………解る！」

そう言つてレイチエルは響転で京楽に肉迫する。それを見て京楽も斬魄刀を構え、攻撃に備える。

京楽春水 VS レイチエル・セレーナ、開戦。

「……………どうした？ 剣を抜かねえのか？」

十番隊隊長・日番谷冬獅郎は、目の前の破面に対しそう言った。一人はボサボサの髪の毛の男の破面であり、もう一人は若緑色の髪の毛の少女である。

冬獅郎の言葉に、男の破面——スタークは頭を掻きながら口を開く。

「……………どうしても、やんなきゃいけねえのかい？」

「……………どういう意味だ？」

スタークの言葉に、冬獅郎は怪訝そうな表情を浮かべる。素直に理解するのであれば、この男は自分とは戦いたくないと言っているであろう。問題はその理由である。敵である自分に対し、この破面が容赦をする訳がない。そう考えるのであれば、実力に差があるのでやり合うまでもない。そういう風に捉えることが出来る。そしてさらにその逆もあり得るが、それは限りなく零に近い可能性であろう。そして最後に、元々この破面が戦いを好まない性分であるのか。この三つの考えの中では、最後のが一番目の破面に合っている物であると考えられる。

「…………俺ア、あんまし全力で戦いたくないんでね。どうにか戦つて
るフリだけして、他の連中の戦いが終わんのボンヤリ待てねえかな」
「…………悪いが、そういう訳にはいかねえんだよ」

スタークが戦いを好まない性格であることは分かった。それはつまり、自分と長々と他の者達の戦いが終わるまで戦うフリをするという意味である。そのままの意味であるが、冬獅郎はその意味の奥にあるものを理解し、表情を険しくした。ずっとこの者と戦うというのは、その後に控えている藍染と戦えないということである。それを理解した瞬間に、スタークの考えは自分と相いれないものだとは判断し、斬魄刀を構えた。

スタークは、殺気立つ冬獅郎に対し『地雷でも踏んだか…………?』とぼやきながら、腰に差している斬魄刀を抜く。そして横で、冬獅郎の霊圧に圧されているリリネットを手で押さえる。

「リリネット。下がれ」

「なっ…………何で!？」

「いいから下がれ。死にたくなきゃな」

つまり、下がらなければ死ぬという事を察し、リリネットは渋々とスターク達から離れて行った。それを確認した後、スタークはため息を吐く。

「…………つたく、面倒臭えこった」

日番谷冬獅郎 VS コヨーテ・スターク、開戦。

別の場所では、女同士が見つめ合っていた。

一人は、少女のような体躯のおかつぱ頭の女性。

もう一人は、金髪で褐色肌のグラマラスな体形の女性。

「…………貴様が、私と戦うのか」

「そうらしいな」

碎蜂の言葉に、ハリベルが背中の斬魄刀の鍔の丸い部分に指を掛けて、そのまま鞘から引き抜く。それを見て碎蜂は、逆手に持っている斬魄刀を構える。

(中心部の空いている短剣……随分と特徴的な形状だな)

碎蜂は冷静に、ハリベルの斬魄刀を分析する。幅の広い刀身であり、その中心部は割りぬかれている。短剣であるため、自分とのリーチはさほど変わらないであろう。中心部がくりぬかれている為、もしかしたらそこを狙って攻撃できるかとも考えたが、相手はそこまで甘くはないだろう。空洞を狙って突き出した瞬間に、そのまま刀身を傾けられて折られるのが関の山だろう。ならば、あれは今の所は只の刀として見るべきである。

ならば、敵に攻撃を加えたとしたら、隠密機動の専門分野である「白打」で仕掛けるべきであろう。

考えが纏まり、碎蜂は相手を出方を伺うように見つめる。

そんな碎蜂に対し、ハリベルは斬魄刀を突き出す。

「——
〃波蒼砲〃」

「っ！」

その瞬間に、ハリベルの斬魄刀から黄色の霊圧の刃が飛び出してくる。それは碎蜂目がけて飛んでくる。だが、相手の出方を伺っていた碎蜂にとつて、直線で向かって来る攻撃など回避するのは容易いことであった。迫りくる霊圧の刃を瞬歩で回避し、そのままハリベルの背後に回り込む。

そして逆手に持っている斬魄刀を一気に振り抜こうとするが、ハリベルも碎蜂の動きを捉えており、すぐに斬魄刀で防御される。

そのまま両者は、一旦距離を取って相手を見据える。

碎蜂 VS ティア・ハリベル、開戦。

「ちっ……あの小娘、ハリベル様と……！」

碎蜂がハリベルと戦っているのを見て、アパッチが齒齧みをする。アパッチはハリベルに加勢しようとするが、それをミラ・ローズが引き止める。引き止められたことに対しアパッチは眉間に皺を寄せるが、ミラ・ローズは視線を動かして敵の存在を示す。

ハリベルの従属官である三人の前に現れたのは、同じく三人。そしてその三人全員女性であった。

「……雛森。もう大丈夫なの？」

「はい……あたしは、五番隊の隊員を預かる者として”ここに来ています”」

ハリベルの従属官達の前に立ちはだかる三人の内、乱菊が雛森に向かって心配の言葉を投げかける。雛森は、以前の藍染の反乱の際に胸を突き刺された。その傷自体は大分早く治ったが、それでも今まで信じ、憧れていた者に裏切られたという事実は、雛森の心に大きな傷跡を残していたのである。

そして日番谷が引率となった先遣隊の報告の際に、雛森は冬獅郎と話したが、その際にも未だに藍染に裏切られたことを信じられずに錯乱してしまったのである。

そんな雛森が、直接藍染と戦うこの決戦に於いて、取り乱すことなく戦えるのが乱菊には心配だった。

「”藍染隊長の部下として”じゃありません」

「……そう。ならいいわ。雛森。まつ梨。気張っていくわよ」

「はい！」

雛森が”藍染隊長”と言ったことに対し、若干の引つかかりを覚えたが、あの目であるならば大丈夫だろう。そう思い、乱菊はまつ梨にも声を掛け、三人に相對そうとする。

数は三体三。数の上では互角であるが、相手がどの程度の実力であるのかは解らない。そして最初の内は、是が非でも有利でなくてはならない。そうでなくては、破面には”刀剣解放”があるのでから、出来る限り解放する前に決着をつけることが出来れば御の字である。

そう思いながら、乱菊は二人と共に向かって行くのであった。

松本乱菊&雛森桃&宮能まつ梨 VS エミルー・アパッチ&フラ
ンチエスカ・ミラ・ローズ&シイアン・スンスン、開戦。

「……………大丈夫ですか？大前田副隊長」

「は、はあ!?何訊いてんだし!?部下に心配される程、俺ア弱かねえよ!!」

敵を前にしてプルプルと震えている大前田に対し、朝霧は心配そうな目を向けながら訊く。それに対し大前田は、挙動不審になりながらも強気な発言をする。

そんな大前田に対し、朝霧はフツと笑みを見せる。

「なら良かったです。久し振りの実戦で緊張なされているのかと思っただので」

「……………お前、何か最近冷てえよな……………」

大前田は入隊当初の朝霧の事を思い出す。あの頃は、凄まじい程真面目で、会う度に廊下中に響き渡る挨拶をする熱い新人というイメージが強かった朝霧であるが、ここ最近はかなりクールなイメージになってきた。それが、朝霧がある隊長に憧れて、頑張っって似せているというのは本人以外知る由もない。

大前田は、『そうです！大前田副隊長は実力者であります！頑張ってください！』というような励ましを期待していたのであるが、かなりクールな雰囲気で突き放されたような気がして、一抹の寂しさを感じていた。

そんなことを思いつつ、大前田は目の前の破面に目を向けた。

「……………どちらがどちらを相手致しましょうか？」

「ど、どっちがどっちってよオ……………そりゃあ、体格が似てる方にしようぜ」

「了解致しました」

大前田の言葉を聞き、朝霧はすぐさま瞬歩で二人居る破面の内の、髪を三つ編みにして、さらに頭にサーベルタイガーのような頭蓋骨の仮面の名残を有している方の前に立つ。

朝霧が自分に狙いを定めたということが解り、ジオⅡヴエガは口を吊り上げながら斬魄刀を構える。それに伴い、隣に居たニルゲが大前田の方に狙いを定めて移動していく。

「へっ……アンタが俺の相手をしてくれるのかよ」

「はい。二番隊・四楓院朝霧です」

「名乗るなんて、随分ご丁寧だな……俺はバラガン陛下フランシオンの従属官、ジオⅡヴエガだ」

「そちらも名乗って頂けるとは、恐縮の至りです」

互いに名乗り合った後、二人の間には静寂が訪れる。

「――！――」

直後、二人は互いに肉迫し激突する。両者の有していた斬魄刀が激突し、金属のぶつかり合う甲高い音が鳴り響く。互いに逆手で持っている為、順手で持っているよりも両者の鏝迫り合いの際の距離は近くなる。その分、相手の攻撃を受けやすくなるが、“白打”を得意とする朝霧にとっては自分の領域である。

ジオⅡヴエガの左足による蹴り上げを、朝霧はそのまま体を捻り、その際に自分の右足をジオⅡヴエガの膝の裏に掛けるようにして受け流す。

「っー」

自分の蹴りを繰り出した勢いと、朝霧の捻りによってジオⅡヴエガはその場で回転する。そして朝霧は、ジオⅡヴエガと一緒に一回転程した時に、左足を振り下ろして攻撃する。踵落としに近い攻撃は、浅くではあるがジオⅡヴエガの胴に当たってそのまま吹き飛ばすに至る。

ジオⅡヴエガが吹き飛んでいる間に、朝霧は次の攻撃の準備をする。ジオⅡヴエガも飛んでいる最中に体勢を立て直し、何とか近くの建物に着地する。

再び、両者の睨みあいが始まる。

だが一秒も経たずに両者はそれぞれ瞬歩と響転で接近し、激突する。

四楓院朝霧 VS ジョルヴェガ

大前田日光太郎右衛門美菖蒲介希千代 VS ニルゲ・パルドウツ

ク、開戦。

烈風

荒れ狂う戦場

駆けるのは

風と虎

「フーン！」

ジオンヴェガは、目の前の朝霧に対して斬魄刀を振るう。その一撃に対し、朝霧は右手で逆手に握っている斬魄刀を突き出し、受け流す。流れるように二人は交錯し、距離が離れると両者はすぐさま振り向いて相手を補足する。

そして朝霧は、再び接近してくるジオンヴェガに対し、左手の人差し指を突き出す。

——破道の四・『白雷』びやくらい」

「——！」

人差し指から、弾丸のように一筋の光線がジオンヴェガに向かって行く。それに対しジオンヴェガは、身体を捻ってギリギリの所で回避する。かなりの速度の攻撃であったが、その分細い光線であった為、少し動くだけで躲すことの出来る攻撃であった。しかし、それを避けられるとは、朝霧は理解していた。

今のは只の牽制。

そのまま朝霧は、左手を広げる。

「——破道の三十一・『赤火砲』!!」しゃつかほう

火炎の弾が、朝霧の左手に形成される。そしてそのまま、向かって来るジオンヴェガに対して“赤火砲”が発射される。迫りくる“赤火砲”に対し、ジオンヴェガも只で喰らう筈が無く、左拳に霊圧を込めて虚弾を放つ。

両者の間で、霊圧の弾丸がぶつかり合い爆発を起こす。爆炎と黒煙が辺りに立ち込め、さらにそれらによって視界も悪くなる。

(小癩な！)

探查回路を用いれば、この程度の視界不良などあつてないもの。そう思いながら、ジオⅡヴェガはそのまま黒煙の中を突き進んでいく。そして先程まで朝霧が居たところに向かつて、斬魄刀を振り下ろす。

だが、斬魄刀は煙を振り払うだけで、その場には何者も居なかつた。

これは予測できたこと。問題は次に相手がどう仕掛けて来るのかである。するとジオⅡヴェガは、自分に影が掛かっていることに気付く。つまり、何かがジオⅡヴェガの上に居るといふ事。ジオⅡヴェガはすぐさま視線を自分の上に向ける。

「破道の五十八・『てんらん嵐』!!」

朝霧は、斬魄刀を手首に掛けてそのまま回転させる。すると、回転する斬魄刀から竜巻が発生し、ジオⅡヴェガに襲いかかる。竜巻は辺りに拡散している黒煙を巻き込みながら、ジオⅡヴェガの身体を斬り刻もうとする。

——成程。二段構えか。

爆発によつて起こつた黒煙で視界を悪くさせつつ、竜巻でそれらを巻き込み、相手の視界だけを悪くさせて攻撃する。最初の火炎弾で敵に火傷でも負わせられたら御の字。そうでなくても、次の攻撃では確実に捉える。

「だが……舐めるな!!」

竜巻で照準がずれながらも、ジオⅡヴェガは虚閃を放つ。それを目の当たりにして、朝霧はすぐさま瞬歩でその光線を回避する。虚閃は範囲が広い。いくら狙いが定まっていなくても、万が一にも命中する可能性はある。もし喰らってしまったら、少なくともダメージが入ることを朝霧は理解していた。

それを考慮するならば、目先の一撃よりも、後の戦闘のしやすさを取つた方がいい。自分が“白打”を主体にする以上、身体にあまりダメージを蓄積するのは悪手である。

そう考えつつ距離を取つた朝霧に、ジオⅡヴェガは牽制の意味の虚弾を放ちながら接近する。

「くっ……縛道の三十七・『つりぼし吊星』!」

虚閃の二十倍の速度を誇る虚弾は、幾ら瞬歩が得意である朝霧ですら延々と回避するのは難しい。朝霧は、ジオⅡヴェガの虚弾に対し、自分の目の前に「吊星」を展開する。本来は、落下や吹き飛ばされた際の衝撃を緩和するのが使い方であるが、それを朝霧はあろうことか自分の目の前に展開したのである。

その霊圧の床に対し、虚弾の嵐が次々と襲いかかる。一撃で破ることが出来るだろうとジオⅡヴェガは思っていたが、その考えに反して朝霧の目の前に展開された霊圧の床は、虚弾を幾つも柔らかく受け止めていく。勿論、ずっと受け止める事などは出来ない。しかし、僅かであるが勢いを緩和されるように受け止められる事により、その床を破ることに予想以上の時間を要した。

実際は数秒のラグ程度であるが、高速戦闘を主体とする二人にとってはそれでもかなりの時間。

(どこだ……!?)

ジオⅡヴェガは、破られた「吊星」の先に居る筈の朝霧を探す。だが、いくら探してもその姿は見つけることが出来ない。探查回路を開き、そして頭をあっちこっちに向けてその姿を捉えようとするが、中々見つける事は出来ない。

だが、自分の下側から風が自分の肌を触れていくのをジオⅡヴェガは感じた。

「薙げ——『かげかぜ陰風』……『れつ烈』!」

斬魄刀を解放した朝霧は、その刀身に纏っている風を、刃としてジオⅡヴェガに放つ。迫りくる風の斬撃に、ジオⅡヴェガは左腕を盾にするようにして防御する。そのまま風の刃は、ジオⅡヴェガの腕と庇いきれなかった胴の一部分に傷を付ける。裂傷からは幾らかの鮮血が宙を舞う。

それに対し、ジオⅡヴェガは自分の鋼皮が破られた事に驚く。自分の鋼皮は破面の中でも決して高い方ではない。だが、それでも破面の鋼皮の硬さはかなりのものであり、只の斬撃では傷一つつけることが出来ない。

近くで戦闘を繰り広げている大前田とニルゲの戦闘が良い例であ

る。大前田が必死に斬魄刀をニルゲに振るうが、一切傷が付くことは無い。

ジオⅡヴェガは迫りくる風の刃に対し、『たかが風』と高をくくっていたが、それは間違いだったようである。相手の力量は、向こうの副隊長とやらよりも上である。膂力はこちらの方が上。だが、テクニクや機転、そして移動速度によってこちらの力に食いついている。

思ったよりも実力のある相手。そしてその戦闘スタイルは限りなく自分に近い。さらにその相手が、たった今自分の前で斬魄刀を解放した。ならば、やることは一つである。

「いいぜ……俺に傷を付けたんだ……しっかりと俺の実力を見せてやらねえとな！」

そう言つてジオⅡヴェガは斬魄刀を構える。それを目の当たりにして、朝霧は目を見開く。

「喰い千切れ——『テイクレストローク虎牙迅風』！」

ジオⅡヴェガが解号を唱えると、旋風がその身体を包み込んでいく。その光景に朝霧は攻撃を警戒して、斬魄刀に風を纏わせたまま構える。

そして数秒して漸く、ジオⅡヴェガが旋風の中から現れる。拳法着と巨大化した三つ編みが縞模様のように彩られ、虎のような姿に変わる。そして額に沿うように一本、両側の頬に左右対称の三本の仮面紋が出現する。そして両腕の手首には、武器と思われる刀が生えていた。

仰々しい変化は無い。だが、それはつまり見た目にはさほど変化がないだけであり、他の何かしらの能力が上がっているという事になる。身体能力か。それとも、今迄に無かった能力を繰り出してくるのか。

ともかく朝霧は、刀剣解放したジオⅡヴェガに対し、最大の警戒を払っていた。

「へっ………行くぜ、四楓院朝霧イ！」

（——迅い！）

響転で一瞬にして迫りくるジオⅡヴェガの速度に、朝霧は驚く。そ

んな朝霧に対し、ジオⅡヴェガは右腕についている刀を突き出す。それを紙一重の所で回避する朝霧であったが、ジオⅡヴェガは次々と刀の刺突を繰り返して行く。

朝霧は、斬魄刀で受け流すなり、身体を最小限に動かしながら何とか致命傷は避けていく。だがその分、小さな裂傷が朝霧の身体に幾つも刻まれていく。

「どうしたア!? アンタも解放したんだから、もうちよつと頑張つてくれよ!! 俺が解放した意味が……」

ジオⅡヴェガは凄まじい連撃の最後に、回し蹴り放つ。

「——— ねえだろうがア!!」

「ぐっ……!!?」

それを朝霧は両腕を交差させて防御するが、そのまま吹き飛ばされて後方の建物に突っ込んで行く。その建物は、今の衝撃で幾らか崩れ落ちる。そしてその際の瓦礫が、朝霧の身体に降り注いでいく。

瓦礫と共に発生した埃により、視界が悪くなる。ジオⅡヴェガはわざとらしく咳払いをした後に、左手を目の前の建物に向ける。その手の平には、禍々しい色の閃光が瞬いている。

「おいおい………この程度かア!?!」

そう叫びながら、ジオⅡヴェガは目の前の瓦礫の山に虚閃を放つ。放った虚閃は、目の前の瓦礫を消し飛ばすだけでなく、建物にトンネルのような空洞を穿った。

今迄の自分であれば、これで仕留めたと考えるであろう。だが相手の足の速さはかなりのものである。つまり———。

「そういうことだろ!?!」

「——— 陰風三式 嵐!!」

ジオⅡヴェガは、自分の背後に回り込んでいた朝霧に視線を移す。瓦礫に埋まつてからここに来るまでたった数秒で動いたことは、賞賛に値する。だが、敵に情けをかけるつもりはない。

朝霧の放つ無数の風の刃を、ジオⅡヴェガは両腕の刀で次々と打ち払っていく。数は多いが、その分先程のものよりは幾分か威力が落ちている。刀剣解放している自分にとっては、この程度の攻撃は容易く

打ち砕くことが出来る。

ジオⅡヴェガは自分に迫りくる風の刃を全て打ち払った。それを目の当たりにして朝霧は、眉間に皺を寄らせて険しい表情を浮かべる。

そんな朝霧に、ジオⅡヴェガは響転で肉迫する。

「へっ………この程度か!!」

得意げな表情で、ジオⅡヴェガは朝霧に両腕の刀を振り下ろす。それに対し朝霧は、斬魄刀を正面に構えて受け止めようとする。これまでの戦いを考慮したのであれば、朝霧はジオⅡヴェガの膂力のままにそのまま吹き飛ばされるか、地面に打ち伏せられるだろう。

そしてジオⅡヴェガは、そのまま刀を振り下ろす。

「……っ!?!」

だが、ジオⅡヴェガはあるところまで刀を振り下ろしたところで、動きを止めた。そしてすぐさま、朝霧から距離を取った。ジオⅡヴェガは自分の腕の刀を確かめる。すると、刀身に綺麗に亀裂が入っていたのである。

「な………何でだ………?」

「………貴方は少し勘違いしているようだ」

驚いているジオⅡヴェガに、朝霧は落ち着いた声で話しかける。

「貴方は、私の斬魄刀である『陰風』を『風を放つ』斬魄刀と捉えている。強ち間違いでもありませんが、私の斬魄刀は風を放つのではない………」

そう言つて朝霧は、陰風を地面に少し突き刺す。するとコンクリートの地面が派手な音を立てながら、罅を広げていく。その光景に、ジオⅡヴェガは瞠目する。

一体何をした?

ジオⅡヴェガは、それを見ても『風を放つ』という風にしか見えな
いと思つた。

「——『風圧を操る』斬魄刀だ」

「………どういう意味だ?」

風圧を操るとは、一体どういう意味であるのか。風を放つのはど

ういう風に違うのか。ジオⅡヴェガは、必死に自分の頭をフル回転させて考える。その『風圧』が、自分の刀に容易く亀裂を入れた原因であるのか。

そんなジオⅡヴェガに、朝霧は陰風の切っ先を向ける。

「……陰風には、一定の範囲の風圧を支配する能力があります。範囲内に存在する総量までは操れませんが……」

——圧縮する事が出来ます。

「っ……!?!」

「圧とは、対象に触れる面積が小さければ小さい程、大きくなってゆくもの……ここまで言えば解りましたか？」

「……………成程な……………」

つまり先程、ジオⅡヴェガの刀の刀身が削られたのは、その風圧とやらを刀身に圧縮したことにより、凄まじい“圧”を刀身に発生させられていたからである。あれは、朝霧の刀によって削られたのではない。朝霧の持つ刀の刀身に触れることなく、風圧で削り落とされたという事である。

丁寧に説明された為、対策を練る事が出来るかと言われたら、そうではない。風圧を圧縮されたまま近距離戦を挑まれたら、朝霧の刀によつて触れた部分から切り刻まれてしまう。逆に遠距離戦を挑まれたら、近距離ほど苦戦することではないが、延々と虚閃と風の刃の撃ち合いになるだけである。

つまり、今説明したのは、ジオⅡヴェガに近距離戦を躊躇わせるため。そうでなくても、今迄よりは近距離戦に於いて、ジオⅡヴェガが神経を使うことになるため、精神的に疲労させることにより、隙を突くことが出来る。

「はっ……………良く考えてるな……………」

「お褒めにあずかり光栄です。地力で差がある以上、こういった小細工も必要になってくるので」

「謙遜は止めろよ。この状況で言われたら、嫌味にしか聞こえねえよ」

真顔で話す朝霧に対し、ジオⅡヴェガは眉間に皺を寄せさせる。ジオⅡヴェガは、朝霧の身体をザツと見る。先程、回し蹴りを喰らわせて

吹き飛ばしたのだが、さほどダメージを受けているようには見えな
い。

恐らく、自分の蹴りに合わせて飛び退いてダメージを軽減したので
あろう。建物が崩れたのも、その風圧の操作とやらでそういう風に見
せていただけ。

そう考えると、小細工が上手いことは確かである。だがその小細工
も、かなりの技術を要するものである為、朝霧の言葉が嫌味にしか聞
こえてこなくなりジオ||ヴェガの憤りは増していく。

「……………いいぜ。だったら、その小細工が通用しねえようにするだけ
だ!!」

そう叫んだジオ||ヴェガの身体が、突如大きく膨れ上がってくる。
筋肉が盛り上がり、上半身は異常なほどまで大きくなる。そして両腕
は、先程のように手首から刀が生えているのではなく、腕全体が一本
の爪のように変貌する。

巨大になったジオ||ヴェガの姿を見て、朝霧は瞠目する。

「見る!!…こいつが テイクレストーク 虎牙迅風 の実戦形態…………… 『テイクレストーク・エル・サーブル 虎牙迅風・大剣』
だ!! アンタのその小細工とやら、完膚なきまでに叩き潰してやるよ
!!」

「つ……………」

異常なまでに膨れ上がった筋肉から繰り出される一撃は、今迄の比
ではないだろう。体重が増えた分、速度は遅くなるであろうが、その
分身体は頑強になっている筈。

今までの戦法は、恐らく通用はしないだろう。ここからは、新たな
戦法が要求されてくる。

「さあ…始めようぜ、四楓院朝霧!!…こっからが本番だ!!」

巨大な虎は、目の前の死神に向かって巨大な爪を振り落した。

混獣

知らぬのか？

お前の身体は

他者を喰らい

血を啜り

築き、潤してきたものなのだ

「——ふっ！」

「ふん！」

空座町のレプリカの上空で様々な者達が相対している中、まつ梨はミラ・ローズと戦っていた。まつ梨は、ミラ・ローズに向かって虎淘丸の切っ先を突き出す。それに対してミラ・ローズは、シンプルな形状の剣で横に受け流していく。だが、受け流された剣を、まつ梨は横に振るっていく。その流れに、ミラ・ローズは自ら飛び退く事で難を逃れる。

二人の体形はかなり違う。まつ梨は、標準な女性の体形であるが、ミラ・ローズは成人女性と仮定するのであれば、かなりの高身長且つ、筋肉質である。つまり基礎スペックではミラ・ローズに軍配が上がる。しかし、斬魄刀のリーチであれば解放した虎淘丸の方が長いため、まつ梨に軍配が上がる。

そうとは言っても、刀が短い方が己の筋力を充分に伝えられやすい為、一概にまつ梨が有利という訳でもなかった。

ミラ・ローズに勝つには、僅かなリーチを有効に利用することが必要になってくる。それはまつ梨も充分に理解していた。その為の戦闘方法として、まつ梨は現在「突き」を主体として戦っている。虎淘丸は、完全にはないがほぼ直接攻撃系の斬魄刀に部類される。故にまつ梨にとって近接戦闘は、慣れている部類に入るものである。

「しっ！」

「甘いー！」

飛び退いたミラ・ローズに、まつ梨は追撃して突きを繰り出す。相手が虎掏丸の刀身に刃を滑らせるようにして、まつ梨の懐に潜り込んでくる。その行動に、まつ梨は目を見開きながらも咄嗟に、鏢の部分にあるハバキと刀身の間で、ミラ・ローズの剣を受け止める。

受け止められたことにミラ・ローズは舌打ちする。だが、相手は突きの状態のまま腕に全ての力を込められる状況ではないので、そのまま己の筋力にものを言わせて、剣を振り抜いて受け止めていたまつ梨の身体を後方に吹き飛ばす。

吹き飛ばされるまつ梨は、追撃してこようとするミラ・ローズの姿を瞳に映す。

このままではいいように攻勢に出られるのが関の山の為、牽制の為に左手を目の前の敵に翳す。

「――破道の三十三・『蒼火墜』！」そうかつい

詠唱破棄ではあるが、牽制には十分すぎる威力は出ている。青い火炎が、一直線に向かって来ていたミラ・ローズに命中する。効果があるかど注視していたまつ梨だったが、火炎の中から無理やり突っ切つて来る姿を確認し、すぐさま虎掏丸を構え直した。

斬魄刀を構えるまつ梨に、ミラ・ローズは剣を全力で振り下ろす。直後、刀身が激突したため辺りに甲高い音が響き渡る。

「ぐっ……！――！」

「おらああ!!」

凄まじい衝撃によって柄を握る手に痺れを感じ、まつ梨は顔を歪める。そして追い打ちをかけるようにミラ・ローズはそのまま剣を振り切る。

先程のを含めて二度吹き飛ばされたまつ梨は、体勢を立て直すことが出来ずにそのまま後方にあった建物に突っ込んでいく。

その光景を見ていた乱菊は、思わず声を上げる。

「まつ梨!!」

「他人様の心配してる場合かよー！」

目を離した瞬間に、乱菊と相手をしていたアパッチがラリアットを

喰らわす。それを真面に喰らった乱菊も、地上に向かつて落下していく。そんな乱菊に対しアパッチは虚閃を、額にある仮面の名残の角から放とうとする。

乱菊はこの状況をどうするか頭をフル回転させる。『吊星』で落下の衝撃を緩和するのが最善かと思ったが、それではアパッチの虚閃を避けられるかどうか不安になってくる。虚閃は嫌になるほど範囲が広い。

だが、乱菊が思案を巡らせている間に、アパッチに火球が激突し爆発を起こす。それに伴い溜めていた虚閃も暴発する。

火球が飛来して来た方向に目を向けると、雛森が『飛梅』を振り切った体勢を取っていた。しかし雛森は、すぐさま襲いかかってくるスンスンの猛撃に対処する為に乱菊から視線を離す。

だが雛森が隙を作ってくれた為、乱菊は遠慮することなく『吊星』を展開して着地することが出来た。

(御免ね、雛森……あんたも大変だったのに……)

「……ちっ、あの野郎……！」

すると、先程の火球の爆発によって起こされた黒煙の中から、身に纏う死覇装が幾らか焦げているアパッチが出てくる。その瞳には、自分の邪魔をした雛森に対しての殺意が滾っていた。

このままでは、アパッチが雛森に対してなんらかの攻撃を仕掛ける筈である。もしそうされれば、現在スンスンの攻撃に対処を追われている雛森に追い打ちをかける結果になってしまう。

そうはさせない為に、乱菊は灰状になった刀身をアパッチを取り囲むように展開する。

——『猫輪舞』。

相手の周囲を高速旋回する灰猫で覆い、触れた相手を斬り刻む技である。こうすれば否が応にでも、アパッチの注意は乱菊の方に向く。

刀身が小さい物に分裂し、相手に攻撃を仕掛けるという点で、乱菊の斬魄刀である灰猫は、六番隊隊長の朽木白哉の『千本桜』に酷似している。だが、違いとして白哉の千本桜は花卉に変貌した時点で、その花卉一枚一枚が既に刀身として機能している。それに比べて灰猫

は、乱菊が柄を振るまで刀として機能しないのである。そして千本桜は、無数の花卉を盾のように扱うという芸当が出来るが、灰猫は灰である故にそうするまでの強度がない。刀身が変貌した後の“数”という点では、“粉”というレベルの灰猫の方が勝っているが、数が少ない分霊圧が凝縮されている千本桜の方が、色々と応用が利く。つまり、この技も隙が無いように見えて、相手の攻撃に弱いのである。

「おおらー！」

アパッチは、自分の周りを旋回する灰に向かって虚閃を放つ。その破壊力によって、旋回する灰の一部に大きな穴が穿たれる。それに伴い、灰猫も旋回を止めて宙に拡散していく。

「くっ……灰猫！ハウスー！」

乱菊が声を上げると、灰になっていた刀身が一斉に柄に戻って刀身の形を為していく。そうした理由は、アパッチが自分に攻撃を仕掛けた乱菊に近接戦を挑もうと肉迫してきたからである。

現在、三体三の中でそれぞれlonerで戦っている。アパッチは、自分の実力が目の前にいる牛のように巨大な胸の金髪の女よりも強いと自負している。ならば、感情のままに他の者達の戦いに割って入るよりも、目の前の女をさっさと片付けた方が手っ取り早いと考えたのである。

見る限り、乱菊が得意とするのは中距離での戦闘。ならば、遠距離か近距離が残るのだが、遠くから虚閃や虚弾をチマチマと撃つのは性に合わない。という訳でアパッチは、近距離戦闘を挑むことにしたのである。

アパッチの斬魄刀は、取り外し可能な短い刃の生えている腕輪という、独特な形状のものである。それをフリスビーのように投げて攻撃することも出来るが、いちいち手元に戻すのも面倒臭いとアパッチは考えていた。

「喰らいやがれエー！」

アパッチは、そのチャクラムのような腕輪の武器を乱菊に振り翳す。その一撃を、乱菊は斬魄刀で受け止める。しかし副隊長と言えど

も、膂力では向こうの方が上である。乱菊は、為されるがままに吹き飛ばされていく。

以前、現世に來た破面の内で乱菊が相手をした者はここまで強くはなかった。つまり、あの破面は同じ破面の中でもかなりの格下。限定解除をして簡単に勝てたが、あの時は「刀劍解放」というものをしてはいなかった。そして次の襲來の際のルビという破面は刀劍解放を行い、自分を含める席官三人を相手取っても余裕綽々といった状態であった。あの者は「第6十刃」と名乗ったことから、目の前の破面よりは強い筈である。

今現在戦っている相手は、刀劍解放をしていなくても自分よりも実力は上なのである。つまり、刀劍解放されれば圧倒される可能性が出てくる。それをされる前に何とか片を付けたいが、それは難しいところであろう。

——油断したところの一瞬を突くしかない。

どうすれば、あの破面を倒すことが出来るか。

そんなことを考えながらも、乱菊は相手を牽制する。

「縛道の六十二・『百歩欄干』！」
ひやつぼらんかん

一本の光の柱を、敵に投げつける。それは途中で無数に分解し、アパッチに襲いかかる。アパッチは何とか回避しようとしたが、その数の多さゆえに完全に回避する事は出来ずに、何本か身体に突き刺さる。「百歩欄干」自体に殺傷能力はないが、それでも相手の動きを止めるという面ではかなりの利便性を誇る。

アパッチが自分の身体に突き刺さっている光の柱を抜き捨てている間に、乱菊は印を組む。

「鉄砂の壁。僧形の塔。灼鉄熒熒。湛然として、終に音無し——
縛道の七十五・『五柱鉄貫』！」
ごちゆうてつかん

突如、アパッチの頭上に五つの五角形の柱が現れる。それらは、光の柱を抜き捨てているアパッチに降り注ぎ、腕や首に命中し身体を拘束しながら地上に落下していく。思わぬ攻撃に、アパッチは驚いたような表情を見せる。

「ちっ……んだ、こりゃ!?!」

「あの馬鹿……！」

その光景を見ていたミラ・ローズが、相手をしていたまつ梨を放つてアパッチの救援に向かう。このままでは、アパッチの首が斬り落とされるのも時間の問題であろう。

だが、ミラ・ローズがアパッチを救出する前に、アパッチは動いた。

「突き上げろ——『碧鹿シエルバ闘女』ア!!」

「っ……！」

アパッチが刀剣解放を行い、霊圧の急激な上昇によって無理やり拘束を解く。乱菊はしまったという表情を浮かべた。下手に拘束したのであれば、あの短気そうな破面はすぐにでも解放する。そこまでは考えていなかった。死神の自分であれば、救援があるものならば素直にそれを受けるであろう。だが、力こそ正義そうな破面ならば、何が会った時は無理にでも自分の力でどうにかしようとする。怖れていた事態が起こってしまった。

解放したアパッチの姿は、全身が茶色い毛皮に覆われ、額からは後方に向かって伸びる鹿のような角が生えているというものであった。

特殊な能力はなさそうだが、それはつまり身体能力を格段に上げているということである。

乱菊が構えている間に、ミラ・ローズは解放したアパッチを見てやれやれとため息を吐いた。自分で拘束が解けるのを知っていたら、態々救援になど来なかったのだが、と。

だが、そのために起こした行動は、ミラ・ローズにとって大いに後悔させる結果を生むことになる。

「卍解」

「っ!!?」

突如、後方で膨れ上がる霊圧に、ミラ・ローズはバツと振り向く。その場には、姿を変えたまつ梨の姿があった。白い腰巻を巻き、肩には竜の罅を模した肩当てが装着されていた。さらに背中からは、霊圧と思しきものが浮遊していた。右肩からは、三日月状の霊圧が二つ程浮遊しており、左肩からは円盤状の物から燃え上がる炎のような物が噴き出している物体が同じく二つ程浮いていた。そして刀身は、鋼のよ

うな物ではなくなっており、代わりに靈圧が炎のように吹き出し、刀身の形を為していた。

——『竜糾虎洵丸』
りゆうきゆうことうまる

そう言った直後、まつ梨の姿はミラ・ローズの目の前に存在していた。その光景に瞠目しながらも、ミラ・ローズは斬魄刀を構えて攻撃に備える。

「〃竜糾絶衝〃！」
りゆうきゆうぜつしやう

「ぐっ!？」

業火のように滾っていく刀身を、まつ梨はミラ・ローズに振り下ろす。その一撃を辛うじて受け止めたミラ・ローズであるが、先程とは比べ物にならない力と勢いに、ミラ・ローズの頑強な体は吹き飛ばされていく。そしてそのまま後方にあつた建物を幾つか突き破っていく。

その光景には、先程解放したばかりのアパッチや、味方である乱菊ですら動揺した表情を隠すことが出来なかった。

アパッチは、標的をすぐさま乱菊からまつ梨に変える。そして解放し鋭くなった爪をまつ梨に振り下ろそうとするが、その瞬間にまつ梨の姿はアパッチの目の前から消え失せる。

「なっ!？」

「はあああああ!!！」

後方から聞こえてくる雄叫びの方に首を向けたアパッチは、その声の主的姿を拝むことなく凄まじい衝撃と共に吹き飛ばされ、地面に激突する。激突した場所には大きなクレーターが出来上がり、埃が辺りに立ち込めていた。

そんなアパッチの頭上には、斬魄刀を構えているまつ梨の姿があった。そして決意の籠った鋭い眼光を、敵である者に向ける。

——長かった。

久し振りに卍解したまつ梨は、その感触を確かめていた。そして二十年前とは比べ物にならない安定した靈圧に、ホッと胸をなでおろした。

初めて卍解を披露したのは、恩人と肉親の仇であるアルトウロ・プ

ラテアドという破面の前。その時はまだ、背中の霊圧の翼のようなものは発現していなかった。それはつまり、二十年前の“転神体”での修行で、完全に卍解を習得するに至っていないかったことを示唆している。あの時は、敵を斬る為だけの“力”を欲していた。だからこそ、アルトウロの前では攻撃にだけ重点を置いた中途半端な卍解になってしまった。

だが、二十年という歳月は、彼女に多大な影響を与えていた。そして未完成であった卍解も、今こうして完成系に至っている。

—— 天地を覆う億の刃を操ることが出来る訳では無い。

—— 大地を砕く力を持つ巨人を召喚出来る訳では無い。

—— 四方三里を凍えさせる氷を繰り出せる訳では無い。

—— だが、卍解の霊力を自らに集中させて、驚異的に戦闘力を上げることが出来る。

それが“竜糾虎洵丸”。刀身の切れ味も、瞬歩の速度も基礎的な部分が爆発的に向上する。それがまつ梨の卍解である。似ている卍解で言えば、一護の“天鎖斬月”であるが、あちらは超速戦闘に重きを置いているが、まつ梨はそれよりもバランス良く霊力が割り当てられている。そして刀身が霊圧で形成されているので、一護の天鎖斬月よりも形的な部分で応用が利く。

鬼道系の卍解と比べると派手さに欠けるが、されど卍解。戦闘力が爆発的に上昇することには変わらない。

悠然とした佇まいでアパッチの様子を伺っているまつ梨の背後から、先程吹き飛ばされたミラ・ローズが斬りかかってくる。

「喰い散らせ—— 『金獅子将』!!」

その際に、ミラ・ローズは刀剣解放を行う。すると、ミラ・ローズの有していた斬魄刀は巨大な大剣となり、さらにライオンを思わせるビキニアーマーを纏ったように姿になる。頭にあった仮面の名残も、兜のような形状に変わり、眉間に仮面紋が出現し、頭髮も鬣の如く増量する。

そんなミラ・ローズがまつ梨に斬りかかるが、反射神経も上昇しているまつ梨は振り向きざまに剣を振るい、その一撃を受け止める。

靈圧の刀身が、凄まじい力で振るわれる大剣と衝突を起こし、幾らか火花のように赤い靈圧が散っていく。

「ちっ……こんな隠し玉があるなんて聞いてないよ……!」

「言ってないんだから当たり前でしょ……!」

そう言っただけで両者は、互いに剣を振るって距離を取る。互いに全力を出している状態であるのだが、軍配はまつ梨の方に向かって上がっているように、乱菊の瞳には映った。

——あの娘……あんな風に……。

急に部下が頼もしく見えてきて、乱菊はフツと笑みを浮かべる。そしてまつ梨を狙おうとしているアパッチに向かって、灰猫を振るう。自分に迫りくる灰に、アパッチは苦々しい表情を浮かべる。

そんな戦いの中、雛森とスンスンも互いに引けを取らない勝負を繰り広げていた。

「縛道の六十一・『六杖光牢』!」

雛森はスンスンの華奢に胴体に、光の帯を突き刺し拘束する。それに対し、スンスンはらしくなく眉間に皺を寄せさせる。スンスンの斬魄刀は釵の形をしており、簡単に言えば極端にリーチが短い。その為、攻撃をするのであればかなり接近しなければならないのであるが、こゝも動きを封じられてしまったのであれば、動く事すらままならない。しかし、スンスンは元々近距離戦が得意という訳では無く、どちらかと言うと他の二人よりは頭を使って虚閃や虚弾も交えながら戦うタイプであるのだ。相手も、どちらかというところと近距離向きではない。そうなると、お互い自然に遠距離戦に移行していたのであるが、遠距離攻撃手段が二つしかないスンスンに比べて、鬼道の達人である雛森は様々な術を行使し、次第にスンスンを追い詰めるに至ったのである。

このままでは、また何かしらの術を使われ、自分が一方的に翻られる展開になると予測し、拘束を解くためにある手段に出る。

「絞め殺せ——『白蛇姫』」

刀剣解放。方法が他の脳筋二人のように力任せなのが気に食わないが、今はそんなことを言っただけでいられる状況ではない。相手の内、一

人が予想以上にパワーアップした為、このままでは相手をするミラ・ローズがやられるのは時間の問題と判断した。それも、ミラ・ローズの刀剣解放が、アパッチと同じで特に目立った能力が無く、身体能力を向上させるといふものである為だ。

卍解が並大抵のものでない事は、スンスンも了承している。相手の卍解がどのような能力であるか解らない以上、あの相手を一人に任せるのは得策ではない。

——あれをやるしかないでしょう。

刀剣解放を行い下半身が蛇のようになったスンスンは、無理やり“六杖光牢”を解いた後に牽制の虚弾を雛森に数発放ち、そのままミラ・ローズの居る場所へと向かう。スンスンが自分に向かっていていることにミラ・ローズが気づき、そして二人が集まっていることを察したアパッチも、二人の場所へ向かう。

三人が集合していることに、まつ梨や乱菊たちも異変に気付く。

「——『穿鱗火』！」

集まる三人に向かって、まつ梨が霊圧で形成されている刀身を振るう。すると、刀身から火の粉のような霊圧が、無数にアパッチ達に向かって飛んでいく。

その無数の霊圧の粒を前にし、スンスンが前に出てくる。

「『蛇殻砦』」

飛来してくる霊圧の粒を、『蛇殻砦』という脱皮した後の自分の抜け殻を盾のようにして防御する。その抜け殻とまつ梨の放った技が衝突し、細かい爆発を起こす。抜け殻といえど、破面の鋼皮に匹敵するそれは、何秒かは耐え凌ぐ。

衝突の際に起きた煙で、少し視界が悪くなる。相手がどう出てくるか、死神の三人はそれぞれ斬魄刀を構える。

「……………いな、何よ……………あれ?！」

突如、霊圧知覚にかかった巨大な霊圧に乱菊は冷や汗を流す。そしてその霊圧の持ち主が、先程の黒煙を巨大な腕で振り払い出現した。

鹿のような角。獅子のような鬣。そして蛇の頭を模している尾。外見的には、虚の仮面を被った人型のように見えるが、異常だったの

はその巨大さである。ビルひとつありそうな身長。そして筋骨隆々なその姿は、見る者を圧倒する。

———
「キメラ・バルカ混獣神」。

「解放したあたしたち三人の左腕から創った、あたしたちのペットだ。名前は「アヨン」」

黒煙の影から、得意げな顔をするアパッチが説明する。言葉通りの意味であるのか、左腕はあの化け物を創る際に無くしたのか、全員左腕が無かった。

切断面からは、痛々しく血が滴っている。

だがその代償として、この化け物を生み出した。

アヨンと言う化け物を前にし、死神の三人は緊張した表情になる。

———
「さあ。殺やつちまえよ、アヨン。」

アパッチは、目の前の三人に聞こえない声で、そう呟いた。

暗雲

雨が私を打つ

雪が私を撫でる

風が私を触れる

陽は、優しく私を包み込んでいく

目の前に佇むアヨンという巨大な化け物は、乱菊達を睨むという訳でもなく、空を見上げているような素振りを見せる。だが、元より目がどこについているのか解らないような容姿の相手であるので、ああ見えてしつかりと三人を眼中に捉えているのかもしれない。

緊張感が、三人に奔る。

「……………」

だが突如アヨンは、三人の内乱菊に向かって突進してくる。それを目の当たりにして、乱菊はすぐさま灰状になっている刀身を、アヨンに向かって振るおうとする。

——刹那。

乱菊が灰猫を向かわせようとした瞬間に、既にアヨンは乱菊の背後に存在していた。凄まじい速度に、三人は驚愕の色を隠せない。

何より、三人の視線は乱菊の脇腹に向かっていった。乱菊の右のわき腹は、大きく抉られており内臓や骨などがくつきりと見えるほどであった。無くなった脇腹はどこにいったのかと、まつ梨はアヨンの方に視線を向ける。

するとアヨンの巨大な右手の親指と人差し指の間に、乱菊の脇腹の肉が摘まれていた。

「乱菊さん!!」

まつ梨がアヨンに注意を向けている間に、脇腹を抉り取られた乱菊は、大量の血を流しながら地面へと落下していく。その視線は、虚空

を見つめており意識がはつきりしていないということを示していた。そんな乱菊を、雛森はあらんばかりの声で呼びかけながら追っている。只でさえ死にかけの身体が、受け身も取らずに地面に叩き付けられたら、問答無用で死ぬ至ることは他の二人には容易に予測出来た。重体の乱菊は雛森に任せるとして、まつ梨は何とかアヨンを相手取ろうとする。

「破道の三十二・『黄火閃』！」

霊圧の光線が、目の前の巨体目がけて発射される。しかしその光線は、あろうことかアヨンの腕の一振りでかき消されてしまう。そして、『黄火閃』をかき消したアヨンは、目標をまつ梨に定め、一気に肉迫していく。

そしてアヨンは、自然体から構え無しで右拳をまつ梨に振るう。それを何とかギリギリの所で躲そうとしたまつ梨であったが、左腕に少し命中してしまう。

その際に、骨の折れる音が何重にも重なってまつ梨の鼓膜を揺らしていく。骨が粉々に碎ける激痛に、まつ梨は顔を歪ませる。だが、このままでは何も出来ずに鬨り殺されるのが予想できたまつ梨は、左腕の骨が全て粉碎骨折している激痛に耐えながら、竜糾虎淘丸の刀身をアヨンの右腕に突き立て、その場で一回転するようにして斬り裂き裂傷を付けた。

そんなまつ梨に向かってアヨンは左拳を振るうが、右腕の影に逃げ込むようにして回避された為、今の一撃は自らの右腕の上で空振るだけに終わった。

辛うじて左拳の一撃は回避出来たまつ梨は、一旦アヨンとの距離を取る。

（何て強きなの……!?自然体から振るった拳で、腕の骨が粉々になるなんて……出鱈目過ぎる力……!）

そう考えながら、骨の碎けた左腕を一瞥する。内出血により、既に変色し始めており、多少皮膚も裂けている為、血も滴っている。これが斬魄刀を握る右腕でなかっただけマシであったと、まつ梨は考える。

(近接戦闘は危険過ぎる……でも、生半可な鬼道じゃ足止めにもならない……なら、無理を押しでも近付いて、短期決戦で……！)

竜糾虎淘丸の最も得意とする近接戦に挑もうと考えていたまつ梨だったが、アヨンの首になにやら鎖のようなものが絡みつく。

それと同時に、まつ梨の目の前に三人の人物が現れる。

「よくやった、まつ梨。ここからは俺等に任せろ」

「志波副隊長……！」

まつ梨の目の前に背を向けながら立つのは、十三番隊副隊長である志波海燕であった。さらに、アヨンの首に鎖を絡めているのは九番隊副隊長である檜佐木修兵。そして最後に、三番隊副隊長である、吉良イヅルも居る。

三人の副隊長が、アヨンという化け物の前に立ちほだかる。

「吉良。一旦、まつ梨と一緒に下がって応急処置してやってやれ。そうしてから、こっちに加勢しろ」

「解りました。さあ、行きましよう」

「え？で、ですが……！」

海燕が、吉良にまつ梨と一緒に下がる旨を伝えるが、それに対してまつ梨は納得のいかないような表情を浮かべる。

あんな化け物と戦うには、少しでも戦力の多い方がいい。そう考えていたまつ梨であったが、そんな彼女に海燕は凄まじい勢いのデコピンを喰らわせる。

「痛い!？」

「素直に下がってろ！そんな腕じゃ、卍解維持するだけで色々ヤベーだろ。吉良に治療してもらって、それから動けるぐらいに回復してか
ら来い！解ったな!？」

「は、はいー」

かなりの剣幕の海燕に、まつ梨は目尻に涙を溜めながら吉良と共に下がっていく。それを見届けた後に、海燕は首に絡まっている鎖を弄っているアヨンに視線を向ける。そしてそのまま、檜佐木に話しかける。

「……檜佐木。アイツは得体が知れねえ。下手に時間をかけたら、被害が広がるかもしれねえ」

「はい」

「だから、最初っから全力でいく。巻き込まれんなよ？」

「っ！」

海燕の言葉に、檜佐木は何かを悟ったかのような表情を浮かべる。すると海燕は、振花を構えて霊圧を高めていく。

「——卍解！」

海燕は叫ぶと同時に、高めていた霊圧が発生した水と共に辺りに弾けていく。それに伴い、海燕の周りには水しぶきが巻き散り、途端に辺りの湿度が高まっていく。さらに、雲雪が怪しくなってきた、空には暗雲が立ち込める。すると間髪を入れずに、豪雨が降り始める。それと同時に、海燕の周りに立ち込めていた霧のような水しぶきも豪雨によって掻き消され、その中から青色の羽織を身に纏い、三又の金剛杵を手に携える海燕が現れた。

海燕が金剛杵を一度振ると、豪雨によって出来た地面の水たまりから、ありえない大きさの水柱がうねりながら天に上っていく。

「——『水仙六花輪道』」

現在、尸魂界における流水系の斬魄刀の中で唯一卍解に至っていると言われている斬魄刀・「振花」の卍解。それに伴い、流水系最強と謳われている卍解でもある。

「水輪丸」のように「天相従臨」の力を持ち、豪雨を降らせ自らが有利になるような領域を作り出す。

突如として豪雨に包まれる戦場に、檜佐木は息を飲んだ。間近で見るのは初めてである。それに伴い、同じ副隊長と言えど格の差を見せつけられたような感覚に陥る。だが、味方であることが、これ以上頼もしいと思つたことは無い。

檜佐木が圧巻されている間にも、海燕は既に臨戦態勢に入つていた。

「……さあ、バケモン。水遊びの時間だぜ」

「……………志波の野郎、卍解しやがったか」

——だが、まあいいか。

冬獅郎は、部分的に豪雨が降りしきっている戦場を眺めてそう呟いた。海燕が冬獅郎よりも死神の期間が長いことや、自分よりも先に卍解を習得していることも知っている。そんな実力も折り紙つきな海燕が卍解するということは、相手もそれなりのものであるのだろうと予測する。

さらに海燕が卍解してくれたことにより、こちらにまで雨が降ることはないが湿度は高まってきている。それは氷雪系を扱う冬獅郎にしてみれば、嬉しい誤算である。

「ふん！」

冬獅郎は、目の前のスタークに向かって斬魄刀を振るう。それをスタークはシンプルな形状の刀で受け流していく。

見た目こそやる気がなさそうだが、腕はかなりのものであり、冬獅郎は警戒していた。

「氷輪丸！」
ひょうりんまる

冬獅郎の刀を受け流していくスタークに対し、氷の竜を奔らせる。それに対しスタークは特に構える様子を見せずに、ノーモーションで虚閃を放つ。青色の虚閃は、冬獅郎の放った氷の竜をいとも容易く消し飛ばしていく。

迫りくる虚閃に対し、冬獅郎は瞬歩で躲すが、今のノーモーションの虚閃に動揺を禁じ得なかった。

——予想以上に来る。

先程の剣技や虚閃を見て、スタークが以前の十刃より数段上の実力者であると判断する。ならば、このまま始解で戦うのは得策ではな

い。

「卍解——『大紅蓮氷輪丸』!!」

「っ!」

卍解を発動し、氷の翼を纏った冬獅郎の姿を目の当たりにしてスタークは目を見開く。突如、膨れ上がる霊圧もさることながら、自らに降り注ぐ冷気に身震いする。

そんなスタークの様子を特に気にすることも無く、冬獅郎は斬りかかっていく。横に一閃した一撃は、スタークが上空に逃げていくことで躲される。だがそのスタークに向かって、冬獅郎は切っ先を向ける。

「『群鳥氷柱』!!」

突如冬獅郎の背後に現れた氷柱の群れが、上空に退避していく。スタークに襲いかかっていく。鋭い氷柱の群れに、スタークは刀による斬撃と、ノーモーションの虚閃で次々と砕いていく。

(志波が作り出したこの状況……活かさない手はねえ)

冬獅郎にとって水とは己の武器に成りえるもの。戦場が水気に満ちれば満ちる程、冬獅郎にとって有利になってくる。海燕は遠くから見えるほどの巨軀の怪物に対抗する為に、卍解を発動している。

少なくとも、海燕がああな化け物を倒すまでは確実に戦場の湿度は上がっていく。その間に、この十刃を討つことが出来れば御の字である。

そんなことを考えながら、冬獅郎は先程のように氷の竜をスタークに何体も放つ。だが卍解状態の為、先程より何回りも巨大である。その竜達に対して、スタークは虚閃で迎撃しようとする。

「おっと、あぶね」

しかし、先程よりも勢いのある竜達を迎撃し切ることが出来ずに、三体ほど撃ち落ちたところで、響転で逃げに徹することにした。それでも追いかけてくる氷の竜に対し、背中から虚閃を放つようにして迎撃していく。

「ったく………氷使うんだったら、もつとクールな感じで使ってくんねーかなア……アンタ、結構熱血っぽくて似合わないぜ?」

「そりやあ悪かったな……………」——「千年氷牢^{せんねんひょうろう}!!」

ぼやくスタークに対し、冬獅郎は「千年氷牢」をもつて答える。突如、自分を囲むようにして現れる巨大な氷柱に、スタークは再び目を見開く。

サイズとしては、以前現世にやって来た破面に放ったものよりは小さいが、その分発動する為の時間は短縮されている。

冬獅郎が手首を九十度捻ると、スタークを囲む氷柱も一斉に中心に向かって動いていく。勿論標的はスタークである。しかし、完全に閉じ斬る前にスタークは響転で氷柱の合間を縫って回避する。

「ちつ…………やっぱり速えな…………」

「いきなりあんな攻撃はやめてくれよ。心臓に悪い」

「今のに捕まつてりやあ、これから驚く事もなかっただろうにな」

「氷の中で眠るなんざ真つ平御免だ。俺は眠るなら、暖かい布団の中がいいんだよ」

気だるげな相手だが、冬獅郎の猛撃を掻い潜るほどの実力は有している。

この相手が、どの程度の順列なのが気になるところである。

「……………てめーは何番だ?」

「……………随分直球な質問だな」

冬獅郎の問いに、スタークは面倒くさそうに頬をポリポリと掻く。スタークも、ここで言うか言わないか悩む。

そして数秒黙った後に、左手の手袋をスツと抜き取る。そして手の甲が冬獅郎に見えるようにする。

「——俺は#1だ^{プリメーラ}」

「——!!テメーが一番か……………!!」

相手が第1十刃であることに、冬獅郎は瞠目する。第1ということとは、今日の前の居る破面が十刃の中でトップということ。並みの実力でなかったことは納得できた。

だが、一番と解ったからといって、冬獅郎が慄く訳では無い。寧ろ、昂ぶりを見せていた。その昂ぶりを隠しながら、冬獅郎は会話を続けていく。

「……………なら、他の奴等はテメーより弱いってことか」

「そいつアどうか。十刃の順列つてのは殺戮能力の順だから。一番だからつつつて、俺が一番強い訳じゃあねえ」

「成程な。参考になつたぜ」

「そりやどうも。そういう訳で少し手加減してくれよ」

「それは無理な話だ」

手加減するように頼むスタークに対し、冬獅郎は即答する。そしてすぐに、スタークに肉迫していき、氷の尾を振り回す。

———
〃氷竜旋尾〃。

それを上空に上がって避けるスタークだったが、すぐさま二撃目を冬獅郎は放つ。

———
〃氷竜旋尾・絶空〃。

天に向かって振り上げられた氷の尾は、ムチのように撓りながらスタークを捉えようとする。その一撃に対し、スタークは虚閃を以て対抗する。スタークの放った虚閃は、迫りくる氷の尾の勢いを殺すことに成功する。その一瞬の隙に、スタークは冬獅郎から距離を取るよう移動する。

(さて……………どうしたもんだか……………)

鬼気迫る冬獅郎に、スタークは少々押され気味であった。それはスタークの実力が冬獅郎より劣っているというわけではない。寧ろ、高いだろう。しかし冬獅郎の放つ覇気のようなものに、普段だらけているスタークにとっては背筋が伸びる様な感覚に陥るものとなっていた。

———
そんなに、藍染サマと戦いたいのかい。

スタークに対して剣を振るう冬獅郎だが、発せられる霊圧の一部がある人物に向かって伸びているのをスタークは気付いていた。それは憎しみであり、怒りであり、ともかく負の感情であることは理解していた。

自分は、藍染を倒そうとするこの少年の剣の錆になるのか。

(おっかねえな……………おい)

明らかに自分を踏み台にしようとしている目の前の少年に、スター

クは畏怖を感じる。自分達のボスは、随分尸魂界で憎まれ役になったのだと思うと同時に、そのとぼっちりが来ていることにスタークはため息を吐く。

——だが……………。

「悪いな。俺も、義理つてモンがあるんでな」

そう言うときスタークは、今までにない速度の響転で冬獅郎の背後に回り込む。その速度に冬獅郎は驚愕するが、スタークが刀を振り下ろしているのを確認して、自分も刀を以て受け止める。

(重……………！)

スタークの一閃が想像以上に重かったことに、冬獅郎は顔を歪める。受け止めた衝撃で、腕が少し痺れる。そしてそのまま、後方に幾らか吹き飛ばされる。その冬獅郎に向かい、スタークは追撃の虚閃を何発か放つ。それらは冬獅郎が前方に展開した氷の翼によって防がれる。しかし、氷の翼に罅が入ったことからかなりの威力であったことが窺える。

「ちつ……………」

「面倒なのは嫌いなんだが、殺されそうになってんのにダラダラやり合うのも気が滅入って仕方ねえ」

そう言つてスタークは、刀の切っ先を冬獅郎に向ける。

「ま、ぼちぼちいこうぜ」

「……………望むところだ……………」

スタークの言葉に、冬獅郎は背中の氷の翼を羽ばたくことで答えた。

誇り

誇りは

私一人の為に

存在するものではない

「檜佐木。一旦、斬魄刀戻せ」

「っ、解りました」

海燕の指示を聞いて檜佐木は風死を手元に戻す。それによって拘束が解けたアヨンに、海燕は攻勢に出る。

「――『地獄道』！」

金剛杵をアヨンに向けて振るうと、空の暗雲に竜巻のように上つていた水の激流が、一斉にアヨンの巨体に向かって行く。その無数の激流にアヨンは拳を振るうが、一瞬砕きはするものの霊圧の刃を含んだ激流によって腕に裂傷が幾つも出来る。さらに砕かれた水流も、すぐに元通りになってアヨンに向かって奔っていく。

自分に襲いかかる水流を、丸太のように太い腕を何度も振り回して打ち砕いていくが、水であるが故にすぐに再生する攻撃は延々と続いていく。時間が経つごとにアヨンの身体には無数の裂傷が出来上がっていく。それに伴い、アヨンを襲う水柱も流れ出る血によって赤く染まっていく。

「どうだ？ そのデケー―身体じゃ、幾ら筋肉あつたつて水の抵抗がデカくて上手く動けねーだろ」

海燕の問いにアヨンは何の反応も返さないが、必死に水柱を打ち砕こうと腕を振りまわす。

「幾らもがけど激流の前じゃあ上手く動けやしねえ。寧ろ、激流の中の刃で身体は斬り刻まれる。やがて激流は相手の血を含んで真っ赤に染まっていく……その光景はまるで『血の池地獄』の如し

……故に『地獄道』だ。どうだ?」

水の激流による攻撃が予想以上通用していることに、海燕と檜佐木はこのまま押し切れるかと考える。

「……………」

だが、檜佐木はアヨンの動きに驚く。あの激流の中を、ゆつくりであるが歩み始めたのである。鹿のような蹄をコンクリートの地面に突き刺しながら、確実に一歩ずつ二人の下に歩み寄ってくる。

その光景に、海燕は顔を歪ませる。普通の者であれば、あの激流の中を歩むことなどできる筈がない。そもそもアヨンは人でないので、その考えは的を外れているのだが、もしこれが破面相手に喰らわせたとしたら動くことすらままならない筈だ。

「ちつ……バケモンが……! 檜佐木! 鬼道で援護してくれ!」

「はい! 散在する獣の骨。尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪。動けば風。止まれば空。槍打つ音色が虚城に満ちる——破道の六十三・『雷吼炮』!!」

海燕の言葉に、檜佐木はすぐさま応答し詠唱を始める。そして手の平に出現した雷の光弾を、激流の中を歩むアヨンにぶつける。なぜここで檜佐木が『雷吼炮』を選択したのかというと、あの水柱に障害されることなく、寧ろより大きなダメージを与えられる手段が『電撃』だと判断したからである。

そして檜佐木の予想通りに、雷の光弾は水で身体中が濡れているアヨンに激突すると、凄まじい雷鳴と共に宙にスパークを奔らせ、アヨンを怯ませる。

(これでいけるか……!?)

鬼道系の攻撃に弱いのか、アヨンは歩むことを止めその場で少しの間立ち止まる。その姿を見て、檜佐木は再び鬼道を放つ。

「破道の五十七・『大地転踊』!」

直後、檜佐木の辺りに散らばっていたコンクリートの瓦礫が浮遊し始め、一斉にアヨンに向かって飛んでいく。瓦礫は水流に巻き込まれ、回転し勢いを増しながらアヨンの巨軀に激突する。

それに伴いアヨンは膝を着く。体力が無くなつて来たのかと二人

は警戒しながら攻撃を続ける。

だが、膝を着いてから十秒ほど経つと、アヨンの両腕が異常に肥大化し始める。

「っ……何だあれは……!?」

その異常に盛り上がった筋肉を目にして、檜佐木は息を飲む。息を飲んだのは檜佐木だけでなく海燕も同じである。そして次の瞬間、アヨンは腕を地面に突きたてながら這うようにして二人に近寄ってくる。さらにその速度は先程よりも速く、このままではアヨンが海燕の傍に来るまで時間の問題であろう。

「冗談キツイぜ、おい……!」

海燕は、どうしたものかと汗を流す。このまま「地獄道」を繰り出すのを止めれば、アヨンは一気に二人の内のどちらかに狙いを定めて攻撃を仕掛けようと駆け出すだろう。だからといって、「地獄道」だけでアヨンを倒せるとも思えない。

——どうする……!?

「——頂を覆う白銀の砂塵」

突如聞こえてくる声に、海燕はその声の方向に顔を向ける。そこには印を組む雛森の姿があった。

何をしているのかと思うと、そのまま印を素早く組み替える。

「蒼天を穿つ銀竹。砕地・散片・回舞・凍面・滑壁・昇魂・零の境界。種まく農婦。隆起する紺碧の長城。空風に連れ去られる裘。悲恋の鯨、会う事能はず——破道の九十二・『水河征嵐』!!」

詠唱を唱え終わった雛森は、這うように進むアヨンに向かって凄まじい冷気の奔流を放つ。その冷気は、アヨンを喰い留めている激流を忽ちに凍らせていき、やがてアヨンの身体を氷で完全に覆って行った。

その冷気は凄まじく、豪雨で濡れていた町の一角を凍結させていった。

氷で覆われたアヨンは、ピクリとも動かない。

「はあっ……はあっ……はあっ……!」

鬼道を放った雛森は、辛そうに顔を歪める。そんな雛森に海燕は瞬

歩で駆け寄り、その身を案じる。

「大丈夫か、雛森？……九十番台の鬼道を撃つなんてすげえじゃねえか！」

「はあっ……はい……上手く出来るかは不安だったんですけど……何とか……」

「雛森。吉良達は？」

二人の下に、さらに檜佐木も駆けより、先程一旦戦線を離脱した吉良がどうしたのかと訊く。吉良は確か、左腕を粉碎骨折したまっ梨の治療の為に離れて言った筈である。

檜佐木の問いに、雛森は何か呼吸を唱えながら答える。

「吉良くんは、乱菊さんの治療を……想像よりずっと酷かったのであたしじゃ治しきれなくて……それで代わりにあたしが応援に……宮能さんは、その二人の護衛を……」

「そうか……ならない……!?」

雛森の答えに納得しようとしていた檜佐木だったが、後方から聞こえてくる何かが崩れる音に振り向く。

「なっ……九十番台の鬼道だぞ……!?」

そこには先程氷に覆われた筈のアヨンが、その氷を砕き二本の脚でしっかりと立っている姿があった。

幾ら副隊長の放った鬼道と言えど、九十番台の鬼道の威力は並大抵のものではない。さらに完全詠唱だった故に、その衝撃は大きかった。

三人は驚愕している間に、アヨンは身体の機能がしっかりしているかを確かめるかの如く腕をブンブンと振り回す。それに伴い腕に僅かに張り付いていた氷も、辺りに散らばっていく。

そして、急にピタッと動きを止める。

「オッ……オッ……オッ……オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「……?!」

アヨンの仮面のようなもの下が急に開き、口が見える。その巨軀に違わぬ巨大な口を開き、アヨンは咆哮を上げる。さらに角の影からは今まで見える事のなかった目も見開かれていた。アヨンの上げた咆哮に、三人はビクツと体を揺らす。

そんな三人に、アヨンは凄まじい速度で迫っていく。

「しまっ……!」

「卍解——『黒繩天譴明王』!!」

しかし、三人がアヨンの拳を喰らう前に、アヨンの振り翳した左腕を突如出現した巨人が、その手に持つ刀で斬り落とした。斬り落とされた腕は、血をまき散らしながら轟音を立てて地面に落ちていった。落ちた際に地面に罅が大きく入ったことから、その質量が窺えるだろう。そしてアヨンは今の一撃で怯み、突撃するのを止め後ずさった。そして、今出現した巨人の主が、三人の前に姿を現した。

「助太刀するぞ。志波副隊長。檜佐木副隊長。雛森副隊長」

「……狛村隊長……!」

護廷十三隊で唯一人狼であり、七番隊隊長を担う仁義の男・狛村左陣。そして狛村が召喚した巨人は、狛村の背後に立ち狛村と同じ体勢をとる。

その間に、腕を斬り落とされたアヨンは無くなった左腕を少し見つけてから、狛村が召喚した巨人——明王を睨みつける。

「……あの物の怪を、いつまでも放っておくわけにはいかぬ。これ以上被害が広がる前に、儂が明王で討ち取ろう」

そう言つて狛村は斬魄刀を構える。それと同時に、狛村の背後の明王も同じく刀を構える。

狛村左陣 VS アヨン、開戦。

「おらあ!!」

「くっ!!」

朝霧はジオⅡヴェガの振るう爪をギリギリの所で躲す。『虎牙迅風・大剣』を発動したジオⅡヴェガは最初よりも数段攻撃力が増しており、朝霧は防戦一方になっていた。白打で攻撃をしようと、その膨れ上がった筋肉が鎧のような硬さに攻撃が通らなかつた。

さらに筋肉が巨大になったことで速度自体は遅くなつたが、反射神経がその遅さをカバーしていた。

「縛道の二十一・『赤煙遁』!」

状況を打破するために、朝霧はジオⅡヴェガの目の前で赤い煙幕を発生させる。それに伴い二人は煙幕で互いの姿を視認できなくなる。そうやって相手の視界を奪っている間に、朝霧はジオⅡヴェガとの距離を取る。

そして瞬歩で建物の陰に回り込み、そこで呼吸を整える。

「縛道の七十二・『倒山晶』」

万が一補足されたら話にならないので、朝霧はその場で霊圧の結界を張り自らの姿を補足されないようにする。

そして決定打に欠ける現状をどうするか、少ない時間で頭を回転させて考える。幾ら隠れようと、いずれは見つかる。虚閃を無差別に放たれたりでもすれば命中するかもしれない。朝霧は周囲の霊圧に警戒しながら、自分の手の内を確認する。

陰風の操れる風圧を刀身に圧縮する『陰風零式』かげかせれいしき『凧』なぎは、切断力は抜群であるが些か攻撃範囲に不安が残る。だからといって他の技で攻撃しようとする、ジオⅡヴェガの筋肉と鋼皮の前に弾かれてしまう。

(遠距離では拙いな……)

遠距離攻撃ではジオⅡヴェガを倒せるだけの攻撃力を有さない。

ならば近距離に限られてくるのだが、ジオン・ヴェガの身体を斬り裂けるだけの手段と言われると、かなり限られてくるのが現状である。

唯一あの鋼皮を斬り裂くことの出来る『陰風零式“凧”』も、一撃で相手を仕留められるかと言ったら、攻撃する場所も限定されてくる。何故朝霧が一撃に固執するのかというと、今のジオン・ヴェガ相手に近接戦を長々と挑むのは悪手だと考えているからである。そして、朝霧は呼吸を整えた後に、とりあえず考えをまとめる。

(首か、脳か……………)

手っ取り早いのは、首を斬り落とすか、脳を欠損させて身体を動かせなくすることである。隠密機動に所属している朝霧は、人間の急所の場所であれば大方把握している。

隠密機動の暗殺は、基本一撃で決する。それ故の、一撃への固執があるといっても間違いではなかった。

(……………いや、一撃で決めようとするのは逆に危険だ。ここは、相手が動けなくように立ち回るのがいい。なら、あれを———)

「どこだ!!? 四楓院朝霧イ!!」

「!」

突如、自分の背後に虚閃が飛来してきたのを霊圧で察し、すぐさまその場から離れる。それによって、朝霧の位置をジオン・ヴェガに把握される。

ジオン・ヴェガは、獲物を見つけた肉食獣のように牙を剥く。

「見つけたぞオ!!」

「ちっ…………縛道の六十一・『六杖光牢』!」

何とか、一瞬でも動きを止めようと朝霧は“六杖光牢”でジオン・ヴェガの身体を拘束する。だが詠唱破棄での拘束であるため、すぐにも破壊され解けるだろう。

しかし、その一瞬で充分であった。

「……………瞬間!!」

突如、朝霧の肩甲骨辺りから風のような霊圧が噴き出す。その光景に、ジオン・ヴェガは目を見開く。

「な……………んだよ、そりゃあ……………!?!」

「……………」

「なっ、消え………がっ!？」

突如、ジオⅡヴエガの視界から朝霧が消えたかと思えば、ジオⅡヴエガは頭部に凄まじい衝撃を覚える。そして身体はそのまま前のめりに倒れていく。

そんなジオⅡヴエガの懐に、瞬間を発動している朝霧が潜り込む。

——朝霧が瞬間を出来るようになったのは、瀟靈廷の藍染の反乱の時からである。

あの時朝霧は、碎蜂と夜一の死闘を間近で眺めていた。そこで朝霧は「瞬間」という存在を知った。そしてその後、己が見た記憶をもとに、見様見真似で不完全ながら習得することが出来た。習得期間が短い為、瞬間の持続時間が極端に短いのがネックであるが、それでも戦闘力が爆発的に上がるのは碎蜂や夜一の瞬間と同じであった。

——天才には二種類居る。

一つは、この世に生まれ落ちた時点で、その才能が突出的に秀でているタイプ。

そしてもう一つは、努力により才能を磨き上げ、その域に達することが出来るタイプ。朝霧はこの二つの内、後者であった。元の才能は歴代の中でも低い方だろう。だが、死にもの狂いの努力により、他の大多数より秀でている力を得ることが出来た。

だが、天才にはある前提が必要になる。

それは、他人に認められることである。それは、その才能が他人に見えるようにするということと同義であるかもしれない。

つまりこの「瞬間」は、朝霧が努力という礎の上に築き上げた、天才であることの象徴。本人はそのつもりはないが、他の隠密機動の隊員から見れば天才と認めざるをえな得ないだろう。若しくは『四楓院の出だから』と言つて、朝霧自身の努力を認めない者も出てくるだろう。

だが、今はそんなことは関係がない。

「おおおおおおお!!!」

朝霧は瞬間状態で、ジオⅡヴエガの急所を狙っていく。その速度

は、先程の比ではない。

「天倒」
「眼窩」
「独鈷」
「霞」
「人中」
「頬車」
「脛中」
「簾泉」
「松風」
「下昆」
「村雨」
「天突」
「秘中」
「早打」
「活殺」
「雁下」
「水落」

「がつ……………！」

続けざまに急所を的確に攻撃され、ジオルヴエガは意識を朦朧としながら、何とかその場に踏みとどまり、巨大な爪を朝霧に振り下ろそうとする。

「て……………めえええええええ!!！」

「……………」

「烏兎」

最後に穿たれたのは、眉間。眉間を刀で突き刺されたことにより、ジオⅡヴェガの瞳から光彩が消えて行く。そしてそのまま、その場に崩れ落ちていく。

眉間を突き刺せば、その奥にある脳の重要器官を一度に複数傷つけることが出来る。ここを貫かれれば、大抵の者は即死する。つまり、暗殺には打ってつけの急所であった。

倒れたジオⅡヴェガを一瞥し、朝霧は刀の血を払い、顔の汗を拭いながら背を向ける。

「……………私のつまらない誇りに付き合って頂き、誠に有難うございました」

——死神としてのの。

——二番隊としてのの。

——隠密機動としてのの。

——四楓院家の者としてのの。

——そして最後に、一人のちっぽけな男としてのの。

毒針

初^{そめ}で瀬戸際

二度目は無いぞ

「——っ」

「おっとオ」

斬魄刀を横に薙ぐ一撃に、京楽は上半身をのけ反らせるようにして躲す。そして今まで鞘に納めていた脇差を抜く。そのまま京楽は、剣を横に振るったレイチエルに向かって振るう。

だがその一閃は、レイチエルが脇差に虚弾を放ち、一閃を横に弾くことで命中することを回避した。しかし、刀を二本抜き二刀流になった京楽は、畳み掛けるようにレイチエルに連撃を浴びせようとする。

間合いの違う二つの斬撃を、レイチエルは両手で握る斬魄刀で的確に攻撃の核を捉えて防御していく。

(こういうタイプの人は苦手だねエ……)

今の所レイチエルは、剣と虚閃、そして虚弾しか使っていない。つまり破面としての最低限の攻撃方法でしか京楽と戦っていない。それにも拘わらず京楽は、斬魄刀を二本抜く結果となった。

今までの戦いを振り返り、相手を表現するのであれば、『基本に忠実なタイプ』。特に特殊な能力がある訳でもなく、只単純に強い。それが、京楽がレイチエルに抱いた印象であった。それはつまり、独特な動きが無い為に付け入る隙がないという事であった。

「——虚閃」

「っ！」

レイチエルは、京楽の連撃の合間の一瞬の隙に、剣を握る手の人差し指を京楽に向け、そのまま虚閃を放った。構えてから放つまでのラ

グが限りなくゼロに近かったが、京楽は紙一重の所で回避する。その際に、京楽の被っていた笠が虚閃の勢いによって頭から離れていく。

虚閃を躲したところで、京楽は瞬歩でレイチエルから距離を取る。

「ふうく……危なかつたねエ……」

「……………」

「おつとオー」

レイチエルに声を掛ける京楽であったが、肝心の本人は無言で京楽に斬りかかる。それに対し京楽は、焦ったような顔をして瞬歩で躲す。

「ちよつとくらい返事してくれてもいいじゃあないかア」

そう言う京楽に対し、レイチエルは静かに斬魄刀を構える。戦場に吹く風が、レイチエルのマフラーを靡かせる。

「……………済まないな。戦いとなると、無言になってしまう性分なんだな」

「なんだ、そういうことかい。ボクは無視されてるのかと思って、少し落ち込みそうだったよ」

「……………」

レイチエルに話しかける京楽に対し、間髪を入れずにレイチエルは虚閃を放つ。その攻撃に、京楽はため息を吐きながら回避する。相手がよく喋る者であれば、問答をしながら隙を突けると思っていたが、どうやらそれはできそうにない。

朽木隊長みたいな破面だ、と京楽は思った。身につけているマフラーが、より一層彼を際立たせている。

そんな相手にどうやって攻撃を喰らわせようかと京楽は思案を巡らせる。

「……………ちよこまかと……………」

逃げに徹する京楽に対し、レイチエルは斬魄刀の切っ先を向ける。そしてその切っ先から、レイチエルは虚閃を放つ。

只の虚閃。そう思って回避する京楽だが、次の瞬間京楽の目は見開かれた。

レイチエルは、虚閃を放っている斬魄刀をそのまま京楽に向かって

振り回したのである。

「ちよつと……それは危ないんじゃないかなア!？」

レイチエルの振る一閃とほぼ同じ軌道で放たれる虚閃を、京楽は瞬歩で回避していく。そんな相手を、レイチエルは響転で肉迫していく。剣先から延々と放たれている虚閃は、レイチエルが剣を振るう度に延長線上の建物を撃ち崩していく。かなりリーチが伸びたレイチエルの剣閃が、一体どれだけの被害を及ぼすか。

「……出し惜しみは出来ないね……」かてんきようこつ「花天狂骨」

自分に言い聞かせるように呟いた京楽は、斬魄刀の名前を呼んで始解する。京楽の両手に握られている刀が、青龍刀のような形になる。そして京楽は間髪を入れずに、京楽は左手を足元に翳す。

「縛道の二十一・『赤煙遁』」せきえんとん

京楽は自分に目の前に赤い煙幕を張り、レイチエルの視界から自らを隠す。だが、それを見ていたレイチエルは、虚閃を放ったまま煙の中央を斬り裂くように剣を振るう。すると、煙幕の中から京楽が地面に向かって逃げていくのが見えた。

「そこか……」

レイチエルは、左手を翳してその京楽に向かって虚閃を放つ。そして凄まじい速度で迫っていった虚閃は、京楽の目の前辺りで地面に激突し爆発を起こす。

爆炎が巻き起こり、それと同時に巻き上がった埃やら煙で視界が悪くなる。

「——」たかおに「斬鬼」

「っ!？」

突如、頭上から斬りかかる京楽に、レイチエルは斬魄刀を構えて防御する。だが、先程よりも格段に重い一撃に、そのまま地面に吹き飛ばされる。だが、只で落ちることはなく空中で体勢を立て直して、上手く着地する。

(どうやって……)

そう思った瞬間、レイチエルは自分の足元に違和感を覚える。そして反射的に、その場から離れていく。

離れた直後、レイチエルの影から刃のようなものが飛び出すのが見え、レイチエルは瞠目する。そして視線を京楽の方に向けると、京楽が建物に映った自分の影に花天狂骨の刃を突き立てているのが見えた。

「凄いいねエ！ 影鬼^{かげおに}を一発目で避けられたのは初めてだよ！」

「……………成程、性質の悪い技だ」

影から攻撃を出せるというのは中々小賢しい。そうとなると安易に地上に降りたり、建物の近くに寄れば相手の攻撃を喰らうという事になるのかもしれない。

ならば、戦うのは空中に限られてくる。

「^{たかおに}斬鬼」

「それは見切った」

再び先ほどのように頭上から斬りかかる京楽に、レイチエルは虚閃を放って牽制する。さすがにこれを喰らうのは不味いと思ったのか、京楽は刀を振ろうとするのを止め、瞬歩で距離を取る。

その隙に、レイチエルは一気に空に上っていく。さらに距離を取る京楽に対し、虚弾を無数に放って近づかせないようにする。虚弾の嵐は、京楽の身体を穿とうと空を駆けて行き、躲された虚弾に関しては後方の建物を無残に蹂躪していく。

「流石だねエ、君が何番か気になって来るよ！」

「……………」

「……………やっぱりだんまりしちゃうのかい」

ことあるごとに無言になるレイチエルに、京楽は苦手意識を持ち始める。だが、それは戦闘において微塵も関係がない事であることは京楽も了承している。

虚弾を嵐をいつまでも避け続けるとなると、流石の京楽でも骨が折れるので遠距離攻撃を仕掛ける。

「破道の九十一・『^{せんじゆこうてんたいほう}千手皎天汰炮』！」

京楽の背後に、無数の光の矢が生まれ、京楽が斬魄刀を振るうと同時に、虚弾の嵐の合間を潜ってレイチエルの懐に放たれていく。

それらはレイチエルの放った虚弾と激突し、轟音を上げながらレイ

チエルの目の前で大爆発を起こす。爆風が辺りを包み込み、その衝撃で建物のガラスの窓が砕け散っていくことが、その凄まじさを物語っていた。その爆発と共に、虚弾の嵐も止み、京楽はその場に留まり相手の出方を窺う。

——さアて……奴さんはどう出て来るかな？

あれで倒せるとは思っていない。詠唱破棄の鬼道で倒せるのであれば、苦労はない。問題は、あの爆発の中でも無傷なのかどうか。これで何かしらのダメージを負ったのならば、後の攻撃の方針が決まってくる。

「っ…………成程ねエ…………」

煙が晴れ、その中からレイチエルが姿を現す。

——無傷。

心なしか、レイチエルの周りが何かに反射して煌びやかになっていく。恐らくその輝いている物が、自分の今の鬼道を防いだのだと、京楽は予測する。

果たしてなんなのやら。

「……………エスカルフィリオース〃**畏怖寒霊**〃。俺の基本能力だ」

「何だア。ちゃんと喋ってくれるんじゃないか。それと基本能力って事は、常に発動してるってことでいいのかな？」

「……………お前は、寒気を感じたことは無いか？」

「なんだい？藪から棒に……………」

レイチエルの突拍子もない言葉に、京楽は首を傾げる。寒気といったら、代表的なのか風邪のひき始めの頃に感じるものだろう。

そんなことを想像する京楽に、レイチエルは言葉を続けていく。

「……………例えばお前が夜道を歩いているとしよう。後ろには誰もいない。だが、何かに見られているような気がして背筋が凍えるような感覚に陥る……………そんな寒気だ」

「アハハ。そりやあまるで、幽霊が憑りついてるみたいだね」

「近からず遠からずだ」

そう言っつてレイチエルは、京楽に斬魄刀であるロングソードの切っ先を向ける。

「俺の力は、悪霊のそれに近い……この世に未練を残して、何百年と地に縛られている醜い魂にな」

「……虚の君がそれを言うかい」

虚の時点で悪霊と成っているのに、『自分の能力が悪霊に近い』などとは面白い冗談である。幾ら破面と成ったとしても、その本質は変わらない。

だが本人が言うからには、それなりに『悪霊』に相応しい能力があるのだろう。

「……『エスカルフィリオース 畏怖寒霊』に触れた霊子や霊圧は、瞬く間に凍えていく」

「成程……さっきのは、それで凍っちゃったってワケね……」

納得がいき、京楽はウンウンと首を縦に振る。そして羽織っていた女物の羽織を脱ぐ。そしてどこかで見ている筈の男の名を呼ぶ。

「浮竹エー……この羽織、ちよつと持ってきてくれるかい！」

そう言つて羽織を投げ捨てる。そして、その羽織が地面に着く前にどこからともなく現れた浮竹が、その羽織を受け止める。

そしてどこか心配そうな目で京楽を見つめる。

「……大丈夫なのか？」

「ああ。奴さん、ちよつとばかし手がかりそうだけどねエ」

そう言つて京楽は目の前のレイチエルを見据える。相手の能力の一つが少なからず暴かれたところで、京楽は再び意気込んだ。

それに対しレイチエルも、始解してトリツキーな立ち回りを見せる京楽に警戒の視線を向ける。

——こつからが、第二幕つてところだねエ。

ハリベルは目の前の碎蜂に向かって「波蒼砲」を放つ。刃状の靈
圧は、碎蜂の身体を穿とうと一直線に飛んでいく。だが、そのような
直線の攻撃など、隠密機動総司令官である碎蜂にとっては、躲すこと
など容易なもの。最小限の動きで、ハリベルの一撃を躲す。

「尽敵撃殺——『雀蜂』」

斬魄刀を解放し、刀がアーミング状の刃になる。リーチこそ短
くなつたが、その最たる能力は「式撃決殺」。同じ場所に二度攻撃を
加えたのであれば、どんな相手でも必ず死ぬ。それが「雀蜂」の能
力。

二十年ほど前にアルトウロという破面と戦つたが、あの時は相手の
挑発にのり白打で戦いを挑んだ結果、鋼皮の前に四肢を負傷し全力で
戦うことが出来なかつた。だがそれは、今になってみればいい経験で
あつた。

無理に白打で挑む必要はない。あくまで、相手の隙を作るものであ
ればいいのである。「蜂紋華」も時間は無制限となり、二撃目を決め
ようと逸る必要も無くなっている。

——確実に、相手の首を取ればいい。

瞬歩で、一気にハリベルに肉迫していく。相手が普通の刀よりも短
い形状であつたのは嬉しい誤算である。そのお蔭で、他の破面と戦う
よりは間合いを詰めることが出来、自分に有利な戦いを繰り広げるこ
とが出来るのであろう。

無論それは、相手が自分よりも実力が低い場合であるが。

「——ふっ！」

「——甘ん」

ハリベルの胸に向かって放たれた突きは、ハリベルが剣を盾にする
ことで防がれる。中心が削り貫かれてはいるが、僅かに存在する刃の
部分で器用に受け止められた。そしてその削り貫かれている部分に、
黄色い光が満ち始める。

——「虚閃」。

目の前の碎蜂に向かって放たれた扇状の虚閃は、碎蜂がそのまま上
空に逃れるように一回転しながら飛び退くことで回避された。だが、

回避した碎蜂を追うように、ハリベルはそのまま突きを繰り出す。

その一撃は、碎蜂が雀蜂を盾にするように自らの身体の外側に弾いていき、そのままハリベルに近付くように迫っていく。

——狙いは、肩。

だが、碎蜂が狙いに向けて突きを繰り出す前に、ハリベルは右に回転して碎蜂を弾き飛ばす。破面の強靱な力の前に、少女程の体軀しかない碎蜂は軽々弾き飛ばされるが、その体軀ならではの身のこなしで体勢を整える。

しかし今度は、ハリベルの方から碎蜂に迫っていった。

ハリベルの斬魄刀は短い。それ故に小回りも利く。力もかかりやすい。それに比べて碎蜂の斬魄刀は短すぎる。相手側から攻められれば、すぐに劣勢になってしまう。

——無論、それをさせないのが碎蜂である。

「縛道の四・『這繩』はいなわ」

左手から細い光の縄を、ハリベルの斬魄刀に向けて放つ。それはハリベルの斬魄刀の空洞の中を通り過ぎていき、途中で回転し始め刃の部分に絡み始める。

それを見てハリベルの眉間に皺が寄る。碎蜂は、相手の思うように斬撃を繰り出せないように「這繩」を引つ張る。

「ちっ……」

このままではいいようにされると、ハリベルは先程のように斬魄刀に霊圧を溜めてその場で軽く振り、虚閃で這繩を焼き切る。だが、その一瞬の隙に碎蜂は肉迫する。

そんな碎蜂に、ハリベルは右手での迎撃が間に合わないと考え、すぐさま斬魄刀を左手に持ち替えてそのまま斬撃を繰り出す。

だが紙一重の所で碎蜂はバク転で回避し、そのまま宙を蹴って再度ハリベルに肉迫する。次にハリベルは右足で膝蹴りを繰り出すが、碎蜂の左足裏に膝を抑えられた。しかしその蹴りの勢いは碎蜂に伝わる。だが、先程ハリベルが振るった左腕を膝蹴りが来る事前に左手で掴んでいた碎蜂は、その勢いで一気にハリベルの左腕の上を飛び越えていき、後ろに回り込むことに成功する。

そしてハリベルと背中合わせのような状態になっている碎蜂は、まだハリベルの腕を掴んでいる自分の左腕と胴の間に、雀蜂の一撃を繰り出す。

——狙われたのは、左腕。

「……ちっ！」

その一撃は、ハリベルの左腕の前腕部に命中する。そして直後に、黒々しい「蜂紋華」が浮かび上がり、碎蜂の攻撃が成功したことを示した。

ハリベルは、追い打ちをかけさせないように、左手に持っていた斬魄刀を右手に渡し、尚且つ逆手に持って背後にいる碎蜂を貫こうと後方に突きを繰り出す。

だがその一撃が来る前に、碎蜂はハリベルの背を蹴って距離を取った。

「……フツ……エスパーダ十刃とやらもその程度か。興奮めだな」

「……興奮めだと？」

ハリベルに一撃を加えた碎蜂は、相手を煽るような言葉を投げかける。これによつて相手が短絡的な思考になれば御の字であるが、どうやら相手は思ったよりも冷静な思考の持ち主だったらしい。碎蜂の挑発に対し、斬魄刀を構え直すだけであり、特に憤慨しているような表情は見られない。

そしてハリベルは、何故か死覇装のジツパーに手を掛け、そのまま上に持ち上げていく。

何かと思つて観察していると、ジツパーが開き切ると同時に、その中に隠されていた物が露わになった。胸から口まで覆う鎧のようなもの。そして何より、右に乳房の内側に「3」という数字が刻まれているのがはつきりと見えた。

「………」か。貴様程度の力で、「3」になれるのか」

「……私程の力で？ 私の力の底など、まだ貴様に見せた覚えはないぞ」
そう言つてハリベルは霊圧を高めていく。それに伴い、碎蜂の緊張も高まる。

女傑達の戦いは、まだ始まったばかりである。

吭牙

磨く磨く

全ては

喰らう為

豪雨の中の戦場は、混沌を極めていた。

——咆哮を上げる化け物。

——その化け物を締め上げる水の竜。

——そしてその二体に向かって刀を振り下ろす巨人。

巨人が二体に向かって刀を振り下ろすと、二体は綺麗に真つ二つに斬り裂かれていく。そして巨大な刀が地面に激突し、水柱や瓦礫、轟音を上げる。傍から見れば、何かの絵巻物語に描かれている一場面かと疑う程の、現実とはかけ離れた光景。だが、彼らの目の前で、確かにその光景は繰り広げられていた。

そして化け物が——アヨンが、狛村の正解である。黒縄天譴明王^{こくじょうてんげんみょうおう}の巨人に斬り裂かれた光景を見たハリベルの従属官である三人は戦慄していた。

「アヨンの奴……殺られやがったのかよ……！」

その中で最も短絡的な性格であるアパッチが、アヨンが殺された光景を見て苦言を漏らした。それは自分達が生み出した怪物が殺されただけでなく、水で構成された竜が復活し、アヨンの肉片に齧りつくという地獄絵図のようなものも視界に捉えたからである。

海燕の「水仙六花輪道^{すいせんりっかりんどう}」の「畜生道^{ちくしょうどう}」で産み出した水の怪物たちは、召喚した後は各自の思考で動き、敵に容赦なく襲いかかる。そしてその生命力は尋常ではなく、水さえあれば何度でも蘇るのである。幾度となくアヨンにむしゃぶりつく水の竜は、肉がミンチになるまで

噛みつく。あそこまでされれば、幾ら生命力の高いアヨンでも動く事は出来ない。

——形勢逆転とはこういったことを言うのか。

アヨンを生み出したことにより、形成は一気に三人に傾いたかのように思えた。だがそれは儚い刹那の出来事のようにであり、二つの正解のコンビネーションの前に、アヨンは討ち取られてしまったのであった。

「…………行くぞ、テメーら」

「仕切ってんじゃないよ、アパッチ」

「そうですわよ」

アパッチの声に、他の二人が応答する。アヨンが倒された今何をするのか。そんなこと、敵を倒すために戦うのみである。全員、左腕が無くなり戦闘力が大幅に激減しているが、今更そんなことは関係が無い。

——自分達は、ハリベルに仕える従属官。

——ならば、ハリベルの為に戦うだけである。

性格は違えど、考えている事は同じ。

三人は、忠誠を尽くす主の為に、目の前の死神達に挑んでいくのであった。

「……………」

ハリベルは、従属官達が生み出したアヨンが倒されたことを察した。そして、何を思ったのか静かに剣を構える。

その光景に、碎蜂は何事かと身構えする。

（…………アパッチ…………ミラ・ローズ…………スンスン…………少し待て。こいつ

を倒して、すぐに行く……)

「討て——
『皇鮫后』タイプロン」

「!」

突如、夥しい量の水がどこからともなく出現し、ハリベルを包み込んでいく。それは二枚貝のような形状になっていき、やがて巻貝のような形状に変化していく。

そしてその水を、大剣のような武器で斬り裂き、中からハリベルが現れる。口元の仮面の名残が消えており、肩にシヨルダーガードを着け、下半身にはミニスカートを纏い、背中に鮫のヒレを彷彿とさせる物が風によって靡いている。露わになった顔の頬には、藍色の仮面紋が現れる。

(刀剣解放か………)

碎蜂が姿の変わったハリベルを観察しながら、左腕を見る。そこには先程まであったはずの「蜂紋華」が無くなっていた。どういう原理でなくなったのかは解らないが、今は無くなったものの考察をしても仕方がない。

そう考えながら見ていると、ハリベルは右手に携える大剣を振り上げる。

「——つな………!!?」

振り下ろした。その瞬間、碎蜂の右半身は斬り落とされていた。そして夥しい量の血が辺りにまき散らされる。

身体の半分を斬り捨てられた碎蜂は、その小さな体を重力に任せて大地に堕ちていく。

「——騙されると思ったか?」

そう言ったハリベルはその場でしゃがむ。その瞬間に、ハリベルの頭部を狙って放たれた碎蜂の蹴りは空を斬る結果になった。

——「隱密歩法四楓の参 うっせみ 〃空蟬〃。

先程碎蜂が居た場所を見ると、隊長羽織だけが斬り裂かれた宙を漂っていた。先程斬られたのは碎蜂の分身。本体は今の一瞬でハリベルの背後まで瞬歩で移動していた。

だが、それをハリベルは予見していた。相手は隠密機動であると感じている。暗殺術を極めている組織のトップの碎蜂には、幾ら警戒を払っても足りないどハリベルは考えている。そして相手に気付かれる事無く攻撃するのであれば、背後か、頭上か。そのどちらかを予想していた結果、背後に來た。今のは、ただそれだけであった。

そしてハリベルは背後の碎蜂にその大剣を振るう。強力な一閃であるが、碎蜂は軽い身のこなしで回避する。

(蝶の様に舞い、蜂の様に刺す……といったところか)

相手は、出来るだけこちらの攻撃を躲し、その右手に装着している斬魄刀で刺そうとする。その形状は毒蜂の尻の針を思わせた為、ハリベルはそう評した。

「——〃戦雫〃」

碎蜂に向かってハリベルは大剣を構え、水の塊を五発ほど放つ。大砲のように襲いかかってくる水に対し、碎蜂は瞬歩で回避していく。

——「はや迅いが、避けきれないわけではない。

躲しながら碎蜂はハリベルに肉迫していく。だが、迫りくる碎蜂に対しハリベルは再び大剣を振るう。

「——〃カスケード断瀑〃」

「!?!」

先程とは比べ物にならない程の、滝のような激流が碎蜂に降りかかる。それを目の当たりにして碎蜂はすぐさまハリベルから距離を取る。そんな碎蜂に対し、ハリベルは再び ラ・ゴード〃戦雫〃を連射していく。突如始まった猛攻に、碎蜂は一旦逃げに徹することにする。

——「……幾らなんでも、攻撃を放つまでのラグが少なすぎる。

威力の高い技であるならば、発動するまでにそれなりの時間が掛かる筈である。碎蜂はその隙を見つけて攻勢に出ようと画策するのであるが、余りにもハリベルの攻撃にはその隙が無い。放たれる〃

戦雲^{ラ・ゴウダ}も只の牽制ではなく、地面に衝突する度に轟音を奏でながら大きく地面を穿つていく。幾ら碎蜂でも、あの攻撃を喰らったのであればただでは済まないだろう。

碎蜂がそのように思案を巡らせている間、ハリベルは戦場の天候が自分に恩恵をもたらしていると確信していた。

いつからかまでは覚えてはいないが、従属官達の方で豪雨が降り始めていた。それに伴い戦場が水気に満ちていき、水を操るハリベルにとっては好ましい状況となっていたのである。攻撃の初速が普段よりも上がっており、さらに攻撃を放つための溜めの時間も短くなっている。

(これを利用しない手はない)

相手は視る限り近接戦闘型。ならば、距離を取るようにして戦う方が賢明である。その為の「水^{武器}」はいくらでもある。

そう考えながら、ハリベルは「戦雲^{ラ・ゴウダ}」を連射する。タイムラグが無い所為で、その水の砲撃は機関銃の如く連射されていく。さらに「戦雲^{ラ・ゴウダ}」の一発一発は家一つなら軽く消し飛ばせるほどの大きさを有している為、躲す碎蜂にとっては洒落にならないものとなっていた。もしこれが「天相從臨^{てんそうじゆりん}」によって雨を降らせている海燕の所為だと解ったら、後で碎蜂は海燕の事を軽く責め立てるであろう。

「ちっ……………」

流星の碎蜂も、爆撃のような水の塊に顔を歪める。合間を掻い潜って接近しようと試みるも、一撃の大きさと連射の速度によって近づけずにいる。

回避している中で、碎蜂はいくつかの打開案を頭に浮かべる。

「破道の四・『白雷^{びやくらい}』！」

貫通力の高い「白雷^{びやくらい}」であれば、あの水の塊を貫いてハリベルにまで辿り着く筈だと考える。その考えは功を奏し、「戦雲^{ラ・ゴウダ}」の一つを貫き、ハリベルの下に駆けて行く。だが、ハリベルは少し首を傾けてその一撃を躲す。

(遠いか……………！)

攻撃を放つたのが遠かった為、射線を見切られて躲されたことを察

し、碎蜂の眉間による皺はさらに深くなる。

そしてハリベルに至っては、この掃射を回避しながらも反撃してくる碎蜂に対し、さらに「戦雲」ラ・ゴータによる弾幕を厚くしていく。雨が降っている間、戦場の水は増えていく。それはつまりハリベルの武器が延々と増えていくことを意味する。ならば、時間が経てば経つほど、攻撃を強めていくことが出来るという事。

時間が経てば、それだけハリベルが有利になるが、それでは従属官の三人を助けに向かうのが間に合うかどうか不安になってくる。
(三人とも……………耐えろよ……………)

「縛道の六十二・『百歩欄干』！」ひやつぼらんかん

「っと、それ止めろよ」

冬獅郎がスタークに向けて「百歩欄干」ひやつぼらんかんを放ったのに対し、スタークは十刃の中でもトップクラスの響転で回避していく。

冬獅郎としては動きの速いスタークを一瞬でも止めて、その隙に勝敗を決したいのであるが、中々そうさせてくれないのが現状である。冬獅郎が卍解を発動し、猛攻を始めてからスタークはどちらかという回避に徹しているというイメージが強くなった。攻撃が虚閃になつたのも、それが顕著に表れている結果であろう。

その戦い方に冬獅郎は僅かであるが苛立ちを覚えていた。だが、ここで冷静を失うのは得策ではない。相手もいう様に「クール」に戦うのがよいと、冬獅郎も考えている。

冬獅郎がそう考えている中、スタークはこの状況をどうするか考えていた。相手は氷を扱う。ならば、下手に近付けばレイチエルの「エスカルフィリオス 畏怖寒霊」のように凍りつけられてしまうかもしれない。

(参つたなア……………)

出来るだけ遠距離を保ちたいが、相手は何としてでもこちらを仕留めようと鬼気迫る表情で追いかけてくる。

(……気は進まねえが……仕方ねえか)

そう思い至り、スタークは少し離れた場所で待機しているリリネットの下に赴く。その際に、冬獅郎はスターク目がけて氷の竜を奔らせる。このままではリリネット共々氷漬けにされるだろう。そう考えたスタークは、自分の指先を少し刀で斬り傷をつけながら氷の竜に手を翳す。

———
“グラン・レイ・ゼロ王虚の閃光”。

青白い閃光が竜目がけて放たれて、一瞬にして蒸発させていく。そしてその威力に、冬獅郎はすぐさま回避行動に移る。それを見て一息吐いたスタークは、リリネットに視線を向ける。

「リリネット。やるぞ」

「っ……い……解った」

リリネットの言葉を聞き、スタークはリリネットの頭に手をポンと置く。その光景を、“グラン・レイ・ゼロ王虚の閃光”を回避した冬獅郎は、何事かと眉を顰める。

「……何をするつもりだ？」

「……俺達は二人で一人だ」

スタークの言葉に、冬獅郎は言っている意味が解らないとばかりに眉間に皺を寄せる。だがそんな冬獅郎をよそ目に、スタークは話を続けていく。

「虚から破面に進化する時、他の破面が肉体と刀に分けた虚の力を、俺達は二つの体に分けた。俺達は一つに帰る時、俺達の力も解放される」

「———！させるかア!!」

「蹴散らせ」

『ロス・ロボス
群狼』

冬獅郎は刀劍解放させまいと咄嗟に斬りかかっていたが、それよりも早く靈圧の奔流がスターク達を包み込んだ。そして、二人の周りを渦巻く旋風を、内部から放たれた虚閃が穿って、そのまま冬獅郎に向かって直進していく。その一撃を冬獅郎は氷の翼を前方に持つてくることにより防御するが、その威力によって氷の翼が幾らか欠ける。

その威力に、冬獅郎は苦々しい顔を浮かべる。

「ちっ……っ！」

「ふう……ふう……よっこい……しよつと……」

その間に、靈圧の奔流の中から姿が変わったスタークが現れた。外的な変化はそこまでない。狼のような毛皮のコートを纏い、左目部分にポインターののような仮面の名残が現れていた。そして先程まで握っていた劍は無くなっており、代わりに両手に二丁の拳銃が握られていた。

「……それがテメーの刀劍解放か」
レスレクシオン

「……おうよ」

冬獅郎は穿たれた翼を再生しながら、スタークに問いかける。それに対しスタークは素直に肯定する。そして、右手に握る拳銃の銃口を目の前の冬獅郎に向ける。

それを見て冬獅郎は斬魄刀を構える。

——どう出てくる？

形状からして、何かを放ってくるかは確かである。問題は、それが何で、どの程度の威力のものであるかだ。

冬獅郎がスタークに注意を向けていると、それは始まった。

「なっ……!!?」

虚閃。だが、只の虚閃ではない。いや、只の虚閃と言えは只の虚閃であつたが、問題はそれではなかつた。嵐の如く放たれる虚閃。それが凄まじい速度で冬獅郎に向かつて放たれるではないか。

その虚閃の嵐を回避しようと瞬歩で移動するが、スタークの「無限装弾虚閃」はその回避速度を上回つた。避けきれないと判断した冬獅郎は、せめてものと氷の翼を盾にするが、瞬く間に削られていき、冬獅郎の胴体に直撃し爆発を起こす。そんな冬獅郎に対し、虚閃の嵐は止むことなく襲いかかつていく。

まるでそれは獲物を貪る狼の群れの如く。襲われた「餌」は、肉の一片も残らない。

氷の竜は、狼の群れによつて貪られていった。

「……………」

数秒掃射を続け、相手の生死を確かめるためにスタークは「無限装弾虚閃」を放つのを止めた。凄まじい黒煙が地面を覆い隠し、先程落ちていった冬獅郎の姿を確認する事は出来ない。

黒煙の中から、ガシャという何かが崩れ落ちる音が聞こえる。

「……あれで死なないなんて、随分頑丈なんだな」

黒煙が晴れると、そこに立っていたのはボロボロの姿になっている冬獅郎であつた。息も絶え絶えになつており、今にも崩れ落ちそうであり、斬魄刀を杖によつて辛うじて立っている状態であつた。

「ち……………くしよう……………」

スタークに凄まじい眼光を浴びせていた冬獅郎であつたが、力尽きたのか瞳から光彩が失われていき、地面に散らばっている瓦礫の中へと倒れていった。それと同時に、僅かながら残っていた氷の翼の根元

の部分も、力尽きた冬獅郎のように砕け散っていった。

銀髪の少年が倒れていくのを、スタークは無表情で眺めていた。

「……！」
だがスタークは、頭上から振り下ろされる一閃に気付き、すぐさま回避に移る。そして距離を取り、その一閃を放った銀髪の少年に視線を向ける。

「……どういこうった」

「こんな騙し討ち一回しか使えねえから、本当はギリギリまで取っておきたかったんだが……舐めるなよ」

「騙し討ち」と聞き、スタークは先程崩れ落ちて言った筈の冬獅郎に視線を向ける。すると、まだそこには倒れている冬獅郎の姿があった。だが次の瞬間に、それは氷の破片となって砕け散っていった。

——どんな手品だよ。

あれが氷で造った身代わりだと気づき、どうやってたらそんな芸当が出来るのかとスタークは疑問を浮かべた。だが、冬獅郎の言葉を聞く限り、一回しか使えない——というより、二度目は気付かれるだろうものなのだろう。

死神達や破面達の戦闘において、相手を視認する時は「視覚」と「霊覚」を使っている者がほとんどである。そして戦闘に集中していけば自然と「霊覚」に比重が高まっていく。それはつまり、目で物を見なくなるということである。恐らく今のは、それを利用したトリックであったのだろう。氷像を作り、それに霊圧を固めて本物に見せた。随分、手のかかるものである、とスタークは思った。

「……別に舐めちやいねえよ。だが、早く終わって欲しいとかは思ってるぜ」

「それを舐めてるって言ってんだよ」

「アンタ基準の話だろ？別に皮肉やら何だらの意味は込めてないからよ、その柄握る力抜いてくれよ」

スタークが冬獅郎に銃口を向けると、冬獅郎もスタークに切っ先を向ける。

——つたく、難儀な話だぜ。

乱入

第二幕が始まる

合間の座興は

これにて仕舞

「……」

レイチエルは、京楽の花天狂骨の攻撃に眉を顰めていた。

——高い場所に居るほど有利になる「たかおに斬鬼」。

——影を踏むと、影から攻撃が出来るようになる「かげおに影鬼」。

そのどちらも、相手をする側からすれば厄介そのものであった。前者であれば、制空権を争わなければならなくなり、後者は自分の影がどのようなになっているのかをいちいち確認しなければならない。それも、「影」の主導権を現在握っているのが京楽であるからである。

流石は護廷十三隊の中でも古参の隊長。相手方の情報は破面達にもいくらか伝わって入るが、この男に関する情報はほとんどないのが現状であった為、京楽が放つ技のそれぞれはほぼ初見であった。それ故に、レイチエルはどうしても後手に出るしかなくなってしまう。

（俺の能力はこういった場面になると扱い辛いな……）

そんな状況で、レイチエルは自分の能力の不便さを呪う。レイチエルは刀剣解放する前は「エスカルフィリオーズ畏怖寒霊」ぐらいしか目立った能力を使うことが出来ない。その代わり、剣技は破面の中でも1、2位を争う程の剣豪である。しかし相手はその剣技を存分に使わせてくれない。

そうとなると刀剣解放をして一気に片を付きたい所なのであるのだが、レイチエルは藍染に「ある合図」が来るまで解放しないように指示されている。それに伴い、レイチエルは京楽の攻撃を回避し続ける結果となっている。

それはレイチエルの刀剣解放の方法は「少し特殊」なのが理由な

のである。

(逃げ回るのは余り好きじゃないんだがな……)

生きていた頃の名残の騎士資質の性格は、この場面でレイチエルにフラストレーションを高める要因となっていた。

そのストレスを発散するかの如く、レイチエルは牽制の虚閃を放つ。

だが直線の虚閃は、容易く回避される。

「不精独楽」!

京楽は二対の刀を振るい、風を巻き起こす。旋風のようにレイチエルに奔つていき、そのまま囲い込む。

不精独楽は巻き起こした風で相手の行動を阻害する技である。

(……これは大丈夫だな)

だが、レイチエルを取り囲んだ風は「畏怖寒霊」によって忽ちに凍えていく。そしてだんだん風の勢いがなくなっていく、すうっと消えて行く。それを目の当たりにして京楽は『やってしまった』という顔をする。

「あつちやく……そう言えばそうだったねエ。触れた霊圧や霊子を凍えさせるだっけか」

「ああ。余り拘束系の攻撃は喰らわれないと思った方がいいな」

「そうかいそうかい。丁寧ありがたいとね」

レイチエルの言葉に、京楽は頭を掻きながら礼を言う。だがそこに和やかな雰囲気など微塵も流れてはいない。どちらも、いつ相手の首を取るのか虎視眈々と画策している。だが、現状は京楽が有利のまま進んでいる。

今のレイチエルの説明は、傍から聞けば何を自分の能力を丁寧に説明しているんだと罵倒されるかもしれない。だが、京楽が相手であればすぐにでも気付かれる事だとレイチエルは確信していた。故に、早くに気付かせて相手に攻撃を仕掛けさせるように仕向ける。そうした方が反撃に出やすいと、レイチエルは考えていたのである。

「——お礼に、別の『遊び』で遊んであげるよ」

そう言つて京楽は、笠を投げ捨てた後に斬魄刀を構える。

「——『艶鬼』……『白』」

何かを呟いた京楽がレイチエルに肉迫してくる。それに対しレイチエルは斬魄刀を構えて防御態勢をとる。

——位置はこちらの方が高い。

——どこかに影が出来ている訳では無い。

つまり、今迄使ってきた技は適用されない。ならば、肉を切らせて骨を断つ作戦で、京楽に反撃しようとしてレイチエルは身構えた。

そして両者の刃が激突する。二刀流の京楽に対し、レイチエルは斬魄刀一本であるが慣れた剣捌きで連撃をいなしていく。

だが手数という部分で京楽に劣る為、少しでも刃がレイチエルの死覇装の腕の部分を斬りつける。この程度であれば掠っただけである為、鋼皮を前に傷一つ付けることも叶わないだろう。

「……何？」

だが、レイチエルが喰らった一撃は、レイチエルの鋼皮を斬り裂く結果となった。僅かではあるが、今程度の一撃で鋼皮を突破されたことにレイチエルは瞠目する。

理解が行き届かないまま、レイチエルはその場で回転斬りを繰り出して、その一撃を防御する京楽を吹き飛ばす。

(傷は浅いが……何だ、今のは……?)

「どうした？そっちの番だよ、ホラ。斬りたい色を言って御覧。言つた色以外は斬れないよ」

警戒するレイチエルに対し、京楽は端的に説明をする。その言葉にレイチエルは、京楽の体を一通り見て答える。

「じゃあ『白』だ」

そう言つてレイチエルは間髪を入れずに虚閃を放つ。それに対し京楽は瞬歩で回避して、レイチエルに肉迫していく。

そんな京楽に、レイチエルはロングソードを高い位置でフェンシングの構えのように構える。そして次の瞬間には凄まじい速度でそれを突き出した。

「——！」

その瞬間、京楽の左肩から鮮血が舞う。それもちよつとや少しの量ではなく、抉られたかの如く噴き出す。

(……あれも虚弾^{バラ}ってやつなのかね……速過ぎて避けきれなかったよ……)

今までの虚弾とは違く、弾丸のような小さく圧縮された霊圧の塊が京楽の肩を掠ったのである。そして京楽は、肩から流れ出る血を一瞥する。

恐らく相手はまだルールを理解してはいない。否、基本的なルールはこちらが教えている為、大方は理解している。だがその裏に隠されているルールの事はまだ教えてはいない。

そのルールとは、自分の口にした色が斬れるようになるのだが、そのリスクが高い程相手に与えるダメージが大きくなると言うものである。

——レイチエルは白がほぼ全身に行き渡っている恰好をしている。

つまり、『白』を選んだのであれば、レイチエルにとってはリスクは高くなるが、京楽を斬った際のダメージは大きくなる。

先程のレイチエルの様子を見る限り、そこまで深くは考えてはいない筈だ。大方、京楽が白い羽織を羽織っている為、斬りやすいと考えた選んだのだろう。それは短絡的ではあるが、実に厄介であった。

(彼、白以外斬れるところがほとんどないからね)

レイチエルを見る限り、斬れる色は限られてくる。

——まず、服の『白』。

——そして、少しだけ露わになっている肌の『肌色』。

——髪の毛の『藍色』。

——瞳の『赤』。

——靴の『黒』。

この中で斬れるのは、『白』か『肌色』になる。京楽が血を浴びて『赤』に染まるという手があるが、それは危険すぎる為論外である。そこで『白』以外に『肌色』はどうなのかというと、手や顔しか露わになつておらず斬り辛い。さらに京楽自身も肌を露わになっている部分が少

ないため、当たっても大したダメージにはならない。

(まいったね……)

本当であれば「影鬼」でじわじわと追い詰めたい所であった。だが、「花天狂骨」がそういう気分でなかったために、現在は「艶鬼」を使用しているのである。

(だからこの子と遊ぶのは疲れるんだよ……)

自分の斬魄刀なのに、自分の思い通りに動いてくれない。何とも扱い辛い斬魄刀であろうか。

しかし、そうだとしても相手と互角以上の戦いを見せることが出来るのが京楽という男である。

「じゃ、次もボクは『白』でいくよ」

レイチエルは『白』が多いが、京楽自身も身に纏う『白』は多い。ならば、それを利用して早期に決着をつければいいだけの話である。

先程の攻撃は一度見たため、また喰らう様な真似はしない。

「縛道の六十一・『六杖光牢』！」

京楽は少し距離をとった所から「六杖光牢」を放つ。現れた六つの光の帯は、レイチエルの胴体に突き刺さる。だが刺さった瞬間から、すでに「畏怖寒霊」の影響を受けて凍えはじめる。

幾ら完全に拘束することが出来ないとはいえ、解除するまでには一瞬の隙がある。そこを狙えばいいのである。

京楽は、瞬歩でレイチエルの背後に回り込む。

(これならどうだい……!?)

レイチエルの無防備な背中に、花天狂骨を振るう。

「……『白』以外なら斬れないんだろ？」

レイチエルはそう言い放ち、ノールックで背後に蹴りを繰り出す。そして『黒』の靴の土踏まずの部分が、京楽の一閃を受け止めた。

京楽が驚く間もなく、レイチエルは「六杖光牢」を解き、背後に向かって一閃する。それを京楽は紙一重のところで回避するが、肝を冷やすには充分であった。

「まったく……足で受け止めようなんて、どんな神経しているのやら……」

「お前が言ったんだらう。『言った色以外は斬れない』と」

「だからって、真面に受け止めようなんて普通は思わないよ」
「そうか」

両者は語りながら、互いに距離をとって斬魄刀を構える。

だが、二人の動きはそこで止まった。そして同時に、ある方向に向かって視線が向けられる。

そこには藍染達がやって来た時のように、空間が裂けていた。だが大きさは今までの中で一番大きかった。

「……成程、来たか」

「十刃の頭四人に加勢できるようなのがまだ居るっての？ 考えたくないねえ……」

黒腔を見て呟くレイチエルに対し、京楽は頬に汗を垂らす。正確に言えばレイチエルは十刃ではないのだが、実力は十刃級なので粗方間違ではない。

それはともかく、その巨大な黒腔の中から人影が一つ歩み出てる。

「ア~~~~~……」

「…得体の知れないのが出て来たねえ…」

中から出て来た破面に向かって京楽はそう評した。特に意味のある言葉を発するのではなく、獣のように唸り声を上げる少年のような破面であった。

だが次の瞬間、その破面の背後から巨大な影が一つ出てくる。

（あれは……あの時の……）

見たことのある白い巨体。そして中央に存在する目のようなもの。それを見る限り、藍染が反乱を起こして尸魂界から逃げていくときに見えた影とそっくりであった。

—— “ブーラー”。

元々は、アルトウロが飼っていたペットの一匹であるが、アルトウロが倒された為に野生と化し、そうなったところを藍染達に捕縛された虚であった。

京楽はその姿を見て、またあの時と同じように大虚を出現させるの

ではないかと冷や汗を流す。

(だけど……)

「ガラ空きだよ」

そう言つて京楽は、フーラーのことを一心に見つめるレイチエルの首に斬魄刀を振るう。そしてその一閃は、容易く首の皮に入りこみ、夥しい量の血をまき散らしながらレイチエルの首を刈り取った。

余りにも呆気なく決まったことに、京楽は拍子抜けした顔をする。

だが、力なく地面に落下するレイチエルの姿を見て、京楽は一人仕留めたことに対し息を吐く。

「さて……どうなるのかねえ」

「んだよ……アレ……!」

ハリベルの従属官と戦っていた狛村や海燕たちも、その巨大な姿を目の当たりにして戦慄していた。既に相手の三人は満身創痍で地に這いつくばっていた。

勝敗ならば既に決しているといっても過言ではない。だが、新手の登場により四人の緊張感が高まる。

そして四人が巨大な黒腔の方を見ていると、小さな影が一瞬にして消えたのを視界に捉えた。

「……っ……なっ……!?!」

次の瞬間、海燕の胸から腕が付き出していた。その腕からは、血が大量に滴っていた。その瞬間に、胸を貫かれた海燕は意識が朦朧となる。

そんな海燕を、貫いた張本人である破面——ワンダーワイスは、海燕を地面に投げ捨てる。

「っ……海燕さん!!」

「死の匂い」ってのは、こういうのを言うんやろね」

鎮火された炎の中から、まず市丸と東仙が出てくる。市丸に関しては、フーラーの吐いた息に関しての感想を述べ、珍しく東仙もそれに同意する。

だがそんな二人の前に、ある人物が出てくる。その姿を見て、まだ意識のある死神は誰もが戦慄する。

「結構ことじゃないか。死の匂いこそ、この光景に相応しい」

——藍染惣右介。その姿に、目を見開かない者は居なかった。

「あらあら……彼等、出て来ちゃったんだね……」

京楽は、出て来た三人を見てそう呟いた。折角元柳斎が、藍染が死神達と破面達の戦闘を邪魔させない為に放った炎であったのに、それを一瞬にして無に帰されてしまったのだ。

ため息を吐く京楽。

——縛れ——『デモニア
黒霊騎士』。

「——っ!？」

突如脳内に響き渡る声に、京楽は振り返る。すると、先程首を刈り取って仕留めたはずのレイチェルの死体に、黒い霊圧が収束していた。

何が何なのか解らずに視線を向けると、黒い霊圧は鎖のような形になりながらレイチェルの死体を包み込んでいく。そしてそれが数秒続いた瞬間に、鎖が弾け飛ぶ。

「……悪いな。俺は、〃一度死ななければ刀剣解放出来ない」
「……成程ね……さつきのも、わざわざボクが仕掛けるのをまつてたんだね」

弾け飛んだ鎖の中から出てくる、全身に漆黒の鎧を纏っているレイチエルが、京楽に対しそう言い放った。

してやられたという感覚に陥りながら、目の前のレイチエルに視線を向ける。全身に鎧を纏っており、解放前の面影は一切残っていない。強いて言えば、首に巻かれているマフラー程度であろうか。だが顔にも鉄仮面を被っており、覗ける空洞からは怪しい真紅の眼光が京楽を睨みつけていた。

(まいったね……まんまと相手に嵌められたって訳かい)

「——でも、忘れてないかい？」

そう言つて京楽は自分の影に花天狂骨を突き刺す。それと同時に、レイチエルの影から刃が飛び出し、右の太ももを貫いた。そしてレイチエルはその場に跪く。

「地面に落ちたんだ。影なら出来てるよ」

そう言い放ち、京楽は最新の注意を払いながらレイチエルに肉迫する。そんな京楽に対しレイチエルは、右手に黒い剣を出現させて斬りかかる。だが、レイチエルが斬ったのは京楽の羽織っていた隊長羽織であった。

その瞬間に、京楽はレイチエルの背後に回っていた。

「〃艶鬼〃……『黒』」

相手は全身『黒』。そして羽織を脱ぎ捨てた京楽も、死覇装の『黒』が全身を覆っている。ならば、ダメージは期待できる。

そしてそのまま、花天狂骨の刃をレイチエルの頭部に突き刺す。それは呆気なくレイチエルの頭部にある鉄仮面を貫く。

(——しまった！)

先程と同じく、余りにも呆気なさ過ぎたため、これが罠であることに京楽は気付く。だが京楽が罠だと気づき離れる前に、レイチエルの腕があり得ない方向に曲がりながら京楽の花天狂骨を掴む。

「……『黒』」

そう呟いて、レイチエルは右手から黒虚閃を京楽に放つ。腕を掴まれている京楽は避けることが出来ずに、真面に黒虚閃を喰らう。

レイチエルの放った黒い暴虐の閃光は、遠くにいる者にも見えるほどの巨大なものであった。

それは、宙に浮いている玉座に坐しているバラガンにもであった。

「ふん……ボスも出て来たことじゃし、儂もかのう」

自分以外の十刃達は、全員が刀剣解放を発動した。こちらの総大将である藍染も出てきたため、自分がいつまでも座っている訳にはいかないであろう。

そんなことを思いながらバラガンは玉座から立ち上がり、あろうことか玉座に腕を突っ込む。玉座を構成する骨のような物が乾いた音を立てながら砕けていく。そして次の瞬間、バラガンはその中から、巨大な斧のような武器を取り出した。

斧を振り上げ、バラガンはそのまま斧を肩に担ぐ。

その威厳ある姿は、死神達にも見えていた。

「あ……ああ……！」

それは、現在乱菊の治療をしている吉良もであった。途轍もない強さを誇りそうな破面が立ち上がり、藍染達も自由に動けるようになった。このような状況、絶望しか残っていないだろう。

「もう……終わりだ……本当に……！」

本来ならば、そのような言葉は戦場で言うべきではないのだろう。だが吉良はそれを言わずにはいられなかった。

そんな吉良は現実から目を背けようと、目を閉じる。

「——待てや」

聞き慣れない、そしてある者にとっては聞いたことのある声、戦場に響いた。

「久し振りやなア、藍染」

乱戦

乱れる

流れる

場が荒れる

場面は、空座町のレプリカへと向かっている五人に移り変わる。日向は、死覇装がボロボロになっている一護に視線を向ける。

その視線に気づき、一護は口を開く。

「ん？どうしたんだよ、日向」

「…いや、霊圧は万全なのかと思ってよ」

一護の傷のほとんどは井上に治してもらっていた。だが日向は、現在の一護の霊圧が万全であるのかどうか疑問になっていた。そのことについて他の三人は気付いていないだろう。それは、内なる虚と“融合”している日向だからこそ気付けたものだとも言える。

—— “暴走” を果たした一護と、“融合” を果たした日向の霊圧の地力は、他者に解らない程上昇していた。

「そりゃあ、半分も回復してねえけどしようがねえだろ。早く行かねえとやべえだろ」

一護の何気ない言葉に、先頭を走っていた卯ノ花の脚がピタツと止まる。そして目を見開きながら一護の方に視線を向ける。

普段の卯ノ花からは想像できない様子に、日向と恋次も少し驚いたような表情を見せる。そして卯ノ花は一護の方に身体を向ける。

「…黒崎さん。今からですが、貴方の霊圧を限界まで回復させます」

「え？今からかよ。でもよ……」

「……先に行くぞ」

二人の様子を見て、白哉はさっさと先を行こうとする。それを見て恋次も白哉に付いて行こうとする。

白哉が先を急ぐ気持ちは理解できる。だが、奇襲を仕掛けるのであれば一斉にの方がいいであろう。

「――朽木隊長、待つてください。俺に作戦があります」

先を急ぐこうとする白哉を、日向が止める。『作戦』とは何なのか。それはこの先の戦いでどの程度効果を発するものであるのか。

そんな無表情でありながら、疑問を投げかける様な雰囲気発する白哉に、日向が言葉を続ける。

「…俺達は五人です。なら、全員で一つの黒腔から出るより、五か所からそれぞれ出て、攻撃を仕掛けた方がいいと思いませんか？」

「…：方法はあるのか？」

元々五人は、空座町のレプリカに向かう方法が一つしかなかった為、五人全員でマユリの開けた黒腔の中に入ってきたのである。ここで日向の言う提案は、黒腔を自在に操れる能力でもなければ不可能なのである。

——それこそ『虚』や『破面』でもない限り。

「あります。俺の今の『戦憶夜叉姫』なら出来ます…：！」

その言葉に、他の四人は目を見開く。

そんな四人を一瞥し、日向はその場で霊圧を高める。

「生い上がれ——『アルボラ髑髏樹』」

「——なんや…：えらい…：懐かしい顔が揃うてるやないの」

市丸、突如戦場に現れた八人を見てそう言った。全員、百年前に姿を消した死神達。そんな彼らを瀨霊廷から追い出した元凶は紛れもない自分達である。忘れる筈がないだろう。

元五番隊隊長・平子真子

元三番隊隊長・鳳橋楼十郎

元七番隊隊長・愛川羅武

元九番隊隊長・六車拳西

元八番隊副隊長・矢胴丸リサ

元九番隊副隊長・久南白

元十二番隊副隊長・猿柿ひよ里

元鬼道衆副鬼道長・有昭田鉢玄

全員、恰好こそ死覇装ではないが、死神の象徴とも言える斬魄刀を携えている。元とはいえ、錚々たる面子である。

護廷十三隊の中では彼らを見て、知っているような挙動をする者も居れば、初見の者も居る為反応はさまぎまであった。

(なんや……面白うなってきたなア)

「仮面の軍勢」と名乗っている彼等は、元柳斎の下に行つて何かを話したりしていたが、その内容までは聞き取れない。

登場から約数分。こちらの破面も痺れを切らす頃であろう。特にワンダーワイスに至つては、謎のうめき声を長々と発している。

「なんやもお、うるさい子やなア。緊張感台無しやん。ボクあの子のああいうとこ苦手やねん」

「……ワンダーワイスの発する言葉には意味がある。黙つて見ていろ」

文句を垂らす市丸に、毅然とした佇まいの東仙は黙るように告げる。それに伴い市丸は口を閉じて黙つて見ていることにする。

すると、ワンダーワイスの近くに居るフーラーに異変が現れる。その巨軀の一部分が裂け始め、口のように開いた後にそこから黒い液体を大量に吐き出し始めた。その黒い液体の中には、何個か白い仮面のような物がプカプカと浮かんでいた。

見たことのある者なら解る、その特徴的な長い鼻を有す仮面。

突如、黒い液体は不快な音を奏でながら骨格を為すように、何体か立ち上がってくる。

——最下級大虚。

その全てが、最下級であるが虚の頂点に立つ大虚であった。幾ら最下級と言えど、この状況で負傷している者が襲いかかられたのであれば、数の暴力で殺されることだろう。

護廷十三隊の多くの者達はそう考えている事だろう。
だが、仮面の軍勢に動きが現れた。

(一護も居らへん、日向も居らへん。まったく難儀なことぢやなアゝ
……まあ、仕方あらへんか)

藍染と戦う為に必要不可欠な戦力の二人が居ないことにため息を吐きながら、平子は目の前からゆつくりと進軍してくる最下級大虚に目を向けた。

——今は、目の前の敵を斬るだけや。

「……行くで」

平子がそう言った瞬間に、仮面の軍勢の全員が顔に手を翳し、顔面に虚の仮面を出現させる。

虚化したことにより、平子達の霊圧が上昇する。そして全員が一気に最下級大虚の下へと駆けて行く。鈍重な動きしか出来ない最下級大虚たちに、虚化して移動速度も爆発的に向上した平子達の動きを捉える事など不可能な話であった。

——ひよ里は、腕力にものを言わせて仮面を叩き割る。

——拳西は、ボクサーの如くラツシユを繰り出しながら、斬魄刀の能力で剣筋を炸裂させて攻撃する。

——白は、軽い身のこなしで次々と大虚たちに蹴りを喰らわせていく。

——ハッチは、結界を扱って大虚の首を次々と切断していく。

——リサは、凄まじい速度の剣閃で大虚の頭部を粉々に斬り刻む。

——ローズは、音で相手を魅了して、死に至らしめていく。

——ラヴは、咆哮を上げながら素手で大虚を真つ二つに引き裂く。

怒涛の快進撃により、大虚の数は一気に減っていく。それを目の当たりにして、護廷十三隊は僅かながら士気を取り戻していく。

(折角やったら、日向にでも倒させたかったんやけど、しゃあないな)
平子は日向の斬魄刀の能力が、倒した虚の能力と霊圧を己のものとする能力と聞かされている。ならば、この大虚の群れを倒させて一気にパワーアップでもさせたかったのが本心である。

塵も積もれば山となる。

十刃や隊長達と比べれば小さな霊圧であるが、これだけの数を倒せばそれなりに霊圧は上がっていただろう。

だが、居ないことをあーだこーだ言っても始まらないことを平子は認識していた。

そして平子は、一気に藍染の目の前まで瞬歩で移動する。

『どや、随分と虚化使いこなすようになったモンやろ』

平子の言葉に、藍染はただ不敵な笑みを浮かべるだけである。

『……藍染。終いにしようや』

そんな藍染に対し、平子は斬魄刀での本気の一閃を繰り出す。だが、藍染は一向に避ける素振りを見せない。

平子は、そのまま藍染に当たるかと思ったが、自分の眼前に迫りくる刃を視界に捉えて、すぐさまのけ反るようにしてその一撃を躲す。

「……外したか」

その一閃を繰り出した東仙は、仕留められなかったことに対しそう呟いた。だが平子の左目の上からは血が流れ出でていた。先程の東仙の一閃が命中したのである。

「アホ言え。当たっとるわ」

「左目から上を斬り落とすつもりだった。その程度は当たっていると判断しない」

「言うやないか、三下」

随分舐められたものだど、平子は滴る血を左手で拭うが、血は一向に止まらない。そんな平子に対し、東仙は斬魄刀を構える。

「さぞ、気分が悪いだろうな。その三下に斬られて死ぬのは」

「はあああ!!」

平子に向かって突きを繰り出した東仙であったが、その一撃は下からやって来たたまつ梨によって弾かれた。流石の東仙でも、卍解状態の

一撃には勢いで負けたため、そのまま一旦距離を取る。

そしてまつ梨は、平子の目の前に立つ。

「大丈夫ですか、平子隊長？」

「なんや、まつ梨ちゃんやないか。ありがとな。助かったで」

「……なら良かったです」

「でも良かったんか？俺等みたアな得体の知れん連中助けても」

自分を助けてくれたまつ梨に、平子はそう質問した。自分達はあくまで藍染の敵であつて、護廷十三隊の味方ではない。それは先程来た時に、元柳斎に直々に言ったことである。

だが、そんな平子に心配に対し、まつ梨は清々とした顔で答えた。

「平子隊長達がそう言つても、あたしは勝手に味方だと思えますから大丈夫です！」

「…元氣そうでよかつたわ。まあ、そう言つてくれたらこつちも楽やわ」

二人がそのような会話をしている間にも、仮面の軍勢の者達はそれぞれ各地の十刃の下へと移動するなり、残りの大虚を倒すなりして移動を開始している。

その光景を眺めていると、とある人物が平子と東仙の間に割り込む。

「……仮面の客人。宮能三席。この男は、儂にやらせてくれぬか？」

「狛村隊長……」

七番隊隊長・狛村左陣。先程、ワンダーワイスによって蹴り飛ばされてきたが、動けない程の傷を負っていない様である。だが、完全に無傷という訳でもない。

本来ならば、一人でやらせるべきではないことはまつ梨も理解しているが、素直に下がることにし、別の相手を探しに去って行った。

そして平子も、東仙の相手は狛村に任せることにし、藍染の下へと行こうとする。だが、その間に市丸が割り込む。

「……なんや。お前が相手してくれよんのか？」

「そういうことやさかい。よろしゅうお願いしますわ」

「俺はお前みたアな、気味の悪い奴とは戦いたくはないんやけどなア」

そう言つて平子は斬魄刀を構える。そして市丸も、脇差サイズの斬魄刀を構える。

刹那、両者は激突する。

「……んだよ。人増えてんじやねえか」

そう言つてスタークは、冬獅郎の横に並んだ二人の人物に目を向ける。一人はジャージ姿のツインテールの少女で、もう一人はおさげで眼鏡でセーラー服の女性という、どちらも中々特徴的な格好をしている者達であつた。

『ねえスターク。大丈夫なの？』

「数だけ増えても問題ねえよ。問題なのは、面倒な能力を持つてつかどうかだ」

『だからそれも含めて大丈夫なのかって訊いてんじやん！』

スタークの言葉に、拳銃の姿になつているリリネットが声を荒げる。冬獅郎一人であれば、特段苦戦することもなく倒すことは可能であるが、あの二人がどの程度の実力なのか気がなるところである。だが、今の所は問題はない。

「……いくぜ、リリネット」

『おう！コテンパンにしてやらア！』

日番谷冬獅郎&猿柿ひよ里&矢胴丸リサ VS コヨーテ・スターク、開戦。

「共通の敵を前に団結するのは、人間の悪しき習性の様に言われるけど……それは違う。それは悪しき習性じゃなく、生物としての生存本能だ。事実、その時精神的団結というものは最も——……痛い！！」

いつまでも放すローズの頭を、ラヴが引つ叩いた。結構な力で叩か

れた為に、ローズは涙目になりながらラヴに非難の目を向ける。

「何するんだよ、ラヴ!!」

「そのハナシはもう終わったんだよ!つまんねーこと喋ってねえで、目の前に集中しろ」

そう言つてラヴは、目の前の斧を肩に担ぐ筋骨隆々の老人に目を向ける。その佇まいから放たれる威厳だけで、かなりの実力者であることが解る。

「見ろよ。強そうだぜ」

「フン……強そう」か。随分と冗談が上手い。虚園の神である儂が強い事など、周知の事実じゃ」

ラヴの言葉に、バラガンはさも当然かのようにそう言い放つた。それは傲慢とも言える言い草であったが、滲み出る霊圧はそれ相応に相応しかった

愛川羅武&鳳橋楼十郎 VS バラガン・ルイゼンバーン、開戦。

「……お久し振りデス。碎蜂サン」

ハッチは、ハリベルと戦っている碎蜂の下に来ていた。だが碎蜂はそのハッチに一向に視線を向けようとはしない。

そんな碎蜂に、ハッチは瞼を閉じて深呼吸をする。それが何を意味するのかは、本人にしか分かりえないことである。

「…アナタが我々を良く思っていないのハ……当然のことデショウ……ですが、今私達は手を組む必要がある。それだけは理解していたきたいデス」

「…勝手にしろ」

碎蜂の答えに、ハッチは安堵の表情を見せる。そして目の前に大剣を構えているハリベルに視線を向ける。

ハリベルは既に臨戦態勢をとっており、いつでもこちらを斬ることが出来る状態である。それを見て、二人も身構える。

碎蜂&有昭田鉢玄 VS ティア・ハリベル、開戦。

「……」

レイチエルは、先程黒虚閃を喰らわせた京楽の目の前に立っていた。京楽は、「艶鬼」の相乗効果もあってボロボロの姿で倒れていた。

そして、止めを刺そうとその首に黒い剣を当てる。

「『竜糾絶衝』！」

だが、そんなレイチエルに立った今やって来たまつ梨が斬りかかり、レイチエルはその場から離れた。さらにそのレイチエルに、どこからともなくやって来た浮竹が斬りかかる。

その一閃は回避されたが、京楽から距離を取らせることに成功し、浮竹は一先ず安堵の息を漏らす。

「まつ梨。京楽を頼む」

「は……はい」

何やらここ数時間、ずっと下がったり前線に出たり忙しいと感じながら、ボロボロの京楽を背負う。

すると、京楽がうめき声を上げながら意識を取り戻す。

「う……うくん……おや。まつ梨ちゃんじゃないか……御免ねエ。いや、でも可愛い子に背負われるなら、役得かなア……」

「京楽隊長、セクハラです」

「うっ……」

まつ梨の辛辣な言葉に、京楽は止めを差されたように項垂れる。そんな軽口を叩く京楽であるが、酷い傷であることは間違いない。ここは浮竹に任せて、一刻も早く吉良や雛森達が居る場所に連れて行った方がいいと考える。

そしてまつ梨は瞬歩でこの場から離れる。

「……やけに素直に見逃してくれたな」

「……最悪、戦闘不能が確認出来ればいい。俺自身、深追いしなくないならしないに越したことはないと考えている」

「ははっ、そうか。済まないな」

そういうレイチエルに、浮竹は軽く笑いながら応答する。だが、その視線はレイチエルの頭部に向いていた。

京楽に貫かれた頭部の鉄仮面であるが、何事もなかったかのように再生している。あの鉄仮面の中に顔があるかすら怪しいところである。

どのような能力を持っているのか謎であるため、余り出し惜しみは出来ない、斬魄刀を構える。

「波悉く我が盾となれ、雷悉く我が刃となれ———」そつぎよのことわり『双魚理』

構えた斬魄刀が、同じ形をした刀と成り、柄尻の部分には紐がありその二つの刀と繋がっている様な形状となる。

両者が剣を構えていると、浮竹の後ろに一人の人物が現れる。

「ウス、浮竹隊長。俺もやりますよ」

「君は……六車か」

タンクトップ姿の男が、浮竹に挨拶を躲しながらレイチエルを睨みつける。

残った大虚は、楽しんで頑張っている白が居る為、拳西はこちらに来たのである。

「助かる。俺の剣は、近接だと少し心もとないからな」

「成程。なら俺が、前に出ますよ」

そう言って拳西は、瞬歩で一気にレイチエルに肉迫する。そしてカーゴパンツのポケットから取り出した斬魄刀で、レイチエルに斬りかかる。その一撃は受け止められるが、剣筋が炸裂しレイチエルの身に纏う鎧が爆発する。

それを確認し、拳西はすぐに距離をとる。

煙の中から、爆発を諸に喰らったレイチエルが出てくるが、鎧はほぼ無傷であった。

「……随分頑丈じゃねえか」

「お前の剣が軽いだけだ」

「……そうかよ。なら、本気で行くぜ!! 卍解———」てっけんたちかせ『鐵拳断風』!!

レイチエルの挑発に青筋を立てた拳西は、すぐさま卍解を発動す

る。風神のような格好になった拳西からは、凄まじい霊圧が溢れだす。

そして拳西は再びレイチエルに肉迫し、その拳を振りかぶる。それに対しレイチエルは、その拳目かけて剣を振るう。

浮竹十四郎&六車拳西 VS レイチエル・セレーナ、開戦。

犠牲

生きる為に

他を犠牲に

お前の世界は

他者の骨肉が

礎となっっているのだ

「打ち砕け——『天狗丸』！」

ラヴは斧を担ぐバラガンに向かって解放した天狗丸を振り下ろす。解放した天狗丸は、巨大なトゲ付きの棍棒のような形になる。

その一撃に対し、バラガンは重量がありそうな禍々しい形状の斧を片手で軽く振り、その一撃を受け止める。金属の衝突する音が辺りに響き渡る。

かなり力を込めて振り下ろした一撃だったが、バラガンに軽く受け止められた事にラヴは驚愕の色を隠せない。

「ふんー！」

「うおお!?」

バラガンはそのまま斧を振り、天狗丸を握るラヴを吹き飛ばす。だが、その間にバラガンの背後にローズが近付いており、斬魄刀を振ろうとしていた。

「奏でろ——『金沙羅』！」

ローズの握っていた斬魄刀の形状が、先端が薔薇のようなものがついている金色の鞭のようなものになる。ローズが腕を振りかぶると、金沙羅がバラガン目がけて勢いよく向かっていく。

正確無比な鞭の攻撃は、まるで蛇のような生き物を連想させる。

だがその一撃は、バラガンが返す手で振るった斧によって弾かれる。それをローズは一旦手元に戻す。

——強い。流石、虚園の神を名乗るだけはある。

最初の会話でバラガンの己の事を「神」と称していたが、実際にバラガンの強さを目の当たりにしてみると、その名乗りは強ち間違いないように思えてくる。

豪快且つ、強力な一撃である。さらに見た目からすると鈍重そうにも見えるが、決してそんなことはなく、仮面無しのラヴやローズの動きには軽くついてこられる程の反射神経を持っており、時折見せる響転は二人の瞬歩よりも速い。

「成程……楽器とよく似ているよ。作られて悠久の時を経た楽器は、深く心に響く音色を鳴らせる。あの十刃も、その年月に相応しい強靱さを有しているよ」

「いちいち例えなくても解るんだよ。面倒だな」

淡々と語っていたローズに対し、先程吹き飛ばされたラヴがツッコミを入れる。その辛辣な言葉に、ローズは少し落ち込んだような顔を浮かべる。

そんな二人に対し、バラガンはため息を吐く。この程度の相手では、自分と相對するに足りない。

(どうせなら、総隊長とやらとやり合ってみたいがのう)

戦うのであれば、敵方の総大将。そうでなければ絶対の力を有す自分に相応しくない。このような戦闘中に漫才のようなやり取りをしている者では、相手にする価値も無い。だが、先程の仮面を出していないことから相手もまだ本気でない事は明らかである。

——小賢しい。

自分を相手に力を温存するなど、不遜にも程がある。どうせ死ぬのであれば、自分に全てを見せてから息絶えろ。バラガンはそう考えていた。

そして、自分が手を下さなくて済む要因が、現在戦場に一つ在る。(死神どもはまだ、レイチエルの刀剣解放の真の能力を知らんだろうからな)

「帝守護刃」^{レスクード}レイチエル・セレーナ。彼の刀剣解放は「黒靈騎士」^{デモニア}

。現在、死神達が知っているレイチエルの能力は「畏怖寒霊」と、頭部の鉄仮面を貫いても死なないという事だけである。

前者はともかく、後者はその理由を知らなければ相手は延々と“不死”の相手とやり合う事になるだろう。言っても、バラガンの“老いの力の前ではそれも封じることが出来る。”

だが真に恐ろしい能力はそれではない。

(さて……最初にそれを見てに絶望するのはどいつかのう……)

その瞬間を考えただけでバラガンは笑みが止まらない。その能力が発動すれば、どんな相手でも辟易するであろう。

そのような事を思いながら、バラガンは目の前の二人に斧を振るうのであった。

「うおらあー！」

拳西は、目の前のレイチエルに向かって拳を振るう。その一撃は命中した瞬間に炸裂し、レイチエルの左腕を吹き飛ばす。だが、それを構わずにレイチエルは右手に握る剣を拳西に振るう。

拳を振る為にレイチエルと距離を詰めていた拳西は、すぐさま回避するも胸の薄皮を一枚斬り裂かれる。

距離を取る拳西に対し、レイチエルは剣を握る手の人差し指を突出し、黒虚閃を放つ。だが、双魚理を構えた浮竹が拳西の前に現れ、黒虚閃を真正面から受け止める。すると、レイチエルが放ったはずの黒虚閃がそのままレイチエルに返って来る。

黒い閃光は、黒騎士の頭部を跡形もなく消し飛ばす。

その光景を二人は暫く眺める。

すると、レイチエルの消え去った頭部の鉄仮面と左腕の鎧の部分が再生していく。その光景に二人は動揺を隠せない。

「……どんな体してやがんだ、あの野郎……」

「解らない……だが、どんな相手にも攻略方法はある！」

そう言つて浮竹は手をレイチエルに翳す。

「破道の六十三・『雷吼炮』!!」

浮竹の手の平から、巨大な雷の光弾がレイチエルに放たれる。その光弾に、レイチエルは黒虚閃を放って相殺するどころか、そのまま呑み込んで二人を消し飛ばそうとする。

その光線を浮竹は先程のように双魚理で反射しようとする。だが、浮竹が黒虚閃を受け止めようとする前に、レイチエルが右手の黒い剣を携えて浮竹に斬りかかる。

だが、剣が振り下ろされる前にその剣に拳西が拳を振り上げる。アッパーのような一撃を、レイチエルは紙一重の所で回避する。そしてそのまま響転で二人と距離を取る。

両者がそのような攻防をしている間にも、浮竹は必死に打開策を考えつこうとしていた。

(相手の能力は何だ……!? “不死”なのか?それなら手が出せない……動きを封じるしか……だが、拘束系の鬼道はすぐに解除される……本体が別の所にあるのか?)

考えられるのは、現在浮竹達が戦っているのがレイチエルの本体ではないということ。つまり、あれはレイチエルが操っている操り人形のようなものであり、本人は別の所に身を隠している。それならば、この鎧の騎士の不死性も納得できる。

(だが、これだけの霊圧濃度の虚閃を放つには、それだけの霊力を伝える為の“線”のような物が必要だ……この相手にはそれがないんだ……!)

もしこの鎧の騎士が操り人形であるならば、あのレベルの虚閃を放つには相当の貯蓄量を持つものでなければならぬ。もしくは、常に何かで本体と繋げて霊力を供給する必要がある。

そうでなくては、あの黒虚閃は理解できない。だが、どの導線のようなものはいくら目を凝らしても見つからないのである。

(ということとは、やはりこれが本体なのか?もし刀剣解放の能力が“不死”そのものならば、霊力が尽きるまで持ちこたえるしかないぞ……!?)

一番考えたくないのが、刀剣解放の能力そのものが“不死”である

こと。そうであれば、刀剣解放が解除される「靈力の枯渇」が起きるまで、浮竹達は戦うしかないのである。

だがそれは、余りにも悪手過ぎる。これだけの相手を前に、靈力の枯渇を待つのは至難の業である。藍染が「城郭炎上」から解放された今、悠長に待っている時間などないのである。

(……仕方ない……)

浮竹は、余り気が進まないが「ある手」を使うことにした。

両手に携える斬魄刀を、浮竹は地面に突き刺す。その光景に、レイチエルの頭部の鉄仮面の中から、紅い眼光が強く光る。

浮竹が何かをしようとしていることに気付き、レイチエルはすぐさま阻止しようと動く。だが、そんなレイチエルの頭部を拳西が殴る。再び炸裂し吹き飛ばす鉄仮面だが、自分に一撃加えた拳西の腕を掴み、右手の剣を拳西の胴体に突き刺す。

「がっ……いー」

「邪魔だ」

そのままレイチエルは、拳西に黒虚閃を放つ。拳西は腕を掴まれていることもあり、そのまま吹き飛ばされていく。

だが、その合間にも浮竹の準備は終わっていた。

「……卍解——」

「ッチョコレート・バー・スライダー」

ハッチは、横一列に並べた結界を伸ばし、柱のようにしてハリベルに投げつける。その結界の雨を、ハリベルは右手の大剣で次々と斬り裂いていく。

見た限り、ハッチは攻撃型ではない。勿論、まったく攻撃が出来ないという意味ではなく、結界を扱うということから、どちらかという補助が得意であるようにハリベルは思えたのである。

「縛道の三十・『嘴突三閃』！」

ハッチの結界の雨を迎撃しているハリベルに向かって、碎蜂は三つ

の靈圧の閃光を放つ。背後から迫りくる三つの靈圧に、ハリベルは結界を斬り裂くために振るっていた大剣を、そのまま後方に向かつて振るう。それと同時に、大剣に溜めいていた靈圧が放出され、扇状に虚閃が放たれる。それによって碎蜂の放った「嘴突三閃」は掻き消されていく。

自分の放った鬼道が呆気も無く消し飛ばれたことに、碎蜂は顔を歪ませる。

そしてハリベルは、そのまま大剣の切っ先を向けた先にいる碎蜂に「戦雲」を五発ほど放つ。

「ちっ！」

的確な射撃に、碎蜂は舌打ちをしながら次々を回避していく。

だが、碎蜂が狙われている間に、ハッチは次の手を打っていた。

「——『六方封陣』」

直後、ハリベルを六つの柱状の結界が東西南北と上下に発生し、そのまま内部に封じ込める。

自分が封じ込められた事に対し、ハリベルは特に焦った様子を見せる訳でもなく、大剣に再び靈圧を込めて斬り裂こうとする。

「軍相八寸、退くに能はず。青き門・白き門・黒き門・赤き門。相贖いて大海に沈む——竜尾の城門!!」

すると、ハッチが自分の目の前に巨大な壁を出現させる。それを見たハリベルは、自分を取り囲む結界を斬り裂くついでに、黒虚閃を放ってその壁を打ち砕こうとする。

そして振るった大剣から放たれた扇状の黒い閃光は、ハリベルを囲む結界をいとも容易く斬り裂き、そしてハッチが展開した「竜尾の城門」を消し飛ばそうと宙を駆けて行く。

だが、予想以上の硬度を誇る壁に、黒虚閃は表面を削るだけに終わる。

「っ！」

「虎咬の城門！」

ハリベルが驚く間もなく、ハッチは続けざまにハリベルの左側に別の壁を出現させる。

「どういうつもりだ……」

「亀鎧の城門！」

今度は右側に壁を出現させるハッチに、ハリベルは警戒心を抱く。そしてその場から離れようと、響転を使用する。だが、そんなハリベルに上空からどこからともなく現れた朝霧が襲いかかってくる。

なぜ朝霧がたった今現れたのかと言うと、先程までニルゲと戦っていた大前田の援護に向かっていたのだが、先程漸く始末が終わり、こちらまで来たのである。

（私は真面にやり合えば、十刃にはとても敵わない……だが、時間稼ぎならば!!）

「瞬間!!」

ジオルヴェガとの戦闘で疲弊していたが、朝霧は躊躇うことなく「瞬間」を行使する。そして高濃度に圧縮した鬼道を纏った拳を、ハリベルに振りかぶる。だが、その一撃はいとも容易く大剣によって防がれる。

この程度は予測出来ていた事。だからこそ、朝霧は続けざまに蹴りを繰り出す。

「うおおおお!!」

自分の今の状態であれば、「瞬間」は数十秒しかもたない。だが、碎蜂とハッチの準備が終わるまでの時間が稼げればいい。

そんな思いを胸に、朝霧はハリベルにラッシュを繰り出す。

だが、そのラッシュはハリベルの大剣を前に悉く防御されていく。そして朝霧のこの行動の意味を理解していた。

「やせんと思うか……!」

ハリベルはラッシュの際に振り抜かれた朝霧の右腕を回避し、そのまま右腕に大剣を振るう。

その際に大剣からは虚閃が放たれ、朝霧はまともにその一撃を喰らう。虚閃を喰らった朝霧は、煙を引きながら地面に落下していく。

だが、その僅かな間にもハッチは既に準備が終わっていた。

「鳳翼の城門！」

今度はハリベルの頭上に壁が出現する。そしてハッチは、そのまま

印を組み換え、最終段階に入る。

「――『四獸塞門』！』」

突如、ハリベルを巨大な結界が囲っていく。再び黒虚閃を放って結界を破壊しようと試みるハリベルであったが、その結界を前に黒虚閃はただ結界に衝突して拡散していくだけであった。

そしてものの数秒で、結界は完全に囲った。

「……何の真似だ？」

「……正解――『雀蜂雷公鞭』」

突如、ハリベルの右の辺りから巨大な霊圧が感じられた。その方向にハリベルは顔を向ける。そこには、右腕に巨大な針状の物体を有している碎蜂の姿があった。

その針状の物体を、僅かばかり開いた扉の隙間からこちらに向けて、狙いをつけていた。

（何の能力だ……？）

ハリベルは碎蜂が何をしようとしているのか解らないまま、『断瀑』を放とうと大剣を構える。

その瞬間、碎蜂の構える針状の物体の後方から火が噴き出した。

「……もう遅い！」

碎蜂がそう言った瞬間に、針状の物体がハリベルに向かって放たれた。そしてハリベルがたった今放った『断瀑』と、『雀蜂雷公鞭』が衝突する。

その瞬間、『断瀑』の水が全て蒸発するほどの大爆発が起こる。
「なっ……！！？」

凄まじい熱気が結界内に満ちていく。蒸発した水は結界内の湿度を急激に高めていき、そして気温も上昇させていく。何より、結界内

に満ちていく爆炎がハリベルの体を焼いていく。

大剣を盾の様にして防御するハリベルであるが、爆炎を完全に防ぐ事などできない。小麦色の肌が、黒く焼け焦げていく。

やがて爆炎は結界内全てに拡大し、結界に罅を入れた。

「……ふう」

その光景に、「雀蜂雷公鞭」を放った碎蜂は滝のような汗を流しながら呼吸を整える。あの状況であれば、例えどんな相手でもその肉を焼き焦がしていくであろう。

それが碎蜂の卍解・「雀蜂雷公鞭」。始解が「式撃結殺」を能力とするのに対し、卍解である「雀蜂雷公鞭」が有しているのは、一撃で相手を屠るほどの攻撃力。

だが、余りに強力過ぎる力に、碎蜂はこの卍解を使用する度に凄まじい労力を必要とするのである。その為、三日に一度が限度なのである。

所謂、「諸刃の剣」と言ったところである。一度使えば、その後はまともに戦うのは難しくなる。

「ふんっ……」

先程まで自分をいいように追い立てていた相手に一撃を喰らわせられたことに対し、碎蜂は勝ち誇ったような顔を見せる。

そして爆風が収まったのを確認し、遠くにいるハッチが結界を解く。そして結界内に充満していた黒煙が、風と共に流されていき、その中から地面に向かって落ちていく黒い塊が一つ確認出来た。

「よし……まずは一体……」

十刃が一体、不本意ながらハッチよの連携によって迅速に片付けられたことに碎蜂は安堵の息を吐く。

そしてハリベルに背を向ける。

——その時であった。

先程、黒い塊が落ちていった場所にどこからともなく現れた黒い鎖が集まっていく。その異様な光景に、碎蜂とハッチは何事かと視線を向ける。

黒い鎖は、まるで群れを成す昆虫の大群のようであった。金属の擦れる不快な音を立てながら収束し、やがて繭のように丸い形状を為していく。

「な……何だ……あれは……!?!」

何が起ころのかと、二人は身構える。そして数秒も経つと、繭のよう形を為していた鎖が崩れ始める。

そしてその中から、一人の人物が現れる。

「ば……バカな……!」

——現れたのは無傷のハリベルであった。

「何が……起こっているのデスか……!?!」

ハッチは、ただ驚愕の言葉を漏らすことしかできなかつた。

老い

見よ

散る花こそ

最も美しい

ここである破面の話をしよう。

元バラガンの側近。そして現「帝守護刃」、レイチエル・セレーナ。彼の刀剣解放である「黒霊騎士」は、その身に黒い鎧を纏うというものである。

その姿である限り、レイチエルを倒すことは困難になる。だが、それは不死というわけではない。攻略方法はあるが、それを実行することが普通の者であれば難しいという話になるだけである。もし相手が、バラガンのような能力を持つ者であったり、元柳斎のような広範囲を焼き尽くす力を持つ者であれば、例え彼であっても倒されてしまう事だろう。

だが、その話は一旦置いておこう。

ここで話すのは、彼のある能力についてである。彼の能力は「悪霊」に近い。「畏怖寒霊」も、寒気を体現した能力と言える。

そしてここからが恐ろしいのである。

——「呪縛生鎖」。

彼の能力の一つ。その能力とは、「事前に契りを交わした相手が死んだ時、レイチエルが刀剣解放している間、レイチエルの霊圧を分け与えて蘇生することが出来る」という能力である。つまり、レイチエルの霊圧が尽きぬ限り、契りを交わした者は「不死」の力を持つという事になる。

傍から聞けば、凄まじく、そして素晴らしい能力に聞こえるだろう。

だが、レイチエルはこの能力のことを「呪い」と評している。何故かという、レイチエルの霊圧が尽きぬ限り「呪縛生鎖」は発動する。言い換えれば、レイチエルの霊圧が尽きぬ限り、何度殺されても死ぬことが出来ないのである。

肉を焼かれようと、骨を砕かれようと、脳髓を啜られようと、臓腑を抉られようと死ぬ事は出来ない。再び綺麗な体に戻り、一から苦痛を味わうことになる。

さらにそれだけではない。「呪縛生鎖」が発動する度に、契りを交わした者の孔には「因果の鎖」のような物が出現する。一度につき、鎖の輪が十個。

レイチエルが刀剣解放を解いた瞬間、その鎖の輪一つにつき、一日の間地獄のような苦しみを受けることになるのである。

——死んだ方がマシと思えるような地獄の苦痛が、襲いかかるのである。

そしてその鎖の輪が付いている間は、レイチエルが霊圧を分け与えなくても「呪縛生鎖」は発動する。その為、苦痛に耐えかね自殺でもしたら、再び十日分の鎖が追加されるのである。

延々と続く地獄。それを「呪い」と言わずして、なんと言うのか。

——どの程度が地獄なのか、想像してみろ。

——お前が、今出来る限りの地獄を想像してみろ。

——「呪縛生鎖」の呪いは、その数段上の地獄だ。

彼がこの能力を使う相手がもし居れば、その相手はレイチエルが「死んだ方がマシ」と思えるような苦痛を与えてでも生かしたい相手なのだ。

地縛霊の如くその魂を、大地に留めておくための鎖。

天に昇っていく魂を。

地獄に堕ちていく魂を。

それらを繋ぎとめる為の代償。

(……ハリベルが一回発動したか)

先程の禍々しい霊圧を感じ、スタークは『呪縛生鎖』が発動したことを認識した。今回レイチエルが契りを交わしたのは、スタークとハリベルの二人。バラガンは、能力の都合上契りを交わすのを遠慮していた。

(死にたくねーな……)

藍染の命令で契りを交わしたレイチエルたちであったが、説明は事前に本人から受けていた。

その『地獄の苦痛』とやらを受けたくはない。

一回でも死ねば、十日間戒めを受けるのである。そんなことは真つ平御免だと考えているスタークは出来る限り死にたくはないと考えていた。

その為に来るのは、殺される前に倒すことである。

「何よそ見しとんねん!!」

ハリベルの居る方を向いていたスタークに、ひよ里が斬魄刀を振り下ろす。それを紙一重の所で回避し、そのまま右手に握っていた拳銃で虚閃を放つ。

その一撃を回避したひよ里は、地面に向かって逃げていくように下がっていく。そのひよ里に狙いを定めたスタークであったが、頭上から迫りくる影に気が付いた。

『フン!!』

「ちっ……」

虚化して斬りかかってくるリサに対しても虚閃を放ち牽制する。その虚閃をギリギリで回避したりサだったが、左手の拳銃で狙いを定めるスタークに気付く。

「!」

「『竜霰架』!!」

しかし、剣銃を構えていたスタークに、刀を突き出すように構えて冬獅郎が突進してくる。それを目の当たりにして、スタークはすぐさま響転によってそのまま三人と距離を取ることにした。

相手一人一人の実力は自分に劣っているだろう。だが、数の暴力と

いうものがある。それなりの者が数人いれば、一人の自分はそれなりに身動きが取れなくなってしまう。

そんなことを考えながら、スタークは「無限装弾虚閃」ゼロ・メトラジエッタを放って、三人を自分から距離を放つ。流石の三人も、その虚閃の掃射によって距離をとることを余儀なくされる。このまま撃ち続ければ一人、また一人と倒すことが出来るだろう。

しかし余り時間をかけるのは悪手であり、霊圧の消費量も凄まじくなる。そして、あの銀髪の少年が何をして来るのかが解らないため、早急にも倒したいところである。

——油断して殺されたら、話にならない。

レイチエルの「呪縛生鎖」カデナがあるため、スタークは最悪死んでも生き返ることが出来る。だが、契りを交わしていないリリネットはどうであるのか。スタークとリリネットは元は一体の虚であり、破面と成る際に他者のように力の核を刀にするのではなく、二つの体に二分化したのである。

しかしリリネットはしっかりと一体の破面として成り立っている。そして、ここからが問題であるのだが、もし刀剣解放し一つの体に戻っている自分が死んだ場合、リリネットにも「呪縛生鎖」カデナは発動するのか。

それは他の者では実証できる問題でなく、それこそスタークが一回死ななければ解らないことである。しかしそれでリリネットが生き返ることがなかったら洒落にならない。

「……つたく」

『スターク、どうしたんだよ?』

「……てつとり早く終わらせるぞ」

『!あれやるんだね?』

「ああ」

スタークの言葉を聞いた拳銃のリリネットは突如分解していき、スタークの手の中から消え失せる。その光景は冬獅郎達の目にも映っていた。

拳銃を失くして一体何をするのだろうか、と警戒心を高める。

「……いくぜ、 ``スターク``」

スタークがそう呟いた瞬間に、コートにからぶら下がっている紐から、霊圧のような物が放出される。それらはスタークの周りを取り囲むように放出されていき、やがて霊圧が狼の形に変貌していく。その数は次第に増えていき、かなりの数となった。

その数を見て、三人は焦燥の色を見せる。

「ちっ!! 訳の分からんモンだしてきよって!!」

「ひよ里、落ち着きイ。下手に出たら、すぐにやられるぞ?」

「わアつとるわ!!」

苛立つひよ里を、リサが疎める。その横で冬獅郎が、相手が仕掛けてくる攻撃に備えて斬魄刀を構えている。

(相手が何をして来るか分からねえ……あれは一体何なんだ?)

四人の戦いはまだ続く。

拳西を黒虚閃で吹き飛ばしたレイチエルは、目の前で双魚理を地面に突き刺している浮竹に視線を向けていた。

そして突如、双魚理の逆に出ている刃から霊圧が溢れだし、浮竹の後方に集まっていく。それはだんだん大きくなっていく、やがて門のような形に変貌していった。見る限り、霊圧が集まってできた只の門に見える。そして門の屋根に当たる部分の両端には鯨のような装飾も霊圧によつて作られていた。

「……『登滝ノ双門』」

(あれが奴の卍解か……刀の形状はほぼ変わっていないな)

その光景を見て、レイチエルはそう考えた。先程の者の卍解は、刀の形状がかなり変貌した。そしてちらりと見えた他の者達の卍解も、見た目はかなり変わっていた。

相手の斬魄刀の能力は、攻撃の反射である。それはレイチエルが自分の放った虚閃が、悉く跳ね返されていることからそう捉えていた。

恐らくこの卍解も、攻撃を反射するものだろうと、レイチエルは予

測を立てる。

その為に、レイチエルは一先ず虚閃を浮竹に向かって放つ。

(これで、奴の反射がどういふものか解るはずだ)

始解と卍解の能力は差異はあれど、ほぼ似通っているものである筈だ。だが、問題なのは「反射」の能力の上位互換がどういったものであるかである。

それを確かめるために、虚閃を放って浮竹に反射させようとしたのである。

迫りくる虚閃に対し、浮竹は先程と同じように片方の刀を構える。

「……………!?!」

だが、刀が虚閃を吸収する前に、何かが浮竹の前に出現し、レイチエルの放った虚閃を吸い取った。

その光景に、レイチエルは驚いたような挙動をとる。それは、レイチエルの虚閃を吸い取ったものが意外だったからである。

(……………魚……………か)

二匹の魚。そのどちらも、霊圧によって形を為しているだけであり、本当の生き物ではないのだろう。

霊圧で形成されている為、色ははっきりとはしていない。だが、口元から生える立派な髭があることにより、大方の予想はついた。

(……………鯉か)

大きさは一メートル程。鯉にしてはそれなりだろう。だが、これが本当に浮竹の卍解であるのなら、拍子抜けも良いところである。さらに、吸い取られた筈の虚閃も、幾ら身構えようと返ってこない。

さらに、浮竹の後方にそびえ立っている霊圧の門も、何の意味があるのか一向に理解出来ない。

「……………それがお前の卍解か」

「ああ。これが俺の卍解、『登滝ノ双門』だ」とうろうのそうもん

浮竹がそう言うと、周りをふよふよと泳いでいる二匹の鯉が元気に宙を泳ぎ回る。それを見てレイチエルは、剣に霊圧を込める。それと同時に、黒い剣がさらに黒々しく染まっていく。

そして凄まじい速度の響転で浮竹に肉迫し、剣を振り下ろした。そ

れを浮竹は二本の斬魄刀で受け止める。浮竹は、凄まじい勢いで振り下ろされた斬撃に顔を歪めるが、何とかその場で踏みとどまる。

そのまま押し切れるかと思っていたレイチエルだったが、浮竹の周囲を泳ぎ回っていた二匹の鯉がレイチエルの鎧に咬み付いたことにより、すぐさまその場から離れることにした。

痛みなどは微塵もない。鎧には傷一つついていない。

(どういふつもりなんだ……?)

今の所、卍解の要素など何一つない。寧ろ、先程よりも弱く感じられる。たかだか鯉を二体召喚するだけの卍解など、刀剣解放をしなくても倒せるであろう。

そう考えながら再び剣を構えるレイチエルに、浮竹は苦笑いを浮かべる。

「いやア……やはり、俺の卍解は使いどころが難しいな」

「……期待外れと言ってほしいのか？」

「それはそれで傷つくな……」

レイチエルの言葉に、浮竹は頭を掻きながら答える。そんな温和な態度を見せる浮竹に、レイチエルは警戒を強める。あの程度が卍解であるはずがない。

これは布石。後に何か恐ろしいことが起こる筈である。

そう考えていると、自分達の下に別の霊圧が近付いてくることをレイチエルは察した。先程、自分が相手をしていた者を連れて行った死神の霊圧である。

「浮竹隊長！」

「まつ梨か！京楽は？」

「雛森副隊長の所に！これからあたしも加勢します！」

「助かる！」

そう言つて“竜糾虎淘丸”を発動しているまつ梨が、レイチエルに向かつて斬魄刀を構えながら相對そうとする。

それを見て、レイチエルは再び黒い剣を構える。

卍解二つを相手。相手としては不足は無い。問題なのは、浮竹の卍解の本領がどういったものであるのかである。それは自分の体を、相

手が斬っても斬っても再生するのと同じレベルで謎である点である。相手に、自分の攻略法を知られる前に、出来る限り早く始末する。(さあ……続きといこうか)

バラガンは、ラヴとローズの二人を相手にしながら、レイチエルの「呪縛生鎖」が発動したのを眺めていた。

死を食い止めるために魂を縛る鎖。それは「古い」を司るバラガンにとっては滑稽とも映るものであった。そしてハリベルが復活したのを目の当たりにした敵の驚いた顔を想像すると、笑みが止まらなくなる。

「……おい、爺さん。何かおかしいんだ？」

そんなバラガンを見て、ラヴが面白くなさそうに言い放つ。敵が笑みを浮かべるなど、相手からしてみればたまったものではない。

そう言い放ったラヴに対し、バラガンは斧を肩に担ぎながら答える。

「ふん。倒したはずの十刃が復活したのを見て、貴様等も気が気じゃあないじゃろう」

バラガンがそう言うと、二人の体はピクツと動く。それもその筈である。死神達は、何故十刃が復活したのか見当もついていないのである。そんな中で、強者と戦い続けるというのは精神的にも辛いものがある。

「じゃが、安心するといい。万が一にも儂がやられたら、奴等のように復活などせん」

その言葉を聞いた二人が驚いたような顔を浮かべ、次の瞬間にはニヤツと笑みを浮かべた。それを見て、バラガンも口の両端を吊り上げる。それによってバラガンの顔の皺が深くなるが、逆にそれがバラガンの威厳を高める。

「……じゃがのう……貴様等は十刃の復活よりも驚くべき所があるんじゃないかのう？」

「はあ？何言つてやがんだ」

バラガンの言葉に、ラヴが再び口調を荒くして返答する。それに対し、バラガンは『その程度か』と吐き捨てる。

それはレイチエルの『呪縛生鎖』を知っているからこそ思える事であつた。

確かに、レイチエルは強い。剣の腕前。破壊しても再生する鎧。触れれば凍りつく『畏怖寒霊』。そして契りを交わした者の暫しの間、不死を約束する『呪縛生鎖』。

だが、『呪縛生鎖』は刀剣解放中のレイチエルが、霊圧分け与える事で蘇生することが出来る。

現在、レイチエルは二人と契りを交わしている。

それはつまり、十刃二人分の蘇生は『完全に』保障できるということとである。

(奴が、儂が第2十刃になるまで、何故第2十刃に居続けることが出来たのか。それは単純な話じゃ。奴の霊力の量が、破面一じゃからじゃ)

殺戮能力で順位が決まる十刃の中で、レイチエルの能力は殺戮能力としてはやや弱めなところがある。攻撃範囲で言えばスタークやハリベルに負けるだろう。一撃の、強力で言えばバラガンやヤミーが勝つだろう。再生能力で言えばウルキオラも負けてはいないだろう。

だが、レイチエルは破面の中で最も霊力の量が多かった。霊力の量は、霊圧の高さとは少し違う。

だが、その他を超越した霊力量によって、いつまでも戦場に立ち続けられる。それによって、自然に殺す相手は増えていく。それによって殺戮能力も高まるという意味で、レイチエルは第2十刃に居たのである。

少し地味な内容かもしれないが、相手にとって脅威であることには変わらない。そしてレイチエル自身の戦闘技術も相まって、その凶悪さを増している。

(じゃが……気に入らんのも……)

バラガンは、レイチエルがこの戦場についてきたのが気に入らな

かった。それはレイチエルが気に入らないということではない。レイチエルをこの戦場に連れてきた藍染の考えが気に入らなかったのである。

レイチエルが死にでもしない限り、二人の十刃は延々と戦い続けられる。そうすれば自然に、死神達は疲弊していく。

——そして、「十分に死神を疲弊させる事が出来た後」は、何が待っているのだろうか？

死神の長を相手取るとしたなら、一度二度の死では足りないだろう。その分、「呪縛生鎖」^{カデナ}の能力による代償が増えていく。

——そして、レイチエルの刀剣解放が解けたら、十刃達はどのようなのか？

(儂が気づいとらんとでも思ったか……！)

その事実を理解した瞬間に、バラガンは「自分の力はレイチエルとの相性が悪い」と嘘を吐いて、契りを交わすのを遠慮した。

そしてバラガンの中に在る『王』としてのプライドが、藍染の思惑に怒りを覚えていた。

——藍染惣右介。貴様の思い通りになるとでも思うたか？

そしてバラガンは、斧を構える。

「朽ちろ——『髑髏大帝』」^{アロガンテ}

斧から溢れた黒い霊圧が、バラガンを包み込んでいく。その光景を、ラヴとローズは『しまった！』という顔をして眺めていた。

——待っている、藍染惣右介。こいつらを殺したら、次は貴様じゃ。

光臨

知ってるか？

英雄は

遅れてやって来るんだぜ

「ふんー」

「……」

竜糾虎洵丸を振るうまつ梨に対し、レイチエルは黒い剣を振るって対抗する。相手の剣の腕は中の上程度。油断でもしなければ、自分が斬られることは方に一つない。

だが、先程の浮竹が発動した卍解が気になって仕方がない。

浮竹自身は余り動く素振りを見せない。だが、浮竹の周りを泳ぎ回る二匹の鯉がレイチエルの放つ虚閃を次々と吸っていったり、直接レイチエルに咬み付いてきたりするのである。

目障りなので何度か斬りつけたレイチエルであったが、霊圧で構成されているため斬ってもすぐに元の形に戻る。

その為レイチエルは極力気にしないようにして、まつ梨だけに集中していた。

(くっ……強い！)

そんなレイチエルに対し、まつ梨は相手の剣の腕に四苦八苦していた。明らかに自分よりも上の剣の腕。さらにそれに破面の力も加わり、劣勢を強いられていることは想像に難くないであろう。時より、合間を縫って浮竹が鬼道で援護するが、あくまで後方からの援護であるため気休め程度にしかないだろう。

だが、浮竹のそのような必要最低限のようにしか思えない援護も、何か考えがあつての事だろうとまつ梨は考えて、レイチエルの剣を捌

くことに全神経をとがらせていた。

「……………」

「っ！」

レイチエルの突きが、まつ梨の頬に掠る。それに伴い、鮮血が幾らか宙に舞う。だがそれを気にする余裕もまつ梨にはない。左手をレイチエルの体に構えて、霊圧を高める。

「破道の三十三・『蒼火墜』！」

青い爆炎が、レイチエルの黒い身体を包み込む。だが、その攻撃に構わずにレイチエルは蹴りをまつ梨の胴体に入れる。それに伴い、まつ梨は左方向に向かって吹き飛んでいく。そしてまつ梨を追撃しよう、レイチエルは黒虚閃を放つ。

だが、その黒虚閃はまつ梨の前に颯爽と現れた二匹の鯉によって吸収されていく。その光景を目の当たりにして、レイチエルはある手に打って出てみる。

そのまま放つ黒虚閃の出力を高める。

(あの魚と消し飛ばす……)

そう考えた瞬間に、黒虚閃の直径はどんどん巨大化していく。その余波だけで、辺りの建物に罅が入り、ガラスは砕け散り、旋風が巻き起こっていく。

次第に威力を増していく黒虚閃であるが、二匹の鯉は一向に消し飛ばす様子を見せない。

「う……………けほつ……………」

「まつ梨、大丈夫か」

二匹の鯉が黒虚閃を喰いとめている間に、浮竹はまつ梨の下に駆け寄って、黒虚閃の射線から離れるように連れていく。

それを見ていたレイチエルは、その逃げていく二人に対し、黒虚閃の射線を修正していこうとする。浮竹は、最初に卍解を発動した場所に向かう。

(……………何をする気だ……………)

そのまま二人とも消し飛ばそうとしたレイチエルだったが、霊圧の門の中から何かがちらに向かつて来るのが見えてきた。

「俺の斬魄刀は、少々子供っぽくてな。良く言えば無邪気。悪く言えば残酷だ」

浮竹の言葉に、レイチエルは思考を巡らせる。そしてそこで、あることに気付く。

「……その龍は、先程の魚か」

「正解だ。言い換えれば、彼らが大人になった姿とでも言おうか。君は、『登竜門』という言葉を知っているかい？」

『登竜門』。それは成功へと至る難しい関門を突破したことをいうことわざである。その由来は、現世のある国に存在する竜門山を切り開いて出来た急流があり、その急流を上り切ることができた鯉が居たならば、その鯉は龍になることができるという言い伝えである。

聞いたことはある。だが、そこから先が気になる事なので、レイチエルは黙って聞くことにする。その為、浮竹の問いに軽く首を縦に振る。

「そうか……俺の斬魄刀の能力は、恐らく君も予想している通り。『反射』だ。始解では速度や圧力をほんの少しいじる事しか出来ない……だが卍解では、もつと戦略が増やせるんだ」

「……例えば、何だ？」

「……例えばか……そうだな。『方向』だな」

浮竹がそう言つて斬魄刀を振るうと同時に、二匹の龍が咆哮を上げながらレイチエルに飛翔していく。

その龍の飛翔の初速の速さに、レイチエルは瞠目する。そして一匹の龍が、レイチエルに向かってその巨大な爪を有す腕を振るう。

そしてそのままレイチエルを叩きつける。

(ツ!!コイツ自体が、相手を攻撃できるのか!!)

龍の掌打をまともに受けたレイチエルは、そのまま建物を幾つも突きぬけていく。そしてふと、視線を上に向けると、先程とは違う龍が口から何かを放とうとしていた。

(あれは……——黒虚閃か!)

レイチエルがそう察すると同時に、龍はレイチエルに向かって黒虚閃を放つ。少し手前の地面から次第にレイチエルに向かって放たれ

続けていく。その威力は凄まじく、大きく地面を削り取りながら爆炎をあげていく。

そんな龍に対しレイチエルも黒虚閃を以て対抗しようとする。

だが、その瞬間に、建物の合間を縫って飛翔して来た先程の龍がレイチエルに向かって尾を振るった。鞭のようなその尾はレイチエルに直撃し、その鎧を悉く砕く。

「ちッ………！」

尾を叩きつけられたレイチエルは体勢を崩される。その瞬間に、もう一匹の龍の放っていた黒虚閃がレイチエルの体を包み込む。

——馬鹿な。

——俺の放ったものより。

——威力が高いだと？

「おーおー……随分派手にやってるね……そこんところ、アンタらどう思う？」

そう言つてスタークは、周囲に倒れている三人に視線を向ける。三人の纏う衣服は、誰のもボロボロになっておりところどころ焦げている。

そうなったのには、スタークの放った技が起因する。

自らの魂を別ち、引き裂き、同法のように連れ従えそれそのものを武器とする技。先程スタークは、それを行い無数の狼を出現させた。

三人はその無数の狼に対し、それぞれ迎撃をしていたものの、狼が噛みついた瞬間に大爆発を起こされて、その技の強力さを目の当たりにした。

だが、だからといってどうすることも出来なかったのである。狼の弾頭は直接攻撃を喰らえば分裂し、その数を増やしていく。だが、だからといって逃げても数の暴力によって追い込まれていつしか逃げ場が無くなり噛みつかれて爆発を起こされる。

この中で唯一卍解を発動している冬獅郎でも、その狼の弾頭は防げ

なかった。いくら氷で防御しようが、幾度となく続く爆発によって、やがて氷の翼はもがれていったのである。その攻撃を何度も喰らい、三人はスタークの前に敗北したのである。

(さ、て、と……誰の援護に向かおうかな……)

相手の戦闘不能が解つた今、これ以上の追い打ちは必要ない。そして自分はフリーになった。だが、だからといって手の空いている敵の総大将とやり合う気にはなれない。そこから導き出されるのは、他の者達の援護。それが一番労力の少ない方法であった。

——藍染には必要ない。

——市丸と東仙にも必要はないだろう。

——バラガンも必要とする柄ではない。

——ハリベルは自分と同じで『呪縛生鎖』があるから大丈夫であらう。

——となると。

「……面倒だが、行くとするか……」

『スターク!!仲間助けんのに面倒とか言うなよ!!』

狼の弾頭から元の拳銃の姿に戻ったりリリネットが、『面倒』と口走つたスタークに対し喝を入れる。その大声に、スタークはビクツと体を揺らしてうるさいといわんばかりに小指で耳の穴をふさぐ。

「別に奴さんを助けんのが面倒って言ってんじやねえよ。こつから向こうに行つて隊長さんとやり合うのが面倒つってんだよ」

『それも助けに行くのが面倒って言ってんのと同じじゃん!!』

「助けに行くのは肯定的だが、強い奴と戦うのが否定的なだけだ」

『……あア——もオ——!!ほら!!さっさと行くよ!!』

「はあ……あいよ」

リリネットの声に、スタークはため息を吐きながらレイチエルたちが戦っている場所に向かおうとする。遠目から見えていたあの二匹の龍はかなり強力な存在であることは分かった。

あんなものを好き勝手にやらせる訳にもいかないので、スタークは澁々ながらレイチエルが戦っている場所へと向かうことにした。

「んだよ……あの姿は……!?!」

ラヴは刀剣解放したバラガンの姿を見てそう呟いた。頭には王冠。手にはブレスレット。そしてボロボロのコートを身に纏っており、何より骸骨に変貌していたその姿に二人は絶句していた。

そしてバラガンが一歩進むと、辺りの建物が風化していき瞬く間に崩れていく。その光景を目の当たりにして、ラヴとローズの二人は距離を取ることにした。

「ちツ……んだ、ありやあ……!!?!」

「彼の近くにあるものが風化する……そんな感じじゃないかい?」

その周囲が朽ち果てていく光景を見て、ローズが冷静に分析していく。その考察に、ラヴは焦ったように声を荒げる。

「何だよ、それ!!こつちから攻撃できねえじゃねえか!!」

「確かに出来ないね……物理攻撃ならね!」

「ツ!成程な……」

ローズの言葉に、ラヴが気付いたようにニヤツとする。ローズの言っている意味が理解出来たのである。そしてそれを理解した瞬間に、ラヴは虚化をして、バラガンの方に戻っていく。

そんなラヴの姿に、バラガンが首を傾げる。

「何じゃ?死にに来おったか」

『へっ……来週のジャンプが気になり過ぎて死ぬに死に切れねえよ』

そう言つてラヴは天狗丸を構える。すると、天狗丸から赤々とした炎が溢れだす。その光景に、バラガンは興味深そうに手を顎に添える。

「ほう……見世物にしては上出来じゃな」

『はっ!今のうちに言つてろ……天狗丸。ちと熱いが我慢しろよ

……
〃火吹の小槌〃』

そう言つてラヴが天狗丸を振るった瞬間に、天狗丸から凄まじい熱量の業火がバラガンに向かって放たれる。バラガンはそれを避ける

事もせずに、そのまま炎に包まれていく。

そしてバラガンを中心に、炎がメラメラと燃え盛っていた。その光景を、ラヴは仮面の奥の瞳で見つめていた。

(……………どうだ?)

「……………ふん。この程度の炎で、儂を殺せると思うたか?」

「ッー」

しかし燃え盛る炎が急激にその勢いを失くしていき、中から無傷のバラガンは歩み出てくる。炎がバラガンを避けるようにして道が出来上がっていく様は、まるでバラガンが絶対的な王であることを如実に示しているような光景であった。

「火吹の小槌」による業火でも傷を付けられなかったことにラヴは気温によるものではない汗を垂らす。

だが、時間は稼げたであろう。

「ローズ!!」

「解ってるよ!急かさないでよね……………卍解—————」

『金沙羅舞踏団』

ラヴの後方で準備していたローズが急激に霊圧を高めていき、金沙羅の鞭であった部分がどんどん伸びていき、一つながりでありながら人型の何かを作り出していく。そして最後に、ローズの背後に指揮棒を持った巨大な両手を出現させる。

ローズ自身も、その巨大な手の持つような指揮棒を手に持つっており、その姿はさながらオーケストラを指揮する指揮者のようであった。

「……………さあ。王に相応しい君に、最高の演パフォーマンス奏をしてあげるよ」

そう言っただけローズは仰々しい振る舞いをしながら指揮棒を振る。それと同時に、十二体程の人形が一斉に動き出し、バラガンを取り囲んでいく。

そして次の瞬間、人形たちが回転し始めバラガンがどこからともなく溢れだした水流によって閉じ込められていく。

「〃海流〃」

「何……………?」

自分を取り囲む水流に驚きながら、バラガンはローズの様子を伺う。

「『火山の使者』」

次に、人形が火の玉を作り出し、バラガンにぶつけ始める。バラガンは水流に捕らわれたまま、その火球をその身に受けていく。

一撃一撃の重さは大したものではない。だがバラガンは、ローズの卍解の異様さに驚いていた。

「馬鹿な……水と火を同時に操る斬魄刀など……」

「どうだい？ 僕の金沙羅舞踏団の演目は……王の君に相応しい豪華なものを選んだつもりなだけども」

そう言いながらローズは指揮棒を今迄のどれよりも高く振り翳す。

「……さあ、他の所も立て込んでいるようだから、次の一曲で終わらせてもらおうよ……」

「『英雄の生涯』」

そう言ってローズは指揮棒を振り、演奏を始める。これでバラガンの首を仕留めることが出来る。その為に、先程ラヴに卍解をする時間を稼いでもらったのである。相手は物理攻撃に対しては絶大な力を持つ。ならば鬼道系や、幻覚系の斬魄刀ならばその力を破ることが出来る。

ローズの斬魄刀の能力は『音楽』。ローズが奏でる音楽によって相手を魅了し、それによってまやかしを見せて、そのまやかしで相手を攻撃するというものである。

最初の二つの技が効いたことから、骸骨のような見た目のバラガンにも音楽は聞こえるらしい。ならば、この最後の技も効く筈である。

「……？」

しかし、バラガンには一向に変化は見えない。

「……フン……合間の余興にはちょうど良かったが……儂を悦ばせるには物足りんな」

そう言ってバラガンは、骨だけの両腕をぱつと広げた。

「貴様……『音』に老いが無いとでも思ったか？」

「なっ……!？」

その言葉に、ローズだけでなくラヴも驚愕の表情を浮かべる。相手

の能力が物を風化させる能力だとは理解していたつもりであったが、まさかそれが「音」にも通用するとは考えてはいなかったのである。「全てのものには『古い』が存在する。『古い』とは『時間』。最も強大で、最も絶対的な、あらゆる存在の前に立ち塞がる死の力だ」バラガンの言葉に、ローズは歯噛みする。確かに音にも古いはある。音は一度響けば、遠くまで響くが、あくまでそれは空気中の物体が振動することによって鳴り響いているだけであり、その勢いが衰えれば音も消え去っていく。

今のも、バラガンの古いの力の前に消え去ったという事を知り、二人は焦燥に駆られる結果となった。

(そんな……それじゃあ、どうやっても勝てないじゃないか……!)

己の切り札である卍解すらも完封され、ローズの精神は追い詰められていた。そんなローズを見逃す訳も無く、バラガンは手の平をローズに翳す。

「――『セロ・オスキュラス黒虚閃』」

「!!」

バラガンの手から放たれた黒い波動が、ローズの体を包み込んでいく。周囲を黒く照らしていく光は、禍々しい光景であった。

「ローズウウウウウウ!!」

「貴様もだ」

そうやってバラガンは残ったもう片方の手をラヴに翳し、再び黒虚閃を放つ。それを天狗丸で防ごうとしたラヴであったが、余りの勢いにそのまま天狗丸ごと後方に吹き飛ばされていく、建物を幾つも突き破って地面に激突する。

その光景を見て、バラガンは黒虚閃を放つのを止めた。

この戦いに乱入するのだから、どのくらいの強さを持つ者であるかと思っただが、やはり自分の古いの力を前にしては無力な存在であることが解った。

「小さい……小さいのう……そうは思わんか？死神の長よ」

そうやってバラガンは、奥の方に陣取っている元柳斎に視線を移す。その際に、どこからともなく取り出した黒々しく、禍々しい斧――

——『滅亡の斧』^{グラン・カイザー}を取り出す。

その光景を見て、元柳斎も今まで鞘に納めていた斬魄刀に手を掛ける。

二人の強者の間に、静寂が訪れる。

——その時であった。

空座町のレプリカの空に、巨大な空間の裂け目が出現し、その裂け目から藍染の居る場所を中心に光が降り注いだ。

その光に、他の場所に居た者達も一斉にその異変に気付く。

——反膜^{ネガシオン}か。

藍染はその光が何なのであるかがすぐさま理解出来た。自分が瀕霊廷から去る時に、大虚に使わせたもの。

こんなことが出来るのは、それこそ大虚か大虚から破面化した者のどちらかである。

——成程、面白い。

「君は、更なる進化の果てに手に入れた力を以て、私と戦おうと言うんだね」

反膜は外と内を完全に干渉不可にする代物である。つまり、外側とは完全に遮断された空間に閉じ込められたということと同義である。

外側に居る者は藍染に手を出せず、内側に居る藍染は外に居る者達に手を出せない。

藍染は、その裂け目に向かって手を差し伸べる。

「漸く、私と同じ高みに届いたな。天宮城日向」
「……………よう、藍染」

散桜

また一つ

また一つ

散るを儂きと思う

この心が憎い

数分前・黒腔内。ガルガンタ

「――作戦は以上です。どうですか？」
「構わぬ」

日向の作戦に、白哉は首を縦に振る。卯ノ花も大方賛成である意思を見せるように頷く。だが、一護と恋次に関してはまだ納得出来ない様子で日向を見つめていた。

そして一護が切り出す。

「だけだよ、お前が藍染と一人でやるってのはよ……！」

「……一護。お前は、今戦える奴の中で唯一『完全に』藍染の鏡花水月の支配を受けていない戦力なんだ。その重要性を、お前は分かっちゃいねえ」

日向自身、藍染の『鏡花水月』の支配を視覚のみ逃れることが出来るが、霊覚を支配されはするので、完全に逃れることが出来る訳では無いのである。

そこで日向が提案したのが、『自分が完全に鏡花水月を無効化するまで、一護には黒腔で待機してもらう』という作戦であった。一護以外は、随時それぞれ黒腔から出て、戦況が劣勢である場所に加勢するなり、治療に当たるなりするというものであった。

だが、それにはある問題が発生する。いつ、日向が鏡花水月を無効化したのを伝えるのかである。黒腔を閉じた状態で外の戦況が窺えるわけも無く、『天挺空羅』も範囲外になってしまう。

そこで登場したのが日向の新たに手に入れた能力——第9十刃、アール・アルエリの有していた「認識同期」という能力である。日向が、アール・アルエリを倒したわけではない。だが数十年前に一度、アール・アルエリがまだ最下級大虚の姿のまま日向に襲いかかり、決着がつかないままその戦闘は終わった。

だが、その際にアール・アルエリには日向の霊子の残滓が刻み込まれ、そして今になってルキア達に倒されたことにより「夜叉姫」の能力が発動し、アール・アルエリの能力を取り込むことが出来たのである。

この能力を使えば、自分の身に起こっていることを逐一報告出来る。

そしてもう一つ、これを確実に使用するために生み出されたのがある。

「一護……こっちの準備が終わったら、そいつに連絡を入れる。だから、いいタイミングで出てきて、藍染に不意打ちかましてやれ！」

「……お前は大丈夫なのかよ？」

「……たりめえだろうが。死ぬ気でやるが、死ぬつもりはねえ」

「……そうか。解った！お前の作戦にのるぜ！」

一護はそう言い切った。それに伴い、日向の表情は柔らかくなる。そして五人はそれぞれの向かう場所に、ある者と一緒に黒腔を駆けて行った。

「……」

日向は藍染を睨んだまま、指をパチンと鳴らす。それに伴い、別の場所で空間の裂け目が三つ生まれる。その光景に、他の者達は驚いたような表情を見せる。だが、藍染に関しては、取るに足らないことだといわんばかりに不敵な笑みを浮かべる。

そして黒腔が開き、中からそれぞれ白哉、恋次、卯ノ花が出てくる。その者達の横には、それぞれ五人程引き連れていた。

全員が鬼のような仮面を被り、死覇装を身に纏う異形の者達。

——「鬼兵隊」。

日向が、葬討部隊隊長ルドボーン・チエルトを倒して手に入れた能力・「髑髏兵团」を行使して作り上げた日向の劣化コピー達。だが、劣化コピーといっても元にした人物のスペックが異常なため、鬼兵隊の者達のそれぞれが席官レベルである。

十刃と戦うには足りない戦力であるが、日向のコピーであるため回道も使える。そのため、怪我人の治療のためなどに日向が急いで作り上げたのである。

そして何より、認識同期により他の者達の状況が逐一入ってくる。連絡手段としては抜群である。

「ふっ……君は虚夜宮での十刃達との戦いによって進化を果たし、私と戦える次元に達したようだね」

「……その言い方だと、前戦った時はまだ俺がテメーと戦えないレベルだった風に聞こえるぜ？」

「ああ、その通りさ。そして君もそれを理解していたからこそ、私との一騎打ちを仕掛けたのだろうか？」

「口だけはいつも通り達者だな、藍染」

静かに話す両者であるが、既に霊圧の衝突は始まっていた。両者が発する霊圧が衝突することによって、大気が震え、大地も唸りを上げる。近くにそびえ立つ建物に罅が入っていき、ガラスの窓は砕け散っていく。

日向は両手に「天逆鉾」を出現させ、藍染は鏡花水月に手を掛ける。

「……！」
「ほう」

日向は瞬歩で一気に藍染の背後を取る。藍染はその初速に驚きを抱きながらも、すぐに斬魄刀を抜いて天逆鉾の一閃を受け止める。その瞬間に、天逆鉾の剣筋が炸裂し、藍染の左肩を僅かに抉る。

その日向の攻撃に、予想外であるというような表情を浮かべながらも、斬魄刀を振るって日向を弾き飛ばす。それを為されるがままに吹き飛ばされる日向であるが、すぐさま体勢を整え藍染に視線を移す。

だが視線を移した瞬間に、藍染の姿は日向の目の前から消えていた。その瞬間、日向は天逆鉾を後ろに向かって振るう。

そして天逆鉾は、藍染の振るった一閃を受け止めた。

凄まじい衝突の勢いで、爆発のような轟音が辺りに響き渡る。

「……………成程。反射神経も上がっているという訳だね」

「テメーの事だ。どうせ、居なくなったら後ろにでもいんだろなって思っただけだ」

「そうか。なら、二度目はないということだね」

「それはどうか」

そう言つて日向は、もう片方の手で握っていた天逆鉾を振るつて藍染に一閃を加えようとする。

だがそれよりも早く藍染は日向との距離を取る。そんな藍染に向けて、日向は天逆鉾を一つ消して、手の平を翳す。手の平からは、凄まじい黒い霊圧が溢れだす。

セロ・オスキュラス
（黒虚閃か）

解放状態の十刃が放つことの出来る虚閃。だが日向は、死神でありながらもそれを放つことが出来る。以前日向が使った時は、藍染が“断空”によつて“飛竜撃賊震天雷炮”を防御した時に、その防御壁を破壊するためだ。

その霊圧の収束を見て、藍染は回避しようと身構える。

だが、その時にある異変に気付く。よく見ると、収束している霊圧に日向が自分の手を斬つて流した血を混ぜ合わせているのである。

まるでそれは、“グラン・レイ・セロ王虚の閃光”を放つような挙動である。

「……………ナーダ・レイ・セロ虚無王の閃光」

次の瞬間、収束していた黒い霊圧が噴火したかの如く藍染に向かって解き放たれる。速度・密度。どちらをとつても、今までに見たことのない程の虚閃であった。黒いスパークが辺りに巻き散りながら、破壊の奔流は藍染に向かって一直線に放たれていく。

“虚無王の閃光”を藍染は他の死神を超越した瞬歩で回避するが、余波だけで服が焼け焦げたのを見て、興味深そうに日向に視線を移す。

(これが、死神の虚化の到達点か……)

藍染が長年研究していた死神の虚化であるが、現在目の前に居る者はその最終段階に入ったものと見受けられる。

まさか、不特定多数の中から選ばれた不幸な少年が、ここまでになるとは、あの時は考えもしなかっただろう。

そのようなことを考えている藍染に向かって、日向は片手に握っていた天逆鉾を投擲する。その遠距離から放たれた一撃を藍染は危なげなく回避する。藍染の横を通り抜けていった天逆鉾であったが、その瞬間に日向が指を鳴らす。すると、天逆鉾が突如膨張し、そのまま大爆発を起こして藍染を包み込んでいく。

黒い霊圧の爆発は、まるで漆黒の太陽のようであった。反膜によって外部と遮断していたから良かったものの、もしなかったのであれば爆発の余波が空座町のレプリカに諸に襲いかかっていただろう。

日向は間髪を入れずに、再び天逆鉾を右手に出現させる。そしてそのまま肩に担ぐような体勢を取る。

「さっさと出てきやがれ。今ので大したダメージ受けてねえのは解つてんだよ」

爆風によって日向が身に纏っているロングコートやマントが靡いている。そして爆風が止むと、充満する黒煙の中から白い衣服を身に纏っている藍染がゆっくりと歩み出てくる。その衣服は先程の爆風で焼け焦げている。

そして露わになった胴体に、何かが埋め込められている事に日向は気付く。

「……んだ、そりゃあ?」

「ふっ……解らないのかい。これは『崩玉』さ」

「『崩玉』……だと……?」

藍染が最も欲していた、浦原喜助の作り出した死神と虚の境界を取り除く物体。それが何故藍染の体に埋め込まれているのか、日向は理解出来ずに首を傾げる。

その間にも、藍染の体に埋め込まれている崩玉は、青々として美しい煌めきを見せながら輝いている。

客観的に見れば、陽の光によって乱反射する川のような美しい玲瓏であるが、状況が状況であるためそのような風流を感じている時間などない。

「そうさ……私を殺したいのであれば早くした方がいい。私がさらなる次元に到達する前にな」

「……言われなくてもそのつもりだ。天照らせ—— 『隸王』」

藍染の言葉に引つ掛かりを覚えながらも、日向は「隸王」を解放する。もしここが尸魂界や虚園であれば、問答無用で周囲の物体が日向に隸属されていくだろう。だがここは現世で、レプリカであるが転界結柱の際の霊子変換によって「器子」に再構成されているため、建物や地形は隸属されない。だが、この場に居る敵に隸属の力は発動される。

——ここが現世でよかった。

もし隸王を瀕霊廷で解放でもすれば、周囲に居る無関係の者達にまで影響が及ぶ。しかしここは現世。器子であれば隸属することもなく、与える影響は少ない。そしてなにより、目の前の敵を倒すためだけの、その力を存分に使える。

そして先程放った「虚無王の閃光」や今右手に握っている「天逆鉾」が隸属され、刀の形になつていく。

——やっぱり、刀の方が使いやすい。

槍の扱いも多少慣れてきたが、やはり何十年も扱っている刀の方が扱いやすいため、隸王の力を使って刀の形にした。

だが、隸王を解放しているとある問題が発生する。

「ふう——……」

日向の眉間には皺が寄る。それはどこか辛そうな表情であるともとれるものであった。

そう。日向の隸王は、解放しているだけでかなりの霊圧を消費するのである。圧倒的な隸属の力により、霊子で構成されている敵には絶対的な強さを誇る「隸王」であるが、その分の代償は凄まじい。もしこれが一般の隊士が解放をすれば、十秒も持たずに霊圧の枯渇により気を失うであろう。

だが隊長格の靈圧を有す日向であれば、数分は解放出来る。

藍染の言っていた通り、『早くした方がいい』のである。ならば、相手の忠告通りに即行で終わらせる。それが一番である。

——狙うは短期決戦。

そう考えながら、日向は藍染に向かって飛翔していった。

「藍染サマとやり合うなぎ、何て奴だよ……」

スタークは、反膜の中で激闘を繰り広げている藍染と日向を見てそう呟いた。あの死神の相手をするのが自分でなくて本当に良かったと考える。

思想の全然違う十刃達が、何故藍染に従っているのか。それは藍染が他を隔絶している力を持っているからである。十刃が全員でかかって倒せない様な相手、それが藍染である。

その強さに心酔し、陶醉し、屈服し——理由は様々であるが、破面達が藍染に従っているのはその「力」に帰結する。それだけ絶対的な力を持つ藍染にあそこまで食い下がるとは、どれだけの相手なのか。想像しただけで身の毛がよだつ。

「はあく……」

「……散れ——『千本桜』」

「おっと」

レイチエルの下に向かおうとしていたスタークの目の前に、無数の桜の花弁が舞い降りてくる。それを響転で回避するスタークだったが、面倒くさそうに頭を掻く。

「……ったく。また別の奴が来んのかい」

スタークが視線を移すと、そこには銀白のマフラーを靡かせる顔立ちの良い男が立っていた。そして己の目の前に構える刃の無い刀に、先程の桜の花弁が集まっていき、刃を為していった。

そしてその男の背後には、赤い髪の毛の男が同じく刀を構えていた。

「隊長……こいつは強いです。ここは一緒に……」

「……兄は、向こうの援護に行くがいい」

「え？で、ですが……！」

「兄が居ると、私の刀を振り辛くなる」

「は、はあ……」

白哉の言葉に、恋次はそのまま浮竹やまつ梨の居る方向へと瞬歩で消えて行った。それを見てスタークは虚閃を恋次に放とうとしたが、その瞬間にスタークに白哉が斬りかかった。

それを片方の拳銃で受け止めたスタークであったが、この隊長の速度が先程戦っていた冬獅郎よりも速いことに歯噛みする。

(まったく……損な役回りだな……)

そんなことを思いながらスタークは“無限装弾虚閃”白哉に放つ。その無数の虚閃に白哉は瞠目するが、すぐに気を取り直し、斬魄刀の切っ先を地面に向けそのまま手を離れた。

「卍解———せんほんざくらかげよし『千本桜景厳』」

「！」

白哉の前を覆い尽くす億の花弁の刃を目にして、スタークは驚愕の色を隠せない。そしてその桜色の花弁の壁は、“無限装弾虚閃”を悉く受け止めていく。“無限装弾虚閃”は連射性能こそ凄まじいが、威力は普通の虚閃と余り変わらない。尚も、普通の虚閃といつてもスタークの放つものであるため威力はかなりのものであるが、それでも硬い城壁のような物に阻まれてしまうと拙い。

『ちよつと、スターク？』

「……黙ってる」

声を掛けてくるリリネットに対し、スタークは真剣な表情で素っ気なく答える。その表情に、リリネットは思わず萎縮する。

———数対数。

相手の斬魄刀はその数が強みと見える。こちらの強みも、圧倒的な数である。しかしその形状や特徴が違ってくるため、戦法も変わってくる。

(……何でこんな強い奴と戦わなきゃなんねーんだよ)

そう考えていたスタークに、無数の花卉がスタークに向かって襲いかかってくる。それに対しスタークは凄まじい速度の響転で回避していく。そして花卉が白哉を覆っていない場所を見つけ、そこから白哉を狙撃しようと虚閃を放つ。

だがそれに気付いた白哉が手掌で操り、千本桜景厳が先程よりも速い速度でスタークの虚閃を阻む。虚閃を受け止めた無数の花卉は、波打つように形を変えていくが、それでも貫かれる事など無くそのまま攻勢に打って出るかのように再びスタークに迫っていく。

(……速い)

白哉はスタークの響転の速度を見てそう感じた。虚夜宮に於いて十刃最速を謳う者と戦ったが、目の前に居る破面はそれに追隨するほどの速度である。

ゾマリに関しては、歩法にステップを加えることにより、テクニカルな動きをしてこちらを翻弄しようとしていたが、こちらは純粹に速い。直線の移動に関してはゾマリに匹敵するかそれ以上だろう。

そのようなことを考えながら千本桜景厳の花卉をスタークに向かわせるが、回避されて後ろに会った建物を呑み込みそのまま瓦礫と為すしか出来なかった。

その間にスタークは白哉の背後に回り込み、そのまま「無限装弾虚閃」を繰り出す。だがそれも、先程と同じように無数の花卉の奔流によって防がれてしまい、本来の威力を思うように出せない。

(……やり辛い)

白哉に関しては、無数の花卉を向かわせても響転で回避されるか、虚閃を放たれて形を崩され上手く攻撃出来ない。

スタークに関しては、虚閃を放つても花卉の防壁に阻まれ、さらに近付くことも出来ない。

どちらも遠距離主体であるが故に、互いの攻撃が邪魔されて決定打が掴めない。

(だが……)

(……だけだよ……)

——負ける訳にはいかない。

両者の決意は、その刃に、その弾丸に乗って激突する。

戦火

燃え盛る火は命の様
消えゆく様も

二人の人物が視線を交わす。一人は骸骨の姿をした虚園の王。もう一人は、白い髭を靡かせる老人。

だが両者からはただならぬ圧が発せられ、それが激突している。そして、老人——元柳斎が、鞘に納めていた斬魄刀を引き抜く。それと同時に、発せられる霊圧に熱が帯びる。それだけで、元柳斎の斬魄刀・リゆうじんじやつか“流刃若火”の凄まじさが解る。

だが、それに相対す骸骨——バラガンは怖気づいた様子など見せない。寧ろ、その凄まじい熱に興味のある様子を見せる。

「ほう……流石、死神の長というだけあるな……凄まじい霊圧じゃ」
そう言いながらバラガンは右手に携えているグラン・カイター“滅亡の斧”を振るう。そして次に、口から黒い波動のようなものを放つ。

黒虚閃ではないそれは、かなりの速度で元柳斎の下へと向かっていく。

「じゃが、儂の“老い”の下ではそれも無意味じゃ」

——レスピラ“死の息吹”。

バラガンの放った死の波動は、どんどん元柳斎の下へと近いづいていく。触れたものを問答無用で老いさせて死へと向かわせるその波動は、例え元柳斎であろうとも、喰らえばただでは済まないだろう。だが、元柳斎がそう簡単に喰らう筈がなかった。

突如、元柳斎の周りに凄まじい業火が巻き上がる。昔から“火災旋風”というものがあり、それは火を伴った旋風が竜巻のように見える現象があるが、今目の前で広がっているのはその火災旋風を何倍も規模を大きくしたようなものに見える。

“噴火”や、“爆炎”という言葉ですら足りない程の炎。それは迫りくる“死の息吹”と激突する。

「……何？」

バラガンは骸骨となったことで空洞になった眼窩で、目の前の光景を見て瞠目した。バラガンの放った“死の息吹”は、元柳斎の放っている業火と激突し、その場で停滞しているのである。

絶対的な力である“古い”。それが只の炎に止められているのである。

「……貴様は、その力の事を“時間”と言ったな？」

「……だったら何だ？」

元柳斎の“古い”を言い換えた“時間”という言葉に、バラガンは素っ気なく反応する。“古い”とは、時間の経過による物体の劣化。それがバラガンの力の本質である。

どんな物体にも、等しく時は流れる。だからこそ、何者にも“古い”は絶対的に通用するのである。

「つまり貴様の“古い”の力は、言い換えれば時間の急速な経過の促進という力じゃ。ならば、儂の炎の一塊が消え失せるよりも前に、儂が新たな炎を生み出せば、その絶対的な力というものを押し切るこゝとが出来ると……違うかの？」

「……莫迦な……そんなことが出来る筈が……！」

元柳斎の言う事は確かに正しいであろう。一つが消え失せるよりも早く、また新たに一つのを生み出せば、自ずとそこには停滞が起こる。そして後者が早ければ、結果的にそれは押し返せることになる。

だが言うのは簡単であるが、バラガンの“古い”の力は簡単に押し切れる程のものではない。一人の体であれば、一分もかからずに塵一つ残さず風化させることが出来るほどのものなのだ。

「儂を誰とっておる？ 護廷十三隊総隊長、山本元柳斎重國。貴様等のような破面如きに後れを取るほど、老いてはいないわ」

「っ！ 貴様!!」

その言葉にバラガンは憤慨し、さらに“死の息吹”を放つ。だが、

それに伴い元柳斎も新たに炎を生み出す。

それに伴い、元柳斎の足元に広がる建物が悉く燃やし尽くされていく。

元柳斎は、一歩。そしてまた一歩とバラガンの下に歩み寄っていく。

「安心せい。苦しみなぞ与えぬように、一瞬で炭にしてやるわい」

「ア~~~~~……」

「！」

何か元柳斎の背後に現れる。元柳斎はすぐさま振り向いて斬魄刀を振るうが、それを受け止められ炎が吸い込まれていく。その光景に驚く間もなく、元柳斎は目の前の破面に殴り飛ばされて地面に落下していく。

凄まじい勢いで殴り飛ばされた元柳斎であったが、空中で体勢を瞬時に整え上手く着地する。その際に着地した地面に巨大なクレターが出来、その衝撃の凄まじさを物語っていたが、元柳斎は堪えた様子は見せない。

だが、先程斬魄刀を振るった際に炎が吸い込まれていく光景を思い出し、何が起きたのかと思案を巡らせる。

そのまま元柳斎は、視線を上に向ける。そこにはバラガンと同じ位の異形の姿の者が居た。顔の半分が仮面で覆われており、両肩は異常なほど突出していた。

(……何故、流刃若火の炎が……)

元柳斎が思考を巡らせている間にも、その異形の者は元柳斎に向かって突進してくる。その光景を、傍でバラガンが眺めていた。

「ふん。ワンダーワイスの奴め……」

バラガンは元柳斎に突っ込んで行った破面の名前を言う。あの破

面の名はワンダーワイス・マルジェラ。ここにフリーラーと共にやって来た破面である。そしてその後、仮面の軍勢である白と戦っていた筈なのであるが、ここにやって来たのを見ると倒したか殺したのである。

最終的な結果はともかく、ワンダーワイスがここに来たということは、元柳斎が終わったことを意味する。

なぜならば、ワンダーワイスの現在発動している刀剣解放「滅火皇子」は、まさに今戦っている元柳斎の斬魄刀である「流刃若火」の炎を封じるといふ能力であるのだ。

——元柳斎を倒すために生み出された、唯一の改造破面。

そのワンダーワイスが、まさしく今、その死神の長と戦っているのである。

(タイミングは予想外だったが……ちょうどよいわい)

予想外の乱入に、バラガンは内心微笑む。最も脅威であった元柳斎の炎が、現在封じられているのである。これ以上、最強の死神と謳われる男を殺す良い機会はないだろう。

バラガンは「滅亡の斧」グラン・カイレダを構え、ワンダーワイスを打ち合っている元柳斎の下に向かっていく。

その姿は、まるで「死神」であった。

(……どうだ……?)

己の卍解・「登滝ノ双門」トウラクウのソウモンによって圧縮して撃ち返した黒虚閃で、不死身と思われるレイチエルにかなりの一撃を加えたはずである。これでまだ無傷であるというのであれば、本当にレイチエルが不死身なのだろうと、浮竹は予測を立てていた。

黒虚閃の爆発によって巻き起こった黒煙は、未だ晴れない。

様子を伺っていると、背後から一つの霊圧が近付いてくるのに気づく。

「浮竹隊長！」

「阿散井副隊長か！朽木隊長はどうしたんだ!？」

近づいてきたのは六番隊副隊長である阿散井恋次。恋次がこの空座町のレプリカに來た際に、白哉や卯ノ花の靈圧も共に感じていた。そして恋次に関してには白哉と共に動くと考えていたのであったが、ここに來たことに驚きを隠せなかった。

「隊長は、一人で十刃をやると！そんなでもって俺は、こっちの援護に行くように言われました!？」

「そうか!？」

一瞬、一人で十刃をやるということに不安を持ったが白哉の事なので大丈夫であろうと浮竹は考え、目の前の敵に集中することにした。未だにレイチエルに動きは無い。

だが、靈圧を探る限りその場に居る事は確かなのである。

「とうろうのそうもん登滝ノ双門」の攻撃形態である「雷龍」達は、浮竹と同じように相手の様子を伺うように上空でぐるぐる回っている。

「……阿散井副隊長。相手は強い。常に警戒を……!？」

浮竹が恋次に注意を喚起していると、黒煙の中から黒い閃光が煙を穿ちながら二人の居る場所へと迫ってくる。それを目の当たりにした浮竹は、すぐさま両手に携えている斬魄刀の片方を構え、その破壊の奔流を吸収し、即座に反射して返していく。

そして浮竹が反射した黒虚閃が再び黒煙を穿つよりも早く、黒煙の中から黒い鎧のレイチエルが上に向かって飛び出して來た。

「!あれを喰らっても元通りになるのか……!」

レイチエルが何も変わらない姿で黒煙から出てきたことに、浮竹は齒噛みする。だが、その動きに注目がいった。

最初の時よりも、動きが遅くなっている。

（疲労か……?なら、そろそろ時間切れということか!）

「阿散井副隊長!卍解して援護してくれるか!？」

「はい!勿論っす!!卍解——『ひひおうざびまる狒々王蛇尾丸』!!」

浮竹の言葉を聞いた恋次がすぐさま卍解をする。そしてダンビラのような形状をしていた斬魄刀が、靈圧の爆発と共に巨大な蛇の骨のような形状になる。浮竹の「雷龍」と同じ巨大なその刀身は、レイ

チエルに向かって一気に迫っていく。

だが、その蛇の髑髏をレイチエルは片手で受け止める。そしてそのまま狒々王蛇尾丸を振り回そうとする。それに伴い、狒々王蛇尾丸の柄の部分を持っている恋次も、波打つように身体を持っていかれようとす。

「うおおお!!」

「竜糾絶衝!!」

だが、レイチエルが完全に振り抜く前に狒々王蛇尾丸の髑髏を掴んでいる腕を、まつ梨が霊圧を込めた刃で斬り落とす。

それによって恋次は途中で体勢を整え、振り回されることを回避することは成功する。

自分の邪魔をしたまつ梨に対し黒い剣を出現させ斬ろうとするレイチエルであったが、それよりも早く雷龍がレイチエルを巨大な手で叩き落とす。

「ぐっ……」

その一撃に、レイチエルはこの戦闘で初めてはつきりとした苦悶の声を漏らした。地面に落下している間にもレイチエルは斬り落とされた鎧の腕の部分を再生する。

だが、そんなレイチエルに向かって先程まで掴まれていた狒々王蛇尾丸の頭部が、レイチエルに狙いを定めていた。

「狒骨大砲!!」

そして背骨のような刃節から霊圧が順々に溢れだし、頭部に到達した瞬間に赤い霊圧の光線がレイチエルに襲いかかった。

だが、その一撃を瞬時に放った黒虚閃で相殺する。しかしその間に、まつ梨がレイチエルの横に回り込んでいた。

「縛道の六十二・『百歩欄干』!」

左手に出現させた光の柱をレイチエルに向けて投擲する。拘束系の技はレイチエルには効かない。だがそれは『最終的には効かない』という意味であり、拘束を解除する一瞬の隙は出来る。

それを狙って、まつ梨は縛道を仕掛けた。先程レイチエルの回し蹴りを喰らってあばら骨に数本罅が入っているが、それでもまだ戦える

といわんばかりに。

しかし、まつ梨が満身創痍であることは傍から見てもはつきりとしていた。苦しそうに肩で息をして、眉間には深い皺が刻まれていた。そして臓器にもダメージが入っているのか、口の端からは血が流れていた。

それでもまつ梨は戦うことを止めなかった。

浮竹がこの破面を完全に倒すためには、何としても隙を作らなければならぬ。レイチエルの様子を見て、先程の攻撃が効いていることが解ただけで、消えかかっていた闘志は再び手に握る斬魄刀の刀身のように勢いを増して燃え盛った。

まつ梨の放った百歩欄干は、無数に分裂し、ひこつたいほう「狒骨大砲」を相殺している途中のレイチエルに襲いかかり、その鎧に数本突き刺さる。

「——っ!!」

そして恋次が放った、ひこつたいほう「狒骨大砲」を完全に相殺した後、レイチエルは鎧に突き刺さる光の柱を引き抜こうと手を掛ける。

だがその瞬間に、再び浮竹の操る雷龍が襲いかかったのである。

「ガアアアア!!」

「邪魔だ!!!」

しかし雷龍が襲いかかる直前に、その頭部目掛けて黒虚閃を放つ。このままいけば雷龍の頭部を貫き、その行動を阻害できるだろう。

だがレイチエルの考えとは裏腹に、雷龍は一瞬にして鯉に姿を変えらる。そしてそのままレイチエルの放った黒虚閃を吸い取る。

その光景に驚く間もなく、レイチエルの背後からもう一体の雷龍が襲いかかる。そして、巨大な手でレイチエルの両腕を拘束したまま、巨大な口腔から先程「波龍」が吸い取った黒虚閃を瞬時に放った。

至近距離での黒虚閃。これならば、どんな相手でも手傷は負わせられるはずである。

そして先程とは違う状況。先程は地面目掛けて放った故に黒煙が発生し、レイチエルの鎧の再生のプロセスを観察することが出来なかった。だが、今の状況は下から上に放っている。これならば観察に邪魔な埃を巻き上げることなく、レイチエルの鎧の再生のプロセスを

観察できる。

浮竹がそのようなことを考えながら、黒い破壊の奔流がレイチエルの身体を呑み込むのを眺めていた。その奔流からは、レイチエルの鎧と思われる黒い破片のような物が辺りに飛び散っていく。

(さあ……どうだ……!!)

数秒して、黒い奔流は止む。そしてその中から、何やらビー玉のような物が落ちていくのが目に映った。

「……何だ、あれは……？」

そしてそのビー玉のような物が落ちていくのを観察していると、その玉を中心に鎧が再生していくのが見えた。

十秒もしない内に、先程と同じような黒い鎧を見に纏ったレイチエルの姿がそこに現れた。

謎の玉。それを中心とした鎧の再生。

「成程……そういうことか!!」

その一連の流れを見ていて、浮竹が声を上げる。そんな浮竹に対し、他の二人は目を丸くする。

浮竹の様子を見る限り、浮竹はあの光景が何なのかはつきりと解つたようであった。二人の視線には、その答えを求める様な感情が籠っていた。

「なっ………どういう事なんですか!？」

「二人とも!よく聞いてくれ!!あの破面は不死身なんかじゃない!!只、本体がああ玉のように小さく凝縮されているんだ!!あの球を完全に破壊しなければ、あの破面は何度でも再生する!!」

「なっ………!？」

その言葉を聞き、二人は瞠目する。今の一瞬でそこまで理解した浮竹への驚嘆もあるが、何よりもレイチエルのその特異性にであった。刀剣解放し、その身体がビー玉程に凝縮されるなど今まで戦った破面の中には居なかった。

だが、今は目の前で起こっていることが現実であった。

「そして本体が凝縮されている分、あの球の硬度は相当なものになっている!!並みの攻撃じゃ砕けないぞ!!」

「じゃ、じゃあどうすれば……!?!」

「集中攻撃だ！全員で攻撃して本体をむき出しにした後、本体に集中攻撃するしかない!!」

浮竹の言葉に、まつ梨と恋次は首を縦に振る。

その一方、レイチエルは自分の鎧の秘密を暴かれたことに歯噛みしていた。ほとんど、浮竹の言っている事は当たっている。

レイチエルがいくら頭部や腕を吹き飛ばされても平気だったのは、本体である核に攻撃が当たっていなかった為である。レイチエルが刀剣解放した後、本体である核は胴体の一つの玉として凝縮する。それ故に胴体への攻撃さえ避けていれば、ほぼ不死身であるかのような振る舞いが出るのである。そして鎧はレイチエルの霊圧と^{エスカルフィリオーズ}「**畏怖寒霊**」によって形成される鎧である為、かなりの少ない霊圧で再生できる。だが、霊圧を凍らせて固めているだけなので、実際は脆い。

そして先程浮竹の卍解により、二度ほど本体への攻撃を許してしまった。本体が凝縮されている為、その分硬度は上がっているが広範囲の攻撃を喰らえば、普通の体であつたらかすり傷で済むようなものでも全身に受けるような状況になってしまう。

そして受けた二発がどちらも自分の放った黒虚閃である為、かなりのダメージをレイチエルは負っていた。

(ちっ……あの男の斬魄刀は厄介だ……だからと言ってすぐに対応できるものでもない。なら、周りの奴等を倒すのに徹した方が得策だ) 浮竹の斬魄刀の能力は、かなり厄介な部類に入る。それ故、下手に最初に手を打つのではなく、外野の方を片付けて始末することを企てる。

そんな事を考えている間にも、敵である三人の死神はレイチエルに向かつて攻撃を仕掛けてくる。

——卍解使いが三人。

敵としては充分過ぎる。隊長でないにしても、それに匹敵しているのがまた厄介であるところだ。もしこれが他の副隊長などの卍解を使えない者達であつたら、すぐにでも倒す事は出来ただろう。

だが、相手はどれも卍解の使い手。卍解をすればその死神の戦闘力は五倍から十倍になるとも言われている。使い手の元の霊圧にもよるが、下位十刃には匹敵するであろう。

——厄介この上ない。

レイチエルは、自分がどのような攻撃に弱いのか把握しているつもりである。それは、広範囲尚且つ超威力の攻撃である。

広範囲の攻撃を喰らえば鎧が全部引きはがされる。鎧が引きはがされた後は、再生するまでレイチエルは動くことが出来ず、無防備なのである。そして高威力の攻撃を喰らえば、むき出しの本体が砕ける。本体が凝縮し硬度が上がったと言っても、少しでも攻撃が当たれば全身に攻撃を喰らったのと同義のダメージを負うことから、刀剣解放以後のレイチエルの耐久力はむしろ下がったと言えよう。

そしてそのような芸当を出来るのは、死神の長である元柳斎や、藍染のような規格外の霊圧を持っている者。さらに「古い」の力を持つバラガンのような者でなければ出来ない。

しかしそのような者達でなくても、実力者数人による連携で鎧を剥がされて本体を攻撃されるというプロセスを取られてしまったら、レイチエルも苦戦は免れない。

——だが、死ぬわけにはいかない。

レイチエルは自分が担っている役割を思い出し、闘志を昂ぶらせる。自分は、二人の十刃の命の要であるのだ。ハリベルはともかく、スタークはまだ発動していないため、スタークに「呪縛生鎖」が発動するよりも前に自分の刀剣解放が解けたら、その先のスタークの命は保障できない。

確実に皆の命が保障出来るまで、レイチエルは是が非でも刀剣解放を保たなければならないのである。

——唯一の方法なのだから。

レイチエルは、己の霊圧を高めながら三人に立ち向かおうと剣を構える。相対す三人の目は闘志に溢れている。

何という真つ直ぐな目なのか。

これは藍染達と護廷十三隊の「戦争」である。戦争が起きれば、多

くの者達が死ぬ。それは免れないことだろう。

——俺の力は、アイツ等を生き残らせるための唯一の方法なんだ。

“呪縛生鎖”は一度死ねば十日間の戒めを受けるが、その間の命は確実に保証出来る。その戒めから抜け出せるかは、本人の問題であるが“死ぬ気”で我慢すれば元の普通の体に戻ることが出来る。

発動しないのが一番いいのであるが、護廷十三隊と戦うのであれば嫌でも死人が出る。言い換えれば、勝てばいいのであるが犠牲を出さずに勝つのは不可能なのである。

どんなに優れた戦士でも、死ぬときは死ぬ。それは実力差もあるだろう。運もあるだろう。それをレイチエルは知っていた。

そして、その不確定要素を断つための生存方法が“呪縛生鎖”なのだ。

自分の失った心を元に、形成されていった能力。それは、他者を生き残らせるためのものであった。

他者と喰らい合う存在である虚にしてみれば不要なものであっただろう。だが、破面となった今は違う。

——生かしたい奴が居る。

人間のような姿になり、僅かであるが人間のような生活が送れるようになり、そして人間のような感情も少し持つことが出来た。

——愛おしいと思う者が居る。

その中で、偽りであっても“友”と呼べるのが数人。

そのどれも、藍染の配下という存在。

君主の下で戦うという意味を、レイチエルは知っている。それはいつ切り捨てられるか解らないということである。

藍染のような者が上に立つ者であれば、下の者は駒にしか過ぎない。それは薄々感じる事が出来た。不必要になれば、自分達は切り捨てられるだろう。

その時の為の保険が“呪縛生鎖”ということである。

「……………おおおおっ!!!」

レイチエルは一気に霊圧を高める。それに伴い、黒い霊圧が辺りに

吹き荒ぶ。その霊圧の高さに、三人は目を見開く。

そして、手に携えている黒い霊圧の剣を巨大にする。

黒く瞬く切っ先を、目の前の死神達に向ける。

「……そこを退けてもらおうか……」

——さあ、生きる為の戦いを謳歌しようか。

閃紅

敵に恐怖など持たない

恐怖する事があれば

お前のその身体が

赤く 紅く 朱く

やがて黒く染まっていく事だ

「破道の六十三・『雷吼炮』
らいこうほう

「無駄だ」

藍染の放った雷を纏った光弾は、日向の体に当たる一歩手前で靈子に霧散していった。そして渦巻くようにしてから、日向の右手に握っている靈子で構成されている刀に吸い込まれていく。

(これが靈子の絶対隷属か……まるで滅却師のようだな)

藍染はその光景に対し興味を抱いていた。日向の斬魄刀である隸王は、現在完全に解放することが可能になっている。

以前双匣の丘で戦った時は、あの隷属の力でも始解すらしていなかった——否、出来ていなかったのである。それ故に隷属の力を調整することが容易であったのだろうか、今はその調整が限りなく利かなくなっている。

隸王の天相從臨の名は「天照」あまてらす。この太陽の光の下の内、日向を中心とした千里がその靈子の絶対隷属の領域と為せるものである。千里は、言いかえれば四千キロメートル。比較対象として瀨靈廷を挙げてみれば、その全てを隷属領域として覆うことの出来るものである。

傍から聞けば凄まじい力であり、その隷属の力と相まって無敵のようにも思えるが、それでも弱点はある。

その隷属の力の凄まじさゆえに、斬魄刀の所有者の霊圧は急激に消耗されていくのである。その証拠に、まだ一分ほどしか解放していない日向も、顔に滝のような汗を掻いている。

藍染からしてみれば、短絡的思考故に勝ちを急いだ結果に思えた。だが、だからといって藍染が日向を圧倒出来ている訳では無い。

放った鬼道は、全て隸王の隷属の力によって命中するよりも前に霧散する。その度に日向の手に持っている霊子の剣が、勢いを増していくのが目に見えた。

その周囲の霊子を取り込み、自らの武器と為していく姿は、クインシー・レットシユティール滅却師最終形態に酷似している。だがその規模は、クインシー・レットシユティール滅却師最終形態を発動した石田とは比べ物にならない。

現に、藍染は日向に近付くことが出来ない。

「――あまのはばきり天羽々斬」

距離を取っている藍染に対し、日向は右手に持つ霊子の剣を振り、グラン・レイ・ゼロ“王虚の閃光”を圧縮した斬撃を繰り出してくる。

その初速、そして余波から感じ取られる威力を目の当たりにして、双匣の丘の時とは比べ物にならない程威力が向上したことを悟る。

瞬歩ですぐさま回避し、別の場所から日向の様子を伺う。だが他を超越する速度で動く藍染の動きに、日向の目は確実にその姿を捉えて首を向けた。

それと同時に、やまたのおろち“八岐大蛇”を発動する。禍々しい色をした鱗を持つ蛇の頭部が、藍染に向かって業火を纏う虚閃を放つ。

――セロ・フルガトリオ煉獄虚閃”。

「破道の九十一・『せんじゆこうてんたいほう千手皎天汰炮』」

八つの業火の閃光に、藍染は無数の光弾を放つ。それらは両者の中心で激突し、大爆発を起こす。爆炎と黒煙が辺りに充満していき、反膜の中の戦場の視界は悉く悪くなっていく。

この視界が悪くなった状況下では、“鏡花水月”の完全催眠の能力持つ藍染が圧倒的に有利である。霊圧知覚の主導権は藍染側にある。

ここで鏡花水月を解放すれば、瞬く間に日向に藍染の位置を誤認させることが可能になる。

それを使わない筈が無く、藍染は瞬時に鏡花水月を解放する。一度催眠下に置けば、ノーモーションで再び完全催眠に陥らせる事が出来る。

要するに、いつ鏡花水月を解放したのかすら解らないまま、相手を完全催眠に陥らせることが可能になるのである。

(さて……君の隸王の力がどの程度なのか見せてもらおうか)

正面から斬りかかれば、視界は支配されない日向にすぐ見つかる。背後に關しては先程の攻防の中で警戒されている筈である。

そこで藍染は、上から斬りかかることにした。

瞬歩で一瞬の内に、日向の頭上まで移動する。そしてそのまま、剣を振り下ろそうと接近していく。

「シヤ———!!」

「……何？」

だが、藍染が完全に日向に肉迫するよりも早く、日向の発動していた「八岐大蛇」の蛇の内の一体が藍染を見つけて、その牙を剥き出しにして襲いかかってきた。

蛇の来襲に対し、一刀のもとに頭部を斬り落とした。そして一つの頭部が斬り落とされたことに気付いた他の蛇たちも、一斉に藍染に襲いかかっていく。

(……成程。この蛇の目も支配されないという訳か)

藍染は日向の浄天眼の効力が、この蛇たちにも適応されていることを理解し、不敵な笑みを浮かべた。

———こうでなくては。

自分が更なる高みに昇るまでの戦いならば、これぐらいしてもらわなくては面白みに欠ける。

只でさえ、自分の周りに居る者達は地力の時点で届かない者がほとんどなのである。そして鏡花水月の完全催眠。この絶対的な二つに加え、今の自分には「崩玉」という存在がある。

今の自分には何を以てしても敵いはしない。だが、そこからさらに

上に昇る為には、ある程度の存在が立ちはだかなければならない。「簡単には近づけさせてくれないみたいだね」

そう言いながら藍染は、迫りくる蛇の頭を全て斬り落とした。重量のある頭部が地面に向かって落下していく。だがそれらも、日向の隸属の力によつて分解され、霊子の刀に向かって集まっていく。

その間にも、日向は藍染に向かって手を翳していた。

——ゼロ・オスキュラス黒虚閃。

漆黒の破壊の奔流。先程発生した黒煙を吹き飛ばしながら、藍染の下に向かって爬行する。

しかしその一撃を、藍染は片手で受け止めた。だが完全に手で受け止めているという訳では無く、藍染の手の前には何やら防御壁のようなものが発生していた。

——エル・エスクード。

藍染の目の前に出現したガラスのような防御壁は、日向の放った黒虚閃を受け止めた。だがこの技は強い衝撃には弱いという特性を持つために、黒虚閃を受け止めたのは一秒程であった。

しかしその一秒の内に、藍染は日向に肉迫することに成功した。そのまま藍染は斬魄刀を横に一閃する。このままいけば、日向の胴体は為すすべなく、双匣の丘での一護のように斬り裂かれるだろう。

「——何……？」

だが、藍染が斬魄刀を振り切ると、刀身の半分が綺麗さっぱり消え失せていた。何が起こったのか解らないまま、藍染は一旦距離を取ろうとする。

しかし藍染のその一瞬の驚きを見逃すはずもなく、日向は霊子の剣を振るう。

———
あまのはばきり
〃天羽々斬〃。

先程も放った〃王虚の閃光〃を圧縮した斬撃が、藍染の体に襲いかかる。それは藍染の左肩から右のわき腹にかけて大きな裂傷を作り上げる。その際に、藍染の体からは血は一切出なかった。

斬られているにも拘わらず流血しないことに疑問を抱きながら、日向は再び剣を振るおうとする。

だが日向の返す太刀よりも早く、藍染は瞬歩で一定の距離を取るよう離れた。

「ちっ……」

二撃目を喰らわせることが出来なかった事に、日向は舌打ちをする。出来れば今の一瞬で藍染に完全に触れてメタスタシアの能力を発動したかったが、斬魄刀の刀身が半分消え失せるといふ事態を目の当たりにした藍染の動きはかなり俊敏であった。

勿論これはメタスタシアの能力などではない。単純に、〃隷属〃の力によって霊子に分解されただけである。只、その力が異常であった為に、刃が日向の胴に当たるよりも早く霊子に分解されただけである。

これこそが〃隷王〃。太陽の光の下に於いて絶対的な優位を誇る斬魄刀である。

余りに強すぎる隷属の力は、発動した瞬間から相手は日向に触れる事すら出来なくなる。真面にやり合って刃を届かせるのはほぼ不可能になる。しかし、その代わりに日向も尋常ではない程に体力を消耗する。

———
時間との勝負。

日向は間髪を入れずに藍染に向かって突撃する。先程の斬魄刀の半分が消え失せたのを目の当たりにした藍染は、近接戦闘では不利を認めないと理解し、左手に黒い霊圧の塊を出現させる。

「破道の九十・『黒棺』」

突如、黒い壁が構築されていき日向を覆っていく。凄まじい重力の奔流は、唸り声のような重低音を辺りに響かせる。

黒棺は瞬く間に日向の体を覆い尽くしていく。

重力の奔流であれば、幾ら隷属の力を持ってしても防ぎなど出来ない筈であろう。

「おおおおおおお!!」

だが、完全に覆われる直前に日向は左手に“天逆鉾”あまのさかほこを出現させて、黒棺の中で投擲する。それは黒棺の面の一つに激突し大爆発を起こす。そして余りある威力に、詠唱破棄の黒棺の面の一つに罅を入れて破壊する。その際に罅の合間から日向は脱出して、藍染に視線を移す。

その瞬間に、日向はあり得ない光景を目の当たりにした。

先程“天羽々斬”あまのはばきりで負わせたはずの傷が、瞬間に塞がっていくのである。それは超速再生といった類のものではなかった。傷口を心に皮膚に罅が入っていき、それが広がっていくと同時に傷が徐々に、傷を負う前の状態に戻っていったのである。

「……なんだそりゃあ。超速再生でも、回道でもなさそうだな」

「ふっ……私が虚のように超速再生などと思うか。これは、主に對する防衛本能だ」

「主に對する防衛本能……だと?」

藍染の言っている意味が理解出来ない。

主とは藍染の事であろうが、“何が”藍染を主と認識しているのが理解出来なかった。だが、藍染の体に埋め込まれている崩玉が神々しく輝いているのを目の当たりにして、あることに思い至る。

(……崩玉か)

藍染がルキアを処刑しようとした一番の理由——崩玉。恐らく、崩玉が何らかの作用をもたらして、超速再生のような回復能力を藍染に与えているものだと日向は考えた。

——気に入らねえな。

自然と、日向の眉間の皺が深くなる。ルキアを殺そうとしたのもそうであるが、何よりも藍染が崩玉を手に入れる過程で行った事を思うと、腸が煮えくり返りそうになった。

流魂街の住民や、平子達に對する虚化の実験。そして瀨靈廷に於ける様々な死神達に對する裏切り。

無念に死んで逝った者達。犠牲になった者達。心を踏み躪られた者達。恐らく、自分が考えているよりも多く、深く傷跡は残っているのだろう。

——ああ、気に入らねえ。

そしてその矛先は自分にも向けられる。自分は無力であった。元凶が藍染と知っても、手を出すことが出来ない程に力の差があった。浦原達に手を出すなど言われて、日向は複雑な気持ちで二十年を過ごした。そしてその間は、自分の力を磨くために費やした。

本当に藍染を倒すためだけなのであれば、アルトウロを倒した後、機を見計らって現世に逃亡すればよかったのだと思う。だが、それは出来なかった。

約束したのだ。

もう二度と、勝手に行かない、と。

親友と交わした約束。それが日向を瀨霊廷に留まらせる結果となった。

以前よりも、周囲に対し疑心暗鬼にはなった。だがそれでもルキアの前だけは、完全に素の自分を見せることが出来たのだ。

自分の、心の拠り所であった。

彼女の笑顔で、自分も笑顔になれた。

それを踏み躪った藍染が許せない。

そして、それを完全に止める事が出来なかった自分も許せない。

——これは俺にとってのケジメなんだ。

虚の力を持つてから、早四十年。その間に、馳せた想いは多くある。その内で、日向にとって果たしたいものが存在した。

半分打算で成った死神だが、今はそんな事は無い。誇りすら持っている。だからこそ、「死神」として藍染の凶行を止めなければならぬ。

(藍染……感謝してやるよ。結果的にはお前のお蔭で、力を、仲間を手に入れることが出来た。だから俺は、仲間を護る為に手に入れた力でお前を止める……！)

藍染の虚化の実験により、日向は戦うきっかけを、力を掴んだ。そ

してそれによって護れてきたものも多く存在する。

始まりこそ不本意だったとはいえ、多くの存在を護れることに自分は満足感を得ていた。

だが、その始まりは藍染の凶行によるもの。犠牲者の内の一人として、日向はこれ以上の犠牲が出る前に止めなければならぬという義務を感じていた。

——その為の力なら、手に入れた。

走馬灯のように駆け巡った想いを胸にしまいこみ、日向は霊圧をさらに高める。その光景に、藍染は不敵な笑みを浮かべた。

(想像以上だ。君は黒崎一護に次ぐ興味をそそられる研究対象だ。さあ……余す所なく、君が私を倒すために得た力を見せてもらおう)

「うおおお!!」

恋次は狒々王蛇尾丸を、レイチエル目がけて振るう。巨大な蛇の髑髏は、その黒い鎧をかみ砕こうと迫っていく。

その光景は、遠目から見ても迫力満点である。しかし先程の二の舞を踏むまいと、レイチエルは響転で回避する。

しかし回避した先には、まつ梨が待機しており斬魄刀を今まさに振るおうとしているところであった。

「でやああああ!!」

「……」

「なっ……!!」

しかし、レイチエルが凄まじい角度にのけ反ったことにより、まつ梨の横に振るった一閃は回避されてしまった。

そのままレイチエルは身体を捻りながらまつ梨に接近し、そのまま回し蹴りを左頬に喰らわせる。まつ梨は鈍い嫌な音を立てながら、そのまま後方の建物を突き破るように吹き飛んで行った。

その隙に、レイチエルの上下からそれぞれ浮竹の操る雷龍が襲いか

かる。その瞬間に、レイチエルは徐に両腕を自らの後方に構え、そのまま霊圧を放出する。その放出をブーストにして、レイチエルは一気に挟み撃ちから脱出する。

「なっ……なんつー野郎だ……!」

一連の流れを見ていた恋次は驚愕の声を漏らす。霊圧を放出して加速するなど、並大抵の技ではない。さらにその加速を見ても、放出した霊圧の量もかなりのものであると解る。

(バケモンかよ……!)

さらに先程から、レイチエルは虚閃や虚弾などを極力使わないようになっていく。それは浮竹の斬魄刀の能力を危惧しての行動である。飛び道具を封じられたことにレイチエルの戦闘は近接に絞られてしまっているが、それを補うように速度をどんどん上げてきている。

その速度は、三人の連携を以てしても完全に捉える事は難しかった。

だが見る限りそれは捨て身にも近い行動であった。勝ちに急いでいるような、そんな行動。

しかし、並みの実力でない者が行くと厄介極まりない。火事場の馬鹿力と言おうか。いつも以上の力を引き出し、凶悪さに磨きがかかっていた。

「ち……くしょうが……!!」

予想以上の速度の、恋次の狒々王蛇尾丸は追いつくことが出来ない。

——どうする？

狒々王蛇尾丸の攻撃力では、レイチエルの本体に致命傷を与えられる程の攻撃力はない。それならば浮竹の正解に任せた方が早い。

しかし、だからといって黙って援護に徹する程恋次の気も長くない。

——どうすりやいいんだ……!?!……!!

必死に頭を回転させていると、一つの考えが浮かぶ。

自分にしては中々の考えだと、口の両端を吊り上げる。そして狒々王蛇尾丸を操り、“狒骨大砲”をレイチエルに向けて放つ。しかし直

線である光線は容易く回避されて、あろうことか奥に居る浮竹に目がけて飛んでいく。

それを目の当たりにした浮竹は、すぐさま雷龍の一体を波龍にして、その霊圧の光線を受け止める。

「阿散井副隊長！落ちっ……！」

てつきり恋次が誤射したのだと思っていた浮竹は、恋次が何の動揺も見せずに首を縦に振ったことで、今の攻撃の意図を理解した。

そして恋次は続けざまに「狒骨大砲」をレイチエルに連射していく。何度も柄を振るい、その度に赤い霊圧の光線が宙を駆けて行く。それをレイチエルは、危なげなく回避していく。途中で浮竹の雷龍による来襲もあるが、それすらも回避していく。

そして恋次は、何発も放った後に瞬歩でレイチエルに向かっている。それに対しレイチエルは、右手に携えている剣の込める霊圧を高めて相対そうとする。

「うおおおおおおお！！！」

恋次は咆哮を上げながら狒々王蛇尾丸を振るう。それと同時に、蛇の頭蓋も恋次と同じように咆哮を上げながらレイチエルに向かって一直線に迫っていく。

そして迫りくる蛇の頭蓋を、本気で殴りつける。それに伴い狒々王蛇尾丸は勢いを殺され、その場で波打つように刃節をくねらせて止まる。

だがその間にも、恋次はレイチエルとの距離を詰めようと動いていた。

「狒骨——！！！」

「遅い！！」

恋次が、レイチエルが殴りつけた蛇の頭蓋から狒骨大砲放とうとしたのに対し、レイチエルはその頭蓋の口腔に向けて黒虚閃を放った。凄まじい霊圧の逆流と、恋次が込めた霊圧が衝突を起こし、狒々王蛇尾丸は爆発を起こす。

刃節はあちこちに飛び散り、そして黒虚閃はそのまま狒々王蛇尾丸の柄を握る恋次の元へと駆けていった。

が
つ
た。

重み

思い出せないんだ
お前が重ねてくれた
手の重みが

「はあ……はあ……い！」

碎蜂はハリベルを前に跪いていた。一度卍解を発動し、止めを差したかと思ったが謎の現象により完全に復活したハリベルを前に為す術が無くなっていた。

何とかハツチが防御に徹し致命傷だけは避けているが、攻勢に出る事は出来なかった。それは隠密機動の命とも言える「腕」や「足」に傷を負わせられていたからである。動くことすらままならない今、碎蜂に待っているのは敗北だけである。

「――カスケード
断瀑――」

そして地上で跪いている碎蜂に向かって、ハリベルは凄まじい水量の激流を叩きつけようと大剣を振りかざす。

しかし、その瞬間にハリベルの様子に異変が現れる。

「つ……い……がっ……い！」

突如顔が険しくなり、滝のように汗を流す。そして弱弱しく腕を下ろす。ハリベルの頭上で収束していた激流も無残にも弾け飛び、そのまま地面に流れ落ちていく。その際に、下に居たハリベルも巻き込んで地面に落下していった。

何が起こっているのか解らないまま、碎蜂はその光景を眺めていた。

それに対しハリベルは、自分が放とうとしていた「断瀑」の水の中で激痛に悶えていた。そして急に始まったこの現象に、心当たりが

あった。

(レイチエル……お前……まさか……!)

そこでハリベルは、余りの苦痛に意識を闇に落とした。

「卍解——『黒繩天譴明王』!!」
こくじょうてんげんみょうおう

狛村は、目の前の東仙に向かって召喚した明王による強烈な一撃を放つ。

だがその一撃は、東仙には当たらなかった。容易に回避された後に、そのまま刀を振るった腕を一閃される。それと共に、明王とシンクロしている狛村の腕から鮮血が舞う。

そして明王の背後に回り込んだ東仙に向かい、裏拳を放った。丸太よりも太い剛腕は、何回りも小さい東仙に凄まじい一撃を喰らわせた。

そのまま東仙は、地面に吹き飛ばされる。轟音と共に地面を跳ねていき、何回か地面に大きなクレーターを作った後に、空中に戻りながら体勢を整えた。

「ふん……その巨体を傷付ければ、お前自身の体にも傷がつく。何とも不便な卍解だな。その強大な破壊力故に……敵を一撃で倒せぬ事など、まして反撃される事など考えた事も無かっただろう」

そう言った東仙の左腕は、歪に歪んだ形をしており元の腕の形とは程遠かった。複雑骨折であるのか、先のとがった骨が肉から飛び出しており、血も滴っている。

だが、次の瞬間腕は不快な音を奏でながら元の形へと戻っていた。

——「超速再生」。

虚特有の、肉体の再生能力。それは虚でない限り不可能である。だが、超速再生を行った東仙の顔には、縦に一筋の窪みがある虚の仮面が存在していた。

それを目の当たりにして、狛村は何とも言えない気分になる。

自分の友は、完全に死神を棄てて「虚の力」を手に入れてしまった。虚の力を得たこと自体は、狛村は咎める様な思いは生まれてこない。問題なのは、友を騙してまでその力を手に入れたことである。黒崎一護も、天宮城日向も、仮面の軍勢も、その虚の力は望んで手に入れた力ではなかった。

そして目の前に居る男は、死神として充分な程の力を持っているのにも拘わらずに、更なる力を求めて、虚の力に手を染めた。

(東仙……貴公は……！)

「どうした狛村。ぐうの音も出ないのか」

「……貴公は何故死神となったのだ？」

東仙に対し、狛村はある一時の事を思い出しながら質問した。今となつては懐かしい、まだ自分が鉄笠を被つてこの人狼としての顔を隠していた頃である。

東仙は狛村に対し、殺された友の正義の為に、友が愛した世界の為に戦うと言った。恐らくそれは大部分が嘘ではないのだろう。だが、東仙は友を殺した世界がどうしても許すことが出来なかった。

だからこそ東仙は、『彼女が愛した世界』と頑なに口にしていたのである。

東仙は、この世界が憎い。それこそ自分には量り切れない程に。

それを思い浮かべた上で、狛村は東仙に訊いたのである。

「……復讐の為だ」

——やはりか。

東仙の言葉に、狛村は悲痛な顔を浮かべる。これが東仙の本心。友を殺した世界が許せない男の本心。

当たり前と言われれば当たり前だ。自分の大切な者を殺されれば、誰とてそうなるだろう。

だがこの男は、許せないだけでなく、復讐するまでに至ってしまった。

「儂は、貴公は亡き友の果たせなかつた正義を果たすために戦っているのだと思っていた……！」

だが今からでも間に合う。彼の正義への思いは本当であるのだ。

今からでも正せば、その「負」の想いを「正」の方向へと正すことが出来るのである。

その一心で、狛村は言葉を続けようとする。

「東仙……貴公は「自分の進み道が最も血に染まらぬ道」と言ったな……だが、今ある光景を見ろ!!これが本当に、血に染まらぬ道なのか!!」

そう言つて狛村は腕を広げる。激戦によって瓦解している建物がいくつもある空座町のレプリカは、既に原型を留めていなかった。

傍から見たら凄惨な光景であろう。そしてこの光景に至るまでに、どれだけの血が流れたのであろうか。護廷十三隊のみならず、破面である者達も血を流している。それもちよつとや少しではない。

そしてそうなつたのは元より、藍染が尸魂界を裏切つたためである。そんな藍染が起こしたこの結果を、東仙はどう思っているのか。本当にこれが血に染まつていないと言えるのだろうか。ましてここで、『目の見えない自分には、血など見えない』と狂言を言う男でもない。

狛村は静かに目の前の男の返答を待つ。

「——狛村。確かに今ある光景は、血に染まっているだろう。だが大局を見据えろ。藍染様が天に立った時、それすなわち完全なる統合に伴う素晴らしき世界が生まれるという事。そうなれば、その先に血を見ることなど無くなるのだ」

「——!!東仙!!貴公は本当に、藍染が天に立った世界が血に染まらぬものだと思うのか!!己の為に、他者の血を犠牲にした男が創り上げる世界など!!それは桃源郷だ!!幾ら求めても、貴公の願う世界になどなりはしない!!」

桃源郷。それは諦念が根底に置かれている夢のような世界。だが、諦念が元となっているため、辿り着くことは出来ないという——叶う事は無いというものである。

藍染が己の目的の為にどれだけの者を犠牲にしているのか。狛村には到底予測出来ない。だが、考えたくもない程流している事は確かである。

だからこそ、相反する立ち位置に居る男が創り上げた世界など、それまでの過程のように血を流すことが日常茶飯事の世界になると考えられる。浅慮かもしれないが、大半の者はそう考えるだろう。

「狛村。お前は藍染様の力を知らないからそう言えるのだ。藍染様は、それを為すだけの力をお持ちになっている」

「藍染がその力を有していたとして、貴公の望む世界へと藍染は変えるのか!!?」

「……」

「……東仙。儂は……」

「……もう終わりにしよう、狛村。これ以上は無駄だ。私とお前の正義は違うのだ」

そう言つて東仙は話を切り上げて斬魄刀を構える。それは確実なる決別。狛村の説得が、東仙を止めるには至らなかった証拠。

そして東仙から、禍々しい霊圧が溢れだす。

「清虫百式——」

『クリジャル・グリーシヨ狂 枷 蟋 蟀』

突如弾けるように東仙の体が液体になっていく。そして黒い液体は、粘性の液体のように蠢きながら再び形を為していく。

全身が黒い体毛で覆われ、四本の腕が生え、背中には鎖が巻かれた二本の角と昆虫のような四枚の翅が生え虫のような姿は、既に人間のそれではなかった。顔も口元を除き、土偶のような仮面に覆われている。

「なっ……刀剣解放……だと……!?!?」

それはまさしく、破面の行う刀剣解放のそれであった。東仙は、初めての人外の体の動きがどのようなものであるのか、手を動かしたりなどしていた。

そして最後に、顔に二つ存在する半球体のものを開いた。その奥に存在していたのは、違うことなき「目」。

「視える……視える……視える!!!これが空か!!これが血か!!これが世界か!!そして……それがお前か、狛村」

目が見えている事に歓喜する東仙は、目の前に立っている狛村に視線を移す。東仙の目の前に立っている死神は、人のように二本足で大

地を踏みしめる獣——人狼だ。

果たして初めて目が見えるようになった男が、人外を見て思う事は

「——思っていたより、醜いな」

「……」

“醜い”。初めて言われたことではない。だが、今迄言われてきた言葉のどれよりも、心に深く突き刺さった。

それが何故なのかは解らない。いや、理解したくないのかもしれない。

だが、それでも自分は友に馳せる想いを曲げる事などできない。

(東仙……儂は……)

狛村は刀を振るう。それと同時に後方に居る明王もシンクロして、東仙に刀を振り下ろす。

どんな頑強な存在でも叩き斬っていた剛剣であったが、今回はそうはいかなかった。明王の振り下ろした刀は、東仙の四本ある内の一本の腕によつて抑えられる。

びくともしない。

ああ、まるで先程の自分達のようにではないか。どれだけ語りかけても、友の心は変わることにはなかった。それどころか、友はさらに墮ちていってしまった。その“墮ちていった”という表現は傲慢なのかもしれない。

だが、確実に自分とは遠い所に行ってしまった。

(だが……東仙……儂は思うのだ)

止められてしまった刀を振り切ろうと、狛村は力を込める。

(貴公が虚へと墮ちてしまったのであれば、その罪を洗い流せるのは死神である儂の斬魄刀ではないのかと)

斬魄刀の本来の力は、虚へと墮ちた魂魄が、虚となつてから犯した罪を洗い流すというもの。それはどの斬魄刀でも同じ事が言える。

虚が犯した罪ならば、それは死神の斬魄刀で洗い流すことが出来る。

「おおおおおおお!!!」

獣のように咆哮を上げながら、狛村は踏み込んでいく。心なしか、東仙を押し返せたように思えた。

このままいけば、東仙を斬ることが可能かもしれない。

——「斬ること」が。

そう思い至った瞬間、明王の力が弱まる。

それを見逃さず、東仙は残っている三本の腕で宙に輪を描く。

「ロス・ヌウエベ・アスベクトス
九相輪殺」

突如、明王の胴体に凄まじい衝撃が奔る。それは明王の身に纏う鎧が砕け散る程のものであり、シンクロしている狛村にも諸にダメージが入る。

その余りの威力に、狛村はその場に崩れ落ちる。恐らく臓器が幾つかやられているだろうと思えるほどの激痛と鈍痛。狛村が崩れ落ちたことにより、明王も崩れ落ちる。

——嗚呼、そうだったか。

狛村は、先程力が弱まった理由を既に把握していた。

——儂は、友を斬れぬ。

斬る相手を、「虚」ではなく「友」と捉えた狛村は、それによって躊躇いが生まれ思うように力が入らずにそのまま反撃を受けてしまった。

友を助けると誓った癖にこの様とは情けない。狛村は、心の中で自分に悪態を吐いた。

そんな事を思いながら倒れている狛村の下に、東仙はゆっくりと近づいていく。そしてその両目の前には、虚閃と思しき霊圧が収束されていた。

「狛村……正義とは、言葉では語れぬものなのだ」

目の前で瞬いている光を前に、狛村の瞼はゆっくりと閉じられていく。

——済まぬ、東仙。儂は貴公を斬れぬ。

そして、東仙の前で収束している虚閃が発射されようとした。

——その時であった。

「突如、何者かが東仙の背後から喉に刀を突きたてた。それによつて、今まさに放とうとした虚閃は収束が乱れて宙に消えていった。

背後から刺された為、何者が自分に刀を突きたてたのかは東仙には見えなかった。だが、その姿を粕村は見えていた。

「檜佐木……！」

粕村の瞳には、辛そうな顔で、一筋の涙を流す檜佐木の姿が映っていた。

自分の敬愛する隊長に刀を突きたてるのが、「戦士」とは何かを説き自分を導いてくれた者に刀を突きたてるのがどれだけ辛かったか。だがそれよりも、これ以上己の記憶の中に居る東仙が穢れていくことが、檜佐木には耐えられなかった。

——東仙隊長。

「刈れ——」

——申し訳ありません。

「『風死』……！」
かぜしに

直後、東仙の口からは刃が突き出てきた。

「阿散井副隊長!!」

浮竹は、すぐさま黒虚閃を喰らって吹き飛んだ恋次の下に駆け寄った。近付いてみると、死覇装はボロボロになり、皮膚も所々焼け焦げている姿が目に入り、かなり痛々しいものであることが解った。

そしてこのままでは死ぬという事も理解できた。

「——その方をこちらに」

「!……君達は……朽木隊長達と来た……」

浮竹の目の前に、三人程鬼の面を被る者達が現れた。そのどれも死覇装を身に纏っているが、その顔を覆う仮面がどうしても虚にしか見えぬ者達であった。

だがこの者達は、今言った通り白哉達と共に来ているのを見たために、敵対関係にある者達でない事は確かであった為に、警戒は余り必要ないと浮竹は考えた。

「『鬼兵隊』と申します。主である天宮城日向の能力によって産み出された兵です。主からは、皆様の後方支援に当たるように指示されております」

「そうか。なら、阿散井副隊長を治療できる者の所に連れて行ってくれないか?」

「仰せの通りに」

浮竹の頼みに、『鬼兵隊』と名乗った者が恋次を背負い、他の者達と共にこの場を去って行った。

そして一息吐いた後に、背後に視線を移す。

「……もうやめたほうがいい」

「……」

そこに立っていたのはレイチエルであった。だが、先程のような黒い鎧ではなく、刀剣解放をする前の姿に戻っていた。

そしてその身からは、白い衣が面影を見せない程に紅く染まっていた。

瞳もどこか虚ろで、肩で息をしており、まさに満身創痍という言葉

が似合っているだろう。

刀剣解放を解除したため斬魄刀が手に戻っており、それを杖のように辛うじて立っているような様子である。

「君はもう戦えない。もしこれ以上戦うというのであれば、君は本当に死んでしまう。悪い事は言わない。もう下がるんだ」

「……それは、俺に負けを認めろと言っているのか？」

「……そういう事になってしまふな」

浮竹の言葉に、レイチエルが消え入りそうな声で問う。それに対し浮竹は、悲痛な目を向ける。

浮竹は既に卍解を解除している。それは無駄な消費を防ぐためでもあるが、何より既に目の前の敵には必要がないものだと考えていたからである。

浮竹の言葉に対し、レイチエルは深呼吸をしてから口を開く。

「……残念だったな。まだ戦いは終わっていない」

「何を言って……——ごぼっ!!」

言葉を言いかけた浮竹であったが、突如口から血を吐き出す。これは敵に刺されたといった類のものではない。これは浮竹の持病である肺の病。

まるで凶つたかのようなタイミングである。

——何故だ!?!何故、このタイミングで……!?!

浮竹は解らぬままにその場に跪く。急激に悪化する体調を前に、浮竹は抵抗する為の体力をどんどん削られていった。

そんな浮竹に対し、レイチエルは一歩ずつゆっくりと近づいていく。片足を負傷しているのか、引きずりながらであるが確実に近付いていく。

「……あれだけ俺と長い時間戦っていたんだ。『エスカルフィリオース 畏怖寒霊』を混じった空気を吸えば、それに当てられて肺の弱いお前は、いずれ戦うことなく地べたに這う」

「ぐっ……まさか……それを狙ってきつききは逃げに徹し……ごぼっ!!」

さらに血を吐く浮竹に、レイチエルは斬魄刀の切っ先を向ける。何

とか斬魄刀を構えようとする浮竹だが、それだけの力すら身体には入らない。

「……お前達の基本的な情報は、一通りこちらにも入っている。お前達とは違ってたな」

そう言つてレイチエルは斬魄刀を振り上げた。それを目にして尚、浮竹は動けなかった。もしこのまま振り下ろされれば、問答無用で浮竹の脳天は斬り裂かれる。

「くっ……！」

「……！」

次の瞬間、レイチエルは響転を使つて浮竹の背後に回り込み、上げていた斬魄刀を戻す勢いで柄尻を後頭部に命中させた。後頭部に強い衝撃を受けた浮竹は、持病で体力がなくなっていたのもあり、そのまま意識を闇に落とした。

そして浮竹の体は、力なくその場に倒れていった。

——これで……。

浮竹が沈黙したのを確認し、レイチエルはある場所へと歩み始めた。その為に、再び斬魄刀を杖のようにしながら歩み始めていった。

一歩進む度に、レイチエルの後ろには赤い線が描き出されていた。

(……寒い)

いつも、喉元に巻かれていたマフラーの事を思い出しながら、レイチエルは自分の体が冷えていっていることに気が付いていた。

ここで歩みを止めれば、すぐにでも凍えてしまいそうな寒気が身体を襲う。

(……だが、やらなければならないことがある)

レイチエルは自分の刀剣解放が解けたことを思いながら、やり残している事を思い出す。これをしなければ死んでも死にきれない。

これだけは、死んでもやり遂げなければならないのである。

——嗚呼。何故、こんなにも体は重いのだろう。

——いや、久しく忘れていた。

——この重みこそ、命だ。

死神

神が死す

(ちっ……色々起きてんなア……)

スタークは各所で起きている爆発を見て、この戦闘の凄まじさを改めて感じていた。そして時間が経つにつれ、霊圧が一つ、また一つと弱まっていつている事に気付いていた。

その中で、ある人物の霊圧も急激に弱まっている事にも気づいていた。

「……」

スタークは無言のまま、セロ・メトラジエッタ“無限装弾虚閃”を白哉に向かって放つ。

一秒間に約千発撃つことの出来る、セロ・メトラジエッタ“無限装弾虚閃”であるが、永遠に

撃てる訳では無い。時間が経てばスタークは疲労する。それに伴い、

セロ・メトラジエッタ“無限装弾虚閃”を撃つのであれば後何分間撃てるのか、といったものもスタークの思考の中に含まれていくのである。

破面となり、ここまで虚閃を連射したことは無い。この攻撃範囲がスタークが第1十刃ブリメーラ・エスパーダたらしめる存在であることに変わりはないのであるが、ここまで長く戦闘を続けたことはなかった。

あの億の花弁を打ち砕くために、何度虚閃を放ったことだろうか。それこそ既に数えきれない程撃つたことだろう。

スタークの表情には、疲労が浮かんでいた。そしてそれは白哉も同じである。

虚園での戦闘を経て、疲れていない筈がない。そして相手であるのは実質的な十刃のトップ。第0十刃セロ・エスパーダであるヤミーはこの場に居ないため、破面の中ではスタークが最強に近い位置であろう。

唯一、バラガンの老いの力のように出鱈目な能力でないことが幸いであつただろう。それでも、厄介な相手であることには変わらなかつた。

『ねえ、スターク!! きつきみために、あれで攻撃しようよ!!』

「……馬鹿言うんじゃないよ。あれやったら、速攻でお前が死ぬに決まってるだろうが」

『で、でも……』

「相性悪いっつってんだよ!! 黙ってる!!」

『!……そ、そんな怒鳴らなくても……』

スタークの柄でもない怒声に、拳銃の姿をしているリリネットは怯えた声で返事をする。リリネットが口にする『あれ』とは、先程冬獅郎達三人を葬った、自分の魂を別ちあつて産み出した狼による攻撃である。

あれを喰らえば、いくら隊長であつても無傷ではいられない。

しかしスタークは、その攻撃に踏み切ることが出来なかつた。その理由の一つは、白哉の千本桜景厳の億の刃に対し、攻撃を受けたら分裂するという能力を持っている狼でも、突破することが不可能だと考えたから。もう一つは、その狼が一匹残らず消滅したら、リリネットが死ぬからである。

霊圧で分かる。レイチエルは死ぬ寸前だ。もう自分達に“契り”の加護は無い。ならば、何が何でも勝って生き残るしか方法はないのだ。

「——破道の四・『白雷』」

「——!・くっ!!」

白哉が千本桜景厳の花弁の壁の影から、一筋の霊圧の光線を放つ。雷のように宙を駆ける一筋の閃光は、スタークの頬を掠る。それに伴い、鮮血が舞う。

——あの刃は厄介過ぎる。

無差別に自分に襲いかかる桜の花弁に、スタークは辟易していた。自分の虚閃とは違い、あの刃は“群れ”であるため形を自在に変え、四方八方から襲いかかってくる。

その為、スタークは必然的に逃げに徹するしかない。そして逃げに徹しているからには、遠くからの狙撃しか出来ることが無い。そして遠くからの狙撃では、必然的に虚閃の勢いが衰え、千本桜景蔽の前に掻き消されるだけの結果に終わる。

(何か方法は……逃げて遠くに居てももこんだけ厄介なんだ……近寄ればもつと厄介に……いや、〃近寄れば〃?)

あることが思いついたスタークは、すぐさま視線を白哉に移す。そこには、手掌で刃を桜吹雪のように操る白哉の姿が在った。

そしてスタークは、白哉のその腕に熱心に視線を向けていた。

(……成程。腕一本分があのからいか……)

『お、おいスターク?どうしたんだよ、急に……』

「リリネット。近付くぞ」

『えっ!?!ちよっ……!』

驚くりリリネットを余所に、スタークは響転で一気に白哉に肉迫していく。突如、逃げの一手から肉迫してくるスタークに、白哉は目を見開きながらも、千本桜景蔽を操り迎撃しようとする。

迫りくる桜吹雪を紙一重の所で回避しながら、スタークは一気に懐目がけて飛翔する。そしてある程度まで近づいたところで、銃口を白哉に向ける。だが、その間にスタークの周りには千本桜景蔽の刃が襲いかかろうと迫っていた。

白哉の前には、防御用と思われる花卉の刃も盾のように形成されようとしていた。

その瞬間、スタークはその形成される際の僅かな隙間を狙って〃虚弾〃を放った。虚閃の二十倍の速さを有す虚弾が、つきり虚閃が来ると身構えていた白哉の右腕に命中する。

それに伴い、千本桜景蔽の動きが若干乱れる。その隙を見逃さずに、スタークはもう一方の銃口で虚閃を放つ。動きの乱れた千本桜景蔽の花卉の壁を貫いて、虚閃は白哉の体に襲いかかった。

スタークは僅かに舞っている花卉によって身体に傷がつくのを気にせずに、一気に白哉の懐に入り、そのまま虚閃を放とうと銃口を構えた。

だが、その瞬間に先程の虚閃によって巻き起こった黒煙の中から腕が飛び出し、スタークの腕を掴んで銃口を反らした。それに伴い、虚空を狙って虚閃が放たれる。

もう一方の銃口を構えて、虚閃を放つ。

「破道の七十三・『双蓮蒼火墜』（そうれんそうかつい）」

だが黒煙の中から噴き出してきた青い爆炎によって、虚閃は相殺される。

「ちっ……」

流星のスタークも、その爆発に伴い追撃を止めて一定の距離を取る。やがて煙は晴れてゆき、死覇装が焼け焦げている白哉が姿を現した。

その姿を見てスタークは確信した。

「成程な……やっぱり飛び道具じゃ、近いと使えねえってことだ」

「……何のことだ」

「あんまり恍けるモンじゃないぜ？アンタの武器、近すぎると使えねんだろ？」

スタークの言葉に、白哉は僅かに眉を顰める。そんな白哉の様子を目の当たりにして、スタークはさらに言葉を続ける。

「こんだけの速度と質量じゃ、幾らアンタでも相手に近付かれた状態で操ったら、間違って自分に当たっちゃうんだろ？」

「……」

「……俺が見た限り、腕一本分と少しの距離が、ミスって操ってもギリギリ避けれる距離ってこった。つまり、アンタと戦うなら遠くでチマチマ虚閃撃ってるより……」

そう言いながらスタークは、手元の拳銃を霊子に返還させた後に剣を出現させる。それは一本ではなく、両手であった。

そして片方の剣の切っ先を白哉に向ける。

「——近付いて斬った方が正解って事だ」

「……成程」

白哉は何かを悟ったような顔を浮かべる。そして右手をスタークの方に翳す。その行動に、先程のように千本桜景厳を操り攻撃を仕掛

けるのかと身構えるスタークであったが、始まったのは予想外のものであった。

辺りを漂っていた無数の花卉が、白哉とスタークを中心に円を作り上げていく。そして二人を囲む花卉は、やがて刀のような形に姿を変化させた。

「……………
〃殲景・千本桜景敵〃」

「……………ちつ。ここに来て隠し玉かい」

白哉が、先程とは違う技を繰り出してきたことにスタークはため息を吐く。周りを見渡すと、まるで外に居る何者も立ち入ることを許さないように刀が整列して、両者を中心に一つの舞台を作っていた。

見ていた限り、この刀が花卉の刃が凝縮して出来たものである事は理解した。それに伴い、一刀一刀の威力が凄まじいものであるのではないかとスタークは予測する。

「……………安心するといい。この千の刃が、一斉に兄に襲いかかる訳では無い」

「……………そーかい。そりや安心したぜ」

勘ぐる様な挙動を見せているスタークに、白哉はあらかじめ伝える。

とりあえず、先程のように無差別に一斉に迫ってくることはないのが解っただけで、スタークは自分の気が楽になった事を感じた。

そして白哉は、千在る刀の内的一本を手元に引き寄せる。

その瞬間、両者の間に流れる空気が一瞬にして張り詰めたことを互いに感じ取った。

「……………!!」

そして、再び両者は激突した。

「ふん!!」

元柳斎は、ワンダーワイスが肩から放った触手による一撃を回避し、そのまま両腕で抱きかかえて引き千切る。

引き千切られた触手の断面からは夥しい量の血が噴き出す。だが、それに構わずにワンダーワイスは唸り声を上げながら、さらに肩から触手を生み出して元柳斎を殴りつけようとする。

数の増えた触手が、元柳斎に一斉に襲いかかってくるが、それらを炎の出なくなつた流刃若火ではなく全て素手で対応していく。

凄まじい速度のラツシユは、残像すら見えるほどであった。だが、それらを全て素手で対応する元柳斎は、所謂「化け物」なのである。

——これこそが総隊長。

——千年、最強の座に就いている死神の実力。

傍から見ているバラガンは、敵ながらもその実力には賞賛を送る様な気分に陥っていた。ワンダーワイスのあのラツシユは、下手すれば十刃でもノックダウンされてしまうような代物である。

だが、数の暴力によりラツシユは僅かながら元柳斎の体を捉えはじめていた。

「——！」

そして遂に、ワンダーワイスの触手の腕が元柳斎の腕を抑える。その瞬間に、ワンダーワイスの方が弾け飛ぶ。弾け飛んだ肩からは血が巻き散つていき、さらには中から先程とは比べ物にならない程の触手がうねうねと蠢いていた。

その光景には、元柳斎も目を見開く。

「アア~~~~…ア~~~~!!!」

一瞬声を張り上げた後、ワンダーワイスは機関銃のような殴打の嵐を元柳斎に喰らわせる。

余りの迅さに、辺りには旋風が巻き起こる。その風は、宙で留まって眺めているバラガンの方にも吹いてきており、その黒いコートを靡かせていた。

止まる事を見せない殴打。流石にこの嵐には、総隊長と言えども万事休すかと思われた。

「……なんじゃ、終いか」

だが、突如ラツシユが止められる。それは、ワンダーワイスが元柳斎を抑えている触手の二本が、元柳斎の腕力によって引き千切られた為である。

予想外の出来事に、知性を失っている筈のワンダーワイスも茫然とする。

そんなワンダーワイスに向かって、元柳斎は拳に力を込めながら口を開く。

「小童……拳骨は、こうやるのじゃ」

「ア……アアアアアアアアアア……！」

「——
//双骨//」

元柳斎が握った二つの拳を、ワンダーワイスの胴体に撃ち込んだ。凄まじい威力の拳骨は、ワンダーワイスの胴を悉く打ち砕き、あろうことかそのまま衝撃によって身体がバラバラに砕け散っていった。

ワンダーワイスの四肢は砕け散っていき、辺りに散らばっていく。

「……ふん」

それを眺めた後に、元柳斎は納めていた流刃若火を再び引き抜き、悠々と自分達の戦いを眺めていたバラガンに視線を移す。

そして元柳斎が引き抜いた斬魄刀からは、再び先ほどと同じような業火が溢れだす。

「漸く終わったか」

「何じゃ。ならば、先の戦いで奇襲でも仕掛ければよかつたらうに」
バラガンの言葉に、元柳斎はそう返す。これは「試合」などではない。「戦争」なのである。勝つためならば、どんな手でも使つて勝てばいいのである。

相手の都合に合わせる必要など、微塵もありはしないのである。

「王である儂が、他人が戦っている最中に手を出すような真似をする
とでも思ったか？」

「……そうか。残念じゃったな。それが貴様の最後の傲慢じゃ」

「それは儂の科白だ」

そう言つてバラガンは骨だけの指を元柳斎に向ける。

「何故貴様の斬魄刀の炎が、先の戦鬪で出なかつたか、貴様は理解して
おるのか？」

「今戦つた破面が、儂の流刃若火の炎をどうにかしておつたのじゃら
う。現に、倒した今は炎が出ておる」

「ほう……どうやら、年老いて頭が回っておらん訳ではなさそうだな」

そう言つたバラガンは、籠つた笑い声を漏らす。その様子に、元柳
斎は納得のいかないような顔をする。

先程まで、この破面は自分の炎を前にして「老い」の力が通用せず
に焦燥を浮かべていた筈だ。ならば、こうして炎が復活した今、先程
と同じように焦るのが普通なのではないか。

それとも先程とは何かが違い、自分に事が有利にでも運んでいるの
だろうか。

そんな風に思考を巡らせる元柳斎に、バラガンは言葉を続ける。

「貴様の言う通りだ。貴様が倒した破面・ワンダーワイスは、貴様の斬
魄刀である「流刃若火」の炎を封じるために創り出された唯一の改
造破面。故に、先の戦いでは貴様の斬魄刀の炎はワンダーワイスに封
じられておつた」

「……だったら、何だと言うのじゃ」

「ククク……言つたらう。ワンダーワイスは、流刃若火の炎を封じる
ために創られたと。「封じる」とは、新たな炎が生まれないように刀

の中に封じること……じゃが、本当に炎はそれだけだったかのう？
あつた筈だ。儂の「死の息吹」を押し返すために発していた炎が」
バラガンがそこまで言うと、元柳斎はハツとしたような顔をする。
確かに自分は相手の「古い」の力を押し返すために、夥しい量の炎を
発した。だがそれ以前にも、藍染を倒すために空座町のレプリカ内
に、「炎熱地獄」という業火を忍ばせていたのである。

ハツとしている元柳斎に、バラガンはワンダーワイスの方に指先を
向ける。

「ほうれ。今にも、爆発するぞ」

「——！！」

元柳斎が、倒し砕け散ったワンダーワイスの方に首を向けると、そ
こには頭部が異常に肥大しているワンダーワイスが居た。

恐らくあれが、たつたさつきまで自分が放っていた炎の全て。もし
それらが炸裂すれば、この空座町のレプリカだけでなく、この戦域全
体を包んでいる結界や、その外に広がっている他の町にも被害が及
ぶ。

そう思い至るよりも前に、元柳斎は動いていた。

——刹那、大爆発が起こった。

否、大爆発という言葉でも足りない程の爆発。それが、核爆弾によ
る爆発と言われても誰も疑わないだろう。それだけの熱と爆風が、空
座町のレプリカを奔っていった。

駆け抜ける爆風は建物を薙ぎ倒しいき、天に昇る爆炎は雲を打ち
払っていく。

——壮観だな。

その光景を、爆心地の近くで眺めているバラガンは「古い」の力により爆風の勢いを殺しながら体感していた。

そして数秒爆発が続いた後、爆心地の中心には巨大なクレーターが出来上がっていた。その中心には、両腕が焼け焦げている元柳斎の姿があった。

「はっ……はっ……はっ……はっ……」

「……」

「……お、おの……れ……」

そう言つて元柳斎は、その場に倒れ込む。死神の長が倒れ往く光景を見て、バラガンはどこか感動のようなものを覚えていた。

千年の歴史が、今自分の目の前で崩れ落ちていった。何とも素晴らしい一瞬が、自分の目の前で起こったのか。この光景は、この先未来永劫訪れないだろう。

そしてバラガンは「滅亡グラン・カイターの斧」を担ぎながら元柳斎の下に歩み寄る。

「儂いのう……死神の長よ。千年の間、最強と謳われた貴様も、散る時は儂い刹那なのじゃ。せめても最後の一瞬は、「神」である儂のギロチンによって鎖してやろう」

そう言つてバラガンは「滅亡グラン・カイターの斧」を振り上げた。狙うは、死神の長の首。

「……やらばだ」

斧が、振り下ろされた。

「——甘いわ」

「!!!?」

だが滅亡の斧が元柳斎の首を斬り落とす事は無く、ギリギリの所で元柳斎の左手によって受け止められた。だがその瞬間から、元柳斎の左腕に「古い」の力が働き、忽ちに風化していく。

だがそれもつかの間、風化し始めた瞬間に、元柳斎の左腕がひび割れる。

「破道の九十六・『いっとうかそう一刀火葬』」

「なっ………!!!」

先の爆発のような爆炎が、バラガンを包み込む。その爆風を防ぐと「古い」の力を発するも、距離が近すぎるために勢いを殺すことが出来ない。

そして爆炎はバラガンの身体を徐々に焦がしていく。白かったバラガンの骨は、どんどん黒く焦げていき、やがてそれは再び白く染まっていく。

「き、貴様アアアアアアアア!!!」

焼け焦げる身体は灰になっていき、天に向かって燃え盛る炎と共に舞い上っていく。黒いコートも消し炭になっていき、豪華な金の装飾も炎によって融解していく。

——おのれ!! 蟻が!! 蟻共がああああ!!!

燃え盛る炎の中で、一つの断末魔が響き渡っていた。

“神”と名乗る命も、また一つの命であったのだ。

日進月歩

日落ちれば

月昇り

月落ちれば

日もまた昇る

「――！」

「ふっ!!」

白哉とスタークは一進一退の攻防を繰り返していた。凄まじい剣戟が辺りに旋風を巻き起こして行く。

銃撃を止め、二刀流で戦うスタークに対し、白哉は右手に携える刀の一本で戦っていた。勿論それだけでなく、時折周囲に整列している数百の刃を操って奇襲することもあった。

だがそれらの攻撃も、スタークは紙一重の所で回避し、白哉に刃を振るっていた。

時折、切っ先が皮膚を掠る。その度に鮮血が舞い、地面には赤い斑点が出来上がっていた。それらがどちらの血液であるのか、二人にはそんなことを考えている余裕はなかった。

――何でだ。

スタークは「コルミージョ」と言う魂を引き別ち形成した二刀の剣を振るいながら考えていた。

筋肉は既に限界を迎えており、気を抜いたらすぐにでも攣りそうな気分であった。筋肉が限界を迎えており、柄を握る力も弱まりすっぱ抜けそうになる。

だがそれでもスタークは剣を振るい続けていた。

――何で俺は、こんな本気になってやってんだ？

怠慢な性格のスタークは、今迄本気で言うことが無く、基本流すようにして何とか切り抜けてきた感が否めなかった。そんな自分が、どうして今こんなにも“本気”で目の前の敵に勝とうとしているのか。それについてスタークは自問自答していた。

負けても命だけは助かるかもしれない。懇願して命乞いをすれば、最悪生き残れる。そんな考えも当初は持っていた。

だが今は、一刻も早く目の前の敵を倒そうと本気で動いている。

「うおおおお!!」

———こんな、柄じゃねえつてのによ。

普段なら絶対に上げる事のない大声を上げて気合を入れながら、剣を振るう。その一閃を白哉は刀で受け流そうとする。だが、スタークは左手に握るもう一刀で白哉の胴を斬り裂こうとする。

その瞬間、白哉は左手を動かす。それに伴い周囲の刀の数本がスタークに迫ってくる。

「ちっ……!」

背後から迫りくる刀を避けるためにスタークはその場にしゃがむ。そして次に、今振ろうとした左手の剣を背後に向かって振るう。

その一閃で、迫ってきた刀を弾き飛ばす。

———でもよオ……。

どれだけ本気を出そうとしても、スタークは本気を出しきれないのである。その理由は、自分の片割れにある。“孤独”に故に産み出した自分の片割れであるリリネットだが、刀剣解放し二人が再び一つに戻った時、スタークが本気を出してしまえばリリネットの人格が消えてしまうかもしれないのである。

つまり、いつも五月蠅いあの少女の人格が消え失せ、物言わぬ刀になるということの意味する。他の者達からすれば、そんなことどうだっていい。斬魄刀に感情など必要が無いと言う者が大半であろうが、スタークは自分の半身であるこの少女をそんな風に扱うことは出来なかった。

それだけではない。自分以外にこの少女を一人の者として扱ってくれる者が居るのだ。

——どうすりやいいんだよ。

あと少し本気になれば、目の前の隊長を倒せるかもしれない。だがそれではリリネットの人格が消え失せるかもしれない。どうにもできないジレンマが、スタークを襲いかかる。

——なあ、リリネット。

『なあに？』

——十秒、俺にくれ。

『……いいよ』

——……済まねえ。

『いいんだよ。だって、もう一人じゃないんだから』

——……ああ。

『やってやれよ、プリメーラ #1！』

——……ああ、そうだな。

俺達が、プリメーラ・エスパーダリリネット・ジンジャーバツク 第1十刃コロナーテ・スタークだ。

スタークは左手の剣を拳銃の形に変形させる。それを見て白哉が先程の虚閃の嵐を予測し、回避体勢に入る。

そしてスタークは、銃口を白哉に向けた。銃口には“黒い”閃光が瞬き始めた。

「セロ・コデインシャル
無限黒弾虚閃」

「!!」

放たれたのは黒虚閃。普通の虚閃の何倍もの威力を持つ破壊の閃光が、一斉に放たれる。セロ・コデインシャル「無限装弾虚閃」は一秒に約千発。セロ・コデインシャル「無限黒弾虚閃」も、同じように一秒に約千発。だが、虚閃ではなく黒虚閃を放つために、スタークはかなりの体力を強いられることになる。そして何より、スタークが本気であることが条件になってくるのである。

自分の「魂」を掛けた技。

その漆黒の大群は、白哉の体に襲いかかる。

『1』

千発の黒虚閃が、一斉に白哉に向かって爬行する。その群れに対し、白哉は瞬歩を使用して回避を試みる。

『2』

しかし放たれた黒虚閃の群れを完全に避けきる事は出来ず、一発を左手に喰らう。だが白哉がやられっぱなしで居る筈も無く、思念で整列している刀を操作し、何本かスタークに向けて放つ。

『3』

自分の四方八方から迫ってくる刀に対し、スタークは右手の剣も拳銃の形に戻し、「無限黒弾虚閃」を放ち、迫ってくる刀を蹴散らす。全方位から迫る刀を撃ち落とすために、スタークは腕を交差させるようにして拳銃を構えて撃ち続ける。

『4』

銃口が自分から外れたことを確認し、白哉は一気にスタークに肉迫する。先程の黒虚閃の群れを放たれば、今度こそ自分に勝機は無いと白哉は一撃で決めようと決心する。

『5』

迫りくる白哉にスタークが視線を戻す。その手には、先程の淡い薄紅色の桜ではなく、白銀に輝く刀が握られていた。

先程まで周囲に存在していた刀は全て、その刀の下に集まっていた。

—— // 終景・白帝劍 //

『6』

スタークは銃口を白哉の方向に戻す。そして両手に携える拳銃から // 無限黒弾虚閃 // を放つ。

漆黒の破壊の閃光が、目の前の白を貪ろうと駆けて行く。

『7』

迫りくる漆黒の虚閃に対し、白哉は白帝劍を振るう。数億の花弁を収束したその劍の威力は凄まじく、自分に迫りくる黒虚閃の一つを斬り裂いていった。

しかし全てを弾く事などできずに、白哉の体のあちこちに黒虚閃が掠る。

だが、この一瞬で白哉はスタークの眼前に迫ることが出来た。

『8』

白い刀が自分に振り下ろされるのを見て、スタークは右手の拳銃を劍の形に戻して受け止めようとする。

次の瞬間、両者の刀は激突する。

だが、密度が違い過ぎた。スタークの // ゴルミージョ // で作り出された劍は、悉く白哉の白帝劍によって砕かれていく。

そしてそのまま白帝劍が、スタークの右手まで到達する。

『9』

手まで到達した白帝劍が、そのままスタークの右腕を斬り裂いていく。目の前の白銀の光の前に、自分の血が舞っていることに対し、スタークは眉間の皺を深くする。

—— 威力が段違いだな。

右腕が斬り裂かれていく。だがスタークはそれにもかかわらず、左腕をあるうことか右腕の肘の下に回しこむ。

その光景に白哉は目を見開く。そんなことをすれば、問答無用で右腕ごと左腕も斬り裂かれるだろう。

しかしそんなことはお構いなしに、スタークは斬り裂かれている右

腕の代わりに左腕に全ての力を集中させる。

そして白帝剣は、スタークの肩まで到達した。

『10』

「!!!」

肩まで到達したところで、白帝剣は止まった。白帝剣は肩の骨に命中し、そこで進撃を止めたのである。勿論、骨だけではなくスタークの元々の鋼皮や左腕の支えがあつてこそその出来事であつた。

そして何より、右腕の肘の下に回しこまれていた左手が、白帝剣をがっちりと掴んでいたのである。

真紅の血が、地面に滴り落ちる。

「……やれ、『リリネット』」

「——っ！」

スタークがそう呟いた瞬間、無数の狼が白哉の背後から襲いかかる。迎撃しようとするも、肝心の刀はスタークに掴まれてしまつてゐる。

為す術なく、白哉は狼に咬み付かれてしまう。

——そして、青白い大爆発が起きた。

「はあ!!」

日向は目の前の藍染に向かって「天羽々斬」を放つ。だが何度も喰らう訳が無く、藍染は凄まじい速度の瞬歩でその一閃を回避する。

命中すれば一撃必殺の威力を誇る「天羽々斬」も、藍染という規格外の男を前にすればただの攻撃に過ぎない。

虚しくも虚空を斬り裂く「天羽々斬」であつたが、すぐさま日向の隸王の力によって吸収されていく。

「……素晴らしい力だ」

その光景を見ながら藍染は日向にそう言い放つた。そんな藍染に

対し、日向は只眉間の皺を寄らせるだけであった。

「だが、その力は君自身のものではなく今まで倒してきた虚の力だ。君自身の霊力が、どれだけを占めているのか」

「……」

そう来たか。日向はそう思った。確かに自分の斬魄刀は、倒した虚の力を取り込むという能力を有しており、これまでに幾度となく強力な破面を倒し、その度に途轍もない力を手に入れてきた。

そう考えてみると、実際の日向の力はどの程度なのか。自分でも気になるところを、目の前の男に言われるとどうしてこうも癪に障るの
であろうか。

『くっくっく……青二才が咆えておるぞ、日向』

「……何で出て来てんだよ、夜叉姫」

鬼の形相で藍染を睨む日向の背後に、具象化した夜叉姫が出てくる。あくまでもこの夜叉姫は日向にしか見えないが、何故このタイミングで出てきたのだろうかとうと日向はため息を漏らす。

そして藍染の事を「青二才」と称した夜叉姫の胆力に呆れた。

そんな日向に対し、夜叉姫は腕を日向の首に優しく回しながら妖艶な香りを発しながら、その艶やかな唇を動かす。

『奴は他人を見下すのがどうも好きらしいな。他人の粗を探し、それを指摘することで自分があたかも高位の存在であるかのように示す……実に賢しい猿公じゃ』

「否定はしねえ」

夜叉姫の言葉に日向は即答で肯定の意を示す。確かに、藍染のあの見下すような視線は気に入らない。それ以外にも気に入らないこと
があり、探せばキリがない程である。

『じゃが、奴が言う大半の事は虚言……貴様が気にすることではない。貴様の霊力がどの程度かじゃと？そんなもの、この戦場では何の関係もない。弱者は常に強者の下に集った。つまり今まで倒して妾達に取り込まれた虚の力は、全て妾達の力なのじゃ。そこに他人の文句など、通る訳もなし……違うか？』

「……ああ、そうだな」

『勝者は正義。敗者は悪とは言ったものじゃ。じゃが、他者に正義を語られる筋合いなどない。日向……貴様は貴様の正義の為に剣を振るっておるのじやろう?』

「……ああ」

『ならば戦え。その為の……“力”なのじやろう?』

「ああ!」

夜叉姫の言葉を聞き、日向は一気に霊圧を高める。それと共に、黒い霊圧と隷属している霊子が渦巻き、黒と青白い光が竜巻のように上るといふ幻想的な光景が生み出される。

だがそのどちらも、目の前の敵を倒す為の力。凡人が触れば一瞬で消飛ぶ程の力である。

その光景を見て尚、藍染は余裕である表情を崩さない。

その理由として日向の様子が挙げられる。

(そろそろ限界という事か)

隸王を解放して数分経つが、日向は明らかに消耗している。その間、藍染は相手に攻撃を仕掛けても悉く打ち砕かれるという今迄の人生の中で存在しなかった事態に見舞われていたが、それも良い経験だと割り切っていた。

そして現在起きている日向の霊圧の上昇は、最後っ屁と言わんばかりに無理に霊圧を挙げているようなものには見えぬ。

このまま時間が過ぎるのを待ち隸王の解放が解けるのを待てば、自分の勝利が揺るがない。

(さて……ここからどのように仕掛けてくるのかな?)

藍染が日向に視線を向けていると、日向は藍染に掌を翳しそのまま黒い霊圧を高め始めた。

——— // 虚無王の閃光”。

先程も見せた、黒虚閃の“王虚の閃光”版。その威力は真面に喰らえば致命傷に至るレベルのものであるが、直線にしか来ないため避けることは容易い。

あくまでそれは藍染の評価であるが、他の者であればその速度と範囲に避ける間もなく飲み込まれ、身体を消し炭にされるだろう。

藍染は瞬歩でその黒の爬行から逃れる。空に向かって放たれた黒の波動は、そのまま天に昇っていき、漂っている雲を衝撃で散らしていく。既に反膜の中は荒野のような状態になっている。建物は全て瓦礫へと変貌しており、元々が町とは思えない程であった。これが本当の町であれば、どれだけの人間と魂魄に被害が及ぶのか予測出来ない。

「おおお!!」

黒い波動が数秒続いた後に、その余波の中から日向が「天逆鉾」を携え藍染に斬りかかる。「虚無王の閃光」の中に身を潜めるとは、中々奇怪な行動をとるものだ、と藍染は考えた。

迫りくる日向に対し、藍染は「雷吼炮」を放った。そして日向は、その一撃を手に携えている天逆鉾で防いだのである。その光景に、藍染はフツと笑みを浮かべる。

吸収せずに防いだという事は、つまりそういう事である。

ならば、と思い藍染は刀身の半分無くなっている鏡花水月を構える。他の死神などであれば、特に斬魄刀などなくても倒せるのであるが、流石に虚と完全に融合している日向を相手に素手では心許ない。崩玉による防衛本能があるとしても、触れないことに越したことはないのだ。

「はあ!!」

「雷吼炮」を潜り抜けてきた日向が、藍染に向かって天逆鉾を投擲する。かなりの近距離で放たれた一撃であったが、藍染の超人的な反射神経の前には容易く回避されてしまう。

それを見越して日向は、左手にも出現させていた天逆鉾で藍染に斬りかかる。

その縦に振るわれた一閃を、藍染は短くなった刀身で受け止める。その際に天逆鉾の剣閃が炸裂し藍染の体を少し焦がすが、藍染は一向に気にはしない。その証拠に、すぐに崩玉による再生が始まる。

そしてそのまま藍染は、鏡花水月を横に払う。

「くっ!」

横に払われた鏡花水月は天逆鉾を両断して、日向の左腕を少し斬

る。だがそれに怯まずに、日向は天逆鉾で突きを繰り出す。しかしその連撃も、藍染には通用せず次々と回避されていく。

その光景を目の当たりにして、日向は一気に肉迫して天逆鉾を横に振るおうとする。

「破道の一・『衝』」

「なっ……!?!」

日向が天逆鉾を横に振るおうとした際に、左手首に凄まじい衝撃が奔る。最も基本的な鬼道であり、衝撃を与えるだけの鬼道であるが、藍染レベルの霊圧の者が繰り出せば、それは爆発が起こったかのような衝撃を相手に与える。

現に日向は、その衝撃によって天逆鉾を振るえなかった。

しかし日向は歯を食いしばり、右手を無理に伸ばす。

「——浅慮だな、天宮城日向。それで私に触れて鏡花水月を消そうとするのかい？」

だが、手を伸ばした瞬間に藍染の一閃が日向の右腕を肘の先から斬り落とした。斬られた腕は宙を舞い、辺りに血を撒き散らす。

それに構わずに日向は再び左手に握る天逆鉾を振るおうとするが、その瞬間に左腕を斬り落とされる。流星の日向も、両腕を斬り落とされ苦悶の表情を浮かべた。

「……残念だ。君はもつと聡明だと……」

「おい」

藍染が日向に語っている途中に、藍染のたった今振るった腕は掴まれた。藍染の右腕は、〃二本の腕〃によって掴まれていた。

藍染は眉を顰めて日向の背中の方に視線を向ける。するとそこには、たった今斬り落とした二本の腕とは違う四本の腕が生えており、その内の二本が藍染の腕を掴んでいたのである。

「勝手に話を進めんな」

そう言った瞬間に、日向の斬り落とされた腕の切断面から一気に肉が盛り上がり、すぐに元の腕の形になった。

——超速再生。

そして再生した二本の腕も、藍染の斬魄刀を握る腕を掴む。

藍染を睨む日向の口角は、今迄に無い程吊り上っていた。それと同じに、藍染の手に持っている鏡花水月も霊子に分解されていく。

それを見ていた藍染は、逆に不敵な笑みを返した。

「斬魄刀を消したからなんだい？それで、私を倒せるとでも思っているのか？隸王のタイムリミットが来た君が、本当に私を——」

「——いつから、隸王が解放されてないと思った？」

「……何？」

日向の言葉に、藍染は眉を顰める。客観的に見て、鬼道が吸収されなくなった時点で、隸王の隸属が終わり、吸収出来なくなったと考えるのが普通である。先程の攻防も、それがきっかけで藍染は完全な攻勢に出たのである。

さらに、先程の攻防では藍染の刃は確実に日向の体を斬り裂いていた。最初はその隸属の力により、逆に刀身が分解されたのだ。

この二つを挙げて尚、隸王の解放が終わってないと言えようか。そんな風に考えている藍染に対し、日向は視線を藍染の背後に向けた。

「……もう、昇ってるぜ？」

『昇ってる』……だと……？……！』

ふと背後を見てみると、そこには巨大な球体が浮かんでいた。あまりの光の強さに、一瞬太陽と認識したが違っていた。

虚の黒い霊圧と、隸属した青白い霊子が渦巻きながら輝きを放っていた。夜空に輝く満月にも似たその光球は、藍染の頭上に浮かび上がっていたのである。

「馬鹿な……いつの間……」

「さっきの虚閃の時だ……テーマは只の攻撃だと思っただろうが、その時隸王は上に打ち上げてたんだよ」

そして次の瞬間、光球は形を変えていく。王虚の閃光を放つ際のように霊圧を渦巻かせながら、球体から剣の形に変えていく。ビル程あるその剣の切っ先は、確実に藍染を狙っていた。

「こんなもの……！」

藍染はすぐさま射線上から離れようとするが、日向の六本の腕によ

る拘束が腕を離さないために動けない。

その腕を斬り裂こうと手刀を繰り出すが、何かに衝突して防がれる。

(これは……反膜か……！)

先程まで周囲に両者を囲むように展開されていた反膜は無くなつており、代わりに現在藍染を拘束する日向の前に盾のように展開されていた。

確実に藍染の鏡花水月を消すために展開されていたものであったが、消した今であればずっと展開している理由など無い。

——今ここに、日向を護る為の盾と、藍染を倒す為の矛が完成した。

そして太陽のように輝く剣が、藍染に向かって凄まじい光を放ちながら降り注ぐ。

「——ふつみたまのつるぎ 師 靈 劍 ——」

夥しい光。真面に目を見開いて見つめれば失明しそうなほどのものであった。そんな光が、藍染に向かって一直線に降り注ぐ。

光は勿論只の光ではない。喰らった者の皮膚を焼き焦がし、骨を焦がし、魂を消し飛ばす威力を持った霊子と霊圧の照射による攻撃。 師 靈 劍 は、戦っている間に隷属させた霊子や霊圧の量に比例してその威力を増す。つまり、隷属した霊子が多い程、吸収した霊圧が濃密であるほどその威力を高くする。

藍染程の霊圧の攻撃を何度も吸収すれば、その威力は桁違いにな

る。

空から照射されるその光は、傍から見れば神々しい光景であろう。絢爛とした光が地上に向かって放たれる光は、まるで神が大地に向かつて恵みを齎しているかのような光景である。

だが、実際にはそんなこととは程遠い蹂躪が光の中で行われているのである。

「……………くっ……………」

そんな光の中から、藍染が必死の形相で出てくる。その身の到る所が焼け焦げており、それが「ふつみたまのつるぎ 薙霊剣」の威力を物語っていた。

光から逃げ出した藍染であったが、急にその身に影がかかった。

「『げっが 月牙……………』」

顔を上げるとそこには、縦に二本線が入っている仮面を被る死神が一人。その右手には黒い刀を携え、さらにその鋭い刀身には禍々しい黒い霊圧が纏っていた。

背後で降り注ぐ青白い光とは正反対の、黒く、そして赤を纏っている霊圧。

仮面の中の瞳には、自分が映っていた。

「『……………天衝^{てんしょう}』!!!』」

直後、藍染が躲す暇もなく黒い斬撃は焼け焦げた身体に襲いかかった。その身を易々と包み込んだ黒い斬撃は、余波で下にあったビルを両断した。

日と月の一撃が、藍染を襲ったのであった。

落涙

嗚呼

この悲しみの

寂しさの塊は

何故

君よりも熱いのだろう

——日向が死ぬ気で作ってくれた隙。

——これを逃す訳にはいかない。

一護はその一心で、一気に黒腔から姿を現した。目の前には、日向の師霊剣を喰らって怯んでいる藍染が居る。

これ以上、確実に攻撃を仕掛ける事の出来る隙はない。

——この一撃に、全てを賭ける。

『「月牙……」』

虚化をして、今収束できる限界の霊圧を刀身に込める。そんな一護に呼応するように、一気に霊圧が膨れ上がってくる。

『「——天衝“!!!”』

一護の放った最大威力の月牙天衝は、完全に藍染の体を捉えた。黒い斬撃が藍染を通り過ぎると、そこには左肩に大きな裂傷を作っている藍染の姿が在った。

——まだだ。

こんなものでは藍染は死なない。この傷でも動けるはずだ。否、動かなければおかしい。

再び刀身に霊圧を込めると、先程と同じ大きさの霊圧が溢れだす。そして完全に霊圧が固まったと同時に、月牙天衝を放つ。

「……」

だがその一撃は、顔を上げた藍染が左手を振るうことにより弾き飛ばされる。それを目の当たりにしてすぐさま追撃を行おうと、今度は刀身に月牙天衝を纏わせたまま斬りかかる。

しかしその一撃も、藍染がその場にしゃがみ込むことにより回避される。藍染はそのまま、一護との距離を一気にとる。

距離をとった藍染に対し、一護は追撃をかけようと足を踏み込もうとしたが、藍染の体から“白い膜”のような物が出てきたことにより、警戒してその場に留まった。

「……何だ……それ……!?!」

「——残念だったな、黒崎一護」

一護の与えた藍染の傷が、一瞬にして元通りになっていく。その光景に一護は仮面の中で瞠目した。

——そんな馬鹿な。

全力で喰らわせた傷が、よもや一瞬にして再生されるとは思ってはいなかった。さらにその再生に仕方が明らかに虚化の超速再生でないものであったため、一護はさらに困惑する。

そして最後に、日向が必死に鏡花水月を消し、その上で自分に一撃を託したのにも拘わらず決めきれなかったことに、一護は焦燥を隠せなかった。

「もう、限界のようだ……死神としての私にな」

藍染の胸に埋め込められている崩玉は、今迄に無い程に輝いていた。しかしその美しい輝きは、一護にとっての絶望にしか成りえないことを、一護本人は理解していた。

歯を食いしばり、藍染から目を離さない。

そして、今日の前で起こっている“進化”を一心不乱に瞳に映しだしていた。

「……………っっ!」

日向は自ら放った“劔霊剣”の直撃を何とか反膜によって防御し

ていたが、霊力の方に限界が来ており、最後の方で反膜が解け、諸に自分に「師霊剣」を喰らっていた。そしてそのまま光が終息している最中、地面に自由落下していたのである。

直撃すれば、いくら体が頑丈であってもダメージは防げないので、何とか体勢を整え着地した。

着地した直後、卍解が解けて元の黒い死覇装に戻る。そして反転していた左目も、元の桔梗色の瞳に戻る。

消耗が激しいのは仕方がない。なんせ、相手はあの藍染であるのだ。その中で卍解を発動し、尚且つ消耗が凄まじい始解を解放していたのであるから、霊力が尽きるのは当たり前であったのだろう。

「ち……くしょう……！」

恐らくあの一撃でも藍染は倒れなかった。そして一護の一撃を喰らっても尚、化け物のような霊圧は健在であった。

その状況に歯噛みしながらも、何とか立ち上がろうとする。

だが上手く力が入らずに、立った瞬間によろめく。

「大丈夫ですかア……？日向サン♡」

だが、その瞬間に背後から聞いたことのある声と共に、支えが入る。そしてその人物がこの場に来たことに、日向は何とも言えない気分になる。

振り向くと、そこには黒い外套を着ている浦原に姿が在った。

「……今、来たんですか」

「ええ。もしかして、遅かったですかね？」

「……いえ、遅くは無いです。ですけど、状況は悪いです」

「……そうツスカ」

日向の言葉に、浦原はすぐさま神妙は面構えになる。そして日向は、今最も気になっていることを浦原に尋ねる。

「ここに来たっていう事は、方法があるんですか？」

「……そのことに関してツスけど、この紙に一通り書きました。なので日向サンは、これ読みながら先に空座町に行ってください。あと紙に、他に使えそうなウチの商品書きましたから、使ってくれても結構ツス」

「…先に空座町……ですか？」

今からこのレプリカの町を出て、先に本物の空座町に向かうように言われた日向は茫然とする。

そんな日向に対し、浦原は紙を渡しながら駄目押しと言える言葉を言い放った。

「ウチの店に『転神体』も用意してるツス。もしかしたら、と思っただんすけど……使えそうツスカ？」

「!!……解りました……先に行ってください。……御武運を」

「了解ツス。では、日向サン。この薬を飲んでください。一時的にですけど、霊力が回復しますから」

そう言われ日向は浦原から丸薬を貰う。それをすかさず飲むと、日向は身体に力が漲ってきたように感じられ、すぐさまその足取りはしつかりとなった。

斬魄刀は無いが穿界門は開けるようであり、日向は穿界門を開いて断界の中に入っていった。

それを見送った後に、浦原はため息を吐いた。

「…情けないツスよね……君のお母さんに、君を護るよう言われてるのに、頼っちゃって」

「……」

レイチエルは無言で歩みを進めていた。最早どこに向かっているのかも解らない。意識も朦朧としており、自分が何の為に歩いているのか解らなくなってきた。

頭が非常に重く感じる。一步步むたびに、分銅が幾つか乗せられたかのような感覚に陥っていた。

それらは全て身体から流れ出ている血が原因であった。

「……」

杖にしている剣の柄を握る力も弱まってくる。気を抜いたら、今にでも話してその場に崩れ落ちそうである。

そうならない為に、しっかりと足の面が地面に着く様に歩む。

だが、それも長くは続かない。それよりも、いつから歩き始めたのかも忘れてしまった。一分しか歩いていないのかもしれないし、それこそ一時間も歩いたような疲労感に襲われた。

そして遂に、レイチエルはその場に崩れ落ちた。

「おっと」

だが、完全に崩れ落ちる直前に、何者かが崩れ落ちるレイチエルの体を支えた。

どこかで聞いたことのある声。そしてその声の持ち主であろう者が、レイチエルの肩に腕を回してしっかりと支えるようにした。

「大丈夫かい、奴さん」

「……コヨーテか」

虚ろな目で左の方を見ると、そこにはレイチエルに負けず劣らず血を浴びているスタークの姿が在った。

そしてその横には、心配そうな目でレイチエルを見つめているリリネットの姿が在った。今にも泣きそうな顔で、じつと二人の姿を見る。

レイチエルは水の滴るような音を聞き、ふとスタークの右腕に視線を移す。

「……その腕は……どうした……？」

「……少しやらかしただけだ」

そう言っているスタークであるが、軽傷には到底思えない。こうやってレイチエルを支える事ですら、かなりの重労働にすら思えるほどの傷である。

だがスタークは辛そうな顔を浮かべることなく、レイチエルを支えながら歩いていく。

「……状況は……どうなっている……？」

「……俺達は充分やったぜ。このままトンスラしても怒られねえよ」

「……生きてる奴は……？」

「……さあな」

レイチエルの問いに、スタークは淡々と答える。

「……俺はいい。他に……生きてる奴が……居るなら……そいつを連れて行ってやれ……」

「はあ!?何言ってるんだよ!?!」

レイチエルの言葉に、この場で最も怪我の少ないリリネットが声を張り上げる。それもそうである。レイチエルの言葉はつまり、『自分を見捨てていけ』というように聞こえたからである。隣で支えているスタークに、そのように聞こえたに違いない。

数拍置いて、スタークが口を開く。

「……解った。リリネット。レイチエルをどこか休めるところに連れてってやれ」

「え!?でも……」

「このままあっちこっち歩く方が、レイチエルには酷だろうよ。そこから辺で横にさせてやれ」

「あ……う、うん……」

確かに重傷であるレイチエルを無理に動かせる方が堪えるであろう。それを理解したりリネットは、スタークからレイチエルを受け取りそのまま背負う。

少女が成人男性を背負うというシチュエーションはかなり異様なものであり、中々無理なのでないかという考えがスタークの頭に一瞬浮かんだ。

その考え通りに、リリネットは顔を真っ赤にさせて歯を食いしばりレイチエルを背負っている。

「……やっぱ、俺が運ぶか?」

「い……いいーあたしが運ぶ!」

そう宣言したりリネットは、ゆっくりではあるが歩みを始めた。あのままでは数メートルが限界であるな、と考えながらスタークは破面の中での生存者を探しに宙を駆けて行く。

探査回路を展開して生存が確認出来るのは、ハリベルとその従属官位である。バラガンやその従属官は完全に死に至っている。そう考えると、自分達はかなり被害が少なくなったものだと考える。

そう考えて、とりあえず最も近い場所にいるハリベルの下に行く。

スタークが移動している間にも、リリネットとレイチエルの二人は牛歩で道を進んでいた。

「……濟まない……重い……だろうな」
「重くなってるない！」

レイチエルの言葉にリリネットは声を上げる。しかしその声はどうやっても強がりには聞こえない。幾ら破面と言ってもリリネットの力は少女のそれだ。大の大人を運ぶ力などない筈だ。

しかしリリネットは必至にレイチエルの身体を背負って歩いていった。

「あたしが運ぶから……しっかり傷治して帰るぞ!!」

「……そう……か……」

そして数メートル程歩いた後に、リリネットは近くの建物の壁にレイチエルを凭れ掛からせる。リリネットは凄まじい疲労の顔を浮かべ、息を吐く。

そしてレイチエルに再び心配そうな瞳を向ける。

「なあ、あたし他に何か出来ることあるか？」

「……特に……ない……座ってればいいさ……」

「……そっかー！じゃあお邪魔するぞ！」

そう言っつてリリネットは、屈託のない笑みをレイチエルに投げかけて隣に座りこむ。笑顔を見たときに、どこか辛そうな風に見えたのは気のせいではないだろう。

破面であるが、見た目も、行動も少女のそれであるのだ。そして思考も少女のそれであるリリネットにとつて、自分の大事な人物の一人が傷ついているのを見るのは、やはり辛いのであった。

若緑色の髪の少女は体育座りのような恰好を取りながら、ブツブツと言葉を発し始めた。

「……あたし……嬉しかったんだ。虚夜宮でレイチエルがあたしを助けてくれたとき」

「……」

レイチエルは、静かにリリネットの話に耳を傾ける。そして出来るだけ、虚ろな瞳に目の前の少女を映していた。

撫子色の瞳は、じっと地面を見つめていた。

「スターク以外で、初めて優しくしてくれた破面だったからさ。もしかしたらやっぱり怖い破面なのかと思っただけど、そんなこと全然なくてさ……何か、兄貴とかいたらこんな感じなのかなア……って」

初めて二人が会った時。それはリリネットがバラガンの配下の者に襲われたとき、レイチエルが偶然通りかかって助けたという事があった。それがきっかけとなり、レイチエルとリリネットは知り合いとなり、そこからの繋がりですタークとも交友関係を持つようになった。

そしてリリネットがスタークに強請って、よくレイチエルの宮に遊びに行くようになった。

——心地良かったのだ。

今まで孤独と戦っていたリリネットとスタークにとって、初めての友人の部屋が。

「紅茶もうまかったし、お菓子もうまかったし……ハリベルもそこでもいい感じの人だなア……って思っただけ。そんでもってドルドーニとかも中々面白かったし……」

彼の部屋は、いつも誰かが居た。まるで何かを求めるように、何人も彼の部屋に訪れていた。そこから、彼の何かを求めて集まった者達も、互いを知ってさらに交友を深めていった。

本当に交友と言えるのかは疑問でもあるが、それでも軽口程度が叩ける場所はその部屋以外なかった。

「ホント、色々お世話になったよなア。あ、でもアニーシヤはイラつくなア……アイツ、いつもあたしのお菓子横取りするし……」

苛立ったことも、今考えてみれば「日常」での事であり美しい思い出として処理される。今まで虚園で殺伐とした生活を送っていた身からしてみれば、限りなく「人」に近い生活が出来たあの場面。

そしてあの場面で、彼はいつも自分に優しい視線を向けてくれた。スタークとは違う何か。それがリリネットには、どこか恥ずかしくも、どこか嬉しいものであった。

「……帰った後さ……皆でもう一回お菓子食べたいな……な、レイ

チエ——」

己の願望を吐露しながら、リリネットは横に視線を向けて様子を見る。そこに居たのは、静かに瞼を閉じて笑みを浮かべている一人の破面の姿。

一瞬、そういう風にして聞いているのかと思ひ、少し肩に手を掛ける。

「」

「……あ、あはは！何だよ、眠いのか!？」

リリネットは必死に笑みを浮かべて肩を揺らしてみる。しかし何の反応も返さずに佇む男を前にして、リリネットの表情は一瞬曇る。だがそこで止まらない。

——ここで止まったら、本当に立ち直れない。

「眠いんだったら、あたしが膝枕してやるよ！ほら！遠慮すんなって！」

そう言つてリリネットは、優しい手つきでレイチエルの頭を自分の太ももに乗せる。やけに容易く太ももに乗った男の顔を見て、リリネットは言葉を途絶えさせないように喋り続ける。

「ほらー！一回チルツチの奴に未発達とか言われたけど、それなりだろ!？あたしこれでも女の子だからさ！」

そう言いながらリリネットは、男の顔にこびりついている血を自分の手で拭う。

「レイチエルは凄いやなく！帝守護刃に、藍染サマに直々に選ばれたんだろ？そんだけ強いってことは、今迄一杯戦ってきたんだろ？」

この破面は強い。それは今までに、数えきれない犠牲を強いて築き上げてきた者であることはリリネットも重々知っている。

だが知っている。この破面は、護る為にその力を使ったことを。

「尊敬するよ、そういうとこさ！あたし全然強くないから、いつつもスタートに頼りっぱなしだからさ！あ、そうだ！あたしハリベルみたいに強くなって、かっこいい女になりたいなく！」

彼と交友関係を持っていた女破面。彼と彼女が並んでいる光景は、どこか絵画のように整っているものであった。

その光景を見たとき、リリネットは少し嫉妬していた。

自分もあんな風にかっこいい女であったら、もう少し自分を見てくれる目が変わってくれるのではないかと思ったのだ。

「それで……それでござあ……！」

言葉が出てこない。必死に探すも、一向に出てこない。一瞬止まっただけで、目尻に溜まっていた水分が一気に、滝のように流れ出す。

——何を言えればいいのか。

今までとは裏腹に、リリネットは沈黙する。

何十秒経ったか解らない。だが、言うべきことが解ったような気がして、呼吸を整える。

「……レイチエル、一杯戦って疲れたんだよな？」

そう言っつて、安らかに眠っている男の髪を少し動かす。

そして、物言わぬ男が浮かべている笑みを瞳に焼き付ける。

「……もう……頑張んなくていいようになってんだよな？」

そう言いながら、腰を折り曲げて出来るだけ男に身体を寄せる。そして華奢な腕で、優しく頭を抱きかかえる。

動悸が激しくなり、呼吸も荒くなっている。

だが、出来るだけ穏やかな声で“彼”の耳元で囁いた。

——おやすみ、レイチエル。

掌上

君はビー玉

私の指で転がされる

煌くビー玉

眺むも 砕くも

私の勝手

一護は目の前で姿を変えている藍染を見て、絶句していた。その異様な変貌もさることながら、白い膜が広がっていくのにつれて、藍染の霊圧はどんどん上昇している。

それが先程言っていた『死神として』の限界を迎えているからかなのかは、藍染本人にしか分からない。しかし目の前で起こっている現象が、並大抵のものでないことは確かであった。

（何て霊圧だよ……!!? ……俺が……俺が何とかしなきゃいけない……!）

「どうした、黒崎一護。手が震えているぞ?」

「!!」

一瞬にして間合いを詰められたことに、一護は驚愕する。藍染の瞬歩が速い事は知っているが、まさか反応出来ないとは思わなかった。

だが、現に藍染は一護の目の前に立ち、その右手を一護の胸の中央に突きつけていた。

すぐさま応戦しようと体に力を込めようとするが、藍染の霊圧を前に身体が強張り、上手く力が入らなかった。

それだけ、一護と藍染の間には力の差があったのである。

——何も出来ずに、畏怖し、無抵抗になってしまう程に。

頭で理解出来ていても、本能が動く事を否定する。

まさに今はそれであった。

「っ……………くっ!!」

だが、戦意が喪失する寸前の所で取り戻し、天鎖斬月を藍染に振る

う。しかしその一閃は、空振りし宙を斬り裂くだけに終わった。

藍染の霊圧を探った一護であったが、感じた場所に対し驚愕を覚えた。

——後ろ…だと…？

藍染は今の一瞬で、一護に悟られる事無く背後に回り込んでいた。一護は、錆びたロボットののように首を徐々に背後に向ける。

そんな一護に対し、藍染は不敵な笑みを浮かべる。

それがいつも以上に冷たく、不気味に感じられるのは一護の勘違いなどではないだろう。

「ふむ…いい霊圧だ。君は、私の思い通りに成長してくれたようだね」

「………何…?!？」

『思い通りに』という言葉に、一護は目を見開く。それがどういった意味なのか解らずに、只藍染を見つめることしか出来なかったのである。

何が思い通りなのか。

茫然とする一護に、藍染は徐々に白い膜に覆われ始めている左手を差し出す。

——君は朽木ルキアと出会い

——石田雨竜との戦いを経て、死神としての力に目覚めた。

——阿散井恋次との戦いで、自らの斬魄刀の力を知り。

——更木剣八との戦いで、卍解への足掛かりを掴み。

——朽木白哉との戦いで、虚化へと踏み出した。

——グリムジョーとの戦いで、虚化をマスターし。

——クリステイナとの戦いで、どうやらそれ以上の力を手に入れた。

「………黒崎一護。君の今迄の戦いは全て、全て私の掌の上だ」

「………今までの……てめえの……掌の上……?!？」

藍染の言葉を聞き、一護の脳内には今までの記憶が走馬灯のように駆け巡る。何度も傷を負い、その度に倒れながらも必死に立ち上がり剣を振るってきた記憶である。

「助ける為に、命を護る為に力を付けて敵に立ち向かっていった。それが藍染の掌の上での事など、信じられる訳がない。信じたくなどない。」

「……何だよそれ……どういふコトだ!!」

「その声を荒げるな、黒崎一護」

一護の張り上げた声に対し、藍染は先程差し伸べた左手の人差し指を立てる。その挙動だけで、一護は威圧される。

だが、だからといって一護の困惑が収まる筈がない。黙っているよりも、大声を出して自問自答した方が精神的にはまだ楽だっただろう。こうやって黙って思考を巡らせているのが、どれだけ精神的な疲労が増えていくことだろうか。

そんな一護に対し、藍染は依然その表情を崩さない。尚も、藍染が表情を崩すなどよほどのことが無い限りないだろう。

「そんなに驚くことは無いだろうか？ 私はまだ、君こそが私の探求に於ける最高の素材になる。そう確信して、君の成長を手助けしてきた。そう言っているだけだ」

「な……!!?」

素材。手助け。どれも予想だにしていなかった言葉に一護は思わず絶句する。

素材とは一体なんなのか。

手助けとは一体なんなのか。

「君は実に特異な出自だった。何故なら君は、人間と——」

「——喋り過ぎだぜ、藍染」

藍染の言葉は、突如響いた風を斬る音に掻き消された。その瞬間に、一護の目の前は黒い影に覆われる。

それは見たことのある、そして見たことのない背中であった。

死覇装を身に纏ってこそいるが、その無骨な体は人生の中で何度も見たことのあるものであった。

一護と藍染との間に割り込むように立ち、刀を握る人物がゆっくりと一護の方に首を向ける。

「……………お……………親父……………か……………う……………」

——黒崎一心。黒崎医院で院長を務め、そして一護の父親である男。自分が知っている限り、一心には靈感など欠片も無かった筈。その人物が、何故死神の姿で自分の目の前に立っているのかが、今の一護の理解の範疇でない事は、困惑した表情から読み取れるだろう。

そんな一護の表情を見て、一心は複雑そうな顔をする。

「……………一護。話は後だ」

「ふっ……………『後』か」

一心の一護に向けて放った言葉に対し、藍染が不敵な笑みを浮かべながら口を開いた。そんな藍染に対し、相対す二人は同時に柄を強く握り締めた。

只、淡々と、端然とした様子で語る。

『『後』とは、一体いつの後だ？』

「……………てめえを倒した後だ、藍染」

挑発染みた言葉に、一心は斬魄刀を構えたまま口を開く。一心の完結な言葉に、藍染は変わらずに笑みを浮かべている。

人によつては、その表情が神経を逆撫でるような物であることは間違いない。

しかし、歯を食いしばる一護と違って一心は黙して相手を見据えていた。

「……………そうツスよ、藍染サン」

突如、一筋の光線が藍染の肩を貫く。その光景に一護のみならず、一心や藍染の目を見開く。

肩を貫かれた藍染であるが、特に苦痛に悶えるような表情は浮かべない。そして貫かれた肩は、先程月牙天衝を喰らった時のように血も出ずに、蒼い光を発しながら元通りになっていく。

傍から見れば不気味にしか見えないその光景も、発動しているのが藍染だと思うと、何故か納得出来てしまうような感覚を恐ろしいと、一護は自分で感じていた。

確かに藍染は他の者達を超越している。力や霊圧、そして頭脳など、他の者達と比べると平均して全てを超越しているのが目の前に居る死神だ。

しかし、「死神」である藍染に先程から何やら変化が起こっていることに、不安を隠せない。

だが、そんな藍染の頭脳を超える死神が一人、この場に現れた。

「——来たか、浦原喜助」

「お久し振りッス、藍染サン。随分、珍しい恰好ッスね」

元護廷十三隊十二番隊隊長。そして元技術開発局初代局長。浦原商店店主・浦原喜助。

浦原は来ていた黒い外套を脱ぎ捨てる。その該当は昔浦原が、流魂街に調査に向かった平子達の様子を見に行くために着て行った、霊圧を消す外套である。

これを利用し、完全に気配を消して強力な技を叩きこむという利用法も思いつくが、今の藍染にとってそのような不意打ちは意味がないことを理解していた浦原は、藍染と崩玉の融合の進行がどの程度進んでいるのか確かめる為に今の一撃を放った。

——成程。かなり進行が進んでますね。

傷の修復速度。そして藍染を未だ覆うとしている白い膜を見て、かなり融合が進んでいると浦原は確信した。

外套を脱ぎ、いつもの店に居る際の恰好になった浦原に対し、藍染が視線を向ける。

「何事も進化の途中というものは醜いものだ」

「誰も醜いなんて言っちゃいけないッスよ。崩玉と……融合したんスね」

「融合」では無い。『従えた』と言って貰おうか。君が御し切れなかった崩玉をね」

その言葉に、浦原は神妙な雰囲気を醸し出す。

昔、浦原が崩玉を創った際に、この代物が自分の手に負える様な物でない事を察し破壊しようと試みたが、結局は駄目であった。

そう思い返してみると、自分が御し切れなかったというのは案外合っているのかもしれない。

「…御し切れなかった…確かにそうツス。当時はね」

「当時は？ 実に明解な負け惜しみだ。それが負け惜しみかどうかすら、どちらでも良い事。既に——」

次の瞬間、藍染の右手で作った手刀は浦原の胸を貫いていた。余りに速過ぎる瞬歩であったのか、浦原は回避する様子も見せずに喰らってしまった。

藍染は手刀を浦原の胸に貫かせたまま、淡々を語り続ける。

「君は崩玉を御する機会を、永遠に失っているのだから」

「……何やア…向こう、エライ大所帯になつとるやん」

「はっ……喜助。来るの遅いわ」

浦原が来たことを、別の場所で戦っていた市丸と平子は霊圧により感じ取っていた。他の者達が倒れていく中で、二人は今の今迄ずっと戦っていたのである。

しかしこのような状況になっているのにも拘わらず、剣技のみで戦うのは余りにも時間が掛かり過ぎる。

幾ら藍染を斬る為に隠していたとはいえ、このまま延々と秘匿し藍染を止められなかったのであれば元も子もない。

平子は渋々ながら、斬魄刀を構える。

「……もうええ加減、うんざりしたわ。そろそろ決めさせてもらうで。

倒れる——『逆撫』

「——…!」

平子が斬魄刀を解放したことに、市丸は少し驚いたような顔を浮かべる。市丸は、真央霊術院を卒業して一番初めに所属したのが、当時平子が隊長を務める五番隊であった。

ある程度の期間平子の事を観察していたつもりではあるが、それでも平子の斬魄刀の解放は見たことがなかった。

果たしてどんな能力なのか。ここまで隠していたのであるのだから直接攻撃系とは考えづらい。だからといって、単純な鬼道系とも思えない。ならばそこから考えられるのは、京楽の「花天狂骨」のような特殊な能力の斬魄刀か、それこそ藍染のような相手を惑わすような感覚を支配する斬魄刀に絞られてくる。

市丸がそのような予測を立てている間にも、平子の斬魄刀は完全に解放が完了した。柄尻がリング状になり、刀身には幾つもの穴が開いている。

平子はリングの部分に手を入れて、クルクルと回している。

「へえ……それが平子隊長の斬魄刀ですかア」

「アホ。お前に隊長言われる筋合いないわ……ま、ええわ。ようこそ……」

平子が何かを言いかけた瞬間に、市丸は鼻腔が甘い香りを捉えた事を認識した。すると市丸の世界が急に反転した。

一瞬何が起こっているのか解らなかったが、冷静に辺りを見渡していると平子の姿のみならず、地面からそびえ立っている建物なども逆様になっていることが解った。

「……逆様の世界へ」

「あらら。これは藍染隊長と同じ感じやん。性質悪いやつやわ」

「お前の性格程でもないわ。どや？これが「逆撫」の能力。上下左右ぜんぶ逆になるんや。落ちゲーのトラップみたいでおもしろいやろ？」

「そんなん言われてもボク、ゲームとかせえへんから解らへんわア」

「……ま、それもそうや……なっ!!」

平子は淡々とした会話を終えて、一気に市丸に肉迫していく。それに対し、市丸はいつも通りの薄ら笑いを浮かべて立っている。

特に斬魄刀を構える様子も無く、目の前から迫ってくる平子をずっと見つめている。

「……上下左右言うてましたけど、もしかして『前後』もやないですか？」

「!!」

そう言つて瞬間、市丸は自分の背後に向かって神槍を一気に伸ばす。『百本差し』と呼ばれている市丸の斬魄刀である『神槍』の伸びる長さはかなりのものである。

そして平子は自分から向かっていることもあり、体感の速度がかなりのものであり、切羽詰った様子で市丸の神槍を受け止める。

そのまま刃を滑らせて市丸の所まで赴き、鏝迫り合いのような状況になる。

次の瞬間、市丸の上腕二頭筋の辺りから鮮血が舞う。受け止めたはずなのに血が噴き出したことに対し、市丸はいつもの糸目を見開く。

市丸が驚いている様子を浮かべたことにより、平子はニヤツとする。

「気付けへんかったみたいやなア……上下左右前後も逆。ついでに、見え取る方向と斬られる方向も逆や」

平子の言葉に、市丸は口を結ぶ。そしてふうーとため息を吐いた後、やれやれというような挙動を見せて口を開く。

「……逆が多すぎてよく解らんわア。何や、これなら鏡花水月の方が五感全部やから、まだシンプルやわア」

「はっ……そうやな。市丸。お前は上下左右前後逆、ダメージを受ける方向……それ全部イチイチ反転して戦えるか？」

「ムリやわ」

市丸は即答した。藍染のようなものならば別であるが、自分のような者では——というよりも、普通の者であればそのような業ができる筈もない。

一度の攻撃に対し、毎回脳内で瞬時に反転して対応しなくてはならない。何とややこしいことであるのかと市丸は思う。

「そうやろな。俺かて最初は慣れへんかったわ」

斬魄刀の所有者本人がこういうのであるから、他の者達が喰らったのであればどうなるか結果は解る。

成程。これで感覚を支配する斬魄刀がいかに厄介であるのかが再認識できたと、市丸はポジティブに考えてみる。

だが、だからといって状況が好転する訳でもない。事実、一撃は喰らってしまった。

どうしたものかと市丸は顎に手を当てる。

「そない考えこんでもどうにもならへんで。諦めて観念せえや」

「観念したら、ボクが藍染隊長に怒られてまうわア」

「はっ、それもそうやな。だから言うて、手加減はせえへんで!!」

そう言うて平子は再び市丸に肉迫していく。この光景で、平子は既に自分とは反対の場所に居るのであるが、それも考えるのが市丸にとってでは面倒になってきた。

そこで市丸はある一つの考えを思いつく。これが現在思いつく、最も「楽な」方法である。

——向かって来る平子に対し直角に斬魄刀を振り回せば、上下に回避されない限り当たる。

「卍、解——」

「!!」

「『かみしにのやり神殺鎗』」

「……はっ?」

平子は、市丸が卍解した瞬間に、肩から鮮血が舞っている事に気付

いた。それは違うことなき、自分の血であった。

傷は深く、肩から腹部辺りまでぎつくりと斬られていた。

斬撃を喰らって深手を負った平子は勢いを失くして、そのまま地面に自由落下していく。

「んな…アホな…見えへんかったやと…!!?」

見えなかった。否、市丸が斬魄刀を振り回した事だけは確認出来た。それを察知してすぐに回避しようとしたのであったが、回避しようとした瞬間には既に斬られていたのである。

速い。速過ぎる。

神速とも言える一撃に、平子は為す術も無く一閃を受け止め、敗北したのであった。

朦朧としていく意識の中で、平子は出来る限りの睨みを市丸に向けてる。すると市丸はいつも通りの薄ら笑いを浮かべ、手を小さく振っていた。

「バイバ～イ♪」

「あんの…クソが…!!」

市丸の煽りに平子の怒りは頂点に達するが、それも長くは続かずに平子はすぐに意識を失った。

目の前の男が落ちていくのを見て、市丸は斬魄刀を鞘に仕舞う。

(なんやア。これなら日向クンの方が、まだ頑張ってくれたで)

自分の元隊長が、自分の卍解によって一刀の下に斬り捨てられたのを見て、市丸は少し残念そうにする。

それに比べて、瀨霊廷で戦った際の日向は、よく自分の初撃を避けられたものだと感心する。

「神殺鎗」は最速の斬魄刀。始解時よりも伸縮距離が何倍になっているのに加えて、つ伸縮速度が恐ろしい程に上がっている。それはまさしく「神速」。見てから回避したのであれば到底回避する事などできない。

自分の卍解を再確認していると、やはり日向の方が規格外なのではないかと思いついたところで、市丸は道草を食うことを止めた。

これ以上のんびり此処に留まっていたら、後で藍染になんと言われ

るか。

「さ・て・と……ボクもぼちぼち行こかなア〜」

そう言つて市丸は、藍染達の方に向かって移動し始めた。

空座町・浦原商店地下。

『朕がこれから語るのは、千年前の話』

「……」

『それを語った上で、貴様に答えを問う』

「…そうか」

『もしそれに答えられたのであれば、貴様に託そう』

——二つの血族の力が封じられた、戦争の遺産を。

開道

君が一本の肉の糸に捌かれたとしよう

その糸は 容易く世界を一周する

故に 君の身体を知り尽くすということは

世界を知ること

嗚呼

世界は何と

魅力的で

小さいのだろう

浦原の胸を手刀で貫いた藍染であったが、次の瞬間にはその目を見開いた。胸を貫かれた浦原が、突如風船のように膨らみ破裂したのである。

——携帯用義骸。

その名の通り、普通の義骸とは違って携帯出来る代物である。その使い方は、自分の息を吹き込むことで自分の姿とそっくりの義骸が完成するのであるが、今は一瞬の内にそれを使って身代わりのように使った。

藍染が目を見開いている間にも、浦原は藍染の背後に回り込んでいた。

「——『六杖光牢』」

そして浦原は一瞬にして、藍染に六つの光の帯を突き刺し拘束する。しかし藍染は終始余裕であるというような表情を浮かべる。

「……この程度の縛道で、私を縛ってどうするつもりだ？」

「この程度の縛道？どこ迄がこの程度ツスか？縛道の六十三・『鎖条鎖縛』!!」

浦原が右手を伸ばすと、同時に無数の光の鎖が藍染の体に巻きついていく。六十番台である“鎖条鎖縛”は、普通の腕力の者では到底解けるものではない。

藍染レベルの者であれば無理やり解く事は可能だろうが、“六杖光牢”の上に縛られているので、今の藍染は動く事すら困難だろう。

そんな状況の相手に、浦原は畳み掛ける。

「縛道の七十九・『九曜縛』!!」

詠唱破棄ながらも、藍染の周りに八つの黒い球が出現する、次に藍染の胸の中央に一つ、鬼道の玉が撃ち込まれる。

六十番台二つの上に、七十番台の鬼道を上乘せされたことにより、流石の藍染も眉を顰める。

そんな藍染に、浦原は斬魄刀を仕込んでいるステッキの取っ手の部分に向けて。

「千手の涯。届かざる闇の御手。映らざる天の射手。光を落とす道。火種を煽る風。集いて惑うな、我が指を見よ。光弾・八身・九条・天経・疾宝・大輪・灰色の砲塔。弓引く彼方、皎皎として消ゆ——」

「……そんな鬼道、使わせると思っただけか？こんなもの……」

「……遅い。破道の九十一・『千手皎天汰炮』」

完全詠唱の“千手皎天汰炮”が藍染に襲いかかる。無数の光弾が縛道によって拘束されている藍染に命中し、盛大な轟音を上げながら大爆発を起こす。

流石、元隊長の鬼道と言ったところであろう。その威力には一護も啞然として眺めることしか出来なかった。

「……すげえ……!」

「……藍染サン。アナタはどうやら本当に、崩玉の力を取り込んだ事で、油断していたみたいツスね……」

“千手皎天汰炮”を喰らったであろう藍染に向かって浦原はそう言い放った。以前の藍染であれば、このようなハマはしなかったはずである。

見る限り鏡花水月は無くなっている。それを考慮すれば攻撃が当たるのは仕方のない事かとも思われるが、それならば通常の時よりも

相手の攻撃に注意する筈である。

崩玉の力による再生を過信しているのか、先程の藍染は大して避ける素振りが無かった。

「その通りだよ」

突如、浦原の背後から声が聞こえる。

「遅い」

咄嗟に首を向けた浦原であったが、それよりも早く藍染の手刀による斬撃が浦原を襲った。左肩を斬られた浦原は、鮮血を撒き散らす。

一体いつ背後に回ったのも驚きであるが、藍染の姿にも浦原は目を見開く。明らかに、先程よりも崩玉との融合が進行している。白い膜は既に、顔の右半分まで覆い尽くしていた。

「油断もしよう。警戒する必要が最早無いのだ」

浦原の言葉に答えるように、藍染が語り始める。それは強者の絶対的な余裕とでも言おうか、平然とした表情を浮かべつつも藍染は己の力を再認識し、その力に酔っている様に若干の嬉々が混じった声色であった。

目こそ普段通りであるが、他者を凍てつかせる声は、藍染の嬉々を帯び、さらに他者を凍てつかせる温度になっていた。

「感じるのだ。崩玉を従えた私の体は、かつて尸魂界に於て比肩する者の無かった私の能力の全てを、遥かに凌駕し始めている。九十番台の鬼道ですら、最早躲すに値しない！」

九十番台の破道。それを隊長格が放てば、その霊圧に比例して破壊力は絶大なものとなる。それを喰らっても尚無傷の藍染を見れば、藍染の言うように全ての能力が今までよりも凌駕していることは強ち間違っていないことだろう。

しかし、それを嬉々として語る藍染に向かって浦原はしめしめと心の中で思う。その油断こそ、今回の藍染を止める手立てとして、最も重要で最も確実であったもの。

「違いますよ。鬼道を躲さなかった事が、油断だと言ってるんじゃない。昔のアナタなら、何の策も無く僕に二度も触れる事などあり得なかった」

それは傲慢などではない。だが、自分に触れる事すなわち、それは自分に攻勢に出るきつかけを創るものでしかない。

浦原の言う通り、昔の藍染であるならば、その手を警戒し決して触れる様な真似はしなかったであろう。

一つのきつかけで、百の打開策を創り上げる事が出来る。そしてその一つのきつかけを予測して、百の準備を予めする。それが浦原喜助という男である。

そしてそれは、藍染の手首が急に発行し始めることによって証明される。

「これは……」

「…封ツス。全ての死神の両手首にある霊圧の排出口を塞ぎました……」

霊圧の排出口を塞がれた藍染からは、何かが轟く様な音が響く。藍染程の霊圧を持つ者が、その排出口を塞がれたならば数秒もしない内に、霊圧が逃げ場を失くすだろう。

それはつまり、霊圧が藍染の中で滞留し、膨張し、爆発することを意味する。

———「封殺火刑」。

「アナタは、自分自身の霊圧で内側から灼き尽くされる」

次の瞬間、藍染から霊圧が溢れだし、縦長に爆発を起こす。その規模もさることながら、爆発によって運ばれてくる藍染の霊圧の濃度も、驚愕すべきことである事を忘れてはならない。

だが、傍から見れば、藍染はこの攻撃によって死んだのではないかと予測される。何故なら、その他を超越した霊圧によって己を内部から焼き尽くしたのである。普通であれば、死んでいるだろう。否、死んでいなくてはならない。

それが合理的な判断か、若しくは短絡的な希望的観測かは後の話にして、浦原は一護と一心の居る場所へと降り立つ。

そんな浦原に、一護は驚嘆の表情を浮かべながら視線を送る。

「…浦原さん…」

「まだツスよ」

「え……」

何が『まだ』なのか理解出来ずに、一護は茫然とする。しかし一護の後ろにいる一心は、その言葉を一瞬にして理解しているかのように表情を崩さずに浦原に視線を向ける。

一護は理解出来なかった。否、理解したくなかった。あれほどの攻撃を受けて尚、藍染が生きている事が理解したくない事象であったからだ。

つまりこの場に居る全員が、『藍染が生きている筈』という予測を持っていてという事になる。

それを代弁するかのように浦原は口を開く。

「あんなもんでお終いならカワイイもんです。ただの化け物で済む話ツスから。すぐに出て来ますよ」

浦原の言葉を体現するように、派手に燃え盛る霊圧の柱の中から、一人の人物の影が現れる。

全員の視線がそこに注がれるが、予想外の姿に、全員が瞠目した。そこに居たのは藍染である筈なのだが、些か藍染には見えなかった。だが、その霊圧から藍染である事は間違いなかった。全身が白い膜に覆われ、素顔も全く見えない。眼も普通ではなく、黒目が全てであるという異質なものと変貌している

そして次に全員は、藍染の右手に注がれた。尚且つ浦原の顔が険しくなる。その理由は、右手に“刀”が握られていたからである。死神の持つ刀。それは十中八九“斬魄刀”である。

しかし藍染の斬魄刀“鏡花水月”は、それこそ藍染の作り上げた虚である“メタスタシア”の力を持つ日向によって、消された筈である。

藍染の特筆すべき警戒事項である“鏡花水月”であるが、それが無いだけでもかなりの精神的な余裕があったことは否めない。それが何の理由であるかは解らないが、その右手に復活している。それがどれだけの脅威かは、全員が熟知していた。

そして最後に“一護だけ”であるが、藍染の霊圧の強大さに身を震わせていた。先程浦原も口にしたが、“化け物”である霊圧。元来隊

長格の倍以上の霊圧を持っている藍染が、更なる霊圧を手にして戦場に戻ってきた。

何と性質の悪い冗談か。これが夢であれば、どれだけ笑えるジョークで済んだか。

「九十番台の鬼道を囮に、私の攻撃を誘い……」

「!!」

全員が視線を向けていたのにも拘わらず、次の瞬間に藍染は三人の中央辺りに立ち尽くしていた。

警戒していたのにも拘わらず、その速さに目が追いつかなかった。鏡花水月で視覚を支配された訳では無い。単純な速さに追いつかなかったのである。

驚愕している三人を余所に、藍染は話を続けていく。

「自ら開発した術で内部から灼く……相手が私でなければ——いや。崩玉を従えた私でなければ、戦いは終わっていただろう」

そう言っただけで藍染は自分の左手首に指を突き刺す。そして手首から、輪っか状の物体を取り出す。

その物体こそが、先程浦原が藍染の体に仕込んだ霊圧の排出口を塞ぐ物。

あつげなく体から取り除かれたことに対し、浦原は無言になる。

「だが、残念ながら君の創り出した崩玉は、君の理解を超えている。私との戦いに備え創ったであろうこの術も、私に届く事は無いのだ」

藍染の言葉を聞いた浦原は、ステッキに仕込まれている刀を抜き出し解放する。そして藍染に肉迫していく。

それを目の当たりにした藍染は、先程取り除いた輪っかを割る。「術が効かぬなら力でくるか。いいだろう」

迫りくる浦原に対し、藍染も復活した斬魄刀を以て相対そうとする。だが、藍染の背後から一心が迫りくる。

元隊長達が迫りくるという状況であるが、藍染にとっては他愛のない状況である。今の藍染にとって、隊長の一人や二人など対して差のない事。最も、例え十人でもかかってこられようと負ける可能性は無い。

藍染は背後から振るわれる斬魄刀に対し、足を後方に振り上げて踵の部分で受け止める。そしてそのまま上に斬撃を弾くことで無力化する。その間に前方から振るわれる斬撃に対しては、同じく斬魄刀で受け止める。

次の瞬間、藍染はもう片方の足で蹴りを繰り出して一心を吹き飛ばし、尚且つ斬魄刀を振るって浦原も弾き飛ばす。

傍から見れば無様に吹き飛ばされる二人であったが、その手には斬魄刀でない何か握られていた。よく目を凝らさないと見えないが、何やら細い光の鎖のような物が手に握られており、その先はそれぞれ藍染の手首と足首に絡まっていた。

張り詰めた鎖は、藍染の右腕と左足をピンと伸ばし、動きを制限する。

「…何の真似だ？こんな——」

『こんなもの、何の意味を成さない』。そう言おうとした藍染であったが、突如背中に凄まじい衝撃が奔る。

そのまま藍染は、轟音と共に地面に叩きつけられる。今の一撃は今の藍染にとって大したものではない。だが、その一撃を放った者を見て、藍染は驚きを含んだ声を発す。

「貴様……夜……」

元二番隊隊長兼隠密機動総司令官・四楓院夜一。何やら特徴的な装備を両手両足に身につけており、尚且つ肌を大胆に露出した動きやすい恰好になっている。

藍染に一撃を叩き込んだ夜一であるが、勿論それで終わる筈がない。

「おおお!!」

次の瞬間、嵐のような拳の連撃が無防備の藍染を襲う。機関銃のように連続した轟音は、暫く止むことがなかった。

元隠密機動総司令官の放つ白打は、一撃一撃が必殺の威力を有す。例え一撃は、元柳斎の拳に負けても、連撃となれば別物である。

重く、迅い拳が、休むことなく襲いかかるのである。

暫く続いた連打は、衝撃だけで周囲の瓦礫を吹き飛ばした後に止ま

る。ここまで数秒。だが、繰り出された数は百を優に超える。

「……どうじゃ。少しは——」

「夜一さん!!避けて下さい!!」

様子を伺おうとした夜一であったが、浦原の言葉にすぐさま回避行動を取る。だが、すぐ回避したにも拘わらず、下から巻き上がった霊圧による一撃は、夜一が身につけていた装甲のようなものの一つを砕く。

この装甲は、浦原が破面との戦いの為に用意した対鋼皮用の鉄甲であった。その内の一つが砕かれたことに、夜一は険しい顔を浮かべながら先程の一撃が放たれた場所から距離を取る。

その間にも、藍染は夜一の連撃が放たれた場所の中央から立ち上がる。

「……どうした。もう終わりじゃあないだろうか?早く次の手を打つがいい。最後の一つが潰えるまで、一つずつ微に砕いていこう」

藍染の体には幾つもの罅が入っている。それらは全て、胸に埋め込まれている崩玉に向かって伸びているのは偶然が必然か、他の者達には解らない。

そして時が経つにつれて、夜一が刻んだダメージの証である罅も癒えていく。

「私を倒す為に練り上げた手段の数は、君達の努力と力の証。そして、それはそのまま君達の希望の数だ。ならば私の為すべきは、その全てを打ち砕くこと。さあ、次の手を打つがいい。浦原喜助。四楓院夜一。そして黒崎一心」

達観した言葉。それに対し名前を呼ばれた三人は、各々の表情を浮かべる。だが三人が思っている事は大方同じである事は間違いない。そして最後に一護は、未だに藍染の霊圧に慄いていた。

——勝てない。

藍染の周りに居る者達の中で、唯一一護だけが戦意を失い始めている。それは、一護だけが唯一藍染の霊圧を感じ取れた事に起因する。

強者だからこそ、恐怖することもある。本当に恐怖するのは弱者ではなく、相手の力の深淵を感じ取れる、力の近き強者である。

この中で唯一、一護だけが藍染の霊圧を感じ取れていた。逆に言えば、他の三人は感じ取れていなかった。故に、未だに戦意は衰える事は無く、「脅威」の力を持つ藍染にどのように対抗するかを模索している。

「ええの？うしろとってるで」
「っ！」

一護は、突如背後に響いた声に振り向く。そこに立っていたのは、藍染の部下である市丸であった。普段通りの薄ら笑いを浮かべながら、一護を見つめている。

だが戦意があるようには見えずに、悠々と散らばっている瓦礫の中の一つに腰掛けている。

「ゆうてな。冗談や……ちよつとサボるか」

「な……何言ってるんだよ……？」

市丸の言葉を理解出来ずに、一護は動揺する。サボるとは何か。この戦いの事か。それとも藍染との戦いをか。それとも、今から始まるであろう自分と、市丸との戦いの事か。

困惑する一護とは裏腹に、市丸は完全に休もうという態度をとっている。

「ええやん。見物しよ。もう無理やて。藍染サンと長いこと居るけど、あんなん見るん初めてやわ。まア、知らん間に崩玉取り込んでんから当たり前か」

市丸はどこか諦観しているような口調で語る。

「わかるやろ。もう、どうもならへんよ。あの人らも君も、殺されてお—— 終い、や」

「……そんなことさせるかよ……！」

「ええね。そう言うと思うてたわ。でも、それにしたら随分諦めてる顔してるやん」

「！」

市丸の言葉に、一護はハツとする。確かに一護は藍染の霊圧に慄いていたが、決して空座町を見捨てようなどとは思っていなかった。

「アカンなア。これなら他の人達の方が、まだ頑張ってるで？君、自分

はあの町に住んでるから誰よりも守りたい思うてる、つて言いたいん？君の顔見たら、そんな言われても信用できへんで？」

「……そ……い……」

「アカンアカン。今の藍染サンどうにかしたい思うなら、殺したい思わな。君は『あの町を守りたい』思うてるだけや。『殺す』と『守る』じゃ、大分心構えちやうで。今の君は、藍染サンと戦うには中途半端や」

「……い……」

とうとう一護は言葉が出なくなる。

そんな一護を見て、市丸はため息を吐く。

——— まだまだ子供やなア。中身はどうしようもないくらい脆い。

幾ら強いと言っても、一護はまだ高校生。つまり子供である。死神でも子供の見た目で強い者など多々居るが、死神と人間では寿命が違うので見た目で精神年齢は決められない。

だが一護は、年相応の精神年齢である。どれだけ強がろうと、どれだけ決心しようと、どれだけ大人びようとしても、それらは子供の域を脱しない。

「はア………しようもな。どうする？ボクと戦うん？」

「っ………い……」

市丸の言葉に、一護は天鎖斬月を握る力を強める。それでも、一護の震えは止まらない。それを見て、再び市丸はため息を吐く。

こんな状態で戦っても、藍染が浦原達を倒すまでの消化試合にしかならない。決着がつかなくても、既に一護は敗北している状態である。

——— ま、ええわ。どうでも。

開錠

鍵は開かれる

先に広がるは

闇か

光か

「……しようもな」

市丸は、目の前で膝を着いている一護にそう言い放った。目の前に居る少年からは、最早闘志というものを感じられない。

力は以前よりも上がっている筈。しかし、逆に心は既に打ち砕かれている為、力が戦いに伴わない。

「君、こない弱かった？ 仮面も脆いもんや。虚化ってそないな程度のもんなん？ あの頃の方が、まだ君怖かったで？」

“あの頃”とは、一護達がまだ旅禍と言われていた時の事であり、あの時一護は☒丹坊の右腕を斬り落とした市丸に向かって、凄まじい気迫で斬りかかった。

あの時はまだ始解しか出来ておらず、今の一護の力と比べると天と地ほどの差がある。それにも拘わらず、市丸にとっては“気迫”という面でどうしようもない程の差を感じていた。

一護の瞳には、恐怖しか映っていない。そこには責任感のみで刃を振るうだけで、必死さというものを感じられない。

「やれやれや。君、逃げ」

「な……!?!」

市丸の言葉に、一護は目を見開く。相手に逃げるよう情けをかけられたのである。それが“戦士”からしてみれば、どれだけの屈辱であるのかは計り知れない。

無論、これは一護が“戦士”であるのであればの話である。

一護が茫然としている間にも、一護の遙か後方では凄まじい爆発音が鳴り響いている。その爆発音に、一護は思わず背後に首を向ける。「後ろ向いてええの？目の前にボクが居るのに？君、もう無理やで」戦意喪失している一護に向かって、市丸は言い放つ。それに対し一護は、ただ黙って市丸から目をそらす。

それを見て、続けて言い放つ。

——君はもう戦士やない。

——死神でもない。

——虚でもない。

——人でもない。

「…そないな半端な状態でここに居って、あの三人が負ける相手に君が勝てる思う？」

あの三人とは、勿論浦原達である。元隊長である三人。それも藍染と戦う為に万全の準備をしている。それにも拘わらず、遠くから感じ取れる霊圧で戦況が著しくない事は理解出来た。

地力で上でも、戦略、技、頭脳に於いて一護はあの三人の上を行けるとは思っていない。だからこそ、あの三人が負ける相手に自分が勝てるのかと訊かれたら、即答することが出来なかった。

そんな一護に、市丸は諦念を込めた視線を送る。

「悪いこと言わんわ。逃げ。未だ死ぬん厭やろ。ボク、君にもう興味ないわ。藍染隊長も今の君にはガツカリするやろ。怖いんやろ？藍染隊長が。理解できるんやろ？藍染隊長の力が」

最後の言葉に、一護は項垂れる。その通りであったからである。

理解の先にあつたのは、絶対的な敗北しか映っていない。だからこそ、一護は今まで戦ってきた中で初めて諦めを見せたのである。

何度も死闘を潜り抜けてきた一護でも諦めるしか出来ない力を、今の藍染は有しているのである。

「……警告は今なのでお終いや。まだ逃げへんやったら……ボクが今ここで斬るわ」

斬魄刀を構える市丸に対し瞠目する一護であるが、その場から動く事は出来ない。さらに、次の瞬間に一護の背後で何かが地面に激突し

たような衝撃が奔る。

それを確かめるために、一護はバツと振り返る。

そこに居たのは、まさに今の一護にとっての恐怖の根源である者。

—— 藍染惣右介。

さらに、藍染が一護の背後に降り立った少し後に、別の場所に三つの何かが落ちていく。

「……親父……浦原さん……夜一さん……」

僅かにでも希望を託していた三人が、見るも無残な敗北を表していることに、一護は茫然とするしかできなかった。

そんな「他者」を頼りにしていた一護の絶望する姿を見て、藍染は人外の瞳で一護を見つめた後に、市丸の方に振り向く。

「……ギン。今、彼に何をしようとしていた？」

「何も。ちよつと力試しです」

「……そうか」

「力試し」と言う市丸に対し、藍染は踵を返して一護の前に一瞬にして移動する。

「穿界門を開け。尸魂界の空座町へ侵攻する」

「!!」

空座町へ侵攻するという言葉に、一護はハツとして顔を上げる。以前の一護であれば、今すぐにでも藍染に斬りかかっていっただろう。

だが、今の一護は一步も動くことすら出来なかった。まだ、使命感よりも恐怖が勝っていた。

「転界結柱を破壊する必要も無い。王宮を落とすなら、尸魂界で王鍵を創る方が好都合だ」

「はい」

藍染の淡々とした言葉に、市丸は手短に返答する。元々は、護廷十三隊を潰して尚且つ転界結柱を発動している柱を墓石、帰帰させる事を目的としていたが、殆どの隊士が倒れている今、態々柱を破壊して帰帰する必要はない。

むしろ、尸魂界の遥か天上に坐している王宮を落とす為に、王鍵の創生は尸魂界で行った方が手っ取り早い。そして、見せしめにもな

る。

上から見下ろしている不遜な王に、新たな王を示すのに。

「ま……待て……!!」

一護は、王鍵を創生しようとする藍染を止めようと身を乗り出す。しかし、次の瞬間に、藍染の顔から何やら破片のようなものが落ち始める。

それを見た一護は、何度目か解らない驚愕を見せる。

「…藍染隊長」

「……ああ。どうやら、蛹籃の時は終わったようだ。有難い——」

「尸魂界の終焉を、私自身の眼で見ることが出来る」

再び素顔が露わになった藍染は、一度覆われる前と様子が違っていった。髪の毛が幾分か伸びており、何よりその瞳であった。

黒目と白目の部分が反転しており、尚且つ本来白目の部分は紫色の様になっていた。虚化のようなものではない、もっと恐ろしいような変貌。それを目の当たりにして、一護の足は再び微動だにしなくなった。

「——君は此処へ置いていく」

進化を果たした藍染は、市丸が開いた穿界門の中に入っていく。その反転した瞳は、静かに一護を見つめていた。

「君を喰らうのは、全てが終わった後でいい」

そう言った直後、穿界門は閉じ、完全に藍染の姿は一護の目の前から消えて行った。

——後とは、何時だ？

王鍵を創生した後か。

王宮を落とした後か。

天に立った後か。

「何だよ……何が……」

「一護オ!!」

背後から轟いてくる怒声に、放心状態だった一護は振り返った。そこにはボロボロになりながらも、しっかりと大地を踏みしめている一心の姿が在った。

「何をボサツとしてんだよ……穿界門を開け……!」

「…親父……!」

「行くぜ。俺達が空座町を護るんだ」

「……え……?」

一心の言葉に疑問を持っているような声を漏らした一護に、一心は一拍置いた後に頭突きをかました。

一護は痛そうな声を漏らす。しかし一心は、続けざまに一護の首に回している腕に力を込めて締め付ける。

「聞こえなかったのかよ?!俺達が空座町を護るって言ったんだよ!」

「空座町を護る」。そう言った一心を見つめる一護は、少し一心を見つめた後に、静かに目を反らした。

明らかに以前の一護では考えられない挙動であった。

「……無理だよ……そんなの無理に決まってんじゃねえか……」

「無理かどうかなんてわかんねえだろうが!!」

「わかるよ!!親父だってわかってんだろ!!あんな霊圧したバケモンに勝てるワケねえよ!!」

一護の言葉に、一心の動きが一瞬止まる。

———そうか。

たった今言っている意味が解り、一心は言葉を続ける。

「やっぱりオメーはあいつの霊圧がわかんのか…」

「…え?」

「行くぞ」

茫然としている一護を背に、一心は歩んでいく。砂利を踏みつける音が、静かな荒野と成り果てた町に響き渡っていく。

それでも足音は一つだけであった。

「来ねえのか」

「…」

「来ねえでどうすんだ」

「…」

「泣くのか」

最後の言葉で、一護は静かにだが振り返って一心の方に振り向いた。それと同時に、一心も振り返る。

「また護れなかったって、そこで座ってなくのかよ!？」

昔の一場面がフラッシュバックする。

それは母親である真咲が死んだ後の自分。学校にも行かずに一日中、母親が死んだ河原に居座っていた自分。

乗り越えたはずだった。

グランドフィッシャーと戦って、乗り越えたはずだった。

だが今自分がしようとしているのは、その場面の二の舞になるようなことではないか。

幾分か表情が変わった一護に、一心は続ける。

「…藍染が尸魂界の空座町に向かった意味をよく考えてみる。オメーが行かなきゃ、オメーが護りたい奴もそれ以外も、空座町に居た奴はみんな藍染の手にかかって死ぬって事なんだ」

再び、脳内に様々な場面が駆け巡る。

それは、それほど昔の事ではなく、つい最近の場面がほとんどであった。

自分の妹達。

学校の友人たち。

そして学校の教師。

それ以外にも、思い起こされる人々は多くいる。

王鍵を創生するには、重霊地と十万の魂魄が要るのである。重霊地は空座町であり、さらにそこに住む多くの物達が、王鍵を創る為の犠牲になる。

先程、〃何の後なのか〃という疑問が頭を過ったことが、ここで理

解できた。

「……親父。穿界門を開いてくれ」

もう、迷いなどない。

自分が何の為に戦っていたのか思い出した。

「……言われなくてもだ」

完全に我を取り戻した一護に、一心はそう言い放った。そして一心は斬魄刀を構えて、穿界門を開いた。

——行くんだ。

——空座町を、護る為に。

『……よくぞ答えた。それが “正解” だ』

「……そうか」

『約束通り、お前に授けよう』

「助かる」

日向は、目の前の男—— “隸王” に礼を言った。そして隸王は、日向の右目に己の右手を翳す。

それと同時に、日向は自分の中に霊力とは少し質の違う何かがあるのの中に流れてくるような感覚を覚えた。

長らく失っていた何かが、漸く戻ってきたような、そのような感覚。心地よく、清々しいような不思議な感覚であった。人は、海を見ると故郷に戻ったような感覚に陥ると言う。果たしてそれが本当なのかどうかは分からないが、例えるならばそれが最も近いであろう。

そして、右眼に違和感のようなものを覚える。

「……これは？」

『……お前が朕の真の所有者になったことで、浄天眼が変質したのだ』
「何だよ。元の力が千里眼とかじゃなかったのかよ」

『確かにそれは浄天眼の力だ。浄天眼の力は、その千里眼と “霊子” を目で捉えることが出来る” という力だ。だからこそ、お前は鏡花水月の下でも視覚で藍染を見ることが出来た』

その言葉を聞き、日向は納得する。

鏡花水月の能力は、始解の発動を見た者の五感、そして霊覚の支配。日向は今まで、この中の視覚だけが支配されていないのだと考えていた。だが、今の隸王の説明を聞く限り、日向の眼自体が第二の霊覚として働いており、藍染の姿を捉える事が出来たのだと考えた。

「でもよ、眼で見てるなら、何で支配されなかったんだ？」

『死神の斬魄刀如きで、霊王の力の宿りし眼を誤魔化せるとでも思っているのか？』

隸王の言葉に、どこか納得のいかないような表情を浮かべながらも、日向は何となくでも理解はするようにした。

「どうやら自分に宿っている力は、人外のものであるらしい。だが、既に人外の力を有している藍染と戦うのであれば、その人外の力が必要になってくる。」

「ふうん……ま、今はいい。これで藍染と戦えるんだろ？」

『それはお前次第だ。朕は、力を貸すだけだ』

「……そうかい。じゃ、やるだけやるだけだ」

そう言って日向は、浦原商店の地下から出ようと歩きはじめる。そして、この空座町に来る前に浦原に手渡された紙に書かれていた内容を思い出す。

その内容は、簡潔に言うところだった。

崩玉を取り込んだ藍染を殺す事は不可能。

だが、浦原が隙を見て藍染に封印する為の術を使用する。

そしてその術は、藍染が限界まで弱った時に発動する、というものである。

(……なら、やることは一つだ)

自分が、今もてる力全てを行使して、藍染を限界まで弱らせる。そうすれば、表上は藍染に勝利したことになる。

王鍵が創りだされるよりも前にそれを行えば、空座町の物達も犠牲にならずに万々歳である。

だが、それを行うだけの力が日向にあったのかという事が疑問になってくる。それは日向自身も気づいていた事でもあった。だから

こそ、浦原の「転神体を用意した」という言葉に活路を見出したのである。

藍染に対抗する唯一の方法。

—— 隸王の卍解を以て、相対す。

始解の時点で、隊長格ですら有り余る力を有す隸王。だからこそ、卍解をすればその力が強まり、藍染に対抗できる手段に成りえるのではないかと考えたのである。

そしてその思惑は、日向が隸王に伝授してもらおう事によって事無く進んでいた。

『……そろそろだ』

「……ああ」

隸王が言った直後、最も大きい力が日向に流れ込む。それと同時に、日向は今までにない程の激痛を右眼に感じた。

痛そうに右眼を押さえる日向であるが、隸王に諫められる。

『最初だけだ。後に、全身に馴染んでいく』

「……痛みが、か?……」

『違う』

—— 霊王の力が、だ。

その言葉に、日向の顔は険しくなる。自分に霊王の力が流れるのである。普通の死神であつたら、そんな御伽話のような言葉を信じられる事などできる筈もない。

だが、現に霊王の化身とも言える斬魄刀が目の前に存在しており、口にしているのである。

「…そうか」

現実味を帯びてくる言葉を噛み締めながら、日向は地上まで出てきた。静かな街並み。それは空座町の物達が全員眠らされているからという訳では無い。

これから、もつと恐ろしい出来事が起こるのではないかという、所謂「嵐の前の静けさ」とでも言おうか。

日向は深呼吸をして、再び歩み始める。

その背中を、具象化している隸王は静かに見つめていた。

……『天』の『宮』の『城』の『日向』……か。

(お前のような名の男に朕が渡るのは、運命だったのかもしれない)

日向の名前から、隸王はうまく言い表せられない数奇な運命のようなものを感じた。何と、自分を振るうのに相応しい名の死神か。

代々、浄天眼を受け継いできた司家も死神に成る者は誰一人としていなかった。それは、浄天眼という存在を授かる際に、ある誓約を交わしたからである。その誓約を恐れた司家の者は、誰一人として死神にならず、そして長い時が経ち、それは風習となっていたのである。だが、この男が生まれ落ちたことによりそれは変わった。

——あの時より間もなく千年。この時期にこうなるのも、運命だったのかもしれない。

あの忌まわしい戦争から間もなく千年経つ。あの戦争がきっかけで、自分は創り出された。

そしてそんな自分を扱う正統な後継者が誕生したことに、隸王は感慨深いものを感じ取っていた。

『……血は争えないか』

霊王の力を受け継ぎし死神が、霊王を殺そうとする死神と戦おうとするのは必然だったのかもしれない。だが、本人は霊王の事など欠片も考えてなどいない。

考えているのは、護るべき者達の事だけ。

——お前は、暗い夜を照らす太陽と成りえる存在。

——死んではならない。

——お前が、尸魂界の真の太陽希望と成りえる時まで。

——お前は、自分が思っているよりも、世界にとって重要な存在なのだ。

——もうすぐお前は、言葉通り「鍵」になる。

——その「鍵」は、藍染惣右介も、奴も欲しがっている物だ。

——奪われてはならぬ。
——そのための。

——“奪う力”だ。

白神

戻らぬ過去は
染まってしまった白のよう

「何だよ……何なんだよ……どうなってんだよ……」

一人の少年は、町の異様な光景に困惑しながらも走り回っていた。それは、動かなければ正気を保っていられる状況で無かった為だ。

彼の名は『浅野啓吾』。空座第一高等学校に通う一年生である。いたって普通の男子高校生である彼だったが、ここ最近は普通とはかけ離れていた生活を送っていた。

それは幽霊が見えるようになってしまったということである。しかし、幽霊が見えても尚、普通の生活を送るように心がけていた彼であつたが、これである。

一心不乱に町を駆け巡り、知っている人物が居ないか探し回る。「たのむよオ……誰かおきてねえのかよオ……!!——おベエエエエエエツ」

そう叫びながら、半ばやけくそのように奔っていた彼であつたが、直後顎にラリアットののような技が入る。それによって彼は、イナバウアーのような背中を後方にのけ反らせた状態になりながら、地面を派手に滑っていく。

彼は、泣き顔になりながら、自分にラリアットを入れた人物に非難の目を向ける。

「いてえなッ!!何すん……あ……有沢!!」

視線の先に居たのは、彼と同じ高校の制服を身に纏う短髪の少女。彼のクラスメートである『有沢竜貴』であつた。

漸く知り合いに会えたことにより、彼の表情は一気に歓喜に染まる。

「よかったア〜〜!!とりあえずオマエとはいえ人に会えてよかった!!というか周り見た?オマエ。ホントもー世界に俺しかいねーんじゃねーかと思っちゃって俺寂しくてさあ!!イヤしかしよかったよ!!別にオマエの心配したわけじゃねーけどさ!むしろ俺の方が心配してほしーぐらいで。そういやオマエ水色見た?俺はまだ!!あ!というかなんでラリアットで止めんだよ」

機関銃のように言葉を発し続けていた彼であったが、途中で容赦ない正拳突きが顔を襲いかかりノックアウトされた。

女とは言え、空手の全国大会で二位に輝いている彼女の一撃は、普通の男子高校生にとっては重すぎる一撃であった。さらに言ってしまうえば、彼女はその全国二位に輝いた際の決勝戦は片手を骨折しており、事実片手だけで戦った結果である為、もしかすれば全国一位であった可能性が高い。

ともかく、彼女の重い一撃は一人の男子高校生をいとも容易く伸したのであった。

とりあえず、強制的に黙らせた後で、有沢は浅野をとある場所へと連れて行くのであった。

その際に、浅野は先程のマンガントークを反省しているかのようにブツブツと呟いているが、サバサバした性格の有沢にとってそれは鬱陶しいものでしかなかった。

「…はい…すみませんでした…なんかテンションあがっちゃって…」
「いつまで騒いだ言い訳してんだ!もーいいよ!ホラ、こっち来て!」
そう言いながら有沢はとある路地に浅野を案内した。するとそこには、彼女達のクラスメートである二人が他の町の物達と同じように眠っている状態で居た。

「うおっ!?本匠!小川!!」

「見つけたんだ。とりあえず学校つれてく。あんたは千鶴背負って」
有沢の指示通りに浅野は千鶴と呼ばれた少女を背負う。その際に有沢に『おしり触んなよ!』と念押しされた為、浅野は注意しながら

背負う。

ここで学校に向かうのは、他に友人が多くいるだろうからという理由と、学校は緊急時の避難場所に指定されているからというものであるからだろう。このような奇奇怪怪な状況においても、それが意味を成すかは甚だ疑問であるが、それでも知らない場所に留まるよりは精神的に楽であろう。

そして有沢は、学校に行くついでに彼女が独自で確認した事実を淡々と話していた。このような状況であるため、情報は共有していた方がいいだろうという考えの下である。

「…とりあえず、あたしの見た範囲で情報教えとくわ。さつき町外れまで歩いてみたんだけど、そこで町がブツツリ切れててその外は山になってた。つまり、考えにくいけど町が丸ごと移動してるってこと」
「…それって…：…やっぱり一護がカラんでんのかな…」

二人は知っている。一護が、只の人間でないことを。それは昔からなどではない。つい最近の事である。

高校になってから異変を感じ始め、そして同じクラスメートである井上が学校に来なくなつた辺りからそれははつきりとした。

そして彼等を見たのである。謎の広い空間の、謎の黒い空間の中へ入っていく、着物を着て巨大な刀を背負う一護の姿を。

恐らく普通の人間であればするでない恰好をしていた彼を見たのが、最後であつた。そこから一日も経たずして、彼らは意識を失くした。そして起きたらこのような状況になっていたのである。

そんな状況で、彼が関わっていないとは考えにくい。

「あつたり前でしょ！他に誰がいるつてのよ！…：…けど」

有沢が思い浮かべるのは、幼馴染である一護の姿。出会つたばかりのころは、母親に甘えつきりの女々しい子どもであつた彼だが、歳を重ねるにつれて変わつていった。

傍から見れば問題行動を起こす不良のような認知であつた彼だが、それらのほとんどが何かを護る為に起こす行動であることを有沢は知っていた。

だからこそ、彼女は言い放つ。

「こうなったのが一護のせいなら、なんとかすんのも一護だよ……あいつはそういう奴だから」

空座町の町外れ。否、尸魂界の辺境と言った方が正しいだろう。そこに、彼らは立っていた。

彼等は、目の前にある空座町の、そのレプリカから穿界門を開いて空座町にやって来るはずだった。だが、彼等二人の内の一人在穿界門の中で“拘突”を消し飛ばしたことにより、その座軸がずれて本来辿り着く筈の場所から大分離れて尸魂界に來たのである。

もう一人の方がそう言っていたため、拘突を消し飛ばした彼は“そういう事において”悠々と歩きながら目的地に向かって歩いていったのである。

そして漸く、目的地に着いたという事であった。

「……成程。尸魂界には不似合いな景色だ」

彼は、目の前にそびえ立っている建物の群れを見てそう言い放った。普通であれば古風な建物が建っているであろう尸魂界に於いて、現世に於いてスタンダードであるビルや家屋は、この辺境の地に於いてはかなり異質な物であった。

「それも……見納めか」

彼等が必要とする“王鍵”を創生する為には、重霊地というものが必要である。それが、この町である。

そしてそれを創り出す際に、この町は無くなる。

つまりは、そういう意味である。

彼等は、再び歩を進めていく。

「……よし、着いたよー」

黒腔から飛び出た石田は、そう言いながら目の前のコンクリートの地面を踏みしめる。そんな石田に続き、後ろからは茶渡、井上、茜雫、ルキアが次々と降り立つ。

彼等が来たのは、本物の空座町。

思い出されるのは数十分前の会話。その際に、四番隊隊長の卯ノ花から石田と茶渡は、現世組の物達は空座町に戻って最終防衛線を張ってくれと言われた。無論、それは本当に苦肉の策である。望む所は、空座町のレプリカで全ての戦闘が終わり、このままこの町が平穏に終わる事。

だが、そうにはいきそうになかった。

石田は降り立ったすぐ後に、巨大な霊圧を二つ感じ取った。一つは、藍染の側近である市丸の霊圧と思われるもの。そしてもう一つは自分達と虚夜宮に来て、一護達と一足先にレプリカに向かって行った日向の霊圧である。

だが石田はそこで、ある疑問が浮かんだ。

(藍染惣右介はどこだ……!?!側近の彼が居るなら、首謀者である彼がやられているとは考えにくい……だが、全然霊圧を感じ取れないぞ……!?)

「どうした、石田?」

「……どうやら、藍染惣右介たちは既に空座町にやってきていると考えていい」

「なっ……!?!それなら一護達は……!?!」

石田に話しかける茶渡に対し、石田は簡潔に事実を述べる。あくまで憶測にしか過ぎないが、ほぼ当たっていると考えていい憶測である。

そして藍染達が来ているという事実には、ルキアが声を荒げる。後ろの方では、井上や茜雫が不安そうな顔を浮かべている。なぜならば、藍染達が空座町に居るといふ事は、先にレプリカに向かって制止しようとしていた一護達がやられている事と同義であったからである。

「黒崎は解らない……だが、天宮城君の霊圧は感じられる。それも、藍

染惣右介たちとは大分離れた位置にだ。天宮城君も動いていることから恐らく彼も、此処に来たばかりと言ったところだ。なら、黒崎は後で来るのかもしれない」

あくまで憶測であるが、石田が言うと言説得力がある。その言葉に、井上は僅かばかり安心した表情を浮かべる。

だがそれが根本的な解決にならないことは全員が承知している。

藍染が空座町に来たという事は、王鍵が創りだされるのは既に時間の問題であるのだ。それまでに一護が来るのかは解らない。

だが、どんな手を使ってでも自分達は藍染を止めなければならぬ。いい。

そういった責任感に駆られる石田であったが、ある霊圧を感じ取って焦燥を顔に浮かべる。

「不味い……！」

「どうしたの、石田君？」

「藍染惣右介たちが向かってる先に、有沢さん達の霊圧が在る……！」

「なっ……！」

石田の言葉に、茜雫以外の全員が絶句した。自分のクラスメイトたちが、今まさに藍染達の魔の手にかかるうとしていることから、一気に焦燥が高まる。

この町を救うのは勿論だが、その過程で自分達の大事な者達が死んでしまつては元も子もない。石田の言葉に、有沢と親友という間柄である井上は顔を青くする。

「くっ……一刻も早く、有沢さん達の下に行くんだ！」

「ムッ……！」

「うむー」

「勿論！」

石田の言葉に、井上以外の者達がそれぞれ有している高速歩法を使って有沢達の下に駆け出していく。井上も勿論駆け出すが、些かその速度は己の望むものは出ない。

そして真っ先に駆け出した石田は、空座町に存在する者達の位置関

係を把握しようと霊圧知覚を尖らせる。

(位置的には藍染惣右介達の方が近い……だが、藍染惣右介達に向かっていている天宮城君の方が速度は速い……！タッチの差か!?)

有沢達は靈感こそあれど、戦術など持っている筈がない。その為、藍染に見つかっても対抗する手段を持っていないのである。

故に、見つかったら即刻終了ということも考えられる。それは今考えられる中で最悪なシナリオである。だが、幸いにも移動速度は徒歩なのかそこまで速くない。そして今移動している中で最も速いのは日向である。そして位置関係から考えると、藍染が有沢達に接触すると、日向が藍染と接触する位置はほぼ同じなのである。

(くそッ……黒崎！何をやってるんだ……!?)

石田の脳内に浮かんでくるのは、一護の事であった。例え敗北していたとしても、彼が何もせずに居るとは思えない。

こうやっている間にも、何かをしているのではないかという希望的観測を巡らせるが、だからといって一護が来るのが早くなるわけではない。そして、例え一護が来たとしても藍染達を止めることが出来るのが問題になってくる。

最終的には、藍染達の野望を止めなければならないのである。

そして石田達に出来るのは、その過程での犠牲を限りなく少なくすることであるのだ。

(黒崎……来るなら早くしろ!)

石田は、この場に居ない男の名を心の中で呼ぶのであった。

学校に向かっている途中の有沢達は、石田達の焦りとは裏腹にゆつくりと歩いていった。人一人背負いながらなのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが、二人は淡々とした口調で世間話のような会話を交わっていた。

「……!?!」

「……な…何だよ……これ…っ!?!」

二人は、突如自分の身に降りかかる重圧に汗を顔から噴き出す。浅野にとつては今までに感じたことのような無いものであり、逆に有沢にとつては一度だけ感じたことのある物であった。

だがそれは以前とは比べ物にならないほどのものであった。以前のそれは、元凶が自分のすぐ傍まで近づいたことにより意識を失くしそうになったのであったが、今自分の身に襲いかかる重圧は、遠くにあるにも拘わらずに既に意識を手放しそうな程重かったのである。

有沢は余りの重圧に、ふらふらとよろめく。

「あ……有沢……っ。大丈夫か……!?!」

「うっさい……あなたに心配されなくても……」

強がっていた有沢であったが、次の瞬間、その余裕は微塵も無くなった。意識のある二人の前に、謎の白装束の男たちが二人現れたのである。

この重圧の元凶であろう物達は、ゆっくり有沢達に歩み寄ってくる。それに伴い、有沢はどうとう耐え切れずにその場に跪く。

「……なに……あいつら……?」

「有沢……っ」

「——大したものだ」

跪く有沢に向かって、白装束の男——藍染はそう言い放った。

「ここまで近づいても存在を保っていられるとは」

「あなた……誰……」

そんな藍染に向かって、有沢は息も絶え絶えになりながら問いかける。だが藍染は不敵な笑みを浮かべるだけであり、一向にその問いの答えを返そうとしない。

さらに、その右手に一体化している刀の切っ先を、あろうことか息も絶え絶えになっている有沢に向かって突き出した。

「……黒崎一護は必ずここへ現れるだろう。新たな力を携えて。私はその力を更に完璧へと近付けたい。君達の死がその助けになるだろう」

——「死」。

明確に示された「死」という言葉に、有沢は一瞬絶句する。そして

すぐさま、背後で立っている浅野に向かって叫ぶ。

「逃げて浅野!!」

「え……」

「早くしろよッ!!あんたがここに居てなんかできんのかよ!!」

有沢の言葉に茫然としていた浅野であったが、最後の言葉ですぐさま迫りくる藍染達から逃げ出すように駆けて行った。

その際、浅野の顔が苦渋の決断とばかりに歪んでいたのを、有沢は見逃さなかった。それもそうである。あのままあの場所に留まっていれば、有沢と同じように立つことすら出来なくなり、その場に蹲ることしか出来なくなり、逃げることも出来なかっただろう。

そうなってしまうたら、背負っている者の命も犠牲になってしまふ。それを瞬時に理解し、彼は有沢の指示に素直に従ったのである。そしてそれは同時に、有沢を見捨てると同義であったのである。

逃げ出す浅野の方に、藍染の背後に居た市丸が身を乗り出す。

「追う必要は無い。まずは、こちらからだ」

そう言う藍染の瞳は、目の前の有沢を捉えていた。

有沢は、絶望した顔を浮かべながら茫然としていた。

—— どうしよう。

—— どうしよう。

—— 体動かない。

—— どうしよう。

—— どうしたら——……!!

刹那、有沢の視界が爆発で見えなくなる。それは、有沢が爆発したからではなく、目の前に居た藍染に何か衝突し爆発を起こしたからである。

その爆発には、有沢だけでなく市丸も驚いたような顔を浮かべる。

「お困りの様だねガア~~~~ル。そういう時は、ヒーローを呼ぶものだ」

やけに芝居がかっている声がこの場に響き渡り、全員の視線がその声の発せられている方向に向けられている。

そこには何やら特徴的な衣装を身に纏っている、サングラスをかけ

た男の姿が在った。腰には『靈』という漢字が模られているベルトがあり、背中にはマントを靡かせていた。

「スピリッツ！ア~~~~オ~~~~」ルウェイツ、ウイズイイイユ
「!!!」

そんな男が無駄な動き満載のアクションをしながら、不思議な掛け声を叫び、最後に決めポーズのようなものをとる。

「お待たせしました視聴者の皆さん！あなたのドン・観音寺！わたしのドン・観音寺！みんなのドン・観音寺が帰ってきました!!帰って!!き——ま——し——た——よ——ッ!!!」

「……」

余りにも場違いなテンションに、有沢のみならず、敵である市丸も呆けた表情を浮かべる。

それにも拘わらず、ドン・観音寺はピシッと決めポーズを続けていた。だがそれが嫌に寂しい雰囲気醸し出しているのは気のせいではないだろう。

「……何者だ、君は」

爆発による煙が晴れ、中から無傷の藍染が姿を現し、突如姿を見せたドン・観音寺に問いかける。

その問いに、ドン・観音寺は先程まで頑なに続けていたポーズを解く。

「むウツ!!この私を知らぬとは無知なボーイだ!!TVは余り見ないのかねッ?!いいだろう!名乗ってみせよう、私こそ——」

「何しに来たのよ、ドン・観音寺」

「No——ッ!!!」

有沢が名乗ると口にしていたドン・観音寺よりも先に名前を口走ったことにより、本人はショックを受けたように声を荒げる。

そして先程から続いている凄まじいテンションで、有沢に迫ってい

く。

「今から私が自分でスペシャルな名乗りを上げようとしているのにッ！鬼かねガールは!?鬼かねッ!」

「悪いこと言わないから帰んな。あんたができることなんて何も無いんだから」

「う…ッ」

有沢の言葉の直後に、ドン・観音寺は顔中から汗を流す。それは有沢の辛辣な言葉に心をやられたのではなく、単純に藍染の態と下げている霊圧に耐えられなくなったからである。

そしてドン・観音寺は、目の前に居る物が尋常でない者でない事を察しながら、目を向ける。

「…そろそろ、私の霊圧に耐えられなくなってきた頃か。いやむしろ、これまで良く耐えたと言うべきか」

そう言いながら藍染は再び足を動かし始める。それに伴い、有沢たちには襲いかかる重圧も強くなってくる。

「ほらー早く逃げなつて!!あんたじゃどうにもならないんだから!!」

有沢はドン・観音寺に忠告する。あれはどうにもならない存在。これこそ、一護のように特別な存在でなければ手も足も出せない存在である為、只の一般人である自分達には何も出来る事などない。

ドン・観音寺は霊能力者であるが、それも靈感が他の者よりも優れているという程度で、戦う力などはほとんどない。そんな者が「圧」だけでこちらを行動不能にする相手に立ち向かえる訳がないのである。

だが、何故かドン・観音寺はその場から一步も動かなかった。

「…逃げる?それはこのヒーローに向かって言っているのかね?

…無知なガールだ。教えておこう」

——戦いから逃げるヒーローを、子供達はヒーローとは呼ばんだよ。

そう言った直後、ドン・観音寺は手に携えていたステツキを構えて藍染に一直線に向かつていく。

「止すんだ。人間如きが私に触れば、存在を失うぞ」

藍染は向かつて来るドン・観音寺にそう忠告した。今の藍染の霊圧は次元を超えており、普通の死神でも何も出来ずにひれ伏すほどの霊圧である。そんな霊圧を、靈感のある程度の人間が真面に当てられれば、すぐにでも塵へと変わるだろう。

事実ここまで来る間に、藍染の進路上に居た人間達は一人残らず魂を削り取られて息絶えていった。

だが、その忠告を聞いて尚、ドン・観音寺は一直線に立ち向かつていく。

「観音寺!!」

有沢は必死にドン・観音寺を止めようと声を荒げる。だが、遂にステツキの先の部分が藍染の霊圧によって塵に変わる。

そしてそのまま、ドン・観音寺も塵に変わるかと思われた。

「——カッコいいな、オッサン。だけど、止めとけよ」

「……ほう」

藍染の霊圧によって塵にされかけたステツキの柄の部分を、ある人物が抑える事によりドン・観音寺は塵にされる領域の外で留まった。

そしてその人物の姿を見て、藍染は興味深そうに視線を向ける。

ステツキを抑えている人物は、静かに瞳を藍染達に向ける。その瞳は力強く、藍染達を捉えていた。

「……間に合ったみたいだな。藍染。市丸」

「……天宮城日向か」

護廷十三隊十三番隊第三席・天宮城日向。

かつて、流魂街で“白神様”と呼ばれていた青年。

——白い死神。

償還

ボクが君を愛している事は

曲げようのない事実

だけど

君の幸せを願って

君から離れる事を

君は赦してくれるか？

愛してるが故に

外れていく事を

「…な…何だね、ボーイはッ!?危険だ!ここはボーイの様なボーイが来る場所じゃない!一般人はさがっているのだ!!」

ドン・観音寺は、自分のステッキを掴んで止めた日向に向かって声を高々に叫ぶ。それもそうである。ドン・観音寺は死神という存在を知らずにいる為、日向の来ている服が死覇装などということを知る由も無く、“只の一般人”として脳内処理されているのである。

そして日向は、ドン・観音寺に背を向けたまま口を開いた。

「オッサンこそ下がってる。此処はアンタの言う通り、一般人が居ちやいけねえ処だ」

「……な…何を言っているのだボーイ!このドン…」

「下・が・れ!此処に一般人に居られたら、やり辛くて仕方ねえんだよ!!」

中々逃げようとしなないドン・観音寺に日向は堪忍袋の尾の切らして、思いつきりドン・観音寺の顔を掴む。

その際に親指と小指が蟀谷にジャストフィットし、凄まじい握力による激痛がドン・観音寺を襲いかかる。所謂、アイアンクローである。勿論本気でなどやっていないが、それでも「メリメリ」という効果音がつきそうな威力に、ドン・観音寺は流石に焦る。

そして素直に下がろうとすると、それに伴い日向の掴む力も弱まり、スルリと手の中から逃れていった。そのまま背後で跪いていた有沢達を掴んで、この場から離れようとする。

「ア：アンダスタンツ！アブソルートリイアンダスタンツ！了解したツ!!ここはボーイに任せよう!!だがツ、危なくなったらヒーローを呼ぶのだぞ!『助けて!!ドーン……』」

「Shut up!!」
シャットアップ

「OUCH!!」
アウチ

少しだけドン・観音寺に感化されながら、日向は近くに落ちていた空き缶を投げる。野球などやったことのない日向であるが、死神の力で投げられた空き缶はプロ野球選手が投げるそれよりも威力が出ていたため、ドン・観音寺はかなり痛そうに顔を押しさえる。

赤く腫れ上がる顔を押しさえながらそそくさと退散していくドン・観音寺を見て、日向はやれやれと首を振りながら藍染達に視線を戻す。

一連の流れを見ていた藍染は、変わらない不敵な笑みを浮かべたまま日向を見つめていた。今の流れをずっと待っていたのだとすれば、中々な事をしてくれるじゃないかと日向は考えた。

勿論それが、藍染が崩玉と融合した事、そしてそれに伴う進化による力の大幅な増幅が理由であることを理解していた。先程から感じ取れている藍染の霊圧は、今迄の比ではない。

日向が静かに藍染を観察していると、漸く藍染が口を開いた。

「『間に合った』と言うのは、今の人間達を逃がす事に対してか?それとも空座町を滅して王鍵を創る事かな」

「どっちもだ」

日向の言葉に、藍染は眉を顰める。幾ら目の前に居る男が強いとしても、次元が違う自分とは戦う事すら無意味であるほど実力が別たれている。それは黒崎一護が理解していたことから解るように、この男

も理解出来ている筈である。

なのに、この男は黒崎一護のように絶望した表情などは欠片も見せずに、「戦える」と言ったような瞳をしている。

どうしてもそれが、今の自分にとって是不遜にしか感じられない。それが藍染の考えている事であった。

「何故、君は此処に来たんだい？」

「……どういう意味だ？」

藍染の問いに、日向は疑問を持つているような声色で返答する。そんな日向に、藍染は反転した異質な瞳で視線を送る。虚化の際の瞳とは違い、まるで存在が違うかのようにその瞳は訴えかけている。

虚化などではない。同じ融合だと言っても、次元が違う。

「そのままの意味だ。聡明な君なら解るだろう。最早、護廷十三隊に誰一人として、崩玉を従えた私に敵う者など存在しない。それは勿論、君も含まれている」

「そーかいそーかい」

藍染の言葉に、日向は呆れたように言葉を放つ。その態度が、藍染にとってはどうにも不快なものにしか感じ取れなかった。

すると、藍染の前に市丸が出てくる。その際に、藍染の切っ先が前に向けられている斬魄刀に軽く触れて、まるで藍染を収める様な対応をする。

「……」

「ここはボクに任せてください。あの戦いの後なんです。彼も、そない霊力が回復出来るわけありません。ボクで充分です」

「……ギン」

——刹那、刃が藍染の胸を貫いた。

その光景に、藍染を見ていた日向が驚愕した顔を浮かべる。それは、その一撃を繰り出したのが日向ではなかったからであった。一撃を放ったのは、今まさに自分と戦うと口にしていた市丸だった。

彼の斬魄刀が、能力である伸縮によって一気に藍染の胸元に向かって伸びたのである。神速とも言える一閃は、いとも容易く藍染の胸を貫いていた。さらによく観察してみると、市丸は自分の刃の切っ先が見えないように、死覇装の袖に隠しながら藍染に一撃を放ったのである。

確実に、殺しにいつている攻撃であった。

「――鏡花水月の能力から逃れる唯一の方法は、完全催眠の発動の前から刀に触れておくこと。その一言聞き出すのに、何十年かかった事やら」

藍染の胸を貫いている市丸は、淡々とした口調で語っていく。その内容は、日向にとっては驚愕の事実。まさか、鏡花水月にそのような弱点があったのかという驚愕と共に、それを知っていた市丸に驚愕した。

さらに話の内容を振り返ってみると、市丸自身その事実を訊き出すのにかなり苦戦したように聞こえる。

そしてそこから導き出されたのは、明確な藍染への殺意。薄ら笑いを浮かべる市丸の顔が、ここまで冷たく感じたことは今までにない。「護廷十三隊の誰一人それを知るもんはおらへんのに、みんな藍染隊長を殺せる気いでおるもんやから、見とってはらはらしましたわ」

そう言った直後に、市丸の正解である「神殺鎗」は元の脇差サイズの刀に戻る。

――藍染隊長殺せるんは、ボクだけやのに。

栓を失った傷口からは多量の血が噴き出す。それ藍染は片手で押さえる。だが、ちょうど心臓の位置を神速で貫かれた為、そのようなものでは血が止まる筈も無く、指の隙間からボタボタと滴り落ちる。「……知っていたさ」

傷口を押さえる藍染は、まるで今起きている出来事が起こることを予測していたかのような口調で話し始める。

「君の狙いなど知った上で私は君を連れていた……君が私の命をどう狙うのかに興味があったからだ……だが残念だ、ギン。君がこの程度で私を殺せると——」

「思うてません」

藍染の言葉を続けるように市丸が喋った後に、市丸は斬魄刀を藍染に見せつける。何の変哲もない只の刀。

他の者が見たら、それが何だと言われそうな光景であるが、目を凝らしてみると解る異変がそこにはあった。

「見えますか……、欠けてんの」

市丸の言う通りに、神殺鎗の中央には菱形の空洞のようなものが存在していた。どうすればそこにそのような空洞が出来るのかとどう言うように刳り貫かれている。

そして市丸は、ゆっくりと人差し指を藍染に向ける。細い指先は、貫かれて血が流れ出ている傷口に向けられていた。

「今、藍染隊長ん中に置いてきました」

「……何……？」

それはつまり、欠片を体の中に置いてきたという事になる。しかし、一体どうやってそのような芸を行ったのが、藍染にとっては疑問であった。

只、高速で伸縮する斬魄刀なのに、どうやって——。

「ボクの出解の能力、昔お伝えしましたね？ すんません、あれ嘘言いました」

——言うたほど長く延びません。

——言うたほど早く延びません。

——ただ、延び縮みする時一瞬だけ塵になります。

——そして。

「刃の内側に、細胞を溶かし崩す猛毒があります」

「毒」。その言葉に、藍染は察したような表情を浮かべる。それは現在藍染の前に立っている市丸の背後に居る日向もであった。

「……解ってもらいたいですね。今、胸を貫いてから刀を戻す時、一欠だけ塵にせんと藍染隊長の心臓ん中に残してきたんです」

「……ギン……！」

心臓とは、血を身体中に送る為のポンプのような役割を果たしている人体の中でも重要な器官の一つである。そしてそのポンプのような器官に毒を含んだ欠片を置いていかれたということは、既に藍染の体に毒が駆け巡っている事を同義であった。

「喋るんやったら早うした方がええですよ。まあ、早うしても死ぬもんは死ぬんやけど」

そう言いながら市丸はゆっくりと左手を藍染の胸に翳す。

「ころ死せ——『かみしにのやり神殺鎗』」

「ギン……貴様……!!」

市丸が解号のようなものを唱えた瞬間、藍染の胸が窪み始める。先程、市丸の口から放たれた言葉の通り、藍染の心臓を中心に細胞が溶かし崩されているのだろう。

だが、凄まじいのはその即効性であり、瞬く間に藍染の胸は骨や肉が無いかのように皮が内側にめり込んでいく。

それを見て、市丸は今まで以上に口の両端を吊り上げる。

「胸に孔があいて死ぬんや。本望ですやろ」

次の瞬間、藍染の体の中央が一瞬にして消え失せる。それは猛毒によって細胞レベルで溶かし尽くされたことを暗に示していた。

そして市丸は、藍染の胸に添えていた左手を露わになった崩玉に伸ばした。後一センチといった所で、藍染は力を振り絞り腕を払って市丸の手を払おうとする。それは無論、市丸の手に崩玉が渡るのを阻止する為である。

だが、その甲斐虚しく市丸は一瞬にして崩玉をその手の中に納め、瞬歩でこの場から去って行く。

「ッ…待て！市丸!!」

そんな市丸を追うように、日向も瞬歩でこの場から離れていく。この場には、倒れる藍染しかいなくなり、静寂に包まれた。

鳴り響くのは、身体の中央を溶かし崩された藍染が地に堕ちる音。

「…ギン」

藍染は、たった今裏切った部下の名前を口にした。

裏切ることは予見出来ていた。だが、それを見逃していた結果がこの様である。崩玉と融合を果たし、死神と次元を隔絶した自分にとって、それは屈辱以外の何物でもなかった。

そして、崩玉を奪われたままでは、藍染の命ももうすぐなくなるだろう。初めて実感する、死との隣り合わせの感覚。

「——うおおおおオオオオおおおおお!!!」

「待てっつっつてんだよ!!」

日向は全速力で市丸を追いかけ、とうとう路地裏まで追い詰める事に成功した。市丸が藍染に反旗を翻し、あろうことか身体の中央を毒で溶かし倒すというのは想像できず、嬉しい誤算であることに違いはなかったが、問題の「崩玉」はまだ敵に手にあると同じであった。

もし市丸が、藍染と同じように崩玉と融合すれば不死に近い力を手に入れられてしまい、振出しに戻ってしまう。それを阻止するために

は、何としても市丸の手から崩玉を奪い返さないといけないのである。

そして市丸の目の前に立ち塞がる日向を見て、市丸は疲れたのかふうーつと息を吐く。

「……もう終わりや。これで……」

「……何が終わりなんだよ」

「……これで、取り返せたんや」

そう言いながら市丸は右手の中にある崩玉を握り締める。よく見ると、市丸の右腕は藍染にやられたのか大きく抉られており、夥しい量の血を流していた。

だが、これで分かったのは市丸の目的が「崩玉を取り返す」という事。

「…何を取り返したんだよ？」

「……君、崩玉を完成させる為に流魂街の人の魂、仰山削られたのは解る？」

「…いや」

「……ボクが崩玉取り返したんは、ソレや」

「！」

市丸の言葉を聞き、日向はまさかと思う。この男が、まさかそのような感情の下に今まで動いてきたのかと驚愕する。

今の話から推測するに、市丸はその崩玉を完成させる為に犠牲になった魂の為に動いていると考えられる。勿論それは市丸自身かもしれないが、そうであれば藍染が態々自分の傍に置く筈がない。例え、先程言っていたように知っていたとしても、顔が知られているのであれば殺意はあからさまになるだろう。

となると必然的に市丸は、魂を削り取られた「誰か」の為に動いていたことになる。

「……まさか、仇を討つためにか？」

「まさか。死んでおらへんよ。今でも元気に生きとる。だけど、魂削り取られるゆうことは寿命縮まるゆう事や……だけど、これでもう終わりや」

そう言った市丸は、再び崩玉を強く握り締めた。

——なんと、一途な男か。

自分の為だけに動いているように思われた男が、このように一人の人間の為に動いているのは驚愕でしかなかった。

だが、ここで気になってくるのはそれが誰なのかということになる。ここまで彼を動かすのだから、相当の人物であることは間違いない。

恩人か、家族か、親友か、恋人か。こういったところであろう。だが、並々ならぬ思いを抱いている事はしつかりと理解出来た。

「……だけど、崩玉をアンタに渡したままにいる訳にはいかねーな」
「……やっぱり、そうなってまうん？」

幾ら、大切な者の為に動いていたとしても、市丸ギンという男は尸魂界にとって大逆を犯した罪人である。

罪人に崩玉をいつまでも持たせている訳にもいかないのです、日向はじりじりと市丸に詰め寄っていく。

「……いや……これは……っ」

静寂が訪れていたが、それは突如市丸が手の中に持っていた崩玉が輝き出すことにより、崩された。場は騒然となり、両者の視線はいずれも崩玉へと向けられる。

——残念だったな、ギン。私の勝ちだ。お前の奪った崩玉は、私の中に無くとも私のものだ。

脳内に藍染の声が響き渡る。それに伴い二人の困惑はさらに高まる。今から何が起こるのかを警戒して、日向は霊圧知覚を最大限に高める。

そして藍染の霊圧と思しき巨大な霊圧が、空座町の空にあると認識した。だが、次の瞬間にその霊圧は空から消え失せた。

次に、それを感じたのは、市丸の目の前であった。

「……！」

刹那、眼前に現れた藍染は市丸に向かって一閃した。それにより、市丸は肩から腰辺りまで深い傷を負う。

紅い血が宙を舞い、それらは地面にボタボタという音を奏でながら落ちていった。

目の前に君臨した藍染の姿は、先程とまた違っていた。何やら背中に、蝶の翅のような物が幾つも生えており、さらに異様な姿に変貌していたのである。

「……！」

さらに次の瞬間、市丸の手の中に在った崩玉は、一瞬にして藍染の胸の孔の中央へと移動する。

それを見て市丸は、夥しい血を流しながらも必死に手を伸ばす。

——取り戻さなければ。

その一心で、手を伸ばした。

だが、凶刃は既に市丸に迫っていた。市丸の伸ばした手は、藍染が振るった一閃により腕ごと斬り落とされたのである。

斬り落とされた腕は、勢いよく宙を舞い、鈍い音を立てて地面に落下した。

——嗚呼。

続けざまに、市丸の胸目がけて藍染の斬魄刀が突き出されていく。その瞬間、市丸は死を確信した。

——謝つといて、良かった。

刃は、市丸を貫かなかつた。

それは今の一瞬で日向が市丸を抱えて、藍染から距離を取ったためである。

その速さには、藍染も感心した様な目を向ける。今の反応速度はかなりのものであり、死神の次元を超えた自分の斬撃から誰かを庇うには、斬られようとする者を救おうとしている心構えがなければ出来ないものであった。

ここから解るに、日向は『元より市丸を救うつもり』であったことが理解できるのであった。

日向は、息も絶え絶えになっている市丸を抱えて、苦悶の表情を浮かべている市丸に瞳を向けた。

「……死ぬなよ」

「……」

「……死ぬのは、償いじゃねーんだよ」

「……」

死にかけの市丸に、日向は必死に声を掛ける。必死にであるが、重体の市丸を気遣ってその声色は幾分か優しく、穏やかなものであった。

「……アンタがしたことは許せねえ。アンタの犯した罪だ。だけどそれは、アンタが死ぬことで償えるようなモンじゃねーんだよ」

「……あ」

「生きて償ってみせろ」

—— ああ、何や。

—— この子。

—— ボクなんかより。

—— ずっと昔から。

—— 強かったんや。

日向の言葉に、市丸は了承したように僅かに口の端を吊り上げる。それを見た日向は、少し移動して市丸を建物の壁にもたれさせかける。

そうしてから、日向は再び藍染に視線を戻した。

その見つめる瞳には、感情がこれでもかと言う程に込められていた。劫火が滾っているような怒り。

だが、そのような視線を向けている日向に対し、藍染は表情を変えない。

「……なあ、藍染」

「……何だ。私の新たななる進化に、怖れを為したのか」

藍染の問いに、日向は自分の放とうとした言葉を一度呑み込んでから、*“全て”*を込めて再び喉元まで持ってきた。

それは、今日向が感じている全てを込めた、目の前の男に向かって放つ言葉。

——テメーは奪い過ぎた。

日向が言葉を発するとともに、辺りに凄まじい霊圧が重力のように

襲いかかっていく。それでもまだ藍染の化け物のような靈圧には届いてはいない。

だが、それを気にすることも無く日向は言葉が続ける。

これで、終わらせる為に。

悲しみを、生み出さない為に。

大切な人を、護る為に。

「……今までテメーが奪ってきた全てを、そっくりそのまま還してもらうぜ」

最後に、日向は地面に手を添えた。

それと同時に、青白い光が地面と手の間から瞬き始める。

「——」

解!!!!

御剣

柄を握れ

刃を振るえ

全ては

お前の為に

少し、昔話をする。

千年前、尸魂界で戦争が起こった。それは、死神と滅却師による戦争であった。その際に、死神の総大将であった元柳斎は辛くも滅却師の総大将であった男を退かせる事に成功した。

だが、あくまで退かせただけであり、肝心の命を取るまでに至らなかった。そして千年前の死神と滅却師の戦争により、数えきれない程の命が奪われたのである。それは死神だけでなく、滅却師でもであった。

そして、このような事態に陥ってしまった尸魂界は事態を重く捉え、再び来るであろう滅却師との戦争の為に、ある一つの斬魄刀を創りだした。

——その斬魄刀の名は“隸王”。

戦争で死した滅却師の魂魄をふんだんに使用し、刀神・二枚屋王悦が、霊王の力も練り込みながら打ち上げた尸魂界で唯一霊王の力も有す斬魄刀である。

その能力は、滅却師の霊子の収束の力を最大限にまで鍛え上げ、隸属という域まで達した霊子の収束能力である。それによって滅却師の霊子兵装を乱し、事実上滅却師の戦闘能力を無にするというものがある。

そしてそれは、同じく霊王の力を込められて創り出された浄天眼と共に、ある人物に託された。その者こそ、後に中央四十六室という尸

魂界で唯一の司法機関を創り出した司家の者であった。

——対滅却師用に創生された武器。それが“隸王”と“浄天眼”であった。

“隸王”により滅却師の霊子兵装を無効化し、“浄天眼”により瀕霊廷全てを見渡し、高濃度霊子環境に於いても滅却師を補足できるようにする。そして“浄天眼”のもう一つの力は、持ち主の魂魄を限りなく霊王と同じものに変質させることにより、滅却師の長の“ある力”に対抗できるようにするというものであった。

これこそが、司家に受け継がれた一つの斬魄刀と、一つの神器。

だが、その余りに強大な力により扱える者がおらずに、時ばかりが経った。それにより本来の使命も忘れた者達が、その血ばかりを受け継ぎ宝の持ち腐れとなっていたのである。

——だが、今代に於いて漸く、それらを扱える者が現れた。

——名を、天宮城日向。

鬼道衆副鬼道長を母に持つ彼は真血であり、死神として優秀な血筋に元に産まれた。そして尚且つ、藍染惣右介により不本意ながらも虚の力を得、それに伴い死神として異質な力を手に入れていった。

そして遂に、隸王を完全に扱える次元まで辿り着いたのである。

“隸王”の真の姿。

その名を——。

光はうねりながら日向の下に集まっていく。それが尸魂界中に蔓延っている霊子であることは容易に理解出来た。青白い霊子は、臆て炎のように猛りながら燃え盛る。それは上空から見下ろせば、『卍』の形のようになりながら渦巻いている。

そして青白い炎は、全て日向の右腕に渦巻くように収束していく。神々しく煌めいている炎は、やがて一直線に天に昇っていく。それと同時に、日向は右手を地面から空に向けて翳し始めた。

先程天に昇った炎は、一つの刀のような形状に変わり一瞬にして日

向の手元に戻ってくる。神速で手元に戻ってくる刀を、日向は何の動揺も無く受け止める。

刀とは言ったが、その形は異様なものであった。柄は無く、剥き出しの刀身の茎なかじの部分と直接つかむような形で、日向はその刀を握っていた。さらに茎に巻かれていた青白い布は、炎のように揺らめきながら日向の右腕に絡みついていった。

それが最後であったのか、日向は刀を横に振るった。

「……『天零剣』」

日向の右手に握られている刀は、燦々と輝いている太陽の如く光を放っていた。直視すれば網膜が焼かれそうな光を放つ刀を前に、藍染は興味深そうに目を向けていた。

「……あれが、『隸王』の卍解か。」

「……成程。君も、右腕と斬魄刀が融合するという似通った形に進化の帰着を見出したようだ」

藍染は日向の右腕と刀を見ながらそう言い放った。藍染は、崩玉との融合により、斬魄刀と右腕が一体化したような形に変貌した。そして目の前に居る死神も、斬魄刀である刀と右腕が一体化したような姿に変貌していた。

卍解したことにより霊圧は高まっているが、それでも藍染には届いていないように感じられる位置である。それを感じ取り、藍染は余裕を持った表情を浮かべる。

「霊王の力を有すといっても、所詮は死神のレベルか、と。」

「……藍染。場所を変えようぜ」

日向は、目の前の藍染に向かってそう言った。それはこのような町の中央で戦ってしまったら、空座町に居る魂魄が数多く犠牲になってしまうと考えたからである。

恐らく二人の攻撃の一つ一つが、数百の魂魄を消し去るほどの力を有している。

だからこそその提案であったが、藍染はそれを鼻で笑った。

「無意味な提案だな。それは私と戦う事の出来る力を持つ者のみが口にできる言葉だ」

「……そうかよ」

藍染の提案の棄却に、日向は瞼を閉じて息を深く吐く。

「……じゃあ、無理やりにも変えるぜ」

「——なっ…!?!」

藍染は、瞼を開けた日向の右目を見て息を飲んだ。日向の右眼は、虚化とは少し違うように反転していた。さらに本来黒目である部分は、何やら歪んだ菱形のような形の白目になっていた。

明らかに虚化のそれではなかった。

そして日向は、左手を藍染に翳す。それと同時に、藍染の周囲に四つの巨大な柱がそびえ立つ。それらは特徴的な線を描き、最終的に藍染を中心として『卍』の文字を描いた。その瞬間、藍染は自分の中から凄まじい速度で霊力が無くなっていくことに気付いた。例えるのであれば、巨大な穴の開いた桶から水が零れ落ちていくようなものであった。

「っ……」

すると藍染の胸に埋め込まれている崩玉が輝き出し、藍染の体は綺麗に分割されるようになってゆき、その場から姿を消した。

次の姿を現したのは、日向の背後であった。既に右手と融合している斬魄刀が、日向の首を斬り落とそうと振るわれていた。

だがそれに反応した日向は、右手の刀を後方に振るって藍染の一閃を受け止める。その際の衝突により、周囲の建物が呆気なく崩れ落ちていく。

瓦礫が地面に落ちる事により、周囲には埃が巻き上がる。

（……何だったのだ、今のは……?——!）

思考を巡らせていた藍染であったが、次の瞬間日向の力によって押し返される。その現実信じられないような表情を浮かべ、藍染は押し返そうと試みるが、尚も日向の膂力が藍染の力よりも上であった。

力負けした藍染は凄まじい勢いで吹き飛ばされていく。それを追撃するかのごとく、迫っていく。

「破道の八十八・『飛竜撃賊震天雷炮』」
ひりゅうげきぞくしんてんらいほう

「……………」

突如、凄まじい閃光が藍染の体に襲いかかり、そのまま速度を上げながらさらに空座町の空へと打ち上げられていく。たかが八十番台の鬼道であるが、勢いだけならば問題は無い。

攻撃範囲も広いため、藍染に当たって空座町から離すには勝手のいい術であった。

日向の放った『飛竜撃賊震天雷炮』の霊圧の光線の中で、藍染は先程の膂力の差によって吹き飛ばされたことに疑問を抱いていた。幾ら感覚を研ぎ澄ませても、日向の霊圧は自分よりも低い。それにも拘わらず、何故先程はあのような結果になったのか。

そう言った風に考えていると、異変が起こった。

——日向の霊圧が、一瞬にして藍染と同じレベルまで跳ね上がったのである。

「馬鹿な……………」

藍染は信じられないと言わんばかりに目を見開き、斬魄刀を振るって日向の『飛竜撃賊震天雷炮』をかき消した。藍染の一振りには、まるで真空波のように宙を駆けて行き、極太の光線をかき消しながら日向の元へ一直線に飛んで行った。

「おおおおオ!!!」

だがその剣圧が日向に命中する直前に、日向も斬魄刀を振るってその剣圧を相殺した。

今ので理解出来た。この男は、どうやってかは解らないが確実に自分と同じ次元に立っている。

さっきの今で、どうやって霊圧を跳ねあげたのかは解らない。始解であった『隸王』は、霊子を隸属させることが能力であった。霊子を隸属させることはともかく、霊子を隸属させたからといって本人の霊圧が上がる訳では無い。

なのにも拘わらず、日向の霊圧は一気に次元を飛び越えてきたので

ある。

(……少々小賢しいな)

だが、崩玉を従えている自分にとって、相手に同じ次元に立たれるという事は寧ろ有難い事であった。隊長格相手ですら存分に振るえなかった自分の力を、心置きなく発揮することが出来る。

——だが、こんなに嬉しい事もない。

そう考えた藍染は、不敵な笑みを浮かべる。それを見た日向は、面白くなさそうに藍染に向かっていく。

凄まじい速度の瞬歩で藍染に肉迫し、そのまま刀を振るった。だが、初動から見切られていたのか藍染は一步引き下がって斬撃を回避し、日向が刀を振るった直後に今度は逆に肉迫し懐に一閃を入れようとす。

だが藍染の動きを見ていた日向は、すぐさまその場から前方に宙返りして横に振るわれた一閃を回避した。

回避された斬撃は、剣圧によって日向の後方に存在していた空間に旋風を巻き起こし、雲の形を変貌させていった。

その間にも、藍染の目の前で前方に宙返りしていた日向は、その回転の勢いのまま刀を振り下ろした。しかしその一閃は藍染が斬魄刀を頭上に構える事により防がれてしまった。先程は原因不明の現象により、通常よりも膂力が落ちていた藍染であったが崩玉の主に対する防衛本能により霊圧は元通りになっていた。

びりびりと張り詰める空域には、刹那であるが静寂が訪れる。

だが、次の瞬間には藍染はその場から姿を消した。先程のように、瞬間移動のような移動方法によって、全方位のあちこちから出現し、場所を変える度に日向に斬りかかっていったのである。

その斬撃の嵐を、日向は自分の感覚を頼りに一撃一撃を何とか防いでいく。その度に、爆音のような音が空中を駆け回り、その衝撃の凄まじさを物語っていた。

「ふっ……逃げずに私の剣を防ぎ切ろうと言うのか」

藍染が何とか防いでいる日向に向かってそう言い放った。そして藍染は、さらに斬撃の重さや速さを高めていく。

それに伴い日向に求められる反射速度が高くなっていく。藍染の移動方法は瞬間移動であり、その移動した際の軌跡を読み取ることが出来ない。故に、いちいち目で確かめるしか藍染の姿を捉える事しか方法がないのである。霊覚に頼ってしまえば、いつ鏡花水月を使われるか解ったものではない。故に日向は、自分の反射神経だけを頼りに防いでいた。

だがそれも長くは続かずに、一撃だけ、浅く日向の右の肩甲骨辺りを斬った。それにより宙には赤い液体が飛び散る。

「敢て口にしよう。距離を考えず私と戦う事は、愚行と——!?!」

再び場所を変えて斬撃を繰り返した藍染であったが、予想よりも早く反応した日向が刀を振るった。その一閃は、藍染の手と融合している鏡花水月を一瞬で真つ二つにして、そのまま藍染の胸板に一文字の傷を付けた。

それに伴い、藍染の体からも血がまき散らされる。

—— あまのむらくものつるぎ “天叢雲剣”。

忘れていた。この技は元々、始解すらしていない“隸王”の隸属の力と、虚の透過能力によって成り立っていた。だが、卍解して完全な隸属の力を発揮している“天零剣”では、その透過能力など必要ない。

胸に一文字を付けられた藍染は、すぐさま距離を取る。その際に、崩玉の力によって胸の傷は一瞬にして元通りになるが、藍染は僅かな焦燥を隠すことが出来なかった。

そんな藍染に向かって日向は、刀の切っ先を向ける。

「……距離が何だつて？近付かなきゃ、テメーを斬れねえだろうが」
「……死神風情が……いい気になるな!!」

日向の言葉に、藍染はあからさまな怒りを見せた。以前の藍染であったならば、決して見る事の出来なかつた姿である。

だが崩玉との融合を果たした藍染は、傲慢な思考に陥っていた。

自分の超越していた力が、さらに超越したことによる絶対的な確信。それが穢されることが、今の藍染にとっては許せないことであった。

そして藍染は、折られた鏡花水月を元通りにする。藍染と一体かしている鏡花水月を元通りにすることは、自分の体を再生するように容易い事であった。

それを見て、日向は刀を構え直す。

(……さて、どんくらい持つか)

日向は、自分がどの程度卍解を維持することが出来るかを考えていた。客観的に考えて、始解ですら数分しか持たなかった斬魄刀を、卍解などすれば何秒の世界かだと考えられるがそれは違う。

始解である「隸王」は、隸属の力がほぼ制御出来ずに常に全開であるのだ。それに比べて卍解である「天零剣」は、日向の意のままに隸属の力を操ることが出来る。それによって、消耗の激しい隸属の力をコントロールして何とか戦闘を維持できるレベルまで持つてきているのである。

そして「天零剣」の能力は、勿論隸属もあるが、それ以外にも存在する。それは「力を奪い、そして与える」というものである。先程はその力により、藍染の霊圧を奪い取り自分自身に与えて、藍染と同じ次元の霊圧まで自分の霊圧を上げたのである。

そうやって、日向は自分の実力を藍染と互角までに持ち上げたのである。

(だがまあ、藍染をぶつた斬ることには変わりはない)

藍染の凶行を止めるには、藍染を限界まで弱らせるしか方法が無いのである。それによって藍染の体の中に仕込まれた術が発動し、そのまま封印するというのが浦原の考えである。

不死である相手を倒す事などできる訳も無く、「止める」事しか出来ないのである。そしてその「止める」事をするには、何より藍染を斬るしかないのである。

「——おおおお!!」

そして日向は、刀を構えて藍染に迫っていった。

「…井上、大丈夫か!？」

「う…うん！ゴメンね、あたし足遅くて…」

ルキアの心配する声に、井上は申し訳なさそうに顔を俯かせる。ルキアは、他の者達よりも移動速度が遅い井上を護る為に、一人戻って井上と共に有沢達が居るであろう方に走っていたのである。

だが、先程から始まった次元の違う戦いにより空座町に存在する霊圧を持つ者の気配を感じ取れなくなってしまったのである。

その為二人は、目で見て探索している状態であった。

「…いや、気にするな。だがここは危険だ。無事が確認でき次第、すぐここから離れるぞ」

「う、うん…あ…」

ルキアが有沢達の無事を確認出来たら離れようという旨の言葉を聞き井上は頷いたが、その場で少し立ち止まった。

不思議に思ったルキアが井上の視線を辿ると、そこには死にかけの男が空を見上げていた。

「なっ…市丸ギン…!?何故、貴様が此処に…!?」

市丸はルキアの問いに答えない。否、答えられない。肩から腰辺りまで深く斬り裂かれた傷と、さらに右腕は肘から先が斬り落とされており、地面に出来ている血だまりから、このままでは失血死でもするのではないかと思われた。

だが、そのような死にかけの状態の市丸は、一心に空を見上げていたのである。まるで、何かを見届けるかのように。

「『双天帰盾』!」

「なっ…井上!？」

そんな市丸に、井上は一直線に駆け寄っていき『双天帰盾』による治療を試みた。楕円形の結界が市丸の体を覆っていき、その神の如き治癒力を以て市丸の致命傷レベルの傷を癒していく。

だがそんな井上を見て、ルキアは止めようと肩に手を掛けた。なぜならば、井上が治しているのは敵。それも得体の知れないような相手であり、尚且つ実力もかなりのものであり、そんな者が回復して自分に襲いかかってでもすれば、ルキアは井上のみならず自分自身を守

り切る事など不可能だと考えたのである。

だが井上は、そんなルキアを振り切つて市丸の治療に専念する。そんな井上に、ルキアは頭を押さえる。虚夜宮でのクリスティナの前例があるとは言え、敵を治すというのは普通であれば考えられないことであるのだ。

しかし目の前にいる彼女は、例え敵であるとしても見捨てることの出来ない、心の優しい、逆に言えば極限に甘い考えを持った少女であるのだ。

既に井上の脳内は、市丸を救うことで一杯であった。

「……な……んで……泣いとるん……？」

市丸は視線を空から井上の下に変える。そして少女の顔を見ると、何故か大粒の涙をその目尻から零していたのである。

そんな息も絶え絶えで、声の小さい問いに、井上は上ずつた声ながらも必死に返答する。

「解りません……でも、もう誰にも死んでほしくないんです……！そう考えたら、涙が止まらなくて……！」

「……そか……面白い子やなア……」

井上の答えに、市丸は笑みを浮かべながら再び視線を空に戻した。そこで行われているのは、日向と藍染による頂上決戦である。

死神と次元を隔絶した二人による、この世の終わりの様な激闘。

市丸は、何故かその戦いを見届けなくてはならない使命感に駆られていたのである。

——『生きて償ってみせろ』……か。

脳内に一瞬響いたのは、日向が言い放つた言葉。それを、だんだん生を取り戻している体で、その脳で考えていた。

今まで、他の全てを犠牲にして行ってきた所業。

それらは到底許されない事であることは承知している。

それでも彼は、『生きて償ってみせろ』と自分に言ったのである。

「なら君も、生きて帰ってこなアカンわ」

そう言って市丸は、日向の勝利を暗に願ったのであった。

護劍

想うだけでも

力だけでも

お前の劍には

その二つが必要なのだ

「はあー!」

日向は目の前に居る藍染に向かって一閃する。だが、同じく藍染も斬魄刀を振るってその一撃を防御する。

凄まじい剣戟の応酬。それらは空座町のみならず、周囲に広がっている流魂街にも広がっているだろう。大気は震え、大地は唸り、時空は悲鳴を上げている。

神ならざる者達の、神の如き死闘。否、死神である彼等を神であるのかという疑問が湧いてくるが、それは彼ら自身が良く理解していた。

「っ……っ!」

「ふっ……」

熾烈を極める戦いの中で、日向は苦悶の表情を見せていた。例えば、霊圧という次元で藍染と同じ場所に立ったとしても、それだけでは日向の疲弊した体を支えるには足りなかったのである。

レプリカの町で戦った時。否、それ以前に虚夜宮で幾度となく行った激戦により、日向の魂魄の鎖結と魄睡は限界を迎え、悲鳴を上げていた。それは斬魄刀で手に入れた霊力が、普段の日向の霊圧のそれよりも異常に高かった為、許容量を超え、何とか収めているものの今にも破裂しそうな状態であったのだ。

一度刀を振るえば、筋肉は焼かれたような痛みが奔る。二度振るえ

ば、骨がすりつぶされるような痛みが奔る。三度振るえば、臓器が絞られるような痛みに襲われる。

それでも日向は砕けそうな程歯を食いしぼり、刀を振るっていた。今にも倒れそうな日向を目の当たりにして、藍染は先程の怒りや焦りなどは鎮まっているのを認識した。

——悦ばしいよ、天宮城日向。

藍染は今ままで最も勢いよく刀を振るった。それを辛うじて受け止めた日向であったが、勢いに圧されて後方に後ずさっていく。

「君を殺せば、私はまさしく神に等しい存在に、また一步近づくことができる。これ以上悦ばしい事は無い」

「……」

藍染の言葉を聞いた日向は、口の中に溜まっていた血を唾と共に吐き出した。その表情は幾分か優れない。

そして日向は、藍染の目的の事を思い返してみる。

この男のしようとしていることは、霊王宮を落とす事。その過程に於いて、十万の魂魄と重霊地である空座町を犠牲にするのだ。それらは何としても阻止しなくてはならない。

ここが、この空座町が、藍染の野望を食い止める最終防衛線なのである。倒れる訳にはいかなかったのである。

鋭い視線を藍染の方に向けていると、突如藍染の姿が綺麗に分割される。

「っ……!?!」

先程から何度も使用している瞬間移動。目の前から消え失せた藍染を探そうと、日向は辺りを見渡す。

「遅い」

「ちっー」

現れたのは背後。既に一閃は、日向の背中を斬っていた。油断していたわけではない。反応が遅れた訳では無い。只、単純に藍染が徐々に強くなっているのである。

すぐさま背後に一閃を振るうが、宙を斬るだけであり仕留めるには至らない。

「どうした？動きが遅くなっているぞ」

「破道の六十三・『雷吼炮』!!」

瞬間移動で目の前に現れた藍染に向かつて、日向は雷の光弾を放つ。だが、大空で瞬く雷光も藍染が左手を振るうことにより弾かれてしまう。

宙には、弾かれて消え去った『雷吼炮』の残骸であるスパークが奔っている。一連の流れを目にしていた日向は、状況が著しくない事を悟る。どうやら藍染は、こうやって戦っている間にも強くなっている。消耗するだけの日向とは違い、藍染は延々と己を高めていくのである。余りにも、一方的でありジリ貧な戦いである事は明白であった。

そんな日向に、藍染は笑みを浮かべながら左手を刺し延ばす。謎の挙動に、日向は警戒心を強める。

「——私と共に来い。天宮城日向」

「なっ……!?!」

予想外の言葉に、日向は驚愕の声を上げる。その勧誘は、双匣の丘でも言い放たれた言葉であった。

あの時は、日向に『両親の恨みを一緒に晴らす』というようなニュアンスのものであったが、今ここで言い放たれた言葉は勿論そのような意味でないことはすぐに理解した。

困惑する日向に、藍染は補足するように言葉を続けていく。

「君は、私と共に天に立つに相応しい存在だ。そして、在るべき世界を創ろう」

「在るべき……世界……?」

「ああ、そうだ」

そう言って藍染は両腕を大きく広げる。背中に生えている翼と一緒に広げられるそれらはまるで、この世界の全てが自分の手の中に在

るとでもいう様な挙動であった。

日向は警戒心を解かず、藍染の様子を伺う。

「君の望む世界とは何だ？」

—— 争いの無い世界か？

—— 犠牲の無い世界か？

—— 皆が平等に生きれる世界か？

—— 悲しみの無い世界か？

「とにかく何でも考えるといい。君の想像力の内で作り上げた素晴らしい世界を。この『崩玉』は、それを叶えるだけの力を持つと言えよう」

「夢なら寝てから言ってる」

「ふっ……信じられないのも無理は無いだろう」

日向の吐き捨てるように放った言葉を、藍染は鼻で笑う。それもそうである。藍染の言っている事は、まさに桃源郷を己が創り出すというようなものである。それが、今迄何人の人間が求め、叶わぬままに死んで逝ったのだろう。

そのような夢物語を信用するほどの馬鹿者はいないだろう。

だが、藍染は話を続けていく。

「この世界は不確定だ。そして不確定であり、それ故に望まぬ事が起こってしまう……それが何故か解るかい？唯一絶対である『神』が、何もしていないからさ」

「……何だ？まるでテーマが、その『神』ってのを見たみたいじゃねえか」

「ああ。見たさ」

「!!」

『神』を見たと言ったと豪語する藍染に、日向は瞠目する。『神』とは何ぞや。この世界に於いての神とは何か。

そう考えて来れば、自ずとその解は浮かび上がってくる。

「……霊王か」

「ああ、そうだ」

尸魂界で唯一の司法機関・中央四十六室。その上の王族の頂点に立

つ存在。それが「靈王」である。

だが、あくまでも只の死神である日向にとって、靈王がどのような言われてもピンとこないというのが現状である。

偉く、尊い。そのような感想しか持てない、普通のものであれば特に深く考える事も無く一生を終える様な存在である。

そのような存在を、藍染がどのようにして目にしたのか甚だ疑問である所であるが、恐らく藍染は「靈王」を目の当たりにしてこのような凶行に出たことは理解できる。藍染をそこまで突き動かした「靈王」——尸魂界の神とは何なのか。

それを答える様に、藍染は言葉を続けた。

「靈王とは、只の存在だ」

「……は？」

余りにも婉曲した答えに、日向は呆気にとられた声を出してしまった。只の存在とはどういった意味であるのか。もしか、靈王とは存在せずに、只の偶像であるものであるのか。日向は必死に思考を巡らせて理解しようとする。

だが、日向が答えを出す前に藍染が再び言葉を続けた。

「安心するといい。靈王は確かに存在する。だが、その実態は只存在するだけの「物」と言った方が良い」

「物だと？」

「ああ。人の形をすれど存在するだけで、自分が統制している世界の為に動く事すらない、只の物として扱われる存在だ」

その説明を聞いても尚、未だにピンとは来ない。だが、藍染の言う「靈王」とは、象徴に近い何かであるのかと予測する。

歴史を見れば、象徴として存在するだけの役職は多く存在する。名誉職などが、それに近いだろう。だが、そんなものだけの為に靈王と言う存在が創りだされる筈がない。しかし、余りにも曖昧な問いに答えなど出る筈もない。

「……君達の世界を統制する「王」は、己の世界に住む民衆の為に動くことすらしない只の「物」なんだ。君は、そのような者の下で動くことができるのかい？」

「さあな。だが、事実今まで動いてきただろうが」

「ここまできて日向は、ぼやけてこそいるが藍染の考えていることを
少しずつ理解してきた。」

象徴のような存在の下で働く事などできない。つまりは、それに近
い事であろう。

そう理解した上で、日向はその象徴の下で尸魂界が滞りなく歴史を
刻んできたことを暗に示す。

「ここまで言っても解らないかい。存在するだけの王など、居ても無
駄だ。ならば、私とその座に就き新たな王として動こう」

「それは傲慢だぜ、藍染……！」

納得できないからと言って、象徴を蹴落とそうとする藍染に日向は
視線を鋭くする。そのような真似をすれば、少なかれど混乱が起ころ
筈である。そして霊王を蹴落とそうとでもすれば、王族特務である「
零番隊」が動く筈である。

零番隊の実態こそ知らないが、霊王を殺そうとしたところで零番隊
と藍染が戦うことは目に見えている。

これ以上血を流すことを望まない日向にとっても、それは避けたい
事象であった。

しかし、「傲慢」と言う日向に対し、藍染は少し怒気を含んだ声で
語り続ける。

「ならば君にとっての『王』とは何だ!? 『神』とは何だ!? それは、そ
の下に生きる者にとっての唯一絶対の存在！人間はその唯一絶対の
存在に陶醉し、心酔し、抛り所として生きる!!生きていく筈だ!!」

「っ……！」

「私は、私にとつての唯一絶対の存在が、そのような『物』であること
は赦さない!!赦せるはずがない!!ならば、私が霊王にとつて代わり、
その唯一絶対の存在となつてみせよう!!そうすれば、創生の刻よりこ
の世に存在し続けた王と違い、世界を在るべき世界へと導いてみせよ
う!!」

熱く語る藍染には、まるでその想いの如く霊圧が炎のように揺らい
でいた。只でさえ霊圧が別次元へと昇華している藍染の霊圧は、少し

上がっていくだけで普通の魂魄を打ち砕くことすら出来る力を持つ。
「人間は望む筈だ!! 変わらぬ幸せを!! そのような世界を!! もし君が私
と共に来ると言うのであれば、そのような世界を創ると約束しよう!!
これから後世へと受け継がれていく、素晴らしき世界を!!」

そう言い切った藍染は、再び左手を日向に差し伸べる。

その演説に、日向は暫し呆気にとられていた。確かに理解できるこ
ともある。永遠の幸せ。それが変わらぬに延々と受け継がれていく
のであれば、どれだけ素晴らしいか。

そういった歴史を辿れば、今大罪人として目の前に君臨しているこ
の男も、新たな世界を創り上げた存在として褒め称えられるのだろう
と。

「これから数千年続く尸魂界……そこに住む魂魄の絶対の幸福……」
死神”である君であれば、それを望む筈ではないのか? 十万という魂
魄の犠牲だけで、その何千倍、何億倍もの魂魄が平等に生きていくこ
とが出来るんだ……さあ!」

差し伸べられている手が、バツと開く。

「卍解——『戦憶夜叉姫』!!!!」

「なっ……!?!」

藍染は、日向が卍解したことに驚愕の顔を浮かべる。既に目の前の男は、「隸王」の卍解である「天零剣」を発動している筈である。

つまり現在日向は二本の斬魄刀を卍解しているのである。斬魄刀という概念が生まれてからこの時まで、同時に二本の斬魄刀を卍解する死神など居たはずもない。

日向は「戦憶夜叉姫」を解放したことにより、普通の死覇装から上衣が白いロングコートになり、さらに左肩からは彼岸花が刺繍されているマントを靡かせている。

そして「天零剣」を解放し変質した右眼に対を為すように、左眼も虚化特有の黒目と白目が反転したものになる。

そして二つの斬魄刀を完全に従える日向は、右手に携えている刀の切っ先を藍染に向ける。

「藍染……変わらない世界なんて無え…」

日向の霊圧は、卍解したことにより高まっていき、さらに黒い霊圧が周囲に渦巻き始める。

「変わるから、「世界」なんだ!!変わるから「未来」があるんだよ!!」
そして一気に、藍染の下に瞬歩で移動し刀を振るう。その一閃を辛うじて受け止める藍染であったが、予想以上の威力を前に驚愕の表情を浮かべた。

日向は、刀を押し込みながら藍染を出来るだけ市街地から離そうと宙を奔っていく。

「そして……——今テメーと戦わなきや、護れねえモンがあるんだよっ!!!」

「ぐっ……!?!」

日向の刀が輝き、霊圧の斬撃が藍染を襲いかかる。

——「天羽々斬^{あまのはばきり}」。

「天羽々斬」を真正面から喰らった藍染は、肩に大きな裂傷を負った。だが日向は続けざまに刀を振るっていく。それを斬魄刀で受け流していく藍染であるが、卍解したことにより日向の攻撃はかなり強化されていた。

そして藍染が斬撃を受け流していると、途中で日向は回し蹴りを繰り出した。疾風の如き一撃は確実に胴体を捉え、そのまま白い身体を山中の方に向かって吹き飛ばしていった。

吹き飛んでいく藍染を、日向は尚も霊圧を上げながら追撃しようとする。だが、卍解を二つ同時に解放していることにより、日向の霊体は限界間近であった。しかし、徐々に強くなつていく藍染を止めるには、この機しかない。故に、短期決戦を挑んだのである。

そんな日向は、走馬灯のように色々な思いを心に浮かべていた。

——変わってきた。

——変えてきた。

——だからこそ、護れたものが在った。

——だからこそ、護れなかつたものも在った。

——故に、これからも変わつていき、護れるものを増やさなくてはならないのだ。

「破道の九十一・『千手せんじゅ皎こうてん天汰たいほう炮』!!」

日向の背後の出現した無数の光弾が、一斉に藍染に襲いかかつていく。だが藍染はそれらを刀を振るった際の剣圧でかき消していく。

しかしその一瞬で、日向は藍染に肉迫し刀を振るった。死神としての次元を超えている二人にとって、死神の術の最高峰である九十番台の鬼道ですら、隙を作る為の手段の一つにすぎなかった。

肉迫した日向による一閃は、藍染の胴を軽く斬りつける。続けざまに日向は何度も刀を振るう。藍染も負けじと斬魄刀を振るう。互いに振るう刀は、激突し、時折互いの肉を斬りつけ合う。尚も、崩玉による再生と、虚の超速再生を持つている二人にとっては些細なものであった。

「藍染……俺は、今テメーと戦って、今在るものを護る!!護ってみせる!!!」

「それが愚考だと何故気付かない!!!天宮城日向……何故お前は、そんなにもこの町を護ろうと戦う!!!」

「それは俺が……俺が『死神』だからだああああああああ!!!」

咆哮の如き叫びを上げながら、日向は刀を藍染の左肩に突き刺し

た。かなり深く刺さり、両者の距離はほぼ零となった。

そんな距離の中で、藍染は日向の顔を凄まじい形相で睨みつけていた。

——忌々しい……！

一点に見つめていたのは、日向の右眼。

“靈王”の力の宿る、その右眼であった。

「その眼が!!靈王の力を宿すその眼が忌々しいのだ!!天宮城日向!!」
そう叫ぶ藍染は、右手と一体かしている斬魄刀を一度引き、次の瞬間その切っ先を日向の右眼に向けて突き放った。それは一直線に日向の右眼を貫き、頭部の逆側からは貫いた斬魄刀の切っ先が、血と共に飛び出してきた。

日向は目と共に頭部に一撃喰らったことにより、苦悶を表情を浮かべる。だが怯まずに、左手で藍染の胸に埋め込まれている崩玉をしつかりと掴んだ。

「これで……逃げられねえだろ……藍染っ!!」

「それが……何だ!?!」

「ぐっ……うう!!」

日向の言葉に業を煮やした藍染は、柄を九十度捻る。それにより日向の右眼は鋭い刀によって抉られるような結果に陥る。しかし、それでも日向は左手を放さなかった。

そして日向は、一気に地上に向かって霊圧の翼を羽ばたいて向かっていく。その際に、右手の刀は日向の手元から消え失せ、一直線に空に上っていった。刀の移動は、藍染も一度目にした。否、一度喰らった。

それを回避しようとするも、がっちり崩玉を拘束されている為、瞬間移動をすることが出来ない。あの移動方法は、崩玉が在る場所、若しくは崩玉と共にある場合でなければ発動出来ないのである。それを日向は、先程の市丸の手元に崩玉があり、そこに藍染が瞬間移動していたのを目の当たりにして予測していた。

このままでは、“あの攻撃”が藍染を襲う。

「くっ……このままでは、お前諸とも喰らうぞ!!」

「はっ……死ぬ気で戦ってる相手に、自分の命を口にすんのかよ!!?」
そう言った直後、二人は地面に激突する。状況としては、日向が藍染に馬乗りになっているような体勢である。

藍染の目線は、空に向かっていた。そこには太陽とは別の輝きを持つ光源が在った。太陽のように燦々と輝きながらも、虚の霊圧を含んでいる為夜のような黒を纏い、神々しさと禍々しさを体現していた。あれには、自分から奪った霊圧と、尸魂界中から集めた霊子が混ざっている。その威力は現世で喰らった時の比ではない。

日向は、藍染が自分の右眼に突き立てている斬魄刀の刀身を、空いた右手で拘束した。拘束する右手には、自分の血が止めどなく流れてくる。

「……〃力〃だけじゃ、護らなかつただろうよ……」

「っ……!?!」

「だが、〃想い〃だけじゃあ護れなかつた……!」

「くっ、離せ!!!」

「藍染……俺がテメーを倒すのは、〃護る〃為の過程なんだよ……!!」
「離せ!!! 天宮城日向アアアアア!!!」

———
〃ふつみたまのつるぎ 薙霊剣〃。

直後、尸魂界に、一筋の光が降り注いだ。

今宵、月が見えずとも

いつも其処には

太陽と

月が在った

― 灼けていく。

― 溶けていく。

― 肉が。

― 骨が。

― 魂が。

― 私はこんな所で敗北するのか？

― いや、違う。

― 私が。

― “死神”程度に負ける筈がない。

― 私は、“超越者”なのだから。

尸魂界に降り注ぐ一筋の光。それは、一点をただひたすらに焼き尽くしていた。それは肉体であり、大地であり、魂であった。

本来、身体を創りえる霊子と、より生きる為に生み出される霊力は、命を焼き尽くそうと滾っていたのであった。

余りにも近すぎる太陽は、周囲の命を忽ちに焼き尽くしていった。

このまま永遠に続くかと思われた輝きは、突如光の中で生まれ始めた禍々しい霊圧によって弾き飛ばされた。

」……」
その存在は、一瞬にしてその場から離れていき、宙に出現した。宙に浮いているのは、異形の存在。虚に近い姿形をしているものの、虚特有の孔はなんと三つも縦に並び存在していた。その内の一番上の孔には、小さな宝石のような玉が何の支えも無しに孔の中心で浮かび上がっていた。

さらに異形はそれだけに収まらない。右腕は刀と完全に一体化しており、見様によつては螭螂のような鎌にも見えるように一体化していた。さらに左腕は、手の指が異常に伸び、所謂悪魔のような形に変わっていた。

異形には翼も六つ生えており、それぞれに目のない顔のようなものが存在しており、顔の中央には鋭利な牙が規則的に並んでいた。飛翼の部分には、黒目と白目が反転しているかのような目も存在していた。

足も普通の人間よりも肥大化した太ももに加え、足先に向かうにつれて細くなり、漆黒に染まると言う形であった。

最後に、その顔であった。額には何やら縦に裂け目のような物がある。眼は白一色となり、逆に顔は全て黒に染まっていた。顔自体も、既に顔と言えるのか怪しいものであり、仮面を被ったか、若しくは皮膚を剥ぎ取って頭蓋骨が剥き出しになったかのような錯覚を覚える容姿であった。恐らく後者に近いであろう顔の横には、縦に裂けた元の人間の顔の皮が寄せられていた。後頭部からは、女性並みに長い髪の毛が風によつて靡いていた。

その異形の存在——藍染惣右介は、自分の視線の先で倒れている青年に睨みを効かせる。先程の光により、上衣は焼き焦げて消え去っており、裸体となった上半身は本来の皮膚の色よりも茶色く変色していた。ピクリとも動かない青年を前に、藍染はゆっくりと一歩ずつ近づいてゆく。

「……感謝しよう、天宮城日向。君の御蔭で……さらなる憎しみの上で私はさらなる高みへと昇ることができた」

次の瞬間、藍染の姿は倒れている青年——天宮城日向の目の前に

在った。そして右腕と一体かした斬魄刀を、動かない日向に向ける。だが藍染は刀を振るうことなく、指が異常に伸びた左手で首ごと掴みあげた。掴みあげられても尚、日向は一切の抵抗を見せない。

「だからこそ君には、最上の敬意……—— “死” を以て、君を見届けることにしよう」

そう言った藍染は、左手で掴みあげている日向を徐に前方に投げる。無抵抗の日向は、為す術もなく一直線に飛んでいく。

後方には岩壁のようなものしかなく、無抵抗のまま激突すれば、間違いなく日向は死に至るだろう。

既に “死” へと導く賽を投げられた日向であったが、藍染はそんな日向に向かって仕掛ける。六つの翼の内の一つが蠢き、付属している顔のようなものの口が開き、口腔に何やら光弾のようなものを出現させた。

「——終わりだ……天宮城日向！」

咆哮すると同時に、その光弾は日向に向かって一直線に飛来していく。見た目こそ小さな光弾であるが、その実態が霊圧が極限にまで凝縮された破壊の球体。一度爆発すれば、爆心地を中心に数百メートル程消し飛ばす威力を持っている。

既に瀕死である日向にとっては、喰らえば間違いなく死に至る攻撃。

“死” は、確実に日向に近付いていた。

暗い、暗い世界。

そこには、まったくもって “生” を感じられない。燦々と輝く太陽も無ければ、儂くも淡い光を放ってくれる月も無い。

そんな “無” の世界を、日向は体感していた。

(体が……重い……)

何とか体を動かそうにも、一向に筋肉はそれに答えてくれない。寧ろ、その “生” を終わらせようと、きつく日向の体を縛っていく。そ

れによって日向は、息苦しいものを感じた。

(誰か……いねえのか……?)

動かない体を必死に動かそうとして、日向は手を伸ばそうとする。何も無い空間に伸ばした手。誰にも届く筈はない。

そう、考えていた。

『日向……』

だが、優しい声色と共に何者かが日向の手を掴んだ。それによって、日向の体は急激に熱を帯びていく。『生』が血管を通して、身体中に駆け巡っていく。冷たくなっていった身体には、赤い血の流動は溶岩の様に熱く感じられた。

その感覚こそ、『生』であることを日向は実感していた。

優しい感触が、柔らかい香りが、心地よい声が、傷ついた日向にそつと身を寄せてくる。

「……夜叉……姫……」

次第に生を取り戻してきた身体は、日向の鉄格子のように硬く閉ざされていた瞼を開けるに至った。光を取り戻した瞳の中には、己の魂とも言える斬魄刀の姿が在った。

麗しい姿形をする夜叉姫は、日向の掴んだ手を己の頬にそつと持つてくる。

——その顔には、一筋の涙が流れていた。

『もう……よい。もうよいのじゃ。少し休もう』

「夜叉姫……俺……何か護れたか?」

涙を流す夜叉姫を見つめていた日向は、何故か解らないままに涙を流していた。そのまま、自分が責務を果たせたのか問う。

それに対し、夜叉姫は紅く泣き腫らした顔で笑みを浮かべて、視線を空に向ける。日向の精神世界における空は、一つの月だけが光源の儂い世界。

淡い光が、聖母のように全てを包み込む穏やかな世界。とても虚と融合しているとは思えない世界であった。

『ああ……護れた。いや、護れる。見てみよ』

夜叉姫の紅い瞳には、空に端然と浮かぶ三日月に向けられていた。

月光に照らされる夜叉姫の姿は、愛おしく、儂く、美しく、悲しかった。

夜叉姫は、空いている片方の手を三日月に向けて伸ばす。

『例え太陽が沈んでも、月がこの世を照らしてくれる』

「……………そうか」

その言葉を聞いた日向は、その意図を理解した。その瞬間に日向は、凄まじい眠気に襲われる。

眠気と戦う日向を見て、夜叉姫は優しい微笑みを浮かべた。その姿はまるで、子を見る母親のような表情であった。

『……………疲れたろう。今は眠れ』

「……………ああ……………かあ……………さん……………」

『誰が“母さん”じゃ……………ふっ。お休み、日向』

再び深い眠りに落ちた日向を、夜叉姫は優しく撫でた。

静寂の時の中で、安らかな寝息だけが夜叉姫の鼓膜を揺らしていた。

——爆発。

大地を抉り、岩壁を崩し、草花を焼き尽くす爆発は、一瞬にして巨大になる。その爆風は凄まじく、辺りにも広がっていき木々をなぎ倒して行く。

空に浮かぶ雲は、爆風に耐え切れずにその形を止めることが出来なかった。

(終わりだ……………これで……………!?)

目の前の爆発を見て勝利を確信していた藍染であったが、ある異変に気付く。爆発の中心に、見慣れない影が見える。

それは先程投げ飛ばした日向などではない。漆黒の死覇装を纏い、右手には腕と一体化している黒い刀が存在した。そして鏢は、特徴的な『卍』の形をしており、腕には黒い鎖が巻きついていていた。

最後に、左腕には先程投げ飛ばした筈の日向が抱えられていた。

「……済まねえ、日向」

黒い刀を携える彼は、腕に抱える日向にそう呟いた。意識の無い彼には、耳に届く筈もない言葉であるが、言わずにはいられなかったのである。

ここまでボロボロになりながらも、藍染を止める為に決死の思いで戦っていた英雄に向かって、彼は再び口を開いた。

「後は、俺に任せてくれ」

——黒崎一護・16歳

——髪の色・オレンジ

——瞳の色・ブラウン

——職業・高校生 兼 死神代行

一護は先程の爆発から日向を一瞬の内に護っていた。空座町に着いたのは、ものの数分前。断界内である修行を終えた一護は、協力してくれた父・一心を安全な場所に置いた後に、すぐさまこの場所に向かったのである。

するとその先で、今まさに日向に止めを刺そうとする異形の姿の者を見つけたため、すぐさま日向を助けるために動いた。

一護は瞬歩で瀕死の日向を安置できる場所に置き、数秒後には藍染の前に戻ってきた。その驚異的な瞬歩の速さに驚いているのか、藍染は茫然として一護の姿を見ていた。

「……君は本当に黒崎一護か？」

「……どういう意味だ？」

「……いや、いい。そういう事だ」

——君は、最後の機会を取り零した。

今の一護の姿を見て、藍染はそう言い放った。異形の容姿をする藍染の表情は上手く読み取る事は出来ないが、あの漆黒の顔面には傲慢と憎悪が血脈のように流動しているのかのように錯覚する。

一護は静かに藍染に視線を向ける。

そんな一護に、藍染は言葉を続けていく。

「今の今迄何をしていたのかは解らないが、既に私は死神や虚などという低劣な存在から訣別した存在に昇華した。既に、君がどうすることの出来ない次元に私は存在しているのだ！」

咆哮する藍染は、宙に留まる一護に向かって肉迫し、腕と一体化した斬魄刀を振るう。剣閃の先にある万象を斬り裂こうとする一撃であったが、その一撃は一護の斬魄刀の一撃によって受け止められる。

直後、周囲に轟音と共に旋風が巻き起こる。大地には砂塵が巻き起こり、砂利を吹き飛ばしていく。

「なっ……!?!」

己の一撃が受け止められたことに、藍染は絶句する。自分は、先程死を覚悟するほどの一撃を受けても尚、崩玉の力による進化した。

それは、自分の霊圧を吸収し同じ次元に立った日向ですら超越する力の筈だった。それなのにも拘わらず、突然現れた死神代行の刀に一撃を止められたのである。これが日向であればまだ理解することが出来たかもしれない。

だが目の前に居るのは、只の死神代行。正式な死神でもない、死神もどき。人間なのである。

そのような存在に、超越者である己の一撃を受け止められたことに藍染は言葉を失ったのである。

「……藍染。もう終わりにしようぜ」

「なっ……!?!」

一護の言葉に、藍染は思わず距離を取る。その己の行動に、藍染は憤慨する。距離を取るといふ事は、相手を恐れているという事。

それは超越者である自分にとって、最大の屈辱であった。

怒りを滾らせる藍染に、一護は何かを悟ったような瞳を向けながら斬魄刀——天鎖斬月を構える。すると、一護の右腕に巻きついていく鎖から、何やら黒い霊圧の様な物が溢れだした。

「見せてやるよ」

霊圧であることは間違いない。だが、どの程度のものであるのか藍

染には感じ取ることが出来なかった。

己の目の前で信じることの出来ない事象が次々と起こることに、藍染は困惑する。

同時に、残滓程度に溢れていた黒い霊圧が一気に膨れ上がり、一護を包み込んでいく。

「最後の月牙天衝だ」

漆黒の霊圧は、数秒一護を包みあげる。そして何か完了すると同時に、黒い霊圧の衣は解けていく。

「——何だ、その姿は——……」

言い表すのであれば、『黒』。

オレンジ色であった髪の毛は、漆黒の長髪となっていた。口から上半身には、青灰色の包帯が巻かれている。同時に右腕には、夜の黒さを体現するかのような漆黒の霊圧が溢れていた。

一護の周囲に渦巻く黒い霊圧は、永遠に其処に留まるかのように濃かった。揺らぐ霊圧は炎のようであったが、その黒さ故に深淵の如き冷たさが漂っていた。

「『最後の月牙天衝』ってのは、俺自身が月牙になる事だ」

——馬鹿な。

「この技を使えば、俺は死神としての全てを失う」

——まだ。

「最後」ってのは、そういう意味だ」

——何も感じない。

藍染は必死に考える。一護の霊圧を、まったく感じられない理由を。そして、最も近い事象が在る事に気が付いた。

空座町のレプリカで一心達と相対した際に、崩玉による進化の一段階目を果たした際に、一心達は自分の霊圧を感じることが出来なくなっていた。

その事象は、藍染が崩玉との融合によつて死神とは別次元へと進化を遂げ、二次元の存在が三次元の存在に干渉できない様に、藍染自身が意図的にレベルを下げて干渉させない限り、死神や人間に霊圧を感じさせることが出来なくなっていた。

それはつまり——。

——まさか。

——まさか、奴は。

——奴は私よりも、更に上の次元に立っているというのか。

「——馬鹿な!!そんな筈があるか!!人間如きがこの私を超えるなど!!そんな事が——」

胸中の黒いものを、藍染はありつたけの怒りを込めて喉から吐き出

す。

信じる事が出来ない。出来る筈もない。つい数か月前に死神になっただけの人間が、瀋靈廷に於いて誰一人として寄せ付ける事の無かった力を持つていた自分を超えることを。それだけに留まらず、藍染は夢にまで見た「崩玉」を手に入れ、それを取り込み融合することにより死神や虚すらも超えた存在となったのだ。

それを、何十億と存在する内の小さな生物の一匹に超えられる事が、藍染にとつて赦せる事象でない事は、今の藍染の挙動から解りえる事であつた。

しかしそんな藍染に気を留めずに、一護はいつの間にか刀が消え失せていた右手を構える。すると手の中に、刃のような霊圧が出現する。

今にも消えそうな、細く、淡く、漆黒に染まっている刃。

その刃を、一護は腕ごと藍染に向かって振り下ろす。

「―――
「無月」^{むげつ}」

晴天を、黒が染め上げた。

夜かと思間違う、黒い空。それらは全て、一人の死神代行の霊圧によるものであつた。そんな黒の蹂躪も、一瞬の儂い景色であつた。

技の終了と共に、霊圧も宙に消えて行き、空には再び青が広がつていた。そこに白いコントラストが浮かび上がっており、いつもと何も

変わらないかのように、空は平然とした様相を見せる。

だが大地に目を向けると、ついさっきまで存在していなかった大穴がポツクリと穿たれていたのである。その際に巻き上がった砂塵は、未だに晴れずに曖昧な大地を映し出していた。

そんな地面に、一護は降り立った。同時に、一護の口元に巻かれていた青灰色の包帯も砕け散る。一歩歩く度に、一護が身体に纏っている包帯はバラバラと破片になっていく。

ふと横を見ると、大穴の中心に人影が存在していた。頭部から背中にかけて、大きな裂傷が出来ている藍染の姿が在った。力なく大地に項垂れている一人の死神の傷は、到底生を維持できるようなものではなかった。

だが、次の瞬間にその傷は縫い付けられるようにして修復していた。

「……まだ再生するのか……!」

崩玉による、主に対する防衛本能。それは通常の生きものであれば到底死に至る傷ですら修復するものであった。

その光景に驚きを見せながらも、藍染の動きを警戒している一護は何か行動を起こされる前に、と瞬歩で藍染の元まで移動する。藍染の体は、先程の“無月”により襪襦雑巾のようになっており、進化の果てに得た翼も無くなっていった。

満身創痕と言っても過言ではない藍染の姿を見ていた一護であったが、次の瞬間、一護の黒い長髪は霧散して消えていき、元のオレンジ色の髪に戻った。

(やべえっ……死神の力が……消えていく……っ)

最後の月牙天衝——“無月”を放ったことによる一護の死神の力の消失は始まっていた。

既に始まった消失により、一護は身体から力が抜ける様な感覚を覚え、その場に崩れ落ちる。逆に藍染は、満身創痕の体でありながらも立ちあがり、崩れ落ちる一護に歩み寄っていく。

「……君の敗けだ……黒崎一護。見ろ」

藍染は、刀身の折れている斬魄刀を一護に向ける。だが、その刀身

は現在進行形でボロボロと崩れ落ちていつている。

「斬魄刀が消えていく……君なら、この意味が解るだろう。崩玉が、私に斬魄刀など必要無いと判断したのだ!! 斬魄刀とその能力と一体となった君と同じ! いや、今やその力を失った君を遥かに凌ぐ高みへと昇り詰める!! 終わりだ!! 黒崎一護!!」

声高々に語る藍染。それに対し一護は、力を失っていき何も出来ない自分に歯噛みする。今の自分に、藍染に抵抗出来る程の力は残っていない。

そして今ここに、藍染と戦える者は残っていない。

客観的に見れば、一護の詰みに見える様な光景。現に両者は、そうであると考えていた。

しかしその考えは、突如藍染の胸から赤い光が飛び出す事で崩れ落ちる。次々と藍染の胸に撃ち込まれていく紅い光の玉。それらは、崩玉とは反するような色を持ちながら、藍染の体を穿っていく。

謎の現象に、藍染は困惑の色を見せる。

「何だこれは……!! 鬼道か……!? こんなものいつ……」

「……ようやく発動したみたいツスね」

「——浦原喜助……!! お前の仕業か……!」

困惑する二人の前に、新たに一人加わる。

その者の名を呼んだ藍染は、鋭い視線を浦原に向ける。それに対し浦原は、下駄をカランカランと濁いた音を鳴らしながら近づいてくる。トレードマークである帽子は無くなっており、空座町のレプリカで藍染と戦った際に出来た傷が痛々しく残っているのが見えた。

だが、そんなことは気にもせず、どこか悟ったような目を浮かべながら藍染を見つめる。

「はい。その鬼道は、アナタが完全な変貌を遂げる前……最も油断していた時に、別の鬼道に乗せて体の中に撃ち込みました」

「……あの時か……!」

藍染は心当たりのあるような口調で返答する。そして浦原は、言葉を続けていく。

「……それは封印ツス。アナタが崩玉と融合した場合、アナタを殺す事はほぼ不可能になるだろうと考え、アナタを封印する為に開発した新しい鬼道ツス」

「……そうか。それは残念だったな……」

浦原の説明に、藍染は諦めるどころか愉悦の表情を浮かべ、己の斬魄刀に目を向ける。そこには崩れ落ちている斬魄刀が在った。

「見ろ！私は今まさに更なる進化を遂げようとしている！この程度の鬼道で、私を封じる事などできるものか!!」

崩玉による進化。それは藍染に、他を超越した力を与えていった。今度もそれを、藍染は信じて疑わなかった。

崩玉が、自分に応える事を。

——次の瞬間、藍染が纏っていた白い膜が剥がれ落ちた。

「な……何だこれは……力が、私の手にした力が……消えていく……!!」

右手にあった斬魄刀は完全に砕け散り、藍染が進化の第一段階に身体を包み込んだ白い膜はバラバラと紙のように舞い散っていった。

その光景に、藍染は信じられないような顔を浮かべる。白い膜が消え失せた右手は、元の肌色の皮膚が垣間見えた。そんな右手で、己の顔の半分を覆う。

——まるで、現実で起こっている事象から目を背ける様に。

「……それが、崩玉の意志っス」

動揺を隠せない藍染に向かって、浦原は言い放った。そんな浦原に、藍染は目を見開きながら睨みつける。

「あの時撃ち込んだ封印が今ようやく発動したのは、アナタの力が弱まったからっス。崩玉はアナタを、主とは認めないと言ってるんスよ」

「……バカな……そんな訳があるか……そんな訳が……そんな訳があるか……ッ!!」

藍染は、己に言い聞かせるように否定の言葉を口にする。

だが現実は無情であり、次の瞬間には藍染の体に撃ち込まれていた浦原の鬼道が進み、十字のような光に変貌する。それに伴い、藍染は身体を大きく丸める。それが、鬼道によるものなのか、藍染の精神的な疲労なのかは解らない。

只一つ明らかであったのは、一つの終焉が近付いている事であった。

「浦原喜助!!」

藍染は、拘束されつつある体に力を籠め、ありつたけの音量で叫ぶ。

「私はお前を蔑如する!!お前程の頭脳がありながら、何故動かない!!何故、あんなものに従っていられるのだ!!」

「あんなもの……? “霊王”の事っスか……?」

藍染の訴えに、浦原はすぐにその内容に気付く。そして、どこか納得したような顔を浮かべながら言葉を続ける。

「そうか、アナタは見たんスね。霊王の存在が無ければ尸魂界は分裂する。“霊王”は“楔”なんス。楔を失えば容易く崩れる。世界とはそういうモノなんスよ」

浦原が答えている間にも、藍染の体に撃ち込まれていた鬼道の封印は進んでいた。撃ち込まれた球の部分から、藍染の体を紅い光が、帯のように、尚且つ結晶のように包み込んでいく。

しかし、目の前の男はそれらを腕で碎きながら身を乗り出す。

「それは敗者の理論だ!!勝者とは常に、世界がどういうものなのかでは無く、どう在るべきなのかについて語らなくてはならない!!!私は――

何かを訴えようとしていた藍染であったが、それよりも早く封印が完了した。藍染の最後の言葉は、封印の際の音に掻き消されていき、それと同時に藍染の姿も“封印架”と言う三つの柱が重なったような物に呑み込まれていく。

幾度となく相対し、その度に苦渋を飲まされた相手が封印されていた。全てが終わる瞬間。

なのにも拘わらず、一護はその姿を直視することが出来なかった。

一護は只食いしばって、藍染が封印される光景から、目を反らしていたのであった。

凱旋

誇りを胸に

彼らは

何度でも立ち上がる

旗を掲げろ

彼らはきつと

戻ってくる

「補修作業完了！点検——ッ」

人の声が慌ただしく聞こえる町。だが、その町はほとんどが瓦礫へと変貌している。しかし、瓦礫の合間を縫っていく人並みは、どこか活気に満ち溢れていた。

「二〇九七番、異常ありません！」

「二〇九八、一〇九九、一一〇〇番、異常ありません！転界範囲内現世人員、全名保護完了しました！」

行きかう隊士達は、空座町のレプリカの東西南北に立っている柱の内の一本の最終点検を済もうとしていた。

藍染達と戦う為に、護廷十三隊の隊長格達が戦闘可能にするために造られたこの装置も、首謀者である藍染が浦原が開発した鬼道により封印され、実質的に戦いが終わり、お役御免になったという訳である。

隊士達の点検完了の声を聞き、指揮を執っていた一人の人物が人差し指を立てて口を開いた。

「ブン。転界結柱、起動するヨ!!」

「お……お待ち下さい、隊長！」

転界結柱を起動しようとした、十二番隊隊長である涅マユリであったが、十二番隊の隊士の声によって、指示を妨げられた。

自分の指示が遮られた事により、マユリはしかめっ面になる。だが、遮った隊士も必死の形相でマユリに近付いてくるため、よほどの問題があると捉えられる。

「まだ街中に隊員がおります!! 穿界門無しでの現世転移は危険です!!」

「……」

隊士の言う事は、転移による危険性についてである。本来死神達は、穿界門を通って現世と尸魂界を行き来するのであるが、その際には地獄蝶という生き物を引き連れ、断界を通るのに安全を確保してから向かうというのが普通である。

それは断界という現世とも尸魂界とも断絶された空間に於いても、確実に移動の安全を確保する為である。

もし断界内に置いてでも行かれたのならば、断絶された空間で彷徨い、永遠に戻ってくる事が出来なくなるだろう。

こういったことを考慮すれば、必然的に隊士の言っている事の方が論理的に適っていると見えよう。

「仕方無い。余裕を持って十数えてやるヨ。全く……自分の甘さに反吐が出るヨ」

「急げ——!! 死ぬぞ——!!!」

それが嘘ではないという事を理解している隊士は、己の人生の中で最も声を出して、他の隊士に退避するように伝えた。

「うっ……」

「っ！東仙……」

狛村は、目の前で瞼を開いた男に声を掛ける。その男は、喉が大きく裂けており、苦しそうに呼吸をしている。

そんな息も絶え絶えな男——東仙は、目の前で自分を見下ろす二人の人物を視界に入れる。

「……狛村……檜佐木……」

「喋るな。虚の力のお蔭で呼吸は出来ているが喉が裂けておるのだ。今は、喋らなくていい」

狛村にそう言われて、東仙は自分の喉に左手を置いてみる。確かに喉は裂けている。そしてそれをやったのが、自分の元部下である檜佐木であることは知っていた。

だが、だからといって檜佐木を恨むなどと言う気は全く起こらなかった。寧ろ、安堵のような感覚さえ覚えていた。

「東仙……戦いは終わった。もう儂たちが刃を交える必要は無くなったのだ。そして、そんな今だからこそ言える……これで儂たちは、漸く心から解り合えると」

その言葉に、東仙は目を見開く。生来より盲目であった東仙も、今は虚化の影響により僅かながら視力を手に入れている状態である。

姿形こそ人外であるが、「友」にそう言われたことに東仙は驚きを隠せなかった。自分は瀟靈廷を裏切り、友を裏切り、そして部下までも裏切って此処に居る。そんな自分が、許されるとは到底思っていなかった。

そして狛村は、そんな東仙に胸中の想いを吐露していく。

「憎むなどは言わん。恨むなども言わん。ただ、己を捨てた復讐などするな。貴公が失った友に対してそうであったように、貴公を失えば儂の心には穴があくのだ」

東仙は、静かに狛村の語りを聞いていた。すると知らぬ間に、東仙の目尻からは一筋の涙が零れ落ちていた。

こんな自分でも、この男はまだ必要としてくれていたのか、と。

「……ありがとう……狛村」

唯一無二の親友に感謝の言葉を言い、次に部下であった檜佐木に視線を向ける。

「……檜佐木。顔をよく見せてくれ……虚化の影響で今はまだ眼が見えるのだ……今のうちにお前の顔を見ておきたい……」

その言葉を聞いた檜佐木は、スツと身を乗り出して、自分に教え説いてくれた元上官に顔を見せる様にする。

東仙の左手は、自然と檜佐木へと伸びていたため、檜佐木はそれに

答える様に両手で力強く握った。

「東仙隊長……俺……俺は待ってます!!」

「……檜佐木……?」

「貴方は罪を犯した……それは許されない事です……だけど、償う事は出来る!俺は、隊長が償いを終えるその時を待っています!」

檜佐木も、先程の粕村のように胸中の想いを吐露した。どれだけ罪を犯したと言っても、東仙は自分の隊長であった男であり、自分を導いた男であり、自分に正義を教えてくれた男であったのだ。

道は少し違えたが、今からでも間に合う。それが檜佐木の想いであつた。

檜佐木の想いを聞いた東仙は、空いている右手で顔を覆う。

「隊長……?」

「……済まない……檜佐木……視界がぼやけてよく見えないんだ……もう眼が見えなくなってきたらしい」

そう言っている東仙の右手の間からは、大粒の涙が零れ落ちた。それだけで、東仙の言っている事が嘘であることに二人は気付いた。

東仙は、顔を右手で覆ったまま、震えた声で語り始めた。

「……ああ……私も、その時を待とう……」

ある男は、静かに尸魂界の山中を歩いていた。転送されようとしている空座町から、幾分か離れているその林の茂みの中は、普段なら居るであろう動物も、少し前のある者達の激闘により怖れを為して逃げていたため、動物で限定するのであれば彼しかいないだろう。

男は、自分の体をぺたぺたと触ってみる。井上織姫という女子に、肩から腰まで掛けて斬られるという致命傷を負った傷を癒された彼であつたが、その傷は既に見る影も無くなっていた。

そんな彼も、傷を癒された後、眺めていた激闘が終末を迎えたと同じ時に、すぐにその場から逃げる様にここまで移動していった。

静かに山林を進む男。だが、次の瞬間自分の背後に何者かが現れた

ことに気付いた。

「……ギン……」

「……乱菊やない……どないしたん？ここにあって」

十番隊副隊長・松本乱菊。空座町のレプリカに於いて、混獣、アヨン、の手によつて脇腹を抉り取られた彼女であったが、吉良の懸命な治療により、何とか形は戻っていた。

だが、幾分かその表情は疲労に満ちていた。

「……どうもこうもないわよ。反逆者のアンタを、みすみす見逃す訳ないじゃない……」

「……ホントに、それだけ？」

「……ねえ、ギン。アンタ、どこに行くつもりなの？」

市丸に問われた乱菊は、素直に思っている事を口に出した。反逆者である彼は、掴まれば中央四十六室の裁判にかけられるだろう。反逆という大罪を犯したのだから、少なからず重い罰を与えられる事は間違いない。

だが、ここで逃げるのであれば、また罪状が増えていく筈なのである。故に乱菊は、ここで市丸を引き戻しに来たのである。

その想いが込められたのが、今の問い。

「……ボクは乱菊の取られたモン、取り返せなかった。ボクは今まで、ソレ取り返す為仰山悪い事してきたわ。だから……これからその分、頑張ってみるわ」

「頑張るって……何をよ!？」

「さあ？じゃあ、ボクはこれでお暇するわ」

「っ！待って！」

そそくさと立ち去ろうとする市丸に、乱菊は走っていき肩を掴む。それに伴い、市丸はどこか困ったような顔をして振り返る。

だが、その瞬間に乱菊の顔は市丸の眼前にあった。

市丸が驚く間もなく、その距離は一気に近づく。

「……!」

柔らかな感触が、市丸に唇に触れる。それと同時に、芳醇な香りも市丸の鼻腔に触れる。思わぬ乱菊の行動に、市丸は為す術なく茫然とする。

市丸が動きを止めている間にも、乱菊は両腕を市丸の腰に回す。それによって乱菊の豊かな胸が市丸の体に押し付けられる。

「んっ……」

乱菊は、出来る限り自分の体を市丸に近付けようとする。それは今まで離れていた分を、今ここで取り戻すように。

最初こそオドオドしていた市丸であったが、途中から唇に伝わる心地よい感触に任せる。そして一度は斬り落とされたが元に戻った右腕を、乱菊の頭の後ろに回す。左腕は優しく、目の前に居る女性の全てを包み込むように腰に回した。

同時に、乱菊も応える様にギュツと腕に力を込める。

——初めて唇から伝えた想いは、熟れた林檎の何倍も紅く、甘かった。

この刹那の感触が、永遠に続けばいい。乱菊はそう思っていた。

だが、それも長くは続かず、市丸から乱菊から身体を離していった。その際の市丸の瞳には、物欲しそうな表情を浮かべる自分の顔が映っていた。

「……アカンで乱菊。こないなとこ見られたら、乱菊が疑われてまう」

「ギン……お願い……あたし待つから……だから……!」

「……アカンわ、乱菊」

そう言い放ち、市丸はバツと背を向けた。

「御免な、乱菊……」——「またな」

「っ……ギン!!」

咄嗟に手を伸ばした乱菊であったが、届くよりも前に市丸は瞬歩で乱菊の前から消えていった。伸ばした手は、先程の熱を求めるように虚空を掴んだ。

暫し、乱菊の周りには静寂だけが存在していた。そして乱菊は、先程の熱が残った手が冷めないように、自分の胸にそつと戻した。次の瞬間、木枯らしが乱菊の涙の痕を吹き付け、寂しさの痕をかき消そうとした。

しかし、一度その温かみを覚えてしまった痕は、寧ろ寂しさを際立たせるだけであった。

「……ギン……」

乱菊は、想い人の名を口にし、再び涙を流すのであった。

同刻・虚夜宮。

「……クリステイナ様」

「……ペツシエか……ドンドチャツカもどうした？」

虚夜宮の建物で、崩れた壁面から足を投げ出していたクリステイナであったが、背後から聞いたことのある声に振り返った。

そこに居たのは、ネルの従属官であったペツシエとドンドチャツカであった。ドンドチャツカの腕の中には、すやすやと寝息を立てているネルの姿が在った。顔こそ、以前の仮面と違う物を被っているせいで一瞬見間違えたのかと思ったが、声と霊圧で二人だとはすぐに分かった。

そんな二人に、クリステイナは静かな声で問いかけた。

「クリステイナ様……貴女を縛る鎖はもうありません。藍染という存在が無くなった今、虚夜宮に留まる理由は御座いません。共に行きましょう」

そう言ってペツシエはゆっくりと跪き、クリステイナに深く頭を下げた。深く頭垂れる破面を前にし、クリステイナはゆっくりと立ち上がる。

そして靴をコツコツと鳴らしながら、一歩ずつ近づいていく。眼前まで迫った後、暫し建物の中は凄然とした様子になる。幾度となく繰り広げられた建物たちは、ほとんどがその役目を果たしておらず、天蓋も消え去った今では虚園本来の黒い空が広がっていた。

只、風が吹き荒ぶ音だけが響く空間で、クリステイナはペツシエの前に膝を着いた。予想外の行動に、二人は驚く。

「顔を上げてくれ、ペツシエ。確かに藍染が居なくなつた此処に留まる理由は無くなつた……なら、私達に番号の差なんてないだろう？」

「…クリステイナ様……」

「……「クリス」と呼んでくれ、ペツシエ」

「っ………はい！」

ペツシエは目の前の光景に瞠目した。ペツシエだけではない。後ろにいたドンドチャツカもであつた。

——クリステイナが、微笑んだ。

久しく見なかつた彼女の笑みに、二人は驚愕と共に歓喜を覚えた。漸く、失つていたものを取り戻したような感覚に陥る。

次の瞬間、クリステイナは徐に立ち上がり、二人に背を向けた。

「……二人共、聞いてくれ。私はお前達とは行けない」

「なっ……!?何故ですか!?!」

しかし、突然言い放たれた言葉に、二人は先程とは違う驚愕を覚えた。既に彼女の縛っていたものは無くなつていた筈である。だからこそ彼女は微笑み、ペツシエにああいったのである。

まだクリステイナを縛る何かがあるのかと二人は考えるが、それよりも早くクリステイナが語り始めた。

「私はまだ怖い。自分の中の黒いものに吞まれて、お前達を傷付けてしまふんじゃないかと思つて……だから……」

「っ………ですが……！」

「……だから……待ってこないか？」

その言葉に、二人の動きは止まる。

余りにも静かな空間は、この場だけが時を止められているのではないかと錯覚してしまう程のものであった。

微動だにしない二人に、クリステイナは髪の毛を掻き分けながらネルの元まで歩み寄っていく。

「私がこの黒いものを制御できるまで……ネルを守ってあげてくれ。それが、『家族』である私からの二人への頼みだ……お願いしてもいいか？」

「……………はい！」

クリステイナの言葉に、二人は畏まった様子で頭を下げた。その様子に、クリステイナは思わず苦笑いを浮かべる。『家族』と言った筈なのに、ここまで畏まれると気が狂いそうになると、クリステイナは思った。

だが、苦笑いを浮かべたということは、彼女にとっての大きな進歩であつたことには間違いない。失っていた表情を、次第に取り戻していつているのである。

苦笑いの後には、再び穏やかな笑みを浮かべ、すやすやと眠っているネルの頬にそつと手を添える。

「ネリエル……」

安らかに眠るネルの頬に、次は軽くキスをする。その柔らかいキスは、張りのある子供の頬に優しく触れ、離す瞬間には少しだけ頬と唇が吸い寄せられるように密着していた。

それを終えたクリステイナは満足げな顔をして、虚園の夜空に視線を戻した。視線の先には永遠に欠けて浮いている三日月が存在し、淡く砂の大地を照らしていた。

「……………じゃあ、少し行ってくる」

それだけ言い遣し、クリステイナは響転でどこかへと消え去っていった。部屋に、僅かだけ残る彼女の甘い香りが、此処にクリステイナが居た唯一の証拠であった。

消えていったクリステイナを見送った二人は、只じつとその場に立ち尽くしていた。

「……………クリス……………？」

若草色の髪をした幼女の破面は、寝言のようにこの場から立ち去っていった彼女の名を呼ぶのであった。

「……………日向」

一護は、自分が空座町に来るまで藍染と戦っていてくれた男の名を呼ぶ。

一護は、空座町に来る前に断界で修行をしていた。それは、〃最後の月牙天衝〃を習得する為であり、外よりも二千倍時間の流れが速い断界内に於いて、一護は約三か月修行していたのである。父・一心の助けもあり、何とか修行を終え空座町に来て、藍染に最後の月牙天衝である〃無月〃を放ち、極限に弱らせて封印するまでに至ったものの、それまでの日向の負担は凄まじいものであった。

只でさえ酷使していた体で卅解を二つ同時に発動して、死神と次元と別った藍染と戦うというのは、天宮城日向という魂魄を限界まで疲弊させるに至った。

あの後、すぐに井上の〃双天帰盾〃により表面上の傷は治ったものの、限界まで使用した霊力は簡単には戻らずに、後は四番隊に任せる事になった。

自分が遅れたために、彼をあそこまで死に追いやったことに一護は責任感を感じていた。

「黒崎サン」

「……………浦原さん……………日向は……………」

突如一護の下にやってきた浦原に、一護はそう問いかけた。安否を

確認する一護に、浦原は言い辛そうな顔をしながら歩み寄ってきた。「……日向サンは、限界まで霊体を酷使したことで、今すぐにでも瓦解しそうなほど不安定になっています。今、霊力を回復させたところで、霊体が耐えきれるか解らない。今は、只安静にするしか方法は無いみたいっスね」

「そう……なのか……」

浦原の言っていることを例えれば、全体に罅に入ったガラスのコップに、水を注いだとしても水の圧に耐え切れずに砕け散ってしまう、ということである。現在不安定な霊体に、無理やり霊力を注いでも、寧ろ悪化させてしまう可能性が高い。というよりも、死に至らしめる結果になってしまうのである。

つまりは、安静にして本人の自然治癒によって回復させる以外に方法は無いのである。

それを聞いた一護は、再び項垂れる。

「——何を俯いておる！たわけ！」

「っ!?……ルキア?っ、みんな!」

項垂れていた一護であったが、聞き慣れた声に反応して顔を上げる。そこには、共に虚園に乗り込んだ者達の姿が在った。

その中でもルキアは、怒り心頭の様子で一護にずんずんと近づいてくる。そして近付かれて分かったことがあり、ルキアの目の下が赤く腫れ上がっていたのである。

一護の眼前まで近づいてきたルキアは、一護の死覇装の襟の部分を掴みあげる。

「お前はやり遂げたのだ……誇れ!!」

「ルキア……」

「でなければ……アイツの面目が立たぬであろう……!」

「!!……そうだな……」

ルキアの叱責を聞き、一護はハツとした。そうだ、自分がここで項垂れていたら、日向に対して何か悪い事をしているのだ。日向は、死ぬ気で戦ってくれた。だからこそ、あそこまで藍染と戦い、結果的に一護が最後の月牙天衝を習得するまでの時間を作れたのだ。

日向の決死の想いを糧にした勝利に、影などつけてはいけない。そう考えた一護は、スツと立ち上がり空を見上げる。

——今日も空は、晴れている。

——次の瞬間であった。

「うあ……あああああああああ!!!」

一護は徐にその場に崩れ落ちる。顔からは多量の汗を流し、苦悶の表情を浮かべている。その尋常でない様子に、周りに居た者達は一斉に駆け寄った。

「一護!!」

「一護っ!!」

「黒崎!!」

周りに駆け寄る戦友たちの姿が目映ったが、次の瞬間には一護の意識は闇に落ちたのであった。

——月が沈み始めた。

終末

終わりの

末の

話だ

空座町での決戦より、十日後。

「——うわああ！」

「ギャオオオオオ！」

一人の少女を、一体の虚が追いかけていた。少女は東流魂街六十二地区「花枯」の住民であり、一から八十まで地区がある流魂街に於いては治安の悪い場所での生活を強いられていた。

そんな少女であったが、僅かながらではあるが霊力があつた。流魂街の住民は、その半分ほどが霊力を持たない者であるため、少女のように霊力を持つということは、少しだけ珍しいことであつた。

だが霊力を持っていると不便なこともある。他の霊力を持たない者と違い、腹が減るのである。その空腹感を満たすためには、何か食べものを食べる必要がある。その為、こうして山にやって来たのだったが、それが運の尽きであつた。

運悪く虚と遭遇してしまい、霊力のあつた少女は続けざまに虚に襲われてしまったのである。

「ひいー！」

「ガアアアア!!」

少女を食べようと口を大きく開く虚。その口の中には、人間サイズの口も見えており、一層不気味さを際立たせていた。

少女は泣きべそを掻きながら必死に逃げる。

「射殺せ——『神鎗』」

「えっ……っ？」

ふと振り返ると、先程まで少女を喰らおうとしていた虚が真つ二つになってるのが目に見えた。虚は身体を両断されたことにより絶命し、身体を霊子に分解させていく。

そして少女は、虚を両断したと思われる長い刃に目を向ける。刃を目で辿っていくと、その先に白い着物を着た銀髪の男が、刀を握って立っていたのである。

虚を倒したのを確認して、その男は刀を鞘に戻す。

「嬢ちゃん。大丈夫かいな？」

「ひいー」

『ひい』て……酷いなア。折角助けたのに、傷ついてまうわ……」

男が心底残念そうな顔を浮かべたことに、少女はハツとする。如何に男が怪しそうに見えても、たった今自分を救ってくれたことは紛れもない事実なのである。

そのことを念頭に置き、少女は頭を下げた。

「あ……ありがとうございます……ごいませす……っ」

「ははっ。怪我無い？」

少女がお礼を言ったことで、男の顔はパツと明るくなる。そして泣き顔である少女の頭に、ポンツと手を置く。

男の清々しい笑顔に、少女も先程の恐怖が次第に薄れていく。

「あの……死神さんですか……っ？」

「ん？どないして？」

「ええっ……着物着て、刀を持つてるのは死神だって聞いたことあるから……」

「ん……まあ確かにボクは死神やったなア。でも、今はちゃんとした死神あらへん」

「……っ？」

男の曖昧な答えに、少女はコテンと首を傾げた。その挙動に、男は苦笑いを浮かべる。死神の組織から離れた自分は一体何者なのか。死神紛いに、こうして流魂街の者達を救おうとしている自分は一体何様なのか。

そう思案を巡らせていると、一つだけ頭に良い考えが浮かんだ。

「そうやな。ボクを呼ぶなら、『白神様』言うてや」

「白神……様？」

「そや。流魂街の人守るに、虚と戦う白い人のこと言うんや」

数十年前、実在した流魂街の守り神。その守り神は、『死神』となることで流魂街から姿を消した。

存在が薄れてきた『義賊』を、自分の手で復活させてみるのも面白い。

男はそう考えたのである。

「さ、嬢ちゃん。ここに居たら、またさつきみたいんに襲われるかもしれへん。折角やから、家まで連れてったげるわ」

「うん……あ、でもあたし……食べもの探しにきてて……」

「あ、そうなん？ やったら、ボクも手伝うわ」

男はそう言っただけを見渡す。すると、何の縁か一つだけ柿の木が生えており、枝からは橙色の果実が幾つも実っていた。

「なんや、柿が仰山生つとるやん」

「え……でもあれ、渋柿……」

「大丈夫やて。ボク、美味しい干し柿の作り方知つとるから。それなら甘くて美味しいんや」

男は、趣味の一環でよく干し柿を作っていた。この時期になると、一日だけ部下に仕事を全て任せて、干し柿作りに没頭していた。

懐かしい思い出であるが、それをよもや故郷である『花枯』で行うとは、奇妙な縁もあるものだと考えた。

そして先程の少女に目を向けると、『甘い』という言葉に反応したのか、口の端から涎を垂らしていた。

「ははっ。そんなん早くには出来ないて。ほら、あれ取ったら、作り方教えたるから」

「うん！」

少女は満面の笑みで、男の言葉に対して頷いた。

虚夜宮。

藍染が居なくなった虚夜宮であったが、統制を失くしたかと思われたと思っただが、意外にもそうではなかった。

レイチエルの「呪縛生鎖」による戒めから解き放たれたハリベルが、実質的に虚夜宮を統治することになったのである。ハリベルは最初、その役目をスタークに譲ろうと考えたのであったが、スターク本人が『柄じゃない。ていうか、向いてない』と言ったことにより、あの程度のカリスマを持つハリベルが統治者になったのである。

そして彼女の従属官である三人は、いつも通りハリベルの側近として佇みながら口喧嘩をしている。「アヨン」を生み出す際に斬り落とした左腕であったが、それらは全て元通りになっている。

経緯はこうだ。「呪縛生鎖」による戒めに尋常でない苦しみを見せていた従属官の三人が、瀕死の状態で「崩姫」である井上を呼びに行こうとしたのである。

だが、三人が瀕死であったのでまだ動ける方であったスタークが、井上の元まで赴き、事情を話したところ治療してくれるに至ったのである。

最終的には、井上の双天帰盾による治療でもハリベルの苦しみは和らげなかった。だが、強靱な精神力によって十日間の戒めを耐え抜き、何とか五体満足で死の淵から舞い戻って来たのである。

「……」

そんなハリベルは、ある一室に向かって歩いていった。そして目指していた部屋の前まで辿り着く。

「ふう……」

ため息を吐いた後、深く息を吸い込んで扉を開く。視界に映ったのは、見慣れている景色。

しかし、この部屋の主であった者は既にこの世にはいない。

だが、人影が二つほど見えた。一人はベッドで眠りについており、一人は椅子に腰かけて紅茶を啜っている。

見覚えのある二人に向かって、ハリベルは歩を進めていく。すると、紅茶を啜っている者がハリベルに声を掛けてきた。

「おう。もう身体はいいのかい？」

「ああ。お蔭でな」

「そうかい……そりやよかった」

第十刃・コヨーテ・スターク。実質生き残っている十刃の中では最も序列が上である者。しかし、藍染が居なくなつた虚夜宮ですでにその番号も意味を成さない。

だが、強さを示すものとしては充分に役割を果たしていた。

それはともかく、ハリベルはベッドで眠りについていてる者の方へ目を向ける。若緑色の髪の少女らしき影は、静かに胸を上下させているだけであった。

「……リリネットなら、散々泣いて疲れて眠つちまつたみたいだ。こんなところ、ずっとそれだ」

「……そうか」

この部屋の主を最も慕っていたと思われる少女。その悲痛のままに泣き散らし、眠りについたという。

如何せん子供だ、とはハリベルは全く思わなかつた。少女の感じている心痛は、まさに今のハリベルを襲っていた。それは紅茶を飲んでいるスタークもであろう。

スタークは、紅茶をぐいっと飲み干し深いため息を吐いた。視線の先は、たつた今飲み干した紅茶が入っていたティーカップだ。ティーカップの底には、血色の悪い男の顔が映っていた。それが自分であることは理解しているが、どこか自分でないような気がしていた。

根も葉もない考えであつたので、スタークは次は背もたれに寄りかかる。両手は頭の後ろに回し、目一杯椅子を傾ける。

「……ダメだね。俺の淹れた紅茶は、不味くていけねーや」

「……お前が淹れたのか、スターク」

「ああ。奴さんの姿思い返してみたけど、どうやって淹れてたのか思
い出せねえよ」

「っ……」

スタークの言葉を聞いた瞬間、ハリベルは幻聴のようなものが耳に
響く。何者かが、ハリベルの背後で紅茶を淹れているような音。それ
と共に、香しい香りが空間に溢れたような錯覚にも陥る。

それは絶対にあり得る事のないものであると解っていても、心のど
こかで以前のように彼が皆の為に紅茶を淹れてくれているのではな
いかと望んでしまう。

悲痛な表情を浮かべるハリベルを見て、スタークは淡々と語り始め
る。

「……奴さんが死んで、俺は悲しかったぜ。でもよ、何で悲しいと思っ
たのかが解らなかった」

「……」

「だけどよ、最近思うようになったんだ。この悲しいって思う“心”
が、奴さんが遺してくれたものなんじゃねえかってよ」

「……」

ハツとしたようにハリベルは自分の胸を手で押さえる。そのまま
瞼を閉じ、ギユツと死覇装を握り締める。それに伴い死覇装には皺が
出来るが、ハリベルは構わずに握り続ける。

そしてきつく閉じられている瞼の端からは、一筋の涙が流れてい
た。

——彼が居なくなつた今では、“呪縛生鎖”の痛みですら愛おし
かった。

呪いと謳われたあの能力も、発動した者が死んだ今では、唯一残つ
ていたものだとも考えられた。

彼のお蔭で生き残つた自分に、今何が出来るのであろうか。ハリベ
ルはそう考えながら、止まらない涙をそのままにしておいた。この頬
を伝う熱が、彼が遺してくれた“心”であると感じていたから。

そんなハリベルを見ながら、スタークは天井を眺めたまま呟いた。

「生きなきゃな。奴さんの分もよ」

「——っ！」

「黒崎くん！」

一護は、ふと目を覚ました。そして行き着く暇も無く、井上の声がすぐ傍から聞こえてくる。重たい身体を動かし横を見ると、そこには井上の他に、石田や茶渡、そしてルキアが経っていた。

そこから周囲を見渡してみると、どうやら自分の部屋のベッドの上で寝ているという事に気付く。

一通り状況を確認してから、一護は身体を起こした。

「皆……ケガはもういいのによ？」

「何を言ってるんだ、黒崎。もうとつくに治ったさ」

「……とつくに？」

石田が、一護の言葉に呆れたような、そして安堵した様子で答える。もう一度全員に目を向けると、誰一人として怪我を負っているような様子の者は居なかった。

少々困惑気味の一護に、ルキアが身を乗り出して説明を始める。

「貴様はあれから十日も眠っていたのだ」

「……十日」

「……一護。浦原から聞いた話によると、消失の第一段階では激痛を伴い、意識を失い、断界の中で肉体に起きた時間経過が逆流する。髪が短くなっておるだろう。それは我々が切った訳ではないぞ」

ルキアの言葉に、一護は目を見開く。浦原から聞いたという事は、恐らく「最後の月牙天衝」について話を聞いたことになるだろう。

最後の月牙天衝を使えば、一護は死神の力を失う。それは一護自身理解していたことであるが、どこか物寂しい感覚に陥る。

「第一段階が終わった時点では、まだ貴様の死神の能力は残っておるそうだが、次の段階に進んだら、そこで貴様は死神の力を失う……それが明日か明後日か、それとも一年後かは浦原にも解らぬらしい」

「……そうか。ま、皆の怪我也治ったことだし、一件落着つてことだな」

「……お……驚かぬのか……?」

一護の呆けた言動に、ルキアは呆気にとられる。死神の力を失うということは、誰よりも他人を護ろうとする一護から、その力を奪う事に等しいのである。それを聞けば、少なからずこの少年は落ち込むと考えていた。

だが一護は、そんな心配を余所に背をグツと伸ばす。

すると、何かに気付いたのか一護はハツとする。

「そ、そうだ！日向はどうなったんだよ!? アイツ、怪我は……」

「う……うむ。それなのだが……」

ルキアが言い辛そうに顔を背ける。その挙動に、一護は最悪の結末を予想してしまう。だが、ルキアの様子から何となく曖昧になっているようにも感じる。

暫く唸っていたルキアが、漸く言う事が纏まったのか口を開いた。

「そのだな……私にはよく解らぬのだ」

「は? どういうことだよ……?」

「いや、治療されているというのは解っているが……今どうなっているのか、様子を伺えんのだ」

「何でだよ? アイツ、どこに居るんだ?」

一護のあつけらかなとした問いに、ルキアは神妙な表情を浮かべ、スツと人差し指を立てた。それだけで動きを止めるルキアに、一護は微動だにしなくなる。

てつきり、そこから説明が始まるのかと身構えていた一護であったが、一向に始まらない言葉の先を求めて、一護は我慢の限界に達した。

「おい、ルキア! どこだって!? その人差し指は何だよ!」

「……上だ」

「は? 上?」

「ああ……漣靈廷の遙か天上……『靈王宮』だ」

「靈王……宮……？」

「898つ……899つ……900ううう……!!」

「うわっはっはっは!!まだまだ回数はあるぞ!」

「どうでもいいから和尚……俺の上からどいてくんねえかな……!!?」

一人の白髪の青年が、恰幅の良い坊主頭の男を背に乗せて、道場のような場所で腕立て伏せをしている。白髪の青年は、身体中に汗を掻き、かなりつらそうな顔をしている。そして、上に背中に乗っている男に退けるように、笑みを引きつらせながら声を発する。

上衣が肌蹴ている青年の上半身は筋肉が張り、プルプルと震えていることから限界であることを暗に示していた。だが、背中に乗っている坊主頭で、たっぷりとひげを蓄えている男は豪快な笑い声を上げるだけで一向に降りようとしない。

「うわっはっはっは!そんなことでは、卍解二つ同時など遠い夢じゃぞ!!『卍解』だから、『万回』。二つだから『二万回』。うわっはっはっは!!ほれほれ!基礎を二万回ずつやらんと、修行をつけんぞ?」
(このハゲ親父しばきて……!)

しょうもない親父ギャグをかます『和尚』と呼ばれている男は、豪快な笑い声を上げたまま青年の上で胡坐をかいている。

仕方なしとばかりに、青年は筋トレを続ける。

しかし、二万回には程遠い回数の中で限界を迎えようとしていることは、既にこの時点で把握していた。という訳で、既に青年はやけく

そで筋トレをしているようなものであった。

「ちくしよおおおおがあああ!!」

「うわっはっは!!後で天示郎の湯に浸かればよいじやろう!」

「それ解つてやらせてんのかこの野郎おおおお!!」

和尚という男の言葉に、青年はありつたけの罵声を浴びせる。

そんな彼の死覇装の上衣は、道場の端の方に畳んでおいてあった。

そして、黒い死覇装の上に、ぽつんと護廷十三隊の副官章のような物が置いてあった。

そこに書いてる漢字は、こうだった。

『零』

王族特務を示す漢数字。

そう、此処は零番隊が守護する神域——“靈王宮”。

エピローグ

有明

日はまた昇る

空座町での決戦から、一か月が経った。

「——ここに、元十三番隊副隊長・志波海燕を、五番隊新隊長に任ずるものとする」

現在、一番隊の巨大な部屋に於いて、新任の儀が執り行われていた。その内容は、欠けていた三番隊・五番隊・九番隊の内、五番隊の隊長を元十三番隊副隊長の志波海燕に任せると言うものであった。

動乱も終わり、瀨霊廷もひと段落したところであるが、いつまでも重要な職である隊長を空位にしておく訳にはいかない。その為、能力・人格に申し分なしと判断された海燕が、こうして五番隊の隊長の席に就いたのであった。

中には、百年以上前に藍染の凶行によって無理やり隊長の座を退かせられた者達に、新たな隊長として就いてもらうという提案も存在したが、仮面の軍勢及び、護廷十三隊の隊長格達の考えに基づき、護廷十三隊で間に合う者が居るのであれば、出来るだけ護廷十三隊で間に合わせるという結論に至った。

因みに、仮面の軍勢が百年以上前に下された処分は既に棄却され、晴れて無罪になった。それは浦原や夜一、そして鉄裁も同じであり、

その気になればすぐでも尸魂界に帰ってこられる状態になった。

だが本人たちの意向により、現時点で彼らは現世で過ごししている。残るは三番隊と九番隊だが、その座は卍解を使える者で人格・能力に申し分なしと判断された者が随時、任に就くだろう。

事実、十番隊第三席である宮能まつ梨は、九番隊での「隊長権限代行」という座に就かせられ、暫定的な九番隊の隊長代理として仕事をしている。

本人は、自分の未熟故にと慌てふためいて拒否していたが、周囲の者達の勧めにより、一年間は代理として就き、その後で再び隊長の任に就けるか判断すると、元柳斎に言い渡され、毎日胃痛に悩ませられながらも働いている。

三番隊はまだ何も決まっていないが、後々決まるだろうと周囲は考えている。

そして、動乱の元凶である藍染、そして加担した東仙の裁判も先日終わった所である。藍染は、地下監獄最下層第八監獄「無間」にて二万年の投獄刑に処せられている。

東仙は、地下監獄第六監獄にて三千年の投獄刑に処せられた。だが、東仙に関しては何人かの隊長格の請願により、半年に一回の面会を許された。傍から聞けば、三千年の投獄は実質的な死刑に等しいものであった。しかし、面会の許可が下りただけで、東仙は幸せそうな顔を浮かべていたという。

そんな瀨霊廷であったが、まだ時の動かない者達も居る。

しかし、その時の動かない者の為に動いている者が居た。

「……」

「ん？どうした日向。もう疲れたのか？」

「……腕立て・腹筋・背筋を二万回ずつやらせたくせに、『もう疲れたのか？』とか何言ってるんだ……」

道場の床にうつ伏せで倒れている日向は、消え入りそうな声で目の

前の男に言い放った。現在二人は、この道場で刀の打ち合いをしていたのだが、日向の言った通り二万回ずつ三種目の筋トレを行った日向は、既に満身創痍であったのである。

二万回という、普通ならばありえない回数もそうであるが、もう一つ日向がへばる理由が存在した。それは現在居る場所の、大気の霊子濃度であった。瀨靈廷の何倍もの霊子濃度によって、最初はすぐに息を切らしていたので、そう考えた場合二万回をやりきったのはかなりの進歩だと言えよう。

日向は何とか身体を起こし、目の前の男に視線を向ける。

男の名は『兵主部一兵衛』。王族特務零番隊に於ける、頭目のような存在。

ここで、何故日向がそのような男と修行をしているのか、説明しよう。

まず時は、空座町の決戦から七日後に戻る。七日経っても意識の戻らなかった日向の下に、ある者が訪れた。それがこの男、兵主部一兵衛であった。

兵主部が言う事には、『靈王の命令によって、日向を靈王宮に招くことになった』ということであった。意識の無い日向は勿論それに背くことが出来ず、靈王の命令である為護廷十三隊の何者もそれを止めることが出来なかった。

そもそもこの日向の連行が、中央四十六室を通って、元柳斎や卯ノ花などの古参の隊長のみに伝えられた伝令であった為、ほとんどの者が気付かずに、日向は靈王宮に連れてこられたのであった。

その後はこうだ。

——麒麟寺天示郎の温泉で湯治し、意識を取り戻し、

——曳舟桐生の下で食事をし、

——二枚屋王悦の下で斬魄刀を打ち直してもらい、

——修多羅千手丸の下で新たな死覇装を繕ってもらい、

——こうして、兵主部一兵衛の下で修業を行ってもらっているのだ。

万全な状態に戻ったのに、何故すぐに瀨靈廷に戻らずに、こうして

零番離殿に残っているのはある理由があった。

それは「隸王」と「浄天眼」が関係していた。卍解を習得し、完全に覚醒した日向の体には霊王の力が馴染み、「王鍵」と変わっていたのである。

藍染が空座町を生贄にし創り上げようとしていた王鍵が、日向の体であるというのがどういう事であるのかと言うと、そもそも王鍵とは、霊王の力によって変質した零番隊の骨のことなのである。

つまり、霊王の力が体に馴染んだ日向の骨は自然に王鍵と変わっていたのである。その為、日向をそのまま護廷十三隊に置くという事は、王鍵を無防備に放置することと同じである。

その為、千年前に隸王と浄天眼を託される際に司家が交わした誓約が、『卍解を会得した際に、その者を零番隊に引き入れる』というものであった。

だが、それを日向が素直に受け入れる訳がない。

その為、長時間の議論により日向と兵主部が出した結論が、『日向を鍛え、十分な実力がついたら瀨霊廷に戻す』というものであった。

日向はそれを了承し、必死に修行し——今に至るのであった。

「わっはっは！まあ慣れれば、当たり前前になつてくるじゃろうて！」

「慣れるかボケ」

「威勢だけは充分じゃ！うんうん！」

日向の罵声に、兵主部は首を縦に振る。

そんな兵主部に、日向はため息を吐く。こんな軽い感じの男であるが、実力は日向と次元が違う。藍染とギリギリのせめぎ合いをしていた日向であったが、この男の前では無力であった。

年季の違いというものがはっきり出ていた。

斬術・白打・歩法・鬼道——どれに於いても、この男は瀨霊廷の者とは隔絶した力を持っていた。

伊達に、零番隊の頭目を名乗るだけはあった。

そんな男に修行をつけてもらうのだ。強くない訳がないと、日向は考えている。

しかし、スパルタ過ぎる内容に、流石の日向でも息絶え絶えになり

ながらメニューをこなす日々が続いていた。

こうして今も、休憩していなければ倒れそうな程に、だ。

「ふうむ……そんなことでは、この『零』はふさわしくないぞ?」

何とか身体を起こして呼吸を整えている日向に、兵主部は『零』と書かれている副官章のようなものを投げつける。

それを自分の眼前で捕えた日向は、じっとその文字を見つめる。

「おんしは、瀟霊廷を護る剣として強くならなければならんのじゃ」

「……解つてますって」

兵主部の言葉を聞き、日向は額の汗を拭って立ち上がる。それを見た兵主部は、満足気な顔を浮かべて、奥にある部屋に向かう。

「——さあ、日向。次は、卍解の修行じゃぞ。気張ってくぞ」

「……うし!」

兵主部の言葉に、日向は自分の頬を叩いて気合いを入れ、壁に立てかけてあった斬魄刀を手にとって奥の部屋に入っていく。

史上初の、二本の斬魄刀を扱う死神。それは二刀一対という意味でなく、純粹に二本の斬魄刀を扱うと言う意味である。

「行くか!夜叉姫!隸王!」

己の魂と言える存在に語りかけ、日向は二本同時に斬魄刀を抜く。そんな日向の目の前には、既に斬魄刀を構えている兵主部の姿が在った。

「卍解——!」

——白神様が行く。